

村嶋英治著『バンコクの日本人』合冊に際して

本稿は、泰国日本人会月刊誌『クルンテープ』に、2010年8月号から2018年8月号まで96回連続して連載したものを、連続した頁数を付して合冊したものである。

連載開始当初、戦前のバンコクに滞在した人、約20人ほどを取り上げて、一人につき3回くらいで書く予定であった。最初の宮川岩二についての3回に亘る原稿がその例である。

しかし、二人目の稲垣満次郎公使夫人稲垣栄子については、時代背景や制度の詳しい説明を加えるようになったため、数回では終わらず分量も増大した。三人目の岩本千綱になると、近代日タイ関係の形成に、彼が良くも悪くも多方面で関係したこともあって、連載回数は69回にも及んだ。それでも岩本の1897年以降、1920年に没するまでの活動については、検討することができないままに終わった。これは、四人目の横田兵之助についても同様である。横田のタイ農務省技師の任期の終了は、多分に大正期の日タイ関係の低迷の現れである。この時代の吉田作弥、西源四郎という二人の公使について、その役割を詳しく検討するはずであったが、僅かに吉田公使の時代の一部を紹介しただけでストップせざるを得なくなったのは残念である。

以上のように、今後付け加えることが多いとは言え、本連載合冊では、近代における日本とタイとの関わりを、その出発点から1910年代に至るまで、これまで利用されることがない、大量の新資料を用いて明らかにすることができたと自負している。

本稿の半分以上には、小見出しを付しておらず、大変読みにくいものとなっている。この欠点を補うために巻末に事項索引(396項目)、人名索引(518名)を付している。

また、本合冊の内容の一部を再整理して、以下の論文を既に刊行した。

- ① 村嶋英治「バンコクにおける日本人商業の起源：名古屋紳商(野々垣直次郎、長坂多門)のタイ進出」、『アジア太平洋討究』24号、2015年、39-69頁。
- ② 村嶋英治「1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業：渡タイ(シャム)前の経歴と移民事業を中心に(上)」、『アジア太平洋討究』26号、2016年、157-223頁。
- ③ 村嶋英治「岩本千綱の『暹羅老嫗安南三国探検実記』をめぐって：探検の背景と実記の質」、『アジア太平洋討究』27号、2016年、13-59頁。
- ④ 村嶋英治「1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業：渡タイ(シャム)前の経歴と移民事業を中心に(中)」、『アジア太平洋討究』29号、2017年、141-221頁。
- ⑤ 村嶋英治「1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業：渡タイ(シャム)前の経歴と移民事業を中心に(下の1)」、『アジア太平洋討究』33号、2018年、153-204頁。

以上の論文は、早稲田大学リポジトリより容易にダウンロードして読むことができる。

本調査においては、稲垣満次郎、岩本千綱などの孫の世代の多数の方々から資料の提供を受けた。また、タイ国日本人会は2018年8月31日午前に、本連載についての筆者の講演会(巻末添付レジュメ参照)を開催され、65名近い方々が参加された。皆様のご協力に深く感謝する次第である。

2018年8月31日 村嶋英治 (eメール: murashim@waseda.jp)

## 村嶋英治著『バンコクの日本人』

タイ国日本人会月刊誌『クルンテープ』連載

2010年8月～2018年8月(96回)

1-3回	タイのプリンセスと結婚した宮川岩二	
4-14回	美貌の初代公使夫人	稲垣栄子
15-83回	日本人タイ研究者第一号	岩本千綱
84回-91回	在タイ10年の農業技師	横田兵之助
92回-96回	泰国日本人会の歴史など	

連載①  
バンコクの  
日本人

## タイのプリンセスと 結婚した宮川岩二 ①

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

はじめに

一九七五年二月にタイを初めて訪問して以来、現在まで、私がタイで過ごした時間を合計すれば、十一年半になる。タイに定住されている邦人に比べ、僅かな期間ではあるが、それでも私の職業人生の三分の一近くをタイで過ごしたことになる。

在タイ中の時間の多くは、タイの近現代史に関する文献資料収集、タイ人関係者へのインタビュー調査、および小旅行に費やした。残りの三分の二の時間は、日本での調査研究および教育である。

私は、主にタイの政治、政治史、対外関係史、華僑史に関する調査研究を行ってきたが、その間に、近現代のタイで活動した日本人に関する資料に出会う機会も少なくなかった。それら

が、書籍や雑誌ならでいいだけ現物を購入し、公文書や新聞記事等であれば、複写できるものは複写し、その他はノートに筆写した。また、一九九〇年代の前半には、第二次大戦期に在タイした邦人の方々に、インタビューを実施したことがある。

これらの収集資料の大半は、東京の私の居室兼資料庫に埋もれたままになっている。五十平方メートルの狭い空間ではあるが、探し始めると意外に時間がかかるし、粉塵や埃とも闘わなければならぬ。

この連載では、我が居室の紙の山から、資料を探し出すことができた順に、時代の前後を考えず、重要性の軽重を顧みず、近現代の在タイ日本人たちの活動やその記録を、何回か、紹介するつもりである。ここで紹介することは、すべて資料的根拠

のあることであるので、できるだけソースも明記したい。また、ここで取り上げる人物や日本関係の事柄に関して、より正確で詳しい情報をお持ちの方も少なくないと思われる。もし、そのような読者がおられれば、本誌編集部を通じて、あるいは直接、私（Eメールアドレス [masashi@aseda.ac.jp](mailto:masashi@aseda.ac.jp)）に、一報をいただければ、何よりありがたい。

なお、シヤム（Si-am）という国名がタイ国（Thailand、Prathet Thai）に変更されたのは、一九三九年のことである。言うまでもないことだが、民族の自称としての「タイ」は、一九三九年以前から存在している。タイ人は、一九三九年以前から、自分たちを「タイ人」（Khon Thai）自国を「タイ国」（Muang Thai）

と呼んできた。一九三九年以前に設立されたタイの企業の名にも、タイを用いたものが多い。例えば [Pun Cement](http://www.pun-cement.com)（タイ語名は [Pun Cement](http://www.pun-cement.com)）だが、この名は同社が設立された一九一三年以来変わっていない。本稿では固有名詞や引用文として用いる場合など特別な場合を除いては、タイという呼称で統一したい。

忘れられた宮川岩二の名声

『泰日日本人会創立五十周年記念号』（一九六三年九月発行、東京、D.B. 2430）に、「泰を語る」バンコック長老の座談会」が掲載され、次のような長老の発言が記録されている。

古沢博雄談「五世陛下時代に

大山の画伯がシンガポールから来て、大山商會を創立しましたが、画伯商売の経験もなく主に支配人だった宮川岩二さんがやっていた。宮川さんはこの大山商會の地盤を築き上げた人で、シンガポール、香港に支店があり、シヤムでは一般日本品の輸入、印刷工場、新聞発行（大和新聞）等当時の王室の御用商人ともなり、宮廷の用度品は元より、政府の印紙を始め、諸

印刷をやっていました」

宮川久談「盛んな時は、間口二十間の大構えで、仕事のスケールから云って、大いに日本人の為に気を吐いたものでした」

古沢博雄談「こんな訳で大山商會と云うより、宮川氏と王室の結びつきは非常に強いものがあり、宮川さんもその後シヤムのプリンセスと結婚しました」  
曾我祐知談「この大山商會も第一次世界戦争当時、ドイツ商

社ビート・グリン商會の日本品輸入を手伝ったのが当時のイギリス公使の忌諱にふれ、シヤム政府の厳重な抗議は元より、英領シンガポール、香港等の支店閉鎖となり、終いにシヤムも休業の止むなきに至りました。惜しい事でした」  
古沢博雄談「宮川さんがシヤムで、日本人の地位を高められた功績は大したものですよ」

発言者の古沢博雄氏は、一八



宮川岩二

八九年一月三日茨城県水戸市生、神田の電気学校を卒業後、一九一一年頃来タイした技術者で、タイ国鉄のマッカサン工場での勤務が長かった。一九七四年十二月二十七日にバンコクで死亡した。長女の春江さん（タイ名、Nichan Lertrichha 元社会行動党代議士 Bunlert Lertrichha 警察中佐の妻）とは、私は二〇〇三年にインタビューしたことがある。その内容は、別稿で紹介してみたい。もう一人の発言者、宮川久氏は、宮川岩二の甥である。第二

次世界大戦の敗戦によって、在タイ日本企業・日本人の在タイ資産は、英米連合国の代理者たるタイ政府によって、すべて接収された。また、八百名近くの日本民間人がタイ残留を希望したにも拘わらず、在タイ・イギリス軍（戦後タイに進駐した実質上の占領軍）は、日本の勢力が戦後のタイで、再び復興することを惧れて、百四十六名にしか残留を許可せず、残りを日本に強制送還した。（敗戦によって、明治以来の日本の在タイ資産が失われ、また在タイ日本人社会が失われたことについては、村嶋英治「日タイ関係1945-1952年」在タイ日本人及び在タイ日本資産の戦後処理を中心に、「アジア太平洋研究」〔早稲田大学アジア太平洋研究センター〕創刊号、二〇〇〇年、参照。この全文を、<http://dSPACE.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/13018>で読むことができる）  
宮川久氏は、戦後タイ残留

7/17-7/20  
2010年8月3日  
7/17-7/20 2010.8.3

を希望した。一九四六年六月十一日付けの三名の男子の残留嘆願書(タイ外務省文書課「3.15」)によれば、宮川久二は、一八九八年生れ、十四歳で来タイし、四十六年六月時で在タイ三十四年、タイ人妻との間に三子(女二、男一、男の姓はSiriwittaya)がある。彼自身は、一九二二年十一月来泰、おじの宮川岩二が支配人を務める大山商會で働き、大山商會が解散後はその後継である大谷洋行に終戦まで働いた(『泰日日本人会創立五十周年記念号』、p. 26)、と語っている。

さて、タイで日本人の地位向上に貢献し、また、タイのプリンセスと結婚したという宮川岩二は、どのように日本人の地位向上に貢献したのであるのか、彼が結婚したタイのプリンセスとは誰なのであるのか。本稿はこれらを探ってみよう。

四十六年五月にタイ残留を希望した日本人名を、在タイ日本公館がタイ外務省に提出した、前

出の資料によれば、宮川岩二は、一八九八年生れで、一九〇五年五月十五日に来タイし、タイ人妻との間に子どもが一人あった。ところが、甥の久二とは異なり、彼はタイ政府の審査の段階で、残留許可の判定を受けた(タイ外務省文書課「3.15」)。それ故、彼が戦後、日本に強制送還されたことは間違いない。日タイ間の外交関係が、一九五二年四月に再開した後、タイに戻ったのかどうかは不明である。ワット・リアップ寺の日本人納骨堂保存の『在タイ国日本人先亡者鑑』(個人情報保護で現在は非公開のようである。ただし、『クルンテープ』一九七九年十二月号に、中山全条「過去帳のシヤム時代から一邦人の痕跡」として紹介されている)には、彼は、一九五七年十一月二十五日死亡、七十二才、大山商會店主、神奈川県出身」と記載されている。なお、一九五七年という死亡年か、七十二歳という死亡年齢か、どちらかが誤記

されている可能性が高い。というのは、後述するように、彼自身が一八九八年六月頃の生れであると記しているからである。一九二〇年に刊行された、伊藤友治郎『南洋年鑑 1921』(合資会社日南公司南洋調査部刊、東京、一九二〇年十一月発行、p. 16)には、一九二〇年当時宮川岩二は大山商會店主で、同商會は一九〇八年一月開業、宮川岩二の原籍は「神奈川県中郡金目村南金目」と記されている。金目(かなめ)村は、現在は平塚市の一部である。

若くしてバンコク最大の邦商に私が見たなかで、宮川岩二の名が出てくる、最初のタイの公文書は、一九一三年の商標登録に関するものである。二十世紀に入ると、日本では創意工夫により日常生活に役立つ様々な便利品の生産が急増した。日本で生産された大衆薬(瓶薬や包み薬、仁丹、目薬)や日用品(歯磨き粉、整髪剤、髪

染料、マツチ、蚊取線香など)は、国内のみならず、アジア市場向けの商品としても輸出された。日本人の考案になる商品が、アジアの市場でも広範に販売されたことは、一九一〇年ごろのタイの新聞でも既に、日本商品の広告が圧倒的に多いことから明かである。タイでも日本商品の輸出が増えると、日本人がバンコクに日本商品の販売店を開いた。また、タイで経済関係の諸法規の整備が本格化するのには、ラーマ五世王(チュラーロンコーン王)からラーマ六世王(ワチラーウット王)に代替わりした一九一〇年頃からである。例えば、宮川も後に何

度もお世話になり、一九三一年には、この法律により破産することになる、本格的な破産法が施行されたのも、一九一一年十一月末日である。商標登録の問題は、このような歴史背景の中で生じたのである。

タイで最初の商標法(Law on Trade Marks and Trade Names 担当官庁、

農務省)が施行されたのは、一九一四年十月一日のことである。この法律施行は、以前から在タイ外国商社が強く求めているものである。

同法施行以前の一九一三年前半、在タイ日本人商社は、日本から輸入する商品もしくは自らの独自商品の商標登録を求めて、日本公使(三穂五郎臨時代理公使)を通じてタイ外務省に登録申請書を提出した。同代理申請手続きには、①申請者は日本の製造者から商標登録の代理申請の権限を与えられていることを、三穂五郎が領事の立場で証明した文書、②商標の内容(図示ではなく文章による表現)、日本の所有者の氏名(会社名)、住所、事業内容、およ

びタイでの代理申請者の氏名・住所・事業内容が記載された文書、の二文書が必要であった。日本公使は、これらの文書を多数一括してタイ外相に提出した。

一九一三年一月から五月にかけて日本公使がタイ外相に提出した登録申請書から次のことが判る。この期間に商標の代理登録申請あるいは自らの独自商品の商標登録申請を行った日本人商店主は、①宮川岩二(大山商會、K. Oyama 商店)(日本公使提出の申請書の表記では、「宮川」は、Miyakawaの場合とMiyagawaの場合とがあり、統一されていない)、②山口軍蔵(Yamaguchi Gunzo 山口洋行、G. YAMA GUCHI 商店、前出の伊藤友治郎『南洋年鑑 1921』p. 161によると、山口軍蔵の原籍は「東京府南多摩郡日野町」)、③カナザワ・マサノブ、④三井物産出張員(小牧太次郎)の四名のみである。

このうち、宮川岩二が申請し

た商標登録申請件数は八十六件。うち自己商品の商標登録申請は七件、残りは日本企業二十社計七十九件の商標の代理登録申請である。後者の大部分は薬とマツチであり、その中には、田口謙吉(参天堂、大学自薬)、三輪善兵衛(ミツワ石鹸)、安藤井筒堂、安住伊三郎などの名もある。

山口軍蔵の申請件数は二十七件以上。うち自己商品の商標は二件以上(正確な件数は残存資料が不完全なため不明)、残りの二十五件は日本の八社の代理登録申請である。後者には森下博(仁丹)、小林富治郎(ライオン歯磨)などが含まれる。

カナザワは自己商品の商標(香水油)の二件のみ。三井物産は、自己商品のマツチ四商標の外は、大阪の商人サハラ・チユウソウ(漢字不明)の商品の計九件であった。

商標法施行後、日本公使がタイ外務省に問い合わせたところ、外務省は法律施行以前に預かった登録申請書を返却し、商

標登録の担当官庁である農務省に再提出するように求めた。(タイ国立公文書館(NAT)資料、Kot. 67. 820)

当時、三井物産はシンガポール支店に属するバンコク出張員としてタイには一名(小牧太次郎)を置いていたに過ぎない。しかも、取扱高が低調で、唯一の出張員さえ廃止するかどうかを検討している時であった(三井物産株式会社庶務課『第二回支店長諮問会議事録(四)』p. 127三井文庫)。三井物産は、武器の売り込みを契機に一九〇六年に、バンコクに出張員を置いた。同社の商売は、第一次世界大戦前は低調で、第一次大戦で持ち直した。

以上から、一九一三年当時、バンコクの邦商中、大山商會主(Nai Hang K. Oyama)である宮川岩二が随一であったことは疑いない。商標の登録申請書の職業欄に、宮川は「諸商品の販売および印刷所」と記しており、既に印刷所を経営していたことが判る。(続く)



当時日本の兵庫県で製造されタイに輸出されたマッチのラベルの一例

連載②  
バンコクの  
日本人

## タイのプリンセスと 結婚した宮川岩二 (中)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

「暹羅に雄飛する絶好機会」

宮川は一九一五年に日本に一時帰国した際、『日本一』（南北社発行）という雑誌の創刊号（一九一五年十月号 pp. 213・218）に六ページから成る、「暹羅に雄飛する絶好機会」というタイトルの論文を書いている。これが、宮川のもとまった文章としては、唯一のものと思われる。同誌は、宮川岩二の肩書きを「暹羅盤谷府大山商會主」とし、「宮川君は本年二十八歳にて盤谷『バンコク』中最大の貿易商である」と紹介している。

彼は、次のように書き出している。

「邦人にして今日までに、南亞暹羅『シヤム』に行つてゐるもの

は、米國その他への渡航者に比すれば未だ頗る少いが、少ないながらも皆その同胞が好人物であるだけに、総てに於て一等國民として待遇されてゐるのは、甚だ喜ばしい現象である。されば今後とも同國に行かうとするものは、何うしても今までの如く吾々同胞の体面を汚さない程度で、相當の教育あり、充分その地位を保ち得るだけの修養ある人々であつて欲しい。動ともすれば新開地や殖民地にあり勝ちの下賤な労働者や、本國を喰ひ詰めて、居るに処なく止むを得ず脱走して来たものなどは暹羅には大禁物である。暹羅には今後とも絶対に下級の労働者は来て貰ひたくないのである。是非とも中流階級の人士にして、何か一種の技術を有したものが欲

しい。独り暹羅とは限らず何れの國へ行つても然りであるが、腕に仕込んだ技術さへあれば相當の収入もあり、他日の成功も疑ひないのである。と云つて唯僅かに旅費だけを持つて飛び出すといふことは、之れは又大いなる間違ひである。縱令如何程その人に手腕があつたところで、その國の國語に通じなければ、差当り日常の用を便しないばかりでなく、何んな職業に雇はれるにしたところが、一々通訳を通じて用務を便するやうでは、雇つてくれる人がない。又獨立して事業を起さうとしても、徒らに無益の費用のみ嵩んで、肝腎の収益を得ることは至つて困難である。さすれば何うしてもその國語を覚え、その國萬般の事情に通ずる間だけは、

仮令暫らくは遊んでゐても生活その他に差支へない程度の費用を、予じめ準備して行く必要があるのである」

彼は、下層労働者ではない、一定の教育があり、技術ある中流人士に、タイへ渡航するよう呼びかけ、かつ、タイに到着後は、まず時間をかけて、タイ語とタイ事情に通じる必要を説いている。

彼は自分の成功経験をもとに、タイ語習得とタイ事情の知識の重要性を、繰り返し強調し、文章の最後も次のように結んでいる。「今私が企業家に望むところは、前にも云ふ通り、兎角急いで仕事を仕掛するで、先づ暹羅に渡つて仕事を始めやうとは思はば、何より先きにその國語の研究が必要であると

5

2010.9  
2010.9月



宮川岩二（『日本人會創立五十周年記念号』の記事「泰を語る一バンコク長老の座談会」より）

時に、その人情風俗を知悉することである。此の土台となるべき肝腎な知識にして充分修得することが出来たなら、そこで始めて事業に着手すべきである。之れに反して渡暹早々各種の事情にも精通しない前から、頓かに仕事を起さうとしても、失敗こそすれ、到底好い結果は得られ

れないのである。暹羅は遺利の多い國である。何でも渡りさへすれば仕事はあるだらう位で行くが早いか、言葉の分らぬところからその自分の取るべき仕事に就いて先登同胞に聞き歩くやうでは、已にその根本に於て誤れるものと謂はなければならぬ。現に私もその始め渡暹した時はその轍を踏み、彼地の同胞に就いて暹羅に於ける商業の前途如何を尋ねたところ、皆異口同音に其の望みなきを注意して呉れた程であつた。それにも関（かま）はず、元來私には私の見るところもあつたので、決然内地に入り込み國語研究の傍らに同國の人情風俗を視察してゐる中に高位高官の人々にも少なからざる知遇を得た。（下線 村嶋）茲に於てか始めてその志す事業に着手したので、随つて種々の便宜を得ることが出来、兎に角今日あるを致した訳なのである」

タイ語とタイ事情の理解に適するのには青年たちである。彼は「先づ暹羅に渡らんとするものは三十歳頃の青年を最も好しとする。其等二十歳頃で彼の地に渡つたものは、大抵それから四五年を経た二十四五歳の頃に至れば、何れも相應に立派に成功するのである。併し暹羅は誰しも知る通り世界に於ける賭博の公許國である。富饒の盛んに流行する處であるから、さらだに各種の誘惑に陥り易い青年のこと故、充分之れに打ち勝つだけの修養が必要である」と述べ、青年が日本に留まつていては先は見えてゐるが、タイでは日本以上に有利な事業が幾らもある。「世界何れの後進國にしても然うでないものはないが、暹羅も亦その例に漏れず、從來同國には数多の白人が入り込み居り、有利なる事業とし云へば何でも之れを独占した結果、勞せずして多大の収入を得るが故

に、今では座食して至極氣楽な生活を送るのみで更に一步を進めて苦心慘憺、事業の發展を圖らうといふ考がないので、仮令眼前に遺利があつても棄てて顧みないといふ状態にある。故に此際吾々日本人にして、幾分でも資本を投じ得るものが行つたなら、その白人の遺利を拾ふだけでも大したものである上に、或はこれと競争して將來彼を圧倒するに至ることも左まで困難でないと思ふ。然るに是れまで行つて日本人の多くは余りに温順であるが為め、慧眼で機敏に立回ることがしないのは頗る遺憾とするところである。斯かる状態にある今日であるから、壯心鵬程万里の雄圖を懷ける邦人に取つては、これほど絶好な機会は復た無いのである」

彼は、タイにおける邦人の現状を嘆き、タイの実業界は白人に独占されている、邦人の個人投資者はせいぜい五十万円どま

6



りだが、白人は五百万から千万円規模であると、邦人と白人の間に雲泥の差があることを指摘しながら、しかし、「今や安逸に慣れ、比較的利欲の念の薄らぎつつある白人の、勝つて兜の緒を締むるを忘れ、徒らに情眼を貪る隙に乗じて、一挙彼等の壘を抜くことは、必らずしも難事でない」と、日本人にもチャンスがあることを繰り返している。

### 第一次大戦の危機 大戦後の再起

若くして成功した大山商會主官川の得意は、長くは続かなかった。第一次世界大戦末期の一九一八年三月に発行された、清水孫策・鈴木謙則『暹羅及南洋出張報告概要』は、「現に邦人雜貨商中尤も有力なりし大山商行（マ）の如きは、些細の行違ひより黒表「ブラックリストのこと」村嶋」に投入せられ

殆んど活動の自由を奪はれ居れり」（pp. 28+29）と述べている。冒頭にも引用した「パンコック長老の座談会」で、曾我祐知（大山商會の元従業員）も、「この大山商會も第一次世界戦争当時、ドイツ商社ビ・グリム商會の日本品輸入を手伝ったのが当時のイギリス公使の忌諱にふれ、シヤム政府の嚴重な抗議は元より、英領シンガポール、香港等の支店閉鎖となり、終いにシヤムも休業の止むなきに至りました。惜しい事でした」と述べている。

しかし、第一次大戦終了後、官川岩二の大山商會は、再生した。

前出の伊藤友治郎『南洋年鑑1921』p. 68によれば、一九二〇年時、大山商會の店主は官川岩二で、業種は、直輸出、入商、印刷部、機關製作、大谷静一（正しくは、清一）が支配人で、従業員として曾我佑知、

横山和十郎らの名が見える。

ついでに書いておくと、『クルンテープ、タイ国日本人会七〇周年記念特別号』一九八四年、五十六ページによると、タイ国日本人会は一九二〇年前後の、第四代、五代目の日本人会会長名を把握されていないようであるが、会長職の任期は一年であったが、伊藤友治郎『南洋年鑑1921』p. 67によれば、「パンコック日本人会（会員数百二十八名内女二十九名）会長・水野泰四郎、理事・山口萬吉、木下亨、土井節、横山和十郎、神谷信男、山本雅一、大場忠、磯部美知、土井孫次郎、大槻二雄、大谷静一、書記・柳田亮民」で、会長の水野泰四郎（みずの・たけしろう）は台湾銀行出張所支配人である。

一九二〇年六月十三日にシンガポールで第一王位継承者のピサヌローク親王（一八八三年三

月三日—一九二〇年六月十三日）が三十七歳でスペイン風邪による肺炎で急死した直後、六月十九日付けで西源四郎公使がテークワオン外相に対して、パンコクの全日本人社会の代表者水野泰四郎（Mr. Taishiro Midzuno, duly representing the whole Japanese community in Bangkok）の哀悼の意を伝えている。（タイ国立公文書館資料、No. 10. 6. 5/20）。なお、大谷清一は、一九三二—三三年時に日本人会会長である。

タイ民間人が発刊した商業経済雑誌としては、最初の部類と思われる、月刊タイ語誌『サヤム・バーニット』（ヤワラット社発行）の一九二二年十一月号（第二巻十号）p. 1289には、K. OYAMA & COY（タイ語名Hae K. Oyama、所在地バーフラット路）は、次

の広告を出している。

販売部…日本商品をどれも極めて安価に販売。

注文取寄部…我が商店への注文者は全ての利便を得る、則ち注文品は早く届き、標本に違ふことなし。安価取扱い。注文と受領に面倒なことなし。

輸出部…各種タイ商品を購入し海外に輸出する。新奇な商品

があれば、本商店に見せて欲しい。適正な値段で購入する。

印刷部…丁寧な印刷かつ適正な値段で、各種印刷を引き受ける。

以上から一九二二年時には大山商會は、日本商品販売、日本商品の輸入、タイ商品の輸出、印刷の四部門からなっていたことが判る。

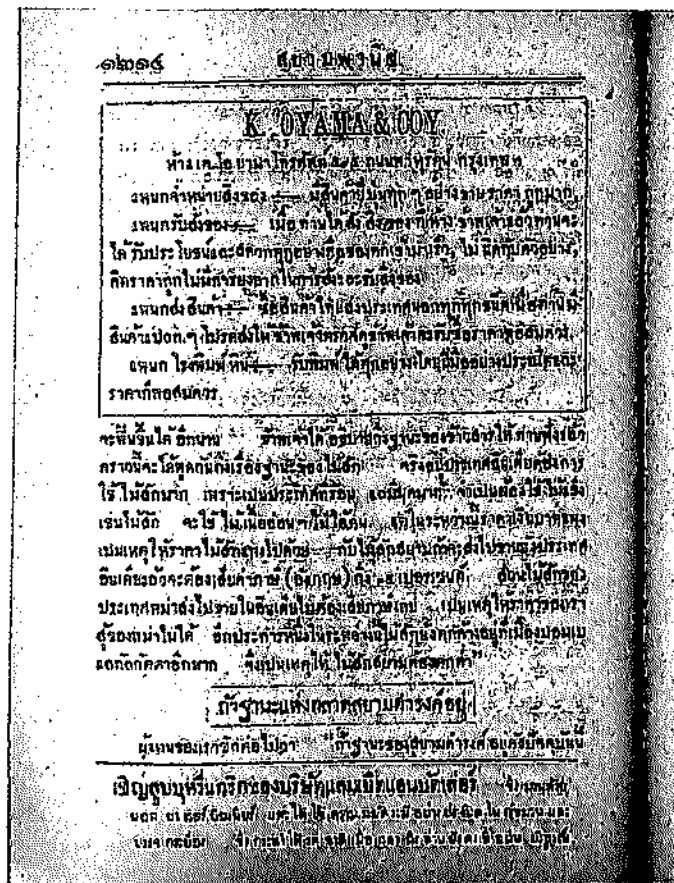
大山商會、ヤマト新聞の所在地周辺が日本人会発祥の地

官川は、大山商會の印刷部を使つて、一九二二年六月一日に、日刊タイ語新聞「ヤマト」(The Yamato Daily News)を立ち上げた。官川は、ヤマト新聞の所有者兼編集者兼支配人である。当時の

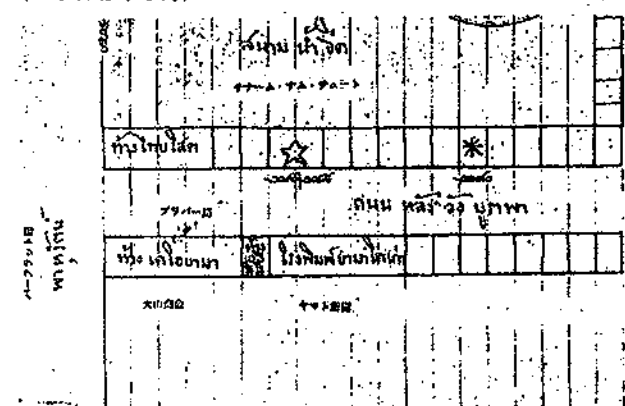
地図によると、大山商會の所在地は、現在のプラバー路からバーフラット路に向かつて歩き、バーフラット路にぶつかる左手角であった。ヤマト新聞社（在プラバー路）は、大山商會と一軒はさんで隣接したシェンブハウス（Hong Thaeew）にあった。

ここに掲げた地図を見ると、大山商會とプラバー路をはさんで対面に、サナム・ナム・チュート（「真水広場」の意）が存在する。現在The Old Siam Plazaが建っている場所である。「真水広場」という地名は、一九〇五年四月に、この場所で開催された下水をくみ上げ、都民に供給したことに由来するものと考えられる。

当時の新聞に、「トゥリーペット路近くがボーリングされ、ポンプが設置された。これで近くの人々は飲料水の獲得が



大山商會（官川岩二営業主）の「サヤム・バーニット」誌広告（1922年9月）



大山商會・ヤマト新聞社の地図



ヤマト新聞 (1922年6月)

用いて新聞紙上で、論敵と好んで議論するなど、開明的な国王であった。余談だが、同王は皇太子時代の一九〇三年初めには、欧州留学の帰路、アメリカを経て日本に立ち寄ったことがあり、その後の数年間、彼と日本の皇族女性との婚約の噂が何回も報道された。

しかし、比較的自由な言論を認めた、開明的なラーマ六世王

簡単になった。但し、今年は河水の塩気はそれほど問題ではなく、また、井戸水は安全だが、民衆は井戸水に慣れないで、その不信を解かなければならない」(Bangkok Times 一九〇五年四月十二日号)という記事がある。The Old Siam Plazaは、トゥリーペット路とプラバー路にはさまれた場所に存在するので、一九〇五年にボーリングされ、バンコク初の井戸水が供給された場所は、現在のThe Old Siam Plaza、往時の「真水広場」と考えられる。

が、井戸による真水の供給が始まっていたのである。それでは、それ以前のバンコクでは、水はどこから得たのであろうか。上述の新聞記事からも判るように、河やクローンの水が利用されていた。チャオプラヤー河の水量が少なくなる乾期には、バンコクまで海水が上がつて来るので、塩気の多い水に困ったようである。水道の取水場所を決める際は、塩水が上がつてこない上流の地が選択された。

記している。「日本人会は、大正三年「一九一四年」三月十八日、現在のチャロエン(マ)・クルン劇場の裏にあるバンモート・サナム・ナムチュー「サナム・ナム・チュート」に所在した二階建長屋の一軒を事務所とし、初代会長・三谷足平氏を選び、創立された。当時の在留邦人数は、上(城内、創立事務所附近)に七十五人位、下(城外、ブツユシ(Chan)レーン附近)に七十五人位、全部で一五〇人位と推定される。大正五年頃、当初の事務所が手狭になったので、筋向かいの比較的大い家を借りた。大正五年十一月三日、現天皇「昭和天皇」の立太子を祝い、全邦人集って祝賀式典を行った。また、柔道、剣道の練習に励んだ。(曾我祐知氏、池田柳太郎氏・談)大正六年頃、下の在留邦人が追々に増したので、(上)下で三五〇人位)事務所をシビ

ヤ路とスリオン路を結ぐ、ソイ・サブに引越した。この事務所は終戦まで存在した。看板は、日本人倶楽部としてあり、テニス、ビリヤード、将棋、碁等の設備があり、又、邦人子弟の学校経営も行っていた。(江尻英太郎氏・談)下流、城外の「ブツユシレーン」と誤植になっているが、正しくはBuss Laneで、現在はチャロエン・クルン路ソイ三十(Soi Captain Bush)である。城内とはオーンアーン運河の内側地域を指しているのであるが、河上の城内にあるバン・モート・パーフラットから河下にある中華街(ヤワラー、タラート・ソイ)を通過して、クルン・カセム運河を越えバンラック区に入った辺りが、Bush Laneである。

の態度は、ロシア革命が起り、共産主義の影響がタイにも及ぶようになると変化する。一九二三年一月三十日に「出版物・新聞雑誌法」を施行し、出版印刷業を許可制とし公序良俗に反する出版をした場合は、許可取消(永久または一時的に)をできるようにし、新聞・雑誌出版者は担当官庁に届出を義務づけ、刑事事件を生じさせるような煽動記事や国を害する記事の著者・編集者・出版者に重罰に処す規定を設け、また、外国からの出版物の持ち込み制限の規定を設けるなど、言論統制を強化した。同法施行後、いくつもの新聞が廃刊に追い込まれた。

ヤマト新聞は、一九二四年三月末で廃刊した。同紙の廃刊を報道した、バンコクの華字紙、『僑声報』一九二四年四月五日号は「ヤマト新聞は、従来、敢言でシヤム人に歓迎されていた。た。シヤム正月の四月一、二、三日は休刊、四日から通常出版と広告していたのに、四日号も五日号も出版されなかった」と報じた。同じく五日付けの『華通新報』は、ヤマト新聞は「資本充足し、社会からも頗る歓迎されていたが、今忽然として廃刊した。その原因がどこにあるのかは不明」と報じた。以上から、ヤマト新聞は、直言で読者にも人気があり、経営基盤も充実していたことから、その突然の廃刊は、「出版物・新聞雑誌法」施行に関係していたものと推測される。

日刊ヤマト原紙は、かつてタイ国立図書館に保存されておられ、マイクログフィルム撮影もされて、閲覧にも供されていたことがあった(当時のインデックス番号L.O. 103)。しかし、現在は、同図書館のマイクログフィルムのインデックス中に、日刊ヤマトの名は見出せない。同図書館が作成した貴重なマイクログフィルム(タイの古い新聞雑誌)のかなりが、十数年前に杜撰な温度管理のために溶けて使用不能になったが、ヤマトもその一つと思われる。しかも、原紙もマイクログ撮影のために、綴じを切られてバラバラにされ、反故同様に壊れてしまっている。ヤマトに限らず、先人たちが丁寧に保存し、最後はタイ国立図書館に引き継がれた、多数のタイ語の貴重な古新聞・雑誌が、実質上消滅してしまったことは、返す返すも残念なことである。(拙稿「36年目のタイ地域研究」、『アジア学』のすすめ、第一巻(早稲田大学アジア研究機構叢書)、弘文堂、二〇一〇年、所収参照)

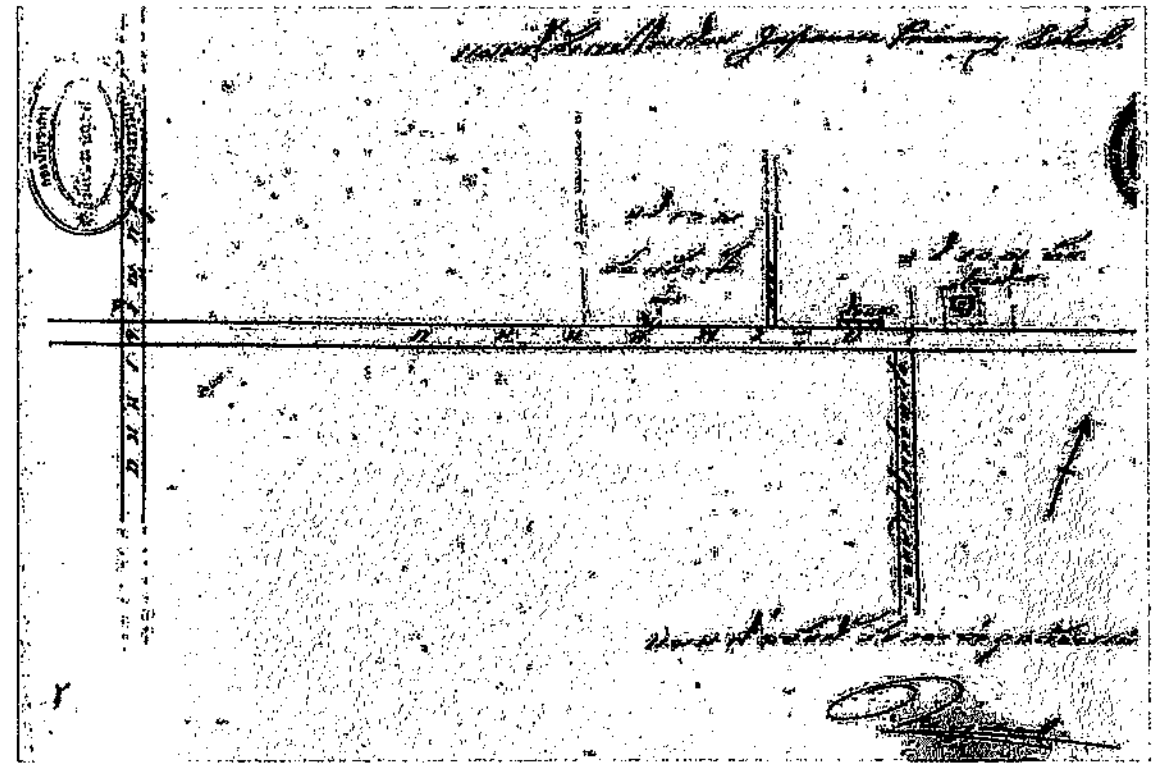
タイのプリンセスと結婚した宮川岩二 ⑦

早稲田大学アジア太平洋研究科教授

511-7-70 2010.10  
2010.10A

←暹羅実業協和会 (バンコク  
日本人商工会議所の起源) の  
広告。1936年

↓シーバー一路の日本人会と日本人小学  
校の位置を示す地図。宮川がタイ文部省  
に提出した申請書に添付されたもの



## 急 告

敝會爲酬謝顧客素愛之起見例年宜貨而廉賣  
凡二次如去年十一月之特賣其成績甚博各界  
之歡迎故本期特再實行四日間如左

### ○期 間

六月五日 星期五 上午 自九點  
至十二點  
六月六日 星期六 上午 自九點  
至十二點  
六月七日 星期日 下午 自一點  
至五點止  
六月八日 星期一 下午 自一點  
至五點止

### ○場 所

本會四角五耶時四角頭電車時  
本會之樓上樓下全部

### 名 品

日常食料品一切、海陸物産及罐頭類一切、正頭絲綢毛棉織  
物類一切、電氣、五金類、磁陶器、玻璃器、汽車樹膠、  
橡皮類、橡膠文具、化學玩具類、裝飾、化妝品、醫療器  
具及雜貨等不能盡錄、

貨物均是對祖家新辦特撰價宜之上貨爲宣傳  
普遍於暹京之起見而漸廉賣即不論從有無交  
易均希蒞場參觀有所評判之爲幸

暹 日本實業協和會事務所謹告

十三・五・五廿 錄作認人印普 印承局印石務印昌南

- 一九三三年九月二日に、現在  
のバンコク日本人商工会議所の  
前身である、「暹羅実業協和  
会」(三六九年九月七日に盤谷日  
本人商工会議所に改組)が十二  
名の邦商により設立された。前  
出の一九三四年一月二十五付  
け、宮崎申郎在盤谷領事から廣  
田弘毅外務大臣宛て、「在外本  
邦人諸団体調査の件」(日本外  
交史料館文書、K.3.T.O.11  
「在外本邦人諸団体調査関係一  
件」)は、暹羅実業協和会につ  
いて以下のように報告してい  
る。
1. 名称 暹羅実業協和会  
(英文未定)
  2. 所在地 事務所所在位置  
は暹羅國盤谷市サノン、ソイ  
サップ、スリウオン路227  
8号暹羅國日本人会内
  3. 目的 日暹貿易の増進を図  
り在留邦商間の親睦並其の利益  
を擁護するにあり。
  4. 組織 盤谷市に於て輸出  
入業に従事する邦商を以て組  
織す。
  5. 設立年月日 昭和8年9  
月3日
  6. 活動の範圍(事業) 並に業績  
本会は創立後日浅きを以て挙げ  
て云ふべき活動及業績なきも最  
近日暹貿易逐次発展の好況に鑑  
み大阪府立貿易館の分館を盤谷  
に設置方の議ありたるに際し之  
に對し帝國領事を通じて之が意  
見書を其の筋に提出せり。  
又本邦の外米輸入制限撤廃方に  
關し外務、農林、商工各大臣に  
對し電報を以て陳情を為した
- 昭和八年末現在會員左の如し  
(12名)
- |                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| 三井物産盤谷出張所 所長大塚<br>俊雄 | 伊藤洋行 主 伊藤太郎助    |
| 山口洋行 主 山口萬吉          | 大谷洋行 主 大谷清一     |
| 江畑洋行支店 主 本田寛次郎       | 川池商事 主 宮川岩二     |
| 溝上洋行 主 溝上政憲          | 日華公司盤谷支店 主 磯 好温 |
| 日出藥房 主 塩田厚           | 豊勝洋行 主 中溝勝次     |
| 日高洋行 主 日高秋雄          | 文田洋行 主 張春木      |

7. 維持方法  
會員より応分の維持費を負担す  
べく合議協定中なり、従つて會  
員としての所有財産及基本金等  
未だ之を有せず。
8. 其他参考事項  
本会の事業として適當なる營利  
事業を起すべく目下研究中なり  
(以上)

暹羅実業協和会創立に参加し  
た宮川は既に大山商會主人では  
なく、川池商事であることに注  
目されたい。

しかし、彼は既に実在しなく  
なつた大山商會主として依然有  
名であつた。一九三六年に出版  
された、竹下源太郎『暹羅を裸  
にして』(東亞人文研究所)、  
四十五ページに、「ケーオーヤ  
マと云ふ人物がある。宮川岩二  
と云ふのが本名で、日露戦争後  
にシヤムに渡來して貿易事業を  
實に盛大に行つていたが、○  
○(マ)「暗にイギリスを指  
す」村嶋注」の手が伸びて來た  
為め事業が振はなくなつた。然

し、この人の政府筋に於ける信  
用たるや実に素晴らしいもの  
で、バンコックでどの俵屋をつ  
かまへてもケーオーヤマとだけ  
云へば他の事は何を云はなくて  
もその家へ連れて行つてくれる  
程に、シヤム人間に広くその名  
が知れ渡つてゐる。従つてこの  
人の陰然(マ)たる勢力は國  
交上、又國民相互間の親善に於  
いて偉大なる勢力を持つてい  
る」という記述がある。

### 日本公使館による 出国強制

タイで顔が広く、かつてタイ  
語の日刊ヤマト新聞を発行する  
など、政治にも関心があつたと  
思われる宮川は、一九三二年六  
月二十四日の人民党の立憲ク  
データ後の政治混乱に巻き込ま



れた。

二〇〇六年九月十九日クーデターで追放されたタクシン派の反撃が、四年間も続いているが、同様に、三二年立憲クーデターで権力の座から追われた王党派や、人民党以上の民主主義を求める勢力は、様々な反人民党政権の陰謀を続け、立憲革命後の政局も混乱した。

宮川は、一九三四年四月、ウタイ・ウィワッタナーノンの人民党政権打倒計画に加担したとして、日本公使館に日本への帰国を強要された。事実は、宮川は、反政府陰謀について情報をもっているかもしれないとして、タイ警察に事情聴取されたに過ぎず、被疑者として調べられたのではなかったのであるが、人民党政権との友好関係を重視する日本公使館は宮川を厄介者扱いして、帰国を強制したのであった（タイ国立公文書館資料、Ko. To. 33. 4/12）。

同年四月十三日号のタイマイ紙は、「K. I. Miyakawa (K. Oyama 商店主) は、政

治に關与して取り調べられ、四月十六日に出国することになった」と報じている。

一九三四年七月二日、東京日々・大阪毎日新聞のバンコク通信員という肩書きで、在日中の宮川（住所は茅ヶ崎）は、日本で開催された汎太平洋仏教青年会第三回総会に出席した、プラーヤー・ディカーンバンチョン暹羅仏教青年会会長ら十名の訪日団に、東京で取材している。この訪日団は、立憲革命後のタイから来た、最初の大規模訪日産業視察団でもあった（日本外交史料館文書、L. 2100-4「仏教関係大会雑件」）。

バンコクタイムズ（Bangkok Times）の一九三四年八月三十一日号は、宮川が、バンコクへ戻ることを希望して、在日タイ公使館に申請してきたので、タイ公使は同外相にどうするか訓令を求めた。タイ政府は、現在、在バンコク日本公使館に問合せ中である、と報道した。しかし、タイへの再入国ビザをもつていた宮川は、駐日タイ公

使館からの回答を得る前に十月九日にタイに戻ってきた。タイ政府は宮川を国外追放処分にするかどうかを検討した。宮川を厄介者扱いし、日本への帰国を強要した日本公使館ではあったが、タイ政府がタイの法令を適用して日本人を国外追放処分にするには反対した。そこで、宮川は注意を受けただけで、タイ滞在を認められることとなった（タイ国立公文書館資料、Ko. To. 33. 4/12）。当時、刑事犯罪に絡んで華僑等がタイ政府の国外追放処分を受けることは、日常茶飯事であったが、日本人で国外追放処分を受けた者はいなかった。

### タイ人プリンセスとともに 綿花農園の開墾

日本の外務省通商局は、一九三五年から一九三九年までの五年間、毎年十二月末現在の「海外在留邦人又は本邦人の経営に就いて其の一カ年の取引、売買、製造、漁獲又は所得高原則として

一万元以上に達すると認めらるるものに付各在外公館の調査せる結果を収録」した『在外邦実業者調』を、印刷している。この中には、当然、タイにおける邦人実業家に関する調査結果も含まれている。

上記五年間のうち、宮川岩二の名がでてくるのは、一九三七年十二月末現在の一回に過ぎない。その報告書には在タイ本邦実業家として二十三社（人）が記載されており、その中の一つとして、宮川岩二が営業主である川池商事は、次のように記載されている。即ち、営業種別は、雜貨輸入と木材輸出、資本は二万五千バーツ、取引高五万バーツで、使用人員は日本人一名、外国人五名である（日本外交史料館文書、L. 2100-4「在外本邦人実業者調査雑件、年報の部」第二卷（昭和十二年度））。

二十三社の中には、三井物産盤谷支店をはじめ、三菱商事、伊藤忠、又一、横浜正金、大阪商船の各出張所など日本の大手

企業も含まれている。日本からの大手を別としても、在タイ個人営業系としては、宮川の大山商会時代のライバルであった山口洋行（山口萬吉営業主）の資本金十萬バーツ、取引高二十四萬バーツにも大きく水をあけられている。

一九三七年半ばから、宮川が本格的に取り組んだのは、台湾拓殖会社の子会社である台湾棉花株式会社の代理人として、同社のためにナコンパトム県カムペンセーン郡で、広大な綿作畑を確保することであった。当時、日本人は条約上、タイの土地所有権を有していたはずだが、宮川が用いた方法は、事実上の妻、M. C. タウインウィタンの名義で土地を取得し、同社に貸与（あるいは売却）するという形式である。タクシン元首相の諸事件で有名になった「ノミニニー」を用いる方法である。

最近、食糧生産地が少ない中東などの国々が、中部タイの米作地をノミニニーを使って取得し

ていることが、しばしば報道されるので、タイの人々は危機感を覚えているようである。自国の土地が、外国人の手に渡ることは、たとえ合法的であれ、どこの国においても強い反発を生むに違いない。

ナコンパトム県での日本人の農地集積に、同県知事たちも強く反発した。一九三九年末、彼らは日本人のために土地を集積することは、愛国心強化のためビーン政権が定めたラッタ・ニヨムに違反すると上司に訴え、同時に、搦め手からも攻撃を仕掛けた。王族女性であるM. C. タウインウィタンは、結婚する場合には、王室典範に従って国王から事前に許可を得ることが必要であるにも拘らず、何の許可も得ることなく、宮川と夫婦生活をしていることは王室典範違反であるというのである。

タイでは王族とは、通常国王の孫の世代までであり、M. C. （モーム・チャオ）とは国王の孫に生れながらにし

て与えられるタイトルである。M. C. タウインウィタンの（一八九四—一九六七）は、ラーマ四世王の王子の一人、ガモラート・ローサン親王（一八五六—一九三二）の二十七日の子でも二十番目の子である。すなわち、ラーマ四世王の孫に当るプリンセスである。

彼女は、日本人宮川岩二らとともにファイ・クワン村に住むようになって約二年になるが、彼女と綿作農園のマネージャーだという宮川の関係は、異常に親密であり、別添の三名の証人の言から、両者は夜間に一つの蚊帳の中でしとねを共にしていることが判る。このような状態は、通常は夫婦関係に見られるものである。王族の婚姻に関する王室典範（一九三二年改正）によれば、王族は結婚する場合に国王の許可を要し、王族女性が王族ではない男性と結婚する場合は、王族の地位を辞さねばならない。

一九三九年末のM. C. タウインウィタンは四十五歳、宮川は五十一歳であった。県知事代行が添付した証言には、宮川から怒鳴りつけられた彼女が、「捨てないで欲しい」と哀願する様など夫婦関係を示す生々しい証拠が挙げられている。

一九四〇年四月十八日に宮内長官に呼び出された彼女は、次

のように弁明した。

ナコンパトムに行く前に、ナリス親王(ラーマ四世王の王子で高位の王族)に自ら挨拶に伺い、農園の産物も届けた。

現在、私は住所もナコンパトムに移している。綿作農園の土地は、私一人だけのものである。現在、宮川がもつて来た綿の種をまいて実験をしており、うまくいけば土地を貸す予定である。宮川には、私のために日本人を雇って工事の監督をするように依頼した。もし綿作がうまくいけば、宮川にライ当り二バーツ以下で畑を貸す契約である。私は日本人を九名雇っている。これらの日本人とその妻、それに私と召使いは、一人の中国人コックに食事を作らせている。宮川はタイ語がうまく、タイに三十七八年住んでいる。宮川は通常はバンコクに住んでいる。宮川と宮川の家族は、私自身および私の両親と親しい。彼は元ケーオーヤマ(K. Oyama)商会主である(タイ国立公文書館資料、

Mo. Tho. 2. 2. 3/45)。

彼女の弁明からは、宮川には彼女とは別に家族がある(あるいは、あった)ことが判る。

上述のタイ国立公文書館資料から判る、ナコンパトムの綿作畑の開墾の様子は次のとおりである。誰からもナニー・ハーンと呼ばれる宮川岩二(片足が不自由)を長として、一九三七年半ばに、トラックターを持ち込み、日本人の従業員七十八人、地元の労働者三百四十人を雇って、林野の大規模な開墾を開始された。ファイ・クワン村はナコンパトム県庁から十二キロほど離れた場所に位置する。一九三九年初めには、同村近くのラムホーイ村、トクンク、ラバンホーム村でも開墾を行なった。自ら開墾した土地の外にも、村民に開墾(Concession)させた土地も購入した。安全のために、警察官も雇って警備に当らせた。

宮川とプリンスの林野開墾あるいは開墾地取得に資金を出したのは、国策会社の台湾拓殖

株式会社(一九三六年十一月創立)であった。それは、一九四二年時の以下の報告書からも明らかである。

台湾棉花株式会社(台拓系)

昭和十二年台湾拓殖株式会社が泰南ナコンパトム県附近の棉作用地約三千五百ライ(1ライは1反6畝4歩)を買収し仔会社たる台湾棉花に経営資金の貸付を為し棉花栽培事業を経営せしめたるも事業開始以来気候或は病虫害等の災害(礙)阻し未だ充分なる成績を挙ぐるに至らざるも研究並に経験を積み漸次成績向上し昭和十六年度には泰全土を襲ひたる旱魃にも拘らずライ当り1.5担の成績を挙げ同年の泰南に於ける他の農場に比して最優秀の成績を占めた。

(イ) 設立年月日 昭和十二年5月7日

(ロ) 本社 台北市米町3丁目1(ハ) 資本金 3百万円(払込75万円)

(ニ) 重役 取締役社長 加藤恭平、常務取締役 山田拍探

(ホ) 農場名称及所在地 ナコンパトム綿作農園、泰南ナコンパトム県カムベンセン郡(ヘ) 正味栽培面積 7百ライ(ト) 実収投資額 約71万円(チ) 年産量(昭和十六年度) 実綿 400担

(リ) 邦人従業員社員 9名(ヌ) 主要取引先 台拓を通して鐘紡に売却せし近頃は台湾棉花自身の手で台湾に移入し嘉義市及台東街台棉の工場で紡績の上本島の需用に充つ(ル) 取引銀行 台湾銀行(ヲ) 株主 台湾拓殖(株数6万株全株引受)

(註) 台湾拓殖株式会社は昭和十二年6月盤谷市デジヨ路(マ)に事務所を設置し台湾棉花株式会社が経営農園の監督をなし又泰南に於ける各種産業経済の調査を行つてゐる(南方開発金庫調査部「戦前に於ける南方各地邦人企業概観(泰南)」昭和十七年10月、経調資料第11号)

土地局は、三十九年十一月二十二日付けで、土地から追い出せ

という命令を送ってきたことを前述したが、この命令は効果がなかったようである。

なお、タイにおける日本人の棉花栽培計画は、前史があり、豊富な資料が存在するが、本稿とは無関係なのでここでは割愛する。

台湾棉花株式会社のナコンパトム綿作農園は、太平洋戦争中には、タイのセニ品不足の緩和のためにいくらかの貢献があったはずである。同農園は、日本の敗戦とともに、連合国の代理人を自称したタイ政府(自由タイ派政権)によって敵産として差し押えられた。敗戦後、日本人がタイに有していた財産は、日本政府や軍の財産だけではなく、民間企業や個人財産に至るまで、すべてタイ政府の手によって没収されたのである。没収を回避するために、財産をタイ人の知合いに移転したり、隠匿したりしたために、相当の混乱が生じたようである。財産争いと関係があるかどうかは不

明だが、ナコンパトム綿作農園では、終戦直後、同園のスタッフ四名が殺害される事件が生じている。

終わりに

一九〇五年五月に、十七歳で来タイした宮川岩二は、タイ語とタイ事情を身につけ、短期間のうちに大山商主として、頭角を現した。第一次世界大戦前に、彼はバンコクにおける最大の邦人ビジネスマンとなった。

第一次大戦では、英独の対立に巻き込まれて、一時的に困難に直面したが、戦後は復活した。一九二二年六月から、二十四年三月末までタイ語日刊新聞「ヤマト」を発刊した。同紙の直言はタイ人の人気を博した。宮川の思想や当時の在タイ日本人社会を、より深く知るには、ヤマト新聞の熟読が必要である。タイ国立図書館に保存されていたヤマト新聞は、残念ながら消滅してしまつたようであるが、幸

い、私の手許には、コピーしたマイクロフィルムが残っている。一九二六年には、宮川は、日本人会会長事務代理として、現在の在タイ日本人学校の起源とも言える「盤谷日本尋常小学校」の創立に中心的な役割を果たした。一九三一年十月、世界恐慌の最中、彼のビジネスは破産した。しかし、新たに川池商事を立ち上げた。一九三三年九月三日に、バンコク日本人商工会議所の前身である「暹羅実業協和会」が創立されたが、彼も十二名の創立会員の一人として名を連ねた。

一九三二年六月二十四日の人民党の立憲クーデター後も、反人民党勢力は依然強力であった。ビジネス上、王党派と関係が深かったと思われる宮川は、人民党と反人民党派の争いの巻き添えを喰らった。彼は、一九三四年四月、人民党政権との友好関係を重視する駐バンコク日本公使によって、日本への帰国を強要された。しかし、同年末

にはタイに戻ってくることにできた。

これ以後の彼の大きな仕事は、事実上の妻である王族女性とともに、日本の国策会社、台湾拓殖株式会社のノミニーとして、ナコンパトムに広大な綿作畑を確保したことである。

敗戦とともに、在タイ日本人は資産のすべてを失い、大部分は日本へ強制送還された。五十八歳になった宮川もその一人であった。

宮川の生涯は、戦前期におけるバンコクの日本人を映し出す、最良の鏡の一つと思われる。私は、宮川やその関係者に会ったことは、一度もない。もし、読者のなかに宮川岩二やその親族についての情報をお持ちの方がおられるならば、是非、本誌編集部か私(Email: murashimawaseda.jp)に「一報をいただければ、大変ありがたい。」

(続く)

連載④  
バンコクの  
日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子 I

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

一九三六年七月六日付けで、ペナンで亡命生活中の元内務大臣ダムロン親王は、初代駐シヤム公使稲垣満次郎夫人、栄子に、英文の礼状を送った。彼女の住所は、東京麻布笄（こうがい）町一〇三であった。

栄子夫人は、訪タイする山口武（当時、在東京シヤム留学生副監督官）にダムロン親王宛のプレゼントを託した。バンコクで受け取ったダムロン親王の娘がペナンに届け、ダムロン親王の次のような礼状となったのである。

お気持ちに深く感じ入った。長い間の音信不通のち、あなたに再び連絡できることは最大の喜びである。私が、あなたやあなたのご主人、それに、共にバンコクで過ごした愉快な日々

を忘れてしまったのではないかと誤解しないで欲しい。偉大なチユラーロンコーン王が、あなたは和服姿が一番美しいので、宮廷では洋装をすることを禁じた、という話を、私は何度、友人たちに話して聞かせていることだろうか。私は兄のテーワウォン親王とともに、日本公使館での純正な日本式晩餐に招待されたが、その時に私たちはあなたが弾いたジャパニーズ・パンジョー（Japannese piano）「三味線」——日本語で何と呼ぶのかは忘れたが——の音色に初めて接した。私とあなたのご主人との付き合いで最も興味ある部分は、日露戦争時のできごとだろう。ロシアの大艦隊「バルチック艦隊」が東洋に向かっていた時、稲垣公使は毎日のように私を訪

ねて来て、ロシア艦隊について何か情報がないかを尋ねた。私は、ロシア艦隊が「シンガポール」から「シヤム湾」にまで北上して水などの補給を受けるようなことはありえない、と彼に言わたのだが、彼は私の見解を信じてはくれなかったようである。私たちは、ロシア艦隊が仏領インドシナ海岸のどこかで石炭を積み込むであろうという点では見解が一致した。

昔話をするのは年寄りの常で、私も七十四歳になってしまった（タイ国立公文書館ダムロン親王個人文書 So. Bo. 250 / 566 傍線筆者）。

ダムロン親王（一八六二—一九四三）とテーワウォン親王（一八五八—一九二三）は、ラーマ四世王の側室の王子で異母

兄弟、それぞれ内務大臣（在任一八九二年四月一日—一九一五年一月七日）、外務大臣（在任一八八五年—一九一三年六月二十八日）として、異母兄のチユラーロンコーン王（ラーマ四世の正妻の王子、一八五三年生、在位一八六八年—一九一〇年）の両股肱として、中央集権で絶対王制のタイ近代国家を築いた立役者である。しかし、その国家も一九三二年六月二十四日の軍人・文官から成る人民党のクーデター（立憲革命）によって打倒された。

クーデターで実権を失ったプラチャーンティボック王（チユラーロンコーン王の王子、在位一九二五—一九三九年）の暗黙の支持を得て、三三年十月に王族ボーウォラデート親王が、コーラートに旗揚げしバンコクに迫



稲垣満次郎夫人と思われる女性。タイ国立公文書館 Pho. Ho Wo Yo 641-99 に、「外国人女性（氏名不詳）」として保存されている

2010.11  
2010.11/A3  
7-7





1898年2月25日、バンコクでデーワオン外相と稲垣満次郎井理公使との間で通商航海条約調印

くると立ち止まって、数分間の楽団の演奏の後、『万歳』を連呼した。通り合わせたフアランの中にも、『万歳』を唱和する者もいた。行列はイギリス公使館の門から構内に入り、そこでもバンドの演奏と、『万歳』を唱えた。日本公使館に到着すると、参加者に食事が供され、花火を上げたのち解散した（バンコクタイムス、一九〇五年六月五日号）。

日本公使館で、提灯馬車行列を迎えたのは、稲垣満次郎（一八六一年一月—一九〇八年十一月）公使と栄子夫人であった。栄子夫人は、旧佐賀藩士山口尚芳（一八三九—一八九四、一八七一年岩倉訪欧使節団の副使の一人、後に貴族院議員）の娘で、一八七八年生れ、「あゝ」が本名である。

一九二一年十月に出版された、女流作家長谷川時雨（一八七九—一九四二）の『明治美人伝』の中に、稲垣栄子の名が次

のように挙げられている。即ち、「わたしは此処に、代表的明治美人の幾人かの名を記そう。そしてその中からまた幾人かを選んで、短かい伝記を記そう。上流では北白川宮大妃富子殿下、故有栖川宮妃憲子殿下、新樹の局、高倉典侍、現岩倉侯爵の祖母君、故西郷従道侯の夫人、現前田侯爵母堂、近衛公爵の故母君、大隈侯爵夫人綾子、戸田侯爵夫人極子を数えることが出来る。東伏見宮周子殿下、山内禎子夫人、有馬貞子夫人、前田様子夫人、九条武子夫人、伊藤輝子夫人、小笠原貞子夫人、寺島鏡子夫人、稲垣栄子夫人、岩倉様子夫人、古川富子夫人の多くは、大正期に語る人で、明治の過去には名をつらねるだけであろうと思われる」（長谷川時雨著『近代美人伝（上）』、岩波文庫、2011年21頁、傍線筆者）、と。

（続）



稲垣満次郎公使（『太陽』1897年5月5日号）

ったが、敗北。王族への反乱罪嫌疑・迫害を危惧したダムロン親王らは、ベナンに逃れ、以後太平洋戦争で日本軍がベナンを占領するまで同地に留まった。ダムロン親王が、ベナンからバンコクに戻る事ができたのは、日本軍の助力が与っている。

チュラーロンコーン王から絶対的な信頼を得て、ダムロン親王が内務省に君臨した、十九世紀末から二十世紀初頭の時代に、タイは、フランスに現在

ラオス、カンボジア領となつてゐる国土、イギリスには現マレーシア、ミャンマー領となつてゐる国土を失つた。内務省は、イギリス、フランス植民地との国境地域や海岸地域も管轄しており、単に国内統治だけではなく、外交的な機能も担つてゐた。そのような関係から、稲垣公使はデーワオン外相だけでなく、ダムロン内相とも職務上の交渉があつたのである。タイ国立公文書館に残されている文書を見る限り、稲垣公使はデ

ーワオン外相よりもダムロン内相と親しかったようである。アフリカ沿岸から、インド洋、東南アジア海域を経て日本近海に向かうバルチック艦隊の動向を把握することは、明治日本に生死を決定する最重要事であつたに違いない。稲垣公使は、タイはロシアの友好国であるので同艦隊がシヤム湾に入つてくる可能性を考えて、シヤム湾沿岸部を管轄するダムロン内相のもとに日参して、バルチック艦隊に関する情報が地方から上がつて来ないかどうか、を問い合せたのであろう。

当時の新聞によれば、バルチック艦隊本隊は、一九〇五年四月八日にシンガポールを通過し、四月十六日には仏印のカムラン湾に入った。続いて五月初めには第三艦隊がシンガポールを通過、両者は五月九日に仏印で合流した。その後北上し、五月二十七日—二十八日の日本海海戦でバルチック艦隊は潰滅した。これから見て、稲垣公使が

ダムロン内相のもとに日参したのは、一九〇五年四月のことであろう。

日本海海戦の大勝に、バンコクの日本人社会は大歓喜した。日本人は、同年六月三日（土曜日）夜八時に、王宮近くのラーチャピット寺近く（サパーン・モーン）のS. 池崎商店の前に集り、二十五台の馬車（二頭立および一頭立）を連ねて、シカク・プラーヤーシー、シーカク・サオチンチャー、バムルン・ムアン路、サナム・チャイ路の順で、バンコク城内を一周した後、パフラット路からチャローン・クルン路を通り、シーパヤーの日本公使館まで提灯馬車行列をした。

馬車の幌には、日本とイギリス国旗が飾られ、楽団が乗った二台の馬車を先頭に、手に手に提灯を持った日本人が乗った馬車が続いた。中に灯をともした、竹の骨組みに紙を貼つて作った軍艦の模型が人目を引いた。行列は日本人の家の前まで



連載⑤  
バンコクの  
日本人

# 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子Ⅱ

村嶋英治  
早稲田大学アジア太平洋研究科教授

栄子（一八七九年三月二十二日生）が一八九九年に結婚した、稲垣満次郎初代公使はいかなる人物であろうか。本号では、簡単に彼のプロフィールを見ておきたい。

稲垣満次郎（一八六一—一九〇八）の経歴について最も詳しい記述は、対支功労者伝記編集会『統対支回顧録 下巻（列伝）』大日本教化図書株式会社、一九四一年、二〇五—二一〇頁の「稲垣満次郎」の項である。主にこの記述に依りながら、別の資料でいくらか補足すると、稲垣の経歴は次のようになる。

稲垣は旧肥前平戸藩天野勇衛の次男として、文久元年（一八六一）九月二十六日に平戸で生まれた。十七歳のころより長崎監獄に奉職し、西南の役（一八七七年）の薩摩軍残党を護送して上京した後に辞職した。東京で、まず中村敏字の同人社に学び、大学予備門に転校し、一八八二年九月、大学（後の東大）文学部に進学した。

時、読売新聞十一月二十七日号は「大学予備門時代の稲垣公使」と題して、次のように報じている。「故稲垣公使は非凡な頑固党で又馬鹿に勉強家であつた。大学予備門時代には着の身に着の俵で袴（はかま）も解かず三十日間位は平気で勉強したものだ。だから垢だらけで何時もシラミの総攻撃を受けて居た。それが氏には無上の光榮否名譽であつたのだ。其後氏は一身上の都合から中途で大学を止してロンドンに留学したが其れ以来丸で人間が変わりコストメチックは塗る。着物は流行の魁と来る。

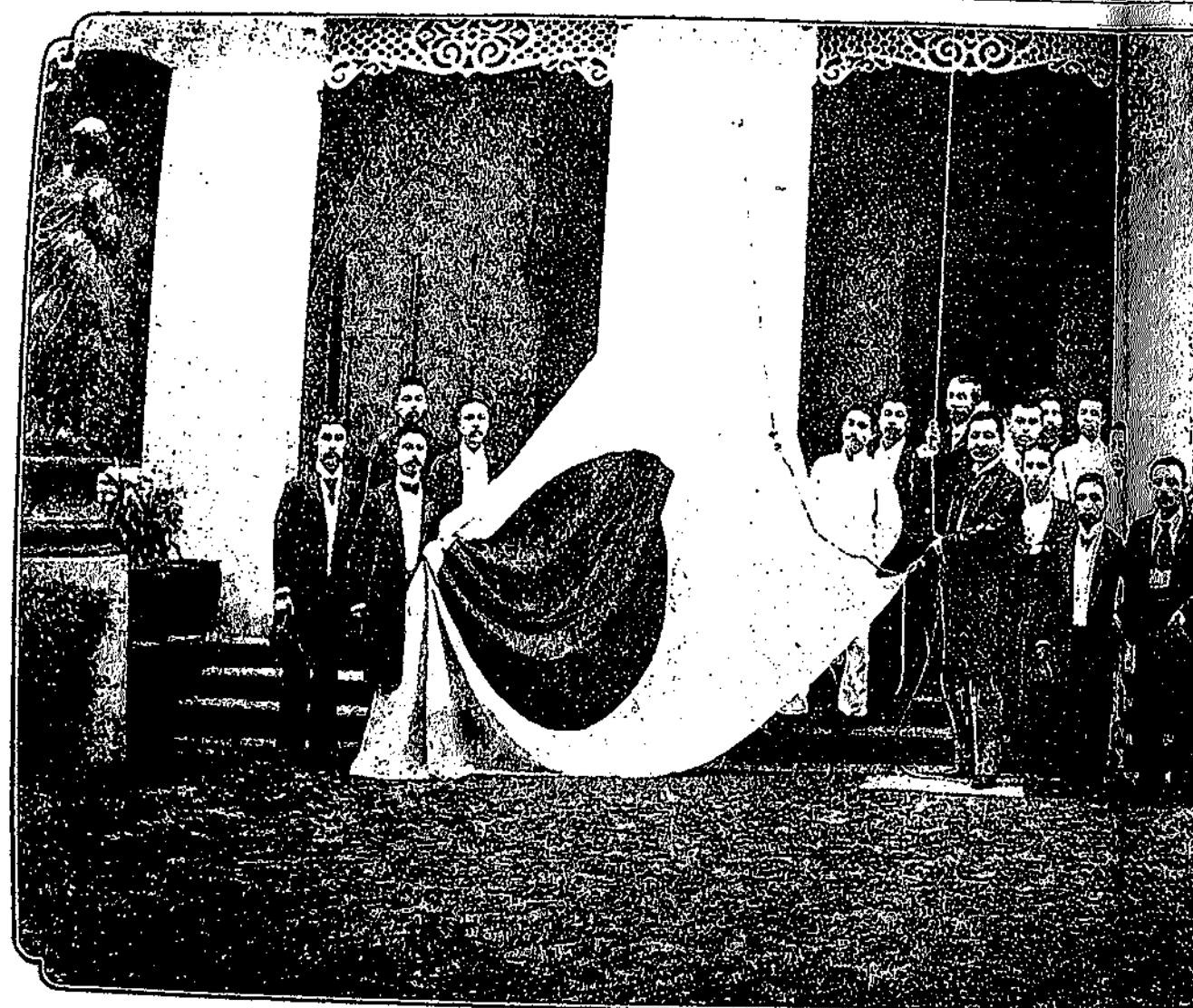
る。めつきりハイカラになりました。せでしまった。氏の令夫人は同じ大学予備門の同窓山口俊太郎氏の令妹で頗る付の美人で而かも才氣縦横な理想的外交官令夫人であるそうである。何れにしても惜しいことである」

稲垣は、一八八五年八月に旧藩主の息子松浦厚（一八六四—一九三四）の欧州遊学の随伴補導役に選ばれ、八六年一月にロンドンに到着。松浦厚とともにケンブリッジ大学に入学した（松浦伯爵家編修所『松浦厚伯伝詩文鈔』倭文社、一九三九年）。稲垣が学んだのは、同大学のGonville and Caius College。一八九年には学士号を得た。翌九〇年、二十九歳の時にロンドンで英文自著「Japan and the Pacific and a Japanese View of the Eastern Question (London: T. Fisher Unwin, 1890)」を刊行。

松浦より二年早く、九一年初めに帰国した。



Mr. Inagaki, the First Minister of Japan in Siam, hanging up the National Flag in the new building of the Legation.



式旗上館使公本日設新國暹  
Mr. Inagaki, the First Minister of Japan in Siam, hanging up the National Flag in the new building of the Legation.

九一年から九七七年にシヤム公使に任じられるまで、学習院並びに高等商業学校の嘱託教授（奏任待遇）を勤めた、という。しかし、学習院には九一年九月十四日に依頼を受け、同月末には依頼により嘱託を解かれていないので、長く嘱託教授をしたのは高等商業学校の方であろうか。



1907年半ばの日本公使館

三十五歳の稲垣は、書生から破格の出世をして、弁理公使として「暹羅国駐劄被仰付」(『官報』第四一三二一、明治三十年四月一日、19頁)けられて、初代シャム公使として、四月二十五日に新橋駅を出発した。

稲垣満次郎を弁理公使に任じる、明治天皇のチュラーロンコーン王宛ての信任状の全文は以下の通りである。

「天佑を保有し万世一系の帝祚を踐みたる大日本国皇帝睦仁敬て威徳隆盛なる良友南北両暹羅国皇帝ソムデッチ・フラ・パラミンドル・マハ・チュラロンコーン・フラ・チュラ・チョムクラオ陛下に白す

朕幸に從來兩國間に存する所の友誼交情の益々鞏固親密ならんことを欲し茲に稲垣満次郎を弁理公使として閣下に駐劄せしむ。満次郎人と為り忠誠篤実事を執て勉勵し物に当て敏達なること朕が固より熟知する所にし。陛下の寵眷を蒙るべきは疑を容れざるなり。満次郎朕が名を以て陛下に陳述する所のものは之を信用聴納せられんことを深く冀望す。茲に朕が恭敬親愛

の衷情を表し併せて陛下の康寧を祈る

神武天皇即位紀元二千五百五十七年 明治三十年四月六日 東京宮城に於て 親ら名を署し璽を鈐せしむ

睦仁

外務大臣伯爵 大隈重信  
(NAT. No. 5 To. 7/16)

六月二日に、稲垣はチャクリーマハープラサート宮殿において信任状を国王の摂政である暹羅に捧呈した(NAT. No. 5 To. 7/16)。

当時、チュラーロンコーン王は訪欧中であつた。稲垣は仮の公使館をオリエンタル・ホテルに開いた。

稲垣の重要使命は、修好通商航海条約の締結であつた。一八九七年六月十五日付で、稲垣はテークウオン外相に、日本政府から修好通商航海条約の交渉を開始するように訓令を受けたこと、政府は稲垣に交渉の全権を与えたことを通知した。六月二十五日には、テークウオン外相から摂政(皇后)から条約交渉の全権に任じられたことを知らせてきた(NAT. No. 5 To. 7/16)。

九二年三月には『商工業対外策』、九月には『教育之大本』と『東方策論結案』の二冊と『九二年にも計三冊を刊行した。その後の著作は九二年五月の『南洋長征談』、九六年二月の『外交と外征』の二冊のみである。

日本における稲垣の活躍の場は、一八九一年初に創立された東邦協会であつた。同年十一月十五日に、彼は同協会の評議員に当選し、九五年十月から一九〇一年六月まで同協会の幹事長を務めた。

稲垣は一八九三年初め頃から東南アジア各地を訪問した。その様子を、彼は早稲田大学で次のように語っている。

「今日私の御話を致します主眼といふものは諸君が此東南亜に於ける國勢平均の由て來たる所及び現今將來の事に付て御考になる此方針だけを御話致すことに止て置きたいと思ひます。……私が此問題の研究を始めましてからでも既に数年掛つて居ります。それで此私の東南亜と名けて居る分の中で香港の如きは私は八回も参つて居る。それからシンガポールの如きへも数回参り台湾へも参ります

し、それから和蘭領のジャワ群島にも三ヶ所ばかり参りました。それからマカオの方へも参り文東京(トンキン)地方へも遊び暹羅の如きは前には一度漫遊し後には其局に當て一ヶ年駐在して居りました。前後四五年間といふものは漫遊を致したり又は其他種々の方法にて大いに研究を致して居るのでございます」(稲垣満次郎「東南亜に於ける國勢平均の歴史及び実勢」、『早稲田学報』第二四号、一八九九年二月二十五日、22頁)

稲垣は、欧州各國が勢力を争い、人種も文化も宗教も異なる民族を支配している地域として「アジアの東南部」を特徴付け、この地域を「東南亜」と称した(稲垣満次郎「東南亜に於ける國勢平均」、『早稲田学報』第一九号、一八九八年九月二十五日、1-4頁)。

稲垣は、東南アジアの地性的性格を特徴付け、意識的に「東南アジア」概念を用いた日本で最初の論者の可能性がある。

読売新聞一八九七年一月十日号は、「岩本氏の東南亜細亞大冒険」の見出しで、ラオス、ベトナム等探検に出發する岩本千

綱の「告別の辞」を掲載している。岩本千綱はこの冒険の後、手回しよく『暹羅老嫗安南「シャム・ラオス・アンナン」三國探検実記』(博文館、一八九七年八月三十日発行)を刊行した。

日本ではアメリカとは違い、東南アジアという概念が、十九世紀末から用いられていることに注意しなければならぬ。

東南亜訪問の一環として、稲垣は一八九四年四月にタイを訪問し、テークウオン外相らと会見している。その詳細は、拙著『ビブーン』(岩波書店、一九九六年)四七-四九頁を御覧いただきたい。

ところで、稲垣が早稲田大学でしばしば講演をしているのは何故だろうか。それは政官界のコネに乏しい彼が、大隈重信に貴重なパトロンとして頼つていたからである。一八九九年に結婚した榮子の父、山口尚芳(まさか)も佐賀の武雄出身で明治維新期に大隈重信の下で活動したことがある。稲垣は夫婦揃つて大隈重信との関係が深かつた。

稲垣が初代シャム公使に任じられたのも、大隈の助力が与つている。『続対支回顧録 下巻(列伝)』の「稲垣満次郎」の項は、次のように記している。

「偶々明治廿九年九月松方正義大命を奉じて内閣「松隈内閣」を組織するや、東邦使臣に民間の人材を抜擢する方針で、当時矢野文雄、大石正巳、荒尾精、及び君等の諸人が噂に上つて居たが、其の実現したのは矢野の支那公使と、君の暹羅弁理公使の任命であつた。蓋し君が一囑託教授から、一躍外交の要職に起用されたのは、當時に在つては破格の出身である。勿論君の東方時局に対する識見を買つたものに相違なきも、又一面には先輩副島種臣の推輓に由り、大隈外相に識拔されたのであるとも云はれて居る」

当時、稲垣は実務の手腕はない、口だけの大風呂敷であると冷やかに見られていた。稲垣は短期間に多数の出版物(単行本、雑誌論文)を出して人の眼を引いてはいたが、外務省の生え抜きでもなく、藩閥にも関係ない在野の書生文筆家に過ぎず、在野から大隈によつて大抜擢されたことへのやっかみも強かつた。

一八九七年三月三十一日、満

紆余曲折の後、一八九八年二月二十五日、稲垣公使とテーク・ウォン外相は、十六条からなる『日本暹羅修好通商航海条約』および三項からなる『議定書』に調印した。なお、本誌十一月号に掲載した調印時の写真は、稲垣が撮影させてタイ側に渡したものである（『The Asiatic』）。

同条約は「日本国皇帝陛下及暹羅国皇帝陛下は俱に両国間並に其の臣民間に幸に存在する所の修好通商及航海の關係を増進せむことを欲し此目的を達せむが爲め茲に条約を締結することに決定し」（『官報』第四四九五号、明治三十一年六月二十五日）という前文で始まっている。

「日本国皇帝陛下」という語に注目して欲しい。明治以来一九三〇年代半ばまでの日本政府の対外的公文書は、天皇とは言わず、常に「皇帝」と言ってきた。日本とタイの元首は、漢字で書いた場合、相互に「皇帝」とよび、対等な関係であった。

ところが、中国にとって「皇帝」は地上に一人しか存在しないように、民国になってからもタイと国交締結の交渉をする場合、中国側はタイの元首を漢字

で「皇帝」と表記することを拒んだ。テーク・ウォン外相は、日本は国交の当初から「皇帝」とよんでくれるのに、どうして中国にはできないのだと不満を表明している。

国内に多数の華僑を抱え、華僑が中国の指導下に動くことを警戒したタイは、もともと中国との国交に積極的ではなかった。近代においてタイと中国との間に初めて国交が成立したのは、一九四二年、南京国民政府（汪精衛政権）との間にあってである。

稲垣は、一八九八年五月二十七日にシヤム国総領事のローラン・ジャクミン夫妻を伴って長崎に到着。六月一日に東京に帰着した。この後、九月十月末に新妻栄子を伴って、バンコクに発つまで稲垣は十七ヶ月を日本で過ごした。

稲垣満次郎が特命全權公使に任じられたのは、一九〇三年十月になつてからである。

一九〇三年十月八日付で「弁理公使從四位勲三等、稲垣満次郎」は「任特命全權公使、叙高階官一等」された（内閣局発行『官報』第六〇八三号、明治三十六年十月九日、170頁）。

明治天皇からチュラーロンコーン王に宛てた信任状（一九〇三年十月十四日付）の本文は、「現に閣下に駐在する弁理公使從四位勲三等稲垣満次郎を特命全權公使に陞任し閣下に駐劄せしむ」（『The Asiatic』）とある。

この部分以外は一八九七年の弁理公使の信任状と全く同文である。一九〇三年十月八日に特命全權に任じられる時点まで、稲垣は弁理公使に過ぎなかった。

ところで在バンコク日本大使館の現在の所長は、稲垣の特命全權公使任命を、一八九九年十一月十九日と記している。これは稲垣が実際よりも四年弱も早く特命全權に陞世していることになる。因みに、一八九九年時点では、在タイの各公使は全て弁理公使であり、特命全權公使は未だ存在していない。タイに初めて特命全權公使を置いたのは米国のようで、一九〇三年のことである。日本より数ヶ月早いに過ぎない。

筆者が上記HPは誤記ではないかと関係者に問い合わせたところ、外務省の基礎資料がそうなっているという返事をいただいた。確かに、戦前に外務省人

事課が編集した年鑑、外務大臣官房人事課『外務省年鑑（貳）』一九三七年、五一頁によれば、稲垣満次郎は弁理公使には一八九七年三月三十一日に、特命全權公使には、一八九九年十一月十九日に任命と記されている。

しかし、上記の明治天皇の信任状原本や日本政府の『官報』から見て、外務省保存の基礎資料には戦前のどきどきがあり、稲垣夫妻が最終的にタイを離れたのは、一九〇五年十二月二十一日である。この時、十一名の海軍留学生を伴って帰国した。翌〇六年八月になって、次の任地としてスペインが内定し、〇七年三月末にスペインに向けて離日した。

夫妻は仲良く連名で三月三十日に次の新聞広告を出している。

「拙者僥任地に向け出発の際には陛下御見送被下難有奉存候。乍略儀紙上を以て御礼申上候。頃首三月三十日、稲垣満次郎・同栄子」（『朝日新聞』一九〇七年三月三十一日）。

（続く）

連載⑥  
バンコクの  
日本人

# 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子Ⅲ

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

前号に記したように稲垣満次郎は、タイとの間の修好通商航海条約に調印した後、タイ政府総領事のローラン・ジャクミンを伴って一八九八年五月末に日本に帰国した。

この後、日本に留まった稲垣は、99年4月頃に山口あゐ（栄子）と結婚、同年10月末にバンコクに再び出発した。稲垣の在日期間は、17ヶ月に上った。本号では、この間の稲垣の就活と婚活について見てみよう。

明治・大正時代のジャーナリスト、政治家として知られる石川安次郎（号は半山、1872-1925）は、『鉄胆阿川太良』（1910年6月発行。日タイ間の貿易を目的に阿南商會を1895年に共に興した阿川太良を追悼した本）に、条約締結に成功し、条約交渉の実

質上の相手方であったジャクミンを伴って、意気揚々と帰国した稲垣を待ち受けていた日本の政情を次のように書いています。

当時の情勢を理解するため、少々長くなるが引用してみたい。

「日暹貿易の先驅者として、彼れ「阿川太良」の事業が大に発展しなかつた事は、我輩共此の商會「阿南商會」に深い關係を有する者の均しく遺憾とする所であるが、之れには多くの理由がある。而して其の最も大なる理由は、政府の方針が我輩共と見る所を異にして居たからである。松隈内閣の外務大臣大隈伯爵は、其の豪壯なる意氣を以て、稲垣君を草莽「民間在野の意」より抜て暹羅公使に任じ、以て大に日暹兩國の親交を増進せしむるの方針を立てたが、此

の外交方針は大隈伯爵の退官と同時に一変した。伯爵に次で外務大臣となつた所の西徳二郎男「1897年11月6日に大隈の後任として外相就任」は、久しく露國に在て、欧州の形勢に通じ、日本に於ける親露主義の頭領で在つた。親露主義は即ち明かに親仏主義で有る。彼れは北方に於て露國と握手し南方に於て、仏國と交歓するを以て、日本が東洋の平和を維持する所以なりとの意見を抱持した人である。而して松方内閣が壇の浦に没落して、英國のヴィクトリア女皇ジュビリー式から帰つて来た伊藤侯爵が第三次伊藤内閣「1898年1月12日成立同年6月24日伊藤首相辞表」を組織するや、西男は依然として外務大臣たり。伊藤首相と語て意氣全く投合し、政府は親露親仏の

方針を執る事となつた。稲垣満次郎君は此の如く政府の方針の一変せるを知らずして、新に日暹条約を締結して帰朝する時、欧州公法學者の泰斗にして、當時暹羅政府の顧問として、少からざる勢力を有して居た白耳義（ベルギー）人ローレン（ローラン）・ジャクミン氏を同伴した。彼れが盤谷を出発する時、心算かに期すらく、日暹条約の締結とローレン・ジャクミン氏の同伴は以て満天下の注意を我が一身に集注するに十分なる価値を有すと。何ぞ図らん。内閣の交渉は、政府の方針を一変せしめて居て、彼れは意外にも頗る冷やかなる待遇を受けた。彼れは帰朝後、直ちに「1898年6月17日に」宮城へ参内して、謁見を賜はるや詳かに日暹条約締結の次第を奏上した。陛

2011.1.18





稲垣栄子

下は彼れの奏上を終りたる時に  
滞りなく大任を了し、満足  
に思ふ

との勅諭を下し賜ふた。彼れは  
満身に此の光榮ある勅諭を浴び  
て、昂然として去て総理大臣官  
邸に赴くと、案外にも伊藤首相  
は極めて冷やかなる態度を以  
て、彼を待遇した。

日本は常に大局の上より打  
算して、外交の方針を定め  
なくてはならぬ。抑も暹羅  
は君も知れるが如く、仏国  
の勢力範囲で有る。日本が  
今日に於て暹羅に接近する  
は、却て仏国の嫉視を招  
き、其の反感を招くの虞あ  
ることを顧慮しなくてはな  
らぬ。

伊藤首相は稲垣君に向て、此の  
意味を敷衍したる大説法を浴せ  
かけ、彼れが滔々として日暹条  
約の効能を説かんとする勇氣を  
挫いて仕舞ふた。此時の稲垣君  
の失望と煩悶は、実に非常な者  
で有った。

稲垣君は其頃独身で、帝國ホ

テルに宿泊して居たが、一日我  
輩の所へ書面を以て、用事が有  
るから面会したいと言て来た。  
往て見ると、此の顛末をスツカ  
リ話して、自分の計画がスツカ  
リ外づれ、ローレン・ジャクミ  
ンに対しても面目がないと言つ  
た。彼れの考按では政府が主と  
なりて朝野を挙げて盛にローレ  
ン・ジャクミン氏を歓迎し、日  
暹条約締結祝賀会のお祭り騒ぎ  
を演じて以て内には国民の心を  
暹羅に傾けしめ、外には暹羅を  
して日本に依頼せしめんと企て  
たので有るが、何ぞ図らん、伊  
藤首相はローレン・ジャクミン  
氏の歓迎どころではない。日暹  
条約其者の発表さへも或は仏国  
の感情を害し、延て露国の感情  
を害しはしまいかと戦々競々と  
して居て『ドウモ稲垣はやり過  
ぎて困る』と首を傾けて居たの  
だ。加之ならず、稲垣君は大隈  
内閣「正しくは1896年9月  
に成立した松方正義首相、大隈  
重信外相からなる内閣、松隈内  
閣と称された」が登庸したる人

材で、外務省の閣外の者で有る  
のみならず、前内閣の時代各省  
に登用された人材は、内閣交迭  
と同時に殆んど悉く一掃された  
るに、稲垣君のみは独り其地位  
を保て居るので、政府の内外か  
ら嫉妬を受けて、攻撃の中心と  
なつて居た。曰く稲萬「稲垣満  
次郎」は策士で有る。曰く稲萬  
は法螺吹きで有る。頻りに其の  
人格を攻撃するので、伊藤首相  
は遠からず稲垣君の首を斬る積  
りで居た。稲垣君は此の巨細の  
事件を我輩に語りたる後に曰く、

僕は暹羅公使を罷めること  
は何とも思はぬが、僕が罷  
めたなら政府は必ず暹羅の  
公使を廃止し、折角僕が苦  
心して着手した日暹の親交  
に、傷が附くことを恐れ  
る。そこでドウモ此際民間  
の輿論を以て、政府を刺激  
して貰ひたいと思ふ。民  
間の輿論が、日暹条約の必  
要を認め、日暹兩國の親交  
を必要とすることを政府に

知らして貰ひたい。君は図  
南商会の顧問で暹羅には特  
に關係が有るから、兩國の  
為めに之を願ふ。

我輩は快よく之を引受けた。其  
内に東印度協会の集會が「18  
98年7月31日に」開かれて、  
稲垣君も出席する事になり、我  
輩と大井憲太郎君が演説をする  
事になつたから、我輩は此の集  
會の席上に於て盛に日暹条約の  
成功を頌賛し、且つ 陛下から  
稲垣君へ勅語を賜はつたことを  
引て、

伊藤総理大臣にして若し仏  
国の感情を害せんことを恐  
れて、陛下が満足に思ふと  
の御賞詞を賜はつた所の功  
臣稲垣君を免官するが如き  
事あらば、我輩共は君國の  
為めに、断じて此内閣を其  
儘に捨て置くことは出来な  
い

と叫んだ。稲垣君も亦此席で、  
諄々として日暹条約の功能を説  
き、大井君も亦激烈なる言語  
と、其の犯すべからざる威容と

を以て、伊藤内閣の外交の軟弱  
なるを罵倒し、稲垣君を免官と  
するが如き事が有つたら、決し  
て承知しないと宣言したが此の  
集會の記事が新聞に現はれて  
後、我輩が品川「弥二郎」先生  
の所へ往くと、先生は伊藤に対  
して勅語に背くかとは、エライ  
急所を突いた者だと笑はれた。  
稲垣君は矢張り同じ論法で大  
隈、山縣、松方の諸元勲を説き  
廻はり、到る所で勅語を持ち出  
したので、如何に外務省の姑、  
小姑が反対しても、遂に之を動  
かすことが出来ず、其内に憲政  
党が出来て、伊藤内閣が転覆し  
た為めに、稲垣君は再び盤谷へ  
帰ることができた。

ローレン・ジャクミン氏は折  
角日本へ来て歓迎されると思ひ  
の外、唯大隈伯爵の厚意に依て  
早稲田大学に於て氏を招待して  
講演を聴いた外、何等の歓迎も  
なく、悄然として「98年6月16  
日に」日本を去り、稲垣君も之  
れには非常に閉口して居たが、  
ソレ所ではない其時には自分の



地位さへ危ふかつたのだから、如何とも仕方がなかつた。

又此時稲垣君は日暹兩國の間に、通商貿易上の設備として緊要なる者、三十余件を携へ、波瀾男爵を始め重なる実業家の間を説いたが、政府の外交方針が此の如く冷淡で有つたから、此の計画は悉く水泡に帰した。若しも此時代に於て稲垣君の意見が行はれて居たならば、日暹貿易の上には大なる利益が有つたで有ろうが、実に遺憾な次第で有る。特に伊藤内閣の後を承けた大隈内閣も、僅かに半年にして倒れ、山縣内閣「第二次山縣内閣」1898年11月8日成立、1900年9月まで」の外務大臣青木周藏が依然として欧州外交を中心とする人で有つたから、稲垣君に対しては最も冷淡なる態度を取り、爾来日暹兩國の親交を増進すべき何等の設備もないので日暹貿易は寧ろ政府に依て阻害せられた形跡が有る。是れは我輩が敢て我が國南商會が十分の發達をなし得な

かつた最大原因とする次第で有る。」

上記引用文は、事件から10年以上を経て書いたためか、著者石川の記憶は混同している。稲垣の外交成果に冷淡であつた伊藤博文首相は、1898年6月24日に辞表を提出し、6月30日には憲政の大隈重信内閣（大隈首相は外相兼任、板垣内相。限板内閣と言われる）が発足している。それ故、同年7月末日の東印度協會の集会（読売新聞1898年8月2日）の時の首相は、石川の言う伊藤ではない。既に稲垣のバトロンの大隈にかわつていた。また、本稿が記すように稲垣のバンコク帰任までのプロセスの実際は、石川の説明とは異なっている。とは言え、稲垣帰国直後の98年6月は未だ伊藤内閣の時代であり、98年初めの同内閣発足以来、稲垣に対する風当たりが相当地強かつたのは事実である。読売新聞1898年4月15日

は、「稲垣公使と日暹条約」の見出しで、稲垣の公使罷免の可能性を次のように報じた。「暹羅國駐劄弁理公使稲垣満次郎氏は今回免官せらるる筈にて既に其後任者さへ定まり居るとのことなるが今何故に突然免官の沙汰に至りしかを聞くに同公使は予て托せられたる日暹条約漸く近頃調印の場合に立至りしが右新条約は勿論欧米諸國の新条約とは趣を異にし不平等の条項数多あれども其条項中政府の意に満たざるものありたるより遂に免官となるに至りしならんといへり。暹羅公使の後任 稲垣弁理公使に代て暹羅駐在公使に任ぜらるべきは無任所弁理公使たる早川鉄治氏なるべしといふ。」

稲垣が批判されたのは、日本がタイと締結した条約は、欧米諸國とタイとの条約なみの特権を獲得することができなかった点である。日タイ条約は、対等の形式を採り、ただ議定書でタイが法律を近代化するまでの期

間に限り、日本の領事裁判権を認めたと過ぎなかつた。無条件無期限の不平等条項が明記されている欧米諸國の対タイ条約とは大違いであつた。6月1日に帰京した稲垣の反論が、読売新聞1898年6月2日に掲載されている。彼は、条約は未曾有の成果であり、東京で用事が終われば直ちにバンコクに帰任するとして、次のように述べた。

「自分「稲垣のこと」帰朝の用向は日暹条約訂結の実況及び意見を開陳するに在りて此事畢れば直に帰任せん考なり。本条約は不平等にして治外法権を存し裁判権の如きも他國は始審權は暹羅國に属し終審のみ自己外國に於て行なへども日暹条約は全然我權利に属せしめたり。此の如く我國利となるべき条約は未曾有にして若し批難を本条約に加ふるものあれば夫れこそ批難者の愚痴を表するに異ならず。既に御聴許となりし本条約文は本月三日發送せられたれば

遠からず發表せらるべし。

佛國が暹羅に志を抱き種々の干渉をなせる事は恰も一時露國の韓國に於けるが如し。随つて人心は却つて佛國を厭ひ実力の存する處は英國に在り。然れども列國環視の間に介在せる暹羅國なれば孰れの邦國と雖も専横なる手段を施す能はざるは同國の幸福なるべし。

同國皇帝陛下は太（いた）く我國を慕はせられ遅くも本年八月には是非來觀すべしとの御話ありたり。帰朝御暇乞の節陛下は我々天皇陛下に御親密なる御伝言ありたるのみならず美術品の御進物ありて自分携へ歸れり。殊に陛下「チュラーロンコーン王」は自分「稲垣」の実母の病氣を聞召され蒲団を下賜せられたるのみならず皇弟よりも刺繍品を賜はりたる事は自分の大に名譽とする所なり。

該國在留の日本商人は三十名あれども孰れも冒險的思想に驅られし突飛連にあらざれば壯士の商人に化けたるものなり。日

暹貿易は我より石炭を輸出し彼より米を輸入し来る等將來頗る有望なるにも拘はらず俄商人は此の如し。現に今回同地に商業會議所設立の計画ありて日本商人よりも委員を選出せられたしとの通牒ありたるも之が適任者なきにても我商人の如何なるものなるやを知るに足るべし。」

上記引用中、欧州訪問から帰つたばかりのチュラーロンコーン王が稲垣に、早ければ98年8月に訪日すると語つたという行は注目される。しかし、稲垣は用事を済まして直ちに帰任するどころか、17ヶ月も滞日することとなつた。どうしてだろうか。帰国当初は、未だ伊藤内閣時代であり、石川安次郎が書いていような稲垣公使罷免の動きも存在してゐたのである。しかし、98年6月末には大隈内閣が成立したので、稲垣が希望すれば帰任は困難ではなかつたはずである。

現に、同年9月には帰任の命令を受け、近々バンコクに復任

する（読売新聞1898年9月14日）という報道がある。11月になると、ローラン・ジャクミンがタイに戻つて来るのは来々99年の3月であるから、それ以前にバンコクに戻つても仕事がない（読売新聞1898年11月29日）という、帰任を遅らせている稲垣の弁解が報道されている。

これから稲垣を遅らしたのは、稲垣の意思によることは明かである。タイとの条約締結という大仕事を終えた稲垣にとつて、日タイ關係の次の仕事は、貿易量の増大や日本商人のタイ進出という經濟關係の拡大であつた。彼は東京で機会があれば、タイ經濟の實情紹介を行つた。例えば、98年12月11日には、芝公園の全國實業大會閉會式で、山縣首相、松方蔵相らの來賓に就いて、シャム貿易談を講演している（東京朝日新聞1898年12月12日）。資本主義發展初期の日本經濟にとつて、タイは注目すべき國の一つで

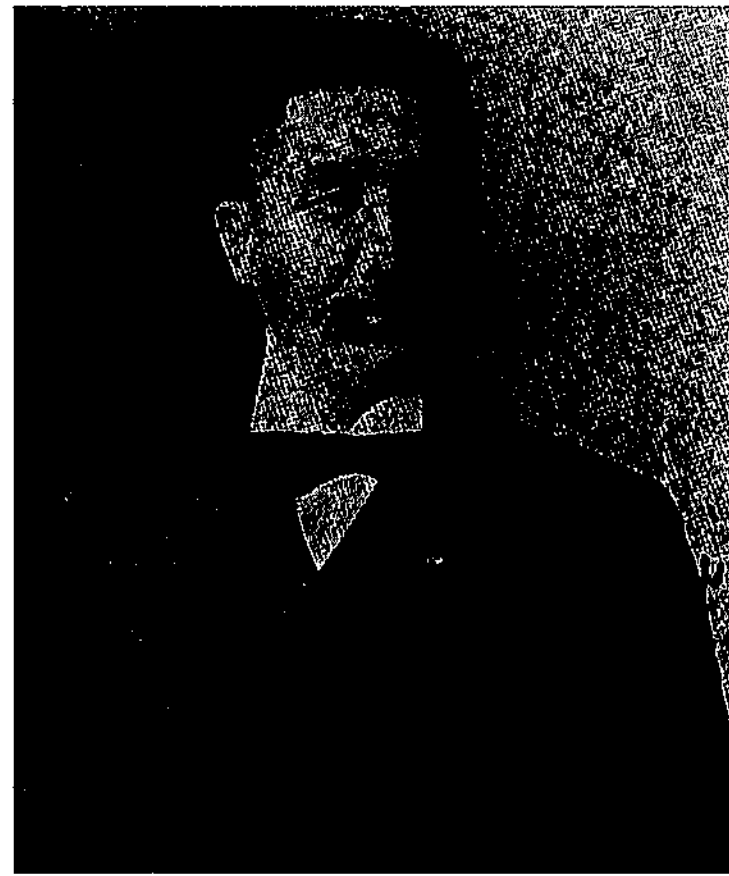
あつたようである。同時に日本人のタイへの関心を高める上で、著名かつ熱心な稲垣の存在そのものも重要な役割を担つたようである。

しかし、東京に居残る稲垣の真意は、新しく大きな仕事のできる活躍の場を求めることであつた。彼は売込みに努めた。読売新聞1899年4月16日の外交界彙報は、「稲垣公使の躍起、同公使は外務次官の空椅子を狙つて盛に運動し居れど、現内閣「第二次山縣内閣」外相は青木周藏」にては到底ダメと冷笑し居れり」と報じている。更に、東京朝日新聞1899年4月20日の黄塵録というコラムは、「稲垣、已に伊太利公使になつた積で教師を聘し新夫人に迄伊太利語を習はせるとは性急のイタリ」と皮肉つてゐる。更に、東京朝日新聞1899年4月25日は「稲垣の失望」という見出しで、「久しく伊國公使の地位を熱望し居たる稲垣満次郎氏は今度再び暹羅に帰任すべし

との内命を受けたる由にて伊国公使は大山綱介氏に任ぜられんとする模様なるを以て氏は大に失望して再び暹羅に赴く位ならば寧ろ現職をも辞職す可しと語り居る由」と報じている。

37歳の稲垣は、就活・猟官運動と並行して、婚活にも邁進した。彼の結婚記事は、東京朝日

新聞1899年4月20日が初出であり、上記のようにイタリア公使のポストを約束されたときとちりして、新夫人にイタリア語を習わせ始めたことが書かれている。同じ日の黄塵録は、「稲垣……新婚旅行中だと涎をたらして羨やむやら猶「それ」むものあり見ツともないではな



稲垣満次郎

いか」と書いている。これらの記事から99年4月には稲垣は新婚早々であることが判る。彼と結婚相手あい（栄子）との馴初めについては、栄子の長兄、山口俊太郎（1863-1924）と稲垣が大学予備門の同窓であったということしか判らない。俊太郎は1871年に父尚芳が米欧回覧の岩倉使節の副使として渡航する際に同伴し、そのままイギリスに留められ教育を受けさせられた。滞英9年、殆ど日本語を忘却して帰国後、東大に学び1887年に東大工科を卒業した人物である（石井良一『武雄史』、1956年刊、665-666頁）。

外務次官やイタリア公使の就活には失敗したが、栄子（20歳）との縁談は稲垣の大きな財産となった。後になるが読売新聞1920年9月21日朝刊の「天理教に凝る稲垣未亡人」と題した記事は、「面白いのは稲垣未亡人で嘗ては日本一の美人

として其美貌の爲めに却つて夫満次郎氏に名を為さしめた位の人だが……」と述べている。美貌の妻を娶った稲垣が、従来以上に注目されるようになったことは間違いない。彼が栄子を伴つてバンコクに出發するまで、稲垣新夫妻は恰好の冷かし材料を新聞に提供した。東京朝日新聞1899年4月26日の黄塵録は、「稲垣の伊太利愈々ベケになつて再び暹羅にも行かれず之れを唄「かか、妻の意」喰つた報「むくい」といふと某通信社の悪誦」と書き、翌日の同一コラムには「稲垣日くおれの希望を拒むと三日で内閣を敲き擯す 三橋日く彼は女房の髪も壞す程の力なき也」とある。更に、5月2日の同一コラムには、「稲垣、新婦の髪を擯す程の腕も無と言れ是でも北廓のお直と新橋の小蝶を生捕た腕だと願「あご」を撫る」と書かれている。

「特命全權白粉公使」という見出しの読売新聞1899年8

月3日の記事は言う。「池の水鳥首尾よく射落して相当の敵に失恋の曲を唄はしめたる稲垣満次郎氏蜜月の歓を尽して京に帰りたる後は鴛鴦双棲の娛み嬉しくて耐らず車を小川一真の門に駆りて写真をとること二十幾回、起ちて写したるもあり坐りてとりたるもあり和服のもあれば洋服のもあり五位の大礼服厳めしく洋装の新夫人と相對して舶来の立雛様かと思はるるが最も得意の撮影とぞ聞えしが小吳「こう」炬を探りて満都燈くが如くになりてよりは夫妻手に手を取て腰越の別業に赴き（但し夫人の実家の）磯馴松の間海濱龍吟相和する処に蜜月の樂を再びし新郎の新婦をいたはる有様には出入の女髪結も坐る感心して家の亭主に旦那の爪の垢頂戴して飲せしなどほざく程なりしが新夫人の行李に納めし白粉「おしろい」近頃みんななくなりて朝夕のお化粧にこと欠く様になりしかば稲垣氏スワ一大事とこの暑さにも屈せず一兩日前

大汗かきて尾張町の白牡丹に入り来り無事に白粉買ひ特命全權の使命を果して勿々腰越に引返へせしかば人々いづれも今更に稲垣氏が艶福を羨み合ひけるとか」と。

「白粉公使に失恋の賦を贈る」と題した読売新聞1899年8月5日の記事は、「特命全權白粉公使の辞令我が紙上に出でしより稲垣氏を恋の敵と附け視ふ多くの不破伴左衛門殿また今更の様に口惜しがりて自暴酒に胃病を起すもありしが中にも外務省の高等官を勤むる某は地段駄踏みつつ失恋の賦といふを作りて之に「書を添へ外務省小使の名を以て腰越なる艶福夫婦の許に送りしに其書は宛も稲垣夫妻が彼の雑報を比翼読みせる処へ着きしかば夫妻は相顧みてニヤリと笑ひしとか」と。

タイに帰任せず、新しい活躍の場を求めた稲垣も、1899年の夏を過ぎると獵官を諦めた。彼はフランスのタイに対する干渉の強化という情勢変化を

弁解材料として、タイへの帰任を自ら申し入れた。

「稲垣弁理の帰任」と題した、東京朝日新聞1899年10月2日の記事は、「仮令石が流るるとも暹羅には帰任せずと内外公私の人に向て公言しつつありし稲垣弁理公使は今度俄然帰任する事を申込みたる由にて或人其理由を質したるに『余は決して帰任せずと決心せしも其後暹羅に對し某国は有力なる干渉を爲し近々大に爲す所あらんとするの模様あるに付其促之を放任する能はず早急帰任して大に国利を維持せんとするなり此れ余の決心を翻へしたる所以なり』と答へたるよし」と記している。

同日の読売新聞も「稲垣公使帰任の理由」と題した同一内容の記事を掲載した。東京朝日新聞10月27日の黄塵録は、「意見用られず官職を抛「なげう」たんと決心したが有力者の有「なだめ」で帰任すると稲垣の弁解有力者とは細君か」と皮肉った。

1899年12月21日付けで駐日タイ公使館のナンバー2、ルアン・サンパキットブリチャー書記官は、本省外務次官ブラヤー・ピバットゴースー（本名はCelestino Maria Xavierという名のポルトガル人）に宛てた私信で曰く、「稲垣は日本で、ヨーロッパのどこかの国の公使に転出しようとして運動した。しかし、日本国民は彼のことに大して考慮を払わなかった。それで稲垣は自発的に暹羅に戻ることを申し出た。日本人は、稲垣が我国と結んだ条約を好ましいとは思っていないのは事実であるが、日本人はバンコクの公使ポストは重要性がないと考えている」(NAT Ro.5 Bo.8.1/33)。

(続く)



連載⑦  
バンコクの  
日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子Ⅳ

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

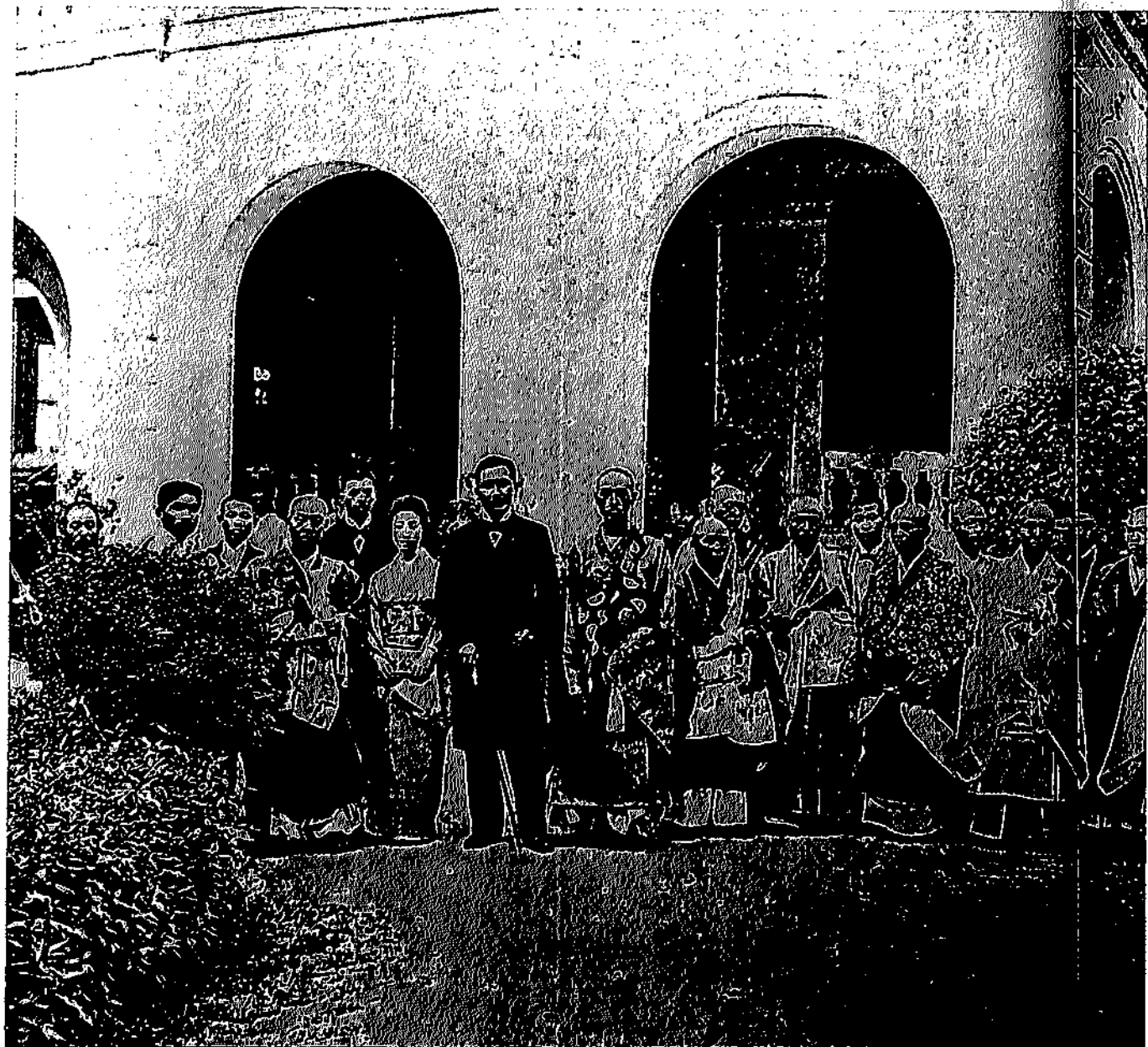
栄子の父、山口尚芳（1839・5—1894・6）の名に、生前の新聞は、「しようほう」とか「ひさよし」とルビを振っている。しかし、彼の出身地である佐賀県武雄市が1956年に刊行した石井良一著『武雄史』、および武雄市立図書館・歴史資料館の、2001年度特別企画刊行物、『岩倉使節団130年、海に火輪を、山口尚芳の米欧回覧』では、尚芳を「ますか」と読んでいる。なお、この特別企画時に作成された『山口尚芳年譜』によって、山口ゑい（後の稲垣栄子）の生年月日や後述する家族を知るこ

とができた。山口尚芳は佐賀藩武雄領の知行八石の平士の家に生まれた。因みに尚芳と関係の深い大隈重信（1838—1922）は佐賀藩の知行300石の上士の家に生まれている。武雄領は佐賀藩内の自治領であり、尚芳は佐賀鍋島藩の陪臣であった。読売新聞が1891年に連載した「明治豪傑ものがたり」の中に、「鍋島閑叟山口尚芳を愚弄す」と題した、次の話が紹介されている。

「山口尚芳、謁を岩倉右府〔岩倉具視右大臣〕に請ひ一室に待つ時に一老翁闕を排して」とびらを開いて入る。尚芳之を見て座を譲れど老翁辭して其下に居る。少焉（しばらく）くして尚芳詰緒を開き足下は何人なりやと問ふ。老翁答へて曰く『私（わ）しかい私は閑叟さんだ』と。是に於てか尚芳倉皇席を下り叩頭無礼を謝す。蓋し閑叟は尚芳を知れるも尚芳は鍋島家の陪臣にして閑叟を知らざりしなり」（読売新聞1891年11月20日）。

で、尚芳はその時まで閑叟の顔を拝む榮に浴したことはなかったであろう。尚芳は15歳で武雄領主に長崎に蘭学学習に派遣され、更に1860年代半ばには大隈重信、副島種臣らとともに英語も学習した。武雄の平野は、有田焼の産地の東隣に位置し、長崎街道が走り、長崎までは僅かな距離である。帰郷後、佐賀本藩より翻訳兼練兵掛を命ぜられた。明治になって佐賀本藩の士籍に列したようである。

「維新の風雲急なるや彼〔尚芳〕は長崎に在り、国事に奔走し大隈重信、副島種臣等と往来し、薩藩と行動を共にし、小松帯刀と最も好く、陸奥宗光とも親交があつた。討幕の挙起るや薩長兩藩は江戸の占領を主張した。彼と陸奥宗光は長崎占領の



仏舍利受領の日。前列の洋装の男性と箱物の女性が稲垣夫妻。1900年6月15日、バンコク

急務なることを唱へ、下の関に至り長州の有志と共に計画するところがあつたが、其目的を達することのできないのを自覚するや、京都に至り近衛公に近づき岩倉侯の信頼を得るに至った。是れが彼の立身出世の第一歩であつた。薩長兩藩を聯合せしむるに当つては、彼は最も必要なる人物にして双方へ奔走幹旋した。慶應四年四月官軍が江戸城に乘入れるに当つては、彼と小松帯刀は先登第一であつたと云う。明治元年王政維新と同時に彼は外国事務御用掛を命ぜられ、閏四月二十一日外国官「職名は判事、但し、裁判官の意味ではない」に補せられ従五位に叙せられた。時に年三十。今日の勅任官に相当し、実に異数の出身である。同年九月朔月越後府判事を仰付られた。当時兵庫の府判事は伊藤博文にして長崎の府判事は井上馨である。明治二年大蔵大丞兼民部大丞に任ぜられ、明治四年八月三日外務少輔に転じ十月八日従四位に

2011.2A3  
2011.2



叙せられた。年三十三。明治四十年十一月政府は岩倉具視を全權大使とし欧米外国に派遣し、国政の改革を告げ、条約の改正を為さんとするに当り、彼と伊藤博文、木戸孝允、大久保利通の四人は副使を命ぜられた。(「石井良一『武雄史』664頁」)。  
また、1993年刊の吉川弘文館『国史大辞典、第十四巻』136頁の山口尚芳の項には、「幼少のころ、藩主の命により、遊学先の長崎でオランダ語、ついで当時、来日していた宣教師G. F. フルベッキから英語を学ぶ。その後、佐賀藩の翻訳兼練兵掛となり、薩摩藩に接近してその動きに同調し、また岩倉具視にも接近した。幕末の討幕運動では薩長同盟の成立に尽力し、新政府軍による江戸開城の時にはその先頭にあった。……(岩倉使節団の巡回から)帰国後、征韓論争では『内治派』の立場にたち、佐賀の乱では鎮圧の政府軍として行動。武雄町の士族が反乱軍に応じた

かったのも、尚芳の勸告による」と記されている。なお、この頁に掲載されている尚芳の写真は、栄子によく似ている。  
岩倉米欧回覧使節団は明治六年(1873年)9月、帰国した。74年2月に、江藤新平、島義勇らを首謀者とする佐賀の乱が勃発し、尚芳は鎮撫の命を帯びて海軍の警備兵を率いて佐賀に入城し鎮圧に努めた。  
翌75年4月、尚芳は外務省の職を免ぜられ、新設の元老院の議員に就任。元老院は立憲政体の詔書に基づき1875年4月25日に設立された立法機関であり、初期は正副議長、2名の幹事、その他28名の議員という少数人数で構成されていた。尚芳は80年3月から翌81年5月28日まで元老院幹事を務めた。幹事辞任と交代に、第2代目会計検査院長を81年10月21日まで兼務した。続いて会計検査院長・元老院議員を辞すと同時に、太政官に新設された参事院(6部構成)の議員に就任し、財務部長

などを担当した。85年10月1日付で従四位勲二等から正四位に叙せられた。1885年12月22日に太政官は廃止され、代わりに内閣制度が採用された。これに伴い参事院も廃止となり、尚芳は元老院に戻った。初代内閣総理大臣は伯爵伊藤博文(従三位勲一等)で、同内閣の森有礼文部大臣、榎本武揚通信大臣は、尚芳と同じ正四位勲二等である。これから見ても尚芳は相当の高官であった。  
87年2月には元老院議員として高等法院陪席裁判官に任じられた。高等法院は常設の裁判所ではなく、大逆罪・不敬罪・国事犯の犯人、あるいは皇族・勅任官を被告とする裁判を担当する特別裁判所で元老院議員および大審院判事から毎年裁判長及び6名の陪席裁判官が任じられた。

大日本帝国憲法が1890年11月29日に施行されたのに伴い、元老院は廃止された。この憲法では、元老院に代わるものとして貴族院が置かれたが、尚芳は58名の勅撰議員の一人として同年9月29日に貴族院議員に任じられた。元老院は廃止されたが、他の大部分の元老院議員とともに尚芳は、2年間の非職を認められ、また、錦鶏間祓候の名譽待遇を受けた。元老院議員として2年間の非職期間が満期に達した時、そのうち十数名については、更に恩典を与え、名に於いては、更に爵位が授けられることになるであろうと新聞は報じ、尚芳の名はその筆頭に挙がっていた(東京朝日新聞1893年9月30日)。  
しかし、彼は翌94年6月12日には満55歳で病死した。尚芳と共に爵位授与予想記事に名が挙げられた者たちは、96年には男爵のタイトルを得ているので、尚芳がもう数年余命を保つことができていれば、間違いなく男爵位を与えられ勲功華族となったことであろう。正三位勲二等であった尚芳は、死亡後勲一等に叙され、瑞宝章が与えられた。

尚芳の病死を報じた新聞記事は、朝日新聞も読売新聞も、彼を硬骨漢で雄弁家と評している。

尚芳は、1862年に佐賀でアイと結婚し、翌年には長子俊太郎が、66年には長女ミエが生まれた。妻アイは1878年に35歳にて、武雄で死亡した。尚芳は、東京でハルを側室に迎へ、ハルとの間に71年に次男俊次郎、75年三男源吉、79年3月22日に次女エイ(稲垣栄子)、82年に三女タイ、85年に四男尚隆が生まれた。栄子は7人兄弟姉妹ということになる。栄子が生まれた時、父は元老院議員で39歳、母ハルは26歳であった。父親が病死したのは、彼女が15歳の時である。

1886年9月、7歳の山口



あい(栄子)は、華族女学校(1906年から学習院女学部と改名、さらに1918年から女子学習院と改名)に、下等小学科2年生として入学。1897年7月に18歳で同校の最高学年であった高等中学科3年を卒業した。当時の華族女学校は、小学科は下等3年、上等3年の計6年、中学科は初等3年、高等3年の計6年であった。彼女の同期生に当る学生の数は71名、しかしそのうち彼女とともに97年7月に高等中学3年を卒業した者、即ち12年間の教育を修了した者は7名(うち華族3名、残る4名は士族か平民)に過ぎない(1935年11月刊の『女子学習院五十年史』掲載の付属年表の85-86頁、170頁)。最高学年まで学んだ人数が少ないのは、学力不足で落第したのではなく、当時10代半ばで結婚するのが普通であり、結婚あるいはその準備のために退学したからである。  
栄子は満18歳まで華族女学校

に学んだのち、満20歳で結婚した。この結婚年齢は当時の上流名門女性としては遅い方である。黒岩比佐子『明治のお嬢さま』(角川選書、2008年刊)84頁は次のように記している。「晩婚化が進んでいる現在の日本とは違い、明治の女性の結婚適齢期は十七歳から十九歳くらいだった。当時は数え年なので、いまならちょうど高校生くらいの年齢に相当する。……明治の雑誌の記事に『老嬢』という文字が出てきて、『オールドミス』とルビがふられていたのだが、その年齢は『二十五、六歳』だった。これも数え年なので、二十四、五歳でオールドミスと見られたことになる。」  
グーグル・ブックス検索では、数年前までは英文書籍しか検索できなかったが、この1年くらいに間に日本語書籍の検索も充実してきた。このサイトに「稲垣満次郎」と入れて検索すると、どこかの頁に稲垣満次郎という名が記載されている書物名

と記載頁が表示される。上記黒岩氏の著作も、「稲垣満次郎」の検索でヒットしたものである。同書は、稲垣満次郎夫人、栄子の華族女学校最終年度の全学期の成績表を、月刊誌『女学世界』(博文館)の河岡潮風「女学校評判記三 学習院女学部」から引用している。

河岡は学習院女部(含む前身の華族女学校)卒業生の成績を優秀、普通、劣等に分けて示した。栄子の成績は優秀者の代表として挙げられたものである。それによれば、栄子は華族女学校卒業年度(1897年度)1-3学期において、全科目、即ち、国語、漢文、欧語、歴史、家政、習字、図画、裁縫、理科、手芸の10科目で、全て「甲」の成績である。今風に言えば、オールAである。彼女の長兄、俊太郎は岩倉米欧回覧使節に日本人初の女性欧米留学生津田梅子、大山捨松らと共に同行してイギリスに渡った。当時、俊太郎は同使節団のメン



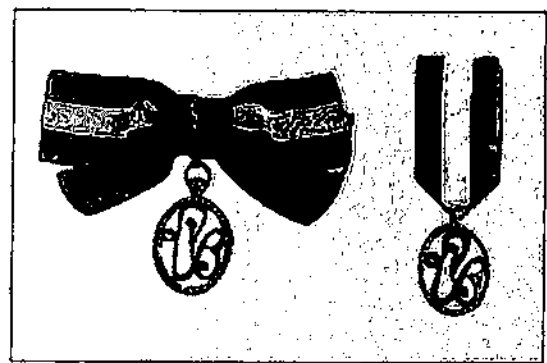
バーに「神童」と評されたとい  
う(石井良一『武雄史』666  
頁)が、妹の栄子も頭脳明晰で  
あったことが判る。

栄子のような成績優秀者は、  
教師たちからも称賛されてよき  
ようなものであるが、彼女の場  
合は違っていた。河岡は取材に  
基づき次のように書いている。  
「外交官夫人として外づの  
交際場裡に、学窓の理想を現実  
するもある。先頃物故された稲  
垣暹羅公使夫人あいな子なども其  
の一人で、在学当時は、少し勝  
気すぎて教師も「へこ」むで  
ゐたのぢやさうなが、公使夫人  
となつた後は、任国陛下の御信  
任も浅からぬ迄の、良貴婦人と  
なつた。在学当時で未来の推せ  
ぬといふ例になつてるとやら、  
序に座右の成績表から同夫人ら  
始め外西三名流夫人の卒業試験  
の成績表を抜き書して見れば  
……」(河岡潮風「女学校評判  
記」三 学習院女学部)、『女学  
世界』(博文館)第9巻5号、  
1909年4月1日発行、93―

94頁)。  
なお、著者の河岡潮風は、女  
学生向け雑誌『女学世界』を発  
行していた博文館編集部員で、  
「明治四十一年(1908年)」  
早大政治経済科を卒業し直に中  
央新聞社に入り後博文館に転じ  
先頃迄雑誌『冒険世界』の編輯  
に従事せり、年齒若きに似合は  
ず才氣に富める活動家にして弁  
舌に文章に相当の効果を収め現  
代の青少年間に一種の勢力を有  
し居たりき、遺著に『五々の  
春』『学校評判記』其他数種あ  
り(読売新聞1912年7月  
14日)。彼は、1912年に25  
歳で病没した。

才色兼備の栄子は、おしとや  
かなお嬢様ではなく、要領を得  
ない教師に対してははつきりと  
物を言つて回ましていたのであ  
ろうし、父親から雄弁と硬骨の  
質も継承していた可能性もあ  
る。教師達の目には、彼女は小  
生意気に映つたのである。筆  
者の考えすぎかもしれないが、  
10代半ばで結婚して「良妻賢  
母」になるべきだという当時の  
お仕着せ型の女性教育に対し、  
栄子は反発していたのかもしれ  
ない。

栄子は満20歳で稲垣と結婚し  
た時点から、公使夫人であつ  
た。往時の公使夫人は夫の職務  
を様々な面で助けるという能力  
も要求された。彼女は性格的に  
も、このような仕事と相性がよ  
かつたものと思われる。彼女  
は、夫との関係を、良妻賢母と  
いうよりも、同一任務を分かち  
持つ同志と意識していたのかも  
しれないし、稲垣の方も、彼女  
にそれを期待していたようであ  
る。



ラーマ5世王(チュラーロンコーン王) ラッタナーポー・メダル

る。同王の御意に召した王族・  
高官及びその妻など限られた人  
物に与えた。中でも外国人で授  
与された者は、御雇外国人の海  
軍司令官 Admiral de Richelieu  
(デンマーク人) など少数であ  
る (Mt Ko. 10.3.21/7)。  
『タイ官報』第20巻の17頁  
(1903年4月5日号) に、  
1903年3月30日に、稲垣  
満次郎夫人 (Madame Nanjio  
Inagaki) がラッタナーポー  
ン・メダル第三等を授与された  
ことが明記されている。この5

世王メダルには高い価値があ  
る。しかし、6世王が王位を継  
承すると、あらゆる勲章、官爵  
位が大判振る舞いされるようにな  
つた。6世王が与えた6世王  
ラッタナーポー・メダルは、  
父の5世王のものとは同日の談  
はできない。  
公使夫人栄子は、特に用事が  
ない限り、毎週木曜日の午後を  
「At Home」(家庭招待日)と  
決めて、公使官邸を開いて在  
タイ欧米人やタイ人名士の訪問客  
をもてなし、極めて好評であつ  
た。12月号に掲げた当時の日本  
公使館の写真から判るように、  
公使館前にはスポーツができる  
広場があつたが、招待日にはこ  
こでバドミントンのトーナメン  
トなども開催した(バンコク・  
タイムズ 1905年3月3  
日)。  
バンコク・タイムズ 1905  
年11月27日号は、稲垣公使夫妻  
の離任決定を次のように報じ  
た。

「駐シヤム日本公使稲垣氏は  
帰国を命じられ、夫人と共に12  
月21日頃にバンコクを発つ予定  
である。正確には12月24日出  
発した。彼は欧州に転勤する  
可能性が高い。稲垣氏は弁理公  
使としてバンコクに1897年  
5月28日に到着し、翌年2月  
シヤムと日本の条約に調印し  
た。彼は1903年に特命全權  
公使に昇進した。また、数年間  
に亘つて「村嶋注、1900―  
03年に」外交団の長を務め  
た。バンコクでの任務が好成績  
であつたため、シヤムにおける  
最初の日本代表の地位に、彼が  
これ以上ながく留まつたまま  
であることは期待できなくなつ  
た。彼の昇進見込みは、彼を知  
る全ての人から暖かい祝福を受  
けることである。社交的に、  
日本公使館はバンコクで重要な  
地位を占めてきた。というの  
は、稲垣夫人が最も魅力的で、  
かつ能力ある女主人であるから  
である (Socially, the Japa-  
nese Legation has come to  
occupy a very important place  
in Bangkok, for Madame  
Inagaki is the most charming

and able of hostesses)。彼ら  
の離任は、この町に大きな喪失  
感をもたらすであろう。』と。  
同年12月14日午後マダム・  
イナガキが開いた最後の「At  
Home」は、次のように報じられ  
た。「評判のよい駐シヤム日本  
特命全權公使と彼の魅力的な妻  
の多数の友人が集まつて非常に  
大きな会となつた。オーケスト  
ラの楽団が演奏し、広場はきれ  
いに飾られ、極めて愉快な午後  
であつた。日本公使館での「At  
Home」はバンコクの社交界で常  
に重要な役割を担つてきた  
("At Home" at the Japanese  
Legation have always played  
an important part in the  
social life of Bangkok)。ホ  
ストとホステスへの惜別の挨拶  
のなかで、多くの人が、これが  
なくなることを残念がった。」「  
(バンコク・タイムズ 1905  
年12月15日)。  
これらの報道は、掛値なしに  
栄子がバンコク社交界の花形で  
あり、もてなしのうまい公使夫  
人であつたことを示している。

連載⑧  
バンコクの  
日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子 V

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

栄子に取材して書かれた新聞記事は珍しい。東京朝日新聞1906年4月28日号に、「暹羅國貴賓（稲垣公使夫人の談）」と題した、栄子とのインタビューが掲載されている。これは、訪日中の暹羅國陸軍總司令官ナコンチャイシー親王について語ったものであるが、その中で、栄子は、タイでは「苟も地位を有つて居る人、日本にて謂はば高等官以上位の者は夫人でも誰でも両陛下への拝謁が能（で）きる。私は暹羅に滞在中特に皇后陛下「サオワパーボン（シ）皇后」を首（はじ）め各皇族とは常に来往したり」と述べ、タイ王室の方々と親密な交流があったことを明らかにしている。

その交流から、今日まで続くバンコクの名門学校、ローンリエン・ラーチニー（皇后学校、ラーチニーは皇后の意）が誕生したのである。

3年間皇后学校教師を務め1907年4月29日に帰京した中島トミ（富子）は、帰国直後インタビューに答えて「稲垣公使夫人が皆て暹羅皇后ラジニー「ラーチニー」陛下に拝謁の折談たまたま日本の華族女学校の事に及びたる末、久しく廃校となり居たる皇族女学校再興の事を語られたるにぞ公使夫人は直に旨を奉じて此趣を本国に通告し旋「やがて右三女史「安井哲子、河野清子、中島富子」を聘するに至れるなり」（東京朝日新聞1907年5月1日、同日の読売新聞にも同文掲載）と語っている。中島はバンコクで栄子にも造花を教えたようであり、そのような機会に栄子から同校創立の経緯を聞いたのである。

垣公使に日本人教師を探すことを依頼し、日本の文部省（菊地大麓文相）が3名を人選したのである。正しく栄子は皇后学校の生みの親の一人と言うことができる。本号は、栄子とその創立に寄与し、3名の日本人女性教師によって開学、運営された皇后学校を中心に紹介したい。

皇后（女）学校の開学を、当時の新聞は次のように報じている。

「暹羅の皇后女学校、暹國皇后陛下の恩召に由り盤谷に設立せられたる女学校は本邦より招聘せる女教師安井氏の一行去る二月十四日同地に到着せるを以て去月四日（1904年4月4日）開校したり校名を皇后女学校（クイーンズスクール）と称し校長には皇太子殿下の秘書官長ルアン・アピラック氏之に任せられ生徒の現員十八名（予科本科各九名）皆貴顕の子女にして其内元陸軍次官の姪、皇太子侍従武官の女外一名は現に宮中に奉仕中なるを特に皇后陛下の恩召を以て就学せしめられたりと云ふ」（東京朝日新聞、1904年5月11日）。

皇后学校は、次の3名の日本人女性教師を3年契約で雇い、1904年4月1日に創設された（開校は4月4日）。同校教育主任の安井哲子（テツ）、1870-1945、東京女子高等師範（現お茶の水女子大学）第一期生）は、英語と数学担当。河野清子（キヨ）、1903年東京女子高等師範技芸専修科卒、1907年時29歳。帰国後、奈良女高師（現奈良女子大学）助教授、教授。越智と改姓）は、刺繍と絵画担当。中島富子（トミ、共立女子職業学校卒、1907年時25歳。帰国後の詳細は不詳、伊沢と改姓し、伊沢とし子と称する）は、造花を担当した。

現在の皇后学校の道路に面した外壁には、同校の歴史を書いたボードが取り付けられている。そこには次のように書かれている。

「皇后は次のような御意図によって、1904年4月1日に皇后学校を創立された。女性に適度の知識を与え、仕事に役立つ技能を身につけさせ、国家民族に貢献する女性の務めを理解させ、かつ学術的に進歩しタイ式行儀作法訓練の場ともなるモデル女学校として、諸外国にタイ国にも近代的でタイ女性が運営する女学校が存在することを示すことができるように。学校のカリキュラムは、『自活できるだけの手工芸を身につけさせること、他の人が読んで判る程度にタイ語を書けるようにすること、英語の読み書きができること、徳のある女性になれるように道徳・行儀作法を訓練すること』という皇后ご自身のお考えにより定められた。

教育科目は、タイ語、英語、数学、生理学、歴史、地理、絵画、手工芸（裁縫、刺繍、造花、生花細工）。特別科目とし

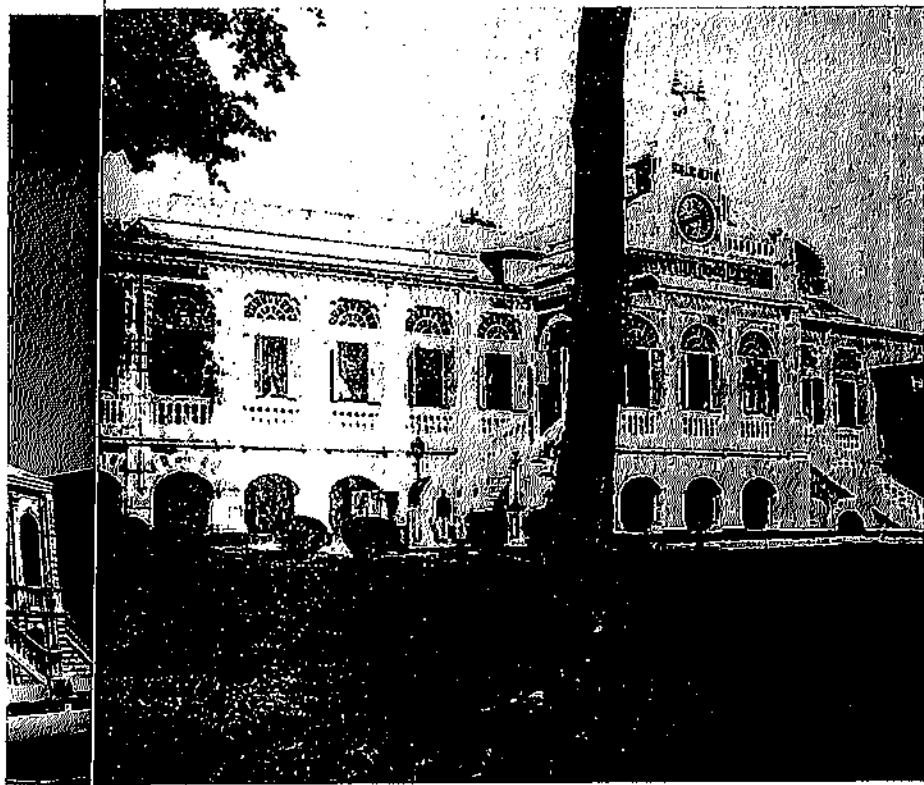
て音楽。皇后学校カリキュラムの最初の3年間は、日本人教師とタイ人教師を雇って教育した。ミス・ヤスイ・テツが皇后学校の最初のクルー・ヤイ「校長の意。但し、正しくは、校長はタイ人男性で安井は教育主任」である。従って当初のカリキュラムは、西洋の学芸と、タイ的なもの、換言すればアジアの工芸との混合であった。

その後、皇后は同校のカリキュラムをタイ文部省のそれに添うものに変更された。その結果、皇后学校は、国がタイ女性教育に用いるカリキュラムの実験モデル校となった。たとえば、1908年の特別中等教育カリキュラムの実験、1911年の技能科目カリキュラムの実験、貯蓄カリキュラムの実験など。実験で生まれた新カリキュラムは、国家民族の進歩において役割を担い能力を発揮すること

とができる、新時代のタイ女性を育てることに貢献した。」

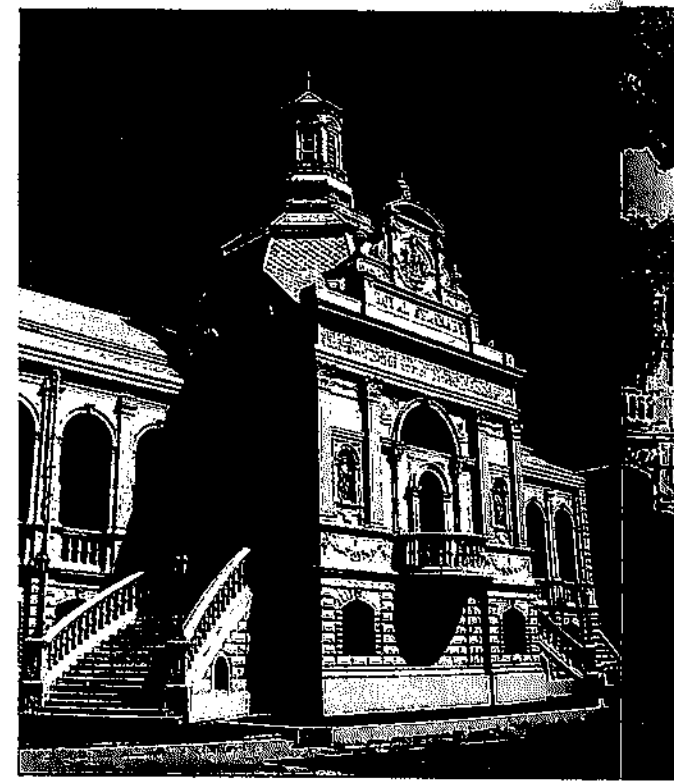
上記のように、皇后学校の教育内容は日本人の3教師が去った後、大きく変更されたようであるが、安井てつは同校の初代教育責任者として依然記憶されているのである。

安井は、1870年に下総古河藩（藩主、土井氏）の江戸屋敷で同藩士族の長女として生れた。武家のむすめとしての家庭教育を受けた彼女は、訪英前はキリスト教嫌いであったという。1890年3月に東京女子高等師範（現お茶の水女子大学）第一期卒業生、その後2年間同校付属小の訓導。96年12月15日付けで「女子高等師範学校訓導安井てつ、教育学及家政研究の爲め満三年間英國留学を命」（東京朝日新聞1896年12月17日）じられ、97年1月文部省留學生としてイギリスに旅立った。イギリスでは、キリスト教に基づく個性尊重と自由とを体験し、内面的にはキリスト教を信奉するようになった。帰国後、1900年9月3日付けで「女子高等師範学校訓



導安井てつ、任女子高等師範学校教授兼舎監(高等官七等)」「(東京朝日新聞1900年9月4日)という辞令を受け、母校の教授に迎えられる。安井は、恩師である高嶺秀夫同校長の洗礼を急ぐという助言に逆らって、同年クリスマス時に海老名弾正から洗礼を受けた。校長は学生への影響を恐れて、安井に棄教か退職かを求め、遂にタイに転出させることにしたのである。

「安井女史学習院に入る」と題した次の東京朝日新聞1908年9月15日号の記事から、安井のタイ行き事情が窺われる。即ち、「新帰朝者安井哲子女史は、一昨十一日愈々学習院女史部の職員となれり。女史は野口「ゆか」女史と同じく津田梅子女史の系統に属し最も熱心なる基督教信者なり固より品性才学両(ふた)つながら備はり



(左)現在の皇后学校 (右)1907年当時の皇后学校

(再建後)

の学習院女史部在職は、半年で終わった。

たれば従つて其感化力も非常なるものにしてかの御茶水師範学校に在職中の如き其薫陶を蒙れる生徒の過半数、皆父兄に秘して竊に洗礼を受け黙してアーメンを唱ふるに至り一部の非難を惹起したれば文部当局者も焦慮鳩首の結果竟に外国の招聘に託して女史を派遣するに至りしといふ。今保守主義の学習院女史部に入る再び往日の物議を醸すなくんば幸なり。」

1907年3月にタイを離れた安井は、1年間イギリスに再留学したのち帰国し、上記のように学習院女史部に就職したのである。しかし、案の定、彼女

渡戸稲造に、キリスト教主義女子大学創立に協力を求められ、18年に東京女子大学創立(新渡戸学長)と同時に学監に就任。1923年から40年まで東京女子大学の第2代学長を務めた。

安井は英国に3年間国費留学生として派遣された、女子教育界のエリート女性であり、愛国心旺盛な彼女は、日本での教育に情熱を燃やしていた。タイ派遣は、彼女が希望したものではなく、文部大臣から言われて心ならずも決心したものである。彼女の伝記も次のように記している。「所詮女高師に於ける先生「安井」は、水に浮ぶ油の如く、融和しがたい存在であつた。先生は黙して語らないから委しい事情はわからないが、気まづい感情がかさなつて、シャム行勧誘といふ結果となつて現はれたことは争へない事実であらう。生真面目な先生は、国家の爲といふ対者の武器に抗し得ず、心ならずもシャム行を承諾せざるを得なくなつたのである。」(青山なを『安井てつ伝』岩波書店、1949年、1

16頁)。

安井のタイ行きは自発的なものではなく、また、タイ側が日本人教師に期待したものは、同じ仏教徒の東洋人が行う教育であつたので、日本側の事情とは言え、安井を選んだことは相当地なミスマッチであつた。

1904年4月創立当初の皇后学校は、チャカペット(Chakapet)路とクー・ムアン・ドーム(Khu Muang Dong)運河沿いのアサダーン路の交わる場所にあつた、皇后所有のショップハウス(ホーン・テオ)に置かれたという。この情報に正しいならば、現在この場所には、クルン・タイ銀行のパーク・トゥーン・タラート支店のビルが建っており、ショップハウスではない。しかし、近くのアサダーン路やターティアン地区には5世王時代に建設された装飾つきの美しい二階建てショップハウスが多数残っている。

この皇后学校創立の地と考えられる場所から、幅広いサパーン・チャローン・ラップ橋をはさんで右手にブラ・ラーチャワ

ン警察署、左手に現在の皇后学校が存在する。同校が現在の場所(スナタライ)に移つたのは、1906年11月であり、安井らは翌年3月の離任まで5ヶ月をこの場所でも過ごした。

安井は、04年2月14日にバンコク到着直後、野口ゆか「幽香、1866-1950、東京女子高等師範の同窓生、初期の幼児教育者」に宛てた手紙(04年2月22日付)で、最初の皇后学校周辺の様子を「校舎兼住宅にて、当分は寄宿生を置かぬ事と致し、此家はプリンスの御所有の由にて隣りは商店の長屋、向も其通りにて下等の人々

のみの住宅に有之候、家「2階の自室」の側は汚き小川にて、多くのハウス・ボートは其中に浮び居り下等の人民は之に住居致居候、日々裸体(但上半身)の人々や、色黒き人々のみ見居り候ては其生活の誠にシンプルなるを喜ぶに至るもをかしく候」(青山なを編『若き日のあ」と、安井てつ書簡集』1965年、141頁)と書き、また、「家は非常にひろけれども往来に近く尤やかましく不健康なる場所……召使は心知れぬ支那人三人、あとの人々「河野清子、中島富子のこと」は年若し、家は広し、往来は近し、注意は中々非常なものに候、……

私は実に此国下等人民が半裸体にてシンプルなる生活をなし、常にニコニコし居るをみて、人生問題に付て感ずる処非常に有之候」(同上、147頁)と書いている。ここにいう「汚き小川」とは、クー・ムアン・ドーム運河のことであり、当時は多数のベア(筏の上の家)や船上家屋がひしめいていたのである。

1904年のバンコクは、現在の中心部でも未だ稲田が残る、安井の居室にも蜚が舞い込むほどであつた。04年10月6日付けの安井の手紙には、「此間からいい処をさがしたので、よ、それは公使館の近処で、田島と、野原と、小川のある処、其先は樹木が南側に並んでドラップには尤よい処、これでバンコクもよほどよくなつて来ました。……此頃はよほど涼しいのです。虫も鳴き、かはいい小鳥もさへづります。きりぎりす



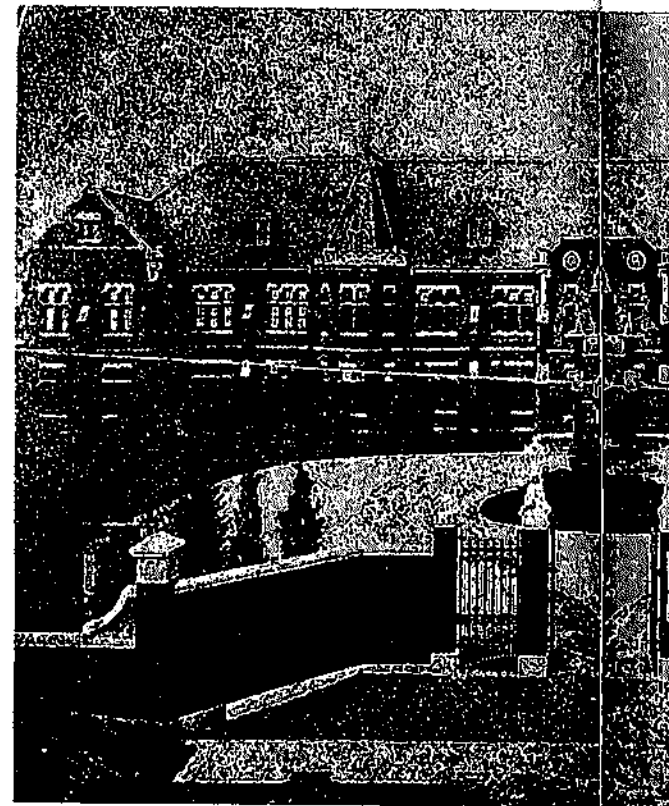


など常に私の机の上に飛で来、  
螢も折々まひこみます、夜の稲  
田など螢で実にはきれいな、只ゆる  
ゆるとながめる事の出来ぬが我  
邦とのちがひ」(同上、170  
頁、172頁)と書かれている。

最近ではメークロン川沿いの螢  
観光が有名だが、1世紀前は  
メークロンまで行く必要はな  
く、パンコクでも螢が飛んでい  
たのである。1世紀前と言わず  
とも、1930年のパンコク地  
図を見れば、現在のバヤタイ  
のBTS駅周辺は、数軒の農家  
しかない水田地帯である。

ところで、安井は、栄子をど  
のように描いているだろうか。

04年1月23日に新橋を発  
ち、2月14日にパンコクに到  
着した安井は、「厳寒の東京を  
後に立したので、酷暑の気分  
になれず、到着後、公使館で公  
使夫人に面談したが、涼しそ  
うな美しい夫人の単衣姿が鮮に  
印象された」(『安井てつ伝』  
117-118頁)。栄子は公  
使館でも着物姿であつたよう  
だ。また、安井は、パンコク到  
着直後、野口ゆか宛の私信に



東京の華族女学校(栄子が学んだ当時の華族女学校)

「稲垣さんの奥さん、中々オ  
子、非常に世話に相成候、かか  
る土地ではやはり是等の人々を  
力にせねばならぬ事と存じ候、  
何事も人に従ふ方仕事の為と存  
候」(『若き日のあと、安井て  
つ書簡集』145頁)と書い  
た。これが、初対面の栄子に対  
する安井の印象である。

皇后学校は4月4日に開学し  
た。04年7月27日付けの安井  
の手紙には、「此処でこそ公使  
の奥さん方の思ひやりが必要な  
のです、奥さんも造花の稽古に  
折々見えます、敬遠主義を取り  
居るため誠に折合よろしく、始  
終東京のお菓子などおくつて  
中々親切にして被下ります」

(同上、159頁)。

同年9月24日(土曜)に  
は、栄子は、安井、河野清子、  
中島富子(3教員を転地旅行に  
案内して来ました。安井は、  
「余り働きつづけて身体が可愛  
そうだから三日転地しよう」と  
思ふても、種々の関係で外の  
人々が気がすまず、併此由公  
使の奥さんに御話して見たら、  
汽車で一時間半の処に連れて行  
かんとの話、折角の御親切故一  
同参り、おもしろく遊びて帰り  
来れば途中のステイションに公  
使、奥様を迎ひに来られ、私共  
をよるこばせんとてついた斗  
「ばか」りの手紙派山持つて来  
られた御親切、途中見たさを忍

んで帰り早々読めば、どれも泣  
ける手紙斗」(同上、165  
頁)と野口に報告した。最初の  
皇后学校兼教員宿舎には、未だ  
番地もなく、郵便物の届きよう  
もなかったのだ、日本からの郵  
便物は公使館を宛先にしていた  
のである。同じ手紙に安井は  
「此間公使館に生徒をつれて行  
った時、奥さんの取られた写真  
真、お笑ひ草に御おくり申上  
候」(同上、168頁)と、栄  
子が撮った写真を同封した。

当時、5世王も好んで自ら撮  
影されたように、写真撮影は高  
級な趣味であり、栄子も写真撮  
影を好んだようである。

05年7月19日に稲垣公使が  
ダムロン内務大臣を訪問し、妻  
の栄子がアユタヤの象狩りの際  
に撮影した写真2枚を国王に献  
上して欲しいと託している  
(M.T. No. 5 To 2, 5, 94)。

着物姿の栄子が写真撮影をし  
ている画像がタイ国立公文書館  
に保存されているという。同公  
文書館で探したが、現物は見つ  
からず、ここに掲載できないの  
は、残念である。

次の記事も皇后学校の安井ら

3教師と日本公使館との良好な  
関係を示している。

「盤谷在留日本婦人慈善会、暹  
羅国盤谷府在留の日本婦人によ  
りて組織せられたる桜会は我赤  
十字社事業に助力せん為め造花  
に絵画に各其嗜「たしな」める  
妙技を尽して売品を製し昨年十  
一月二十四日「1904年11  
月24日」日本公使館の庭園に於  
て稲垣公使夫婦の開ける園遊会  
と共に赤十字社のために慈善会  
を開きたり同会員は稲垣栄子、  
田邊菊子「公使館一等書記官田  
邊三郎夫人」、政尾光子  
「シヤム政府法律顧問政尾藤吉  
夫人」、安井哲子、河野清子、  
中島富子「後ろ3名は皇后学校  
教師」等の各女史にして同国の  
上流人士及び同府在留の外国人  
等も熱心に助力し又同国王及皇  
后陛下よりは各通貨二千銖づつ  
の御寄付あり会員は為めに丹誠  
を凝らしたる桜花及菊花の館を  
献上し皇弟パヌフングシー  
「バーヌランシー」親王殿下も  
御臨会あらせられ一大成功を以  
て散会したり其総収入金は通貨  
1万2876銖60アツツに達  
し内雑費3606銖30アツツ

を控除し純益金及寄付金を併  
せ通貨9270銖30アツツ  
(此邦貨5110円25銭)を  
得たり」(東京朝日新聞190  
5年1月6日)。

ところが、この頃から安井と  
稲垣公使夫妻との関係は微妙に  
なり、05年半ばには衝突にま  
で発展したようである。

05年10月7日付けの野口宛  
の手紙で、安井は「先日申上候  
ひしX夫人、終に先方より訪問  
せられ、其後何事もなく交り居  
り候間御安心被下度」(『若き  
日のあと、安井てつ書簡集』、  
192頁)と書いている。X夫  
人が誰なのか、それが判る手紙  
は書簡集から省略されている。

しかし、「此手紙は是非やいて  
頂戴よ」と安井が書き添えてい  
る、05年11月5日付けの野口  
宛手紙には「一昨日「11月3  
日」は天長節で「公使館に」朝  
拝賀に行き、正午日本人のみの  
祝賀会にのぞみ、夜又外国人や  
シヤム人の招待会に行きまし  
た、昨年叱られた故今年は残ら  
ずに行つたのです、ことに衝突  
の後ですから、(以下破損)  
(略)」(同上、193頁)、と  
いう一節がある。

野口は、安井が求めた手紙の  
機却処分はせず、問題部分の  
みを破り取つたので「破損」し  
たのである。掲載された部分を  
読む限り、焼き捨てる必要があ  
るほどの話はない。それ故、  
「破損」部分と省略された部分  
に安井が他の人が読むと困ると  
考えた内容が書かれていたはず  
である。文脈から見ても、それは  
公使夫妻への不満であつたと考  
えて間違いない。上記10月7  
日と11月5日の両方の手紙を  
重ね合わせると、安井と公使館  
との間に何らかの衝突が生じた  
こと、衝突した相手はX夫人、  
即ち栄子であつたと推測され  
る。

稲垣夫妻は05年12月24日に離  
任するが、『若き日のあと、安  
井てつ書簡集』に掲載されてい  
る安井の手紙は、11月5日の  
手紙の次は06年1月15日であ  
り、その間の2通が省略されて  
いるので、稲垣公使夫妻の離任  
前のパーティなどに安井が参加  
したかどうか、その印象如何な  
どは判らない。

安井が稲垣公使にも相当に批  
判的であつたことは、1月15  
日の手紙の次の一節からも窺わ  
れる。「外務大臣も加藤高明氏  
「1860-1926、190

6年1月7日-3月3日第1次  
西園寺内閣外相」に代りしよ  
し、本日ある人の噂に稲垣公使  
とは派がちがふゆる運命如何な  
るべきかとの事に候、人間は権  
威を有する間は邪道を無理に渡  
り可得も、これを失ふ時は、日  
頃のうらみある者一時に起り候  
ゆゑ、急に不幸に陥るべしと存  
候、人間の尊ぶべきは權威にあ  
らず、富貴にあらずして、信用  
にある事と存候」(同上、19  
6頁)。

ところで、パンコクを離任し  
た稲垣が希望していた次のポス  
トは中国公使であつた。

1914年3月14日に、東  
邦協会の副島種元元会頭や稲垣  
満次郎元幹事長などの追悼会  
で、稲垣の知己で、文筆家でも  
あつた肝付兼行男爵「1853  
-1922、海軍中將、貴族院  
議員、大阪市長」は、次のよう  
な秘話を明かしている。稲垣公  
使が「暹羅に行かれましてから  
も時々通信がありましたが、詮  
ずる所支那の外交に當つて見た  
いといふのがその熱望する所  
であると確に察せられましたので  
丁度御列席の加藤「高明」男爵  
が外務大臣であらせられた時  
「1900年10月19日-01年



6月2日」にも何とかして彼の希望を達せしむる道はないものであらうかと私は友人として御内談に出たこともあつたのであります。是れ加藤男の前で言ふのでありますから確に事実であります。又其の後小村「寿太郎」外務大臣「在任、1901年9月21日—06年1月7日」にも同様のことを話したのであります。同大臣は今といふてはどうすることも出来ないがよく考へて置かふと云ふことでありました。……今日から見れば西班牙の公使になつたのは暹羅の公使よりは榮転であつたのであります。本人の榮志は東邦の外交にあつたのでありますから決して満足はして居らなかつたであらうと思はれます。……本人が東邦の外交に非常に熱心でありましたことを追想しますと私は友人と致しまして今日喧しい所の東方政策、即ち中華民国に対する外交の衝に当らせて

見たい心持がするのであります。「『東邦協会会報』第227号、1914年4月20日発行、33—35頁」。

稲垣は03年3月末に一時帰国した後、7月7日付けでテウオン外相に私信を送り、皇后から託されたシヤム人留学生の日本の様子を報告するとともに、7月25日頃から1ヶ月半の予定で、朝鮮、北中国を旅行することを告げている(『文芸』、1914年)。これは当時の稲垣の満州、中国への関心の高さを示すものである。

東京のシヤム公使は、毎日新聞1906年5月16日号に、稲垣は外務次官に任じられた内田康哉の後任として北京公使に任じられる予定であり、稲垣の後任の暹羅公使は人選中との記事が載つた旨、本省に報告している(『文芸』、1906年5月13日)。しかし、これも画餅に終わった。『若き日のあと、安井てつ書簡集』は、安井が野口ゆか宛てに出した私信を編集したものである。安井のタイからの野口宛私信は、全部で48本あるそうだが、うち11本については全文省略、掲載された残り37本についても省略部分が少なくない。

い。同書簡集の編集の際、シヤム時代の手紙は、全部省いた方がよいという提案さえあつた。即ち、安井の手紙は「すくなからず削除した部分がある。半世紀以上をすぎているが、純粋に資料として通用させるには、まだ日が浅いと考えられたからである。渡辺善太先生は、シヤム時代の手紙は、全部削つた方がよいという御意見であつたが、これを全部除くと、この時期をしるための原資料はないことになるので、日常生活をつたえる叙述の類を中心に、残すことにした」(同書、17—18頁、と)。

さらに同書6頁では、シヤム時代の書簡が多数省かれ掲載されなかつた理由を「多少公開をはばかる批判などがあるためである」と説明している。安井のタイからの野口宛私信48本は、現在東京女子大学総務課資料室に保存されている。筆者が昨年末に、同資料室に未公開書簡の閲覧許可を求めたところ、一切公開できないという回答を得た。刊行から既に半世紀近くなるが、未だ「純粋に資料として通用させるには、まだ日が浅い」のであろうか。印刷されている手紙の内容

から推測するに、安井と同居した2人の日本人教師(河野清子、中島富子)は、安井と年齢差もあり、また兩人はキリスト教に何の関心も示さなかつたので気持ちが通わず、安井との間に感情の行き違いが生じたようだ。しかし、そのうちに安井がお姉さんらしく兩人の世話もするようになり、また共通の外敵もできて関係は好転したようである。一方、安井は着任当初、稲垣公使夫妻の世話になり友好関係を保つたが、1年も経つと公使夫妻が押し付けがましく見えてきたのか関係は悪化し、衝突にまで至つた。未公開の安井の私信には、着任後間もない時期の、中島や河野に対する不満、1905年後半の稲垣公使夫妻への手厳しい批判が含まれているのかもしれない。

安井とバンコクで3年間をともにした中島(伊沢とし子)は、シヤム国の思い出と題した、安井への追想文で「安井先生に其実力とそして交際が巧みであつたかと思ひます」(青山なを編『安井てつ先生追想録』、1966年、15頁)と、安井の交際下手を残念がっている。

連載⑨  
バンコクの日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子 VI

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

前号で記した安井哲子のことを、もう少し続けておこう。安井は、来タイ前は、勤務校の校長で恩師でもある高嶺秀夫と対立し、バンコクでは稲垣公使夫妻と衝突し、帰国後も学習院女学部(当時の院長は乃木希典)から半年で放逐された。その頃の安井は、器量よしの「男らしき女性」として次のように評されている。「てつ子様の御器量は斯ふ申しては失礼なれど世の女先生といふ御方に多くある様な女豪傑風にはおはしませう。世には女先生と申せば太り肉の、色黒きか、或は赤ら顔の横太りなるなど、やさしく、しほらしく、美しき方には縁遠きのみ多くおはします様に思ふが世の常の人の心に候へども、てつ子様は之に反し、すつきりとしたる御すがた、御つやもよく、先づは美人の方におはしな

し候。されば御年若の頃ろなど

は女先生としては寧ろ艶なるに過ぎたる方におはしつらんと想像いたし参らせ候。さりながら昔は容貌婦女子の如くにしてしかも謀略に秀いでたる軍人もありきと聞き参らせ候。人は其面「おもて」と其性「さ」が「の」全く趣を殊「こと」にしたるも稀にはおはしなれ候。てつ子様の御様子を遠くより思浮め候へば、やさしく、しほらしく、艶なる方におはしなれ候は

んずらんと思ふものなきにしもあらず候はんかなれど、近づきて「ひそか」に其私を察すれば男の様な御気性にして是や誠に女丈夫とやらんと申すべき御方と存じ参らせ候。」(「人々之噂、安井てつ子様の事」、『国民雑誌』(山路愛山主筆)、第2巻4号、1911年4月、27—28頁)。

安井はいかにも、おっかない先生のように見えるが、生徒のために尽力する大変慕われた先生でもあつた。「てつ子様をよく知りたる人の中にはてつ子様は教育者としては実践躬行の人、男にて申さば乃木大将の様な人、当今第一流の女流教育家なりなどと申されし人もおはしなれ候。たとへばてつ子様が舎監をやめて暹羅に御赴任遊ばし候ひし時に女子高等師範学校に開かれし送別会の光景などはてつ子様の教育家たる真の価のいともいとも明かに、隠なく頭はれたりと申すべきものにてあれ程の感情深き送別会は復び見ることはなりがたしなど申す人もありと承り候。生徒の中には誠の姉や母に分れもするやうにすすり泣きするものもあり、しめり勝なりし其風情、しほらしく、やさしく師弟の情濃かにあらはれて、是や教育家の光栄に此処に在るなめりと深く感激したる人もありしと聞き伝へ

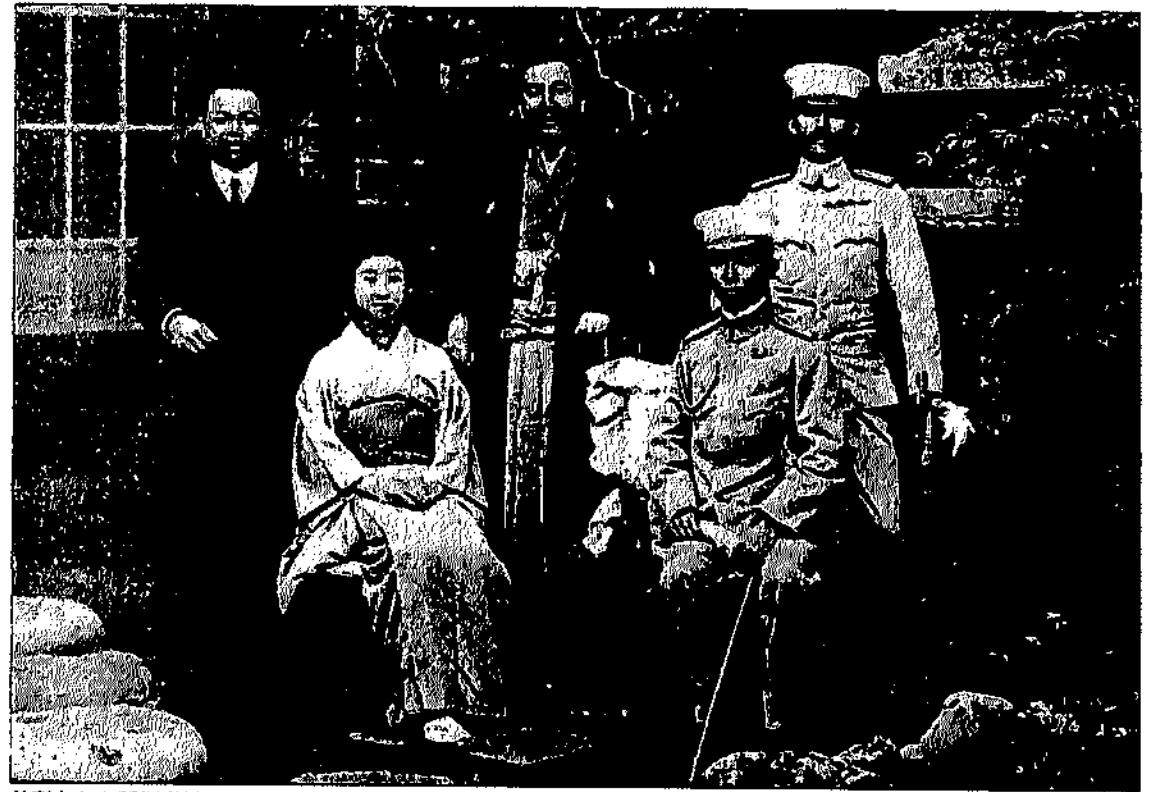
申候。」(同上、25—26頁)。

安井が皇后学校でもタイ人の生徒に慕われたことは、安井の野口ゆか宛私信から窺われる。

安井とともに3年間タイで皇后学校教師として過ごした中島富子(神田一ツ橋の共立女子職業学校職員、中島鍋次郎の三女、当時25歳)が帰国直後に新聞記者に語つた記事は、20世紀初頭にバンコク生活を3年間体験した日本人の観察として貴重なものである。長くなるが、以下にほぼ全文を掲げておこう。

「明治」三十七年四月同校開校当時生徒としては貴族の子にして七歳より十七歳までのもの僅に十八名に過ぎざりしも、三年後の今日に於ては九十六名の生徒を収容し居れりまた校長は皇太子付秘書官ルアング・アピラック氏にて教師は以上三女史の外暹羅説本の講師ラオ・夫人なり▲教授学科、高等師範学

2011.4  
2011.4  
711-711



前列左から稲垣栄子、ナコンチャイシー親王、後列左からナリソン駐日タイ公使、稲垣満次郎、ナレンドーンタイ国陸軍中佐。1906年

校出身の安井女史は英語と数学、同校技芸専修科出身の河野女史は刺繍と絵画、共立女子職業学校出身の中島女史は造花を教授する事となり、此の他の級の進に随つて地理と歴史との最簡單なるものをも併せて教授し、尚最初は幼稚園風に授業する組もあれば高等女学校程度位に授業する級もあり生徒全体の学力は年齢と共に区々として定まらずまた生徒の数理に疎き事は到底お話にならず▲英語と技芸、最初入学せし十八名中の成績良きものにて数学は加減乗除の式題が漸くに解き得らるる位故、数学の教授には頗る困難を感じしも英語は極めて巧みなものにして手工は更に其の長所と見るべく其進歩発達の度頗る速なり▲第一回の卒業、修業年限は五ヶ年なれど成績の挙るものには卒業証書を与へ居れり。今年三月の四名の卒業生中プリンセス・ボンピモルラパン(17)及びニン(17)の両嬢は卒業後直に同校の教授を嘱託され、予て日本に留学して先頃帰国せしリー嬢と共に安井女史

等一行の椅子を襲て同校に教鞭を執る事となり又目下日本留学中にて五月中本国に帰る可き女子高等師範学校の暹羅学生ヌアン外三名「朝日新聞」では「二名」となっている「の女学生も多分此皇后女学校に教鞭を執ることとなるべし▲階級制度、皇后女学校の位置は再三変更されて今は現皇后陛下の御姉君(先年薨去)の当らせらるるサナンダラヤ殿下「Sunanthalai」の御邸を以て之に充て居れるが同国は一般に階級制度の厳格なる処なれば同じ卒業生にても前記のプリンセス・ボンピモルラパン嬢が上級の授業を受け持ち、次がニン嬢にて、日本に留学せし洋行帰りのリー嬢は下級を受持ち居れり▲家庭に在る時は総裸体、家庭に在る時は階級の上下を問はず男女とも裸体となりパヌングとて三ヤール半程ある着色せし大幅の布片を腰部にグルグルと巻きつけ此の上へ婦人のみは乳巻と云へるを左の肩より両方の乳へ向けて三角包帯の如くに懸け足は何時も跣足なり尚上流婦人は此の上に西洋婦

人の上着の如きものを着くれど下層の婦人は大概腰巻きと乳巻きのみにて外出するなり▲自動車・馬車・自動船の流行は暹羅をも襲ひて暹羅人は宅に在るときこそ前の如き裸体若しくは半裸体なれども、イザ外出となれば中流以上の人は必らず自動車若しくは馬車に乗るを常とし皇后女学校の生徒の如きは殆んど総べて自動車か馬車にて通學し居れり尚此の外自動船と云ふものも中流以上の各戸に備へられて外出に用う。此は盤谷は我が大阪市以上に水利の便ある所なればなり▲横座りの礼法、真直に起ち或は座るは暹羅にて不行儀となるが常に男女とも両脚を左方に投げ出して少し膝関節を後に折り(右足を余計に折る)、左手をつきて体を支へ右手を右足の上に置きて客来らば横になりしまま両手の掌を合はせて礼をなすものにて此の際も矢張り跣足の裸体なり。また彼の国の居室は綺麗なる板の間となり居り敷ものを敷きたるは少し尚客と対談する際にも此の姿勢を取り左手をつく場合には

肘関節の内側を外に折れる程に出すことを一種の善れとなし、また総べて肘関節のみならず腕関節並に各指の節々を反対に折ることを以て上流婦人の名譽となすを以て、中には指の節を反対に折りて腕にくっける婦人もある程なり。これが為め上流社会にては小児の頃より軟骨に育て上ぐることに勉め一寸支那の纏足に似たる処あり▲皇后陛下の贈り物、三女史とも三年の任満ちて三月二十八日盤谷出發、安井女史のみは新嘉坡を経て英國に向ひ欧州漫遊の途に上り中島、河野の両女史は鎌倉丸に投じて四月二十六日神戸に上陸せしものにて暹羅皇后陛下は三女史の芳を懐(ねがら)ふ為め紀念として銀製の見事なる菓子皿を贈られしが三女史に教育を受けし女学生一同も別れを惜み紀念として同様銀製の花瓶を贈りたり」(読売新聞1907年5月1日)。

朝日新聞同日号も、読売新聞と同一内容の記事を掲載している。但し、読売新聞にある「横座りの礼法」、「皇后陛下の贈り物」の項はない。一方、朝日新聞は、読売新聞にはない、「名物の象狩」の項があり、次のように記している。「三年に一回ほどづつあり盤谷を距る約五十哩(マイル)のアユンシャ(マ)と云へる旧都に於て其奇觀を見物せしむ当日は上皇族より下すべての階級に亘る觀覽者はひしひしと詰めかくる例にて一回に二百七八十の象を狩り集め(中島女史の赴きし時)たり暹羅にては耕作には多く水牛を用ひ居るも象は材木の運搬に最も多く使はれ居れり」云々。

稲垣夫妻がバンコクを築つたのは、1905年の暮れであるが、同年の春には三井物産初代社長益田孝(1848-1938)の実弟、益田英作(号は紅艶(こうえん)、1865-1921)がタイを商用で訪問し、稲垣夫妻の世話になった。益田孝と英作は、1906年4月25日神戸に上陸したナコンチャイシー親王を昼食時に、「三井物産会社専務理事益田孝、同英作……等は出迎へ日本料理を勧め」(『朝日新聞』1906年4月26日)するなど、タイとの関係が深い。これは當時、タイ政府が三井物産を通じて日本から武器を輸入していたからであろう。



が、如何にも茶味に富んで居るので、古来寂茶用の珍器に算へられて居るが、扱「さ」て此陶器が何処で出来たかと云ふ事に就ては従来一定の説がなかった処に、紅艶「益田英作」の暹羅に赴くや同国のスンコラウ「スンコロウ、サワンカロークのこと」と云へる場所が古代より製陶を以て有名であつた事を聞き込み、実地研究の上、今日日本で宋胡録と称するは、スンコラウと云ふ地名の転訛で暹羅産の陶器である事を発見した。紅艶の暹羅入りは故稲垣満次郎氏が同国公使たりし頃であつたが、其後公使が帰朝の節スンコラウより掘出した古陶磁器だと云つ

て持帰つた者を見れば、其過半は青磁であつた。或る学者の説を聞くに唐時代に暹羅国王が青磁の製法を伝ふるが為め、唐より青磁窯工を招聘した事が歴史に残つて居るさうで、スンコラウより青磁の破片が掘出さるるものを見れば、当時此地で青磁をも製作した者であらう。」(高橋義雄「大正茶道記、一」淡交社、1991年、413頁)。

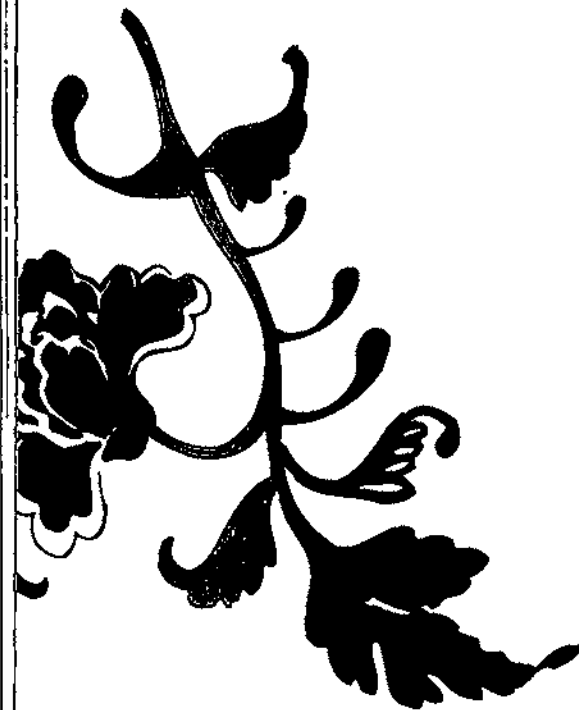
益田孝、益田紅艶(英作)の兄弟は茶道具収集家としての有名である。益田孝も次のように語っている。「稲垣満次郎が暹羅駐劄公使をして居つた時、私は弟の英作を暹羅へやつたこと

がある。宋胡録と云ふ焼物は日本にも古くから伝はつて居るが、之れは印度洋のアデン「アラビア半島南端、イエメンの港湾都市」から暫く馬車に乗つて行つた何とか云ふ処で出来るのだと云ふことに聞いて居つた。処が、英作が暹羅から帰つて来て、宋胡録はアデンのものぢやない暹羅のもので、暹羅のサワンカロークと云ふ処で焼いたものだ、其のサワンカロークと云ふ処が今でもちやんとあると云ふ。其の話を稲垣にした処が、其れでは私がサワンカロークの古い焼物の標本を手に入れてお送り致しますしやうと云ふて、サワンカロークの土の中から掘り出したのだと云ふ茶碗の破片を送つてよこした。処が其れを見ると、全く支那の古い青磁で、之れまで宋胡録と云ふて居つたものとは違つて居る。」(長井實「自叙益田孝翁伝」、1939年、593-594頁)。

「風の便り 当世の所謂通とやらの中にも数へらるる芝公園「紅艶(こうえん)」という号の由来は公園(こうえん)の近くに住んでいたからであるという」の益田英作氏に就ては、随分変つた可笑しい話がある。此春商用で暹羅へ出掛けた折云々。

高橋義雄(箒庵)は稲垣満次郎と同年1861年の生れだが、彼と稲垣夫妻との接点は宋胡録だけではない。高橋義雄(箒庵)は、稲垣死後、未亡人の栄子を後妻に迎えようとした人でもある。読売新聞1910年7月30日(朝刊)は「新婚(高橋義雄氏稲垣未亡人)」と題して次のように報じている。

「先頃愛妻千代子を失うて以来閑々の情遣るに処無く快々として淋しき生活を為しつゝありし王子製紙会社専務高橋義雄氏(50)は某氏を媒介として故稲垣満次郎氏未亡人栄子(32)との間に婚約略ぼ整ひ栄子は目下神奈川県金澤なる京極子爵の別邸に避暑中にて結婚は早くも初秋の頃なるべしと云ふ。」



連載⑩  
バンコクの日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子Ⅶ

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

稲垣満次郎は、3歳で父親(旧平戸藩勘定奉行天野勇衛、天野家は維新後先祖の姓である稲垣姓に戻った)を亡くし、叔父本澤五郎に金銭的援助も受けて、東京に遊学した。稲垣は1877年に上京し、78年9月満16歳で東京大学予備門入学、82年9月満20歳で東京大学文学部に進学。文学部卒業を間近にして平戸藩旧藩主松浦詮(まつら・あきら、1840・1908)伯爵の長男松浦厚(1864・1934)のイギリス留学の同行監督を依頼され渡英のために退学した。稲垣が叔父本澤五郎に宛てた手紙17通が『稲垣満次郎書簡録』(1937年刊)の中に紹介されている。

稲垣は東大文学部学生時代から、松浦詮に見込まれ、長男厚の侍読(家庭教師)を週4回務

めていた。文学部卒業間近になつた1885年夏休みの8月、鎌倉円覚寺で禅修行中の稲垣は、長男厚のイギリス留学のお供として訪英できないかという松浦詮からの打診を受けた。旧藩主から白羽の矢を立てられたことは、旧臣としてはこの上ない名譽であり、無条件に従うべきことのようにも思われるが、封建の世は既に遙か昔になっていた。友人達と同様東大卒学士の資格で官途に就き、遂には総理大臣になる夢さえ描いていた稲垣は、学位を得ずにお供で渡英し、イギリスで為すことなく日本に帰つてくるようなことになれれば、立身出世の計画も台無しになると考えて、旧藩主に次のような条件を付けた。

任務は厚の学業および品行の監督に限ること、満次郎をイギ

リスの大学に入学させ学位を得するまでどのような事情があつても帰国させるようなことはしないこと、と。稲垣は多くの東大教授たちは欧州の大学の卒業生であつたから、彼らと同等の学位を得ることで東大卒以上の箔をつけようと考えた。稲垣の条件を松浦詮が認めたので、稲垣は厚のお供をして渡英することにしたのである。

渡英直前、85年9月14日付の叔父宛の手紙で、満23歳の満次郎は、「小生此度欧州へ参り候得者(えば)必ず他日天下を経営するの力を養ひ得候見込相立ち相決し候事に候、然るに小生平常申上候には三十歳前後迄に学問を一通り仕、夫より實際に従事し学問實際の關係を明め、年五六十歳に至りたる時天下に一事業を為し名を青史に伝へ

ん」と決意を披瀝した(『稲垣満次郎書簡録』37・39頁)。

稲垣は86年1月4日にロンドンに到着し、ケンブリッジ大学在学中の末松謙澄「1855・1920」などに相談して入学先として同大を選んだ。但し、厚の面倒を見なければならぬので直ちには入学できず、86年10月入学し、89年5月31日卒業試験を受け同年6月卒業した。彼の目的は単なる学位の取得ではなかった。「入校の後には西洋人の目を驚かしめんと決心」していた彼は、卒業後もイギリスに留まつて英文自著の執筆出版に携わった。「日本人にして英語を以て政治書を著述したるもの未だ無之」時代において、英書出版で西洋人を驚かしてやろうという壮挙のためである。彼の著書は、90年2月には、

2011.5  
7417-70 2011.5

「英国にて一二と謂はる歴史の大家なるシーレーン翁の修正も相終へ、即今付梓中に御座候。此書は将来日本は世界にて富強の国となるべきと、歴史上より証明したるもの」(同上書、42頁)であった。

稲垣がお供した松浦厚は、稲垣病死の報が伝わるや、次のように語っている。

「故稲垣公使▽伯爵松浦厚氏談 ▲異色ある学生 英国ケンブリッジ大学に私より一二年前から在学されて居つたが其頃の留学生は多く教授の講義位に満足し卒業後の学位を得るのを唯一の目的として居たが稲垣氏は夫に満足せず専ら英国の実情に就ても研究を怠らず日本人の学生倶楽部を率先して発起し同志と共に英国研究を熱心に遣つて居られた。大学総長なども大に氏の人格に注目して従来日本人の学生は講義の筆記に甘じて居たと思つたが稲垣氏によつて東洋人の頭脳の精緻なものと観察力

の鋭敏なのを知つたと云ふ位褒めて居た」(『朝日新聞』1908年11月27日)。

稲垣は1891年2月に帰国。高等商業学校で非常勤講師として商業史を講じ少額の定収を確保したが、これは母親を養うためであり、専任教員として就職し小安を食ふつもりは全くなかった。彼は、「奏任「明治憲法下で高等官の一種」四等の百円の本官になれなど薦められたるも皆断はり置候。小生は斯の如き小官には決して出ぬと申候」(『稲垣満次郎書簡録』45・46頁)と書いていた。彼は執筆、講演、海外調査を繰り返しながら、同時に時の頭官松方正義(1835・1924、後に公爵)に食い込むことに成功したようである。叔父宛書簡によれば、1895年初め、日清戦争終結交渉の準備において、彼は様々なアイデアを出して松方正義を補佐したという。

明治政府の代表的財政家であ

る松方(薩摩藩出身)は、1885年12月に内閣制度が発足した後だけで見ても、最初の内閣(第一次伊藤内閣)から黒田内閣、山縣内閣の3代の内閣で継続して大蔵大臣を務め、続いて91年5月6日から92年8月8日まで首相兼蔵相(第一次松方内閣)、続く第二次伊藤内閣(92年8月8日・96年9月18日)では95年3月17日から8月27日までの短期間蔵相、更に96年9月18日から98年1月12日まで再び首相(第二次松方内閣)であった。松方は伊藤博文とはそりが合わず、山縣有朋とは悪くなかつたようである。

松方正義が首相を92年8月に辞して以後、96年9月に再び首相に任じられるまでの間の4年間、即ち第二次伊藤内閣時代を、稲垣は松方の逆境の時代と表現し、その逆境時に最も献身的に松方に仕えたのは自分一人である、松方は首相に復帰すると、稲垣の貢献を評価して大隈

外相との間に、稲垣をトルコ公使とすることで合意した、と叔父宛て書簡に書いた。

即ち、「松方伯「爵」の逆境に在ること大凡四ヶ年、此間終始一つも変りなく伯を輔佐致し候ものは、自慢仕るにあらざるも、私儀一人なりと申候ても不かなかるべき乎。而して伯にも何に欺となく天下政事の機密を相談致され候義に御座候て、遂に逆境変じて順境となり、総理大臣となられるや、天下小生を以て内閣書記官長たるべしとの予想に御座候。此も無理からぬことに御座候て、既往四ヶ年の伯と小生との関係間柄を少しく知るものは斯く考へ候ことならん。然るに小生は素と外交専攻を以て今日まで身を立て来り候ものなれば、此時に於て外交を捨て内政に専ら力を尽すは、己れの短所を以て天下に事を為す



1891年時の稲垣満次郎

次第なれば、松方伯内閣組織の際小生は若し内閣書記官長となることなれば、六ヶ月即ち第九議會を終へ、大凡内閣の基礎の確立する迄にして、其後は一切御断り申上げ、直に公使となりて外国に赴任仕るべく、左すれば初めより就官せざるが却て宜しかるべく、又公使となるも欧州中央の国に駐割して、空しく事なきに消日致すことは眞平御免を蒙り度、外交有事の地に赴任致し度とてトルコ国と新条約

を結び、其新設の公使館に赴任致度、左すれば今より六ヶ月間は任官せず、野に在りて伯及び其内閣を輔佐すべしと、松方伯との談一致致し、松方伯大隈伯を外務大臣に薦める為に最初訪問の際既に稲垣はトルコ駐割の公使にとて、二伯の間に相談纏り(同上書、54・55頁)。

しかし、当時日本とトルコの間には未だ国交がなかつた。大隈は外相となるや駐ベルリンの青木公使にトルコ大使と条約締

結の交渉を命じた。しかし、合意に達することはできなかった。その理由は、日本側がトルコに欧米並の平等条約を要求したためであるという(西国間に国交が成立したのは1924年になってからである)。また、稲垣と大石正巳(1855・1935、土佐出身、第二次松方内閣では農商務次官に就任)は第二次伊藤内閣を転覆した謀士、策士だと世間の注目が集まつたので、稲垣は大森に身を隠して「自己の名利も利欲も捨て専ら松方伯を輔佐致し、松方伯も天下機密の事は悉く相談され候」(同上書、55頁)。

思つたようにトルコとの国交が進まず、稲垣の公使就任の話に暗雲が漂つた。幸い、トルコは当面脇に置いて、シヤムとの間の条約締結交渉に公使として赴くチャンスが与えられた。稲垣は、3ヶ月で条約締結の任務を完了させ1897年7月には帰国し、それからトルコの首都に直接乗り

込んで条約交渉に当たる積りで、同年4月に日本を発つた。長年の浪人暮らしの後、数え年37歳(満35歳)で公使の地位を得た稲垣は、10年後には自分は日本の大臣になつてみせると叔父に次のように書き送つた。

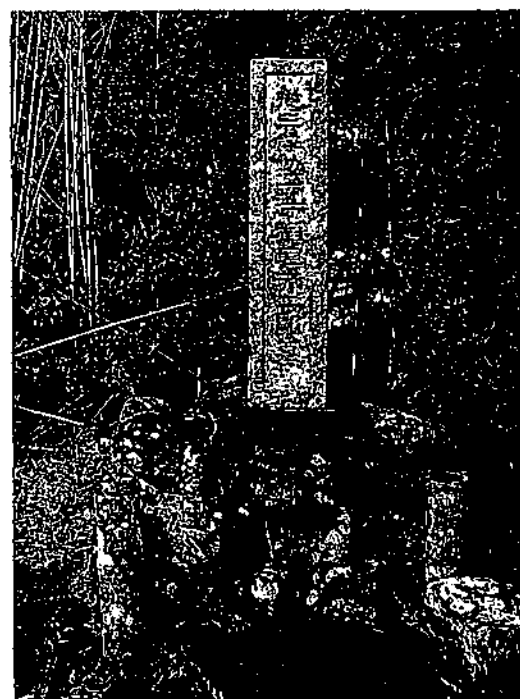
「さて内閣組織当時の内約も青木公使の談判成功せずして止み、小生の志望も達せざることになり相成るべき乎と恐怖罷在「まかりあり」候得共、幸に暹国「シヤム」と新条約訂結のこと有之、此義に付ては皆て小生彼の国に参り、其当局者をも知り居ることなれば、条約訂結の爲めに三ヶ月参り、然して後に又トルコ国へ条約訂結に参り呉れよとの外務大臣「大隈重信」の相談にて、首相「松方正義」の賛成を得て小生も承諾致し、今回公使に任ぜられ渡暹のことに相成候。就ては今日の処にては4月13日神戸港出帆、15日頃長崎出帆、香港に到り夫より暹国盤谷府に参り、新条約訂結談判を開き、其事業を終へ直に帰

朝のことなれば、先づ二ヶ月三ヶ月を要すべく、七月頃には帰朝して、八月頃には米國を経て歐洲に出でトルコ首府コンスタンチノブルに到り、其國と条約訂結の談判を開き、然して其近隣の小國三四國とも条約を結び、來春一応帰朝致候てトルコ國に新公使館設立の時（三十一年四月）全權公使として茲に駐劄のことは已に首相外相と小生との間に相談一決し居り候義にて、此内約を以て今回も渡退のことに致し候義に御座候是

より小生も多年研究し且つ天下に唱道致候ことを實際に行ふことなれば、従つて責任も重く、且又手腕をも振ふの機会も多々可有之と悦び罷在候。多年の間天竺浪人致し居り候義にて、行末如何に成り行くものにやと嘸「さぞ」御心配もあらせられ候ことならん、乍然多年逆境に処して苦勞致候義は、將來に於ては大に身の爲めに相成り小成に安ずる如きの病は起り申す間敷と存罷在候。今より申上置候。四十六七歳の時は必ず内閣大臣

となりて御覽に入れ可申上、然して日本及び世界の青史に名を留めて、聊か孝道を尽し申すべきとの覚悟は十二分に有之候」（同上書、56頁）。  
自信たつぷりに10年後には大臣になると書き送つた稲垣だが、これは本人の主観としては大言壮語ではなかつたのかもしれない。それを明かにするには、彼が第二次伊藤内閣の倒閣、松方第二次内閣の成立にどの程度貢獻したかを調べる必要がある。しかし、日本政治史を紐解いて

も、明確な解答は見つからない可能性が高い。シヤム公使就任以前の稲垣については、多数の著作を物し、全國を演説して回つた程度くらいにしか知られておらず、彼に焦点を当てた研究は乏しいからである。現に、ここに引用している『稲垣満次郎警備録』を引用した研究さえ皆無のようである。



↑平戸、最教寺の遺蹟（稲垣は「稲垣満次郎之傳」で「次」ではなく「二」になつてゐる。「名古屋日蓮寺の遺蹟」(戒名「敬真院殿至誠宏徳大居士」)

しかし、10年後の稲垣を待ち受けていたものは、「公使となるも歐洲中央の國に駐劄して、空しく事なきに消日致すことは眞平御免を蒙り度」と、彼が厭つた歐洲の片田舎での腎臟悪化による病死であつた。3ヶ月で終わる筈だつたシヤムとの関わりは8年以上となり、続いてスペイン・ポルトガル公使として赴任1年余、スペインの避暑地サン・セバスチャンで4ヶ月間病に臥したのち、1908年11月25日午前8時、栄子夫人一人に看取られながら最期を迎えたのである。

連載①  
パンコクの  
日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子Ⅷ

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典、第一巻』（吉川弘文堂、1979年、721・722頁）の稲垣満次郎の項目は次のように記している。

「稲垣満次郎 一八六一・一九〇八 明治時代の外交官。文久元年（一八六一）九月二十六日、肥前国松浦郡平戸村（長崎市平戸市）に生まれる。藩立学校維新館を経て鹿児島・長崎に遊学の後、大学予備門を経て、明治十五年（一八八二）東京大学文学部に入學。同十九年英国ケンブリッジ大学に入學。帰朝後、学習院・高等商業学校の嘱託教授を経て、同三十年三月、暹羅（シヤム）国駐劄弁理公使に任ぜられ、三十六年特命全權公使に昇任。四十年二月、スペイン・ポルトガル駐劄公使に任ぜられたが、翌四十一年十一月二十五日、任地マドリッド近郊

で病没。四十八歳。墓は東京都港区の青山墓地にある。その著書『東方策』（明治二十四年初版）は、わが國民の對外思想を啓発し、東洋および世界に対するわが國の對外策を確立しようといふ意圖したもので、広く読まれ版を重ねた。（河村一志）

この項目の執筆には、申し訳ないが、少なくとも5ヶ所に誤りがある。誰にでも判る簡単な誤りは、死亡時の年齢は48歳ではないことである。文久元年9月26日は、太陽曆（グレゴリオ曆）換算では1861年10月29日（火曜日）であり、亡くなったのは1908年11月25日であるから、正確には47歳と1ヶ月足らずである。しかし、数え齢では48歳であるから、これは許容範囲内かもしれない。稲垣が明治15年（1882年）に東大文学部に進学したことや

学習院・高等商業学校の嘱託教授をしたことは、外務省外交史料館に保存されている稲垣の個人履歴ファイルに記載されていることであり、筆者も前号に稲垣の経歴をこのファイルの記載通りに紹介した。しかし、その後資料に当たってみて間違いであることが判明した。

東京大学予備門編纂『東京大学予備門一覽、本費 自明治十五年（明治十六年）』（明治十五年十二月出版）には、明治十五年（明治十五年9月授業開始、16年7月終業）の大学予備門の全在學生徒名（322人）が学年クラス別に記載されているが、稲垣の名は最上學年（第1級生）という。当時の制度では3年生（として、内田康哉、林権助、平沼騏一郎、鈴木馬左也、早川千吉郎らと共に記されている。稲垣が東大に進学したの

は、予備門を明治16年（1883年）7月に卒業し、2ヶ月の夏休みの後、同年9月のはずであり、1882年ではない。これは同期生である内田康哉（後に外相、伯爵）や鈴木馬左也（後に、第3代住友総理事）の年譜に、明治16年9月に東大に進学したと記載されていることから確認できる。鈴木馬左也と早川千吉郎（後に三井合名副理事長、満鉄総裁）の2人は、稲垣が死亡した時の新聞の死亡広告に友人代表として名を出している。ついでだが、大学予備門は英語科目に重点を置いた教授教育機関であるが、数学、物理、化学、生物、歴史、地理などの授業も英語で行われ、当然試験の答案は全て英語で書かなければならなかつた。イギリスに留学した稲垣が、直ぐにケンブリッジ大学に入學できたのは





稲垣満次郎の墓がある名古屋市の日蓮寺の本堂

日本での英語教育の御陰である。イギリスでブリックスクールの教育を実地調査したところがある稲垣は、大学予備門の数学のレベルは、イギリスのブリックスクールよりも高かったと、1890年代半ばに講演している。

次に、稲垣が1897年3月にシヤム公使に任じられるまで、学習院・高等商業学校の嘱託教授を務めたというのも、間違いない。稲垣が91年9月に「学習院教授を嘱託す（但委任待遇）」の辞令を受けたが、2週間後に辞めてしまったことは、既に紹介した。一方、高等商業学校の方は、嘱託教授に就任した形跡は全くない。これは、（東京）高等商業学校の後身である一橋大学の付属図書館が所蔵する『高等商業学校一覽』から明白である。毎年発行された同校一覽には、嘱託教員（非常勤講師）を含む全教職員の氏名、担当課目名が掲載されている。当時の高等商業学校は、毎年9月11日に第1学期開

始、第2学期は2月16日開始、7月10日までの2学期制であった。明治23年度（明治23年9月から24年9月）から明治29年度（明治29年9月から30年9月）の同校一覽を、全て調べてみたが、稲垣満次郎の名前は全く見出せなかった。稲垣の叔父本澤五郎宛（1891年7月30日付）の手紙から見ても、彼が同校嘱託教員に就任した可能性が最も高い、明治24年度の同校一覽によれば、商業歴史の課目を担当したのは嘱託教員の和田垣謙三である。1891年7月30日時点では、稲垣に9月の新年度からの商業史担当嘱託教授の話があったのは事実であるが、実際には稲垣は高等商業学校でこの職を担当することはなかったのである。外務省の個人履歴にどうして嘱託教授歴が記されているのかは不思議である。

更に、冒頭の国史大辞典は、稲垣は任地マドリッド近郊で病没し、墓は東京都港区の青山墓地にある、と記しているが、これらも残念ながら誤りである。

稲垣の墓は青山墓地には現存していない。

稲垣が死亡した場所は、ビスケー湾に面しフランスとの国境に近い高級保養地のサン・セバスチャン（サン・セバステア）である。ここがマドリッドの近郊とは言えないことは地図を見れば一目瞭然である。稲垣はどうして首都マドリッドではなく、サン・セバスチャンで4ヶ月間病のち死亡することになったのであるか。その理由を、1909年2月12日に神戸に因幡丸で稲垣の遺体と共に帰着した妻の栄子は、朝日新聞記者に次のように語っている。

「御存知の通り西班牙「スペイン」の交際季節は二に分れ冬は首府の馬蹄力（マドリッド）夏は海風涼しきサン・セバスチャンです。私共の西班牙に着きましたのは一昨年「1907年」の夏でした。間もなく夫と共に右のサン・セバスチャンへ参りました。驚いたのは西班牙の夏の交際社会の華美（はで）な事です。御新婚の西班牙両陛下

「アルフォンソ13世、1886・1941、1906年5月末

イギリスのビクトリア女王の孫と結婚」には御同列にて交際社会の牛耳を執り給ひ万事に格式を貫き西班牙の由緒ある貴族等の雲の様に算せらるる其華々しさは初て欧羅巴に参りました私共夫婦に取りましては突然極楽の様な心地がしました。皇帝陛下には深く稲垣を御親任あらせられて私風情に賜はる御手紙すら長くも「マイデーヤ、マダム稲垣」と云ふ御親戚の間柄に用ひ給ふ言葉は賜はりました。それに付けても楽しく嬉しかったのは一昨年の夏でございましたが昨年の夏はお話し申すも涙でございます。忘れも致しませぬ昨年八月七日サン・セバスチャンの避暑地で皇帝陛下の拝謁がございました。稲垣にも拝謁を仰付られました。至急に伺候致さうと致しましたが折悪くどうしても頭が上りませぬ。尤も少し前から頭の具合が悪いと申して居りましたものの平生健康でございまして左程とも思はず

居りましたが此日はどう致しまして枕が上らぬと申しましてそれから遂に四ヶ月間避暑地の夏も暮れまして秋風寒くなりましても首府へ帰ることも出来ないう故に倫敦、巴里或はボルドーなどより名に聞えたる名医を頼みまして手を尽しましたが天命と申すのでございませう其甲斐もなく昨年十一月二十五日の朝八時頃遂に眠るが如く死にました。初めの二ヶ月ばかりの間はナニ此位のことと死んで堪えるものかと云ふ元気でございまして其後或朝私を呼びまして何時になく打怦れて申すには自分はモウ駄目である運命はモウ極つて居る、今日は皆にお分れをするからとて召使ひよりボーイに至るまで枕頭に呼寄せまして一々名前を呼び、お前方にもいろいろお世話になつて有難かつたぞよと淋し気に微笑しながら札を述べました。其時には一同思はず顔をそむけ暗涙を催しました。皇帝陛下よりは日々セバスチャンの知事を通じて長くも涙の出るばかりなる有難い御慰

間でございます。時には両陛下より御心を掛けられたる御親輪さへ賜はりました」（東京朝日新聞1909年2月14日号）。

神戸に上陸した栄子は、稲垣の遺体を因幡丸に残し、東京で葬儀の準備のために東海道線で東京に向かった。2月13日に東京に着いた栄子は、今度は読売新聞の記者に、「稲垣が病病しましたのは小村外相が英國から帰朝の際丁度巴里へ参つ」（読売新聞1909年2月14日号）と後であると述べている。小村寿太郎駐英大使は、1908年7月15日に帰朝命令を受け、7月27日ロンドンを発ちシベリア経由で帰朝し8月27日に外相に就任した（黒木勇吉『小村寿太郎』講談社、1968年、947・948頁）。

稲垣は7月末に小村がパリを通過する際に、同地に小村を訪ねたのである。その時までには稲垣は少なくとも動くことはできたのである。しかし、スペイン国王アルフォンソ13世の夏の避暑地であるサン・セバスチャ

ンで、8月7日に拝謁の予定があり同地を訪ねたが、拝謁予定の日から枕が上らず、寝た切りとなったのである。稲垣の病氣は腎臓病であった。稲垣はその前から腎臓病に罹っており、体に浮腫がでる程度の症状はあったのかもしれないが、8月7日になって急に悪化したのである。今日の医学では人工透析やある場合には親族からの腎臓移植によって延命できるそうであるが、当時は不治の病であった。

「稲垣の遺体は、西班牙風の防腐剤を施し最も鄭重に全身を布にて巻き箱詰めにて、長さ6フィート9インチ、幅3フィート7インチ、高さ2フィートの

寝棺に納められ帰国した」(読売新聞1909年2月14日号、東京朝日新聞同年2月18日号)。

栄子が稲垣の遺体を火葬しないまま、因幡丸で遺体とともに帰国した理由はスペインでは火葬が厳禁されていたからであった。「欧米ではつい数年前迄火葬を大変嫌がったものだが近年其の好結果を見て大いに奨励する様になったが、旧教を信ずる西班牙では未だに断じて行はせない。先年稲垣満次郎氏が彼の地で客死した折火葬をさせないので遺骸を日本へ送るを非常に困った相である」(読売新聞1915年8月14日号)。

稲垣の遺体を載せた日本郵船

の因幡丸は2月17日14時過ぎ横浜に到着。栄子は横浜を訪れ、未だ本船上の遺体を拝し翌日の遺体上陸打合せを行った後、葬儀の準備のため東京に戻った。翌18日午前10時、増上寺住職神林周道等が因幡丸船中にて読経した後、「六角形の寝棺を日の丸の国旗にて掩(おお)ひ数個の白色の花環にて装飾し夫人其他近親の人々に付添はれて上陸せり。外務省を代表して下浜したる西外務大臣秘書官、篠野外務書記官を始め西班牙領事パルマロリー氏、周布神奈川県知事、同夫人、益田孝、市長代理其他数十名波止場にて是を迎へ馬車にて午後零時五十分着同一時貸切一等室に安置せり。斯くて午後二時更に停車場内に於て靈柩を納めし車室を開き導師の読経に続いて周布知事、西班牙領事其他の礼拝あり。終つて横浜警察署佐野警部の護衛にて午後二時横浜を發す。▲靈柩新橋着、午後二時五十八分愁に満てる列車の静かに新橋停車場に入るや亡き故友の靈を迎へんとて

集まれる小村外相、西班牙、葡萄牙公使、大隈、福島中将等を始め数百の人々は一斉に柩を迎へ、靈(やが)て靈柩は六名の夫人に昇(か)き上げられ日置敷仙師に護られて柩を出づれば茲にも数百の人々を呑んで柩を拝す。寡夫人「栄子」は西班牙葡萄牙公使に扶けられて柩に従ひしが親しき夫人の出迎へを受けて今更に亡き夫の偲ばれてや顔(せぐ)り来る涙止めがたくペールながら白の手布(ハンケチ)に面を掩へる可憐(いぢら)しさに思はず顔を背くるもあり。其隙(ひま)に柩は予て差し迎への葬馬車に昇き入れ花輪にて蓋とし日置敷師の馬車と寡夫人の馬車に挟まれ静かに本邸に入れり」(東京朝日新聞1909年2月19日号)。

2月18日の東京朝日新聞には「特命全權公使従三位勲一等稲垣満次郎儀兼て任国西班牙に於て病氣の処養生不相叶昨年十一月廿五日同国に於て薨去致候に付此段御通知申上候敬具。但遺骸は本月十八日午後二時五十八

分新橋着同廿一日午後一時四谷

区荒木町廿七番地自宅出棺青山斎場に於て仏葬式執行仕候。放鳥造花等御寄贈の儀御断申上候。明治四十二年二月十七日、妻稲垣栄子、親戚 本澤五郎、山口俊太郎、友人 侯爵桂太郎、伯爵大隈重信、伯爵小村寿太郎、男爵斎藤實、石井菊次郎、早川千吉郎、鈴木馬左也」という死亡広告が掲載された。

ここに於ける親戚の本澤五郎は稲垣の父方の叔父で、稲垣を幼少より援助した人である。山口俊太郎は栄子の長兄。友人として名を連ねている人で、本当の親友は最後の2人、早川千吉郎、鈴木馬左也である。彼らは大学予備門の同期生であっただけでなく、鎌倉円覚寺の今北洪川和尚について禅を学んだ仲間である。早川千吉郎(1863・1922)は、当時三井銀行専務理事。彼は、石川県出身、東大予備門から1887年東大法卒、1890年に松方正義の知遇を受け大蔵省に入り1901年に三井銀行専務理事、

1909年に三井銀行常務、更に三井合名副理事長、1921年に満鉄総裁を務めた。鈴木馬左也(1861・1922)

は、当時に既に住友財閥の経営トップである住友第三代総理事であった。彼は、宮崎県出身、東大予備門から1887年東大法卒で内務省入り、96年に退官して住友入社、1904年に住友第三代総理事に就任した。

東大時代の稲垣は、三井財閥の経営者となる早川、住友財閥の経営者となる鈴木らと親交があり、その交友はその後とも続いたのである。本稿では紹介できなかったが、稲垣はタイ経済について相当の蘊蓄を開陳している。トップ経済人との交友が、経済史への関心が深かった稲垣の経済への興味を一層刺激した

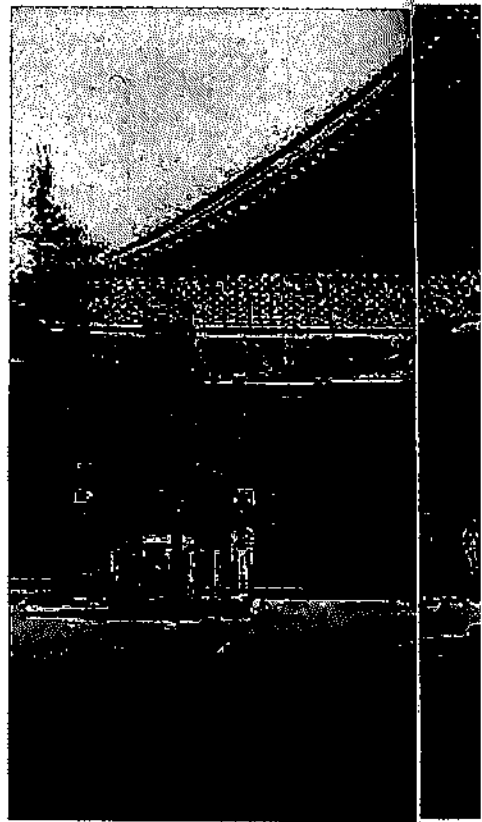
可能性がある。

2月21日の青山斎場での葬儀は次のように報道された。

「稲垣公使の葬儀、西班牙公使放稲垣満次郎氏の葬儀は昨午二時青山斎場に於て執行されたり春寒料峭として吹風肌を劈(つんざ)き午後一時四谷荒木町の自邸を發せし靈柩は近衛一個大隊の儀仗兵に前後を擁せられ三十余対の生花造花を先にし親戚故旧の人々柩の前後左右に扈從し肅々たる一帯の葬列は斎場なる青山墓地に向へり△莊嚴なる斎場の光景、靈柩は午後二時特命全權公使従三位勲一等稲垣満次郎之柩と記したる柩旗を高く葬列の上に翻かし前後儀仗の吹奏する喇叭の哀の譜に送られ着場し直に斎壇に移されぬ繞いて栄子夫人は黒色洋装の喪服

情として施主席に着き会葬者順次着席あり当日の導師護國寺の権大僧正高城義海師は二十二名の僧侶に伴はれて着席し式に移れり衆僧の読経了りて導師義海師は敬真院殿至誠広徳大居士と書せる靈牌と遺骸に対し一揖(いちいつ)の後捻香献供を終へ読経の式終るを待ち悲壯なる追悼文を讀上げた時は満場俄に打濕り殊に栄子夫人の竊に暗涙呑むを思へば一同哀悼の感に堪へざりき順次焼香ありて同三時式は全く終り再び靈柩は壇上より取離され同墓地に向はんとするや儀仗兵は茲に永別の喇叭に追悼の終りを告げ壇を巡る香煙を払うて去る。柩は同墓地南西の一隅に搬ばれ夕陽西に傾く頃埋棺を終はりたり△主なる会葬者、氏は生前交際家たりし丈けに会葬者朝野各方面に亘り特





京都の醍醐寺の正堂

に畏くも久遠宮（くにもみや）殿下には御名代として山田大尉を会葬せしめられ大隈伯、寺内陸相、斎藤海相、林前外相、山本前海相、伊東元帥、乃木学習院長、福島参謀次長、石井次官、西班牙公使、葡萄牙公使、副島伯、寺島伯、園田孝吉氏等其他政治家、実業家、学者、技師、軍人、官吏等無慮五百名に上り（東京朝日新聞1909年2月22日号）。

葬儀の翌日、栄子は紙面をかりて次の挨拶を行った。即ち、「故従三位勲一等稻垣満次郎葬送之節は遠路御会葬被成下難有奉謝候混雑中尊名伺漏も可有之に付略儀以紙上御礼申上候明治四十二年二月二十一日 稻垣栄子」（東京朝日新聞1909年2月22日号）。

また、2月24日には浅草本願寺別院において、前法主大谷光瑩を大導師として追弔法要が行われ、栄子等遺族の外にシヤム公使、スペイン公使らも焼香した（読売新聞1909年2月25日号）。

以上から判るように、稲垣の遺体は火葬されることなく、青山墓地に埋葬された。昭和12年10月に発行された、菊池芳夫編『青山墓地録』（大日本偉人顕彰会発行）、4頁には同墓地の地図指番の「一六、52」に「特命全権公使従三位勲一等、スペインに客死」した肥前出身の稲垣満次郎（但し、稲葉と誤記されている）の墓があることが明記されている。同上書73頁からは、稲垣と同一の地図指番に「元老院議員正三位勲一等会計検査院長外務次官」の略歴を有する山口尚芳の墓があることが判る。栄子は、父尚芳の墓の近くに満次郎の墓を作ったのであろうか。

筆者は今年の2月に青山墓地を訪ねてみた。尚芳の墓（「山

口家之墓」）は現存しており、管理事務所の台帳で簡単に所在地（戦前の地図指番名は、整理時に変更され、現在は1イ・1・2という地番である）が判明する。しかし、稲垣満次郎の墓は、現在の台帳には記載がない。稲垣の墓は、山口尚芳の墓の近くにあるはずであるから、「山口家之墓」の周辺の墓誌を丹念に探してみたが、稲垣満次郎に関連するものは何一つ見つからなかった。稲垣の墓があったはずの周辺には、1875年にタイを訪問した大島圭介、稲垣と親しかった肝付兼行の墓があり、稲垣の墓が作られたと同時期である明治42年1月に建造された藤村操（明治36年5月22日に巖頭之感を樹木に刻んで華嚴の滝に投身自殺した一高生）

の碑も現存しているにも拘わらずである。青山霊園管理事務所の話では、霊園の土地は東京都の所有であり、ここに墓地を維持するには管理費を支払わなければならない。5年以上管理費が払われないと墓そのものが撤去される可能性がある、という。いくら東京の土地が少くないとは言え、これでは死後も賃貸マンションに住んでいるのと同じで、管理費を払ってくれる人がいなくなったら無縁仏としてお墓まで撤去されてしまうのである。子孫のいない稲垣の墓は、栄子の死（1966年4月10日）後に撤去されてしまったのであろうか。

満次郎の墓は、前身に写真で示したように平戸市最教寺と名古屋市日泰寺にもある。しかし、稲垣満次郎の兄である雄太郎の孫に当たる稲垣健一氏の話では、前者は満次郎の爪を、後者は遺髪を入れたものである。満次郎の遺体はどこに消えたのであろうか。

連載⑫  
バンコクの  
日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子 IX

村嶋英治

早稲田大学アジア太平洋研究科教授

新橋駅に到着した稲垣満次郎の遺体を、その自宅まで先導した日置黙仙（1847-1920）師は、当時日暹寺（現日泰寺）の住職であり、後に曹洞宗本山永平寺の貫主、曹洞宗管長も務めた高僧である。日置師は1901年6月に仏舍利受け取りの代表の一人として渡タイしており、それ以来稲垣夫妻と親交があったものと思われる。

日置とタイとの関係は深く、その後も1911年12月の6世王ワチラーウット王の戴冠式にも日本仏教界代表として訪タイしている。

日暹寺における満次郎の遺髪墓所（石塔）建立式は、1909年11月28日にシヤム公使、プラー・ナリソンラーチャキット（1865-1951、写真参照）を迎えて挙行された（読売

新聞1909年11月23日号）。プラー・ナリソンは第2代目の駐日シヤム公使として、1903年11月から1910年初めまで長期間在日した。離任後、彼はラーマ6世からも重用され、プラー・ウィーストサーコンディットという新しい官名を与えられた。長命な彼は、戦前の日タイ交流の様々な場面に姿を現している親日家である。

日暹寺での満次郎の墓所建立式に参列したプラー・ナリソン公使に、栄子夫人は「日暹寺の本堂建設用に、チュラーロンコーン王がチーク材の柱を下賜する」という話を稲垣にされていた。稲垣が死亡したのでこの話も消滅したものと思うが、柱下賜の件を国王に確認して欲しい」と、要請した。

駐日公使を離任しバンコクに

帰ったプラー・ナリソンは、1910年2月14日付で、柱下賜の件をチュラーロンコーン王に報告した。同王は国王秘書官長に「本件はダムロン親王（内務大臣）が知っているだろう。尋ねてみよう」と指示した（タイ国立公文書館（NAC）Ro. 5 To. 25/94）。ダムロン親王の答えは同文書中にはないが、この件がどう処理されたかについては、次のファイルから判明する。即ち、1910年2月15日に国王秘書官長はダムロン親王に問い合わせた。ダムロンは同年2月24日付で国王秘書官長に、「稲垣から確かにその話が

あった。彼は日暹寺の柱としてチーク丸太を2本求めた。ただし、国王から下賜される形式を希望した。私は、チーク柱2本はそれほど大事ではないの

で、もし稲垣が国王に御願すれば下賜されるだろうと答えておいた。稲垣が国王に御願したかどうかは知らない」と回答した。この回答を讀んで、国王は2月26日に「下賜してよい」と指示した。同年8月13日にダムロンはチーク柱2本を日本政府に送る用意が整ったと国王秘書官長を通じて上奏した。8月20日付で「送ってよい」という国王の指示がダムロンに伝達された（NAC Ro. 5 To. 21/37）。

このようにバンコクではチーク柱を送る準備が半年の内に整った。しかしこれはダムロン内相が担当したので、外務省からは出先の駐日公使には、進行状況は何ら報告されなかった。

日置黙仙師と栄子夫人は、プラー・ナリソン前公使に依頼



したチーク柱の下賜について、  
本国政府からどのような回答が  
あったかを尋ねるため、ブラ  
ヤー・マハーヌバープ新駐日公  
使を訪ねた。日置は、かつて仏  
舎利の下賜を受けるため訪タイ  
してチュラーロンコーン王に拝  
謁したことがあること、日暹寺  
建設のため国民から40万円を集  
めたことを告げ、前任公使に依  
頼したチーク柱下賜の件に回答  
があったかどうかを質問した。

新任公使の本省宛報告では、  
日置が40万円の寄付を集めた  
語った瞬間、日置らの目的は  
チーク柱ではなく金が欲しいの  
だと「直感して」、「日本人は小  
うるさく他人から一方的に利得  
をしようとする連中なので、一  
回、道を開けば、この後何回も  
終わることなく貰いに来るだろ  
う」と考え、そのような金があ  
るなら、日本で使うことは無意  
味だ、バンコクの寺院に使った  
方がよいと判断して適当にあし  
らった、という(Mr. Bas Teja)。  
1910年8月23日付で、  
テワウオン外相は国王秘書官  
長に、駐日新公使の日置等に対  
する扱いぶりを是認した旨報告  
した。ダムロン内務相の報告と  
テワウオン外相の報告との間  
の食い違いに気が付いた国王  
は、国王秘書官長に外相にチー  
ク柱下賜の決定を知らせておく  
ように指示した。結局1910  
年末にはチーク柱は日暹寺に到  
着した(Mr. Bas Teja)。日本  
人を理解できない、あるいは日  
本人に好感をもっていない新任  
駐日公使の早とちりは、幸いに  
英明なチュラーロンコーン王に  
よって是正されたのである。

この本堂は1904年にどこか  
らか移築された仮本堂であり、  
1984年に現在の大本堂に  
取って代わられるまで80年近  
く使用された(加藤龍明『微笑  
みの白塔―釈尊真骨奉安百周  
年』、中日新聞社、2000  
年、200・201頁)。な  
お、前号にこの仮本堂は戦災で  
焼失したと書いたが、これは間  
違いであり、ここに訂正する。  
日暹寺では、第1次世界大戦  
中の1918年6月に「釈尊御  
真骨奉安塔」が竣工し、同月11  
日から5日間、落成奉安大法会  
が挙行された。最後の15日に日  
置黙仙を大導師として執行され  
た奉安式大法要において、真骨  
(御遺形)は奉安塔に遷座され  
た。この大法会には、弟子も出

席したことは、「覚王山を埋む  
名僧智識、万縁叢中紅一点の稻  
垣公使未亡人」(新愛知191  
8年6月14日号)という見出し  
で報道されている。  
この時、本堂建設も計画され  
ていたことは、1917年3月  
号の『覚王』(愛知郡東山村覚  
王山日暹寺が1913年初に発  
刊した月刊誌)に「覚王山奉安  
塔並本堂建築寄付単(拾円以  
上)」として寄付者のリストが  
掲載され、また「覚王山に於て  
は、本堂建築の第一歩として、  
去月「1917年2月」中旬  
同寺仮本堂の前方に間口十五間  
奥行三間の第一工作場を建築せ  
り」という記事が掲載されてい  
ることから明かである。奉安塔  
の工費は17万8000円であつ



ブラヤー・ナリソン駐日公使(右)

たが、本堂建築にはその10倍以  
上の経費が必要であつた。新愛  
知1918年6月12日号は、  
「覚王山では奉安塔竣工後は  
愈々本堂建築の大事業に着手す  
る事となり奉安塔と同じく伊東  
工学博士の設計になるもので総  
工費予算は百万円と見積られて  
あつたが物価騰貴の今日では其  
三倍を要する見込で今後三年間  
に竣工せしむる予定であるが、  
引続き仏教改善会、仏教中学  
建設、世界仏教伝道会本部設立  
に尽す筈で世界的仏教の道場と  
して日本仏教徒信仰の中心地と  
する意気込みである」と、報じ  
ている。  
しかし、意気込みは兎も角、  
本堂建設もその他の大企画も実  
現しなかった。タイ国王から贈  
られたチーク柱は、この本堂建  
設に用いられるはずであつたろ  
うが、実際に本堂が実現したの  
は贈られてから70年以上も  
経った後であつた。  
本堂建築用のチーク柱は、ど  
うなつたのであろうか。



連載 ⑬  
バンコクの  
日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子 X

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

さて、満次郎の葬儀を終わ  
り、日蓮寺にも墓所を建てた未  
亡人栄子は、今年4月号に記し  
たように、「某氏を媒介とし  
て」王子製紙会社専務高橋義雄  
氏(50)との間に婚約がほぼ  
整ったという記事が、読売新聞  
1910年7月30日号に掲載  
された。

高橋義雄(高橋常庵)の経歴  
は、「1861年8月28日水戸  
藩士高橋常彦の四男に生まれ  
る。慶應卒業後、時事新報、洋  
行2年後、三井銀行大阪支店  
長、三井呉服店や三井鉱山理事  
の後、1909年11月王子製  
紙会社専務に就任。1909年  
12月22日妻千代子没」(高橋  
常庵著「熊倉功夫・原田茂弘校  
注」『大正茶道記、三』淡交  
社、1991年、610頁)で  
ある。

栄子の再婚話を仲介した某氏  
が誰かは判らないが、稲垣の親  
しい知人には、益田孝兄弟、早  
川千吉郎など三井のトップ経営  
者があり、栄子の長兄山口俊太  
郎(1863・1824)も、  
三井物産に勤務し、1908年  
11月時の肩書きは、巴石油株  
式会社の専務取締役(読売新聞  
1908年11月13日号)であ  
る。更に、俊太郎の妻は、明  
治・大正の大出版業者、金港堂  
主の原亮三郎(1848・19  
19)の長女、幹緒子である  
が、幹緒子の妹である操子の夫  
は、山本条太郎(1867・1  
936)である。山本は15歳  
で三井物産に入り、35歳で上  
海支店長、43歳で常務取締  
役、1914年48歳の時、  
シーメンス製鉄事件で有罪退  
社。その後、南洋開発、繊維、

鉱山、電力、化学工業などの多  
数の事業を手がけた。1920  
年立憲政友会から衆議院議員当  
選5回、26年同党幹事長、27  
・29年には満鉄総裁を務めた  
(『山本条太郎伝記』1942  
年)。  
妹栄子の将来を心配した長兄  
の俊太郎が再婚話を勧め、三井  
関係の人脉の中から高橋義雄と  
の縁談話に至った可能性が考え  
られる。

1910年7月30日の上記  
読売新聞記事に続いて、翌11  
年1月19日の同紙は、「隣の  
噂」欄に次の記事を掲載してい  
る。

「結婚に就ては珍談がある、先  
日高橋義雄君が昵懇の知人だけ  
を自邸に招いて披露の宴を催し  
たる時、菊地某君が来賓を代表  
しての挨拶の終りに先夫人も

今回の夫人も共に稀れに見る賢  
夫人で且美人である、男子とし  
て一生に二度迄かくも揃つて美  
人を迎ふるとは吾々一同の羨望  
に堪へぬ処でございますとや  
つたので花婿殿顔の面喰つて居  
たが、或る皮肉家が傍の客を顧  
み、小声に混ぜつ返して曰く  
『古くして新しきものは何  
に』」

二つの記事が続いて読めば、  
誰でも栄子は高橋義雄と再婚し  
たものと思うに違いない。しか  
し、高橋義雄が結婚した相手  
は、栄子ではなかった。前出書  
は高橋義雄の経歴を「1910  
年11月平岡潤の次女楊子と再  
婚。1911年10月王子製紙  
を退社、実業界を引退。191  
1年10月26日長男忠雄生まれ  
る」(前出、高橋常庵著「熊倉  
功夫・原田茂弘校注」『大正茶  
道記、三』淡交社、1991年、610頁)で  
ある。

道記、三』610頁)と記して  
いるのだ。

次に栄子の名が新聞紙上に現  
れるのは、1920年になって  
からである。

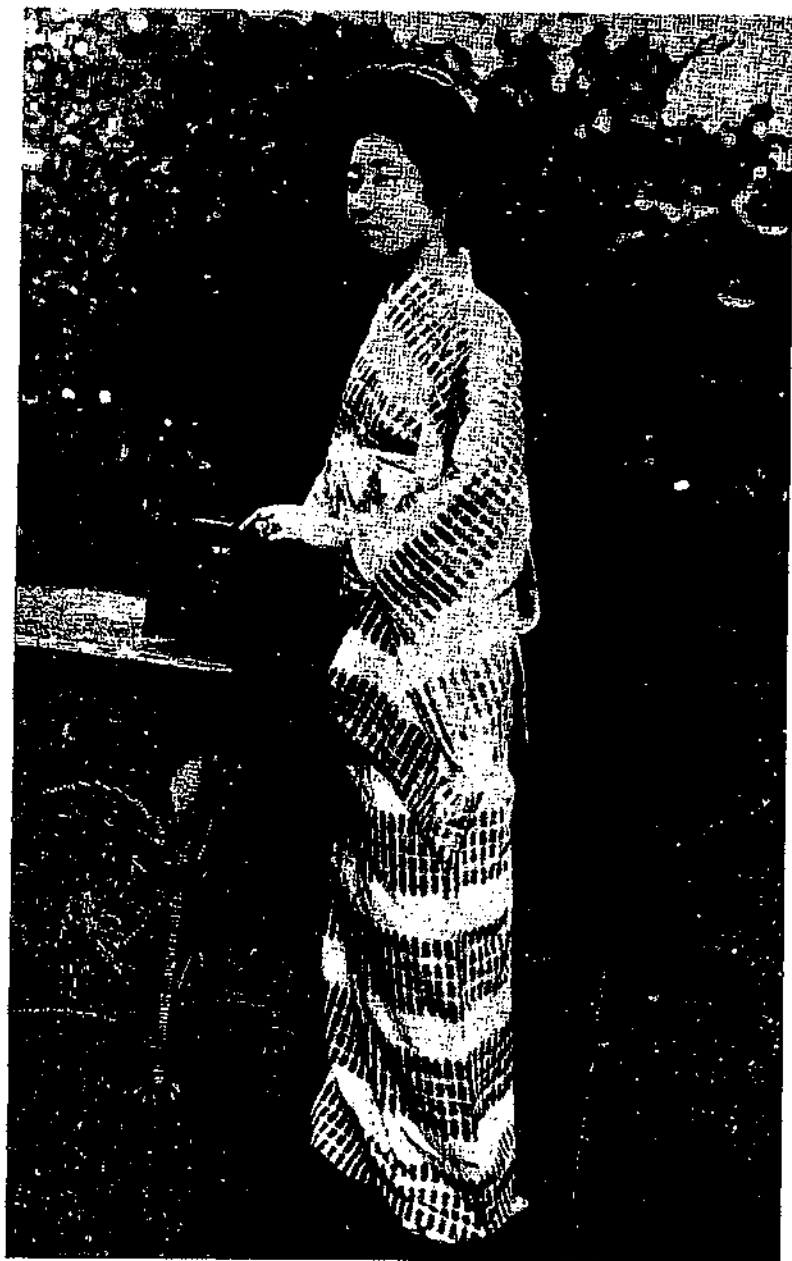
読売新聞1920年9月21日  
朝刊「表に裏のある信心の解  
剖、名のある宗教 名のない宗

教、稲垣未亡人の此頃」と題し  
た記事は、天理教、更には靈智  
教に凝る栄子を次のように描い  
ている。

「面白いのは稲垣未亡人で嘗て  
は日本一の美人として其美貌の  
為に却つて夫満次郎氏に名を為  
さしめた位の人だが美貌自慢の

何だ彼んだと随分噂に上つてい  
た中になつたり消息が無くなつ  
たと思ふと舞台は変つて今年は  
もう四十二といふ年になつてさ  
て又当年の外交官夫人が天理教  
の大信者と成つていふといふ噂  
が誠しやかに伝へられたのであ  
る。夫人のある知り合の人の話

によると夫人は満次郎氏が死ん  
だ上、たつた一人の子供が死ん  
で持病のヒステリーが益々烈し  
く浮世を厭がつたり孤独の生活  
が苦しさうな様子をしていふ  
へ誰が知らせたか天理教のお有  
難味、夫人は一も二も無く感心  
して御神楽歌をやるやうになる  
と今度は如何した訳か横須賀に  
住んでいる或る先生が非常に有  
難くなつた。今では赤坂丹後町  
の邸内に小さな出版工場を造へ  
て職工八名と外交員が働いて化  
粧品問屋を廻つてはペーパーの  
注文を取り之れを商売にしてい  
るが之れで喰はねばならぬ訳で  
も無いので夫人は天理教の方が  
一生懸命で絶えず横須賀へ出掛  
けたり先方から其先生がやつて  
来たりして教会などへは余り出  
入はしないが其熱心が度を越し  
ているとかで親類の人達も苦い  
顔をしているとやら。廿日記者  
が赤坂の邸へ訪ねると今日もま  
た不在で留守の人がおどおどし  
ながら『三日程前から横須賀の  
方へ参つてまだお戻りはありま



写真撮影する稲垣栄子

2011.8  
2011.8

せん、神様の御信心は本当です  
が近頃は少しごたごたしていま  
して親類の方も誰方もお見えな  
さいません、奥様は御不在勝で  
す、横須賀の先生もお出でにな  
ります奥様も始終お出掛けにな  
つて忙しいと見えて御泊りにな  
つて御帰りになる事もあります  
先生のお名前は申上兼ねます  
と云ふ。

上記記事には「たった一人の  
子供が死んで」と書かれている  
が、これは実子のことではな  
い。栄子が稲垣死後に貰った養  
子のことである。

財産もあり生活に困らない女  
性は、結婚してわざわざ苦勞す  
るくらいなら一人の方が気楽で  
よいという考えは、一定の共感  
を得られるかもしれない。しか  
し、栄子はこのような考えで再  
婚しなかったのではないよう  
だ。彼女は稲垣家の存続のため  
に養子を貰ったのである。

養子は、稲垣圭三郎（188  
2・1914）で、彼は明治15  
年江口五平の次男として肥前平

戸に生れ、「明治三十三年平戸  
中学猶興館を卒へて高等学校に  
進み、次いで東京帝国大学法科  
を卒業し法学士となり、明治四  
十一年稲垣満次郎の没後稲垣家  
に入つたのである。夙に菅沼貞  
風、石橋禹三郎等の雄図を景慕  
し、図南の志を抱いてゐたが、

偶々愛久澤某が新嘉坡に事業を  
起すに当り聘せられて其の帷幄  
に参画し、明治四十年彼地に渡  
航し護謨栽培、植林事業を開始  
し一意事業の発展に尽瘁してゐ  
たが、未だその大成を見ずして  
大正三年十一月七日新嘉坡に客  
死した。享年三十三。遺骨を郷  
里平戸に葬つた。（遺族、東京  
市麻布区筈町105、稲垣栄  
子）」（葛生能久著『東亜先覚  
志士記伝、下巻』黒龍会出版  
部、1936年、767頁）

1914年末に稲垣家の跡取  
りを失つた後、栄子は信仰に  
凝つたのである。栄子は、稲垣  
家の存続を諦めたわけではな  
く、その後も、稲垣満次郎の兄  
雄太郎の孫にあたる少女を養女

に貰おうとしたこともあったと  
いう。

『東京朝日新聞』1921年  
9月20日朝刊は、「稲垣未亡  
人が天華洋行の特売店、靈智教  
に凝つて」という見出しで「大  
本が衰頹するとその類派の皇國  
擁護団が鎮魂婦神の本家を名乗  
つて現はれる。かと思ふと靈智  
教が一部の知識階級を靡「な  
び」かして勃興しかけてゐる。  
議論は兎も角現代の社会現象と  
して興味がある。殊に靈智教信  
者には上中流の著名人士が多  
い。現に前暹羅公使稲垣萬（マ  
マ次郎氏未亡人栄子もその一  
人で今名古屋に滞在中先般大聖  
師渡辺薫美一行と満鮮旅行をし  
てからすつかり靈智教に凝り固

まり近く名古屋で天華洋行の特  
売店を開く相だ」。渡辺薫美  
（わたなべ・ただよし）は、仏  
教的皇道主義と評される靈智教  
の教祖である。

本誌の昨年11月号に、女流  
作家長谷川時雨（1879・1  
941）の『近代美人伝  
（上）』（岩波文庫、20・21  
頁）に栄子の名が挙げられてい  
ることを紹介した。岩波文庫の  
この部分は、長谷川時雨「明治  
美人伝」（『解放』、大鑑閣発  
行、1921年10月号、43  
6・455頁）を編集したもの  
である。この初出原文は次の通  
りである。

「わたしは此処に代表するに  
足りる明治美人の幾人かの名を

記さう。そしてその中からまな  
（マ）幾人かを選んで、短か  
い伝を記さう。上流では北白川  
宮大妃富子殿下、故有栖川宮妃  
懋子殿下、高倉典侍、現岩倉侯  
爵の祖母君、故西郷従道侯の夫  
人、現前田侯爵母室、近衛公爵  
の故母君、大隈侯爵夫人綾子、  
戸田侯爵夫人を数へることが出  
来る。東伏見宮妃殿下、山内禎  
子夫人、有馬貞子夫人、前田瀧  
子夫人、九条武子夫人、伊藤輝  
子夫人、小笠原貞子夫人、寺島  
鏡子夫人、稲垣栄子夫人、岩倉  
桜子夫人、古川富士子夫人の多  
くは、今日に語るべき人で、明  
治の過去には名をつらねるだけ  
であらうと思はれる」

即ち、岩波文庫版では、19  
21年（大正10年）の初出原  
文の送り仮名が現代風に修正さ

れ、また原文にない「新樹の  
局」の名が加えられている。そ  
の外に、大きな変更点は、稲垣  
栄子夫人らの多くは、「今日に  
語るべき人」という原文が、  
岩波文庫版では「大正期に語る  
人」に修正されていることであ  
る。このことは、長谷川時雨  
が執筆した、1921年10月  
の時点では、稲垣栄子を「今日  
に語るべき」美人として認識し  
ていたことを示している。即  
ち、長谷川にとつては、192  
1年時の栄子は依然として現役  
の美人ということになるのだら  
う。しかし、残念ながら時雨は  
栄子についてこれ以上のことは  
語っていない。

1921年は、筆者が探した  
限りでは、栄子の名が新聞に現  
れる最後の年である。読売新

聞、朝日新聞の2紙で検索する  
限り、両紙にはこれ以後稲垣栄  
子に関する記事は見当たらな  
い。他の新聞に栄子の記事が掲  
載されている可能性はあるが、  
両紙のような便利な検索システ  
ムがないのですぐには判らな  
い。

しかし、栄子は完全に忘れら  
れた訳ではない。10年後の1  
931年にとんでもない誤報  
が、ダイヤモンド誌に載ってい  
る。即ち、ダイヤモンド193  
1年6月21日号から7月11日  
号まで3回連載の「乾新兵衛と  
はどんな人か」が、乾新兵衛が  
後妻に元稲垣満次郎夫人を大正  
11年頃、西川某の周旋で迎え  
たこと、夫婦仲が良く、夫人は  
掘り出しものであったこと、夫  
人の弟の名は阿部純隆であるこ  
とを書いている。更に夫人は、  
乾新兵衛と阿部純隆が渡辺銀行  
の倒産に伴う渡辺倉庫事件で背  
信行為を理由に逮捕された時、  
救済に全力を尽くしたとも書い  
ている。

乾新兵衛（1862・193  
3、旧名、前田鹿蔵）は、現在  
の乾汽船、イヌイ倉庫等の祖で  
ある。神戸の大酒造業者であつ  
た先代乾新兵衛は子供がなかつ  
たので、新太郎と「より」（1  
859年生）をもろ養子に取つ  
て夫婦にさせた。しかし、新太  
郎が長女「あゐ」（1879年  
11月生れ）を残して死去。先  
代乾新兵衛は、奉公人であつた  
前田鹿蔵を「より」と夫婦にさ  
せた。間もなく先代が死亡し、  
鹿蔵は乾新兵衛を襲名した。彼  
は、銀行から見放された事業家  
に対する高利貸しとして成功し  
た。彼は、日本一の金貸しと  
も、近代日本の三大金貸とも言  
われた。

1928年の兵庫県下の所得  
査定額のトップ3名は、1位、  
住友吉左衛門140万円（所得  
税34万円）、2位、乾新兵衛1  
27万円（同30万円）、3位、  
岡崎忠雄50万円（同10万円）  
である（赤松啓介『神戸財界開



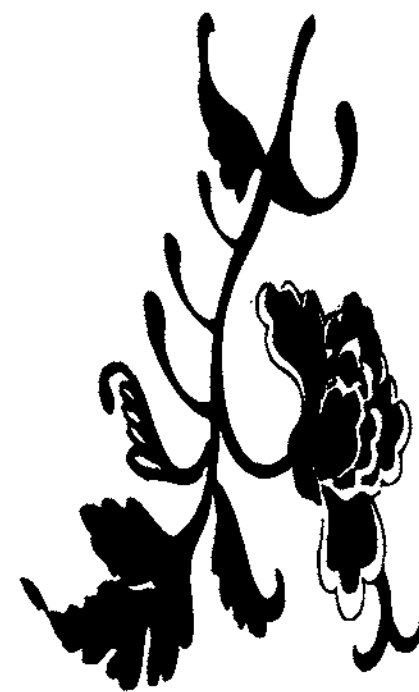


拓者伝』1980年、172頁)。ついでながら、岡崎忠雄(元神戸銀行頭取、同和海上火災社長、神戸商工会議所会頭)は、1936年3月27日に、神戸経済界で暹羅と貿易上関係がある企業(日本毛織、鐘淵紡績、川崎造船、三菱重工神戸造船所、三井物産、三菱商事など)が、神戸商工会議所内に神戸日暹協会を創立した際に、同商工会議所会頭として、神戸日暹協会会長に就任し(外交史料館「100/314」暹羅協会関係)、1938年から41年まで、毎年私費で10名のタイ学生を日本見学に招いた篤志家でもある。

乾新兵衛は後妻に「スズ」を迎えたことが判る。スズは稲垣栄子と名前、生年月日、兄弟姉妹など一致せず全くの別人である。以上からダイヤモンドに連載された「乾新兵衛とはどんな人か」にある、乾新兵衛の後妻は稲垣栄子という記事は全くのデタラメであることは明白である。これだけ根拠のない記事は、当然訂正されるだろうと、同年中のダイヤモンドを探したが、訂正記事は見つからなかった。当時は、新聞雑誌は未だ書き放題の時代であったようだ。ダイヤモンドの誤報を事実と誤解した経営史家小川功氏が、この記事を引用して乾新兵衛の後妻は元稲垣満次郎夫人であると、3〜4本の論文で書き、これらの論文はウェブ上に公開されている。ダイヤモンドの記事は、栄子とは無関係であり、その後の栄子を知る手掛りにはならないが、ウェブ上にある栄子についての誤った情報から誤解

が生じないようにここに取り上げた。それでは、栄子の墓所はどこにあるのだろうか。もし栄子が再婚していないならば、平戸最教寺の稲垣家の墓所にあるのではないだろうか。2010年12月、筆者は福岡への帰省の機に、平戸に足をのばしてみた。平戸は公共交通で行くには不便な所である。福岡空港国際線ターミナルから西鉄高速バスで佐世保駅前まで1時間40分。同地で乗り換えた西肥バスのローカル線で平戸桟橋まで低い山間を更に1時間半。乗継ぎを含めれば福岡から

4時間近くかかる。平戸は、松浦藩の城下町であり、17世紀初頭にはオランダ船やイギリス船が入り、それぞれの商館が置かれた国際貿易港であった。平地は僅かで、小さな平戸港の西側の山縁に海岸まで数百メートルの狹隘な平地が1キロ余り続いているに過ぎない。港の中央にある平戸桟橋から徒歩10分以内に、史跡名所は殆ど位置している。港湾の奥にある幸橋(市役所前)から500メートルほど西に歩けば丘の上の名刹、最教寺に至る。平戸は日本から中国に渡る海上交通の要地であり、入唐帰朝



←平戸の最教寺に稲垣満次郎が寄贈したタイの仏像「思惟釈迦牟尼仏」↓  
稲垣満次郎



した弘法大師(お大師様)が日本で初めて護摩を焚いた場所であるという。17世紀の初め松浦藩主が建立した最教寺は真言宗であり、お大師様の霊場であることから西高野山と称している。

同寺の霊宝館には、稲垣満次郎が寄贈した高さ40センチほどの「思惟釈迦牟尼仏」(金銅仏)が安置され、「思惟瞑想中のお釈迦さまである。この仏さまはシャムのアユチャにて発掘され明治三十五年初代シャム公使稲垣万(マ)次郎氏によって寄進された。約七〜八百年前の作といわれる」という解説が付されている。

霊宝館から両側に石仏群やお墓が並ぶ坂を数分間上ると、朱色の三重大塔の立つ奥の院に至る。稲垣家の墓地は、三重大塔に向かって左側の、横の生垣で囲まれた中にすぐに見つかった。掃除がよく行き届いている。十数本の墓石が立ち、多くは江戸時代の年号が刻まれている。

満次郎の墓石は、高さ1.6メートルほどの長方形の花崗岩で、表には「従三位贈一等稲垣満次郎墓」(満次郎ではなく満二郎と書かれている)と彫られている。裏面には小さな文字が浅く刻まれているようだが、風化と苔のために判読不能である。

栄子の名は、「稲垣家之墓」と刻まれた墓石の裏に8名の稲垣姓の物故者が刻まれている中に見つかった。「昭和四十一年四月十日卒、稲垣栄子」とある。戒名は付されていない。

ここに栄子の名を刻んだのは、満次郎の兄である雄太郎の息子、稲垣次郎氏である。次郎氏は、神戸高等商船学校教授から戦後海上保安教習所(海上保安大学校の前身)の初代所長を務めた人である。

栄子は夫の満次郎が死亡した1908年の58年後、1966年まで生き延び、稲垣家の一員として87歳の天寿を全うしたのである。

連載⑭  
バンコクの  
日本人

## 美貌の初代公使夫人 稲垣栄子 XI

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

稲垣満次郎・栄子夫妻には子

孫がない。栄子の遺品はどう  
なっただろうか。特に本誌の今  
年の2月号で紹介した、栄子が  
チュラーロンコーン国王から  
賜ったラッタナーポーン・メダ  
ルは現存しているのだろうか。

稲垣満次郎の兄、雄太郎の孫  
に当たる稲垣健一氏（1929  
年生、愛知県立高校の教職に長  
く従事されていた）の話では、  
満次郎・栄子夫妻の遺品は一番  
下の妹寺井幸子さんにあげたと  
いう。7月7日に、筆者は鎌倉  
に幸子さんを訪ねた。

幸子さんの夫君、寺井愛宕氏  
は、1987年7月から89年  
8月末まで第26代横須賀地方  
総監（海将）を務められて退官  
された海上自衛隊の高官であ  
る。愛宕氏の父君は、日米開戦

時に在ワシントン大使館で海軍  
武官補佐官であった寺井義守中  
佐で、戦後第4代横須賀地方総  
監（海将）から海上自衛隊幹部  
学校長ののち1961年に退官  
されている。一方、幸子さんの  
父君である稲垣次郎氏は、神戸  
高等商船学校教授から戦後19  
47年5月に海上保安教習所の  
初代所長に就任し、49年には  
初代海上保安庁次長に就任され  
ている。

稲垣次郎氏は雄太郎の次男  
（但し、長男は夭折したので実  
質上は長男）であり、その下に  
3人の弟があった。次郎氏の長  
男である稲垣健一氏は、祖父雄  
太郎のことは殆ど何も知らない  
という。

健一氏が聞いたところによれ  
ば、祖父の雄太郎は満鉄などの

株式に投資して大失敗して最後  
は破産し、平戸の家屋敷も失っ  
たという。そのためか、父の次  
郎氏は雄太郎のことを殆ど語る  
ことがなかったようだ。

多分、稲垣次郎氏とその母サ  
ダ（雄太郎の妻）に取材して書  
いたと思われる、葛生能久著  
『東亜先覚志士記伝 下巻』  
（黒龍会出版部、1936年、  
766・767頁）の稲垣雄太  
郎の項には、次のように書かれ  
ている。

「稲垣雄太郎、旧平戸藩士天  
野勇衛の長男。安政六年（18  
59年）肥前平戸に生る。『東  
方策』の著者稲垣満次郎は其弟  
である。幼にして父を喪ひ、弟  
満次郎と共に叔父本澤五郎の扶  
育を受け、稍々長じて玉置謙斎  
に学び、又た佐々村の時習館主

秋永桂蔵に就て漢籍を学んだ。  
桂蔵が時習館を閉すに及び去つ  
て鹿児島に遊学したが、西南の  
乱起るに会し長崎に赴き叔父山  
川景範の許に身を寄せてゐた。

当時薩軍の将士捕はれて長崎に  
護送せらるるもの多く、之れが  
監守の為に警官及び獄吏を募  
集してゐたので、景範の勧めに  
より雄太郎は警官に、満次郎は  
看守となり、囚徒の取締看守に  
従つた。雄太郎は当時青雲の志  
鬱鬱禁する能はず、乱後職を辞  
して露領浦潮（ウラジオスト  
ク）に渡航し、在留すること十  
数年、自ら商業を営み、時に或  
は西伯利亚奥地の探検に従事  
し、露国東侵の状況を観察調査  
するに努めた。その調査資料は  
弟満次郎の東方策論の参考資料  
となつたものが多かつたといは



スペインで撮影したと思われる栄子の写真（寺井幸子氏所蔵）

れてゐる。日清戦役後帰朝して沈没した支那軍艦の引揚を計画し、日露戦争に際して亦大に画策する所であったが、事志と違ひ爾來長崎に閑臥し、大正元年八月十六日病んで佐世保に没した。享年五十四。遺骨は郷里平戸に葬った。(遺族、神戸高等商船学校教授、稲垣次郎)

稲垣満次郎自身は、1892年に「家兄稲垣雄太郎亦夙に大に見る所あり浦留斯徳」ウラジオストク」に在留するもの茲に十三年 昨年五月露国の西比利亜鉄道に着手せんとするに際し大に其機を得たるを喜び起て其下受をなすことを結約せり 然れども故ありて果さず 予太だ之を憾む」(稲垣満次郎「西比利亜移民論」、新聞「日本」1892年2月15日号)と語っている。雄太郎と満次郎が1881年に一緒に撮った写真が残っている(平戸市史編纂委員会『想いの平戸』、1998年、120頁)。雄太郎はこの

頃、ウラジオストクに発ったのであろうか。

ウラジオストクの雄太郎は、1890年6月には、日本海で最初に操業した近代捕鯨船(捕鯨砲で榴弾付きの銃を鯨に打ち込み、ウインチで引き上げるノルウェー式捕鯨船)をロシア人の所有者から借り上げて、平戸周辺で捕鯨を行おうとして許可を同地の日本領事に申請したが、外国船を理由に却下されている(神長英輔「北東アジアにおける近代捕鯨業の黎明」、『スラブ研究』49号、2002年、57・58頁)。また、1905年8月19日付で稲垣雄太郎(住所は佐世保市松浦町)は、桂太郎外相に「日露事変に付損害御届、一金、六千八百式拾五円也(露貨六千五百留)右者明治参拾六年中旅順口に於ける露国海軍所屬船渠用之船舶付属品の内長崎市元馬込町石川鉄工所へ注文製作中明治参拾七年一月央其の老部成就仕候に付長崎駐



↑栄子がチュラーロンコーン国王から賜ったラッタナーポー・メダル →スペインで撮影したと思われる満次郎の写真(寺井幸子氏所蔵)

在露国領事を経て露国海軍旅順鎮守府に向け右に対する代金露貨六千五百留の送金を請求中開戦と相成前記の金額全部損失に帰し候に付此段御届申上候也」(外務省外交史料館、外務省記録5門2類17項、「日露戦役個人損害関係法律並に勅令に基づく救恤金関係雑件」)を提出している。

以上の例から見ても、雄太郎の諸事業はツキから見放されていたことは間違いない。

さて雄太郎の孫に当たる寺井幸子さんの話に戻ろう。鎌倉

で幸子さんにお会いすると、まず栄子のラッタナーポー・メダルとスペインで撮影したと思われる満次郎・栄子夫妻の写真を見せて下さった(写真参照)。満次郎の勲章などの遺品も残っていたが、夫が転勤族なので転居のたびに処分してしまった。しかし、このメダルだけは、小さいので女性にも装飾品として何か使い道があるだろうと手許に残していた、とのことである。メダルの由来も何も知らなかったが、今度筆者の原稿を読んで、初めて栄子がチュ

ラーロンコーン国王から賜ったものであることを知ったそうである。

幸子さんは、次郎氏の三女で末娘である。幸子さんが高校3年生か大学生になったばかりの頃、次郎氏が彼女を連れて目黒の鷹番町の栄子の自宅(一軒家)を訪ねた。その頃の栄子は今の幸子さんと同じ70歳代の半ばで、当時163センチあった幸子さんから見ると、大変小柄な人に見えた。親族が言うのもおかしいが、上品で美しい人であった。この訪問の理由は、栄子から次郎氏に末娘の幸子さんを稲垣満次郎家の養子にしたいという話があったからだろうと思われる。

次郎氏は、娘を養子にやるには栄子のところに相応の財産が残っていることが前提と考えていた。これは親としては当然の情であろう。しかし、栄子の回りには、取り巻きがいて、その中の一人は土岐さんという男性

であったが、彼等が食いつぶして、既に大した財産も残っていないように見えた。そのためか、或いは、大柄で活発な幸子さん(幸子さんは新人類のはしりだと自称された)が栄子のお眼鏡に適わなかったためか、養子の話は立ち消えになった。

幸子さんの夫が呉で勤務していた時代に、栄子は亡くなった。父の次郎氏が栄子の遺骨を平戸の最教寺の稲垣家の墓所に入れた。納骨の帰りに次郎氏が幸子さんに納骨を終わったと電話して来た記憶が残っている。

栄子が死亡した際に、次郎氏は満次郎や栄子の勲章、勲記、写真、大礼服などを貰っただけであった。娘一人しかいない長男の健一氏は、これらの満次郎夫妻の遺品は、夫が海上自衛隊に勤務する妹の幸子さんのところの方が、何らかの使い道があるかも知れないと考えて、幸子さんに与えたのだった。

※図からは日本人タイ研究第2号 岩手県です。



連載⑮  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 I

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

今号から取り上げる岩本千綱  
(いわもと・ちづな、1858  
年土佐生れ、1920年没)

は、本シリーズで書いた宮川岩  
二や稲垣栄子に比すれば、いく  
らか名の知られた人物である。  
彼の経歴についても、彼自身が  
書いた簡単なもの(本号後半に  
引用)を基にしたものが、既に  
3、4種類存在する。それにも  
拘わらず、敢えて本シリーズで  
取り上げる理由の一つは、従来  
は入手に大変な努力が求められ  
たために利用されることがな  
かった資料が、ウェブ上の情報  
の増大で容易にアクセスできる  
ようになり、より詳細に彼の実  
像を描くことができるように  
なったからである。

副題に「日本人タイ研究者第  
一号」と付したので、「研究  
者」と「第一号」に関して、そ

れぞれ説明を加えておきたい。

日本語で研究者と言え、  
少々堅苦しく聞こえるかもしれ  
ないが、英語で言えばリサー  
チャー、物事を丹念に調べる人  
の謂である。それによって給料  
をもらっているかどうかは問わ  
ない。研究者は、当然その成果  
によって他者や自己によって評  
価される。

もし学術研究であれば、その  
専門分野の学界で重要と見なさ  
れているテーマで、かつ先行研  
究にはない、新しいものを付け  
加えたものでなければ評価され  
ない。但し、文系の学界は一つ  
ではなく、世界、日本、タイな  
ど様々なレベルがある。もし、  
調査結果を本などにして販売し  
収益を目指すことにウェイトが  
あるならば、当然読者の関心に  
答えることが重要である。一

方、人様の評価を気にしなくて  
よい調査であれば、研究者(調  
査者)自身が調査依頼者の関心  
で重要性が決まる。20年ほど前  
に、ワシントンの国立公文書館  
で数ヶ月間調査をしたことがあ  
る。毎日、同館の開館時刻前か  
ら「リサーチチャー」と称され  
る、利用者数十人が入口に列を  
なしているのを見て、リサーチ  
の裾野の広さに新鮮な思いをし  
た。その多くは、全米から来訪  
した先祖調べの人たちであり、  
同館が保存する古くからの入国  
記録の中から先祖のアメリカへ  
の渡来時期を探ることを目的と  
していた。その頃の日本の公文  
書館利用者は、研究論文を書く  
教員か学生に限られており、公  
文書館は閑としていた。最近  
は、いくらか賑わっているようだ  
が、それでも日本各地の県が最

近作った県立公文書館の多くは  
依然閑古鳥の巣のようである。

岩本千綱の著作には、筆者が  
確認できただけでも、タイ関係  
の3冊の本と4本の雑誌論文が  
ある。その外に刊行されていない  
報告書や新聞記事なども少な  
くない。彼は、立派なリサー  
チャーである。

彼の3冊の著書(写真参照)  
とは、『暹羅(シヤム) 探検実  
記』(興文社、東京、1893  
年10月16日発行、134頁)、  
『暹羅老樹(ラオス) 安南三國  
探検実記』(博文館、東京、1  
897年8月30日発行、192  
頁)、『仏骨奉迎始末』(仏教圖書  
出版株式会社、京都、1900  
年7月21日発行、96頁、但し、  
大三輪延弥との共著)である。  
3冊とも国会図書館のHPから  
全文ダウンロードすることがで

きる。

日本ではタイを専門的に研究  
して月給をもらえる、大学や研  
究所の研究者は、タイ語の先生  
を除けば1960年代になって  
初めて現れた。月給取り(余談  
だが、サラリーマンのタイ語定  
訳は samut sein duan になっ  
たようで、最近ではテレビでし  
ば耳にする)ではない岩本

は、著書に売上収入と事業資金  
集めとを期待したようで、読者  
受けするような記述になっ  
ている。

研究評価のもう一つの基準と  
して、難易度がある。これは特  
に説明を要さないだろうが、仮  
にタイの政治経済の現状調査を  
例に取れば、英語文献だけに限  
るか通訳を使って翻訳させた文

献のみを使用する初歩レベルに  
始まり、文献調査だけではなく  
足で歩いた観察やインタビュー  
調査を加えたり、タイ語を習得  
してテレビ、講演会などの音声  
情報を用いれば、難易度のレベ  
ルは上昇する。更には、隣国の  
クメール語、ベトナム語、ラー  
オ語、中国語情報なども駆使で  
きれば一層上昇する。



岩本千綱

岩本がタイ語を十分に駆使で  
きたかどうか怪しいが、後述の  
ように明治12年に陸軍士官学校  
(陸軍士官学校旧制3期生)歩  
兵科を上から6番という優秀な  
席次で卒業した岩本は、英語は  
堪能であったようで、英語情報  
は相当吸収していることは著作  
の内容から読み取れる。また、  
タイで知り合った山本銀介をタ  
イ語通訳として実地調査を行っ  
ている。しかし、彼の研究評価  
は、難易度如何によってではな  
く、その内容の新しさによって  
なされるべきであろう。彼の研  
究の価値は、日本語によるタイ  
についての先行研究が存在しな  
いなかでのパイオニア研究であ  
ることである。

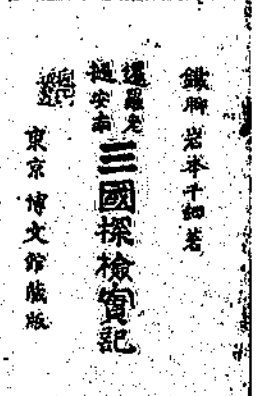
岩本の著作の前にも、タイに  
ついて書かれた日本語の書物が  
2冊は存在する。一つは、大島  
圭介・川路寛堂・河野通猷『暹  
羅紀行』(工部省、1875年  
8月刊、本書は、暹羅紀行、暹  
羅紀略(上・下)各54頁、74  
頁、124頁から成り、合計2

2011.10  
7月7日 2011.10

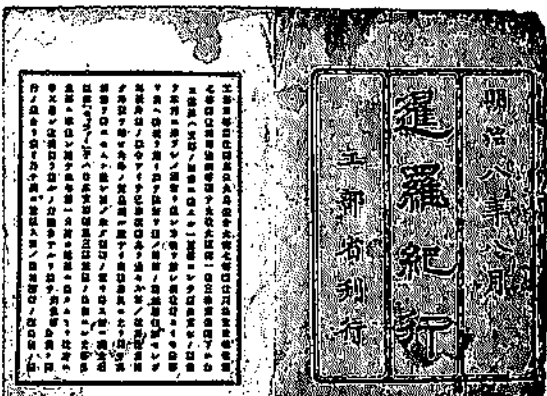


『暹羅探検実記』  
岩本千綱(著) 興文社  
1893年10月16日発行

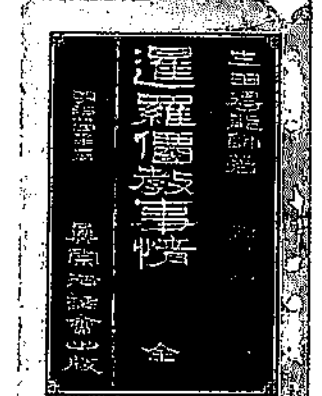
『暹羅老撾安南三國探検実記』  
岩本千綱(著) 博文館  
1897年8月30日発行



『仏骨奉迎始末』  
岩本千綱(著) 仏教圖書出版株式会社  
1900年7月21日発行 共著



『暹羅紀行』  
大島圭介・川路寛堂・河野通猷(著)  
工部省 1875年8月刊



『暹羅傳説事情 附生田得能自伝』  
生田(織田)得能(著) 真宗法話会  
1891年2月10日発行

52頁)、もう一つは、生田(織田)得能『暹羅傳説事情、附生田得能自伝』(真宗法話会、東京、1891年2月10日発行、87頁プラス16頁)である(写真参照)。大島圭介は幕臣で、函館戦争(五稜郭の戦い)のリーダーの一人、投降後明治政府に出仕し、日清戦争勃発時は、朝鮮公使であった人物である。織田得能は仏教大辞典などを遺した大仏教学者である。しかし、兩人ともタイ研究の期間に限られており、特にタイ研究を志向したわけではないので、本稿では岩本に「日本人タイ研究者第一号」の名を与えたい。さて、前置きが長くなったが、1897年の岩本自身の文章で、まず彼の経歴を見てみよう。

「余は原「も」と海南土佐の人 年十六歳を以て藩立海南学校に東京に遊び仏蘭西学を修む翌年陸軍幼年学校に入り士官学校を経て「明治」十二年卒業を軍人に置く明治廿年北越新発

田にあり其十二月余と親交ありし政客某氏保安条例に触れて都門を追はれ偶々帰郷新発田に遊ぶ 余一日氏に会し杯盤の間旧情を語る事上官に聞へ物議騒然終に停職を命ぜられ去て東京に來りしは翌廿一年なり尚此時東方の形勢漸く切迫し志士論客の意見を聞はす者到處に聳聽たり而して其言ふ処を聞くに大概座上の空論にして未だ嘗て實際的の論策を獻するものあるを見ず。余や資性疎放痛く小節に拘泥するを嫌忌し陸軍に在るの日も為めに屢々素行の修らざるを以て友人の忠告を受けし事あり於此平天賦の性は余を驅て東洋諸邦の漫遊を思ひたしめ而して輿地圖は先づ余に暹羅國を指示せり乃ち断然官を辞し東奔西馳同感の士を求るも不幸にして其志を得ず終に単独之に従事するの止を得ざるに到れり此れ余

切迫せる実況を説き我國の東方策上之を対岸の火災視すべからざるを談論せしも概ね冷笑を以て迎へられ甚しきは山師なり詐欺師なりとの酷評を受けるに到れり。然るに前田正名氏は余が微衷を憐み其厚志により幾多の商品見本を携へ再び渡暹の計画を為すに到り途次神戸にありて尚ほ見本を集む時に七月三十日飛報は余が耳を打てり曰く暹仏間の和議破れ仏艦三艘湄南河口の砲台を陥れ遂に盤谷に進入せりと余之を聞き驟然「けつぜん」起て行李を修め朋友に告げず親戚に協らず翌日出帆の仏船に乗り神戶港を抜錨し孤剣復た去て暹羅の國難に赴く到れば則ち媾和談判將に終らむとするの時なり仍て皇族大臣等を訪ひ來意を通じて大に厚遇を受け数月にして帰朝更に殖民通商の計画を為せり蓋し暹羅農相「スラサックモントリー」等の勸る処にして如此事業は余が短処にして到底自ら其衝に當り成功の無覚束を知れ共如何せん時機未だ熟せざるか有力にして経験に富

めるもの進んで之に従事するものなきを以て余は成算を期せず始めより一身を失敗の犠牲に供する覚悟にて事に此に従ひ以て適任者の出るを待ちしなり。廿七年十二月農夫三十名を率ひ神戸港を発す 先是余が金員を保管せしめたるもの窃に之を費消せしを以て香港迄の運賃を支払ひ殘金幾「わずか」に九円を懐にして途に上れり蓋し香港よりの運賃は同処に於て調達の見込あり万一手違ひとなる時は千圓の血と肉とを抵「かた」となし農夫は悉く盤谷に送らんと決心したればなり時に天向は余を棄ず香港に於て暹羅農相に邂逅し就て八百金を借り一行安全に盤谷に達するを得たり。翌廿八年農相より金数千円を借り殖民及び通商の要務を帯びて帰朝し漸く其目的を達して將に出発せんとするに際し不幸大患に罹り臥褥百余日此間盤谷に在る三十名の農夫は殆んど四方に散乱し通商の計画亦た随て破壊せり。廿九年余は日暹兩國間の通商条約締結及び盤谷府へ帝國領事館

設置の事に与り聊か其目的を達したり。同年東京の某々氏等暹羅國と貿易を開かんとし余をして其事に与らしむ仍て余は東道主人となり主任者某氏と共に盤谷に到る事成るに垂「なんな」んとして余は某氏等との間に意見の衝突を來し其結果終に相互の關係を絶つに到り随て計画亦た敗る。」(前出、岩本千綱『暹羅老撾(ラオス) 安南三國探検実記』2・5頁) 言い訳がましい経歴書ではある。

岩本の陸軍士官学校旧制3期卒業席次の前後の人物は殆ど將軍に昇進している。中でも有名な同期生は、秋山好古陸軍大將や上原勇作元帥であるが、彼らと肩を並べる可能性もあった岩本が、1888年12月に30歳で官を辞し、「山師なり詐欺師なりとの酷評を受」け、「十ヶ年の星霜を送りたる失敗史」の道を歩まざるを得なかったのはどうしてだろうか。彼が書いた履歴書ほどの程度事実なのであるうか。次回から検討したい。

連載⑩  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱Ⅱ

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

2011.11A  
7125-7 2011.11

前回、岩本が自著『暹羅老楊安南三國探検実記』（1897年8月刊）に書いた経歴を紹介した。この後、別人が岩本の経歴を書いたものもいくつかある。

例えば、①郷里の土佐で出版された、寺石正路『続土佐偉人伝』（1923年11月10日刊、高知、富士越書店、1986年に再刊）の304-305頁、②葛生能久『東亜先覚志士記伝、下巻』（1936年10月刊、東京、黒龍会出版部）の29-31頁、③復刊された『暹羅・老楊・安南三國探検実記』（1943年9月刊、名古屋、三三書院）219-252頁の作家堀場正夫（1906-1994）の解説、④中公文庫で再復刊された『シャム・ラオス・安南三國探検実記』（19

89年11月刊）191-215頁の金子民雄氏の解説である。

4書すべて、1897年までの岩本の経歴を、岩本の自著に依っている。それ故、岩本40歳までの経歴は、彼自身が記したものの以外は存在していないことになる。①は、1897年の三

國探検以降、岩本千綱が没するまでの経歴を次のように簡単に加えている。即ち、「千綱は「三國探検」より日本に帰朝し大に朝野の後援を得て日暹貿易の端緒を開く。中年以後壯志已まず暹南洋に往来し其探検の志を悉にす。大正四年東京大正博覧会の時同志と共に上野山上に南洋館を設立し土人を招き物産を列ね大に南國の事情を紹介す。明年七月京都に於て開催の博覧会にも再び同志と共に南洋館の設立を企図す。大正九年十二月

十九日食道癌を病んで歿す。享年六十三。著書暹羅老楊安南三國探検（マ）実記あり。長男正男後を受く」。1897年以後の岩本に關して、②④は、①の記述を下敷きにして

いる。ところで、①は岩本の没年と享年のみを明記しているだけで、生年については記していない。しかし、②④は、岩本の生年を安政5年（1858年）と書いている。これは①の享年63歳から逆算しただけのように思われる。岩本の正確な生年月日は不明であるが、彼の士官学校の同期生たちの生年からみて、岩本の1858年生まれば当たらずと雖も遠からずと言うことができる。

さて、岩本自筆の経歴と、①④の記述を比較すると、重要

な部分で一致しない所が「カ所」だけ存在する。それは、彼が官を辞すことになった説明である。

岩本自身は、前号に引用したように「明治廿年北越新発田にあり其十二月余と親交ありし政客某氏保安条例に触れて都門を追はれ偶々帰郷新発田に遊ぶ。余一日氏に会し杯盤の間旧情を語る事上官に聞へ物議騒然終に停職を命ぜられ去て東京に來りしは翌廿一年なり」と記すだけで、「政客某氏」の名を挙げていない。しかし、①になると「明治二十一年北越新発田聯隊に在り。此頃国内政論沸騰し民權自由の声天下を風靡す。同年十二月郷友馬場辰猪大石正巳等保安条例の爲め都門を逐はれ北越を流浪す。千綱己が寓に招きて酒を置て款待し旧情を語り互

に気焰を吐露す。事聞ゆ官千綱の軍職に在りながら自由主義論客と交り互に連絡する所ありとし職を免ず」と記して、馬場辰猪（1850-1888）と大石正巳（1855-1893）の名を明記している。しかし、馬場辰猪の名は直ちに疑問を生じさせる。馬場は明治19年6月12日に大石正巳と共に渡米のため横浜を發ち、そのまま帰国することなく明治21年11月1日にアメリカで客死している（『馬場辰猪全集、第四巻』、岩波書店、1988年、476-477頁）。明治20年であれ21年であれ、馬場が新発田に現れることは不可能なのである。このような創作が加えられているので、岩本の生地で出版されたとはいえず、①の記述の信憑性も疑わしくなる。②も①と同様にこの兩名を挙げたままである。

しかし、③になると、さすがに馬場辰猪の幽霊を登場させることの非を悟ったためか、次のように書いている。即ち、「二十年には北越新発田に在ったが、その年の十二月たまた大隈重信を首班とする改進黨に属する大養毅、大石正巳らが保安条例に触れて東京を追はれ新発田に來り遊ぶのに出会った。予てこれらの政客と親交のあった彼は、彼の自伝にもみるやうに一夕杯盤の間に旧情を語り、東亜の危局についても論ずるところがあつたらしい。それが動機となつて、後年この壯圖に身を投ずるに至る彼の天賦の性格は物議をかもし、翌二十一年に軍職を辞したのである」（同書、223頁）。ここでは、馬場辰猪の名は大養毅（1855-1932）と取り替えられているのである。

④は、③の記述を更に敷衍して、「この年「明治20年」の十二月、言論集會の自由、地租輕減などの要求を掲げて藩閥政府に迫つた事件があり、伊藤博文内閣はただちに保安条例を布告と同時に施行した。このため三千人近くが拘引され、五百七十名が追放された。東京を追はれた大養毅たちと、天皇の軍隊の將校たる千綱が酒宴を張つたというのは、それだけで時の政府や軍では許し難い犯罪だったのである」（同書、198頁）と述べている。

明治20年代の日本の政治は、政權を握る藩閥官僚政府が、言うことを聞かない民選國會を懲罰的に頻りに解散し、壯士や衆議院議員などをいとも簡単に拘束、追放を繰り返すなど、その政治弾圧の激しさは現今のタイの比ではなかったことはよく知られた事実ではある。しかし、大養毅の年譜を見る限り、明治20年末の保安条例施行時に拘引あるいは追放処分を受けたという記載は全く見当たらない。それどころか、大養毅の伝記には「勿論政府に味方する意志など氏「大養」にあるべき筈はないが、独自一己の主張に従つて狂躁運動を余所に見、伊香保に湯治中、東京の騒ぎを知つたのであつた。氏は保安条例に掛らなかつたのみならず、長い政治生活を通じて未だ曾て法網に掛つたことがない。其の訳は危激の言動を敢てなかつたからである」（鶴崎熊吉『大養毅伝』誠文堂、1932年12月刊、96頁）と全く逆のことが記されている。

抑も、岩本の自筆経歴の「政客某氏保安条例に触れて都門を追はれ偶々帰郷新発田に遊ぶ」という部分を素直に読めば、某政客は単数であり、この政客は新発田に帰つたのであるから、





1888年シャムの訪日教育視察団の写真

新発田周辺出身の人物でなければおかしいのである。①②④は、根拠を示して厳密に記述することが求められる研究書ではないので、岩本の物ぶりを示すために適当に潤色しても構わないということなのだろうか。しかし、事実が書いてあると思つて読む読者には、大変迷惑な話である。これらの書物に限らず、内外の学者がタイについて書いた最近の図書でも、事実の間違いは毎度のことである。他の商品ならば、当然回収返金義務を負うほどにひどい欠陥商品もある。社会科の教科書も例外ではない。筆者はかつて日本の某大手教科書出版社に頼まれて、地理、歴史の教科書の東南アジア関連の項目をチェックしたことがあるが、間違いが多いのに驚いた。

ところで、反政府派の政客と交流したことが、官を辞さざるを得なくなった理由であるという岩本の説明自体は事実なので

あろうか。それとも上辺を取り繕うための言い訳だろうか。岩本自身は、他の所でも同様の説明をしたようだ。例えば、原敬(1856・1921)

は、1893年5月7日の日記に次のように記している。「暹羅国より帰朝せりとて岩本千綱なる者来省す、元と陸軍中尉にて政党内閣係せりと云ふことにて退役となり、其後暹羅に赴き居りて同国の事情を物語る、板垣の知人なる土州人と云ふことに付面会せしも、如何なる人物なるや詳ならず」(原奎一郎編『原敬日記、第一巻』福村出版、1965年、211頁)。

岩本は1892年8月に初めてシャムに赴き、翌93年2月に帰国したが、その後、当時外務省通商局長であった原敬を板垣退助の知人と称して訪ねたのである。言うまでもなく原敬は後の「平民」宰相だが、彼を引き上げたのは陸奥宗光外相、さらに伊藤博文首相である。余談だ

が、稲垣満次郎の外交官としての出世を妨げたのは、この系統の人々であり、原敬日記には露骨に稲垣への悪口が書かれている。

また、1897年8月7日に岩本は、史談会においても「私は岩本千綱と云ふ者であります、全体私は軍人出身で明治七年陸軍幼年学校に這入つて其れから士官学校に移り、明治十二年に陸軍士官に成りましたが、二十一年に長官と意見の合はぬ事がありて官を辞し、当時より暹羅に眼を着け、二十五年始めて該国に渡航して爾来今日迄十回往復しました」(史談会『史談速記録』第59輯、1897年9月12日発行、78頁)と自己紹介している。

さて、岩本が説明した官を辞した理由は、事実だろうか。答えを先に言えば、超胡散臭いのである。

歩兵第十六聯隊(在新発田)小隊長陸軍歩兵中尉岩本千綱

は、1888年(明治21年)12月14日付で依願退職をした。ウェブ上の「アジア歴史資料センター」のサイトで、「岩本千綱」を検索すると、防衛省防衛研究所所蔵の陸軍省大日記に、この依願退職が記載されていることが判る。

更に、同一サイトで、退職に先立つ明治21年4月に、岩本の上官が彼を罷免したいという、次のような伺いを陸軍大臣に出していることが判る。

「士官進退の儀に付稟申「ひんしん」、歩兵第十六聯隊小隊長陸軍歩兵中尉岩本千綱

右者素行修らず所屬隊長等に於て屢々懇諭督責を加ふるも更に改悛の意を表せず為めに一身の榮譽を害ひ他人の信用を失し其職權の行はれざるは勿論一般軍人の体面を汚損するに立至り加ふるに家計困難居常「日常」負債に苦み其本職に注射すべき精神は盡て償債

「借金返済」区処の方術に汲々「うば」はれたるものの如し更に將校たるの本分に背き到底小隊長の資格を有せざる者と認定致す 依て相当の御處分相成度此段及稟申候也

明治二十一年四月 仙台鎮台司令官男爵佐久間左馬太 陸軍大臣伯爵大山巖殿

岩本は日頃素行が悪く、何度も注意しても改めず、加えて、借金で首が回らないため仕事に集中できず、小隊長の資格がないと上司に判定されたのである。素行が悪いということ、反政府派の人士との付き合いがある、と解することもできるが、次のような事実を見ると政治的

な問題よりも金銭関係の私行上の問題だと思われる。

上述の「アジア歴史資料センター」の資料によれば、1879年12月に士官学校卒業後東京で待命した岩本は、80年1月に熊本鎮台歩兵第13聯隊付けを命じられる。半年後の同年6月、熊本鎮台第13聯隊第3大隊の小隊長に任じられた。その後、岩本少尉は士官学校生徒中隊小隊長に転じ、更に84年3月には歩兵第2聯隊第2大隊小隊長に転じた。中尉に昇級した岩本は、歩兵第16聯隊(在新発田)小隊長に異動するが、ここで退職を迫られたのである。

同一サイトの「岩本千綱」検索では、「明治十四年度準備金増減報告付録、減債部歳出入訳書、大蔵省」の見出しで、次の

ものがヒットする。  
「一、金六百六拾五円六拾二銭五厘 雑損  
但購収公債証書の内高知県より買上たる土族岩本千綱所有の証書六百貳拾五円は当時詐偽「うそ」を以て買上げを請願したる事跡発見し其贓物「盗み」など不正な手段で得たもの」なるが為めに現品六百円及現品の存在せざる分は買上代償と又買上げたる時より返戻をなしたる時迄の利金を合せ高知縣裁判所の宣告に拠り同裁判所へ追徴せられたる分

右 相違無之候也  
明治十六年六月」(アジア歴史資料センター、国立公文書館、内閣、各省決算報告書、各省決算報告書・明治十四年度決算報告書)

上記資料の正確な意味は判然としないが、少なくとも、土族岩本千綱は、他人所有の公債証書を不正な手段で取得し、自分の物と偽って1881年に高知県に買い上げてもらったようである。

士官学校卒業後間もなくから岩本は金に困るようになったのであろう。岩本が借金まみれになった理由は、酒で身をもち崩したのか。他に浪費癖があったのか。或は小村寿太郎のように親の負債を引き継いで債鬼が役所にまで押しかけてくる状態であつたのか。勿論、本当のことは不明だが、三國探検実記には、上座部仏教に出家した僧形でありながら路傍の村民を騙して酒を手に入れた自慢話が随所

に書かれているので、酒も一因であつたことは間違いないであろう。

ところが、だらしなない将校任官後の岩本とは打って変わって士官学校時代の岩本は優等生である。上記サイトにある、明治12年12月19日に印刷された「明治十二年第一部生徒後季大試験考科表」は、同年卒業前の歩兵科(含む騎兵の3名)の最終試験を受けた65名(この内一人は卒業しなかったかその前に死亡したので、実際の卒業者は64名)の成績表である。学科、術科、躬行の3分野の合計点で順位が付けられている。1位は、山口圭蔵(1861・18932、最後は少将)、3位は秋山好古(1859・18930、最後は大将)、6位が岩本千綱である。岩本は学科7位、術科6位、躬行1位の成績である。躬行が実践性という意味であるならば、岩本の探検家としての素質が示されていると言えよう。

岩本の次の7位は石橋健蔵(1859・18927、最後は中将)である。

このように、岩本は歩兵(含む騎兵)の生徒中、上位の成績で卒業した。彼の席次の前後には、後に将官に昇進した者も少なくなく、卒業時の成績から見ると岩本は将軍になっても不思議ではないのである。もう一つ、岩本の特徴的な点は、士官学校入学以後卒業まで一度も罰を受けていないことである。65人中、罰を受けていない者は7名に過ぎず、上位者でも1番の山口は1回、3番の秋山は6回も罰を受けている。岩本は極めてまじめな青年であつたか、臨機応変に対処できる要領の良さを備えていたかのどちらかである。

とにかく岩本は1888年末、素行不良により依願退職という形で職首された。彼がシャムに渡航するのは、それから3年半も経ってからである。

連載⑦  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱Ⅲ

陸軍歩兵中尉岩本千綱が1888年12月14日付で「依願免本官」となったことは、読売新聞の同年12月19日号からも確認できる。

前号で岩本の生年が安政5年であるかどうかは定かではないと書いた。しかし、『高知人名辞典』(高知市民図書館、高知市、1971年)43頁の岩本千綱の項は「安政5年5月10日土佐郡初月村(高知市久万)に生まれる」と記している。同書の改訂版である『高知県人名事典、新版』(1999年9月発行、高知新聞社、高知市)は、「内容も検証に検証を重ね、正確を期し、また顔写真を徹底的に入れ、記録性を可能な限り追究した」というが、そこにも安政5年5月10日と記されている。これは現行のグレゴリオ暦では、1858年6月20日に当たる。もし、この生年月日が正しいければ、岩本は30歳半で退職し、34歳でタイに初めて旅立つ

たことになる。

岩本が1888年末に退職したのは、92年6月のタイ行きまでの3年半をどう過ごしたかは判らない。ただ、岩本は最初の訪タイから帰国した後、93年4月に明治21年(1888年)から暹羅(シャム)行きを考えて研究を開始したと、次のように語っている。「陸軍中尉岩本千綱氏は去る「明治」廿一年来暹羅国探検の念を起し欧書等に就て追々其の事情を研究せし末昨廿五年「1892年」七月中遂に同国に入り盤谷府にて同国の文部、農商務等の諸大臣に依り種々の調査を為し(新聞「自由」1893年4月6日号)。

当時の日本に、読むのに3年半を要するほどのタイ関係の欧書が存在したとは考えられない。彼の最初の単行本『暹羅探検実記』(1893年10月刊)に、明示的に引用されている欧書『The Statesman's Year Book (Macmillan, London)』(政

治家年鑑」と訳されている)の1冊に過ぎない。しかも、同書の1886年版、1890年版のシャムの項はわずかに5頁に過ぎないのである。

抑も、岩本は何故タイに関心をもったのだろうか。後には、彼自身もタイ行きの動機をタイの独立を救う志士的意図があつたかの如く説明しているが、次号以下に説明するように彼の支離滅裂な行動から見ると、到底それが主要な動機とは思われない。むしろ、常に金に不自由していた彼は、失職後タイで一攫千金のチャンスを狙ったと考えるのが自然であろう。それは次号に引用するように帰国後の彼の言動が、儲け口の話を中心にしていることから推測できる。

彼がタイに目を付けた一因としては、1888年前後より、タイに関する日本の新聞報道が増大したことを指摘できよう。1887年9月26日に東京で

早稲田大学アジア太平洋研究科教授

村嶋英治

調印された「修好通商に関する日本国暹羅国間の宣言」のため、テークウオン(1858・1923)外相一行が来日し、続いて、この宣言の批准書交換(1888年1月23日)のため、パーサコラウオン(1849・1920)大使一行が来日したが、この間各紙は彼等の行動を詳細に報道した。

テークウオン外相一行11名は、1887年9月15日に横浜着、翌16日入京した。9月26日に、日本側全権青木周蔵子爵(外務次官、なお外務大臣は伊藤博文首相が臨時兼任中)とシャム側全権テークウオン外相との間に、「修好通商に関する日本国暹羅国間の宣言」が調印された。一行は、同夜横浜からイギリス郵船デヘラン号に搭乗し、9月28日朝神戸着。同日正午大阪訪問、同夜京都泊。29日に神戸に戻り乗船、10月1日に長崎着、造船所を見学して帰路についた。

2011.12  
7月17日 2011.12



前列左端がバーサコラウオン

さらに、3ヶ月半後の1888年1月15日、ブラザー・バーサコラウオン大使ら9名が宣言の批准書交換のために横浜に到着した。1月23日に東京で批准書交換が行われた。

『修好通商に関する日本国暹羅国間の宣言』の前文は、「日本皇帝陛下及暹羅皇帝陛下ハ嘗テ兩國間ニ存在セシ友誼親睦ノ關係ヲ再起シ且ツ將來締結スベキ條約ノ基礎ヲ定メンコトヲ欲シシ」と述べ、宣言全文は以下の通りである。

「此宣言批准ノ日ヨリ以後兩國締約國間並ニ其臣民間ニ永遠無窮ノ平和ノ親睦アルベシ。兩國締約國ハ互ニ其朝廷ニ外交官ヲ派遣シ又最惠國領事ノ駐在シ得ベキ各海港市府ニ總領事、領事若クハ領事事務官ヲ置クノ權利ヲ承認ス。兩國締約國ハ可成る兩國間並ニ其臣民間ノ通商及航海ヲ奨励シ且ツ之ニ便宜ヲ得セシムルコトヲ約ス。完全ナル條約締結ニ至ル前ニ兩國締約國ノ一方ノ臣民通商又ハ他ノ正当ナル目的ヲ以テ他ノ一方ノ領地ニシテ最惠國ノ

臣民ニ通商ヲ許ス場所ニ來ル時ハ身体財産ノ保護及公平無私ノ待遇ヲ受クベシ。前陳ノ事件ニ關スル詳細ノ事項ハ兩國間將來ノ條約ヲ以テ之ヲ規定スベシ。此宣言ハ成ル可ク速カニ遅クモ調印ノ日ヨリ四箇月以内ニ批准シ東京ニ於テ其批准書ヲ交換スベシ。右証拠トシテ双方ノ全權委員ハ此宣言書ニ記名調印スル者也。明治二十年九月二十六日即チ陰曆クン年アサユジヤマース月九日暹羅曆紀元二千四百四十九旬九日西曆千八百八十七年九月二十六日

青木周蔵  
デヴァウオングセ」

（出所）外務省調査局編纂『日本外交文書、第二十卷』1947年、東京、186、189頁。宣言は『官報、第1372号』（明治21年1月28日）にて公布）

バーサコラウオン一行の任務は、宣言の批准書交換だけではなく、日本の教育、司法、軍事制度の調査も兼ねていた。当時の新聞から、1月15日に来日し、2月28日に神戸を發った一行の日程を要約すると以下のよう

うになる。

1月15日 深夜横浜港着グラン  
ドホテル泊  
1月18日 横浜から東京へ、鹿鳴館泊  
1月19日 伊藤外相（依然伊藤首相が外相兼任中）を外務省に訪問  
1月21日 皇居で天皇へ信任状・親書を捧呈、陪食叙職を受ける  
1月23日 午後2時外務省で伊藤外相と批准書交換、上野公園東照宮へ参拝し、博物館教育博物館動物園見学  
1月24日 大蔵省印刷局工場を視察  
1月26日 横浜から船で横須賀へ、造船所見学  
1月27日 青山練兵場で近衛隊分列式見学、夜は有栖川宮邸で晩餐  
1月28日 鹿鳴館で各皇族暹羅大使等を主賓として舞踏会が開かれる  
1月30日 午後6時頃より府下諸古道具及鳥屋等を招き種々の骨董鳥類等購求  
1月31日 皇居御造営場拝観  
2月2日 農商務省で各局課を視察、午後東京鎮台歩兵第三聯隊及び騎兵營で騎兵の各技術を

見学、夕方大山陸軍大臣が鹿鳴館で夕食に招待  
2月3日 夕、大倉喜八郎が向島の別荘に招待。伊藤榎本兩大臣、波澤益田伊集院等の諸紳士も列席  
2月4日 大使の付属官侍從補クオット、フンプライ氏は午前10時より通弁を伴い大審院で民刑の法廷を視察  
2月8日 午前10時より司法省及び大審院東京始審裁判所を見学  
2月9日 暹羅国書記官コーサラ氏は午前文部省を訪ね矢野文部属の先導で飯田町の高等女学校で授業を見学し同省へ帰り昼食のち高等師範学校等を視察  
2月10日 コーサラ氏外一名は午前永田町の森文部大臣邸を訪問し教育につき種々談話、その後高等中学を視察  
2月13日 大使は五名を同伴し参内皇帝（マ）陛下へ謁見  
2月14日 コーサラ氏は木挽町の高等商業学校付属商工徒弟講習所を訪ね同所の組織、授業科目等を詳細質問。帰国して同種の講習所を設立する目的という  
2月15日 東京発横浜へ  
2月16日 大隈外相（2月1日

就任）は、大使に暇乞いのため横浜に  
2月16日 コーサラ氏外一名は横浜から上京して文部省を訪ね近藤属と共に東京職工学校を訪問し生徒の授業、校則及び諸器械等を調べ横浜に帰る  
2月19日 朝イギリス船デヘラン号で横浜発  
2月22日 神戸から京都へ出発  
2月23日 近衛大佐サックダ、ウッド氏外一名はこの日も東京に滞在し陸軍士官学校戸山学校を訪ね軍人養成法等を調査  
2月28日 フランス船で神戸発帰国へ

これらの視察調査では、報告書が作成されたはずであるが、今日残っているのは、1888年5月22日付でバーサコラウオンがデーワウオン外相に提出した、東京農林学校（駒場農学校が1886年に改名したもの）と千住製絨所についての報告（タイ国立公文書館S.O. 1033.6）のみなのである。

1888年2月5日（日）鹿鳴館でバーサコラウオンはデーワウオン外相宛て文書を作成し、その中で青木周蔵外務次官との会話を次のように報告した。

青木が、何人もの日本商人がバンコクに店を開くためにシヤム渡航の許可を求めて来ている、と語ったので、日本政府はバンコクに外交使節が領事を設ける考えはないのかと質問した。青木は、「今のところ閣議で設置を協議する考えはない。というのは外交使節には大金を要するから。しかし、日本人がバンコクに居住するようになれば、日本政府は公使か領事を置くだろう」（タイ国立公文書館S.O. 1033.6）と答えた、と。

岩本は訪タイ直後からタイに公使館または領事館を置く運動の推進者となるが、88年1月23日の修好通商宣言批准後、日本政府が直ちに公館をタイに開設しなかった理由は、未だ在タイ邦人が少ないというものであったことが判る。

上記日程に登場する文部書記官コーサラ（1851・1935）氏の当時の正式官名はクン・ウオラカン・ゴーンソンであるが、ゴーンソンをローマ字書きするとGordonとなるのでコーサラと読まれたのである。彼等が東京滞在中に写した写真が、クルンテープの前月号に掲載されたものである。この写真は日タ



イ関係に関する現存写真として  
は最も古いものと思われる。

岩本は山本銀介と2人で、  
シヤム・ラオス・安南三国探検  
に出発したばかりの1896年  
12月30日夜コラート郊外で野  
宿中、地図、磁石、旅券、薬品  
などの貴重品を入れた袋を盗ま  
れた。岩本の三国探検実記によ  
れば、その際にコラート副知  
事であった子爵ピニサラに助け  
られた。ピニサラは、コラート  
氏が昇進して与えられた官名で  
ある。なお、ピニサラの官名は  
正しくは、プラ・ピニットサー  
ラー、官職名は副知事ではなく  
ナコンラーチャシーマー省内務  
官兼法務官であった。山本銀介  
は、タイ行きの船でコラートら  
と同船したので、彼と旧知で  
あったことがコラートで幸い  
した。

福島県出身で東京鎮台給仕の  
山本安太郎、名古屋出身の山本  
銀介の二少年、真宗大谷派僧侶  
の生田(織田)得能、真宗仏光  
寺派僧侶の善達法彦(よしつら  
・ほうげん)(廣谷俊之「高橋  
順次郎先生伝」武蔵野女子学  
院、1957年、205頁)お  
よび、日本で入手した2頭の馬  
の世話係である宮内省の馬丁  
(生田得能「暹羅仏教事情」25  
頁)の5名については判明する  
が、もう1人が判らない。「大  
使には我が国の少年三名を随行せ  
しめらるる」(東京日日新聞1  
888年2月2日号)という報  
道があるので、或は2人の山本  
の外に、もう1人少年がいたの  
かも知れない。

パーサコラウオン大使が日本  
人少年を伴って帰国した理由  
は、次のように報道されてい  
る。

「大使が此度雇入れ帰国の節  
連れ帰へらるる福島県人山本安

太郎氏(十五年七ヶ月)は目下  
大使の各地巡覧にも同車して随  
行し居る由なるが同大使が我が  
国の子供を雇ひ入れたる訳柄と云  
ふを聞くに帰国の上座右に召し  
遣ひて自からいふはより漸次日  
本語を習はるる為めにして又山  
本氏へは大使自から英語を教へ  
らるると云ふ又其雇入れ年限は  
五ヶ年にして月々六弗を給与せ  
らるる約なり」と(東京日日新  
聞1888年2月5日号)。

岩本のタイでの活動やタイ情  
報の収集は、パーサコラウオン  
について渡タイした2人の山本  
少年抜きには語る事ができな  
い。岩本は、92年7月の渡航以  
前に日本で山本の両親を捜し出  
し、バンコクの山本少年の消息  
を聞いて連絡したものと思われ  
る。何となれば、山本がタイ  
で、まず訪ねたのは、両山本が  
住むパーサコラウオン文部大臣  
邸であり、ここに岩本も居候し  
たのである(読売新聞1893  
年8月7日号)から。更に、  
パーサコラウオンの紹介で、ス  
ラサックモントリ農商務大臣  
の知遇を得たのである(朝日新  
聞1893年2月24日号)。

岩本にとって15歳ほど年下の  
両山本は貴重なタイ語通訳であ

### 泉新城

り、タイ知識の情報源でもあつ  
た。半年足らずの在タイ経験で  
書いた暹羅探検実記(1893  
年10月刊)の内容が、相当に具  
体的なことは、岩本自身の高い  
探求心の他に、既に5年近く在  
タイし、タイ語教育も受けてい  
た二少年からの情報が大きく  
与っていると思われる。特に山  
本銀介は、岩本の暹羅探検実記  
執筆時には岩本と共に一時帰国  
しており、岩本の動く辞書的役  
割を果たしたに違いない。山本  
銀介は岩本のタイ語通訳として  
三国探検に同行し終着地のハノ  
イで1897年4月21日に、病  
で急逝した。享年26。正に命と  
タイ知識を岩本に吸い取られ  
て、短い人生を終わったのであ  
る。一方、山本安太郎は銀介ほ  
どにはお人好しではなかった  
が、それでも岩本の様々な失敗  
事業に付き合ひ、明治末年には  
雲南省干崖(現在の地名は盈  
江)に、タイ族酋長の刀安仁の  
支援にも共に赴いている。

両山本は日本での教育が低  
かったためか、何らの著作も記  
録も遺していないようである  
が、彼らの貴重なタイ経験・知  
識は岩本の著作として残ったと  
いうことができよう。



連載 ⑧  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 IV

早稲田大学アジア金融研究科教授  
村嶋 英治

岩本の郷里、高知市で出版さ  
れていた『土曜新聞』1920  
年12月24日号は岩本の死亡を  
次のように報じている。

「南国の志士岩本千綱氏逝  
く、南国の志士岩本千綱氏本年  
夏頃から食道癌で府下千駄ヶ谷  
原宿八十番地の自邸に病養中だ  
つたが、病勢抄「はかばか」か  
しからず順天堂病院に入院加療中  
昨十九日遂に死去した。享年六  
十三歳。氏は陸軍士官学校出身  
で中尉として新発田部隊に駐在  
中明治二十一年秋馬場辰猪、大  
石正巳氏等民権党の同地に遊説  
するや身軍職に在りながら同党  
員を宿泊せしめ大いに政論を闘  
はしたと聯隊長の知る処とな  
り本官を免ぜられ幾許「いくば  
く」もなく

幾年か浪にただよふ捨小舟  
いづれ寄辺の岸や有らむ  
と常に高唱して快を呼びつつあ  
つた。……」

岩本が本館に送ったこの歌を  
高唱したのかどうか。この記事  
も前号に書いた馬場辰猪の幽霊

を帯ち出してゐることも事  
実、見えてきた。……」

浄土真宗大谷派の学僧、生田  
(織田)得能「1860・19  
11」は、岩本千綱の訪タイよ  
りも4年半前、即ち1888年  
2月末に日本から帰国するパー  
サコラウオン大使に同行してパ  
ンコクに往き、復路はチュラー  
ロンコーン王の実弟、パーヌパ  
ン(パーヌランシー)親王「1  
860・1928」の訪日に同  
行して1890年7月19日に  
日本に帰着した。

得能と同行した両山本少年ら  
の日本人たちは、パーサコラ  
ウオン邸に住み込んだ。岩本千  
綱も最初の在タイ期間(189  
2年8月から半年)を通じて、  
ここに宿泊した。岩本来タイと  
同時期に、3年契約でパーサコ  
ラウオン文相下の文部省に雇わ

れた4名の日本人面工たちも全  
期間をこの邸に住んだ。

パーサコラウオンは初期の日  
タイ交流の橋梁における最も重  
要な人物であつただけではな  
く、彼の館は多くの初期来タイ  
日本人にとってバンコクの住み  
処であつた。

批准書交換に訪日したパーサ  
コラウオン一行は、次の旅程で  
帰国した。即ち、1888年2  
月28日にフランス郵船で神戸  
を出発し、3月2日午前11時  
上海沖着、上海上陸後同日22  
時同地発、5日香港着、10日  
香港・バンコク間を往來する郵  
船「バオングセ」(テークウオ  
ン)号に乗り換え香港発、翌11  
日汕頭着、16日15時汕頭発、  
20日朝8時タイ湾のコー・シー  
チャン着、20時まで潮待ちを  
して、21日午前2時バンコク  
着、大使らはそのまま上陸し帰  
館、一方、生田得能らは朝まで  
船に残って税関検査を受けたの  
ち、パーサコラウオンの館に到  
着した。

得能は到着時のパーサコラ  
ウオン邸でのカルチャー・  
ショックを次のように記してい  
る。

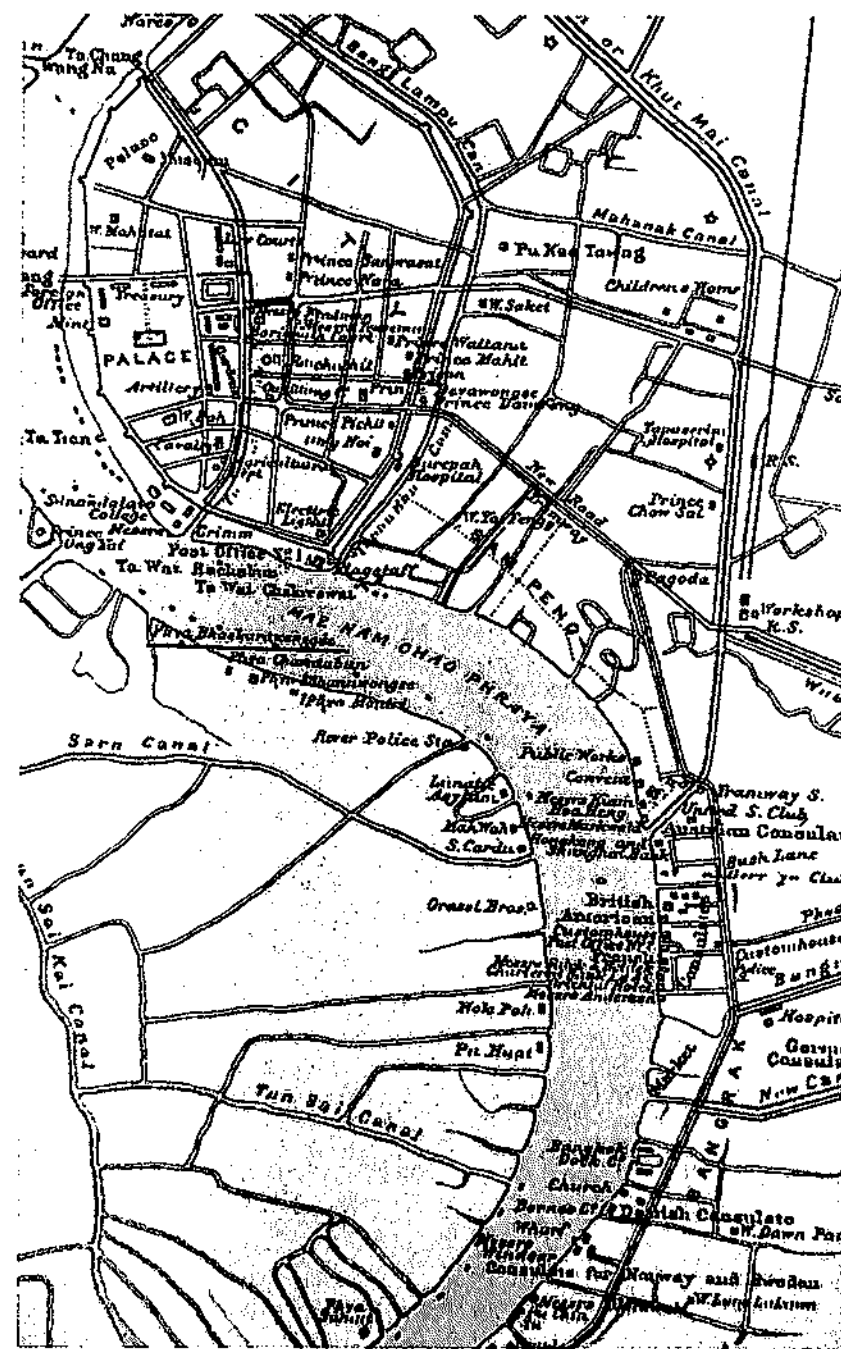
「さて日本を出でし時は「1  
888年」二月二十八日なれば  
余寒猶酷「きび」しかりし者  
谷に着せしは三月二十一日に  
して是れ當地に於て暑氣の最も烈  
しき候なりし故、熱に苦しむこ  
と非常にして殊に此日は朝飯を  
与へられず刺さへ三時間も税関  
の前に「たたず」ませたれば  
空腹の余り殊に疲労を覚へ正午  
大使「パーサコラウオン」の館  
に着せし頃は心気恍として酔へ  
る如くありしなり、而して生  
「得能」等案内者に引かれ館主  
の居間に至れば大使は板の間に  
盤坐し笑を含みて生等を迎へり  
生等此に坐を占めて一札を陳べ  
館主「パーサコラウオン」の傍  
を見れば一婦人の年四十位なる  
者の伏臥して両足を天に挙げ両  
手を以て額「えら、あこ先の  
意」を支へ而して両足を以てポ  
ンポン板の間を叩きつつ生等を

ケルテープ 2012.1  
7月テープ 2012年1月

熟視する者あるを見る 生等其誰たるを知らずして館主の顔を見れば館主は其婦人を指して「マイワイフ」といへり 生等驚て之に叩頭すれば婦人は無言に顔を上下せり 生等相見て然る「がいせん」たり 又見る一個の老女極めて肥太極めて醜惡殆

んど怪物の如き者裸体跣足僅に乳房と陰部を蔽ふて居間に入り来るを 而して館主は「マイシスター」といへり 生等此等の風を見て始て此国を嫌忌し輕蔑するの心を生ぜり 其より館主の命に依りて生等一同客殿に送られ其日二時頃始めて暹羅流の

供応に逢へり 其飯の如き極めて淡泊にして更に甘みなく其菜の如き肉に蔬に種々ありと雖ども何れも臭き香を付け強き脂を用ひ惣じて生等日本人の口に適せずと雖ども空腹の余り喜で之を食し了り其より家僕に導かれて館後の一大伽藍「プラーユラ



1888年のバンコク地図 (パーサコラウォン部は下線)

ウォン寺」に参詣せり 伽藍は館主の持ち分にして塔の高き堂の大なる 仏教の盛なるを示めすと雖ども落葉の果々たり生草の茂々たるは土風の不潔を徴するに足る 伽藍内洋風に建築せる小学校あり及び蒸氣機械を据へる印刷所ありて皆館主の所有に係る 之を一見し了りて館に帰り晚餐を喫して寝に就けり茲に一の幸なるは昼間の非常に熱きにも拘はらず夜分に至れば最も清涼なる風強く又此の如き極暑の候には却て一匹の蚊を見れば夜間窓を開て寝に就けば清風々々昼間の炎熱を払ひ尽し快く眠り得るなり さて翌朝に至り盥漱「手を洗ひ口をすすぐ」せんとして僕を呼んで水を乞ひしに僕は生等を導きて河辺に至り河に投じて浴す可く教へり 生等驚きて河を見れば濁流漫々極めて不潔時々人糞の流れ来たるを見る 何となれば総じて土人の尿は河に流れて之を造り小便大便「ことごとく」河中に垂れ流せばなり 河水の不潔以て思ふべし 然れども土人は更に之に頓着せず 館主を始め此水に浴し此水を飲むと雖も生等日本人の俄に堪ゆべき所にあらずるなり 然るに此に最も奇なる

は此不潔なる水も六七月の交河水大に減じて烈しく潮水を含むに至らざる已上は更に衛生に害あるの徴候を見ず 此水を飲む為に下痢を起す者もなく虎列拉「コレラ」を病む者もなきは生等の実験して疑はざる所なり 元来当国は非常に熱く其極室に在ても動もすれば百三度「摂氏38・39度」に上ることあり又非常に不潔にして其証民家の縁の下は大抵豚の住処たり 且つ上に述べたる不潔極まる生ま熱き河水を飲水と為「なす」にも拘はらず更に悪疫の流行を見ず 唯三十余年前一度コレラの流行を見しのみと云ふ 但し一種の悪疫とも申すべきはヒーパー即ち熱病なり ヒーパーは内外人を問はず一般の常病なり然れども盤谷地方に行はるる者は其性極めて柔に之が為に死を來たすこと甚だ稀なり且つ此には河水に浴するを以て最も良治方とし又毎朝未明に河水を灌頂するを以て最も好きヒーパーの予防法なりと云ふ」(生田得能「暹羅滞在の中の見聞」、『東京地学協会報告』第12巻6号、1890年9月刊、26、29頁)。

パーサコラウォンの館で、到

着当日の得能らに供された食事は、タイ料理ではなく、パクチーなどをふりかけた中華料理系のものが主であったように思われる。

ところで、昨秋の大洪水は、タイと水との関わりを改めて思い起こさせた。しかし、水辺や水上と深い関わりをもっていたタイ人の生活が、ここ20年くらいにうちに急激に川離れ、水離れをしてきたことも事実である。

1980年暮れに、筆者が家族とともにピサヌローク市中心部にあるワット・マハータート寺前のナーン河に架かる橋の上に立って、河面を見ると、水上に張り出した厠がずらりと並んでいた。同じ年の6月にナコンサワン市の市議員選挙の調査で、同市の有力者である現職の副市長の家を訪ねた。彼の家は、チャオプラヤー河岸のペー(竹製の筏の上に建てた水上家屋)の上にあった。土地の所有面積はどれだけでもかという筆者の問いに、副市長は「このように家も河の上にあるので、土地は全く所有していないと当然の如く答えた。」

81年3月、助手として雇っ

ていた男子大学生を、筆者がバンコク中心部に20年契約(承契約)で借りたばかりのエアコンなしのフラットに無料で長期間に泊めてやったことがある。彼は、厚かましくも安月給の筆者にエアコンを買ってくれとうるさかつた。エアコンを育て、家は河の上にあったので、涼風の中で生活するのに慣れており、都会のコンクリートの中ではエアコンなしには過こせないというのだ。その後、筆者自身が、このフラットでエアコンなしに断続的ながら20年間を過ごした。が、特別に暑い思いをしたことはない。暑ければ水をかぶれば快適だったからだ。しかし、エアコンの大衆化と水上、水辺生活の衰退とは因果関係がありそうだ。

1990年代半ばまではバン

コクのチャオプラヤー河上にもペーが残っている所もあったように記憶しているが、今は皆無である。ピサヌロークの一連の水上厠もナコンサワン市内の河岸を一面に埋め尽くしていた

ペーも、最早存在しない。タイ語表現の中にも、しばしば登場するペーを見たことがない若者が増え、そのうちにペーは死語になるかもしれない。

さて、得能のいうヒーパーとはマラーヤのことである。次号以下に述べるように、多くの明治期にタイ日本人がこれで命を落としていく。得能は、不潔な河の水を飲んで、コレラの流行は殆ど見られなさと述べているが、俄には信じがたい。というの、1950年頃までのバンコクでは、数年に一回の周期でコレラが流行していたという統計があるからである。得能が在タイした期間は、幸運にも流行周期の底に当たったのかもしれない。彼が日本に帰着したのは、1890年7月1日の最初の衆議院議員総選挙が終わったばかりの頃で、皮肉なことに日本各地でコレラが猛威を振るっていた。

ところで、現在のラーマ1世

王橋をバンコク側からトンブリ側に渡って直ぐの右手に高い仏塔がそびえるワット・プラユウオン寺とその河上の大伽藍ワット・カンヤナミット寺との間の、チャオプラヤー河に面した広大な一角が、パーサコラウオンの館であった。本号に掲載している、1888年のバンコク地図では、パーサコラウオン邸は、実際の位置より少し河下寄りになっているが、より詳細な1896年の地図で正確な位置が確認することが出来る。

パーサコラウオン「1849・1920」は、バンコク王朝創立以来高位高官を輩出した、名門大貴族、ブンナーク家の一員で、兵部卿ソムデット・チャオプラヤー・ブロマハー・プラユウオン「1788・1855」の末子である。異母兄たちには、チュラーロンコーン王（5世王）が即位後、成人するまでの摂政であり、同王をしのぐ勢力を有した長兄のソムデット・チャオプラヤー・ブロマハー・シースリヤウオン「1808・1883」、5世王時代初期の外務大臣チャオプラヤー・ティパーコラウオン

「1812・1870」、1885年にテールワウン親王が外相に就任するまで外相であったチャオプラヤー・パーヌウオン「1831・1913」などがある。

パーサコラウオンは、南タイのチュンボーンで生まれたことから、ボーンと名付けられた。6歳で父を失い、長兄に養育された。幼少より勉強好きであったという。15歳でイギリスに留学し英3年、1866年に長兄の子で兵部卿チャオプラヤー・スラウオンワイヤワット「？・1888」が訪欧使節として来欧した際に通訳を務め、この使節とともに19歳で帰国した。4世王が外国人との会話の通訳兼秘書として使っていたモーム・ラーチョータイ「1820・1867」、「ロンドン紀行」の作者としても著名」が1867年7月末に死亡したので、4世王は代わりにパーサコラウオンを通訳として使った。翌68年10月1日、4世王は崩御。少年チュラーロンコーンが5世王として王位を継ぎ、摂政として長兄シースリヤウオンが権力を振るった。この時、官吏たちだけではなく王族さえも、

5世王と内通して反摂政陰謀を企てている、と摂政から疑われることを恐れるあまり、5世王を避けた。しかし、パーサコラウオンは恐れずに国王を訪ねて親しくなった。

当時、タイ官吏で外国の制度を調査できるだけの英語力がある者は、彼だけであったという。それ故、5世王はジャワ、インド訪問に彼を同行させた。また、西洋をモデルとした諸制度、たとえば勲章、近習部、王族用英語学校、近習兵部などを、彼に調査させて作らせた。近習兵部は、後述するスラサックモントリの父が司令官で、彼は副であった。前者が死去した後、彼は司令官（中佐）に昇進した。

1873年に成人に達した5世王は、摂政に抗して王権を強化するため、立法院たる参議院と枢密院を創設するが、両制度創立の中心になった者もパーサコラウオンであった。その後、王弟が成長し、テールワウン親王、ダムロン親王など英語が使える人材が育ってきた。近習兵部司令官の地位も別の王弟のものとなった。彼は79年英総領事ノックスの事件で、英に派

遣され、事件処理を担当。この時に、国王秘書のポストはテールワウン親王のものとなった。テールワウンは1885年に外相に就任し、87年に訪英後訪日した。その間、パーサコラウオンは外相代行を務め、翌年批准書交換のために大使として日本に派遣された。日本から帰国後は関税局長、90年農務卿、92年文部大臣、同年、5世王のコーシーチャン島での保養の際のお付きの責任者、同年12月29日にはチャオプラヤーに昇格した（「チャオプラヤー・パーサコラウオン葬礼記念本」1922年、など）。

1880年代末までに摂政らの抵抗勢力が消滅し、同時に5世王の弟たちや息子たちが成長して、国政を担うことが出来るようになる。初期日タイ交流でも最も重要な役割を担ったパーサコラウオンとスラサックモントリという5世王初期の2人の功臣は次第に疎んじられようになった。1897年の第1回訪欧前後から、5世王はパーサコラウオン文相下の教育改革が遅れたことに不満を表明するようになり、遂に1902年に高齢を理由に退けた。

連載⑩  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 V

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

生田（織田）得能が1890年7月に帰国した直後に、東京地学協会で講演した「暹羅滞在の見聞」の一部を前号で紹介した。この講演は『東京地学協会報告』第12巻6号（1890年9月号）から第13巻2号（1891年5月号）まで、4回に分けて掲載されている。

岩本千綱が93年2月にタイから帰国して、同年4月16日に東邦協会で行った講演「暹羅談」が『東邦協会報告』第25号（1893年5月号）で出版されるよりも、3年弱も前に、生田の講演は刊行されているのである。

上記講演で生田は、単に自分の個人的体験を語っただけではなく、文献に基づいてシャムの解説を行っている。例えば、「暹羅滞在中の見聞」の後半部分は、イギリスの『王立地理協会報告』第10巻3号（1888年3月号）に掲載されたシャム政府の地図測量部長ジェームズ・マッカードのSi amと

題した講演を正確に翻訳して転載している。このSi amは、当時のタイの人文地理に関する最新情報であった。生田が、これを翻訳したのは、自分では踏査できなかったシャムの南部、北部、東北部の様子を知らせるためである。

このように生田のシャム記述は、相当に学術的である。筆者は、邦人タイ研究者第一号の称号を岩本千綱に与えたが、少々早まった感も免れない。

常光浩然『明治の仏教者、上』（春秋社、1968年）、332・333頁は生田（織田）得能の経歴を次のように書いている。

「織田得能は、万延元年（1860）十月三日、越前国坂井郡鶴村波寄（現福井市波寄町）、真宗大谷派「東本願寺派」甌香寺住職生田恵海の三男として生まれ、幼名を貞と云った。明治四年、十二歳のとき、大谷派福井別院の学舎に入り、翌明治五年三月には、京都本山

において得度を受け、真宗大谷派の僧籍に入った。明治十年十八歳のとき福井県師範学校に入り、同十二年同校を卒業して、直ちに同校および福井中学校の助教に任ぜられ、教鞭をとるかたわら富田厚積・滋賀有作について漢学を学んだ。

得能は生れつき一徹で頑固で、自分の主張を一步も曲げない性格であった。明治十五年、彼が二十三歳のとき、中学校長と意見を異にし、そのために中学校の教職を辞してしまった。そこで彼は京都にのぼり、高倉学寮に入って仏教を研究した。ところが京都でも長くおらず、明治十六年には越中国魚津「現富山県魚津市」の池原雅寿について唯識・俱舍を学んだ。

明治十八年には河内国葛城山「現大阪府南河内郡河南町」高貴寺に入り、四分律・大乘律を学び、慈雲の記録を披見して勉強した。それから再び池原雅寿のもとに帰って研究し、さらに伊勢の楷梯塾に学んだ。

明治二十年一月、彼は東京にやって来た。時に二十八歳。この頃、麹町の四番町に白蓮社を営んでいた島地黙雷の知遇を得て、その邸に寄寓した。ここに寄寓している間に、時間もたくさんあるので、黙雷と共に『三國仏教略史』三巻を約一か年で書きあげ、明治二十三年七月に、両者の合著として鴻盟社II哲学書院から発売した。正価六十五銭。これが、わが国において仏教歴史なるものの最初である。この著作は彼が東京において内外にその真価を認められる第一歩であった。今まで仏教の研究は主として訓詁注釈であったが、新たに歴史的立場に立つての研究は、この方面の先鞭をつけたものとして特に注意に値する。……

明治二十一年になると、シャム国全権公使（ママ）ビヤルバスIIオングス「プラーヤー・パーサコラウオン」氏が帰国するので、福井県足羽郡社村南江守「現福井市南江守町」、仏光寺



派仏照寺住職善連法彦と共に、同公使に従ってシヤム国に遊び、およそ三年間にわたり、南方仏教の事情をつぶさに観察した。その見聞の概要は、彼の著書『シヤム仏教事情』にくわしく記してある。これを讀むと、今から七十余年も前の見識として、まことに敬服に価するものがある。

彼は明治二十四年三月十九日、東京浅草松清町にある真宗大谷派所属の宗恩寺に入寺し、同寺の娘織田千代子と結婚し、ここに織田得能と改めた。得能は多数の仏教の著作を出すとともに東本願寺組織の中でも出世したが、同組織の権力者石川舜台と衝突して一時的に学階も住職のポストも剥奪され

たこともある。東大の哲学教授として著名な井上哲次郎の勧めで、明治32年4月から独力で『仏教大辞典』編纂の事業を開始した。常光浩然は、仏教大辞典完成にかけた得能の凄まじい執念を、中津の耶馬溪に青の洞門を掘った僧海と対比しながら次のように描いている。「まず編



『通羅仏教事情』掲載の生田得能と思われる僧侶

集の場所は、いろいろの雑音にさらたげられることを恐れて、自分が住職している宗恩寺裏の土蔵の二階を選んだ。土蔵の二階を二つに仕切つて、一方は彼の編集室、一方は火鉢と茶器を置いて休憩室と定めた。室内は薄暗く電灯がない。窓が小さいので読書も十分できぬ。しかし彼はこの方がかえつてよい。あまり明るい気が散るからといって、小さな窓際に机をおいて、電灯はついにつけなかった。そうして千代子夫人のほかに、一切ここに入出入を禁止した。寺の法用は、多田という役僧をおいて、これに一切の法務をまかせ、彼は葬式にも説經にもめつたに出かけなかった。だから檀家の中には彼の顔を知らぬものも少なくなかった。檀家のもので、のち彼が死んだとき、非常に偉い坊さんであつたことを、新聞で知つたという話のこつている。こうして彼は、夜となく星となく、一切経はもちろん、あらゆる仏書をあさつて、語彙を抜きだすことを始めた。そうして一語一語、毛筆で和紙に走り書きで原稿にしたためた。星は小さな窓のもとで、夜は旧式のランプのもとで

筆を進める。食事のために下におりて来る時間が惜しい。下へおりるのは便所に行くときだけで、三度三度の食事は握飯にして、千代子夫人が彼の机のそばへそつと置くのがおきまりである。なにしろ独力でやるのであるから、寸時も惜しい。全く昼夜を忘れての努力であつた。二、三日おきに、夜になると付近を散歩するのが唯一の運動である。……こうした状況が、二年、三年、四年とつづいてくると、いろいろの故障が起る。まず第一に、本人の精神状態がいらいらしてくる。目はおちこちで、異様な光を見せるようになる。全く辞書に憑かれた鬼のようになつてきた。……仕事はいよいよ進み、原稿も九分九厘という時になつて、彼はついに倒れた。明治四十年の夏、脳脊髄炎という病名で巣鴨脳病院に入院したが、その後病は癒えず、病院でいつもたわごとをいう。それは仏教事典のことばかりである。時々彼は正気に返ることがあつた。多情多恨の彼は、万斛の涙を流して泣いた。この畢世の大事業の完成を見ずして死んでゆくことは、彼にとって耐えられぬ悲しみであつ

た。よつて彼は、後事を上田万年・芳賀矢一・南条文雄・高橋順次郎の四博士に頼んだ。四博士は彼の心情を汲んで、後事は四人で引き受けること約束した。これを聞いた彼は感激の涙を流して喜んだ。こうして彼は、明治四十四年八月十八日、青山脳病院で、さびしく死んでいった。時に年五十二歳。……織田得能没後六年目に当たる大正五年に、この『仏教大辞典』はようやく世の中へ出ることになつた。本文は索引とあわせて2108ページ、口絵116ページ、しかも世界最初の完全な仏教辞典で、質・量・語数・正確さ、いずれも遜色のない膨大な豪華版が出版されたのである。

常光浩然は、『通羅仏教事情』（1891年2月刊）を「今から七十余年も前の見識として、まことに敬服に価する」と評している。同書は、タイ仏教の實際を観察し、その厳格な戒律に感動した得能が、彼のよく知る日本仏教と比較しながら、タイ仏教の教義と実践とを説明したものである。本書は、現在では、今から120余年も前に書かれたものとなるが、筆者の見たところ、今日まで邦語で書かれたタイ仏教のどの解説書やどの研究書にもまして要を得ていると思われる。ただ、不思議なことは、数ある日本人タイ仏教研究者が、本書を全く引用したことがないことである。

生田と同郷（福井市）で、生田のシヤム行きに同行した善連法彦（よしつら・ほうげん）は、シヤムに留まること半年にしてセイロンに赴いた。善連の印度留学を紹介した朝日新聞の記事は、次のように記している。「『善連法彦』師は越前の入にて真宗仏光寺派の僧、早くから東京に出で哲学を研究して居つた。明治二十一年春暹羅の全權大使帰国の際に師は友人人生田得能氏（今の織田得能師）と手を携へて大使に随ひ暹羅に渡り盤谷に滞在すること半年許其間専ら暹羅仏教の研究に従事したが、更に小乗仏教の最盛地である錫蘭（セイロン）に留学を思ひ立ち生田師と袂を分ちて同島に渡ることとなつた。生田師は其後も暹羅に留まること二年許、帰朝後『通羅仏教事情』の著があつたことは人の能く知る所である。錫蘭に渡つてから

と同様にパーリ語や英語を学びつつ、上座部仏教を研究したものと考えられる。

タイ留学以前においても日本各地で研究した得能の和漢の大乗仏教知識は、広くかつ深いものであったに違いないが、タイ留学によって新たにパーリ語や英語で、上座部仏教文献を学び、文献を持ち帰ったことが、彼が畢生の大作『仏教大辞典』を編集する際に役立ったはずである。

彼は、バイ・ラーン（貝葉もしくは貝本と言われる）に刻まれた南伝大蔵経を日本に初めて請来したことを、次のように語っている。

「パーリ語はサンスクリット語の如く本来固有の文字を存する者にあらず、各国到る処の地方に随て、其地固有の文字に依て、其音を写されし者なれば、錫蘭緬甸「ビルマ」老婦「ラオス」暹羅等、各国到る処、其字体を異にするなり、即ち現今暹羅に用ゆる所の巴理「パーリ」

語の文字は、東藩塞「カンボジア」国の文字にして、暹羅には一種固有の文字ありて、一般通用するにも拘はらず、其経文は皆東藩塞國の文字に由て記せし者なり、之に由て説をなす者あり、暹羅の仏教は在昔東藩塞より伝來せし者ならんと、而して之を記するに、惣て多羅葉を用ゆ。

貝「バイ」は葉の義にして多羅は樹の名なり、暹人は之をラン「ラーン」と稱す、隨て其葉をバイラン「バイ・ラーン」と稱するなり、樹の形標欄「シジュロ」に似て、熱帯地方の山林に生ぜり、其葉を長二尺幅二寸位の長方形に断ち、鉄筆を以て文字を表裏両面に刻み、後に墨汁を注入するなり。

其葉至て堅密にして、能く久しきに堪へ、最も不刊の文字を刻するに適せり、蓋し聖語を記するに、必ずしも貝葉を用ひし者は、敢て紙片なきにあらず、當時已に紙片ありしことは、經文上の証あり、然れども一は之

を鄭重にすると、一は保存に好きとを欲してなり、故に今日に至るも、貝葉の価値貴きに拘はらず、經典は惣て貝本に限り、寺院に至れば、沙弥淨人（淨人とは寺内に居る俗人を云ふ）孜孜として写刻するを見る、而して一般に之を売買するを禁ぜり、蓋し亦た法宝を重ずるの至りなり、余は幸に六十余帙の貝本を得て歸り、之を我祖山に納る嚙矢也」（『暹羅仏教事情』56、58頁）。

シヤムから帰国する時の様子を得能は次のように記している。

「長老スハダは余が師なり、余盤谷を去るとき、長老余に賜ふに一軀の釈迦像を以てし、告げて曰く、此佛は老嫗國より傳來せる古仏にして、余が年來の念持仏なり、今汝に与ふ、汝能く之を供養せよと、而して且つ我れ聞く日本國は地美にして人衆「おお」く、且つ仏教甚だ盛なりと、然れども其伝ふる所の法を聞くに、惣て末世の似法にして在世の正法にあらず、僧侶にして妻を帯ぶ、是れ尚正法なりと思ふや、仏徒にして酒を飲む、是れ又正法なりと思ふや、

想ふに汝が國に眞の僧宝なし、其所謂僧侶なる者は、只仏教師の分齊にして僧侶の名を付すべき者にあらざるなり、好「よ」き日本、人衆く法盛なり、獨り其法の正しからざるを惜む、嗚呼我れ往て法を興さんか、我年將に五十ならんとす、而して体強く氣壯なるは、汝の知る所なり、尚能く興法弘宗の任に當るに堪ゆ、汝意あらば國に歸て之を周旋せよ、汝が國は辺地に属す、五人の比丘あれば以て人を度するに足る、汝若し可なりと云ば我直に四人の比丘を率て骨を東海の絶州に埋めん、且つ我れ汝に一の願あり、聞く汝年已に三十に至るも、未だ妻を帯びずと、是れ半生妻なくして過ぎしなり、敢て請ふ尚半生妻なくして過ぎよ、我れ汝が学あり才あるを知る、若し汝にして正法に志あらば何ぞ法の興らざるを患へん、是れ余が願なり」と（同上書、83、85頁）。

得能の師は、得能を通じて日本に上座部仏教を伝えようという一大決意を語ったのである。しかし、得能はこの本出版後、1ヶ月余で真宗の寺に婿入りして住職となった。

連載②  
バンコクの  
日本人

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 VI

村嶋英治

1888年12月に陸軍を辞めた岩本が、タイの土を踏んだのは、生田（織田）得能らに遅れること4年半、92年1月である。

岩本は、在タイ半年にして早くも93年1月には、同地を発ち、2月17日に神戸に帰着した。

朝日新聞1893年2月24日号は、「暹羅の殖民、秋津商会」と題して、岩本の話の次のように報じた。タイ専門家としての岩本千綱のマスコミ初登場である。

「先に暹羅行をなせし有志者岩本千綱氏（休職陸軍歩兵中尉）は愈去る十七日神戸に着し翌十八日大阪に入り昨夜帰京せしが今氏が其友人に語れる要略を伝聞するに暹羅に入りし以来夫（か）の文部大臣バスカロン「バーサコラウオン」侯の紹介にて農商務大臣陸軍中将モントリー「スラサックモントリー」伯と北部殖民の事を約し陸軍大將たる皇族其他貴族の賛成を得たり 約せし所は荒地四百坪

に対し年租二十五銭を払はば灌漑に供する溝渠の開鑿等諸種の耕作準備は農商務省負担して之を貸さんといふに在り 又暹羅建築会社（ビルジングコンパニー）に技師たる佐々木寿太郎、文部大臣秘書官山本銀介氏と謀りて秋津商会と称するものを此國に設立する事を定め右建築会社に創立事務所を置き政府より文部省用諸器具官内省用色染縮緬等売込の約、建築会社よりチーキ材（軍艦の艦底に用ふるものにて此國に産するを良品とす我國にて曾て栽培せしも地味適せざる故か生育せず）朱檀黒檀等買入の約も成りチーキ材朱檀黒檀其他諸材象牙水牛角、皮其他皮類の見本を持來れり而して右殖民の事に至りては形勢上極めて有用なるを觀察し得たりとのことなり 左に出すは文部次官ウージ伯が自署して岩本氏に渡せし文部省用達命令書の訳文（新嘉坡領事齊藤幹氏の訳）なりとぞ

当省大臣は此書面を以て今後

本省に於て要する所に日本物品求用方を紳士足下に命じたることを証明す」

スワルトの名は、バンコク・タイムズ刊の「1894年版バンコク・シヤム年鑑」184頁に、Swarat Seet N. Swarat & Co. and architect, N. Swarat & Co. と記されている。イタリア人なのに、どうして佐々木姓なのかは不明であるが、建築技師の佐々木寿太郎（三重県出身、1910年5月バンコクで死亡）と親戚関係があるのかもしれない。

次いで岩本に関する記事を載せたのは、新聞『日本』1893年3月25日号である。岩本の名は誤記ながら、「暹羅貿易事情」と題して次のように述べている。

「岩下細干（ママ）と云へる人有り 去る廿一年以来馬來（ママ）、暹羅等の東洋諸國を巡回視察し先般暹羅在留山本安次郎氏外二名と共に暹羅國に秋津商会なるものを設立し同國文部農商務二省が需用する日本製

品の御用開きを約したる由 同氏は今回一旦帰朝し去る廿日神戸商業會議所に於て日、暹貿易を演説したり 其要旨を録すれば左の如し（神戸通信）

暹羅へ輸出し最も有益なるは漆器、陶器、織物、刃物、鉄具類、畳表、蝙蝠傘、傘及び靴等、彼の地産にして外國へ輸出し有利なるは紫檀黒檀木材象牙角烟草其他天然物、元來暹羅國は通貨少く下等民は固より貴族の富巨万を有するものも公益を謀るものなし 故に道路橋梁皆不完全にして不便なり 然るに自身一己の爲めに費すは甚だ多く室内の裝飾衣服等凡て贅沢を極む 其性質は愚にして物品を買ふには品質等は敢て料らず其値段の如きは自己の意の向ふ所なり 故に其機を窺て売込めば利益莫大なりとす 軍艦は僅に八隻、陸海軍兵は五六千又航海事業は不振、人口は一千余万、彼の地と貿易をなさんには豪膽にして言語に通じ忍耐に富める者を適當とす 又同國には商賈の期節ありて一月一日（即

2012.3  
711-7-7 2012.3





版」を出品している（東京国立文会財研究所編『明治美術展覧会出品目録』、中央公論美術出版、1994年、9頁）。彼は、兄の大山周蔵（1892年刊の『懷古東海道五十三駅真景』の画工・印刷・発行人。大山印刷所を経営）とともに、明治初年に玄々堂門人として技術を磨いた。

従来日本の紙幣（藩札）は、模造されやすい木版印刷であったが、明治初年政府は精密印刷ができるので模造が難しくなる銅版印刷による太政官札の印刷を採用し、玄々堂に依頼した。それでも、間もなく偽造が増加し、玄々堂は紙幣の彫刻印刷から撤退させられた。それ以降、玄々堂はより精密な印刷が可能で、写真は写真面では優れていたが、画像のサイズは小さく、変色しやすいだけではない。印刷することができなかった。石版の画像は、大サイズ、堅牢、着色可能なうえ、印刷による多

量複製ができた。石版では、洋画家の作品、有名人の肖像、風景などの一枚物が印刷された。また、日露戦争ごろに写真製版が実用化し新聞等に写真を印刷できるようになるまでは、新聞の報道写真に代わるものとしても高い需要があった。

大山翠松（兼吉）の経歴を最も詳しく紹介したものとして次のものがある。

「大山翠松…大山周蔵の弟で前名志田兼吉。玄々堂で山本芳翠に師事し、松翠の号を受け、明治18年の『人名鏡』に、画工客席に名前（志田兼吉）が見える。明治12年玄々堂版『芝中御蔭之松真景』に志田松翠と記しているが、のちに翠松に改名。芳翠と合田清の帰国（パリから1887年に）により、生巧館に入り、泰錦堂にも技術に關係すること多く、明治20年末広鉄腸訳『雨中花』挿絵、22年毎日新聞『憲法発布図』、また23年『谷間の百合』挿絵にK0（大山兼吉）イニシャルをのこ

す画家と言われるが、異論もある。26年（マ）タイに渡りこの地最初の石版印刷業大山商會をつくり、大正10年頃帰国して貿易商を営んだが失敗し、まもなく鎌倉にて病没した」（神戸市立博物館編『描かれた明治ニッポン』石版画（リトグラフ）の時代、解説図録研究編、興文社、2002年、307頁）。

本シリーズの一番最初に、大山商會主になった宮川岩二を紹介したが、大山翠松とその兄、大山周蔵が、大山商會の創立者である。

さて、上記の4名の版画師を含むタイ日本人12名は、1895年1月28日付で、チュラーロンコーン王がワチラウット王子（のちの6世王）を皇太子に立てたことを祝賀する次の祝辞（写真参照、タイ国立公文書館蔵。Toon）をテークワウォン外相に奉呈している。

「謹テチャヲ、フア、マハバジラヴウズ「チャオ・ファア・マハーワチラーウット」殿下ヲ皇太子ニ立セ給フヲ祝シ併テ兩陛下並ニ暹羅國ノ萬歳ヲ祈リ奉ル、

明治二十八年一月拾八日  
暹羅國在留日本人、  
スワラット會社（Suvarato &

8）佐々木寿太郎、田山九一、チャラビヤ、バスカラウランクセ「バーサコラウオン」伯邸内嶋崎千六郎、大山兼吉、伊藤金之助、樋口二郎、スリーサック「スラサックモントリー」伯爵邸内大谷津直磨、石橋萬三郎、松野狂介、辻秀五郎、三谷足平、武藤美一」

この祝辞から在タイ日本人の住み処は、唐ゆきさん等を除けば、3ヶ所しかないことが判る。当時暹羅中の岩本の名は祝辞中にはないが、彼の仲間にはスラサックモントリー邸に住んでいる面々である。岩本と關係が深い人物については後ほど紹介したい。

パーサコラウオン邸の嶋崎千六郎とは、朝日新聞1895年12月8日号掲載のタイからの通信に「文部省に雇はれ久く図画彫刻等の職を奉ぜる嶋崎天民大山翠松の二氏は当年九月満期解雇にて帰朝せり」とあることから嶋崎天民のことであることが判る。また同一記事は、1895年中に伊藤金之助が肺結核で、樋口二郎が赤痢で、それぞれタイで死亡したことを記している。同年1月には皇太子を祝った2人は、間もなくバンコクの露と消えたのである。



連載②  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 VII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

2012.4  
クニナ 2012.4

前号で1892年8月から3年間、嶋崎天民や大山兼吉ら名の有る日本人画工4名がタイ政府に雇用されていたことを紹介した。彼らはタイ政府が自前で雇った点では、最近半世紀の技術協力とは異なるが、見方によつては、近代日本とタイとの間の最初の技術協力の事例と言えるかも知れない。

日本人画工に期待されたのは、実際の出版であったのか、タイ人技術者の育成にあったのか。日本人画工のタイ文化への寄与は、どの程度であったのか、何か痕跡を残したのか等など。どなたか、タイの出版文化史と日タイ技術協力に心がある方に、是非調べて欲しいものである。

今のところ、筆者の手持ちのタイ側資料は次のものだけである。即ち、1895年2月7日付で、外相デーウォン親王は国王秘書長官に宛てた文書で、各官庁の役職者と職務の一覧を肖像印刷付きで出版することを提案し、「人物の肖像は（文部

省）教育局の日本人職人が作製することができ、何人分かの小さな肖像を1頁にまとめて印刷すれば、売り物になるだろう。この出版で利益も出るだろう」（タイ国立公文書館文書（以下NM）No. 5016）と述べている。ここに言う「教育局の日本人職人」とは、間違いない嶋崎天民や大山兼吉ら4名のことである。

日本側資料で参考になるのは、暹羅國盤谷府南商會編纂『暹羅王國』（東京、経済雑誌社、1897年9月9日刊）に掲載されている、嶋崎千六郎（天民）、大山兼吉、伊藤金之助の3名とタイ文部省との間の雇用契約書である（契約書には、印刷工樋口二郎の名はない）。

契約書によれば、当初3年契約で、嶋崎の月給はメキシコ銀貨70ドル、大山、伊藤は60ドルである。タイまでの旅費・支度金は各350ドル、木版製図・彫刻に必要な機具買入費および生徒20名の伝習上必要な機具買入費として合計2000ド

ル、満期等の事由による帰国旅費は各290ドル支給の約束である。

なかなかの厚遇である。具体的に彼らの仕事ぶりがどうであったか、生徒20名への伝習に成果があつたか否か等々に関する資料は未見であるが、参考までに同時期にタイ政府が雇用したドイツ人の彫刻職人のケースを紹介しておきたい。

この欧州人彫刻師は、1891年12月に王弟ダムロン親王がローマを訪問した際に雇用を約し、日本人画工とほぼ同時期の92年6月に来タイした。彼は契約満了前に、帰国を希望したただけではなく見舞金まで要求したためか、タイ政府との間にやりとりがあり、そのために記録が残されることになったと思われる。

彼の1年目の月給は300バーツ（60ポンド）が約束され、毎年50バーツ昇給し、5年目の月給は450バーツに達し、これ以上の昇給はない。タイに来訪するに先立ち、渡航費

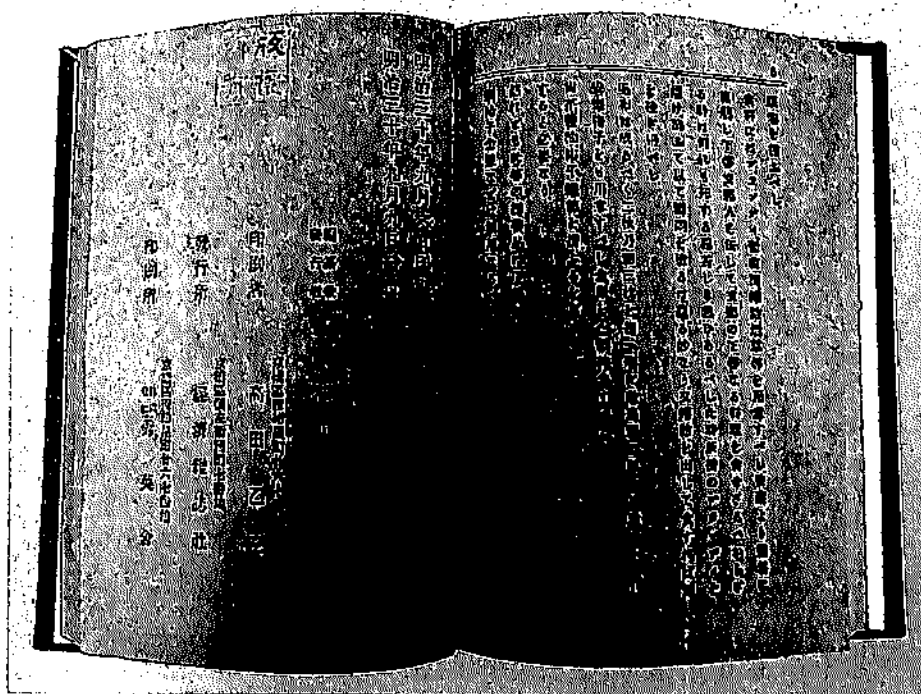
150ポンド、渡航手当40ポンド、前払い月給1ヶ月分60ポンド、機具買入費200ポンド、その輸送費20ポンドの合計470ポンドが支給された。日本人画工の倍近い厚遇であらうか。

このドイツ人職人は、在タイ2年後の94年6月に在タイドイツ公使を通じて、テークワウォン外相に次のように申し入れた。従順（チャイ・オーン）なタイ人に塑像の作り方を教えるために来タイしたのに、学びに来るタイ人は一人もいない、また、タイの土は粘着が悪く直ぐに割れるので製作に適さない。契約を解除して帰国したい。ローマで旧職に復することは困難なので、帰国旅費の外に見舞金も支給して欲しい、と。

この報告を受けた監督大臣（彼の場合は、宮内大臣）は、学習者が全くゼロということではなく、2人はいた。この男は怠け者で積極的に教えようとせず、その上とんでもない臆病者でフランスとタイとの間に戦争が起こるのではないかと、

いつもビクビクしている。国外に在るむすめが金持ちの息子と結婚することになったとかで、退職を申し入れてきたのだから。見舞金などを払う理由は

全くない、と答えた(MAT No. 10.35.8/1)。ところで、前述の『暹羅王国』の奥付には、編集兼発行者石川安次郎(石川半山、187



暹羅王国(東京、経済雑誌社、1897年9月9日刊、163頁)

2(1925)、定価20銭とある。石川は別のところで、同書出版のいきさつを次のように述べている。即ち、1896年5月に「五十万円の株式会社を起して、大に日暹両国のために企画する所あらんとした時、我輩「石川」は先づ日本国民の間に暹羅の事情を知らざる者の多きを慨し、鉄胆「阿川太良」の携へたる材料と我輩が別に調査した所の者とを集めて、『暹羅王国』と云ふ一書を著す事に定めて居た、然るに会社が匿名組合になつたために、此の出版も中止して居ると、翌明治三十年「1897年」の一月に帰て来た鉄胆は、是非共之を出版して呉れと言ひ出した」(石川安次郎『鉄胆阿川太良』1910年6月刊)。本書は、阿川太良(あがわ・たろう)が提供した



資料も加えて、石川が執筆したことが判る。『暹羅王国』は、よほど多数出版したためか、売れ行きが悪かつたためか、刊行後10年以上も経た1908年2月まで、石川安次郎が会長である好学会の雑誌に毎号次の広告が出ていた。

「子爵品川彌二郎君題辭、在暹羅盤谷府暹南商會主人阿川太良君序

『暹羅王国』正価 金貳拾銭、郵税金四銭

本書は好学会長石川安次郎君が曾て暹南商會顧問たりし時に編纂せられし者にして、書中収むる所の項目左の如し

第一 緒言

第二 王国の歴史(太古の歴史、第一王朝、第二王朝、第三王朝、盤谷府の創定)

第三 暹羅事件(事件の顛末、支那人の暹清同盟論、英國人の暹英同盟論)

第四 今日の暹羅(地理、政治、物質的文明の進歩、英國人の暹羅実業感、精神的文明の進歩、社交的風俗)

第五 日暹間の交渉(維新前の交渉、山田長政伝、明治の交渉)

第六 将来の暹羅

付録 暹羅渡航者案内

暹羅は年を逐ふて邦人の注意を惹けるも此の王国に関する著述は唯此一書あるのみ」

確かに上記広告の項目から見ても、『暹羅王国』はタイに関する本邦最初の包括的な案内書であり、「此の王国に関する著述は唯此一書あるのみ」も誇大広告とは言えない。日本人のタイ研究史において逸することのできない一冊である。

本書のかなりの部分は、英文資料を基に書いたものと思われるが、日暹間の交渉部分は、同時代の日本のことにも拘わらず明白な誤りがいくつもある。石川は著名なジャーナリストで政治家ではあるが、綿密に調べて書くタイプではなく、記憶に頼って書き流すタイプであったようだ。

阿川太良は日タイ関係史では、岩本千綱ほどには名を知られていないが、岩本に遅れること2年弱、1894年6月に来タイし、1900年7月に享年37歳で病死するまで、6年に亘ってタイに関わった人物である。

阿川は、長州萩の士族で、父が早世したため、母弟妹養育のために郡庁で働いていたが、壮志抑えることができず、189

0年7月1日の衆議院の第一回選挙で当選した、同郷の吉富簡一議員の書記に雇われて上京した。帝国議會会期終了後も在京し、同じく長州士族の手塚猛昌が社長である『庚寅新誌』(こいういん・しんし)に就職。91年7月から93年7月まで、同新誌の発行人、編輯人を担当した。この時に8歳年下の石川安次郎(岡山県士族)と同僚となり、肝胆相照らす仲となった。阿川は、1892年半ばから上海の新聞『申報』の講説を開始。1893年7月末に中国に旅立ち、9月に天津、10月に上海に遊んだ。

庚寅新誌は国際・国内の諸情勢、時事解説を中心とした、質の高い雑誌である。暹羅の事件についても時々、言及があり、特に、1893年の暹羅事件について、申報の記事を翻訳して掲載している。これは阿川の手になるものである。庚寅新誌は、阿川の中国行きを次のように報じた。

「本社の阿川太良氏は、久しく支那漫遊の志ありしも、社務他忙「僥は心があわただしいこと」更に間を得ずして、専ら社務に従事したりしが、東洋日に多事、殊に近日暹羅の事あるに及んで、雄心勃々禁ずること能

はず、遂に百事を抛ち、孤身短褐「褐は粗服の意」、客月下旬を以て、漫遊の途に上れり、今や長鯨に駕し洪濤を蹴て大海の上を進行せん、而して我國の紛々擾々たるものを回想せば、氏や益々慨然する所あらん(『庚寅新誌』第7巻83号、1893年8月1日発行、47頁)。

阿川は暹羅事件に触発されたのに、どうして暹羅(タイ国)ではなく清国に行ったのかは判らない。とにかく、中国で金に窮して帰国を考えた阿川は、石川安次郎に送金を頼んだ。石川は、長州藩士出身の品川彌二郎子爵から得た金を送り、帰国せずに頑張るように励ました。阿川は香港に出て、1894年6月にバンコクに着き、岩本千綱、山本安太郎らが既に住んでいたバーサコラウオン邸(ママ)に身を寄せた。しかし、岩本と山本は、薄情にも同所から阿川を追いついた。当時のバンコクには日本の領事館も公使館

もなく、阿川は身よりも金にも窮し、僧侶に飯を恵んでもらうなど、殆ど乞食生活に陥った。

「當時在留民の中に、佐々木寿太郎君と云ふ人が有った。土木技師か何かで有ったが、鉄胆「阿川」の人物を尊敬し、其の困難に同情を寄せ、時々一ぱーツ(日本の金五十銭位)を呉れたさうで、鉄胆等は之を得ると、直ぐに賭場へ往て、其の運を賭し(石川安次郎『鉄胆阿川太良』)た。阿川は放浪しながら、タイ語、風俗を学んだ。彼は、バンコクでは日本商品が高く売れることに注目し、日本商品を販売する商店設立を企図した。丁度、嶋崎天民が、タイ文部省との3年契約を終えて、日本に帰ることになったので、嶋崎に説いて賛同させ旅費をもらい、95年9月に嶋崎と同道して離タイした。帰国後、石川らと図り、出資者を得て日本商品を輸入し、バンコクに戻って暹南商會を立ち上げた。

さて、阿川が触発され、前述のドイツ人職人が臆病風を吹かした退任事件とは、何だろうか。

ベトナム、カンボジアを支配下に置いたフランスは1887年に仏領インドシナを発足させた。この後、フランスはラオスへ食指を伸ばした。当時ラオスの領域は、タイの属国とタイの直接統治地域から成っていた。1888年4月以来、フランスは、ラオスは旧ベトナムの保護領であつたので、その権利をベトナムから引き継いだと主張した。ラオスをめぐり、タイ・フランス間に緊張が高まった。1893年3月12日に、フランスの駐タイ弁理公使兼総領事パグイはメコン川左岸(ラオス)からのタイ軍の撤退を要求。軍隊間の小競り合いも始まった。同年7月13日の夜に、フランス軍艦がチャオプラヤー河の河口(パークナム)の堡壘を強行突破してバンコクに侵攻し、ラオス等の割譲を求めた。同年10月3日のタイ仏条約でタイはラオスを失った。

しかし、フランスの野心は、飽くことを知らず、同条約で得たメコン河から25キロ以内の東北タイ地域における特権(この圏内においては、タイは軍隊を置くことができず、フランス領からの商品は無関税、フランスは仏人や仏印籍人の利益保護のためにエージェントを多数配置できる、など)を盾に、些細な問題を針小棒大に取り上げてはタイ政府に難癖をつけ、東北タイの植民地化を強行しようとした。1893年前後の数年間は、タイ近代史における最も災難と苦難の時代であり、いつタイ・フランス間に、本格的な戦争が勃発しても不思議ではなかった。

当然、バンコクの人心も不安で、ドイツ人彫刻師が臆病になったのは、決して異常ではない。数ある華僑の中にも、タイに見切りをつけてさっさと逃げ出す者も少なくなかった。清国政府は、1893年の退任事件で、華僑が多数帰国したことを理由に、華僑の安全調査のために軍艦をタイに派遣したいと申し入れた。フランスに抗するために、猫の手も借りたいチュラロンコン王は、これを許可した(Mat. No. 167)。

ところで、タイが清国に敬意を払ったのはこの時までであり、日清戦争敗北後は、冷淡なものとなった。しかし、タイから逃げ出す外国人ばかりではなかった。

連載②  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 VIII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

タイは日本と違って、1880年代以降の各省庁の公文書の殆どを保存している。一方、明治以来の日本の省庁の多くは、公文書をきちんと保存する制度を欠いていた。例外的に、陸海軍と外務省は比較的丹念に公文書を保存していたが、残念ながら1945年の敗戦後占領軍上陸直前に敵の手に渡さないうちに焼却した。その結果、現在、日本側には手持ちの一次資料がなく、相手側の不当な史実の捏造にも何等有効な反論ができないという自業自得を味わっている。

タイ国立公文書館では日本の官庁なら数年後には破棄してしまふような些細なものまでも保存し公開している。ところが、どういふ訳か、国境に関連した文書の殆どは非公開である。タイとインドシナ諸国のみならず、南タイ・マレーシア国境に関する文書も、100年以上を経たものでも、索引を含めて非公開である。これらの資料は、

1975年前後の数年間当時の民主化の中で一時的に公開されたことがあるが、現在は公文書館館長だけしか鍵を持つていない秘密文書室に保存されているという。

タイとカンボジアの国境紛争や南タイの反乱は、今日のホット・イッシュであるが、その由来沿革を公文書によって調べようとしても一般人は閲覧することもできないのである。以上のような資料状況であるので、1893年前後の退任事件時に、タイ側の指導者が何を考え、政策方針をどのようなプロセスで決定したのかについて、は、不明な部分が多い。但し、タイ国立公文書で丹念に調べれば、退任事件に関する資料に断片的ではあるが、行き当たることもある。その中から当時の緊迫ぶりが判る資料を以下に紹介してみよう。

1893年3月10日付で、外相デーワウオン親王は駐仏公使ワッタナーヌウォン親王に宛て

た文書で次のように述べた。

「フイガロ紙(フランスの大手日刊紙)が、タイが軍隊をフランス領土に侵襲させていると報道したという。1893年2月1日付貴館を受領した。その後、フランス政府は、下院議会において、メコン河左岸「東岸」のルアンプラバンに狙いを付けていること、タイがベトナムの領域に侵襲しないように防衛に努めていることを表明したという。2月9日付貴館を受領した。更にバリの新聞は連日、タイがベトナム領土を侵襲しているとセンセーショナルに書き立てているが、フランス外相は貴殿に何の話もしないのに、面会を求めるとにしたいという2月22日付の貴館報には、既に電報で答えた。バンコクで私は、パグイ・フランス弁理公使「1892年6月24日にコ・シーチャン島の王宮で5世王に信任状を奉呈した」に、タイはベトナム領土に侵襲してはおらず、事実上フランスがタイ領内

のサゴップサソック(アソソックとも言う)地域まで侵襲してきたので、これ以上の侵襲を防ぐためにタイは軍隊を置いているのだと説明した。タイ領内には入って来ないというフランスの約束は信用できず、隙を見ては入り込んで来ている。フランスは相互に相手領土には入らないと約束した1890年の合意に違反している。フランスは撤退すると言いつつ何もしないから、タイは軍隊を派遣して防衛せざるを得ないのだ」(タイ国立公文書館(MAT) No. To. 40. 3713)。

侵略者フランスの世論が、かえってタイを侵略者呼ばわりすることは、話があべこべではないかと思うのは、タイの指導者だけではないであろう。両者の話が食い違ふ最大の理由は、フランスがタイ側の言う国境を認めようとはしなかったからである。地図のどこに国境を引くかの争いについて、デーワウオン外相は駐仏タイ公使に

2012.5

7/17-7/20 2012.5

10/104

13

103



宛てた1893年6月3日の文書で次のように述べている。  
「4月27日付の貴信に同封された、パヴィイがパリで印刷した『インドシナ』地図を、5月28日に受領した。同じ地図をパヴィイはバンコクで私に見せて、この地図はまだ完成してはい

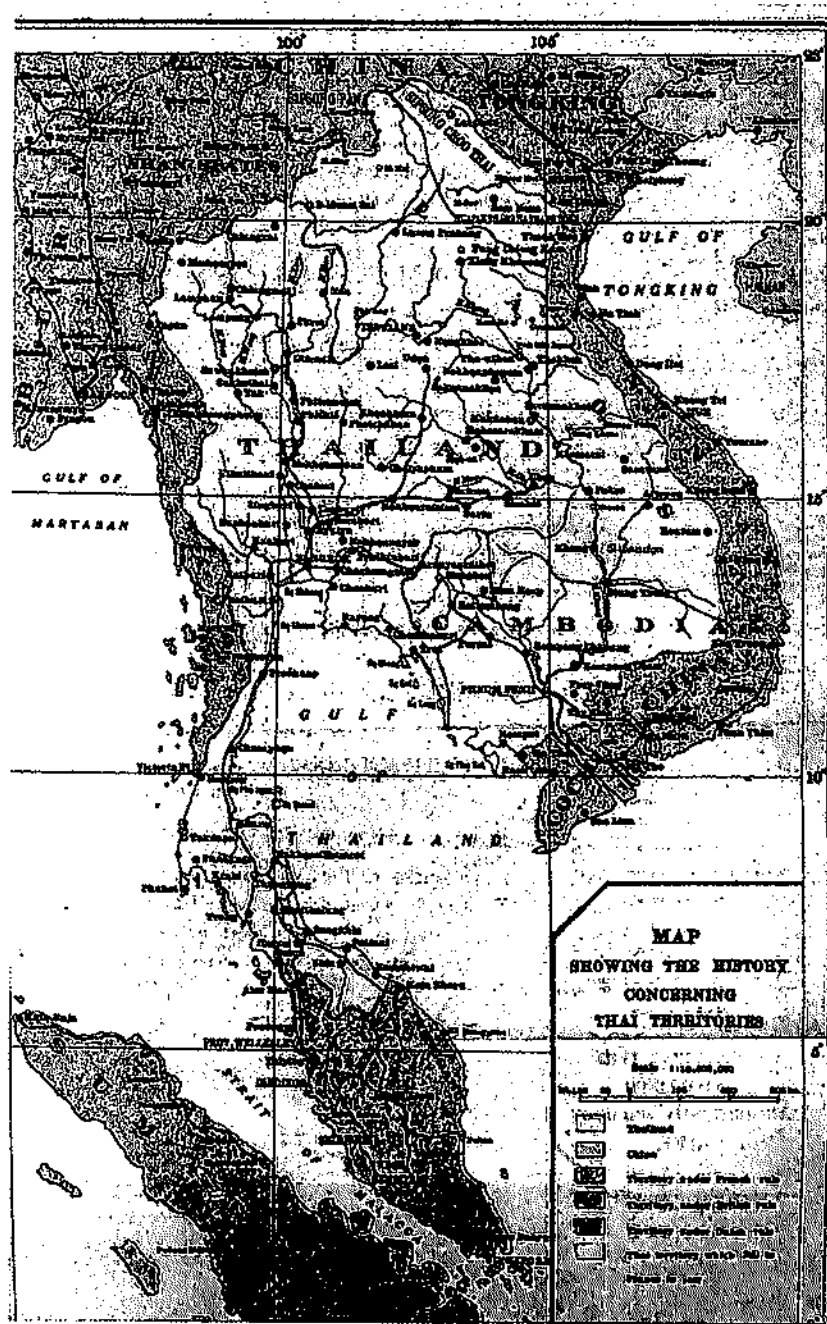
ない、両国の協議で国境を合意したのち、国境を書き込んでから販売したいと語った。この地図は、これまでになく詳細な地図である。それというの、パヴィイの一派が、国境面定調査委員と称して(本当はそのような口実で我々を騙して思うように

やったのだが)5年余もかけたものだからである。我々は道案内を出し、藪を切り開いて通行の利便を図り、乗り物も提供するなど、あらゆる援助を与えたのだ。ベトナム側は何らの支援もしていない。我々が案内して示した通りに国境を定めれば、

現在我々が維持防衛している国境と一致する。しかし、パヴィイは敢えて地図に国境を入れようとはしない。入れれば、すべてがタイ領となってしまうからだ。これらの地域は真正銘、昔からタイが維持防衛して来たものであり、他人の地を略取したものではない」(M.T. No. 40.37/10)。

在バンコクの日本人が、ワチラーウット王子の立皇太子に際し、テラウオン外相に提出した祝詞を今年3月号に掲載した。ワチラーウットは異母兄のワチラナヒット皇太子(プーミポン現国王の父)の長兄、1878年6月27日生、1895年1月4日没)が16歳半で夭折後直ちに後継者に任じられたのである。

フランスがタイに対する脅迫の度を強めていた1893年7月6日は、ワチラナヒット皇太子の年齢が、父チュラーロンコーン王が即位した年齢(15歳と10日)に達した日であった。41歳のチュラーロンコーン王は、この日、皇太子に次のように教諭している。  
「このような極度の困難な時



1887年以前のタイ領土地図 (1940年タイ広報局出版)

に、おまえの年齢は私「チュラーロンコーン王」が王位についた年齢と同じになった。私がこれまで実践してきた行動の大枠を、この日の記念にアドバイスしておく。しかし、私が言うことをそのまま真似ることはできない。周りの人も状況も違っているから。今の方が私の時よりも都合で、おまえの立場もいい。それ故、良き行動をとれば、対内的には私の時よりも簡単によい結果を得ることができ

る。しかし、対外的には、昔よりも厳しくなっている。かつての私のようにゆっくりしていることはできない。国内の団結を早急に図り、臨機応変に外に処すことが肝要である。そのため次のことを指針とせよ。①親しい親戚や友人、例えば弟たちに対して、愛情深く振る舞い、自分を支えてくれる勢力を作ること。②王族、貴族を問わず、高官に対して謙虚に振る舞い、アドバイスや注意を聞くこと。③前世の功德で幸運な身に生まれて重労働を課される業苦の下に生まれたと考えよ。将来王位に上ることは苦であり、楽ではない。④国王であることは、金満

生活を楽しむこともなく、やりた放題に力を振るって人を虐めることもなく、嫌いな者にひどい仕打ちをすることもできない。飽食と惰眠にあけることもない。そうしなければ、出家するか、財産家になればよい。国王は貧民のためにいるのだ。苦楽に堪え、心の中に知らず知らずに生じたり人に煽動されたりして生じる愛憎を抑え、怠惰であってはならない。得られるものは、死して名を残すことのみだ。一族を守ることができた、統治下の人民の苦難を防ぐことができたという名声を。この2点を常に心がけよ」(M.T. No. 5. Ro. 10. 3/10)。

艦に乗ってサイゴンから来たフランス人とベトナム人合計12名の将兵が9月3日に、アンコールワット(タイ語ではナコンワットと表記)見学に来たと書いてシエムリアップの港に上陸した。彼らは通行許可書を所持していなかったが、通例通り、知事官舎に一泊させ翌日アンコールワットまで案内した。この報告は更に内務大臣ダムロン親王に上げられた。ダムロン親王は、タイ王国領であるシエムリアップに、仏人が軍艦で来ることは違法である。フランス外務省に抗議すべきである。と外務大臣テラウオン親王に具申しした(M.T. No. 40.37/10)。

謂ふ者ぞ、彼の徒らに鑑々乎として他の鼻を覗ふに暇なき者も、亦夫れ遠からざらんか。且又俠國の民、一人の旧縁ある小國の爲めに一策を抱て急に赴く者あるなきか」(同号、74頁)。

前号で1893年3月4月に7名の欧米人がタイ政府に従軍志願を申し出たが、日本人は1名もいなかったことを記した。しかし、日本人の中からも、遂に義侠の士が現れた。故郷の長崎平戸で暹羅事件の報道に接した石橋萬三郎(1869-1918)である。

読売新聞1893年8月25日号は次のように報じている。

「平戸の快男児 肥前平戸の人石橋萬三郎氏が先年南米智利「チリ」の乱れたる際カリホルニアの水師營に赴き自ら請ふて水兵となりたることは何時ぞやの紙上に記したることありしが

義「さき」に仏暹事件の起るや氏は好機乗ずべしとなし進んで暹羅に投ぜんが爲に孤身盤谷府に向つて出立し上海埠頭に於て端なく暹羅探検者岩本千綱氏に邂逅し岩本氏が暹羅に知人あるを幸ひ詳かに自己平昔「平素」の抱負を語り其底蘊を求めたれば岩本氏も大に其志を壯とし応分の力を添ふべきを諾し共に香港まで赴きたり此時石橋氏の囊中僅かに五十銭の通貨を貯ふるのみ 夫れより石橋氏は岩本氏に別れ新嘉坡「シンガポール」に向つて出立したりと云ふ 氏今年齡二十三に満たず而して此壯圖を企つ 氏も亦一個の快男児と云ふべきのみ」

石橋が上海で、パンコクに向かう岩本千綱に邂逅したのは、1893年8月初旬のことである。岩本は、半年足らずのタイ滞在の後、1893年2月17日に神戸に帰還し、再びタイに向

かう途中であつた。

再渡航に先立ち、岩本は、同年4月16日には、東邦協会でタイから持ち帰つた小物も披露しながら暹羅談を熱演した。それについては、「東邦協会講演会来る十六日午後一時より神田一ツ橋外大学講義室に於て開会す 講演者は此程暹羅國より帰朝せし岩本千綱氏にて演題は暹羅談(一) 暹羅の位置(二) 暹羅の社会(三) 暹羅と列國と通商上の關係(四) 暹羅と列國と政治上の關係(五) 暹羅の前途なり」(新聞「日本」1893年4月14日号)と予告記事が出ている。

この講演は、「暹羅談」のタイトルで『東邦協会報告』第25号(1893年、22・64頁)に掲載され、それに少々追加したもの、が、岩本の最初の単行本『暹羅探検実記』として同年10月に刊行された。

岩本は、講演後5月には再びタイに出発する予定であつたよう、新聞「日本」1893年4月15日号は「岩本千綱氏は来月「5月」七日横浜出帆の仏國郵船に搭じて再び同國に航し貿易殖民の事業に着手し十月頃

までには又々一時帰朝の筈なりと云ふ」と報じている。しかし、岩本が日本を発つたのは、3ヶ月後の8月1日であつた。読売新聞1893年8月7日号は岩本の出発を次のように報じた。

「日本人暹羅政府の爲めに銃器を買入る 嘗て陸軍大尉(ママ)の職を奉じたる岩本千綱氏は其後故ありて職を辭し多年(ママ)暹羅に遊び今春來帰朝してありしが去る一日仏船ザラジ号に搭じて再び暹羅に向け出發せり氏は暹羅國文部大臣の信任を得常に其官邸に住して殆んど事實とも云ふべき有様にて大臣の爲めに其用途をも務め居るを以て今般渡航に就き大阪の銃砲商栗谷品三翁より村田銃三百挺を買入て携帶せし由」。

パーサコラウオン文部大臣の爲めに岩本が村田銃を購入してタイまで運搬したのが事実なら、岩本も、石橋萬三郎とともに暹羅事件で窮地に立つたタイの救援に駆けつけた日本人の一人と数えることができるだろう。岩本は石橋萬三郎という盟友を得て、3年間タイ事業を共にすることとなる。

連載  
パンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 IX

暹羅事件に触発されてタイを目指した石橋萬三郎(1869-1898)は、4月号で紹介したように1893年8月初、上海でタイに向かう途中の岩本千綱と邂逅した。石橋は、シンガポールを経てパンコクに到着し、早くも8月30日には「暹羅人」と題したタイ印象記を新聞日本に送った。少々長い、以下にその全文を引用する。

「暹羅人 在盤谷 石橋萬三郎報、世界の大勢は終に人種競争に帰すべきか 近來米州に於て歐洲に於て白人が支那人の上陸を拒絶し間接に黄色人種の蔓延を防遏するのみならず進で亜非利加の全部を横領せんとし又た既に亜細亜の大半を侵し黄色人種をして将に運動の余地なからしめんとす日本支那は暫らく言はず暹羅の大勢今後果して如何に帰すべきや是れ一の疑問

なり況んや仏蘭西は貪婪厭くなきの欲を逞ふし既に離を得て又た蜀を望む同國の安危存亡機正さに逼れるをや是れ志士仁人の一日も傍觀すべからざるの秋なり

○暹羅人の無氣力 凡そ社会は上中下三階級の人民より成るこゝと通例なれども暹羅に限り密だ上下の二階級あるのみ即ち官吏と奴隸なり官吏は賄賂と阿諛の爲めに動き多く金錢を集めて家屋什器を飾り内に數多の奴隸を蓄ふるを以て無上の名譽とするもの如し故に大臣皇族等の邸内には百人若しくは二百人の奴隸あり此の奴隸は彼の亜非利加の奴隸の如く鞭を執て驅逐するものにあらず只だ犬の如く猫の如く邸内に飼はれて午睡に目を暮すと云ふが如きものなり邸内に偶々勞力を要することあるも主人は別に支那人を雇ひ來りて其事に従はしむるを以て奴隸

は別に驕奢を尽くすこと能はざるも氣樂に生涯を送ることを得るが故に益々奴隸を奨励するに至り社会の中心に立ちて商業に奔走するものなく又た耕作に骨を折るものもなし能く此間に侵入して大に農商業の實權を掌握するものは支那人なり支那人は外に在りては能く白人の大敵となり内に在りては我同胞中の先驅となれり日本人豈に支那人を先驅として止むべけんや暹羅人は支那人と固より日を同うして語るべからずと雖ども少なくも自活の道を圖る丈けの勇氣あらば尚ほ怒すべし是れすら彼等は猶ほ厭ふものの如し我輩先頃新嘉坡より汽船に搭て當府の河岸に達するや幾十の支那人來りて船客の荷物を運び以て厘錢を争ふものあり我輩は税関の検査を経し以前に二人の暹羅人に行李を運ばしめんことを約し置きたれば從容として彼等が来るを待

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

ち居たるに漸く一時間余を経過して後來れり仍て我輩は前約を遂げんことを求めしに彼等は断然前約を絶ち傍らに土人の群集して笑話する中に入りて遊びけり之を以て傲するも暹羅人の怠惰なる一端を知るべし是れよりも尚ほ甚しきは市中巡回の巡查は賭博場若しくは露店の傍らに坐して飲食をなしつつ土人仲間と談話することなり其他高等の官吏が午前十一時若しくは午後一時頃より役所に出勤して午後五時頃に退庁し大臣皇族の如きは夜に入りて宮中に天機を窺ひ種々諛諂「とうゆ」の言を列べ國家に對する職掌は己が生活の裝飾たるに過ぎざるが如し去月仏蘭西の軍艦二艘メーナン河に沿ふて盤谷に攻め入りし時も陸軍は敵艦攻撃せたりとて急に鉄砲を磨き始めた位の事にて陸軍省も兵士も共に平生の用意なし怠惰極まる始末と謂はざるべし

からず特に兵士が僧侶の祈禱を受けて敵の弾丸を避け得るものと思惟し首に小仏像を懸けて出陣の用意とするが如きは真に以て無氣概無氣力なる人民の標本とするに足れり豈に憫むべきにあらずや

○暹羅人の生活 暹羅人は馬來人の如く口熱を去ると称して好んで檳榔子と石灰を嚼むが故に食物も頗る辛辣のものにあらずれば心経(ママ)に感ぜず常に辣椒「トウガラシ」の汁に野菜若しくは魚類を調合したるものを米飯と掻き混ぜて食ふなり而して食事は一日兩度にして午前九時頃と午後五時半頃なり上等人士の食事は大抵日本人の中等に少し優りたるも普通の人民は一日五六銭位にて愉快に生活するよしなり又た被服は至て簡單なるものにて普通人民多くは裸体跣足穿つものは唯だ腰巻一つなり上等の人は上に白のコート下に腰巻足には靴を穿ち恰も我安政頃の兵士が筒袖の上衣に袴の股立取りたるが如く見ゆるなり家は衣食に比すれば建築構造共に大に進みたる感あり恰も

西洋風と支那風の折衷流とても云ふべく特に煉瓦を多く用ゆるの傾きあり然れども極貧民に至りては牛小屋同然にて矢張日本と同じ

○暹羅の僧侶 暹羅は仏教國と云はんより寧ろ僧侶國と云はん方可ならん乎試に盤谷の市街を徘徊せば通行人の十分の一、時としては十分の二三位の僧侶なり左もあるべし僧侶は日本と異なり品行至て方正にて婦人の手よりは物を取らずと云ふが如く又た少しく宗學上の智識もあれば普通土人の如き無教育の輩は僧侶を以て博士神孫の如くに思惟し偶々上流の人も少しく難問の事あるときは判断を僧侶に任ずる位なれば彼等が社会に尊敬を受け又た僧侶となつて立身を希ふの徒も隨て多き訳なり是を以て僧侶國の感を起さしむるも亦た無理ならぬ次第なり

○暹羅の貿易 暹羅人は前に述べたる上下の二階級に過ぎざれば雜貨を多く供給すべき中等の階級なく且つ生活至て簡單なれば雜貨の種類も亦た少なし故に盤谷の市街を徘徊すれば各店頭大概一様の商品を見受くべし特に陸には道路なく只だメーナン河と其支流に沿ふて小舟を以て往來する位なれば交通不便の点より見るも商業の振はざるを知るべし尤も暹羅は米穀、堅木「チーク」、象牙等の物産に富む國なれば綺麗にして廉價の品及び上等の裝飾品若しくは新機械等を以て政府相手の商売を為さば頗る利する所あるべし現に独逸人、英國人は政府部内の貴顕に取り入り頻りに注文の依頼を受けつつあり是れ等は日本商人の注意せざるべからざることなり(八月三十日説)「(新聞『日本』1893年9月25日号)。

石川半山著『暹羅王國』(4月号参照)は、石橋の来タイ時期を1893年10月3日に暹仏講和条約成立した後であり、同年末としてゐるが、それよりも早く石橋が8月にはタイに到着してゐたことは明白である。上記「暹羅人」冒頭で「是れ志士仁人の一日も傍観すべからざるの秋なり」と来タイの理由を披瀝した石橋は、当時満24歳になつたばかりであつた。「盤谷の市街を徘徊」すればという表現が2回も出てくるように、「暹羅人」は、バンコク到着後宿泊先のパーサコラウオン文部大臣邸に落ち着くまでの手荷物運搬の苦勞、同大臣邸内で観察した奴隸の様子、バンコク市内を歩き回つての觀察など、在タイ10日ほどの時点での新鮮な印象記である。

怠惰で昼寝好きなタイ人が、働かされることのない奴隸として官僚貴族に多数飼ひ殺されてゐるので、労働力不足は中国人移民で埋められてゐるという指摘は面白い。早くも、彼はタイにおける日本人移民の可能性や日本商人進出の有望さを感じたようである。

岩本の盟友としてバンコクで諸事業を共にした石橋萬三郎とは何者だろうか。彼について書かれたもののうち、下記が比較的正確なように思われる。

「石橋萬三郎(北松浦郡)、石橋萬三郎は、平戸町呉服太物商石橋彦兵衛の第十子、明治二年七月四日を以て生る、幼より俠

骨稜々、稍長じて俊邁、行事成人の如くなりき、十三四にして既に四方の志を抱き、屢々發父長次郎に他郷留學の事を請ひしも許されず、明治十六年九月遂に家を脱して福岡に到り、福岡英語學校に入學し卒業後、東京に遊びて同地成立學校を卒ふ、やがて同校囑託教師米國人デニングの紹介を得て渡米す、時に明治二十一年三月十四日なりき、渡米の後カリフォルニア州、東ヨークランド府「Oakland」サンプランシスコ近郊」なるデニングの親族ブラウン宅に寄寓し、勞役に服する傍ら、リンコルン「Lincoln」學校に入學し、明治二十二年七月大學に進み、二十三年更にヨークランド実業專門學校電信科に入學し、二十四年二月同校を卒業す、此の間或はブラウンの玄關番となり、或は菓子製造商の雇人となり、或は炊夫とな

り、或は牛乳搾りとなり、或は學僕となりて、經濟の修學(政治科經濟科)怠らず、業を卒ふるや、偶々智利「チリ」革命戰爭に就き、海兵の募集あり、萬三郎は直ちに其の募に応じて軍艦に投じ、明治二十四年四月八日、桑港「サンフランシスコ」を發して戦地に到り、同年十一月凱旋す、恰も飛信あり父の重病を伝ふ、即ち倉卒として帰朝す時に明治二十五年四月二十一日なりき、其れより平戸に居ること一年余、仏國暴威を以てメコン(ママ)河口を略すと聞き、大に慷慨し、暹羅救済を標榜し、決然起つて同國遠征の途に就く。萬三郎の暹羅に到るや、仏暹の事件僅に平ぎたるも、暹羅の小弱志士の心を動かさざるを得ざる事情あり、同國農商務大臣ビヤスリサツクと謀り、移民拓殖の策を画し、一度帰朝して朝野に奔走し、數十名

を募集し、明治二十七年四月再び同志を提「ひつさ」げて暹羅に赴き、共に暹羅事業に尽せしも、遂に不成功に終りしなり、之より後萬三郎は快々として樂しまず、憂憤措く能はず、常に西方大陸を跋渉して大に為すあらんと欲せしも、不幸明治三十年十月頃より肺患に罹り、翌三十一年一月(ママ)東京明治病院に没す時に年三十。(平戸郷土誌)「(古川増壽『大禮記念長崎縣人物傳』長崎縣教育會、1919年5月刊、878・879頁)。

上記からは、石橋はチリ革命戰爭の実戦に参加したかのようにも読める。しかし、石橋自身も語つたところでは、アメリカを發つつもりでいた時、チリ政府軍と革命軍との間に戦端が開かれる状態に至つたので「米國政府は在智利の居留民を保護せんが為に三艘の軍艦を派遣す」という新聞記事に接したので、艦隊乗組員を志願し二等水夫として採用された(智利の革命戰爭(一)、石橋氏談話の要領)、九州日日新聞1894

年3月22日号)に過ぎない。また、病死したのは、1898年3月23日、享年満29歳であつた。

石橋は、子沢山の商家の倅であり、親は子供の教育に金をかけるつもりはなかつたので、14歳で平戸から福岡に出走して以後、アルバイトで自活し學業を続けるしかなかつた。

長崎県立長崎圖書館編集『郷土の先覺者たち—長崎縣人物傳』(長崎縣教育委員會、1968年10月23日刊行)の207・217頁に、浦恒一氏(元平戸市立平戸中学校長)が「海外發展に尽くした、浦敬一・石橋萬三郎・稲垣満次郎」の見出しで、平戸出身の3名の伝記を書いてゐる。その中で、石橋について「町人志士、袋町のガキ大將、もし徳川幕府政治があつたらば、十年つづいたならば、彼は平戸の町奴、西海一の大親分とうたわれたであろう。そういう俠氣が彼の身上であつた」と書き出している。

どうしても石橋の面構えを見たくなるが、彼の写真を入手で



きない。3人の伝記でも、浦と稲垣（初代駐タイ公使）は肖像写真が載せられているのに、石橋は墓所の写真に止まっている。

土族出身で立身出世という一族の興望を担い、その援助のもとに東京に遊学した同郷の浦や稲垣と、苦学生時代の稲垣は違っていた。石橋は稲垣より8歳年下であるが、稲垣に対して同郷の先輩として敬意を表したり、親しみを持ったりするどころか、敵愾心を露わにしている。稲垣も石橋らのタイ事業を壮士が商人に化けたものと腐している。石橋と稲垣は全くそりが合わなかったようだ。

1863・1920）が到着し、3ヶ月近くを岩本らと同宿した。熊谷は熊本を基盤とした地方政党、国権党の猛者であり、来タイ10年前に中国留学の経験がある中国語の使い手である。彼の訪タイ目的は、日本人移民の入植事業地の調査であった。

は売春婦（醜業婦）および売春宿の経営者のことであり、当時一般的に用いられた表現である。本号に掲載した写真資料（日本外務省記録4.22/99「海外に於ける本邦醜業婦の員数及其状況等年二回報告方訓達一件」）が示すように、明治31年（1898年）末（同資料は明治32年末と誤記）の在タイ日本人醜業者は、女15人、男2人の計17名である。

ち、「明治となりて渡邊者の先鞭は蓋し、かの大島圭介氏なるべし。氏は大蔵省出仕三名と共に、明治八年、埃太利公使と共に、渡邊二十日間程、滞在したり、在留民としての先驅者は娘子軍「醜業婦に同じ」にして十七、八年頃より入り込み、普通の者にはビヤパー「プラーヤ・パーサコラウオン」の伴れ婦りし、山本安太郎、山本銀介の二少年なりとぞ」（三木栄『盤谷一巡』、発行所 暹羅国日本人会俱樂部、印刷所 大山商会石版部、1921年8月3日発行、24頁）。

公第二号

醜業者取調表送付ノ件

當管轄區域に於ける明治三十二年十一月三十一日現在醜業者取調表別紙ヨリ及御送付候間御接手相成度候但し全表中人員ハ在留人々員表雜部ニ合

業者取調表別紙ヨリ及御送付候間御接手相成度候但し全表中人員ハ在留人々員表雜部ニ合  
明治三十二年一月七日  
在盤谷  
一等領事 國府寺新

外務次官都築馨六殿

明治三十二年十一月三十一日現在醜業者取調表

男	女	合計
一五	一七	

日本外務省記録4.22/99「海外に於ける本邦醜業婦の員数及其状況等年二回報告方訓達一件」

6）は、群馬県土族、1910年3月に東京美術学校漆工科を卒業し研究科に進学したのち工芸技術者としてタイ政府に雇用されて来タイした。タイ美術工芸、日タイ関係を中心として多数の著作をものし、第15代日本人会会長（1938年）でもある。三木は、1939年5月31日にはタイへの帰化が認められている。タイで帰化法が1911年に施行された直後、同法による帰化外国人第一号となった概旭乗（おおむね・きよくじょう、1898年2月から満7年間浄土宗僧侶としてタイ留学、1906年2月に再来タイ、佐賀県三養基郡三川村出身）に次いで、三木は2番目の日本人タイ帰化者である。

即ち、醜業者たちが明治以降タイに長期滞在した最初の日本人ということになる。それは、両山本青年や織田得能らが来タイする3、4年前のことである。三木栄（1884・196

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 X

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

Longman Dictionary of

English Language and Culture

の1992年版(初版)がバン  
コクの項で「バンコク・タイ国  
の首都で主要港、寺院および美  
しい建造物で名高い」に続け  
て、「また、多数の売春婦がい  
る所」として言われることがあ  
る」と余分なことを付加した  
ので、タイ人の猛反発を招き、  
不買運動を受けたことがあ  
った。世界の他の都市と比較  
した場合、バンコクについての  
説明はバランスを欠いた不当な  
ものであるのか、あるいは、や  
はり特筆するに値するだけの  
ものがあるのかは知らない。い  
ずれにしても、1956年に日本  
で売春防止法が成立した後に  
育った日本人には、1970  
80年代のタイで実見した性産  
業の繁栄振りに度肝を抜かれた  
経験をした人が多いことであ  
ろう。

1980年頃からタイのベテ  
ラン娼婦たち(北タイ出身でベ

ンコクのマッサージ・パーラー  
で5年以上働いた女性が多かつ  
た)が日本に進出した。82年9  
月に筆者は2年半のタイ派遣か  
ら東京に戻ったが、当時タイ人  
売春婦の警察沙汰(多くは客と  
の喧嘩や無灯火自転車で警察に  
尋問を受けオーパスステイが判  
明し逮捕されたケース)が頻発  
し始めていた。警察や裁判所は  
未だタイ語通訳者を整備してい  
なかったため、筆者も通訳を依  
頼され二十数件に立ち会うとい  
う貴重な経験をすることがある。  
83年末に至るとタイ語通訳制度  
が整備され、ペイも格段によ  
くなった。筆者も通訳として登  
録するように求められたが、お断  
りした。

売春防止法以前の日本社会の  
公娼制を、小野次あかね著『近  
代日本社会と公娼制度』(吉川  
弘文堂、2010年)によって  
まとめれば次のようになる。  
日本では江戸時代の遊郭が、  
明治になり法律名は貸座敷と名

称は変更されたが、公娼制は売  
春防止法制定まで継続した。こ  
こで働かされる娼妓は、親権者  
等を連帯保証人として貸座敷と  
の間で前借金(1925年当時の  
の平均は1000円前後)の契  
約をなし、強制売春によって前  
借金を返済するまでは解放され  
ない。売春の売り上げのうち、  
本人が取得できるのは4分の1  
程度に過ぎないので、返済まで  
10年程度を要したようである。  
親権者等がむすめを売る実質上  
の人身売買であり、むすめたち  
は債務奴隷として前借金完済ま  
で身体を拘束され売春を強制さ  
れた。

19世紀末のタイの有力官僚貴  
族の邸宅にはそれぞれ数百人の  
債務奴隷がいたことを、本稿で  
何度か紹介したが、我々は、タ  
イは遅れていると嘆くことはで  
きないであろう。  
日本の話に戻ると、公然売春  
に従事する娼妓の外にも、芸妓  
(酒宴の場での歌三味線舞踊者)

や酌婦(料理屋での客の酌)も  
売春婦を兼ねている場合が多  
かった。1925年5月現在の  
一調査では、日本に娼妓が5万  
1845人、芸妓が7万698  
1人存在していた。遊郭(貸座  
敷)や芸妓置屋が女性を抱える  
にあたっては、通常、芸妓酌  
婦周旋業者の周旋によった。同  
周旋業、および貸座敷等の営業  
には国の鑑札を要した。一方、  
芸妓娼妓酌婦として働く側も警察  
の許可を要し、性病の検査を受  
ける義務があった。このように  
許可を得た公娼制度の外には多  
数の私娼が存在したことは言う  
までもない。

さて、タイにおける娼家・娼  
妓取締の最初の法律は、190  
8年4月1日からバンコクに施  
行された「性病予防法」であ  
る。同法では、日本で娼家、妓  
楼、遊女屋などと言われたもの  
を、Rong Ha Kithと言いい、その  
主人はRai Rong、娼妓、娼婦、  
遊女の類いはYing Naknon

Sophentと言っている。娼家の  
設立営業には許可を要した。即  
ち、娼家の主人は畿内省の取締  
官に設立届けを出し、許可証を  
得なければならなかった。許可  
証一通を得るには30バーツ(有  
効期間3ヶ月)の納付を要し  
た。

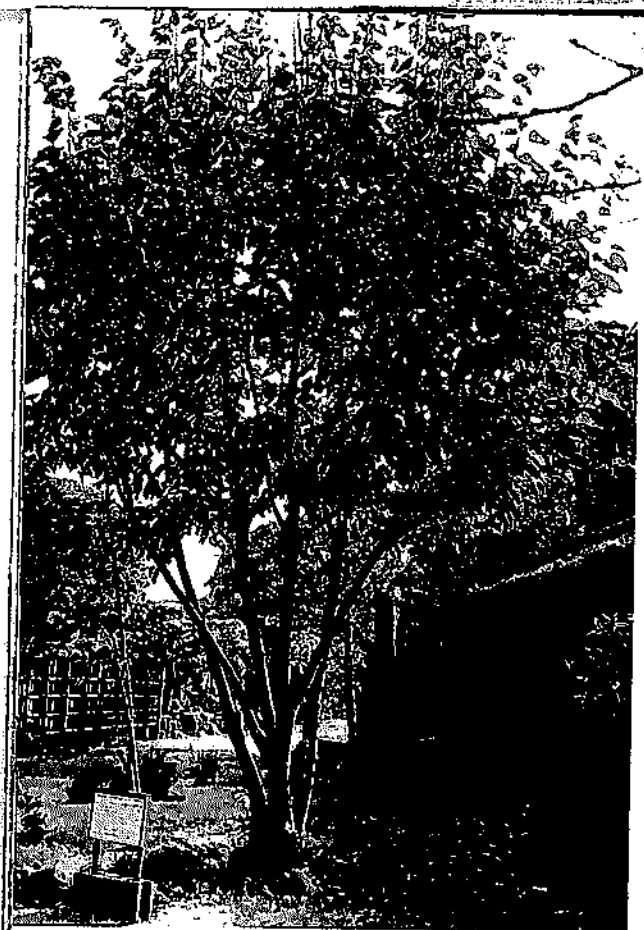
娼家の主人に次の義務が課さ  
れた。即ち、娼家内部が通行者  
に見えないようにすること、娼  
家周辺の清潔清掃を維持するこ  
と、娼家の目印として提灯を掲  
げること、娼妓を監禁しないこ  
と、15歳未満の少女を娼家内  
で養育しないこと、娼妓名簿を  
作成し届け出ること、名簿に出

入がある都度届け出ること。

一方、娼妓希望者側も取締官  
の許可を要し、また、ある妓楼  
から別の妓楼に移動する場合に  
も取締官の許可を得なければな  
らなかった。取締官は希望者が  
15歳以上であること、自由意思  
によるものであること、病気に  
感染していないことを確認して  
許可証を交付した。取締官は娼  
妓に性病罹患の可能性があると  
判断した時、検査医に命じて  
検査させる権限を有した  
(『タイ年次法令集』第21  
巻、頁336-337)。  
「性病予防法」により許可  
されたバンコクの娼家、娼

妓の数がどれほどであったの  
か。筆者が見たことがある統計  
は、1925年度のものに限ら  
れている。この統計は娼家の主  
人を民族毎に分けて示してい  
る。即ち、中国155戸(娼妓  
数合計697人)、タイ16戸  
(同90人)、ベトナム9戸(同9  
人)、ロシア1戸(同2人)で  
あり、娼家合計は181戸、所  
属娼妓合計798人となる(タ

照本県荒尾市の「宮崎兄弟の生家」の菩提  
樹。1895年末に移住したタイ人  
た宮崎滔天が持ち帰ったという。彼の著作に  
はバンコクの日本人娼家の話も登場する。



ボダイジュ 菩提樹(シナノキ科)  
1895年(明治28年)、宮崎滔天が中国革命  
の系図を求めてシャム(現在のタイ国)に渡  
った際、土産に持ち帰ったものと伝えられる。  
2004年(平成16年)、白濁根元より折損  
したものの、ひこばえを養育し育てたもの。  
(3代目)  
毎年5月末〜6月初旬にお寺に似た高貴な  
豆の可愛い薄黄色の装束の花を咲かせる。

イ国立公文書館文書 No.10  
5505。この統計数字はバンコ  
クにおける売春婦総数の氷山の  
一角であり、この他に、私娼が  
多数存在していたことは自明で  
あろう。

上記統計数字から見る限り、  
バンコクの娼妓の圧倒的多数は  
中国人女性であった。タイに來  
た華僑は、潮州、広東、客家、  
福建、海南の5言語グループ  
(5属と言われる)出身者が中  
心であるが、このうち、女性が  
夫や親と一緒にではなく、単身で  
旅行することを許容する文化を  
有したのは広東人だけであり、  
従って中国人売春婦の多くは広  
東人女性であったという。

1925年の統計には日本人  
の娼家・娼妓は存在しない。こ  
の年に限らず、タイで「性病予  
防法」が施行されて以来、日本  
人娼家は多分一度も許可願いを  
出すことなく、営業したものと  
思われる。

6月号で紹介したように、1  
898年末のバンコクには日本  
人醜業者17人(女15人、男2  
人)が存在したことを駐バンコ  
ク日本領事が報告している。バ  
ンコクの他に1893年の暹仏

2012.7  
7月7日 2012.7

事件でフランス軍に占領された  
チャンタブリーにも415名の  
日本人娼婦が存在した。  
世界各地の日本領事の職業婦  
報告を一括したファイル(外務  
省記録室に在る)「海外に於ける  
本邦職業婦の員数及其状況等年  
二回報告方訓達一件」では、  
1897年6月末の日本人職業婦  
はウラジオストク471  
人、上海135人、香港には8  
妓楼に66人の公然売淫婦が  
おり、この外に密売淫婦20人、ボ  
ンベイ35人。在シンガポール領  
事の報告では、同時期の日本人  
職業婦は、概算でシンガ  
ポールに女450人、男100  
人、ペナンに女120人、男30  
人、ジャバに女150人、男20  
人である。中には、マニラ、天  
津、釜山、京城のように日本人  
職業婦ゼロという報告もある  
が、シンガポール等に比せばバ  
ンコクの17人という数は微々た  
るものである。

バンコクの日本人職業婦の実  
態は、バンコクにおける日本の  
最初の領事裁判の記録から覗う  
ことができる。1897年5月  
末、日本の最初のタイ公使であ  
る稲垣満次郎が着任し、タイと  
の間に良好通商航海条約の締結  
交渉を開始した。同条約は98年  
2月25日に、稲垣公使とデー  
ウォン外相との間に調印され  
た。条約交渉中の97年10月初  
め、稲垣公使は、「日暹新条約  
締結に至る迄の間当国在留日本  
国臣民へ対し我が裁判権を執行  
すべき義に付当国外務大臣  
「デーウォン親王」の承諾を  
得た」(外務省記録室に在る)と  
「暹羅国に於ける帝國領事裁  
判」に即ち、日本は条約締結以  
前に領事裁判権を認めさせたの  
である。この権利は、97年11月  
18日に一等領事、藤田敏郎が  
行った最初の領事裁判(下記)  
によって確立した。

97年10月2日夜に、Japane  
se hotel house (バンコク警視  
總監の英文通知書の表現)に宿  
泊したイタリア人男性アルカが  
日本人娼婦(大仁田サヤ)に35  
バツを盗まれたとタイ警察に  
訴え出、バンコク警視總監(お  
雇い英人)から稲垣公使に通知  
されたので、この娼婦を被告と  
して日本領事館で11月18日に裁  
判が開かれた。

同裁判における供述から次の  
ことが判る。被告大仁田は熊本  
県天草郡出身で40歳、彼女が働  
いていたのは、バーンラックの  
「珈琲店」である。この店の経  
営者は村上タミ(同じく天草出  
身で36歳女性)である。村上  
は、ミカリーフという名の英人  
から店を借りて、「珈琲店」を  
開いていた。アルカはミカリー  
フが同店に連れてきた者で、麦  
酒2本を飲み2バツ、宿泊料  
として8バツを払った。大仁  
田はマレー語ができると供述し  
ているので、バンコクに流れて  
来る前はマレー半島のどこかで  
働いていたのである。当時1  
バツの日本円交換レートは60  
銭であるから、売春の代価8  
バツは4・8圓に当たる。

岩本千綱は、1894年末に  
シヤムへ最初の日本人移民32名  
を連れ出したが、95年11月に神  
戸又新日報の記者に32名の様子  
を質問されて、「三十二名の中  
目下サラテン」「サーラーデー  
ン」にて土地耕作に従事するも  
の男女六名、プカナン鉱山に十  
二名、盤谷府よりコラットへ通  
ずる鉄道工事に八名、其賃金は  
鉱山一ヶ月十八圓より廿五圓、  
鉄道工夫は一日四十銭より五十  
銭、耕作地は仕納を収獲する筈

二店は女主二店は男主なり。若  
し国の体面を毀損するを憂へざ  
れば此商業は前者数業に經過し  
て最も繁昌すべきこと疑ひな  
し」と述べている。

更に続けて「暹羅事情」は、  
石橋萬三郎が、デ、ソーザ  
(「元来支那の旧領マカラ産の  
ホルトキース「ポルトガル人」  
なれども籍を英國に有する由に  
て曾て日本横浜に在て売込店の  
手代を務めたる為め少し日本語  
に通じ自ら日本事情に明なりと  
云ひ日本の洋妾「ラシャメン」  
を蓄へ近時流行の婦人化人を氣  
取「る人物で1895年1月頃  
に来タイした」を頭取として、  
在タイ日本人への融資のために  
創立した、怪しげな「日本暹羅  
銀行」も日本人職業婦を頼りに  
していることを次のように述べ  
ている。

「金庫主管 此役目は銀行中  
の主なる部分なるや論を俟たず  
故に其人を選むや正美にして恒  
産的ならざるべからず而して此  
行の此役を勤むるものは如何な  
る人ぞ当地在留者中最も日本人  
の名譽を毀損すべき営業即ち娼  
家の主人にして其姓を村上名を  
市松と唱ふる人なり堂々たる銀行  
然(しか)も社会の上流に在て  
経済機關の調理を主(つかさど  
る)國家有数の業務を営むもの其  
人を得るに娼樓の主人を用ひざ  
れば他に適任者を有せずとは日  
本を冠する名称の下吾人の慚愧  
に堪へざる所なり是れ蓋し底に  
は孔(あな)あり上には蓋(ふ  
た)ある目的の有る所なり何と  
なれば此村上某は当地在留娼樓  
中第一位を占る親方株にて同人  
を籠絡するときは在留職業婦の  
洋人具き貨幣は悉く此銀行中に  
吸収貯蓄せしむるを得ればな  
り而して此苦々敷商業は当地在  
留商人の売場高より数倍の多  
きに達すれば利に敏(さと)き  
ポルトキ先生「デ、ソーザ」早

くも茲に着眼し名を取るより利  
を取れの実利主義に依て此人を  
金庫主管なる重役に採用せしな  
り蓋し此金庫主管なる役を勤む  
る者は保証金として二千末  
「バツ」(千二百圓)の身元  
保証金を収むべき約束の由」。

上記「暹羅事情」によれば、  
1895年末当時のバンコクの  
日本人経営の娼家は4戸(2店  
は女主人、2店は男主人)あ  
り、その一つが村上市松のもの  
である。女性である村上タミが  
経営した表向き「珈琲屋」は1  
895年当時から存在していた  
かどうかは判らないが、もし存  
在していたとしたら、その一つ  
であろう。

バンコクのワット・リアップ  
の日本人納骨堂の過去帳の最初  
の部分に、1896年から19  
00年頃に死亡した、8人の日  
本人女性の名が苗字なしの名のみで  
記されている。この内、ケイ子  
とハナ子の住所は村上方と書か  
れているので、多分村上市松の  
娼家で働いていた女性である  
う。梅子、チズ子、シン子は盤  
谷ニューホテル、花子、イシ  
子、初子は盤谷旭ホテルが住所  
になっている。この二つのホテ





川原

熊本國権党の猛者、熊谷直亮（くまがい・なおすけ、1863-1920）が1893年12月8日に、パンコクの岩本千綱（いわた せんこう）を頼って来タイしたことは本年6月号で紹介した。彼の来タイ目的の一つは、日本人がタイに出稼移民する可能性を探ることであった。

熊谷は、岩本千綱とともに、パッサコラウオン邸に宿泊したが、93年の年末正月のパンコクの日本人の様子などを「暹羅通信」と題して、郷里の熊本で出版されている九州日日新聞に掲載した。長いが、以下に全文を紹介する。

暹羅通信 一月九日

「1894年1月9日」盤谷府

免 鉄城生「熊谷直亮」  
拝呈仕候各位愈々御清輝目出度御超歳之段奉大賀候小生碌々馬駒を加へ候間御休神「安心」被下度候

願ふに神州は梅花笑ひ黄鶯「うぐいす」囀「さえず」るの交、中原之政争も本年は倍々（ますます）痛快に可有之諸君

之御熱誠遙に拝察仕候

当地は新年と雖も何の目出度光景も無之赤道以南の風、唯に椰子樹梢（こすえ）を動すのみにて新春を迎へ申候心地とは少しも御座なく現に元日には帷子を着し淋漓たる流汗を拭きながら、明治陛下の万歳を祝し候次第にて寒暖計も九十二度「33・3℃」に上り申候今後は当地見聞の模様続々御報知可申上管に御座候間余白の時分御掲載有之度

当地は東洋の「王國」、而して其形勢は恰も風前の灯火の如し苟も東亞の列國に生れて國家的の觀念を抱くものは少しく願慮する所なくして可ならんや

◎大日本同胞忘年会 暹羅國に當時「現在」在留の日本人は総員二十余人然れども多くは出稼職業婦人にて真正に生活しつつある者は僅かに八人なり

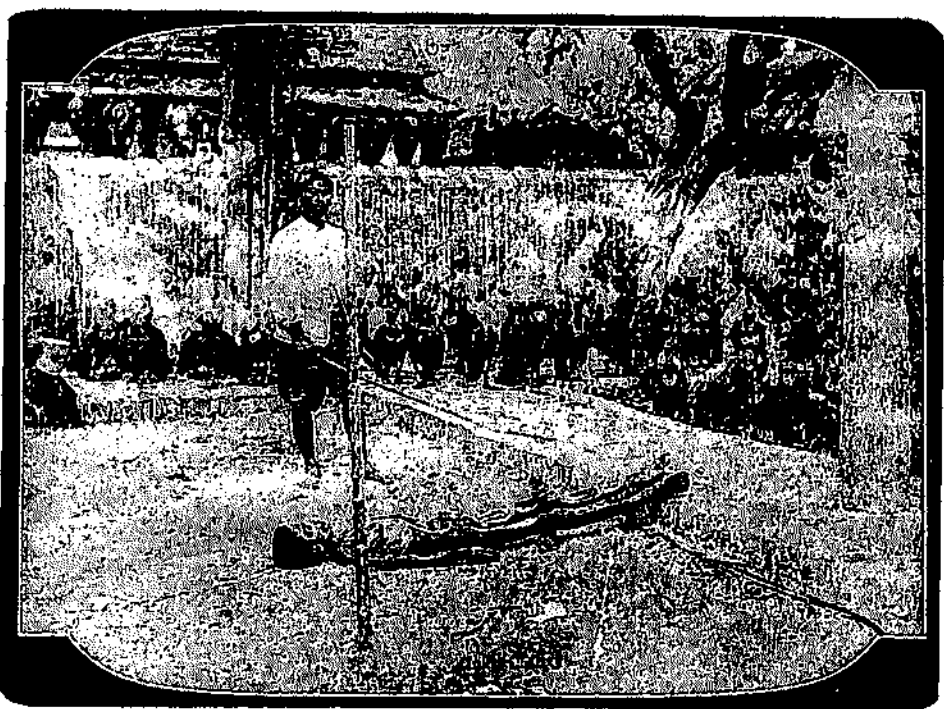
十二月卅日余の寓居せる文部大臣邸に於て大日本同胞忘年会を開けり来会せる人々は島崎天民（東京府）伊藤義正（岐阜県）山本安太郎（福岡県）大山

翠松（神奈川県）田山九一（愛媛県）佐々木寿太郎（三重県）

岩本千綱（高知県）の七名にて島崎伊藤の二氏は彫刻師大山氏は画師にて此三人は美術家として一昨年来当文部省の聘する所たり又た佐々木田山の二氏は建築会社を興して当政府の用達を為し山本氏は文部省の雇員たり、唯だ岩本氏と余とは所謂ゆるる孤剣單身の遠征子にして其の天竺浪人なり午後四時開宴蜜酒を傾け雞豚を屠り互に往を懐ひ來を語る酒酣（たけなわ）なるに及び余起つて一場の演説を成して曰く

今や諸君と余とは、四千余里の波濤を破り、此の黒蠻の異域に在つて、旧を送り新を迎へんとするの時に際す、豈に思郷の懷に堪へざらんや、然りと雖も男兒已に志を立て郷國を出づ、空しく老ふべからざるなり、況んや当暹羅國は東洋の「王國」、旧我邦と深く和親の誼を存す、而して今日の形勢を見るに、西、英の掠

むる所となり、東、仏の奪ふ所となれり、版圖日に蹙（ちぢむ）れども、社稷を憂ふるの國民あるを聞ず、貴族宰臣は、宴安「くつろいで」是れ耽り、徒らに佛「ほとけ」を信じて敢て國家の大計を画する者なし、世人皆曰く、暹羅の亡滅は當に數年を出でざる可しと、余は以て之を憂へて暹羅は已に業「すで」に亡びたりと、故に歐米各國は、領事館を置き、弁理公使を駐在せしめて、頻りに此國の形勢に注目す、然るに我邦は、均しく東洋の列國なり、宜しく早く善隣の好を結び、以て東洋の大勢を制すべき筈なるに未だ領事の駐劄さへ行はれず、徒に醜業婦人の放恣に任ず、國家の体面を汚す亦た甚太だしからずや、余や諸君と此國に在つて多事の此時に際す、大に警「いまし」め



岩本千綱著『暹羅ラオス安南三国探險実記』（1897年）に掲載されている死体を傾とする怪鳥レーン（コンドルの仲間）の写真

ざるべからざるなり、年暮て瘴癘日に到る、諸君自愛せよ

と是より各々興に入り歌ふあり舞ふあり又た身の異域にあるを覚へざる計りなりし時に岩本氏

は我物との賛歌を作りて曰く「我物（わがもの）と思へば嬉れしヤム國、義氣の重荷を肩にきて、遊歩に行けば冬の夜の、川風暑く鰐がなく、待つ身に長き風雲とき、ほんにやるせ

が無いわいな」（未完）（『九州日日新聞』1894年2月2日号）。

○暹羅の新年 一月一日には曉起して湄南河に遊泳し旧塵を淨め先づ邸内の眺望閣に上りて四方拜を行ふ朝飯を了り帷子「ひとえもの」に袴を着し予（かね）て約したる佐々木寿太郎の宅にて催ふべき新年会に赴く初春の贈物として氷数斤を携へしも亦た笑かし会場に到れば暹羅人支那人西班牙人等數十人來客として座に在り先づオルガンの響に連れて「君が代」を唱へ明治陛下の万歳を三呼す次に神州尚武の氣を外人に示さん為め余が太刀打及び柔術仕合を演じ了つて祝宴を開く各々淋漓たる汗を拭ひながら新年を祝しければ佐々木氏忽ち川柳あり「帷子で年始まわりやパンコク」此の日正午寒暖計九十二度未だ冬期にして此の如し暑期の熱思ふべし元來暹國には一種の暑ありて太陽曆にもあらず又た太陰曆にもあらず當時は暹羅にては二月下旬なり而して此國は一年を三期に稱し我邦の三四五六の四ヶ月を暑氣（マ）とし七八九十の四ヶ月を雨期とし又十一十二の四ヶ月を冬期とす右の次第なるを以て太陽曆の修正

を祝するものは日本人と西洋人のみ当地に尤も多き支那人は陰曆を用ひ暹羅人は前陳の如くなれば猶更新年の感なかりし前夜歳を守つて寝に就くや夜半砲声忽ち夢を破りて至る岩本氏と共に枕を蹴つて起つて曰く蓋し悪夢にあらずるなりと走つて湄南河岸に出づれば河口パークナン「パークナム」の地に当て大小砲声交々轟ろき殺氣股々たり或は想ふ仏軍の再製にはあらざるかと已にして四隣寂寥遙かに鶏犬を聞くのみ翌早之を聞けば仏艦の演習せしなりと彼れが不時の示威を為して暹人の胆を奪ふ亦た悪むべき哉然れども新年早々此の砲火の響を聞く豈に天我れに風雲を下すの前兆にあらずるなきか

○暹國近状一斑 盤谷府は暹羅第一の都會にして百政枢機の出づる所、湄南河北より来て王城を抱き府の中央を貫流して南、海に注ぐ府は河口を距る凡そ十五里河口の地をバクナンと稱し兩岸に數基の砲台を築き以て海路の要領と為す去秋仏艦の砲撃する所即ち是れなり湄南河は川幅甚だ広からず熊本の白川と一様なれども水底の深さは如何なる大艦巨船をも往來すべし當府の人口は四十万と稱すれ

ども未だ戸籍法の設けも之れなき位なれば詳細ならず居民は支那人尤も多く馬來人老婦「ラオス」人は是れに次ぐ西洋人は當時二百四十名なりと云ふ暹羅人は貴族、中等人、奴隸の三種に別れて貴族の威勢は頗る盛んなり中等人奴隸に対しては殆んど人間の皮を被れる動物視するもの如し要するに蒙昧遊惰褻褻耽足唯だ佛は信するの風習は上下同一にして此國の次第に衰弱に赴く一大原因なるべし

暹羅王國の政治は君主專制と立憲政治と相混交せしもの如く内閣の制度國務會議等の設けありと雖も其の内実は貴族の獨裁「名門」より成りて敢て君主の獨裁にもあらず宮内、大蔵、外務、陸海軍、文部、農商務等の各省ありて大臣は皆貴族なり内閣には白耳義人「ルーレン」「ローラン・ジャクメン」氏を雇ひて顧問となせり皇室費の如きは別に之れが區別もなく財政紊亂して大蔵省とは只其の名あるのみ英國タイムズ新聞の通信員の痛嘆に依れば此國輸出入の計算さへ政府にては未だ定かに取調付かずと國家經濟の基本たる輸出入の統計すら已に此の如し他は以て知るべきなり就中

執法官の腐敗警察官の放漫なるに至つては實に驚くの外なしと同時に又た之れに反して刑罰の慘酷なるは野蠻の極と云ふべきなり(未完)(九州日日新聞) 1894年2月3日号

教育は貴族學校、貧民學校、育嬰堂などの設立ありて皆々高壯美麗なる建物ありと雖も此國元來の教育未だ開けざれば唯に字を書し教を知るに外ならず教科書の如きは小冊子の三四巻あるのみにて他に歴史の元氣を鼓舞し經書の道義を開発すべき教とは更に無之故に此國の人々の腦底には忠君愛國などの考へなどは決して浮ぶべき筈なく全國四分の一程なる版圖を仏國に奪ひ取られても曾て對岸の火ほども感ずる人なきは亦た道理の外の道理と云ふべし

宗教は一種の信物教にて國民の三分二は僧侶なり此他回々教、耶穌教等の寺院もありて仏朗西人などは熱心に唱導しつゝあれども左程の影響なきが如し故に當國にて一番勢力あるものは僧侶にて流石に威權盛大なる貴族と雖も僧侶に向ては合掌三拝す皇太子の如きも十三四才に到れば一たび薙髮(ちはつ)して僧となり既足にて市街を托

鉢するを例とする位なれば上王公貴族より下、奴隸に至るまで皆之を盲信す是れに依て寺院の多きと僧侶の夥しきは又た一の奇觀と稱して可なり府の中央に一大塔あり鰐魚寺(がくぎょじ)と云ふ此の寺内の池には無數の鰐魚を飼(やしな)へり何の爲めなるやと尋ねれば供養の爲めなりと答ふ而して鰐魚時々柵を破りて市街に出で人畜を害すれども又敢て罰するものなし王城の南十數丁の処に人焼場あり一大寺院にして四方高き胸壁を廻らす此内にて病死者或は刑戮に達したるものを焼く、生焼のもの半焦れのもの、又は頭顱骸骨等、亂草の間に累々として臭氣鼻を衝く此辺の樹林には喰人鳥と云へる鷹に似たる大なる鳥「Bee-eater」ありて此燒余りの人体を喰して生活す其声甚だ凄其「本号写真参照」、大都會の中央已に鰐魚躍り喰人鳥飛ぶ是れも亦た仏教の余沢と云ふべきか呵々

軍備は甚だ不完全と評するの外なし陸軍は總員一万六七千、五師団に配置しありて當府には五千を屯すと云ふ歩騎砲兵あり

と雖も騎兵は國王の左右を護衛するに過ぎず小銃は昨冬独逸より精良なるもの六万挺を購入せしよし先日大迫少佐獨逸國よりの帰途當地に來る、一日随つて軍隊を巡視す少佐一々士官に向てヤードの遠近高低を訪ふ(マ)マ一人も答ふる能はず少婦歸つて話すらく暹羅の兵は兵にあらずと海軍は二千五百噸位の巡洋艦を始めとして百七十噸位の小艦に至るまで都合十二艘あり常に王城の西門に碇泊す久しく此地に在る人の話に依れば年中河口を出づることなく又た演習を行ふ等は絶へて之れあらずと陸軍士官學校を立て伊太利人數名を雇ひ海軍には丁抹人數人を雇ふて士官とす然れども其不紀律不完全なるは斯の如く夫れ將た何を以てか王城を保護し又た何を以てか暹國を守護せんや唯々嘆かほしき次第なり

商業は悉く支那人の掌握に歸し重なる貿易又は工業等に関する事柄は總て西洋人の專恣に任

ず現に英吉利人のボルネオ商會及びウインソル商會獨逸人のマルクワルド商會の如きは當時専ら利益を射(いり)つつあり暹羅國人は其間に在つて貴族は佚樂、上に驕り中等人及び奴隸は遊眠、下に屈して自己の職業に従事するものなく車夫船丁に到るまで其勞働者は皆支那人なり

嗚呼四万九千九百方里の土地山川より東洋に獨立しつゝある暹羅の一王州は眠れるが如く酔へるが如し現在を以て將來を測るに此の一王州はマサニ富國の術に依つて立つべきか將た強兵の策に依つて立つべきか白象旗の性命も何時まで維持し得らるべきものにや只管感慨の外なき次第なり

以上は取り交たる外見の雜録に御座候各大臣と對話の筆記又は内部の事情は後便に托し申すべく候尤も此の通信相認め候折柄農商務大臣よりの使者参り明日より北方の内地へ殖民地探検旁々同行すべしとの事に接し候間愈々明日よりは虎臥す野辺に旅行致しアユチャの旧都を訪ひ山田長政の遺跡を弔ひ炎風熱雨の中聊か鬱勃の氣を養ふ筈に御座候

間本月末一先づ盤谷に歸り候上虎豹鯨鯢を叱咤するの日記は御報知申上べく願ふに曾て故郷に在るの政争鼎沸の間に立つて吞吐せる雄氣今却て此黒蠻の地に振ふ又た一大快事矣

明治廿七年一月九日 於暹國盤谷湖南河上 熊谷鉄城 尚ほ近作兩三首左に呈す「漢詩三首略す」(九州日日新聞) 1894年2月4日号

他人様の國に來て1ヶ月程度では、いくら洞察力に優れていても事物を正しく理解することは無理がある。タイ仏教に関する記述などにその淺薄さが現れている。岩本千綱が1893年12月30日夜の在バンコク日本人忘年会で、吟じたという「我物(わがもの)と思へば嫁れしシヤム國、義氣の重荷を肩にきて、遊歩に行けば冬の夜の、川風暑く鰐がなく、待つ身に長き風雲どき、ほんにやるせが無いわいな」を開けば、熊谷に「忠君愛國などの考へなどは決して浮ぶべき筈なく」と評されたタイ人たちも、頼みもしないのに勝手に來タイして何を言つてゐるのだと憤激するのは必定である。

熊谷や岩本に限らず、アジア

の危機を強調し、自國の利益とアジア諸國の利益とを同一化して、日本人がリードして近隣アジア諸國に乗り込んで改革しようという姿勢は、この時期の日本人壯士に共通に見られるパターンである。主觀的には、彼等は善意なのであるが、自利と他利とを混合し、とりわけ前者の割合が大きければ、巻き込まれた側は大變な迷惑を蒙ることとなる。

ところで、熊谷の文章を読むとバンコク市街のどこにでも鰐がいるような印象を受けるが、當時といえども鰐がいたのは、ワット・チャカワット(サム・ブルーム寺)、即ち彼の言う鰐魚寺1ヶ所に過ぎない。同寺は、熊谷らが宿泊したパーサコラウオン邸のチャオプラヤー河を挟んだバンコク側對岸にあるので、熊谷や岩本はその前を何度も通つたのであろう。また、「喰人鳥」と言えば、生きた人間も襲われそうだが、實際はタイ語で「レン」と言うコンドルの一種で、形状は鷲などの猛禽類に近いが生き餌を取るだけの爪の力がないので動物や人間の死体を餌としてゐる。レンに屋根にとまられると縁起が悪い。1930年頃までの新聞に

は、時々バンコクのどこそここの屋根にレンがとまったという記事を目にする。

大袈裟な表現や熊谷の尊大さは鼻につくが、記事の多くは概ね事實に基づいて書かれてゐる。ワチルナヒット皇太子が沙弥に一時出家したのは、1891年9月10日、確かに満13歳の時であるし、陸軍士官學校のイタリヤ人教官とは、G. Gerini (1860-1913)、プラ・サラサートポラカ(ン)らであった。タイ海軍はデスマーク人艦隊司令官の A. E. Plessis de Richelieu (1852-1932)、フラー・チョンラユット(の指揮下にあった。リシュリユー(Richieu)は、1902年に退職するまで27年間タイ海軍に勤務した。彼はチュラーロンコーン王の信頼が高く、同王の帷幄に参じた。同時にビジネスにも関心が強くバンコクの經濟發展にも貢献した。例えば、1889年にバンコクを走る路面電車会社(後に電力会社も兼ねる)を設立し、続いて現在のフアランポーン國鉄駅玄関前のラーマ4世通りを起点としパークナムに至る鉄道を開いた(バンコク・タイムズ1932年3月28日号)。

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XII

初回訪タイより1893年2月に日本に帰った岩本千綱は、次の2点を明らかにした。即ち、①パーサコラウオン文部大臣とスラサックモントリ農商務大臣が、日本人を農業移民として受け入れることに熱意があること、②タイで官公庁建設工事を請け負っている佐々木寿太郎らと共に、日本商品を販売する秋津商会を設立したこと、である。なお、秋津商会は、短命で終わったが、日本人がタイで開いた最初の商店である。

岩本の帰朝直後、朝日新聞は次のように報じている。  
「暹羅の殖民、秋津商会 先に暹羅行をなせし有志者岩本千綱氏(休職陸軍歩兵中尉)は、去る十七日「1893年2月17日」神戸に着し翌十八日大阪に入り昨夜帰京せしが今氏が其友人に語れる要略を伝聞するに暹羅に入りし以来夫(か)の文部大臣バスカロン「パーサコラウオン」侯の紹介にて農商務大臣陸軍中将「スラサック」モントリー伯と北部殖民の事を約

し陸軍大將たる皇族其他貴族の賛成を得たり約せし所は荒地四百坪に對し年租二十五銭を払はば灌漑に供する構渠「運河」の開鑿等諸種の耕作準備は農商務省負担して之を貸さんといふに在り又暹羅建築会社(ビルジングコンパニー)サイム「サイアム」(社長伊太利人スワルト)に技師たる佐々木寿太郎、文部大臣秘書官山本飯介両氏と謀りて秋津商会と稱するものを此國に設立する事を定め右建築会社に創立事務所を置き政府より文部省用諸器具官内省用色染縮緬等完達の約、建築会社よりチキ材(軍艦の艦底に用ふるものにて此國に産するを良品とす我國にて曾て栽培せしも地味適せざる故か生育せず)朱檀黒檀等買入の約も成りチキ材朱檀黒檀其他諸材象牙水牛角、皮其他皮類の見本を持来れり而して右殖民の事に至りては形勢上極めて有用なるを觀察し得たりとのことなり左に出すは文部次官ウージ伯が自署して岩本氏に渡せし文部省用達命令書の訳文

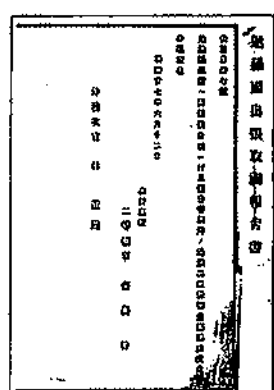
(新嘉坡領事齊藤幹氏の訳)なりとぞ  
当省大臣は此書面を以て今後本省に於て要する所に日本物品求用方を紳士足下に命じたることを証明す(朝日新聞1893年2月24日号)。  
新聞「日本」も、以下のよう  
に岩本の同様な談話を掲載した。  
「岩本千綱氏の暹羅談 暹羅探險の志を抱き昨年七月彼國に渡りて種々の調査をなし此程帰朝したる非職陸軍中尉岩本千綱氏の談に拠るに同國は軍艦用の船材に富み洋人が是まで船載し來り我國に売付しもの夥般は同國の産にして之を吾邦人が直接輸入せば莫大の利益あらん又た彼地に在留する邦人は僅か二十名に足らざるも國人の信用大に厚く同國の文部農商務二大臣の如きは頻りに日本人の移住を望み暗に歐人の跋扈を抑へんとするの意あり又暖國の事として米作は年に三回の收穫地あれど荒蕪未開の地亦た多し物産は獸皮及び寶石類なり政体は貴族專制に

傾き大臣其他の顯官は皆貴族出身にて數百人の奴隸を有し賄賂の贈送盛んに行れ奢侈の風は一般の常習なり故に我國に陶器其他の美術品も需要多しと同氏は本月末又同國に渡り彼我貿易事業に着手する由なり(新聞「日本」1893年4月5日号)。  
スラサックモントリ大臣らが、日本人の入植を期待した土地は、當時政府の許可を得て民間会社が新田開發のために運河を掘って灌漑を整備していた、バンコク北方のバトムタニー地方であつた。  
本誌8月号に、熊本県人の熊谷直亮が日本人移民の可能性を調査するため1893年末に來タイし、岩本千綱と同宿したことを紹介した。1894年1月、熊谷はバンコク北方の入植予定地等を見学し、更に北行してアユタヤの日本人町跡を訪ねた。  
彼はその様子を郷里の自派新聞、九州日日新聞に投稿した。同紙1894年2月25日号は、



熊谷直亮氏日本入タイ時調査した地図

「熊谷鎮城「直亮」氏暹羅に在りて着々殖民の事業を計画し施設略ぼ緒に就く。頃日「ちかこ」社員の許に寄せたる書簡は稍其の消息を語るものあり左に掲ぐ」として、熊谷の次のような書簡を掲載した。  
「(前略) 小生着暹以來已に内地を探検する三度或は南山を臨へ北河を渉り蠻地到處唯々辛楚と艱難とのみ実に小生の頭上には毒蛇あり小生の脚下には猛虎あり小生の呼吸する空氣中にはマラリヤあり途に当れる鯢鰐一たび躍れば人をして忽ち痛死せしむ大丈夫雄圖を万里の外に擲(はか)らず亦た党派競争の比にあらず併し金さへあれば蘇丹がし報いりしらんム像を幹に提調て寄せか快ラ野れ事省に取れ部試地をの「野れ領本出越二運現にに記新嘉坡に國人スト下、辺りが駐1894年「日本」に「トシ手力ノ」た告るのメンでル群遊る



令「スタンレー」の暗黒亞弗利加「アフリカ」探検も底にもあらざるのことかと存候今春は早々北地の遊歴を致し途に哀州「アユタヤ」古都及び日本村の旧跡を訪ひ申候日本村の旧跡は盤谷村を距る一百余里哀州の城外に在り老樹扶疎冷煙荒野を掠め今や唯だ其名あるのみ即ち一木標を建て「日本村之旧趾」と大書し又裏に「明治二十七年一月廿一日大日本人熊谷直亮建之」と記し野花冷水聊か以て山田仁左衛門の英魂を弔ひ申候時恰も月明に有之四辺の風景は殊更三百年前の偉業を追想せしめ転た感慨の至に有之申候當時左の一詩あり  
絶代雄圖長不存。遠人好茲弔英魂。千秋唯有古都月。乱草荒煙日本村。  
尚々殖民事業に就ては已に魚屯潭「バトムタニー」より哀州を経て沙羅保利「サラブリー」に亘る湄南河の右岸土地豊穠水陸至便の地所二百里四方を借受る事に農商務省と特約最早相整ひ条約書も已に殖民地第一駐留場と定めたる殺破塔「サバトム」より南「パークナム」迄の所は受取申候要するに暹羅の山河は頻りに日本人の渡航を相待ち居候些し彈丸黒子の競争を



罷めて波を踏へ海を渉るの壮図に御着手被成候ては如何小生は蜜酒を市橋に買ひ諸君の御来還を相待可申先は是迄早々如此に御座候頃首 二月三日「1894年2月3日」(『読売新聞』1894年3月3日号、「朝日新聞」1894年3月24日号も同一書簡を掲載)。

前号引用の熊谷の文章同様、誇張の多い文章ではある。しかし、彼が視察した当時のパンコク北方は、現在ではカオヤイ山中に追い上げられてしまった野生象の生息地が広がっている。

駐新嘉坡領事斎藤幹が、1894年6月12日に本省に提出した「暹羅国出張取調報告書」に掲載されている地図を、本号に掲載したが、地図の中央部分に記載されている「日本人に試作せしめんとするの地」からラシット運河を挟んで右手下、現在のラムルツカー辺りに「野象群遊の地」が記されている。この地図には東西に3本の運河が走っているが、一番上(北)がパタニー県のランシット運河、真ん中が同県のラムルツカーを走る運河、一番下のパンコクから東に走る運河がセーンセーブ運河(現在ラムム

カムヘン通りと並行し、バーンカピ、ミンブリー、ノーンチョークを経てチャチョンサオ県に至る)である。上記熊谷の書簡は、『殖民協会報告』第11号(1894年3月21日発行)、73頁に転載されている。同報告は次のように書き出している。

「馬來半島及暹羅国へ移住の企図、本会「殖民協会」評議員津田静一氏は斎藤新嘉坡領事が馬來半島の土侯より譲受けたる土地及び熊谷直亮氏等の暹羅政府より借受けたる土地に移住民を送るの計画をなし、先づ百名を送る都合にて本会に手を経て該移民運賃割引を郵船会社に掛合ひ会社も快く之を承諾せるを以て、氏は愈々之が準備の爲先月十九日「1894年2月19日」九州移民会社に向て出発せり(下略)。

津田静一(1852-1909)は、熊本藩の上級士族出身で、明治初年に米国のイエール大学等に留学。中央での官途榮達を捨てて郷里熊本に帰り、民権主義に抗して国権主義を唱え、その発信手段として『九州日日新聞』の前身を創刊し、また私立九州大学創立構想により九州学院(現存の九州学院とは

別)を創立した教育家である。同時に、洋行途中で実見した、中国人移民(華僑)の隆盛にも刺激を受け、日本人の外国移民を唱導し、殖民協会の発起人の一人となった人物である。津田は、殖民先として、タイに目を付け、実弟の熊谷直亮をタイ調査に派遣したのである。

津田が、一時帰国した石橋萬三郎らと共に暹羅殖民に着手することは、『殖民協会報告』以外にも盛んに報じられた。例えば、

「暹羅殖民策、此程大三輪長兵衛・津田静一の二氏暹羅政府より五千余町の土地を借区し五十万円の資本を投じて同国に一大殖民地を開くことに相談一決したるに依り右用事を督び目下同国より帰朝中なりし石橋萬三郎氏は三月上旬大阪・熊本を歴て一先郷里平戸に帰省し直に再び暹羅に向け出発する筈なり」と(『読売新聞』1894年3月3日号)。

また、朝日新聞は、「暹羅殖民事業、近時世間に風評ある暹羅殖民事業の計画を聞くに其発端は前年暹羅仏国と兵を構へたりし当時暹羅軍に投ぜんとて同地に赴きたる肥前平戸の冒險家石橋萬三郎氏爾來同国

文部大臣ビヤスリサク(マヤ)氏の邸に食客となり居り先頃同氏の囑託を受け石版及び勲章調製の注文を為さんとて本邦に帰来りし序(ついで)大坂の大三輪長兵衛氏を訪ひ暹羅政府が竊(ひそか)に日本人の移住を希望し日本人にして殖民せば数百町歩の水田を百年以内無料にて貸与せん意ありと告しにぞ大三輪氏之を佐々友房氏に伝へ氏は更に之を熊本の津田静一氏(元九州学院長)に語りたるに津田氏は昨年旧藩主の家事に於て東亜巡回中の大迫「尚道?」大尉に會ひ暹羅の国情に就て詳細に聞かざりて心私(ひそか)に同国に殖民の事を思ひたちつたりし折柄とて大に喜び直に大三輪佐々二氏に謀り出京の上石橋氏を訪ひ種々談合の末石橋氏よりビヤスリサク氏に數回郵書をして問合せをなし愈よ二百十六町歩の水田を八十年間無料にて貸与すべしとの返答を得たるに就き津田氏は断然意を決し先づ實地の調査をなさんとて志気の堅固なる老練の農業者(相當の資産を有し自費にて渡航するもの十名及び医師一名)と共に來五月暹羅に向て郷里を發することとし既に其準備に取掛れ

り又石橋氏は予め之をビヤスリサク氏に報じ自身は客月已に石版勲章買入等の用向を果し今は郷里平戸に帰り居れど近日出發し彼地に於て津田氏の一行を迎ふる準備を整へ置かん約束なりと云ふ(『朝日新聞』1894年3月15日号)。

津田の暹羅殖民へのコミットメントは、同時期に石橋萬三郎が友人の郡島忠次郎宛てた、次の手紙からも明かである。「一時帰国した石橋は」、熊本の津田静一、宮崎實藏等を訪ふて志を語り、暹羅殖民事業に関する意見を交換した後、慨然として單身渡暹の途に上った。時に明治二十七年四月十日である。彼が渡暹に先ち在上海の友人郡島忠次郎に寄せた同年三月十一日附「1894年3月11日」の書面は最もよくその志を物語っている。その書面に曰く。

「今回の殖民計画は肥後の津田静一氏、大阪の大三輪長兵衛

氏等に依り実行することに相成、着々歩を進むるの心算に御座候間乍憚御放念奉願上候小生の暹羅国に対する意見は一、殖民事業を拡張して日本の勢力を作る事二、政府部内に日本人を入る事三、鉄道路を買占むる事四、馬來半島を買入る事

右は暹羅に対する不親切の様なれども我党の目的は白人と中央亞細亞に敏腕を争ふにあれば、事苟も東洋の安危に関するものなり。依て以上の四ヶ条を実行することを期す。

小生は昨日当地に参り明日熊本に行き、夫れより大阪に出で要事終つて直ちに暹羅に行く筈に御座候。荒尾先生は小生が大阪に在る時東京に在り、小生東京に行けば先生大阪に走る、仍

て面会せず。根津先生には三四回面会せり。白岩、成田、山内等大兄の紹介を受けたる諸君に宜敬御伝言被下度候。後便は多分暹羅よりならん。君が健康を祈る。先は勿々不備。明治二十七年三月十一日 長崎客舎 石橋萬三郎 敬白

彼「石橋」が渡暹の途中上海に達したる時は既に用意の旅費尽きて、当時上海の日清貿易研究所付属の商品陳列所にて実務修習中であつた郡島忠次郎の助力を求め、同地よりデッキバツセンジャーとして支那の苦力と伍しつつ盤谷に赴いた(葛生能久『東亜先覚志士記伝』下巻「黒龍会出版部、1936年、47-48頁」)。

余談だが、郡島忠次郎は、筑前の山林管理を任された大庄屋の家系で、筆者の生家(福岡県糟屋郡篠栗町)の3軒上の地に生まれている。

デッキバツセンジャーとは三等船客のことだが、これは中国人苦力に限ったことではなく、当時は貴族や官員を除けば日本人旅行者の殆どが三等船客である。今風に言えば、航空機のエコノミークラスにぎゅうぎゅう詰めになされているようなもので

あろうか。当然、日本とタイとの間を往復した若本千綱も宮崎滔天(寅蔵)も、三等船客であつた。東京の外務省外交史料館に、明治41年「1908年」以降各月毎に長崎、神奈川、兵庫各県(港のある県)から報告された渡航・帰国者の報告(外務省記録のやま)の「海外渡航者人員調査報告雑件」が保存されている。

この報告は、「移民」と「移民に非ざる者」を二分。移民は、契約か自由か細分し、「移民に非ざる者」は、公用、修学、商用、視察研究遊歴(旅行者)、雑に分けられている。行き先、乗船の等級も記されている。例えば、1908年7月に神戸港に北米合衆国・ハワイ・カナダから帰国した日本人181人中、一等船客は3人、二等船客は2人に過ぎず、残り176人は三等船客である。再度の訪タイに当たって石橋萬三郎は、郷里の平戸より同志の松野恭三郎、荒川雅五郎を同行した。

上記の諸報道や石橋の郡島宛手紙を読む限り、津田静一が暹羅殖民に本氣なつたことは明らかである。



連載の  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XIII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

前号で熊本県の教育者、津田  
静一（1852-1909）  
が、岩本千綱や石橋萬三郎の唱  
えるシヤム移民事業に強い関心  
を示したことを紹介した。彼は  
1893年2月5日に東京で創  
立された殖民協会の發起人20人  
の一人である。1888年初め  
に、彼は「殖民政略」と題し  
た、次の講演を行っている。明  
治初年以來欧米に長期滞在した  
経験をもつ知識人の彼が、何  
故移民事業を重視したのかを理  
解するために、以下全文を引用  
したい。

「今晚は、我が日本帝国将来  
の事業に關し、聊か愚論を陳述  
すべし、諸「さて」方今欧州中  
にて、最も興業の隆盛にして、  
貿易の広大なるは、英國の右に  
出づるものなきは、諸君の能く  
熟知せらるる所なり、然るに今  
英國は如何なる手段を用いて、  
斯くの如く興業貿易の盛大を致

せしやと問ふに、野生「津田静  
一、以下同じ」は之に答へて、  
其原因全く殖民政略に在りと目  
はざるを得ず、何となれば、先  
づ殖民の一事行はる時は、通  
商貿易の道は自然と開くるもの  
にて、殖産興業も從て起り、又  
之を保護する為には、海軍も拡  
張せざるを得ずして、万般の事  
業之に伴うて勃興するものな  
り、看るべし、英國は今より大  
凡三百年前までは、実に微々た  
る一小国なりしも、エリザベス  
の朝より、北米殖民事業盛大に  
なり、冒險者の数次第に増加す  
るに從て、航海の術も自ら開  
け、コロンブエル（マ）が保  
護者となりて、共和政治を執行  
するの時に方ては、陸上にて彼  
の有名な鉄騎が、勳王の諸軍を  
蹂躪したるのみならず、海上に  
ても、當時猛威を東西洋に逞う  
せし荷蘭「オランダ」の水師  
「海軍」を撃沈し、遂に海上の

權を握るに至れり、然れども、  
英國は尚ほ之にも満足せずし  
て、軍艦を四方に派遣し、亜非  
利加、亜細亞等の島嶼を始め、  
南洋に星羅棋布する所の諸島を  
も略し、遂に印度の半島に拠  
り、支那の土地を併せ、今度又  
緬甸を併吞せり、故に現今英國  
の人種は、已に地球の全面に散  
在し、共に其政令を守り、且つ  
言語、文字、慣習、歴史、宗教  
等を同する所より、其勢力頗  
ぶる強大にして、殆ど宇内を席  
捲するの姿あり、而して斯く殖  
民事業の熾に起りしは、固より  
幾分か政府よりも誘導せしには  
相違なけれども、或は政府に抵  
抗し、宗教の自由を得んが為  
め、遠く異域に逃れしものあ  
り、或は本国にて商業に失敗  
し、虎穴に入りて虎子を得るの  
目的にて、風濤を冒して海外に  
航するものあり、此等の徒が漸  
次に群をなして、遂に北米及び

南緯等の如き、兩大州を占領す  
るに至れり、尤も北米の如き  
は、其後英國に叛いて一の獨立  
國を開基し、政治上文は英、  
米各々其治術を異にすれども、  
言語文字と云ひ、人種宗教と云  
ひ、皆な其の源を同するゆ  
え、英國に取ては、益々己れ  
が、基礎を固うするの援助とな  
り、興業及び商法上の利益實に  
尠ならず、先年北米合衆国内  
亂の時に於て、英人が大に商業  
の不振を憂ひたる一事に就て  
も、其兩國關係の至密なるを知  
るに足れり、故に野生は斷言し  
て、英國の工、商兩業盛大を極  
め、且つ海軍も威を宇内に振ふ  
の原因は、全く殖民事業の一点  
に在りと日はざるを得ざるな  
り。

因て願ふ、我が國は東洋の中  
に孤立し、四方皆海の土地なれ  
ば、速も此の彈丸黒子の一小島  
を以て、露や、英や、支那や美

利望の如く、我に数十倍せる大  
國と対立し難し、能く之に対立  
するの道、唯殖民事業を盛大に  
して漸次我が版圖を広むるの一  
策あるのみ、然るに、殖民政略  
も、近來德乙「ドイツ」の比斯  
馬克「ビスマルク」が為す所の  
如く、無闇に軍艦を各地に巡回  
せしめ、未だ版圖の判然せざる  
島嶼あるに逢へば、忽ち德乙國  
の旗章を掲げ、德乙國の所領と  
云ふ標札を樹てしむるの所為  
は、決して策の得たるものにあ  
らず、我國今日の有様にて、万  
一之に類似したる事をなさば、  
直ちに歐米の強國と葛藤を惹起  
し、非常の困難に陥ること明白  
なれば、野生は此の如き手段  
に由つて、殖民の事業を起さん  
ことを欲せざるなり。

然らば如何にして之を為すや  
と云ふに、野生は敢て政府に依  
頼せず、我國人民が、自ら奮つ  
て殖民会社を創立し彼支那人が  
各地に出稼ぎする如く、続々海  
外の地に移住し、専ら殖産の業  
に従事せんことを企望するな  
り、然れども支那人は皆無氣無  
力の輩のみにて、歐人の為めに

奴隸の如く使役せられ、更に廉  
恥の何物たるを知らず、只管金  
儲の一点にのみ汲々たる次第な  
るが、日本人は先づ該会社にて  
海外の地所を買入れ置き、土族  
中にて有力の人々、各々数十名  
の農民を率いて、其地に移住  
し、開墾の事業を起す時は、其  
利益の鴻大なる、決して北海道  
開拓の比にあらざるべし、諸  
「さ」て野生が第一に、我國よ  
り殖民通商に大利ありと認むる  
は、フィリッピン群島より、印  
度諸島及び南洋に散布する諸島  
是なり、然れども、右の島嶼中  
にて、最も豊饒にして便利なる  
處は、已に歐米諸國の占領する  
所となりたれば、中々日本國の  
版圖に入り難き訳なれども、元  
來野生の目的は、版圖の虚名を  
広むるよりも、我が同人種を四  
海に蕃殖せしめ、以て歐米人の  
蠶食を防ぎ、從て通商貿易を頻  
繁にして、一は物産を起し、一  
は工芸を熾にし、且つ海軍を強  
大ならしめんとするの点にある  
ものなれば、其所領は英たり、  
仏たるを問はず、利益ある所に  
棲息して、法律の範圍内にて、

業務を営まんと欲するものなり。  
今、前に述べたる群島の大勢  
を説かば、土地は大概肥沃にし  
て、熱帯地方は、常に緑樹青草  
を藪り、四時花果の絶ることな  
く、植物は種を下しきへすれ  
ば、殆んど生長せざるものなき  
程なり、且つ熱帯地方と云へ  
ば、誰しも其名に聞き怖して、  
非常に暑からんと思ふべけれど  
も、野生の考にては、我が九州  
人杯には却て北海道の寒地に赴  
くよりは暑しき様なり、又土  
人は絶て未開の蠻夷のみにて、  
人口極めて寡少なるより、空漠  
たる原野ありと雖も、敢て之れ  
を耕すものなく、若し此に穀物  
か甘蔗、煙草等を種付れば、其  
生長実に見を憚すものありて、  
米は年に兩作を得、煙草の葉の  
長さは三尺に過ぎ、甘蔗の幹は  
寸を以て量るべし、況や年中青  
草の絶ることなきゆえ、若し牧  
畜の業を起さば、其利益亦た僅

少なからざるべく、方今濠州より  
羊毛を輸出するの高を以ても推  
想すべし、  
然り而して、右の如く大利あ  
るの土地ありながら、彼の金儲  
に抜目なき歐米人が、何故速か  
に着手せずして、之を棄置くや  
と疑惑する人もあるべけれど  
も、此れには一の理由あり、元  
來己れの生國に恋々し、他郷に  
移住するを好まざるは、一般の  
人情にて、歐米人と雖も、免れ  
難き所なり、故に歐米にて、少  
く資産あるものは、願く其故國  
新威ある生國にて生活し、遠く  
海外に出るを欲せず、独り家に  
余産なく、身に負債あるの徒に  
至ては、何卒して濠州にでも出  
稼し、以て富貴を求めんと欲す  
れども、旅費の手当なくして、  
空く貧困の中に残年を送るもの



20/2.10  
20/2.10

比々「いたるところ」皆な是なり、是れを以て、我國にて自ら愛國者を以て任ずるの士は、先づ此富士の山、琵琶の湖等のある所の扶桑國に恋々せず、決然郷國を辭して野蠻の地に入り、我が言語文字慣習風俗宗教學術をして、全地球の面に傳播せしめ、工業を起し物産を殖し、通商貿易の道を開いて、益々我國の富強文明を増進せば、何の功業か之に過ぐるものあらん、野生が我國の愛國者諸君に望む所

是の如し、諸君以て如何とせらるるか(能田益貴『樸溪津田先生伝』津田静一先生二十五回忌追悼會、熊本、1933年、233-236頁)。  
要するに、津田静一は、海外殖民によつて經濟が発達し強大國になつたイギリスの殖民政略を日本の發展モデルと考え、日本を強大で經濟が発展した文明國(富強文明國)にするために、國家の武力行使によつてではなく、平和裏に民間が移民会



1889年に運河掘削会社を設立してチャオプラヤー・デルタ新田開発に着手したサイイ親王

社を興し、大投資して取得した海外の広大な土地(主権者が誰かは問わない)に日本農民を移民させる、これによつて日本の海外貿易、商工業をも發展させようという考えであつた。  
更に、津田は、民間による移民事業、即ち出資者を募ることは十分に可能であり、また、移民候補地の選定に当たつては、自ら事前調査を行うつもりであることを、1893年8月に次のように述べた。

「然らば何故に、海外に出るを以て利ありとなすか、抑も經濟の原則に於て、最も骨子たるものは、土地、勞力、資本の三者なり、日本は人口余りありて土地足らず、故に海外に出で、殖民地を開くは、其大利たる言を待たず、但し之を為すには資本を有せざるべからず、是れ殖民事業を企てる者の困難とする所なり、左れども、今や東京の如き殖民熱大に起り、有志の士頻りに之が会社を創立せんとするの企てあり、余も榎本子爵等の熱心家と相図りたることあれば、此度は先づ東京に至りて、

資本を集むる事に尽力する筈なり、然れども、資本を集むるは至難にあらず、人は利益に走るものなり、利益のある所、誰か資本を投ぜざらん、……左れども、事業は遺り様の如何に由りて成敗を決するものなり、仮令ひ有利の目的既に確立するものと雖も、之を為すの道宜しきを得ざるときは、遂に失敗を取らざるを得ず、故に余は先づ自ら彼地に赴きて之を探検し、而る後他人を誘導せんと欲す、成敗固より予め期すべからずと雖も、苟くも平昔「いつも」の志を行ふときは、敗るるも亦た悔るなし、兎に角余は海外に於て、一の日本を作る考なり、其國家重大の問題たることは、諸君の了知せられんことを望む所なり」(同上『樸溪津田先生伝』、342-343頁)。  
前号で紹介した石橋禹三郎の移民事業の大構想は、津田の考えと近いものがあつたので、1894年2月東京で會つた兩人は意氣投合したのである。若本千綱の考えは、次号以下で紹介するが類似点は少なくない。

以上は、タイに移民を送り出そうとする日本側の理由であるが、丁度その頃、タイ側にも移民を大歓迎する事情が生じていた。とりわけ、農業担当大臣に前後して就任したパーサコラウオンとスラサックモントリーは日本移民を待望した。

パーサコラウオンが農務大臣に任命されたのは、訪日から帰國したものの1888年11月1日。1892年3月29日には、農務大臣から文部大臣に転任した(前任文部大臣のダムロン親王は内務大臣に転じた)。パーサコラウオンの後任農務大臣は、スラサック(在任期間…1892年3月29日-1897年3月14日の5年間)。有力王弟の一人、プラチャク親王の諺言(スラサックの部下であるイタリア人陸軍士官学校教官C. F. G. 氏が國王に許可を求めることなくシンガポールからダイナマイトを持ち込んだのは、スラサックの王位簒奪クーデター準備の一環であるという事実無根の話)により、スラサックが陸軍司令官を辞任して間

もない頃のことであつた。  
パーサコラウオンとスラサックが農務大臣であつた19世紀末は、広大なチャオプラヤー・デルタの灌漑・新田開発が会社方式で本格的に開始された時期である。両大臣は土地、農業の責任者として同デルタの開発を監督した。

1889年1月17日に、サイイサニツティウオン親王(以下サイイ親王、1846-1912)、イタリア人商人 Grassano Canal Irrigation Company (タイ語ではシヤム運河(Kalong)・用水池(Khu Ne)掘削会社)は、タイ政府と次のような契約を結んだ。契約期間は25年、運河を掘つた両側それぞれ40センチ(1センチは40メートルなので、1・6キロ)までの土地(即ち両岸合計3・2キロ)で既保有者がいない土地を保有し、自由に販売することができ、浅くなった古い運河を浚渫した場合は、舟から通行料を徴収できる。工事は、2年以内に着手すること、利益の20パーセントを國庫に納入する



1896年に広汎にタイ調査をした平山周

こと、会社はタイ裁判所の管轄下に置かれること(Act No. 5 of 1894)。

1896年11月17日に、5世王(チュラーロンコーン王)夫妻を招いてランシット運河の竣工式典が実施され、サイイ親王は次のように奏上した。即ち、会社は1889年1月17日の契約ののち測量を実施し1890年から主に機械力で掘削を開始した。チャオプラヤー河に近いプレームプラチャーコン運河からナコンナーヨク川まで、

幅16メートルで1137センチ(45・48キロ)を掘削し、東西にそれぞれ水門も建設した、水門の御蔭で一年中、耕作ができるようになった。運河の両岸の土地保有権は販売され、水田耕作も開始された、と(同上『文書』)。

サイイ親王は2世王の孫の一人で、5世王とは従兄弟、シリキント現王妃の母方の曾祖父である。5世王の侍医係として信任あつく、また、1890年か



ら3年間海軍司令官代理を務めた。

宮崎滔天(第2回訪タイ)に同行して1896年4月2日-8月10日の間、在タイ、広汎にタイ各地を見学した平山周(1870-1940)はランシットの新田開発を次のように紹介している。

「暹羅國中膏腴(こうゆ)の米田は、湄南(メナム)河の兩岸南北凡そ四百五十哩(マイル)」、東西凡そ五六十哩は所謂湄南平原の地にして、就中最も膏腴なるは湄南バンパコン河中間一帯の地なり。プラツムタニー(バトムターニー)は即ち此中間一帯の地にして、盤谷府を距ること遠からず。然れども人口の不足と土人の懶惰とは、王畿近傍の沃土すら尚ほ空しく野象の徘徊するに任せり是に於

てか国内の有志者相謀つて私金を醸出し、親王チャワサイ

「サーイ親王」殿下社長となりて開渠会社を組織し政府に請ふて右荒原の譲渡を受け、溝渠「運河、水路」を開鑿して灌漑の便を通じ、至廉の地価を改めて米作希望者に売渡さんとす。

盤谷府より北東北に向ひ湄南河を遡ること凡15哩陸路直徑凡そ10哩の地に至れば丘陵なく、樹木なく、一望只茫々たる平坦の荒原にして、東はバンパコン河より西は湄南河に達し、北はサラボリー「サラブリー」より南は暹羅湾に達す、而してバンパコン河と湄南河との東西の距離は、最狭部30哩、最広部38哩此東西の全距離と盤谷府を距(さ)る凡そ3哩の北に達するの間、これ即ち盤谷開渠会社の溝渠開通地なりとす。本溝渠の

設計は、大渠2条、中渠1条、小渠19条、都合22条、大渠の幅

16メートルにして、其事業費は40メートルに付220テコール「バーツ」、測量費が合して250テコール、中渠の幅は12メートル其事業費は40メートルに付175テコール測量費を合して凡そ200テコール小渠の幅は8メートル事業費は40メートルに付50テコール、測量費を合して70テコールなりとす。現今獨国機関士数名を雇ひ、開鑿器30馬力の蒸気機関2箇を備へ付け、毎月18メートルを掘り、

薪(しき)りに開通に従事す此の事業の着手は廿余年(ママ)以前にして、既に開通したる溝渠は凡そ80キロメートル(ママ)に上れり。既開の溝渠の深さは概ね10フヒート乃至12フヒートにして、大中2溝渠には小蒸気船を通ず。溝渠開通の上、其地方の土地売渡代価は小渠に接したる土地面積1ライに付2テコール、中渠に接したる土地4テコール、大渠に接したる土地5テコールの定めにし

て、現今売払済の面積は凡そ25万ライ、概ね支那農民にして歐洲人としては只甸國(ママ)

米作会社の一あるのみ。此地方は湄南河とバンパコン河の両面より、積年洪水の作用に因て北部地方の山土を流出し、遂に此の大平坦の地を作為したるものにて、今猶年々洪水氾濫して地味を改良す。地質は灰質の凝結性ある粘土にして、断て砂礫なく、其二三呎「フイート」下面は黄色の粘性土なり、土地膏腴に過ぎて開鑿初年の米作は稻茎のみ、非常に成長し、秋実却て

少なし、次年よりは相当の收穫あり、二三年に至れば他部に比類なき收穫を得べし。嗚呼暹羅には斯の如き良好の開墾地ありと雖も、人口少なくして只支那人の蹂躪するに任するのみ、支那人の性質は彼れ素より之れ知り、而も猶支那人の移住を欲するか、抑も亦之を如何せんと欲するか(平山周「暹羅の農業」、『太陽』第4巻第6号、1898年3月20日号、192194頁)。



連載  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XIV

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

1890年代半ばにおける日本人の暹羅殖民の経緯について、詳細に書いたものとして

は、宮崎滔天(1871-1922)が南蛮鉄の筆名で、『国民新聞』の1897年7月24日号から8月4日号まで8回に分けて連載した「暹羅殖民始末」が唯一存在するだけである。

1906年以降何回か刊行されている入江寅次郎の邦人の移民史に関する浩瀚な著作、『邦人海外発展史』も、暹羅殖民に関しては、宮崎の上記著作を、出所を明示することなく殆どそのまま引用しているにすぎない。戦後に出版された何冊かの日タイ関係史も、この域を出るものはない。

宮崎の「暹羅殖民始末」は、『宮崎滔天全集 第五巻』(平凡社、1976年)の一部句読点を変更した以外は、そのまま採録されている。

史である「暹羅殖民始末」を書いたのは、彼が最終的に暹羅から帰国した1896年6月から一年余を経た時点である。彼は「暹羅殖民始末」の冒頭を次のように書き出している。

「題して暹羅殖民始末と云ふと雖も、実は殖民失敗の歴史なり。余筆を擧げて此事実を記し、以て世上の鑑戒に供せんと企つるもの数回、而して今日「1897年7月」に至るまで之を敢てせざりし所以のものは、筆勢自ら他の失行悪為を暴露せざるを可らざるを以て、強て沈黙を守りたるに是れ因るのみ。」

彼は沈黙を守ってきたが、友人から、「暹羅殖民の失敗の故を以て、直に断じて成立す可らずとなす」という考えが広まっている現状では、今後暹羅殖民の成功を志す人も出てこない、暹羅殖民の失敗の原因を詳しく説明した方が、今後暹羅殖民に志ある人の助けとなるし、日暹

両国関係上の利益ともなると言われたことがきっかけで考えを変えた」と述べている。

宮崎が沈黙を守ったという期間は一年余に過ぎず、果たして沈黙を守るといふ表現は適切なのだろうかという疑問も起こるが、しかし旧暦明治33年12月に生まれた彼が、明治35年に、数え年わずか33歳にして赤裸々に自らを暴露した自伝、『三十三年の夢』を発表したことを見ると、彼にとつては、一年余は十分に長い期間かもしれない。

彼は「暹羅殖民始末」のなかで、「他の失行悪為」、とりわけ、三谷足平(日本人会初代会長と言われる医者)のそれを、口を極めて非難している。その当否は、次号以降で検証することとしたい。

「暹羅殖民始末」は、暹羅への第一回出稼移民として、1894年末に岩本千綱が連れてきた山口県の32名、第二回として

1895年10月に宮崎滔天自身が連れてきた熊本県の20名に先立ち、1894年(但し宮崎は1893年と誤記)6月に津田静一の暹羅移民が実現間際で頓挫したことを残念がっている。

それによれば、暹仏事件に刺激されて渡暹した岩本千綱と石橋萬三郎は、間もなく日本人の暹羅への農業移民を企画した。農業、土地の責任者であるスラサックモントリー農商務大臣の知遇を得た兩人に、同大臣は「皇太子チャウファ親王(チャオ・ファア・ワナルナヒット)の御料地サツパトム(サツパトウム)に移民耕地の試験をなし、事業拡張するに従ひ北方サラボリー方面十里四方の地を以て大殖民の基礎となす可し」とアドバイスをするともに、サツパトムの250余町歩の借地を斡旋した。即ち、スラサック大臣は、まずバンコクの当時の東部郊外に当たるサツパトムで試

作をした後、運河掘削会社の新田開墾地に入植するように勧めたのである。

サツパトム「サツパトゥム」は、ローマ字で発音通りに表記すれば、Sa Pathumであり、今日でもSa Pathum（サイアム・パラゴンとセントラル・ワールドの間にある寺院）やBang Sa Pathum (Sa Pathumとも表記される。サイアム・セントラーの裏のパータイ通り沿いにある宮邸、現在はシリントン王女のお住まい)として、その名を残している。

1894年当時、Sa Pathumと



宮崎滔天 (1871-1922)

称された区域は、上記を含む相当に広大な地域であったようである。斎藤幹の「暹羅国出張取調報告書」34頁は、「サツパトム」(「サツパトゥム」は盤谷より南南東に向ひバクナム「サムット・プラカーン」に赴く鉄道路線に沿ひたる両面の地を総称す。茲にサツパトム停車場あり四面既開の水田にして東南面は少距離を隔て湄南河に接し東北面は一望既開の水田たり総地面の状況は斎藤幹が一応望視したるところにては水田八分を占め小樹林其二分を占む。此小樹林は即ち農民の生息すると



津田静一 (1852-1909)

ころにして茅屋諸所に出没す」と記している。現在のフウアラムポーン駅近くを起点として、パークナムに至る鉄道が、現在のラーマ4世通りを走っていた。この鉄道のチャオプラヤー河側(東南面)とチュラーロンコーン大学やルンピニ公園側(東北面)の両面を、Sa Pathumと称し、既墾の水田と農家が点在する純農村地帯であった。現在はバンコクのど真ん中である、この地域の1世紀前の姿である。

岩本と石橋は、サツパトゥム試作の出稼ぎ移民の供給源を海外移民に熱心な津田静一に期待した。宮崎の「暹羅殖民始末」は次のように記している。

「明治廿五年(ママ、正しくは廿六年)十二月、石橋萬三郎氏は其準備員として暹羅を発して帰朝せり。同氏は帰朝後幾多の経営を経て、終に肥後の津田静一氏、大阪の大三輪長兵衛氏に面して暹羅殖民の希望を説くのを機会を得たり。津田氏は夙に欧米の山川を踏破し東洋の友邦を視察して、世界の大勢は遂に人種競争の方面に帰着するを看破し、而して我日本をして此の人種競争場裡に立たしめんに、海外殖民を以て第一の急務と信じ、殖民の事を以て自家の天職と自任せるの人なり。是を以て氏は言論に實際に其所任を賞かんと企図せること十年一日の如し。乃ち暹羅に於ても、是れより先き己に氏の実弟熊谷直亮氏をして其実情を視察せしめたるを以て、石橋氏の希望は直に同氏の容るる所となり、氏は先づ三十名の農夫を率ひて一年間の農事試験をなし、其結果を見て暹羅殖民の大方針を定めんと決し、廿六年(ママ、正しくは廿七年)六月を期し同氏自ら

移住試民を引率して渡暹せらる可きの約整ふたれば、石橋氏は暹羅殖民の爲めに適當なる統領を得たるを喜び、植民地に於ける諸種の準備を整へ、津田氏の来着を待ち受けんが爲めに先発して再び暹羅に入れり。

石橋氏の再び暹羅に入るや、岩本氏を始め同志暹羅建築会社員佐々木寿太郎氏及暹羅語学生山本安太郎の諸氏と共に諸般の準備に力を尽し、津田氏来暹の期日即ち六月初旬には万事略ぼ整頓に帰したれば、津田氏に書を寄せて何時入暹するも差支へざる旨を報じたり。津田氏よりは事情に依りて渡暹の期猶七、八ヶ月延引す可き旨の返答を得て之をスリサツク「スラサツク」俟に通じ、猶ほ諸氏相議して岩本氏をして行て津田氏の準備を助けしむることに決し、茲に岩本氏は其任務を帯びて行李勿々帰朝の途に就くこととはなりたり。

岩本氏の帰朝するや、津田氏の郷里なる熊本に行かず、直ちに神戸に到りて別に移民の募集に着手し敢て津田氏と相聞せざるものの如く、唯自家神戸に於ける運動の模様を報ずる而已に

して、絶て津田氏を消息を伝ふることなし。在暹の諸氏は於是猶津田氏に書を寄せて其近状を尋ねたるに、同氏は愈々一身を此業に委せんが爲めに一家の処置と強固なる準備を要するを以て、猶多少の時日を遷延す可し、国家の爲めに忍耐我慢す可しと云ふの意を以て答へたれば、在暹の諸氏亦大に心を安んじて、唯時日の回転を楽み津田氏入暹の期の来るを待望せり。

翌二十七年四月の交に至り、津田氏は愈々其準備も整ひ渡暹の期正に遠からざるに至り、此れを在暹の諸氏に報ず。諸氏亦成功の近きにあるを喜び大事愈々其緒を開けんとす。時なる哉命なる哉、朝鮮の變亂は延びて日清の衝突となり、戦雲將に東洋の天地を掩はんとなす。壮士は切りに剣を磨し兵馬は盛に荒原に嘶(いなな)く。此の時に當つて九州の各地義勇団の組織あり。熊本の壮士亦困難に際して人後に落つるを恥ぢ、奮つて私に義勇奉公の団体を作る。而して人皆津田氏を推して是れが統領たらんことを乞ふ。津田氏辞すること再三、衆聴かず。氏終に統領の任に就く。爾來氏国

難に処して寧日なく、続ひて朝鮮行となり、暹羅殖民の事茲に氏の手を離れざる可からざるに至る。是れ実に暹羅殖民事業に取つては一大不幸の出来事と云ふ可し。若し此變動なく、津田氏の熱心と経験ある手腕をして、業(すで)に暹羅殖民の事に従はしむること得たらんには、今や已に幾千の農夫を移住せしめて、暹羅の平原に日本村を作り、以て暹羅に於ける日本の勢力を進め、併せて同国の英傑スリサツク侯をして愁眉を開かしめたるを得べかりしに、天未だ暹羅に幸せず、困難を起して津田氏の暹羅行を止む、惜む可き哉。

岩本氏は神戸或は東京に於て暹羅殖民の事に就き多少の運動を試みしと雖も、当時日清の戦争正に酣なるの時にして一人の殖民の事に耳を貸すものなく、止むことを得ず三十二名の移民を山口県に募り、二十八年一月渡暹の途に就けり。

岩本氏三十二名の移民を引率して盤谷に入るや、同志の士は皆殖民事業の愈々其実行を見るに至らんとするを喜び、相勇んで移民をサツパトゥムの耕作地に移する準備を努めたり」(『国民新聞』1897年7月25日及び27日号)。

宮崎が暹羅に関わったのは、1895年10月以後であり、その前年に生じた津田静一の暹羅殖民計画不成功の経緯の記述は自らの実見ではなく、石橋や岩本などから聞いた話に基づいている。上に引用した部分の記述は、宮崎の誤聞もしくは聴取不十分のためか、彼の常識に問題があったためか、或は単に注意不足のためか、執筆時から僅かに3、4年前の出来事を記述

しているにも拘わらず、とんでもない誤解をしている。更に話の辻褄を合わせようとして、誤解の上塗りをしたために、ありもしなかったことを書き込んでいく。この外にも、津田の暹羅殖民が中止に追い込まれた原因を日清戦争にあると誤認して、「天未だ暹羅に幸せず、国難「日清戦争」を起して津田氏の暹羅行を止む、惜む可き哉」と全く架空の話を記して意味のない大袈裟な概数を並べている。ジャーナリストや学者先生の時事解説など、昔も今もせいぜいこの程度だと言ってしまう。それまでだが、現場にいた人から聞いたとか、現場で見聞したとかいう話でも、眉唾で臨むべきだという教訓の一例であろうか。

朝することなどはあり得ないことである。津田の来暹予定は当初から変更されることなく27年6月もしくは7月の1回のみであったが、宮崎はその1年前を津田の最初の来暹予定日だと誤解してしまったために、いつまでも来ない津田の手助けのために岩本を帰国させたが、岩本は津田を訪ねなかったであろうか、岩本帰国後暹羅に残った石橋らが津田に直接問い合わせ、津田から暹延の返事を得たのであるとかいった創作で辻褄を合わせた。更に、ひどい間違いは、津田が暹羅殖民を諦めたのは、日清戦争への彼のコミットメントの所為であると書いていることである。次号に紹介する津田静一自身の佐々友房宛手紙から、実際に朝鮮半島で日清間に軍事衝突が生じたのちも、津田は2、3年の予定で単身暹羅殖民調査に出发することを熱望して金策に明け暮れていたが、1894年6月にはその途も尽きていたことは明瞭である。

宮崎の「暹羅殖民始末」の記述によらず、筆者の調査結果に基づいて津田の来暹中止の経緯の概要を記せば次のようになる。既に本誌9月号で見たように、明治廿六年(1893年)末、津田の実弟熊谷直亮が来暹して、岩本千綱の助力を得てサツパトゥム入植地貸借の契約書を得た。同じ頃、石橋萬三郎は、別の用事も兼ねて帰国し、津田や大三輪長兵衛「183511908、大阪の大実業家で朝鮮政府の顧問でもありアジアへの関心が深い人物」を訪ねて暹羅殖民を説き、94年2月頃には津田の合意を得た。津田は、サツパトゥムでまず実験的に稲作をするために数十人の農夫を引率して来暹する準備に着手した。ところが、元来資産家ではない津田が、この事業を行うには出資者を募るか、借金するか、あるいは公的機関の資金援助に頼る必要があった。しかし、津田の金策はどの方法でも成功しなかった。

民協会の評議員仲間であるが、訪暹後、岩本千綱は信用できない人物であるとして、岩本の殖民計画の口車に乗せられる危険を戒める手紙を、4回に渡って津田に送った。それだけではなく、稲垣のパトロンの存在であった松方正義「183511924、総理大臣2回歴任、当時伯爵」に津田の軽率への憂慮を訴えた。松方は津田の先輩である安場保和「183511899、熊本藩士出身、福島・愛知・福岡各県令県知事、元老院議員、北海道長官、貴族院議員男爵」を通じて注意するように促した。また、殖民協会会長の榎本武揚「183611908、当時農商務大臣」子爵も津田の暹羅殖民は成功の可能性が低いとして慎重さを求めた。94年6月末には、津田の渡暹殖民計画の金策は完全に行き詰まった。その1月前の5月頃には津田に渡暹を催促する手紙を出した岩本千綱も、津田を見限った。同年6月末暹羅を発った岩本は神戸を拠点として、自力での移民募集に方針を変更した。

連載 29  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XV

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

本誌11月号で、宮崎滔天著「暹羅殖民始末」(1897年)が述べる、津田静一の暹羅殖民中止の説明は事実とは異なることを指摘し、事実の概要を示した。本号では、その根拠となる資料を紹介したい。

その資料とは、津田静一(185211909)が衆議院議員の佐々友房(185411906)に宛てた手紙である。津田と佐々友房は、ともに熊本県士族の教育者であり、政治的な同志であるだけでなく、炭坑や殖民事業への投資・経営も共に謀る親しい間柄であったようである。国会図書館蔵資料室所蔵の「佐々友房関係文書」中に、津田から佐々友房宛てた、多数の書簡が残されている。書簡は当然手書きで、しかもくずし字であるから判読に難儀したが、数日眺めて全文を読めるようになった。

まず、津田の佐々友房宛手紙から、津田の実弟熊谷直亮が岩本

千綱の援助で獲得したというサツパトゥムの農地貸借契約書なるものと、津田の暹羅殖民計画との関係を見てみたい。

本誌9月号に、1894年2月3日付で熊谷直亮は「条約書「借地契約書」も既に殖民地第一駐留場と定めたる殺破塔「サツパトゥム」より稲南「パークナム」迄の所は受取申候」という便りを日本の複数の新聞社送ったことを紹介した。しかし、奇妙にも、その契約書なるものを、津田は終に目にするのができなかったようである。

1894年5月31日付の津田から佐々友房宛の追伸(6月1日付)に、津田は暹羅政府雇いの画工大山兼吉(翠松)が香港の東洋館から5月24日付で郵送して来た手紙をそのまま書き写している。それは、熊谷が大山からの借金の形に渡した免状(借地契約書)を大山が一時期帰国して在京中に新橋の江木写真

館に預けたので、津田が弟熊谷の借金を払って請け出して欲しいという内容である。

事もあるように、熊谷は訪暹の最大の成果である答の暹羅政府からの免状(借地契約書)等を抵当として、大山からバンコクで借金したのである。熊谷がその金を何に使ったかは不明だが、渡暹関係の必要経費以外であったことは間違いない。多分バンコクでの放蕩のためである。

熊谷は暹羅に行く前から既に「酒色のとりことなつた。度々差押えを喰う羽目となり、そのたびに兄津田静一のとこに無心に行つた」(飯田幸之助「鉄城熊谷直亮の片影」、『日本談義』(熊本市)1970年3月号、53頁)という有様であり、人格破綻者に近かった。

弟思いの津田は、弟をバンコクに殖民の下見に送り、更には暹羅の新天地で殖民に従事させて更生させようと考えたのかも

知れないが、既に熊谷の症状は手遅れであったようだ。津田は、大山の手紙を書き写した後、続いて、次のように書いている。

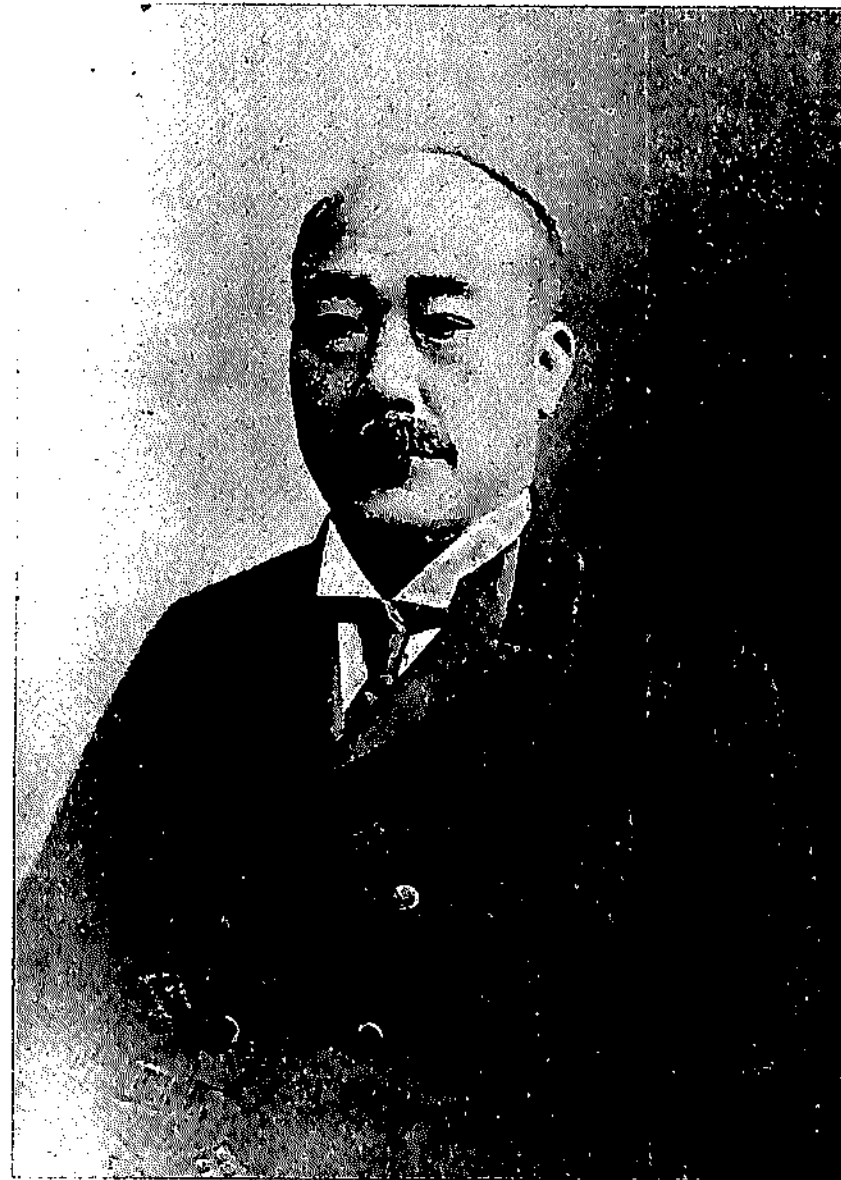
「生「津田」は大山に対して最初より熊谷の不義理は誠に懇謝するの外無之。併し生に取りては是迄熊谷の爲めには充分世話も致し及ぶ文の義務は相居候末に付最早何分力に及び不申依て其負債弁償は引受兼申候。尤も生も目下殖民事業を目的とし不日暹羅へも渡航の積なれば必ず該地に於て御面会可申其茲に至れば生が大山に対し尽くすべきの義務は相居可申候云々と答書仕出置きたり。然るに前文書「大山の香港からの手紙」中に殖民の免状及び〇(ママ)状は江木方に預置云々と有之候は定めて該書類は熊谷持参の物にて該書類なくしては生の出発六ヶ敷是非之を受出に相違なきものと想像し此品抵当の姿にて江木より借金し自分「大山」出



発せしにはあらざるか 然れども生は殖民を為すには如是眞偽も分らぬ書類を當てに着手は不仕 愈々となれば自分は別に暹羅政府と直接に談判したる上ならでは浮「うか」りとは仕掛り不申覚悟なれば右の書類は生に對しては何の効能もなかるべき

も其品なくしては何時迄も熊谷の帰還出来兼可申且つ該約定の結末付かざるに熊谷の実兄たる生より更に土地の約定すると申す事甚だ都合あしく事毎に妨害を受け困却の至に御座候此れは貴耳に達したりとて無益の事なれども御念の爲め一寸書添置候

也「(国会図書館憲政資料室「佐々友房文書」文書番号64-26)」。さて、津田から佐々に宛てた手紙のうち、暹羅殖民のことが書かれていた最初のものは、1894年5月22日付の次の書簡である。



佐々友房 (1854-1906)

「閣下彈劾上奏案の改は吾党千載の遺恨なり……高橋「長秋」1858-1929、熊本士族、明治・大正時代の実業家で大阪百三十銀行副頭取、肥後銀行頭取などをへて熊本電氣を創立」も昨日着熊之電報有之候当分彼の炭山の件及び小生の運動費一条に付御相談致したるべく目下鼓鑼交々起り干戈相接するの際に於て數千里外拓殖の事に迄貴慮相煩候は誠に心外の次第に候へども是亦吾党將來の大事業に付何卒一挙手一投足の勞を御取り被下度願上候……小生出発も愈々七月初旬よりの処に決定唯今専ら人と金との募集に奔走中にて此頃天草へ出張御領村の山崎順七へ五百円の借金相談に及置候処若し其承諾を得候はば借用人には小生相成候へ共保証人には大兄「佐々」高橋大谷の御三名を御依頼致度大谷は最初より好んで此事を勧誘せし位の都合ゆえ無論連署は異議無之甚だ御難題ながら大兄にも御一判被成下度「なしくだされたく」願上候唯今の処にては人員は最早農夫丈は容易に相揃可申く此上は運動費の一点に相成申候

岩本千綱よりも細簡到來頻りに小生等の渡暹を相待居候模様に見え右の都合なれば石橋よりの相談に決して異議有之間敷推考仕候

尤も過日來稻垣満次郎よりも暹羅及香港より數度の來信有之候彼此の書狀参照して該地の事情大略相分り此上は新嘉坡領事斎藤幹の來信を一見したる上詳細の手配相定め可申候斎藤は此程一ヶ月間余暹羅にありて該地の実況を取調べ頗る事情に通達せしものと被察候間其報告は大に参考に相成申候

此激戦中に如何しく候へ共少しく間隙も有之候はば自由党と御交渉の上彼の移民保護(地方税を以て)の一件はよろしく御尽力被下度渴望仕候

先は要用迄如此御座候頓首五月廿二日夜 靜一

友房様格下「(前掲「佐々友房文書」文書番号64-25)」。この書簡から次のようなことが判明する。即ち、暹羅殖民計画は、津田一人の事業ではなく、佐々友房、高橋長秋ら熊本の同志たち(吾党)との共同事業であること。7月初旬に暹羅に出発する予定で、引率する農

夫および渡航費用の金策に奔走しているが、農夫を揃えることは簡単だが、渡航費用等(運動費)は借金を申し込み中であり、もし借金ができた場合には佐々等にも保証人になって欲しいこと。岩本千綱からも渡暹を切望するという手紙が届いたので、岩本と石橋萬三郎の考えは一致していることが確認できたこと。4月に訪暹した稻垣満次郎の書簡も到來し、あとは同時期に訪暹した斎藤幹の報告書も待つてゐること。衆議院議員である佐々は自由党側と交渉して、政府が移民保護に資金を出す制度を成立させて欲しいこと、である。

続いて、津田は、5月31日付の佐々宛書簡に次のように書いている。

「拜啓高橋「長秋」より數回の細簡到來同人も折角病人をも差置上京運動致候炭山「借金して炭坑開発のために山林を購入れたが、その利子の工面と思われ」殖民の兩件共悉く思ふ様に相運兼廿八日より悄然として帰坂せし由誠に残念の至に御座候此上は炭山に付ては本月の利払中々困難に可有之候又殖民

の方も大三輪の方にて相調不申では実に他に考案も想付不申候高橋も必ず何か研究中には可有之候へ共未だ何等の模様も報知し来らず生も此場に臨み最早中止すべき時機に無之是非共七月よりは三四名丈にても出発せざれば世間に面目を失し可申何卒一臂の御助力を仰申候尤も当地にては大谷株のお世話氣に成り五百円丈は生が爲めに工夫するとして目下周旋中には候へ共例の通り金銭の事は手に握らざれば安心出来難く今以天草より帰熊せざれば(今夕帰熊の由)何とも相分不申候議會の都合も變な事に相成益々御苦心の可有之候彼の自由党の井上侯攻撃の如き其心情の卑劣なる實に可憎の至にて近來の光景中に想像の所及に無之候乗筏浮海の念愈々鬱勃たるを覺ふるのみに御座候今度の如き景況にては一寸相願

置候地方税費目の中に移民費を増加云々の件は逆も閉会迄に御提出六ヶ敷かるべく責めて該件にても通過致居候はば後來多少の便利を得可申に此事如何哉と憂慮〇〇「2字読めず」申候高橋の來信には稻垣「満次郎」より暹羅殖民の事に付何か松方「正義」侯迄申告せしと有之候如何の意見なるや承知致度該書狀御写取出来候はば一見相願度候尤も生の方へは盤谷香港上海より前後四回の通信有之候總て東京にて聞きし如く牡丹餅が棚から落ちる様は無之。岩本「千綱」等の云ふ所は容易に信を措き難し。斎藤「幹」領事の報告を一読せよ。先づ生身該地に渡航し実地の調査を遂げたる上に農夫を送れ等の主意に有之候而して斎藤領事が暹羅の農商務次官と問答の筆記を読むに今度岩本等の借用せりと唱ふ

るサツパツムの官有地は岩本等は随分永代借地の約束にて武百六拾町歩を悉皆借受る事出来ると云ふも齊藤の聞く処によれば普通の約束は一兩年間長くても十年間位にあらざれば貸与し難し且或部分を人員に依りて貸与する迄にて決て始より全部を貸すにあらずと答へたりと云ひ其辺に少々差違有之候へ共齊藤

の間は公務上の事なれば彼よりも表面の答をなし岩本の方は私交上の話ゆゑ都合によりては十年を経過せし後は更に継続するも差支なし又渡来人民多数ならば全部を貸すも差支なし位に言ひたるにはあらざるか此等の事は熊谷持参の契約書「熊谷が大いに借金の担保として渡してしまつた借地契約書」に明記しあ

るべく候へ共それとても未だ真偽を判じ難く或は岩本等始め欺かれ居るやも難料確實の事は自ら其地に至り調査するにあらざれば安心難致併し土地の事に至ては逆も農夫数名をして一ヶ年間を試耕せしめざれば善悪の見込相付兼可申候何等の国に於ても生「津田」老人の探検は差して効能有之間敷間一考仕候併し

出発前には是非共齊藤領事の報告は一見致度と存じ過日新嘉坡の方へ照会に及置候へ共十日頃迄にあらざれば回答接手覚束なく依て若し誰ぞ懇意の人が有之候はば外務省移民課長原敬へ該報告書を請はせ其要領文を御知せ被下間敷哉此事は生に取りては大関係の要件に御座候（前掲「佐々友房文書」文書番号64126）。



高橋長秋 (1858-1929)

津田は暹羅殖民計画を公言しているの、面子上からも暹羅殖民を止めるわけにはいかないが、それに先立つ渡航費用の工面に苦勞していること。資金源としても期待した、大三輪長兵衛は暹羅殖民計画に乗らなかつたこと。渡航予定農夫の人数は既に数十人規模ではなく数人に減少させたこと。訪暹した稲垣満次郎から4回に渡り、暹羅殖民には慎重を要するという主旨の手紙が来たこと。サツパツムの借地契約の内容は岩本千綱の調査と齊藤幹領事の暹羅農商務次官「ブラ・プラチャーチー・ポリバーン」への質問に対する回答の間で乖離が大きく、岩本調査には永代借地の如く書かれてはいるが、齊藤領事への回答

では長くても10年が限度、12年で終わる可能性もあるというもので、その真偽は自分で現地に赴き調査するしかないことと等々が上記書簡の内容である。

10月号で紹介した、齊藤幹の暹羅国出張取調報告書が述べるようにサツパツム地域は、既に開墾された水田地帯であり、借地予定の土地も皇太子名義の官有地とはいへ、小作人が耕作している土地に違いないから、日本人に貸与する場合の条件も小作契約と大差ないものになると考えるのが常識的であろう。

その後1894年6月5日付で津田は次の佐々宛書簡を出した。

「生「津田」が殖民の計画も将さに成就せんとするに方り稲垣満次郎より数回の書状到来頻りに憂慮の意を報じ来り且つ榎本子「爵」よりも齊藤新嘉坡より外務省へ私信の写を添へてサツパツム官有地の殖民に適せざることを岩本の信用し難きことを説き生の出発を止め強て渡暹するならば生単身にて往けと申来りたり就ては生に於ては進退

維谷「これきわまる」の域に陥り頗る困却を極申候。生の考にては岩本等の言ふ所固より一に信じ難しと雖も齊藤等の觀察も重に視線を岩本の身上に注ぎたるより暹羅全体に關しては或は精密の視察相届りたる処あるやも難料く其等の事に付ては数日前東京に帰着せし大迫砲兵少佐の考案大に取るべきもの可有之と存候間御繁忙中には候へ共何卒一日同氏を御訪問の上篇斗御話合被下度尤も同氏は軍人にて重に兵事上の点に注目せしものには有之候へども全体の國勢には頗る精通し居且つ岩本の事もよく存居候へば大に都合よろしく但殖民に關しては前の調査としては無之岩本等の調べを信じ居る哉難料候へ共該調査と今度齊藤領事が農商務次官と問答の筆記を比較するに段々相違の顯有之其事岩本を疑ふの眼にて見候へば非常の差違の如くなれども冷眼且内情迄も洞察して之を見れば決してそれ程の差別は無之況や生が今度の筆は該調査を根拠として思立の義にあらざることは今春已に調査は信ずるに足らず殖民の成否は生の人物如何に存すと申せしによりても御

承知相成るべく生は只大体の觀察上より着手する迄にて他人の調査は余り当には致し不申候右の如き事情なれば生の胸算には全く一の頓挫を來し候是非共農夫を連越さんと云ふも外務省に於て必ず故障可有之候不得已單身又は兩三名位の同伴にて出発せざるを得ず何も不日高橋帰暹の上相談の積に御座候（下略、内容は、福岡県の山林取得に關する手続きの相談）

六月五日 静一 友房様

二伸 未だ御胸算も相定ず可申候へ共何時頃迄に御帰熊相成候哉一寸御知被下度候也（前掲「佐々友房文書」文書番号64127）。

上記書簡の主旨は次のようなものである。即ち、稲垣の外にも、齊藤幹領事の報告を目にした榎本武揚子爵からもサツパツムの農地は殖民計画には不適なことを、岩本千綱は信用できないという注意が津田に届けられた。しかし、彼等は主として岩本不信から、暹羅殖民不適の意見を發しているだけであり、暹羅の実情が殖民に不適なのかどうかは十分には検討していな

い。同志の佐々は、暹羅の実情に通じている大迫尚道「185411934、鹿児島県土族、後陸軍大將」砲兵少佐を訪ねて話を聞いて欲しい。津田も、岩本の暹羅殖民に關する調査を全面的に信じているわけではないが、津田自身の全般的な觀察から暹羅殖民は成功の可能性があると認める。しかし、移民保護令が施行されている今日、多数の農夫を暹羅に移民させるには、齊藤幹等の意見もあり外務省等の許可は得られそうもないので、まずは数人で行くつもりである。それにしても、先立つ資金が必要なので高橋が熊本に帰つたのち相談したい。

暹羅殖民事業を共にする同志と津田が考えていた佐々は、有力者の意見に従い同事業から手を引く決意を、6月7日付の次の書簡で津田に伝えた。「年号不明（廿七年か）六月七日附佐々友房氏來狀摘録（上略）扱「さて」暹國行之件に付一之障害は稲垣氏之通信なり松方伯「松方正義伯爵」は安場氏「安場保和」迄榎本子「榎本武揚子爵」は井上毅氏迄各々伝言有之切に大兄之事を危み居られ

侯由就ては生「佐々友房」は少々異な考も起り申候云々（下略）（能田益貴『樸溪津田先生伝纂』津田静一先生二十五回忌追悼会、熊本、1933年、16頁）。

それでも津田は暹羅殖民を諦めず、6月20日付で佐々に次の書簡を出した。

「前略」朝鮮の事は京城を守り仁川を占め其間の連絡線を取り我軍威を揚げたるの一点は流石我國の軍備上の進歩を現したるものにて拍手呼快の外無之是迄の運動は上出来なりし侯然るに唯憂ふるは彼の李鴻章袁世凱の老練才幹あるものと我が伊藤「博文首相」大島「圭介朝鮮公使」の柔弱老朽なるを比較するときは仮令軍略上にては幾分の勝を制するも政略上に於て或は鼻毛を抜かれ或はゴマカ

サレするときは後日に至りて意外の恥辱を加ふるに到り可申今より杞憂に堪へ不申候御意見如何生「津田」渡邊の事は他の事は最早悉皆準備相整候へ共肝腎の運動費一も相調不申今夕高橋と出会合見可申候へども同人よりは已に落胆の書面も参り居候事なれば中々望少く困却の至に御座候尤も一昨夜松平氏迄は伝言仕置候間同氏よりも御聞可相成候が此上は榎本子爵等の注意も有之たる末に付先づ農夫同行は相止め身身旅行位に致し一応馬來暹羅等の地に赴き充分実地の調査経験を積み其上に着手することに致し度相考申候就ては其運に致候へば逆も借金押しては都合あしく矢張遺棄仕ては差支へざる金を携帯せざれば

甚だ不自由の次第に付彼の公山弗擾的の手段に拠り参謀部か内閣の中より云々の事は出来申間敗戦後細松平氏より御聞取の上若し御同意ならは高嶋「高島綱之助子爵」1844-1916「榎本」武揚等の諸子へでも御相談の上兩三年間を維持する丈の御世話相叶間敷哉生は決して多額を要する訳には無之一ヶ年の処八百乃至千円も有之候はば充分に可有之候生が殖民の企も最早大分世間に音高く相成此際に至り出発出来兼候はば大に面目を失候次第に付何卒御一考の上御助力被下度懇祈仕候（筆者下略）六月廿日 静一

友房様（前掲「佐々友房文書」文書番号64-30）。上記書簡から、津田は朝鮮半島で日清の戦端が開かれた後、2-3年の予定で單身馬來・暹羅に單身殖民調査に行くつもりであったことが判る。しかし、資金の用途が全く立たず、参謀本部か内閣の機密費に期待をかけ、佐々に獲得のため助力を依頼した。津田は日清戦争のため関心を暹羅殖民から朝鮮に移したとい

う、宮崎滔天の説明は間違いであることが判る。津田は榎本の忠告に従い農民の同行は止めることにしたが、今まで暹羅殖民を唱えた面子もあり何としても單身でも暹羅に行く必要を感じた。しかし結局、最後の希望であつた機密費を得ることができず、資金がないため暹羅行きは中止したものと想われる。即ち、津田は金策に失敗して暹羅に行くことができなかったたのである。ところが、好都合にも日清戦争が生じたので、彼は在タイの人々には渡邊でできない言い訳として、日清戦争を使つたかも知れない。在暹の岩本や石橋などからの一方的な話を聞いたままに書いた宮崎の暹羅殖民始末では、津田の渡邊がでなかった理由を日清戦争としたのである。津田は、榎本や稲垣満次郎らの岩本不信の情報から、暹羅に連れていく農民数を減少させ最後はゼロにして單身行くことにしたのも、あらゆる金策（大三輪らの出資、借金、国の機密費）がことごとく失敗して、行く意思はあつたものの先立つものを準備できなかったのが真相である。



連載③  
バンコクの日本人  
日本人タイ研究者第一号  
岩本千綱 XVI

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

岩本千綱が1894年前半に期待した、津田静一の暹羅殖民計画は結局成就できなかったことを前月号に記した。ここで、もう一度、岩本千綱自身の日本人移民事業計画を、順を追って見ておきたい。

1893年9月23日号の朝日新聞は、岩本千綱の同新聞社宛の次のような書簡を掲載した。

「岩本氏の音信（暹羅時事）。暹羅の事に熱心なる岩本千綱氏は吾社に向て左の一書を送り越せり

拜啓八月十日發兌貴社新聞一昨三十一日一読仕候処「吾を治るものは吾ならざる可からず」なる社説項中「暹羅の事起るや東洋に關する者果して何の爲す所ありたる亜細亞に民たる者果して何の試る所ありたる云々」と有之候得共岩本は仏艦が盤谷を封鎖せるを載せし官報を見るや胸中万斛の感慨を懷き孤劍即發上海に到るに及び石橋が同意

見を齎「せい、持つての意」して渡航するに遭遇し相携へて再び盤城に入候

右の都合に付き國としては何の爲したることもなきかは存せず候得共前項亜細亞に民たる云々は事實相違と相考候。何となれば現に日本國民たる我々兩名は早く既に当地に墾け付けたれ共不幸事に及ばざるを以て當國各大臣へも来意を通じ尚ほ善後策に於て聊か計画仕居候乍御手數御訂正相成度候也明治廿六年九月二日

暹羅國盤谷府文部大臣  
バスカラウラングセー  
侯爵邸にて 岩本千綱  
同 石橋禹三郎  
好男児、愛すべし余輩は悦んで命に應ず即ち茲に之を掲げたるを以て訂正の意味なりと解せよ。而して岩本氏は更に引續きて左の如く記せり。暹羅の現況説き得て痛切人をして慄として亦慨せしむるものあり。前項は理屈に亘り候得共更に

貴社説の如く今回暹羅事件「1893年7月13日のパークナム事件」は東洋に邦する者の袖手傍觀して不相濟儀に有之候。可憐なる此產象國を自儘勝手に引掻き回し居るは第一英國にして次は日耳曼「ゲルマン」なり。支那人は上下に行き渡りて商權を握り居り候得共彼れは何れにても金さへ儲ければ足れりと心得東邦の成行き杯には毫も心配せず。汪生「岩本千綱」は英仏政略の方法を比喩して云はん。甲は詐偽取財にして巧に法網を脱し而かも得る所多く、乙は持兇器強盜の如く逮捕に逢ふこと速にして得る所は却て少しと。暹仏交渉事件は殆んど其真面目を現したる者なり。

汪生が当年二月一日帰朝の初某々名士に予め今日あるを説きたれ共耳を傾くる人はなかりき。尤も此事變の遠因は仏國が安南を維持する爲めには是非共湄江「メコン」迄を奪掠すべき必要より生ぜしは勿論なれ共其

近因は実に言語に絶えたることにて西洋人が如此東邦人を馬鹿にするかと思へば実に慷慨悲憤に堪へず候。

日本にては追々國會開期も近付き例により各政党的喧嘩も可有之候得共希くは閥閥「げきしょう」の争を止めて眼を外に注がれ度。就中暹羅の如きは政府も議員も亦た他の國民も一致して条約完成領事設置のことに不相成ては数年を出でず意外の変体を來すべき乎。人は雞林「朝鮮」を以て東洋禍機の伏する所と申候得共汪生は暹羅を以て東邦治亂の焦点かと確信仕候。右に付き今度当地在留重なる人々と相協り農商務大臣「ラヤー・スラサックモントリ」同次官「プラ・プラチャーチー・ポリバーン」等に請願の上充分なる保護を受けて耕作又は牧畜地借用の運びに致候間追々我日本の有志者を糾合し新日本村を拓き緩急に應ずる予備をなし置く見込に候。

7月27日 2013.1  
7月27日 2013年1月



英仏独を始め西洋諸国種々の国旗を翻す大なる家屋を見るに付け、馬車を駆て意気揚々と傍若無人なる白哲人に逢ふに付

け、裸体素足の東洋人が顔「くず」れ傾きたる矮屋に出入し己れが住むべき土地なるにも係らず恰も喪家の狗の如く狐鼠

「こそ」々々として逃ぐる様子に軒下を往来する憐れ果敢なき有様を視るに付け、轉「うた」た感慨の情に堪へず。然るにても

日本に生れ何不自由を知らざる輩に此惨状を知らしめ度思ひ候。抑も新聞は社会の耳目殊に貴社の如きは内外に信用を博され



チャオ・ブラー・スラサックモンリー 1852-1931  
(『太陽』1896年8月5日号口絵より)

候得共国家の爲め十二分に対外策に就て御尽力被下度。今日仏国が湄江迄を要求し英國が之れに故障を為さざるは不日己れが湄南「メナム」迄を略取するの備を作る者と御承知有之度候。尚ほ珍敷ことあれば御通知可申候不。

暹羅の事に就て義捐を需む。右岩本石橋両氏はまた東邦協会に左の一書を寄せて江湖の義捐を需めたり。

仏軍が盤谷府を封鎖せしの報一たび我々の耳に達するや弘袂「ふるい」起ち単に剣と精神とを齎「せい」し直に盤谷城に入る。遅し矣平和の条約既に入るを告ぐ。

退て日本に帰らん乎我々の志にあらず。然思すれば今回平和の裏には他日の禍機蟄伏するを見る。仍て我々は地を城外に占め永住の策を講ぜんと之を暹羅農商務大臣同次官其他名士に協る。悉く非常の賛助を得難地「ばくち、たちまちの意」沿岸の地五十余町を借し五ヶ月間に米穀菓物の培養に着手するを致せり。若し期を誤れば或は我々の言欺罔となり、小は日本の国体を汚し、大は東亜の緩急に応

ずるの機を失するの恐れあり。憂國の名士諸君伏して冀くは我々の微衷を諒し応分の義捐をなし此国家事業を扶助せられんことを。果して若干の金を得れば統々借地の区域を拓め幾千人の植民を爲すこと実に半歳を出でざるべし。我々は國家の爲め仮令斃るも諸君の恩に酬ゆるには必ず草を結ぶべし。恐惶(ママ) 敬具。

岩本氏の意見書。又右岩本氏は日暹通商条約締結、領事設置の必要に就て一の意見書を陸奥外務大臣に贈(ママ) れりといふ(朝日新聞1893年9月23日号、句読点は村嶋追加)。

岩本の上記朝日新聞及び東邦協会宛書簡には、欧州勢力に軍事的経済的に脅かされるアジアの一国、シヤムの命運を同じアジア人として自分自身の問題と見る姿勢、経済的に優位な西洋人に対し卑屈なアジア人の振る舞いへの不満、シヤムに数千人規模の日本人村を作りシヤムに一旦事あれば日本人を率いて援軍に馳せ参じようという気概、日清戦争直前の朝鮮半島よりも、シヤムの方が東アジアの火薬庫であるという東アジア情勢

認識が示されている。

なお、岩本らは、読売新聞にも同種の書簡を送ったことは、1893年9月23日号の読売新聞の小記事から明かである。しかし、読売は朝日ほどには岩本に代わって宣伝する労はとらなかつた。

スラサックモンリーは、シロム路とサートン路の間のスラサック路、その近くのB.T.S.の路のシラサック交差点などに、その名を残し、現在のバンコクに住む者にもなじみ深い名前である。

スラサックモンリーは1852年3月28日に軍人貴族の家に生まれ、仏暦2431年(1888)少将、仏暦2443年(1890)陸軍司令官、仏暦24435年(1892)農商務大臣、仏暦24439年(1896)チャオ・ブラー・爵位、仏暦24441年(1898)中將、同年現役軍人を退職年金受領、仏暦2468年(1925)元帥、仏暦2474年(1931)7月1日に死去した(タイ官報48巻1083頁、1931年7月5日号)。

彼はデーウワン外相らと共に、1885年に命を賭してもチュエーロンコン王を守ることをエメラルド仏の前で誓約した一人であり、同王の信頼が厚かつた。1880年代後半、30代半ばの彼は、王命で当時タイの属領であった、ルアンプラバ(現在ラオス領)やディエンビエンフー(現在ベトナム領)などに侵入した太平天国の乱残党の中国人(チン・ホーという)の征伐で名を上げた。1892年3月29日満40歳で農商務大臣に任じられ、同省が一時廃止される97年3月14日まで在職した。その後は、官職に就くことなくビジネスに従事した。彼は、軍人としての才能のみならず、商才も豊かであった。彼はサラーデーンに洋館(バーン・サラーデーン)を有し、それに隣接した広大な土地を所有していた。彼は、1896年前後にこの土地の地価を上げるため、それまで運河を小舟で来るしか交通手段がなかった所有地にフアンポン方向から道路を建設し、更に土地の一部を女学校建設用地に売却した。学校が出来ると人の往来が

多くなり、それに伴って様々な商店もできるので、地価を上昇させることができるというのが、彼の狙いであった(タイ国立公文書館資料 R.S. 8. 1. 33)。現在のスラサック路付近、即ちサートンやシーロム地域の一部も、彼によって開発されたものと思われる。彼が、バンコクの偉大な初期デベロップパーであったことは間違いない。バンコク発展史における彼の役割について詳しく研究すれば、博士論文も書くことが出来ると思われるが、残念ながら本格的な研究はないようである。

スラサックが死亡した時に出版された葬礼記念本には、彼の自筆のチーン・ホー征伐の回顧が掲載されている。しかし、それ以後については何の記録もない。これはスラサックが子供に

恵まれなかったためかもしれない。現在広く知られている彼の写真も晩年の1枚だけであり、本号に掲げる写真は、日本の雑誌『太陽』1896年8月5日号の口絵に掲載されたもので、珍品である。この写真を『太陽』に提供したのは、岩本千綱だろうか。この写真掲載からも、当時のタイ在留邦人とスラサックとの絆の深さをうかがうことができる。

スラサックが、岩本、石橋、宮崎らの在タイ日本人壮士と交わり、スポンサーとなった理由は、彼の軍事的及びビジネス的目論見からであろう。ビジネスに關しては、当時大開発中のバ

ンコク北方の新田には耕作農民が不足しており、日本の農民を大量に導入したいという考えを有していたことは、既に紹介した。他方、軍事的には、シャムの独立を仏や英が更に侵すようなことがあれば、岩本らが日本人村の壮丁多数を率いてシャム防衛軍に参加することを期待したのもと思われる。これは、恰も山田長政の時代を彷彿させるような話であるが、当時のシャムの軍隊の実情を考えると十分に現実味のある話であった。

当時のタイには近代的徴兵制は未だ導入されておらず、軍隊の近代化もスラサックが率いた近衛軍などを除けば進んでいなかった。バンコク市内には、軍隊として組織化された少数民族集団が一定の地域に集住しており、一旦緩急あれば、これらの少数民族集団の長が指揮する軍隊が動員される体制になっていた。例えば、グラント・パレスの上流に位置するサムセーン地区に集住するベトナム人(1830年代にベトナム王朝のカトリック弾圧を逃れてバンコクに移住して来た人々、その中心はフランシスコ・ザビエル教

会)は、その長の指揮下に兵士として組織されており、平時は居住地に近いドクシット宮殿の警備を担当していた。彼らの軍事組織は、徴兵制が1905年に導入されて解体し、ベトナム人たちは、バンコクの近県やナコンサワン、ピチット県などの遠方にまで農民として移住した。中にはベトナムの故郷に戻った家族もいる。

また、現在は高速道路が建設されて分断されてしまったが、ペップリー路からバンタットトーン路に入り、その西側(右手)地区(バーン・クルア)に集住したチャム人(ムスリム)は、シャム海軍の主要な兵士供給源であった。

更に言えば、タイ軍は少数民族をタイの軍隊の一部として利用する便法を1980年代初期に至る迄探っていた。すなわち、1950年代にミャンマーから逐われて、チェンライなどタイ北方に移動して来た中国国民党軍は、タイ政府の対タイ共産党との戦闘に参加した。例えば、1980年前後におけるカオ・コー(ベッチャブーン県)山地の激戦に参加し死亡し

た国民党将兵の白亜の記念碑がカオ・コー山中の道路脇に建立されている。タイ政府の対共産党戦闘に参加した国民党軍の将兵はその功績に応じてタイ国籍や永住権を与えられ、不自由な難民の地位を脱することに成功した。

岩本のシャム殖民の計画に話を戻すと、彼の殖民計画は、必ずしも1893年7月13日のフランス軍艦とタイ軍との間のチャオ・プラヤー河口の戦闘、即ち、パークナム事件(暹羅事件)を契機としたものではない。1893年2月にタイから第1回帰国の直後、岩本は、「暹羅に入りし以来夫(か)の文部大臣バスカロン(パーサコラウオン)侯の紹介にて農商務大臣陸軍中将モントリー伯(プラーヤー・スラサックモントリー)」と北部殖民の事を約し陸軍大將たる皇族其他貴族の賛成を得たり約せし所は荒地四百坪に對し年租二十五銭を払はば灌漑に供する溝渠の開鑿等諸種の耕作準備は農商務省負担して之を貸さんといふに在り」(朝日新聞1893年2月24日号)と語っている。

とにかく、上述9月23日の記事ののち、朝日新聞は次のように続報を載せている。

「岩本氏等の暹羅事業。岩本千綱氏等が暹羅に於て土地を借受け植民事業を企てる由は去る九月二十三日の紙上にも記せしが、同国政府の農商務大臣スリサク伯も大に之に賛成し同省にては盤谷府より旧都アユチア及び北方サラボリ(サラブリー)迄メナン沿岸の地を貸下ぐることになり、猶其鞏固を図るため文部大臣と共に国王殿下(ママ)に上奏して裁可を受ける都合なりと。因に記す同日の紙上に岩本氏等が東邦協會に書を寄せて江湖の義捐を需むる様記せしが、右は敢て広く江湖の義捐を需むる次第にはあらず、特に協會に書を寄せたるに止まるとなり」(朝日新聞1893年11月30日号)。

93年12月には津田静一の実弟、熊谷直亮が殖民調査に来タイしたが、津田のシャム殖民は結局実現しなかった。岩本らのシャム殖民に津田が参加することには危惧を表明して、強く反対したのは、東邦協會幹事長の稲垣満次郎であった。稲垣はシン

ガポール領事の斎藤幹に同行して、94年3月31日にバンコクに到着した。西洋紳士の稲垣は、岩本から山田長政ばりの話をあらためて聞かされて哑然かつ暗然としたのであろう。

岩本は、94年正月を熊谷直亮とともにパーサコラウオン邸で過ごしたが、その後スラサックモントリー農商務大臣のパーン・サーラーデーに住居を移した。岩本等がこの洋館を曉鐘閣と称したことは次の記事から判明する。

「盤谷府の曉鐘閣 盤谷府居留本邦人の有志者は先頃来同国農商務大臣の旧官邸を借受け之を曉鐘閣と名づけ純然たる日本人の一住居を構へ日暹両国民のため計る所あらんとて目下夫々奔走中なるが其閣員は石橋禹三

郎、山崎喜八郎(肥前人)岩本千綱(土佐)の三氏なりと」(朝日新聞1894年7月18日号)。

津田のシャム殖民に見切りを付けた岩本は、次の朝日記事のように、94年6月末、自ら日本で移民者を調達すべくバンコクを離れた。

「暹羅国通信(七月七日盤谷府発) 殖民事業。岩本中尉は事業上の用件を帯び先月末(1894年6月末)新嘉坡及び香港等へ出張せし故、石橋禹三郎氏等専ら諸般の準備を為し居れり。事業の基礎も稍々強固となりたれば遠からざる中に愈々着手すべし」(朝日新聞1894年7月31日号)。

連載 ③  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XVII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

1月号で、「盤谷府居留本邦人の有志者は先頃来同国農商務大臣「スラサックモントリー」の旧官邸を借受け之を暁鐘閣と名づけ純然たる日本人の一住居を構へ日暹両国民のため計る所あらんとて目下夫々奔走中なるが其閣員は石橋萬三郎、山崎喜八郎（肥前人）岩本千綱（土佐）の三氏なり」と（朝日新聞1894年7月18日号）と紹介した。

スラサックモントリー邸は、サーラー・デーンにあったので、バーン・サーラー・

デーンと名付けられていた。

サーラー・デーンは、シロム通りがラーマ4世路に突き当たる場所付近、BTSの駅名にもなっている。バンコクの住民で知らない人はいないであろう。サーラーと言えば、強烈な日射や降雨をしのぐために道路脇に作られた屋根と柱だけから成る吹き通しの休憩所（バス停を兼ねることもある）や庭園内の東屋が最も身近なものだと思ふが、県庁舎をサーラー・カーンと呼ぶように、サーラーは立派な建物にも使われること

もある。

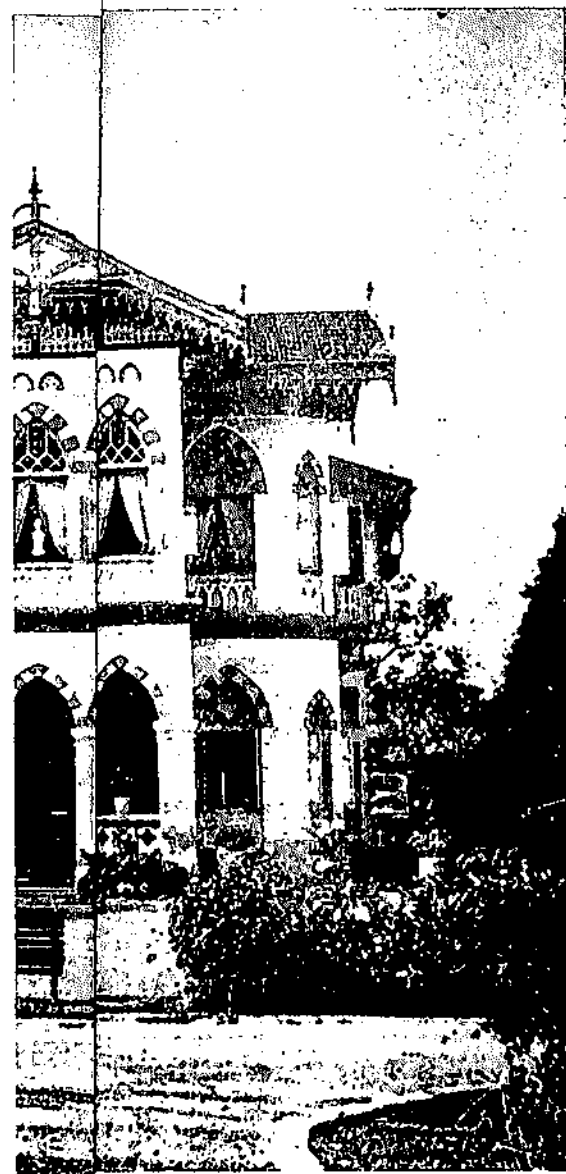
サーラー・デーンという地名は、この地に駅舎（サーラー）の屋根が赤色（デーン）に塗られた停車場があり、駅名もサーラー・デーン駅と称されたことに由来するという。この鉄道は、タイ最初の鉄道で、現在のフウアラムポーン国鉄駅玄関前方を起点（バンコク駅）として、チャオプラヤー河口のパークナム駅（サムット・プラカーン）が終点。デンマーク人等が出資して、1893年4月11日に開通した、21・3キロの

民営鉄道である。この鉄道の始発駅バンコク駅の次の停車場は、2・3キロ離れたサーラー・デーン駅であった。この鉄道は、1936年に契約が切れ、タイ国鉄に吸収されて1960年1月1日まで存続したというが、この路線に乗り込んだ経験をもつ邦人が現在何人おられるだろうか。

この地をスラサックモントリーがチュアロンコン王（ラーマ5世）から下賜されたのは、1887年頃で、その時には下賜地には既に洋館が建っていた。その洋館は、西欧人の持ち物であったが、王室財産局（内務局）が購入し、それがスラサックに下賜されたのである。この洋館（写真参照）が、いつからバーン・サーラー・デーンと称されたのかは判然としない。スラサックはその後バーンラックに新たに屋敷を建



在りし日のバーン・サーラー・デーン（暁鐘庵）



造して移り住み、バーン・サーラー・デーンと周辺の100ライ（16ha）の土地は1897年には内務局の所有に帰した。1910年に、この洋館は、チュアロンコン王から今度内務大臣のチャオ・プラヤー・ヨマラート（1862-1938）に下賜され、彼の邸宅となった。ヨマラートはチュアロンコン王からワチラーウット皇太子（後のラーマ6世王）のイギリス遊学中の教育係を仰せ付かった人物であり、ラーマ5世、6世、二代の国王から信頼された寵臣でもあった。6世王はバーン・サーラー・デーンをしばしば訪問し、同所は社交の中心であった。

1922年、畿内省は内務省に合併され、ヨマラートは内務大臣に転じた。ヨマラート内務大臣は、6世王の在位15年（1925年）を記念して、バーン・サーラー・デーンからラーマ4世路を挟んで真向かいにある土地、現在のルンピニー

2013.2  
2013.2





チャオ・プラー・スラサックモンントリー  
肖像 (朝日新聞1896年7月14日号掲載)

岩本千綱が引率した32名を、同会社の係員として引率して1895年10月17日にバンコクに到着した宮崎滔天は、直ちに暹羅に石橋萬三郎を訪ね、同庵の住人となった。宮崎はその著『三十三年の夢』(初版1902年)の中で暹羅庵に入った際の様子を次のように記している。

「船の湄南河を遊ること三三時程の処、則ち是れ暹羅の首都盤谷なり。余「宮崎」は先づ独り上陸して石橋萬三郎君の処に到り、岩本「千綱」君の紹介書を出し示し、且告るに來意を以てす。彼曰く、岩本は実に無礼極まる奴なり。殖民会社の要務を帯て帰国し、既に半歳を過ぐるも回(かえ)り来らず。諸般の事一も約を履むことなし。之が爲めに信をスリサック「スラサック」侯に失し、違約料を商人「Bangkok Dock Co.」の、同社と暹羅殖民会社は1895年2月18日に日本人熟練職人6名の供給契約を結び前渡金210ドルを受け取った。岩本はこ

れらの職人を含む移民募集のため帰国したが、契約を履行できず」に取られ、信用財貨両つながら失墜して如何ともすべきなく、終に先月を以て殖民会社を解散するに至れり。故に僕殖民会社員として此事に関するを得ずと雖も、一箇石橋の資格を以て君の事を助けんと。言動活発、宛然古壯士を見るの感あり。乃ち余が爲めにビールを抜いて其安着を祝し、部下の士二三を率いて船に來り、共に小舟に転乗して湄南の支流を遊り、棕櫚「しゅる、椰子の意と思われ」芭蕉「バナナ」の下を潜りて暹羅庵に入れり。暹羅庵は農商務大臣スリサック侯の旧邸にして、日本殖民会社「暹羅殖民会社」の「用」の爲めに貸与せる所。古びたりと雖も壊損に至らず。規模宏壯、儼に千人を容るるに足る。而して侯の下臣の其傍にあるもの、皆意を尽して誠懇の情を致せり。又以て侯が日人を愛重せることの深厚なるを見る可きなり」

この宮崎の記述からは、暹羅庵とは、宏大なバーン・サーラー・デーン洋館そのものであることが判る。大谷津直麿が岩本千綱と連名で、暹羅殖民会社を代表してバンコク・ドック社(現在のサートン橋のバンコク側たもとにある小公園が、同社の旧址)と熟練工6人供給契約を結ぶに当たって、バンコク・ドック側に渡した名刺には「Gatsui, B. Sc. c/o Late Residence of H.E. Phya Surisak」と記されているので、1895年2月18日時点で、スラサックはバーン・サーラー・デーンには住んでいなかったことは明かである。冒頭に引用した、1894年7月18日号の朝日新聞記事でも既に「農商務大臣の旧官邸」とある。スラサックはバーン・サーラー・デーンからバーン・ラックに転居後、空き家となった同邸洋館本体を日本人に貸与したと考えて間違いない。宮崎滔天の第2回シヤム渡航に同行して、1896年4月2日に来タイした平山周らも、この洋館(暹羅庵)に住んだが、彼らは同年8月10日にバンコクを引き揚

公園の地(當時は水田)を会場として一大博覧会を企画した。しかし、6世王の急逝のため、博覧会は開催されず、造成中の会場は未完のまま放置された。その後、現在ボクシング場がある辺りは貸し出され、スワン・サヌックという遊園地が営業された。同遊園地が撤退したのち、ルンビニー公園として整備されたのである。ルンビニー公園の正門入口に、大きな6世王像が立っている理由は、このような因縁のためであろう。ヨマラートの死後の1939年、バーン・サーラー・デーンは大蔵省管轄下の王室財産局に売却され、いくつかの協会の事務所として使用された。1966年に至って、王室財産局は、民間と共同出資でドウシットターニー・ホテル建設のため、バーン・サーラー・デーンを取り壊した。1894年から2年余、岩本千綱ら、在タイ邦人の拠点であったバーン・サーラー・デーンは、遂にドウシットターニー・ホテルとして生まれ変わったのである。

岩本、石橋らがバーン・サーウオン邸から転居して来て、暹羅庵もしくは暹羅庵と名付けて住んだ建物は、バーン・サーラー・デーン洋館そのものであったのか、それともその敷地内の別の建物であったのだろうか。暹羅庵の住人の一人となつた、山崎喜八郎(1866-1912)は、1894年4月19日に長崎を發ち、同年5月19日にバンコク到着、ところが日清戦争勃発の報に接し「魂飛び腕躍る」の情を抑えきれず、同年8月27日バンコクを飛び出し日本に戻った。彼は来タイ当時のバンコクの日本人の様子を次のように書いています。

「予が始めて当国「シヤム」に渡來せし當時に於ける盤谷府在留日本人の数を挙げれば男七八名、女未詳(凡十數名)之に予が香港より同航せし四名の男子を加ふるに過ぎざりしなり其後予が滞在中前後相踵「ついで渡航せしもの六名ありき。惣じて當時日本人の住宅として一家を営む者は女子三戸何れも淫を囑「ひさ」ぐ醜業婦なりとす、男子は別に一戸を構「かま」ゆる者なし則ち或は文部大臣「バーン・サーウオン」官宅内に寓するあり又は他に下宿する等他種々なりし、而して予は友人岩本千綱、石橋萬三郎の二氏と共に現農商務大臣「スラサックモンントリー」の旧邸内或る一屋を借受けて之に住し名けて暹羅庵と稱し日夕東洋の大勢を論じ輿垂の経緯を説きて長劍空しく匣中に鳴りし感なくむばあらざりき。當時在留日本人の職業を大別すれば暹羅國政府雇美術教師(彫刻、繪画)に大山翠松、嶋崎天民、伊藤義正の三氏通弁として山本安太郎、山本新介(ママ)の二氏建築師に佐々木寿太郎、田山九一の二氏、総て是等の人々が新渡來者に向つて種々の便宜を与へたること実

に少々にあらざる可し其他有志家あり医師あり語學研究者あり又は單に視察の爲め渡來せし者等種々なりとす」(山崎喜八郎『図南策実歴譚』(鍾美堂支店、東京、1899年)。

上記山崎の記述からは、暹羅庵は洋館そのもののなかだろうかとは判らない。

広島の海外渡航会社が暹羅殖民会社「Bangkok Dock Co.」スラサックモンントリーの物心両面の支援を得て岩本、石橋、大谷津直麿らが1895年2月にバンコクで創立した会社」との共同事業のために募集した、日本人第2次シヤム移民20名(第1次移民は1894年末に

げた。

この後、同館に日本人居住者はいなくなり、スラサックは、翌1897年に、バーン・サーラー・デーを内務局に売却したのである。古くかつ由緒ある、この洋館が今日まで残っている。芸術局によって歴史的建造物として登録され、簡単に壊しはできなかったであろうが、我々はドゥシットターニー・ホテルを目にして、かつて水田の中に屹立した暁鐘庵を思い浮かべるしかない。

話は前後するが、1894年6月末、岩本が日本に移民募集のため帰国した後、同年7月26日、バンコクの日本人は暁鐘庵において、日清戦争の勝利を祈願する大会を開催した。その様は次のように報道されている。

「在暹日本人の遠征遙祝会 暹羅在留の日本人は暹にルートル電報に天津条約衝突の結果として日清両国間の交戦は遂に列国に向て布告せられたり云々とありしを見て一同感奮の余り去る七月廿六日午後六時より同国農商務大臣の旧邸なる大広間に於て遠征遙祝会を開きたり先づ其室内の正面には天皇陛下の御影を安置して左右には大日本帝国万歳、遙謝遠征軍之労と大書せる二旗の白旗を掲げやがて一声の爆竹と共に山崎喜八郎氏袴羽織の打扮(いでたち)にて正面に起立し全員に代て開会の辞を陳べ次で悲痛慷慨なる一場の演説をなせり右畢て一同聖影の御前に整列して最敬礼を行ひ將に

其席に復せんとせし折から恰も好し同国文部大臣バース「パーサコラウオン」侯爵より一封の電報を贈(もたら)したり是に於て石橋萬三郎氏は場の中央に進みて高らかに之を讀上げたなり其文に曰く

支那の運送船は日本軍艦の為に沈溺せられたり

一同之を聞くや拍手喝采の声は屋外も震ふばかり異口同音に帝万歳、陛下万歳、遠征軍万歳を連呼し一座宛(あたか)も狂するが如く歓呼の聲暫しは鳴も止まざりし暫くして佐々木寿太郎(ささき・ひさたろう)氏徐に起立し日本人が暹羅に對する將來の希望及び注意等を陳べ次に山本安太郎氏の暹羅服を着用し次に鈴木錠蔵氏日本服にて執も一場の演説をなし夫より一同配膳に就き献酬正に酣(たけなわ)なる頃或は剣舞或は舞踏或は吟詩等銘々思ひ思ひの余興ありて同夜十二時過ぎ退散したり又同夜会合せし有志者は石橋萬三郎(長崎)、松野恭三郎(同上)山本安太郎(東京)(佐々木寿太郎(東京)島崎千太

郎「天民」(東京)田山九一(香川)大山兼(翠松)(東京)樋口次郎(愛知)山崎喜八郎(長崎)鈴木錠蔵(茨城)松田惣一(東京)の十一名にて此他疾病事故等にて欠席せし者六七名ありしと近着の同地通信に見ゆ」(朝日新聞1894年8月24日号)。

山崎喜八郎は、長崎県諫早の井崎に生まれた士族。父は神職にあつた。13歳にして両親を失い、叔父の世話になり諫早中学に学んでいたが、青雲の志抑え難く、友人の執行徳郎らと共に1883年東京に出奔。アルバイトで生活しながら私塾で英語などを学んだ。更に1889年にアメリカのサンフランシスコに渡航、3年間農業、牧畜、開拓等を实地に就いて学び、92年5月に帰国した。その後、宮崎の新聞社の聘に応じ赴任したが、94年4月に長崎を發つて来タイした(諫早市史編纂室『諫早市史、第四巻』、長崎、1962年、57-58頁)。山崎の経歴は、同じ長崎県出身の石橋萬三郎にそっくりである。



連載 ③  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XVIII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

岩本千綱らの在バンコクの邦人が、スラサックモントリの旧邸(バーン・サーラー・デー)を借りて暁鐘庵(又は暁鐘閣)と名付けて住んだ期間は、1894年半ばからの2年足らずに過ぎなかった。しかし、暁鐘庵は、借り家屋であるとは言え、バンコクにおける日本人が自ら保った最初の拠点であつただけではなく、ここで最初の日本人団体(日暹協会)が結成されたという点でも重要である。

1900年7月31日に発行された岩本千綱の著作『仏骨奉迎始末』に掲載された出版広告でも、暁鐘庵に言及している。同書は、中見出しには、岩本千綱・大三輪延弥合著と記されているが、奥付にある著作兼発行者は、岩本千綱の一人の名のみである。なお、奥付の岩本の住

所は「高知県高知市南新町3丁目17番地」である。大三輪延弥(僧名・信哉「しんさい」、1868-1952)は1900年当時、京都におり、最後は鎌倉浄光妙寺住職であつた。上記『仏骨奉迎始末』巻末には、八染道人著『日暹通商私史、一名暁の鐘』と題した、次の出版広告が掲載されている。

「日暹交通の基原は遠く元龜天皇の往古にありと雖も近時日暹公(ママ)通の基原は果して何れに在るか暁鐘庵中に志士飢に泣き盤谷市中僧侶の残飯に腹を充たし猶ほ且つ桜花郷男児の消操を全ふして遂に日暹両国条約の締結を催せし前後の顛末に至ては鬼神為に哭し婦孺為めに起つ概あり。仏骨奉迎の挙其挙実には美なり而して此美事を紹介せしは實に帝國公使其人なりと雖も抑も亦た暁鐘庵裡の余氣

之を至さしめずんばあらず今や外交に教法に益々日暹二者を接近せしめんとするの氣運に際して此私史の出づる豈に偶然なりとせんや世の志士仁人たるもの正に該著によりて暁鐘庵裡の志士が日暹交通に貢献せるもの果して一字一涙不可再読底の実歴を見よ」。

八染道人とは岩本あるいは岩本・大三輪両名の筆名と思われるが、この本は広告のみで刊行はされなかつたようである。もし、出版されていれば、暁鐘庵に拠つた初期在タイ邦人の生活や行状を記した貴重な資料となつていただであらう。

先月号で紹介した、山崎喜八郎『図南策実歴譚』(1899年12月25日発行)の巻末にも、次の3冊が近日出版として予告されている。即ち、『南方経緯策』、『暹羅国事情』、『日暹

交通史』である。この三著は、山崎を著者もしくは情報提供者として刊行されたようである。これら三稿だけでも、どこかに残つていて欲しいものである。

さて、刊行された上述『図南策実歴譚』の中で、山崎は日清戦争の勃発に興奮して急遽帰国のためバンコクを發つた日の1日前(即ち、1894年8月26日)、スラサックモントリを新邸に搬入のため訪問したことを述べ、更にその日、自分の寓居たる暁鐘庵に戻つてから、日暹協会の発会式に参加したことを次のように記している。

「夫れ暹羅に於ける予が一応の視察は粗々之を了せり而かも南亞の妖靈鬱鬱として尚常に安からざるものなきにあらずと雖

クニクニ 2013.3

150

149

山崎嘉八郎著「國南軍實録」  
(1899年刊)の巻末予告

叢書

一南方経緯策 全一冊 近日出版

一暹羅國事情 全一冊 近日出版

一暹羅交通史 全一冊 近日出版

八采道人著

日暹通商私史 一名暹の鐘

日暹交通の基原は遠く元龜天正の往古にありと雖も近時日暹交通の基原は果して何れに在るか曉諭庵中に志士凱に泣き盤谷市中那智の殘飯に腹を充たし猶ほ且つ櫻花郷男兒の清涙を全ふして遂に日暹兩國條約の締結を催せし前後の顛末に至ては鬼神爲に哭し婦孺爲に起つ所の慨あり  
佛骨奉迎の舉其舉實に美なり而して此美事を紹介せしは實に帝國公使其人なりと雖も抑も亦た曉諭庵裡の餘氣之を至らしめずんばあらず今や外交に教法に益々日暹二者を接近せしめんとするの氣運に際して此私史の出づる豈に偶然なりとせんや世の志士仁人たるもの正に該著によりて曉諭庵裡の志士が日暹交通に貢獻せるもの果して一字一涙不可再讀底の寶座を見よ

岩本千綱著「佛骨奉迎始末」(1900年刊)の巻末出版広告

旧の親交を加へられて共に國家の爲めに充分の自愛慎重あらんことを望めり、伯は曾て懷悍老嫗「ラオス」の賊乱を平けてより爾來久しく陸海の兵権を総握して、才德兼備、良將軍の誉れ高かりけるが、遂に倭者の忌む処と爲り、王位を窺ふものなりと讒せられてより、令名又昔日の比にあらずと雖も伯が當國第一流の人傑として内外人の共に稱道する処たるは勿論、陰然の聲望國を擧げて殆ど其一身に集まれりと云ふ又實に過言にあらずるを信ず、此日伯は予を延ひて別室に請じ、漫乎たる其容、温平たる其言、徐ろに口を開ひて曰く、君今進んで印度各地の遠征を擧げて遽然直に暹羅の程に上らんとす、知らず故國の風物又大に英雄を要するあつて然るなき乎、予曰く假令全く然らざるも、否、良しや我輩大馬の徒素より論ずるに足らずと雖ども、此時此際、徒らに漫遊之れ事として一日を異郷の外に空しくするは情に於て頗る忍び難きものなきにあらず、況や暹

般の視察的遠征の如き元と之れ男子業中の一些事のみ之を異日に譲る又敢て遅しとするあらざるに於ておや、即ち予が勿々突然此決意を爲したる所以なり、貴下幸に之を諒せらるるあらん乎、伯快然首肯すること一再、須臾にして独り何事おか呻吟するものの如く、沈黙無言之を久て忽ち机上より一個の砲丸を採り出し、自ら之を手にし、且つ曰く、這は昨年暹仏破綻の際仏國軍艦より我バクナム砲台に向けて放撃したる彈丸の一なりとす、當時余は僅に今の農商務の閑職に閑蟄せられて國家の爲めに万丈の大氣焰を吐出し、電雷の快手を奮う事を敢てする能はず、遂に以て万世不滅の國辱を取るに至れり、遺憾未だ曾て此の如く大なるはなく常に之を座右にして目觸るる毎に予が心腸を九回せしむるの想ひあり、願くは君察する處あれ、今や臨別の一言、唯だ相互に自愛之れ事とし異日再会の機を俟つて再び真個の英雄を談ずるの愉快あらんことを期望するにあるのみ

云々。噫々僅に此一事を以てするも伯が人物の如何を想見するに余りありと可謂矣、誰か知らむ他日暹天の南方に當つて儼々の威名を爲すものありと聞かば少なくも伯、其一人たるを免がれざることを。斯くて予は尚暹羅に於ける前途の事など相語り相話して而して辞去す。寓に帰れば既に在留同胞の有志五六相会して予の帰るを待つあり、蓋し予て日暹兩國間の親和公益を謀り併せて在留日本人の保護團結を主とするの目的を以て同志の計画に係る日暹協會の發会式を本日にて舉行せんが爲めなり。發会式終はるや諸氏は予が爲めに盛なる送別の宴を開き例の豪飲飽食、或は剣を操て而して舞ふあり、案を拍て而して吟絶、如斯にして而して遂に一夜を徹するに至れり、明くれば八月廿七日午後三時、同行者の一人鈴木錠藏氏と共に諸友に送見せられて清國汽船孫權号に便乗し汽笛一聲煙を残して而して盤谷を發つ。

新聞『日本』1894年9月23日号は、日清戦争への在タイ日本人の献金を次のように報じている。

- 「在外外人の献金、在暹羅の本邦人及び伊國人より献金を出願せしが本邦在留の外国人のみは是迄承認せしも在外外人の献金は今回始めてなるを以て多分相当の方法を規定し承認するなるべし」と云ふ其献金者は左の如し
- 一金五拾円 在暹羅盤谷府伊國人 エススワラル「正しくはM. Sivarao」
- 一金五拾円 同
- 本國人 佐々木寿太郎
- 一金拾五円 同

- 同 大山翠松
- 一金拾貳円 同
- 同 田山丸一「正しくは九二」
- 一金 九円 同
- 暹羅婦人 山本カチ
- 一金 六円 同

この記事の最後に言う「日暹俱樂部」は、山崎の記す「日暹協會」と同一のものだろうか。現在の日本人会はその起源を1913年9月としている。しかし、上に引用した二つの資料より、それを遡る19年前、即ち1894年には、バンコクに日本人の団体が誕生していたこ



とは明白である。

とりわけ、1894年8月26日には、バンコクの暹羅庵で日本人会と同様の目的を掲げて日暹協会が結成された。この時、岩本千綱は在タイしていなかったため、日暹協会の中心人物となったのは、石橋三郎だと思われる。日暹協会の存在は、一時日本の新聞でも報道された。しかし、中心人物の死亡等のためか、消滅した。

1913年の日本人会結成の中心となる医師の三谷足平は、1894年の時点でも既に在タイ

イしていたが、この日暹協会には参加しなかったようである。

さて、8月27日に、山崎喜八郎(1866-1912)と鈴木錠蔵(1869-1947)は、中国船孫権号でバンコクを発った。鈴木は、茨城県出身で後には政友会に所属して同県から代議士に当選している。高等商業学校「現一橋大学」で矢野二郎校長辞職要求運動に参加して退学処分を受けた猛者の一人であり(朝日新聞1918年4月15日号)、当時は日本吉佐移民合名会社員としてシヤムに



鈴木錠蔵

日本人移民の可能性を調査するために派遣され、帰路を山崎と共にしたのである。

郷里の長崎到着後、山崎は日清戦争勃発後のバンコクや暹羅途中の中国人の様子を次のように語ったことを、読売新聞1894年9月23日号が報じている。

「日本の志士暹羅より清国郵船に乗る、本年四月以来暹羅國盤谷府に在留し居たる山崎喜八郎と云へる人去る八月二十七日清国郵船に乗組みて盤谷を出発し香港にて更に英國船に乗換へ本月十六日無事長崎に帰着したるが今氏が同地に或人に語りたる談話の要領を左に記す

▲盤谷在留の支那人操練をなす、山崎氏は去る八月二十七日清国汽船孫権号の盤谷を出帆するの報に接し勿々(そうそう)旅装を整へ吉佐移民会社社員鈴木某氏「鈴木錠蔵」と共に寓所を出でて汽船問屋に赴きたりしに途中盤谷在留の支那人等は日清交戦に付殊勝にも敵愾心を起し

練兵式に擬して勇気を鼓舞せんとて多人数隊伍を組織し「きはい、旗の意」を押立て鐘鼓を打叩き行軍式をなして市街を横行し居り山崎鈴木の両氏は日本服を着し日本刀を帯びて其傍を通行したるに彼等は奇しく両氏に注目したるも両氏が自若として通過するが為遂に何等の手出しをもなす能はざりし

▲船中にて支那人の為に行李を盗まる、孫権号乗組船客の多数は支那人にして彼等は朝暮日清交戦談に余念なく侃々然たる言語を弄して日本の弱小を笑ひ氏等兩人を見て頻りに悪口雑言を並べて氏等を冒(のの)し居たるが氏等は一日其行李を盗取せられたり是れ言ふまでもなく支那人の所業なれば直ちに船長に向て訴状を差出せしに船長は船中にて物品を盗まるるは被盜者の不注意に依る船長の知る所にあらず又之が穿鑿(せんさく)をなすの義務なしとして少しも取合はざれば詮方なく其儘に放棄したるも其物品の代価は実に百

余円なりしと

▲孫権号香港に着す、斯くて孫権号は本月五日無事香港に着し乗組支那人も多くは茲に上陸し氏等兩人も亦我國各港及び桑港間を航海する英國汽船グリーンク号に乗り移り同港に泊泊すること一週間にして十二日出帆し翌十三日厦門に入港せり(孫権号乗組の支那人中にもグリーンク号に乗り移りたるものあり)

▲厦門に於ける支那人の乱暴、厦門に入港して聞く所によれば同地在留の日本人は屢々支那人の為に襲撃に会ひ家屋を破壊せられ物品を奪掠せられたるは幾度なるを知らずと

▲船中の洋人日本人を暴行す、ゲ

リック号は十四日未明に厦門を出発したるが是より乗客は西洋人多数となり両氏も自然肩身の広くなりたるを覚えぬ且つ談の日清戦争に及ぶや洋人は何れも日本最良にて、豊島・牙山「1894年7月25日豊島沖海戦、8月1日宣戦布告」の例を引き清國は到底日本に勝つこと能はずなど評判するゆえ支那人等は前の倨傲にも似ず畏縮して一言も発せざりし且つ最も可笑しかりしは十五日夕刻に船の支那海を離れんとする頃多数の西洋人支那人等甲板に在り四方八方(よもやま)の話を為しつ

ありしに遙か日本海よりして一隻の軍艦黒煙を漲らして同船の方に進行し来るや支那人問うて曰く何國の軍艦ならんと洋客戯れて曰く日艦なり今將に此船を点検して支那人を捕縛せんとするなりと支那人聞て大に驚き頻に洋人に助を乞ひ何卒捕縛せられざる様尽力し呉れとて只管頼み入りたり

▲長崎着港支那人の恐怖、十六日松崎グリーンク号長崎に着するや厦門より桑港に航する支那人あり氏等に問うて曰く此所は日本港なり日本人或は我等を害せざるやと氏等曰く日本人は文明の民なり且つ義侠心に富めり敵國の人民を害する様の事は断じてなし君等上陸せよ余が家に伴はん万一乱暴人あらば余等保護すべしと勧めたるに彼等は非常に恐怖して上陸は勿論甲板上にも出でざりしと。

日清戦争ではバンコクの華僑も愛國心を喚起され、軍事訓練を実施して、「鐘鼓を打叩き行軍式をなして市街を横行し」、対戦相手である日本人の山崎と

鈴木は、和服で日本刀という出で立ちであつたが、路上で華僑隊とすれ違ったことが、この記事から判る。

山崎や鈴木に限らず、当時、東南アジアに出た中流日本人男性は、和服に日本刀というスタイルが多かつたようである。

このシリーズで稲垣栄子の話を書いた際、日露戦争の勝利を祝つて、バンコク在留の日本人が当時のバンコク市中心部を馬車で提灯行列したことを紹介した。1932年立憲革命後、タイ・ナシヨナリズム政策が本格的に発動されるまで、バンコクの外国人は華僑であれ、日本人であれ、あるいはその他であれ、バンコクは恰も自分自身の町の如く、誰にも気兼ねなく自由に振舞うことができた。当時、タイで刊行されていた中国語新聞を読むと、バンコクのみならずタイ各地の華僑たちも、しばしば中華民国の記念行事のために提灯行列を行っていることが判る。

連載 ③  
パンコクの  
日本人

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XIX

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

前号で、高等商業学校（現一橋大学）から放校されて間もない、鈴木錠蔵（1869-1919）が、日本吉佐移民合名会社の社員としてタイに派遣され、タイが日本人の移民地として適しているか否かの調査に従事したことを紹介した。

鈴木が、1894年5月12日に横浜を発ってバンコクに向かったことは、次の資料から判る。

「日本吉佐移民合名会社社員鈴木錠蔵氏は商業視察を兼ね暹羅国移住地探察の爲め去十二月（1894年5月12日）横浜出帆の近江丸に搭じ神戸にて広島丸に乗換へ出発したる付本会より同地の通信を委嘱す」（『殖民協会報告』第13号、1894年5月21日発行、91頁）。

日本吉佐移民合名会社は、1891年末に吉川泰次郎（1852-1895）と佐久間貞一（1848-1898）が創立し、2人の姓から一字を採って社名とした会社で、日本にお

る移民会社のはりである。吉川は奈良の神官の子で、江戸に出て軍艦奉行の下で学び、維新後慶応で英語を学習し、教師に。1878年郵便汽船三菱に入社、1894年には日本郵船会社二代目社長に昇進した。佐久間の方は、彰義隊に参加した旧幕臣で、1876年には西洋文明を伝える手段として活版印刷所秀英舎（現大日本印刷株式会社）を創立した実業家である。

日本吉佐移民会社の設立を、『日本商業雑誌』（博文館）第2巻9号（1892年5月3日）は次のように報じた。少し長いが、岩本千綱らの杜撰な移民契約と対比するために、日本の移民会社が作成した初めての移民契約と思われる全文を以下に引用しておく。

「南洋群島中仏領ニューカレドニア島のニッケル鉱業会社の冀望に応じ吉川泰次郎及び佐久間貞一の両氏は今度日本吉佐移民会社を日本橋区小網町に設立し

たり。同会社は右ニッケル会社と契約し不日我移民民六百余名を郵船会社汽船を以て同島に渡航せしむる事に決定せる由なるが其契約は中々行届きたるものにて要領は次の如し。

ニューカレドニア島への渡航は日本郵船会社汽船を用ゆる事、往復共渡航は無賃の事、雇期限は五ヶ年の事但し月数は六十ヶ月にして一ヶ月労働日数は二十日又一日は十時間とす、労働はニッケル鉱採掘及其他会社常務の事但し探掘は地面とす、定増の事、給料は一ヶ月四十フラン（我十円）の事、休業は日曜日の外一月一日二日帝國天皇節仏國大祭日等一箇年合て六日の事、疾病は会社服役により発したる時は治療中給料を減ぜず自然に由る者には十日以内は給料三分の一、十日以後は四分の一を与ふる事然れども過飲不品行の結果に出る者には支給せざるべし、正当なる理由なくして業務を怠る時は減給の処分を行

ふ事但し減給は如何なる場合に於ても日本総監督の承諾を要する事、労働者出発前一箇月の給料四十フランを前借せしめ右を就役後四フラン宛宛毎月の給料より差引く事、労働者取締の爲に総監督医師通弁（孰れも日本人）を雇入るべき事但し其給料を合して一箇月二千フラン（五百円）其他医師の給料は未定、労働者中より小頭十二人を撰み之に定給の外毎月若干の手当を与ふる事但し右給額は総監督の見込に任す、労働者には給料の外会社より無代にて衣食住を備ふる事①衣服は契約中一箇年間次の物品を二組宛給与する事、帽子、上衣、チョッキ、股引、雨衣、②食事は次の分量を一日内三回に給与する事但し会社には日本人料理人を雇入る凡て炊煮の上給与すべし、日本白米九百グラム（我六合）、乾魚百十グラム、鮮魚或牛肉二百グラム、外に醬油味噌漬物等、③家屋は都て日本大工に因引せしめ労働者十分便宜の爲め我國長

【表1】移民会社

(単位：円)

移民取扱者及其所在地	営業許可	営業開始(明治30年4月現在)	移民取扱者又は会社代表者の名	保証金額	資本金額
日本吉佐移民合資会社(東京)	明治27年	営業開始	佐久間貞一	10,000	100,000
神戸渡航合資会社(神戸)	同	同	今井太左衛門	17,500	30,300
小倉幸	同	明治29年6月15日営業許可取消	小倉幸	10,000	20,000
広島海外渡航株式会社(広島)	同	営業開始	佐藤岩男	25,000	30,000
横浜移民合資会社(横浜)	同	明治28年4月営業廃止届認可済	大西正雄	20,000	-
明治移民株式会社(兵庫)	同	営業願不認可	後藤勝造	5,000	-
森岡真(東京)	同	営業開始	森岡真	10,000	20,000
海外殖民合資会社(横浜)	同	営業継続せざるもの	横山孫一郎	20,000	-
大日本移民株式会社(東京)	明治28年	明治29年廃止届	中山譲治	-	-
日本移民合資会社(大阪)	明治29年	営業開始	島内義雄	10,000	50,000
椿本俊吉(奈良)	同	6ヶ月期限経過に付許可無効	椿本俊吉	20,000	30,000
東京移民合資会社(東京)	同	営業開始	貝山大説	10,000	20,000
鎮西移民株式会社(熊本)	同	営業未開始	内藤正義	10,000	30,000
熊本移民株式会社(熊本)	同	同	田尻端	10,000	30,000
小山雄太郎(熊本)	同	営業開始	小山雄太郎	10,000	20,000
中国移民合資会社(広島)	明治30年	営業未開始	村上快藏	10,000	50,000
東洋移民合資会社(東京)	同	同	佐久間貞一	10,000	100,000
厚生移民株式会社(和歌山)	同	同	小切間植右衛門	10,000	50,000
神戸郵船株式会社(神戸)	同	同	大森栄介	25,000	50,000

屋風に作り風呂湯雪隠等を各長屋に附属せしむる事、菓餌は一切無代で、人頭税の如き一切諸入費は会社負担の事。

此他移民民が貯金送金を便にし可成内外の生計を豊裕ならしむる事及同島に於て従来使用の徒刑人とは全く其居地を区別する事等に付き両会社の間に取極めたる事は至極注意周到なる条項もあるよし何にしろ郵船会社副社長「吉川泰次郎」及び秀英舎長「佐久間貞一」之が任に當る事なる故其結果の成功よきは期して待つ所なる可し。

明治時代の大規模な集団移民の嚆矢は、布哇（ハワイ）政府と日本政府間の日布渡航条約（1886年1月締結）を根拠とした官約移民であり1885年から1894年まで26回に亘り、男2万3396人、女5673人、合計2万9069人が移民したという。なお、明治28年（1895年）以後は、官約移民ではなく、日本の移民会社若しくは個人の契約に依る移民に替わった。

1890年代に入ると、日本人の海外渡航者の階層は拡大した。『日本商業雑誌』第2巻22号（1892年11月18日号）は、「洋行者」と題した次の記事

を載せている。

「数年前まで洋行者は大抵官命を帯ぶるにあらざれば留学若しくは視察に止りたるが故に其人は多く中流以上の人なりしも今は喰語書生若しくは無宿労働者等が身を内地に置くに苦み続々渡航して何かな商売を発見せんと欲する者漸く増殖せり此等の徒は皆中流以下の輩なるを以て其風俗は汚下其行爲は卑穢終に外邦人の嫌悪する所と爲り支那人と同一視せらるるに至るアイダホ事件の如きも亦其一端にあらざるか果して然らんに内國人も亦大に反省する所無る可らず。また、同号は「米國アイダホに於て本邦出稼人放逐事件」と題したアイダホ事件に関する次の記事を載せている。

「米國アイダホ州を通過する共同太平洋鉄道会社鉄路修補の爲に出稼せる本邦人は本年「1892年」春以来四百余名の多きに達したれば従来雇使せる土着の労働者の職を奪ふの色彩あり之が爲に蜂起して日本人放逐運動を創め其の鉄道の通過するワイオミング領地グラレング地方よりオレゴン州ハンチングトンに至る540哩30余線区中6線区は此の放逐同盟に加

71029-7 2013.4  
2013.4

【表2】取扱人別渡航地及人員(年数は明治)

	吉佐 移民会社	神戸 渡航会社	小倉幸	広島海外 渡航会社	森岡真	日本 移民会社	合計
ニューカレドニア							
25年	600						600
クイーンズランド							
25年	50						50
26年	520						520
27年	425						425
29年	417						417
ハワイ							
27年		560	841				1,401
28年		99	782	1,206			2,087
29年		762	1,942	2,936	499	853	6,992
北米							
27年		6					6
28年		42		65			107
29年		146		211			357
カナダ							
27年		135					135
28年		264	64				328
29年		91	2	84			177
樺州							
27年		1					1
28年		5					5
29年		5		120			125
ボルネオ							
27年		2					2
28年		9	21				30
フィジー							
27年	305						305
グアドループ							
27年	490						490
暹羅							
28年				20			20
ウラジオストック							
29年				1,682			1,682
合計	2,807	2,127	3,652	5,324	499	853	18,262

共和国が成立するまで、大量の華僑移民を受け入れた。とりわけ、1945年の第2次大戦終結後の国共内戦期には、多数の華僑がタイに押し寄せた。我々が今日タイで相手にする華人の多くは、第2次大戦後にタイに流入した華僑の第2、第3

世代である。しかし、中国の共産化により、共産主義のタイへの一層の拡大を恐れたタイ政府は合法的華僑受入をほぼゼロに制限した。その後、1980年前後に至ると今度は、海外に出稼ぎに出るタイ人が増加し、この傾向は

今日まで続いている。そのため、海外出稼ぎを斡旋する移民会社が林立した。中には、中東向け移民会社経営で成功し、国政に進出した、ウドン県のプラチュアツプ・チャイヤサーンのような人物も現れた。筆者が何人かのタイ人海外出

稼ぎ経験者から聞いた限りでは、彼等が台湾やシンガポールなどに渡り出た場合の日収は大体500バーツであるという。タイの賃金水準に比し2倍弱であろうか。タイ人は国外に稼ぎに出て、労働力不足のタイ国内には近隣諸国から低賃金労働者が流入している。筆者のゼミのミャンマー人学生の話では、ミャンマー本国の日当は1ドルにも満たないことが多いという。タイの賃金が如何に安くとも、彼等には魅力ある出稼ぎ先である。

このように、100年以上前の日本の海外出稼ぎブームは、タイを含む東南アジアでは現在の現象である。悪質な業者も横行し、空港や街頭では出稼ぎ希望者に注意を呼びかける文書の掲示や横断幕を目にすることが多い。

さて、岩本千綱は1893年2月に第1回の訪タイより帰国し、盛んに日本人の暹羅移民が有望なことを唱道したことは既に何度も紹介した。岩本の暹羅移民論は、日本における1890年代の海外出稼ぎブームの潮流に投じたものであった。

第2表に見るように、189

はり先づコウンデンホームに始まりナムバ、カルドウエルの各地方に広まり新聞と演説を以て日本人放逐すべきを説き遂に暴行を加へて放逐したりと云ふ。

1892年に400余人に上ったアイダボの日本人出稼者は、どのようにしてこの地に来たのだろうか、ハワイに官約移民で来たものに、更に米本土まで渡って来たものなのか、あるいは日本で移民周旋屋の手を経たものなのだろうか。

表1、表2は、『進歩党党報』第3号(1897年6月1日号)9頁11頁に、「政務資料」として掲載されている「移民に関する統計」を転載したものである。進歩党は、大隈重信を事実上の党首とする、当時の政府与党である。

表2では、移民会社が扱った最初の移民は、吉佐移民会社の1892年のニューカレドニア移民であるが、表1、表2に掲載されている移民会社は、明治27年(1894年)4月13日付の官報で公布された「勅令第42号、移民保護規則」によって許可されたものに限定されている。

抑も、移民保護規則が施行さ

れた背景には、悪質な移民周旋人や会社の横行があった。『日本商業雑誌』第2巻8号(1892年4月18日号)に掲載された、「海外移住同志諸君に告ぐ」と題した、海外移住同志同志会結成の呼びかけは、「然れども移住出稼人は記憶せよ、曩には多数の同胞が、奸商猾奴の誘拐に陥り、天涯異域に悲愴の月を詠め、嗚咽故郷の天を懐ふ惨憺場裡に沈淪したることを、之れを思へば三伏熱中身尚ほ粟を生ず、嗚呼誰が残念ならずと云ふ者ぞ吾人は常に恐る、世間奸酷悪漢の奴隷が、種々の名称を装ふて移住出稼の大勢を利用し、万里の異郷に同胞を売り、其血を吸て其腹を肥さんとするものあることを」と述べている。

「勅令第42号、移民保護規則」の規定を以下に抜粋すると、

第1条、本令に於て移民と称するは労働を目的として外国に渡航する者を謂ひ移民取扱人と称するは何等の名義を以てするに拘らず移民を募集し又は移民の渡航を周旋するを以て営業となす者を謂ふ

第5条、移民取扱人たらんと欲する者は地方長官を経由し内務

大臣の許可を受くべし

第6条、移民取扱人は地方長官に保証金を納めたる後にあらざれば移民を募集し又は移民の渡航を周旋することを不得す

第7条、前条に掲ぐる保証金は一万円以上とし地方長官内務大臣の認可を得て之を定む

第8条、移民取扱人は移民の渡航を周旋するに当り移民との間に書面契約を為すべし

前項契約に関する条件は予め地方長官の認可を受くべし

第9条、前条の条件中には左の事項を具ふることを要す

一、契約期限 二、渡航周旋料、三、疾病その他困難の場合に於て救助又は帰国の手続

第18条、何等の名義を以てするに拘らず移民取扱人たるの許可を受けず若くは営業停止中に移民の募集又は其の渡航の周旋を為したる者は二十円以上二百円以下の罰金に処す

今日、「移民」と言えば、一家を挙げて移住して永住することが、通常の意味であると思うが、この時代の「移民」は、男性が単身で数年間海外に出稼に行くことを意味する場合が多かった。それは、移民保護規則第1条の「移民と称するは労働を目的として外国に渡航する者」という定義からも明かである。彼等の目的や移民先の生活振りは、同時代にタイに来た華僑たちと大差はない(但し、日本人移民はどの国に行くにせよ、県が交付した旅券を所持したが、タイに来た華僑の殆どは旅券をもつておらず、パンコクで入国証明書を発行してもらっていた)。

タイは1949年に中華人民





0年代には、ブラジルを筆頭とする南米や東南アジアのフィリピンなどは未だ日本人の移民先とはなっていない。これらの地域への移民が始まるのは20世紀に入ってからである。1890年代には、岩本の広報活動も効を奏して暹羅は有望な移民先と考えられていた。本号冒頭に述べた、吉佐移民会社員の鈴木錠蔵が1894年5月に暹羅に移民調査に派遣されたことも、暹羅への関心の高さの現れである。

第2表には、暹羅への移民は、明治28年(1895年)に広島の外渡航株式会社が手がけた20名しか記載されていない。この20人には同社の雇われ監督として宮崎滔天が同行した。この表に見るように、広島の外渡航株式会社は、日本吉佐移

民会社と並ぶ、当時の移民業界の大手であり、それ故に、宮崎滔天が『三十三年の夢』に記すように、同社の暹羅移民監督に就任した彼に相当の待遇を与えることができたのである。しかし、暹羅への最初の移民は、この20名ではなく、1894年12月に岩本千綱が連れてきた、32名の山口県人である。彼等のことが表に記載されていないのは、岩本が既に施行されていた「勅令第42号、移民保護規則」に違反して、移民取扱人の許可を得ないまま、その上、当局の警告も無視して日清戦争下のどさくさに紛れて神戸から連れ出したからである。彼の違法行為は、翌1895年

に正規に移民取扱人の許可申請をする際の障害となったこと、次号以下に後述する。さて、上記2回の暹羅移民の結果は、その大半が病死するという惨憺たるものであり、これ以後移民会社の暹羅移民取扱実績はないが、それでも20世紀近くまでは暹羅は予定移民地の一つとして認識されていた。例えば、田口卯吉がイギリスのエコノミストをモデルに創刊した週刊誌『東京経済雑誌』第987号(1899年7月15日)の153頁に、「本邦移民会社の現状」という記事があり、10の移民会社について、予定移民地および取扱予定人員(1年間)を記載している。この10社中に、予定移民地の一つとして暹羅を挙げているものが4社もある。例えば、日本移民合資会社は、豪州諸島、暹羅、カナダ、メキシコ、北米合衆国、南米諸島、取扱人員は2000人。九州移民株式会社は、ハワイ、豪州、カナダ、暹羅、メキシコ、ルソン、マレー半島、支那、シベリア、取扱人員は1500人。厚生館移民株式会社は、ハワイ、豪州、北米合衆国、シベリア、カナダ、暹羅、メキシコ、取扱人員1000人。森岡真氏取扱は、ハワイ、北米合衆国、カナダ、豪州諸島、暹羅、ブラジル、取扱人員1000人である。『東京経済雑誌』第1008号(1899年12月9日)の1269頁は、外務省の調査による1898年末海外在留帝国民数を掲載している。それによれば、多い順に、ハワイ3万4562人(男2万7209人、女7353人)。韓国1万5304人(男8620人、女6684人)。合衆国9121人(男8615人、女506人)。諸英領(豪州のタウンズビルや木曜島、シンガポール、香港など)4709人(男3781人、女928人)。ロシア領3237人(男1632人、女1605人)。清国1782人(男1333人、女449人)。カナダ1463人(男1388人、女75人)。これ以後は極端に少なく、英国171人、ドイツ132人、フランス101人、ついで暹羅の60人(男36人、女24人)である。それでも暹羅は、在外邦人数では、11番目に多い国である。暹羅の次は、メキシコの39人、フィリピンの24人である。



新巻

連載 ③  
バンコクの日本人

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XX

村嶋英治

早稲田大学アジア太平洋研究科教授

以前の号に記したように、1894年6月に津田静一の移民計画が資金調達不能のため行き詰まった。そのころ岩本千綱は日本に帰り、神戸に滞在して自ら移民集めを開始した。岩本の第1回移民募集の様相、および渡暹(タイ)後の32名の移民の運命について詳述したものは、宮崎滔天が南蛮鉄の筆名で国民新聞に連載した「暹羅殖民始末」以外には見当たらない。既に述べたように、「暹羅殖民始末」の記述は、聞き書き故の不正確さが多く、疑問なしとはいえないが、今のところ他に資料も見つからないので、同始末の記述をそのまま、先ず紹介したい。断つておくが、以下の引用中のタイの地名や場所は不正確であり、それらについては今後の号で指摘する。

岩本氏は神戸或は東京に於て暹羅殖民の事に就き多少の運動を試みしと雖も、当時日清の戦

争正に耐えるの時にして一人の殖民の事に耳を貸すものなく、止むことを得ず三十二名の移民を山口県に募り、二十八年「1895年」一月渡暹の途に就けり。岩本氏三十二名の移民を引率して盤谷に入るや、同志の士は皆殖民事業の愈々其実行を見るに至らんとするを喜び、相勇んで移民をサツパトン「サツパトム」の耕作地に移する準備を努めたり。先是農商大臣スリサツク「スラサツク」侯には日本国を漫遊し、転じて遼東の戦を見んと欲し、一月初旬を以て盤谷を発して香港に到る。偶々皇太子「ワチルナヒット皇太子」殿下崩御の急報に接し其志望を果さず、舟を回して盤谷に帰る。依て岩本氏等は直ちに侯を訪ふて殖民の事に就き談ずる所あり。侯亦賛同の意を表して曰く「暹羅殖民の事は実に日羅兩國の利益なり、諸氏奮つて之に任ぜよ、其資本の如きは

必要に応じて支出す可し」と。猶工商業に就て意見を述べて曰く、「殖民の事業に伴ふて同時に工商業を暹羅に扶植するは目下の急務なり、一方に於て日本村を作ると共に日本町を作る亦快ならずや、諸氏夫れ之を勉めざる可からず」と。嗚呼昔しは山田長政渺たる一身を挺して暹羅に航し、千難万難具さに皆め尽して千里の蛮土に日本村を作りたりと伝へらる。今は則ち暹羅人にして日本村を作り日本町を興すことを任となすスリサツク侯あり。是れ天与の好機にあらずして何ぞや。諸氏則ち意を承して茲に愈々暹羅殖民会社なるものを組織し、工商業を其一部に輸入して、部署を定め役員を撰定すること左の如し。

暹羅殖民会社副社長  
同 岩本千綱  
同 佐々木寿太郎  
同 山本安太郎  
同 石橋萬三郎  
同 会社社理事  
同 大谷津直亮「直鷹」  
監督 松野泰二郎「恭三郎」  
書記 荒川雅五郎  
他に十余名の仮規則なるものを設けて暹羅殖民会社なるものを愈々茲に成り、而して其運動費準備金乃至土地農具等に至る迄、諸般の費用は皆スリサツク侯是れを支出して遺憾なからしむ。若し其任にあるもの至誠篤行を以て事に従ふたらんには、従来日暹兩國間の深厚なる關係を生じて、兩國を裨益する勲なからざるに至るや明かなりと雖も、惜哉其人を得ず。漸く実行の間際に至つて早や已に失敗の兆候を呈するに至れり。

殖民会社の組織全く成り、移民は唯六月雨期を待つて農業に着手する用意も茲に整ひたれば、岩本氏は第二回移民募集のため、大谷津氏は岩本氏の運動を助け傍ら商業部の担任として見本輯集の爲め帰朝せり。万般

14 160 2013.5 2013.5

16 159

の費用はスラサツク侯之を給し、別に盤谷船渠(Banckow)に会社よりは職工の入手付金として三百万(ママ)円を岩本氏に給し、スリサツク侯は猶金装の刀剣一口を托して其の刀身を磨かんことを依頼せり。

岩本氏等の一行帰朝して四月五月も已に過ぎ、雨期種植の節来るや、スリサツク侯は移民の暹羅耕作法に習はず或は收穫誤らんことを慮り、所屬の農夫二人を付して移民耕作の便宜を与へ、今や將に植付に着手せんとするの時に當つて、移民は会社に向ひ一人金五十円宛の前借を申込み、而して会社は之を拒絶せり。是に於て彼等は同盟罷工の挙に出でたり。

移民が前借を要求して之を拒絶せられ、終に同盟罷工の挙に出でたるは其行暴に似たりと雖も、彼等をして此に至らしめたる原因なくんばあらず、乞ふ之を明かにせん。

始め岩本氏移民を山口県に募るや、一時姑息の方便を以て彼等を誘ひ出せり。今彼等と岩本氏の間に取替されたる約定書なるものを見るに実に左の如し。

### 契約書

- 今般暹羅國へ農業の爲め渡航するに付き左の条件を契約す
- 第一条 田畑一人に付き十ライ(一ライ我四百九十一坪余)を貸与可致事
- 第二条 米穀一ヶ年二度收穫ある事
- 第三条 貸与せし地租一ライに付き凡二十錢にして自弁の事
- 第四条 着過後事務に従事するものは本人の志望に依り一人五十円宛貸与し米穀收穫後より十二月間に月賦返却の事
- 第五条 農業に従事する必要器具並に家屋は一時貸与可致事
- 第六条 農業に従事し一ヶ年十ライを耕し米穀二百六十円、副産物九

十円見積収入金ある事

但生活は自弁の事

第七条 渡過後農業に従事し一ヶ月間の生活は日暹協會に於て担当の事

右七ヶ条相違無之万一項たりとも相違候節は往復旅費支弁は負ふと雖も本人の故意により相違する時は總て責任を有せず此契約は渡航後滿二ヶ年の期限となし更に協議の上継続することあるべし

明治二十七年十一月廿一日

岩本千綱 ⑧  
移民一同氏名 ⑨

以上の契約書は実に彼等をして暹羅を黄金國と思はしめ渡航熱を旺盛ならしめたり。一人前五十円宛前借を申出でたるが如きは、右契約第四条の実行を要求したるものにして、素より彼等は一片非望の念を以てしたりと云ふ可からず。唯岩本氏が此約束を結びたるは、スリサツク侯と予め相談したるにあらず、他に自ら支出するの目算あつてなしたるにあらず、一時を弥縫したるが如き観あるは、掩ふ可からざる事なりとす。

殖民会社は事情をスリサツク侯に訴へ、五十円宛貸渡の件を求めたり。然れども侯は、憐



「さき」に香港に於て岩本氏が移民を引率して其旅費を消費し、三十余人殆んど進退谷(きは)まるの窮場に臨んで、八百余円を支出して渡航の目的を達せしめ、而して今亦總計千六百円を、謂はれなく支出すること、侯の喜ばざる処なり。故に侯は之を拒絶せり。会社は亦之を彼等に拒絶せり。依て彼等は終に同盟罷工を企てたるなり。

正面の理由は則ち此の如くなれども、彼等苟くも岩本氏の勧誘により、千里の畜土に入つて農業に従ふの目的を以て来り、而して今僅に前借の一件の爲に大目的を放棄せんとす。彼等別に余財あるに非ず。之を放棄して何に依て衣食して生命を全ふし得可き乎。彼等如何に無智の民なりと雖も、考慮茲に及ばずんば容易に同盟罷工を企てて殖民会社に反抗す可からず。殖民会社社員は種々手を尽し、他に業務を与へて生計の道に就かしめんと努めたれども、賃金月給の低廉なるを口実として、容易に職業に就かんとせず。漸々殖民会社の手を離れて、医師三谷某「三谷足平初代日本人会会

長」の宅に転居するものあるに至れり。他なし、三谷某は彼等を以て鉄道工事の雇役せしめて、坐(いな)がら彼等の汗液を吸(す)らんとの野心を包蔵し、彼等を煽動教唆したるに是れよるのみ。

「1895年」五月下旬ブカノン鉱山監督者 仏人エリドベスなるものあり。殖民会社に來りて、日本の職工労働者百人計りを雇入るの依頼をなす。会社は差当り二十人位なれば或は応じ得らるやも計られざる旨を以て答ふ。移民農業に従はずして未だ職を得ざるものあればなり。ドベスは雇入れんことを乞ふ。会社理事石橋萬三郎氏乃ち彼等を集めて此事を告げ、応否は二三日を期して返答す可しと言放ち、事務所に歸つて彼等の決意を待つ。翌日十二人の移民來りてドベスの雇に應ずるの希望を述べ。依て石橋氏は直に仏国公使館の公証を経て、ドベスと労働者の間に契約の取換せをなさしむ。

其条々左の如し。

第一 日本労働者はブカノン鉱山会社に労役中は仏國人民と同じく仏國領事保護の下に立つこと

第二 鉱山監督者は日本労働者に対して腕力を以て命令を強行することを得ざること、但し不都合の場合あるときは一応暹羅殖民会社理事石橋萬三郎に通知をなし同人に於て適當の処置をなすこと

第三 日本労働者若し疾病に罹りたる時は鉱山監督者は之に向て相當の手当を為すべし

第四 労働者の種類に依り給金を左の通り定むるものとす

大工 卅五円 鍛冶 四十円

普通労働者 三十円

双方の契約茲に整ひ、移民は後に加りたるものを合せて十五名、殖民会社監督松野恭三郎、荒川雅五郎兩氏と共にドベスの一行に加はり、盤谷を發してブカノン鉱山に向へり(ブカノン鉱山は盤谷府より汽船にて二昼夜安南の方に抛りたる湄江の別流を遡り其より陸行四日程コラツトの西北方(ママ)凡八十哩の処にあり)。

残余十二名の移民中、農事に志あるもの僅に二名、他は或は身を三谷某に托するものあり、

或は人足奉公をなすものありて、各々其好む処に従へり。惜むべき哉第一回の移民は、斯の如くにして遂に農事試作に着手するに至らずして四方に散乱せり。

ブカノンの鉱山に労働せる十五名の工夫等は、已に己(おの)れ等労働の基礎定まりたるを以て、給金の幾分を割(さ)ひて殖民会社の監督に与ふるを拒み、却て会社の關係を断たんことを申出でたり。松野荒川の兩監督は大に怒り、移民を棄てて直に盤谷に歸り事情を陳ず。依て理事石橋氏は直ちに書を鉱山監督者ドベスに寄せて、暹羅殖民会社理事の名を以て締結したる契約を解除し、更に移民と直接に契約をなす可きを告げたれば、ドベスは直に承諾の旨を通じたり。石橋氏は猶仏領事及移民等に右の次第を通じて殖民会社と移民の關係なきことを明にせり。

「1895年」九月上旬四人の移民は突然ブカノンより歸り來れり。顔色青紫の如く、形容古木に似て殆んど現世の人にあらず。泣て殖民会社に訴へて曰

く、我等皆深林熱に罹つて或は死し、或は已に死に瀕す。死せるものは詮方なし、願くは残余のものを助けたまへと。会社と彼等とは、表面已に無関係の地位を取りしと雖も、最初の関係上見棄難く、乃ち此四人を三谷医局に入院せしめ、会社の役員、佐々木、石橋、山本、松野、荒川の諸氏相議してブカノン工夫救助の方法を講じ、遂に石橋、松野、荒川の三氏彼の地に到り彼等を携へ帰るに決し、勿々旅装を整へて盤谷を發しブカノンに向へり。三氏行てワンパテット(ママ)に着すや、石橋氏はリニューマチスに罹り、松野氏は熱病になやみ、是より二日程のブカノンに達する能はず。土人の酋長に依つて人夫十

六人を雇ひ、籠と薬品を携へしめ、残余の日本人を運び来らんことを命ず。往復六日にして携へ来る移民、唯僅かに一人の婦女と及其乳兒而已。其他の十人は皆死亡して已に他界の人となり了れりと云ふ。三氏は死に瀕せる一人の女と乳兒を携へ、即日ワンパテットを發し盤谷に向ふ。途中行難の状況の如き、今之を贅せず。

六人を雇ひ、籠と薬品を携へしめ、残余の日本人を運び来らんことを命ず。往復六日にして携へ来る移民、唯僅かに一人の婦女と及其乳兒而已。其他の十人は皆死亡して已に他界の人となり了れりと云ふ。三氏は死に瀕せる一人の女と乳兒を携へ、即日ワンパテットを發し盤谷に向ふ。途中行難の状況の如き、今之を贅せず。

ものを携へてドベス監督の旅寓を訪ひ、其労働中の取扱に就て双方を對審せしめたるに、敢て虐待の形迹を認めざる而已ならず、却て優遇したるものがあるが如し。ドベスは彼等の粗食の身体に善からざるを論じ、時々鶏豚等の肉を与ゆるも彼等は之を食はず、土人に売却して此れを金に代へたるが如き事、ドベスは藥物の供与を怠らざりし事、ドベス亦病んで帰盤せんとする時、一同に向つて帰盤を勧告したれども、彼等は旅費を吝んで之に應ぜざりし事等、皆寧ろ彼等を証明せり。嗚呼世上豈に無教育の窮民程憐む可きものあらんや。

今彼等をして此極に至らしめたる所以を窮極すれば、岩本氏が無責任の契約をなして之を履行する能はざりしは第一の原因なり。石橋氏が自ら彼地の風土氣候を察せずして彼等を送りしは第二の原因なり。彼等が金錢を重しとして一身を尊貴せざりしは第三の原因なり。

十名の移民ブカノンの死し、二人は盤谷に於て虎列拉に斃さ

れ、他は三々五々思ひ思ひに離散して亦收拾す可からず。第一回殖民の終局徒に不始末の悪名を遺したる而已にして見る可きものなし(国民新聞、1897年7月27日、30日号所載、但し句読点を一部変更)。

ブカノン(正しくはブカヌン)は、フランス人がプラチンブリーの三鉱区で金採掘の権利を与えられて設立したワタナール金鉱山会社の鉱区の一つである。ブカヌンの地は、現在主要道路を外れ、地図にも見当たらない。しかし、当時はコーラートから南下してプラチンブリー県のプラチンタカム郡に至る街道筋の、コーラート県側の最後の村であり、ここで両県を隔てるカンペン山地の谷間(チョーン・ブカヌンという)を通過すれば、プラチンタ

カム郡側に出ることができた。同郡内を流れるバンパコン河の支流(クロン・プラテート)に達すれば、ここからは舟でバンコクに行くことができ。上記、殖民始末にワンパテットと記している地名は、正しくはプラテート村のことである。

この鉄道建設で死亡した日本人は、第1回移民および第2回移民(1895年10月に広島の海外渡航株式会社監督として宮崎滔天が連れて来た20名)の人たちである。多数の日本人が命を落とした、ブカヌン金山は完全に忘れられてしまったようである。

ここに掲げる二つの表より見て、1894、5年当時、日本

ここに掲げる二つの表より見て、1894、5年当時、日本

【表1】1895年時の大坂と東京の職工の賃銀

職名	大坂に於ける1日の賃銀	東京に於ける1日の賃銀
日雇人足	15 銭乃至 20 銭	23 銭乃至 30 銭
大工	25 銭乃至 40 銭	35 銭乃至 50 銭
鍛冶職	20 銭乃至 35 銭	25 銭乃至 40 銭
女工	4 銭乃至 8 銭	6 銭乃至 12 銭

(出所：国民新聞1895年1月22日号掲載、島江生「大坂に工業学校を設けよ」)



【表2】1895年3月、9月神戸市内諸職工賃金調査 (月給と記入したもの以外は日給、単位は全て銭)

	1895年3月			1895年9月		
	上	同左 中	同左 下	上	同左 中	同左 下
農作年雇 月給 男	250	200	130	250	200	130
農作年雇 月給 女	150	70	40	150	75	50
農作日雇 日給 男	18	10	8	20	12	9
農作日雇 日給 女	8	5	3	9	6	4
機織 男	20	18	15	20	18	15
機織 女	20	16	10	20	16	10
陶器饅飴師	40	35	20	40	32	20
漆器塗師	40	30	20	40	30	20
鋳(かざり)職	35	30	25	45	38	25
袋物職	45	38	30	45	38	28
染物職	30	22	20	30	22	20
和服仕立職	40	30	10	40	30	12
洋服仕立職	100	65	30	100	70	35
木挽職	60	50	35	60	50	35
大工	50	40	30	55	45	35
左官	45	40	30	55	45	32
瓦葺	60	50	35	60	50	38
家根職	42	35	30	42	35	30
指物師	35	25	20	35	25	20
経師(表具師)	38	28	25	35	28	25
畳刺	32	28	20	35	30	23
建具職	48	30	25	48	30	25
石工	50	45	35	50	45	40
植木職	35	30	25	35	30	25
煙草刻職	50	35	20	50	38	22
製茶男工	70	50	30	50	35	20
菓子製造職	30	20	12	30	20	15
下駄職	50	35	20	50	35	25
靴職	50	40	30	50	40	30
馬具職	45	35	25	45	38	30
筆製造職	45	35	30	45	35	30
紙施工	25	20	15	25	20	15
鋳物職	70	50	30	70	50	30
鍛冶職	60	40	22	70	50	25
綿打職	38	30	20	38	30	20
活版植字職	40	30	20	40	30	20
版摺職	55	40	25	55	40	25
油押職	30	25	20	28	22	18
船大工	40	30	25	50	35	28
桶職	30	25	20	28	20	17
酒造稼	13	10	8	13	10	8
醬油造稼	13	10	7	13	10	7
漁夫	30	25	18	32	28	20
日雇人夫	25	20	18	30	25	20
下男 月給	300	200	150	300	200	150
下女 月給	200	100	50	200	100	50

(備考)農作雇、酒造醬油造人、下男下女等は雇主より賄を受け他は自費を以て賄をなす。機織職は紙漣等を為して其他常雇なる如きものは幾分賃金他比較上多きものがあるが如し(出所:神戸又新日報 1895年12月8日号掲載、「市内諸職工の賃金」)

連載 35  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXI

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

岩本は、1894年12月に、32名の山口県出身の移民を連れて渡タイした。この渡タイは、神戸港の出発時点から波乱含みであった。『殖民協会報告』第20号(1894年12月発行、87頁)は、次のように報じている。

「暹羅国移住 会員「殖民協会」岩本千綱氏の発起に係る第一回暹羅国移住民三十名は先月「1894年11月」末英國汽船タコマ号にて出帆せんとした際移住「移民」保護規則抵触の虞ありとて神戸水上警察より差止められしが談判の末程善く落着し本月「1894年12月」上旬出帆渡航したる筈又同氏は引続き第二回移住民四十名を渡航せしむる準備中なり」と。

岩本らとバンコクで暹羅殖民会社を興す目的で、同時期に日本を発った大谷津直磨は、途中立ち寄ったシンガポールで、斉藤幹領事と面識ができた。バン

コク到着後、大谷津が斉藤に送った手紙を情報源として、斉藤は原外務省通商局長宛に次の意見具申を行った。

「諸君益々御安静慶賀候 陳者此節暹羅国在留本邦人の私報に接するに本年の始めより我が帝国人民の該地に移住する者続々増加し且つ岩本千綱氏の企図に係る移住農夫も既に参拾余名に達し候由に有之候而て岩本氏は先般右農夫を従へ暹羅に渡航中香港に於て暹國農商務卿に際会し依て余事計画のため同卿に從ひ再び日本に帰航致されたる趣に有之又た先般渡航の理學士大谷津「直磨」氏の書信に依れば右移住農夫のことは着々其歩を進め候に付岩本氏を以て該國移住農業会社の社長となし大谷津氏は其副長となり益々事業の拡張を謀るべく就ては現今暹國農商務卿の日本に渡航したるを機とし該事打合せのため同

「岩本」氏も一応帰航致候云々

と有之候

右の諸件に付き熟考仕候現今暹國には五拾名内外の日本新移住民あることは多分事実と被存候是に於て幹「斉藤幹」が聊か杞憂の一端として申上度は左の數件に御座候  
一、移住民五拾名以上労働の業務に従事するときは永遠の年月中には種々の紛争なきを保「やすん」ぜず  
一、我が帝国と暹羅國間には明治廿九年九月調印の兩國宣言書なるものあるのみにて未だ完全の親交通商条約御訂結の運に至らず

一、所謂る治外法権は相互条約書の明文あるを待て始めて成立する義に候得ば現今の宣言書のみにては固より該権を主張致し難く好しや其時に臨み之を主張し得るの方便あるも我に於て其手順未だ不相調候

一、故に我が移住民間或は彼我兩民の間に紛争の生ずるあらば

暹國政府は無論彼の法廷に於て之を裁判可致候

一、現今暹羅國と親交の条約ある諸外國中例の治外法権を有せざるものなきは勿論にして我が帝国の如きは既に欧米諸國と条約御改正ある今日に當りては暹羅國に在住する我が帝国人民に對し本件に關しては至急何分の御評議あらんことを希望仕候  
右は殊更に申上候迄も無之業已に夫々御評議の事とは被存候へ共差當り我が移住の該地に増加する景況有之候条為念一応閣下迄愚考申上置候其内時〇「一字読めず」御保護方一に奉存候敬具  
明治二十八年三月十三日  
在新嘉坡 齊藤幹  
原通商局長殿

この原通商局長とは、後の平民宰相、原敬である。当時の外務省には、政務局と通商局の2局しかなかったため、原敬は既に相当の高官であった。この

年、原は伊藤博文内閣の陸奥宗光外相の下で外務次官に抜擢された。翌1896年陸奥外相の病氣辞任により、原は駐韓国公使に転出。松方正義と大隈重信が連携した第2次松方内閣（松方内閣）が、1896年9月に成立し、大隈が外務大臣に就任したのち、原は大隈を嫌って外交官を辞した。因みに稲垣満次郎は、大隈外相によって、18

97年3月に初代駐シヤム公使に任じられたが、人脈上の違いによるものか、原敬は日記の1897年3月31日の項で稲垣を次のように酷評している。「榎本武揚農商務大臣を辞し大隈外務大臣を兼任（一昨日）せり、又外務省にては暹羅弁理公使に稲垣満次郎を採用せり。榎本は伊藤内閣総辞職の際独り内閣に止まり而して松方内閣の

**R. OMODA**  
JAPANESE BARBER,  
corner of Bush Lane.

Hair cut, shave and shampoo	Tes.	1	32
Hair cut and shave	"	1	32
Shave	"	"	"

**MONTHLY SYSTEM.**

Hair cut twice and shave daily	"	7	5
" " " " alternate days	"	5	3
" " once " twice weekly	"	3	2
" " " " weekly	"	2	1
Sharpening a razor	"	1	48
Sharpening scissors	"	1	32

Open daily, 8 a. m. to 8 p. m.  
Sundays, 8 a. m. to 5 p. m.  
3rd January, 1900.

面田利平廣告 Bangkok Times 1900年1月12日

都合にて其職を去りたるものゝ如し、其意見何処に存するや知らずと雖も進退甚だ美ならず、而して何れの内閣にても重きをなさざるものに似たり、又稲垣の如き法螺を吹きて世に阿り官に諛（へつら）ふものにして然かも外交に無経験なる人を採用せり。曩（むかし）には矢野文雄を駐清公使となし今又此人を用ゆ、其他にも尚ほ此の如き者ありと云ふ、丸で外交官の何物たるを大隈解せざるに似たり」（原奎一郎編『原敬日記、第一巻』、福村出版、1965年、263頁）。

ルコ公使することと合意した、トルコに行く前にシヤムとの間の条約を締める任を与えられ、短期間の予定でシヤムに行くことになったという趣旨を書いている（『稲垣満次郎警備録』、54・55頁）。

稲垣のパートナー、松方は伊藤博文とソリがあわず、伊藤系列の陸奥宗光、原敬およびこれに繋がる外務官僚から、その後も稲垣は疎んじられて割を食うことになる。

兎角、斎藤領事の書翰を読んだ原敬は、1895年3月26日付で兵庫県知事に次の文書を送付した。

「親展 兵庫県知事周布公平殿  
外務省通商局長 原敬  
客月初旬の頃岩本千綱なる者暹羅国行労働者数十名を神戸港より渡航せしめんとして一応貴庁の説諭を受け後遂に渡航せしめたるやに伝聞致候処同人義は尚又我出稼人百名計募集の爲め近々帰朝可致との内報有之候間同人の所為移民保護規則違反に不相成哉其〇「一字読めず」御注意有之度此段申進候也」（外務省記録3・8・2・48「移

民取扱計画雑件、第一巻」

以上のように、移民保護規則に違反した岩本の移民連れ出しは、当局から目を付けられた。上記斎藤の原宛書翰からは、岩本は移民を同行中の香港でスラサックに会い、そのまま香港に居残つたようにも、パンコクに到着後直ちに香港・日本に向かったようにも読める。伝聞情報であるから判然とはしない。岩本は1895年1月8日付で、香港から次の手紙を神戸の神戸又新日報に送っている。

「暹羅農商務大臣 暹羅（サイアム）とルビ」農商務大臣は曩（むかし）に移住民三十二名を引連れ当港（神戸港）より渡航せし岩本千綱氏の勧誘に依り日本漫遊を思ひ立ち既に香港迄着せし暹羅（サイアム）皇子薨去（別項電報参看）の報に接し本国へ引返すこととなりし趣きにて同行の岩本氏より本月八日認めたる郵書を以て昨朝当港（神戸）旅店へ左の如く申越せり

暹羅（サイアム）皇子薨去の趣きにて都合によれば農相は一度盤谷に引返すやも難計就て

は小生も或は該地に隨行四五日頃迄に帰朝する様に相成るや目下判然不致候若し他より問合せ等有之候得者（ば）右の趣き返事願度委細は後より云々  
一月八日 香港に

て 岩本

因みに記す当港（神戸）にては岩本氏の通知に依り既に其の準備をなし居たるよしにて右農商務大臣は来る廿日頃着神護訪山東常盤樓に投宿の上当市内を遊覧し夫れより大坂、奈良、京都の各処を遊覧の上陸路東京へ趣く予定にてありしなりと」（『神戸又新日報』1895年1月16日）。

日清戦争の視察等のため訪日途中のスラサックは、香港でワチルナヒット皇太子死去の報に接し、訪日を止めて帰国した。1895年1月8日時点で香港に滞在していた岩本も日本には行かず、香港よりパンコクに戻つた。

さて、岩本が連れ出した第1回シヤム移民32名は、前号の宮崎滔天の「暹羅殖民始末」に



見るように、山口県人であつた。彼らの姓名や出身村を探し出すことは可能であろうか。

外務省外交史料館に『旅券下付表』と題した、明治初年以來海外渡航の日本人に、国が交付（下付）した戦前の官庁用語）したパスポートの膨大な文書が残っている。これは外務省本省および各県が発行したパスポート氏名を3ヶ月毎にイロハ順で集計したものである。発行のオリジナル文書ではなく集計表であるため、転写の際の書き損じや書き落しは当然存在する。また、3ヶ月単位の集計表自体が紛失してしまつて欠落している期間もままあるが、大部分は保存されている。この文書の中から、1894年後半にシヤムに農業目的で渡航する山口県人

に兵庫県が交付したパスポートの記録（第1表参照）を見つけてことができた。この時期にシヤムに農業目的で渡航するために旅券を得た者は、全国でこのケースしかないもので、これは間違いない岩本の第1次移民団員である。

第1表中、最初の藤井新吉から亀弘まで、岩本千綱を除く18人（藤本夫妻の11ヶ月の幼子を含めれば19人）は、神戸市海岸通4丁目5の住所に寄留し1894年10月27日もしくは30日に旅券を取得した。次の石井から面田までは、同市相生

【表1】第1回シヤム移民の山口県人リスト（兵庫県庁で旅券取得）

旅券番号	姓名	族籍	住所	年令	渡航目的	渡航先	旅券下付月日	旅券返納月日
25898	藤井新吉	山口県平民	神戸市海岸通 4丁目5番留	28才6ヶ月	農業	暹羅	1894. 10. 27	
25899	岡本興太郎	同	同	25才11ヶ月	同	同	同	
25900	岡本ハツ(興太郎妻)	同	同	21才11ヶ月	同	同	同	
25901	井川松次	同	同	25才3ヶ月	同	同	同	
25902	吉本興市	同	同	50才8ヶ月	同	同	同	
25903	吉本ナツ(興市妻)	同	同	49才5ヶ月	同	同	同	
25904	藤井通吉	同	同	49才4ヶ月	同	同	同	
25905	吉本富五郎	同	同	30才11ヶ月	同	同	同	
25906	吉本ナツ(富五郎妻)	同	同	30才3ヶ月	同	同	同	
25907	岡本若松	同	同	20才11ヶ月	同	同	同	
25908	岡本イロ(若松妻)	同	同	18才2ヶ月	同	同	同	
25931	岩本千綱	高知県士族	神戸市海岸通 5丁目16番	37才2ヶ月	農業研究	同	1894. 10. 30	
25932	船本歌次郎	山口県平民	神戸市海岸通 4丁目5番同居	38才11ヶ月	農業	同	同	
25933	船本チヨ(歌次郎妻) 船本貞一(長男)	同	同	31才9ヶ月 11ヶ月	同	同	同	
25934	西浦龍蔵	同	同	30才9ヶ月	同	同	同	
25935	西浦イト	同	同	28才11ヶ月	同	同	同	
25936	岡山才吉	同	同	41才	同	同	同	
25937	岡山ハナ	同	同	28才9ヶ月	同	同	同	
25938	亀弘平吉	同	同	23才10ヶ月	同	同	同	
27678	石井佐五郎	同	神戸市相生町126	32才	同	同	1894. 11. 15	
27678(マ)	岡本佐助	同	同	37才4ヶ月	同	同	同	
27680	林長左衛門	同	同	23才2ヶ月	同	同	同	
27681	吉田儀助	同	同	35才7ヶ月	同	同	同	
27683	大森五郎右衛門	同	同	37才4ヶ月	同	同	同	
27684	岡本末松	同	同	40才11ヶ月	同	同	同	
27685	田村文治郎	同	同	34才	同	同	同	
27686	面田利平	同	同	24才	同	同	同	
27718	銀本新蔵	同	神戸市栄町3丁目66	43才5ヶ月	農業研究	同	1894. 11. 21	
28009	岡口倉松	同	同	49才8ヶ月	同	同	1894. 12. 11	
28071	中尾芳之助	同	同	46才7ヶ月	同	同	同	1895. 1. 15
28072	中尾スエ(芳之助妻)	同	同	48才3ヶ月	同	同	同	同
28073	中尾タネ(芳之助長女)	同	同	12才6ヶ月	同	同	同	同
30285	磯長海洲	鹿児島県士族	神戸市山本通 2丁目番外28番留	34才7ヶ月	写真業	同	1894. 12. 21	
30286	釜倉ハル	神奈川県平民	同	43才10ヶ月	鹿児島海洲に従ひ	同	同	

作

町126に寄留し、同年11月15日に旅券を取得した。途中27682番が見当たらないが、旅券番号が連続していることから、合計9人であると考えられる。その後の鑑本から中尾の3人家族の計5名は、同市栄町3丁目66に寄留して11月21日もしくは12月11日に旅券を取得した。但し、中尾一家の3名は翌月には旅券を返納している。シヤム行きを取り止めたと考えられる。それ故、岩本に同行したと考えられる者は、藤井新吉から岡田倉松までの29名(幼児含めれば30名)である。

この移民団員の年齢は比較的高く、7組もの夫婦(資料に夫婦と明記されているのは5組)がいる。参加者は出稼ぎ労働ではなく、家族全員の労働を必要とする農業移民を目的としていたのであるから当然であろう。

岩本の第1次シヤム移民団の人数は、本稿冒頭の資料は30名や30余名と記している。しかし、岩本は次の新聞記事のよ

うに32名と語っている。

「暹羅(サイアム)移民の模

様 暹羅渡航の事に関し先般婦朝当市に滞在中なる岩本千綱氏は先頃より病弱のため諏訪山吉田病院へ入院中の処、猶又快方に赴きたれば全快次第猶又同地へ渡航の筈なるが同氏に就き向(さ)きに同地へ渡航せし本邦移民の模様を聞くに三十二名の中目下サラテン「サーラー・デー」にて土地耕作に従事するもの男女六名、ブカナン・鉱山に十二名、盤谷府よりコラットへ通ずる鉄道工事に八名、其賃金は鉱山一ヶ月十八円より廿五円、鉄道工夫は一日四十銭より五十銭、耕作地は仕納を収獲する筈にして此土地耕作者は時々同国農商務大臣より奨励の賞与を得るなど甚だ好結果を得居れりとして耕地は一人前十ライ(一ライは我四百九十五坪)の割合にて耕作に従事なし居れりと云ふ(『神戸又新日報』1895年11月10日号)。

岩本が新聞に上記引用を語った時、宮崎滔天の暹羅殖民始末によれば、ブカナン(正しくはブカナン)金鉱山や鉄道工夫に雇われた人の大半は命を落としており、農業に残っている者は

僅かに過ぎなかった。もし、岩本が言うように移民団は32名であったのなら、筆者が作成した第1表は数人の欠落があることになる。なお、同表の最後に記載した写真業の磯長海洲・釜倉ハル夫妻は、岩本移民団には含まれないが、移民団と同時期に兵庫県で旅券を取得し、渡タイしている。

ところで、ワット・リアップの「日本人納骨堂過去帳」の最初には、「山口県人鑑本作造氏外拾七名、明治廿七、八年移民シヤム内地ゲンコイ地区工夫(風土病)と記されているが、「鑑本作造」は第1表の「鑑本新蔵」と同一人物の筈である。

移民団が旅券を取得した1894年当時、一般人は出身地の県ではなく、出発港(神戸、横浜、長崎など)のある県で旅券を取得するのが普通であった。

それ故、第1表記載の住所は、神戸の寄留先であり、これからは山口県などの出身なのかは判らない(なお、当時山口県から直接朝鮮半島に商用等で行く者が多数おり、彼らは山口県庁で旅券を取得している)。

しかし、幸運にも第1表中に出身地が判る人物が唯一人存在していた。面田利平(1870-1937)である。面田は1900年1月3日号のパンコク・タイムズ紙を皮切りに、1930年代半ばまで殆ど毎日同紙に理髪店の広告(本号掲載の広告参照)を出している。面田は第1回移民の生き残りで、来タイ5年にして高級理髪業で身を立てることに成功した。開業当時1バーツ(Tes)は大体日本円で60銭であるから、一人の客を得れば、一日の重労働分以上の収入を得ることができたことになる。面田は、戦前在タイ西洋人やタイの富裕層あるいは在タイ邦人の理髪師として、よく知られた存在であった。

面田は、1922年と26年に在タイ日本領事を通じて、タイで生まれた4人の子どもを自分の戸籍に入れている。その文書に記されている彼の本籍地は、山口県大島郡家室西方(かむろにしがた)村である(外務省記録38723-7「在外本邦人身分関係雑纂 亜細亜南洋之部」)。



著名な民俗学者宮本常一（1907-1981）もこの家室西方村に生まれ育った。同村は、1941年に白木村と改称し、1955年には合併で東和町の一部となった。この東和町を含む、大島郡の総ての町（4町）は2004年に合併して周防大島町一つとなつていく。出身地の縁で、宮本常一は岡本定と共著で、膨大な『東和町誌』（山口県大島郡東和町発行、1982年刊）を書いていく。同誌の前書きで柳居俊学・東和町長は、「町誌の執筆監修にあたられた民俗学の權威宮本常一先生（本町出身）が、大づめの段階でこの世を去られ、出版に間に合わなかったことは、かえすがえすも残念なことであります。掲載された原稿は宮本先生が常日ごろ町内をくまなく踏査され、その目で、耳で確かめられたことを、多年の体

験と豊かな蘊蓄に照らしつつ心血を注いで書かれたもの」と述べている。同誌は、90頁分を「明治維新以後の出稼ぎ」に割いているが、面田利平に関する記述は見当たらない。ただ、旧油田村の出稼ぎを述べたところに、次の記述がある。

「このほかにこの村『旧油田村』では船員としての出稼ぎもあった。その実数はさだかでない。明治二〇年代のことであつたというが、油宇の漁師が三、四人でシヤム（タイ）へいった。どういふ仕事でいったのかよくわからぬが、たつた一人生き残つて帰つてきた者の話に猛獣の出るところで、夜は火を焚いて猛獣を防いで仕事をした。

しかし何一つよいことはなく、みなマラリアにかかり、中には頭を水中に突つ込んで死んだものもあった。

どのような手続きとルートで渡航したものであろうか、とにかく陰惨な結果になったがくわしいことは一切わからない。戻つてきた一人も間もなくハワイへいつて、その後かえつてこない。その人の語つたことだけが残つて伝承されているのである」（宮本常一・岡本定『東和町誌』、山口県大島郡東和町発行、1982年、608頁）。

油田村は周防大島の東端部に近い漁村である。宮本常一は、船員としてシヤムに出稼ぎに行つたと理解したようだが、生き残りの話からも判るようには、海上の仕事ではなく猛獣が出るような森林の中での仕事である。これは、正にブカヌン金鉱山若くはコーラート鉄道建設現場の状況であらう。この不運な漁夫たちは、面田利平とともに、岩本千綱に連れられてシヤムに行つた第1回移民団のメンバーと考へて間違いない。

面田らの暹羅行きは、宮本が



連載 36  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

岩本千綱は1895年1月8日付で、一先ず香港からバンコクに戻るといふ手紙を神戸における定宿（神戸市海岸通5丁目16番屋敷の廻船問屋、安松市郎右衛門方と思われる）に出した後、バンコクに帰還し、シヤムへの日本人規模移民の受け皿として、暹羅殖民会社を発足させた。

岩本らが日本でシヤム行き移民を集めようとしたら、自ら移民会社を設立するか、もしくは他の移民会社に依頼するか、あるいは両方の手段によることになるが、その前提としてシヤムにおいて日本人移民に仕事其他を世話する会社の設立が不可欠である。移民希望者は、移民先での仕事・賃金、生活などについて安心できる説明がない限り、応募をするはずはないからである。

社とシヤム移民募集契約を（多分1895年5月に）した広島の外渡航株式会社について見ると、同社は、1894年10月20日に内務大臣より営業許可を受けたが、その際、広島の地元紙である芸備日日新聞と新聞『中国』に「本会社移民取扱営業の件内務大臣より本月廿日付を以て許可相成候此段株主諸君へ廣告す。広島市袋町十八番邸」（芸備日日新聞、1894年10月28日号）と広告を出し、更に1895年1月より営業を開始する旨を「本会社営業保証金完納候に付来る一月より渡航者取扱可致候」（新聞『中国』、1894年12月27日号）と広告を出している。同社の最初の移民募集は、布哇（ハワイ）移民であり、次の募集広告を行った。

「出稼人募集廣告、布哇国出稼人三百三十四人（内男二百廿六人夫婦者五十四偶）右布哇国新法律に基き同政府の認許を経たるに依り出稼人募集候条企望諸君は来る廿日限り本社へ御申込相成度此段廣告す

但備後地方は安那郡道上村安中萬一宅へ申込あるも妨げなし

広島市袋町十八番邸 海外渡航株式会社

明治廿八年三月十三日」（芸備日日新聞、1895年3月17日号）

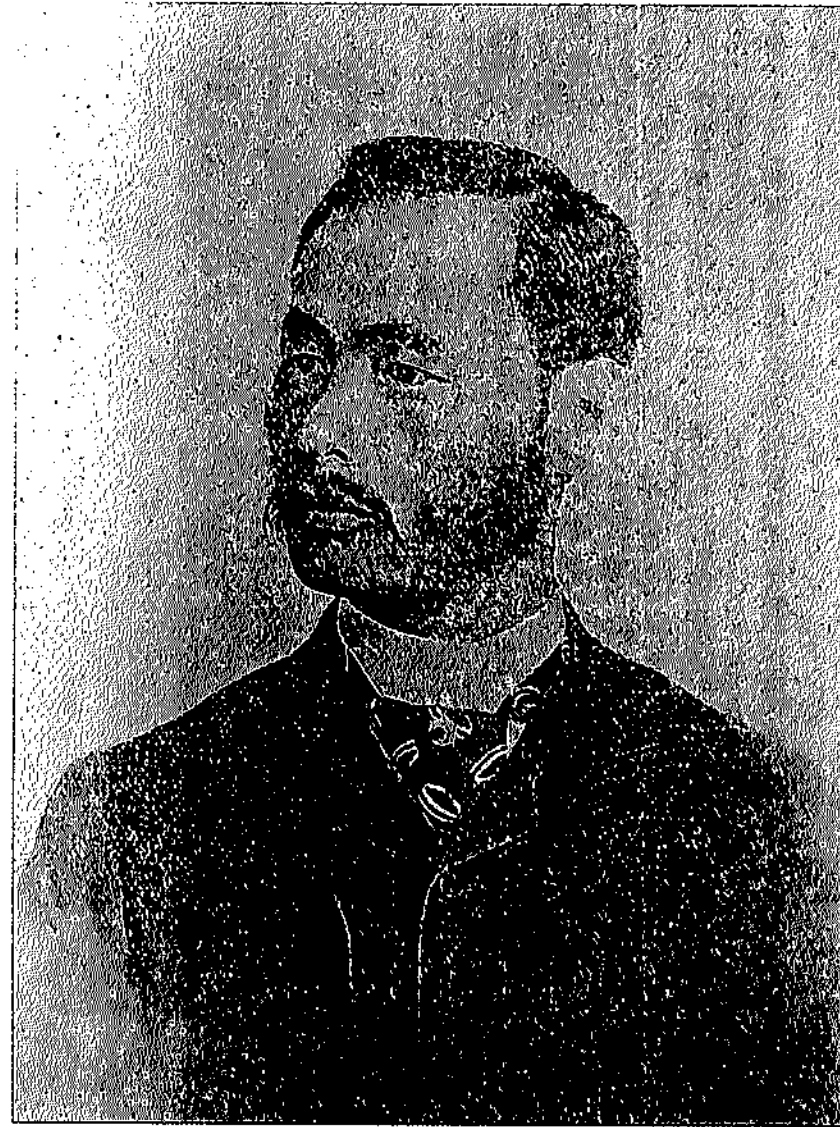
この移民はサトウキビ栽培のための労働者であつたが、彼等が無事ハワイに到着したことには、「渡航者布哇に安着す 本市袋町渡航株式会社の取扱にて布哇国へ渡航せしめたる本県及熊本県下の出稼人三百五十名は去月「4月」廿九日無事該地へ安着したる旨同国代理店ロムウェルド会社より通知ありたるを以て同会社にては昨日出稼人の家族へ其由を通知したり」と

2013.7  
5月17-20日

人熟練工を日本で6名調達し、バンコクまで連れて来て供給するという次のような内容の契約を結んだ。

し、食費・宿泊費は自前で1日(9時間半の労働)1ドル(墨銀)25セントの日当を月給で支給される。一方、ドック側は、労働者が熟練しており、性格がよくかつ同社の規則に従う

ならば、12ヶ月の雇用義務を負う。ドックは、バンコクで熟練工を引き取った時に、1人当たり45ドルの報酬を暹羅殖民会社に支払うことを約し、加えて契約時点においても熟練工1



暹羅殖民会社顧問、大谷津直磨 (1859-?)

人当たり30ドルの前貸金を支払う。前貸金は、熟練工の月給から最初の3ヶ月間、毎月10ドル天引きされる。

熟練工がドック側に責任がある労災により仕事ができなくなった場合は、3ヶ月を上限として日当の半額を支給する。もし、熟練工が12ヶ月の満期に達する前にドックから離職した場合、暹羅殖民会社に支払われた45ドル中、離職以後の期間相当分はドックに返還しなければならない。この外に、暹羅殖民会社は、熟練工用に通訳者1名を供給する。通訳者は6名の熟練工と同一条件で雇用されるが、その月給は能力に応じ、25ドルから45ドルまでの間とする。

合意に従い、契約時点で、岩本と大谷津は、ドック側から熟練労働者6名プラス通訳者1名、合計7名分の前貸金210ドルを受領した。

しかし、結局、岩本らはこの契約を何等履行することはなかった。契約後3年近くたった1897年10月7日に

なつて、ドックは稲垣満次郎弁理公使に、岩本と大谷津に前貸金210ドルを渡したが、その直後に2人は日本に帰ったまま何の音沙汰もないとして調査を依頼する文書を提出した(外交史料館所蔵、外務省記録4-13-144)。岩本千綱盤谷船渠会社工夫供給の契約不履行並に暹羅國農商務大臣の裝飾委託刀剣入質に付同大臣より取戻方請求一件、以下の出所も同一。

付右刀剣取戻方尽力あり度旨本邦人磯長海洲及佐々木寿太郎へ別記乙号の通り依頼有之候趣を以て同人等より申出候に付ては右両件共本邦人の体面並信用にも不少關係を及ぼし候義に候得者早速所理為致候こと必要と存候得共目下本人は東京在住の様子に有之候に付篇と本人御取調の上何等御回報相成候様致度此段及稟請候 敬具  
明治三十年十月十三日 在暹弁理公使稲垣満次郎  
外務大臣伯爵大隈重信殿

これを受けて、外務省の内田康哉通商局長からの問い合せに、岩本は98年3月6日付で次のように弁明した。

「本邦人岩本千綱契約不履行其他に付取調方稟請の件  
本邦人岩本千綱なる者明治二十八年中当府船渠会社へ工夫供給の契約を結び前渡金貳百拾弗を請取りたる俟其後契約の履行無之右は如何なる次第なるや事実取調あり度旨同会社支配人より別紙甲号の通書類相添依頼有之又先年当府農商務大臣より前記岩本千綱へ刀剣一振日本國に於て裝飾を加ふる為め委託致置候処今日に至るも未だ返戻せざるに因り原形の俛にても不苦候に

「千綱儀去る明治廿八年暹羅國に於て農商務大臣スリサクヂー「スラサック」侯爵の補助により日本より農工夫移住の目的を以て殖民会社設立の當時同國盤谷ドック会社より日本の職工雇入を依頼せられ旅費手当等の内金として墨銀二百弗(マ)受取り帰朝の上夫々の手続を経て五名だけ雇入致し千綱渡還の節引連れ可申約束に致し置

き候処不幸病氣に罹り往再一ヶ年廿九年三月に到り漸く渡航の運びに相成り候得共前記職工は種々の事情あり悉く解約致し隨て彼れ等に手渡し致したる準備金等も其俛に相成り候処ろ石橋卯(マ)三郎より承り候には先是官崎寅藏の引連れ渡還せし農夫十名を石橋の尽力にてドック会社へ雇わせ其際協議の末兼て千綱が受取りたる二百弗も別段会社へ返却するを要せざることに相談したりとのことに承知致し居候処る前般貴下より該頭末御尋ね相蒙り尚ほ詳細の始末書石橋へ請求致し候得共目下同人居処不明の為め諸方搜索致し候と雖も未だ相分り申さず何れ更に御答申可致と存じ候得共不取敢前条事実迄開陳に及び候也

以上の如くにして尚ほ之を詳言致し候得ば

一、職工の旅費手当等としてドック会社より受取りたる二百弗は日本にて雇入れの際悉皆内渡しと為せしこと  
一、一端雇入れたりと雖も或る事情にて解約せし為め手当等は悉皆無効となり取戻し得ざりしこと

一、石橋卯三郎が人夫十名をドック会社へ周旋せしとき同人と会社との間に相談し其際雇入の人夫に旅費手当等を給せざる為め前記二百弗も差引千綱に請求せざることを  
但し之は石橋が千綱に對

する友誼上の助力に出せしこ  
と

右各項御参考の爲め更に開申致  
候也

明治卅一年三月六日

京橋区南鍋町一丁目七番  
地小田武雄方 岩本千綱（岩本  
千綱印）  
内田通商局長殿

上記岩本の弁明は、西徳外  
相から98年3月10日付で稲  
垣公使に伝えられた。稲垣は、  
弁明を英訳してバンコク・ドッ  
ク支配人に4月14日に伝達し  
た。支配人は、稲垣に4月23  
日付で、岩本の弁明の第3点は  
事実と反するとして、次のよう  
に返答した。「岩本が言うよう  
な取り決めは何等存在していな  
い。石橋と称する者が、彼の手  
持ちだが、職を与えることがで  
きない多数の日本人労働者を雇  
うように我が社に要請してきた。  
我が社は雇用に応じたが、  
労働者は10日ほど働いただけ  
で、より賃金が高いブカヌン鉱  
山と鉄道に去ってしまった。熟  
練工を我々に供給するか、さも

なければ前貸金を返還しなけれ  
ばならないという岩本の義務は  
免除されることはない」と。  
バンコクに残って暹羅殖民会  
社の経営を担当していた石橋萬  
三郎は、バンコク・ドックから  
熟練工供給契約の履行もしくは  
前貸金の返還を迫られ、189  
5年9月には同社を解散した。  
岩本、大谷津は、熟練工・通  
訳合計7名のタイまでの渡航経  
費や渡航準備金としてバンコ  
ク・ドックから前貸金210ド  
ルを受け取ったまま、契約を履  
行せず、持ち逃げする結果と  
なったのである。

さて、話は先走るが、上記1  
897年10月13日付の稲垣公  
使の大隈外相宛て公信21号に  
言及されているので、岩本が1  
895年2月の離タイ前に、ス  
ラサック農商務大臣から日本で  
装飾して欲しいと依頼されて預  
かった刀剣（日本刀）の運命に  
ついて、ここで見ておきた  
い。

スラサックは、1897年7  
月28日付で、Secretaries of  
the Japanese Clubの磯長海洲

と佐々木寿太郎に対し次の書翰  
（公信21号別記乙号）を送つ  
た。即ち、岩本が日本に出発す  
る際に、刀を預け日本風の装飾  
を加え、バンコクに戻る際に持  
ち帰るよう依頼したことはこ  
存じの筈であるが、それ以来長  
時間を経たのに、何等音沙汰が  
ない。この刀は思い出深い品で  
あり、装飾を加えないままでも  
結構なので、是非取り返した  
い。どうか御助力を御願ひした  
い、と。

ここにいう「the Japanese Club」と  
1895年1月に暹羅（バー  
ン・サーラー・デーン）で結成  
された日暹協会とは同一のもの  
と思われるが確証はない。但  
し、97年当時、バンコクに日  
本人の団体が存在していたこと  
は明らかである。

稲垣公使の前掲公信21号に  
対して、97年12月3日に外相  
は公信72号で、岩本千綱の以  
下の返答を稲垣公使に送付し  
た。

「黄金色装飾刀一振  
右は明治廿八年二月暹羅国よ  
り帰朝の御り同国農商務大臣陸

軍中将スリサクデー「スラサッ  
ク」侯より日本にて取り付け方  
を依頼せられ携帶し已に悉皆出  
来の上同年八月渡航の際持ち行  
くべき筈の処無端大病に罹り  
神戸病院に入り同年十一月下旬  
迄加養病ひ漸く癒へて將に出発  
せんとせしに先之日本政府より  
盤谷府滞在の日本人保護を仏国  
領事に托せし爲め暹羅上下の悪  
感情を来し前途の仕事上頗る支  
障を来すの慮ありたれば暹羅  
某有力者並に在暹日本人より  
依頼により總代の資格にて東京  
に上り栗原佑及び長谷場「純  
孝」其他衆議院代議士諸氏を訪  
ひ且つ當時の外務次官原氏等に  
意見を陳述し暹羅国へ帝國領事  
設置の議を促し諸方奔走中彼の  
刀は神戸海岸四丁目（マ）安  
松市郎右衛門に保管を依頼し置  
き后更に之を同市栄町六丁目  
（マ）吉原太三郎に依託した  
り 去年渡暹の節之を携行せん  
と欲せしに彼れの云ふに甚だ不  
相済ことなれ共実は不時の融通  
に之を他物と共に親戚に預け多  
少の金円を整へたれば暫時猶余  
を乞ひ直に後より盤谷へ送るべ

しと頻りに依頼あり其事情如何  
にも気の毒なりし故深く之を戒  
め尚ほ直に小生が許迄送付すべ  
きことを約し出帆したり当時の  
実況は同行者馬場新八今井庄兵  
衛氏等の親しく見る処なり

盤谷に達し農商務大臣には其  
旨を以て日延を乞ひ置き日本よ  
り送付を待つ中小生は内地旅行  
引続き日本に帰朝し尤も盤谷出  
発の期該刀は直に農商務大臣  
の手許へ送るべき旨を吉原へ書  
通し置けり

本年六月神戸に着し直に吉原  
を訪問せしに彼れは去年より病  
氣にて頃日追々快方に赴きたる  
を以て目下他に遊藝中なりとて  
彼の代人に面会し刀の事を尋ね  
たるに前述病氣等の爲め今に其  
俟に打過ぎ居ること故其等  
閑を費め一方には在盤谷山本安  
太郎に送書し小生渡航の節携帶  
すべき故其旨農商務大臣へ申訳  
方を依頼し尚ほ吉原代人へは本  
年末小生渡航のとき携へ行けば  
夫れ迄に不都合なき様可致旨申  
聞せ上京致し候

り刀丈は或は先へ送り届くる  
考も有之目下神戸へ交渉中に候  
間御尋ねに実況申述候  
明治卅一年十一月十七日 敬白  
岩本千綱（岩本印）  
内田通商局長殿

しかし、岩本は刀剣を返さな  
かった。稲垣公使は1898年  
3月16日付で、西外相宛に次  
の公信第8号を送った。  
「本邦人岩本千綱への寄託刀剣  
取戻に關する件

先年当國農商務大臣より本邦人  
岩本千綱へ刀剣一振を寄託し其  
後之を返還せざるに付本人取調  
方昨年十月十三日付公第二十一  
号を以て申進置同年十二月三日付  
送第七十二号を以て本人よりの手  
続書を添へ御回答の次第も有之  
候処今日に至るも未だ返戻し来  
らず抑も該刀剣は暹羅先帝より  
前外務大臣へ下賜せられたるも  
のにして一家の宝物として秘藏  
し居るものに有之 之を當國農  
商務大臣より岩本千綱へ寄託し  
たるものにして同大臣は大に苦  
慮致居り若し質物等に相成居候  
義なれば之を贈「あがな」ふ丈

の金額は前渡にて可差出に付其  
の金額承知致したしと迄申候得  
共当方にては金額も相分兼候に  
付前渡を為さしむることに計  
らひ難く候に付ては該刀剣にし  
て愈々質物と相成居り右岩本千  
綱に於て之を受出すべき金額を  
支弁不致る爲め送付方遅延致居  
候如き始末に候はば右必要の金  
額支弁方何とか御取計置相成り  
一日も速に該刀剣送付相成候様  
致度其の金額は農商務大臣より  
返還可致義に有之候間此段可然  
御取計置相成度右申進候 敬具  
明治三十一年三月十六日 在暹  
井理公使稲垣満次郎

稲垣は98年6月1日に帰京  
した際に、直接外相に事情を説  
明した。これを受けて6月11  
日付で、内田康哉通商局長は大  
森鍾一兵庫県知事宛に「該刀剣  
は元と暹羅國先王より同國前外  
務大臣へ下賜に係るものにて一  
家の重宝として秘藏せらるるも  
のなるを農商務大臣より岩本へ  
寄託したるものにて同大臣  
は之が爲め非常に苦慮し居り質  
物等に相成居候義なれば之を贈  
「あがな」ふ丈の金額は前渡に

て可差出とまで申出切に該劍取  
戻方望み居候趣本年三月十六日  
付を以て同井理公使より重ねて  
回報接到尚同井理公使今般帰朝  
の上先方の実状等親しく當省に  
於て談話の次第も有之旁同農商  
務大臣の爲め如何にも氣の毒の  
感に有之候間該刀剣の転輸致人  
の手に渡り終に其所在を失する  
に至らざる内速かに回収の道を  
講じ度候に付乍御手数數前記吉原  
太三郎御取調の上岩本申出通り  
の事実には有之候哉若又右申出の  
通り果して質物と相成居候はば  
回収に要する贖金額等至急御回  
報に預り度」と依頼した。

はやくも6月18日付で、兵  
庫県知事は内田通商局長に、  
「吉原太三郎なるものは目下布  
哇國へ渡航不在中なるも代理者  
の申立に依れば該刀は岩本千綱  
より吉原太三郎へ譲受け其後他  
へ質入しあるを以て元金及利子  
御弁済し相成候は何時にても差  
出致旨別紙儀の通り債権者連署  
を以て申出」として、下記の別  
紙を送付した。即ち、  
「本日神戸市栄町五丁目吉原太  
三郎所有刀剣之義に付事実御尋



問相成候処本人は明治三十年十一月海外渡航致し居候に付私共本人の代理と成り左に事実を陳述す

刀剣之義は明治年月日不詳の頃当市住岩本千綱と申人より吉原太三郎へ譲り受け其後商業資産の都合に依り明治廿九年十二月他に質物と成し金貳百拾円を借入れ之れに本月までの利子七拾九円八拾銭を加算すれば総計金貳百八拾九円八拾銭と相成り申候尤も刀剣は日本製にして其拵「こしらえ」等も亦然り

右之事實にして金貳百八拾九円八拾銭を御下被下候はば本人不在に不係刀剣は何時にても上納可仕候依て債権者運署を以て此段御受申上候也

明治三十一年六月十六日

神戸市栄町五丁目 吉原太三郎

代理 岩崎甚平

同市相生町二丁目 債権者 菊水吉介

兵庫縣知事大森鍾一殿

結局、98年9月22日に外務省が302円40銭を立て替えて、兵庫縣にスラサックの刀剣を質請けさせた。翌月国府寺新

作在暹羅時代理公使は、スラサックから同額を回収した。日時を加えて岩本千綱の弁解を整理すると次のようになる。即ち、スラサックから装飾を依頼されて預かった日本刀は、神戸の吉原太三郎に預けたが、吉原が勝手に借金に形にしてしまった。暹羅、ラオス、安南の三国探検の旅に出発するため1896年10月8日に神戸を出港し、1896年10月末頃パ

預けて以来、岩本から何の音沙汰もないと書かれている。岩本は作り話で言い訳をした可能性もある。

何れにしても、吉原は岩本のいう約束に従ってパノコクに刀を後送するどころか、その直後の96年12月に210円で買入れた。これは刀の所有権が吉原に帰していったからであろう。岩本が刀を持参できなかったのは、吉原が借金の形に親戚に刀を恣意に渡したからではなく、岩本本人が借金の形に吉原に刀を渡していたからであると考えるのが自然であろう。

スラサックは日本の外務省に依頼して、自費で質請けの元利

全額を払い、3年半以上を経てやっと手許に取り戻すことができた。岩本がスラサックとの約束を反故にした理由は、金銭に窮していただけではなく、期待したほどにはスラサックが暹羅殖民会社を支援せず、同社が潰れてしまった以上、スラサックの利用価値はなくなつたと見限つたことも一因かも知れない。恩義を受けた人に対する岩本の仕打ちは正に自己中の極みである。

連載の  
パノコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXIII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

が、彼らは10日ばかり働いただけで、より賃金のいいプカヌン金鉱山や鉄道建設に移つていったと回答した。

両者の話は、実はかみ合っていない。岩本は、明白に宮崎滔天が連れていった第2次移民団について述べているのだが、ドック支配人は第1次移民団について語っているようである。プカヌン金鉱山で働いた日本人移民は、1895年1月に来タイした第1次移民(32名)だけであり、その約半数(15名)がプカヌンに行った(残りの一部は鉄道工夫となった)。95年10月来タイの第2次移民(20名)はプカヌンには誰一人として行っていない。

本誌5月号に引用した宮崎滔天「暹羅殖民始末」によれば、第2次移民団の到着前の1895年9月上旬にはプカヌンに行つた15名中4名がパノコクに逃げ帰り、暹羅殖民会社にプカヌンで死に瀕している仲間の

救済を求めた。暹羅殖民会社は、既にこれらの移民に対する責任はないと考えていたが、同社の石橋萬三郎、松野恭三郎、荒川雅五郎の3名はやむを得ず救済に赴いた。助け出すことができたのは、日本人女性1名とその乳飲み子のみであり、残りの10名は既に死亡していた。更にパノコクに逃げ帰った4名中、2名もコレラで死亡した。来タイ後9ヶ月にして、第1次移民団の32名中、少なくとも12名は病死したのである。その前にプカヌン金鉱山のフランス人監督者もマラリアに罹り、パノコクに引き揚げていたので、プカヌンの操業は遅くとも95年9月には停止したはずである。それ故、第2次移民団がプカヌンで働くことはあり得ないのである。

他方、パノコク・ドックで働いたことが明白なのは、第2次移民団である。第2次タイ移民団を暹羅殖民会社と提携して募

集した海外渡航株式会社は、宮崎滔天を代理人として採用し、パノコクに同行させた。タイ到着後、宮崎滔天が連れてきた20名の移民中15名は、石橋の周旋により月給12円でドックに就職し、宮崎が通訳の任を勤めた。ところが間もなく、このうちの8名は三谷足平に誘われてより賃金のいい鉄道建設工事に去った。このことは宮崎自身が「暹羅殖民始末」に書いている。

以上から、とりわけ、ドックの支配人がプカヌンという固有な名詞を出していることから見て、第1次移民団にも、石橋の斡旋によりパノコク・ドックで働いた者がいたことは間違いないと思われる。

農業を目的に来タイした第1次移民団が、どうしてパノコク・ドック、プカヌン金鉱山あるいは鉄道建設の工夫に転じたのか。フランス人経営のプカヌン金鉱山はどのような会社が経

営し、金鉾山はコーラートのど  
こにあったのか、現在ブカヌン  
に昔のルートで行き着くことが  
可能だろうか。1895年2月  
に日本に移民募集などのため帰  
国した岩本千綱と大谷津直磨  
は、暹羅殖民会社の名で、日本  
で誰と提携してどのように移民  
(第2次移民)を集めようとし  
たのか、どの程度本気だったの  
か。第2次移民の来タイ者はど  
うしてわずか20名と少なかった  
のか。大谷津、松野、荒川ら  
の暹羅殖民会社の社員はどうい  
う人達なのか、官崎滔天には徹  
底して糾弾され悪名高い三谷足  
平は本当に悪人なのだろうか  
等々、様々な疑問が生じる。こ  
れらの疑問に本号以下で答えた  
い。

まず、暹羅殖民会社の社員で、  
これまで紹介していない人物に  
ついてできるだけ詳しく見てお

こう。官崎滔天の「暹羅殖民始  
末」に記された暹羅殖民会社の  
陣容を、誤記を修正して再度掲  
載すれば次のようになる。

暹羅殖民会社副社長 岩本千綱  
同 会社理事 佐々木寿太郎  
同 同 山本安太郎  
同 同 石橋萬三郎  
同 同 大谷津直磨  
監督 松野恭三郎  
書記 荒川雅五郎

暹羅殖民会社は社長を置いて  
いないが、これは、スラサック  
モントリの資金に期待して彼  
を社長に想定していたからだ  
と思われる。岩本の経歴について

は、ここでは触れない。

佐々木寿太郎(ひさたろう)  
は、外交史料館旅券下付表の記  
録からは、1890年に旅券下  
付を受けたことが判るだけで、  
同記録には彼の族称(土族か平  
民か)、生年月日、本籍地、旅  
行地名、旅行目的などは一切記  
されていない。しかし、この記  
録から見ても、佐々木は1890  
年に来タイしたものと思われ  
る。彼は、なかなかの人物で  
あったようで、その後来タイし  
た岩本千綱や阿川太良が彼の世  
話になっていた。「日本人納骨  
堂過去帳」には、彼は三重県出  
身、建築技師で1910年5月  
23日死去したことが記されて  
いる。

山本安太郎は、1872年6  
月生れの東京府士族で1888  
年にパーサコラウオンに伴われ  
て来タイした。タイ語をマス  
ターしたが、評判は岩本千綱並  
に芳しくない。

石橋萬三郎(1869-18  
98)については、これまでも  
詳述した。旅券下付表によれ  
ば、彼は最初の来タイのため、  
24歳1ヶ月の1893年7月  
21日に、商用を理由として旅

券下付を受けている。来タイ後  
3ヶ月ほどで帰国、同年11月  
22日には長崎県に旅券を返納  
した。1894年3月12日には、  
長崎県で再度旅券下付を受け  
て、タイに渡航。今回は2年  
弱連続して在タイしたと思われ  
るが、96年2月21日には長崎  
で旅券を返納している。其  
頃帰国したものと思われる。98  
年3月23日に、結核にて東京  
で死亡。

松野恭三郎は、1875年半  
ばに平戸の士族松野太郎の三男  
として生れ、1894年3月8  
日に東京府から、暹羅語研究の  
ため暹羅に渡航するために旅券  
の下付を受けた。当時、旧藩主  
である松浦詮伯爵の東京邸に寄  
宿中で、多分何らかの学校に通  
い、英語等を学んでいたものと  
推測される。94年5月に暹羅  
に旅立ったが、多分彼を暹羅に  
呼寄せたのは同郷の石橋萬三郎  
であろう(一時帰国した石橋に  
同行して来タイした可能性もあ  
る)。

1895年1月、ワチルナヒッ  
ト皇太子の早世直後、チュラー  
ロンコーン王はイギリス留学中  
のワチラーウット親王(後の

ラーマ6世)を皇太子に立て  
た。1895年1月20日付  
で、在タイ日本人12名は連名  
で立皇太子のお祝い文をデー  
ウォン外相に提出した。12名  
とは、建築技術者の佐々木寿太  
郎と田山九一(1870-19  
41、香川県士族、1891年  
末来タイ)、タイ文部省に雇用  
中の印刷工4名(嶋崎千六  
郎、大山兼吉、伊藤金之助、樋  
口二郎、最初の3名は1892  
年8月に来タイ)、それにスラ  
サックモントリ邸(バーン・  
サーラー・デーン)を住所とす  
る大谷津直磨、石橋萬三郎、松  
野恭三郎(狂介)、辻秀五郎、  
三谷足平、武藤(ぶとう)美一  
である。

辻は1871年末に長崎県で  
生れ、1894年末か95年初  
に来タイしたばかりであった。

その後1904年ごろまでタイ  
で商業に従事し、その後蘭印  
度に転じたようである。

武藤美一は1877年に佐賀  
県で生まれ、辻同様来タイした  
ばかりであった。横浜で働いた  
ことがあり、少々日本語にも通  
じ日本人を妻とするデ・ソーザ  
(マカオ生れのポルトガル人、  
英国籍)が1895年1月に来  
タイして、同年中に在タイ醜業  
婦の宿主等からの出資で怪しげ  
な「日本暹羅銀行」を立ち上げ  
たことを、以前紹介した。武藤  
は、この銀行の事務員であつ  
た。三谷足平(1860-19  
24)は、初代日本人会会長で  
もある。後日詳細に紹介し  
たい。

さて、松野恭三郎の話に戻る  
と、彼は在タイ半年余で189  
5年2月の暹羅殖民会社創立に  
際し、同社の移民を監督する任  
務に就任した。当時、未だ満19  
歳であった。

松野および同い年の荒川は、  
第1次移民の15名が95年5  
月、ブカヌン金鉾山の労働者  
として採用された際、暹羅殖民  
社の監督として同行した。しか  
し、間もなく移民たちは、自分  
たちの賃金から、松野、荒川に  
手当を出すことを惜しみ、暹羅  
殖民会社との関係を断った。移  
民たちにとっては、タイに來た  
ばかりの自分たちと同程度の在  
タイ経験しかなく、かつ年齢的  
にも自分たちよりも若い20歳  
前後の松野と荒川は、あまりに  
も頼りなげに見えたのだろう  
か。それに松野、荒川を介して  
フランス人監督と意思疎通がで  
きたのちは、単純な仕事なので  
特別な通訳も必要としなくなっ  
たのであろう。

1ヶ月程度でブカヌンから  
バンコクに戻った松野は、前述  
した設立早々の「日本暹羅銀  
行」から融資を受けて洗濯屋を  
開いた。本誌6月号で紹介した  
面田利平も、同時期に「日本暹  
羅銀行」の融資を得て理髪店を  
開いている(朝日新聞1895  
年12月8日号)。

旧平戸藩出身者の親睦会、三  
光会の会報『飛鷹』の第8号

(1900年12月29日発行)  
の49頁は、その後の松野につ  
いて次のように記している。

「暹南商會、松野恭三郎氏は去  
る廿七年五月「1894年5  
月」東京を去つて暹羅盤谷府に  
入り同地にある四年 其間香港  
新嘉坡等南亞の要港を視察する  
あり 卅年「1897年」九月  
(マ) 稲垣公使が國書を捧じ  
て到るや南亞に於ける邦人の事  
業甚だ振はざるを慨し松野氏等  
在羅人を奮励せらる 松野氏は  
婦朝して素志を貫かんとして東京  
にありて経営奔走する久し 幸  
に友廣猪之助氏「平戸出身と思  
われる」の助援を得たり 氏  
「友廣」は廿八年日本法律学校  
を卒業し一時郷里にありしが昨  
年「1899年」八月出京し松  
野氏が企圖の有望なるを信じ且  
つ苦心經營の情を察し画策 困  
難相扶け他日の成功を期せんと  
す。千葉県人武井忠五郎山口県  
人阿川太郎(マ)二氏に依て  
盤谷府に商店を開き貿易に従事  
せしが阿氏不幸此世を去り其事  
業將に絶えんとす 武井氏の令  
弟信氏故兄の遺志を継がんと欲  
するなり 松野友廣二氏と意氣  
相投じ結託して規模を大にし株

式会社を興し南亜の貿易を振興せんとし八月東京橋区本村木町に事務所を設け図南商會と命じ都下及び名古屋豊橋千葉埼玉地方奔走の結果、勤からざる賛助者を得たる由なれど諸氏積年計画を遂ぐるの遠きにあらざるべし、聞く所によれば其計画の大略左の如し

株式組織とし南亜貿易株式會社と稱す

東南亜の直貿易をなすを以て目的とす

総資本金額を三十万円とし第一回払込金額を総資本の四分一とす

本店を東京に支店を暹羅盤谷府に設け尚營業上の都合に依り支店又は出張店を内外極要の地に置く事あるべし

しかし、同郷の稲垣満次郎公使に懇懇された松野の日タイ直貿易という図南の企図は成就し

なかったようである。前記『飛騨』に掲載されている三光會會員名簿によれば、1900年末時点の松野の住所は、「京橋区本村木町3丁目21番地 図南商會」だが、翌年の名簿には名前がなく、1902年から1913年までは、在郷「平戸村松野恭三郎」と記載されている。その後は不明である。

荒川雅五郎も平戸で1875年の8月頃に生まれた。族称は平民で、暹羅に「儒学」の目的で渡航するため、長崎県庁で1895年1月23日に旅券の下付を受けた。来タイ直後の95年2月に暹羅殖民会社の書記に就任した。荒川も松野同様、未だ満19歳の青年であった。

荒川も松野と同様、石橋と同

郷であり、親分肌の石橋の子分格であったと思われる。荒川のその後については資料がない。同じく新着で暹羅殖民会社の顧問に就任した大谷津直磨は毛色の変わった人物である。

大谷津が学術研究を目的として暹羅行きの旅券を東京府で下付されたのは、1894年10月26日。その直後に、シンガポール経由で来タイした。岩本千綱は、1894年5月6月から移民集めのために滞日したが、当時岩本の名はタイ探検者・事業家として喧伝されていた。安政6年生れの大谷津は、安政4年または5年生れの岩本と同世代。恰度、中学校長の職を失って失業中であつた大谷津が、岩本に連絡し意気投合したものとと思われる。

大谷津直磨(1859-?)は東京大学植物学科の第2期卒業生(理学士)である。同学科の最初の卒業生は1885年7月に卒業した齋田功太郎(1859-1924、高等師範学校教授)、2番目の卒業生は、1886年7月に卒業した白井光太郎(1863-1932、東大教授)と大谷津直磨の2人で

ある(東京帝国大学『東京帝国大学一覽、従大正三年至大正四年』、1915年、236頁)。但し、大谷津が卒業する年の3月、東京大学は帝国大学と改名され、その下に法、医、工、文、理の五大学が所属することになった。大谷津が卒業したのは、正式には帝国大学理科大学植物学科である(木村陽二郎編『白井光太郎著作集第VI巻』、科学書院、1990年、299頁)。

ついでだが、一昨年あたりから、東大は9月入学と騒いでいたが、東大に限らず20世紀初頭位まで日本の中等教育機関は9月入学、7月卒業であり、多くの授業は、英語で行われていた(たとえ教授も学生も両方ともに日本人であつても)。

さて、大谷津の研究テーマは、禾本(カホン)科(現在はイネ科という)植物の分類であつた(田制佐重『趣味の日本科学史』、啓文社、1938年、430頁)。当時の植物学教室の教授は矢田部良吉である。植物学の巨人、牧野富太郎(1862-1957)が植物学教室への出入りを許されたの

は、この頃である。牧野は、土佐の金持ち造り酒屋の一人息子であつたが、植物研究に没頭する余り学校教育にも、家業にも関心を持たず、小学校中退の学歴であつた。大谷津は、青年牧野と同世代であり、東大植物学教室で面識もあつたはずである。

大谷津の先輩の齋田も、同期生の白井も植物学者として大成した。同様に専門的な研究の手ほどきを受けた大谷津にも、もし植物学研究を続けていれば同様の人生が待ち受けていた筈である。しかし、限られた狭い世界に長らく生きることは、彼の性分に合わなかつたためか、あるいは研究の楽しみに魅了されるような経験に乏しかつたためか、とにかく彼は大学卒業後、植物学研究の世界から離れてしまった。

白井光太郎著作集を編集した木村陽二郎(東大教授、植物学・科学史研究者)は、白井の伝記の中で、白井の同期生大谷津について、「明治十九年には植物学科の四年生には彼『白井』と大谷津直磨、動物学科には坪井正五郎がおり、…筆者

「木村」は大谷津の将来についても知るところがない(木村陽二郎編『白井光太郎著作集第VI巻』、科学書院、1990年、286頁)と述べている。

それでも、大谷津の前半生は、シヤム行き前に出版した自著『簿記学』(尋常師範学校講義録第21号、1894年6月25日発行、東京、全317頁)に付した「理学士大谷津直磨先生小伝」から判明する。そのまま引用すれば次の通りである。

「大谷津先生名は直磨、安政六年『1859年』五月小田原相模早川口に生る、考「死亡した父の意」姓倉賀野諱は太宮、弓術師範たり、明治五年、先生出でて大谷津元長の義子となり、今の姓を冒す、大谷津氏は世々小田原藩の医員たり、元長に至り蘭学を修め、刀圭の名頗る高し、又先生をして業を継がしめんとす、先生中心医たるを喜び

ず、且曰く、専門の学を修めんと欲すれば、須らく洋書を讀まざる可らずと、乃ち藩立中学校に入り、始めて英語を学ぶ、尋て東都に來り贅を慶應義塾に執る、後一年出でて松山医学校(棟庵氏の設立する所)に入り、理化解剖藥物の諸科を学ぶ、而して遂に果さず、去て東京英語学校に転じ、明治十三年大学予備門に移ると云ふ、今先生の伝を詳にせず、姑く其履歷書を請ひて抄出すること左の如し

明治十九年七月十日帝國理科大学卒業(植物学科)(帝國大学) 同年九月十八日習院教授(宮内省)、廿年二月十日依願免本官(宮内省)、同年五月一日より八月廿三日に至る神奈川県平民田中平八に随ひ商況視察として英仏並びに北米合衆國諸大市

府を巡回す、同年十一月二日任山形県尋常中学校長兼教諭(山形県)、同廿二年六月四日山形県尋常中学校校長兼職中校務格別勉勵に付其賞として金貳拾円を給与す(山形県)、同年同月十五日任富山県尋常中学校校長兼教諭(富山県)、同廿三年一月廿二日依願免本職並兼職、同年同月廿八日東京日本橋区坂本町田中銀行役員となる、同年五月八日より同九月一日に至る商況視察として北米合衆國華盛頓州の新開諸市並に英領加奈陀晚香波港等を巡回す、同廿四年三月七日任徳島県尋常中学校校長(徳島県)、同廿六年四月廿九日依願免本職

大谷津は、明治22(1889)年6月から翌23年1月ま



での半年間、富山県尋常中学校（現富山県立富山高校）の第3代目校長として勤務した。校長は判任官待遇で教諭も兼ね月俸は90円であった。同中学は富山最初の旧制中学である。当時は中学レベルの数学や地歴などの教科書は英語でしかなく、中学生も教師も高い英語力を要求された。大谷津はなかなかハイカラではあったが（彼のハイカラさは本誌前月号掲載の肖像からも推察される）、生徒の心を掴むことができず、校長排斥運動を受けて、23年1月に全教員（除く御雇い外国人の英語教師）と共に辞職した（高成玲子「富山のお雇い外国人教師（その1）」、『英学史研究』第27号、1994年）。しかし、大谷津の前任者の校長も学生ストライキで短期間に退任しているもので、大谷津に特別に問題があったとは思われない。

その後、大谷津は1891年から2年間徳島尋常中学（現徳島県立城南高校）校長を務めたが、ここでも生徒の排斥運動を受け、93年4月末に同校長を依願免官となった。排斥運動の発端は、大谷津校長が教諭資格のない同校教員を同年4月14日にクビにしたことである。この事件は次のように報じられている。『徳島中学の騒擾、一中学教諭加藤重成は、去十四年体操科卒業生にて、教諭の資格なきものなりとかなれど、同校教諭となり英語地文科等担当せしが、無資格にあり、殊に経費の都合及月給の他と権衡を得ざるとやらにて、去十四日諭示（マ）免官となりしを生徒は教授に親切なる加藤を免するは、必ず学校に覚悟ありて、追出せしものなりとて、同夜委員を挙げて、校長を訪はしめ、翌十五日午後大瀧山に会合し、協議の上、不親切なる校長理学士大谷津直磨、無学なる教頭農学士安田英吉「札幌農学校卒、1902年新潟県立村上中学初代校長」、助教諭大久保初雄の三人を放逐する事に決し、運動事務所を設くるなど甚しく激昂し、翌十六日は、四五人を除く外、三百余人同盟休校せり。於之学校は保証人を召喚せしに、十七日に出頭せしもの、四十余名なりしが、其内の四五人は生徒のかく騒ぐは、原因あるべければ、一応礼さん

ことになりたり。尤も生徒は連判状を作り、右三名を追出さねば、出校せずなど申居る由。又十七日には県庁及県参事官を訪問して、事情を訴へ本日も出校せず、運動せり。学校にては本日又々保証人、県会市会議員等を集め、校長演説する由なり。』（『教育時論』（開発社）第289号、1893年4月25日発行、33頁）

このように中学生が、校長や教師の辞職を要求してストを行うことは、当時の流行であった。

免官されて1年後、94年3月30日号の朝日新聞には「理学士大谷津直磨先生編『中等教育植物学講本』（南江堂書店）の広告が出ている。その宣伝文句は、『本書は全部を（一）植物体学（二）植物解剖学（三）植物生理学（四）植物分類学（五）総論の五編に分ちて之を一冊に完結し尋常中学校及び同師範学校に於て用ゆべき適当の教科書なり』である。

このように教科書を書きながら浪人生活を送っていた大谷津は、岩本のタイでの活躍を耳にして、岩本と連絡を取ったもの

と思われ。タイ渡航後、暹羅殖民会社顧問に就任、95年2月にバンコク・ドックとの契約にも立ち会い、その後、移民募集と商品仕入れのために岩本と帰国し、神戸市海岸通の廻船問屋、安松市郎右衛門方に世話になった。彼は95年8月17日付で、暹羅に再渡航のために旅券を取得したが、結局渡航することはなかった。彼の岩本やタイとの付き合いは8ヶ月で終わったのである。

96年12月当時、大谷津は大坂に住んでおり、『中等教育実験博物学』（浪華書院、大坂、1896年）を刊行、更に、98年4月には、大谷津直磨・金井次郎編『新英会話』（浪華書院、大坂、1898年）を刊行した。後者の表紙に英語で書かれた大谷津の肩書は、大阪市立商業学校（現大阪市立大学）英語担当教授となっている。その後、1900年から1903年までは、岩井商店（その後日商岩井、更に双日）の大阪本店支配人の職にあった（岩井産業株式会社『岩井百年史』、1964年）ことが確認できる。

連載 ③  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXIV

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

岩本千綱が、バンコクに32名の農業移民たちを連れて来たのは、1894年の年末年始の頃である。彼らは、バンコクのサンプトゥム地区に、1家当り10ライ（約1・6ha）の農地を貸与されて稲作を行う予定であった。

到着後、移民たちが見たバンコクの耕作予定農地は、乾期で水も無く、ひび割れて、鋤も簡単には通らないくらいに固着した粘土質の土地であったはずである。雨が降って耕作が可能になるまでに、あと半年近くを要するだけではない。日本の百姓経験者なら、この土地からどれほどの収量があるかを直ちに見抜くこともできたはずである。

タイは二期作三期作も可能だ、土地も広いうえに肥えていると聞かされて、人生の再出発

のために来タイした彼らの期待は絶望に一変し、騙されたという怒りで顔を引きつらせたことであろう。

しかし、この責めを岩本一人に負わせるのは酷である。日本移民が来タイを決意したのは、岩本の口車に乗せられただけではなく、当時の日本では、過大で現実離れしたタイのコメ生産性の情報が流布していたことも一因であると思われるからである。

まず予備知識として、当時における日本及びタイのコメの輸出入、タイのコメ生産性に関するデータをみておこう。

現在日本にコメを輸入する際の関税は、従量税であるが、従価税（輸入額何円あたり何円と決めた方）に換算すると、7・78%に相当すると言う。いくら安く輸入しても高関税に

【第1表】1890年代の日本およびタイの米の輸出入

	1890-1894年平均 (1年当り)	1895-1899年平均 (1年当り)
a 日本産米の輸出品 (船用を除く)	1,322,695 picul	1,642,694 picul
a 上記日本産米の輸出入額	4,458,346 円	7,500,370 円
b 日本への外国米輸入量	3,360,522 picul	4,639,118 picul
b 日本への外国米輸入額	5,986,353 円	17,145,668 円
c タイ産米の外国輸出品	7,250,000 picul	8,000,000 picul
c タイ産米の外国輸出入額	14,268,000 円	21,846,000 円

（出所：日本のコメ輸出入は大蔵省『大日本外国貿易年表』（1990年原書複製版）より筆者計算。タイ米の輸出（バンコク港に限る）については、James C. Ingram, Economic Change in Thailand 1850-1970, Stanford University Press, 1971, 38頁。イングラムの元来のソースは、イギリスの駐シャム領事年次報告であり、同書のパーツ表示を筆者が1パーツ=0.6円で円換算した。なお、piculは重量の単位で60kgに相当する）

よって日本産米より販売価格が高くなるように設定されており、コメの輸入は実質上禁止されている。このような日本産米と外国米との極端な価格差の時代を

長らく経験した我々は、かつて日本産米は日本の主要輸出品であったと言われても俄に信じがたいかもしれない。

しかし、1891年の日本の

711-7-7 2013.9  
2013.9

総輸出額（日本産品）7873万8053円76銭中、日本産米は621万3494円69銭（199万8648 picul）を占め、単品として1位の生糸2935万6338円73銭に次いで堂々の2位である。93年は生糸、緑茶に次いで3位、94年では、生糸、羽二重、緑茶に次いで4位である。しかし同時に、当時の日本はコメの輸入国でもあった。

第1表を見ると、1890、1894年に関して、日本は、(a) 1 picul (60 kg) 当り3・37円で日本産コメを輸出し、同時に (b) 同1・78円で外国産のコメを輸入している。一方、タイは、(c) 1 picul 当り1・97円でタイ産のコメを輸出している。日本産米の単位当り輸出価格は、ダイ産米のそれの1・71倍であり、現在のような極端な価格差はない。

次に、タイのコメ生産性について見てみよう。『シヤム王国年次統計表』に、コメの全国生

産地面積、収量、ライ当り収量の統計が初めて掲載されたのは、1923年版（第8号）からであり、バンコク（プラ・ナコン）県を含む県別のコメの植付面積・収穫量は、1933年版（第18号）から掲載され始めた。

同上の年次統計表の数字を基に計算すると、1933年から1937年の5年間の全国およびバンコク県のライ（約1・6反）当りモミ年間平均収穫高（重量）は、それぞれ、3・58 picul (215キロ)、3・67 picul (220キロ) となる。これを1反当りに換算すると、それぞれ2・24、2・29 picul である。更にモミを玄米にした場合、歩留7割（白米・碎米のみ、糠は含まない）と多目に見積もって計算しても、1・57、1・60 picul しかない。1 picul は60 kgなので、1年間の反収玄米はタイ全国平均が94・2 kg、バンコク県は96 kgとなる。

この数字は、統計のある1930年代のものであるが、1890年代の生産性も大同小異であろう。

日本の反収は少なくとも玄米7俵（420キロ）であるから、バンコク県の反収は日本の4分の1以下である。日本で1町歩（10反）コメを作れば、玄米換算で4・2トンの収穫がある。一方、バンコク周辺で10ライ（16反）の農地からは、平均で玄米1・54トンの収穫しかない。

日本式の集約的農法や二期作をタイで行えば、収量は増加するだろうが、日本式農法により堆肥を作り、土の改良をするのには、相当の年数を要するし、灌漑用水などのインフラも自力で直ぐにできるものではない。仮に近くに揚水できる水路があったとしても、引き込むためにはポンプが必要である。日本人が、慣れない厳しい気候風土や衛生環境の下でゼロから生活を築いたうえに、日本式農法実現のために、いかに持ち前の勤

勉さを発揮して働いても、数年で成果を得ることは不可能であったと思われる。仮に、5、6年間、ある程度の生活・所得保障、公費によるインフラ整備が約束されるなら、希望をつないで頑張る移民もいたかもしれないが、これらは全く期待できなかった。

その上、タイ式農法で耕作した場合、10ライの農地から期待できる収入は、次に示すように日本の最低賃金の水準にも達していなかった。

1890年代前半にバンコク周辺の県知事から報告されているモミ1クイアン（1クイアンは2000リットル、この量のモミを重量換算すると約1000 kg）の価格は36バーツ前後である。例えば、1893年1月20日に、サムットソンクラム県長が国王に報告したモミ価格は、クイアン当り36バーツ、同年1月21日、チャントプリー県長が国王に報告したモミ価格もクイアン当り36バーツである（タイ国立公文

書館 5.5 Rolu 1/61-189623 年王事日誌。

上述のようにバンコク県における1ライ当りの平均モミ収量は3・67 picul (220 kg) であるから、10ライではモミ2200 kgの収量となる。モミ1000 kgが36バーツであるから、2200 kgを全て売ったとしても、79・2バーツ（日本円換算で47・52円）に過ぎない。1ヶ月の収入にすると4円足らずである。

当時のタイの農家の所得について、イングラムはタイ経済史研究の名著で次のように推計している。

5人家族が20ライの土地を耕作して、1ライ当りの平均モミ収量を4 picul とすれ

ば、モミ80 picul の収穫となり、このうち20 picul を家内消費分とし、残りのモミ60 picul を精米すれば、3分の1がモミ殻等で失われ、白米40 picul となる。農民がこの余剰分の40 picul を輸出価格の半値で買付商人に売ったとすれば、1890、1894年時の年間所得は、66バーツ（39円60銭）となる（第1表より、1・97円÷2×40 picul = 39・6円となる）（James C. Ingram 前掲 Economic Change in Thailand 1880-1970, 65頁）。これでは月収3・3円に過ぎない。

斉藤幹駐シンガポール領事は、1894年4月に訪問したアユタヤでの聞き取りであるとして次のように記している。

「一家夫婦にて水牛1頭を持ち毎年20ライの地を耕して七八クエン（クイアン）の粗米を穫べし。農家既に此收穫あれば自家食料に供したる残余は売却して金銭に換ふ以て1ヶ年を不自由なく支持するに足るべし。故に他に労働をなすの必要を見ず。現今盤谷コラット間の鉄道工事起りし以来其労働に意図外の金員を携へ返るものあり」

（斉藤幹『暹羅国出張取調報告書』外務省通商局第二課、1894年9月20日発行、27頁）と。

20ライ当りモミ7・8クエン（クイアン）という数字を、仮に中間の7・5クイアン（7500 kg）の収量とすると、ライ当り6・26 picul (375 kg) となり、上述した全国平均ライ当り3・58 picul (215 kg) より7割以上多い数字である。但



【1894年9月25日】

上記の数字から見ると、1890年代半ばは、日タイ国間の米価には今日のような極端な差はなく、タイ米は日本産米の6割程度の値段であったが、タイのコメの単位面積当り収量は日本の4分の1以下と低かった。タイで20ライ(3・2ha)の水田を作った場合でも、日本の最低水準の所得しか得られないのが実情であった。

ところが、冒頭で述べたように、当時の日本ではタイのコメ生産性は日本並に高いという大誤謬が流布していた。

第1次移民バンコク到着の8ヶ月前の1894年4月に、移民が耕作する予定のバンコクのサツパトゥム地域を視察した斎藤幹駐シンガポール領事は次のように報告している。

「水田の地質は……灰色の粘土にして断へて砂礫なし而て乾天永日に亘れば(「斎藤」幹巡回の時は既に四五ヶ月降雨なしと云ふ)田面に亀甲状の破線を生じ深さ五六インチ其底部は黄

赤色の粘土にして米田耕作時季に方り水分を保持する能力あり是れ盤谷近傍水田の地質と一様にして所謂洪水の際溜溜(「メナム」)バンパコン河河道より汚水と共に送寄したる膏土なり降雨は五月の始めに起り十月乃至十二月に続くことあり米田耕作は此降雨を待ちて始めて着手す(「斎藤」此地に来りしは実に「1894年」四月廿一日なりしが未だ何等の着手なし)土民の説に依れば降雨の際田面に充滿する水層は平均一呎「フイット」二三インチ前後「38cm程度」なりと云ふ(「前掲」暹羅国出張調報告書」34頁)。これから、サツパトゥムでは一期作しか行えないことは明白であ

る。更に、斎藤は次のように述べている。

「此のサツパトゥム「サツパトゥム」に一個の官有地あり其近傍なる農家に就て親しく従来状況を開くに此地は苗植法「田植」を用ひ一年一回の耕作にして六月頃より農事を始め十月頃に収穫す其後は降雨なきがため耕作せず而て毎年二名にて水牛を使用し耕すところの面積は凡そ二十ライ即ち凡そ日本の三町二段「反」九畝其収穫高は凡そ五キエン「クイアン」の初米にして即ち日本の九十五石「正しくは、55石5斗6升弱」余之をカーゴ一石に換算すれば五十石「同29石2斗4升弱」余故に日本一段「反」の田畑にて現今暹羅農夫獲るところの初米は二石八斗九升「同1

石6斗9升弱」余之れを精米所のカーゴ一石とせば凡そ一石五斗「同8斗8升弱」(暹羅農夫は初米にて売出すものなれども日本人に於て計算易からしめんがため仮りにカーゴ一石とす)余となる然れども之は是れ二名にて一ヶ年二十ライを耕し得るところの比例なり(農夫の言に依る)二十ライは実に日本の三町二段九畝余に相当す之を僅かに二名の農夫にて水牛の力に依り耕作並に収穫共に結了するにせば随分勤勉の業と云ざるべからず聞くとともに依れば暹羅の米作は非常に容易にして植付後更に草取り杯の手数を勞せず天候の美と土地の膏腴にのみ依頼すと我不幸にして農事の時に逢はず果して僅か貳名の農夫を以て二十ライの広地を耕し得るや否や又た其耕作法は如何なる簡便法を用ゆるやを知ることは能はず暫く農夫の説を記して以て後の確報を待つのみ。所謂我老農に如ずとの古語に依り前文農夫の言の如く二十ライに付一ヶ年中得るところの

初米を五キエン即ち日本の九十五石「正しくは、55石5斗6升弱」余とすれば日本の一段の地面に依て獲るところの初米は二石八斗五升「同1石6斗9升弱」余之れを半精米玄米(カーゴ一石)となせば一石五斗「同8斗8升弱」余となる故に一段の地面には僅かに五斗依にて三「同1・75」俵を得るのみ当地にてカーゴ一石を五俵とすれば一段の収穫米金高は七弗五十仙「同4・4弗」となる二十ライの田畑即ち三町二段九畝にて一ヶ年の収納金高は実に二百四十五弗「同145弗」となるべし然れども夫婦二人にて苗植法に依り三町二段九畝の地を耕作するは随分勤勉を要するものと思はざるべからず。当国耕作の容易なりと云へる説を先づ信ずべきものとすれば日本農夫一家夫婦にて一ヶ年凡そ七八ライ乃至十ライの地を耕作することとは或は出来得べき業なるべし然れども十ライは我が一町六段四畝余に相当す之に日本の耕作法を施せば所詮至難の事なれど

も先づ暹羅風の植付に従ふものとし仮令ば六月に三段七月に三段八月に三段九月に三段十月に三段都合一町五段(用水も天候も皆な適するものと見て)而て其收穫も亦此順次に依るとせば或は其功を奏することを得べき歟然りと雖も土地は広し人口は少なし区々たる一小地に日本の如き至大の勞力を施すよりは寧ろ全く暹羅風の耕作法に依り飽まで広大の地面を耕し因て相当の收穫を得るの利あるに若かざらんか是れ亦た別に試耕上講究すべき一事なりとす都て是等の事情は勤勉なる我が日本農夫若干名の自から此地に來り實際試耕を経るに非れば確言すること能はざるものなり而て孰れにせよ若し十ライ「16・45段」の地を耕すものとせば前文の比例に依り一ヶ年僅かに百二十二円五十錢「正しくは72・5円」の金高を収むるに過ぎず我が日

本農夫之れに満足するや否や(同上書35・36頁)。

上記の引用に筆者がカギ括弧で付した修正より判るように、斎藤は「五キエン「クイアン」の初米にして即ち日本の九十五石」という計算間違いをしている。クイアンは容量の単位で、2000リットル(1公定thannanは1リットル、20thannanで1thang、100thangで1クイアン)であり、一方、1石は、10斗(180リットル)である。5クイアンは1万リットルであるから、55石5斗6升にしかならない。この計算間違いにより、斎藤はサツパトゥムでの10ライの耕作で1年間の

収入は122・5円(當時弗と円は等価)と見積もり、その収入の低いことを指摘しているが、正しくは更に低い72・5円に過ぎないのである。

斎藤以上の大誤謬を犯しているのは、本誌3月号で紹介した鈴木錠蔵の「暹羅探検報告」(『殖民協会報告』第18号、1894年10月20日発行)である。同報告は、下記のように1ライ当りのコメの収量を、實際の4倍以上とする、信じがたい誤りを犯している。

「收穫の割合……1ライは我491坪(1反6畝余)に相当す此1ライの收穫平均高玄米40タング(1タング「thang」1斗1升に当る)なり之を我反別に換算すれば1反に付2石7斗5升(玄米)を收穫するを得べし」(20頁)。

この途方もない誤解をもとに、鈴木はタイにおける1反当りの農業所得を、次のように計算した。即ち、タイの1反の玄米收穫高は2石7斗5升



「27・5斗＝495リットル」なので、1石「180リットル」の米価6円として16・5円、これから租税0・1円、溝渠税0・12円、雇用賃金等1・5円を差し引いた14・78円が1反からの収益である。他方、日本の反別玄米収穫高を2石5斗「25斗＝450リットル」、1石の米価を7・5円として計算し、これから諸経費を差し引いた後の1反の収入は11・50円である、と。彼の計算では、タイの米作の方が、日本のそれより単位面積当り3割も収入が多いことになるのである。彼は、「丁寧にも『然れども内地に於て1反歩2石5斗を産する地は最上等の地にして一般平均は玄米1石5斗乃至1石6斗なり去れば米作に就ては「タイは」実に豊饒の地たるのみならず生活の簡易なること別紙に記するが如くなれば我農民にして克く異域の風土に堪へ勤勉努力せば必ずや好成绩を奏すべし」(34・35頁)と駄目押ししている。

しかも、これは単作の収益であることは、彼の次の記述から明かである。即ち、「従来経済上に就て報告せるを見るに暹羅国は何れの地に於ても2回の収穫を得、時としては3回の収穫あるかの如く説き是以て予算せるものあり或る地方にては2回の収穫をなすと聞けども一般は1回の収穫にて終るなり何となれば何れの国にても季節は破るべからざるものにて暹羅国熱しと雖も十月より翌年四五月に至る乾燥の候には植生発生し得ればなり、常識あるものは勿論如斯大言に瞞着せられざれども是が為め却て実際の報告迄も抹殺するに至る豈慨歎に堪ゆべけんや」(37頁)。

鈴木は、同報告の初めと終わり部分で次のように述べている。「従来邦人の斯国「シヤム」を訪ふ者多くは名を銜はんが為めに説く所往々放逸に失し正鵠を欠く遺憾の極と云ふべし」(12頁)、「暹羅政府が好を我國に通ぜしより茲に十年然るに政府より調査せるものは昔し大

鳥圭介氏の暹羅紀行あるのみ其他二三民間の士の論究するものありと雖も常に其真相を忘れて唯々自己の虚名を買はんとするのみ今や国勢昔日と同じからず経済上に於ては殖民談の焼点となり政治上に於ては東方問題の中心となり最も注目すべきの時なり此際政府は特に相当の地位を有し卓識の脳髓を有せる人物を遣し責任を帯びて充分に考究せしめ通商条約を締結するの価値あらば直に決定し國民をして扼る所を知らしめよ単に一官吏勿卒の調査等に任して放置せんことは吾輩の甚だ取らざる所なり」(41・42頁、と)。

ここで鈴木が言う、名を銜い虚名を買わんとする「二三民間の士」とは、暗に岩本千綱、熊谷直亮らを指し、「一官吏勿卒

の調査」とは、斎藤幹駐シンガポール領事の上記『暹羅国出張取調報告書』を指していることは間違いない。

日本政府は本格的なシヤム調査を実施すべきであるという鈴木木提言には全く同感である。鈴木は、彼が貶している先行調査に比して、自分の報告は信頼性が高いと無邪気にも確信しているようである。上述のように、バンコク県の年間反収は玄米で96kg、玄米15kgを1斗(18リットル)として容量に換算すると約6斗4升(115リットル)であった。しかし、鈴木はタイにおける反収を玄米で27・5斗＝495リッ

トルとして計算している。実際の4・3倍である。彼の報告は、先行調査のどれにもまして、シヤムの現実から遊離した非常識な内容であり、彼の報告こそ「正鵠を欠く遺憾の極」であり、慨歎に堪えないものであった。

当時、暹羅農業の情報が少ないかつたなかで、鈴木木報告は、權威ある殖民協会の機関誌に、現地調査に基づいたものと銘打って掲載されたのであるから、殖民事業関係者の意思決定を左右した可能性がある。暹羅稲作の生産性を極端に過大に報告した、鈴木木情報を鵜呑みにした読者が、タイへの農業移民の利を説き、それを信じて移民団に参加した者を生死の境にさまよわせることがあったとしたら、彼の罪は計り知れない。

但し、大誤謬は日本人だけとは限らない。

ディロックノパラット親王(1884-1913)は、チュラーロンコーン王とチェンマイ王族出身の母親との間に生まれ、ドイツの大学で農業経済を研究し博士号を得た王子として知られている。彼が、大学に提出した博士論文は1908年に刊行された。その英訳書、*Siam's Rural Economy Under King Chulalongkorn (White Lotus 2000年、120頁)*に次の記述がある。

「シヤムの農業は殆どが、6-7人からなる家族が行う小農経営に担われている。これらの農家は普通、80-200ライ(1ライは1600平方メートル)の耕地を保有するが、保有

地全てに植え付けるわけではない。農家当りの植付地面積は通常100ライとされる。ライ当りの平均収量は1900リットルと計算されるので、1家族当りの年間収量は19万リットル(即ち13万6040kg)である。農家は、その6分の1(3万1666・6リットル、2万2673・29kg)を自家消費、種モミ、翌年の不作に備えての蓄えとして保留し、残り15万8333・41(ママ)リットル(11万3366・72kg(ママ))を市場に販売する」。

彼は、1ライ当りのモミの平均収量を、1900リットルとしているが、本稿で上述しているように、タイの全国平均1

ライ当りのモミ収穫重量は3・58 picul(214・8kg)であり、これをモミ1リットルは0・5kgとして容量に換算すると429・6リットルとなるに過ぎない。1900リットルは、その約4・4倍である。また、彼はモミ1リットルの重量を0・716kgとして計算しているが、これもあり得ない数字である。それは別としても、自家保留分のモミ2万2673・29kgを精米すると、歩留65%として、白米1万4738kgとなる。1年間に1人の人間が食べる白米は、いくら多くても200キロには達しないから、これではたとえ種モミや備蓄米としての使用があるにせよ数十人分の1年の食糧となるはずである。28歳で自死の道を選んだディロック親王の聡明さや積極的な生き方は、在欧州留学時代の諸事績から明瞭に窺うことができる。とは言え、タイ農業の現場から遠く離れていたために、このような数字となつたのであろう。



約を解除されている（『タイ官報』第9号、60頁、1892年5月29日号）。しかし、タイ政府は、暹羅事件の勝者フランスのパヴィ駐タイ公使の申し入れに応じて、94年5月7日までの着工期限の延期を認めた。

ジャコブがフランスから第一陣の技術者や機械を送ったのは、93年9月になってからである。この時ジャコブは来タイせず、バンコクの商人チョーを鉱山経営の代理人に任命した。ワタナ―金鉱山有限会社がパリで正式に登録されたのは、前述のように94年6月12日であり、ジャコブによれば出資者は銀行家や社会的地位のある人々であった。

タイ政府が、パヴィの要求に

屈することなく契約通りにジャコブの違約を理由に契約を解除していれば、日本人移民たちがプカヌン鉱山で命を落とす悲劇も生じなかったであろうが、何とも不運な巡り合わせであった。

ワタナ―金鉱山有限会社は、1894年に、まずワタナ―のナンチンで採掘を開始した。プカヌンでの着手は遅れた。

95年4月8日付でジャコブはテーワウオン親王に次の文書を提出した。タイ政府の鉱山局から各鉱区の正確な測量をするよ

うに求められているが、プカヌン鉱区については未だ実施することができない。その理由は、プカヌンまで行つてくれる人を未だ見つけることができないからである。同地に行き着くことは極めて困難であり、とりわけ、今の季節は最悪である。プカヌン鉱区は、自分が得ているコンセッションの中でも予想される利益が最少の鉱区でもあるので、測量は、次の季節まで延期することを許可して欲しい。加えて、プカヌンまでの道のりは遠く、生活必需品を送ること

も容易ではないので、現時点では、この鉱山で働く苦力を見つけることもできない、と。

上記文書から、95年の4月初頭の時点では、鉱山会社は日本人移民を労働者（苦力）として獲得するには至っていなかったものと思われる。しかし、同社はこの直後、日本人移民を含む最初の労働者をプカヌン鉱山に送り込むことに成功し、採掘事業を開始したことは次の資料から明白である。

95年7月9日、コーラート駐在のフランス副領事M・ドゥクウルジョン（M. de Coulléges）は、コーラート州長官ブラヤー・プラシットサンガーン（1859-1932、後に駐英公使、国防省次官を歴任）を訪ねて、頭痛が激しく体調が悪い、海の空気を6-7日間も吸えば良くなるのでバンコクに出たい。については、荷役牛（Kha Lang）30頭を調達して欲しいと依頼した。副領事は、ブラヤー・イエン山地を越えサラブ

リーに至るルートを探れば、

タツブ・クワーンからはバンコクまで鉄道が通じているが、そこに至るまでが泥道が多く乗馬に適していないので、乗馬通行ができるプカヌンを経てカビンブリーに行くルートを採りたい、と語った。州長官は、サラブリー・ルートは交通量が多いので道沿いで荷役牛を調達することは容易だが、一方、プカヌン・ルートは山道が多く、道には石塊がゴロゴロしており、マラリヤも猖獗だと言われていると心配を表明した。しかし、乗馬せずに歩いて行くだけの体力はない、プカヌンまで行けば鉱山を開いているフランス人もいるし、プカヌン鉱山への物品を水揚げしているバーン・パター

トの港もある。そこまで行けば手漕ぎ舟に乗ることができ、さらにカビンブリーまで行けば蒸気船に乗り換えることができる、この道のりはサラブリー・ルートに比べて遠いことはない、と副領事はプカヌン・ルー

トに執着した。

副領事は、プカヌンまで行けばフランス人が鉱山をやっており、彼等に世話になることもできるし、鉱産物等の運搬ルートも開けているはずだと期待したのである。マラリヤについては、副領事も州長官も既に罹っており、発作に苦しめられていたが、キニーネ等の特効薬を持っていた。

8月9日に内務大臣ダムロン親王が、外務大臣テーワウオン親王に報告した文書によれば、タイ内務省から派遣されたタイ人中尉らに護衛されて、副領事らの一行は、7月19日にコーラートを出発し、7月27日にブラチンブリーに到着した。副領事はプカヌンからフランス人の病人2名を伴ってきたが、彼らは同地で鉱山をしているフランス人であった（タイ国立公文書館蔵、S. 6522）。  
以上の資料から、1895年4月初頭には、金鉱山会社はプカヌンに行く者を見つけること

ができないと弁明していたが、同年7月後半にはプカヌン鉱山は既に開業していたことは間違いない。

これは、本誌5月号で紹介した宮崎滔天の「暹羅殖民始末」の次の記述とも一致する。即ち、「1895年」5月下旬ブカノン「正しくはプカヌン」鉱山監督者、仏人エリドベスなるものあり。「暹羅」殖民会社に來りて、日本の職工労働者百人計りを雇入るの依頼をなす。会社は差当り二十人位なれば或は応じ得らるるやも計られざる旨を以て答ふ。移民農業に従はずして未だ職を得ざるものあればなり。ドベスは雇入れんことを乞ふ」。

結局、普通労働でも月給30円という高給につられて、女性を

含む15名の第1次移民が、プカヌン鉱山労働者を志願した。女性まで鉱山労働を志願したのは、32名の第1次移民中には7組もの夫婦が含まれていたからである。

彼らはどのようなルートをどのような交通手段を使って、何日くらいかけてプカヌンに達したのだろうか。

宮崎滔天は「暹羅殖民始末」の中で、「プカノン鉱山は盤谷府より汽船にて二昼夜安南の方に廻りたる湄江の別流を廻り其より陸行四日程コラツトの西北方（マヤ）凡八十哩の処にあり」と記している。これは伝聞





現在唯一プカヌンの名を残す寺院の門

による不正確な記述である。「安南の方に抛りたる湄江の別流」とは、湄江「メナム河」とは別流のバーンパコン川のことである。船旅ののち陸行4日程度でコーラートの西北方80マイルに達することは、徒歩で行くしかなかった当時においては不可能なことであり、宮崎が記したプカヌンの位置は間違っている。しかし、バンコクからプカヌンまで1週間足らずで到着したことは、事実であろう。

多分、彼らは1895年6月にバンコクからチャチョンサオ方向に向かう定期船に乗って出発し、海に出た後、バーンパコン川を遡り、カビンブリー近くのプラチャンタカムで定期船を降りて小舟に乗り換え、バーンパコンの支流(パテート川)をさらにバーン・パテート(Thudon)まで遡ったはずである。当時、バーンパコン川沿いには大規模な精米所が立地するなど、流域の開発が急速に進んでおり、バンコクからは

定期船が運航されており、交通の便は良かった。例えば、チャチョンサオのサナムケート郡に金鉱の調査に行くフランス人に同行したタイ内務省の役人の報告では、1896年2月29日13時35分に、定期船でバンコクの中華街のワット・コ(วัดทอง)を出発し、同日17時55分に河口パークナムに到着、ここで一夜を過ごし翌3月1日早朝出発し、同日16時にはチャチョンサオに到着している(タイ国立公文書館 KOT 363/60)。

このフランス人は、ワタナー金鉱山会社のフランス人とは無関係である。当時のチャチョンサオ、プラチンブリー地方は、金山を当てようと目論む西洋人で小ゴールドラッシュの様相を呈していたようである。

バーン・パテートで舟を下りたのは、山地が近くなり、川が浅くなったためである。ここからは荷役牛を雇って、金鉱開発の機材道具や生活必需品など大

量の荷物を運搬しながら、原野や森のなかを歩くこと数日にして山を越え、プカヌンの原野に達した。一行の中には、第1次移民の日本人男女労働者15名の外に、来タイ間もない松野恭三郎、荒川雅五郎の2青年も暹羅殖民会社派遣の監督兼通訳として同行した。日本人以外にも中国人などの苦力がいたのか、フランス人は何人同行したのかは判らない。本誌8月号に記したように、松野と荒川の手当は、日本人労働者の賃金から支払われることになっていたが、労働者がこれを拒否したので、松野と荒川は1ヶ月程度でバンコクに戻った。

プカヌン金鉱山開業3ヶ月足らずの1895年9月、日本人

労働者15名中4名がバンコクに逃げ帰って来た。プカヌンの日本人労働者は、松野と荒川を追い返し、暹羅殖民会社とは縁を切っていたが、バンコクに逃げ帰った上記4名の懇請を受けて、暹羅殖民会社のメンバーはプカヌンに救援に赴いた。「暹羅殖民始末」は、次のように記している。

「最初の関係上見棄難く、乃ち此四人を三谷医局に入院せしめ、会社の役員、佐々木、石橋、山本、松野、荒川の諸氏相議してプカヌン「プカヌン」工夫救助の方法を講じ、遂に石橋、松野、荒川の三氏の地に到り彼等を携へ帰るに決し、

勿々旅装を整へて盤谷を發しプカヌンに向へり。三氏行でワンパテット「正しくはバーン・パテート」に着すや、石橋氏はリューマチスに罹り、松野氏は熱病になやみ、是より二日程のプカヌンに達する能はず。土人の酋長に依つて人夫十六人を雇ひ、籠と薬品を携へしめ、残余の日本人を運び來んことを命ず。往復六日にして携へ来る移民、唯僅かに一人の婦女と及其乳児而已。其他の十人は皆死亡して已に他界の人となり了れりと云ふ。

結局、1895年9月までに日本人労働者はプカヌンで10名がマラリヤで死亡。その前に

逃げ帰った4名のうち、2名はバンコクで、コレラで死亡した。プカヌンで働いた日本人労働者15名中で、生き延びることができた者は、乳児連れの女性1人を含め3名だけである。

本誌6月号に掲げた第1次移民リスト中、乳児を連れた夫婦は臨本一家しかいないので、この乳児は臨本貫一(1894年10月末時点で満11ヶ月)、その母親は臨本チヨ(同31歳9ヶ月)である可能性が高い。

フランス人副領事がプカヌンに立ち寄った7月下旬に、病人のフランス人2名とともにバンコクに帰っていたら、もう少し多くの人が助かったのではないだろうか。当時、既にマラリヤ特效薬のキニーネが流通していたのだから。今から心配しても詮無いことではあるが。

プカヌンはコーラートのどこにあるのか、その後どうなったかについては次号で紹介したい。

岩本千綱が連れて来タイした日本人第1次移民32名のうち、12名の命を奪ったブカヌンは、どこにあり、現在どうなっているのだろうか。

2011年8月にカンボジアのコン市(タイ東海岸のタラート県に隣接する、カンボジアのコン州の中心地、同州の住民の多くはタイ族で、現在でも農村の住民にはタイ語が通じる)のホテルに宿泊していた際に、たまたまテレビをつけると、Thai PBSでブラチンブリー県の実況を放送していた。同県カビンブリー郡のボー・トーン(金坑)という地名が記憶に残った。

昨年半ばにブカヌン捜しを始めた当初、この地の正確な地名がブカヌンであることも判らず、当然タイ文字で正しくはどう書けばよいのかも判らなかつたが、旧金鉱山は有名であるに違いないから、金の産地ブラチンブリーに行つて聞けば、それらしい地名は簡単に判るだろうと楽観していた。そこで、昨年6月にボー・トーンを訪ねてみた。

ブラチンブリーから、カビンブリー郡、サケオ県方向に国道33号線を走り、カビンブリーを7-8キロ過ぎた地点で右折したところにボー・トーン村が存在する。日本では金鉱と言え、山地の中にあるように思いがちであるが、ボー・トーン村も金鉱跡も平原のただ中である。金鉱跡は地下に、恰も地下鉄の通路のように地表に対して水平なトンネルを掘って人力で採掘した。金鉱跡には、機械を据え付けたコンクリート塊や、トンネルの入口部分の跡などが残っており、公園となつてい

して整備したようだ。ところが、鍵を開けて貰つて入った博物館の訪問者名簿を見ると、我々の前に見学者があつたのは4月半ばであり、我々は2ヶ月ぶりの訪問者であつた。

さて、タイ工業省の鉱山局が作成しウェブ上に公開している、タイ全国金鉱地図は、①金の埋蔵が確認されている場所、②かつて採掘したことがあるが現在は廃鉱になつてい場所の両方を記載している。後者は全国に3ヶ所しか記載されていない。即ち、パッタニー県のトモ金鉱、ブラチンブリー県のボー・トーン金鉱の3ヶ所のみである。この記載を鵜呑みにすれば、旧金鉱ブカヌンは、ボー・トーンのことであろうと短絡的に考えてしまふそうである。しかし、ブカヌンの所在地はコーラート県だと言ふのに、ボー・トーンはカビンブリーだし、その外にも富崎滔天が「暹

2013.11.20  
2013.11

(コーラート) 県のHPに、同地とバンコクとの間を結ぶ二つの歴史的古道が紹介されている中に、ブカヌンが見つかったのである。2ルートの一つは、コーラートからサラブリーに向かうルート(現在の国道2号線方向)であり、もう一つがコーラートから南下し同県のバクトンチャイを経て、山中のチョー・ン・ブカヌン(Chon Buan)を通つてブラチンブリー、さらにはバンコクに至るルートである。チョー・ンは山と山との間の谷間、カヌンは果物のジャックフルーツのことである。

第2ルートの方向には現在国道304号線が走っている。ブカヌンは、304号線がコーラート県とブラチンブリー県の県境のサンカムベーン山脈(カオヤイ山系の東端部分、高い所は800メートル以上)に突き当たる、コーラート側にあるは

ずである。そこはかつてバクトンチャイ郡であつたが、現在は同郡から分離されたワンナムキオ郡が置かれていて、その辺りを、市販の道路地図で探して見たが、ブカヌンの地名は見当たらない。現在市販されているタイの道路地図は4-5種類あるが、最も詳細なものでも、せいぜい郡の下にあるナムボンの名とその境界を入れたものに過ぎない。ナムボンは多数の村から成るが、それらの村名は殆ど記されていない。結局、ワンナムキオ郡周辺でブカヌンの地名を見つけることはできなかった。

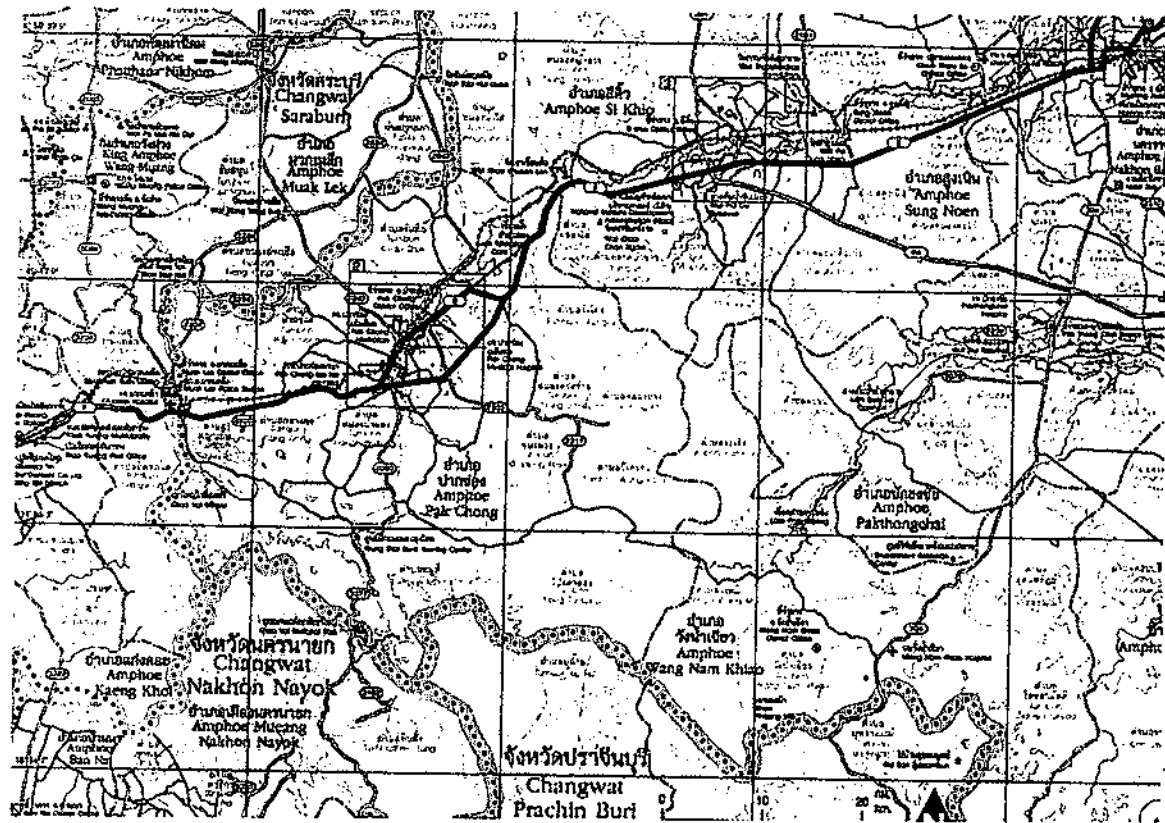
そこでタイ文部省に勤務する知り合いに話したところ、コーラート県内の学校行政を監督する部門に親しい人がいるのでブ

カヌンの場所を尋ねてくれることとなつた。その結果、バクトンチャイの東に隣接するコーンブリー郡(この郡もバクトンチャイ郡から分離した)にブカヌンという地名が存在することが分かった。少々東に過ぎるのではないかと思つたが、とにかく昨年暮れに同地を訪ねてみた。

コーンブリー郡庁所在地で道案内人に加つてももらい、東方向に曲がりくねつた赤土道を進んだ。あたりには、小山は点在する程度で大部分は平坦もしくは、ゆるい起伏のある台地で、サトウキビやキャッサバの畑、ユーカリやゴムの植林地が連なり、土地は有効に利用されている。12月後半は、丁度サトウキビ刈りの季節でありカンボジアからの出稼ぎ労働者が鎌で刈り取つていた。土けむりのなかを20キロほど入つて、ヒンラップ村に到着した。ラムチェ・ダムとムーボン・ダムの中間地点である。村民に聞くと、かつて、この村の一部は、ブカヌン村と称したが、隣接するヒンラップ村が拡大して合併されてしまふ、現在はブカヌン

村という地名は消えてしまつたそうである。





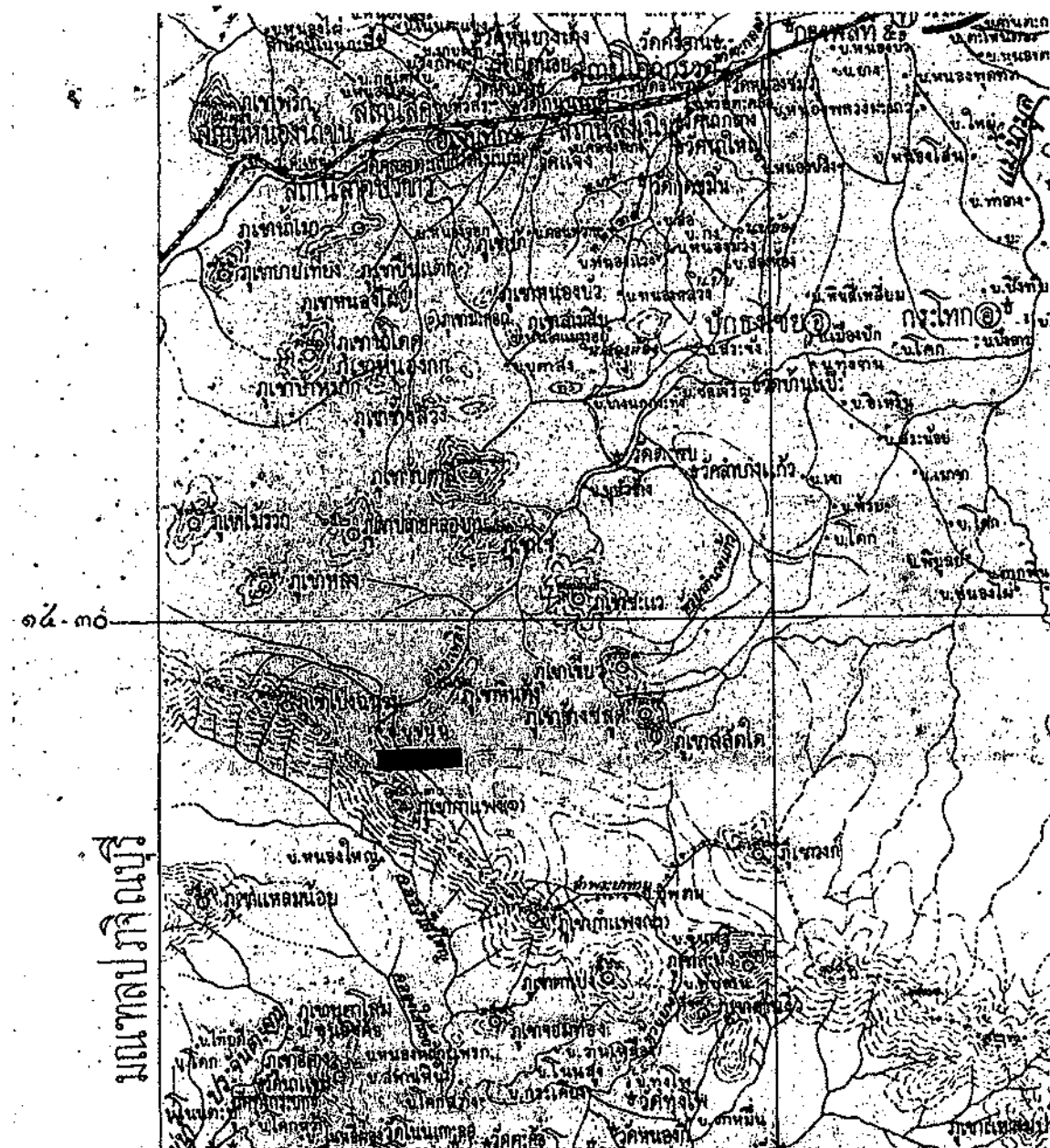
【地図②】現在のワンナムキオ郡、プラチャンタカム郡の地図

プラチャンブリー県プラチャンタカム郡のバーン・パテートの地名が入った、1922年の地図（本号掲載の地図①、ブカヌン）は地図中央部の黒線の上も見つかった。しかし、現在の地図を見ると、ブカヌンとおぼしき地点とプラチャンタカム郡との間には、道一つ存在していない（地図②参照）。これはどうしてだろうか。

上記の地図から、ブカヌンの心当たりはついた。5月の連休を待って訪ねてみた。安全のため、ピサヌロークのナレックスワン国立大学の橋樑幸講師に同行を願って、2013年5月4日午後2時過ぎにバンコクからタクシーで出発。これまで2回のブカヌン捜しでは、バンコクから車をチャーターして行ったが、運転手に土地勘がなくて困ったので、今回は現地車を調達することに。まずタクシーでワンナムキオを目指したのである。ラーマ9世道に上がって、スワナブリー空港前を通過し、チョンブリー方向にモーターウェイを暫く走り、314号線に入ってチャチョンサオ方向に向かう。

トヨタの工場を過ぎて間もなくするとバナムサラーク、カピンブリー方向へ右折の交差点、ここで右折した道も314号だが、そのまますすぐに進んで行くといつの間にか304号線に入っている。後は、この道をコーラート県の入口、ワンナムキオまで進めばよい。カピンブリーからワンナムキオの間の304号線は、東北タイからレームチャバン港に貨物を運ぶという大型トレーラーがひっきりなしに走っている。バンコクからワンナムキオまでは270キロの行程なので、3時間少々で到着できるだろうと考えていたが、郊外に出るとガスの補給ができるスタンドが少なく順番待ちのため30分も待たされた。要領の悪い運転手が道を間違えたりして時間がかかり、山地越えの坂道を突破して、ワンナムキオに到着したのは夜7時であった。

この辺りの地名には、ワンナムキオとかブカヌンなど、頭にワン（wan）とかブ（b）と付くものが多い。方言でワンは水の溜まったくぼみや池の類を言い、ブは森林の中に点在する



【地図①】ブカヌンの名が載っている1922年の地図

コーラート地域の古い地図を探してみた。

ブカヌンと題し、等高線まで入った詳細な、1934年地図局印刷の5万分の1地図（タイ国立公文書館、Pho.kob.Bo. or (G.I.C.)）が見つかった。この地図によるとブカヌン村の位置は、東経101度41分、北緯14度25分あたりである。ここはコーラート県所在地から南西方向にあたり、直線で約75キロ程度の地点である。国道304号線からは西に相当離れている。

地図からブカヌン村の近くをブラブレン川（บางบาล）が流れていることも分かった。ブラブレン川はブカヌンから下流バクソンチャイに流れて、ムーン河に注いでいる。コーラートからバクソンチャイに南下してバンコクに至る歴史街道は、バクソンチャイまで来ると、そのまま現在の304号線のように南下はせずに、ブラブレン川に沿って南西に方向を変えたことが判る。

また別に、ブカヌンの地名と、日本人移民がそこで下船してブカヌンまで歩いたという、



広くて小高い草原で周りには水場もあって人間（人間だけでなく野生動物にとっても）の居住に適した土地の謂いだといふ。ともに水があつて人間生活に必要な要件を備えている場所が地名の一部となつてゐるのだ。

ワンナムキオ近郊には、リゾートホテルは多数あるが、町の中宿は、最近できた1軒しかない。この2階建の宿屋は、パキスタン出身のムスリムが経営していた。この地で育つた30歳の女主人の話では、この町のムスリムは、彼女の一族だけだといふ。

早速、この宿屋や夕飯を食べに行つた食堂で、ブカヌンの場所やブカヌン金鉱山を尋ねてみた。宿屋の女主人も、この地に50年間住んでゐるという飯屋も、ブカヌンという地名を聞いたことがないといふ。ブカヌン捜しに三度目の正直を期して来たのに、何とも狐につままれた感である。

翌朝6時、304号線に沿つて低い建物、道の両側に並ぶワンナムキオの町を歩いてみた。早速、3人の僧侶がリヤカーを引いて托鉢してゐる光景

が目に入つた。托鉢する僧侶の後ろには、普通、バケツなどの容器をもつた寺男や少年が托鉢物の運搬係として従つてゐるものだが、3人の僧侶には従者はおらず、一番若い僧侶がリヤカーを引いてゐる。リヤカーの中をのぞき込むと大鍋にご飯が山盛り、もう一つの鍋にはビニール袋に入れたおかずが入つてゐる。僧侶のリヤカー托鉢は、タイの人手不足や少子高齢化の象徴であらうか。この小さな町に、気がついただけでも、3軒もの消費者金融の看板を掲げた店舗があつた。セブンイレブんに立ち寄つたのち、宿屋の直ぐ隣にある政府の観光情報事務所を訪ねた。

事務所入口の観光地図の看板の中に、ブラブレン川の名を見つけた。304号線、この事務所の横から分岐する3052号線に沿つた場所にある。上述のように1934年印刷の地図局作成の地図では、ブカヌン村の近くをブラブレン川が流れてゐる。現在は堰き止められて貯水池ができてゐるようである。この川の近くにブカヌン村があるはずだと確信して事務

所の敷地の中に入つた。日曜日で、しかも朝7時であつたが、職員宿舎にいた職員が、事務所を開けて詳しい国立公園地域の地図を示して、丁寧に説明してくれた。

第1次日本移民が、ブラチャンタカム郡のバーン・パデーから徒歩で歩いて越えて来たサンカムバーン山中の道は、現在はどうなつてゐるのだろうかという関心から質問すると、ブラチャンタカム郡とワンナムキオ郡の間に横たわるサンカムバーン山脈地域は、現在はカオヤイ国立公園に指定されておらず、その間に道路はないだけでなく、入山するためには国立公園の管理事務所の許可を要するといふ。地図には断続線で、牛車道が引かれた所もあるが、現在ではこれらの道も消えてしまつてゐる筈だといふことであ

る。

続いて、同職員にブカヌンの場所について尋ねた。ここに赴任して20年になるが、そのような地名を聞いたことがない。ブカヌンではなく、ブチャオクンではないだろうかといふ返事には失望した。ブチャオクンは、ブチャー以上のタイトルをもつ高官もしくは同等の僧位をもつ僧侶に対する敬称であるが、ブチャオクンは、ブチャオクンの敬称で呼ばれた人物が開いた村かも知れない。とにかく、ブカヌンを探してブラブレン貯水池とブチャオクン村に行つてみることにした。

前の晩に宿屋の女主人に頼んで紹介してもらつた運転手とは、電話で朝7時半出発と合意

してゐたが、時間を過ぎて現れない、1時間近く過ぎたので見込みなしとして先ず近くの飯屋に朝飯を食べにいった。食事が終わった9時に、頼んでゐた運転手がピックアップで現れた。なんと若者の3人連れである。観光に行くので友達も連れてきたといふ。狭い後座席に我々2人の客を乗せるつもりなのだろうか。遠くには行きたくないといふので、遠くに行く必要はない、ここから16キロほど離れたブラブレン貯水池とブチャオクンに行けばよいのだ、正午前には戻つてくると借り上げの内容を説明した。代金を尋ねると4000バーツと途方もない答えである。

仕事と遊びを混同した上に、日本人からぼったくつてやろうといふ、とんでもない若者のようである。値切つた結果、半減したがそれでも高いし態度も悪い。断つて町の中で車を探すとにした。

コメの卸売屋で恰幅のよい、いかにもタオケーと言つた主人に借り上げる車がないかと尋ねると、親切に電話で何台か当たつてくれたが、どれも空いて

いない。主人は、バス停前のモーターサイクル乗り場で、尋ねてみれば探すことができた。ろうとアドバイスしてくれた。行つて見ると、確かに「車、請負します」という紙切れが吊り下がつてゐる。オートバイの運転手に車の手配を頼むと、何人かに電話してくれてやつとピックアップが見つかった。車は朝から仕事に出張つてゐるので、9時過ぎになつてから車を探したのは時間がかかるようだ。10時近くになつて現れた若い運転手に目的地と所要時間を言つて、値段を聞くと6000バーツ。妥当な額である。しかし、この土地生まれの彼もブカヌンという地名は聞いたことがないといふ。

ともあれ、この運転手と巡り合わせたことは、大成功であつた。彼は、この辺りで雇われ運転手をしてゐるので、道路に通じてゐるだけではない、誰に聞けば判るかもよく知つてゐた。貯水池まで行く途中、彼は、サンカムバーン山脈には、香木（マイ・ホーム、後述のチュム住職の話ではマイ・クリンサナーという木）が自生してゐる

ので、あの村の連中は盗伐を生涯にしていると言及した。サンカムバーン山脈は、カオヤイ国立公園の一部分で入山禁止といふのは建前で、この地域の村民は高く売れる木を探して入山してゐるようである。

貯水池まで来て、遙か向こうにサンカムバーン山脈を仰いだのち、この辺りのことに詳しいガイドの老人がブチャオクンにゐるから、尋ねてみよう、と、運転手は、ガイド業兼民宿経営者の老人の家に案内した。

自称ルン・ウアンという老ガイド（国境警察官を警察大佐で退職）の話から、ブチャオクンは、ブカヌンではないことが判つた。しかし、彼はブカヌンという地名を知つてゐた。ブカヌンはパークチョンからサンカムバーン山脈を越えてブラチャンタカムに至るルート途中の敷少ない村であつたが、1950年代末のサリット首相時代に、密猟者や盗賊の巣窟となつたために、サリットによつて廃村にされたといふ（しかし、後述のチュム住職の話によれば、サリットに廃村にされたのはブカヌンではなく、サンカムバーン

山脈のより深い所にあつたノーンヤイ村であるといふ）。

ルン・ウアンは、ターワンサイ寺のチュム住職は、この地域の生き字引的存在なので、彼を訪ねるように勧めてくれた。ブカヌンを探してさらに10数キロ奥に入つた、ターワンサイ寺に向かう途中、同寺では、筋骨逞しい住職が草刈り機で騒音を立てつつ本堂の前で草刈り作業中であつた。住職は日陰に椅子を出して、次のような話をしてくれた。

コーラート生れで、現在68歳、出家して40年になる。15歳の時、王族の末裔、モームルアン・ブラッチャヤーコン・ウオラワン（アメリカ留学経験者、住職はモームとよぶ）がこの地域で牧場を開く独占的権利（サンパター）を政府から得て入植した際に、従業員として雇われたので、一緒にパークチョン方面から、この地に入つた。この牧場と同時期に、政府はパークチョンでも牧場のサンパターを出したが、パークチョンの方は牧場として成功した。入植時、この寺のすぐ下の道



に沿ってプカヌン（Pucanun）の村跡が残っていた。寺や家屋の土台柱だけが無惨に突っ立って残っているだけで、人っ子一人住んでいない荒涼たる風景であった。

プカヌン村がどうして無人の廃村になったのか、本当のことは知らないが、あるいはコレラか何かの悪疫が流行って、村民は村を捨てて逃げ出したのかも知れない。モームは、プカヌン村を、ターワンサイ（Tuan Sai）村と改名した。これによってプカヌン村という地名は消えた。しかし、住職はこの村がかつてプカヌン村であったことを残すために、寺の門を建てた時に、門の裏面側の標札に「Pucanun (Tuan Sai)」と書かせた（前月号掲載の写真参照）。確かに、内側はカヌン（ジャックフルーツ）の絵が描かれている。門の表側には唯、

ワット・ターワンサイと書かれ、サイ（Sai）の木の絵が描かれている。

ワンナムキオで尋ねた人は全員、異口同音にプカヌンという地名は聞いたことがないと答えたのは当然のことであったのだ。彼らがこの地に来る前の、どうの昔に、プカヌン村は何故か消滅してしまっていたのだから。

モームは牛130頭（オス60頭、メス70頭）を持ち込んで牧場を開いたが、牛は次々に虎の餌食となつて、僅かを残すのみとなり、モームの牧場経営は10年で失敗に終わった。

現在サンカンペーン山脈はカオヤイ国立公園に指定され入山禁止ではあるが、香木（マイ・クリッサナ）を採るために入

山している者もいる。また、カオヤイには、マイ・パユン（紫檀）もある。マイ・パユン材は、大変重く綺麗な黒色の模様があり縁起のよい（モンコン）木である。中国人が好むので注目されるようになった。住職は、この寺の中の親木から種を取ったマイ・パユンを並べて植えている。

住職は、プカヌン村の付近には、金鉱脈に沿って、鉱物を掘った坑跡（ミ）がいくつも残っているという。住職が教えてくれた坑跡の一つに、帰路立ち寄った。一面のキャッサバ畑の中に、小池があったが、それが坑跡なのだろうか。近くの住民の話では、この地名は、ノーン・トーン（金の沼）で土の中から人骨が出て来たことがあるという。

ヌンは森林の大海中の孤島であり、パークチョンに出るにも、或は山越えてプラチャンタカーム（バーン・パテート）に出るにしても、無人の森林と草原を数日間歩くことを要した。

住職は出家する前の、40数年ほど前に、ガンチャをプカヌンで栽培し、出来たものをもつて徒歩でサンカンペーン山脈を越えて、2日ばかりでプラチャンタカームに売りに行ったことがあり、途中山中で1泊した。山中にはゾウが踏みならした道があり、それを歩いた。当時は、ガンチャはまだ違法ではなかったそうだ。

日本移民が2、3日ばかりで歩いたプカヌンからバーン・パテートの間は、直線距離では30キロに過ぎない。もし、この間に自動車道があれば、短時間で到達できるのだが、現在このルートはカオヤイ国立公園中にあり、道路は存在しない。筆者らは、帰路304号線に戻り、カピンブリーを経てバーン・パテートを訪ね、日本人移民らが上陸したに違いない水路にたずんだ。



連載④  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXVII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

1895年9月の日本人労働者10名のマラリアによる病死によって、ワタナール金鉱山有限会社はプカヌンでの金の採掘を止めたのか、それ以後も続けたのかは判然とはしない。

ワタナール金鉱山有限会社は、タイ農商務省との1896年1月28日の契約で鉱区を更に60平方マイル追加したので、鉱区合計は143・5平方マイル（371・7平方キロ）となり、タイ政府に支払う借地料も年額400ポンドとなった。しかし、同社は1900年に操業を停止し、1902年11月から借地料の納入も滞った。1906年1月になって、タイの鉱山局が属する内務省の大臣、ダムロン親王は、国王に同社の代理人がタイにいないと長くなり、調べたところ同社はパ

リで破産したことが判明したので、鉱区についての契約を解除する手続きを開始したいと上奏した（タイ国立公文書館 No. 5 No. 6/20）。

さて、プカヌン入山後、3ヶ月にして熱帯熱マラリアで死亡した日本人労働者は、少々高給が得られるからと言っても、どうして命を引き換えるような無謀な道を安易に選んだのであるのか。

考えられる理由は、彼らは、熱帯熱マラリアの致命的な危険性について、全く無知であったことである。

日本人が熱帯熱マラリアに多数罹患した最初は、1874年5月の台湾出兵においてである。3000人ほどの出兵中、戦死者は12名、「台湾熱」と言われたマラリアによる死者は561名に上ったという。更に1895年夏、プカヌンで日本人労働者がマラリアに罹患したと同時頃、日清戦争後の台湾平定に出兵した日本軍は「台湾熱」で多数の死者を出した。即

ち、1895年5月8日の日清講和条約発効によって台湾の割譲を受けたのち、同年11月まで、日本は5万人ほどの軍隊を台湾平定のために派遣したが、このうち4642人がマラリア等により病死したという。

マラリアの原因となるマラリア原虫は、フランス人の軍医ラヴラン（Laveran）が、マラリアが流行している赴任先のアルジェリアで、1880年にマラリア患者の血液から発見した。また、この原虫が赤血球の中で成長して胞子を作り、その胞子が赤血球を破壊して血液中に放出されることによって、患者が発熱することも明らかにした。彼はこの功績により、1907年にノーベル賞を得ている。

しかし、マラリア原虫がどうして人体内に入るのかは、1880年のマラリア原虫発見以後も不明であった。

例えば、マラリア原虫発見以降に書かれた馬島珪之助編訳『赤痢及麻刺里亜』（誠之堂、1897年刊行）の麻刺里亜（マラリア）部分の「麻刺里亜の感染順序」の項（同書62、63頁）は次のように記している。

「麻刺里亜寄生虫は厳正なる血液寄生虫にして人身体の外にありては如何なる場所「に」存在し且つ如何なる形態を呈するものなりや漠として少しも得る所なし。故を以て麻刺里亜感染の順序は又全く不明にして（略）麻刺里亜寄生虫は又外界に於て存在せざる可からざるものなり。即ち本病が地方病性に存在し且つ時々流行性に蔓延する一種の泥沼地にありては其空気、土壌若しくは水中に該寄生虫を含有するを要す。而して或る学者は該寄生虫を空気と共に吸入するによりて本病を発するものなりと唱へ、或る学者は

511-70 2013.12  
2013.12

704

703

又飲料水に混じて人身体に侵入するものなりと主張せり」マラリアはハマダラ蚊が媒介する伝染病であることは、1898年になってイギリス人のインド駐在軍医、ロナルド・ロス(Ronald Ross)が立証した。ロスはこの功績で1902年に第2回ノーベル賞を受賞している。

ロスによる発見の少し前には、専門家のなかには蚊がマラリアの原因ではないかという推測は存在したが、毒をもった蚊が水に落ちて、それを飲んだ人が感染するなどと考えられ、ヒトが蚊に刺されて伝染することは判っていないかった。また、多種ある蚊のうち、どの種類の蚊が原因なのかも判っていないかった。

一般人はマラリアの原因が蚊であることさえも知らなかった。マラリアについての正しい

知識の普及は20世紀初頭前後のことに過ぎず、それによって、台湾におけるマラリア患者が減少したことは、次のように報告されている。

「マラリアは本島『台湾』風土病の重なるもので本島人は通例寒熱症と謂つてをる。明治七年戦役の際我軍隊は多数の熱病者を生じ大損害を与へた事があるが、当時は台湾熱で通して其マラリアなる事に気付かなかつた。領台後も矢張瘧熱性の疾病と心得て居るものが少くなかつた。之を他の熱帯地の例に依ると英領印度に於てマラリアの爲め死亡するもの年々約百二十万人ある。人口の割合よりするときは台湾に於ては約一万二千人のマラリア死者あるべきであるが、領台後暫くは実際に於て略之に一致する死者があつたので

ある。然るに衛生設備及防止策の遂行は漸次其数を減減し台北の如きは、十数年来一人のマラリア患者を發したる事なく、其他主なる市街地に於てはマラリアの流行漸次熄滅に近きつつあるは、御互の幸福と云はねばならぬ。……抑もマラリアはブラズモヂューム(Plasmodium)マラリア病原虫の原生動物の終結」と称す最下等動物の寄生により発起する伝染病で原虫に三種あつて各熱期を異にしてをる。三日熱原虫、四日熱原虫、熱帯熱原虫即ち是である。三日熱マラリアは内地で瘧(ぎや)く又はオコリと稱するものに外ならずして北海道、樺太、朝鮮、満洲にもある。然るに本島『台湾』及び八重山には内地に

ない熱帯性即ち悪性マラリアがある。地方に依つては其マラリアの大部分は此種なる事がある。東部地方のマラリアは多く悪性である。四日熱マラリアは稀であるが塩水港『台南県』付近には此種のものが多し。古来マラリアは沼沢地より発散する所謂瘴氣に触れて罹るものと信ぜられていたが、今より三十余年前仏國の軍医ラヴラン氏により其病原たるマラリア原虫の初めて検明せられ而(しか)も尚人体内の血液寄生原虫が如何にして他の健康人の体内に侵入感染するや久く鮮明しなかつたが、英國の印度駐在軍医ロツス(Ross)博士の熱心なる研究の結果アノフェレスなる蚊(Anopheles 翅斑(ハマダラ)蚊)の媒介によること明かになり、従つて彼の沼沢地より発生する所謂瘴氣なるものは実に茲に発生するアノフェレス蚊に外ならぬので、アノフェレス以外の蚊族はマラリアを媒介せぬことが明かになつたのである。嘗て伊太利で吸血感染せしめたるアノフェレス蚊をマラリアのない倫敦に齎(もた)ら

し、彼熱帯病学者の父と仰がる老マンソン氏の令息を刺螫(しせき)せしめたところが、三日熱を發し蚊瘡説をして九鼎大呂(ママ)よりも重からしめた。而して感染蚊の刺螫を受けた後マラリア熱を發作するに至るまでの日時即ち潜伏期は三日熱にありては十五日乃至二十五日、熱帯熱にありては六日乃至十五日であるが上述の如く蚊瘡説の確立後と云ふものは伝染源が人類で他の哺乳動物は感染せぬと云ふ事が明かとなり又た之を媒介するは吸血によりて始めて感染せるアノフェレス蚊なること又疑ひを容れざることとなつてマラリア征服上至大なる光明を得ることとなつた。マラリア原虫の媒介者なるアノフェレス蚊の種類は実に百廿種もあるが、其中本邦内地『日本本土』に産するものは只一種のアノフ

エレス・シネンジスのみであるけれど、本島『台湾』に産するものは総てで九種ある。アノフェレスは肉眼で見ると普通蚊より識別することは困難でない。其特徴とする二、三の点を挙ぐれば翅面に鮮明なる斑点あること、肢(あし)の著しく長いこと、壁面に止まるとき体は之と角度をなして一直線をなすこと、子(ぼうふら)は水面に並行の位置を取り恰も浮漂せる小木片の如く、刺螫すれば先づ後退すること等である。厄介な奴に似ず普通蚊の子(ぼうふら)は通例寧ろ下水溝其他の清浄ならざる溜溜水(ちよりゆうすい)『溜まり水』等に成育するに反し、アノフェレスの子(ぼうふら)

(ぼうふら)は溪流池沼の辺縁(へり)、水草の間、湧水新に成れる溜水等清鮮なる水面を選んで棲息する。元來が野生的の蚊で雌虫は晩方屋内に侵襲して来て吸血欲を充たすのであるが、雄虫は他の液分を摂るのみで全く吸血せぬ。これは普通蚊でも同様である。彼らが一仕事了へて昼間の潜伏所又は置卵水面に引上げるのは、時によると其距離十町(一キロ余)以上に及ぶことがある。ナント驚ろくではないか。

三日熱、四日熱は経験した人も多いし、症状に就ても見聞する機会があるので一般に識られて居るが、夫の熱帯熱にありて

最も恐るべきは眞の悪性症に陥ることである。中で昏睡性マラリアと稱せらるるのは、患者の高熱發作中唯だもう嗜眠昏睡に陥り、恰も脳卒中者の様運動不能となり、遂に死に抵るものが多し。又熱帯熱に伴うて併発するものは黒水熱、脚氣、急性肺炎、赤痢、腸室扶斯等中々油断がならぬ(高木技師談「マラリアの話(上)(中)」、台湾日日新報1914年3月30日31日号)。

高木の解説はマラリア原虫として、發熱に周期性が少ない熱帯熱マラリア原虫、48時間毎に高熱が出る三日熱マラリア原虫、72時間ごとに高熱がでる四日熱マラリア原虫の3種を挙げているが、現在では、この外に50時間毎に發熱する卵形マラリア原虫やサルマラリア原虫も知られている。

熱帯熱マラリアの症状は、上記解説のように他の原虫のマラリアに比して症状が重い。また、マラリアを媒介するハマダラ蚊は、清浄な水辺に生息し、メスの吸血活動は夕方である。ハマダラ蚊は、泥水には生息



しないので、バンコクでマラリアに感染する危険性は低かった。

1912年11月13日2月に、タイで農業調査に従事した、台湾の塩水港精糖会社の農場長佐々木幹三郎は、バンコクにはマラリア患者の邦人が存在しないことを、次のように書いている。

「暹羅では三月、四月頃虎列拉「コレラ」が流行する事があります。所が盤谷在住人の話では、時に依りますとペストは流行りますがマラリアは少いと云ふことでもあります。台湾あたりでマラリアに罹ると脾臓が大きくなりまして土人の子供などは非常にお腹ばかり大きくなりまして、身体の発達が鈍くて見悪く多いのであります。暹羅にはさう云ふ者は殆ど居りませぬ。盤谷の市中で日本人は朝鮮人が五名と台湾人が八名とを合せて総て日本の国籍にありますがその合計で二百人ばかり居ります。其の中でマラリアに罹つて居る者は一人もございませぬ。健康の上から見ましても非常に良いやうでございます。

す」(佐々木幹三郎「塩水港精糖農事主任」「暹羅農業視察談」(一)、「台湾日日新報」1913年8月6日号)。

塩水港精糖会社は、台湾の塩水港(現在台南県)で生まれ、今日まで存続している日本の企業である。当時の経営者は荒井泰治(1861-1927)であった。荒井は、仙台の貧窮士族出身で、実業家として成功した立志伝中の人物であり、「東京棉花商」と、兼て交渉ありたる暹羅調査(奥山十平・新井一郎編「荒井泰治伝」、仙台多聞閣蔵書、1916年、178頁)に、佐々木を出張させたのであった。

佐々木の調査地は、ナコンナーク県下のドンラコン地域城の宏大な半原野であった。本誌2012年10月号にサイイ親王が中心となって設立した会社、原野であったチャオプラ

ヤー河水域のランシット地域を水田に変えるために運河の開削を行ったことを紹介した。ドンラコン地域はバーンパコン川の支流ナコンナーク川の水域にあり、その開発はサイイ親王の息子である医者のヤイが進めていた。当時、暹羅法律顧問の政尾藤吉もシーラーチャー地区での綿花栽培を試みたように、日本はシヤムでの綿作に関心を持っていた。佐々木の調査では、ドンラコン地区は綿花よりも米作に適することが明らかになった。結局、荒井はシヤムへの農業投資を実施しなかったようである。

さて、上述の如く、熱帯熱マラリアを媒介するハマダラ蚊

は、清浄な水辺に生息し、メスの吸血活動は夕方である。ブカヌン金鉱で働いた日本人労働者は、一日の重労働を終えた夕方、泥と汗にまみれた体を、プラブレン川の清流で洗ったに違いない。これは、清水に棲み、夕方吸血活動をするハマダラ蚊の活動時間に合せて、わざわざ我が身を献じて熱帯熱マラリア原虫を移されたようなものである。まさに無知による自殺行為以外の何物でもなかった。

上記のような水浴びの光景は、コラート鉄道建設工事現場に関する、チュラーロンコーン王と建設省大臣心得との次の会話から推測したものである。

2年余の病氣(重い不眠症)から漸く回復したチュラーロンコーン王は、オーク・クンナーンを、1894年10月に再開した。オーク・クンナーンとは、国王が文武百官の前にお出ましになり、報告を受けられ、それに対して命令・指示を出される、専制君主時代の最も重要な政務であった。同王はほぼ毎

日夕方、この政務をされていたが、1892年には重度の不眠症に罹られ、その開始時刻が真夜中の12時近くになり、遂には長らく中止されるに至ったのである。

復活後の1894年12月6日のオーク・クンナーンでは、毎回多数の報告を提出する北部省(マハートタイ)も南部省(ガラホーム)も、珍しく報告がなかった。時間的に余裕ができたので、国王は、コラート鉄道建設の責任者である建設省大臣心得の王弟ピタヤラプ親王に「鉄道建設の視察結果はどうだった。建設はどこまで進んだのか」と質問した。

これに対して、同大臣は「タップクワンまでです。しかし、現在労働者の中国人は逃走したり死亡したりする者が多く、毎日1人死んだり、2人死んだりしています。以前は900人の中国人労働者がいましたが、今残る者は300人だけです」と答えた。

国王「山地(Dong)を抜けるまでには、まだ長くかかるのか」大臣「まだ長くかかります。

しかし、現在ヘー医師は、中国人労働者をパークプリオ「サラブリー」に宿泊させること、即ち朝に同地から労働者を汽車に乗せて山中の建設現場に運び、夕方仕事を終えたとパークプリオに送り返すことを考えています。そうすれば熱病患者も減少するはずですよ。と言うのは、山中の川水がひどく悪く(ライイ)、中国人は不注意にも、仕事で汗をかくと水浴するので、病気になるからです」

国王「あと何年くらいかかるのか」大臣「2年の見込みでしたが、現在中国人が十分に働けないので、契約を3年に延期します」(タイ国立公文書館 2000.10.16)。

川の水が悪いという話からは、マラリアはハマダラ蚊の人間に対する吸血によって感染することは、未だ認識されてはおらず、水が原因と考えられていたことが判る。知識の如何にかかわらず、労働者が夕方に川水で行水しないように、労働が終るとサラブリーまで汽車で連れて帰ることが実施されたなら

ば、マラリア患者は減少したことであろう。しかし、上記会話録から1年後、1895年10月に宮崎滔天が広島の海外渡航株式会社代理人となつて、タイに連れてきた熊本県の移民者はコラート鉄道建設の工夫となり、相も変わらずマラリアで死亡している。佐々

この地を、の死亡後、1年足らずの内に通過した岩本千綱は次のように記している。「1896年12月」23日晴早発途上にて水粥を食し午前八時ケンコイ「ゲーンコイ」駅に達す人家五、六十停車場は頗る見るべきものあり聞く処によれば他日チヤンマイ「チエンマイ」(チヤンマイは湄南河の上流老撾(ラオス)にあり此辺艦材チークを産するを以て有名なり磐谷より約五百哩)鉄道を

布設する時は此地より分岐する計画なりと云ふ夫れかあらぬか停車場の規模は首府磐谷よりも宏大に洋人三、四名常に爰に住居せり停車場の側に一軒の水菓子屋あり就て水を求めしに老爺恭しく柄杓(ひしゃく)に一杯の清水を盛りバナナと五、六の駄菓子とを添へて供養せり十二時過タツコン村に入る人家三、四悉く鉄道係員なる土人の住居なり皆て日本より渡来せし鉄道工夫中此地に於て死亡せしものある由を聞き居たれば其墓所を訪はんものと一農家を叩きたるに其家婦は非常なる信心家と見え懇切丁寧に坊等を遇し飯を炊き牛肉を焼き玉子を煮る等馳走に到らざる処なく坊等は図らず望

外の美食に飽けり而して最  
(い)と遺憾を極めしは日本人  
死亡当時の係員不在の爲め終に  
其埋葬地を知るに由なき一事に  
て鉄脚「岩本千綱」乃ち小斧を  
借受け路傍の大樹を白し鉛筆を  
以て左の数字を記す  
南無日本鉄道工夫之靈頓生普  
提  
日本行脚僧 鉄脚坊 岩本千綱  
三無坊 山本鑑介  
謹誌  
皇曆 明治二十九年十二月  
二十三日  
書し終りて一掬の冷水を供へ  
数茎の草花を手向け以て同胞の  
幽魂を天外の異域に祭る  
明治二十八年熊本県下の農夫  
磐谷に渡航せしもの数人コラツ  
ト「コーラート」鉄道の工夫と  
なりタツコン近傍の工事に出張

せしに風土の異なるが爲め端な  
く病死せしものありて骸を此山  
中に葬りしこと鉄脚坊帰朝中に  
て其詳細を知らず  
夫より二僧は家婦に向て親切な  
る待遇を謝し行李を肩に再び鉄  
道線上に出たり  
磐谷よりケンコイ村に至る地は  
概ね平坦にして鉄路亦た多くは  
直線なれどもケンコイよりタツ  
コン村迄は漸く緩なる傾斜をな  
し所謂爪端(つまさ)き上りに  
て線路の左右に深林多く又一軒  
の人家なしタツコンよりは純然  
たる山中にて……(岩本千綱  
「暹羅老樹安南三國探検実  
記」、博文館、1897年8月  
30日発行、1912頁)。  
日本人鉄道建設工夫が病死し  
た「タツコン」とはどこである  
うか。岩本の三國探検実記は、

多くの地名の表記が正確ではな  
く、中には誤つて別の地名を記  
したもののさへある。探検実記と  
いうからには、探検した土地の  
名くらいはできるだけ正確に表  
記して欲しいものなのだが。  
三國探検実記に記されている  
タイ領内の地名の訂正は、今後  
の号で行うつもりであるが、取  
り敢えずタツコンの正確な地名  
を紹介しておきたい。それは、  
タツブクワーンのことである。  
タイ国鉄のキロ数計算では、サ  
ラブリーからケンコイまでは  
12キロ、ケンコイから  
タツブクワーンまでは6キロで  
ある。  
日本人会は、1966年に  
ケンコイ寺に「日本人第一  
回移民ノ碑」を建設し、コー  
ラート線建設工事に従事してマ

ラリアで死亡したという18名  
を慰霊している。筆者は今年の  
9月に刊行された日本人会百年  
史において、この移民の碑に  
少々間違いがあることを指摘し  
た。詳しくは同史を御覧頂きた  
いが、簡単に要点を記しておく  
と、18名中コーラート線の建設  
で死亡した者は、名に過ぎず、  
ブカヌンで死亡した10名および  
ブカヌンからバンコクに逃げ  
帰つたのち死亡した2名が含ま  
れている。サカヌンの2名は  
第1回移民、コーラートの6名  
は第2回移民である。また、上  
記岩本千綱の三國探検実記か  
ら、磐谷が死亡した場所はゲー  
ンコイではなく、そこから6  
キロ上つたタツブクワーンであ  
ることが判る。



連載②  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXVII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

暹羅殖民会社副社長の岩本千  
綱、同社顧問の大谷津直磨は1  
895年2月18日にバンコク  
ドック社との間に、熟練工供給  
契約を結んだ。その直後の2月  
27日に、両人は熟練工採用と  
第2次移民団の募集を目的とし  
て日本に向けてバンコクを出発  
した。  
朝日新聞は、バンコクで刊行  
されていた日刊フリープレス紙  
が95年2月27日号の社説で表  
明した、日本人移民が多数シャ  
ムに来ることへの期待を翻訳し  
て次のように紹介している。  
「暹羅殖民会社に就て 夫  
(か)の岩本千綱、石橋萬三郎  
其他の諸氏が経営設立したる暹

羅殖民会社の事に就き同国フ  
リープレス新聞は去月廿七日の  
紙上に於て日本移民に關する  
批評及び日本政府に対する注意  
と題し左の社説を掲げたり亦以  
て同国人が本邦人に対する感情  
の一斑を知るに足るべし  
吾人熟々今日の日本を見るに  
前世紀に於ける日本とは大に其  
面目を改め國民特有の輕暢なる  
氣質と莖爾たる温容の裏面には  
嚴平として犯すべからざるもの  
あり 彼の日清戦争に於て又た  
殖民事業に於て親しく日本の為  
す所を見るに欧米諸國と並び立  
て世界強國の内に数へらるる要  
素を備へ居るもの如し 濠州  
諸新聞の報ずる所に拠ればトル

レス海峡「Torres Strait」も  
近々日本商人及び労働者の手に  
入るべしと云ふ 彼布哇に於け  
る日本人米國に於ける日本人が  
為す所は遍ねく世人の熟知する  
所なり 日本が近年に至りて如  
斯海外殖民を企つること盛なる  
に至りしは一は人口過多の結果  
たるべしと雖も一は又同国人に  
固有なる敢為冒險の氣質に職由  
することは固より言を待たざる  
なり 然り而して此敢為なる日  
本殖民の潮流は既に暹羅灣頭に  
過ぎ来たりて彼の不潔汚穢なる  
支那人を逐ひ払ひ終に之に代り  
て種々の事業に従ふの日も亦遠  
きにあらざるべし 是れ當國に  
衣食する内外人の最も希望する  
所なり 今や暹羅殖民会社なる  
もの起れり 同社は岩本千綱、  
石橋萬三郎、大谷津直磨、佐々  
木寿太郎(ひきたろう)、山本  
安太郎氏等の設立する所なり  
當時「現時」農商務大臣スリサ  
ク「スラサック」伯の特別な

保護に依りてサツパトナムの田野  
に耕作する数十名の農夫は即ち  
同会社の計画に由るものにして  
今回岩本千綱、大谷津直磨の両  
氏は日本に歸りて更に有為なる  
農夫百余人を連れ来たらん為め  
正に本日「1895年2月27  
日」を以て當盤谷府を出発せら  
れたり 諸氏は百難を冒して此  
の永遠なる事業に當ることを悦  
び農夫の外に尚ほ日本人の為す  
べき事業は多く當國に存在する  
ことを確信せり  
吾人も亦た茲に殖民会社に望  
むことあり即ち会社員諸氏の尽  
力に依りて輕便洒落なる日本人  
力車及車夫の輸入あらんことは  
れなり 盤谷府に於ける今日の  
人力車は其醜汚見るに忍びず車  
夫亦支那人なれば車と輿(と  
も)に汚穢到底吾人の需要に応  
ずることを得ず 馬車を備(や  
と)はんか貨錢非常に高く連  
(とて)も一般の需要に應ずる  
ことはざるべし 幸に電氣鉄

## 募集廣告

今回其筋の暹羅國へ出稼人一百名  
認可を請け暹羅國へ募集す  
但御照會の節郵券封入なきは回答せず  
明治廿八年 海外渡航  
七月三十日 株式会社 九州出張所

## 出稼人募集廣告

今回其筋の暹羅國へ出稼人百五十名を募集  
認可を得 明治廿八年 海外渡航 七月三十日 株式会社 九州出張所

出稼人募集廣告

今同其筋の暹羅國へ出稼人百五十名を募集  
認可を得 但し契約書等は留市院馬場丁目九州出  
張所へ御來問あれ書状の御問合は回答せず玉  
名郡地方は高瀬町市原屋に於て時務取扱申候  
廣島渡航株式會社  
明治廿八年八月一日 九州出張所

特別廣告

移住民募集廣告

第二回暹羅國出稼移住民  
二百名を募集す 希望者  
は来る 十八日

迄に當出稼所に申込みし  
但玉名郡は高瀬町市原屋 山鹿郡は山鹿町住田  
屋に於て事務取扱申候事  
熊本市洗馬町  
廣島海外渡航株式會社  
明治二十八年  
八月十三日 九州出張所

移住民募集廣告

第三回暹羅國出稼移住民一百名を募集す希望者は  
戸籍全篇をへ當出稼所に申込みし  
但し玉名郡は高瀬町市原屋山鹿郡は山鹿町住田  
屋に於て事務取扱申候事  
熊本市洗馬町  
廣島海外渡航株式會社  
明治廿八年  
八月十五日 九州出張所

九州出張所

1895年7~8月の九州日日新聞(熊本)に掲載されたシヤム移住募集廣告

道の設けあるも是唯本通りの一筋にのみ敷設され又他に一条の支線なきを奈何せん 故に日本人力車の来りて一般の便利を助くるあらば吾人の幸福亦た渺なからざるべし

終に臨んで吾人が一言殖民会社及日本政府に向て促がさんと欲するものあり 他にあらざる吾人が最も歓迎する所の多数日本人の渡航に伴ふて日本政府は一日も早く領事館を設置せらるべきことは是なり 凡一國人民が外國に在住すれば其商売生命財産の權利を保護し且つ兩國の間に親交を維持するが爲めに領事館(若しくは公使館)を設置するは元より至當の事なり 然るに彼支那政府は之れを怠りたるが爲め同國民の當國に在住するもの六百五十万人(ママ)の多きに達するも一人として彼等の權利を全うする能はざるは吾人の現に目撃する所なり 故に吾人は多数日本人の移住を希望すると同時に一日も早く日本領事館若しくは公使館を設置し一は以て在留日本人の福利を助け一は以て東洋友國の情誼を全うし此後進なる暹羅國民に文化の教を垂

れんことを切に希望に堪へざるなり(朝日新聞1895年3月30日号)

岩本は、95年3月には日本に帰着した筈であるが、こののち1896年末まで2年近くを日本に滞在したままタイに戻ることはなかった。  
前に紹介したように、この2年弱の在日中、岩本はバンコクドックとの契約を履行せず、契約金を持ち逃げする結果となった。また、恩義あるスラサックモントリーが日本で装飾を施すように依頼したので預かってきた由緒ある日本刀も、借金のかたに無断で人手に渡してしまつた。1894年末に彼がタイに連れてきた第1次移民団32名(もしくは30名)のうち15名が、1895年6月にはプカマシン金鉱山の労働者となり、9月までに12名が熱帯熱マラリアなどで落命した。帰国当初、岩本は第2次移民団員数百人を集める計画であつたが、彼の無責任さが新聞で告発されたり、彼自身が当時南洋日本で大流行中のチコレチと患はれる瘧疾に罹患したりして、結局1895年10

腸チフス

はじ

月に來タイした第2次移民団は、海外渡航株式會社が募集して、宮崎滔天が同社代理人として付き添つた20名に過ぎなかつた。そのうち15名はコーラート鐵道建設労働者として職を得たが、うち6名は熱帯熱マラリアにより死亡した。

岩本は日本で2年近くの間、何をしていたのであるうか。まず、彼が神戸を拠点として行つた第2次移民募集事業から見てみよう。

95年3月帰国当初、暹羅殖民會社社長岩本千綱は、同社の名前で大がかりな移民募集を考えていた。彼は船をチャーターして、数百人の移民を一挙にタイに運ぶつもりであつたようである。

多数の移民を集めるために、彼は二つの方法を併用した。一つは、自らが主導して神戸で移民會社(東洋移民合資會社)を興して人集めをする方法、もう一つは既存の移民會社と契約して集める方法であつた。

後者のために、岩本が暹羅殖民會社社長として契約した移民會社として少なくとも2社

が判明する。即ち、海外渡航株式會社(本社広島)および神戸渡航合資會社である。次の記事によれば海外渡航株式會社は、1895年5月7日付で、内務省にシヤムへの移民取扱實施の許可を求め、7月18日に許可を得ているが、これは同社と暹羅殖民會社との契約成立を前提とした許可申請であつたと考えられる。

「海外移民事業の拡張、本市〔広島市〕海外渡航株式會社にては本年〔1895年〕五月七日付を以て移民地申請中に在りし魯領蒲潮斯德〔ロシア領ウラジオストク〕及び暹羅地方は内務省より許可を与へたる旨一昨日同社へ宛電報にて通知ありたる由なり、尤も同會社が前二地方へ移民を申請したりしは蒲潮斯德へは目下魯國政府の着手中なる鐵道工事用人夫にして第一回の出稼人は重にも熊本地方より募集し既に申込入八百人の多きに達し又暹羅地方へは専ら農業的移住民にして該出稼人は同會社和歌山出張所に募集する筈にて最初の渡航者は少くとも二百名を下らざるべしと云ふ、

「神戸」の久壽里房次郎(くすり・ふさじろう)安松市郎左衛門(やすまつ・いちろうさへもん)の両氏は資本金三万円を以て東洋移民合資會社を設立せんとて移民取扱營業開始の義を内務大臣へ出願せり尤も認可を受けたる上は直に其筋の登記を経て更に同會社設立の願書を差出す由なるが同社取扱の目的は単に暹羅國に限り移民の取扱をなし他諸外國に対しては一切之が取扱をなさざるなり尚ほ移民取扱の数は二千人を程度とし以上超過の人員は之を取扱はざる予定なり又右移民取扱の外付隨の事業として暹羅盤谷府に設立せる暹羅殖民會社と特約を結び同會社に於て使役する本邦出稼人の労働せし結果として收穫する米穀の内同會社の手を以て本邦へ輸出するものを引受け買取する予定なりと云へり」(神戸又新日報1895年7月4日号)。

この記事から、神戸の米穀商であつた久壽里が、加わつたのは単に安松の親族であるだけではなく、日本移民がタイで生産したコメの輸入の意圖を有して



いたことが判る。  
久壽里と安松が連名で内務大臣に提出した許可申請書は次の通りである。

海外移民取扱営業の儀に付願  
近時本邦人海外出稼の志望頗る勃興し外国諸方へ渡航するもの日を逐て其数を増し候は内国人口の増殖及彼我労働賃銀の高低に基きたると加ふるに民智の開発に連れ漸く遺利を国外に捨得せんとするに由るものにして国家の爲め前途大に慶すべき現象と奉存候

仍て我々共爰に東洋移民合資会社を設立し移民周旋の業を営まんと欲し広く海外各国移民適当の地を取調候処暹羅國は土地豊肥五穀耕作に適するのみならず今や追日開進の途に向ひ居候に付隨て鐵道工事堀割工事精米業其他尤も多く其国土の如きも盛夏は殆んど百度に上るも毎に微風ありて苦熱を驅り極冷の候も

七拾度を降らず殊に該國政府人民共に頗る日本人に厚意を表し寧ろ之を歓迎するの趣き有之右に付我々共の組織する会社は暹羅國を以て目的地となし他諸外國に對しては一切之を取扱を為さざる儀に有之候而して移民周旋の方法たる移民地に於ける相當の会社若くは個人と堅確なる契約を結び其都度之に對し地方庁の御認可相受候上需用の人員を相送り可申 其他個々出稼人に對しては奸黠「かんかつ」の徒夫の朴訥質直なる農夫が事情に暗く旅券の出願乗船の手続き等万端不便を感じて其機に乗じ甘言之を欺き種々の手段を運らし因て以て不正の利を占むるが如きの弊害を杜絶し此等渡航者の爲め誠実に諸般周旋の勞を執り以て利便を与へんとするは是我々共の組織する会社附

從の目的にして要は同胞の愛護と利益の増加とを計るに有之候尤も出稼人中疾病或は不測の事變に遭遇する等のものあるに當ては相當の救助は固より此場合に於ける帰朝旅費の如きは会社支弁の責に當り我在外領事館を煩はす等の義は致す間敷候將又保証金の義は御命令に従ひ相納め可申候  
右の次第に付何卒微意御諒察の上我々共組織する合資会社に於て移民取扱業相営み候儀御聽許被成下度別紙暹羅國實見録相添へ此段奉願上候也

#### 附言

本会社營業の目的は移民取扱の外付隨の事業として予て暹羅國盤谷府に設立せる暹羅殖民会社と特約を結び同会社に於て使役

する本邦出稼人が労働せし結果として收穫する米穀の内同会社の手を以て本邦へ輸出するものを当会社に於て引受け買取する予定に有之候  
明治廿八年七月一日  
神戸市東出町百四十九番地平民  
久壽里房太郎（印）  
同市海岸通五丁目十六番地平民  
安松市朗右衛門（印）  
内務大臣子爵 野村靖殿

暹羅國に於ける日本労働者に對する實見録

暹羅國は北緯四度より廿一度に亘り東經九十八度より百六度に及び東は安南に接し西英領緬甸に連り南暹羅灣に枕し馬來半島に尽き北コース「ラオス」を経て支那雲南省に境し紀元千八百九十三年仏蘭西と交戦の結果湄江「メコン」以東を裂て之れに譲与せると雖も全國の幅員尚ほ二万余方に足り地勢北方は山嶽重疊漸く南して漸く平に誠に首都盤谷より四方を眺望するに眼界の尽きる処又山影を認めず唯茫茫たる千里の沃野を見るのみ  
國內二大河あり其東境に在る

ものを湄江と稱し源を支那雲南省に發し南柬埔寨海に朝す其西に在るものを湄南「メナム」と名け首府盤谷を通じて南暹羅灣に入る共に其巾百間より二百四五十間に到り深き所は一千四百百噸の蒸汽船を堤下に直繫するを得べし

此二大河より幾百の支流若くは運河を作り國中恰も蛛網の如く運輸と灌溉との便に供す世界の大勢は可憐にして而も豊饒なる此白象王国の未開を許さず今や歐洲各國眼を此に注ぐ者多し然りと雖も其風土の異なる人情宗教を同ふせざる其他各種の源因より此地に労働者を送るの便を有せず然るに獨り我日本は前記の各項大同小異略ぼ其軌を一にするを以て之を送るに尤も適當なりと信ず

由來我日本の官人若くは私人が或は視察に或は探險に歩を此地に入れし者尠ならずと雖も悉く皆短日月間にかかも所謂旅館調査を為せし者のみなれば單に皮相のみに止まり未だ其真象実情を窺知せしものなし之れ暹羅殖民の有利を今日に至る迄日本社会に注意せられざる所以なり

#### らん乎

試に我日本より該國に労働者を送るに便利なるの点を略挙すれば則ち左の如し  
第一 暹羅國人は歐洲人を忌憚し支那人を厭嫌し日本人を愛敬す

蓋し歐人の該國に現住して所謂紳士と稱する者多くは水夫若くはボーイ等の成り上りにて驕慢無礼該國人を視ること恰も牛馬の如く支那人は單に利己主義を之れ事とし毫も該國の休戚を顧慮せず可知勤勉にして而かも任侠なる我日本人を愛敬敬待する所以なるを

第二 土地頗る豊饒にして古來肥料を用ひず之れ皆に土質の然らしむるのみならず雨期の候浸水の爲めに塵埃を運び来ると稻茎の朽腐するにより自然の肥料となるを以てなり

#### 第三 生活極めて容易なり

該國の物産は素より米穀を以て第一となす加るに魚類極めて多く不完全なる投網を下すも尚ほ一挙して魚類數十尾を得べし牛肉の如き亦一斤の価金五六錢に上らず故に労働者にして充分滋養に富みたる適當の食事を爲すも其生活費一ヶ月凡そ金貳円六七拾錢を出らざるべし之れ実驗上より得來りたる所なり

第四 氣候日本人の身体に適す該國の緯度は前述の如くにして其氣候に於けるも十一月の寒期と雖も華氏の寒暖計七十二三度を降らず又三四月の熱期と雖も百度に昇ること稀なり

蓋し我九州地方に於てすら盛夏の候時に或は百度以上に昇ることあれば邦人の其暑に堪へずと爲す可からず加かも該國は日中毎「つね」に微風ありて苦熱を

式度の便あり三昼夜にして達す  
可く香港よりは同じく二回若く  
は一回の便あり六昼夜にて到る  
を得べし

今試に日本神戸港より香港迄六  
昼夜にして達するにせよ日本退  
羅間は十二昼夜を要し台湾新領  
地よりは幾かに八昼夜を費さざ  
るべし

今又茲に從來皮相の探險者が該  
國に労働者を送るに不利なりと  
するの理由を列挙すれば

第一 日本退羅兩國は去る明治  
廿一年布告せられたる親交条約  
の宣言書により既に殖民貿易を  
為すも故障なしとは雖も未だ通  
商条約なきを以て此國に向け勞  
働者を送り若くは商業を開くは  
危険なり

第二 該國には風土病として虎  
列拉、赤痢、馬來熱等の諸病あ  
れば此地に移住するは危険なり  
第三 飲用水悪しければ健康を  
害し危険なり

第四 國人に定見なければ反覆  
常ならず危険なり  
其々探險者は概ね以上の四件を  
以て危険なりと為すものの如し  
然り所謂旅館安臥的取調より見  
来れば危険は極るが如しと雖も

試に深く實際的に其真象を穿て  
ば大要左の如し

第一 日本の国情と退羅の現況  
とを深慮すれば單に通商条約な  
る一紙片を待んで万鈞の重とな  
すを得可きか否決して然らず抑  
も退羅の内閣は歐洲諸國の爲め  
に時に或は動搖せらるる事あり  
故に仮令日退羅兩國間に立派なる  
通商条約あるも苟も彼れ歐洲諸  
國にして害心あらんか奚んぞ此  
一紙片に由て以て安全なりと言  
ふを得んや若し又仮りに退羅人  
の反覆心を起すを憂慮すべしと  
せんか今茲に明言するを憚かる  
と雖も之を防ぐに豈に其法なし  
と言ふ可けんや

第二 退羅に發生する虎列拉病  
の如きは伝染性のものに非ずし  
て悉く自發なり其原因は頗る多  
しと雖も要するに不衛生より来  
る所にして現任文部大臣パスカ  
ラウングス「パーサコラウオ  
ン」侯は衛生局長を兼ね居るを  
以て談茲に及ぶ毎に大に注意を  
与へしことあり盤谷府にある医  
師亦其予防法の頗る容易なるを  
確言せり

第三 退羅の飲料水たるや惡は  
則ち惡なりと雖も其水質に至て  
は強ち不良と言ふ可からず現に  
數日間貯水し子虫「ぼうふら」  
の生ぜしものを飲むも實験上曾  
て異状あることなし現任農商務  
大臣スリサクデー「スラサツ  
ク」伯の邸内に頃來「ちかご  
ろ」小池を掘り噴水器を作れり  
此水は決して不良なる者に非ず  
故に飲料に供するに井を掘る  
か又は河水と雖も之れを過濾す  
れば毫も健康に害なきは亦医師  
の証する所なり

第四 退羅人を以て定見なし反  
覆常ならずとなす蓋し酷評と言  
ふ可し彼をして反覆常ならざら  
しむると否とは要するに之に接  
する人物の其所爲の如何にある  
のみ此確証頗る多しと雖も今茲  
に詳述せず  
退羅國に移民を送るの便否は大  
略前陳の如し果して然らば或る  
論者の言ふが如く危険なるもの  
なるや否やは自ら瞭然たらん次  
に其労働の種類を數ふれば  
第一 農夫 第二 鐵道人夫  
第三 掘割人夫 第四 舟子水  
夫 第五 煉瓦「煉瓦」製造人  
夫 第六 精米所人夫 第七  
建築及道路改修人夫 第八 鉦  
山人夫

以上労働に対する大要を説明す  
れば

第一 農業は米穀、野菜、胡  
麻、甘蔗「サトウキビ」等を重  
なるものとし現に退羅殖民会社  
は盤谷府の東端サツパトーム村  
に凡八拾万坪余の試験的良田を  
借り首府の北方凡三拾哩南河  
東岸のプロトントニー「パ  
ターニー」村付近に數方里の地  
所を有す

第二 鐵道は首府盤谷より起り  
旧都アユチア府を経て北方コ  
ラツト府に達し延長三百六拾哩目  
下工事半ばに到らず此鐵道にし  
て完成せば西緬甸國ラングン府  
に達するの大鐵路布設の計画あ  
り前途益々労働者の多數を要す  
べし

第三 掘割は北方サラボリ「サ  
ラブリ」を起点としプロトン  
タニー「パトムターニー」タチ  
ヤンに亘る數里間に四拾余条の  
運河を穿ち以て灌漑の便に供せ  
んとす此溝渠の如きも未だ漸く  
其三分の一を完成せしに過ぎず  
第四 舟子水夫は湄南河口淺瀬  
となりし爲め大噸數の汽船は河  
口を距ること三拾哩余のコスチ  
ヤン「コ・シーチャン」島の港

灣に泊し沿岸各所より支那船を  
以て米穀を此に運搬載す其數  
實に夥多し此れに用ゆる水夫亦  
頗る多數を要す

第五以下は別に説明するを要せ  
ざる可し

要するに退羅に於ける労働者の  
必要は前途恰も春海の如し該國  
有識の士は素より新聞紙の如き  
も從來夥しく移住せる彼の不潔  
貪婪なる支那人を追ひ払ひ之に  
代ゆるに快達勤勉なる我日本人  
を以てするの可なるを唱へ否  
「しか」らざるも國の幅員に比  
し人口非常に多ければ此際日本  
人を招迎するの頗る得策なるを  
称道して殆んど全國の輿論をな  
す者に似たり就中農業の如きは  
其收穫せし米穀を直接我國に輸  
入し易「か」ふるに我製品を以  
てせば彼我の幸福共に尠なから

ずと言ふ可し

其他牧牛、育羊、養豚の如き日  
本人が舊て業務に従事せんとせ  
ば彼れ退羅人は敢て之に資を投ず  
るを吝「おし」まざる可し

以上は現任退羅殖民会社副社長  
岩本千綱氏より特に氏が退羅に  
於ける日本労働者に対する實際  
上の所見として聞知し得たる大  
要なり（外務省記録31812  
148「移民取扱計画雜件、第  
一卷」）

上述の退羅國實見録は岩本が  
話したことを要約した旨記され  
ているが、多分岩本自身が執筆  
したものである。但し、筆跡  
は岩本のそれより違筆なので、  
岩本が書いたものを誰かが清書  
したものと思われる。この実見  
録で、岩本はシャムへの日本人  
移民の非を主張する人の見解

は、駆け足で安樂な「旅館調査」  
をした皮相なものに過ぎないと  
論断し、シャム移民の有望さを  
説いている。また、岩本はかつ  
てのような農業移民に限定せ  
ず、鐵道や運河建設人夫、鉦山  
人夫、沖仲仕、精米所苦力な  
ど、様々な分野に日本人労働力  
を供給しようと考えていたこと  
がわかる。

なお、申請書には申添とし  
て、久壽里と安松の経歴と營業  
資本金が次のように示されてい  
る。

東洋移民合資会社設立の義に付  
願申  
神戶市東出町百四十九番地平民  
久壽里房次郎

右者先代より米穀問屋業を営み  
現今尚ほ本業に従事致居候事

同市海岸通五丁目十六番地平民  
安松市朗右衛門  
右者明治十五年より回漕業を営  
み現今尚ほ本業に従事致居候事  
營業場所 当時「現在」神戶市  
海岸通五丁目十六番地に設置す

營業資本金  
金參万円也 但し業務着手の際  
内一半を各自出金し残る一半は  
必要に応じ漸次出金の筈  
右の通り相違無之候也  
明治廿八年七月一日

久壽里房次郎 印  
安松市朗右衛門 印



連載 ⑬  
パンコクの  
日本人

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXIX

早稲田大学アジア太平洋研究所教授  
村嶋 英治

タイへの日本人労働者移民業を実施するために、岩本千綱は神戸の廻船問屋安松市郎右衛門および米穀問屋久壽里房次郎とともに、東洋移民合資会社の設立を計画した。1895年7月1日、安松と久壽里は、兵庫県知事を通して内務大臣に移民取扱の営業許可の願いを提出した。

出願書では、タイの事情に通じかつタイの2大臣とコネがあり、その上タイにおいて日本人移民の受け皿として暹羅殖民会社を既に設立している岩本が協力することを述べ、計画の具体性が強調された。

しかし、周布公平兵庫県知事は、認可に反対する意見を副申して7月13日に内務大臣に安松等の出願書を伝達した。反対の理由は、現在海外の移民受入の需用が減少しているにも拘わらず、移民業者が取扱手数料収

入を狙って労働者を甘言で集め、連れ出した後は放置するという無責任な実態があるなかで、新しい業者を認可すれば、移民募集の競争を一層激化させるというものであった。

知事の危惧は当時神戸で、移民者が騙され、神戸出発後途中で放置される事件が報道されていたことに一因がある。例えば、神戸の地方紙、神戸又新(ゆうしん)日報の1895年6月9日号は、

「移民周旋人の奸計、移民周旋人が正直なる田舎ものを誘惑し移住の周旋をなすべしと欺むき所有金を巻揚げるは珍らしからぬ事なるが、此れ等もその仲間にや。当市の南某外二名は昨年十二月下旬広島県より二十四名、本年二月頃同県より二十一名の移住民を連れ来り英領なる南洋ボルネオ島へ移住せしめんとし前記二十四名よりは千三

百余名を、二十一名よりも亦た千余円を預かると称して横取りし移住民は便船を求めて香港まで送りたり。何にも知らぬ移住民は三名に預けし金円にて渡航も出来、目的地に着せし上は残金を渡し呉るならんと安心し居たるに香港へ着いて見れば便乗此処までの定めなり。船賃も無論此処までよりは受け取り居らぬとの事にて誰れに掛合はん様もなく同地に在住せる本邦人大高佐市方に身を投じて進退何れも自由ならず男泣きに泣き居るよし。その筋にての注意は去る事ながら移住でもするものはよくよく聞き合せ信用するもの

の手を経て渡航すべし」  
この記事の「南某」は、移民会社の認可を得ていないモグリ業者のようである。  
「ボルネオへ渡航、和歌山県の南繁蔵と云へるは山林伐採の目的を以て労働者十五名を引連れ

昨日当港出帆の便船にてボルネオへ向け渡航せり」(神戸又新日報1895年2月27日号)  
と報じられている南繁蔵のことであろう。

さて、兵庫県知事の副申を読んだ内務大臣は主務局長(警保局長)を通じて、兵庫県に詳しい調査を求めた。これを受けて、兵庫県知事は、安松、久壽里に追加情報の提供を要請した。安松・久壽里は連名で、8月7日付けの回答書を提出した。この回答書には、安松・久壽里に加え三人目の東洋移民合資会社の社員として、熊本県士族檜前(ひのまえ)捨次郎の名が初めて記載されていた。檜前は、後述するように宮崎滔天を岩本千綱に紹介した人物である。

この回答書とは別に、兵庫県は独自で調査をして、取調書を作成し8月24日付けで内務省

警保局長に提出した。

取調書は、現在海外での移民の需用は少ないのに甘言で移民者を募り無責任に放置し日本の領事に面倒をかけている移民業者が存在するという現状を屢説し、さらに安松・久壽里には一定の財力はあるが暹羅のことは全く知らず、岩本一人の情報だけに頼ったあぶない計画であるとして、認可すべきではないという見解を繰り返した。

同取調書は岩本千綱の素性、岩本と安松、久壽里との関係を次のように記している。

有無

本件に関する主動者如何を内偵するに左の如し

高知県高知市新町五丁目十番地士族岩本千綱(三十七年)は曾て陸軍中尉の職を奉じ退職を命ぜられし後は一定の職業なく諸方徘徊せる内暹羅國へ渡航し本人のみに語る所によれば同國農商務大臣の知遇を受け居たる処過般殖民会社を設立せらるるに際し千綱は其副社長相當の位置に挙げられ爾來同会社に従事せりと其実否を質さんとあらば同大臣に電報を以て問合せらるべく其費用の如きは自分に於て無論負担すべしと揚言し居れり

三 本件企業の内情は

前記の千綱当神戸に往來する毎に安松市郎右衛門方を定宿とし互に懇意となり千綱は市郎右衛門に説くに暹羅國に於て移民開拓の業に従事せば夥多の利益あるを以て市郎右衛門も亦移民取扱の業を始めん事に同意し爰に創業の準備をなし而して久壽里房次郎と市郎右衛門とは親戚なるを以て協議同意出願したる趣に有之然るに市郎右衛門及房次郎とも實際移民取扱の経験あるに非らず唯千綱の言を信じ発起したるものと認められ候」(外務省記録38268「移民取扱計画雑件」)。

9月2日、内務大臣は、安松等の出願書は法定の要件を充たしているものであるから、過当競争という理由だけで不認可にすることはできない、認可しようと考えたが、一応外務省に意見を求めた。9月20日外務省(主管は通商局)は、次のように回答してきた。

「内務大臣子爵野村靖殿

外務大臣臨時代理侯爵西園寺公望

神戸市東出町平民久壽里房次郎外一名より移民取扱営業出願の件に付關係書類添付本月二日付兵甲第二〇三号を以て御照会の趣了承兵庫縣知事副申の主旨とする所は重にも同業者を増加するは不得策なりと云ふに在て之に認可を与へざるの理由としては薄弱なりと雖も移民会社目下の情況等より觀察すれば尚ほ篤と詮議を要する事と存候殊に右出願者は其目的とする移民地を實踐したるにはあらず其國狀に就ては單に高知県士族岩本千綱の言のみを信じ企業するものの如くなれども右岩本に付ては種々宜しからざる風説等有之候人物なれば同氏の言を信じ此業を開始するは頗る危険のことと考候且同國に於ては帝國政府より派遣したる駐在官吏無く近頃漸く仏國政府に依頼し其外交官をして帝國臣民「プカヌン」金鉱山で働いた第1次移民」を保護せしむることに為したる位なれば今後多數の移住民渡航致候ては保護十分行届かざる義も可



有之候又新嘉坡在勤者藤二等領事の暹羅國出張取調報告書並に香港在勤中川一等領事の移民保護に関する意見書（本年六月廿五日官報掲載）に依るときは暹羅國に於ては労働賃銀甚だ低廉にして普通労働者は日雇三十二アツ乃至四十アツ即ち我が三四十錢にして月雇十テコル「バーツ」乃至十六テコル即ち我が六円乃至九円六十錢を得るに過ぎざれば同國の事情に暗き無智の出稼農民をして失望せしむる場合も多かるべく又同國官吏中には本邦農夫の移住を希望する者あるも氣候炎熱運輸不便なる等のため我が政府及移民取扱人に於て特別の保護注意を与ふるに非れば同國に於ける移民は成立せざるべく且米作を除くの外普通一般の労働を以て目的となす移民には相応すべき事業無之趣に候又目下営業中なる神戸渡航合資会社の如きは徒らに海外移住の利益を説き海外に於ける労働者需用の如何を顧みずして可成多数の労働者を渡航せしめ名を手数料等に藉りて巨利を占めんとする為め無智の農民をして

困難に陥らしめたる等の不都合ある旨屢々帝國領事より報告有之候其都度兵庫縣知事へ取締方及移牒「？」置候義に有之候本件の如きも一度許可相成移民取扱営業を開始するに至らば終には前頭神戸渡航合資会社の如き結果を來たし僅少の渡航周旋料を得るのみにては得失相償はざるに付自然需用の如何を顧みずして可成多数の労働者を渡航せしめ遂に彼等をして困難に陥らしむる場合に立至るは實利上免るべからざるの通弊と考候就ては前文の事情再應兵庫縣知事へ御下問相成篇と御調査の上果して不都合なしと御認相成たる上にて御認可相成る様致度此段回答申進候也

行が広く知られており、また、認可を得た神戸渡航合資会社と雖も、できるだけ多数の移民を集めて手数料を稼ぐことを重視し、移民の保護は二の次という、金儲け主義に走っており、県庁や外務省は移民事業者に不信感をもっていたこと。第二として、兵庫県の調査で、岩本千綱は東洋移民合資会社設立の実際の主動者と認定されたが、彼は陸軍中尉で退職を命じられ、その後定職に就かず諸方徘徊のうちタイに渡った得体の知れない人物であり、タイのことを全く知らない安松と久壽里が、岩本の口車に乗せられていた可能性があること。第三に、内務省から外務省への照会によって、岩本の悪評が再確認されただけ

ではなく、外務省は斎藤幹などの調査報告書等によりタイの米作の實際を知っており、かつ、タイの一般労働は日本と比較しても決して高くはないことも承知していたので、日本人のタイへの農業・労働移民は成功の余地に乏しいと判断していたこと。加えて、日本領事がいらないタイに日本人労働者を多数連れていって問題が生じた場合、彼等を保護できないという危惧をもっていたこと。

しかし、岩本は東洋移民合資会社設立準備と並行して、既存の移民会社を通じて移民集めも実施していた。彼がタイ移民募集を依頼した移民会社として判明するものは、上に酷評されている神戸渡航合資会社、それに海外渡航株式会社（広島）である。どうしてこの2社なのであるのか。それは次の記事から判るように、当時、神戸周辺で営業していた移民会社は、この2社に限られていたからである。

「渡航会社の衰運、数年前海外出稼渡航熱の盛んなりし際は之れが渡航上の周旋を営業とせるもの陸続輩出し随て弊害も百出せしかど移民保護規則発布後は其官に納むべき保証金の多額なる為め不得止廃業せしもの少なからず。本県に於て認可せしは只だ一二会社なりしも其後日清戦争となり一方には出稼労働仕向き先の不景気と官庁の労働者に対する取締りの厳重なりしと虎列拉病の影響とによりて移民者は日に月に減少し随つて之れが周旋すべき会社の如きも神戸渡航「合資」会社のみとなれり。然るに同社の如きは三万円の保証金を納め居れるに拘はらず八月中同社の周旋せしは僅かに一名（同月中の移住民総数三十名）此の手数料十円とするも実に保証金の三千分の一の収入なりを以て其業務の困難なるを知るべし。尤も広島より出張の海外渡航「株式」会社は目下布哇出稼民九百余名を募集中の由なるが目下平和克復後の事にもあれば少々渡航者の数は漸次増加するならんと云ふ。停業、六ヶ月に及ぶ、渡航周旋の目的を以て当市に設置せる小倉商會は移民保護規則発布「1894年4月12日勅令第42号」後即ち本年四月営業停止を命ぜられ爾來殆んど六ヶ月に及ぶも未だ内務大臣より解停の沙汰なしと云ふ」（神戸又新日報1895年9月28日号）。

神戸渡航合資会社は今井太左衛門が1894年に神戸で創立、同年にハワイ、カナダを中心に移民を送っている（本誌2013年4月号参照）。本誌前月号で、海外渡航株式会社は、1895年5月に暹羅移民募集の許可願いを内務省に出し、7月に認められたことを紹介した。神戸渡航合資会社も同時期に同様の手続きを行ったと思われるが、それを示す資料を見つけることができない。

読売新聞1895年6月14日号に、「暹羅移民応募者 暹羅殖民会社は岩本千綱氏の創立せしものなるが同氏は先般來該移民募集の用向にて帰朝し神戸に於て募集に着手したるに其結果頗る好成績にて昨今まで二百余名に達し居れりといふ」という記事が掲載されているが、あるいはこれは神戸渡航合資会社による募集なのかもしれない。しかし、同合資会社が岩本と提携して、移民希望者の多い広島県などでタイ移民募集を行ったことは、広島最大の地方紙、芸備日日新聞が掲載した次の告発書より明かである。



蔵「暹羅探検報告」(『殖民協会報告』第18号、1894年10月20日発行、を指すと思われ)を見れば同地には未だ農商務大臣の監督に係る暹羅殖民会社なるものあるを聞かず。いづれが真にしていづれが偽なるかは未だ判然たらずと雖も世人の爲めに迷津の誤記」を照らすの燈明台を求むるや切なりと佐田天照子と云ふ人より投書ありたり。暫く掲げて後日待つ(『芸備日日新聞』1895年7月25日号)。

この投書が掲載された直後、95年7月30日、7月31日両日の芸備日日新聞に次の広告が掲載された。

「暹羅國渡航者の義に付本月中芸備日日新聞に広告したる取扱其他の件は都合を以て今回限り総て取消候事、明治廿八年七月廿八日 神戸渡航合資会社」

このように神戸渡航合資会社は95年7月末に、タイ移民募集事業から手を引いた。なお、筆者は同合資会社が7月中旬に芸備日日に広告したという広告を同紙に探してみたが、見当た

なかった。

一方、岩本のもう一つの提携先、海外渡航株式会社(広島)はタイ移民募集を継続した。同社は、95年7月8日、広島や熊本、神奈川の地方新聞に本誌前月号で紹介したような広告を出してタイ移民を募集した。しかし、九州日日新聞(熊本)の1895年8月4日号には、岩本を副社長とする暹羅殖民会社のタイ移民募集は信用できないとして注意を促す、次の投書が掲載された。

「海外移住につき希望者の注額、戦勝後の國民が海外大飛躍の希望を有するは誠に喜ぶべき事なるが此機会に乗じて種々の奸計を廻らし私利を營なむものあれば応募者たるものは宜しく移住地の状況、移民会社役員の人等等に就き詳細の取調を遂げ自から安心する処あるを認め而る後決心する処なるべからず。頃日「熊本」市内に在りて暹羅移民を募集するものあり。希望者も頗る多きよしなるが本日余は洗馬町の同事務所に至り事務員に面会して先づ暹

羅殖民会社の社長は何人なるやを聞きしに事務員は其氏名を知らずと答ふ。次に該地農作物等の状況を質せしに事務員は一切之を知らず。唯だ頃日九州自由新聞に暹羅紀行とか云ふものを掲載しあれば之を見れば判然すべしと答ふ。彼等は既に彼地の事に就ては何事をも知らざるなり。次に余は渡航費の事に就きて問ひしが彼等の云ふ所にては渡航者は一人につき金六十円を携帯すべし。内十円は当地事務所の手数料として引去り船は神戸(目下副社長岩本千綱氏此地に在り)と云ふ。にて外国船を借受け以て盤谷に直航すべし。若し応募者多数ならば船賃も自から廉価となるべきも少数の場合には此船の借入賃を頭割りにせざるべからずと云へり。此事最も奇怪なる話なり。郵船会社の汽船に搭載することせば新嘉坡まで下等にて一人につき二十円内外なり。外国船に乗込めば下等十七円余なり。新嘉坡より盤谷に至る迄は三四円の間のみ。されば本邦より暹羅までの船賃は僅かに二十五円を費やせ

ば足れり。然るを同会社は此廉価なる便船に乗らしめずして何故に別に外国船を借入れんとするぞ。怪訝の根本は此処に在り。正直なる田舎漢などは特別仕立の汽船に載せらるることを喜ぶやも知らざれど特別の底には亦た特別の事ありと知らざるべからず。余は元來暹羅移住を目的とする者なれども此殖民会社なるものの甚だ不信用なるを信じ正直なる人々の之が爲に欺かれんを恐れ此意見を付して貴社に投ず。貴社幸ひに余白を暇(か)さば幸甚。八月三日阿蘇郡内牧村土族(投)」

筆者は、九州自由新聞(熊本)に掲載されたという暹羅紀行を探してみたが、残念ながらこの時期の九州自由新聞は、この図書館にも保存されていなかった。



連載 ④  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXX

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

『殖民協会報告』第42号(1896年10月29日発行)の74頁に次の記事がある。

「海外移民会社の認可 本邦に於て従来移民事業を取扱ひ來りたるは東京吉佐移民会社神戸海外移民合資会社「正しくは神戸渡航合資会社」及広島海外渡航移民会社「正しくは海外渡航株式合資会社」の三社のみなりしが尚ほ去る八月中認可せられたるは日本移民合資会社海外移民事務所の二なりと」。

これは1895年までの日本には、認可を受けた移民会社(個人営業を含まない)は、3社しか存在していなかったことを意味する。このことは本誌2013年4月号に掲げた表からも確認できる。

岩本千綱が、1895年半ばに安松市郎右衛門、久壽里房次郎および檜前捨次郎の3名とともに創立を計画した東洋移民合資会社は、仮に内務大臣の認可を得ることができていれば、日

本における最も古い移民会社の一つに数えることができたのである。結局、東洋移民合資会社は、前月号に記した経緯により認可を得ることができなかった。

しかし、岩本は移民会社設立申請と同時に、既存の移民会社とも提携してタイ移民を募集した。95年当時の日本に存在した3移民会社中の2社と提携したのである。

これは、タイへの移民計画は、日本移民史において最も初期の移民事業の一つであるとともに、近代の日本人移民草創期には、一時的にせよ移民候補地としてタイへの期待が大きかったことを示すものである。しかし、タイ移民は失敗に終わり、今日の日本人移民史研究においてはタイへの移民事業の歴史は完全に忘却されている。

岩本が提携した移民会社は、神戸渡航合資会社と海外渡航株式合資会社(広島)の2社であつ

た。このうち、神戸渡航合資会社は、岩本を批判する投書が新聞に掲載されたこともあつて95年7月末に岩本との提携から手を引いた。一方、海外渡航株式合資会社は、タイ移民募集を継続した。

海外渡航株式合資会社は、地元の広島県、それに熊本県でタイ移民の募集を実施した。

広島では、「露國浦鹽斯德及暹羅國の移民取扱今其筋の認可を得候に付此段廣告す、明治廿八年八月、広島市袋町十八番邸 海外渡航株式合資会社」という広告が、当時広島地方の最大地方紙、芸備日日新聞の1895年8月3日、4日、5日号に3日間連続掲載され、また、當時は芸備日日の10分の1以下の売り上げに過ぎなかった中国新聞の同年8月7日号にも同一広告が掲載された。

続いて、「募集廣告 暹羅國移民入用に付希望の人は本月十七日迄に申込あるべし 広島市

袋町 海外渡航株式合資会社」が、中国新聞1895年8月15日、16日、17日号に3日間連続掲載され、芸備日日新聞には同年8月15日号に1回のみ掲載された。広島における文字通りの募集広告は、これのみであった。

広島県は当時の日本において移民者の多いことでは有数の県であり、かつ海外渡航株式合資会社の地元でもあるのに、同社が、広島県でタイ移民募集の営業活動をし、それほど活発には実施しなかったのはどうしてであろうか。

「広島県庁の渡航取締 海外出稼業は固より我國に取りて奨励すべき好事業たるは争ふべからざる事なれども若し出稼地の調査の能く履行がざるものありて我國の異郷に無益の辛酸を嘗むるに至れるものあるのみならず却て醜を海外に買ふ如きは帝國の体面にも關するものあればとの注意よりしてか広島県知

711-7  
2014年3月

事は昨今海外渡航者の取調を嚴重にし以て災を未然に防がん方針なりと云へり」(芸備日日新聞1895年8月24日号)という記事があることから、本誌前月号引用文に見たような、外務省などから広島県に対してタイ移民への否定的な情報を送られ、県庁の監視が厳しかったことが推測される。

一方、熊本県では、地元紙の一つ、九州日日新聞を見ただけでも、海外渡航株式会社は1ヶ月に亘って繰り返し通羅出稼人の募集を行ったことが判る。即ち、

「募集広告 今回其筋の認可を請け通羅出稼人一百名を募集す。但御照会の節郵券封入なきときは回答せず。明治廿八年七月三十日 海外渡航株式会社 九州出張所」(九州日日新聞1895年7月30日号、31日号連載)を皮切りに、

「出稼人募集広告 今回其筋の認可を得 通羅国へ出稼人百名を募集し来八月四日当地を出発せしむ。但し契約書等は当市洗馬堂丁目九州出張所へ御来問あれ書状の御問合は回答せず玉名郡地方は高瀬町市原屋に於て時務取扱申候。山鹿郡地方は山鹿町隅田屋に出稼事務取扱申候。広島(マ)渡航株式会社 明治廿八年八月一日 九州出張所」(九州日日新聞1895年8月3日号、4日号連載)。

務取扱申候 広島(マ)渡航株式会社 明治廿八年八月一日 九州出張所」(九州日日新聞1895年8月1日号、2日号連載)。

「出稼人募集広告 今回其筋の認可を得 通羅国へ出稼人百五十名を募集し来八月四日当地を出発せしむ。但し契約書等は当市洗馬堂丁目九州出張所へ御来問あれ書状の御問合は回答せず玉名郡地方は高瀬町市原屋に於て時務取扱申候。山鹿郡地方は山鹿町隅田屋に出稼事務取扱申候。広島(マ)渡航株式会社 明治廿八年八月一日 九州出張所」(九州日日新聞1895年8月3日号、4日号連載)。

「特別広告 移住民募集広告 第二回通羅国出稼移住民二百名を募集す 希望者は来る十八日迄に当出張所に申込みべし。但玉名郡は高瀬町市原屋 山鹿郡は山鹿町住田屋に於て事務取扱申候。熊本市洗馬町 広島海

外渡航株式会社 明治二十八年八月十三日 九州出張所」(九州日日新聞1895年8月13日から8月17日迄5日間連載)。

「移住民募集広告 第三回通羅国出稼移住民一百名を募集す 希望者は戸籍全写をそへ当出張所に申込みべし。但し玉名郡は高瀬町市原屋 山鹿郡は山鹿町住田屋に於て事務取扱申候。熊本市洗馬町 広島海

外渡航株式会社 明治廿八年八月十五日 九州出張所」(九州日日新聞1895年8月25日から8月28日迄4日間連載)。

3回と記されているので、7月末8月初めの募集が第1回にあたるのである。この3回の募集人員を合計すると、400人か450人となるが、これほど多人数を募集したのであるか。それとも、第1回目には十分な数が集まらなかったもので、第2回、第3回と称して再募集しただけなのであるか。

正解は、後者である。海外渡航株式会社は岩本との契約で、100名のタイ移民を集めることに合意したにも拘わらず、100名を集めることができず、これに対して岩本が損害賠償を求めて争う強硬姿勢を示したために、何度も繰り返し募集をせざるを得なかったものようである。海外渡航株式会社が募集したタイ移民を、タイに率いた宮崎滔天(本名 寅藏、筆名

南蛮鉄)は、国民新聞に連載した「通羅殖民始末」に、次のように書いています。

「岩本『千綱』氏は一方に於ては切(しき)りに移民会社「東洋移民合資会社」の成立を待つと雖も、容易に許可を得ざるを以て、同年「1895年」七月広島海外渡航株式会社に托して百人の移民を募集せしむ。渡航株式会社は之に応じて、之を熊本県に募り、辛じて六十人の応募者を得、直に神戸に回送す。岩本氏其百人に充たざるの故を以て渡航会社を訴へて損害の要償をなさしめんと擬す。会社周章狼狽す処を知らず、仲裁を用ひ、辞色を卑ふして平和の落着を計ると雖も、事容易に決せず。双方の交渉殆んど寧日なし。時に岩本氏病を得て諏訪山吉田病院に入り、一時生死不定の身となり、万事亦休止の態(すがた)となる。

当時一飛報あり、通羅移民ブカノン「正しくはブカヌン」に惨死すと。此移民の惨死は延びて岩本氏の身上に及び、遂に氏の素行人物をも非難せしむるに至る。於是渡航会社も亦氏の言動に疑惑を生じ、氏に移民を托

することを危ぶむの止「やむ」を得ざるに至れり。然れども六十の移民を一旦誘出して、空しく帰らしめんか、多少の損害金を彼等に払はざる可からず。進ましめんか、岩本氏、人数不足を名として受取らず。進退に窮まるの際、恰も布哇「ハワイ」移民募集の事あり。依つて彼等移民を説いて布哇行に変更せしむるの議に決し、乃ち其意を以て六十の移民に諭す。命を受くるもの四十、他は皆最初の目的を達せんことを主張して聞かず、亦渡航会社の難題物となり。

余、当時偶々通羅漫遊の志を持して神戸にあり、彼等「20名」余が同県「熊本県」人にして、且つ其中には同郷知り合のもの四、五ありたるを以て、余に來つて通羅に同伴せんことを乞ふものあり。余亦大に通羅行の不得策なるを論じ、寧ろ国情相通せる布哇に行くことの得策なるを説くも之に服せず。未知の蛮国に入つて巨利を博せんと

先入主となり、假令通羅の野に餓死するの不幸を見るも、初志を貫徹せざるは止まず、渡航会社「海外渡航株式会社」若し此行を止めしむれば、一人に付八十円余の損害を払へと要求するに至れり。於是渡航会社は遂に一人の代理人を付し、岩本氏の契約を解除し、自ら責任を負ふて二十名の移民を渡通せしむるに決せり。

渡航会社は余に向つて其代理人たることを乞ふ。余辭して受けず、専務取締役春田幸三郎「正しくは、社長長田幸三郎」氏、余と一面の識あるの故を以て切りに乞ふて止まず。万一の不幸に陥るあらば、全般の責任皆我双肩に負ふて之を処理せんと云ふ。余辭すること四度、会社は更に重役二人を派して余を説かしむ。依て余は吉田病院に至り岩本氏を訪ひ、移民渡航の可否を正す。岩本氏当時病猶重く、水を以て口中を濕し、漸く微声を発して曰く、余「岩本」は渡航会社との関係を断つ止むを得ざるに至れり。然れども移民の渡通は余衷に切望に堪へざる処、我殖民会社「通羅殖民会社」の余を促す唯移民の來着

を待つ而已。余渡航会社と關係を絶つと雖も、裏面の實めは殖民会社に於て之を負ふ可し。乞ふ、理事石橋「通羅殖民会社理事石橋萬三郎」氏に君を介せん。願くば安んじて移民と共に通羅に入る可しと。余「滔天」心少しく動き、更に渡航会社重役に就て彼等の意志を慥かめんがために、謂て曰く、若し不幸にして業に就くを得ず、通羅の野に漂浪する時は之を如何。彼等答へて曰く、電報一発の下に旅費を送らん、君之を以て移民を送還せよ。余曰く、諾。更に移民に至つて前意を以て之を語る。物知りの一人進んで曰く、山田仁左「山田長政」の墓碑に屍を埋めん而已。衆齊(ひと)しく善哉と稱す。余曰く、快、乃ち代理人たるを諾す」(国民新聞1897年8月1日号)。

「通羅殖民始末」の刊行から5年後、宮崎滔天は『三十三年の夢』でも、同様の話を次のように書いています。



のまえ) 君なるもの亦彼と事を共にせり、余乃ち檣前(ひのま) 君の紹介によりて往て岩本君を見る、而して其説く所に因りて同国の事情を知り、殊に同国に於ける支那人の勢力あるを聞知するに及んで、心頭一点の希望は浮み出たり、以て(おもへ) らく此処或は万一の踏台をなすに足らんと、窃(ひそ)か)に胸底に曇みて東京に出で、有楽町八百屋の楼上なる二兄の下宿所に入り、共に起臥寝食を共にして、竊かに前途の方針を協議せり(白浪庵滔天(宮崎寅藏)『三十三年の夢』、国光書房、1902年8月20日発行、56頁)。

二兄と共に中国革命を志していた滔天は、岩本からタイでは華僑の力が強いという話を聞き知って、タイ行きも中国革命準備のための選肢の一つになり得ると思いついたが、この時点では、タイ行きを決心したわけではなかった。彼は、二兄と相談して先ず別の選肢を試してみた。即ち、華僑の多い函館で中国人から中国語を習得すべく、同地の女侠を訪ねて資金面の援助を請うたのである。しか

し、折悪しく日清戦争直後で函館の華僑の多くは同地を離れたまま未だ戻って来てはおらず、よき教師を見つけないことができなかった。やむを得ず、東京に引き返し、二兄と共に銀座在住の無名の英雄を訪問して相談したところ、支那の言語風俗に習熟するようにアドバイスを受けた。そこで、二兄は横浜の支那商館に入り、宮崎滔天は暹羅華僑の間に中国革命のベースを作るために、「暹羅に航して基礎を彼地に作るに努め、兩人二途に別れて分業の法に従ひ、而して遂に基礎堅固にして将来の進路に便あるの方面に向つて合同せん」(同上書61頁)と決めた。中国革命準備のために、暹羅に行くというのは何とも迂遠な道である。宮崎兄弟の中国革命の構想が、未だ幼稚で幻想的な段階であつたためであらうか。

「余」滔天は東京を発して神戸に向へり、岩本君に面して暹羅行の打合せをなささんが為なり、彼日ふ近々移民を率いて暹羅に乗り込むべければ、期に後れざる様来り会せよと、余は急ぎ郷に帰りて準備を整へ、再び神

戸に至りて岩本君を訪り、何ぞ図らん、彼は重病を得て瀕死の境に漂ひつつあらんとは。百人に近き移民は既に来りて出発を待ちつつあり、而して主なる岩本君の病は日に重(お)もり行きて、何時出発すべしとも定まらず、剩さへ病院長は死生不明の診断さへ報告するに至りたれば、之が周旋者たる広島移民会社の困却一方ならず、加ふるに各所の新聞は筆鋒を揃へて岩本君の身上攻撃を始め、其事業を危(あやぶ)みて山師的なりとなすもの多かりしを以て、移民会社も前途の憂慮と目前の事情とに迫られて、其移民を挙げて布哇行に変更せしめんと努め、遂に岩本君等一派と移民会社の衝突となり、延いて移民と移民会社の衝突となり、紛々擾々として解決の期なく、時日徒らに遷延して出発の期知るべからざるを以て、余は独り先発して単騎暹羅に入るの決心を採り、別を告げんが為めに岩本君を其病牀(病床)に訪へり。曾て鉄(くろがね)の如くなりし岩本君は、今や絲の如く瘠せ細りて病瘵に横(よこたは)れり、余を見て黙礼を施し、手真似もて

看護婦に下知して、差出す冷水に其口を過ほしつ、微声を絞りて余に謂て曰く、僕の身今此の如し、生死未だ知る可らざるものあり、恨むらくは暹羅農商務大臣の重託に辜負(そむく)することとを……語絶えて言ふ能はず、復た水を飲みて漸く口を動かして曰く、聞く移民の大半既に布哇行に変更して、残余二十人のみ頑として暹羅行を主張して止まずと、想ふに是天の未だ吾志を棄ざるなり、君願くは僕に代り、彼等を引率して暹羅に航し、彼国農商務大臣スリサツク侯、及び我殖民会社同人と謀りて殖民の基を定めよ、若し此の如くなるを得ば、豈嘗僕の幸福のみならんや、亦実に日暹両国将来の幸福なりと、余は此一言によりて動かされたり、然り、従来彼の言説所作に多少の疑惑を懐きたる余は、敢て其是非を問ふの邊なくして彼の意に従へり、然り、命是に綱(きは)まれば人皆真に回る、此刹那に岩本君なきなり、人を動かす豈弁舌にあらん哉、余岩本君の代理人となり、移民を率いて暹羅に至らんと決するや、移民会社も亦法規に従つて一代理人を

置かざるべからざるを以て、余に托するに其任を以てす、蓋し彼等余を以て経済的方便の用となしたるなり、余も亦懷中僅かに渡航費を余すのみなるを以て、奇貨用ゆべしとなし、月給四十円、外に旅費百円の約を以て之を諾す、余が月給取りとなりたるは前後唯是あるのみ、乃ち航期定まり紛擾も亦た解くるを得て、移民会社員の喜び一方ならず、重役一同余を拉して福原「神戸の福原遊廓」の第一樓に上れり、則ちまた青樓に春を買ふの始なり」(同上書61、63頁)。

上に引用した「暹羅殖民始末」と『三十三年の夢』の内容は、同一の著者が書いたものであるにも拘わらず、自己撞着を起こしている部分がある。中でも、岩本と海外渡航会社との関着の原因を、前者は海外渡航会社が契約人数を集めることがで

きなかつたためだと説明し、後者は海外渡航会社が、岩本が重病に罹つたのと岩本の評判が悪過ぎるのとタイ移民事業の成否を危惧して、タイ移民をハワイ移民に振り替えようとしたためだと説明している。しかし、諸資料を総合して見ると、前者の方が事実に近いようである。1895年3月に、パンコクから神戸に戻つてきた岩本が、第2次移民を率いてタイに再渡航するために兵庫県で旅券下付を受けた日は、同年6月14日である。旅券下付表には、岩本の住所は「神戸市海岸通五丁目16番寄留」、渡航目的は「殖民並に商業」、岩本の年齢は37歳10ヶ月と記されている(外務省記録3門8類5項8号、明治二十八年自一月至六月、海外旅券下付表)。彼の寄留地は、安松市郎右衛門の住所である。一方、岩本と共に、帰国した

大谷津直磨の旅券下付日は、同年8月17日、渡航目的は「學術研究」、住所は同じく安松方である。大谷津と前後して、安松方を住所として暹羅行きの旅券下付を受けたものに、4名の山口県平民がいる。即ち、8月9日に野坂和平(38歳11ヶ月、渡航目的「農業視察」、山縣復三郎(38歳4ヶ月、「商況視察」)、守田卯兵衛門(29歳10ヶ月、「商況視察」)、8月16日に中尾芳之助(43歳3ヶ月、「殖民会社用」)である。中尾は、94年末の第1次移民団の一人として旅券下付を受けていたが、何らかの事情で同行できず、第2次移民団と共に渡タイすることにしたようである。中尾の渡航目的は「殖民会社用」。この殖民会社とは岩本を副社長とする暹羅殖民会社と見て間違いない。一方、滔天、宮崎寅藏(熊本

県平民、24歳10ヶ月)が、渡航先「暹羅」、渡航目的「海外渡航株式会社代理人」として旅券を取得したのは1895年9月30日である。彼の住所は「神戸市栄町六丁目21寄留」であり、安松方ではない。宮崎が海外渡航株式会社の代理人としてタイに連れて行つた第2次タイ移民団20名の旅券下付の記録は、どうしてか、外交史料館保存の旅券下付表中には見いだせない。この件に限らず、間違ひなく来タイした日本人なのに旅券下付記録が見つからないケースも少なくからず存在する。保存されている旅券下付表は全ての下付者の記録を網羅した完璧な記録とは言えない。

但し、20名中の一員であつたと思われる、男女2人の旅券返納の記録が存在する。それは、山本九十九と山本スマが1902年2月12日に兵庫県に返納した旅券である。

九十九とスマの本籍地は同一で、熊本県玉名郡八幡村。兩人が、暹羅を渡航先として旅券の下付を受けた日は、1895年8月22日、その時九十九は27

明治廿八年各府県伝染病患者死者数

	虎列拉病 患者	虎列拉病 死者	赤痢病 患者	赤痢病 死者	腸管扶斯 患者	腸管扶斯 死者
大坂府	7195	5564	1370	375	820	257
広島県	4040	3070	2208	720	932	195
兵庫県	3603	2782	1873	590	1359	351
岡山県	2940	2003	2328	709	487	133
香川県	2333	1053	1237	403	1219	214
福岡県	2138	1468	2319	459	1591	393
京都府	1842	1561	907	270	926	279
山口県	1941	1303	1434	341	476	107
長崎県	1746	1220	564	168	462	70
愛媛県	1442	1002	1515	338	680	126

出所：九州日日新聞1896年3月11日号より筆者作成。但し、虎列拉(コレラ)死者千人以上の県名のみ掲げ、それ以下の県は省略した。

日新聞は、明治廿八(1895)年の全国の伝染病の罹患者数、死亡者数を上の表のように報じている。

以上二つの新聞記事の掲げる数字はソースが異なっているようであるが、大阪兵庫両県の死者数合計だけでも19年前の阪神淡路大震災の死者数(6434名)を凌駕していることは間違いないようである。このような大損失の後、1897年3月に伝染病予防法が制定されている。

とにかく、海外渡航株式会社では、岩本の化けの皮が剥がれたことと、岩本が重病に罹り渡タイどころの騒ぎではなくなっただことから、岩本と手を切り、タイ移民として募集した熊本県人60名をハワイ移民に振り向けようとした。しかし、20名はハワイへの振替を拒み、もしタイ行きが不可能なら一人80円の賠償を要求した。

その時に、折良く、宮崎が郷里熊本から神戸に戻ってきた。海外渡航会社は、宮崎を旅費100円、月給40円で雇用した。宮崎の職務は、同社の代理人として移民をタイに伴うと

ともに、タイにおける移民の保護監督である。ここに第2次タイ移民事業は、岩本の手を離れ、海外渡航株式会社の事業として実施されることとなった。

理や利を説いても肯んぜず、タイ行きに執着した20名の熊本県人の話で、筆者の頭に直ぐに思い浮かんだのは「肥後もつこす」という言葉である。筆者の出身県は福岡で、熊本県(肥後)は隣県である。少年時に福岡で読んでいた西日本新聞には、時々「肥後もつこす」の記事が出ていたのを覚えている。しかし、その意味を実感したのは、上京して接した何人かの熊本県出身者の頑固さに辟易した時である。

海外渡航株式会社が、採算の合わないタイ移民事業を断行した理由は、「肥後もつこす」の賠償要求の所為だけではないのは当然であろう。

当時の移民会社が移民から得られる基本収入は、周旋料で一人10円程度。加えて他の名目の少々のピンハネである。20人を移民させても、会社が得る利益は200円程度に過ぎない。そのために、宮崎に渡航費

1000円、月給40円を払ったのでは採算が合わない。しかし、同会社が敢えて、タイ移民事業を続けたのは次の理由によるものである。

一つは、95年初めに開業したばかりの同社は、大々的に第1回ハワイ移民事業を実施したが、移民保護規則に定める手続き違反の疑いで裁判沙汰が生じており(芸備日日新聞1895年6月30日号)、タイ移民の紛争問題をうまく処理しないと、個人移民事業者大手の小倉幸同様に営業停止命令を受けて、立ち上げたばかりの有望事業が失敗する危機に直面していた。もし、20名が騒いで営業停止処分を受けるようなことになれば、元も子もなくなることになる危険性がある。

第二に、岩本の悪評とは別に、タイ移民事業自体は当時有望な事業と見られていたことを、かつて資料で示した(本誌2013年4月号)が、同会社は今後の新規移民地拡大のための実験、先行投資と考えたものと思われる。

歳7ヶ月、スマは26歳8ヶ月であった。それから6年半後に、両人は初めて帰国し旅券を返納したのである。彼等の本籍地の熊本県玉名郡八幡村は、現在は荒尾市の一部となっている。「暹羅殖民始末」の中で、滔天は、20名は、彼と同県(熊本県)人であり、その中には、同郷(荒尾)の上、顔見知りも4、5人いたと記している。

これまで述べて来たことを総合すると、次のように推測される。

8月の半ばに、岩本と同じく安松方を寄留地とする大谷津、山口県平民の4名が旅券の下付を受けていることから、岩本は彼等も伴い、海外渡航株式会社に募集を依頼している百名の移民が集まり次第、タイに出発する予定であったと思われる。もし、東洋移民合資会社が内務大臣の認可を得てタイ移民募集ができれば、勿論それも加えて。

本誌前号で見たように8月初めには、東洋移民合資会社認可出願には、熊本県士族檜前捨次郎が安松、久壽里に次ぐ3人目の社員として加わっている。檜

前が、旧知の宮崎に、岩本を紹介したのは、それより1ヶ月前くらいのことであろうか。岩本は、移民の外にも訪タイ希望者複数を伴う予定であったので、それに宮崎がもう一人加わっても加わらなくても何の問題もなかった。岩本は、初対面の宮崎にも、同行を希望するならば、お安い御用だ、と気軽に応えた。この時、宮崎は直ちにタイ行きを決心せず、上京して二兄に相談し、先ず函館で華僑から中国語を学習する道を模索した。

タイ行きに決めた宮崎が、神戸に戻ってきたのは8月半ばである。岩本の同行予定者たちも旅券申請を進めていた。間もなく出発と知って、宮崎は熊本の家族に別れを告げに帰郷した。

しかし、同行者が旅券を取得した8月半ばになっても、東洋移民合資会社の認可は遅々と

して進まないだけではなく、海外渡航株式会社が募集したタイ行き移民百名も思うようには、集まらない。その一因は、プカヌン惨死の情報が届く以前の7月、8月初めにおいても、既に岩本の移民事業に疑惑が多いことが報道され、神戸渡航合資会社がタイ移民募集を中止するほどまでに岩本の評判が悪化していたことにある。岩本等は海外渡航株式会社の違約を責め、同会社は8月に3回も募集広告を出すこととなった。

岩本が連れて行った第1次タイ移民十数名が、プカヌン金鉱山で惨死したとのニュースが日本に届いたのは、9月に入ってからのはずである。岩本が宣伝している暹羅殖民会社は、名前だけの幽霊会社ではないのかという疑い、岩本は船賃などでも移民からピンハネをして不当な利益を得ようとしているのではないかといった類いの岩本

への疑惑は、プカヌン惨死の報により頂点に達した。

これと殆ど同時に岩本は、重病に罹ってしまった。このような際の入院は、仮病と疑われても仕方あるまいが、岩本の病は本物であった。彼の病名は不明であるが、病状から見ても何らかの伝染病であったはずである。

1895年は神戸を含め全国でコレラと赤痢が大流行した年であった。現在唯一利用可能な当時の神戸の地方新聞、神戸又新日報には連日コレラ、赤痢の患者数が報じられている。同紙1895年11月28日号は「虎列拉(コレラ)病と赤痢、県(兵庫県)下に於ける本年一月一日より本月廿四日迄の虎列刺患者数は三千六百三十四人内死亡二千六百七十八人にして赤痢病は同日数間の患者一千八十九人内死亡五百三十一人なりと云ふ」と報じている。

また、熊本の地方紙、九州日





まいったという「海外渡航株式会社代理人」就任が、渡航目的として明記されることはあり得ないはずである。宮崎の『三十三年の夢』は、筆が走りすぎて事実から乖離した部分もありそうである。

さて、岩本が、神戸の吉田病院から退院したのはいつであるうか。

神戸又新日報1895年9月28日号は、岩本の動静を次のように報じている。即ち、「岩本千綱氏 暹羅(サイアム)移民出稼のことにつき先程来同地より帰朝せし高知県人岩本千綱氏は今猶ほ当市海岸安松方へ滞在中」。

この記事は9月28日時点で、岩本が神戸の定宿、安松市郎右衛門方に滞在していたと読むことができるが、それが事実なら、岩本は既に病院から退院していることになる。

前号にも書いたが、宮崎のタイ行きまでのプロセスを繰り返すと次のようになる。

1895年7月末8月初めの頃、神戸に一時立ち寄った宮崎は知人増前の紹介で、初めて岩

本と相知った。中国革命志向の宮崎は岩本からタイには華僑が多いことを聞いて、タイに渡って華僑の間に中国革命の基礎を作ることと一選択肢かも知れないと思いついた。その時の岩本は、8月後半には移民、大谷津直麿および数名の同行者とともにタイへ出発する予定であった。岩本に同行する予定の者は8月半ばに旅券を取得した。

もし、8月半ばまでに移民100名が集まっていれば、岩本は予定通り出発したはずであるから、タイ行きを決心して神戸に戻って来た宮崎はそれに間に合わず同行できなかったであろう。しかし、海外渡航株式会社は頻繁な新聞広告の甲斐もなく、幸か不幸か8月後半になっても、応募者は少なかった。その責任の一端は、悪評をたてられた岩本自身にあったはずであるが、岩本は海外渡航株式会社の違約を責め立てた。宮崎は出発までまだ少々時間的余裕があるとして、別れに熊本の家族を急ぎ訪問した。宮崎が再び神戸に戻って来たのは9月初旬ごろと思われるが、岩本と海外渡

航株式会社の関係は、一層悪化し、かつ岩本は急病で入院中の身となっていた。

海外渡航株式会社はタイ行きの移民として集めた熊本県人60名をハワイ移民に振り替えようと説得したが、20名は頑としてタイ行きに固執した。海外渡航株式会社は、岩本と手を切つて単独でタイ移民事業を試みることに決し、ある程度は英語力がある宮崎に、タイに移民を率いた後、同社の代理人としてタイに駐在するように交渉した。無経験の宮崎は、迷った末、9月半ばにはこれを引き受けた。前渡金を手にした宮崎は、神戸の福原遊廓で数泊を過ごしながら、旅券下付と出帆を待った。その頃には岩本は病も快方に向かい病院を退院して、安松方に戻った。

1895年末の海外渡航株式会社の海外出張所は、次の記事から判るように、ハワイと暹羅との2ヶ所しかない。ここに言う暹羅の出張所とは、同社代理人宮崎滔天が一人で駐在しているバンコクの事務所を指していることは間違いない。

「海外渡航希望者日に増加す従来の例によりて見るに海外渡航者は国民一般の海外思想漸次発達するに随ふて徐々々其数を増し来りしが征清事件以来頓に増加して其数従前に幾倍するものあり 是れ戦争の端なくも急に海外思想を發達せしめたるの徴として見る可き歟 我が広島県下に於て最も多数の海外出稼人を出すは佐伯、沼田の二郡にして安芸、高宮の二郡之れに重(つ)ぎ 上は三次等次第に山間に入りて次第に其数を減じ轉じて備後地方に至れば愈々少く其神石郡の如きに至りては殆んど皆無の姿なりしに本年に至りて佐伯、高宮の地方に於ける非常の増加は云ふまでもなく神石郡の如きすら当地海外渡航会社第一回の渡航者として十余名を出し更らに第二回の渡航者として六十余名を出せり 斯の如き多数の渡航希望者は布哇国に到らんことを望むもの最も多きを占むれど其外の諸外国に渡らんことを望むもの亦た決して少からず 去れば海外渡航会社に対して契約を申込みもの非常に多しと雖も同会社には布哇国通

羅の二ヶ所のみは出張所ありて渡航者を保護することを得と雖も其他の地には是等の設けなく北米合衆国の如きは曩きに多少の出稼人を渡航せしめたるも十分の保護を与ふること能はざるより現に同地の取扱を中止し居る始末なれば申込者をして一々満足せしむること能はず如今大奮発を以て規模を拡張せざる可からざる至れりと云へり」(芸備日日新聞1895年11月12日号)。

海外渡航株式会社は、数少ない出張所をタイに置いたのである。しかし、その意気込みにも拘わらず、結果を先に言えば、タイ移民事業は当然の如く失敗した。失敗の責めは、五里霧中の中で手探りを試してみた海外渡航株式会社と同社代理人宮崎の両者が負うべきだと思われるが、宮崎は自らの非力、努力不足を反省するどころか責任を他人に転嫁して、糊塗弁解に努め

ているように見える。宮崎滔天はタイから帰国した後は、孫文らの中国革命を献身的に支援した好漢であるが、在タイ時代は移民会社に雇われた一従業員という立場上、小心であらざるを得なかったのだからうか。

宮崎の責任転嫁の所為で、彼から必要以上の筆跡を受ける不運に見舞われたのは、三谷足平(1860-1924)である。三谷は岩本千綱より3歳ほど若いだけで、岩本と同世代である。三谷は、最近創立100周年を祝った泰園日本人会の幹事会長の医師であるが、1895年当時日清戦争の召集命令を無視して来タイしたばかりであった。バンコクで開業しようにも、バンコク在住の日本人は数十人

に過ぎず、またタイ人や華僑の患者を診るには未だ言葉もできず信用もないので、患者を見つけて難儀していたものと思われる。そのような状態の者が、手っ取り早く金銭を手にする選択肢の一つは、同国人から上前をはねることであつた。三谷が標的にしたのは、宮崎が引率してきた20名のタイ移民である。「暹羅殖民始末」で宮崎は次のように記している。

20名の移民は、タイ到着後1週間にして、「石橋(馬三郎)氏の周旋に依り五人は日本商店に、十五人は盤谷船渠会社に労役することとなり、茲に皆生計の道を得て安堵の思ひをなせり。此時船渠会社は一ヶ月十二

円の賃金を給することとなし、三ヶ月を過ぎて猶ほ六十銭に直「値」上すること約す。日本商店に於ても男十二円、女八円の約を以て労役に服せり。彼等は「暹羅」殖民会社に依つて農業に従事する望みは已に失ひしと雖も最後の決心たる仁左「山田長政」の暮「墓」畔に餓死するの患は乃ち免るを得たるなり。三谷足平氏の奸策及移民の変動、斯くて移民、船渠会社に働くこと数日、余「宮崎」は彼等が言語に通ぜざるを以て、通訳の爲めに日々此処に通勤して傍ら監督の務めをなせり。彼等が軽快敏捷なる働きには、従来支那人暹羅人を相手としたる役員等、実に舌を巻いて驚嘆し憂時「少しの間」にして日本労働者の名声を高からしめたり。于時一日、彼等の中八人のもの、余に來り、アイチャ「アユタヤ」鐵道工事に労役せんことを乞ふ。是れ船渠会社に比して賃金高直「値」なるを以てなり。余自ら一応探験の上、風土氣候の身に適するや否やを確かめて後にあらざれば許すこと能はざるを以て答ふ。彼れ等探験



の時日を問ふ。余、今より此事を会社「海外渡航株式会社」に照会し許諾を受けざる可からざるを答ふ。彼等甚だ時日の遷延を憂ふるものの如く、直に工事を従はんことを切望して止まず。余遂に之を許さず。利害得失を説いて慰諭するもの数回、彼等聞かず。一片の離縁状を余に与へて会社の關係を絶たんと企つ。其文面に曰く、

私共今般貴殿の説諭に従はず、三谷足平氏の尽力に依り鉄道工事に到り候上は  
假令「たとえ」如何なる事情に遭遇するも更に貴社の御補助に預り不申候間、為後日右如件に候  
代理人御中 移民八名印「官崎は『三十三年の夢』では、8名ではなく6名と記している」

事既に茲に至る、亦如何ともなすべきなし。余一夕酒肴を求めて彼等八人を招き、離別の宴を催し且つ告げて曰く、汝等我命

を用ひずして鉄道工事に到らんとす。是れ余が大に遺憾とする処なり。汝等已に会社の關係を絶つと雖も、若し誤て病を得て窮困に陥るあらば、直に帰り来て助けを求めよ。余正に応分の便宜を与ふべし、帰り得ざるものは之を報ぜよ我行いて助く可しと。彼等皆首を垂れて泣く。而も一人の我命に従はんと云ふものなく、得難望蜀「難望蜀」を得て蜀を望むの念は少しも変ずる処なし。彼等已に「プカノン」「プカヌン」に於て日本人惨死の状況も之を聞知し乍ら、一身を忘れて覆轍の後を追ひ、瘴癘の中に分け入んとす。唯是れ一片郷国の妻子父兄をして、一日も早く安樂の生活をなさしめんと欲するの心情禁じ難きによる。嗚呼、亦憐む可からざらんや。嗚呼、彼等をして此の如き冒險の念慮を起さしめたるものは誰ぞや。是れ先きに山口県の移民「第1次タイ移民団」を煽動して殖民会社に反抗せしめた

る三谷足平氏乃ち其人なり。氏は青森の人、曾て身軍籍にあり。私「ひそか」に脱して清国上海に入り、職業婦を妻として医業を営む。日清の衝突起らんとするに際して、政府は一片の召喚状を發して彼れが帰朝を促す。氏逃れて香港に到る。茲に亦同様の事に逢ひ、一身を隠すに処なく、終に日本の領事公使館なき暹羅に入りたる也。時に鉄道工事受負人スミソンなるものあり。同じく日本人の職業婦を妾となす。而して三谷氏の妻君とは元、同業親睦の間柄なりしを以て、相親んでスミソンと相知るに至れる也。此の因縁を以てスミソン日本労働者を熱望し、三谷氏乃ち其機に投じて、一ヶ月労働給金三十円の定約をな

し、而して移民を煽動せり。更に移民と三谷氏の間に結ばれたる契約は大略左の如し。  
第一条 移民の労働時間を十時間となす事  
第二条 移民の月給は十五円となす  
第三条 移民の食料は三谷之を引請る事  
第四条 移民若し疾病により二日以上休業せるときは月給の割合を以て引去ること  
第五条 疾病の故を以て暹羅に在留すること不可なりと認むる時は三谷氏は一時其旅費を立替る事依之見之、三谷氏はスミソン

より一人一月三十円の給金を徴収し、而して移民に対しては唯其半を給するものなり。則ち中間の十五円は、氏が収めて以て懐中のものとなすものなり。當時氏の名声は在留日本人中に一分の信用なく、猶ほ能く其不当の契約さへ履行し得るや否やを疑へり。依つて重なる日本人は、移民に対して懇切に此行の非なるを諭せり。而も彼等終に從はず、三谷氏に誘はれてアイチャ「アユタヤ」鉄道工事場に向ふこととなりたり。余「官崎滔天」は彼等八人の移民が此行を以て軽々看過するを得ず、且つ他に暹羅移民に対する要件を帯びて一旦打合の爲め後事を山田、柳田「亮民」の両氏に托して帰国せり。是を十二月「1895年12月」下旬の事となす。渡航会社「海外渡航株式会社」との交渉は「はかど」らず、余且病を得て再渡暹の期を遷延し、二十九年三月「1896年3月」長崎を發して再び暹羅に入る。余帰朝中の出来事は兩代理の報告に依つて知了するを得たり。曰く、三谷氏は移民月給をスミソンより受取り、之を懐にして

盤谷に帰り去りし事、及スミソンより托せし金員を消費して自家の用に供し去りしこと、此二件によりてスミソンは大に憤激し、三谷氏との契約を解除し、移民をして同氏との關係を絶たしめたること、及び余の帰国後、他に七人の移民、余が留守中の代理人たる山田柳田両氏の説諭を用ひず、先発者と同様の離縁状を与へて、鉄道工事に赴きたること等なり」(国民新聞1897年8月3日号)。  
官崎はコーラート鉄道建設のことを、アイチャ「アユタヤ」鉄道工事と言っている。しかし、この時点では、鉄道工事はアユタヤを超え、サラブリーも過ぎて、熱帯熱マラリアが猖獗を極める山の中に入っていた。官崎は「三十三年の夢」では、この鉄道工事を、「アイチャ」とは言わず「タルラック」の鉄道工事と書いている。「タルラック」は、多分岩本千綱が「タツコン」村と称したものと同じで、タツブクワーンを指すものと思われる(2013年12月号参照)。

三谷足平については、昨年刊行された『泰西日本人会百年史』の拙稿中に述べたが、ここでもくらか情報を追加して、在タイ日本人社会の名士に転じる以前の三谷について触れておきたい。  
三谷足平は、弘前藩の御用刀研師の家系に生まれた。父の三谷弘句は、津輕の著名な俳人である。三谷は父親の俳友である藩医(近習医)北岡太淳のもとで医学修業を開始した(『大浦山誌』海蔵寺住職花田正道発行、弘前、1944年、24-25頁)。  
アジア歴史資料センターのウェブ・サイトで「三谷足平」を検索すると、次の3つがヒットする。これから海外に出る前の三谷について次のことが判明する。

まず、『内務省衛生局報告第廿五号』(明治14年「1881年」7月15日発行)に「成規の試験を経て東京大学医学部の卒業証書に拠り(本年六月中)開業免許を授与したる医師並薬舗人名を左に報告す」とあり、報告氏名中に「内外科 青森県下 三谷足平 廿一年二月」とある。これから、1860年4月

生(三谷足平は、21歳2ヶ月時の1881年6月に、試験に合格して医師の開業免許を得たことが判る)。  
次に「非職將校都合に依り東京府下寄留の儀に付申越 非職陸軍三等軍医三谷足平右の者今般都合に依り東京府下神田区小川町四番地に寄留致度旨願出の趣許可候に付此段申越候也  
明治二十年四月二日  
仙台鎮台司令官佐久間左馬太  
陸軍大臣伯爵大山巖殿」とあることから、三谷は医師免許取得後、陸軍の三等軍医に採用され、仙台の第二師団に所属していたが、その後非職(休職)となり、1887年4月には東京に上京したことが判る。彼は休職扱いのまま多分東京で医業に従事していたと思われる。  
更に「陸軍省大日記」に「召集取消の文字誤記の件通牒」と題した次の文書がある。  
「師第四九号 課長より第二師団參謀長へ通牒案 貴師団御所轄「？」休停職及予後備將校等団隊等配属中姓名不見当もの

三谷足平については、昨年刊行された『泰西日本人会百年史』

の拙稿中に述べたが、ここでもくらか情報を追加して、在タイ日本人社会の名士に転じる以前の三谷について触れておきたい。

三谷足平は、弘前藩の御用刀研師の家系に生まれた。父の三谷弘句は、津輕の著名な俳人である。三谷は父親の俳友である藩医(近習医)北岡太淳のもとで医学修業を開始した(『大浦山誌』海蔵寺住職花田正道発行、弘前、1944年、24-25頁)。

御取調の儀師第四七号を以て及御照会候処該人名中三等軍医三谷足平酒井米誠の頭書召集取消とあるは誤記に付御取消相成度然処三谷は失踪に付至当の御処置可有之候此段右通牒旁々申進候也 廿七年八月卅一日

日清戦争の勃発により、休停職及び予備將校も召集されたが、1894年8月末には休職中の三等軍医である三谷は無届けのまま行方不明になっていくことが判明した。この時点で処罰手続きが開始されたものと思われる。



1901年4月に三谷が、バンコクで詐欺取財事件の被告として領事裁判にかけられた際、4月14日、篠野乙次郎領事は三谷の前歴について、本省に「三等軍医三谷足平は欠席判決の言渡を受けて居る者なるや又同人は弘前親方町一番地に住居したるや」を電報で問い合わせた。これを受けて、杉村外務省通商局長が、中岡陸軍省人事局長に照会したところ、5月16日付で次の回答が寄せられた。即ち、「予備陸軍三等軍医三谷足平右去る明治二十八年十月廣島地方裁判所に於て充員召集不応の件に拠り輕禁錮二ヶ月の欠席裁判あり 本人当時の住居は弘前市大字親方町廿四番なり」(外務省記録「ヤマト」日本に於て欠席裁判判決を受けた三谷足平の詐欺取財被告事件に關し在暹羅帝國公使より伺出一件)、と。

三谷は、日清戦争終結後の1895年10月になって広島地方裁判所で充員召集不応に依り、本人不出頭のまま輕禁錮2ヶ月の判決を受けたのである。上述「暹羅殖民始末」が記

すように、当時、三谷は日本領事館のないタイに渡っていたので、判決はあったものの、日本で服役させられることはなかった。

この刑罰回避が、問題にされたのは、1901年4月初旬に篠野領事が派遣した領事館付警察官によって三谷が逮捕された際である。三谷逮捕の真の目的は、彼が起こした詐欺事件について領事裁判にかけられるためであつたが、逮捕はよく知られてゐる軍逃亡の嫌疑を理由としたようである。

当時、三谷はスラサックモントリ元農商務大臣の庇護を受けてシーラーチャーの病院で医師をしていた。本誌2012年3月号に示したように、三谷足平は1895年1月18日に在バンコク日本人が、ワチラーウット親王の立皇太子を祝つてテーワウオン外相に奉呈した祝詞に石橋萬三郎、大谷津直磨とともに、住所をスラサックモントリ邸として名を連ねてゐる。三谷も、岩本千綱、石橋萬三郎、宮崎滔天らと同様、来タイ直後からスラサックの庇護を

受けた一人なのである。しかも、その親分・子分関係は、前三者より長続きた。

スラサックは子分三谷の逮捕に猛烈と反発し、三谷の釈放を要求して稲垣満次郎公使を面罵した。

その内容を稲垣はテーワウオン外相に語り、同外相は1901年4月9日付で国王秘書長官ソムモット親王に次のように報告した。

「稲垣公使がテーワウオン外相に言うには、スラサックは稲垣の名譽を害する発言をいくつも行った。スラサックは三谷逮捕に關して、日記帳に記してゐる通りに印刷するつもりだと言つたことが一つ。スラサックは、かつてバンコクを訪問した川上「操六」將軍と、暹羅と日本との間に何か問題が生じたら互いに連絡を取り合つて協力して解決しようと合意してゐるので、川上將軍に連絡して稲垣公使を本國に召喚させると言つたことが一つである。

テーワウオン外相は稲垣に次のように答え、かつ質問した。事件が終了した時に、スラ

事件が終了した時に、スラ

サックに三谷を返せば、スラサックは満足するだろう。ところで、三谷は日本領事館に登録を求めているのに、領事は登録を拒んでいるというが本当か。もし、事実ならその理由は、と。

稲垣公使の答は、三谷が登録を求めたのは藤田領事の時代からであるが、三谷は、軍を逃亡した嫌疑があり、かつ本当の名前が何であるのか不明であるからだろう。この人物は四つも名前があり、間違ひなく悪人だ。フランス領事が日本人保護を依頼していた時代にも、三谷は一回財産差押の判決を受けてゐる。それでバンコクに居ることができず、ナコンラーチャシーマーに逃げていた。稲垣公使が最初にバンコクに着任した時「1897年5月」にも、フランスの領事裁判所が債務弁済に充てるために差し押さえた三谷の私財のうち、僅かに残つたものの返還を受け取つたほどである。どうしてスラサックがこのような人物を使うのか不思議だ。スラサックは、稲垣に日本人から何回も騙されたと愚痴つたことがあるのに。例えば、パー

サコラウオンがブラー・リットティロンロナチエート駐日公使に通訳として付けてやつた山本「安太郎」は、かつてスラサックの通訳をした時に盗みを働いたことがある」と(タイ国立公文書館史料 No.5 So.13/25)。

本号に掲げる、東京日日新聞1921年8月21日号の記事に、三谷はスラサックに従つて、プレーにおける土匪の反乱鎮圧に軍医部長として参加したと記されているが、これは1902年7月に生じたギオ(シヤン)またはタイヤイに同じ)の反乱のことである。本号に三谷が参加したのか否か、未だ裏付けとなる史料は目にしていなが、三谷が親分スラサックの庇護に感謝して参加した可能性はある。

ところで、稲垣はテーワウオン外相に、日本政府が在タイフランス領事に在タイ日本人の保護を依頼していた時期(1895年9月-1897年3月)にフランスの領事裁判により債務弁済の命令を受け、私財を差し押さえられたことを語つてゐる。これは本号引用の国民新聞記事にある、三谷がスミソンと

の約束を守らず、移民の給料を持ち逃げした事件で、スミソンが訴えたためである。

どういう因果関係かは定かではないが、兎に角、1895年10月は三谷にとつて、大変な時期であつた。本國では欠席裁判で有罪判決を受けた。バンコクでは官崎が連れてきた移民を横取りしてコーラート鉄道建設苦力としてスミソンに斡旋して、まとまった金を手にしたが、直ぐに約束を反故にしてバンコクに逃げ帰つた。その結果、スミソンに訴えられてフランス領事の領事裁判でバンコクの私財は差し押さえられた。三谷は、コーラートに逃げて、ほとぼりの冷めるのを待った。

さて、三谷の1901年の詐欺事件では、領事裁判の結果次のように判決が確定した。

#### 公第二号

詐欺取財犯三谷足平に対する裁判確定の件

青森県平民三谷足平は本月十三日当館に於て詐欺取財被告事件に付重禁錮四月罰金八円監視六月の判決を受け翌十四日控訴申立候処去二十日に至り控訴を取下げ裁判確定致候に付別紙判決書写相添此段及報告候

敬具

明治三十四年五月廿四日  
在盤谷 領事篠野乙次郎  
外務大臣 加藤高明殿

#### 判決書

青森県弘前市親方町十八番地  
平民戸主  
当時「現時」暹羅國シーマハラ



チャ「シーラーチャー」居住  
医業

被告 三谷足平 四十二年  
右三谷足平に対する詐欺取財被  
告事件を受理し審理を遂げ判決  
すること左の如し

#### 判決主文

被告三谷足平を重禁錮四月に処  
し罰金八円を附加し六ヶ月の監  
視に付す

#### 理由

第一 被告三谷足平は明治三十  
三年四月日不詳盤谷府パンモ  
街マクリン商会に到り其の所有  
の黄楊木材を日本へ輸出すれば  
需要莫大なるを以て一本に付金  
五円位の高価を占め居り大に利  
益ある旨を説述し其の木材は劣  
等品なるを一千百本に對し墨銀  
三千二百一弗七拾仙の荷為替を  
付せしめ被告は前金として前記  
マクリン商会より過銀千六百五  
拾銖を受取りマクリン商会の名  
義を以て東京暹羅貿易商會渡辺  
知頼へ宛て輸送せり然るに渡辺  
知頼に於て委託販売の承諾もな

きに突然荷為替付黄楊木材の到  
着したる通知に接し之を引受る  
べき責任なきも損毛なき限りは  
引受くる積にて人を派し検査し  
たるに全部多くは小材にして荷  
為替金額の大凡三分の一の価に  
過ぎず依て引受方拒絶に及び  
爾後取扱銀行よりマクリン商会  
へ宛て報道あり品質劣等なるに  
因り競売に付するも其損失大な  
るべく且庫敷保険料等の費用益  
嵩む由申越したるに由り同商会  
は被告に對し其の処分方問合は  
するに被告は毫も之に應ぜず尚  
屢々手紙及電信を以て処分方相  
談の爲め來盤を促すに事故に托  
して來らず又其処分方に付一言  
の応答も為さず果して正當に契  
約を履行するの意志あらば速に  
処分するは被告の利益なるに拘  
はらず數箇月間今日に至るも尚  
ほ之を顧みざりしものなり之を  
要するに被告は当初より其の目  
的黃楊木材を輸出して利益を得  
んとしたるに非ずしてマクリン

商会をして利益ある希望を抱か  
しめ財物を詐取したるにあり其  
の事實は當舖付警部内藤弘の告  
發書渡辺知頼の始末書被害者マ  
クリンより提出せし第一号乃至  
第十七号書類並當法廷に於ける  
被告の供述等により証憑充分な  
りとす

明治三十四年五月十三日在盤谷  
日本領事館に於て検事外務省警  
部内藤弘立會宣告す  
領事 篠野乙次郎（前掲  
外務省記録）  
三谷は1901年5月13日  
にパンコクの日本領事館の監獄  
に入獄し、同年9月9日満期出  
獄した。判決により1902年  
3月9日まで6ヶ月の監視中で  
あったが、1902年1月15  
日以後31日まで命令に反して  
領事館に出頭しなかった。その  
罪により同年2月19日に領事  
裁判により20日間の重禁錮の  
判決を受けることとなった。服  
役後6ヶ月の間は半月に1回、  
領事館に出頭せよという命令  
は、パンコクに居住しているの  
ならいざ知らず、シーラー  
チャーから出頭するのは負担で  
あったのは間違いない。

なお、1901年に逮捕した  
当初、日本領事は三谷を本國に  
送還して、召集不応の刑罰も受  
けさせようと試みたが、送還に  
は警察官の同行が必要であり、  
警察官の手配ができず、沙汰止  
みとなった。

連載 46  
パンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXXII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

1987年12月22日付で、広

島県知事は外務省通商局長内田  
康哉宛に「明治廿八年移民取扱  
人海外渡航株式会社移民明細  
表」および「明治廿九年移民取  
扱人海外渡航株式会社移民明  
細表」を提出した（外務省記録  
3-8-2-85「移民取扱人に依  
る移民並依らざる移民の員数」  
各府県知事並に在外領事より報  
告一件）。この二つの明細表中、  
暹羅への移民について見れば次  
のようになる。

前者明治28年の表について見  
れば、広島県の移民取扱人であ  
る海外渡航株式会社が1895  
（明治28）年に暹羅向けで取り  
扱った移民数は男18名、女2名  
の合計20名である。宮崎滔天が、  
海外渡航株式会社の代理人として  
95年10月に暹羅に引率した人数  
は20名であるから、同社が広島  
県に報告した数と一致する。な  
お、20名中には、2名の女性も

いたことになる。

更に、後者明治29年の表から  
は、1896年に海外渡航株式  
会社が、新たに暹羅移民として  
扱った数はゼロ、但し同社が會  
て扱った暹羅移民（即ち95年の  
20名、全員自由移民）中、96年  
に帰国した者2名（男女各1）、  
死亡した者6名、在留中の者12  
名（男11、女1）であることが  
判る。在留中の12名のうち、依  
然同社と契約中の人員は8名  
（男7、女1）、解約人員は4名  
（男のみ）である。また、この  
12名中5名はタイから別の國に  
移動している。この資料から、  
宮崎が伴った20名中、1896  
年時点では6名（男のみ）がタイ  
で死亡、2名（男女各1）は日  
本に帰国、5名（男のみ）はタイ  
から別の外國へ移動、7名（男  
6、女1）がタイ残留というこ  
とになる。

1895年10月に宮崎滔天が

引率してきた第2次タイ移民  
を、三谷足平が鉄道工夫に勧誘  
したことは前号に記した。宮崎  
によれば、最終的に鉄道工夫と  
して就業した者は15名に達し  
た。しかし、1896年4月初  
めまでには、全員がマラリアに  
罹ってパンコクに戻り、このう  
ち6名が死亡した。生き残った  
者たちも、まもなく、4、5人  
の半病人を除けばシンガポール  
に脱出した（宮崎滔天『三十三  
年の夢』国光書房、1902年、  
97-102頁）。

以上の記録から見ても、コー  
ラート鉄道建設工夫として死亡  
した者は第2次タイ移民団の6  
名である。既に見たように、岩  
本千綱が率いた第1次タイ移民  
のうちブカヌン金鉱山で働いた  
12名が死亡している。第1次、  
第2次タイ移民合計52名（又は  
50名）のうち、1895年央か

ら96年初めの間に、18名が主に  
熱帯熱マラリアでブカヌン、  
タツブクワン、パンコクの地  
で死亡したのである。

来タイ後半歳を経ずしてタイ  
の土と化した、この18名を悼ん  
で、日本人會は、1966年に  
サラブリー県ゲーンコーイ郡の  
ゲーンコーイ寺境内に慰靈碑  
「日本人移民之碑」を建設した。  
同寺は、国鉄ゲーンコーイ駅を  
出て、商店街を10分程度歩いた  
市中に位置している。

同寺には、第2次大戦中の1  
945年4月2日のゲーンコー  
イ空襲犠牲者の慰靈碑もあり、  
タイ人の間では、この慰靈碑の  
方が有名であるが、二つの慰靈  
碑は同じ敷地の中に並んで立っ  
ている。

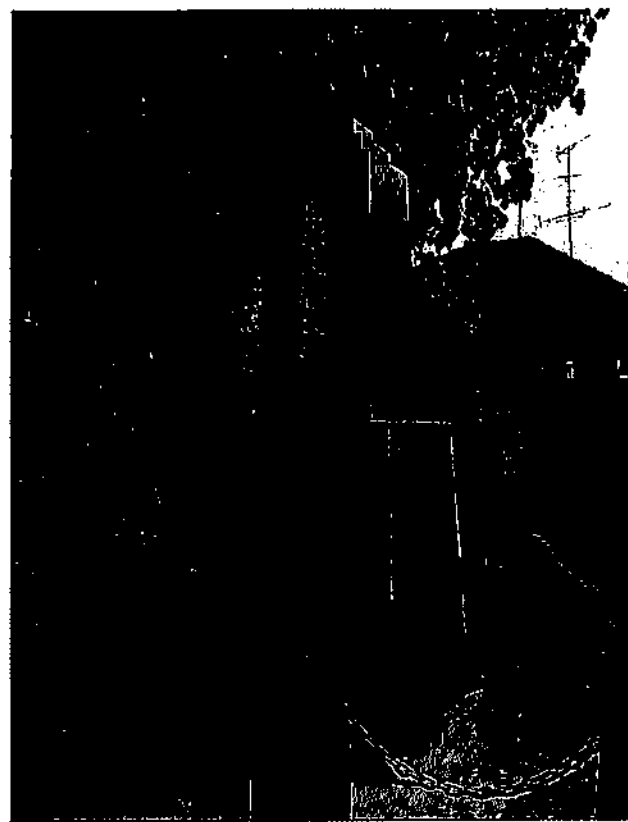
「日本人移民之碑」の表側台  
座には、次の文章が刻まれてい  
る。

から自分の曾祖父がバンコックのゲンコイで亡くなったと言  
い、名前は鍛本作造という事が  
わかり父は非常によろこび、早  
速過去帳に現在の様「山口県人  
鍛本作造以下十七名ゲンコイ地  
区にて工夫として労務中風土病  
に倒る」に書き替えました。そ  
れで風土病やマラリヤで死亡さ  
れた方々の霊を慰さめるため昭  
和四十一年十月ゲンコイ市ゲン  
コイ寺の住職から許しを得て釈  
迦像を建立し碑文を彫刻しまし  
た。日本人会では五年毎にゲン  
コイ寺で慰霊祭を行うことにし  
ています。……この様に父が面  
田さんとの約束を果し得たこと  
は、日本人会の方々の一方なら  
ぬ御協力があつたからだと思ひ  
ます」（日高百合江「タイ国日  
本人納骨堂五十周年に寄せて」、  
高野山真言宗タイ国開教留学僧  
の会（会長藤井真水）編『泰  
国日本人納骨堂建立 五十周年記  
念誌』京都、1987年、41  
43頁）。

日高秋雄氏は、1938年度  
と39年度8月まで日本人会の理  
事長（会長に次ぐポスト）を、

また39年度の8月から残余期間、会長を務め、戦後も日本人会の役員として貢献した。

1971年から79年まで日本人会会長の役にあつた西野順治郎氏（1917-2001）は、『クルンテープ、タイ国日本人会七〇周年記念特別号』（1984年3月刊）56-58頁で歴代日本人会会長を紹介している。この紹介は、『クルンテープ、タイ国日本人会八〇周年記念特



日本人移民之碑（サラブリー県ゲーンコーイ駅近くのゲーンコーイ寺境内に所在）

「明治廿九年移民取扱人海外渡航株式会社扱移民明細表」

(各国とも上段の数字は男性、下段は女性)

	渡航人員 (契約移民)	渡航人員 (自由移民)	帰国 人員	死亡 人員	疾病 人員	受救助 人員	同上帰国 人員	転地 人員	契約中 人員	逃亡 人員	解約 人員	在留続 人員
布哇国	1848 327	562 155	17 2	契23		契17 契 2	契17 契 2		3335 677	158 6	21 1	3357 678
北米合衆国		233 7							296 14			296 14
英領加拿大		83 1							83 1			83 1
徽州		121 1							121 1			121 1
暹羅国	男0 女0	0 0	1 1	6		13 2		5	7 1		4	11 1
浦塩斯德		1664 1	1660 1	4	189	1664 1	279					0 0

日本人第一回移民ノ碑  
日本人第一回シヤム移民山口県  
人鍛本作造氏外十七名ノ靈此地  
ゲンコイニ眠ル  
之等ノ人々ハ一八九四年（明治  
二十七年）岩本千綱氏引率ノ下  
ニ日本人最初ノ移民団ニ加ワツ  
テシヤムニ渡リ農務卿スリサク  
侯ノ後援ヲ得バンコック市ニテ  
米作ニ従事シタガ事志ト相容レ  
ズ時恰モバンコックコーラー  
ト間鉄道敷設に当リタイ国鉄道  
省ドイツ人技師ノ斡旋ニヨリ之  
ニ従事シタ稀有ノ難工事ニ加エ  
未開瘴癘遂ニマラリヤニ冒サレ  
十八名ガ異郷ニ永眠  
之等移民ノ七十年祭ニ本国ヨリ  
仏像一体ヲ勸請シ碑ヲ建立シテ  
靈ヲ慰メ以テ其ノ冥福ヲ祈ル  
一九六六年三月二十一日 泰  
国日本人会

昨年9月に出版された、日本  
人会百周年記念誌掲載の拙稿や、  
本連載で、既に説明しているが、  
上記碑文には、残念ながら聞  
違っている部分も少なくないの  
で、ここで再度確認しておきた  
い。

1928年に23歳の若さで来  
タイし日高洋行を創立した日高  
秋雄（としお、1905-19  
79）氏のむすめである百合江  
さんは、日高秋雄氏が中心に  
なつて日本人会が1966年に  
サラブリー県のゲーンコイ寺  
に慰霊碑を建設した経緯を、次  
のように記している。

「それはすいぶん昔のお話し  
になりますが、昭和十九年（マ  
マ）頃にニューロード近くに面  
田利兵衛「正しくは面田利平」  
さんというせんたく屋（ママ）  
さんをしていた人が父を呼び  
『自分が今まで思っていた事だ  
がとうとう実現出来ずこの事を  
日高君にたのむ』とこのゲンコ  
イ「ゲーンコイ」の山口県人の  
工夫の方のことを話したそう  
です。それは山口県人の日本人  
第一回の移民としてバンコック  
にて、現在のルンピニー公園の  
土地でと聞いておりますが、米  
作をやりましたが失敗し、その  
当時のドイツ技術師の紹介でバ  
ンコック・コラーット鉄道の建  
設の工夫として参加しマラリヤ  
と風土病に倒れ皆んな亡くなつ

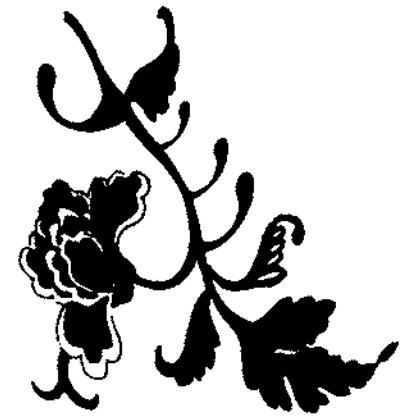


# 日本人第一回移民ノ碑

日本人第一回シヤム移民山口県人鍛本作造氏外十七名ノ霊此地にシヤムコイニ眠ル

嘉永六年八月四年(明治二十七年)岩本千綱氏引率ノ下ニ日本人最初ノ移民団ニ加ワツテシヤムニ渡リ農務卿ヲサケ僕ノ後援ヲ得ハンコック市ニテ米作ニ従事シタガ事志ヲ相容ルズ時恰モバングレーブノ間鉄道敷設ニ當リタイ國鉄道省ノ人技師ノ斡旋ヨリ主ニ従事シタ  
稀有ノ難事ニ加エ米作農務卿ニマラリヤニ置サレ十八名が異郷ニ永眠ス之等移民ノ當年祭ニ本國ヨリ仁像一俤ヲ勸請シ碑ヲ建立シテ靈ヲ慰メ以テ其ノ冥福ヲ祈ル

一九六六年三月二十一日 泰國日本人会



別号』(1993年12月30日刊)1316頁に、直近の10年間分が追加された点を除けば、修正されることなくそのまま再掲されている。残念ながら、西野氏の紹介する戦前部分の会長名、在任時期については完璧からはほど遠い。とにかく、西野氏は上述会長紹介で、三谷足平初代会長に關して、「三谷足平(医師)大正三年(四年)度、明治二十七年にシヤムに渡り、陸軍軍医部長(ママ)も勤め、山口県移民団がケンコイ「ゲーンコイ」にて倒れた際に治療に馳せつけた等功績大」と書いている。筆者は西野氏の生前にインタビューしたことがある縁で、氏

の没後、バンコクの旧宅を訪ねて残された資料を拝見させてもらったことがある。その中に上述の歴代日本人会会長紹介の草稿も見つかった。その草稿には三谷足平について、「明治27年ゲンコイ地区にてコーラットバンコック間の鉄道建設中の山口県第一回日本移民団18名のマラリヤ発病を聞いて直に水牛の背に乗って治療に馳せつけたるも時既に遅く日本婦人1名子供赤子各1名を救助したるのみにて移民団18名死亡せらる(面田利平氏より承る)」と書かれている。西野氏が初来タイしたのは、自伝(西野順治郎「タイの大地と共に」、日経事業出版社、1996年、298頁)によれば1937年7月24日であり、面田は同年9月6日に死去している。面田から直接聞いたのではなく又聞きだと思われる。

面田利平(1870-1937)は、本誌2013年6月で紹介したように、第1次移民32名(又は30名)中の生き残りの一人で、亡くなるまでバンコク

で理髪業を営んだ。面田は、プカヌン金鉱山で働いて死亡した12名(岩本千綱引率の第1次移民)と鉄道コーラット線建設で死亡した6名(宮崎滔天引率の第2次移民、合計18名について墓もない無念さを日高秋雄氏等に訴えたものと思われるが、日高氏も西野氏も、死亡した18名は総て鉄道工夫であつたと勘違いしてしまつたようである。上に引用した第一回移民の碑に書かれている、ゲンコイ地区で死亡した山口県人鍛本作造とは、正しくはプカヌン金鉱山で死亡した鍛本信蔵(45歳)のはずである。

また、碑にいう第一回移民とは、第1次、第2次移民の両方を含んだものと解さねば、数合わない。繰り返しになるが、岩本千綱が率いたのは第1次移民のみであり、第2次移民は宮崎滔天が率いてきた。鉄道建設で死亡した者は、第2次移民の6名だけであり、残り12名はプカヌン金鉱山工夫として死亡したのである。また、本誌2013年12月号

に記したように、6名の鉄道工夫が死亡した場所もゲンコイではなく、同地から6キロ上ったタツブクワーンである。

日本人第一回移民の碑の碑文を事実にして修正すれば、「日本人第1次、第2次シヤム移民、山口県人鍛本信蔵氏外17名の霊、プカヌン、バンコク、タツブクワーンの地に眠る。之等の人々のうち、山口県人12名は1894年(明治27年)末、岩本千綱氏引率の下に日本人最初のシヤム移民団に加わつてシヤムに渡り、農務卿スラサック侯の後援を得て、バンコク市にて米作に従事しようとしたが事志と違ひ、フランス人経営でカオヤイ山系に開山したばかりのプカヌン金鉱山に赴いて工夫として働き1895年8月ごろ病死した。又、1895年10月に宮崎滔天氏が海外渡航株式会社(広島)の代理人として率いて来た、熊本県人から成る第2次移民団員は、恰もバンコクコーラット間鉄道敷設に当り三谷足平氏の斡旋によりタツブク



ワーンで就業したが、稀有の難工事に加え未開瘴癘遂に熱帯熱マラリアに冒され、1896年初めに6名が死亡した。合計18名が異郷3カ所に永眠することとなった。

なお、上述の西野氏の三谷についての記録、「18名のマラリヤ発病を聞いて直に水牛の背に乗って治療に馳せつけた(面田利平談)」ことは、事実関係も錯綜しているが、先月号に述べた当時の三谷の行状からみてもあり得ないことだと思われる。

また、西野氏は三谷がシヤムで陸軍軍医部長の経歴を有する旨述べているが、これもあり得ないことである。仮に、これが事実であれば、三谷はタイ官界において法律顧問の政尾藤吉以上の高官であり、様々な場面で名前が出てくるはずであるが、この時代のタイ側文書のかなりに目を通した筆者の目に触れたものはない。

但し、1903年以降、三谷足平の評価は次第にプラスに転じたことは疑いない。

朝日新聞1903年12月10日号に次の記事がある。

「暹羅国と本邦医士 三谷足平氏(青森県出身)は十数年前暹羅国に渡り夙に同皇室の信任を得既に最高軍医官として朝野の望みを繋ぎ居れるが尚今同国貴族より某医学博士に囑託し本邦医士招聘選任方を申来りたるに付本所千歳町に開業する成田庸逸氏(青森県弘前市)其候補者に選定せられ近々渡暹する事に決せり尚同国にては本邦医士多数の渡航して開業せんことを希望し可及的便宜を与ふる方針なりといふ」

この記事の「最高軍医官」も、前述の理由により誤報だと思われる。しかし、三谷がタイ王室関係者を診察するようになったことは、次の資料から間違いないと思われる。

1909年8月末に、高僧プラタムパーモークが病に罹った時、チュラーロンコーン王の異母姉のグロム・ルアン・サモンラタナシリチュート親王は、プラー・ペート医師を、同王の側室の一人ピアンはプラー・

ピシン医師を、更に大僧正ワチラーン親王(同王異母弟)は、トルコ人医者と日本人医師を派遣して診察させた。このことはチャオプラヤー・ウィットウオンウエイクライ宗教・教育大臣から、摂政ワチラーウット皇太子(チュラーロンコーン王はラーチャブリーに巡幸中)に報告された。同摂政は1909年9月3日付で同大臣に上記文書受領の返答をしたが、その中で「診察に来たトルコ人医師と日本人医師は、名前が記されていないから、有名ではない医師だと思われる。その腕前が信頼できるかどうか」と懐疑的なコメントをしている(タイ国立公文書館文書 No. 5 Rol. 1/5 105)。

筆者もここに日本人医師の名が明記されておればよいのに、と残念に思うが、この日本人医

師は三谷足平のことであると考えて間違いないであろう。その理由は、4年間の時差はあるが、1905年8月のバンコク領事の下記報告によれば、当時において在タイ日本人医師は三谷足平一人しかいなかったからである。

「外国に於て開業せる日本医師の住所氏名取調雑件  
明治卅八年九月十日接受 通商局  
公信第四十四号 受第一二七一

当地に於て開業せる本邦医師の件に於て六月廿二日付送第九号を以て取調方御申越の趣了承致候目下当地に於て開業せる者は左記姓名に有之候間此段御回答

申進候也

明治三十八年八月十五日

在盤谷 領事田邊熊三郎

外務省通商局長石井菊次郎殿

青森県弘前市親方町一番地

當時盤谷府バンモー街在住

三谷足平(外務省記録3-11-1/23)。

1920年7月、高橋バンコク領事は、台湾総督府に提出した、「盤谷に於て日本病院設立希望の件」を内田外務大臣に参考のため送付した。

領公第25号

大正9年7月21日 在盤谷領事

高橋清一

外務大臣子爵内田康哉殿

盤谷に於て日本病院設立希望の件

本件に關し別紙写の通台湾總督府へ及御照会候条右御査閱相成度此段申進候 敬具

大正9年7月21日

在盤谷高橋領事

台湾總督府 高田總務長官代理殿

揮啓陳者暹羅に於ては医療の進歩極めて幼稚にして此方面に於て先進國醫師の助力を必要とする事情は毫も支那に譲る所あらざる是れ當國官民及民間に三十余名の欧米人医師あり外數名の邦人医師開業し居る所以なるべきも是等小數外医の活動が當國医療上の欠陥に對し充分なる補足をなし能はざるは勿論に有之而して盤谷に於ては支那人(中華民國人の外、暹國籍者其の他支那人種にして支那人の生活を営めるものを総稱す)頗る多く就中小店舖は概ね支那人の經營に係れり而して盤谷の支那人は人種に於て思想に於て南方支那の系統に屬し近年支那の國論に響應して動もすれば日貨排斥を試みんとす然れば盤谷市に於て日本側の管理する病院を開き最新の設備を施し優秀なる醫師を派遣し支那人患者を本位とし暹人を副とし当地医療界の欠陥に對し応分の貢獻をなすに於ては啻に仁術の本旨に適するのみならず對支對暹外交上に裨益し

延ては我南洋貿易の發展にも資する所あるべきは疑を容れず又差向き小數乍ら在留邦人が日本病院の新設により多大の安心と便益を得べきことは申迄もなし千九百十九年末に於ける盤谷在留歐米人医師の數十九名内齒科医三名あり歐米醫師の過半は開業医にして他は暹羅政府の傭聘に係り衛生局医官、官立病院の醫師、医科大学講師、伝染病研究所長等たり目下盤谷に於て邦人開業医五名あり何れも暹人及支那人を重要な得意とす暹國內地には十一名の欧米人醫師在留し居り内九名は米國長老教会派遣の伝道医にして他の二名は暹國政府医官なりとす尚内地には右の外 International Dispensary (ロックフェラー財団) 派遣医一名暹國政府の助力を得て十二指腸虫駆除に従事しつつあり

盤谷に於ける病院は左の如し  
盤谷に於ける欧米人經營の病院は St. Louis General Hospital (仏) と Bangkok Nursing Home の二個所にして前者は九名の看護婦と一名の囑託医あり Sisters of Charity の經營に係り人種の如何を問はず患者として收容するが仏領印度支那政府より看護婦一名に對し月五十法の補助金を支出しつつあり Bangkok Nursing Home は外國商館の維持に成り主として欧米人を收容するを目的となせり看護婦三名を置く院付醫師なし  
盤谷在留支那人の維持に成る天華病院なるものあり十數年前十一万五千銖を投じて創設し患者二百人を收容する広さあるも技術上の設備と現代的醫師と

を欠如し今日に於ては苦力合宿所に異ならずと評するものあり  
暹羅側に於ては官立病院は痲瘋「ふうてん」病院、避病院、医科大学付属病院各一個普通病院数個あり外に官立同様の赤十字病院あり赤十字病院医員は悉く暹国軍医なるが官立病院の要所には概ね欧米人医師を使用し居れり暹羅側の私立病院としては元錫蘭人にして当国に帰化せる某医師経営のもの一個あるのみ  
盤谷に於ける人口を仮りに六十万と見積り内支那人は三分の一以上なるべく（盤谷人口に關し信憑すべき統計なし）彼等は商業上の実権を掌握し富力に於て遙に暹人を凌駕し居るも之を

概言するに暹人の多少輕侮する所たり而して暹国官設病院は固より人種の異同を問はず患者を收容すとも難し支那人として之に入院するは聊か苦勞なきに非ず寧ろ一視同仁を標榜する日本病院あらば之に入院することを欲すべく況や人種關係上支那人暹人共に欧米人医師よりも寧ろ本邦医を親むの風あるは確なりされば如斯病院新設の曉には創立後一兩年即同院の存在が普く当地人に知らるる頃は已に財政上に自立し得べきを想像せざるを得ず從て差向き創設費及一兩年の維持費に關し考慮を要する次第なるがその少からざる一部分は当地經濟狀態回復の上は

（昨年七月米輸出禁止に引続き昨冬大凶作の結果目下は不景氣なり）当地有力の支那人及台銀三井支店等に拠出せしむることにも困難と察せらる  
就ては貴府に於て厦門広東の例に倣ひ当地に病院設立の御意向無之哉若し有之に於ては設置せらるべき病院の規模其他に關し調査旁当地日支暹人と打合の爲近き將來に於て調査員を御派遣相成ては如何此段得貴意候  
敬白  
追て御參考迄在当地三谷醫師提出に係る同醫師大正七年一月以後収入月別表新患者月次國別表及新患者疾病系統表を添付致候（添付写略）（外務省記録

「二二二」の「一」病院關係雜件（在外本邦人經營病院の部）第一卷。  
このように1920年には、三谷は領事から資料提供を依頼されるなど、領事館とは友好關係にあったと思われる。19年前には、領事裁判により領事館内の監獄に投獄された三谷ではあるが。  
先月号で見たように、1921年半ばに三谷夫妻は、20数年ぶりに日本に帰国した。三谷は、同年12月15日にタイに帰るために旅券の下付を受けた。その旅券下付記録には、本籍は東京府南葛飾郡寺島村（現墨田区）、族籍は平民、渡航目的は病院經營、と記されている。三谷夫人イネは、タイに同行せず、そのまま東京に留まつたが、1923年4月28日に「大足平看病」のために旅券を取得し、タイに向かった。三谷足平は、1924年7月3日に満64歳で、パンコクで逝去した。当時、妻イネは61歳であった。三谷と同世代の岩本千綱は、1920年末に満63歳で、東京で他界していた。



連載 ④  
パンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXXIII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

先月及び先々月号では、海外渡航株式会社（広島市に本社）の代理人宮崎滔天（寅蔵）に率いられて1895年10月に来タイした、熊本県人20名から成る第2次シヤム移民について、主に宮崎の2著作に拠って紹介した。今回は、より具体的な第2次移民像を求めて、東京の外交史料館に保存されている、海外渡航株式会社関係の資料を中心に見てみたい。

95年（明治28年）10月2日であるから、彼等は宮崎が率いて来た一行20名の一部であることは間違いない。6名の族籍は全員、平民である。なお、第1表に記載されている年齢は死亡時のものか旅券申請時のものかは判然としないが、いずれであれ、来タイ後1年以内に死亡しているもので、その差は1年を超えることはない。付言すれば、この死亡者名簿には、33名が記載されており、6名が暹羅、23名が布哇国、4名が浦塩で死亡している。

第1表は、1897年1月12日付で、海外渡航株式会社社長佐藤岩男が、移民保護法施行細則第23条に依り広島県知事折田平内に届けた明治29年（1896年）中の、同社移民の死亡者名簿から渡航地を暹羅国とした6名のみを取り出したものである。海外渡航株式会社は暹羅移民を1回しか企画したことがなく、6名は全員、渡航日が18

第2表は、タイ国日本人会が1935年7月16日に落成式を行った日本人納骨堂に保存されている過去帳の最初の1、2頁部分である。

過去帳（第2表の冒頭が、現在の「山口県人鍛本作造氏外拾七名」となった時期は、1966年である。既述の通り、戦前から日本人会の役員を歴任し

た日高秋雄（としお）氏は、戦前に第1次移民の生き残り面田利平（1870-1937、山口県大島出身）から、多数の死亡者を出した初期のタイ移民の慰霊を託された。しかし、敗戦によって在タイ日本民間人は全て、自由タイ政権によってパーンブアトーン・キャンプに抑留され、その殆どは本国に強制送還された。自由タイ政権は、連合国の代理と称して日本民間人の私財も接収した。これによつてタイの日本社会は完璧に破壊されてしまった。日本が独立を回復したのち、タイへの渡航が可能となり、日高氏はタイに戻つたが、1960年代半ばに至るまで面田との約束を実行する余裕はなかった。日高氏は面田から慰霊すべき人達の名前や死亡状況を聞かされていたに違いないが、30年近いプランクによつてこれらは失われ、既に初期移民の存命者もいなく

なつていたので、18名が死亡したという伝承を除けば、ゼロから慰霊すべき人達の情報収集を行わざるを得なかった。日高氏は、第1次移民は中国地方出身であつたという話を手掛かりに、山口、広島、岡山県のマスコミを通じて情報提供を求めたところ、死亡した人のひ孫に当たる山口県人から連絡があり、鍛本作造という名を得た。これが当時判明した唯一の氏名であり、過去帳冒頭が現在の文言となつたのである。

本誌2013年6月号に、外交史料館保存の旅券下付表から筆者が見つけた第1次タイ移民者をリストにして掲げたが、第1次移民として1894年末1895年初に実際に渡航した人数は29名（乳児1名を含む、引率者岩本千綱は除く）であり、全員山口県平民であつた。その中の一人に鍛本新蔵（43歳）がおり、筆者は「鍛本作造」と同一

【第1表】海外渡航株式会社級のシャム移民中、明治29年に死亡した6名

旅券番号	氏名	渡航の年月日	死亡の年月日	年齢
43514	島田慶太郎	明治28年10月2日	明治29年4月16日	30年9ヶ月
43477	徳永米作	同上	明治29年4月27日	22年8ヶ月
43487	山下卯三郎	同上	明治29年5月5日	31年1ヶ月
43498	坂本増太郎	同上	明治29年8月6日	41年6ヶ月
43476	田島鉄蔵	同上	明治29年8月16日	25年2ヶ月
43504	馬淵一三郎	同上	明治29年9月29日	17年

(出所:外務省記録382/331「帰国者、死亡者名簿」)

【第2表】日本人納骨堂過去帳最初の1～2頁部分の記載者

氏名	死亡年月	出身地	死亡場所	職業等	死因
山口県人鐵本作 造氏外拾七名	明治廿七、八年 移民		シャム内地 ゲンコイ地区	工夫	風土病
伊藤ユリ子	明治廿九年	長崎市	盤谷税関吏ペロス氏宅		脳膜炎
島田敬太郎	明治廿九年四月	熊本県		鉄道工夫	風土病
徳永米作	明治廿九年四月	熊本県			風土病
吉丸熊一	明治廿九年四月	佐賀市			コレラ
八戸剛一郎	明治廿九年四月	長崎諫早			コレラ
馬淵喜一郎	明治廿九年六月	熊本県	建築技師佐々木寿太郎方		
田島鉄蔵	明治廿九年七月	熊本県	サラデン農事試験所		赤痢
阪本増太郎	明治廿九年八月	熊本県	三谷足平方		コレラ
山下卯三郎	明治廿九年	熊本県	於シンガポール		風土病
池田興作	明治廿九年	熊本県	盤谷発船国乗船中		
ケイ子	明治廿九年	長崎県南高来郡	村上方		
木島某	明治卅年			稲垣公使給仕	赤痢
ハナ子	明治三十年	長崎県南高来郡	村上方		
梅子			盤谷ニューホテル		

(出所:『日本人納骨堂過去帳』、但し筆者が項目を設けて分類した)

信

人物と理解した。  
また、岩本千綱が率いた第1次移民から「鐵本作造氏外拾七名」、即ち合計18名が死亡したという記述は間違いであり、第1次移民の死亡者は12名、それに第2次移民の6名(即ち第1表に名前がある人)も混入して18名となつてしまつたことを、筆者は何回か繰り返し述べてきた。12名が死亡した場所はゲンコイではなく、ブカヌン、金鉱山もしくは同金鉱山からバンコクに逃げ帰つたのちである。それ故、過去帳冒頭部分をより正確に書き改めるとすれば、「山口県人鐵本作造氏外拾一名、ブカヌン金鉱山工夫として就業明治28年8月9月に熱帯熱マラリアで死亡」となる。

このように、過去帳の冒頭部分の記述内容は事実と余りにもかへ離れているので、事実を知らない人が伝承に拠つて後年付け加えたものである。それが1966年に初めて加えられたものなのか、1966年以前にも存在した何等かの文言を、同年に修正追加したものなのかは判らないが。

冒頭の記載を除くと過去帳は、明治29年の死亡者から始まつている。第2表に名前がある女性、全員が唐行きさん(当時の用語では醜業婦)だと考えられる。伊藤ユリ子はタイ政府雇いの西洋人の妾になつた、所謂ラシャメン。ケイ子、ハナ子はバンコクで村上が経営した娼家の娼婦。村上は名を市松といひ、バンコクの日本人娼家の主人である(朝日新聞1895年12月8日号)。ケイ子、ハナ子の出身地である長崎県南高来(みなみたかき)郡は島原半島にかつて存在した郡であり、その旧郡域は、現在の島原市、雲仙市、南島原市である。島原は熊本県ととも、唐行きさんの主要な出身地として知られている。最後に記されている梅子もホテルと称して日本人が経営した娼家の娼婦である。バンコクにおける日本人の娼家は、ホテルの看板を掲げていた。

1915年にバンコクを視察した日本人は次のように述べている。  
「盤谷の邦商、シャムに於ける邦人は其大部分盤谷にありて地方には極めて少数である、盤谷にも以前は百人以上もありたる由なれど現在は僅に六十人、内二十人は醜業婦(醜業婦)なるも他は比較的落着いた生活をしてゐる。写真屋が五軒、医師が二人、齒科医が二人、雜貨店は大小八軒程ある、青楼は英領土の如く公然許可されず、総てホテルの看板下に醜業を営んでいる、私の如きも最初車夫に日本人のホテルがあるかと問へば有りとなつたから然らば其処に行くと命じた、着いて見れば成程ホテルの看板はあるが妙齡の婦人が数名もゴロゴロしている、サーロン姿と云ひ口調と云ひ到底真面目の営業人とは見えぬ、ハテ不思議と思つてゐると、ホテルの女が此処は女郎屋だといふ、これにはしたたか閉口したが他に日本旅館なきままだむ

さて、第2表中の男性で素性



が判るのは、八戸剛一郎と木島某である。八戸は、山崎喜八郎がバンコクに開いた桜木商店の経営のため、宮崎滔天一行に加わって商品を携帯して来タイしたが、到着後数日にして当時大流行中のコレラで急死した。木島某は、外交史料館保存の旅券下付表には「木嶋磯吉 稲垣井理公使従者 新潟県平民」と記載されている。池田興作は20名の第2次移民の1人で、後述1897年1月11日付の海外渡航株式会社の上申書では英国に移転したと記されているが、この英国とは英領シンガポールの意味のようである。宮崎は『三十三年の夢』に、移民の一人が自殺したと書いているが池田のことであろうか。吉丸熊一については、よく判らないが、残り6名の男性は、第2次移民の死亡者であり、第1表の6名と驚く

ほど一致している。死亡月に少々異同がある外は、馬淵一三郎と馬淵喜一郎の名が微妙に違っているだけである。宮崎は前述書に「病移民は、六人までも南校生「八戸剛一郎」と前後して逝世せり」と書いていて、第2次移民の6名は1896年4月に前後して死亡したような印象を受けるが、実際は、彼等の死亡した月日も、場所も死因もバラバラである。岩本千綱が連れて来た第1次シヤム移民の12名が、大体同じ時期にプカヌもしくはバンコクで主に熱帯熱マラリアで死亡したのとは大きく様相が異なる。1896年4月に死亡した島田、徳永の死因である風土病とはマラリアのことであろう。同年8月に田島は「サラデン農事試験所」で赤痢で死亡している。農事試験所と言えば恰も政府機

関のように聞こえるが、これは1896年雨季に宮崎滔天一行がサーラーデーンのスラックモントリーの土地を借りて稲作を試みた、にわか百姓の試作地を指している。因みに、その場所は、シーロム通を挟んでタニヤの向かい側にある名門セント・ヨセフ・コンベント学校の現在の敷地に当たると思われる。同校はスラックモントリーが1896年にカトリック教団に学校用地として無償で寄付した9ライの農地（バーン・サーラーデーン自邸の隣接地）に建てられた。第1表、第2表、相互に参照されることなどあり得ないはずの二者が、第2次移民6名の死亡者名について、どうして驚くほど一致しているのだろうか。第1次移民の死亡者12名については、日本人納骨堂過去帳に、後年記載された不正確な情報を除けば、氏名さえも記されていないのに、第2次移民の死亡者6名については、どうして詳細な情報に記載されているのだろうか。これに答えるためには、この

過去帳成立の経緯を検討する必要がある。過去帳自体からは、だが、何時記録を開始したのかという情報は見いだせない。明らかなのは、過去帳には明治29年（1896年）の死亡者から記載されていることである。1913-1914年に成立した日本人会も、1912年に始まった日本人墓地設立のための積立金の会も、1896年には未だ存在していない。但し、筆者が日本人会百年史に記したように、1897年にはバンコクの日本人は日本人倶楽部を持っていた。また、タイ国立公文書館に、1903年4月20日に小松緑（1862-1942）臨時代理公使が、領事の資格で、バンコクで死去する日本人も増加してきたので日本人墓地が必要になったとして、タイ政府に墓地用地を要望した文書が保存されている。その中で、小松は「現在在留邦人は80名を越えている。日本臣民のタイ入国は10年以上になるが、死亡者も少なくない。彼等はそれぞれ異なる無名の場所に埋けられている。今

や、日本人コミュニティは墓地を熱烈に求めている。日本人は殆ど仏教徒なのでワットで火葬することに異存はないが、墓石を立てることが出来る場所が欲しいのだ」と述べている。外務省から報告を受けたチュラローンコーン王は快く国有地を無償で、早急に下賜するように、宗教・文部省に指示された。タイ側が最終的に提示した場所は、ラーマ一世通に面し、現在の国立競技場からも遠くはないワット・チャイモンコンである。ところが、小松は現地を自ら視察することもなく9月初めまで放置していた上、宗教・文部省を訪ねて、提示された土地はデコボコしており、整地工事に2000バーツが必要だが、その費用はないので手をかけずに墓地として使える土地が欲しい。何れにしても11月に稲垣公使が帰任するので、それかそれらにしたいと返答した。報告を受けた国王は「良いのが欲しい」といいながら僅かの金も出せないのか」とコメントされ、日本人墓地下賜の件は沙汰止みとなってしまった（タイ国立公文書館 Ro.5 No.4463）。

小松は帰国後官を辞し、政治評論家となった人物である。彼は在タイ日本公使館二等書記官在任期間が1年そこそこであるにも拘わらず、自分は小村寿太郎外務大臣と個人的に親密であると吹聴して、タイ政府が自分へ叙勲するように熱心に働きかけて実現させた（同上 No.413/19）。彼が同じ程度の情熱をもって日本人墓地用地取得に努めていれば、日本人会は納骨堂ではなく、立派な墓地を都心に持つていた可能性が有る。バンコクの日本人社会が日本人墓地の必要性を認識し始めた1903年頃には、タイの土と化してしまった同胞の鎮魂の念も強くなり、日本人物故者名を判明する範囲で集約したに違いない。これが過去帳の原形となり、日本人会の成立とともに整備されたと思われる。筆者の推測では、死亡者名等を記録に留め、過去帳として整備した人物は、柳田亮民（熊本県出身）を以て外にはいないと思われる。柳田は日本では僧籍にあったこともある人物で、

中国大陸で活動した釈元恭和尚に触発されてタイ行きを決心し、宮崎率いる第2次移民20名の1人として来タイした。第2次移民の死亡者6名の姓名、死亡状況の詳細が過去帳に記されているのは、柳田が同行者であった彼等をよく知っていたからであろう。柳田は日露戦争が始まると、稲垣満次郎公使に見込まれて、ロシア艦隊の動静調査のために馬來半島に派遣されている（外務省記録 5.2/20「日露戦役関係 露国波羅的海艦隊東航関係 一件 第五巻」）。1920年には、彼は日本人会の書記の職にあったことが次の記録から判る。「バンコック日本人会（会員数128名内女29名）会長・水野泰四郎（台湾銀行出張所支配人）、理事・山口萬吉、木下京、

土井節、横山和十郎、神谷信男、山本雅一、大場忠、磯部美知、土井孫次郎、大槻二雄、大谷静一、書記・柳田亮民」（伊藤友治郎『南洋年鑑 1921』、合資会社日南公司南洋調査部、東京、1920年11月発行、67頁）。日本人納骨堂過去帳の昭和20年の終戦後の項に「柳田 日本人会書記」とのみ記された死亡者がいる。名前、死亡年月日、年齢、出身地等の情報は欠落しているが、この人物は柳田亮民であると考えられる。そうであれば、柳田亮民は1895年に来タイし、1945年に死亡するまで半世紀の間、在タイしたことになる。柳田がどれくらいの期間、日本人会書記を務めたのかは不明であるが、彼はその在職時に、過去帳を管理し、その整備に努めたはずである。なお、この外に柳田亮民に言

及している資料として、波多野秀（1900年広島県福山生、士族、1915年末来タイ、チェンマイ在住）の『タイ国在住六十年、想い出すままに』（1974年10月15日）がある。同書は僅か22頁のガリ版刷りの小冊子であるが、「横浜の野崎洋行がシヤムに支店を出すので支店長、柳田亮民、波多野章三（筆者の兄）の三人がバンコックへ上陸したのは明治二十五年（1892年）の春頃、日清戦争の始まる二年位前のことでした」と書き出している。この小冊子は、矢野暢『南進の系譜』（中公新書、1912頁）が、「この手記のかんりの部分が事実を正確に伝えていると思う」と評価し、上記引用の書き出し部分や、柳田が後から来タイした磯長海洲の写真屋開業のために借家を探したこと、柳田が上海からきた日本人職業婦の世話をして「ホテル」の開業を助けたことを事実として記している。

さて、死亡した6名を含む第2次移民について、宮崎滔天の著作以上に具体的な情報を、『海外渡航株式会社業務関係雑件』全6巻（外務省記録382/39）のなかに見出すことができる。海外渡航株式会社は、1894年10月20日に移民取扱人営業を許可され、14年余営業後1907年12月7日に廃業届を出し、同年12月30日会社解散した。移民取扱人は、1894年4月13日官報公布の移民保護規則、更に同規則に替えて1896年6月1日に施行された移民保護法により、行政による厳格な監督を受けた。移民取扱人である海外渡航株式会社と、監督官庁たる外務省通商局および広島県（内務省）との間のやりとりが、

上記文書全6巻に保存されている。このうち、第2巻と第3巻に第2次シヤム移民に関する文書が含まれている。まず予備知識として、移民保護規則（1894年4月施行）と移民保護法（1896年6月施行）の異同について見ておこう。両者ともに、①移民取扱人（移民会社）は移民と書面契約（契約期限、渡航周旋料、移民が疾病等困難に遭った場合の救助・帰国手続など）を為すを要し、②移民から契約書に明記された渡航周旋料（移民保護規則では「渡航周旋料」、移民保護法では「渡航周旋料若しくは手数料」）以外を徴収することは禁じられ、また、③移民取扱人が代理人を置く場合には、監督官庁に届け出て許可を得なければならぬ点に同じである。

監督官庁は、移民保護規則でも移民保護法でも、基本的に内務省と外務省であるが、後者は外務省の権限が強化されている。移民保護規則と移民保護法の間で大きく異なる点は、移民保護法は、移民取扱人は移民を送った土地に、代理人等を在留させるべきことを義務化したことである。付言すれば、移民保護規則も移民保護法も、移民を二つのタイプに分けている。即ち、移民取扱人の渡航周旋を受ける移民と、移民取扱人の世話にならない移民の二者である。後者の移民に限り、移民保護規則は、疾病その他の困難に遭った場合、救助又は帰国させるための費用を保証する身元引受人二人以上を定め、旅券を出さない地域を指定した。指定されたのは、移民者が多いと想定された地域である。移民保護規則では、北米合衆国、カナダ、徽州諸島、布哇島の4カ所が指定されたが、移民保護法では、これに暹羅国が追加され5カ所となった。これは当時タイが移民先として、如何に有望視されていたかを示す証左である。

上述外務省記録文書全6巻のシヤム移民に関する、監督官庁と海外渡航株式会社との間の主なやりとりは、移民保護法で義務化された、代理人の移民地在留に關してであった。

1895年8月1日付で、海

外渡航株式会社はシヤムおよびウラジオストク移民との間の契約書の雛形を監督官庁に届けた。

契約書は両地行きとも同一であり、渡航周旋料は10円で契約期間は3年。渡航費用は移民の全額負担。海外渡航株式会社は移民に代理人を付け、移民に仕事を周旋する義務がある。代理人は移民が疾病その他困難に陥った場合、救援・帰国を助ける義務があるが、費用負担者は移民（又は保証人）自身である。この契約は、移民保護規則施行時に結ばれている。移民保護規則では代理人の移民地駐在は義務付けられていなかったが、契約内容は3年間に亘って代理人がシヤムに駐在し、移民を援助するというものである。

移民から10円の渡航周旋料を徴収しただけで、3年間代理人を置いて彼等の面倒を見ることが営利事業として成立させるために、多人数の移民を送り出すか、移民数は少なくても代理人への支払を極端に低く押さえることができることが必要である。シヤムと同じ頃実施した、ウラジオストク移民（シベリア鉄道建設工友として）は前月号に示したように1665人も多人数を送り出している。シヤムの場合、かつて指摘したように、将来の有望移民先として採算を度外視した実験移民であつた側面もあるが、当初の予定では岩本千綱を事実上の代理人にするので代理人経費は殆どゼロと見積もっていたのではないだろうか。

移民保護規則第13条に従い、海外渡航株式会社は、代理人名を広島県に申し出て、許可を得た。広島県知事は許可した、ウラジオストクおよびシヤム行きの代理人名を、1895年8月14日付で次のように外務省通商局に通報した。即ち、

廣島県蘆田郡常金丸村 露國浦潮斯徳 永久通義  
廣島県佐伯郡石内村 暹羅國盤谷府 沖村亮造

海外渡航株式会社が届けたシヤムの代理人、沖村亮造とは聞き慣れない名前であるが何者なのであろうか。1895年8月半ばは、岩本千綱が海外渡航株式会社に依頼して募集した移民を率いて渡航間際であつたはずなのに、どうして代理人が岩本ではなくは沖村となつていたのであろうか。

1896年12月11日付で、藤

井三郎外務省通商局長は折田平内広島県知事に、沖村亮造は既にシヤムから日本に帰国していると伝承しているが、事実かと問い合わせた。

96年6月1日から施行された移民保護法は、移民取扱人は移民地に代理人を常駐させることを義務付けていた。海外渡航株式会社が1895年10月に実施したシヤム移民は3年契約なので、同社は1898年8月まではシヤムに代理人を常駐させる義務があつた。シヤムに代理人不在であれば、違法である。

外務省が同社のシヤム代理人を沖村亮造として、問い合わせた理由は、広島県は、同社が沖村から宮崎寅藏（滔天）に代理人を変更したことを外務省に通報していなかったためである。広島県は外務省の問合せを、海外渡航株式会社に伝え、12月18日付で得た同社の回答を、同月22日付で外務省に返し、「海外渡航株式会社暹羅國派遣代理人沖村亮造に關し御照会の趣了承同人儀は暹羅國に出発の直前神戸港にて本年「1896年」四月十九日病死致候旨同社より





申出候間以了知相成度」と伝達した。

これを受けた外務省は、次のような厳しい反応を示した。

「明治廿九年十二月二十八日発遣 送第492号

外務省通商局長藤井三郎

貴管下海外渡航株式会社通羅國派遣代理人沖村亮造義病死の義に付本月22日付内一坤第4799号を以て御回答之趣了承同人は同国へ向け出発の途次本年4月19日神戸港に於て病死せしにも拘はらず同会社は空しく今日まで届出さずしか或は届出たるも貴官より通羅國に有之候哉宛に角斯く緩慢に付し候ては真に不都合の次第と存候元来同会社の取扱に係る移民は目下同国に在留せるにも拘はらず代理人を置かざるは固より法律の許さざる所に有之候然るに其後未だ同国へ派遣すべき代理人を許可せられ候こと更に御通羅無之右は如何に有之候哉承知致度就ては至急御取調之上何分の御処置相成候様致度此段及御照会候也。

を十分認識しており、かつ1896年6月に代理人宮崎寅藏が突如帰国して以来、広島県から許可を受けた正規の代理人が不在であることは隠しようのない事実であつたので、外務省が代理人沖村亮造の名を出して来たのを幸いとして、1896年4月に沖村を渡航させようとしたが渡航直前に神戸で死亡したと虚偽の言い訳で誤魔化そうとしたのである。広島県の担当者は、海外渡航株式会社の言い訳をそのまま上記のように12月22日付で外務省に伝達した。

以て御認可相成候処同人義病氣に付更に同年九月中宮崎寅藏を代理人とし御認可を得同年十月二日移民廿名引率し本邦出發該國盤谷府に派遣し移民の業務に就く周旋を為致置候其後沖村亮造明治廿九年四月十九日死亡仕候此段上申候也

吉、山下萬次郎、松村平六、田中富次郎の四名は「3年契約を」解約の上新嘉坡に移転し馬淵喜作同人妻ワカの二名は客年十二月廿七日帰国し目下同地に残留して就業するものは僅かに七名に過ぎず然れども彼等は皆安全に夫々就業仕居候尤も客年六月廿五日同國農商務大臣へ宛て百円の保護金を支出仕候事有之候得共是れ病氣の爲め困難に陥りたるが故に御座候爾後同国へ移民を渡航せしめしこと無之將來も同地へは移民を渡航せしめ不申方針に御座候如斯有様なるを以て本社は残留移民に対し其帰航費は勿論尙相當の報酬を与へ帰國せしむるの得策なるを以て種々勧誘仕候得共如何せん該移民等は自由渡航者にして本社に申込を拒絶仕候故無止代理人をして其保護監督を為致置候折柄同國派遣の代理人宮崎寅藏は本会社へ無届にて先般帰國し客年

十二月二日付を以て辭任届を差出申候依て本社に於ては過般上申仕置候如く爾後適當なる代理人選定中に御座候此段上申仕候也

明治三十年一月十一日  
海外渡航株式会社 社長 佐藤岩男

廣島県知事折田平内殿

同社の上申書から第2次シヤム移民20名中13名の氏名が判明する。このうち死亡した者は、第1表の6名に加え、前述のように池田興作である。4名が3年契約を解除してシンガポールに移動、2名が帰国した。

を尽くしているのかどうか目こぼしをして欲しいと言うのが上申書の主旨のようである。しかし、上申書は代理人の宮崎が96年6月1日に早々とタイを発ち、半年以上に亘って代理人が不在になつてゐる事実を曖昧にしている。

上申書を転送しただけで、何のコメントもしなかつた広島県の対応に、外務省の担当官は、納得しなかつた。担当官は上申書の曖昧な部分を衝いて次のように疑問を呈した。1896年4月には宮崎が代理人としてバンコクに滞在しているはずなのに、どうして沖村を二重に代理人として派遣しようとしたのか。沖村が出発前に神戸で死亡したというのなら、どうして代わりの代理人派遣の通知が外務省になされなかつたのか。1895年9月に広島県は宮崎に代理人の許可を与えたというが、広島県から外務省には通知されず、本邦に宮崎は代理人として移民に同行したのか。1896年6月には宮崎が代理人としてタイに在任しているはずなのに、どうして農商務大臣に100円を送つて保護を依頼する必要があつたのか。

「殊に宮崎寅藏に対し代理人認可の義は竟に「広島県から外務省に」御報告なきのみならず同会社より届出たることは果して事実なるや否や「広島県の」御意見も可有之等と存候然るに此際突然同代理人の帰國を報ぜられたるは或は事実を隠蔽し曖昧に付し去らんとするの所為にあらざるや大ひに疑を存する所に之候左れば内一坤第205号及別紙「上申書」共に一も信を置かざるは此の如き有様にては移民の取締上及び移民の保護に關し眞に遺憾なき能はざる次第と存候抑も同会社「海外渡航株式会社」は昨年浦潮行移民に關し失敗ありしのみならず近來同会社の所為に關して世評最も悪しき様聞き及び候折柄斯かる場合も有之聊か以て世評を信じ得べき義と存候宛に角右に關し充分御取調之上詳細の御回答煩度將亦同会社に対しては速かに何分の御処置相成仍ほ将来最も嚴重に御取締有之度」。

外務省の厳しい叱責調の要請に、同年2月27日付で広島県は



派遣代理人を認可し同十月二日午前第六時英國船チャンシヤ号に搭し移民二十名を引率し神戸発同十七日盤谷府着後同人在留中移民の疾病に罹りたる救済費に不足を生じたるを以て該國農商務大臣たる某儀より若干の借替金及び同人一時帰朝を思立ち其不在中同様の場合の手当として金百円を帰着後直に送達すべきことを約し昨年六月一日同府出発突然帰社送金方申出たるに依り同会社は直に再渡航方を示談し一回金百円を送付したる等の事實は在外國よりの信書其他に依り相違なきものと認め候然るに同人は以来熊本県に在りて渡航中会社より受取る手当金等不当の要求を為し会社は之に應ぜざるに依り不満を生じ遂に十二月二日に至り辞任届を出したる始末に付辞退報告若くは後任代理人派遣を遷延したる事實に有之候

一 沖村亮造を派遣せんとせし事由

明治廿八年八月九日同國派遣代理人認可を与へ出発の期に臨み病氣に罹りたるを以て無止前項

の如く官崎寅藏を更に代理人と為し派遣したるに最初より沖村亮造を派遣すべき目的なるを以て交代せしむべき見込にて出発の直前又不國神戸市に於て病氣に罹り遂に諏訪山吉田病院にて昨廿九年四月十七日死亡せしを以て官崎寅藏を其俟在留せしめんとしたるに前項陳述の通突然帰朝に付再渡航を示談したるものに有之候。

海外渡航株式会社が最初のシヤム行き代理人として、1895年8月に広島県に居けた沖村は、出発直前に病に罹り、5ヶ月後の1896年4月に死亡したという。沖村が死亡したという吉田病院は、1895年8月に岩本が急病(腸チフスと言われる)で入院した病院でもある。

さて、沖村亮造と岩本千綱の關係は如何。筆者は、沖村は岩本の身代わりである架空の人物か、實在していたとしても唯名義を貸しただけの人物だと推測する。海外渡航株式会社が、岩本との間に何等問題が生じていなかった1895年8月初めに

おいてさへも、岩本の名を代理人として表に出せなかつた理由

は、移民保護の監督官庁、外務省通商局の真剣な仕事振りを見れば一目瞭然である。

岩本千綱は、1894年末に

移民保護規則に違反して第1次シヤム移民を強行した前歴があり、それは外務省担当者には周知の事実であつた。当時岩本が設立を主導していた東洋移民合資会社の認可も、岩本の存在故に外務省に阻まれていた。岩本は、第2次シヤム移民募集に關しても、新聞等から糾弾されていた。仮に広島県が岩本千綱を代理人として許可したとしても、その通知を受けた外務省から強い反対がでることは明らかであつたのである。

また、旅券下付表に欠落が多いことは承知の上で、同表にシヤムを渡航先とした沖村亮造の名が見いだせないことも沖村架空説を補強する一根據として挙げるべきであろう。

ところで、海外渡航株式会社が、官崎に代わる代理人派遣の免除を求めて1897年3月25日に、外務大臣に嘆願書を出して曰く、

「本会社は去明治廿八年七月十

六日熊本県移民柳田亮氏外拾九名暹羅國渡航企望に依り三ヶ年間保護の契約を以て同年拾月二日代理人官崎寅藏をして引率せしめ該國へ渡航為致各自移民を業務に就かしめたるに其後移民武拾名の内拾三名死亡又は移民勝手に移民地を転じ或は帰國する等にて目下残員は僅かに七名に有之該七名は悉く暹羅國盤谷府に在留し商家に雇はれ労働致居候者に有之候処代理人官崎寅藏は本社へ無届にて客年六月中帰朝し直に再び渡航する筈なるに突然同年十二月二日付にて代理辞任届を差出たり……該國の情況を顧みるに殖民的多数の移民にあらざれば其効を奏せざるに付僅々たる自由移民は將來に目的無之目下僅に七名の為め代理人を派遣するは非常の迷惑を感候……最初依頼を受け該移民を取扱たる縁故ある本邦人岩本千綱も該國在留致居代理人派遣せざるも法律上の責任を怠る如きこと無之候間何卒代理人派遣の義務特別の御詮議を以て免除せられんことを企望仕候此段謹て奉歎願候也」。

連載 ④  
パンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXXIV

1895年半ば第1次日本人

移民が、岩本千綱・石橋萬三郎らの暹羅殖民会社との關係を断ち、プカヌン金鉱山を經營するフランスの会社と直接雇用契約をすることにした際、石橋は移民たちがフランスの保護下におかれることをフランス領事館に要請した。これを奇貨としてフランスは日本外務省に働きかけ、1895年9月14日より在タイ・フランス領事館が、在タイ日本人の保護を担当することになった。

そのことを示す、日本政府の文書には次のものがある。即ち、1895年9月16日付で内閣書記官は各大臣に「暹羅國在留帝國臣民の保護を仏國政府に依頼したる件、右回覽に供す」として、西園寺外務大臣から伊藤博文内閣総理大臣に宛てた、同年9月14日付の次の公文を回覽に

供した。

「暹羅國には未だ帝國外交官並領事官派遣の運に不至候処同國在留の本邦人より仏國政府の保護相受度旨願出たる趣を以て先般在本邦仏國公使來省の上下に付本國政府より訓令を受ける旨申述同國在留民の員數等問合せ候其後和蘭國弁理公使よりも同様の件以書翰申越候得共仏公使より既に開談有之候際付在暹羅國帝國臣民の保護は之を仏國政府に依託するを適當と認め先づ在仏曾根公使に電訓致し同國政府の意向を探候処同國政府は我依頼に應ずべき事に決したる趣回電を得候に付更に公文を以て照会せしめ同政府より右に對し承諾を表し其次第を在暹羅國臣民代表者に通知したる旨回答を得たる趣曾根公使より申越候右に付和蘭國弁理公使へは相當の謝詞を述べ來意断り置候此

段及報告候也

明治二十八年九月十四日

外務大臣臨時代理

文部大臣侯爵西園寺公望

内閣總理大臣侯爵伊藤博文殿

(國立公文書館、公文雜纂・明治28年・第8卷・外務省3(アジア歴史資料センターサイト検索)。

パンコク・タイムズの1895年10月24日号は、在タイ・フランス公使館が10月21日(月)に在タイ日本帝國臣民宛に掲示した、ドウフランス弁理公使の次の告示を掲載している(本号写真参照)。

「フランス弁理公使は、暹羅に居住する日本帝國臣民に公示する。フランス共和國政府からの訓令および日本外務大臣侯爵西園寺からの通知によれば、日本帝國政府の要請により全ての日本臣民はフランスの保護下に

置かれた。日本臣民は何時でもフランス總領事館に出頭して、保護民登録証を受領することが出来る。」

在タイ日本人が、フランス領事から保護民登録証を受領したことは、第2次移民20名を率いて1895年10月17日にパンコクに到着した、宮崎滔天の遺品からも確認できる。

宮崎滔天の遺品を實際に調べた三木民夫氏が、そのなかに、1895年の「パンコクフランス總領事發行身分証明書」があることを確認している(三木民夫「宮崎滔天における『支那革命主義』の確立——『暹羅殖民』活動を中心に」『民衆史研究』第12号、1974年5月発行、200頁)。

宮崎滔天は、その豪傑風の容貌からは想像できないような、細心、几帳面な人であつたよう

村嶋英治

早稲田大学アジア太平洋研究科教授

## THE JAPANESE IN SIAM.

The following notification was received and posted in the French Legation on Monday:—

The Ministre Resident of France intimates to the subject of the Japanese Empire residing in Siam that according to instructions received from the Government of the French Republic and a communication received from His Excellency the Marquis Suizoni, Japanese Minister for Foreign Affairs, all Japanese subjects are at the request of the Imperial Government placed under the protection of France. Japanese subjects can present themselves any day at the Consulate General of France to receive their papers of registration.

(Signed) A. DEFRANCE.

在タイ日本人に保護民登録を呼びかけるフランス公使の告示  
(バンコク・タイムズ 1895年10月24日号)

で、中国革命家の多数の書(秘  
密に属するものは当然処分され  
ているが)だけではなく、細々  
した物も大切に保存している。  
考えれば当然の話で、官崎に  
のような資質がなければ、孫文  
を始め中国人革命家から重宝が  
られることもなかったであら  
う。

官崎が残した遺品は、東京池  
袋の戦前の木造家屋に、孫に当  
たる藤本(ふき)さん(官崎龍  
介と柳原白蓮との間の長女)と  
ひ孫ご家族が、大切に守ってお  
られる。藤本さんと結婚し、官  
崎家の養子になった男性(故人)  
が、早稲田大学の理工学部で教  
授であつた縁で、滔天の遺品の  
一部が早大に寄託されるという  
話(実際には成立しなかった)  
があり、筆者も昨年の夏に、ご  
自宅を訪ねし遺品を拝見する機  
会があつた。

フランス領事に、保護民とし  
て実際に保護を求めた在タイ日  
本人としては、「*protegees*」と  
いう日本のサーカス団の長がい  
る。日本語名にローマ字のエル

を用いた奇妙な表記ではある  
が、これが正しい自称であるこ  
とは、1895年10月末の数日  
間バンコク・タイムズに、  
"Japanese Takalagawa Troup"  
という名で、「団員の病のため  
10月29日(火曜)夜9時開演ま  
で延期」(バンコク・タイムズ  
1895年10月26日号など)  
と広告を出していることから間  
違いない。このサーカス団(タ  
イ語は *karaw*)は、どのよう  
な曲芸を出しものにしたのか、  
抑もどのような旅芸人であつた  
のかは、今のところ皆目判らな  
い。グーグル・ブックスの検索  
から、1895年刊行の  
"The Selangor Journal" "The  
Takalagawa Troupe of Japa-  
nese performers" がクワラル  
ンプールで上演したこと、その  
2年前にも上演していることが  
記載されていることが判るだけ  
である。

5年11月15日夜に事件が生じ  
た。

1895年11月16日付で、  
Jos. de Pina フランス領事が、  
バンコクの警察を掌る畿内大臣  
ナレート親王宛てに次の書翰を  
送った。即ち、"M. Takalagawa,  
Director of the Japanese  
Circus, French Protege" の申  
出によると、11月15日夜サナ  
ムルアンの日本人サーカス団の  
テントを警備していた警察官  
(下士官クラス)のナリー・レッ  
クが、サーカス団の楽屋から上  
着やスーツを盗んだ。上着の中  
には、銀の鎖のついた金時計と  
2枚の香港上海銀行券、10パ  
ーツ、5バーツのシヤム貨幣が  
入っていた。また、別の団員は  
スーツを盗まれた。これにはイ  
ギリス籍のムスリムで、イギリ  
ス公使館の通訳イブラヒムとい  
う証人がいる。また、警備の警  
官と兵士が中をのぞき見しよう  
としてテントに大穴を開けたう  
え、彼等が投げ入れた石が、団  
の雇員(ムスリム)の頭に当たっ  
てけがをした。レックに盗んだ

物を返還させ、また負傷者に補  
償を求める、と(タイ国立公文  
書館文書 Ro. 5 No. 52, 517)。  
フランス領事は、日本のサー  
カス団長をフランスの保護民と  
明白に記している。この団長は、  
フランスが在タイ日本人の保護  
を引き受けたことを知って、フ  
ランス領事に訴えたものである  
う。なお、タイ側公文書では団  
長名の表記は混乱しており  
"Takalagawa" 若しくは "Takalagawa"  
と書いた文書もある。  
畿内大臣はブラ・アナン警察  
部長にイブラヒム証人とレック  
を尋問させた。証人はレックが  
布の様な物を持ち出したのは見  
たが、時計などが入っていたか  
どうかは不明だと証言し、一方、  
レックは否認した。警察部長に  
は、決定をする権限はないので、  
原告(日本人)と被告の両人を  
第2ボーリサバー「バンコクに  
3カ所あつた、タイ側の裁判所  
自由刑6箇月以内の軽犯若しくは  
係争価額200バーツ以内の民  
事事件を担当」に連れて行った。  
原告は、被害総額は202バー

ツだと申告したところ、同裁判  
所は訴訟金額が権限をオーバー  
しているという理由で受理しな  
かった。そこで11月29日に、警  
察部長は経緯を記した文書と  
もに外国事件裁判所「治外法権  
を享有する外国人が原告となっ  
てシヤム法管轄権の下にある者  
と争う、タイ側の裁判所」に送  
付した。

しかし、外国事件裁判所も取  
調調査が作成されておらず、手  
続法に反するので受理できない  
と受け付けなかった。12月26日  
になつても、司法大臣は、もし  
日本人が手続法に従って訴えれ  
ば、審理すると畿内大臣に答え  
るのみであつた。  
当時タイでは近代裁判の真

似事が開始されたばかりであつ  
た。タイ語も法律知識もなく、  
頼りにできる法律顧問もない  
日本人がタイ法廷で争うことは  
実質上不可能であつたであら  
う。加えて、サーカス団はいつ  
までも在タイしている余裕もな  
く、遂には泣き寝入りになつた  
ものと思われる。

ところで、フランス側は日本  
人を保護民として遇するのであ  
るから、タイの裁判所に頼らず、  
フランスの領事裁判所で審理す  
ることができたはずである。畿  
内大臣が、最も恐れたことは、  
この点である。しかし、フラン  
スは領事裁判によつて日本人の  
利益を守るところまでは進まな  
かった。当時タイ政府との間に、





フランスが保護民とすることが出来る範囲に關して、大きな見解の違いがあり、両国間の重要な紛争の種になつていたこと、それに、被疑者がれつきとしたタイ政府官吏である警察官であつたことも、フランス側が手控えた理由であらう。サーカス団長は、盗まれた物を取り返すことができれば良かったので民事的な請求に終始した。それでも、タイの兩裁判所は管轄権外であるとか手続きが正しくないとかいう理由を付けて受理しなかつた。タイ側が、窃盗を否認した警察官を刑事事件で調べたかどうか、不明である。筆者は、この事件がバンコク・タイムズに報じられていないかどうかを調べてみたが、見つからな

かつた。

官崎滔天が、フランス領事館に出頭して、身分証明書(保護民登録証)の発給を受けていることから、彼と關係ある日本人の多くも同様の発給を受けたものと思われる。また、上記のように実際にフランス領事の世話になつた日本人もでた。しかし、在タイ日本人は、フランスに日本人保護を依頼した本国政府の決定を、必ずしも歓迎したわけではないようである。

朝日新聞1895年10月11日号は、次のように報じている。

「暹羅在留日本人は本国政府の処置に就き非常に不満を抱き居るものの如し。

従来暹羅に在留する日本人は暹羅國法に従ひ之に満足し居り

しが追々在留日本人増加し其利害の關係する所重大に至れるを以て領事の管轄を受くるを便宜と考へ居る折柄和蘭總領事の之が委任を受けんと欲する趣を聞き在留日本人は必要の権限を同總領事に与へられんことを本国政府に請願せり。然るに仏人バヴィー氏は仏國の新名譽と勢力を得る好機なりと考へ暹羅鉦山「フカヌン金鉦山」に於て仏人の配下に屬し仏國公使館に於て其約束に調印したる若干の日本人は仏國の保護を受くる者として登録したり。仏國外務省は此通知を得て日本駐劄公使に其運動を為さしめたる結果暹羅在留日本人は九月十四日を以て仏國の保護に置かれたりとの通知を受たり。之を聞くや在留日本人

は実に狂するが如くに激昂し、……暹羅在留日本人の仏國人に對する感情斯くの如くなれば今回仏國の保護の下に置かれたる日本人は會議を開き信任ある適當の本邦人を派遣せらるべきことを日本政府に請願すること及び在留日本人の仏國保護の下に置かれたることを悲み且つ驚嘆する旨の決議案を議決したりといふ(筆者が句点追加)。

ロンドンで発行されていたThe Pall Mall Gazetteの1895年10月29日号(バンコク・タイムズの1895年12月5日号に転載)にも、「シヤムにおける日本人の活動とフランス人」と題して、次の同内容の記事が掲載されている。

「昨年あたりから、從來太平洋に向かつていた日本人移民の主流は、フィリピン、ジャワ、シヤムなどより近い國に方向転換した。……貿易会社、美術品商、齒医者、写真屋、それに多數の苦力が日本から「シヤム」に到着した。政府から大まかな条件で許可された、一移民会社

「岩本千綱を副社長とする暹羅殖民会社」も生まれた。6ヶ月ほど前には、日本人コミュニニティの指導的メンバーは、治外法権を行使できるように、東京の政府当局に領事を任命するよう要請することを決めた。この話を聞いた、パヴィー・井理公使は、それらの日本人の何人かに、もし「フランス領事館に」登録するならばフランス保護民として受け入れてよいと提案した。彼は、少なくとも1人は勧誘することに成功した模様だ。彼は直ちにパリに電報を打つて、この重要性を指摘するとともに、駐日フランス公使の支持も得た。一方、シヤムにあるフランスの鉦山会社「ワタナー

金鉦山有限公司」が、日本の移民会社「暹羅殖民会社」を通じて、苦力の一団を輸入した。到着した苦力たちは、鉦山会社と契約を結ぶ時に、フランス保護民として登録するように勧誘された。彼等は鉦山「フカヌン」に出発した。その8割は、森林熱、コレラおよび放置によつて、たちまち死亡した。彼等に鉦山管理者はキニーネを供与することさえも拒んだ。残りの人は、ジャングルで死にかけていた時、移民会社「暹羅殖民会社」が派遣した救助隊によつてどうにか救われた。その中には幼児あり、また膝の深さの泥水の中に二日間亘つて夫の亡骸を引き摺つて来た老女もあつた。保

護者であるフランス当局からは何等の手助けや補償もなかつた。ところが、1ヶ月前「1895年9月頃」、パヴィーの後任の仏總領事は輕率にも、日本人リーダーたちを領事館に招集して、フランスは寛大にも彼等の政治的繼母となることを引き受けた、既にシヤム政府にその旨を通知したと告げた。日本人リーダーたちは、怒つてそれを拒絶した。彼等は、フランスが最近日本に加えた侮辱「日本が日清戦争の講和条約で得た遼東半島を、露・独・仏三国は清に返還するように迫り、1895年5月4日に日本に受け入れさせた三国干渉を指す」から考えて、日本政府がそのようなことに合意するはずはないと信じなかつた。彼等は、總領事に与えられた権限を明示するように求めたが、總領事は応じなかつた。「バンコクの」日本人コミュニニティは、直ぐに會合を開き、本国政府に提出する抗議書に合意し、再度日本政府に領事任命を求めた」と。

フランスは日清戦争後三国干渉で日本に遼東半島の返還を強要し、日本世論の大反発を喰らつたばかりであり、タイにも様々な嫌がらせ(根拠のない保護民登録もその一つ)を加えて領土を奪取しつつあり、タイ人の対仏感情も極めて悪かつた。在タイ日本人をフランスの保護下に置いたことに対するタイ側の不満は、1895年10月26日付駐仏ブラヤー・スリヤーヌワット公使からテーワウオン外相宛の次の公信からもうかがうことができる。

「1895年」9月10日及び16日付電信拝受。日本國が在暹日本人の保護およびその利益の保護をフランスに依頼した件に關して、暹羅の外務省は日本の外務省に真意を説明すべきである。即ち、フランスは暹羅國を圧迫する手段として使い、日本の眞の利益を保護する目的とは異なつた使い方をすること、暹日兩間の友好維持に資するため使用うのではなく逆に東洋における分裂を起すことになるの





で、困ったことになることを。当地のバリでも間接的に日本の公使に話してみるが、バンコクでは直接日本側に送るべきである。暹羅の政策は、日本との貿易と親交を深めるべきである。それによつて、日本が暹羅に領事館や公使館を必要とするほどに、日本人の暹羅における利益を増大させるべきである。これが実現するには時間がかかるであろうが、しかし今その第一歩に着手せねばならない。これは Reproachment 政策であり、暹羅国と日本国間の親交を深めるやり方である」(タイ国立公文書館文書 No. 10505)。

日本外務省の決定は、岩本千綱が火を付けたシャム移民熱の高まりや彼が中心となつて実際に着手したシャム移民の実施によつて増大し始めた、在タイ日本人を保護することを重視したためであるが、この政府決定はかえつてタイに日本領事館を設置するように求める、在タイ邦人の声を高めた。当時、日本に在つて、この運動の中心になつ

たのは、岩本千綱であつた。まず、彼自身の言によつて、日本領事館設置運動の背景を見ておこう。

『太陽』第2巻17号(1896年8月20日号、22、25頁)に「日暹条約談判の由来」(岩本千綱氏の談)として、次の記事が掲載されている。

「暹羅国民は深く我國を敬愛し、また近時我國民の彼國に移住するもの少からず、此に於て我が領事館を暹羅に置くの建議は、第九議會「1895年12月28日」1896年3月28日」の貴衆兩院に於て可決せられ、我れより將に進みて通商条約を締結せんとするに當り、我が策士の懇懇により、彼れより特に大使を派遣し、通商条約を締結せんと欲し、彼の文部大臣バスカラウオングス「バーサコラウオ

ン」氏は既に大使に任命せられ、方今爪哇へ行幸中なる国王の帰國次第、直ちに來朝すべしと聞く。此に於て大使の來朝を懇懇したる我が策士は、直ちに帰朝して彼れを待つる準備に奔走せり。所謂策士とは誰ぞ、高知の人、休職陸軍中尉岩本千綱氏はなり。今氏に就き其の経歴と其の日暹条約締結の關して奔走したる事情を聞くに左の如し。岩本中尉は明治二十一年第十六連隊に屬して越後新発田に在勤中、長官に抗議して終に職を辭し、後数「しばしば」世途の險を踏み、明治二十五年始めて暹羅國に渡航す。單身孤劍、囊裡また一弗の貯蓄なし。幸ひに同國農商務大臣ビヤスリサク文部大臣バスカラウオングス兩氏の知遇を受け、殊にビヤスリサク氏の家に客と爲る。當時本邦人

の暹羅に在るもの未だ多からず、且つ其の多数は職業婦人にして、正業に従ふ者僅かに六人のみ。岩本氏翌年帰朝し、更に大に暹羅移民の事を企て、神戸の客舎にあり、会「たま」たま七月三十日報あり。仏國戰を暹羅と開き、仏艦は進みて首府盤谷府に入ると。氏は變を聞て直ちに起ち、八月一日また暹羅に向て發し、十八日盤谷府に入れば、戰線に罷んで平和の議將に熟せんとす。氏は同國各大臣を歴訪し、善後の策を陳ず。此に於て氏の名益ます現はる。

氏は二十七年一旦帰朝し、更に三十二名の労働者を率いて三たび暹羅に赴く。其頃は日本人の暹羅移住者漸やく増加し、其



の居留民は相謀りて日暹協會なるものを組織し、患難相救ひ、又紛争を裁定す。當時日暹間には未だ通商条約なく、我居留民は暹國の法權に服せざるのみならず、又我が領事もなければ、之を管轄するものなし。故に同胞集團の自治体を爲したるなり。之が牛耳を執るもの石橋萬三郎及岩本氏と爲す。既にして氏は二十八年の春帰朝す。

二十九年一月在盤谷府石橋萬三郎氏より、遙に書を帰朝中の氏に寄せて曰く、

在留日本人は將に仏國公使の保護を受けんとす。吾兄の知るが如く、仏人從來暹人を凌辱し、暹羅國民の怨恨骨髓に徹す。故に我在暹同胞の保護を仏國公使に託すは最も不利なり。況や居留民は其保護を和蘭公使に請ひ、和公使悦んで之を諾し、既に日本の国旗まで調整し、一方には其の保護を爲さんことを日本政府に照会したるに、其事

を漏れ聞きたる在盤谷府の仏國公使は、最も敏捷に長文の電報を發し、一面には日本外務省と在京の仏國公使館に照会し、他の一面には仏本國政府に交渉し、和公使の郵書未だ日本政府へ達せざる前に、早くも暹羅在留日本人の保護は在盤谷府仏國公使之任に任ずることと爲りたるなり。仏公使が此の如く閃電的運動を爲すは、暹羅に於ては仏國人に対する感情最も悪き故、當時暹人が親愛する日本人の保護に任じ、日本人を前立として仏國の利を謀らんとするのみ。其の自ら進みて日

人の保護に任ぜんとするは、頗る難有迷惑なるものなり。吾人在暹の同胞は、不幸にして仏國公使保護の下に立たば、今まで優遇せられたる暹人に疎まれ、又曩に我れより保護を請ふて承諾を得た

る和蘭公使に対しても面目なし。故に仏公使保護の事は速かに取消すことに運動せよと。

氏「岩本」は此の報を得て大に驚ろき、先づ外務省に到り原「敬」外務次官に面して保護を仏公使に依頼したる顛末を聞くに、唯だ暹羅在留の本邦人日に増加するも、主管者なき故、仏國公使自ら之を保護すべしと厚意的申入に對して、之を依頼したるのみ。其後和蘭公使より同様の申入ありたるも既に仏國公使に依頼したる後なるを以て、如何ともしがたかりしと。此に於て在暹本邦人を仏國公使に依頼するは、國王(マヤ)に在ては寧ろ何國へも依頼せざる

に如かず。然れども既に之を依頼したる後、俄かに取消す可らずんば、今日の計は速かに日暹通商条約を締結し、我れより領事を派遣すべし。此の如くなれば暹政府仏公使和公使何れの感情をも害するなくして、在留邦人の福祉を増進するを得べし、と説く。然れども當時議會は政府の施設に反對すること多き故、暹羅領事館設置の事、之を政府の提案と爲せば、或は通過を必しがたきを憂ふ。故に議會に於て之を建議として提出せんことを望みたり。此に於て氏「岩本」は旨を領し、各党有力代議士間に奔走し、先づ衆議院に於



ては、革新党の長谷場純孝、改進黨の尾崎行雄、自由党の栗原亮一諸氏の賛成を求めて提出したれば、大多数を以て通過し、更に貴族院にも有力議員の手より建議したれば、また容易に通過することと為れり。

暹羅領事館設置の事既に可決せらる。我政府は之を実施せんとす。氏は内に於ける準備此の如く熟するを見て、本年「1896年」三月四たび暹羅に向つて発し、往て先づ農商務大臣ピヤスリサク氏に説くに日暹通商条約締結の利を以てし、又暹羅にして条約を日本と締結するに意あらば、欧州諸国との条約の如く、日本人には治外法権を許さざる可らざるを以てす。ピヤスリサク氏亦略ぼ首肯く、是より先き我が外務省より公然の照

会を以て条約締結の事を照識す。暹政府既に之を諾し、自から大使を選定し、去る明治二十一年中修交条約締結の為に「正しくは、明治二十一年一月に条約批准書交換のために来日」、日本に來朝したることある文部大臣バスカラウオングス氏を任命することと為れり。時會「たま」た暹國王は爪哇に行幸中なる故其の還幸を俟て副使を選任し直ちに發せんとするなり。此に於て岩本氏は大使に先づて帰朝し、更に懇諭する所あらんと欲し「さて」は「1896年」六月下旬を以て先づ帰朝したるなり。

是より先き日清戦ひ酣「たけなわ」はなるや、暹人は当初信ずらく、日本の小を以て焉くんぞ清の大に敵せん。既にして日本の連戦連勝するや、暹人は愕いて其の勇敢に服し、最も深く日本に依頼し、大に国力を振興せんと欲したり。岩本氏が第三回の渡暹の頃「1895年初」は、実に此時にして、暹人の崇む。三國干渉以後、暹東の還付、朝鮮の退縮、一も見るべきものなし。日本もまた頼むに足らず

と。現にピヤスリサク氏の如きも、直接に岩本氏に対して此言を發したり。氏之を駁して曰く、清國に勝ちたるは日本國民なり。三國に屈したるは当局有司なり。當局有司は其地位朝夕に變ず。然れども日本國民は決して「かわ」ることなし。彼の勇敢にして義快なる四千萬國民あり。暹人の興復を依頼すべきもの、此の國民を措て夫れ他にあらんやと。ピヤスリサク氏もまた之を然りとしたり。暹政府の大使を派遣するに至りたるは、主として此の如き依頼心を有するに基づく、故に大使來朝の日我が國民みな至誠を以て彼を遇せば、彼れの依頼は益ます之を深からしむるを得べきなりと。

上記岩本千綱の談話の真偽については、他の資料での検証が必要だが、取り敢えず、文部大臣バスカラウオングス（バーサコラウオン）の通商条約締結のための来日は実現しなかったことを指摘しておきたい。



連載 ④  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXXV

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

1895年9月14日より、在

タイ日本人はフランス領事の保護を受けることになったことを、前号に記した。この決定は、第2次伊藤博文内閣（1892年8月8日～1896年9月18日）時の外務省首脳が、フランス側の熱心な働きかけに応じて行ったものである。

当時の外務大臣は陸奥宗光（在職1892年8月8日～1896年5月30日）であるが、病休中につき文部大臣の西園寺公望が外務大臣臨時代理（1895年6月5日～1896年4月3日）を務めていた。外務次官は陸奥の腹心である原敬（在職1895年5月21日～1896年6月11日）であった。西園寺公望（1849～1940）は1870年代に20歳代の殆どをフランス留学で過ごし、原敬（1856～1921）は、フ

ランス語知識を生かして新聞記者をしていたが1882年末に外務省に採用され、1885年から3年余、外交官として在パリ公使館に勤務した経験がある。原はフランスから帰国後農商務省で参事官、大臣秘書官（1890年5月）からは陸奥農商務大臣の秘書官として勤務し1892年8月陸奥が第2次伊藤内閣の外務大臣に就任すると同時に同省通商局長に採用され、陸奥の病休直前の1895年5月外務次官に昇進した。原は外務省に在職わずか8年余、39歳にして外務次官に就任している。

原敬はその日記で、稲垣満次郎が1897年3月に初代駐タイ公使に35歳で任じられた時、外交を知らない書生を公使に任命するとは、と松方正義内閣の大隈重信外務大臣の人事を貶したことを、以前本誌で紹介した。

しかし、原敬と稲垣との間に、天地ほどの差はなく、両者の違いは、原が伊藤・陸奥・西園寺等の人脈（後の政友会）、稲垣が松方・大隈人脈であったこと、それに原の運のよさである。

稲垣は、イギリス留学中に欧州大陸各地、その帰路北米、更に東方策士として文筆で活躍するようになると、東アジア各地（タイを含む）から潯州まで旅行し、原の及ばない幅広い見識を持っていた。

仏独露の三國が日本に遼東半島の返還を強いた三國干渉（1895年5月4日に日本受諾）を行い、日本世論がフランスに反発していた当時においても、フランス経験が長い西園寺外務大臣・原敬次官コンビは、フランスに親近感をもっていたことが、在タイ日本人をフランスの保護下においた理由の一つであ

ろうか。

西園寺や原が知っていたかどうかは判らないが、当時のタイ指導部のフランスへの反感は、日本の比ではなかった。その理由は後述するが、タイ人が忌み嫌っていたフランスに日本人の保護をわざわざ依頼するという決定は、失策以外の何物でもなかった。

時代は少しあとになるが、1922年11月13日、在暹（シヤム）特命全權公使矢田長之助は、外務大臣伯爵内田康哉に宛て、「在暹帝國公使館サービス改善に関する意見」と題した、長文の意見具申を行っている。その書き出しは、次の通りである。「当館は從來閉却に閉却を加へられ稲垣公使在任時代を除いては殆んど其存在をすら忘れられたるやの観あり 殊に比年当館は伝統的に一種の左遷地を以

264

7027-7  
2014.8.13

263



て看做され来り当館在勤を命ぜられたる者がその全部と迄は言はざるも殆んど大多数不平と不満とを抱懷せんは否む可らざる事實なり 由來外務省には欧米在勤者を利ける「きけもの」扱ひにし当館等に勤務する者を目して田舎巡りと呼ぶの習例を馴致し或は当館在勤の命令を以て辭職の間接懲罰と感觸する者ある亦強ち咎む可らざる状態に在りき 如斯は当事者自身が時代の進展に盲目なるの致す処而して帝国外交の刷新上最も浩嘆すべき事実なり

付何等割切「がいせつ」なる方法を講ぜらるること刻下の急務なりと信ず（外務省記録の「Insult」在外帝国公館關係事件（在暹羅亞南洋支那各館））。

矢田が勇を鼓して告発した日本外交のアジアに対する見識の無さは、既に西園寺、原においても顯れていたようである。

さて、当時のタイ指導者がフランスを忌み嫌ったのは次の理由による。第一に、フランスが1893年にタイと武力紛争を起し、1893年10月3日締結の条約「Treaty」でメコン河左岸（メコン河内の全ての島を含む）の広大なラオス（タイの直轄統治地域及び風國の兩者から成っていた）を奪ったこと、第二に、同じく1893年10月3日の協約「Convention」の第4条の規定を一方的に拡大解釈して、フランス領事をタイ各地に派遣しては先祖がインドシナ地域出身の一般住民を、数万人もの多数、フランス保護民として登録させ、フランスの裁判管

轄權（領事裁判權）の下に置いてタイの法秩序に打撃を与え、また、主に1820年代後半にシヤム領に強制移住せられたウィエンチャン地方のラーオ人を5万人規模で、フランス領となつたラオスへ帰還させ、當時は人口過少のタイに、大きな損失を与えたことである。

タイが1855年4月18日にイギリスとの間に締結した修好通商航海条約を手始めに、欧州各国と計11ヶ国と締結した同種の条約には、在留外国人を所屬國の公使館領事館に登録させる規定があつた。登録制度の目的の変遷について、1907年に日本の外務省員（但し作成者名は記載なし）が作成した「保護民の登録に關する暹羅と各國との關係」と題した文書は、領事館における登録の意味が、当初の居留地制度の代替物から、仏英等の勢力拡張の手段へと變化したことを次のように述べている。

「暹羅と諸外國との交通開け諸外國人の暹羅に來往するもの

多きに及んで暹國政府は特に外國人居留地なる區画を設け其地域内に限て居留を許すの方法をとらず全國殆んど到る所居住往來の自由を認めたと雖も唯在留外國人は其の所屬國の公使館又は領事館に於て登録を受くべきものと定めたり 此制度は1855年の英暹修好通商航海條約に於て始めて認められ暹羅と通商條約を締結せる國は多く之に模へり……我國及米國との條約を除くの外悉く此主意の規定を置けり 蓋し在留外國民登録の制度は其初めは單に取締の爲めに設けられたるものなるべく或は居留地制度の如きものと代るべき方法として諸外國も亦暹國

も共に之を便宜とし斯く多數の條約に規定せらるるに至りしならん 故に前記諸條約の文字より見るも又之を規定せる主意よりするも各國公使館又は領事館に於て登録を受くるものは單に當該國臣民のみに限るべかりしことは明白なり 然るに仏英其の他二三の國は此在留外國人登録の制度を利用して一は其の有する領事裁判の範圍を拡張して暹國を苦め 一は自國保護の下に在る人民を多くして其勢力を張らんが爲め暹國の国力微弱なると其法制の不備なるとに乘じ漸次領事館保護民と稱するものを設け之を自國領事館に登録して以て暹國の法權以外に立たしむるに至れり 而して各國の保護民漸次國中に増加するに至り暹國は其法權を意の如く行ふを

得ず時には立法の自由も掣肘を受くるの有様なりしを以て大に其弊害を悟り殊に仏國が盛に無條約國民たる支那人を登録して暹國の一大財源を失はしめんとするの眞ありしに依り鋭意保護民絶滅の策を講じたり 晩近（ママ）に至り暹國の國權恢復策は大に進捗し英丁仏蘭諸國とは既に登録民の範圍及之に及すべき裁判管轄權に付條約を結んで之を明確にし又仏國との間に於ては今年「1907年」に至り多大の犠牲を爲して著しく此點に關し有利なる地位を得たるが如く其他他逸國とは目下之に關する交渉を重ねつつあるが如し」（外務省記録「Insult」帝國領事裁判權及裁判事故關係事件（暹國に於ける保護民の領事裁判權取調））。

特に1893年10月3日のシヤム・フランス協約以後、同協約第4条によりフランスは、先祖がインドシナ地域出身であるタイ住民を保護民として強引に登録した。前掲文書は次のように解説している。

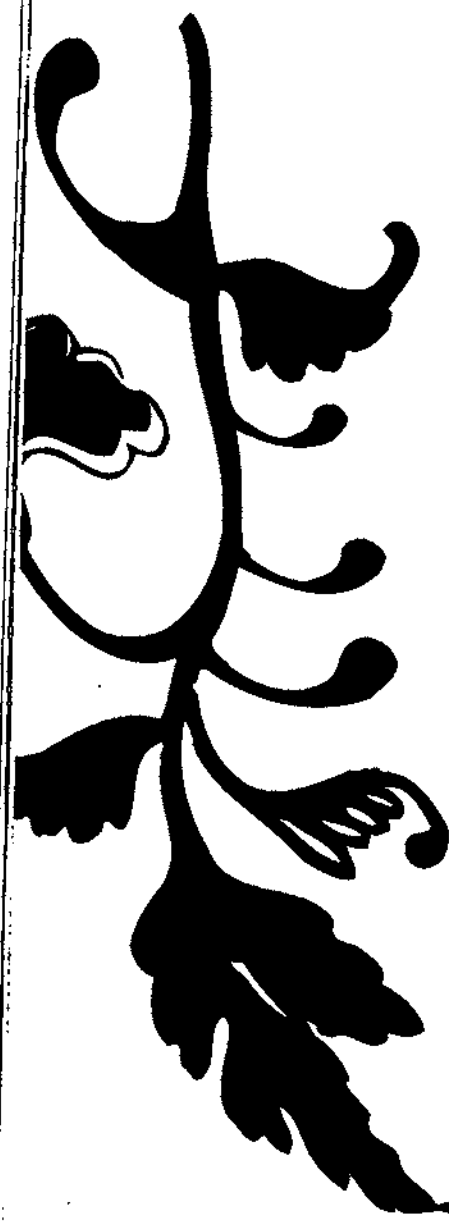
「仏國政府は本条「協約第4条」を解釈してラオチアン「ラオス」人安南人及柬埔寨「カンボジア」人は爾後仏蘭西臣民として仏國の保護の下に置かれたるものなりと主張し暹國政府は又本条の主意は斯くの如く広義のものに非ずして条文の前段は單に戰時に拘禁したる人民を解放することを約し後段は其帰國を妨げざることを約したるに過

ず前記諸種の人民に対する仏國の保護權を承認したるが如き性質に非ずと主張せり 兎に角此兩國の争を以て見れば或種類の人民に保護を与ふると謂ふは隨て之を暹國の法權以外に置くことを意味したるものなること明かにして暹國が仏國の主張を納れざりし理由亦實に此點にありしなり」。

因みに協約第4条には次のように書かれてゐる。

「シヤム政府は、何らかの名目で拘禁している一切のフランス臣民「French subjects」、安南人、メコン河左岸のラーオ人、カンボジア人をパンコクのフランス公使又は國境のフランス官憲の処分に一任しなければならぬ。シヤム政府はメコン河左岸の元住民が、原居住地に帰還することを何等妨げない」。

日本政府が、フランスに在タイ日本人の保護を依頼した1895年9月當時は、フランスの強引な保護民登録によつて、タイ・フランス關係が緊張している時期であつた。フランスは不





当な保護民登録でタイ政府を困  
らせた上、中止すること引き  
換えに新たな代償を得ようと計  
算していた。フランスが在タイ  
日本人に、インドシナ地域出身  
者の子孫や中国人と同様に、保  
護民としてフランス領事館に登  
録を求めたことは、日本人をフ  
ランスの利益のために利用しよ  
うという意図があつたことで  
あつた。在タイ日本人は、固ら  
ずもフランスの道具にされてし  
まったのである。

フランスが在タイ日本人の保  
護に執心したことは、在仏留  
荒助公使と日本外務省の次のや  
りとりからもうかがうことがで  
きる。

1896年5月16日、駐仏留  
祿公使は、「日本政府はバンコ  
クに領事館を新設しようとして  
いるのか。フランス政府は、可

能なら新設を遅らして欲しいと  
希望している」という趣旨の電  
報第18号を本省宛に送った。そ  
れに先立ち、5月10日付で曾祿  
が本省に送付した公信第24号で  
は、次のように詳しく説明して  
いた。

「盤谷に領事館を新設するの件

第18号電信を以て申進候盤谷に  
我領事館を此頃「近いうちに」  
新設せらるるの件は我議院に  
於ける質問より生じたるものに  
して当国「仏国」外務大臣曰く  
果して貴國議院の質問よりして  
盤谷に貴領事館を新設せらるる  
や此件に付ては他國は貴國の欲  
する處を妨ぐるの權利は毛頭之  
れなく、乍併彼地在留日本人保  
護の約を為せしより未一箇年も  
経過せざるに傾「にわか」に之  
を廃止するは其當時に於て大に  
好感触を与へたるの結果を水泡  
に帰せしむるの憾なきに  
非らず且つ之れが為には  
或は我議院に於て此件に  
係り質問も生ずべく実に  
余計の心配を要するに至  
るべければ何卒此辺御推

察被下相成る儀なれば今暫時其  
新設を見合せらるるの処置を貴  
政府に於て執らるるの方便は之  
れなきやと、下官「曾祿」は之  
に答へて曰へり盤谷に領事館を  
新設する議は之れなきに非され  
ども下官は未だ我政府の決意を  
知らず果して貴官の伝聞せらる  
る通なれば何と我政府よりの  
通報に接すべし貴官の所望は我  
政府に通すべしと、是に於て別  
れたり右申進候敬具。

これに対し、7月29日付で、  
西園寺外務大臣は曾祿公使に次  
のように答えた。

「帝國議院の質問により暹羅國  
盤谷府に領事館を新設する議は  
今暫時見合せられ度旨仏国外務  
大臣より閣下に申告候件に關し  
去る5月10日付公第24号を以て  
御申越之趣了承致候同大臣申述  
之通在暹羅國帝國臣民の保護を  
仏國政府に依託致候以來未だ  
一ヶ年をも経過不致候得共近時  
本邦人の同國に渡航移住する者  
漸く其數を増し隨て同國との交  
通益々頻繁に赴きたるを以て到  
底永く帝國臣民の保護を外國政

府依托し置くを得ず而して帝國  
議會より盤谷府に領事館を設置  
するの建議も有之候間本大臣に  
於ては愈々公使館設立のことに  
決定致し候得共其經費に付ては  
議會の協賛を要する義に付五月  
十九日附電信を以て申進候通明  
年度に至らざれば新設致し兼候  
間實地設立を見るは早くとも明  
年三月以後に可有之候右は仏國  
政府へ通知するに不及候得共  
閣下に於て御含置相成度此段回  
答申進候敬具。

上記文書に言う帝國議會でバ  
ンコク領事館新設に關する質  
問、若くは建議とは、1896  
年2月29日の衆議院本會議で、  
賛成多數で可決された、「我帝  
國領事館を暹羅國に設置する建  
議案（山下千代雄君外四名提  
出）」のことである。この建議は、  
前月号で引用した太陽掲載「日  
暹條約談判の由來（岩本千綱氏  
の談）」によれば、岩本の議會  
への働きかけで実現したもので  
ある。

しかし、これに先立つ、18  
96年2月13日に第2次伊藤内



閣は、西園寺外務大臣臨時代理  
の提案により、タイに対し修好  
通商航海條約締結交渉開始の打  
診をすることを閣議決定してい  
た。この決定により、2月17日  
には西園寺からデー・ワウオン外  
相宛に「明治二十年殿下「デー・  
ワウオン親王」及青木子爵の調  
印せられたる和親通商に關する  
宣言の結果として日暹兩國間の  
交通並通商逐日隆盛に赴き候に  
付ては其當時予期せし如く完全  
の通商航海條約を締結するの時  
機今や已に熟したる様思考せら  
れ候就而暹羅國皇帝陛下の政府  
に於ても此点に付御同見に候哉  
且右條約締結の爲め談判を開始  
するの意向を有せらるる哉否承  
知致度何分の御回答有之候様致  
冀望候」（外務省記録25111）  
「自明治十三年至明治三十一年

日暹修好通商航海條約締結一  
件」という文書が送付された。

前掲太陽論文によれば、18  
96年1月に岩本千綱は、バン  
コクの石橋萬三郎から、日本政  
府が在タイ日本人の保護をフラ  
ンスに依頼したことを糾弾し、  
これを取り消すように運動して  
欲しいという主旨の手紙を受け  
取った。そこで、外務省の原敬  
事務次官に面会したところ、原  
は問題解決には、日タイ間に通  
商條約を締結しバンコクに日本  
の領事館を置くことであると語  
り、政府批判派が少なくない國  
会で政府案が支持を得ることが  
できるように、國會が自ら建議  
案を出すように岩本に運動して  
欲しいと依頼した。なお、當時  
の原敬日記は大雑把で、岩本に  
面会したという記載はない。

日本外務省が積極的にタイに  
修好通商航海條約締結を働きか  
けるようになった理由は次号で  
説明するが、前後關係から見  
て、岩本千綱は、既に同條約交渉開  
始の準備を進めていた外務省首  
腦のお先棒を喜んで担いだもの  
と考えられる。

「我帝國領事館を暹羅國に設  
置する建議案」の全文は次の通  
りである。

「明治二十年一月「正しくは21  
年1月27日」我帝國は暹羅國と  
の親交條約「修好通商に關する  
宣言」を宣布し其の文中兩國政  
府は其の臣民を保護し公使領事  
を置くを得る云々とあるも未だ  
完全なる通商條約を締結せず從  
て未だ公使領事を置くに至らず  
近時我國民の暹羅國に渡航移住  
する者漸く其の數を増し各自職  
業に從來「從事」するも未だ以  
て生命財產を安托するの機關備  
はらず我在留人民の之を渴望す  
るや久し會々「たまたま」日清  
戰爭の起るや我帝國は在留人民  
の保護を仏國公使に依頼し以て  
今日に及べり歐米各國は大抵暹  
羅國に公使領事を派遣せざるは  
莫し我帝國と完全なる通商條約  
の締結は固より急務なりと雖も  
尚ほ焉「これ」よりも急務なる  
は領事館の設置なり政府は速に  
領事を派遣し以て在留人民を保  
護するの道を全ふせんことを望

む因て之を建議す」（帝國議會  
衆議院議事速記録10（第9回  
議會）上 明治28年）（東京大  
學出版會、1979年、416  
頁）。

岩本は建議案を審議した衆議  
院を自ら傍聴し（朝日新聞18  
96年3月1日号）、建議案の  
可決を目の当たりにした。提案  
理由を、この日の議會で演説し  
たのは、山下千代雄（1857  
-1929）代議士である。そ  
の全文を以下に引用する。

「私は本案提出者の一人でござ  
いますから、提出の理由を聊  
説明致さうと考へるのでござい  
ます。それで本案を説明致しま  
するに、成るべくだけ簡単に  
やりたいのでありますけれども、  
も、此暹羅國と日本との關係上  
に就いて、諸君は特に御調に  
なつて居りませうけれども、併  
ながら其關係の大略を此議場に  
於て説明致しませぬと、本案に  
就いて諸君の御賛同を得るに  
も甚だ不十分と考へますからし  
て、成るべく簡単に關係如何と  
云ふことに就いて説明を致す考

へでございます。で、歐羅巴諸國の東洋政策は夙に吾々をして憂慮に堪えざらしむる所のものであります。而して日清の戦争以来、其結果として、彼の支那國は甚だ与し易き國であつて、さうして日本の侮るべからずと云ふ、明に証明したのでございませう。それ故に彼の諸國の意思と云ふものは、期せずして此日本を抑へ、又彼の支那國を侵略すると云ふ方針に向ひつつあると云ふことは掩ふべからざる事蹟と考へるのでございませう。而して諸國が其東洋政策を遂ぐるに就きましては、其足溜りとする所の必要なる土地と云ふものを、此亞細亞洲中より得まして、さうして之を根拠として其志を逞うすると云ふことは、彼の政策としては最も必要であるのでございませう。即ち彼の諸國の朝鮮に於ける、或は仏蘭西の暹羅に於けるが如きものは、即ち英吉利の印度、或は香港に於けるが如きに倣「なら」はんと欲するに外ならぬと私は考へるのでございませう。斯様な

る形勢の危急切迫なるに當りまして、彼の清國と云ひ、朝鮮と云ひ、暹羅國と云ひ、皆我日本とは所謂唇齒輔車の關係あるものでございませう。それ故に是等の國に對しまして其文明を啓発し、獨立を扶植し、而して彼の白哲人種をして其志を逞うせざらしむると云ふことは、則ち我日本國の任務であると私は信ずるのでございませう。我日本國が此大なる任務を尽し、而して大義を天下に伸べんと致しまするに就きましては、内に速に立憲政治の完備なることを期し、速に軍備の整頓を遂げ、又産業等、即ち所謂国力に關する事業に就いて、速に之を充實することとを努めなければならぬのでございませう。而して外に對しまし

ては国力の許す限りに於て外交の地歩を進めまして、彼の貿易の移住殖民の事業の如きものは、務めて之を奨励保護して、是が着々實行に至らんことを期せなければならぬのでございませう。即ち本案暹羅國に領事館を設置することの必要なるものであると云ふのは、所謂我日本帝國の任務を尽します所の階梯としての重なるものの一つであらうと云ふの考へでございませう。暹羅と日本との關係に就いて其大體を説明しまするに就いては、第一外交に就いて、第二貿易に就いて、第三移民に就いて、其關係如何を簡単に説明するやうに私は致す考でございませう。

諸君、諸君が彼の暹羅と云ふ國を想像せらるると同時に、彼の暹羅なる國は我新領地の台灣と甚だ遠からざる距離を持つて居りまして、而して東部亞細亞洲の一獨立王國であると云ふことを御想像なさるであらうと考へます。又之と同時に二百六十年前に、彼の山田長政なる人が孤劍浮浪の徒よりして、彼の暹羅國の高嶺に上りまして、其當時は二千人の日本人が彼の暹羅國に移住致しまして、頗る勢力を持つて居りまして、今仍ほ其子孫が存在してあると云ふことを御想像になるであらうと思ひます。従つて古来より彼の國と我日本との關係の深いと云ふことに就いても、諸君が御分りになるであらうと思ひます。然るに此偉人山田なる人が

去りまして以來、幕府の鎖國主義のために、明治二十年山田安太郎「正しくは、明治二十一年二月に山田安太郎」と云ふ人が彼の地に渡航致しまするまでは、殆ど日本人の跡を絶つたのでございませう。然るに土佐の人でござりまして、岩本千綱と云ふ人が大に彼の國に見る所がありまして、さうして彼の國に渡航を致しまして、当路の大臣、皇族、華族、其他朝野の有力者に結託を致しまして、刻苦經營致しましたる結果として、昨年即ち二十八年に至りまするまで、日本人の彼の國に移住する者が既に八十余人の多きに達したのでございませう。然るに日、暹の兩國の交際と云ふものは、去る明治二十年の一月に修交條約「正しくは、明治二十年九月二十六日に日暹修好通商宣言に調印、二十一年一月二十日批准、一月二十七日公布」が結ばれてありますのみであつて、完全なる通商條約と云ふものが結んでないのでございませう。又修交條約中には公使領事館を置くことが出来ると云ふこ

との明文がありますに拘はらず、未だ我日本の領事館と云ふものが設置してないのでございませう。而して彼の國の法律は誠に不完全でございませうからして、日本人にして彼の國に移住致しまする人々は、其生命財産と云ふものの保護を託するに不十分であるのでございませう。既に領事館もなく、彼の國の法律が我生命財産を託するに足らずと致しますれば、他に欧米諸國中で少なくとも我日本人の利益にならぬ丈の國に、其保護と云ふものを託するが必要になつたのでございませう。それ故に彼の岩本氏を始め、岩本氏が昨年「一八九五年」四月頃帰朝致しました後は、石橋某「石橋禹三郎」なる人が日本移住の人々を統率致しまして、さうして彼の保護委託事件に就いて頗る斡旋尽力致したのでございませう。それで此保護を委託致しまするに就きましては、欧米の各國中の公使に就いて適當なるものを選まなければならぬ。彼の國の政府の人達、又日本の移住

民全部が、彼の温厚篤實の評判の和蘭國の公使に此保護を委託することに話が纏つたのでございませう。和蘭公使も此保護を引受けると云ふことに就いて甘諾を致しましたのでございませうが、其手續を執行するに際して、仏蘭西の前公使パービン「バヴィー」と云ふ人が其移民の保護を蘭國の公使に託すると云ふことを知つたのでございませう。之を知ると同時に仏蘭西本國の外務省、及日本駐節の仏蘭西公使に向つて、此保護事件に就いて電信の往復を致したのが、其電信料が殆ど千弗以上に上つたと云ふことであるのでございませう。而して彼國に於きましては、公使自ら石橋某「石橋禹三郎」等を喚びまして、招きまして、自分の保護を受けるが宜しいと云ふことを百方勧誘致したのでございませう。然るに彼の仏蘭西は遠東半島の還付事件に就きまして、以來我日本國の國民の感情を害して居る所のものである。即ち暹羅領に於ける日本人に致しまして、仏蘭西の

公使の保護を受けることを肩「いさぎよ」しとしない。それ故に之を以て其勧誘を拒んだのでございませう。然るに其後間もなくして仏蘭西の公使に日本人の保護を委託すると云ふは、日本外務大臣の臨時大臣「西園寺公望」の正式の書面を石橋等が示されたのでございませう。事此に至つては最早如何とすることが出来ないで、即ち仏蘭西公使の保護を受けると云ふことの手續を致したのでございませう。で、彼の國人が日本とは古き關係もあり、縁故もあり、而して日本人に對しての感情と云ふものは、實に日本は亞細亞洲中の東部にある所の國であつて、即ち互に交を親うして、互に助けなければならぬと云ふの考と、さうして日本人の義侠心、



云ふものを彼國に置きまして、さうして日本人の保護を彼の國に依頼すること、最も必要なる所以の一つでございます。

又第二に貿易上の關係を簡単に申しますれば、彼國即ち暹羅より日本に輸入する重なる物品は米でございます。米は彼國第一の國産で、さうして我國の外國米中の最も多い所のものであるのです。現に一昨二七年度暹羅國の輸出總額金三千四百萬圓の内、米穀は二千萬圓に上ばつて居るのでございます。又軍艦用のチイキ「チーク」、是は緬甸、暹羅、此二國が世界中で（此時「簡単に願ひます」と呼ぶものあり。「長いと人が減ります」と呼ぶ者あり。）もう少し御話しないと分りませぬから、少し御辛抱を願ひます。で、我國の輸入のチイキ「チーク」

ざりますけれども、未だ領事館の設がなく、又通商条約の締結がないと云ふために、甚だ不安心のために逡巡して居るの有様であります。是即ち移民の關係の上に就きまして領事館設置の必要な所以であります。

で、既に斯の如き必要があり、さうして領事館設置に就いて要する所の経費を申しますると、彼地は最も物価の安い所でございまして、僅に一箇月百円以内位で経費だけは支弁さるるさうであります。斯様な必要があつて、其経費の上に就きましても甚だ簡便でござりますからして、当局者も必ず是に就いては十分に考へられて其領事館設置、通商条約を締結するの運に至らんことを力めつつあるであらませうが、則ち本案を提出して速に当局者の実行を促さんと欲する所以でござります。願くは全会一致の御賛成を得まして、最も急を要する議案でござりますからして即決確定を飽くまでも請ふのでござります。」（前掲「帝國議會 衆議院

演説者の山下千代雄は自由民権運動出身の山形県代議士、タイと関係がある人物とは思われない。演説でも「さうであります」と何回も述べており、伝聞知識によつて話していることは明白である。当時の東アジアの一般的政治情勢についての見解は別として、タイの政治、経済、在タイ日本人等については、岩本千綱から聞いた話、若くは岩本から提供された資料をそのまま読み上げたのではないだろう。在タイ日本人社会の中心的指導人物として、岩本と石橋禹三郎の名が上げられ、この2人の活動を中心にして在タイ日本人の活動が語られているのはそのためである。





2014.9A3

第2次伊藤内閣下の西園寺公望外務大臣臨時代理（正規の外務大臣は陸奥宗光）の依頼により、1895年9月14日から、在タイフランス領事が在タイ日本人の保護を担当することになった。これは、当時のタイ人の対仏嫌悪を知る、在タイ日本人に不評であつたばかりか、日タイ関係にも悪影響を与えた。

修好通商航海条約締結の任務を与えられて初代駐タイ公使として、1897年5月28日にバンコクに着任した稲垣満次郎は、同日オリエンタルホテルに仮公使館を開き、6月2日に摂政（5世王（チュラーロンコーン）は訪欧中）のサオワパー皇後に信任状捧呈。6月15日にテーワウォン外相に条約交渉開始を申しこんだ。タイ政府は6月25日にテーワウォン外相一人

を条約交渉の全権委員に任じた。日本政府が領事裁判権を求めたうえ色々注文をつけたこともあつて、条約交渉には思ひの外長時間を要し、1898年2月25日になって、日本暹羅修好通商航海条約（全16条）および議定書（全3項）の調印に漕ぎ着けた。

条約調印の大任を終えた稲垣は、1898年6月1日に東京に着。バンコクから準備してきたと思われる、長文の「日暹修好通商航海条約締結談判頭末摘要」を直接、西徳二郎外務大臣に手渡した。その摘要を稲垣は、次のように書き出している。

「一、条約談判開始前の準備本官「稲垣」全権委員として日暹修好通商航海条約締結談判を開始するに先ち暹国の状況及同国に於ける日本国の位置に関し

ひ居り、第四、日清戦争後欧州列国が帝國政府の挙動に注視し来りたるを以て条約談判の経行如何に付ては各駐劄公使の注目する所となり且暹国と欧州諸国との条約は大概三十四年以前に締結せられたるものにして改正の時機も近付き居るが故に日暹新条約は改正条約の模範となるべきものなるべしとて殊に注意を惹くに至り機会あらば妨害をも加へんとの形跡あり

事情斯の如く困難なるを以て本官は勤めて摂政皇后陛下を始め皇族親王各大臣と親密に交際し帝國が暹国へ対する友好なる姿勢を感ぜしむることを謀り、仏国公使館へ依託したる在留帝國臣民の保護は早速之を引続「引継」ぎ、在留日本人に対しては最も厳正に処し、又各國公使へは条約談判を開始せざる

外見を粧ひ以て稍々逆境より順境へ移るの途を得たり、然り而して其の實際に於て暹國政府が國王陛下の不在中にも条約談判を開始すべきや否は大に懸念する所なりしが漸次探り見たるに右に付ては暹國政府も既に決意し居りたるものと見え談判開始のことに同意せり然れども尚茲に杞憂とせし所は是迄暹國の慣例として条約談判の爲めには数

名の全権委員を任命するを以て若し斯の如きことあるときは徒らに談判を煩雜ならしむるの虞あるを以て外務大臣一名を任命せらるる様隠然然かし（ママ）遂に其の目的を果すを得たるを以て六月十五日公文を以て別紙第一号の通り本官が全権委員として渡来したる旨を通知し併て暹國政府に於ても早速全権委員の任命ありたき旨申送りたるに

外務大臣デヴァウオングセ「テーワウォン」親王一名を全権委員に任命せられたる旨六月二十五日公文を以て別紙第二号の通り回答せり」（外務省記録2.5.17「自明治十三年至明治三十一年 日暹修好通商航海条約締結一件」）。

タイに於ける日本国の位置に關し探究した稲垣は、在タイ日本人の保護をフランスに求めた

日本の政策がタイ朝野の人々の対日感情を害したこと、また、来タイした日本人は無資無産の徒であつて詐欺に類する行為にまで及んだため、日本人一般の信用が失われたことを指摘している。後者にいう日本人の不善に關しては、本誌でも岩本千綱、山本安太郎、三谷足平などのそれについて既に紹介した。さて、在タイ日本人の保護をフランスに依頼した西園寺外相・原敬次官コンビは、それから5ヶ月後の1896年2月17日には、タイに対して修好通商航海条約締結の働きかけを開始したことは前月号で述べた。同時に在タイ公使館の新設準備を進めた。公使館が開設されればフランスに在タイ日本人の保護を依頼する必要も当然なくなる。

しかし、西園寺・原コンビの対タイ条約締結打診の動機は、タイ側の対日不快に気づいて是正しようとしたものではなかった。この時期に彼等がタイに対



タマサート大学貴賓室にある、シャム政府総顧問ジャクメン像

して条約締結を申し入れた最大の理由は、日本は日清戦争を挟んで欧米諸国との条約改正（領事裁判権の撤廃）に成功し、欧米諸国と対等の地位に上昇することができたので、欧米諸国と同じ立場でタイに臨むことが出来る条件が整ったと考えたからである。即ち、欧米諸国がタイと結んでいる不平等条約と同種のものにタイに求めることが出来る好機到来と考えたからであった。

日本は1880年（明治13年）時点でも、タイと条約を締結するのは、日本が欧米との条約改正をした後であるべきだと考えていた。例えば、1880年1月20日付で、品川忠道上海総領事は井上馨外務卿に次の報告を行った。

「此地駐在之奥「オーストリア」副領事ジョーセフ・ハー

スなる者過日暹羅國へ往行致候節同国外務大臣「チャオプラヤー・パーヌウォン・マハーゴーン・サードイボディ」之会話中

日本政府は本國「タイ」と先きに条約を締結する起見ありて官員「1875年初の大島圭介からの派遣のことか」を派出せられ候処目下其議相止居候數絶て好音を接せず若し上海に到日本の官員と面談候ときは其現況を問ひ且つ本國は早く締結を企図し居る旨を通告せられ度

と申候由右御含までに申上候也

これを受けた井上外務卿は3月17日付で、三条実美太政大臣へ次の伺いを出した。即ち「暹羅國の外務大臣日本國と条約締結致度旨會話有之候義に付

何

暹羅國の外務大臣奥國副領事ジョーセフ・ハーリスと會話の節本邦と締結致し度旨冀望候由同領事より転話有之趣上海駐劄品川總領事より別紙写の通申越候然る處現今我國各國との条約改正の折柄に付右結局に至り候上に而結約可致我政府の内意に有之候旨品川總領事より奥國副領事迄相答させ可申存候此段相伺候也」

3月23日付で三条太政大臣は上申の通り許可したので、3月31日に井上外務卿は品川總領事に、条約改正ができてからタイとの条約は締結するという方針を通知した（前掲外務省記録251/77）。

日本、清國、シヤムなど、19

世紀末のアジア独立国の間の条約交渉では、領事裁判権や最惠国待遇などの扱いが条約締結上の大きなネックとなっていた。また、清國が近隣朝貢國属邦視を止めないことも平等条約締結の妨げであった。これについては、1887年9月26日に東京で修好通商宣言に署名したテ・ワウオン外相が、帰国後の88年1月23日午後バンコクの外務省で2人の清國の南洋調査団となした会談録が興味深い。

この2人は、团长の王榮和（官名は、記名總兵、副將）と副团长の余瑞（よ・けい、1878-1885年清國長崎領事）である。彼等は1886年8月26日に広東を發ち、マニラ、シンガポール、ペナン、ヤンゴン、スマトラ、ジャワ、蘇州を廻つて1年後に広東歸着、更に1887年11月19日に再度広東を發ち、ボルネオ、シンガポール、シヤム、ベトナムを訪問した（詳しくは、青山治世「清朝政府による『南洋』調査（1886）

1888年）—華人保護の実施と領事設置の予備調査」、『文研会紀要』第14号、2003年参照）。

両清國官吏は、英文の文書でテ・ワウオン外相に面談を申しこんだ。テ・ワウオン外相が5世王に上申したところ、國王は、面談は許可されたが、アポインメントの回答は文書ではなく口頭でするように指示された。文書で回答すると、中國側がタイ側の名譽を傷つける文言に翻訳する虞があるという理由である。清國は暹羅を依然として朝貢國の属邦と見なしているの

で、北京の皇帝は「暹羅國王」を当然、臣下扱いにし、清國からシヤム政府への公文書にも上位者から下位者に向けた表現が

取られていたからである。王榮和はペナンで学んだことがあり、英語がよくできた。テ・ワウオン外相は彼との會話を次

のように5世王に報告している。

王榮和は、まずバンコクには長くは滞在せず次の便船でサイゴンに出て帰國することを告げ、次いでプラーヤ・チョードック（タイ外務省の對清國連絡担当官）が快適な宿舎を準備してくれとお札を述べた。王は暹羅の輸出入商品のリストを求め、テ・ワウオン外相は提供を約した。ついで、両者は次の會話を

行った。

王榮和（以下、王）「在タイ中國人の數が判る人口統計があるか？」

テ・ワウオン（以下、テ）「人口統計はあるが、古すぎる。出生者が増加しているが新しい統計はない。古い統計は信頼できない」

王「貴國の中國人の數は、大体何人か」

テ「全國では百万人には達して

いよう」

テ「どの國を視察したのか」

王「ジャワ、スマトラ、英領マ

ラヤ、蘇州」

テ「蘇州に中國人はどれ位いるのか。聞く所によると、蘇州は中國人の入國禁止事項があり、嚴しい課金もされているという

が」

王「中國人は總數大体1万人いる。蘇州が中國人にあのような措置を続けるなら、清國も對抗措置を執らざるを得ない。しかし、それを蘇州人は何等心配してない。中國に滞在している蘇州人は2-3人に過ぎないから

だ」

テ「多くの國を視察された中で、タイ國ほど中國人を優遇している國はないでしょう」

王「それには感謝するが、この國の中國人は他の外國人とは違つて人頭税を払わねばならないと不満を漏らしているが」

テ「その通りだが、この國の土着民は中國人以上に税を負担している。それに存じの通り、その他の外國人が我國で生活するには困難がつきまとう。加えて、この國での中國人の利得は、他の外國人以上には妨げられてはいない。中國人が人頭税を払うのは當然である」

王「ごもっとも。ところでシヤム國と條約を締結している國の國民でシヤムに滞在している者の總數は」

テ「300-400人」

王榮和は、遠回しに外國人が國王に謁見することは可能かどうかを質問した。テ・ワウオンは、たまにはあると返答。王は國王謁見希望を口にすることはなかった。

王「タイは日本と條約を締結したのか」

テ「詳細な條約ではなく、將來條約を結ぶことに合意したものだ。外國との條約では、ある利益を与えると「他の國にも」同様に与えなければならない点が

障礙となつてゐる」

王「その通りで、この条項はひどい。清国もこの条項で困つてゐる。ヨーロッパ人は我々「アジア人」への圧迫がひどい、特にフランスは、長期的には、解決の道もあるだろう。中国は、昔はヨーロッパ人との交際はなかったが、今は国際法を十分に研究しないと、遅れをとつてしまう」

テ「その通りだ」(タイ国立公文書館 Ko To (No) 1 Chin Lag 1 pp. 128-133)。

この会話でデーワウオン外相が本当のことを話しているとすれば、同外相は日本と通商航海条約を結ぶ場合、欧米諸国に認められた最惠国待遇をどうするか、条約交渉のネックであると考えていたことになる。

尚、上に引用したタイ国立公文書館文書は、2、4、5世王時代の中国への朝貢関係文書を1冊の大型ノートに転写した実質200頁ほどのものである。この転写ノートを読む限り、当

時のタイの清朝への朝貢の様子

当初、タイには中国との宗藩

は以下のようなものであった。清朝皇帝の定めでは、初期バシコク王朝は通常4年に1回朝貢すべきこととなつてゐた。4世王時代の初期までこれは遵守され、歴代の国王は清の皇帝から「暹羅国王」に封じられた(別の中国書によれば、それを示す金メッキの銀印を下賜されていたという)。バンコクから清国への進貢は、季節風に乘つて帆船でまず広東まで行き、そこから3ヶ月間の陸の旅で北京に到着した。北京から帰る際も往路と同じコースを取つた。季節風を待つため、往復に2年を要したという。タイの最後の朝貢は1852年で、その帰路の1853年6月15日、朝貢団は、河南省永城縣(現在、河南省商丘市)で盗賊に襲われ、北京皇帝の返礼物や買い付けた物品は全て奪われたうえ、通訳1人が殺された。これ以降、朝貢団の安全を理由にタイは進貢を先延ばしにした。

1860年代から80年代にかけて、清国からは何度も進貢を催促する使節が、清皇帝が国内各地や属邦の統治者に出した詔書をも携えてバンコクを訪れた。彼等がタイの担当官に語つたことや詔書の内容は、タイ語訳され5世王に報告された。タイを属邦扱いする彼等の言動は5世王を怒らせ、同王は、使節の脅迫めいた要望にも拘わらず使節に謁見を許そうとはしなかった。それでも、タイは広東から陸路でなく、欧米諸国と同様に天津まで汽船で行つてそこで上陸が許されるなら、朝貢し

てもよいと経路の変更を求めたが、清は旧例の変更は一切認めなかった。清朝は、タイに旧慣通りの朝貢を求めるばかりで、対等の近代国家関係を結ぼうとはしなかったのである。なお、興味あることには、朝貢催促使節がもたらした清皇帝の詔書では、シャム、ベトナム、ミャンマー、琉球の4朝貢国をワンセットにしたものが多いことである。

5世王は1880年代に至つて、北京への進貢は止めた」と明言するようになった。タイが中国と国交を開いたのは、それから60年後の1946年になつてからである。但し、1942年

には汪兆銘南京政府との間に、日本の要請によつて国交が開かれてゐる。

一方、タイと日本との関係は、1887年の修好通商宣言に示されるように対等なものであった。同宣言では、タイ国王を「暹羅皇帝陛下」と呼称し、日本の天皇は「日本皇帝陛下」と称している。デーワウオン外相は、日本がタイ国王を漢字で「皇帝」と表記していることを確認し、1922年に北京政権が国交樹立を求めて来た時、同政権に日本と同じくタイ国王を漢字で「皇帝」と書くように求めている。なお、明治以来日本の天皇は、対外的には「皇帝」と自称した。日本の外交文書の表現が「皇帝」から「天皇」に変化したのは、1935年の国体明徴

運動の結果であると思われる。

さて、1896年2月17日付で西園寺外務大臣がデーワウオン外相に向けて、修好通商航海条約締結交渉開始を打診してきたことを知つた5世王は、ことのほか喜ばれたようで、自ら日本を訪問する意向を4月初めに示された。これは同王の第1回訪欧(1897年4-12月)の1年前のことである。もしこの時に、5世王の訪日が実現していたならば、その後の日タイ関係にも少なからず好影響を与えて、親密な日タイ関係の出発点として、教育あるタイ人なら知らない人はいないほどの有名な史実となつていただことであるう。

ところで、1896年4月に5世王が訪日を意図された事実は、筆者が知る限り従来出版された如何なる文献にも記されていない。筆者がわずかに、この事実を見出したのは、タイ国立公文書館(NAT)所蔵のジャクメン(Glavie Polih Jaquemas)シヤム政府総顧問関係文書においてである(本号9頁写真参照)。

日本の条約交渉打診は、1896年1月15日に調印されたタイに関する英仏協定の直後のことである。この協定では、チャオプラヤー河流域におけるタイの独立保全が合意された。国王の訪日計画は、この英仏協定成立と何等かの関係があるようにも思われる。

残念なことに、日本暹羅修好通商航海条約(1898年2月25日調印)の交渉過程が判る公開文書は、今のところ東京の外交史料館所蔵文書、即ち日本側のものだけに限られ、タイ側のものは未だ目にする事ができない。もし今後、タイ側資料を

読むことができれば、より詳しい国王訪日計画が判るかもしれない。

とにかく、国王はジャクメン総顧問に、訪日の意図を示し、国王訪日に対するイギリスの賛否を英国公使に尋ねるように、また日本で天皇と会見する際の服装について調べるように指示された。それは多分1896年4月4日夕食後のことである。4月6日、ジャクメンは英国弁理公使の De Bussche に面談。同公使は、イギリスは国王訪日にどちらかと言えば好意的であり、反対が生じることはないだろうと答えた。同公使は日本在勤の経験があるので、日本の宮廷における服装についても、次のようにアドバイスした。

日本の天皇も皇后も、宮中の諸官も総て欧州風の服装や制服を着ている。天皇は常に欧州風の軍服を着用せられ、皇后も女官たちも洋装である。しかし、中国や韓国の公使は、それぞれ自国の服装で参内していた。両



国公使が夫人同伴で参内することとはなかつた。もしタイ国王が訪日を決定された場合、国王は、バンコクの宮廷で着用されている服装と同じものを着用されるのが宜しかろう。男性の従者も同様である。一方、全くの私見だが皇后および女官は訪問する宮廷の服装(即ち洋装)に合わせる方がよいと思う。一般的に言えばタイの服装を国外で着用する場合、タイ人男性が着用することは適切だが、タイ女性の場合は不適である。彼女らは風変わりに見られることは当然好まないだろうから。タイ女性の服装は、男性に比べ、欧州や他のアジア女性の服装からかけ離れているので。



ジャクメンは4月7日に上記情報を5世王に報告しながら、国王の訪日を翌1897年の3月か4月まで延期するようにアドバイスした。その理由は、今年の夏訪日した場合、帰路は台風のシーズンに当たり海が荒れるので心配であるというものであった。彼は、来年の出発まで十分に準備を整え、今年はその前奏としてジャワに行幸されてはどうかと提案した。ジャクメンは、国王が訪日計画を口にする前の4月1日から、タイの繁栄と進歩にとって最も大切なことは国王の健康であるとして、保護のためにジャワへ旅行をされることを勧めていた。何度か述べたように、5世王は1892年末から丸2年間、深刻な不眠症を患われ、1895年に入つてやつと健康を回復されたところであつた。なお、ジャクメンが得た情報では、ジャワ観光のベストシーズンは6、8月であつた。

4月8日、5世王は英文書簡

でジャクメンに答え、彼のアドバイス通り訪日計画を延期された。長文の同書簡の冒頭部分は次の通りである。

"My dear M. Rolin-Jacquemyns, On the 7th [April 1896] I received your letter together with the three enclosures. I am glad that Mr. de Bunsen sees no objection to my visiting Japan and that he expresses his opinion on the question of dress. The reason for my wishing to go is the result of the Agreement which we are about to make with the Japanese Government. However as I have already spoken to you about it, the time left on hand being too short to make the necessary preparations, it must of course be postponed." (タイ国立公文書館 Ko. To. 101/3)。

この書簡にいう Agreement は、修好通商航海条約そのもの

を指すのか、これとは別に5世王に日本と協定を結ぶ意図があつたのかは判然としなが、いずれにしても日本側からの条約締結打診に触発されたものである。

5世王は、1896年5月9日バンコクを出発され、ジャワ各地を旅行のち8月12日にバンコクに戻られた。

国王出発直前の5月6日付で、テワウオン外相は日本外相に英文書簡で答えた。同書簡は6月11日に日本外務省に到着、次のように翻訳された。

「日本国皇帝陛下の文部大臣兼外務大臣侯爵西園寺公望閣下以書東致啓上候陳者一千八百八十七年修交通商宣言書を以て籌画したる如く此際完全の通商航海条約を締結せんと目的を實行せしめたとの希望に關し皇陛下下の政府は日本帝國政府の意見に同意なるや否去る二月十七日付貴東を以て御問合の趣致領承候

右条約の締結に關し暹羅國皇

帝陛下の政府は欣然帝國政府と談判を開始可致候依て右談判は日本國に於て之を開くことに付帝國政府の御都合承知致度候若し右にて御都合宜敷候はば之が爲め「暹羅」皇帝陛下の政府は兩國互に擬定する所に因り一名若は數名の相當の資格ある全權委員を特派使節として暹羅國より派遣可致候

右談判の結果は兩國其の國柄に依り當然相互に對し特に抱く所の友誼恭敬の情に基き條約を締結するに至るに在るべきは皇帝陛下下の政府の確信する所に有之候

右回答旁本大臣は茲に閣下に向て敬意を表し候 敬具  
一千八百九十六年五月六日 盤谷府外務省に於て (前掲外務省記録 2.5.117)。

タイは、條約交渉開始を快諾し、そのために東京に全權委員を派遣しようとして積極的に対応したのである。本誌7月号に紹介した「日暹條約談判の由来(岩本千綱氏の談)」『太閤』18

96年8月20日号)で、岩本千綱が述べているパーサコラウオンの日本派遣の情報は、このような背景を有していたのである。

テワウオン外相の5月6日付回答が東京の外務省に到着した翌日の6月12日、ジャクメンの女婿で、タイ政府の法律顧問であつたベルギー人キルパトリック (Kilpatrick) がテワウオン外相の紹介状(5月7日付)をもつて日本の外務省を訪れた。彼は5月7日にバンコクで、ジャクメンのむすめと結婚式を挙げ、2ヶ月の予定で日本に新婚旅行に來ていたのであるが、多分東京到着後、内々に外務省を訪ねて自己紹介しテワウオン外相の5月6日付書簡が外務省に到着後、あらためて訪問することを約していたものと思われる。

テワウオン外相の紹介状には、キルパトリックはタイ政府の信頼を得ており、タイ事情に精通しているので、何でも彼に

尋ねてくれ、私宛の伝言を彼に託されてもよい、と書かれていた。

6月25日西園寺外務大臣は、キルパトリックを外務省に招いて、テワウオン外相に宛てた「談判を東京に於て開くことに付ては帝國政府は至極御同意に有之候而して之が爲め暹羅國皇帝陛下より当地へ派遣せらるべき一名若は數名の全權委員は喜で之を迎接可致候談判開始の期日に關しては日本國皇帝陛下の政府は欣然暹羅國皇帝陛下下の政府の都合宜しき様可取計候」という文書と次の覺書を託した。

「帝國政府は日本國の旧條約改正の事業に鋭意從事し居り而して今や右大事業は遂に其の成功を告ぐるに毫も疑なきに至るまで其の歩を進めたることを審にするは帝國政府の満足とする所なり。

新事態より生ずべき最も重要な結果は貿易、旅行及居住の爲め帝國全部を開くこと及内國の司法權と裁判管轄權とを以て

至高となすの原則を充分に認むることとなり 日本國は今日條約改正の成功を期し其の歩を進めつつあると全く同一の方針に基き已に西洋邦國との間に現に實施せらるる所の條約を有す而して帝國政府に於ては暹羅國の政府、臣民、通商及航海を此の地位に置かんと欲するものなり。

右に對し帝國政府に於ては日本國の政府、臣民、通商及航海も亦暹羅國に於て最惠國の地位に置かれんことを希望す。

日本國政府は暹羅國政府に於て遂に領事管轄權制度を全廢に帰せしめんことを希望せらるる旨を承知し該希望に對し誠意同情を表し且暹羅國に於ける日本



国領事管轄権は他各国の領事管轄権が廃せらるると同時に廃止すべきことを規定せる條款を日暹条約中に挿入することは欣然同意を表する所なり。

明治二十九年六月廿五日 東京に於て「前掲外務省記録25.117」。

日本政府は上記覚書で条約において治外法権と最惠国待遇を求めざることを明示した。キルパトリックはその場で、覚書の内容はシヤム政府の同意を得ることは困難であると述べた。案の定、東京に全権代表を派遣すると言っていたタイ政府からは、その後何の音沙汰もなくなつた。そこで日本の方から翌97年になって、条約交渉を主要任務とする稲垣満次郎并理公使を派遣することとなった。

一方、条約締結への動きと並行して、タイに公使館を設立する計画も進行した。公使館設立のためには、予算案が国会を通過することが必要であつた。

国民新聞1896年12月27日

号に、明治30年度の政府予算案が「明治30年度歳入歳出総予算説明」として掲載された。その「第4章 歳出予算中重要な事項」に、「明治30年度歳出予算中重要な事項を挙げれば左の如し、外務省所管 第一 公使館領事館増設並新営 布哇、メキシコ、ブラジル、暹羅の四箇国に公使館 シドニー、アン

ウエルス「ベルギーの支那」、シカゴ、マニラ、牛荘に領事館新設の必要あり 其経費23万5220円臨時費6万4500円合計29万9720円を明治30年度外務省所管経常部第2款臨時部第2款に予算せり」とある。

4 公使館増設を含む明治30年度予算案は、第10回議會に付議された。予算委員会は、4 公使館のうち、メキシコとブラジルの2 公使館予算を、削除してしまつたが、1897年2月16日の本會議で予算委員会の修正案は否決され、政府原案通り4 公使館予算案が承認された。国会における議論から見ても、4 公使

館増設の主要な理由は、増設対象国は日本人の移民先として有望であるということであつた。

1897年2月16日の衆議院予算審議において政府委員小村寿太郎外務次官は次のように説明した。ブラジル政府は日本人の移民を歓迎しており、1897年2月12日には日伯修好通商航海条約の批准書交換（調印は1895年11月5日）も行われた。今後移民の増加が見込まれるので移民の保護上、公使館が必要である。また、メキシコでも移民事業計画のために既に邦人が6万町の土地を購入している、それにメキシコは日本に「1888年11月30日に調印された日本最初の近代的平等条約である日墨修好通商条約により」公使を置いていて、と。

議員からは、小村に現在メキシコとブラジルにいる日本人数

について質問があつたが、小村は言葉を濁した。そこで、予算委員会で外務省予算の主査を務めた、予算削減派の梶山鼎介議員が、予算委員会で小村が報告した日本人数は、ブラジルに40人、メキシコには9人に過ぎなかつたことを暴露した（『帝國議會 衆議院議事速記録12（第10回議會 明治29年）（東京大学出版会、1979年、p. 90-96）。

タイには岩本千綱らが2度の移民で既に日本人50人余を連れて行つており、ブラジルやメキシコと比しても多かった。ハワイは別格としても、当時日本政府がタイへの邦人移民に大きな期待をもっていたことが、4 公使館新設からも判明する。

連載⑤  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 XXXVII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

岩本千綱が1894年末に自ら率いて来タイした、山口県人から成る第1回タイ移民32名（又は30名）中、タイに終生留まつたのは、理髪師として成功した面田利平のみである。続いて岩本千綱・石橋萬三郎らがバンコクに設立した暹羅殖民会社と海外渡航株式会社（広島）とが企画した第2回タイ移民事業で、宮崎寅藏（滔天）が1895年10月に、熊本県人20名を率いて来タイしたが、このうちタイに終生留まつたのは、柳田亮民のみである。

面田と柳田の兩人についての情報は多くはないが、彼等がタイでどう生きたかは、断片的に本誌において何回か触れるところがあつた。ここでは、兩人のことを記載した二つの資料を紹介したい。筆者が今まで見た限りでは、同じ資料のなかで、2

人に言及したものは、ここに取上げる2点に限られている。

その一つは、波多野秀「タイ国在住六十年——想い出すままに」（1974年、聯版印刷）であり、もう一つは在盤谷帝國領事田邊熊三郎報告「暹羅に於ける日本人」（外務省報告課「通商彙纂」明治42「1909」年13号所載）である。

前者の波多野回想録を本誌6月号で紹介した際、その中で言及されている人物たちの来タイ年月が事実から大きくかけ離れていることを指摘した。実際には未だ来タイもしていない人物が、既に来タイしていた人物の世話をしていたといった類の、前後関係からしてあり得ない、おかしい話が多い。それ故、波多野回想録を細部まで真に受け取ってしまうとトンデモナイ誤解が生じてしまう。

松本逸也『シヤムの日本人写真師』（めこん、1992年）は本格的な調査に基づく貴重な研究の成果であるが、波多野回想録を出発点として、それに頼り過ぎて推測を加えたために、事実とかけ離れてしまった記述もある。もう少し丁寧に他の資料（例えば旅券下付表）を探して比較検討に努力を費やしていれば、事実在即してより正確に書くことができたはずであり、残念である。矢野暢『南進の系譜』（中公新書、1975年）は、日本と東南アジアとの関係史について多くの説者の説を啓いた好著であるが、この著作の波多野回想録引用部分も同様な問題を抱えている。

しかし、波多野回想録は、資料的価値のないものではなく、読み方・使い方によっては極めて有用な資料である。少なくとも

も面田と柳田の2人に触れている、数少ない記録の一つである。

波多野回想録の半分は、1900年2月25日に広島県福山に生まれた波多野秀が自分の来タイ（1915年10月）以前の話を、先にタイにきた、実兄の波多野章三（1884年10月生、1898年10月過ぎ来タイ）、岳父となった田中盛之助（1875年8月生、1907年7月過ぎ「写真商」として来タイ）などから聞いたことを書き留めたものであり、彼自身が直接見た聞き話ではない。それ故、時期、関係者名、因果関係などの多くは正確であるが、述べられていることに近い事象が実際にあったことは間違いない。

今日では入手しがたい、波多野秀「タイ国在住六十年——想い出すままに」を、回想とは無関係な最後の十数行を省いて

2014 10月3日

全文を以下に引用したい。なお、使用漢字や、書き損じもそのままにしている。筆者が補足した箇所は「」で示している。

波多野秀「タイ国在住六十年  
——想い出すままに」

横浜の野崎洋行がシヤムに支店を出すので支店長、柳田亮民、波多野章三（筆者の兄）の三人が初めてバンコックへ上陸した。

夕、國在六十一年

— 想い出すままに —

波多野秀

横濱の野崎洋行がシヤムに支店を創すので支店長 柳田嘉民、彼が野崎と  
の三人が初め、バンコックへ上陸したのは明治三十五年の春頃、日清戦争の  
始まる二年位前のことで了た。その時集金は一回で了た。三人はシナ猪に  
泊って毎日家探しに出かけ、バンコクの角地に手帳の家を見つけた。九月九  
ツでそこを借り開店しました。支店長はだれもなく、のんだくれ、日本  
へ送金しないので商品が卖れなくなり、二年位で店はつぶれ支店長は残った品  
物を競売にかけ、柳田、彼が野崎兩名を置き去りにして一人で帰国してしま  
いました。置き去りにされた三人は食うに困ってセンベイ屋をしてや、と命

波多野秀「タイ国在住六十年—想い出すままに」  
(1974年、増写版印刷)の第1頁

くなり、二年位で店はつぶれ支店長は残った品物を競売にかけ柳田、波多野両名を置き去りにして一人で帰国してしまいました。置き去りにされた二人は食うに困ってセンベイ焼をしてやつと命をつなぐ有様でした。そうこうしているうちに、日本とシナの風雲が怪しくなり、今にも戦争が勃発するようなうわさがパンコックの街中に広まり

ました。その頃のパンコックの街はどこもかしこもシナ人ばかりで唯一の交通機関ロッチエック（シナ人の車引き「人力車」）がうようよしていたので外に出るのが恐ろしかったそうです。二人は毎日こわごととセンペイを売りに出（マ）ていました。

ある日上海を逃れてパンコックに來られた磯長海洲氏夫妻に出会い柳田のところへ紹介しました。夫婦は小さな女の子を連れておられたので直ぐ日本人とわかったそうです。磯長氏は上海で写真業を営んでおられたが、風雲が怪しくなってきたのでパンコックで開業したいという話を聞き、急に力強くうれしくなつて早速柳田が借家探しに出かけ今の中央郵便局の前に大きな家を見つけそこで開店の運びになりました。波多野章三も弟子入りして明治四十三年にこの店を継ぐことになりました。

現在の郵便局はその頃は英國の領事館で、郵便局は川ぶちの税関の横にありました。

設中のパンコック―アユタヤ間の鉄道が完成されて試運転を行うことになりました。列車はパンコックを發し轟音を立ててアユタヤ近くに差し掛りました時にジャングルの中にいた野象の大群は列車の轟音にびつくり仰天したものが、俺よりも大きな長い図体の奴がそんな轟音を

英國人鐵道技師の依頼で磯長が四ツ切判で撮影し十数枚の原板を波多野が保存しとつたがパンパートンに収容される時（後述）に捨てて来た事を聞き残念です。

その次に上海を逃れてやつて来たのが角田の婆さんで日本娘を五人連れて家が見つかるまで

柳田の所で皆ごろねをしとりました。急に日本人がふえ賑やかになり美味しい物も食えるようになって柳田は大変な張り切りようで家を探しました。すぐその当時一番にぎやかで交通の便の良かったサムエークの角を借りて、そこでフジホテルの看板をあげて開業しました。

その頃シャムの女性はやいも老人も皆散切り頭で皮ふの色は黒く顔は角張つてどれもこれもピンロージュの實を嚙んで道端に赤いつばを吐くのでとても気持ちが悪く感じました。昔と今を比べると全く比較にならない程お化粧が上手になつて美人もふえたものです。

そんな時代にキレイな色白の日本娘を連れて来て店を開いたのだからたまらない、忽ち店は毎晩押すな押すなと突きまくられて万客大繁盛したそうです。

女將の婆さんは通称上海婆さんと呼ばれ一躍有名になりました。これが日本娘のシャム進出の始まりです。明治二十七、八年の日清戦争で大勝した日本は一躍外国人から愛国心の強い国民と賞賛されてシナ人もシャム人も初めて日本人を尊敬してくれるように成ったので肩身が広がったそうです。

日清戦争が終つて間もなくして長崎県出身の池崎という人が来られてバンコックで池崎洋行を開店されました。これが野崎洋行に次ぐ二番目の日本人商店です。池崎さんはベツ甲細工師で特に宮内省に出入りされて皇族や上流夫人のクシ等をベツ甲で造つて居られました。

シヤム政府は日清戦争で勝つた日本を急に認識する様になり日本熱が勃興し第一回の政府留学生として女子学生二名、男子学生二名計四名を明治三十四年に池崎洋行の世話で日本へ留学させる事になりました。女子学生二人は東京お茶の水女子学校へ入学して日露戦争中は日本で

す。そして明治三十九年に帰国しました。

その時二人の女子学生はタボを使つて日本式の髪を結うて美人に成つて帰国したので日本髪が有名になつて日本商店がタボを取り寄せて賣りはじめました。これがシャムで日本髪と呼ばれて流行し出したのの始まりです。この四人の学生は帰国して政府に報告していわく日本の女性には髪を長くして美人揃いです。男も女も勤勉で良く働いて礼儀正しい国民です。風光はとても美しかったですと。

此の様な感想を政府に報告しましたので益々日本熱は高まりました。

この中の一人の女学生は戦後チェンマイでスキヤキ屋を営んでおりました。もうよいお婆さんでしたが流暢な日本語を話しておられました。

一方ワンサラロムの中にあり  
ました皇族の女学校の皇族の生  
生がまた池崎洋行の世話で日本  
の華族女学校を見学に行かれま  
した。先生も生徒もみんな美人





揃いだつたので目もくらまなばかりにびっくりして帰國、その事を詳しく報告したら、是非日本から女の先生を招くようにとのことで、また池崎氏が世話をした二名の先生を招く事に成りました。二人の先生は日本髪に着物でエビ茶のハカマをはいて来られました。先生がたの期待に反して日本の先生は二人共お多福だつたので皇族女学校の先生がたはがっかりしたそうです、とは池崎洋行の池崎氏の長男吉郎さんの話です。しかし、お多福とかなんとか失礼な事をいわれたにもかかわらず美しい日本髪がとてとてもてたそうです。タイの上流夫人からかわいがられ御夫人がたはタボを入れた日本髪の結いかた等を習いに來たりして日本趣味が益々盛んになり日本の先生は無事に二年間勤められて帰國されました。

この日本髪がいつとはなしに北タイ地方にも流行しました。

タイ人と違つて、ラオ人「北タイ住民」は色は白く髪も長くて衣装もまたタイ人とはまるでちがつて上品で美しいのでこの日本髪がとても良く似合つたのです。チェンマイ地方でも日本髪を結わない女性性は時代後れの人間のように言われたそうです。その位日本髪が大流行し、昭和五、六年頃まで賣れ残りのタボを買いにきた人もおりました。日清日露の役に大勝しました日本は一躍強大国とシヤム人、シナ人から尊敬されて益々肩身の広い思いでした。

日露戦争が終つて間もなくして田中盛之助が来タイ。しばらく磯長方に居られましたが、やがてランパンの王様と知り合いになつて王様と一緒にランパンへ行きました。その当時はドイツ人の手で鉄道建設中でナコンサワンまで鉄道が通じておりました。ナコンサワンからは舟で

行く事になり一ヶ月近くかかつてランパンへ着きました。

ランパンで写真屋を始めて  
おつたらアメリカ人の医師ドク  
ター・コートに会いました。ド  
クターは田中に自分はチェンマ  
イヘキリスト病院を開設のため

に行くのだが田中もチェンマイへ行かないかと誘ひチェンマイの模様などを詳しく話してくれました。人口はランパンよりずっと多く一万余りもあり市場は繁栄しとるという話をきいてチェンマイの方に魅力を感じて早速店を始末して行く事に決めました。鉄道は無論ないし舟で上ると五日もかかるので馬で山道を通つて一晩山小屋に泊り明くる日の夕方チェンマイに着きました。ワットケツという町はその当時はその当時はチェンマイで一番賑かな町でした。船着場、運送屋が軒をならべ宿屋もたくさんあつて一先ずそこにおちついて家を探して、ターペーロードに家を見つけて写真店を開業しました。

ドクター・コートのキリスト

病院は間もなく米国婦人のマツクコーミツク夫人が來られて夫人の資金援助で現在の広大なる土地を買つて、そこに病院を建設、マツクコーミツク病院と改名して現在の如く大隆盛した次第です。

現タイ国王の父君であるコム  
ロアン「クロム・ルアン」ソン  
カーナカリン殿下は明治の末米  
国留学から御帰国に成つてこの  
マックコーミツク病院に暫くの  
間勤めておられました。

チャンマイで写真屋は田中  
が一軒だけだと思つておつた  
らアヌサン「*Maasaphatjant*  
*Maasaphatjant*」というシナ人の写  
真屋がワツケツ「ワット・ケー  
ク」で開業しており後年彼は  
チェンマイ一番の金持ちになり  
ました。銀行家のクライシー氏  
はアヌサンの孫に当ります。第  
二次大戦勃発の際彼の他に中国  
人五名が日本軍に捉まつて取調  
べられたいきさつは省略しま  
す。

田中の次に間もなく医師の三谷足平氏と渡辺氏が日本から活

動写真を持ち「こら」れてパン  
コックで活動写真館を開きまし  
た。これがシャムに於て活動写  
真の始まりです。シャム人はナ  
ンジップンと呼んで大繁盛しま  
した。

濟んだフィルムをチェンマイへ送って貰つて田中が役人俱樂部の近くに活動小屋を建て始めましたら チェンマイでも大いに受けてナンジツプンと言うて大繁盛しました。ナンジツプンとは日本活動写真（日本影絵芝居）の意味 活劇物でクライマックスに達したらバクチクをパンパン焚くと観衆は興奮して喜んだと田中の笑い話のひとつでした。活動写真は三年余り続けたそうでその頃からシナ人が外国映画を輸入してパンコックでやりましたのでナンジツプンは止したそうです。

この呼び名はいつ迄も残って  
外国映画でもナンジップンと言  
うておりました。

また現在チェンマイとランプンでタイシルクやいろいろな織物が大隆盛したのは稲垣公使の

御尽力の賜物です。スコータイの附近には桑の木があり日本から先生を呼んでカイコや機械織機を持つて指導したのが始まりでそれがチエンマイとランブンで大発展したのです。少し後れて日本から傘を造る先生が来られてチエンマイで紙造りから傘の竹骨まで指導したのが現在チエンマイのボサンで家内産業として大発展しとる次第です。

一九〇五年に着工したパン  
コック、チエンマイ間七五一キ  
ロメートルの鉄道工事は一九二  
一年にドイツ人の手で完成して  
開通式を行いました。最大の難  
工事だったのはランパンとラン  
ブンの中間のクンタントンネル  
で長さ一キロありますが、この  
辺りはマラリヤ熱の猖けつ地で  
トンネル工事では死亡者が続出  
致しましたが三年がかりで漸く  
ドイツ人が完工させました。そ  
の途端に第一(マ)世界大戦  
が勃発しました。昔からシヤム  
とドイツは友好関係の間柄であ  
つたのですが、佛、英の強い要  
請に依つて連合軍側につかざる

を得なくなつてフランスに出兵した次第です。一方シヤム国内におつたドイツ人は軟禁されましたがシヤム鉄道の恩人として客人同様に優遇されました。戦後は益々両国の親善關係を深めました事は皆様御承知の通りです。

パンコック・チャンマイ間の  
鉄道が開通したにもかかわらず  
利用者が少なかったのはトンネ  
ル工事中マラリヤで多数やられ  
たので汽車に乗ってトンネルに  
入るとマラリヤにかかるという  
デマが町中のウワサになって恐  
しがって二、三年は汽車に乗り  
たがらなかったからなのです。  
因に、パンコック、チャンマイ  
の汽車賃は十二バーツでした。

またその頃は治外法権がありましたので治外法権の蔭にかくれて悪いことしたり、バクチ場の番人をしたりしていつも領事館の警部サンをてこずらせたやつ（日本人）もおりました。日本が卒先して治外法権の撤廃にふみきつたのもこんな事が原因のひとつだったときいておりま

す。シャム側には捕まえたり裁判する権利はないので領事裁判はいつも英国領事館で開かれておりました。日英同盟のよしみか英国領事は日本人の裁判にはいつも寛大であつたそうです。「バンコクの」兄の店は領事館の前だったのでよく通訳に呼ばれて行きましたがちつとこしかけて居る文で一時間十五パーツも貰つた事を自慢しておりました。

私は大正三年バンコック大山商会の宮川岩三氏と一緒にシヤムに参りました。あくる日兄が挨拶に日本人倶楽部へ連れて行ってくれました。倶楽部はニューロード、ブッシュレーンの入口の右側の小さなバンガ



ローの家で泉生太郎氏が書記でした。その左の角は床屋の面田利平さんの店でコーラット鉄道建設工事の工夫で来られた最後の一人です。今は息子の初平君が後をついでる事と思います。私は大使館附陸軍武官の常岡大佐の勧めで昭和四年八月チェンマイ行き急行列車でバンコックを立ちました。北上の途中夜明けに目をさまして窓外を

見たら豪雨のために谷川の水は洪水の如く線路上まで出水して約490キロの地点に差し加かった時に轟音と共に汽車は谷川に転落して多数の死者を出しました。私は幸に軽傷ですみました。救援列車がランパンから来るのを10時間も人家の無い山中で待つのは全く辛かったです。チェンマイへ着いたのは夜中の三時過ぎでした。当時の



WE respectfully solicit inspection of our:-  
Japanese Crêpe-cloth, Shirts, and Singlets,  
Photographs of Japanese Beauties, Preserved  
Beef, and The celebrated Japanese Beer.

Our prices challenge competition..

ASSUMPTION SQUARE.

Bangkok.

Jan. 10th, 1906.

大山商店の広告 (バンコク・タイムズ1896年1月11日号)

チェンマイの町並みは中央を大きなピン河が流れて四方は山に囲まれて日本の田舎町そっくりで丁度郷里の福山の町の様な感じでした。

ラオ人は人情味も温厚(ママ)で私もついそれに引かれて永住してしまつた様な訳です。

その当時のチェンマイには総督府が有り総督はブラオンチャオ・トスリウオン殿下でした。またチェンマイの王様チャオケオナワラット王も御健在でお二人共日本趣味をお持ちで日本から金の屏風を買われたり、スキヤキ鍋もたくさん取寄せてよくスキヤキ会をやっておられました。私の結婚式は総督邸でとり行われました。

その頃の日本人は田中の他に八木、長野、矢野、堂本氏等居られました。今は古くは私一人になってしまいました。

太平洋戦争の始まる少し前に日本領事館がチェンマイ「に」設置されました。原田領事と西野順次郎「順治郎」氏が来られました。またバンコックの日本の

会社も支店出張所を設け賑かになりました。元旦には一同が領事館に集まって君が代を合唱した事等は昨日の様な感じでした。昭和十六年十月頃から世界の雲行きが怪しく成つて来た話を町のあちこちでうわさし出しました。

もし戦争が勃発すれば将「蔣」介石軍がランパンに攻撃して来る事は日本人一般の常識と成つていたので我々は一決して、田中は病氣中だったのでマック・コミック病院へ入院させて十二月六日一同はバンコックへこつそりと一週間ばかり避難する事になりました。

十二月八日のお昼近くにバンコックに着きましたがバンコック近くの駅々にはもう日本兵が来ていたので驚きました。私達家族は五日目に戻つて来たらアメリカ人、英国人はチェンマイからビルマへ逃げこんだということでした。ママが昔からの英国人永住者五名はまだチェンマイに家族と共に住んでおりました。

十二月中旬頃から日本飛行隊の地上部隊がチェンマイ飛行場に進駐し始めました。また間もなく兵団長山之内中将のひきいる「祭兵団」も進駐して来ました。私の写真店の隣のキリスト教会が司令部となり若い者は皆な通訳に駆り出されました。開戦七、八年前に田中が調査した事があるメラライ、メーホンソンの近道に道路を造るために工兵隊が着工し始めましたが工兵隊にはブルトザ(ママ)はな

くスコップとクワだけで始めたので工事は遅々として進まず兵隊はインパール作戦に合わないでチェンライからビルマ入りする事になりました。然し工兵隊は最後にはこの道路を完成させました。終戦間際になつて兵隊はこの道を利用してビルマからさがつて来ました。

敗戦の原因の一つはブルトザが無かつた事も一つの敗因だというても過言ではありませんまい。

一方飛行隊の地上部隊の方も滑走路の延長工事がこれまたク

ワとスコップで苦力を百人位集めて始めましたがこれまた仲々はかどらず四、五ヶ月かかって漸く飛行機が降りられる様に成つて集結部隊が勇姿を現わしたのは四、五月頃だったと思います。

或る日の早朝敵機数機が襲来日本軍は二台「の」高射砲で応戦しました。敵機一機に命中し煙をはきながら低空でランパンの方へ飛び去りました。私たちはこの空中戦を店の前から眺められまし(ママ)たが全く壮観でした。日本軍は時を移さずとんで来て私も一緒にランパンに行きました。黒い煙になって墜落してました。すぐ兵隊を連れて来て丁重に葬りまして「米軍空軍勇士の墓」と書いた碑を立てて黙礼させられたのは側で見ていた私も思わず頭が下りました。

昭和二十年頃から日本軍の旗色が悪く成つて来てビルマからメサリエンに入り高い山をいくつも越えてチョムトンに出て来た兵隊は重病人が多「く」チョ

ムトンの郡長は田中に知らして来るので田中は薪を焚いて走る車をとつて二、三回往復した事もありました。

昭和二十年八月二十九日終戦に成つてから在チェンマイの日本人の財産は全部没収されてバンパアトンの抑留所へ抑留される事に成つて陸を行くと顔見知りの人が多いのでみっともないので田中の発案で川降りとしやれこんでピン川を舟で下り二十日位かかって十月末頃にバンパアに着きました。バンパアトンの抑留生活は水田の中に竹と茅で建てた長い長屋でこれがほんとうの竹の柱に茅の屋根とあった風流な抑留風景でした。バンパアトンの抑留所生活は一年近くつづきましたが日本軍の残した味噌醤油等の食糧が豊富にありましたので割合気楽に過ごす事が出来ました。

古くから居た日本人女子供も合せて約百人余りの者が残留出来る事になつて抑留所から解放されたのは昭和二十一年の十一月でした。

終戦後まもなく日本外務省の連絡事務所がバンコックに設置されましてタイ政府に没収された財産の明細書を提出する様にと通知が有りましてので明細書を出しました。その時の話では日本政府が保証してやるとの話でしたが、その後待てど暮せど梨のつぼで、何の音沙汰もありません。今は他の者は皆、極楽へ行つてしまつて 私一人が残されてしまいました。貰えるものなら生きてる内貰いたいもんですな。(チェンマイ市在住)

昭和四十九年十月十五日

本誌6月号で述べたように、柳田亮民は1895年10月に宮崎滔天を代理人とする海外渡航株式会社募集移民20名の一人として来タイ、波多野章三(1884年生)は14歳の1898年10月過ぎに来タイ、磯長海洲夫妻は1894年末ごろ来タイしている。柳田と波多野の来タイ時期は、1892年(明治25年)ではなく、ともに日清戦争後で

バンコクの日本商店 (1891年~1908年) 一覧 (開店順)

商店名	取扱商品	開店年月 (西暦、明治)	閉店年月 (西暦)
野々垣商店	雑貨	1891(24)	6ヶ月にて閉店
日羅商会	雑貨	1895(28).1	1896.1
大山商店	炭酒	1895(28).8	1896.4
桜木商店	雑貨	1895(28).8	1899.3
図南商会	雑貨	1895(28).11	1901.6
都築商店	雑貨	1896(29).4	1898.3
大山商店	陶器	1896(29).10	1898.8
日通貿易会社	雑貨	1896(29).11	1ヶ月にて閉店
野崎商店[洋行]	雑貨	1898(31).8	1902.12
中野商店	茶及雑貨	1898(31).10	1899.6
池崎商店	雑貨	1899(32).3	
協進商会	雑貨	1899(32).3	1904.10
山口商店	雑貨	1899(32).5	
渡辺商店	雑貨卸売及黄楊輸出	1899(32).8	1904.4
河野商店	雑貨卸売	1904(37).2	
大山商店	雑貨	1904(37).4	1905.3
夏目商会	煙草	1905(38).1	1906.6
矢吹商店	雑貨	1905(38).3	1906.8
日通商行	雑貨	1905(38).4	
江畑商店	雑貨	1905(38).5	
本多商店	雑貨	1905(38).6	1908.4
三井物産会社出張所	輸出入貿易	1906(39).7	
尾崎商店	雑貨	1906(39).8	1908.10
大山商店	雑貨及洋服裁縫	1907(40).1	1907.5
大山商店	雑貨及石版印刷	1907(40).3	
山口商店	雑貨	1908(41).4	

(注) 明治を西暦に換え、開店年月の古い順に並び替えた。出所:「暹羅に於ける日本人」(明治41年12月23日付在暹羅帝國領事田邊三郎報告)、外務省報告課『通商叢書』明治42年13号(明治42年3月8日発行)、57-58頁。

ある上、一緒に来タイしたのでなく3年間のズレがある。磯長夫妻は、柳田や波多野より先に来タイし写真屋を開業している。未だ来タイもしていない柳田と波多野が、波多野回想録が言うように磯長新来時に手助けをするにはありえない。

このリストにある野崎商店は野崎洋行と同一だと思われるが、同商店は1898年8月に開店し4年余存続した。野崎洋

行主は、野崎統太郎であり、旅券下付表によれば彼は商業視察を目的に暹羅に行くために1896年10月16日に旅券を取得している。旅券取得時の野崎は29歳2ヶ月、広島県深津郡福山町出身で東京府芝区西久保廣町に寄留していた。波多野章三は、「商業に被雇」を目的として暹羅行きの旅券を1898年10月

22日に取得した。取得時の年齢14歳1ヶ月、広島県深津郡「1898年10月1日に深津・安那両郡が統合して深安郡となった」福山町出身の士族である。野崎と波多野は共に福山の出身であり、野崎はバンコクに商店を開いて後、同郷の波多野少年をバンコクで店員として使うために呼び寄せたものと推測される。

野崎統太郎の品行に少々問題があったことは、1898年12月30日に日本の領事裁判所によつて、子爵とある日本人が微罪により5日間の監禁の判決を受けていることから推測される。資料には「波多野」は姓のみが記され、名は明記されていないので、統太郎とは断定できないが、当時数十人の在タイ日本人中、同一姓の別人がいた可能性は少ないし、旅券下付表中暹羅を渡航先として旅券の下付を受けた者は、野崎統太郎以外には存在しないので「波多野」は、間違いなく野崎統太郎のことであろう。彼のどのような行為が

微罪にされたのかは記載がない。国府寺新作臨時代理公使はタイの畿内省と法務省の2省に依頼して「Moraki」を捕らえ、処罰した(タイ国立公文書館 Ro.5 To.22/18)。

しかし、野崎洋行は1899年当時、バンコクの代表的な日本商店の一つであったことは次の資料から明らかである。即ち、

1899年10月17日、在盤谷府日本雑貨及び輸出入商総代と称して、池崎新吉(1855年生、長崎生、1896年後半来タイ、池崎商会主)、山口友吉(1872年生山形県生、1898年2月来タイ、山口商店主)、阿川太良(1865年生山口県生、士族、1894年6月初来タイ、1900年7月シンガポールで病没、図南商会主)、野崎統太郎(1867年生広島県福山生、1896年10月来タイ、野崎洋行主)、湯澤良助(1876年生長野県生、1897年末来タイ、タイ語学習後99年公使館雇)の5名は連名で、国府寺臨時代理公使に商品見本陳列所運営に関

する請願書を提出した(外務省記録「Moraki」本邦商品販路拡張の爲め在外帝國領事館内に商品見本陳列所設置一件)。

野崎洋行が1902年末、閉店した後、同行に雇用されていた柳田亮民と波多野章三は、帰国せず、タイに留まり煎餅を製造販売して自活した。

田邊三郎領事は、1908年末の「暹羅に於ける日本人」報告で、在タイ日本人の雑貨の一つとして理髪業、煎餅(せんべい)製造業を挙げ、両者について次のように説明している。

「一、理髪業 前記第一回移民の一人「面田利平」にして独り盤谷に留りて理髪店を開き居るものあり在留日本人の外欧米人を顧客として毎月平均通貨四百餘内外の収入あり。

二、煎餅製造業、盤谷に於て煎餅製造業を始めたのは前記第二回移民の一人「柳田亮民」にして一時は大に売行善く相当の利益ありしかば他に二三本邦人の之に倣ふ者ありしが其後支那人中にも之を製造する者漸く多

く競争上価格を引下げざるを得ずして遂に不引合の爲め廃業するの止むを得ざるに至り目下最初の創始者一戸は依然其業務を継続し居るも支那人の競争の爲め復た従前の如き収益なしと云ふ。

バンコクの街角では、「カノム・トキーヨ」などと、日本由来を思わせる名前の焼き菓子製造販売する屋台を昔から(といつても筆者が実見したのは1970年代後半以降だが)目にするが、柳田亮民や波多野章三が売った煎餅はどんなものであったのだろうか。柳田らは野崎洋行が閉店した後、1903年ごろに煎餅業を始め、少なくとも田邊領事が報告した1908年末までは継続していた。これは波多野回想録で述べられている時期よりも10年後のことである。

波多野回想録では、日清戦争時に、上海から角田の婆さん(上海婆さん)が5人の日本娘を連れてきたのがバンコクにおける「からゆきさん」営業の始まり

であり、来タイ当初、彼女たちは柳田宅に泊まり、娼家として使う家も柳田が探してきたと述べている。上海婆さんがバンコクで醜業(女郎屋)を長期間営んでいたのは、波多野回想録の外にも同時代の資料にも言及したものがあつた。間違いない事実である。しかし、彼女がバンコクで営業を開始したのは、次の資料から1890年ごろであり、柳田来タイより5年も前の話であるから、柳田が世話をできたはずはないのである。上海婆さん(本名は角田ではなく「網田マチ」のようである)は、1920年にタイから引き揚げる途中のシンガポールで新聞のインタビューに、上海で16年、バンコクで30年間営業したと語っている。これから計算して、上海婆さんは1890年頃来タイしたことになる。彼女の詳細については、バンコクの「からゆきさん」の項に譲りたい。

波多野回想録は、長崎出身の随甲屋の池崎新吉が、タイから日本への留学や、日本人女性教



師のタイ招聘の衝に当たったと記しているが、これも疑問である。

しかし、波多野秀自身の体験を述べた部分の情報は貴重なものがある。例えば

「私は大正三年バンコック大山商会の宮川岩二氏と一緒にシヤムに参りました。あくる日兄が挨拶に日本人倶楽部へ連れて行ってくれました。倶楽部はニューロード、ブッシュレーンの入口の右側の小さなバンガローの家で泉生太郎氏が書記でした。その左の角は床屋の面田利平さんの店でコーラット鉄道建設工事の工夫で来られた最後の一人です。今は息子の初平君が後をついでる事と思います」など。



日本人倶楽部は、暹羅日本人会の集いの場であるが、その所在地はニューロード、ブッシュレーン、即ち Charoen Krung Road Soi 30 (Captain Bush Lane) の入口の右側であったことが判る。なお、波多野秀は大正三年に来タイしたと回想しているが、旅券下付表によれば、「兄」(章三)の呼称写真業補助の目的で大正4「1915」年10月1日に旅券を取得している。来タイしたのは大正4年である。彼が名を挙げている、泉生太郎(1886年佐賀県伊万里生、医業関係者)も面田初平(面田利平の4人のこどもの一人)も実在の人物である。

上述波多野回想録に、第1回移民の面田利平はコーラット鉄

道建設工夫であったと述べられている。面田は同様のことを、田邊熊三郎領事にも語ったようである。

即ち、1903年10月から1910年6月までバンコクに在勤した田邊は、1908年末の前述報告「暹国に於ける日本人」の中で、面田利平と柳田亮民から直接聞いた話として、初期日本移民について次のように書いている。

「我移民の当国に送られたるは明治二十八年に二回ありしが何れも不幸にして失敗に了れり今当時の顛末に就き探聞し得たる所を左に陳ぶべし

是より先き岩本千綱なる者あり明治二十六年中時の農務大臣ピヤ、スラサクデイ、モントリーの知る所となり遂に同大臣と謀り同大臣より土地及農具一切を借受くるの約束を以て我農民を暹国に移住せしむるの計画を立て乃ち一旦帰国の上自ら勧誘募集して山口県の移民三十二名を率い渡暹したるは明治二十八年一月にして之を第一回の移民と

す。然るに元来岩本は無資本の者にして香港に至つて已に滞在費及前途の渡航費に差支ふるの窮境に陥り偶々前記農務大臣の公務を以て香港に至るに幸に其助力に依りて纔に其目的地に達するを得たるが如き実情なりしかば其の来暹後も土地及農具を約束の如く貸与せられしと雖も其他必要の設備なく又之を為すの資力なかりしより此等の移民は忽ち生活に窮して復た農作に従事するの余裕なく各自目前の活路を求むるの已むを得ざるに至れり是に於て多少の貯蓄を有せし四五名の者は新嘉坡に転航し而して残留者中七名は鉄道敷設の工夫となり又約二十名は或る金山「ブカヌン」の工夫に雇はれたり。斯くて彼等は一時糊口の途(鉄道工夫として一日の賃金は暹貨二銖内外なりしと云ふ)を得たりと雖も鉄道の敷設と云ひ金山の開掘と云ひ何れも非常なる不健康地に在りしかば僅々二三ヶ月間労働せる中病を以て斃るる者相繼ぎ殊に金山の坑夫となりし者の中盤谷

に生還したるは僅に三名にして其余の十七名は尽く病死したりと云ふ又惨なりと謂ふべし右第一回移民の失敗後間もなく第二回の移民は亦た同一人「岩本」に依て企画せられたり。今回は岩本より広島海外渡航移民(マ)

マ) 会社に出く所あり同会社の手を経て九州の移民二十名を募集して渡暹したるは同年十二月(マ) 中にして同会社より代表者として宮崎寅蔵を同行せしめたり。然るに当時盤谷に設立しありと称せられし日暹殖民協会「暹羅殖民会社」なる者は有名無実のものにして何等右移民を迎ふるの準備あらざりしかば彼等の到着するや亦た忽ち前回の移民と同一の境遇に陥り遂に会社代表者「宮崎」の斡旋に依りて或は在留本邦人の雇人となり或は盤谷船渠会社に雇はる

ることとなり而して船渠会社に雇はれたる者は其後賃銀の少きを嫌ひ鉄道工夫の収入多きを期いて移民会社代表者が近き前回の例を援いて懇諭せしをも聴かず断然同会社との関係を絶つて遂に鉄道工夫となりし者十四

五名ありしが果せる哉一二ヶ月にして何れも病の爲めに労働に堪へずして盤谷に帰來し其後四五名は実に之が原因となりて病死せり同時に移民会社の代表者は自ら調査したる結果暹国農業の甚だ有望なるを認め盤谷に留りたる移民数を集め更に前記農務大臣より耕地及農具を借り受けて翌二十九年七月頃盤谷郊外に於て米作を試みしが不幸にして非常の旱魃に遇ひ灌漑用の農具を獲る能はざりしが爲め何

等収穫を獲る能はずして是亦全然失敗に了れり

右二回の移民中現今尚ほ当地に在留せる者各一名づつ「面田、柳田」ありて以上の顛末は即ち彼等より親しく聞き得たる所なるが要するに彼等移民は指導者其人を得ず且つ各自維持し得るの資本なかりしより不健康なる労働に従事して全然失敗に了り其の当初の目的たりし農業的殖民に至つては未だ何等正当の実験を経ざりしなり(前掲田邊著「暹国に於ける日本人」59-60頁)。

グリーンコイ寺にある日本人会の「日本人第一回移民の碑」には、18名の死亡者全員がコーラット線の鉄道工夫であると記されているが、筆者は主に宮崎寅蔵(消天)の著作を根拠として、死亡者18名は、ブカヌン金山で死亡した第1回移民12名、コーラット線建設工夫として死亡した第2回移民6名から成ると本誌5月号で述べた。

田邊の上述文も宮崎の著述も参照しているようであるが、移

民の各種就業数、死亡者数は宮崎が示した数字とは異なっており、面田、柳田の証言に依拠したと考える外ない。面田が、一緒に来タイした32名中、17名がブカヌン金山で病死したと、1908年に田邊領事に語ったことは間違いないことと思われる。

宮崎は第1回移民とは、直接の面識はなかったが、同移民に後れること1年足らずで来タイし、伝聞した彼等の惨状を、1897年7月の国民新聞に連載した「暹羅殖民始末」の中に記録した。もし宮崎よりも面田の数字の方が事実により近いならば、碑文にいう死亡者18名は全員が第1回移民であり、その中17名がブカヌン金山での死亡者、残り1名が鉄道工夫ということも可能であろう。仮にそうだとすれば、コーラット鉄道線での死亡者は僅か1人程度である。「日本人第一回移民の碑」の碑文は、ますます事実から遠ざかつていくことになる。



連載  
バンコクの日本人

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱

XXXVIII

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

本誌前月号で、1908年末に在バンコク領事の田邊熊三郎が本省に報告した「暹羅に於ける日本人」を基に、バンコクの日本商店（1891年～1908年）一覽（開店順）を示した。それによれば、バンコクにおける最初の日本商店は1891（明治24）年に創立された野々垣商店で、雑貨が取扱商品であったが、6ヶ月で閉店したという。田邊領事の報告は、野々垣商店については、次の文献に依拠したものと思われる。

「暹羅に於ける日本商店の歴史を略叙せば、左の如し。第一野々垣商店（既閉）、千八百九十一年の頃名古屋の人野々垣某、雑貨店を開く。山本銀介之が通弁たり。六ヶ月にして閉店。是れ実に盤谷府に於ける日本商店の嚆矢たり」（暹南商会（石川安次郎）編纂『暹羅王国』経済雑誌社、1897年9月9日発行、152頁）。

現在に至るまで、タイの日本人の歴史に触れた書物は、上述の暹南商会の記述を基にして、タイに於ける日本人ビジネスの元祖は、名古屋の野々垣某が1891（明治24）年頃始めた野々垣商店であると書いている。野々垣某の名前やプロフィール、更には彼がどうしてタイに商店を開くことになったのか、そもそも明治24年創業は間違いないのかなどについては全く調査がない。

今日のタイで隆盛を誇る日本人ビジネスの歴史の出発点が、曖昧なままでは何とも口惜しい限りではないか。そこで少々、

七七三八	則負一
七七三九	則負ヤク
九三九七	野村嘉七
九四一六	野村嘉七

七七三九	則負ヤク
九三九七	野村嘉七
九四一六	野田直助
九五二七	野口ユク

九三九七	野村嘉七
九四一六	野田直助
九五二七	野口ユク
九二七一	野田直助

野々垣直次郎が1888年に旅券下付を受けた記録（外務省旅券下付表から）

野々垣商店について調べることにした。岩本千綱の話なのに、また寄り道ですかと問われそうだが、必ずしもそうではない。岩本は、1892年8月に初訪タイするが、その計画作成段階において、野々垣やその関係者に関する報道情報を参考にしたいと思われるからである。

まず、野々垣の実名を明らかにしないと、次の調査に進むことができない。そこで、手掛かりを求めて野々垣の出身地である名古屋で、1891年当時発行されていた日刊地方新聞を読むことにした。さすがに大都市の名古屋だけあって、当時既に6紙（扶桑新聞、新愛知、金城新報、天下新報、時務日報、三河新聞）もの日刊地方紙が出ていたという（扶桑新聞1891年6月10日号）。このうち、現在国会図書館所蔵のマイクロフィルムで読むことができるのは、新愛知（1888年7月5日に大島宇吉らが創刊）と扶桑

新聞の2紙だけである。両紙とも自由党系の新聞であることは紙面を読めば一目瞭然である。新愛知は創刊号が保存されているが、数ヶ月に亘る欠号が何度もある。一方、扶桑新聞は創刊3年目の1889年末から保存されているが、欠号は少ない。マイクロ中にある最初の号から1892年末まで読んでみた。期待通り、扶桑新聞の1891年5月から7月にかけての号に、野々垣に関する多数の記事を見出すことができた。

今月号から来月号に亘って野々垣関連の資料の引用が長くなるので、先ず手短かに結論だけを書いておこう。

野々垣某の名は、「名古屋市伊勢町八十五番戸士族野々垣直次郎」。野々垣直次郎（1852～1904）が商売のためにタイ渡航の旅券を取得したのは、1888年（本号旅券下付表参照）。来タイしたのは、1888年末か1889年であ

る。後に禅僧として名声を馳せた釈宗演は、セイロンからの帰路、1889年7月10日から21日まで在タイした。釈宗演は、来タイ後、紳商野々垣直次郎から10円の借金をした。釈宗演はタイ側の受け入れへの不満を綴った複数の日本の知人宛書翰を、1889年7月15日にタイを出発して帰国の途に就いた野々垣に託した。野々垣は再びタイに戻る予定であると記されているが、実際に来タイしたかどうかは不明である。

日本商品購入の命を受けて来日したタイ人官吏クンペエ（表記はクンペイ、クンペー、クムベエなど多数）の通訳、山本安太郎の1891年5月時点の話によれば、以前バンコクには日本商店が存在したが、話の時点では日本商店は全く存在していないという。この時、野々垣直次郎は名古屋に在ってクンペエの世話をしていた。

さて、以下に扶桑新聞に1891年5月から7月にかけて掲載された、クンペエと野々垣直次郎関連の記事をそのまま引用したい。これらの記事には、日本とシャムとの関係に関する知られていない事実や訪日タイ人による日タイ比較という興味深い事柄も記されている。

六月二十三日  
野々垣直次郎

野々垣直次郎とクンペエの関係を示す新聞広告（扶桑新聞1891年6月24日号）

野々垣直次郎とクンペエの関係を示す新聞広告（扶桑新聞1891年6月24日号）

扶桑新聞1891年5月28日号「暹羅国政府日本品を買んとす、

7月11日 2014.11.11

暹羅政府は頃日同国收税官吏「クンパハ」といへるものに同政府雇通弁官山本安太郎氏を伴はしめ王室の用品買入れの爲め我日本に派遣することとなり其途次香港に立寄り同地に於て既に日本品夥多を買入れ居れり又我國に來りたる上は諸種の物品を買入る内にも陶器織物を第一の目的とするよしにて右山本氏の直話に拠れば織物の如きは多くは西京西陣の機元に注文するよし又暹羅には斯く日本品を需用すれども商店とは曾て名古屋の長阪某(マ)の雜貨店ありしも今は引ひて一軒もなし又虎列拉は目下盛んに流行しつつありと

扶桑新聞 6月7日号「暹羅國侍從の來名、暹羅國侍從ウィチャンサリ、グニエ氏は同國帝室の用品及び其他の物品を凡そ一万円余購入せんが爲め東京より一昨々日「6月4日」來名し富沢町の有隣亭へ投宿せられしが何か都合ありて一昨日「6月5日」柴町の山田もと方へ宿替へをなしたりと因に記す氏は當市に一ヶ月程滞留するの予定なりと云ふ

扶桑新聞 6月9日号「我尾張とシヤム國、シヤム國人の來名、シヤム王國の人ウィチャンサリ、クンペエ氏は此程當名古屋に到着せり氏は同國王の侍從にして收税の官を兼務する人なる趣なるが今回は表面は一商人の資格にて來りたる由にて國王の用度品買入を兼て貿易商況觀察の爲めなりと云ふ而して又同氏は當地に於て市長具知事其他二三商人の周旋にて都合好く其用を達すべしと云ふ吾人は一般日本人殊に尾張人が親切を以て接せんことを望まざるを得ずシヤム國が東洋に於けるの關係、今日の狀態を以て歐亞兩洲の形勢を察するに一目し以て興亜の必要を感じずんばあらず夫國を亞州に成する者多し然れども得て能く獨立國たるの実を全(ま)つとふする者果して幾許かある或は英に或は仏に或は露にその要領を占めらる然らざれば則ちその羈絆の下に立たざる者果して幾許かある殊に方今に至り露英を始め歐洲諸強國の着眼は東漸して亞州に移轉し來り龍圖虎嘯の演劇は早晩東洋に在て得て免がれ能はざるべき所と爲すシヤム國の如き亦之が要衝

に立つ者と謂はざるべからず東洋將に多事ならんとする今日に於ては亞細亞の諸邦國は輔車相依る者なり彼我互に勉めて相扶助し相奮勉せしめずんばあらず以て各自の獨立自由を安全ならしめずんばあざるなり日本人とシヤム人との交通、シヤム國が東洋に於けるの關係は概ね右開陳したるが如し然り而して我が日本人がシヤム國人と交通を始めたる沿革を採窮(マ)するに早く既に文祿年間(マ)に在るが如し元和寛永の交に於ては日本有爲の士にして商と爲り該地に航したる者少からずと云ふ夫(マ)の山田長政がその勇剛とその才學とを以て大にシヤム國王の親信する所と爲り終にイビル國王と成りたるの偉蹟に至りては兩國交通の美談として後世永く遺(わ)する能はざる處なるべし尾張とシヤムとの交通、山田長政の偉蹟に至りては兩國の史乘永く載せて双方交通の誼を遺れざるべし長政は實に我尾張の人なりと云ふ(尤も或る一説には勢州「伊勢」の人なりとも云ふ)然り而して今回ウィチャンサリクンペエ氏が我日本に來るや先

づ我名古屋に來(きた)る者は先きに名古屋の人野々垣某が該地に向て商業上の行を爲したるの交通に因由すと嗚呼昔者長政既に尾張より出でて業(す)でに彼が如きの偉蹟あり今時ウィチャンサリクンペエ氏我日本に來るや先づ我が尾張に來るもの尾張の人野々垣某との縁故に出ると云ふも亦豈に一奇縁と謂はざるべけんや尾張人は最も親切に接待し出來得る丈の便益をシヤム人に与へ以て益々信交を彼我の間に保つことを勉めざるべからず今の世弊權勢に媚び富強に諂ひ而して貧弱を顧みざるの患なき能はず今夫(マ)シヤム國は貧弱國也と謂(いは)す然れども富強國と稱すべからず宜しく気候の心を以て飽迄好意を以て接待し將來益々親密を加へ來らんことを望まざるべからざるなり東洋の形勢上よりして然らずんばあざるなり將來の政略上よりして然らずんばあざるなり從來の交誼上よりして然らずんばあざるなり今回來名の厚意を迎ふるの上よりして然らずんばあざるなり

氏の登庁、暹羅國侍臣クンペイ氏は前号に記せし如く昨日通弁と共に志水市長の案内にて県庁へ出頭し岩村知事初め柳本書記官、原川、西村兩参事官等と暫時談話せり

扶桑新聞 6月9日号「愛知県仏教會暹羅人を招待す、暹羅國は從來仏教隆盛の地にして殊に其國王の如きは頗る熱心に仏教を奉ぜらるる由なるが今回同國人クムベイ(マ)氏來名せしに就き愛知県仏教會にては来る十一日同氏を門前町の西別院へ招待して饗応し同日は各宗取締及び同會理事員等も参席する由

扶桑新聞 6月12日号「遠島村七宝工場の巡覽、再昨九日シヤム人クンペエ氏は通弁山本安太郎氏及び野々垣直次郎、加藤喜久治、青山仁三郎等諸氏と共に海東郡遠島村へ七宝焼廠に赴きしが諸氏は同郡長横田氏の注意により物品便覧の好都合を得たり又同行は予て携帶せし王宮備付品雛形を示して価額數千円の品物を注文せしとぞ扱此の景況にては七宝焼は將來シヤム國との貿易上に望みありと某氏は語れり

○津島町高等小學校の巡視、右一行には同郡郡長の案内にて同學校に臨み生徒の學力及び兵式体操を一見したるがシヤム人クンペエ氏は斯る僻遠の地にして尚ほ斯る學校と生徒あるかと嘆稱せしと云ふそれより帰途津島に應じたり

○シヤムに於ける日本町、右長政の事蹟杯語りし時クンペエ氏の話に拠ればシヤム國首府なるバンコック(マ)には今尚ほ日本町と稱する町名ありと云ふ因に記すシヤム人は容貌骨格等日本人と異なる處なし



扶桑新聞 6月13日号「シヤム國人來往の小歴史、去る明治十九年「正しくは二十年」シヤム國王族デバオンゲセス「デーワウオン親王」氏(外務大臣)始



真宗本派別院へ赴き先づ仏前に参詣し其れより茶室に至り茶菓の饗応を受け暫時休憩の上書院広間に於て来会者一同に面会せり此時水野道秀氏は会員に代りクンペエ氏を招待したる趣意を述べク氏は黙礼して其厚意を謝し一場の談話を為せり其要旨は暹羅國の仏教も日本と聊か異なる所なし然乍我邦(暹羅)には四個の禁制あり第一盜する事、第二殺生する事、第三僧は妻帯せぬ事、第四僧は虚飾せぬ事、又國王始め一般の儀式は仏前に於てする筈にて大臣となる者も一度は必ず僧となるも其年限は至つて短し一般の僧侶は托鉢して修業せるも大臣は托鉢せず(マ)又日本の僧侶は種々佳美なる衣を着るも我邦は一般に黄色の衣を着るも三通りの外に用(い)ず云々日本と交流を親密にすることは素より希望する所なりと述べ右にて一同退散し夫れより直に下茶屋町の太谷派別院及び橋町の東輪寺へ参詣し同寺にて普茶の饗応ありしとぞ

るが同氏は再昨十日には尾州東春日井郡瀬戸村へ赴きたる処村長水野寛氏磁工組頭取加藤左衛門氏始めの周旋にて陶器館を始め加藤氏川本氏等の工場電場を巡覽し此間官田瀬戸分署長は出張して夫々注意を尽したりしがクンペエ氏は大に技術の精巧を感賞し是迄同國へ輸出したる物品の高価なるに疑ひを抱き居りしが此現場に臨み大に手数を要する事を見し始めて其の實価あるを了解せりと

○象頭の柱掛 クンペエ氏は陶器の事に精しき人と見へ夫々詳細の説明を聞たり大に満足の様子にて興に乗じ自ら粘土を取り即座に象頭の柱掛を手製し今回來遊の紀念として残置たるが其製作の妙なる人々實に感心せりとぞ

○座上の彈琴 右一行は帰途小幡村大島「大島平吉」氏の宅に休憩す座上琴ありクンペー(マ)氏は琴瑟の心得あるの人なるべし採りて弾じたりしがその韻甚だ妙なりしと云ふ

○上京するやも計り難し クンペエ氏は都合に拠れば至急上京するやも計り難し尤も上京したればとて復び來名すべしと昨日

本社社員が同氏を訪ひたる時語られたり

扶桑新聞6月14日号「クンペエ氏の談話、同氏は王室備付品調達の為め先日來彼處此處巡覽したるも何分思はしき品物乏しき趣なり又彼のシヤム國も近時追々進歩の氣運に就かんと欲し首府バンコックより支那に通ずるの鐵道線路を敷設する由なり全体今の國王は民情を厚く重んぜらるより時々微服して一二侍士と微行し民情を視察することゝ怠らずと右は社員「扶桑新聞社員」への物語

○入浴せず クンペエ氏は來名以來更に入浴せざる由なり今其の次第何故と尋ぬるに氏は人に肌膚を見らるるを太(いた)く厭ふ趣きにて全く之れが為めなりと云ふ

○寒冷 クンペエ氏は寒冷(さむい)寒冷と申さるる趣きを聞込みたる故其は何故や此の暑氣に向つて寒冷寒冷の声を聞くととは尋ぬる者も之れあるべけれど

どもシヤム國は熱帯地方に位置るが故なり

○クンペエ氏の出京 同氏は予記の如く昨朝暹羅國の一番汽車にて出京せしが氏は近々復(ふ)たた)び來名すること予期の如しと云ふ

扶桑新聞6月23日号「クンペエ氏の再來、クンペエ氏は通井山本安太郎氏と共に一昨日横浜より再び來名し榮町の山田屋へ投宿せられしが旅行免状に行違の廉ありて今朝神戸へ向け出發する由

扶桑新聞6月24日号「クンペエ氏の告別、暹羅國王の侍臣クンペエ氏は昨日 本県庁へ出頭し柳本書記官に面会し種々在名中厚意に与りたる挨拶を為し用事も整ひたれば近々帰國すとて告

別の辞を述べ其れより帰宿の上旅装して神戸へ向け出發せしが同港より乗船して帰國する由

扶桑新聞6月24日号「シヤム國人クムペエ氏滞在中は懇篤なる御待遇に預り奉鳴謝候一々参堂御礼可仕之處帰國勿々之際取紛れ候に付宜敷伝へ呉れる様申越候間同氏に代り茲に御礼申上候也 六月二十三日 野々垣直次郎

扶桑新聞6月26日号「無届で止(とめ)た科料、当「名古屋」市伊勢町八十五番戸士族野々垣直次郎氏は無届にて此程來名「名古屋」したるクンペエ氏を止宿せしめたるに依り再昨日「6月24日」五拾錢の科料に処せられたり

扶桑新聞7月23日号「君平氏溺死す、本月十二日香港にて一の死体の海上に浮べるを発見し段々取調べたるに是は先頃美術上の視察を兼ね官中の御用品購求の為め我國に來りし暹羅の官人君平(クンペイ)氏の死体なりとのこと知れるよし(さ)て)如何にして氏は斯る最期を

遂しかと云ふに我國よりの帰途仏國郵船アンコナ号にて同港に着し同國領事館に立寄りて船に帰らんと三板(通船)に乗りて波止場を離るると間もなく何故にや投身したるなりと云ふ但し隨行の日本人某は船に残りありて無事なるよし

編者曰く右は昨廿二日発売の大坂朝日新聞に見えたりクンペイ氏は先般我名古屋市中に滞在し海東郡、東春日井郡に七宝焼瀬戸焼等の景況を巡視し本県下三四者と談じ將來日本とシヤムとの間に於て聊か規画する所もありし由なるが今は果して此の悲哀の事ありしが實に一驚の外なきなり知らずクンペイ氏は何の爲めに斯る浅猿(あさま)しき最期を遂げたるか確報を得て更に記載すべし

扶桑新聞7月26日号「クンペイ氏の水死に就ては去廿三日の本紙に何の爲め水死せしか此報の真偽如何聊か疑ひを存し記し置きたるが今当市に於て氏に親く接したる或人の話を聞くに氏が帯び來りたる王室備付品の用事何分思ひ通りに調達行届かず此儘にて帰國成り難し云々と言ひ

たることありたる由なれば彼と此とを思ひ合すれば今回氏の不幸も或は此辺よりせしものかと

1888年初めパーサコラウオンが日暹修好通商宣言の批准書交換のため來日した際、バンコクでタイ語を学ばせるために山本安太郎、山本銀介の二青年や、タイ仏教を学びたいという真宗僧侶の生田得能、善連法彦を連れて帰った。上記扶桑新聞1891年6月13日号の記事によれば、この直後くらいに、名古屋の神野金之助(1849-1922)、森本善七(1855-1928)、野々垣直次郎(1852-1904)の3実業家は、タイとの貿易事業を行うことを決め、このうち野々垣直次郎が、商品を携帯してタイを訪ねたという。外務省外交史料館に保存されている、旅券下付表によれば、野々垣が旅券を下付されたのは、両山本青年や生田、善連と同年、即ち18

88年のことであるから、時期的に符合している。当時、既に日本商品はタイでも大人気を博していた。例えば、1890年4-5月にチュラーロンコーン王(5世王)はマレー半島を一周する旅をされた。まず、マレー半島の西海岸のタイ領ラノーン、パンガー、ブーケット等を経て、ペナンへ。5月23日にはペナンで「日本車」(car)を、即ち人力車に乗られて市内を御覽になり、マラッカを経て5月30日にシンガポールに到着された。國王はプラーヤー・アヌクーン(陳金鐘)シンガポール總領事の私邸に宿泊され、お供の者はホテルに泊まった。翌31日、即ち國王のシンガポールにおける初日の日程は、「14時御写真撮影、15時總督代行謁見、16時病院2ヶ所訪問1000ドル寄付後車で市内



巡覽して夕刻帰邸、21時過ぎ再外出。Sangという中国人の店で日本品（souvenir）をお買い上げ、23時帰邸（タイ国立公文書館 So. B. 17, Prince Samut 日記第8巻、1890年）である。なお、当時の日本（日本）の表記は「日本」。

このように1890年5月にシンガポールを訪問された5世王が同地で、最初に訪ねられた商店は日本商品販売店であった。これはタイの王侯貴族の日本商品好みを示す恰好の資料である。なお、5世王時代、ラノーンからブーケットに至るマレー半島西海岸で徴収された多額のスズ採掘税や徴税諸人納付金は、バンコクに送られることなくペナンのイギリス銀行支店に預金され、国王の外遊や多数の王子の欧州留学に用いられた。更に付言すればソムモット親王は5世王異母弟で同王の秘書長官を生誕に亘って務められた方である。この親王の30余年の日記は、5世王時代を理解する最高の資料である。タイ国立公文書館では、遺族からこの日記の複写を得て公開していたが、2013年初めに閲覧でき

なくなった。

また、1891年3月、ロシア皇太子ニコライ（1894年11月に皇帝ニコライ2世として即位）は日本訪問に先立って東南アジアも歴訪し、タイにも同年3月19日から25日まで滞在し大歓迎を受けた。3月19日、5世王主催の晩餐会が開催された。王官は、象の旗などとともに多数の赤い日本提灯で装飾されていた（タイ官報第7巻、475-481頁、1891年3月29日号）。ここからも王室の日本趣味をうかがうことができる。

ロシア皇太子は軍艦で1891年4月27日に長崎に到着、鹿児島などに立ち寄って5月9日神戸に入港した。皇太子来日前の日本の新聞には、西南戦争で自決せずシベリアに逃れた西郷

隆盛が皇太子の軍艦で帰ってくるという噂で持ちきりであった。皇太子の日本印象は悪くなかったようだが、1891年5月11日に大津で、警備の津田三蔵巡査に切りつけられる不幸な事件が生じた。大津事件は日本中を震撼させた。5月20日、島山勇子という25歳の少女は京都府庁前で皇太子に謝罪の遺書を残して自決した。

タイ人官吏クンペエが、山本安太郎（1872年6月生）を通報として来日したのはその頃である。上記引用新聞記事で見ると、クンペエの来日目的は、王室備付品の購入だというのが、クンペエの名前が一定していないだけではなく、その肩書きも「税金官吏、侍従、侍臣、侍官など」と様ではない。

そもそもクンペエは何者なのだろうか。

通常5世王が王命で派遣する場合、それが国内の地方であっても赴任前に国王に謁見が許され、それが官報に掲載される。まして、王命で海外に派遣する場合は、重大事であるから必ず拝謁するはずである。しかし、1890-1891年当時のタイ官報には、クンペエを日本に派遣するといった記録は勿論、日本に買付のため官吏を派遣するといった類いの記録は一件もない。また、1930年代半ばまでのタイ官報には官吏等の死亡欄があったが、1891



年7月12日ごろ香港で投身自殺したクンペエの死は、官報死亡欄に報告がない。

それ故、クンペエは王命によって派遣されたのではなく、私的に派遣されたのではないかと考えられる。彼を派遣したのは、子飼いの山本安太郎を通じて付いていることから見て、パーサコラウオンに違いない。5世王が信頼する王弟たちと同等の権勢を誇ったパーサコラウオンは、妻プリアン（Princess Priang）の弟であるブラヤー・リテイロンロナチェート（1853-1929）を、英語が不自由であるにも拘わらず、初代駐日公使に押し込んだ際にも、山本安太郎を通訳として付けている。なお、このプリアン女史こそ、本誌2012年1月号で紹介した、生田得能がその行儀の悪さに驚いた女性である。しかし、彼女は5世王の王妃たちとも親密であり、サオワパー皇后を総裁とするタイ赤十字で、皇后に次ぐ地位にもあった。

当時ブラヤー・パーサコラウオンは農務大臣であった。同時に彼は大蔵省に属する税関局長をも兼務していた。しかし、

未だ行政系統が整理されておらず、税関局長は農務大臣よりも重要ポストであり、農務省が税関局の建物内に置かれている有様であった。

そこで彼の農務省または税関局の部下に、クンペエらしき名前前の人物がいなかったかを調べてみた。上記扶桑新聞の6月7日、9日の記事からクンペエは、ウィチャーンサリクンペエという長い名で呼ばれていたことが判る。当時タイには苗字は未だなく、タイ人はほとんどが一音節からなる短い名前しかもっていなかった。それは官僚貴族においても同じである。しかし、彼等は任官昇進によって、国王から官位とともに長い官名を与えられた。ウィチャーンサリクンペエは官名と実名とを連結したもののようと思われる。

ラッタナコーシン109年（1890年4月）1891年3月）の農務省官吏一覧を見ると、省付官吏の一人に、*Na Chuanthana Phumpraphu*（ルアン・ウィチャーンサリ、モームラーチャウオン・パー）という人物が存在する（タイ官報第

7巻、200頁、1890年8月31日号）。この名は、ウィチャーンサリクンペエとほぼ一致する。ルアンは官位、ウィチャーンサリは官名、パー（ペエ）が実名である。異なる点は、クンがモームラーチャウオンになっ

ていることである。モームラーチャウオンは、国王のひ孫に当たる者のタイトルであるが、タイの王族は国王の孫までなので王族ではない。もし、モームラーチャウオン・パーを簡略に、クン・パー（Kun Per）と呼んでいたのであれば、両者は同一人物と見做してよい。その可能性は少なくない。何故なら、タイ口語では、男性モームラーチャウオン即ちモームラーチャウオン・チャーイ（Chai）は、通常クン・チャーイ（Kun Chai）と呼ばれることに示されるように、モームラーチャウオンの代替としてクンを使用する例が存在しているからである。

しかし、クンペエがルアン・ウィチャーンサリ（モームラーチャウオン・パー）だと判ったところで、それ以上彼についての情報は無い。勿論、今後気をつけておけば、行き当たるか

もしれないが。

クンペエはパーサコラウオンが私的に日本に派遣したものであるとすれば、その目的はどこにあったのだろうか。

1891年当時、タイでは路面電車会社の設立、コーラート鉄道線建設への資金募集、運河開削会社の設立など、欧州人とタイの王侯貴族たちの共同出資による事業が活発化していた。タイの王侯貴族たちは、株式会社制度の運用を経験し、資本主義的投資に関心を高めていた。このような中で、日本商品の需用が高いことを知るパーサコラウオンは対日ビジネスを考えていたのかも知れない。1888年初め批准書交換のため来日した際、両山本青年を伴って帰国したのも、単に彼等を教育してタイと日本との架け橋になる人物として育成しようという意図だけではなく、日本との私的ビジネス等において通訳として使おうという考えがあった可能性もある。

次号に掲載する釈宗演の手紙から推測して、来タイした野々垣直次郎は、山本安太郎、山本銀介、生田得能と同様にパーサ



クラウオン邸に宿泊したと思われ。野々垣はバーサクラウオンと面識ができただけではなく、王侯貴族への日本品販売に、バーサクラウオンの力を借りた可能性もある。野々垣はクンペエとも旧知の仲であり、その名古屋訪問を助けただけでなく、クンペエが旅行免状なしに名古屋を再訪して、旅館に宿泊を拒否された際には、自宅に泊めていた。このため、野々垣は50銭の料りに処された。

運動闘士、新愛知新聞創業者の伝記には次のように記されている。

「五、暹羅遠征と貿易商会  
恰もその頃名古屋の実業家本多某、野々垣某の両氏が商用を帯び暹羅国を巡歴して帰朝した。是より先翁は台湾、朝鮮等の国情を具さに調査されたが、両氏の帰朝を機会に暹羅国の事情を詳細聴取して文化の程度等を知ることを得、暹羅国との貿易を開き、先づ外貨を獲得して、然る後機を見て山田長政の軌を学ばんとする理想の下に秘策を胸中に描きつつあつた折柄、偶々暹羅の侍従長(マニクンペー)なる人が近く執り行はれる暹羅

国皇帝即位式(マニ)の調度品購入の御用命を奉じて来朝した。同氏が七宝焼購入の為め来名した機会を捉へ、一夕小幡の本邸に招じて暹羅の国情を具に聴取し且つ貿易の交渉を遂げて尽力方を依頼され、その翌日愛知県知事勝間田稔にも紹介の勞を執られた。此の時クンペーは知事室を眺め廻して『恰も暹羅の宮中の如き立派な部屋』だと眼を瞠「みは」つて驚いたと云ふ逸話もある。

斯くして翁は長谷川五郎(現新愛知重役長谷川良平氏嚴父加藤喜久治(元新愛知支配人等と共に重細重貿易商会を設立された。加藤氏は専ら貿易品の仕入れを担当し、長谷川氏は暹羅に渡航して販売の衝に當るべき諸般の手筈を整へ、呉服、雜貨、漆器、七宝焼等を仕入れる一方汽船の購入契約も了へ、大々的に南方進出の計画を進められた。然るにクンペーは東京滞在中持前の遊蕩性を發揮して花街に足を踏入れ吉原遊技に耽溺して荒亡流連数日文字通りの酒池肉林に浸り、重要な王室の御用命を忘れたかの如くであつた。斯くするうちに暹羅国

皇帝即位(マニ)の大礼も目眩に迫り本国よりは櫛の齒を引く如く帰還命令は発せられた。クンペー、已むなく名残り惜気に吉原から御輿を上げ帰国の途次再び名古屋に立寄つた。翁は此の機会に同氏と同行暹羅に渡航せんとせられたがクンペーは之を拒み、皇帝即位の大礼終了後再び日本に来訪すべければその節同道すべしと約して西下し、神戸港より独逸船に便乗帰路に着いた。歸て船の香港に到着するやクンペーは甲板より海中に投身自殺を遂げた。果せる哉、クンペーの所持品は名古屋で購入せる七宝焼以外何物もなかつた。

連載 20

連載 20  
日本人タイ研究者第一号  
岩本千綱 XXXIX  
日本人タイ研究者第一号

村嶋英治  
早稲田大学アジア太平洋研究科教授

バンコクにおける最初の日本商店は、1891年頃、名古屋市の野々垣某が開き、半年で閉店した商店であると長らく信じられてきた。

在タイ日本人ビジネスの元祖を明らかにするためには、野々垣某という名無しのままでは困るので、筆者の調査によつてその名は直次郎であることを先月号で明らかにした。野々垣直次郎という氏名は、1888年の旅券下付表や、1891年6月に名古屋産品を買付にきたタイ人官吏クンペエを世話したこと

を報じた扶桑新聞の記事に見出された。

しかし、これだけでは、野々垣が在タイしたのは、何時頃なのかは判らない。彼は1891年半ばには名古屋でクンペエの世話をしているから、この時期

の在タイはあり得ない。また、1888年に旅券を取得しているが、直ぐに渡タイしたとは限らない。例えば、外務省の旅券下付表によれば、岩本千綱は最初の旅券を1889年に得ているが、実際に渡タイしたのは3年後の1892年。翌93年帰国して1889年に得た旅券を返納している。

野々垣直次郎の在タイ時期を探すためグーグル・ブックス検索をしたところ、幸運にも、山口輝臣「釈宗演―その『インド』体験」(小川原正道『近代日本の仏教者―アジア体験と思想の変容』慶應義塾大学出版会、2010年所収)の202頁に、比丘出家するつもりでセイロンからバンコクに來た釈宗演が、1889年7月にバンコクで紳商野々垣直次郎から10円を借金

したという記載を見つけた。これで野々垣は、1891年よりも2年も早い1889年7月には在タイしていたことが判明し、筆者の疑問は一件落着いたとも言ふことができる。

しかし、山口輝臣氏が引用している、釈宗演に関する4冊の書籍と一つの仏教新聞に掲載されている釈宗演のタイ関係の書翰4本を読んでもみると、野々垣直次郎の在タイ消息が判るだけでなく、当時のタイの仏教事情や日本とタイ、セイロンの仏教面の関係をうかがうことができる。しかも、1886年6月6日にバンコクでチュラーロンコーン王に拝謁したこともある般若尊者とグネラトネというセイロン仏教徒の紹介状をもつて來たにも拘わらず、王弟グロムムーン、

ワチラヤーン法親王(1860-1921)などタイ仏教指導者たちから相手にされず、僅か10日で逃げるようにバンコクを去った釈宗演は、間もなく臨済宗の有名禪師となつた著名人である。

山口輝臣氏は釈宗演を次のように紹介している。

「釈宗演(1859-1919)という名を聞いて、思い浮かべるものは、人それぞれだろう。管長を務めた円覺寺(1892年、34歳で円覺寺管長に就任)や住持として過した東慶寺を思い出す人もあれば、政財界にわたる華やかな支援者たちを挙げる人もいよう。また明治二十六(一八九三)年にシカゴで開催された万国宗教会議に出席するといった国際的な活躍、とりわけ弟子ともいふべき鈴木大

7 (302)

7月17日 2014.12月



拙とともに、樺を西洋世界に紹介した功績を思い起こす人もあるだろう。あるいは夏目漱石の『雨』の参禅場面で登場する老師のモデルとして知っている人もいるかもしれない」(前掲論文166頁)。

上述の釈宗演のタイ関係4書翰(但し、同一書翰でも、掲載された書籍間に僅かな不一致があるし、誤植もあるが)は、次号で紹介することとして、本号では、幸か不幸かタイでタマユット派(タンマユット派とも言う)比丘に出家することができず、ある意味では道を誤ることとを回避できた釈宗演が、来タイする前、セイロンでどのような沙弥生活を送ったのか、どうしてタマユット派出家に関心をもちようになったのかを検討したい。

この検討によって、「タイで出家した最初の日本人」と言われる岩本千綱『海外仏教事情』(国際仏教協会)第7巻2号、1941年2月、「特輯 タイ

国の仏教」は、46頁に「日・泰仏教関係」の見出しの下、「タイで出家した最初の日本人」と題し岩本千綱を紹介している。は、本当に出家したのか僧形を真似ただけなのか。出家した場合、沙弥出家だったのか比丘だったのか、を考えるためのヒントを提供することもできるはずである。加えて、本稿は、釈宗演のセイロン滞在時代と当時のセイロン仏教事情についても、いくらか新しい事実を追加できるものと思われる。

まず、井上禪定監修『新訳・釈宗演西遊日記』(2001年、大法輪閣)などによって、彼の

セイロンでの足跡を追って見よう。

釈宗演は、1887年3月8日に横浜を立ち、3月31日にイギリス植民地セイロンのコロンボに到着。4月2日には、コロンボから140キロ弱南下したゴール(Galle、スリランカの南部県にある都市)に着き、林董の紹介状をもって同地のグネラトネ(Edmund Rowland J. Goneratne, 1845-1914)を訪ねた。

グネラトネはシンハラ人の名門の出で、ゴールにおける最有力現地人官吏(Atapattu Mudaliar of Galle)であるだ

けでなく、深い学識を有する文化人であり、熱心な仏教徒で仏教復興運動の指導者でもあった。

イングランド国教会がコロンボに創立したパブリックスクールに、彼が1860年代初に学んだ時代の日記は、よく知られている。1865年に現地人官吏に採用され、通訳、知事補佐、警察署長、土地登記官などとして南部県各地で勤務した。1883年にはその功績により、セイロン総督が現地人高官に与える Mudaliar の称号を得た。32年間の官吏生活のうち、1897年に退職した。彼は南部県の



バンコクで1889年7月に野々垣直次郎から借金した釈宗演

3ヶ所にプランテーションを所有していた(Sri Lan Kan Sinhalese / Burgher Family Genealogy, <http://www.rootsweb.ancestry.com/~lkang/gen001.html>)。セイロンで植民地行政官として働き、そのキャリアの初期に

はゴールで治安判事の職にもあった。パリー語研究者 Rys Davids (1843-1922) は「上司と衝突して帰国後、1882年から1904年までロンドン大学のパリー語教授を務めたが、彼はパリー語仏典の刊

行のために、Pali Text Society の創立に尽力し、1882年から出版物の刊行を始めた。グネラトネは、パリー語仏典を校訂編集して同会からいくつもの出版物を出しただけでなく、セイロンにおける同会の窓口も務めた。なお、同会には、チュラーロンコーン王も寄付金を提供している。

さて、ゴールに到着した釈宗演は、1887年4月2日にグネラトネを彼の屋敷(Magatte Mahipala という名の古い屋敷で現在はホテル。このホテルのHPにグネラトネの経歴紹介がある)に尋ね、大歓迎を受けた。

グネラトネは、林董、南条文雄など日本の指導的人物と交流をもっており、日本人仏教徒の留学を呼びかけていた(奥山直司「日本仏教とセイロン仏教との出会い」・釈興然の留学を中心に、「コンタクト・ゾーン」第2号、2008年、に精緻な研究成果が記されている。また、この論文はセイロンの仏教指導

者についても詳しい)。それに応じた、真言宗三會寺(さんねじ、現横浜市港北区)の住職釈興然(1849-1924)は、1886年10月にゴールに到着し、グネラトネの世話でカタルワ(Katalawa)の Seethaweli Karana 寺 (Sagrawarapura, 釈宗演は語意から「金沙寺」と訳)の住職である般若尊者(Bhaddasakara, Bhaddaguru)の下で87年2-3月頃沙弥に出家した。釈興然は、末寺32ヶ寺をもつ三會寺の住職を1882年から勤めており、外国語は一切知らず、年齢も37歳になっはいたが、セイロン行きを決意したのである。

新来の釈宗演は、グネラトネが邸内に設けていた仏事用の庵(Sinhali Avasaya)に4月7日まで泊まり世話を受けた。彼は、旅行中毎日のように酒を飲んで、いたが、ゴール到着を以て禁酒とした(新訳・釈宗演『西遊日記』(2001年、大法輪閣、79頁)。グネラトネは宗演を、ゴール

にあるアマラプラ派(新派)の Sri Paramananda Vihara 寺 (Tatvantham) のセリスマナ チッサ大尊者 (Sri Tissamahinda) およびその弟子であるカタルワ村の金沙寺の般若尊者に紹介した。4月7日、宗演は既に釈尊然が沙弥として修行中の金沙寺に移った。カタルワは、ガールから南東に10マイルほど下った、風光明媚な海岸と大きな Kogala 湖の間にある。

宗演は、5月7日のウイサーカプーチャーの日に、盛大なお祭りの中で得度受戒した。この日の日記に釈宗演は次のように書いてある。「ようやく私の得度受戒の式があった。戒師はセリスマナチッサ大尊者、証明師は隣の寺の某摩訶長老(マハデーロー)、阿闍梨は般若尊者である。式の終了後、千数百の男女が、かわるがわるやってきて、私に礼をしてゆく。……あんな人がきて、私に、こういって。この国が、ひとたび英国の植民

地となつて以来、このような盛んな行事は、絶えてなかった。もともと、それ以前の、この国に君主がいた頃は、君主の力をもつて、大きな仏事をおこなっていた。今日は、そうではない。国に君主なく、人民の信教の自由に任せている。しかしながら、本月、本日、仏教徒の信仰が、期せずして一体となり、その盛典を挙行した。それは、一つには仏恩に感謝し、二つには日本国の仏教の同胞の方々に對して好意をあらわし、三つにはあなたの受戒得度を祝うものである。と。本日より、日本の法服を脱ぎ、この地の僧侶の威儀にしたがうこととなる」(前掲書、110-111頁)。

ところで、この日記に言う得度受戒とは、比丘になるため227の具足戒を受ける儀式 (Sangha) であったのだろうか、それとも釈尊然と同様に10戒を受けるだけの沙弥に出家 (Uttama) したものであるか。釈宗演はどちらであるかを書いてはいない。

戒師(セリスマナチッサ大尊者)、証明師(グナサーラ尊者)、阿闍梨(般若尊者)の3名を挙げているところから見れば、比丘に出家した可能性も考えられる。沙弥に出家するには、戒師1人で十分であり、寺の住職(この場合は般若尊者)が戒師となればよいから、僧伽ゴールからセリスマナチッサ大尊者を戒師に招く必要はない。しかし、証明師という表記は気になる。もし証明師が正しい表現であるならば、比丘出家に必要な3師及び証人のうち、羯磨師を欠いているからである(釈宗演の言う阿闍梨は、教授師と同一であると考えれば)。

比丘に出家する儀式には、3師と証人となる比丘が必要である。即ち、3師とは、儀式の長である戒和上 (Sangha)、教授師 (Sangha)、羯磨師 (Sangha) であり、後者の2師はタイ語で Sangha と言われる。証人となる比丘 (Witness) はタイのウェブ情報

では、正式には25人必要なのだ。そうであるが、10名以上なら儀式を行うことができるであろう。

残念ながら、釈宗演の出家は、釈尊然と同様に沙弥出家であつたようだ。その理由は、釈宗演は1887年5月27日の日記に2人の童子の得度式について、「得度式は、総じて、前に述べたときと同じなので、ここで再び言及しない」(前掲書121頁)と書いており、前に述べたときは、5月7日の自らの得度式のことを指す。童子の比丘出家は有り得ず、沙弥出家しかない。その沙弥出家の得度式が自分の得度式と同一というのであれば、釈宗演は沙弥に出家したことになる。また、同年7月22日の日記には、「午前、隣村の飯道場の祈禱に際して施される昼食におもむく。夕方、礼仏。比丘たちは不在である。ちなみに、記す。この地の説経法は、比丘と沙弥が同じ席に坐り、声をそろえて誦経することを禁止

している。(律に書かれているのか)。したがって、檀家から請われて説経するときは、比丘だけがこれに応じ、沙弥は関わらない。ただし、食事のときは、沙弥も施食にあずかることができる」(前掲書177-178頁)。この部分は、檀家の説経に比丘は行つて不在であるが、沙弥である釈宗演は、比丘と同席して説経することはできないので、寺に残つて夕方勤行(礼仏)をしたと読むことができる。

1887年8月4日(タイ暦では9月15日、即ち9月の満月)、宗演は、グネラトネ邸内の庵 (Simali Ayasaya) で般若尊者、釈尊然とともに雨安居を始めた。雨安居の期間中、

この庵にセリスマナチッサ大尊者がタイの比丘を連れてきたり(前掲書192頁)、タイのラーマンニヤ「ラーマン・ニカーイ」派の比丘が訪ねて来たり(前掲書194頁)した。このように同宿したタイの比丘たちから、宗演はタイ仏教事情を聞いたはずである。雨安居は10月30日(タイ暦では12月14日、即ち12月の満月の1日前)を以て終わった。

タイでは、雨安居入り(カーウ・パンサー)は、タイ暦の8月黒分第1日、即ち8月(閏月のある年は後の8月)の満月の翌日に始まる。1887年のタイの雨安居入りは、7月6日であったが、この年のセイロンの

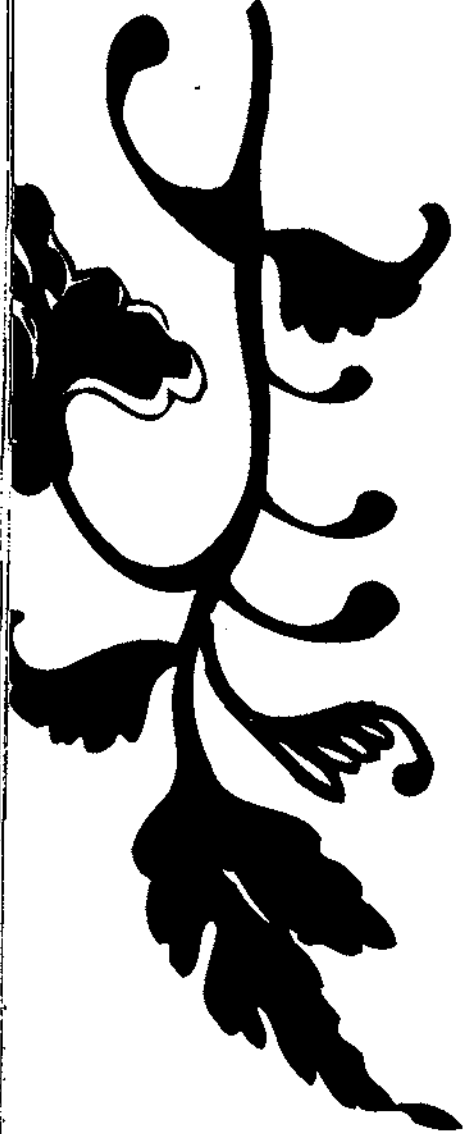
雨安居入りはタイより1ヶ月遅れであった(更に正確に言えば、満月の日の計算がセイロンはタイより1日早かった)。セイロンでは毎年そうなのであるかどうかは判らないが、1889年7月に来タイした宗演がタイの雨安居入りの日を1ヶ月間違えるという大失敗をしたのは、ここに一因があるかも知れない。

宗演らは雨安居明けの後もグネラトネの庵に留まっていたが、11月18日にグネラトネから次のような話を聞いて喜んだ。「英字新聞が報道しているといつて、グネラトネ氏が話してくれたところでは、わが国の小松宮中將殿下におかれては、最近、ヨーロッパから帰国の船旅

のみならず、タイ国に巡遊された。タイ国王は、御船に乗り、シンガポールまで出迎えられ(ママ)、そのほかにも、最上の礼を尽くして、殿下をもてなされた。これに先立って、タイ国王の弟君「デーワウオン親王」もまた、欧米巡遊のみならず、わが日本にも立ち寄られたとの由を聞けば、今後、両国の交際も始まり、私たち仏教者の交流はないか、と想像して、おもわず顔がほころんでいるのが、セイロンに漂泊している釈の宗演坊その人である。」

これは外務大臣デーワウオン親王が来日して、1887年9月26日に「修好通商に関する日本国暹羅国間の宣言」に調印し、両国間に国交が開かれたので、日タイ仏教交流が始まると率直に喜んだものである。

1888年1月26日、宗演と10ヶ月をカタルワ及びゴールで共に修行した釈尊然は、コロンの仏教学院 (Vidyodaya Pirivena)



に修業の地を移し、学院長で  
シヤム派(旧派)高僧のセリスマ  
ンガラ(Phra Samsana)の指導を  
受けた。この後、釈興然は、1  
890年6月9日に旧都キャン  
デいのシヤム派寺院で比丘に出  
家した。彼は上座部の比丘にな  
った最初の日本人と言われている。

釈興然は1893年9月、日  
本に帰国し、真言宗三會寺住職  
に復帰したが、上座部の比丘と  
して1924年3月15日に死亡  
するまで戒律を守り続けた。こ  
の間、釈興然は駐日シヤム公使  
ブラヤー・ナリソンラーチャ

キットの輪旋で1907年10月  
から翌年11月までバンコクの寺  
に滞在した(東元多郎「グナラ  
タナ釈興然和上伝」、『海外仏教  
事情』第10巻3号、1944年  
6月)。残念ながら、筆者はバ  
ンコクの釈興然に関する詳細な  
情報には、今のところ辿り着い

ていない。

カタルワに残った宗演にはタ  
イ行きの希望が次第に膨らんだ  
ようである。沙弥に出家したあ  
とも宗演が長らく滞在したグネ  
ラトネ邸内の庵には、しばしば  
タイの僧が宿泊しただけではな  
く、宗演にとつて最も身近な3  
名、即ち2人の師、セリスマ  
ナチッサ大尊者と般若尊者、それ  
にグネラトネが、1886年6  
月に1ヶ月以上もタイに滞在し  
て帰ってきたばかりであった。  
それどころか、セリスマナチッサ  
大尊者は、バンコクでタマユッ  
ト派に再出家さえしていたので  
ある。

1886年6月のセリスマ  
ナチッサらセイロン僧侶のタイ訪  
問とタマユット派への再出家  
は、百数十年前のアユタヤ時代  
にセイロン王がサンガ(仏教出  
家者の集団)再興のためにアユ  
タヤ王に国書を寄せて以来のタ  
イ・セイロン仏教関係史上の大  
事件であった。1886年6月  
6日の『Chotmaihet Phra-



上座部仏教比丘に出家した最初の日本人、釈興然

rachakitt Reisan (国王行事日  
誌)には次のように記されて  
いる。

「本日、ブラ・セリスマナチッ  
サが拜謁を願い出た。午後5時  
過ぎ、国王は謁見の間にお出ま  
しになり、係官とグロムムーン・  
ワチラーヤーンがブラ・セリスマ  
ナチッサを先導してきた。国王  
は然るべく応接され、ブラ・セ  
リスマナチッサが文書を捧呈し  
た。文書に曰く、国王にセイロ  
ン仏教の擁護者になつて欲し  
い。セイロンのサンガはアマ  
ラブラ派、ウバリーウオン派「シ  
ヤム派」、ラーマン派など3、4  
派に分裂し、規律についての考  
えも異なる現状にある。そこで  
各派の長老が一つの派に統合す  
ることを協議した。しかし、国  
家の統治者は仏教を信仰しては  
おらず、仏教の擁護者を探すこ  
とは難しい。そこで仏教徒は、  
世界にシヤム国ほど仏教が栄え  
ている国はなく、世界の王者で  
仏教を信奉されているのはシヤ  
ム国王ただ御一人だけであるの

で、国王にセイロン仏教の擁護  
者をお願いするに如くはないと  
いう見解で一致した。そのため、  
アマラブラ派のブラ・セリスマ  
ナチッサ外2名の僧侶が海を渡  
り遠路はるばる来訪し、また、  
シヤム派の長老セリスマンガラ  
も代理の僧侶を一人同行させて  
いる。と。ブラ・セリスマナチッ  
サは、セイロンのサンガの意思  
を奏上した。傾聴された国王は  
ことのほか、お喜びで、タマユッ  
ト派の規律を学ぶためにシヤム  
に留学してくるセイロン僧を庇  
護すること及びセイロンの全て  
の僧侶を庇護し支援することを  
お引き受けになった。国王はグ  
ロムムーン・ワチラーヤーンに、  
セイロン仏教の擁護者となつ  
て、仏教を一層盛にしたいとお  
話になった。ブラ・セリスマ  
ナチッサは、タマユット派の長  
老に、タマユット派の規律を学  
んで実践したいと求めた。グロ  
ムムーン・ワチラーヤーン、グロムム  
ン・ワチラーヤーン、ソムデット・  
プラワンラット、ソムデット・

プッタコーサナーの長老たち  
は、承諾し全員、水中に浮かぶ  
警察の船アーサーワディーロッ  
ト号上に集まり、河を結界とし  
てブラ・セリスマナチッサのタ  
マユット派再出家の儀式をその  
晩に行つた。セイロンが仏教の  
規律をシヤムに求めたのは、今  
回が2回目である。アユタヤの  
プロマゴート王時代、まだセイ  
ロンが王者によつて統治されて  
いた時、国書をアユタヤに送つ  
て来てシヤムの僧侶の派遣を求  
めたことが第1回目である。同  
王はブラ・ウバリー長老とその  
弟子に仏教弘布のため渡海を要  
請された。それでセイロンにウ  
バリーウオン派「シヤム派」と  
いう名のサンガが生じ今日まで

存続している。第2回目の今回  
は、セイロンには王者はなく仏  
教を信仰しない者たちが統治し  
ている。それ故シヤムに見るよ  
うな仏教の興隆はない。セイロ  
ンの長老僧侶と仏教徒から、  
シヤム国王を仏教の擁護者に推  
戴したいという意思を知らされ  
たチュラーロンコーン王は、深  
く同感され喜ばれた。長老僧侶  
と仏教徒の希望に添ってできる  
だけ援助することをご嘉納に  
なった。」

また、国王秘書官長であつた  
王弟ソムモット親王は、日記の  
1886年6月6日の項に、次  
のように記した。

「今日、グロムムーン・ワチ  
ラーヤーンがブラ・セリスマナ



チツサを先導して国王に拝謁させた。拝謁には(ワチラヤーンの外に)プラ・キティサーンムニーも立ち会った。私はグロムムーン・ワチラヤーンに会い、彼とセイロン僧を読書室に待機させた。一方、プラ・セリスマナチツサは今晚タマユット派へ再出家した。それはプラヤー・ナワラットが管理するアーサーワディローット号上で執行された。グロムムーン・パワレートの戒和上、他の2師「Wissara」はグロムムーン・ワチラヤーン(タイ)とプラ・アリヤムニー(ラーマン)である。2人のソムデットなど高位の僧たちが立会、少し離れて16名の青年僧(全てパリアン保持者)も並んだ。……本日午後5時過ぎ国王は謁見の間にお出ましになり、まず

グロムムーン・ワチラヤーン1人を召されて様々な話をされ、それからプラ・キティサーンムニーにプラ・セリスマナチツサを案内させて引見された。プラ・セリスマナチツサはバリー語で書いた、長々しい文書を捧呈した。要約すれば次のようになる。即ち、国王にセイロンの仏教を支援して頂きたい。セイロンにタマユットを弘布するため、50人(30人でもよい)の僧侶を収容してタマユットを学び実践することが出来るタマユット派の寺院を新設して欲しい。既存の古い寺院を使おうにも狹隘過ぎて使えない。例えば、プラ・セリスマナチツサ大尊者が居る

Sri Paramananda Vihara (Gallur) 寺院はわずか10名を収容できる余地しかなく、般若尊者 (Wissara) の居る Swarnawalikarama (Korumbura) にはわずか15名しか収容できないから。国王はこの考えに賛成されたが、果たしてセイロンで土地を購入できる権利があるかどうか、イギリスの法律は認めているのかどうか疑問が残るので、今後検討することになった。

グネラトネも、セリスマナチツサ大尊者のシャム行きに同行し、国王にも拝謁したことは、1886年7月12日付で彼がパソコク(宿泊先はプラヤー・パサコラウオン邸)から日本の南条文雄に出した、次の書翰から明らかである。

「拙者去る「去月」四日錫蘭「セイロン」より無事に当府に到着フアヤ、ブハスカラランセ「プラヤー・パサコラウオン」閣下の館に滞留罷在候 閣

下は当国王殿下「チュラローンコーン王」の宰相たり 拙者錫蘭出発の節は日本へも巡遊可致心組にて其事を先便に御報達致し置き候へ共今日に至りては気分も頗る宜しからず此後の海路旅行覚束ず是非なく当初の目的をすて日本へは渡航致さざることに相決し申候 固より失望の極には候へ共性質船の動揺に堪へずして病を致し候に因て此の如き次第に立到り候 当府滞在中は貴頭緒紳にも面会致し国王殿下にも拝謁仕り候 当府は来る十五日頃出発今月末には錫蘭に帰る候積りに御座候 此書翰は吾敬重する親友林「林董」君にも御示し拙者日本へ渡航の企を止め候事同君に御知らせ被下度候

再白雲照律師の徒弟「釈興然」を錫蘭へ御派遣の義可然御取斗之ありたく衣食等は拙者相賄ひ申候バリー「バリー」語教育のことも周旋可仕候貴国に於て南部仏法を了解せんとするにはバリー語を学び候事最も必要と存



じ候

千八百八十六年七月十二日  
暹羅国バンコック府 イアル  
ジー グーネラトネ [E. J.  
Goneratne] 『能潤会雑誌』  
第14号、1886年10月5日、  
22-23頁。

当時のタマユット派については次号で説明することにして、取り敢えず、山田均氏の次のタマユット派概説を引用しておく。「タンマユット派、タイ仏教教団内部の派閥。ラーマ4世が即位以前、出家中に主導した戒律遵守運動に端を発する。ラーマ4世は出家中、ワット・マハータートやワット・サモラーイを拠点にして、同調する少数の僧とともに、当時の仏教教団内部に行われていた慣習的

な戒律実践を否定し、パーリ語原典にそった戒律実践を主張する運動を行っていた。タンマユティカと自称した彼らは、1836年にワット・ボーウオーンニウエートウイハーンを活動の拠点としてから、しだいに社会的な位置を得るようになり、81年にはタンマユット部として教団組織内で独立の地位を得た。

その後、ラーマ5世王弟ワチラヤーン親王など名僧があいついで出て教団内の近代化に功績を立てたこと、多くの王族がタンマユット派寺院で出家したことなどから、教団内での勢力も高まり、一般社会からも特に評価される傾向が生じた」(石井米雄・吉川利治編『タイの事典』同朋舎出版、1993年、207頁)。

1886年以後、タマユット

派がセイロンで弘布したという話は聞かないが、セリスマナチツサ大尊者との会見から11年後、チュラローンコーン王は訪欧の途中、セイロンのゴールに立ち寄られ、大尊者の寺、Sri Paramananda Vihara 寺を訪問され、またコロンボではグネラトネにも再会された。

1897年4月7日、チュラローンコーン王は御召艦マハーチャクリー号(船長以下主要船員は英人)に乗り、300人ばかりの従者を連れてパソコクを出発、訪欧に旅立たれた。4月11日シンガポール着、4月13日同地発。4月19日朝セイロンのゴール着、コロンボより先にゴールに上陸したのは、コロンボは4月20日朝御到着の予定で準備していたからである。4月19日午後ゴール上陸、まず丘の上にある Sri Paramananda Vihara 寺に御参拝。アマラブ派の比丘24人と沙弥16人が出迎え、その長セリサンカチツサ (Wissara) セリスマナチツ

サ大尊者とは別人)がシンハラ語で歓迎の詞。この寺(1824年建造)は丘の上にある小さな寺で比丘沙弥合わせて10名くらいしかない。続いて平地にあり、規模の大きい Gangaraja 寺を御参拝、セリスマンガラ (Wissara) が出迎えた。国王の行列をゴールの民衆は所狭しと集まって迎えた。4月20日午前1時、ゴール出帆、朝7時過ぎコロンボ着、9時45分御召艦にセイロン副総督、Sri S. S. S. (セイロン人官吏の長) などが出迎え。解でコロンボ港に上陸されるとセイロン軍司令官やコロンボの英人官吏50名余、各国領事、現地人官吏の長6名(全員 Magistrate 或は District Officer のタイトル有り)、仏僧(セイロンの全仏教派を代表して祝詞を読んだ)、ヒンドゥー教の祭司が出迎えた。続いて全セイロンの仏教徒の委員会の名で、グネラトネ (Mudaliar Goneratne (M. of Galle)) が歓迎詞を読み上げ、

Col. Olcott が仏教徒旗を献上した。同日午後、御宿泊所の Green's House にもコロンの有力仏僧や仏教徒が訪問。4月21日朝汽車で旧王都 Mandalay へ、セイロン総督が出迎え、Green's Hotel Kandy 泊。セイロン総督主催午餐会（総督は午餐会後さつさと避暑地に引き揚げてしまった）、その後釈迦の齒があるリガワ寺を御参拝、僧侶約500人が歓迎した。国王は釈迦の齒に触ることを望まれたが、前例がないとして断られた。国王は王威を侮辱するものであるとして寺からの献上物を返却され、また国王が奉納された品物は全て取り返されてホテルに帰られ、その後の歓迎行事を断られた。4月22日 Mandalay の植物園、旧王宮を御見学後、汽車でコロンボに戻られ、夕方、御召艦でコロンボ港（プラーヤー・シーサハテープ）『国王ラッタナコーシン』116（西暦1897）年訪欧記、第1巻（タイ語）、1907年刊行、54、78頁。

さて、釈迦の師であるセリスマナチッサ大尊者、般若尊者、それに支援者である大恩人のグネラトネの3人が1886年6月にバンコクまで出かけ、チュラーロンコーン王にセイロン仏教の擁護と、セイロンにおけるタマユット派の弘布のために寺院建立とをお願いしたのである。セリスマナチッサ大尊者は、バンコクでタマユット派に再出家させた。宗演が、最も身近な3人から聞いたタマユット派の話しに強い影響を受け、セイロン仏教より、タイのタマユットの方が尊い、師が再出家したタマユットで比丘出家を試みたと思うようになったとしても自然なことであろう。

プラーヤー・パーサコラウオンは、1888年初に日暹修好通商宣言の批准書交換のため訪日し、2人の真宗僧侶、生田（織田）得能と善連法彦（よしつら・ほうげん）を伴って帰国したこと、は、何度が書いた。生田、善連

の両者がバンコクに到着したのは、1888年3月ごろである。生田はプラーヤー・パーサコラウオン邸に留まって仏教研究を続け、帰国後『暹羅仏教事情』をものしたが、善連は間もなくバンコクを発ってセイロンに向かった。

当時、仏教の発祥の地、印度の一部と認識されていたセイロンへの留学は、日本人僧侶のあこがれの的であったが、一方、タイ（暹羅）やビルマへの留学は馬鹿にされていたようである。善連が、そのような先入見



でタイからセイロンに移ったのかどうかは不明だが、しかし、セイロンに来てみると、セイロンの仏教は、130年前の1753年にタイのウバリー長老を招いてやつとサンガ（出家者の集団）が再興されたばかりであった。これはポルトガル時代のカンボジアで、全ての僧侶は例外なく還俗を強制され、従わぬ僧侶は惨殺されるか、タイに逃れたために、カンボジアのサンガが失われ、その後タイの僧侶の力を借りてサンガが再興されたことと似た状況である。

善連は、1888年8月25日付でコロンボから、教学論集宛に、ヘンリー・ステイル・オルコット (Henry Steel Olcott) 1832-1907 を会長とする神智学協会のコロンボの事務所を郵便物の宛先とすることを連絡するとともに「錫蘭通信」を寄せた。その中で、釈迦演にも言及しながらセイロン島に於ける仏教の歴史と現状を述べ、タイ仏教にはセイロン仏教以上に学ぶべきものがあり、従来の見方はあらためられるべきだと、次のように書いてある。

「其後宗教の世界が一転して戦争場となり再転して仏教の撲滅となり、僧侶を駆りて還俗せしめ拒守せしものはことごとく虐殺せられ殆んど無仏の地となりし」〔西暦1701年サンガ消滅〕と云へども、厄運も亦常住なる能はず更に仏教興隆の良運に逢へり、然りと云へども全島僧宝を欠き戒縁具足せざるを以て遠く暹羅に行き僧宝を請す国王の尊信厚く国王自ら受戒しサ

ンクハラと云へる大僧位を称せり故に僧侶となるに種族を簡「えら」びプラーマ族の外は僧となるを許さざりし、然るに他の種族の者は是を不愉快に思ひビルマに航して留学し其僧と共に帰りて更に種族を簡「えら」ばず一派を開けり、故にサイアム相伝を旧派「シヤム派」と云ひビルマ相伝を新派と云、而して旧派は凡「およそ」百三十年前〔西暦1753年〕の開宗にして生「善連」の親教師スマンガラは此宗の高僧なりされども大管長に非ず、新派は一名をアマラプラ ニカーヤ（派）「アマラプラ派」と称へ八十八年前〔西暦1803年〕の開宗に權る宗演君の親教師パニユニヤ（般若）尊者は此宗に属す、此新派又分れて数派となり今より二十年前〔西暦1864年〕アンプガンワチーインデヤ・サウワラニヤナ・サノミと云僧がラーマンニヤニカーヤと云一派を開きし、此ラーマンニヤ派は特別に行儀を尊び式法は惣て仏

の在世と同じく行くに蝙蝠傘を携ふることなく歩むに草履を用ることなし目今三百五十人の僧ありて頗りに伝法弘通せり世人の信仰も此ラーマンニヤを第一なりとす、右の如く未だ幼若なる錫蘭の仏教なれば不完全なる部分も多く有るなり、日本にてはサイアムやビルマと云へば留学するを嗤笑「あいしやう」し罵るが如き有様にて錫蘭「セイロン」と云へば羨む様に候へ共決して然らず暹「シヤム」には旧慣古風の仏教を存し錫蘭には聊か百三十年前の気味に適して開きしかの疑あり、企望す仏教新聞記者案見を吐きて青年僧侶の方向を誤らるることなかれ外航留学を奨励する人は必ず暹とビルマを云へ錫蘭を第一と云勿れ、国王自ら仏教を尊信し国力を尽して仏教を紹隆するの国何れにかある唯横濱を去る西の方三千三百里一の盤谷あるのみと答ふべし」（善連法彦「錫蘭通信」、『教学論集』第58編、1888年10月、12、13頁）。

なお、訪日後帰国途中のオスマントルコ海軍のエルトゥールル号が、1890年9月16日夜、串本近くで台風のために岩礁に激突し、座礁沈没した。同号の船員中587名が死亡もしくは行方不明になり、69名のみが救出された。この69名を送還するため、1890年10月5日に品川を出航した日本海軍の比叡と金剛は、神戸で69名を乗せ、翌年の1891年1月2日にオスマントルコ帝国の首都、イスタンブールに送り届けた。両艦は往路の1890年11月16日にコロンボに寄港した。その際、真宗善連法彦と小泉了諦（1851-1938）の二名がオスマン帝国視察を希望して便乗した。両人はトルコを経て、1891年2月半ばには、パリに現れた（新愛知、1891年4月19日号）。以上から、善連法彦は2年3ヶ月間ほどセイロンに留まったことが判る。

1886年6月6日に、チュ  
ラーロンコーン王に拝謁して、  
同王にセイロン仏教の庇護者に  
なれるようにお願いし、同夜  
チャオブラヤー川上の船中でタ  
マヌット派に再出家したセリス  
マナチッサ大尊者のフルネーム  
は、Bulathgama Dharmajankara  
Siri Sumanatissa Nayaka  
Thera (1795-1891)  
である。スリランカでは  
Bulathgama Sumana 比丘という  
名の方が一般的なようだ。

大尊者は、1795年にスリ  
ランカの中部県に生れ、同地の  
シヤム派で得度したが、その後  
南のゴールに移り、アマラプラ  
派に再出家した。ミヤンマーで  
の修行からセイロンに戻った  
後、1864年にラーマンニヤ  
(Ranana) 派を創立した  
Ambagahawatte Saranankara 比  
丘 (1832-1886) も、  
大尊者の弟子であった(因みに、

ラーマンニヤ派はタイのタマ  
ヌット派に類似しているとい  
う)。大尊者は、このようにセ  
イロン仏教の3派と親密なコネ  
があった。彼は、そのコネを仏  
教復興運動組織化に利用した。  
彼は仏教3派全てが参加して1  
860年代に展開された仏教・  
キリスト教論争 (Buddhism  
controversy) における主要人  
物である。彼は、セイロンのみ  
ならず、シヤムの国王「ラーマ  
4世王」からも寄付を得て、1  
863年(ママ)にセイロン仏  
教徒の最初の新聞印刷所  
(Latopakara Press) が創設さ  
れるのを助けた。神智学協会  
創立者のオルコット大佐 (Col.  
Henry Steel Olcott) とブラ  
ヴァツキー夫人 (Helena  
Blavatsky) が、1880年  
に初めてセイロンを訪問し  
た際、最初に訪ねた寺院は、  
ゴールにある大尊者の寺院

[Sri Paramananda Vihara]  
であつた (K.N.O. Dharmadasa,  
Language, Religion, and  
Ethnic Assertiveness: The  
Growth of Sinhalese Nation-  
alism in Sri Lanka, Univer-  
sity of Michigan Press, 19  
92年, 334頁)。両人は、  
この時、大尊者から五戒を授け  
られ公式に仏教徒となった。オ  
ルコットはセイロンの仏教ナ  
ショナリズム運動においても重  
要な役割を演じた。なお、後述  
するように、日本の仏教徒は算  
金して1889年前半にオル  
コットを日本に招待した。

スリランカ人名事典(英文)  
にも、セリスマナチッサ大尊者  
の生年は1795年と記されて  
いるので、彼は1886年に来  
タイした時は、90歳を超えてい  
たことになる。彼はラーマ5世  
王(1853-1910)の世  
代ではなく、その父であるラー  
マ4世王(1804-1868)  
の世代である。彼は、ラーマ4  
世とは即位以前の出家時代から  
親交があり、同王は彼の仏教復  
興運動に資金的援助を与えた。  
ゴールの Latopakara Press  
が1860年代初めに発刊し  
た、シンハラ語新聞 Lanka  
Lotava は、セイロンの仏教復  
興運動上に大きな役割を担っ  
た。それを印刷したイギリス製  
印刷機は、ラーマ4世が大尊者  
に寄贈したものであつた。

スリランカの近代文化史上の  
重要歴史遺産であるこの印刷機  
は、大尊者が創立した、カタ  
ワの Ranwella Putana Viharaya  
(Ranwella Putana Viharaya  
(Ranwella Putana Viharaya)) に移され、  
大尊者が印刷に使った。そし  
て現在に至るまで同寺が保管し  
ている。この寺院こそ、188  
6年から1889年にかけて、  
釈尊、釈宗演が沙弥として住  
み込み、般若尊者の指導を受け



釈宗演が面会した頃のワチヤーワン法親王 (1860-1921)

た寺である。なお、釈宗演が用  
いた金沙寺 (Sarnawalukarata,  
Nagasturagiri) という名称は、  
現在はいれられていないようだ  
ある。

釈宗演は、般若尊者に別れを  
告げ、1889年6月末バンコ  
クに旅立つ前に、「般若」尊者  
は殊に小生「宗演」の行業頑固  
なるを証明すると、別紙活版

刷りの証明状を被下「くだされ」  
候」(長尾大学編著『宗演禪師  
書翰集』一松堂、1931年、  
68頁)と、同年6月19日付の鈴  
木天敬和尚宛ての書翰で述べて  
いるが、この証明状は般若尊者  
の印刷局で印刷したものと思わ  
れる。同書翰中には、「先日東  
京の雲照律師(興然の師)より、  
小生へ書面を被送、律師より般

若尊者の印刷局へ半紙六万枚  
と、蒼龍篇より金二十五円紙料  
として御送り被下候様子、初め  
て拝承致候」(同69頁)という  
記述もある。

ラーマ4世王寄贈の貴重な印  
刷機を保管している Ranwella  
Putana 寺は、2012年11月  
に火災で炎上した。印刷機も被  
災したが、灰燼に帰すまでには  
至らなかったようである。タイ  
外務省のHPによれば、同外務  
省は、ラーマ4世王との縁を考  
慮して2013年3月に寺院再  
建費の一部として20万バーツ  
を、スリランカ外務省を通じて  
寄付した。2014年10月22日  
に同寺の再建竣工式が行われ、  
タイの臨時代理大使も式典に招  
かれた。

ラーマ4世王とセリスマナ  
チッサ大尊者との親交の詳細に  
関する資料を筆者は、未だ目に  
していないが、チャオブラヤー・  
テイパーコーラウオン『ラーマ  
4世王年代記』には、セリスマ  
ナチッサ大尊者が登場する。1  
853年初めにラーマ4世王  
は、セイロンに10名の僧を、60

人の兵士の従者を付して派遣し  
た。使節は1853年1月8日  
にバンコクを出発し、1月25日  
にシンガポール着、2月6日に  
同地を発つて、2月18日にセイ  
ロンのゴール港に到着した。セ  
リスマナチッサ大尊者や官吏が  
船まで出迎えた。タイ使節は  
ゴールからキャンディに向けて  
出発する3月1日まで、同大尊  
者の Sri Paramananda Vihara  
寺院を拠点として活動した。

さて、釈宗演の訪タイ及びバ  
ンコクの日本商人、野々垣直次  
郎の話に戻ろう。

釈宗演は、1888年末前後  
には、1年後の1889年末頃  
に訪暹する計画であると日本に  
書き送っているが、同宿の釈興  
然がコロンのセリスマンガラ  
大尊者 (Uttarakhande Sri Samangala  
1827-1911) を院長とする  
仏教学院 (Vithayakul Pithana) に  
去った頃、訪暹の時期を半年早  
くし、89年6月末にはセイロン  
を立つことに変更した。

『明教新誌』1889年7月  
28日号は、「釈宗演氏の書翰と  
パンナセカラ氏の保証状(マ



マ」と題して次のように報じている。

「在錫蘭「セイロン」の洪嶽宗演氏より本邦知友の許へ贈られたる書翰ならびに氏が暹羅國移錫（いしやく）に付きケ、パンナセカラ「般若尊者」氏の同氏に与へられたる保証状の写は左の如し

拜啓各親下倍々御万福に可被為遊御接化（こせつけ）候条法門之大幸此事に奉賀候二に小拙幸に無魔渡島以来満二ヶ年余戦々競々として修梵行修梵学罷過ぎ候間此段御安神可被下候陳者兼而先便にも申上置候通り這回当地求君「グネラトネ」並に般若尊者の懇篤なる紹介を以て暹羅國へ渡航致候事に決定仕候此の第一目的は茲獨「比丘」之大戒を伝受致度志願に出候元來錫蘭「セイロン」之戒法は中世一時滅絶に歸し爾後暹羅緬甸より法脈を相承致候事に御座候得者現今錫蘭の戒脈は右両國の支出に御座候論本島の戒法も清浄純白に御座候得共種々宗派別々の面御有之外国人の吾等には幾分不自由なる感情有之且

般若尊者は先年暹羅國王の請待にて同國へ被赴同國のタンマユツケ「タマユット」派の律儀尤も純良なる事を常に稱嘆被致居候旁這回小拙の還行は尊者及び求氏の大賛成に出で同國の皇族大臣へも夫れ夫れ添書を貰ひ候間先づ小拙の目的も多分成就可致事と自信罷在候同國へ渡行の上は法親王金剛智三藏「ワチラヤーン」に（國王の弟）從ひ更に波利学を修め候上にて茲獨戒を伝受の素願に御座候此段御安神可被下候此行釈然氏とも相談致候得共同氏は近來多病勝にて今回同伴難相成因て小拙一人先づ錫蘭之事に取極め申候其他真宗僧二人は目下俗士同様の風林にて修学被致居候右真宗二人の方は戒法に關係無之候間唯々學問のみ被致居候何れも杜健に御座候而小拙滿二年間種々御慈情を勞せられ被下慈恵の恩賜にて纔に正命を相統致候感謝難尽候而小拙二間の行為は別紙般若尊者の証明状（ママ）に詳なれば右の状御一統へ御披露被成下宜敷拜謝之程奉願上候學資慈恵の諸君へ一々修書の暇な

く候間乍憚宜布御伝声奉願上候何れ暹羅に到達の上にて委（くわ）しく御通知可申上候今日尚（ママ）ガール府を出立仕りコロンボへ罷越し該地に於て一週間斗り滞留仕候上定期の汽船にて新嘉坡へ出で夫より暹羅盤谷府へ着の次第に御座候海路凡そ二週間斗りと聞及申候今回の路費は昨今落手致候新堀丑太郎氏が昨年十一月十六日に差送られ候金に御座候

切て東海君には時々不絶新聞紙御差送り被成下御厚情多謝の至に御座候右転地に付暫時御見合せ被下度且つ明教社へも同斷御伝通願上候無端更渡宋建「桑乾」水、却望并州是故郷とは今日小拙の感情に御座候二年間栖み馴れし此仏國を去るに臨み如何にも懐かしく悲しく存候況や異郷殊域の同教者が別を惜みて泣きつかこちつ致候有様は鉄作の心肝も亦断腸の氣味に御座候小拙は二年間辛抱を喫せり然れども此の地の僧俗が小生へ愛敬し呉れ候一片の同教相愛心は深く心肝に徹し申候先は旅装準備中急ぎ大乱筆にて転地の事情略

して各位の清閑に達し奉り度如此に御座候頓首

「1889年」六月十五日

謹上 坂上真浄、圓山元魯、天澤文雅、守永宗教、東海玄虎、加藤宗眼 各位座下

東京慈恵有志諸大和尚 同諸大居士 各々

錫蘭にて 洪嶽宗演九拜

切て別紙ケーパーナセカラ氏の保証状「証明状」原文は左の如し

#### Certificate.

The bearer of this letter Kogaku [洪嶽宗演], is a Buddhist Priest of Japan who arrived in Ceylon two years ago, with letters of introduction to Edmund Gooneratne Atapattu Mudaliyar of Galle, and under the care of that Chief was entrusted to me, to be taught the Pali language, with great ceremony, on the full moon day of the month Wesake, in the year of Lord Buddha 2430, and was

named Pannaketu.

Since he was placed under my charge he has by his good conduct, and strict discipline, won my esteem, and has acquired a tolerably fair knowledge of Pali and Sinhalese.

He leaves me now with my permission and consent for Siam to obtain Upasampada ordination from the Dhammayutika sect [タマユット派], and after a short period of study to return to his native country.

I have pleasure in testifying to his exemplary character, and uniformly good behaviour to me and his brother pupils during his stay with us.

This is delivered in the year of Lord Buddha 2433, the 13th of Poson Pura.

By

Dharmacarya Pannasekhara Thera, of the Sarnawalkarama, Kataluwa, Point de Galle, Ceylon.

K. Pannasekhara [般若尊者]

般若尊者は、証明状（保証状）に、仏暦2433年と記している。タイでは西暦1889年は、仏暦2432年に当たるから、セイロンの仏暦はタイより1年進んでいることが判る。

また、上記宗演書翰は、「其他真宗僧二人は目下俗士同様の風林にて修学被致居候右真宗二人の方は戒法に關係無之候間唯々學問のみ被致居候」と当時セイロン滞在中の2人の真宗僧侶に言及している。この2人は、仏光寺派善連法彦（1865-1893）と本願寺派東温藏（1867-1893）のことである。両名は連れだつて、ゴールにグネラトネを訪ね、同地で釈宗演にも会ったことがあ

る『反省会雑誌』第20号、1889年7月、16頁。善連も東も、上座部仏教にて得度することなく、従つて黄衣は纏わず、「俗士同様の風林」であつた。コロンの善連が黒衣の袈裟で写つた写真も残っている。この事実および次号で紹介する生田のタマユット出家回避の資料から見て、真宗大谷派生田「織田」得能（1860-1891）も、在タイ時に出家したことはありえない。本誌の2012年2月号で、筆者は生田が出家したと推測しているが、ここに訂正する。

釈宗演（1859-1891）のタイ行きに、紹介状を与えた般若尊者、グネラトネは、セリスマナチッサ大尊者に同行して来タイし、1886年6月6日に5世王に拝謁したことがある。その際、グネラトネは、プラーヤー・パーサコーラウオン邸に宿泊しているの、多分パーサコーラウオン宛に紹介状を書いたものと思われる。来タイした宗演も、同邸に宿泊した。ワチラヤーン法親王（1860-

1921）宛の紹介状には、般若尊者が印刷した英文証明状の外に、同尊者の南條文雄宛書翰（真宗大谷派本願寺事務所文書科『本山報告』1885年11月号参照）同様、ローマ字表記のパーリ語文があつたかもしれない。

但し、セリスマナチッサ大尊者の弟子である般若尊者は、セイロンでも殆ど知名度がない。彼は、セイロンの近代仏教史に名を残すほどの名声はなかつたと見えて、スリランカ人名事典（英文）には取り上げられておらず、また英文ウェブ検索でも日本僧（宗演、興然）とセイロンの關係を報じた最近のコロンボの「日刊紙」（The Daily Mirror）の2008年12月29日号の記事以外にヒットするものはない。

紹介状を携えた釈宗演は1889年7月10日夕刻にパンコクに到着した。しかし、予想だにしなかつた、「冷待」、「嚴待」が待っていた。タマユット派出家とパーリ語学習という二大計画は来タイ1週間で断念、7月



21日には正に這道の体でタイから逃げ出す羽目となった。彼が、タイは野蠻国、タイ人は無人情と罵罵しつ、タイから書き送った数通の手紙が残されている。これらを読みながら、彼の身に何が起ったのかを見てみよう。

第1信「略啓。一昨日不取敢端書を以て御報道申上候通り、去る十日「1889年7月10日」夕刻当盤谷府へ着し先づビヤ「フラー・パーサコーラウオン」大臣の家に仮居致候得共、未だ土地の様子も不申分殊に大暑にて閉口仕候。扱て当国へ転錫に付ては錫蘭の俱君「グネラトネ」及び般若尊者より当国の大臣皇族方へも夫々添書を被付被下候得共、仲々当地の風俗は一向物に順着不致風にて決して待みに相成らざる事と存候。併し不日法親王金剛智三蔵「ワチラーン」に謁して就学の方角を可相定心得に御座候。扱又這回当地への旅費は錫蘭にて領収致候御惠送の五十円にて、諸費並に旅費とも辛うじて相并し申候得共扱て当地へ着の節は纔二

三円の残金に相成り、夫も着早々何物（ママ）にか盗取られ大だ当惑致居候処、幸ひ当地滞在の日本人即ち尾州名古屋の紳商にて野々垣直次郎氏より、金十円借用致し先づ当分の危急を助かり申候。就ては這回右野々垣氏一応帰国且つ横浜へも被罷越候由に付き、小生より相頼み貴商へ被参候答に致置候間御面会の上にて右十円の借用を返却し、且つ御札御述へ被下度奉願上候。且つ為念別に端書を以て貴下へ右事情御願に及候也。扱て又兼て御厚情にて帰朝費御周旋被成下候由感謝の至に御座候。右は御都合にて一日も早く御惠送願上候。勿論郵便局へ御照会の上例の錫蘭の延引に相成候様の次第ならば幸に、右野々垣君再応の渡来も有之候間同氏へ御托し被下候とも宜敷奉存候。猶当地の様子は同氏より委細御聞知願上候。一舟老師海蔵老師等各位座下へ宣布御伝言を乞ふ。何れ就学万端好結果を得候上にて續々御報道に及ぶべく、先は右差当り要用のみ如是に候。

「1889年」七月十三日  
暹羅盤谷府 釈宗演洪岳  
新堀丑太郎兄坐右（長尾宗魁、宗演、神師の面目）、隆文館、1920年、103-105頁。  
釈宗演が、バンコクで泊まったのは、パーサコーラウオン邸の日本人男性用の部屋である。そこには1888年2月にパーサコーラウオン（1849-1920）が日本から連れてきた、タイ語学習中の山本安太郎、山本鑑介の2青年、仏教研究中の生田得能が住んでいた筈である。また、宗演は、来タイ直後になしたの持ち金も盗まれ無一文になったところを、名古屋の紳商、野々垣直次郎に助けられ10円を借りていたので、野々垣も同邸に宿泊していたものと思われる。野々垣は一時帰国のため、1889年7月15日にタイを離れ香港經由で横浜上陸の予定であったので、宗演は借金の返済を横浜の新堀丑太郎に依頼した。なお、野々垣が再度タイ

に渡航したかどうかは旅券下付表で調べる必要がある。  
宗演はパーサコーラウオンに、セイロンのグネラトネが宗演に示した程度の待遇を期待していたかどうかは判らないが、初日から冷淡な受け入れに戸惑った。  
第2信「卒啓。今朝（ママ）已に一本の手紙を認め野々垣氏へ相托し、着後の事情を申上げ且つ十円借用御支払の儀御願置き、夫より午後法親王金剛智三蔵の寺へ参り、謁見の上小生此地へ渡来の志願を述べ、錫蘭より持参致せし、般若尊者及俱君等の紹介書を呈し候処、法王（ママ）の申さるるに、今日は已に入制より一日（一昨日雨安居の結制なり錫蘭の結夏「けちげ」と一月の相違あり。錫蘭にては

来月の満月布薩なり。是れ小生が予想の相外れ候次第）を経過せし事故、居多の僧房尽く比丘沙弥の座位を定めたり、一室も空室無之に付き、此夏（げ）に限り「即ち3ヶ月間」当寺に滞在為致候事、六ヶ敷く被申、小生も殆ど当惑仕り、已に三英里斗り（当寺と該寺との距離）も携へ参り候重き荷物を、又ぞろ当寺へ持帰り、右の由当寺大臣「パーサコーラウオン」に相談致候処、大臣の申すには、然らば先づ当寺近傍の寺「ワット・ブラユーン」へでも今夏（こんげ）は逗留被致、朝夕共（ママ）托鉢三昧に、露命を被支方可然との事が、即ち今十四日「7月14日」の有様に御座候。扱て這回小生が遙々辛苦を致し、錫蘭より当地へ罷越候志願は、第一比丘戒を受くる心得にて、且つ波利（パーリ）学も愈益勉強の積、当地の大臣方へも、確実なる紹介書を持参致候得共、当地の風俗は仲々淡泊なる事に、一向順着致し呉れず、実に予想外の困難を感じ、住居さへ未だ相定まらざる次第に候。素より

本来無一物の身にて、海外万里に行脚致し候事故、木の下の石の上の艱難は、疾く覚悟に候得共、第一当地にて失望の事は、波利学者の少なき事にて、折角小生の目的も、或は水泡に帰せんとす。錫蘭の般若尊者は、先年当国王の請待にて当府へ罷越され、殊に法親王金剛智三蔵と懇親の間柄にて、万端彼我の事情を被存居候。其尊者の言葉に従ひ、其尊者の親切にて紹介書を貰ひ、当地へ渡来致し候は、素より盤谷府の寺観の美を慕ひ、山水の雅を愛し、ブラブラ六部行脚を致す積りに無之、唯々清浄の戒統を、日本へ伝へ度き微志にて、始終貴君等の御厄介をも顧みず渡来致候処、目今の処にては未だ住居さへも定らぬ次第、其困却御察し可被下候。若（もし）又或連中に云はすれば、依頼主義は万事あてが外れるとて、嘲けるかも知らず候。併（し）かし、大法の為に依頼も卑屈も無之、小生は随分人の股をくぐり橋の下に靴をも捧ぐる所存に候得共、唯一の恐れは、此五尺の身体に御座候。此厄介の体も

自分の物と思へば、鴻毛よりも軽く存候へ共、人の物法の物一切衆生の共有物と思へば、余り非常の辛苦を致し、露命を縮め候様の事有之候ては、仏祖に対して報恩の分無御座候。唯々志願成就迄は、此の厄介なる一嚮（らん）の頑肉も、金玉の如く大切に存候。決して小生の気儘にあらず。扱て明日よりは愈々足にて、知らぬ村園門若の間に鉄鉢を掛けて、淨乞食を致す所存に候得共、到着後未だ四五日を經ず、東西も弁せぬ此の地に、乞食するは可なり難儀の事に御座候。且つ当節は九十度強「摂氏32.2度余」の大暑にて、仲々炎威恐ろしく候得共、急須樹に上る何ぞ其の枝を扱ばん。縦令火の中水の中でも、法の為と思へば太だ嬉しく存候外、余念無之候。実は這回小生が此地へ渡来せしは、生涯の失策に候。余の事は兎も角も、学問の出来ぬ道に踏み迷ひ候は、返す返すも

残念に御座候。是に付けても、錫蘭の般若尊者の御親切を思ひ出し候。若し貴君前報の如く、帰朝費御周旋被下候筈に候得者、天敬老師瑞応老師等へ御相談の上、一日も早く御惠送願上候。且つ東京の方は、万事天澤文雅師と御相談被下候はば、至極宜敷と存候。且つ東京博文堂の伊藤直三氏へも御相談を乞ふ。鎌倉円覚寺中且つ管長老師には、決して御心配掛け被下間敷く候。扱て明日の出帆にて、彼の野々垣氏帰朝被致、幸ひ貴商店へ立寄被下候筈に付き、御面会の上にて親しく当地の模様御聞知被下候はば思ひ半に過ぎん。扱て又当地には織田得能（当時未だ生田姓）氏と申す、真宗の学士留學被致居候に付、万事同氏と共に勉強の積りに御座候。然るに小拙此地に向後半年も、学問の良師を求め、若し不





幸にして明師に逢はずば、再び  
錫蘭へ参り、波利語の大成を期  
し度き心願に候得共、是又一つ  
の妄想煩悩に御座候。小生目下  
の心事千緒万端、一に禿筆に尽  
し難し。万々御高察を乞ふ。猶々  
鹿山管長老師始め一舟瑞応の二  
師へも、手翰を呈し度奉存候得  
共、右の体多楽(ていたらく)に  
て卑微に任せず候間、貴君よ  
り直に御話願上候。上來陳述す  
る処は、少々愚痴に相成御愧か  
しく存じ候得共、実以て当惑の  
段御察を乞ふ。併し一難を経て  
一勇を増す位の事は、率丸のあ  
る蟲の常に候得者、決して小拙  
の困難の事情を聞いて、御驚き  
被下間敷候。先は野々垣君の出  
帆に際し、大急ぎにて乱文相認  
め申候。御判読可被下候。余の  
妄想は又次便に譲る。早々頓  
首

「1889年」七月十四日晚  
暹羅盤谷府 釈宗演より  
新堀丑太郎様 坐下(前掲『宗  
演禪師の面目』94-98頁)。  
上記第2信(7月14日付)は、  
7月15日にバンコクを発つた  
野々垣に、第1信(7月13日付)

とともに託したものである。な  
お、第2信中の日は混乱して  
いるが、次のように解すること  
ができる。  
結制と結夏はともに安居(出  
家者たちが雨季の3ヶ月間寺院  
で集団生活し、外泊を避けて修  
行に専念すること)に入る(カー  
ウ・パンサー)という意である。  
カーウ・パンサーの日は、タイ  
では陰暦8月黒分第1日である  
ので、1889年は7月13日に  
当たる。宗演は、7月14日にワ  
チャーン法親王を訪ねたの  
で、カーウ・パンサーに1日遅  
れてしまつて、法親王の寺(ワッ  
ト・ボーウオン)の僧房は満杯  
になつており空き室がないとし  
て滞在を断られたことになる。  
宗演と同世代のワチャーン  
の冷た過ぎる対応振りから見  
ると、同法親王と宗演との間には、  
うまく意思疎通が出来なかつた  
可能性が高い。宗演はパーリ語  
で法親王と話したと次の第3信  
に書いている。法親王は幼児か  
ら高度の英語教育を受け満19歳  
で出家する前は英語を用いて兄  
5世王の秘書を務めた能吏で

あつたし、宗演もパーリ語より  
も英語の方がまだしも達者で  
あつたと思われるので、英語で  
話していればもう少し相互理解  
ができたようにも思われてなら  
ない。  
宗演はそれでも、パーサコー  
ラウオンに相談して同邸に隣接  
するワット・プラユーン(ブン  
ナーク一族の菩提寺)の僧房に  
住むこととし、且つ生田得能と  
ともに学習をしようと意を取り  
直した。  
なお、宗演は托鉢を過度にお  
それていたようである。多分、  
セイロンではグネラトネの厚遇  
によつて、殆ど托鉢に出ること  
もなかつたのであろうが、彼は、  
托鉢は炎威の下で行うものと決  
めてかかつている。確かにセイ  
ロンではそうかも知れないが、

上座部仏教圏でも僧侶の托鉢の  
時間帯は異なり、タイは早朝6  
時、カンボジアは8時、セイロ  
ンは10時ごろである。  
セイロンの托鉢時間が朝10時  
ごろであることは、セイロンで  
比丘に出家した釈興然が、18  
93年9月に帰国後、次のよう  
に講演していることから明らか  
である。  
「行乞の事、凡午前十時頃宜  
しきを計り、鉄鉢を洗ひ水滴を  
帯びたるまま、衣服を整へ、上  
衣と複衣とを重ねて通肩に被着  
して、その鉄鉢「鉢」を右手に  
置き、右の衣の辺をもて之を覆  
ひ、左手を添ふ。其道を行くや、  
両眼を地上に注ぎて敢て他を顧  
みず、徐ろに俗舎に至り麻「ひ  
さし」外一尋「6尺」にして黙

然として立つ、施主出でて食を  
授ければ、先づ左手にて衣の右  
辺を取りのけ、鉄鉢を露はして  
食を受け、また衣を覆ふて咒願  
「じゅがん」して徐ろに去る。  
此の如くにして次より次に至  
り、足ることを知りて還る」(釈  
興然「南方仏教事情」、仏教学  
会『仏教講話集、明治28年夏期  
講習会』、1895年、170  
頁)。  
しかし、宗演の我慢は2日も  
もたなかつた。ワット・プラユ  
ーンの住職に、蜘蛛が巣をはりめ  
ぐらし、鼠の糞で足の踏み場も  
ない幽霊部屋をあてがわれた宗  
演は、遂に怒り心頭に発した。  
第3信「過日(十三日)尾州  
の人野々垣直次郎氏の帰朝に際  
し小生当地へ着後の景況略申上  
置候得者「へば」定めて小生還  
回遭難の趣御承知被下候事と奉  
存候。扱て去る十二日(ママ)  
法親王へ謁し諸々の紹介書を呈  
し、パーリ語にて談話の末留学  
の義を願候処、已に入制後に付  
き掛錫「かしやく」を被断折角  
錫蘭よりの紹介も水泡に帰し、  
空しく当家大臣「パーサコーラ

ウォン」の許に帰り其の翌日当  
家の菩提寺へ参り掛錫の義を頼  
候処明日より来院せよとの事に  
付き、其の翌日又ぞ同寺に参  
り候。然るに漸くにして一の乞  
食部屋を示して此処に安んぜよ  
との事に付き其の部屋を一見す  
るに、蜘蛛の網鼠子の糞足を措  
く処なく手を付くる場所なし。  
顧ふに今時懲役人と雖も是の如  
き牛部屋には栖息に堪へざら  
ん。併し是が真の苦行三昧と存  
じ少しも不服には不存候得共、  
到底此の野蠻国にては、小生の  
目的を達する事不叶大体の小生  
の志願はパーリ語なれ共、此の  
国にては右パーリ語の学者たり  
し者は寥々曉天の星も希なら  
ず。小生此の地の僧に逢ふて  
パーリ語を以て会話を始めんと  
存ずれ共一般の僧侶は実に無学  
無識にして、日用の会話さへ  
碌々出来申さず、但小生が親し  
く対話してパーリの学者と存じ  
候ひしは彼の法親王金剛智三蔵  
とピヤ「パーサコーラウォン」  
大臣の菩提寺住職なる某和尚の  
み。然れ共此の坊さん達は根が  
皇族とか大臣の素姓とかにて

仲々権柄強く矢張り俗情を脱せ  
ず、特に少々気の利いた坊さん  
は法要等にて小生等に教授して  
呉れる暇なく、逆も小生は此の  
国に見込無之候。小生が余り此  
の国を信じて来りしは小生の見  
込違ひなれば、無論自身に小言  
を云ふの外なく候得共、実以て  
此国の人間共は無人情無道愛な  
る事言語道断の事に候。総てが  
数日の間に於て一日一返「遍」  
の食事も小生に恵み呉れざる様  
の有様、素より小生は南方式の  
戒法に準じ、五戒は無論手に金  
銀は触れずと存じ頭は勿論眉毛  
も剃り落し、色は炭団「たどん」  
の如く相成り、纔か身に付くる  
物は仏制の三衣一鉢のみ如何し  
て此窮厄を透らんか、身には一  
文銭の蓄も尽き候得共仲々素手  
にては一枚の紙も一足の草鞋も  
求むる事を得ず、殊に土地不馴  
の折柄無仏性の輩は外国人と付  
け込み、無止みに剥ぎ取り致候  
様の次第、実に盤谷府は聞いて  
極楽見て地獄、成る程微弱なが  
らも独立の仏教国なれば、王宮  
は壯麗なり寺院は美観なり。然  
れ共人民の無学なる(学者もあ

れ共)僧侶の無人情無見識なる  
実に驚き入りたる次第なり。小  
生錫蘭にありし日尚人民の無氣  
力僧侶の無学識なるを愁ひた  
り。今や当地に来て当の風俗人  
情宗教政治の実際を見て之を錫  
蘭に比すれば、月窟氷炭も皆  
ならず即ち錫蘭の風教學術は香  
「はるか」に当国の上位にある  
なり。且つ錫蘭人の法の為に親  
切なる錫蘭僧の求法者を優待す  
るは実に感心な事共なり。小生  
は聊か口業の恐るべきを知る。  
然れ共這回小生が遭遇したる当  
地の冷待、土人の無情なるは殘  
念憤懣切齒然泣百千万の言語も  
之を尽すを得ず。否々右に陳述  
する処は昨今小生の胸中に鬱積  
する悲憤の悪煩悩にして、決し  
て之を人に向つて述べざれ共  
但々貴君に向て此の厄難を訴ふ  
るは、蓋し懇親の間柄なればな  
り。小生自ら謂へらく我れ海外  
に行脚して少しく我慢を退治せ  
んと、今や暹羅に來て無明再燃  
然止するに忍びず、嗚呼小生の  
脇も未だ未だ迷ひだらけなりと  
自ら慚愧の至に候。返す返すも  
小生が当地へ参りしは一段の見



込達に御座候。唯々小生の志願を達する見込さへあれば飢え死候迄も決して前志を挫かず候得共、目的の無き此の野蠻國に貴重時間を費し有りもせぬ施を剥ぎ取らるるは如何にも残念なれば、断然と思ひ切り是より香港迄汽船の甲板上に打乗り、支那内地を漫遊して帰朝の途に就く覚悟に極め候得共、昨今の災難身に半文銭の蓄へ無之に付き少々持合せたる道具を売却して香港迄引き揚ぐる事に決し候。身は僧侶にして寺院に錫を掛くる事出来ず法を聞く事を得ず、徒らに当家「バーサコーラウオン家」の信施食（一日一飯の）を受け大よりも劣りたる卑屈な日月を消し候は、日本人の恥辱と存じ千思万考の末事茲に決し候。殊に着後身体十分の健康を得ず多少の病兆も有之候得共、氣象のみは残念と云ふ字と共に愈益壯にして鬼をも引き裂く心持に候得者、決して御掛念は無用に御座候。パリ語も独学にて勉強致せば致される位の事は已に錫蘭にて相学び候得共、当國へ参り候千万の辛苦が

一朝の水泡に帰し候ひしは遺憾やる方なく候。元來当地にも日本人二十三人も在住致居り候得共、一部は學生にして暹羅の土語を学び居り一部は南法家にて金もつけを目的となし、其の下等の一部は御聞もあらん彼の破廉恥の賤婦が色を売り春を鬻ぎ日本の國辱を海外に晒す奴原なりと聞く。小生はパリりと云ふ仏法の原語を求め且つ仏戒を伝へんとの目的なりし。然れ共已に其の志願を達するの目的なく豈に此野蠻國に貴重光陰を消し、師友父母の厄介を掛くるに忍びんや。成程今少しく辛抱を致し一年か半年も此の地に住居致し候はば、世間の僥倖は必ず有之事に候はん。其僥倖たるや世榮のみ虚名のみ法に於て何の益あらん。是れ小生が怒て此國を去り否々荒蕪として笑て暹羅を出づる所以なり。此段深く御高察を乞ふ。扱て此書御一見早々兼て御願置候婦朝費速に香港迄御通達被成下度幾重にも御願申上候。其の金は香港在留日本領事館にて釈宗演と御振出を乞ふ。相成るべくは一文にても

多きを幸とす。其の中にて少したりとも有用の書籍相求め度存候。先便野々垣氏に托せし書中錫蘭にての諸費一覽を御覽に入れ候。（以下引用者略す）恐惶頓首

此の手書直に一舟老師瑞應老師へ御披見に入れ被下度願上候。

「1889年」七月十七日夜十一時 盤谷ピヤパー「ブライヤー・バーサコーラウオン」大臣の男部屋にて 釈宗演 急書

新堀丑太郎様（前掲「宗演禪師の面目」98-103頁）。

彼が、住職に牛部屋をあてがわれて切れたのは7月16日。急ぎ香港行きの船賃を工面し、デッキバツセンジャーとしてパノコクを去つたのは、7月21日である。船賃の工面のため、セイロンから携えてきた貴重な仏教資料を生田得能に手放した可能性がある。香港に着いた宗演は、ここに居合わせた帰國途中の野々垣から更に10円を借金した。

第4信「引用者前略」小生



は錫蘭より十分の紹介を帯び渡航致候にも拘はらず、誰一人の親切に周旋致し呉れ候者無之到着の翌日より鉄鉢を捧げて托鉢せよとの嚴待、其他一進一退も金銭に非れば叶はず其無人情なる事は実に錫蘭と雲泥の相違に御座候實に進退維谷「これはまり」候ひしは盤谷数日間の有様、殊に当時身体も不加減の折柄殆んど当惑に暮れ候得共かくあるべきに非れば持合せの品物を日本人「生田得能？」に売却して十三円の金子を得且つ其以前野々垣氏の厚意にて借り候十円の子も盤谷滞在の費用に尽き辛うじて香港行の明鳳丸と申す蒸汽船に乗り込み、二十一日出帆にて一昨日迄凡そ十日間

甲板上飢渴を凌ぎて風雨に晒され、先づ万死中に一生を得て香港迄参り……又ぞろ一困難と存じ候処彼の暹羅にて始めて逢ひ厄介になり候尾州の紳商野々垣氏、猶当家「香港の旅館」に逗留被致居候に付き心苦しく存じ候得共又十円借用致し此金にて、上海へ向け甲板上の汽船にて転じ同地の本願寺出張所へ参り相頼み食料のみにて滞在致候はば、入費も幾分か安く相あがり可申と存じ此次の便船にて上海へ向け渡行の事に決心致候

（以下引用者略す）

二番地盤増方 香港押巴頓街二十「1889年」七月三十一日 釈宗演九拜

天敬大和尚、瑞應大和尚 各座現下、新堀丑太郎様貴下（前掲「宗演禪師の面目」105-108頁）。

次の文章からも宗演は、釈尊の教えをオリジナルの言葉（パリ語）で理解できる最初の日本人を目指すという大望をもっていたように読めるが、こ

こに彼の志は道半ばにして雲散した。

「予が不敏を顧みず纔かに一二護法紳士の草鞋を恵むありて遙かに本島「セイロン」に渡来せしも専ら釈尊が長舌「言語」を以て演述せられし原語即ちパリ語を伝受せんが為めなり而して小乗仏教の安心を究むることとは之を第二の目的に置くものなり東北の仏教授受連綿寔に法材に富むと雖只釈尊の真言（パリ語）と貝葉の經卷（原文）とを伝来し保存せざりしは豈に遺憾ならずや（中世支那の高僧輩は屢入竺して仏音を伝受せり今將「は」た存するや否や日本の大徒にして曾て渡天「天竺」して仏語「パリ」を修学せしものあるを聞かず）（釈宗演「西南之仏教」、東京博文堂、1889年1月刊、63-64頁）。

宗演は、ブライヤー・バーサコーラウオンやワチラーヤン法親王の冷たいあしらいに激怒した。彼等が本場にチャイ・ダムだったためか、意思疎通に問題があったためか、当時のタイは仏教の海外宣布に未だ無関心で

あったためか、将又宗演が無一文であつた所為か、様々原因が考えられる。一つ確かなことは宗演の期待水準が高すぎたことである。宗演は、セイロンで厚遇を得たことに加え、彼自身が大変気の利く、捌けた性格であつたので、彼なら他人にしてやるはずのことを、他人も自分にしてくれることを期待したものとと思われる。信者に対する宗演のサーピス精神旺盛振りについては、野口復堂（善四郎）の回顧がある。



上座部仏教に関する日本人の最初の書物、釈宗演『西南之仏教』（1889年1月刊）

会長であったオルコットに白羽の矢が立った。オルコット招請を依頼された、京都出身の野口復堂（1865年生）は1888年9月9日にフランスの郵船で神戸を發つてインドのマドラス（現チェンナイ）に向かった。往路、同年10月セイロンに立ち寄り、コロンボ留学中の釈然然とも面識ができた。コロンボで面会した釈然然、善運法彦、またこの時はカタルワの金沙寺に居たので面会は出来なかったが、1893年8月10月に開催されたシカゴ万国宗教会議に同道した釈然然について、野口は後年次のように回顧している。

て、俗服で下宿より学校へ通学したもの、却々（なかなか）の才物でオルコット氏二度目の来朝には通井の勞を取つてくれた人、惜しい事には才子多病、若死に致された。最後に訪問とは言ひたいが、道が遠いのと何時電報が来てマドラスへ出發せねばならぬか分らぬので、本意を達しかねたのは、当時ゴール港に独学して居られて、後に鎌倉円覚寺派の管長となられ、後年復堂（わたし）と一緒に米國に往つた釈の宗演禪師である。此の禪師は善運師と同様幼々の才子で、機鋒鋭峻容易に當るべからざる所がある。米國より帰朝のお土産の中にはダイヤの指輪がいくつもあり、お負けに復堂の買ひし分迄お買上げになると

云ふ豪勢。それ故東京での禪堂は三井俱樂部、お弟子には河野広中、野田大塊「卯太郎」を始め大臣や名士が袖を連ねるのみか、禪那の中には帝劇の女優も居ると云ふ派手やかさ。之に引換へ釈然然は愚直に如実に、頭も眉も剃り落し、朔風雪を捲く嚴寒の中、麻の三衣即ち大風呂敷を素裸に巻き付け、ブルブルと慄へながら、鉄道局の復堂の室に入り来り、先づ火の前で丸くなり両手を火に翳しつつ「何うしても斯波宗教局長が、予が一宗の創立を許るしてくれぬ。信徒の数が少くとも二万以上なければならぬと云ふ。実に困つて了ふ」との落胆。そこで復堂は、「世間普通の理屈から言へば、抑も一宗の開山たるべきあなたに服従は如何。印度は熱國故素肌に麻の三衣もよいが、此の寒い日本の冬に熱國同様の扮装、之には尋常以上の理屈がなければならぬ。其の尋常以上の理屈を尋常の人に會得せしむるは容易の業ではない」と言つて居る処へ、コンコンとノックの音が聞えると、釈然然は大声

で、「ヘンツリか、ヘンツリか、明けて這入れ」と言はれたので、復堂は魂消（たまげ）て居ると、戸を明けてぞれへ這入つて来たのは真黒な錫蘭（セイロン）のボーイであつて、東神奈川「興然の三会寺へは東神奈川で乗換小机駅下車」迄の切符二枚と釣銭を列べて見せて居る。釈然然は頻りに眼で見て勘定して居るが手には触れない。そこで復堂は「不自由ですな釈然然さん。今時のお寺さんは金銭に余り手を触れ過ぎてよくないが、又あなたの様に嫌過ぎるもよくない。又ボーイの名は何ですヘンツリなんて、若し此の席に欧米婦人でも居つたら、貴女侮辱で國際問題を起しますぞ」と言つて、早速名を改めさす事に致した。同じ仏教の僧侶であつて、同じ錫蘭の島で學んで来た、宗演、興然の二師が、斯く迄の相違を生ずるとは、復堂はいづれを是とも非とも申しません。唯々中道実相こそ肝要と思ひます」（野口善四郎「四十二年前の印度紀行」、『大鼎』所収、二西社、1930年1月刊、23・25頁）。



連載 ⑤  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱（41）

臨濟宗の僧侶釈然演が、パリ語学習継続とタムユット派出家のためにセイロンからバンコクに1889年7月10日に到着した際、彼は同地で無一文となり名古屋出身の在バンコク日本人商人、野々垣直次郎（1852-1904）から借金した。

1月号で紹介した釈然演の書翰によれば、野々垣は1889年7月15日にバンコクを發ち、7月末には香港に滞在、その後横浜に上陸し名古屋に帰つて居る。野々垣は、バンコクを發つ時は一時帰國の予定であつた。本當に一時帰國後、再来タイしたのなら、明治22年度前半の8月9月頃に旅券下付を受けてもよいはずである。彼が2度目の旅券下付を受けたかどうかを、外交史料館保存の旅券下付表で探してみたが、見当たらない。明治22年度旅券下付表は、本省渡しは全期間が保存されているのだが、府県渡しにつ

いては、生憎、明治22年4月9月分、即ち22年度前半部分が欠落しているのだ。とにかく、現存する旅券下付表からは、野々垣への旅券下付は、明治21年度の1回しか確認できない。その後の野々垣直次郎については、名古屋市長議員および愛知県議員を務めたこと以外は不明である。即ち、野々垣は、1898年（明治31年）の第4期市会選挙で二級議員に當選した。その際、職業は「無職」、生年月日は嘉永5年2月13日（1852年9月26日）と申告している。彼は、明治37年4月6日に死亡するまで市議員に継続して在任した（名古屋市長事務局長「名古屋市会史、第一巻（概説）」（1939年、334-338頁）。当時は市議員と県議員の兼職が可能であつたようで、野々垣は、明治32年9月25日に名古屋市選挙区から県議員に當選し、36年9月に退

任するまで、4年間県議員として在職した。彼の住所は横三蔵町3番地、族籍はここでは平民と記されている（愛知県議会史編纂委員会『愛知県議会史、第一巻（明治篇 上）』（1953年、337、463頁）。ところで、1889年半ばの時点で、バンコクで商いをしてゐた日本人は、野々垣ただ一人であつたのだろうか。前月号で紹介した、釈然演のバンコクからの第3信（1889年7月17日付）に、「当地にも日本人三十人も在住致居り候得共、一部は學生にして暹羅（シヤム）の土語を學び居り一部は商法家にて金もうけを目的となし、其の下等の一部は御聞もあらん彼の破廉恥の賤婦が色を売り春を賣き日本の國辱を海外に晒す奴原なりと聞く」という条がある。學生とは、山本安太郎、山本鑑介、生田得能らを指すことは間違いない。「商法家」とは当時

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

がら別の在タイ日本商人「長阪某」が登場したことに気付かれた読者もおられたことである。

「名古屋の人長阪某」とは何者であろうか。野々垣のことを言い間違っただけではないのかという疑問が生じてもおかしきはないが、別の資料にも長阪という名が登場する。

たとえば、1911年12月初めに挙行された、ラーマ6世王の戴冠式祝賀のために来タイした、曹洞宗の高僧日蓮黙仙(1847-1920)に随行してきた来馬塚道(くるま・たくど)う、1877-1964)の著作、『黙仙禪師南國巡禮記』(平和書院、1916年)がある。来馬は1901年に曹洞宗大学林(駒沢大学の前身)を卒業、多数の著作を物すと同時に、曹洞宗内で要職を務め、戦後第一回の参議院議員選挙にも当選している。極めて精力的な人物であつたようで、この『黙仙禪師南國巡禮記』は、和文864頁に上り、かつ英文の要約も付いている大作である。同著の中で

「明治渡暹者の先驅、此の大島公使の渡航〔明治8年3月〕の後十餘年を経て、明治二十年に、暹羅國の國使始めて我國に來り、それより、兩者の意志漸く疎通して、同年九月二十六日の航海修交條約〔正しくは「修好通商に關する日本國暹羅國間の宣言書】の調印、翌二十一年一月二十三日の批准となり、更に、明治三十一年の改訂〔正しくは明治31年2月25日調印の日暹修好通商航海條約締結〕となり、今日まで、益々國交は良好なるに至つたことは、既に人の知る所であるが、其國交の開始以前(マ)同國へ渡航した日本人は長阪太門(マ)と云ふ人で、逸早く盤谷に來つて商店を開いたことがあるさうだが、其後山本銀介と云ふ人が渡航して、深く暹羅事情を研究し、又、山本安之助〔安太郎〕氏と云ふ人は、最初の國使バスカラオングセビヤパー〔プラヤー・パーサコーラウオン〕氏の便宜を得て渡暹し、引続き、佐々木寿太郎、田山九一氏なども渡つたが、佐々木氏は、眞摯に暹羅事情を研究したけれども、不幸にして中途

に死亡し、田山氏は今も、工部省の役員(マ)となつて居る又、其頃織田得能、善運法彦など云ふ仏教徒の渡暹したこと、今猶、一部の人には知られてゐる。而して、其後追々多数の日本人が渡航して、日暹關係は、人民の間に於ても漸く密なるに至つたのであるが、其等の詳細のことは、今省略することとし、吾人の見聞した中で、暹羅と日本との關係につき、異彩を放つてゐるものは、岩本千綱氏の内地縦断旅行と、仏舍利奉迎の盛事とであらう、之は敢て今更述するほどのことでも無いかも知れぬが、岩本氏の探検談は、或意味に於いて日本人の壯舉を示し、仏舍利奉迎のことは、日暹兩國の佛教上の交際の上に大關係があるから、之も、史上の日暹關係として、記しておく価値があらうと思ふ。

近代の内地縦断者、岩本氏の探検の事は、予が、まだ大学「曹洞宗大学林」に居た頃、特に予が氏の寓居を訪(と)ひて、大学の大講堂に講演されんことを依頼した關係もあるから、比較的に詳しく記憶してゐる、氏は、何等かの目的を以て此國に來り、種々の計画を立てて居る間、山本銀介氏と知合になり、明治二十九年十二月から百十一日間に、暹羅、老撾、安南の三ヶ國を跋渉したのである、此兩人は、金は無し、又普通の旅客と名乗つては、途中の危険のある事を慮つたので、俄かに僧侶の姿となり、暹羅式の法衣に身を装はひて、しかも日本の僧侶と云ふ名義で内地へ向つたとの事である、……何分兩人ともに日本の僧侶で無いから殆ど御経を學んだ事がないので、時々村民から經文を説む様に頼まれると百計尽きて遂に、『梅ヶ枝の手水鉢』叩いてお金が出るならば』と云ふ大津絵の文句に暹羅式の節をつけて阿房陀羅經以上の出鱈目を並べて歩いたと云ふ事である、是れは岩本氏自身も余等に向つて話した事であり、又盤谷に於ても、古い邦人諸君は能く知つて居る事である、岩本氏は斯くの如く暹羅に於て、他人の余り有して居らぬ智識を有し、殊に明治三十三年仏舍利奉迎の爲め、日本の仏教徒が此國に來た時には種々心配して呉れたと

云ふ事であるが、今や氏は暹羅國に關する事業を放擲して緬甸より雲南の方面に於て何か事業を経営しつとあると云ふ事である、而して山本氏は不幸にも此探検を終つてハノイに到着し、是れより香港に向はんとする時に、山間に於て得たる風土病の爲めに落命する悲運に遇はれたので、吾々は茲に一人の暹羅通の日本人を失つたのである(同上書、132-135頁)。

来馬は長阪の名を「太門」と書いてゐる。一方、明治21年の旅券下付表を見ると、同年兵庫縣で「長阪多聞」なる人が旅券の下付を受け、明治24年10月27日に返納したことが記されている。この下付表には、長阪の本籍地、年齢、族籍、渡航先といった情報は記載されていない。

「長阪太門」と「長阪多聞」とは、同一の人物のように思われるが、それぞれの氏名を、グーグル・ブックスで検索すると、「長阪多聞」で一件だけヒットした。

加藤豊監修・解説『日本におけるマツチ生産、マツチラベル博物館』近代日本のグラフィズム…加藤豊コレクション(東方出版、2004年)に掲げる「マツチ産業年表」中に「長坂(ママ)多聞」が登場するのである。

この年表によると、日本のマツチ(燐寸)生産は、1876年9月に清水誠が東京本所に創立した新燐社(しんすいしゃ)に始まる。2年後の1878年9月には、新燐社は上海にマツチを輸出し、これが日本製輸出マツチの嚆矢である。79年、82年にかけて、関西や四国地方の旧藩の多くで、土族授産施設としてマツチ製造所が開設された。名古屋では、80年に杉山弥三郎がマツチ工場(眞燐社)を起し、翌81年には「長坂多聞」が燐巧社(すいこうしゃ)を創立してマツチ生産を開始した。

この年表から、愛知県における初期の燐寸製造業者は長坂多聞なる人物が存在したことが判つた。ついでに、日本における初期のマツチ生産は、主に失業士族が担つたという新知識も得ることができた。これをヒントとして、次ぎに愛知県のマツチ産業史文献を図書館で探して

見ると次の文獻に出くわした。即ち、愛知県『愛知県史、上巻』(1914年)の工業編 第10節燐寸の項(十の116-1118頁)は、名古屋に於ける燐寸製造の歴史を次のように述べてゐる。

日本人による燐寸製造は、金沢藩士で文部省留學生としてフランスに學んだ清水誠(1846-1899)が東京で1875年(明治8年)に着手し、翌年より新燐社の名で大規模生産を行つたことに始まる。名古屋における最初の燐寸生産販売は、1880年7月に眞燐社が開始した。それまで名古屋で販売されてゐた燐寸は、東京の新燐社のものを除けば輸入品ばかりで値段も高かつた。名古屋の眞燐社は、1879年に燐寸事業に乗り出した杉山弥三郎が中心となつて、発火薬品の調製を担当する麻生頼三郎、資本主た

る今井正吉の三名で始めたものである。1881年初めには長坂多門(本来は朝倉姓、後に長坂と改姓)が名古屋市下堀川で軸木製造を開始し、「同(1881)年5月、長坂多門も亦仲の町に燐寸製造業を始め、是れ本「愛知」県に於ける第二の燐寸業者なりとす」、この後愛知県では続々と同業者が出現した。「明治」十六年(1883年)眞燐社は、株式組織となり其の資本を増し、杉山自ら社長となり、大に事業を發展せり、是れ県下當業に於る株式組織の嚆矢なりとす、同年9月土族授産の趣旨に依り、本県に於ては、勸業資金一千五百円を該社に貸与して補助せるも、其翌17年(1884年)或る事情の爲めに解散し、爾後は、杉山一個人の經營に歸す、然るに當時杉山は自から阪神地方に赴き、清國貿易品とするの目的を以て、種々の



調査をなし、翌年「1885年」三月大坂川口居留地、清商三番館弘昌号と契約し、輸出向燐寸製造事業に着手せり、是れ本県に於る輸出向燐寸製造の始まり、翌十九年「1886年」従来使用の材料は、槍又は槓の二種なりしが、斯業の発達に伴ひ、価格非常に昂騰せるより、杉山は低廉なる姫子松を飛騨国より輸入して、好材料を得たり、同年「1886年」三月燐寸業同業組合の組織あり、同組合は間もなく其の組合員、長坂多門を前後二回暹羅國に派遣し、本業販路の視察を為さしめ、内にありては更に北陸奥羽北海道、又は九州等に販路を拓めたるを以て、産額は日を追ひて増加し、外にありては輸入外品を駆逐せるのみならず、二十一「1888年」年に至り工賃の低落と原料の安価とに依り、却つて海外に輸出するの端を開けり。

上記資料により、名古屋の長坂なる者が、シヤムに渡航したことは間違ひなさうなことが、長坂は燐寸製造業者であり、「長坂大門」や「長坂多門」ではなく、「長坂多門」が正しい姓名である。るらしいことが判った。そこで「長坂多門」について調べると、いくつもの資料が出て来た。朝日新聞記事データベース検索では次の記事が見つかった。「暹羅貿易の計画、名古屋の紳商松村九助岡谷惣助等の諸氏は暹羅國へ直輸出を試みんことを思ひ立ちそれに就ては先づ彼國の國情風俗等を実視すること必要なりとて之を同地の土族にして是等の事に経験ある長坂多門（ながさかたもん）氏に託したれば氏は万事を担当し周旋最も勉めしを外務省に於ても此舉を賛し特に外務次官よりは眞に我邦に來遊ありし同國皇族デバウヤングス親王殿下に宛て添翰を附せられ又大蔵省よりは印刷局製造の壁紙數百種の見本を交付せられたれば氏は渡航の準備を整へ去る十七日発足して神戸に出（いで）たりといふ其携帶せる品物は印刷局製壁紙、愛知県産有名の諸品、岐阜県監獄諸製品、肥前伊万里焼、三重万古焼、三重山崎伊藤某の醤油清酒味酢、但馬城の崎の麦藁細工等なり」と（朝日新聞1888年10月23日号）。

この記事の愛知県士族「長坂多門」は、明治21年に旅券下付を受けた「長坂多門」と同一人物とみて間違ひあるまい。長坂多門の生没年、燐寸製造業に乗り出す前の経歴、或は晩年が判る資料には未だ行き着いていない。現在判った限りで、長坂多門の最も古い経歴に関する資料は次のものである。「警察における柔・剣道は、明治初年すでに取り入れられ、はじめはおもに撃剣、すなわち剣道が行なわれた。警察官吏として採用された者は、武家育ちの者が多かったところから、いきおい武道が盛んになった。ことに明治十年西南の役がばつ発した際、この戦役で警視庁の抜刀隊の奮戦が目ざましかったところから、撃剣の必要性が認識され、警察官の武道錬磨の氣運が高まった。」（愛知県警察武道

史）によると、明治十三年ころ撃剣は、日比野實吉（小野派一刀流および無念流）、長坂多門（北辰一刀流）、加藤實一（同）、柔術では……の武道家が、相ついで警察官または嘱託として採用され、これらの人たちが一般警察官の指導にあたり、現在の警察武道の基礎を固めた（愛知県警察史編集委員会『愛知県警察史、第一巻』、1971年、456頁）。この資料からみて、燐寸製造開始前後の長坂は、北辰一刀流の使い手で剣道師範であつたようだ。名古屋で最初に燐寸製造業を起し、かつ長坂のシヤム派遣にも関係した、杉山弥三郎（1853-1920）が、1901年12月13日付で作成して名古屋市に提出した、「杉山弥三郎功勞事蹟」は、杉山が燐寸製造に従事するまでの経歴を次のよ

うに記している。

愛知県名古屋高岳町十二番戸士族 燐寸製造業 杉山弥三郎 嘉永5年12月「1853年1月」生、1869年に家督を相続し、1870年4月四等兵隊降参、同年11月常備兵降参、71年10月東京鎮台へ召集、74年陸軍伍長、75年除隊帰休、76年愛知県選卒降参、77年2月鎮台召集陸軍軍曹、同年11月帰休（新修名古屋市史資料編集委員会『新修名古屋市史 資料編 近代1』、名古屋、2006年、709頁）。

即ち、杉山は17歳から24歳まで軍人・警察に任官した後、79年から燐寸製造に転身したのである。なお、杉山は1907年9月から名古屋県議員を7年4ヶ月務めた。死亡したのは1

920年12月17日である（愛知県議会史編集委員会『愛知県議会史 第一巻』1953年、465頁）。

士族たる長坂の青年時代は、杉山に近いものであつたのかも知れない。

長坂は、1881年に燐寸製造業起業資金として、愛知県から20000円を2年後の返済を約して借金をした。前掲『新修名古屋市史 資料編 近代1』716-718頁には、返済期限が到来した1883年から85年にかけて長坂が愛知県に提出した3回にわたる返済期限繰延および利子分の棄捐願の文書が収録されている。明治18年（1885年）1月23日付で、長坂が愛知県に提出した拝借金利子棄捐願は次の通りである。この願は、元本だけはどうにか完済するので、利子は棒引きにして

欲しい、もし認めてもらえなければ休業せざるを得ず、自分のマツチ製造業は名古屋の主要産業として発展しつつあるのに、その芽を摘まれ、また百人余の従業員が路頭に迷ふことになるという、虫の良い半ば強迫的内容である。

「拝借金利子之儀に付願、

私儀附本「マツチ」製造資本金として金貳千四百拝借金仕漸次還納の末残額金六百円也追々延引相成候処漸くして右六百円取納め候付何時にても還納可仕候然るに去る十四年「1881年」右製造開設候創業の義に付何分諸入費相當加ふるに世上一般の不景氣に遭ひ隨て右製品大に下落し最初の資本金は悉皆損毛致し既に閉業も可仕場合之處多分の資金も消耗致し且遺憾之至に候間更に資本を入れ一層勉勵致し一昨十六年夏頃より一種特別なる硫黄製を製し大に費用を省き東京大阪等より廉価に製造せしを以て世間の信用を得昨十七年に至りては他の輸入を防ぎ当地の製品一の物産とも相成日に盛んに及び当今は隣國は勿論江州「近江」越前京都地方へ販

売の路開け通常の蠟製に至る迄信用を得るに至れり此上尚資力を増し盛んに製造せば全国一般へも可及勢ひなり是れ偏に拝借金を以て一時融通致候付私に於ては困難を凌ぎ今日迄引続き営業仕亦毎日此業に従事する百名余の者多くは窮民なるが故に些々たる雇賃を以て生活せり之れ則救助の一端にも相成深く難有仕合奉存候然る処前頭六百円取納め方に付ても是迄非常の損害を醸し候義に付容易に纏り不申漸くして元金文は取束ね候得共利子金の義は如何様力候共即今金融相付不申若強て之れを取納めんとせば資本乏敷折柄に付此上は一時休業可仕場合にも立至り残念の至に奉存候間甚恐多願にて上申仕兼候義には候得共今般上納すべき利子金文は特別の御詮議を以て無利子にて御間届の上抵当品御下げ渡被下置候様只管奉懇願候也

明治十八年一月廿三日 名古屋市中の町二丁目 長坂多門 愛知県大書記官 野村賀真殿

さて、前掲「杉山弥三郎功勞事蹟」は、長坂多門をシヤムに派遣した背景、経緯を次のよう



に記している。

二、明治十九年七月「マ、マ、正しくは明治二十年九月」暹羅国外務卿本邦へ来遊あり當時当市「名古屋市」の豪商神野金之助「1849-1922」

は野々垣直次郎を同国に派遣するの計画あり我が燐寸業も亦た此の必要を認めたるに依り玩弄物商陶器商七宝焼錦燐燐七宝業等と協議し特派員を暹羅国に派遣せんとし自分は他の各業者たる河村治助松村九助近藤秀之進本多与三郎鈴木弥六竹内固忠等と共に発起者となり派遣員を長坂多門と撰定し前記自分等七名の諸貨物代価合計凡そ三千元程並に旅費五百円を長坂多門に附托し暹羅國に渡航せしめ尚ほ前頭三千元の諸貨物に対しては売上金の一割を報酬として長坂多門に附与すべきことを約束せしが當時当地方の燐寸業は皆な内地向製造而已にて他に此の企図に協同するものなく派遣者長坂多門も他の開墾事業の爲め夥多の損害ありたる場合に於て自ら

出資すること能はざるより燐寸部分は全く自分一人にて諸般の出資を負担せり。

一、明治二十年三月「マ、マ」長坂多門暹羅國より帰朝して派遣中の実況を報告す附托貨物合計三千元に対する売上金は僅かに壹千円ありし而已結局二千円と旅費五百円は全損に帰し其視察の報告等亦各業者を満足せしむること能はず茲に於て再び長坂多門より再渡航携帶貨物を出すべき交渉あるも大抵皆な之に応ずる者なきより自分及び河村治助より燐寸並に玩弄物若干を附托し別に京都より織物類若干を附托して暹羅國へ赴かしめたり然るに此回も亦非常に不結果にして長坂多門帰朝後燐寸等の売上代金は毫厘も受取ること能はず自分等は非常の困難を感じたり

又同年秋季に至り更に燐寸の新開業者七名に及びたるに依り曾て設立したる五商會を解き各当業者の自由販売となしたり

一、明治廿一年一月同業組合總會に於て自分は組合頭取となり同廿八年迄繼續す「前掲『新修名古屋市史 資料編 近代1』712頁」

「杉山弥三郎功勞事蹟」から、長坂多門をシヤムに派遣したのは、野々垣直次郎のシヤム派遣に刺激された、同じ名古屋人ではあるが野々垣とはグループを異にする商人たちであったことがわかる。

だけではなく、大蔵省印刷局製壁紙、愛知県産有名諸品、岐阜県監獄諸製品、肥前伊万里焼、三重万古焼、三重宝山村伊藤某の醤油清酒味噌、但馬城崎の麦藁細工、玩弄、織物、陶器、七宝焼、塗七宝など多様なものであったことが判る。

なお、日本商人による、シヤムへの最初の売り込みから17年後、1905年10月15日発行の『実業之日本』第8巻22号に掲載された、香天生「新発展地暹羅に於ける有望事業（続き）」に次の記述がある。



うとするのは、中々至難のやうではあるが、大資本を投じてやりさへすれば、圧倒の出来ぬ道理はない。従来多少試みたものもあるが、小資本だから、却つて圧倒せられたのである。現在の輸入高は、三十万円にも上つてゐるから、これを一手に握ることが出来れば、利益のあるのは分りきつてゐる。▲木綿織物

年中裸体で、腰巻一つで暮らす国民を相手だから、木綿織物の需用は極めて広い。シヤム人の沐浴といふのは、腰巻をしたままで、水を被（かぶ）ること、それが一日に何回も行ふのだから、どんな貧乏人でも、腰巻の十や十五個は用意してある。それに、上流社会になると、シヤムも用ふるから、日本の木綿又は木綿縮の類は、随分多額に費消する。これも皆支那人の手で輸入せられてゐるが、もし日本人が直接に貿易の道を講じたならば、大した利益があるに違ひない。▲陶器 これも亦有望品の一つであるが、これを輸入するには、日本に行はれるやうな製法ではダメだ。シヤム人は、極めて薄縁の、全体が薄焼の品

を好むから、特別にシヤム向の焼方にせねばならぬ。又シヤム人は、極めて新奇を好む性質だから、形なども、普通の円形でなく、歪んだもの、四角なもの、三角なもの等にして、且つ細長いのを好むから、その辺に余程注意を払はないと、どんな上等の焼方でも、決して売れはせぬ。又かれらは仏教信者であるから仏像のあるものを非常に好む。それゆゑ、美麗な彩色で、仏像を焼込まうものなら、争つて買ふは請合ひだ。▲漆器 これもかなり有望だが、陶器と同じく新奇を好むといふ、シヤム人の嗜好に適せぬと、失敗の恐れがあるから、この点は、返す返すも注意を要する。▲用紙、玩具、扇子、団扇 これ等も皆有望である。但し玩具、扇子、団扇等は、年々新案の彩色や、新案の形を用ふのがよい。何時までも同じ形や、同じ色取りで推通せば売れる性質のものでも失敗するから、これ亦心すべきことである。

▲醤油 シヤムには、醤油もなく、味噌もなく、その代りにカピといふものを使ふが、このカピといふのは、小海老を煮て、

発酵させて、それに塩を加へて、臼で搗いたもので、上下一般に、食事には必ず用ひる。しかし、日本人には何分にも臭くて食べぬので、自分の友人は、わざわざ日本から醤油を取寄せているほどだが、かれらも、醤油の方が旨いといつてゐる。されば、この醤油の輸入は、追々有望になるであらうと思ふ（同誌28-29頁）。

シヤムに売り込むべき日本商品は、17年の間に大きく変化することはなかったようである。ただ、日本製の商品を持えた日本商人のシヤム進出の試みは、華僑商人の厚い壁に阻まれてしまったことは明白である。筆者の香天生とは、当時シーラーチャー材木会社（大出資者チャ

オブラヤー・スラサクモントリ）の支配人であり、日本に出資者募集のために一時帰國していた松木良助（1869-1926）元陸軍中尉の筆名だと思われる。

「杉山弥三郎功勞事蹟」に戻れば、この事蹟は長坂多門のシヤム派遣から10年ほどしか経ていない1901年末に作成されたものであるにも拘わらず、長坂のシヤム渡航の時期を、実際よりも数年早く誤記してゐる。彼が最初に渡航したのは、早くても外務大臣テロウワオン親王が来日して修好通商宣言に調印した明治20年9月から1年

余を経た明治21年(1888年)10月であり、後述するように1889年末頃帰国して、2度目の渡航をしたのは1890年2月頃である。

当時、日本製工業品の海外輸出は、マッチ同様、紙でも始まりつつあった。長坂多門は、紙の輸出も企図し、最初のシヤム渡航に先立ち、大蔵省印刷局長得能通昌(1852-1913)、薩摩出身、1888年9月末に局長に就任したばかり)を訪ね、得能局長からシヤムで局紙(印刷局の製造紙)の注文を取るよう依頼された。シヤムに渡航して注文を得た長坂は、1889年末ごろまでに帰国し、得能局長に局紙を直接払い下げるように求めた。しかし、得能は直販を断り、三井物産もしくは薩摩出身の豪商岩谷松平(1850-1920、53人の子供をもうけたことと知られる)から購入するようにと答えた。この上京時、長坂は、刀根喜太郎を訪ねて、得能局長との行き違いやシヤム事情を語った。刀根は、1888年8月に自らが中心となって紙業集談会を組織し、1

889年3月からは、『紙業集談会雑誌』を出版していた。紙業集談会の目的は次の点にあった。即ち、「願みれば昨年八月初めて有志者を会し規約を議定せしより以来毎月一回を期し同業者諸氏と共に集談会を催す所以のものは何ぞや専ら同業の親睦を計り以て商業上相互の経験意匠を吐露し彼れが長を取り我が短を補ひ以て将来に斯業の改良を謀らんと欲するにあり故に同業者諸氏相会する毎に原料栽培製紙改良の方法を議し或は古来の紙史を探り又は海外製紙の景状を報告し或は甲の諸問に就ては乙之に答へ丙の意見に就ては丁之を駁する等論議百出愈々出でて愈々熾(さかん)ならずとす斯の如くして進んで止まざれば斯業に裨益を与ふる亦少小に非るべし」(『紙業集談会雑誌』第1号、1889年3月22日出版、1頁)。

1890年1月25日に開催された第17回紙業集談会において、刀根喜太郎は長坂から聞いたことを次のように語り、会員に情報提供を行った。

事する諸君に一言す 本員「刀根」の知る所の人愛知県の長坂(マ)多門と云へる人は貿易に熱心なる人にて前年我邦と暹羅国と条約の締結せるや忽ち起ちて該国に渡航し萬国(バンコク)府に一店を開設せり 然るに同氏が前年彼の国に到るの際「大蔵省」印刷局の得能氏より局紙の販路上に就き懇々の依頼もありし由故該国に到り種々局紙の販路を穿鑿して此の程再び当地「東京」に來り得能氏に依頼の復命を為し此際多少の局紙の申さるるには局紙の販売は多く三井物産会社又は岩谷松平の両所へ命じ置きたる事なれば直に足下に払下げ難し宜しく両所に就て議すべしとの事なり依て氏「長坂」は願(おも)ふに固(も)と是れ得能氏より販路拡張の依頼を受けたればこそ今聊か目的ありて局紙の払下を請へるも彼の両所に何等の特約あるかは知らざるも両所に就て議(はか)るべければ議りもすべし去り乍ら両所より買入る時は両所に幾分の利を占めらる道理にして商算上引合さる場合あり

這は怪しかる次第なれば元々印刷用紙の事なれば斯る手数の掛る局紙を買入れざるも世上製紙会社に至しからず寧ろ他の製紙会社に特約すれば三井岩谷の手に掛らず蠅々(さつさ)と直取引の出来る次第なれば断然印刷用紙の払下は断念して他にて買入の約を結ばれたる由なり 追は別に諸君に報道する必要もなきが如しと雖も夫れに就き諸君に勧告する所は該地「シヤム」は随分印刷用紙壁紙等の需用もある由にて壁紙の如きは既に若干の注文も引受け帰られたる位なれば向來倍々(ますます)貿易の望みあることなれば諸君幸に憤發して暹羅通商に従事せられては如何ん 同氏の物語に依れば該地の輸入税は代価百円に付き金三四の割にて何品にても輸入し得べし又た神戸より香港までの運賃は一噸に付き貳円七十五銭にして香港より該地までは同じく一噸に付き高きは四円安きは三円位の割合なりと話されたれば御参考までに申述べ置きぬ云々」(『紙業集談会雑誌』第9号、1890年1月31日出版、16-17頁)。

更に、紙業集談会雑誌第9号には、次の記事も載っている。

「刀根氏と永阪(マ)マ、長坂)氏の談話、愛知県人永阪(マ)多門氏は貿易に熱心の人にて暹羅の万谷(ばんこく)府へ一店を開設され紙業の事に就き此の程刀根氏を訪ひ談話の重なるものは同氏「刀根」が去る廿五日「1890年1月25日」集談会にて演説せられたるが尚聞く所に依れば同地「シヤム」の商人は概ね支那人にして土着の商人更に無く土地の人民貧富の懸隔甚しく富めるもの倍々(ますます)富み貧困なるものは倍々貧なる由なり又同国は近來大に日本の風俗を好み日本人の風采を欣慕する由なり何故斯く日本人を愛するかといふに其原因種々あるべけれど前年我國へ派遣されたる同国の皇族デバオンセ「デーウオン」と云る人來朝の際、我國文物の進歩開明の速

なるに驚き帰国後最も日本の如くすべし此れは日本が善良なり杯と頻りと日本熱に浮されたるより下人民も聞及びて日本を慕ふ氣風の生じたるものならんと云へり又同地には三種の新聞紙ある内其中一種は皇族(マ)マビヤスカラオンセ「ブラヤー」パーサコーラウオンセ」と云る人の持主なる由同氏「長坂」が注文を受たる印刷用紙は此の新聞社へ送るもの由曾て同氏が該地「シヤム」に赴き途次香港にて日本商人の話には該地は熱帯地方にて殊に湿地なれば壁紙の如きは逆も需用に成るまじとのことなりしが實際同地に到れば決して然らず随分壁紙の注文もありたる由殊に皇族(マ)マビヤスタンと云へる人は大にこの紙を愛せりと云々扱て又同氏「長坂」は来る二月中旬「1890年2月中旬」に再び彼の地へ赴かるに付若し会員中依頼

せられたき事あらば同氏へ紹介すべしと刀根氏よりの報知あり」(20頁)。

1889年当時、シヤムで発行されていた3種の新聞とは、タイ官報やワチラーン誌のことと思われる。

上記引用資料からも、長坂多門は、1890年2月頃、シヤムに再度渡航したことは間違いないであろう。ところが、現存の旅券下付表を調べてみると、長坂の旅券取得の記録は明治21年の1回だけしかなく、2回目の取得の記録は見つかからない。更に不思議なことは、第1回目の旅券を返納した日が、1891年10月27日と記録されていることである。当時は、数次旅券はなかったはずであり、新しい旅券を取得するためには、古い旅券を返納することが必須であつたはずであるが。

いずれにしても、扶桑新聞1891年5月28日号に掲載された記事で、山本安太郎が「曾て名古屋の人長坂某の雜貨店ありしも今は引払ひて一軒もなし」と語っているのを、長坂は遅くとも1891年初め迄には、

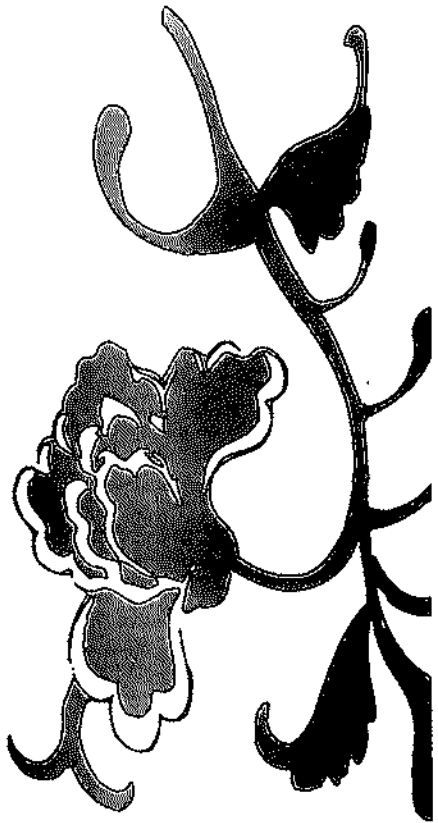
シヤムを引き払ったことにな

る。シヤムを引き揚げた後の長坂多門は、再びマッチ製造業に従事した。1894年9月に京都で開催された全国燐寸業大会に、長坂は出席している。

前田正名が同業者団体結成を目的に、全国各地の燐寸製造業者に來会を呼びかけて、1894年9月1日(5日)に京都で開催された全国燐寸業大会の報告が、『蚕糸・木蠟・燐寸大会資料』(明治中期産業運動資料、第22巻、日本経済評論社、1980年)に掲載されている。当時は、1894年7月に日清戦争が勃発した時期である。日本の燐寸産業は輸出産業として発達しつつあつたが、主要輸出先は中国であり、輸出は中国人商人の掌中であつた。9月3日の談話会で、前田は演説の中で次のように語っている。

「支那人が得意先則ち買手なるが為め彼れに依らざれば忽ち輸出の道なしと云ふ恰も燐寸商日本に無しと云ふの状なり蓋し是れ直接貿易の道立たずして居留外人との取引を以て貿易なりと





心得る者多く為に今日の如き奇怪の現象を露呈するに至れるなり、若し直輸貿易の道立ち真個外に向ひて商業を営むあらば何ぞ支那商を待たん何ぞ欧米人を待たん却つて此際日本商人の専売に帰し莫大の利益を収得すべき時期なり惜ひかな商工の組織無く内輪喧嘩同士打撃切等の為め商工業とも支離滅裂此千歳得難き好機を見つ猶悟らざるもの多きこと周章狼狽抑も何事ぞ」(『全国燐寸業大会報告』11頁)。同日、各地の燐寸産業についてそれぞれの代表者による報告があったが、愛知県について、長坂多門が「愛知県名古屋燐寸業委員」の肩書で次の報告を行った。

「名古屋燐寸業の景況報告、名古屋に於て燐寸の業を開始したのは明治十三年頃なり何れも新規創業のこと故夫々従事する者極めて幼稚加るに函木地軸木薬品等総て土地に於て購求することを得ざる為め大に困難を極め其土製造の粗悪なるが為め販路に苦み一二の製造家は終に閉業するに至り其の二三は失敗するも屈せず挽「たわ」まず従事せしを以て漸次に事業に慣れ継続することに至れり然るに名古屋は木材に富めるを以て函木国(マ)軸木の製造業者続々起り大に便利を得るに至り十五年頃より以後製造に従事する者増加し十八年頃には製造家八九名となり幾分の利益を見るに至りたり為めに年々歳々増加して今日に至りては既に二十四名の製造者に及べり去れども何れも聊かなる製造なれば阪神の製造に比較すれば実に微々たること且内国用のみにして輸出用は其時により聊か製造を試みる位のものなり然るに利益の点に至りて

は各自製品を増加するのみにて互に競争して漸次利を得ること僅少なり実に製造するのみにて販売するを知らざるが如し去れども名古屋に於ては開業以来製造業は増加して聊かつつ進歩するも退歩することなし依て向來見込ある土地と考察せり然れども今日迄の如くんば利を得ることなき故向來海外輸出を謀らざるを得ざる故今回の大会を期し一致団結輸出の途を謀らば漸次盛大に至るべき見込なり」(同上報告、51、52頁)。なお、大会決議調印者のリストには、長坂は、「名古屋市中ノ町三丁目、燐寸業者 長坂(マ)多門」と記載されている(同上報告、22頁)。

長坂多門の名が最後に見いだせるのは、1897年1月10日付の愛知燐寸株式会社、第1回(明治29年下半季)報告に、同会社の株主欄があり、そこに記載された「愛知県名古屋市中ノ町93番戸 長坂多門」である(前掲『新修名古屋市史 資料編 近代1』721頁)。

以上のように、野々垣直次郎と長坂多門は、異なるグループに属する名古屋の商人たちが、1887年9月26日に「修好通商に關する日本国暹羅國間の宣言」が調印され、日タイ國交が開始されると間もなく、新開地シヤムでの一儲けを企てて、それぞれ競つて送り込んだ士族の人材であった。兩人は、1889年(明治22年)には、間違いないシヤムで商いに従事していた。

333

連載 ⑤  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(42)

タマユット派出家を回避した  
生田(織田)得能

ワチラヤーン法親王の下で、タマユット派で具足戒を受けて比丘に出家すべく、スリランカから1889年7月半ばバンコクに到着した釈宗演(臨済宗の僧侶)の期待は、「聞いて極楽見て地獄」のバンコクであえなく萎んでしまった。釈宗演は、名古屋の紳商野々垣直次郎から借金して、ほうほうの体で逃げ出した。在バンコクの10日余りを、釈宗演はパーサーコラウオン邸で真宗大谷派の学僧生田得能と同宿した。

井公成氏は生田の禅宗嫌いを指摘している。即ち、  
「我が大乗ノ如キハ、大ニ哲学者ノ學風ニ傾ケル氣味ヲ存ス、殊ニ釋宗ノ如キハ其魁タル者トス、其見ル所高尚ニ渉ル者アリト雖モ、其行フ所之ニ叶ハサル者アリ、……此ノ如キ世智弁聰ハ仏陀ノ罪人ナリ、余方此論ヲ草スル者ハ、暹羅仏徒ノ風ヲ見テ感スル所アレハナリ(同「生田得能『暹羅仏教事情』明治二十四年」、三三二頁)。  
すなわち、戒律嚴守のシヤムの僧侶と比較して、大乗は哲學に傾きがちであることを指摘し、口では高尚なことを言いがら行ないは卑俗な者たちを批判するものである。そうした大乗の徒については、「仏陀の罪人」だとも言い及べている。その批判の主な対象は、禅宗である。得能は禅宗嫌いであつて、しばしば禅宗批判をしてきた(「石井公成『明治期における海外渡航僧の諸相』、『近代仏教』第15号、2008年、14頁)。  
この部分を読むと、得能は暗

に「世智弁聰」に長けた宗演を批判しているのではないかとさえ思われるほどである。

日本帰國後は、釈宗演も得能も、仏教界のスターの一人となった。両者の動静は、しばしば仏教新聞で報道されている。仏教新聞の一つである『教学報知』(1897年10月1日に京都で真溪派(またに「るいこつ、1869-195)が創刊、1902年1月に中外日報と改称し現在まで存続している)には、

「村上専精師 曰く、鎌倉の『釈』宗演師程俗僧はない、寒酸枯木死灰と一般たるべき禅僧にして、ヤレ中島男爵夫人を悼む偈とか、ヤレ星亨の暴死に弔文を贈呈するとか、名問を買ふことに汲々して居ると、傍に人あり低声して曰く是れ村上氏自身の自白のみと」(『教学報知』1901年8月11日号)。  
なお、村上専精(1851-1929)は、当時大乗非仏論を発表して、仏教界から猛批判を受け大谷派の僧籍を辞した頃

## 村嶋英治

早稲田大学アジア太平洋研究科教授

であった。  
生田得能は、シヤム國防大臣パーヌランシー・サワーンウォン(クロム・プラ・パーヌバン親王(1860-1928)、5世王の実弟)の訪日に同行して、1890年7月17日に帰國した。

『タイ官報』第7巻(1890年)は、パーヌランシー親王の訪日が詳細に報告されている。同官報から要約すると、訪日の日程は次の通りである。  
1890年6月27日に同親王は、訪日のため専用船でバンコク発。直行して7月3日香港着、香港政府の案内で香港の軍事施設など見学。7月13日ドイツの定期船に乗り換え、日本に向かい、神戸を経て7月19日横浜着。小松宮近衛都督の案内で軍隊、軍事施設(造船所、赤十字病院など)、軍の学校など見学。有栖川宮参謀総長にも会つた。天皇、皇后にも拝謁し晩餐会が挙行される。8月1日に開通したばかりの汽車で日光訪問。8月4日東京発名古屋泊。8月5日名古屋

クルンテープ  
2453A  
334



陶器など見て、名古屋発京都着。8月9日朝まで京都で、絹織物などを購入。8月9日鉄道未開通のため人力車で奈良へ、東大寺や正倉院を見学。8月10日鉄道で大阪へ。8月12日大阪で造幣局、武器製造の軍需廠などを見学。8月12日神戸へ。8月13日19日神戸で休憩。19日神戸発、8月21日上海着、イギリス租界のホテル泊。疲れて発熱のため上海で長期休養。9月6日上海発。9月9日香港着、香港でも休養。日本で購入した船(皇太子号)に9月21日に乗り移り、9月24日香港発。9月27日サイゴン着。9月28日武器庫、軍団病院を見学。10月4日、皇太子号に乗ってバンコク着。

生田得能は神戸で上陸後、パーサコラウオンの大谷光瑩法主宛書翰を直ちに京都の東本願寺に届け、帰国報告をした。東本願寺の月刊本山報告は、生田の帰国を報じ、パーサコラウオンの書翰を次のように印刷した。

「贈品並帰朝、暹羅國農務大臣バスカラウオングセ「パーサコラウオン」氏には去廿一年二月全權大使を帯び来朝の際本山「東本願寺」に立寄られしことは第三十三号に搭載せしが其際同大臣に陪し留学したる兼学五等學師生田得能が今回同國王弟「パーサコラウオン」氏に「パーサコラウオン」殿下と共に帰朝に付特に英文の書翰を付し波利文員葉論蔵及び積増補とも全部並に宝塔一基同堂再建用に供すべき黒檀三本を寄せられ生田得能は波利文員葉三藏並に三衣、鉄鉢、宝塔、仏像等を得て去る十七日帰朝せり大臣書翰の訳文は左の如し

其理を研究し以て南北二方の仏教を参照せんと志するを、台下一に告知するは予の大に喜悅する所なり。台下一希くは予の敬意を表することを記し、波利文員葉三藏並に三衣、鉄鉢、宝塔、仏像等を得て去る十七日帰朝せり大臣書翰の訳文は左の如し

生田は釈宗演とは正反對に、タマユツト派での比丘出家のため十分なお膳立てを受けながら、自らその機会を回避したのである。

た。当時生田と称して居り、これも始めての謙義ながら、随分氣焰が高く、「ゴッドとか、何とか、さういふ者は無い者だ」と言ったりした。其後時々話し合ったが、暹羅で修行し来り、何かと言へば暹羅の話になつた。日本人は何処でも留学地最良になり、英國に留学すれば英國最良、獨逸に留学すれば獨逸最良になるという通り、生田は暹羅に留学して暹羅最良になり、色々暹羅の事を褒めた。暹羅で生活を暹羅風にし、ライスカレイを手掴みにして食ふので向ふの受けが良かったと話した。立派な坊主が居るとも語った。その生田氏が後に織田氏と改めた。織田の養子になつたのである。その織田は信長一族から出で、商家といふ家柄で、そこへどうして養子に入つたか、聞いたやうで忘れてしまつた。後

に彰義隊戦史を読み、一種因縁話のやうなものを、生前に聞き質して置けば宜かつたと思ふ。織田得能となつたのは浅草門跡寺中宗恩寺の住職となつたもので、宗恩寺は境内に新井白石の墓がある(ママ)知られて居る。宗恩寺は織田大蔵大輔信恭の弟なる主膳清が住職となり、後に彰義隊の組頭に任ぜられ、上野で戦敗して更に同寺に復歸した。信恭の長男信任は之と違つて官軍に附属し、京都へ往つて立身せうとし、適當の随行者「が」ないので困つて居たが、主膳は刺客岡田十松の道場に通つた時、相弟子に楠見大助といふのがあり、最も鑿劍を能くしたのを思出し、それが宜からうと勧めた。信恭「信任の筈」は楠見を従へて出掛けなければ、幕府の商家といふので、志を得なくて帰つた。処が大助は信任に家来として戸籍簿に登録

するやうに望み、(當時何之誰家来とせねば世に信用なく、營業も出来なかつたとの事)、信任は大助の酒癖を嫌つて承知せず、明治四年五月三日、大助は酔に乗じて来り、信任を斬殺し、その妻及び養女をも殺し、養女は十四五歳で、手を合せて儘に死んで居つた。主膳の次男信吉が養子となつて居り、其場に居合せ殺されたらうが偶々宗恩寺に出掛けていて禍を免れた。そこで主膳は人と相談し、織田信吉の後見人鷹羽玄道をして仇討の願書を其筋に差出さしめた。市中取締の本宮が小石川伝通院に在つて、願書を許可したが、大助は暫く姿を隠して後に捕へられたので、其筋で鷹羽を召して日ふ、「既に官に捕へた以上は法を以て死刑に処するので、仇討しては本領安堵することが出来ない」と。それで官の為すが儘に任せ、官は大助を斬罪にし、首を小塚原に梟し、玄道も主膳も信吉も之を冥見した。信任が殺害されてから、信吉が家を継ぎ、信吉が死んで其兄の八雄丸が継ぎ、八雄丸が死んで織田の血統が絶え、そこで生田得能が相続した訳になる。これは別に込入つた事情があるかも知れぬけれど、凶行があり、

仇討の願書が出たのは事実であつて、珍らしい事とせねばならぬ。織田得能は養家織田氏と少しの血縁なく、仏教上の學問を以て立ち、後に独力で「仏教大辞典」を編纂したが、極度の神經衰弱に陥り、髪も髯も伸び放題に伸び、瘡も疥も物凄く、此世の人と見えぬやうになり、遂に病没した所、人に依つて何かの祟りと言はぬでなかつた。東本願寺「大谷派」で渥美契縁氏が権を握つた時、井上円了、清澤滿之、村上專精等の諸氏が之に反對し、織田氏が渥美を助けたので横着者と思はれたけれども、本願寺改革の旗を押し立てた者が後に忘れたやうになつたのを觀れば、独り織田氏を怪むべきで無い。仏教改革は鎌倉に釘か、釘らしい釘がないか、東本願寺は現に前よりも悪化して居る(三宅雪嶺「自分を語る」朝日文庫8、1950年、160-162頁)。

『反省會雜誌』第11号、1888年10月10日、6-7頁に、生田得能の「暹羅通信」(1888年7月26日付)が掲載されている。反省會雜誌(月刊、1892年5月から反省雜誌と改名、中央公論の前身)は、禁酒運動を主要なテーマとして18

87年8月に西本願寺の学校教員・学生が創刊した。言わずもがなであるが、不飲酒は、仏教の基本戒律である五戒の一つなのだが、NHK連続テレビ小説で酒造り夫婦の話が人気を博しているのが日本である。

在タイ5ヶ月時に生田は上記「暹羅通信」で次のように述べている。  
「暹羅の」動植物は非常に繁殖致し池に鰻を養ひ野に水牛を放ち花は尽く香を帯び果は皆味を有し候へ共人類は之に反して未だ野蛮の区域を脱せず国民一般の気風として柔弱困窮最も進取の志に乏しく只熟しては水上に浮び飽ては樹下に遊ぶ有様に如何に生「生田」等因循の目を以て之を觀るも氣の焚つことのみに御座候其故天恵地福の饒なるにも拘はらず国内の事物一として觀るべき者なく本邦杯に比しては実に数等相下り候へ共独り仏教は宇内無比の隆盛を極め王公より輿僮「召使」に至るまで仏を敬するの重き僧に施すの多き恰も平城の七朝を現見す

る如く相覺候元來当地は山水の景に乏く尤も盤谷府近辺は一望澤國に候へば宏大なる伽藍の如きも更に風致は無之候へ共其規模の大なる其莊飾の美なる實に耳目を驚するのみに候蓋塔高さ數十丈全身金を以て之を鍍す一道の日光赫として之に映すれば榮煌赫々殆ど人目を眩し宝棟幾十軒四層尽く風鈴を懸け一陣の清風颯として之に触れば數千の簾鈴鏘として声あり快絶快絶恰も溪上水音を聞て煩熱を忘るるの思致候乍去生「生田」は此等蠻民の莊飾せる皮相の外観に情を奪る者に非ず蠻民の一徳には古聖の写せし一器の水は大切に一器に移し更に我意を挟まざる者に候へば仏教の如きも古代に比して著き相違を見ず正法は正法通に相伝ひ受戒より安居より布薩より托鉢より其他万般の行事何れとも世尊在世の聖規を保ち居候候渡航已來は何事も面白又難有恰も鳥拉山(うらら)下に金剛石を掘る有様に心を樂ましむることに候過日も或る比丘が骸骨觀て居る処即ち骨鏤觀の圖を得たれば一瞥感慨に堪えず巴調を賦候  
獨帝英王彼一時、電光朝露更無期、勅君蚤立安身地、人命危於累卵危。

乍併当地十萬の僧は更に彌陀の本願を知らず皆に飛花落葉の下四諦の理を觀じて空寂なる涅槃那の小果を期するに止るは憐れにも氣の毒にも不堪候仍て更に一絶を賦す  
偶感  
憐殺過僧十萬人、三衣一鉢博勞身、吾家妙教君知否、花地月天常是春。

生田得能  
在暹羅盤谷府  
生田にとつてタイの魅力は、仏陀の時代の正法が正法通りに相伝わっている点であつた。阿弥陀仏の本願を知らないタイの出家者は氣の毒な存在であり、その一人になるために出家することには、生田は魅力を感じなかつたようだ。  
タマユットとマハーニカイ

生田は、1891年出版の『暹羅仏教事情』で、タマユットとマハーニカイとの違いを次のように記している。  
「仏教此國「シヤム」に伝はりてより、宗旨に於て一の波瀾を生ぜしことなし、彼徒我日本に十三宗三十派ありと聞て、大に之を驚き、且つ怪て曰く、信徒何れの処にか道帰せんと、而

して彼國の先帝(今王の父)比丘たりしとき、一派を創立して古來の宗制を改革せり、是に於て國內始めて二派を生じ、旧派をマハーニカイヤ「マハーニカイ」と稱し、新派をタマユットヤ「タマユット」と稱す、然れども是れ唯法衣の裁制、或は經文の誦法等に関する、儀式制度の改革に止り、更に宗義に係りて異同を生ぜしにあらざれば、宗旨は尚無二の体面を保つなり、而して新派は寺院僧侶共に少しと雖も、寺院壯麗にして僧侶英邁なり」(生田得能前掲『暹羅仏教事情』52-53頁)。  
このように、生田は、兩派は儀式制度の違いに止まり、宗義の違いは存在しないと述べている。

この点は、同時代のタイのインテリ王族も同様の見解であつた。

松山松太郎を中心とする海外宣教會が仏教の國際交流のために発行した英文雜誌『暹羅之寶珠』(The Jewel of Siam)は、印度、米國、英國に次いでシヤムの5ヶ所にも贈呈された。この雜誌を読んだチャンドラダッタの返信が、海外宣教會『海外仏教事情 第一集』(1889年4月刊) 108-109頁に



次のように掲載されている。

「チャンドラダッタ(ママ)・ダッタ氏書信(1888年9月) サイアム、パンコク(暹) 拜啓 有益なる新紙暹羅の宝珠御送与被下正に落手仕候速に全紙を通読せしに誠に是れ宝珠の名に背かず甚だ貴重なる一新紙なるを感覺し小生をして喜悅に堪えざらしめたり而して小生は貴紙を視て生死の暗夜を照し万人をして其正路を知らしむる一光明の煥發したるが如く覺へたり貴君等は此貴重なる新誌贈与を受けたる者に向ひ仏教上感ずる所を陳べて貴君等に示さんことを丁寧に求められ而して小生は此營養を蒙りたる一人なり故に小生は貴紙に従ひ左にサイアム仏教に就き又小生が仏の大法に關して考ふる所に就き聊か陳述せんとす  
然るに小生は茲にサイアム仏教の詳細を陳ぶるを欲せず是れ貴君等は既に之を熟知せらるることを思へばなり当地には仏教分れて二派となることセイロンに於けるが如し此二派の別は畢

竟戒律を守るの寛嚴及び着衣の方法相異なるのみにして決して重要な点に於て差あるにあらず其根本の法理教義に至りては諸仏教國に通じて同一一般なるなり故に此單簡なる陳述を以て諸君をして當國の仏教の概要を知らしむるに足れりとす  
熟々惟みるに仏教は万有の學にして唯一完全なるものなり我が身辺を取り圍める許多の奧蜜不可思議を顯はすものなり是れ西洋諸國の有形的諸学科の証左する所にして決して空言にあらず小生は宇宙間に三大存在して有情非情を合成するを信ず此有情非情は既知的に属するあり或は未知的に属するあり而して所謂三大とは即ち物、力、空、是なり此三大は共存して……」

チャンドラダッタ氏とは、His Royal Highness Prince Chandrahat Chuchadharin (พระที่นั่งอัมพรสถาน) 1860-1932) のことである。彼は、4世王の第51子、第47子であるワチラーヤン法親王と同じ1860年の生まれである。1873年には第49子のソムモット親王も加えた3名で同時に沙弥に出家している。チャンドラダッタ親王は、外務省勤務ののち文部局長、保健局長を勤めたのち、1896年11月グロムアムーンに昇格しPrince Vivid Varnarajaの名を与えられた。  
彼は英語で、タイ仏教を語ることで知られる数少ないインテリであつた。1893年夏のシカゴの万国宗教會議(日本からは釈宗演、野口復堂らが出席)にもシヤム代表として出席し、Buddhism as it exists in Siam のタイトルで、四諦と八正道について説明している。1908年には『石塊中の金剛石』(The Diamond in the Rock)と題した、一般人向けに仏教を教えるタイ語本を出版した。同書は、今日でも読まれている。  
1900年初め暹羅5世王からの仏舍利寄贈の話が出てくると、この寄贈を利用しようと企んだ、真宗大谷派(東本願寺)の当時の最有力者、石川舜台(1842-1931)は、岩本千綱に千円を与えて同年3月に渡タイさせ仏舍利奉迎活動に従事させた(鹿野久恒編『傑僧石川舜台言行録』(仏教文化協会、金沢、1951年、145-146頁)。それから3年間余、岩本は京都に住み着き、仏教関係者と交流した。これによつて岩本の仏教に関する知識は深

まつたようであるが、僧形で三國探検をした1896-1897年時には、彼の仏教理解は浅かつた。彼は三國探検中、暹羅探検部分の総括として、仏教について次のように書いていたが、この文章では、「宗派にタマユ(旧教)マハーニカイ(新教)の二流」と、兩派を正反對に取り違えている。

「此に暹羅紀行を終るに臨み坊等が通過せし地方及び其附近の氣候人情風俗交通及び農商業軍事宗教地方制度等の概要を一括し左に記述すべし」として、「宗教 人は言ふ暹羅を世界第一の仏教國なりと夫れ或は然らん然れども坊等原(もと)と宗教家にあらざるを以て其觀察亦た杜撰誤解のことなき能はず故に茲には單に其地見聞に係る處の大略を述ぶるのみ

暹羅國は上皇太子の尊(たつとき)より下士民に到る迄一たび仏門に入りて僧となるを慣習となす而して大僧正以下夫々の位格ありと雖も日本の如く法衣の制を以て之を區別する等の事なし

宗派にタマユ(旧教)マハーニカイ(新教)の二流あれども只誦經の法、法衣の工合(ぐあい)托鉢の式等其他些細なる差違あ



タイの宗派別仏教寺院数と割合 (1996年)

ワット数	マハーニ カーイ	タマユット	安南宗 (アナムニカーイ)	華宗 (チンニカーイ)
プラ・アーラー ムルアン(王立寺)	199 (79%)	52 (21%)	0	0
ワット・ラート (民立寺)	28,415 (95.2%)	1,417 (4.7%)	11	8
合計	28,614	1469	11	8

い「暹羅に於ける山田長政」、『東洋哲学』第6巻10、12号(1899年10月、12月)を書くなど、山田が多くの五山文学研究では高く評価されているというが、上村と同時期に来タイした日本人僧侶には、1898年9月に来タイした浄土宗の概旭乗、1899年3月に来タイした曹洞宗の遠藤龍眼がいる。兩人に

#### タマユット派の宗勢発展

『タイ官報』第9巻16号(1892年7月17日号)によれば、タマユットの寺院は1892年当時バンコクに22寺(ボーウオン、ラーチャボピット、ラーチャブラデット、パトムコンカー、ボロムニワット、マクットカサット、ソーマナット、デーパシリン、ピチャイヤート、ブッパラーム、サムバンタウオン、ラーチャデイト、トゥクリート、サデーブなどの著名寺院)、地方に20寺、合計42寺が存在するに過ぎない。地方の寺も中部タイに集中し、その他には南タイのソクラー、ナコンシータマラートに各1寺、東北タイはウボン1寺のみ、北タイには全く存在していない。注目すべきことに現ラオス領のチャムパーサク、シーパンドンに各1寺が存在している。

筆者が1999年3月15日にチェンマイ最初のタマユットの寺(ワット・チェーデイルアン)の住職プラタマディロクから聞いたところでは、この寺は1927年にタマユットに変わったという。北タイにおける最初のタマユット寺院であり、この時点から中部タイ文字を使用するようになり、読経も中部タイ語に変わったという。

タイではワットの格は、二つに分けられている。一つは、王室が建立・維持するか、それと同格と認められたプラ・アーラームルアン(王立寺)であり、日本風に言えば官幣寺院である。もう一つは人民が建立・維持しているワット・ラート(民立寺)である。タマユットは格の高い王立寺の割合が高い。タマユットとマハーニカーイに教義上の違いはないとは言え、タマユットとマハーニカーイの僧侶は、通常布薩などの仏事を共にすることはできない。また、たとえマハーニカーイで具足戒を受け比丘に出家しても、タマユット派の比丘になるには同派で再出家しなければならない。満100歳で一昨年入寂されたプラヤーナサンウオン大僧正(1913-2013)も、東北タイの森の僧(プラ・パー)の元祖として有名なアーチャン・マン師(1871-1949)もタマユットへの再出家組である。

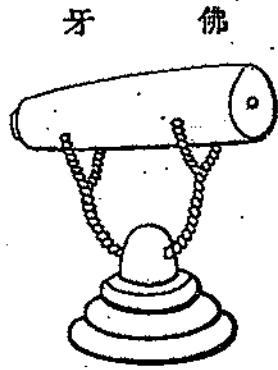
るのみにて素より区別を立る程のことなし故に暹羅の仏教は一に釈尊の膝下に奉仕するの宗派と云ふを以て適当なるものと信ず。旭日未だ微光を放たざるに早く已に数名の僧侶幾群となく鉄鉢を肩にし戸前に立ちて鉢鉢を振る元來暹羅の僧は朝昼に食ふて午後に至れば流動物の外口にするを許されず又飲酒は嚴禁なれども肉食は差支なし僻陋の地にては鉢鉢は一つの儀式に止り人民より朝昼共食物を寺院に持ち運ぶを常とし(全体朝食は鉢鉢物を喰ひ其残物を昼食とするを法とす)渠等(かれら)は之を以て其義務と爲すものに似たり法衣及袈裟は悉く香染(黄色)にて大僧正以下……(岩本千綱『暹羅、老鴉、安南三國探検実記』博文館、東京、1897年、71-72頁)。

1898年ごろから在タイした哲学者の曹洞宗インテリ僧上村観光は、次の記述から見ても、当時の岩本千綱ほどにもタイ仏教を理解できなかったようである。

「上村氏は若狭の人、同国の発心寺に投じて出家し、曹洞宗の人となり、のち哲学者(現在の東洋大学)に学び、卒業して暹羅(現今のタイ国)に留学し、明治三十一年、帰朝の後、高野山や東大寺の学林の教壇に立ち、高野と南都「奈良」を往復していたが、田島「志一」氏と知り合つて『禅宗』誌上に「暹羅の仏教に就て」の一文を寄せた。時に明治三十二年のことであつた。その後、暹羅の勅願寺の仏舍利を日本に奉請する(この仏舍利は名古屋の覚王山日蓮寺のちの日泰寺に安置された)特使曹洞宗の日置然仙・臨濟宗の前田誠節の両師に、忽滑谷(ぬ

かりや)快天師と共に随行して、明治三十三年、暹羅に再渡し、三十五年春「1902年3月」から、『禅宗』の主筆に任じた。その頃は未だ五山文学とは無縁で、一仏教学者として編輯を委ねられたのである(上村観光居士の五山文学研究史上の地位及びその略歴)(玉村竹二『日本禅宗史論集 上』思文閣出版、京都、1976年、532-533頁)。





大宮孝潤が写した佛牙  
(仏陀の大歯)

内で頻りに密会した挙げ句、1887年2月15日に王宮内の大奥で男児を出産した。ラーチャプラデット寺は、格式が高く同寺の僧侶はしばしば王宮内の仏教儀式に招かれるので、王宮内に入る機会が多く、王宮内の女性たちと接点が多かったのである。僧侶が性行為を行うことは重大な戒律違反である。また、王族は結婚する場合は事前に国王の許可を得なければならぬ。このような掟を顧みず、しかも王宮内で秘かに出産するのは王権に対する重大な冒瀆である。ペップリー行幸中の5世王に出産が報告されると、同王は直ちにトーの死刑を命じた。前夜から答打たれたトーは2月25日松前前に斬首され、遺体はそのまま埋められた。王女は、王族のタイトルを奪われ、出産の日から足枷をはめられて牢に投

じられた。王族のタイトルを剥奪された女性の呼び方は、プリセスからモーム・インに変わる。モーム・インと呼ばれるようになった5世王の異母姉は、9月2日夜に絶命した。直ちにワット・アルンの墓地で、足枷や鉄鎖をつけたまま焼かれ、骨灰は地中に埋められた。彼女の子は、その前に既に死亡していた。5世王はプリサダーンの帰国を許さなかった。ただ幸いに、彼からプリンスのタイトルを剥奪することはなかった。プリサダーンに残された道は少なかった。彼は出家すべくセイロンに向かった。逃避行のなかで、5世王との関係がどうなったのかは判らない。

哲学館出身の天台宗の僧侶、大宮孝潤(1872-1949)は、プリサダーンが出家した当時、セイロンに在った。アマラプラ派に出家して間もないプリサダーン親王に会った大宮は、プリサダーンの出家がセイロン人の仏教信仰に与えたインパクトなどを次のように書いている。

「暹羅の皇子チュウムサイ「チュムサーイ」殿下は同国先々国王「3世王」の皇子「正しくは孫」にて今代の伯父「正しく

は従甥」に当る由、殿下は昨年十月廿五日を以て当地錫蘭島へ着、以来熱心に仏典を学ばれ、去る十一月五日には愈々皇子の服を脱し、各国より贈呈せられたる十有八個の勲章を襲し、自ら其佩刀を折り、当地アマラプラ派(ママ)の大僧正須菩提「スボデー」に従て剃染(剃髪染衣)受戒し名をデナワラワ「サ」(Dhanawala)と改め、愈々黄衣持鉢の身となられたる由、余は是れを聞きて或は狂心の沙汰には非るか、若しくは亡妻亡子等其他の事情によりて一時其精神を頓挫したる者には非か歟と、竊かに怪しみて容易に当地人士の吹聴を信ぜざりしが、偶々一昨々日よりは当地コロンボ港を隔つること七十二哩、カンディ「キャンディ」と名くる処のマリガワなる寺「Dargah Mari Gawa」にて、例年一回宛五日間を限りて仏牙を拝観せしむるの例日に際し、仏教信徒は踵を接して是れに趣く時とて、余も亦其拝観に趣き、一昨十二月廿日午前七時半当港発の列車に搭じて東行七十二哩、午前十一時半同地カンディに着、予め当地某氏より発電し置かれたる趣きにて、カンディ仏教徒、大学の校長自ら余を出迎へられたる

に接し、延かれて其寄宿舎に至りて休憩宿泊所と定め、是日は折悪敷非常の雨天なれば、翌日を以て仏牙拝観に詣でんと其日は先づ寄宿舎に休憩したりしに、右寄宿舎は如何なる故にてか諸人の出入頻繁として頗る忙しき様子なるのみならず、前に縁門を設け非常なる盛観に飾り立てたる故、余は其何に故なるやを問ひたるに、当日はシャムの法親王殿下が仏牙拝観の爲め来らるるによりてなりとの由、法親王デナワラワ王殿下はスボデー大僧正外廿余名の僧侶と共に午後二時半コロンボ港の列車に搭じ、午後六時半兼て用意し置きたるカンディ仏徒大学の寄宿舎に着せられたり、其時無慮数千の老弱(ママ)男女群集して全く道路の通行を杜絶し、到底数十名の巡査の制圧し得る所に非ず、混雑の状頗る盛観なりき、斯くして余は二階の一室に静居し、殿下の剃染受戒は果して狂気の沙汰なるや否や、其姿容を伺うて知るを得べく、又且つ其事情を聞き得るの機会を得たりと察し居たりしに、殿下は一重の扉「まど」を隔てて余の隣室に居を占められ、日本僧侶が其隣室に居ることを聞かれ、直ちに自ら欄戸を開き、玉

バーヌランシー親王に同行帰国しなかつたもう一人

1890年8月バーヌランシー親王に随行して再来タイし、タムユントに出家する予定であった生田得能は、ついにタイ行きを取り止めたが、同親王一行の帰路、香港で逃げ出し、バンコクに戻らなかつた人物がもう一人存在する。プリサダーン(Prince Prisdang)親王(1852-1935)である。彼は、訪日中、勲一等旭日大綬章を叙勲されたが、5世王はそれを佩用することを許可されず、1891年2月23日付で、外務大臣テウウォン親王は青木周蔵外相宛に次の断り状を出している。"I am at the same time under the painful necessity to advise Your Excellency that His Majesty my August Sovereign has for purely personal reasons refused to grant for the present permission to Prince Prisdang to wear the decoration graciously bestowed on him by His Majesty the Emperor of Japan. I am thus not in the position to return to Your

Excellency the receipt signed by him as desired." (外務省記録62/520「外国入叙勲雑件(暹羅人之部)」)プリサダーン親王は、3世王の王子であるチュムサーイ親王の第7子、即ち3世王の孫である。3世王(1788-1851)は2世王(1768-1804)の第3子、4世王(1804-1868)は同じく2世王の第43子であるので、3世王と4世王は16歳半年齢が離れた異母兄弟である。5世王(1853-1910)は4世王の第9子であり、プリサダーンは3世王の孫であるから、5世王からみればプリサダーンは年齢的には1歳半上だが、世代的には従兄の子ということになる。1871年に、5世王はプリサダーンをイギリスのキングズカレッジに留学させ土木工学を学ばせた。同王は彼の英語力を賞われ、1881年から欧米12ヶ国の公使に任命された。彼は欧米におけるタイ人最初の常駐公使である。1885年5世王から国政改革について諮問を受けた彼は、在欧中の3人の王弟とともにタイを立憲王制にすべきであるという急進的改革案を上奏した。1887年4月、

郵便電信局長として本国に呼び戻された。現時点ではタイ語のウィキペディアでさえ、彼が主導した王権を制限する急進的な改革案のことが、彼が香港でバーヌランシー一行から離脱した遠因であると説明している。しかし、真相は香港で彼は或るタイ人女性と駆け落ちしたのであった。87年に帰国後、彼と親友のプラー・スラサックモントリーとの親交が復活した。スラサックモントリーの義理の姉「ス」(スラサックの兄であるスパンブリー知事の妻)とも接する機会ができ、両者は遂に不倫関係を疑われるようになった。どちらが言い出したものなのか、プリサダーンの訪日出張を機に、香港で落ち合い、海外で自由に生きようと計画が作られた。プリサダーンには当時、3人の妻がおり、Mae Shiは人妻であったが、香港で落ち合ったプリサダーンとMae Shiはサイゴンに出て、カンボジア国王に任官を試みるが不成功、次にシンガポールに出て、知り合いがペンで営む会社への就職を依頼するが



これもダメ。とうとうバンコクに帰りたいが何とか命だけは助けて欲しいという歎願状を5世王に出すまでに窮した。1887年にタイの王侯貴族たちを震撼させた、大スキヤンダルの悲惨な結末があったからである。一部にモーム・イン事件として知られる、この事件の概要は次の通りである。モーム・インは4世王の第3子で、同王が王位に就いた後生まれた最初の子である。王族の地位を剥奪される前は、インヤオワラック王女(1852年1月21日生)1887年9月2日没)と称した。5世王の二つ違いの異母姉であり、ワチラヤーイン法親王の8歳上の実姉である。彼女は、ワット・ラーチャプラデットの僧であるトーと王宮

顔に満腔の喜悦を顯はして余に交話を求められ、数回の挨拶を終りて後、殿下は余は皆て貴国日本に趣きたりしことあり、即ち千八百八十六「正しくは1890」年なれば今を去ること凡そ十一ヶ年前なりき、其時余は日本の天皇陛下に謁し奉りて一個の勲章を拝受し、東京、京都、横浜、高野山、等各所を觀覽したりき、貴国の文物は凡て優美なり、文明の余光は先回の日清戦争に於て知るを得と、頗る吾が帝國を賞賛せられ、更に言を改めて余は大に感ずる所ありて今回仏門に歸し、此の通りの黄衣の身となれりと、温顔寛言、少許の狂姿なきのみならず、頗る達者に上品の英語を話し、文明的の教育を受けられし点に於て間然する所なし、聞く所に因れば殿下は本年四十有六歳十年前に貴妃を亡ひ、爾後日本及び英仏獨伊等の諸國を周遊せられし由、是れを以て殿下が得度の事情を詳かにしたる者には非れども、兎に角、其狂気の沙汰に非ず又妻子を喪亡したるために思想を挫折して剃染したる者に非ず、と云ふことだけは知るを得たるなり、之れに就きて更に読者に報道すべきことは、殿下が仏門に歸して剃染せ

られしより錫蘭に於ける仏教に非常なる勢力を加へたることは、然れなり、錫蘭の仏教信徒は、殿下が少壯の時の写真を得て之れを印刷に付し、戸毎に之れが額面を掲ぐる事宛も國王の肖像を奉ずるが如く、殿下歸仏以來は錫蘭人の外教「キリスト教」信徒が急に其数を減じて、多く再び吾が仏教に帰順し、老弱或は涕泣して仏教之れより輝かんと喜ぶものありて、兎に角一威勢を加へたり、殿下は今日即ち一月一日午後一時を期して仏牙拝観に趣かれ、明日当港へ帰らるる予定なりしも、余は之れが為め光陰を消費することを望まざれば、昨日午後仏牙を拝観して、本日早朝殿下及び須菩提大僧正に別を告げ、コロンボにて再び面晤せんことを期して、独り当港に帰着したり、

を許す際は数千の拝觀者群集して詳しく見るを得べからざれども、余は同寺僧の好意によりて真最初に其開塔の時よりして見るを得たれば幸に詳観したり、其金宝塔三重共何れも頗る壯麗、加ふるに諸種の寶石を彫鏤し、余は其之を製作せるに就きて何十万又は何百万の大金を消費したるやを算する能はざるなり、或人は云ふ是れ虎の牙にし、或人は云ふ是れ虎の牙にし、其故は人の牙は少しく平形ならざるべからずして又且つ此の如く長き筈なし、又仏は入滅の後直ちに火葬したり、火葬に触れたるの牙悪んぞ此の如き光沢を有する筈あらん、其状全く虎の歯に類すと、然れども仏身は非常に偉大なりしに相違なければ、其牙の大なるは怪むに足らざるなり、但し一旦焼きたる歯は如何なる光沢に變ずるや余の未だ知らざる所、然れども若し是れ果して虎の牙なりしならんには、如何にしてか此寺堂を興し此金塔を作りて宝蔵するに至り

しや、余の考を以てすれば到底山師細工の爲し得る業に非ずと思はるるなり、又其形状の点に就て云々すれども、上古人々未だ火食せざる時に當りてはその齒頗る壯健、或は猛獸に類するなきを保せず、釈尊の代既に是れ水草を追ひ野虎と其食を共にする世にあらざりしは明瞭なる事情なれども、兎に角古代の人身、間々或は非常壯健に、且つ異形の齒牙を有するの人も、亦全く之なしと斷言する能はざるべし」(在錫蘭大宮幸潤「暹羅の皇子殿下とカンディの仏牙」と「東洋哲學」第4編第1号、1897年3月20日、28、31頁)。

プリサダン出家の事情を知らない大宮は、トンデモない推測をしたものである。プリサダンは、コロンボのKotahenaにあるDipaduttarama Purana Thai Raja Maha Viharaya (Jathheanaru) 寺に止住し、5世王がお亡くなりになった後、帰國して還俗した。

連載⑦  
パンコクの日本人

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(43)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

岩本千綱はバンケラ寺で出家した?

岩本千綱は、自著『暹羅、老嫗、安南三國探検実記』(博文館、東京、1897年、518頁)において、三國探検のため、1896年12月20日にバンコクを出発した理由、経緯を次のように記している。

「於是(ここ)において」か静思黙考(おも)くらく從來余が為し來りしものは毎(つね)に其長所を棄てて短所にのみ走りしを以て屢々企て屢々敗れ事終(つい)に此に到る之れ予め期する所にして又た誰をか恨みむに余が所為の方向を變ずるに坐(ざ)するのみ眼を放てば今や東方の形勢益々切迫し來り就中暹羅の國歩日々艱難に陥る而して此の國の存亡は東方の大勢に關する所実に尠からず然れども未だ一人の実踐上之に對する方策を講ずるものあるを聞かず余は素より熟知す殖民の事業

商業の計画は疎放余が如き者の能く為す所にあらず加かず、予て將來余は得意の点に向て運動せんにはと心終に此に決し先づ進んで暹羅の内地に入り此國に重大なる關係ある北方仏蘭西新殖民地老嫗(ラオス)を跋渉し転じて東方安南東京(トンキン)に向ひ到る所の人情風俗地理宗教其他萬般の実況を視察し一は以て自ら資する所と共同感者の參考に供する所あらむと胸中の画策已に成れども只た之に要する資金の出所なきに苦しみしが百方熟慮の末終に意を決して湄南(メナム)河畔のバンケラ寺に投じ髪を剃て僧と成る蓋し余が今回跋渉せんとする地方の人民は何れも大に仏教を尊信し僧侶を遇する甚だ厚く苟も僧籍に身を投ずるものは托鉢によつて旅行を為し且つ盜賊等の危害を避るを得る事を知ればなり……

余は北進の途に上るに先づ余が第一の恩人たる農商務大臣陸軍中将スリサクチーモントリ「スラサックモントリ」侯に問ふに此行に對する侯の意見を以てす蓋し侯は皆て老嫗の土寇を征し五ヶ年間該地方の各所に転戦し頗る其地理風俗等を詳知すると余が從來暹羅に於て為せし仕事は悉く侯の指教を乞ひしとを以てなり然るに侯は大に此舉を賛し懇切に指導する處ありしが又た行路の危難を慮て日ふ此の道中たるや數十人の護衛と萬般の準備とを整へて行くにあらずれば種々の危険を脱れ難し然るに今や足下等は身に寸鉄を帯びず同行(わづか)に二人を以て此途に上らむとす其危険固より知るべきなり恐らくは足下等未だ暹羅國境を超へざるの間に於て命を殞(おと)すに到らん乍去足下等強て之を為んと欲すれば文部大臣寺院局「CHURCH」長バスカラウラングス「バーサコーラウオン」侯に乞ひ治道の各寺院に告示書を發せしめ行途の便を計るを上

策とすと余等謹て其教に従ひ去て寺院局長バ侯を訪ひ備(つづ)さに語るに余等が希望を以てす侯曰く余は能く足下等を知るものにして又た其舉を賛す然りと雖も僧侶として旅行するには一通りの説經儀式位は知らざる可からず否(しか)らざれば余は寺院局長の職務上告示書を出し難し若し是非共足下等の志を遂げたくば幸に余に属する寺院「ワット・プラユーン」あれば三四ヶ月間之に滞在し僧務を修めて然る后出發さるる方得策ならむと余等此に到て頗る困却せしも侯の性質は兼て知る所にして懇請の到底徒勞に属するは明なれば心竊(ひそ)かに決する所あり陽に諾して其場を去り翌二十日「1896年12月20日」一封の書を侯に残し突然盤谷府を發足し此に千里遠征の道を開けり。

上記文中の「湄南(メナム)河畔のバンケラ寺に投じ髪を剃て僧と成る」という条を読めば、

344

710-7-70  
2015年4月3日

343



『海外仏教事情』（国際仏教協会発行）の「特輯 タイ国の仏教」が、日・泰仏教関係の見出しの下、岩本千綱を「タイで出家した最初の日本人」と理解した（同誌、第7巻2号、1941年2月号、46頁）ことは、強いて間違いないと言ふこともできない。次号以下で述べるように、岩

本の書いたものは、地名の読み方などに大きな問題があるとは言え、多少の誇張を除けば体験した事実を記したものであり、今流行の偽造・捏造・創作などではないことを、筆者は関連資料の対照によって確信している。しかし、上記だけの情報では、「パンケラ寺」の正確なタ



タイ語訳政信著『潜行三千里』（1954年12月刊）のカバー

イ語発音が何なのかは想像するしかないし、タイ語検索によつて仮にそれに近い名称の寺が見つかったとしても、そこが、岩本らが「髪を剃って僧と成」った場所なのかどうかの決め手はない。出家したことを証する、最も重要な証拠は、本誌昨年12月号にも記したように、得度式を主宰した戒和上（ウパチャー、Uparaj）の存在である。ところが、岩本は、ウパチャーの名に全く言及していない。彼は「髪を剃って僧と成」ったのではなく、髪を剃って僧に化けただけなのではないかと疑われる所以である。

#### 岩本千綱の 曹洞宗大学林での講演

1898年1月23日（日曜日）、曹洞宗大学林（当時は、麻布北日ヶ窪（六本木）に所在、駒澤大学の前身）で、曹洞宗の学生・僧侶の団体である和融会が主催した岩本千綱講演会が開催された。

和融会の月刊誌『和融誌』第12号（明治31年2月10日発行）は、「和融会一月の例会、去月第四日曜日（1898年1月23日（日））」には大学林内に和融会月次会を開き、曾て久しく暹羅国に遊歴されたる岩本千綱氏を聘し彼地の国情風俗及び宗教即ち仏教上の談話を聴き、大中学林の会員は一同新知識を得たるの感ありき（同号、目次のウラ頁）と報じ、岩本の講演速記を、「暹羅老婦安南三國探検」というタイトルで『和融誌』第13号、14号、16号、17号に4回に分けて掲載した。

この岩本千綱講演が、本誌2月号に引用した、来馬塚道（1877-1964）が自著『黙仙禪師南國巡禮記』（平和書院、1916年）の中で、「岩本氏の探検の事は、予が、まだ大学『曹洞宗大学林』に居た頃、特に予が氏の寓居を訪（と）ひて、大学の大講堂に講演されんことを依頼した関係もあるから、比較的詳しく記憶している、氏は、何等かの目的を以て此国に來り、種々の計画を立てて居る間、山本銀介氏と知合になり、明治二十九年十二月から百十一日間に、暹羅、老婦、安南の三ヶ国を跋渉したのである、此兩人は、金は無し、又普通の旅客と名乗つては、途中の危険のある

事を慮つたので、俄かに僧侶の姿となり、暹羅式の法衣に身を装ひて、しかも日本の僧侶と云ふ名義で内地へ向つたとの事である」（同上書、133-134頁）と書いている講演である。来馬塚道は、曹洞宗大学林卒業後、月刊誌『伝道』の主筆、1902年5月18日に自らの結婚式を仏前結婚式で行い（中外日報1902年6月3日号）、その後の仏前結婚式の雛形を作つた人物でもある。当時の和融誌には、殆ど毎号、来馬の論説が掲載されている。

曹洞宗大学林における岩本千綱の講演は、1892年の初訪タイ以来6年間のタイ知識を総結集したものといふことができる。講演の冒頭で、彼は「暹羅の事柄を仮りに十項に分けて御話致します、第一は暹羅王國の略歴史、第二は暹羅國の地理氣候、第三は同じく人情、風俗、習慣、衣食住等、第四は国體、政治、法律、第五は軍事、財政、貿易等、第六は物質的文明及び教育等、第七は宗教、第八は種々なる儀式に就ての雑話、第九は昔より今日に至る迄日本と暹羅と交通の沿革、第十は結論としまして、是れに就ての所感を述べ

タイ日本人に関する新情報が見つかふ可能性があるのだが。岩本は前席講演十項中の第七項、第八項で、曹洞宗の僧侶や学生、即ち仏教専門家を前に、仏教に關しては素人であると断つて遠慮がちに、タイの仏教、仏教関連儀禮、僧形で三國探検に上つた理由などを次のように語つた。

「第七 宗教のことは、前に御断り申せし通り、私は宗教は少しも分りません故、随て注意も薄ふあります、処で一昨年（1896年）十二月廿日暹羅を出て、去年（1897年）四月九日迄百十一日の間、暹羅老婦安南の三國を旅行する其必要の爲め僧侶になつた、（マ）少しは間違つて居るか知りませんが、私が目で見、耳で聞たことを話すこと故、鳥と鷲の如く甚敷間違ひはなからうと思ひます、さて印度は仏教の盛なる國と云ふことを聞き居りますが、私が今日迄実檢した処では、暹羅の如き仏教の盛なる國は他にあるまいと思ひます、一般宗教心はドーかと云ふに上國王より、下下等人民に至る迄、天地間に貴ひものは独り釈尊のみと云ふ觀念があり、素より暹羅は

一宗一派で宗教と云へば、本尊の外何んにもない位で、御寺へ参つて見ても、御像は立像と坐像とありまして、立像は御足を揃へて二両手をだらつと下げたると前に突き出すと（此処手を以て形容す）二ツ、坐像はあぐらをかいて左の手を下げたのと両手重ねて膝上に置きしと二ツ、都合四ツあるそれだけで、寺院によりては二十も三十も飾つてある像が、今御話の四形の釈尊像の外は、何にもありません、如此彼れ土人等は、生れながらにして天地間貴ひものは、釈尊とのみ心得、それを親から子へ口伝へに次第々々に遺伝となり、理屈や學問上から貴ぶの何んのと云ふことはない、僧侶は釈尊の代表者たる活仏である故自身は如何なる苦みをしても之に供養せんければならんと云ふことが、充分腦髓に浸み込んで居る、それ故へ耶蘇教が仏蘭西より這入つて居つても、充分弘まらん、ソコで田舎へ行て見ると茅草の中に石造の嚴然たる實に一見驚くような、教堂が建つて居り、仏蘭西の宣教師、若くは暹羅の牧師を置き又た隣國柬埔寨（カンボジア）或は安南杯の孤児にて十三才より十


終りに火葬に致し（暹羅には土葬はありません）身分のある人には國王臨幸ありて第一に点火致します、されど必ず僧侶は正席につきます、どのような儀式でも僧侶が望ねば正式にあらずと致して居ります、ソコデその僧侶はどれ程の智徳があるかと云ふに、別に智識徳望も何んにもない様です、首府盤谷がその通りである故、内地は無學無識の僧侶のみで論より証拠、私の様な何も心得ぬものでさへ普通の教育あれば日本の知識で立派に通用します、凡て僧侶の務めは朝、もつくら起きて薄明きに拘はらず、釈尊の前に端坐し御經を一卷誦誦し終りて、銘々鉄鉢を肩にし托鉢に出かけ、人民は皆門の戸口に出でて飯或は菜杯を供養します彼國の僧侶は御承知の通り、飲酒邪淫を非常に嚴禁してありますが、肉食は家でも牛でも何でも食ふて差支ない、鉄鉢を出しますと、供養者が其中へ供物を入れ後へ退いて礼拝して居ります、私は七十才ばかりの老女が一文銭を上げて、恭しくおがんで居るを見ました」（前陸軍中尉岩本千綱君口演・文狹「挾」廣文速記「暹

60年4月2日生)は、13歳近くになった1873年1月10日に、他の4名の異母弟妹、即ち、ソムモット親王(1860年9月7日生、その日記は5世王時代の重要資料で本シリーズでも度々紹介した)、スナンター王女(1860年11月10日生、1880年5月31日に御座船が転覆して水死。異母兄5世王の愛妻)、チャントラタット親王(1860年12月11日生、前号で紹介したように英文でタイ仏教の紹介に努めた)、ノンカラーン王女(1862年7月12日生)と共に、前頭部に長く伸ばして束ねた頭髮(三)部分を剃る儀式をして元服した。

この5名中女性を除いた3名の少年王族は、同年8月7日に一緒にワット・ボーウオン寺で剃髪沙弥出家し、78日後の10月23日に還俗した。なお、ワチラヤーン法親王が比丘出家したのは、1879年6月27日である。

ワチラヤーンワローロット法

をして送りました。此の前真宗から織田得能氏杯も二三年遊学



を守ろうなどという気持ちには、  
微塵も持ち合わせてはいないこ  
とは明白であり、言明心に基づ

親王伝(タイ語、マハーマクツ  
トラーチヤウントヤライ財団  
刊、1971年)。

このように元服式と沙弥出家  
は全く別物であるが、岩本は  
ごっちゃにして説明している。

第2の結婚式についても、僧  
侶が結婚式そのものの祭司とな  
ることはあり得ないはずであ  
る。結婚行事の一環として、新  
郎新婦の親戚などに僧侶を招い  
て御経を上げてもらうことは多  
いようだが。

ただ、第3の葬礼は、それほ  
ど間違っていないようだ。

筆者は、1981年にバンコ  
ク、ナインローンのワット・ケー  
寺と小路を挟んで反対側に新築  
された5階建て100室ほどの  
フラット(敷地はワット・ケー  
所有)の3階の一室(35平米)  
を10万バツで20年の長期契約  
(セ、承)の潮州語発音  
して、同所で断続的ながら20年  
を過ごした。ワット・ケー寺  
では、頻繁に葬儀が行われ、  
真夜中過ぎまで映画やリケー  
(23)、中国劇ギョウ(24)、「優  
の福建語発音」などの演劇の大  
音響がひびき安眠を妨害される  
ことも少なくなかった。正に岩  
本が葬礼式で述べている大騒ぎ

の様である。風向きよって時に  
は有機体を燃やした悪臭も漂っ  
て来た。

岩本が記す国王の葬儀臨席に  
ついて、今日でも国王や国王  
代理の王族が、エリートの大葬  
式に臨席される様子が、毎日の  
ように20時のテレビニュースで  
放映されているのでおなじみの  
通りである。

蛇足ながら、バンコクの庶民  
生活の一端を筆者が住んだフ  
ラットの生活振りを通じて紹介  
しておこう。

郵便物は、フラット1階入口  
カウンタに放置され、その日  
の内に回収しないと、受け取る  
ことは難しかった。自分のもの  
でない封書を、誰かが勝手に  
持つていくからである。筆者の  
部屋には、10年分以上のタイ語  
新聞雑誌各種を積み上げていた  
が、白蟻に入られて2、3週の間  
に、新聞の中身は食い尽くさ  
れてしまった。白蟻は、本より  
も印刷インクの滴る新聞紙を好  
むと見えて、同室に蓄えていた  
書籍類の被害は少なかつた。後  
から思うと、蛍光灯の下を少数  
の白蟻が飛び、夜中に白蟻が新  
聞紙を食べる音もしていた。10  
年ほど経たころ、フラット住人

数名(その親王は日本で働いた  
ことがあるという女性)がフ  
ラットの出納管理者を名乗り、  
少額ながら管理費と水道使用料  
などを徴収し始めた。当初契約  
では、これらの経費は無料とな  
っていたのだが、そうこうす  
るうちに、彼等は徴収した金を  
持ち逃げし、水道局への支払が  
滞ったので、水道局からはフ  
ラットに通じる大きな水道栓を  
止められてしまった。フラット  
住民は隣接するお寺(ワット・  
ケー)に水をもらいに行くこと  
となった。男性の場合は僧侶の  
行水場で行水することもでき  
た。筆者が白いパンツ一枚に  
なつて行水していると、僧侶か  
ら白いパンツは透き通るのでダ  
メだと厳重注意を受けた。筆者  
の部屋にはエアコンなどは付け  
なかつたが、どの季節でも快適  
に過ごすことができた。暑けれ  
ば水をかぶり扇風機で十分に冷  
やすことができたからである。  
電話料金は、銀行の自動引き落  
としができるようになったの  
で、使用料未納のために不在中  
に断線されてしまい再開通のた  
めに、ワット・リアップの対面  
にある電話局に支払に行くのも  
なくなつた。

20年契約が切れる間近に、金  
融危機の影響で、バンコクの至  
る所に多数売れ残っていたマン  
ションを安く購入できたのは幸  
運であつた。フラットから引ッ  
越しをしようとして、入口の雑貨店  
で運搬車をどこで雇えばよいか  
と尋ねたところ、その女店主は  
引ッ越すのなら、フラットの権  
利を売れ、運搬は自分の車を  
使つて無料でやつてやると言い  
出した。20年契約が切れると、  
無権利になるものと勘違いして  
いたが、セ(承)契約では更  
新する権利が残るのだ。この権  
利を女店主の言い値の10万バ  
ツで売った。但し、20年前の10  
万バツは日本円で100万円  
したが、この時は30万円に下  
がつていたが、女店主は、この  
フラットの10数部屋の権利を手  
にしており、借家経営をもして  
いたのである。別に10万バツ  
以上を提示する申出をする人も  
あつたが、彼は即金を準備でき  
なかつた。引ッ越しとなると、  
話したこともないフラットの住  
人たちが次々に室内に入つてき  
て、これを呉れ、あれを呉れと、  
木製ベッドや多数の本立て、そ  
れに紙の類いまで運び出して  
いった。

### もう一人の偽僧侶 辻政信大佐

辻政信(1902年10月11日  
生、1968年7月20日死亡宣  
告)が岩本千綱の先例に倣つた  
のかどうかは分からないが、タ  
イで偽坊主になつた有名人とし  
て彼の名を逸することはできな  
い。

辻政信参議院議員は、196  
1年4月ラオスで消息不明に  
なつた時も僧形であつたが、こ  
こで紹介したいのは、1945  
年8月終戦時の話である。「作  
戦の神様」とも讃えられた辻政  
信大佐は、終戦時、バンコクに  
司令部を置く第18方面軍(19  
45年7月16日編成、略称義部  
隊、司令官は中村明人中将)の  
作戦担当課長(第1課長であつ  
た。激戦のビルマ戦線にあつた  
辻は、1945年5月24日に在  
タイ軍(当時は未だ18方面軍で  
はなく、1944年12月8日に  
編成された第39軍)への異動命  
令を受け、6月5日にバンコク  
に着任した。彼の任務は、ビル  
マ陥落後次ぎはタイに侵攻して  
くるはずの英軍に備えることで  
あつた。

辻は敗戦の日の8月15日に  
「何とかして坊主になりタイ国  
に潜ろう」と覚悟を決めた(辻  
政信「潜行三千里」毎日新聞社  
1950年6月5日発行、26  
頁)。辻の意図を伝え聞いた7  
名の若い少尉や見習士官(全員  
僧侶出身)が、同行を志願した。  
彼等は、日本の東南アジア作戦  
の総司令部であつた南方総軍  
(終戦時の司令部はベトナムの  
ダラットに所在)の特攻隊要員  
であつたが、乗るべき飛行機も  
なくなつたためバンコクの18方  
面軍に割り当てられて地上の勤  
務に就いていた。辻を含む8名  
は、日本人経営のタイランド・  
ホテルの一室でタイの僧衣に着  
替えた(同上28頁)。

青年僧の姿になつた7名は8  
月16日に、ワット・リアップ内  
の日本人納骨堂に入り、辻は翌  
17日早朝同所に入つた。辻が、  
18方面軍がタイでの対英決戦の  
ために備蓄していた大量の食糧  
や必要物資の一部および高額の  
資金や金塊を持ち込んだことは  
言うまでもない。

余談だが、筆者は1990年  
前後、未だ生き残つておられた  
在タイ日本軍の軍人・関係者多  
数にインタビューを行い、貴重

な資料なども複写させて頂いた  
ことがある。第18方面軍の参謀  
部は3課から成り、第1課長(作  
戦)は辻政信大佐、第2課長(情  
報)は矢野正俊大佐(陸士37期)、  
第3課長(後方)は小西健雄大  
佐(辻政信第1課長と同期で陸  
士36期)であつた。この3人中、  
矢野正俊、小西健雄の両氏には、  
それぞれ熊本市黒髪、東京の武  
蔵境で、ギリギリながらお目に  
かかることができた。この外に  
も、参謀の原寿雄少佐(和歌山  
市)、憲兵隊副司令官の堀井龍  
司中佐(東京)、憲兵隊特高課  
長岩崎礼三少佐(大阪)、中野  
学校出身の大場啓少佐(東京)、  
員沼研造少佐(秋田)、楠本機  
関長の小田正身(三重)、大川  
周明塾で訓練を受けた逆瀬川澄  
夫(兵庫県西宮市)、新井章(東  
京)、岩崎陽二(大分県佐伯市)  
などの各氏にもお目にかかつ  
た。また、民間人では三菱商事  
バンコク支店長の新田義實(1  
894-1992、戦後は明和  
産業社長)、日タイ文化研究所  
の平等通照(1903-199  
3、横浜市港北区新羽善教寺住  
職)などの諸氏などであつた。  
これらの方々は、現在では殆ど  
故人となられてしまつたものと

思われるが、諸氏から頂いた貴  
重な資料は、この25年間、別の  
調査にかまけて殆ど利用するこ  
ともなく放置状態になつてお  
り、誠に忤怩たるものがある。

在タイ日本軍の経理責任者で  
あつた第3課長小西健雄氏(戦  
後はポラ化粧品の中野地区責  
任者)の話では、日本軍が持つ  
ていた金塊の多くは、敗戦後  
パーツなどに現金化して各部隊  
に配布した。残した金は英軍に  
没収されないようにするため、  
池の中など様々な場所に隠した  
が、英軍は、結婚指輪や金歯ま  
では取り上げないだろうと考  
え、金の指輪を多数作成して将  
校に配布し、また彼等の歯を金  
歯にしたということである。

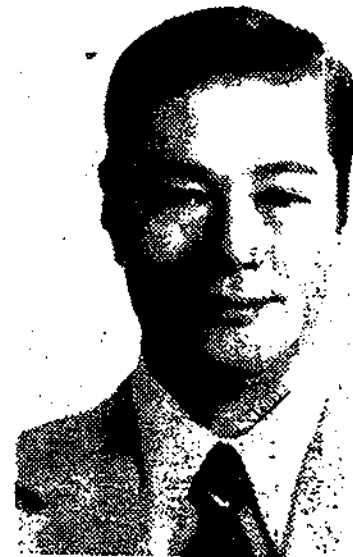
さて辻政信の話に戻ると、辻  
は日本人納骨堂滞在2週間前後  
の内に順次青年僧たちをワッ  
ト・マハタート寺に移した。1  
945年9月に入つて英軍のタ  
イ進駐が始まり、民間日本人は  
パンプウアトーンに抑留され  
てしまうと、辻には逮捕される  
のではないかという不安が高  
まつた。10月22日には、今まで  
自由であつた日本人僧侶も抑留  
の対象者とされるといふ情報  
もたらされ、かつ辻は一応遺書



を書き自殺したことにはなつて  
いたが、英軍は18方面軍司令部  
に辻を出頭させるように命令し  
てきた。追及が身近に迫ったと  
考えた辻は、タイ潜入の継続を  
諦め中国への脱出の道を探るた  
め、10月23日「辻は日曜日と書  
いているが、23日は火曜日」に、  
スリウオン街に戦後開設された  
中華民国国民党海外部駐暹辦事  
処「正しくは「海外部泰國特派  
員辦事処」に、成主任「フルネー  
ムは、成烟景」宛ての手紙を届  
けた。内容は、9月28日「正し  
くは9月21日から」に頂点に達  
した華僑暴動（ヤワラート事件）  
の裏面情報を知っているから、

成主任に納骨堂に10月26日まで  
に来て欲しいというものであつ  
た。しかし、3日間が過ぎ27日  
になつても成主任は現れなかつ  
た（前掲辻政信『潜行三千里』  
80-82頁）。

ヤワラート事件（華僑は9・  
21事件という）とは、日本の  
敗戦とともにベトナム・ラオス  
にまで進駐してきた中国国民党  
府の軍隊を、タイにまで進駐さ  
せる口実作りのために在タイ中  
国国民党（当時の責任者は成主  
任）が暴動を煽動し、これをタ  
イ軍が武力弾圧して華僑に多数  
の死者が出たため、華僑の一斉  
罷市罷工（ストライキ）となつ



辻政信大佐の重慶逃避を助けた、在タイ中国国民党  
組織の責任者、成烟景（真名は陳英謹）主任秘書  
（『鉄血雄風：泰華僑抗日実録』329頁より）

たが、在タイ中国国民党の指令  
で9月30日朝を以て罷市罷工を  
収拾させた事件である。そうで  
あれば、事件の主導者である成  
主任が辻の裏面情報なるものに  
魅力を感じずに放置したのは当  
然のことである。

しびれを切らした辻は、10月  
28日朝、再び辦事処を訪ねた。  
「先日の取次ぎの青年が愛想  
よく迎えてくれ、応接間に通さ  
れて暫く待つ内に一癖ありそう  
な青年が颯爽として乗り込ん  
だ。筆談の結果郭「郭開又は郭  
子凱、海南人、1918年サム  
イ島生、1919年バンコクで  
死亡、辻は広東人と誤記」科長  
であつた。暫くのち成「成烟景  
1919年生」主任秘書が出勤  
した。年はよもや三十歳にはな  
るまい。色白の瘦型の美青年だ  
（本誌写真参照）。この人が郭「森  
洲、海南人」中將の代理として  
百五十万の華僑の事実上の全責  
任者であろうとは誰が予想し得  
よう。服部「卓四郎、辻より2  
期先輩」大佐の昔の姿そっくり  
だ。この人こそ服部さんに代つ  
て、この身を助けにきたのでは  
あるまいかとの錯覚さえ起つた。  
山法師のような坊主が鉄の手

で成青年のきやしやな白い手を  
固く握つたとき、相手の顔に紅  
がさすのを見逃さなかつた。約  
一時間に亘つて筆談した。片言  
の北京官話に広東出身のものに  
は全く通じないのだ。

本名、経歴、特に東亞聯盟  
運動、蔣母慰靈祭、鐵笠との関  
係——等々余すところなく書い  
た。

重慶に赴き鐵笠將軍及び蔣主  
席に会見し、日華合作の第一歩  
を開きたい。もし不可能ならば  
直に逮捕し英軍司令部に差出さ  
れたい。

「生命を惜しんで逃避するも  
のではない」と力強く最後の結  
論を書いた。

一々首肯しながら読んでいた  
両青年の面上は次第に紅潮し、  
両眼には光がさして来た。

やがて成青年は「等一候、我  
們要會議（暫く待て、會議する）」  
と紙片に書いて次の間に入つ  
た。凶か吉か？待つこと約三十  
分の後ニコニコ笑顔で入つて来  
た。占めた！と感ずる。成青年  
は細いきやしやな手先で、  
可以（よろしい）  
と二字だけ書いた。後は郭科  
長と相談せよとのこと、郭君は

筆談で「今晚九時、自動車で寺  
の付近に迎えにゆく。」と。捨  
身の断によつて遂に光明を見出  
した。

それにしても三十歳にも達し  
ないこれらの青年が、百五十万  
の華僑の総元締たる郭中將に代  
つて一切を処理し、九・二八「正  
しくは九・二一」事件の交渉を  
タイ英両国を向うに廻し、堂々  
やつているのかと羨しくなつ  
た。顧みればこの年代はまだ一  
中尉で、陸大の学生として戦術  
教官と喧嘩するのが関の山であ  
つた前半生である。

英国から追及されている身を  
国家の公務員たる彼らがかばう  
ことは、下手すると国際問題を  
惹起する。日本の官僚、日本の  
外交官だつたら、この突差の場  
合に果してどれだけの処置を取  
れたであろう。恐らく「重慶に  
問合せるから暫く待て。」とい  
うのが関の山であろう。

感激と興奮を抑えながら再  
びサムローに乗つて何食わぬ顔  
をしてお寺に帰つた。（同上書、  
83-85頁）。

辻はこの夜、僧衣を脱ぎ偽装  
のため遺書を残して、納骨堂を  
出た。翌朝辦事処に到着した辻  
は、郊外の隠れ家に移された。

辻に梁、呉の2青年が同行して、  
11月1日に汽車でバンコクを発  
ち、ウドン（辻はウボンと誤記）  
に向かった。ラオス、ベトナム  
を経て46年3月9日にはハノイ  
を発ち昆明に入った（同上書、  
179頁）。

筆者は、辻政信が頼つた、当  
時の在タイ国民党のトップで  
あつた成烟景主任秘書に、同じ  
くスリウオン街にあつた泰華留  
華同学会黄埔校友会の事務所  
で、1994年1月6日に会つ  
たことがある。この校友会は、  
タイ華僑で日中戦争時に中国に  
帰国して黄埔軍官学校分校に学  
び、抗日戦争に参加した人達の  
団体である。事務所はその後、  
バーンナー・タラート路のネー  
ション新聞社と道を挟んで反対  
側辺りに建設された泰華英烈館  
に移つた。

成烟景は偽名で、本名は陳英  
謹（1919年潮州生、辻は海  
南人と誤記）である。偽名と本  
名は中国語で発音した場合、比  
較的近い音となる。陳英謹は筆  
者に次のように語つた。

辻政信は、まず手紙を寄越し、  
ワット・リヤップに会いに来て  
欲しいと求めた。仕事が多忙で  
あつたので、放置していると、

辻は僧衣のまま事務所に見れ  
た。辻は少し中国語ができた。  
英語、中国語どちらでも30分  
ほど話した。蒋介石の妻「陳英  
謹の記憶違い、正しくは母堂」  
の葬儀を、辻が盛大にやつた時  
の写真も持参しており、英軍に  
は捕まりたくない、どうか重慶  
に行けるように助けて欲しい。  
重慶でどうされようとも構わな  
いから、と率直に援助を求めた。  
辻が会いに来るまで、辻という  
人物については、彼の経歴も含  
めて全く知らなかつた。辻が葬  
儀写真を証拠にもつてきたの  
で、重慶に送つたのち彼が歓迎  
されるのか、戦犯とされるのか  
は我々の与り知らぬことである  
が、とにかく重慶に送つてやる  
うと仲間と協議して決めた。こ  
の決定に当たっては上部に何ら  
相談しなかつた。

辻は日本に帰国後、手紙を  
送つてきた。戦後10年くらいし  
た頃に、私（陳英謹）は日本を  
初めて訪問した。当時製紙工場  
を経営していたので、製紙関係  
の機械を買うことが目的であつ  
た。国会議事堂の食堂で辻と食  
事をした。また自宅を訪問した  
時には、辻の家族は全員土下座  
して感謝を示した。中国人には



土下座をしてお礼をする習慣は  
なく、しかもいつまで経つても  
顔を上げないので、全く面食  
らつた。それから更に10年くら  
いして2回目の訪日をした。ガ  
ムテープ製造の機械を買つたため  
である。辻は既にいなくなつて  
いたが、辻の妻や娘婿が極めて  
厚遇を与えてくれた、と。

なお、成烟景（陳英謹）及び  
郭開（郭子凱）の経歴は、泰華  
黄埔校友会『鉄血雄風・泰華  
僑抗日実録』（1991年、パ  
ンコク）のそれぞれ、329-  
330頁、82-86頁に見ること  
ができる。

上記、辻の『潜行三千里』お  
よび陳英謹の証言から見て、辻  
政信は、在タイ中国国民党組織  
の庇護の下に1945年11月1  
日にはバンコクを発ち、46年3  
月9日には中国に到着したこと  
は疑いないであろう。ところが、  
1999年になって、イギリス  
人ジャーナリスト某によつて  
『革命国王』という英文書物が  
出版された。同書は、ラーマ8

世王がお亡くなりになった1946年6月9日当時、辻政信は僧形で依然バンコクに潜んでおり、同王暗殺に関わったと繰り返す述べ、最後を、もし辻政信が1945年に英軍に捕らえられていれば、8世王が暗殺されることはなかったであろうと結



戦時中の日本人納骨堂での三菱商事中井正吉氏（1943年3月31日マラッカ沖で死亡）の葬儀、当時の泰日人協会会長は江尻賢美、タイ日本商工会議所会頭は新田義賢、帝國在郷軍人会泰日分会長は日高秋雄の各氏（故新田義賢氏所蔵）

んでいる。何とも荒唐無稽な話である。故意の捏造偽造により日本人を貶めることをなすりつけとする悪質文書者の輩は、どこにでもいるようである。同書には、日本にまで行って調査した結果であると書いてあるのだから笑ってしまうが、笑止千万のままで済ませていると、将来この仕掛け爆弾が爆発して、良好な日タイ関係を傷つけないとも限らない。

### タイ語訳『潜行三千里』中の日本人納骨堂

1950年6月に日本で刊行された『潜行三千里』は、1954年12月にはタイ語訳本が出版された。そのカバリーにはワット・リアップの日本人納骨堂と辻政信大佐の写真を使っている（本誌p21写真参照）。訳者はウタイ・タンタラークンで、タイトルは辻大佐の階級を勝手に將軍にかさ上げして『將軍の潜行』と変更されている。本のスタイルで出版される前には、グンサトリという婦人雑誌に連載したそうである。

タイ語訳書の訳者前書きによれば、訳者たちは日本人納骨堂がどこにあるのかを知らなかったが、ようやくその場所を探し当てて、1954年4月に訪問した。日本語の『潜行三千里』には、1945年8月の日本人納骨堂は、敷地が広く、牆壁を廻らし、僧侶の庫裏、井戸、食堂、多数の樹木と広場があったことが描かれているが、現在（1954年）は、お堂がただ一つ残るのみであった。お堂には3年前からタイ人の僧アラ・ニヨムが一人で住み、室内には様々な形の仏像を収め安置している。寺で下働きしているチャイというタイ人男性は、辻という名前は知らないが、終戦時にビルマから来た巡礼僧（アラ・トウドン、*Aradun*）が納骨堂に住むようになったこと、この僧と一緒に納骨堂に侵入した泥棒を追いかけたこと、この僧は34ヶ月でいなくなったことを語ったという。

353

連載 ⑧  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱（44）

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

### 織田得能のその後

1890年8月にバンコクでタマユット派に出家できる準備が整っていたにも拘わらず、バンコク行きを止めた織田（当時生田姓）得能は、決して消極的な人物ではなかった。織田得能に関する本格的な評伝は一冊もないので、判る範囲でタイへの再渡航を止めてのちの織田得能の活躍を見ておきたい。

織田は、『仏教大辞典』等の著者として、偉大なる業績を挙げた仏教の学僧であることはよく知られている。しかし、彼はそれだけではなく、エネルギーに溢れた類い稀な行動力の持主であり、それを学術面の外にも真宗大谷派内での政争や宗教関係団体の組織化や国際会議の企画など様々な局面で示した。残念ながら、その行動がよい

結果に結びつくことは少なかったが。

### 仏教とキリスト教の相克 果鴨監獄教師事件

1898年、織田得能は、真宗大谷派議制局の賛衆の地位にあった。賛衆の定数は60名、それなりに発言権のあるポストである。かれはこの賛衆という肩書きを用いて、石川舞台執行部打倒を目指した八面六臂、神出鬼没の活動をしている。

この当時、大谷派中の反石川派（渥美契縁など）の勢力も伯仲していたようで、得能は反石川派から物心両面の支援を受けたようである。それに関する記事は、中外日報にも少なくない。得能は対立派から流される露骨なデマ、中傷誹謗ものともせず、生臭い権力闘争の渦中

で急先鋒を演じていた。

そのような中で1898年9月5日に起こったのが、果鴨監獄教師事件である。

この事件の発端は、1898年に牧師の留岡幸助から受洗してキリスト教に入信したばかりの有馬四郎助（1864-1934、鹿児島出身）が、同年8月11日に警視庁果鴨監獄典獄（署長）として転任して来たことである。有馬は、前任地のどこでも職員の大層取替を行った前歴を有しており、教師師たちが警戒していたところ、案の定9月5日に同監獄の4人の教師（全員が真宗大谷派）に辞表の提出を強要した。その理由を質した教師師に有馬は「憲法の上に明に信教の自由を許せり、然るに仏教の教師師のみを以て囚人を教誨するの理由なし況んや内地雑居の期目前に逼り来る

に於てをや、故に今回は仏耶兩教を併立せしめて監獄教誨に充つるに決せり」（安藤正純（鉄腸）編『果鴨監獄教師紛擾顛末』、1989年12月6日発行、社会評論社、4頁）と答えている。有馬は4名の大谷派教師全員に辞表を書かせたのち、そのうちの1人を再任して仏耶兩教、即ち仏教と耶蘇（キリスト）教から平等に1名の教師を置くことを目論んでいたが、仏僧に再任を断られて結局、教師師は新たに採用した耶蘇教の留岡幸助（有馬の師）1人となったのである。つまり、典獄の権限内とは言え、大胆にも教師師を仏教からキリスト教に転換したのである。

有馬が理由として挙げた、憲法が保障する信仰の自由と内地雑居について見ると、後者は翌1899年にイギリスとの間の

354

2015年5月3日



織田得能の家族とマクラウド  
(出所：清水恵美子『五浦の岡倉天心と日本美術院』岩田書店、2013年、東京、43頁)

平等な通商航海条約が発効すれば、従来外国人の住居は居留地内に限定され、それを越えた旅行等には特別の許可を要した制度が撤廃され、外国人の住居地や旅行の制限がなくなる。そうなれば、監獄にもキリスト教の外人囚が増加する可能性があるもので、それに備えねばならぬという迂遠なものである。前者の信教の自由は原則としては当然であるが、現に入獄している者は殆どが仏教徒（果鴨監獄では1860人の囚徒中、キリスト教信者は多くて30人であったという）であるから、キリスト教徒の教誨師が仏教徒の囚人を教化改宗させる自由、囚人から見れば自分の信仰とは異なる信仰の押し売りとなり、却って大多数の囚人の信仰の自由を反する結果となるのではないかと思われる。

有馬のような宗教熱心な一典獄の眺ね上がりと思われる言いつと行動は、責任者である内務大臣によって当然是正されるであらうと考えるのが普通の常識ではないかと思われるが、明治のこの時代にはそれは通じなかつた。

つた。当時の内務大臣は、自由民権運動の闘士であった伯爵板垣退助である。彼の家の伝来の宗派は曹洞宗であったというが、プロテスタント思想の影響を強く受けた人物である。内務次官は鈴木充美。内務大臣の意を汲んだのか、内務省の面子を考えたのか、是正するどころか、監獄の教誨は、普通の道徳を説かせるのであるから仏教である必要はなくキリスト教でも構わないという屁理屈で、有馬典獄を擁護した。真の宗教家が自己の信仰を離れて「普通道徳」を説くことなどできる筈はなく、無理に信仰から中立な道徳を説いたならば感化力のない空虚なもので終わることは見え透いているのだが。

何の落ち度も無く4名の果鴨監獄の教誨師が辞めさせられた真宗大谷派では、最実力者石川舜台参務を東上させ、彼は9月19日付で下記の伺い書を板垣内相に提出した。

「今般警視庁果鴨監獄署は従来  
の仏教教誨師四人を論旨解職し  
更に耶蘇教教師留岡幸助を選び

年9月25日号も同文)

上記伺い書は、主に法律を根拠とした批判であった。

これを敷衍して安藤正純は、10月5日に次のように演説している。「元来仏教は内務省社寺局の下に管轄監督せられ、又保護（保護といふべくんば）せられて居る、宗制寺法は各宗各派之を定め、内務大臣が之を認可するのである、住職の任免は内務大臣が便宜上管長に依頼してあるのである、如此であるから僧侶は参政の権がない、衆議院議員となりて議院に国事を議ずる事が出来ぬ、基督教はどうであらう、内務省が監督して居る宗教ではない、又其の保護もない、一切其の爲すが儘に任してあるのである、其れ故に又凡てに於て制限がない、牧師にして直ちに国会議員ともなれば、衆議院議長ともなる、長老にして直ちに内務大臣ともなれば、次官局長ともなる、一向に監督制裁がない、然れば其の取扱上にならぬ、然るに國家が其の國家としての公共事業たる監獄教誨

を國家が監督せず、其の爲すが儘に放任せる基督教に請託委任するといふは、是れ失当違法の処置と云はねばならぬ、何故に内務大臣はかかる一方に厚くして一方に薄き依怙偏頗の行動を為せる典獄を其儘に看過するのであるか、物論漸く覺醒するも尚且つ之れを処分するの勇なきより見れば、是れ微々たる一典獄の行動にあらずして、内務大臣其の人の意志であらうと推し測られるのである」（前掲書、79-80頁）。

明治憲法は、信教の自由を謳っているとは言え、当時神道と仏教は、國家の強い管理下にあった。即ち、各宗派の規則（宗制寺法など）は内務省の認可を要し、また各宗派の管長は就任に際し、その都度内務大臣によって認可されることを要した。法律上内務大臣は、管長認可を取り消すこともできた（明治十七年八月十一日太政官第十九号布達など）。

その分、キリスト教には与えられていない、次のような保護も与えられていた。

「基督教に対しては警察に於ける取締は実行せるも宗教たる待遇をなさず随て東京市内を始め各府県に散在せる数千百の教会堂にも納税の義務を負はせ且つ司法処分に対しても何等の特典を付与せざるに反し仏教に於ける寺院堂宇は納税の義務を免じ又其寺院内に於ける或る物品は刑法に於て差押ふる事を禁じ且つ仏教の僧侶には参政権を付与せず然るに基督教の宣教師参政権を有する等彼此懸隔甚しく……」（教学報知1898年10月17日号）。

衆議院議員選挙法第十二条には「神官及諸宗の僧侶又は教師は被選人たることを得ず」という規定があり、この条文だけからは、神官僧侶のみならずキリスト教の牧師等にも被選挙権は与えられないと解釈することもできるように見えるが、実際に上述のように、被選挙権を有しないのは、神官僧侶だけであつた。

現今の日本人の多くは、タイの僧侶には、選挙権も被選挙権も与えられていないことを知っ

真宗大谷派本願寺

明治三十一年九月十九日 参

務石川舜台

内務大臣伯爵板垣退助殿（前掲書、19頁、教学報知1898



て驚くが、日本でも1925年に普通選挙法が成立するまで僧侶は被選挙権を有していなかったのである。

板垣内相は、石川の9月19日の伺い書に回答しなかった。石川は9月25日に檄文を出し、9月19日の内容を敷衍した。しかし、何の音沙汰もなく遂にしびれを切らした石川は、9月30日に第2回目の檄文、今回は激烈に板垣内務大臣を民の専制者、主権破壊者であると糾弾した次の批判書を発した。

「謹で啓す過る廿五日裁書して高教を俟つ、爾来影響を知る所なし痛傷の至に勝へず、鄙意猶尊府を煩すに足らざりしかを疑ひ此に更に愚見を陳す、所謂根本的改革なる主旨を查勘するに政治は既に民主原案を吸収す」と称し、其一貫徹底する所國家の主権を破壊して民主政となさんとする者なり、而して其君權無限無限服従を惡罵するが如き、何ぞ己を顧て其民權無限と完議旨従との大惡弊を處らざるや

なかつた。

10月12日付で、大谷勝縁総務に、石川舞台が黜罰例(ちゆつぱつれい)、大谷派の規則(ちくけつ)に違犯したかどうかを調べさせることにし、石川には事情説明の始末書の提出を求めた。石川始末書に曰く、

「明治三十一年九月廿五日及同月三十日の両度に於て大隈伯爵(当時首相)外数人に送付したる書類に其始末左に開陳仕候

王法為本は我宗の要旨に有之候へば其教旨を貫徹せしむることは吾人僧侶の責務と確信致し知己の人々に卑見を披露致さんため書簡を以て予て面識ある一部の人々へ送付したる迄にて決て國政に容喙し政事を議論致したる者に無之候

明治三十一年十月十五日 石川舞台

10月20日、大谷勝縁総務は石

や専制と曰ひ庄制と曰ふが如き君主の専有に非ざるなり、之を有するは君と民とを択ざるなり、民の専庄は可にして君主の専庄は不可なりと曰ふを得べき歟、豈民主政の専制庄制の却て君主制より酷きものあるを知らんや、主権を破壊するを以て根本的改革とせば、是改革には非ずして破壊なり、主権破壊党なる者は何の國家と雖之を容忍するものあるを聞かず、若夫此を寸に容忍せば尺の破壊文の破壊踵を接して至り、蠶生蔓延して滿天の勢終に支ふべからざるに至らん、是智者を待て後知に非るなり。況や耶穌教の如き神ありて君父なき者、隠然として浸潤腐蝕す教法之が内を攻め世論之を外に唱ふ、政と教とは殊なりと雖ども吾國家に害毒を及すは呼応して其禍を一にす、今日に至るまで此が準備に急ならざりしは遺憾の至と雖、既往は如何すべからず、今にして猶為すこ

となくんば前途知るべきのみ、聖勅遵ふに足らず、主権動すべくんば憲法なきなり、是國家なきなり、痛哭に勝ふべけんや、此に至て嗚鼓之を攻むべきもの彼に在らずして此に在んとす、明公熟々之を計れ頓首再拜

明治三十一年九月三十日 眞宗大谷派本願寺 石川舞台

(前掲書、28-29頁)。

これに激怒した板垣内相は、大谷派法主の東上を求めた。法主が断ると、代理者が来ることを要求。更に、内務省下の京都府庁幹部に次のように指示した。

「此程内務省對本願寺事件に付て知事代理として東上せられたる青木書記官は去十二日「1898年10月12日」夜帰京「京都」せられたるが其自ら語るところに曰く内務大臣の語る所に依れば東本願寺の石川參務は僧侶の本分を逸脱して政論を為し為政上に妨害を与ふること渺からざれば速に本願寺の宗制寺法に照し同參務を処分すべし、然れども石川參務の爲す所或は自己の意思に出づるや縱(よ)し其意思に出るとするも確

乎たる見地を有したる乎、一時の出来心なるか將た他の教唆に成る乎、抑も亦た檄文等の書類は同氏の預り知るか、知らざるかを確かめざれば管長とても其処置に窮すべければ、管長の法主は此際速に其露はれたる事実より露はれたる事実等を逐一調査して本山の意向を内務大臣に復申すべし、蓋し内務省は東本願寺の自治に待つものと知るべし……」(教學報知1898年10月15日号)。

前述のように内務大臣は管長認否の権限を有しており、大谷派管長(法主)に圧力を加えたのである。

鈴木充美内務次官は次のように公言したという。

「鈴木次官曰く若し本願寺法主にして舞台を処分せざれば本省は其職權により法主及び舞台に制裁を加ふべし、制裁とは管長の認可を取消すと舞台を僧籍より放逐するに在りと、果して之を為すに至るや否や」(教學報知1898年10月17日号)。

しかし、全国に多数の末寺を有する、大組織の大谷派法主は板垣や鈴木に屈しには屈し

川の始末書をそのまま受け入れ

「石川舞台の所為は之を反則と認めず」と判定した(教學報知1898年10月21日号外)。大谷派は石川の行為を王法為本に基づく護法の行為と認めたのである。

そうこうしているうちに、内

閣更迭のため11月8日には板垣内相も鈴木次官も退任、松平正直新内務次官は有馬典獄を市ヶ谷監獄に異動させた。

一方、織田得能は、連枝大谷勝縁総務の処置に納得しなかつた。10月22日織田は次の檄を飛ばした。

「先般參務石川舞台氏東上中僧侶として不穩の言動有之候とて宗制上可然処分可致様内務省より 管長台下に訓示有之候処 管長台下には直様石川氏を御呼戻の上其始末に關する垂問書を免せられ候儀予て承知の処昨今探知する處に依れば右垂問書に對して差出したる石川氏の答申始末書の要領は左の条項にて有之候

一、東京に於て大隈伯爵等に送付したる書類は王法為本の教旨を貫徹したるものにして僧侶の

實務と確信する事

一、該書類は自己の意見を發表せん為面識の人々に送付したるに止まりて國政に容喙し政治を議論したるものに非ざる事

右答申始末書の条項に依れば石川氏の意見は竊に内務省より訓示したる意見と背馳し彼此の見解氷炭相容れざるものに有之候然れども這は猶石川氏一個の私見に過ぎざるものにして敢て官署に對する一山の方針とするものに非ずと愚考せしを以て左したることも有之間敷と存じたるに豈圖らんや該始末書は宛然一山の主義方針として報告上申の運に立到り申候果して該始末書を以て宗門の主義一山の方針と為すに至ては実によ々數一大事と愚考仕候条此際十分に御注意の上慎重に御熟考相成度此段御警告致置候也

追て石川氏の始末書意見に對する并駁鄙見は不日文書を以て御高覧に供し度「これが1898年12月刊の織田得能著『王法為本論』」考に御座候

明治三十一年十月二十二日 大谷派本願寺議制會賛衆 織田得能」(教學報知1898年10

月27日号)。

得能の行動には、当然反発も強く、多分幼少から彼を知る人の侮蔑的文書もいくつか新聞に掲載された。その一つに曰く、

「得能尊者の性行、彼は越前國波寄村「福井市」成福寺の寺中「じちゅう、大きな寺院の境内にある小規模だが独立した寺」一畝香寺「がんこうじ」の三男に生れ十一二歳までは本坊「この場合は成福寺」の茶番坊主に使はれ十四五歳の頃始て福井大谷派小教に入学せしに云ふに忍びざる或る不祥事件のため退校を命ぜられ已むを得ず還俗して県立の師範學校に入学せしも面白からず終に流浪の身となり居る内、池原雅壽師の門に入り多少仏典を學び夫より東京に出で島地點雷師の居候となり其庇蔭に浴して暹羅に渡り一年ならず「正しくは2年半」して帰朝僑伴にして今の寺に入住することを得たるも彼が胸中には元來道德心と義侠心などあるべき善なく唯功名と利欲の一方を以て多少の學問あるを鼻にかけ猿の物真似的に狂奔するのみ、越前國中の僧俗は誰一人と



して彼と語るを欲せず挙げて悉く指弾するばかりなり、要するに名を売り利を貪らんとする一小僧と見れば大なる間違なるべし此旨諸士に忠告するものなり(白川村吉永法雲)。(教学報知1898年10月29日号)。

得能は更に、11月1日付で次の意見書を京都で配布した。  
「織田得能氏の意見書 目下石川氏攻撃のために通々(はるばる)東京より出張せられ七条停車場前の鳥居本様に滞在せる同氏は此程の激文に次で一篇の意見書を散布せり、茲に其要点二三を掲げんに

◎監獄教師免職の理由  
蓋し有馬典獄が本山一真宗大谷派一派の教師を免職せしめたる次第には如何にも穏かならざる処置ありしは事実にして仏教徒たる者之を聞て誰れが不快の念を生ぜざる者ぞ一往一応に同じ一之を責むるは吾輩も亦同情を表する所なり然れども覆(ひるがえ)りて之を案するに一俗吏の不当の処置に帰するのみ我仏教に於て幾何の損得がある之が為に仰々しく騒ぎ立て宗

教家の徳操を傷(きづ)つ(け)世間識者の笑を招きしは幾何の損と思ふぞ熱(つら)つ(ら)案するに当年は蓮如上人の四百回忌なり乞ふ少しく其遺徳を追想せよ上人吉崎に御化導中に加賀國富樫介が無法にも兵を率て吉崎を襲ひ来たと聞き玉ひしかば上人は加越一帯の熱心なる信徒を有し玉ふにも拘わらず勿々(そうそう)に吉崎を退去し玉へり時の坊官下間某(下間蓮宗)なる者上人の命を拒んで退去せざりしより上人は坊官を勸当し玉へりと聞く嗚呼宗教家の本領は如是のみ若し俗吏の不当より我布教を妨害することあらば我は去りて他の有縁の地に向ふべし武官俗吏に抵抗して何の得がある然れども末世の凡情は固より之に忍びざる者あらん故に之を争ふを敢て不当とは言はず但之を訴ふるに道あり力を用ゆるに程度あり石川氏が直に書を載して内務大臣を詰問せし如きは訴ふるの道を得たりと云ふ者か又是式(これしき)の事に激々として騒ぎ立ち自分ながらも熱中

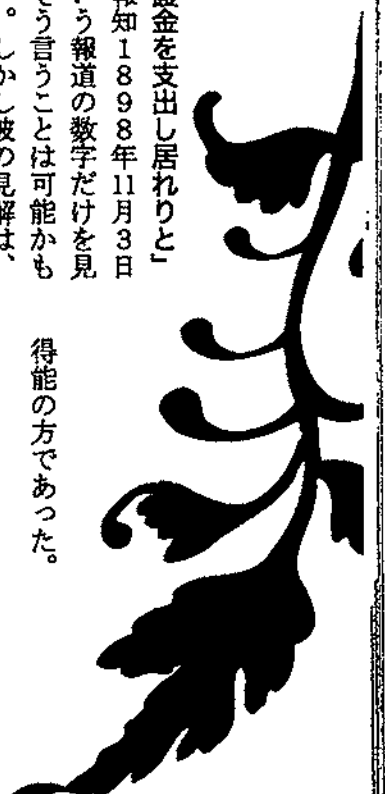
の余りに少しく度を越へしを詫るほどに(御門主に対する表面の謝罪状)不穩の言動(二度の移動)をなすに至るとは。力を用ゆるの程度を得たと思ふか遂に之が為に内務省より逆説(さかねじ)を喰ひ(移動政論に對し)是非分明の監獄問題も遂に世の同情を失するに至りしことと実に遺憾の限りなり若し石川氏にして穩和至当の手段に出でしめば隣山(西本願寺)は勿論他宗他派の協力をも得べかりしなり余りに逸越騰奔せしより諸宗諸派共に傍觀の位置に立たれしなりと信す

◎正当防衛の手段に就て  
一監獄内に三人の教師を減じたりとて一人の教師を入れたりとて仰々しく宗教の爲めに正当防禦とは何事ぞ針小棒大にもほどがあるぞ蓋し最初彼等一輩の言に依れば各宗各派は論なく神道各派に至るまで同心協力申込み来れり云々と云ひ居りしも其隣山の如きは毫も之に關せざるのみならず現に「西本願寺」御法主殿には去る十八日「1898年10月18日」御東上遊はされ内務省の趣意をも御

体認ましまし至極御平穩の由承はる今は氣(けい)たる石川氏一人の身にこそあれば氏の身に取りては誠に正当防禦とも云ふべき平氣の毒の極みなり凡そ御一新以来富山県等の合寺沙汰もさることながら吾眞宗に取りて眞個に正当防禦とも云ふべきは恐くは先年京都府より眞宗の称号を禁ぜられし一事ならん眞宗各派に取りて是程の大事はあらざるべし然り而して些の輕躁に涉る挙動なく循々乎として其道を尽されたればさしも压制勝の政府ながら之を拒むに辭(ことば)なく遂に宗名を回復せられしにあらざるや輕浮慢心の輩何ぞ少しく顧みる所なきや果爾監獄の一事若し果して宗教に取りて正当防禦の大事たらしめば隣山は何故に傍觀せらるるぞ各宗各派は何故に賛同せられざるぞ喪心失命の人は此程のことと分らざるべし苟も常識ある者は容易に判斷し得ん

◎石川氏等の処分に就て  
余は法理を熟知する者にあらざれども此の如く本人の始末書のみを論拠として判決を与ふるは恐くは片言訟を聞くの違法なら

360



ん若し此の如き判決法に依らば天下の罪人皆無罪放免たらんと信ず奇々怪々と言ふより外なし蓋し總務殿は御連枝なり貴公子なり此等の事に御精通ましまざるは固より其所なり是れ皆石川氏の等輩が誣罔の手段に出でしのみ此に至て奸人の奸実(にん)に之を要するに此般の事は石川氏一己の功名心より事端を蓄(しげ)くして遂に累を管長台下に帰せ奉り畏れ多くも管長台下を政府と接戦の陣頭に立たせ奉りしなり嗚呼何等の無道心ぞ若し此事よりして万が一にも我管長台下の御職上に故障を生ずる如きこともあらば未だたる者宗祖に對し奉り何等の申訳をなすと思ふぞ深く省慮する所あり感極りて胸裏が筆洩りて意(つく)さずを諷察せよ」(教学報知1898年11月3日号)。

大谷派執行部をいたく刺激したのは「總務殿は御連枝なり貴公子なり此等の事に御精通ましまさるるは……」という、得能が身の程も顧みず連枝(法主の兄弟)大谷勝縁總務を侮辱した

と思われ一節である。織田糾弾の聲は高まり、11月10日付で、彼に次の処分が下された。  
「武蔵國東京市浅草区松清町宗恩寺旧住職 織田得能 其方儀本年十月二十二日同月下院(し)並に十一月一日付を以て印刷物を衆人に配布したる所為は宗制寺法「内務省が認可した大谷派の規則」第八十九条及賞罰例細則第四十三條に該當するを以て除名に処す  
明治三十一年十一月十日 總務 大谷勝縁 司正局長兼撰 藤原勵観」(教学報知1898年11月17日号)。

彼は住職の地位も僧侶の地位も失つたのである。  
得能は、政争の中の発言とは言え、少数のキリスト教教師師が加えられたとしても大騒ぎするほどの重要な問題でないと断言している。「全国監獄教師の現状を聞くに總數二百六十中神官の司るもの一、基督教教師の司るもの二、東本願寺派に属するもの四十余、西本願寺派に属するもの二百三十余ヶ所にして西本願寺は之が為め年々一万三千

余円保證金を支出し居れり」と(教学報知1898年11月3日号)という報道の数字だけを見れば、そう言うことは可能かもしれない。しかし彼の見解は、仏教徒にはなかなか賛同を得にくい見解であつたと思われる。数が問題ではなく、キリスト教が仏教のポストを奪い、それを為政者が容認し、却つて非を唱えた仏教指導者が為政者に脅されるという、国家と宗教の關係に關わる基本問題であつたからである。

ついでながら、これまで何度かお世話になつた、常光浩然『明治の仏教者(上)』(春秋社、1968年)は、どうしたことか教師事件部分について、は、全般的な外れな説明をしていて、即ち、洋行経験があり開けた頭腦の持主であつた石川舜台が、社会の大勢から見てやむを得ないとして、キリスト教教師も認めるといふ政府の方針變更を承認したことを、得能が批判したと書いてあるのだ。上述の通り、開明的であつたのは、

得能の方であつた。

タイのキリスト教徒

この機会に、仏教信仰が強いタイにおけるキリスト教についても、筆者の経験を少々書いておきたい。

日本では明治の高教育層とその子孫には、クリスチャンが多い。卑近な経験でも、筆者の大学生時代、授業やゼミで指導を受けた教授の多くはクリスチャンであつた。筆者が現在所屬する研究科の日本人教員も、時期によつて異なるが少なくとも4分の1以上は常にクリスチャンである。筆者はと言へば、生家が新四国八十八ヶ所霊場靈場(八十四番札所)を管理しているの、御大師様の境内を遊ぶ場とし育ち、また、自宅仏壇(浄土宗)を前に祖父が毎晩長々とあげるお経を聞きながら育つた、伝統的仏教徒であるが。

359

仏教が盛んなタイでも、高教  
育層の中には、日本と同様にク  
リスチャンも少なくないよう  
ある。ただし、タイの場合は、  
移民系の人々が中心である。

バンコクの王宮より上流のチ  
ャオプラヤー河に面したサーム  
セーン地区には、カンボジアか  
ら引き揚げて来たというポルト  
ガル人の古い集落がある（それ  
故、地名はバーン・カメーン、  
カメーンはクメールのタイ語発  
音）。そこに隣接して1820  
（1830年代にベトナムのキ  
リスト教弾圧を逃れて来たベト  
ナム人が住み着いている（この  
地域をバーン・ユアン、サーム  
セーンという。ユアンはベトナ  
ム人のこと）。ここに住むポル  
トガル人とベトナム人は、共に  
カトリックでそれぞれの教会を  
もっている。

19世紀末から長らく、デー  
ウォン外相の右腕として働き、  
第1次大戦に至る15年間ほど外  
務次官を務めた、プラヤー・ピ  
パット・ゴサー（Celestino  
Maria Xavier）は、タイ生れ  
でイギリスで中等教育を受けた

ポルトガル人であり、次官にな  
る際にタイ籍に変更した人物で  
ある。彼のお墓を探すと、サ  
ームセーンのカトリック墓地内  
を一つ一つ確かめながら歩き  
回ったことがある。彼の親族の  
墓は見つかったが、結局、本人  
の墓は見当がなかった。しか  
し、思いがけず、チャラート・  
ヒランシリ大將の墓に出くわし  
た。1977年3月26日クーデ  
ターに失敗して、死刑に処せら  
れたこの將軍（元陸軍副司令  
官）も、ポルトガル人を先祖に  
持つカトリックであったのかと  
不思議な感慨を覚えた。因み  
に、筆者がこの墓地を初訪問し  
た1980年代には、19世紀初  
頭に死亡した、ポルトガル人の  
石の墓誌がいくつもころがって  
いたが、その後は見当たらずに  
なかった。

ついでに言えば、タイの立憲  
革命前は、外相の秘書役の外務  
次官には、出身を問わず、国籍  
を問わず、有能な人物を取り立  
てたようである。もう一人、元  
外国籍ながら1920年代後半  
に外務次官に取り立てられた人

物として、プラヤー・シーウイ  
サーンワーチャー（雲天樑、1  
897-1968）がいる。彼  
はタイで育った、イギリス籍海  
南人で留學先のイギリスで外務  
省員に採用されて駐仏公使館で  
1921年初に勤務を開始した  
が、任官時にタイ籍に変更し  
た。彼は1928年には本省の  
外務次官代行に昇進した。外務  
省入省から7年、30歳そこそ  
で外務次官とは、破格の人事の  
ようにも思われるが、当時のタ  
イ外務省の政策決定においては、  
外務大臣が全能であり、外務次  
官ポストには重要な権限はな  
く、外務次官に求められた資質  
は外相の秘書役としての有能さ  
であったからである。

プラヤー・シーウイサーンは  
立憲革命後には、外務大臣に任  
じられている。彼の妻は、前述  
のポルトガル系外務次官プラヤ  
ー・ピパット・ゴサーのむすめ  
である。

プラヤー・シーウイサーンの  
長兄である雲竹亭（ゴーン・  
フントラーケン、1883-1  
959）は、20世紀前半長期間

に亘ってタイの海南人の中国国  
民党系のトップ指導者であつ  
た。その息子のソン・マイ氏は  
戦前の日本留學生の出世頭で、  
1980年代ブレーム首相の下  
で長らく大蔵大臣の職にあつ  
た。雲竹亭がイギリス籍からタ  
イ籍に転じたのは、1942年  
11月になってからである。

#### タイの仏教とカトリック

タイ人は他宗教に寛容である  
ことは間違いないが、近代にお  
いては必ずしもそうではない時  
期があった。1940年代前半  
の時期である。

1940年後半、フランスが  
ドイツに占領され力を失墜した  
のを契機に、ブリン首相下の  
タイは仏領インドシナ（カンボ  
ジア、ラオス）の失地回復を要  
求し、仏印軍との間に戦闘が生  
じた。

タイ側から見れば、フランス  
は強引かつあくどいやり方で、  
19世紀末・20世紀初頭に、現在  
ベトナム、ラオス、カンボジア  
領の一部になっている、タイの

属領や直轄地を強奪した。タイ  
は1893年10月の暹仏条約で  
メコン河左岸のラオス領を、  
フランスに割譲した。この条約  
で、1820-1830年代に  
ラオスから中部タイ各地に強制  
移住させられたラーオ人の子孫  
たちをメコン河左岸へ帰還させ  
ることに同意した。岩本千綱  
がベトナムに向けてバンコクを  
発ち、ノーンカーイまでの東北  
タイ街道を通過した1896年  
末1897年初当時は、フラン  
ス領事の庇護の下に、プラチ  
ンブリ、チャチョンサオ、ロッ  
ブリーなどからラーオ人の子孫  
たちがウイエンチャンに向けて  
大規模な集団で帰還中であつ  
た。岩本の三國探險記は、この  
帰還者集団、若くは先祖の故地  
に一旦帰還したが、生活になじ  
めず再びタイ領に引き返してく  
るラーオ人について全く言及し  
ていないが、彼が通過した東北  
タイ街道は、これらのラーオ人  
移動者で相当に賑わっていたは  
ずである。その詳細は次号以下  
で紹介したい。

タイとフランスの国境は19  
07年条約によって最終的に確

定された。その後、第1次大戦  
でタイは仏・英側に立つて参戦  
したこともあっては、タイ仏関  
係は好転した。1932年の立  
憲革命までは、王侯貴族のタイ  
・エリートにとって対仏失地は  
思い出しにくい過去の話とな  
り、失地回復を唱える人はい  
なかった。

しかし、1932年6月24日  
の軍事クーデターから1935  
年3月の7世王退位に至る迄の  
3年近い厳しい政争や軍事衝突  
を経て、権力掌握を確実にした  
人民党新エリートにとって失地  
回復は、ナショナリズムを煽つ  
て国民の支持を集めることがで  
きる魅力ある課題であった。

1893年7月半ばに生じ  
た、フランス軍艦のバンコク侵  
入（パークナム事件）では、  
スラサックモントリイは心服  
する兵士を率いて直ちにバン  
コクの警備について（『国王  
日誌』）。この事件は岩本千綱  
や石橋萬三郎の心を動かし、在  
タイ欧米人の中には低仏のため  
タイ政府に義勇軍志願を申し出  
る者もあった。これらのことは  
本誌2012年4、5月号にも

紹介した。しかし、この事件で  
大衆的なナショナリズムが喚起  
されるような社会的条件は、当  
時のタイには未だ存在していな  
かった。5世王による奴隷解放  
令はあったものの、当時の王侯  
貴族は未だ少なくない奴隷を抱  
えていた。平等な市民はまだ生  
まれていなかったのである。当  
時、タイ語の日刊新聞は、英文  
バンコクタイムズのなかの二面  
がタイ語であったことを除け  
ば、一紙もなかった。タイ語だ  
けの最初の日刊紙、ピム・タイ  
が発刊されたのは、1907年  
になってからである。エリート  
層の子弟を教育する学校がいく  
つか創立されたばかりの時期で  
あり、大部分のタイ人は公教育  
を受ける機会もなかった。

しかし、1930年代には、  
既に多数のタイ語の日刊新聞が  
刊行されており、その中にはタ  
イ・マイ紙やシークルン紙のよ  
うに国王専制政府に対する半公  
然とした批判を行う新聞もあつ  
た（立憲革命前の6世王、7世  
王時代の政府は、言論による  
批判に対して比較的寛大であつ  
た）、公教育も拡大し、ラジオ  
放送も始まった。これらによつ  
て大衆的なナショナリズムの受け  
皿が生じ、それを宣伝するため  
のメディアも整ってきたのであ  
る。因みに政府側が反政府側を  
攻撃するためにラジオ放送を初  
めて有効に使ったのは、193  
3年10月のポーウラデート親王  
の反乱時である。この時点のラ  
ジオの普及率は、1村に1台程  
度と低かったが、政府はバンコ  
クでは街頭にラジオを設置して  
反政府派を非難する布告を次々  
と放送した。この成果を受け  
て、現在国営ラジオ・テレビを  
運営している広報局が創設され  
た（当時は、露骨に宣伝局とい  
う名称であった）。



現在の街頭政治の原型ができたのも、この1930年代半ばである。この頃、女性の比丘尼出家の実現、労働者の福祉、民主的な選挙などのために戦い怪人と称されたナリン・パーシント(上司の王族と対立して1910年頃餓死される前は県知事クラスの内務省官吏、同氏は半僧侶半俗人の意味で頭髪の半分だけを剃り落とすというヘアスタイルの時もあった)は人民党政府に抗議して、ラーチャダムノーン路脇で何度かハンストを行い、最後はワチラ病院に担ぎ込まれるのを常としたが、ハンストの度に、5000人近い支持者が集まった。動員力でナリン一人に及びもつかないシヤム共産党は、そのパワーに羨望した。これがタイにおける街頭政治の嚆矢である。

1940年半ばフランス本国がドイツに占領されると、タイはフランスに對し国境線改訂の要求を突きつけ、次第にエスカレートして、ラオスやカンボジアの失地の返還を要求するまでに至った。衰えたとはいえず、仏印がタイ側の要求を拒否すると、政府宣伝局は、失地回復の宣伝を強化。人民や学生の政府支持のデモが全国で展開された。タイ陸軍は、東北タイ国境を越えてカンボジア、ラオスに軍隊を進めた。バンコクでは、初めての灯火管制が仏印軍による空襲を警戒して実施された。政府人民一体となった熱狂的な反仏行動のなかで、犠牲となつたのは神父にフランス人が多く、カトリック教会である。カトリックはフランスの手先、第五列と同一視された。政府はカトリック信者の公務員に仏教への改宗を強制し、非改宗者は退職を余儀なくされた。このようなかで、1940年12月後半、現地警察官の手によって、メコン河沿いのムクダーハーンで、ソーンコーン村のカトリ

ある。

ック教会のタイ人神父1名がまず殺害され、続いて改宗を拒否した信者(子供を含む)6名も殺害された。この7名の被害者は、1989年にパチカインによってタイ人初の殉教者(Martyr)に認定された。前月号で、東北タイの辺鄙な土地で天に誓えるカトリック教会に出くわして驚いたという岩本千綱の話を紹介した。今日でも東北タイ、とりわけメコン河沿いの地方を旅行すれば、同様の感を味わう人も多いことだろう。

しかし、1940年から数年間、東北タイのカトリック教会の殆どは、恐怖から信者が寄りつかなくなり、廃寺同様となつて納屋や牛小屋として使われていたことは、当時のタイの新聞でも報道されている。通常、他宗教に寛大なタイ人にも、政治的熱狂に支配されるとこのような非寛容なことも起こり得るのである。現在でもタイ仏教徒の一部には、カトリックに対する警戒心が底流として存在することも指摘

摘しておく必要がある。その中心人物の一人は、タムユット派の中心寺として高い權威を有するワット・ボーウオン(釈宗演が1889年7月に留錫を断られたワチラヤーン法親王の寺、一昨年入寂されたプラヤーナシノウオン大僧正の寺)の住職補佐であるラベープ師(1934年ナコンシータマラート県生、現在の僧侶位は、プラタマメーターポーン)である。同師は、1976年10月6日事件の引き金の一つとなった、タノーム元帥の帰国、ワット・ボーウオンでの出家を助けた僧侶としても知られているが、タイ国仏教振興センターを主宰し、その団体より『仏教破壊計画』(タイ語)を出版している。タイにおけるカトリックの拡大の方策としてパチカンが決定したという内部文書の暴露が、同書の内容である。筆者には、当然のことながらその真偽のほどを判断する能力はない。同書は、宗教間

対話(ダイアログ)を隠れ蓑に、カトリックが教勢拡大を図っている指摘しているが、確かにカトリック神父の資格をもつ、サコンナコン生まれのベトナム系タイ人の大学教授が、農村開発などにおける宗教の役割などをテーマとして盛んにダイアログ活動を行っていたことは記憶に新しい。

筆者はラベープ師を数度訪ねたことがあるが、その目的の一つは、バンコク初期に、あるカトリック神父がタイ仏教を徹底的に批判するために著したという『教理問答(ブツチャーウィサツチャナー)』を拝見させてもらうためであった。この本のタイトルは一般名詞であるが、筆者が見たのはカトリックの仏教批判の書である。同書は1958年にも一度印刷されたこ

とになっている。同師からは、上の階の書庫にあるから見つかれば、見せてやるという返事をもらって後、二三度訪問したが、結局目にすることはできなかった。

それならば、直接タイのカトリック教会の中央を訪ねて、貰えばいいではないかという指摘を受けるであろうが、筆者の如き部外者で何のお役にも立てそうもない者が訪問しても、けんもほろろの扱いを受けるだけなのである。カトリック側の強い警戒心、その原因としてタイ社会との間の緊張関係が未だ存在しているからであろう。

#### 織田得能と岡倉天心の交流

僧籍を奪われた織田得能は、23頁の小冊子ながら約束通り、自著『王法為本論』(1898年12月25日発行、光融館)を刊行した。その前書きを、「除名僧織田得能」という肩書きに続いて、次のように書いている。「嗚呼大谷派本願寺の近事言

ふに忍びざる者あり、頃日東京巢鴨典獄一曲事ありしより、参務石川憤然として怒を発し、蓋に櫓を飛ばして時の政府を攻撃せり、而して当局者罪を本山に問ふに及んで、彼れ之を王法為本の本旨なりと辨疏し、山論亦之を是認せり、余其王法為本の本旨を誤まり、教家の面目を傷くること至大なるを慮り、聊か意見を述べて之を同胞に問ひしに直に余を除名に処せり、蓋し宗門の極刑なり、余不敏なりと雖、自負頗る強く、身逆境に墮して、道心彌々堅し乃ち慨然として王法為本論を作る、三編あり」と。

追放中の身ながら意気軒昂たる得能は、1901年1月には、他の高名な僧侶や仏教学者と共に、東亜仏教会の創立に加わった。同会の目的は「1、上下に通じて普く布教の道を開く事、2、宗教の方面より東洋を啓蒙する事、3、現時仏教界の情弊を洗滌する事」であった。織田は同会常務委員として、同会活動の中心的役割を果たした

(教学報知1901年1月15日号)。

1901年4月には、得能は除名後2年半ぶりに、「旧の如く住職を差許されしと共に去る十日付を以て律師に補せられ学師の称号を授与された」(教学報知1901年4月19日号)。

同年7月に、中国のラマ教の元締め、北京雍和宮総長阿嘉呼図克圖(Akwa-Hutuktu)大僧正が、義和団の乱において、日本軍が雍和宮を守ったことへの謝礼を目的として来日した。8月初めの同大僧正の帰国に際し得能は同行して訪中し、ラマ僧1名を伴って9月3日に日本に帰着した(教学報知1901年8月3日、9日号)。これは、チベットの首都ラサに到達した最初の日本人、河口惣海が1903年に帰国して、チベット仏教に関する情報をもたらす2年前のことである。仏教大辞典執筆中の得能は北京のラマ僧からチベット仏教について学ぶ意図を持っていたのかも知れない。このラマ僧はワンボ

ルシアという名で、得能の寺に住み込み、1902年6月3日に得能とともに帰国した(中外日報1902年6月7日号)。得能の寺には、1901年初めから、アメリカ人女性マクラウド(Josephine MacLeod, 1858-1949)も、仏教を学ぶために住み込んでいた(『伝燈』1902年7月28日号35頁掲載の織田得能の談話)。彼女は、『ヴィヴェカーナンダ』(Swami Vivekananda 1863-1902)の弟子筋に当たる裕福なアメリカ人婦人で、一八九三年シカゴの世界宗教会議でヴィヴェカーナンダの演説を聴いて感激、以後熱烈な信奉者、パトリック(岡倉古志郎『祖父岡倉天心』中央公論美術出版、1999年、93頁)となった人物で、師をカルカッタに訪ねた婦りに、得能の寺に住み込んだのである(写真参照「織田得能の家族とマクラウド」)。

英文『東洋の理想』を完成させた(のきつかけを作ったのは、このマクラウドである。マクラウドを天心に引き合わせたのは、茶友として岡倉天心と親交があった得能(竹内松次郎編集代表『福井県文化誌 第一集、我等の郷土と人物』福井県文化誌刊行会、1952年、229頁)であると考えられる。岡倉天心、マクラウド、堀室徳(1876-1903)の3名は、1901年12月7日門司港を出港してインドに向かった。それを追って2ヶ月半後の1902年2月22日に横浜を発った織田得能は、カルカッタに到着後、天心とともにヴィヴェカーナンダと会見し、この時「織田の発意にかかる東洋宗教会議開催の件について協議」した(『岡倉天心全集、別巻』平凡社、1981年、417頁)。

但し、当時の新聞情報と照合すると、この時点で既に「東洋宗教会議」という名称が存在したのかどうかは疑問なしとはいえない。得能は4月19日には天心、堀室徳とともにガヤに向けて出発しブッダガヤなどを訪問、5月1日には帰国の途に着いた。この後、7月4日にはヴィヴェカーナンダが病死。天心は1902年9月半ばにカルカッタを発ってシンガポールを経て10月30日に神戸に上陸、帰国した(前掲『祖父岡倉天心』101-102頁)。

得能は5月26日に神戸着、休む暇もなく6月3日にはラマ僧ワンボルシアを伴い東京を発って清国に向かった。得能が清国から帰国したのは、7月半ばである(中外日報1902年5月29日、6月4日、7日、7月14日号)。

得能は、印度から印度教(ヒンドゥー教)僧、北京からラマ僧などを招き、1903年4月大阪で開催される勸業博覧会に合わせて、国際的な宗教大会を開催する計画であった(『中外日報』1902年8月7日号)。

岡倉天心の帰国後、得能は天心とともに、大谷派(渥美契縁など)だけではなく京都府、京都市、京都財界に宗教大会開催の援助を求めて走り回った。その成果は、

「東洋宗教大会 東洋の宗教大会を明春京都に於て開くや否やの件につき内閣(京都市長、西村(治)「商業会議所会頭」、雨森「市会議長」の諸氏は去七日夜岡倉「天心」、織田「得能」の両氏等と再会協議し大森知事の賛同をも得る事とし其費用総額五千元とし内三千元は印度より二千元は内地にて仏教信者より喜捨金を募る事とし尚東京にて内務、文部、外務各大臣、宗教局長其他の意見をも聞きて異議なければ愈之が実行を公然発表する等」(中外日報1902年12月10日号)と報じられたが、実現することなく立ち消えとなった。

連載 59  
パンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (45)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

岩本千綱の  
浄土宗本校での講演

本誌の本年4月号で、岩本千綱が1898年1月23日に曹洞宗大学林(駒澤大学の前身)で講演したことを紹介した。実は、彼はそれに先立ち、1897年11月半ばに、当時東京芝増上寺内に置かれていた浄土宗学本校(現在京都にある仏教大学はその前身の一つ)で、タイ僧侶同様に黄衣を纏い「暹羅仏僧の資格」で講演していた。当時浄土宗が月3回発行していた『浄土教報』第307号(1897年11月25日発行)の6頁に次の記事が掲載されている。

「岩本氏本校に講話す 暹羅探検家を以て有名なる岩本千綱氏は伊達霊聖師の紹介を以て去る十二日宗学本校学生及有志者の為に暹羅仏僧の資格にて一場の講演を開き其旅行中の経歴暹羅老過二国に関する政治風俗教育宗教に關し前後四時間に亘る

の長演説をなしたり右講演大体の筆記は次号本誌に掲げて読者の一覽に供すべし」。

岩本は講演を、以下のように切り出した。

「予は今紹介せられたる如く日本にありては、俗体として岩本千綱と稱し、暹羅にありてはバンケラー寺のクーン和尚を師としてプラ、ヨックと稱す、プラとは僧、ヨックとは太陽の曙光地平線上に出でんとする所を云ふ(東方日出國の人なるを以て此名を受けた) 今日予が旅行中の事状を説きむが為に暹羅僧侶の資格を以て此壇上に現われたり、而して予が今着せる偏袒黄色の服装は実に暹羅僧侶の服にして其大札服となす所也、蓋し同國の僧侶に五種の被着法あり、曰く大札服曰く礼服曰く平服曰く托鉢服曰く旅行服なり、是服装の異なるにあらず、一種の服にして其被着方法によりて名を異にせる也、今日講演する所は暹羅、老過、

東京(トンキン)の諸國に亘る是諸國が互に相隣接せるを以て也、(茲にて板に略図を記す) 先談話中の要項を示さば第一暹羅位置第二其人情風俗附衣食住の事第三其政治并地方制度第四宗教及教育第五農商業軍事及結論第六老過の位置第七其人情風俗及衣食住第八其政治并王家第九宗教第十農商業軍事第十一東京安南の一班第十二結論なり大体かく別つと雖談話中大牙錯綜し順序甚だ混雜することあらん、而して事宗教に關せざるもの亦多々なるべしと雖談話の順次勢之に亘らざるべからざるものあるを以て斯く種々の事項を拮据することとなせり

談話の初めに当り聊か予が経歴を舒すべし予は高知県土族にして明治六年陸軍幼年学校に入り九年進んで士官学校に入り十二年卒業し廿一年まで士官として熊本佐倉青森東京新發田に職を奉ぜり、其新發田にありし際友人の保安条例にて退去を命ぜ

られて来れるものあり、一夜共に会して一夕の醉を買へり、然るに事官の察知する所となり身に寸毫の疚しきなしと雖遂に辭職せざるべからざるに至りたり、爾来少く東洋の形勢に考ふる所あり種々沈思の末遂に暹羅に通商殖民するを以て策の最得たるものとなし廿五年初て彼地に渡り爾来往復前後十回其間稍微力を致したり然るに昨年に至り彼地に公使館の新設あり事業漸く拳らんとするの兆候を呈し來りたれば、予は進むで益内地の探検に従事し併せて高丘親王の御遺跡を探究せんことを企圖するに至りたりき」(浄土教報第308号、1897年12月5日、3頁)。

また、岩本は講演の最終部分で次のように述べている。

「ある宗教雑誌の中には岩本は人を欺きて山中を通る僧侶也と書したる者もある趣なれど予等はバンケラー寺のクーン僧正に就きて正式の得度をなしし旅行

中決して僧侶たるの行為に恥ることをなす。吾輩も人民を教化して幾分仏徳を仰がしめたりし事も多しとす。豈顧みて自ら疚しとせむや」(浄土教報第310号、1897年12月25日、5頁)。

#### 岩本講演内容の虚実

上記引用部分から、この時岩本は、自分はバンケラー寺のクーン和尚の下で正式に得度した、プラ・ラック (Phra Lak) という名のシャム僧侶であり、三國を「旅行中決して僧侶たるの行為に恥ること」、疚しい行いをしなかったと断言している。

この発言は、2ヶ月後の曹洞宗大学林における講演とは一致してはいない。それ以上に、理解しがたいことは、シャム僧侶たるの行為に恥じる行いはしなかったと堂々と述べているにも拘わらず、この講演より2ヶ月半前に上梓した、自著『暹羅老樹安南三國探検実記』(博文館、東京、1897年8月30日発行)の68-69頁では、旅行中東北タイで1897年1月20日夜に、

仏教の基本戒律である五戒に反して、村民に嘘をついて、酒を飲んだこと、つまり五戒中の二戒を故意に破ったことを、これまた堂々と次のように書いてることである。

「二十日晴 早発午後五時頃コナン村 (Khan) の苦」に着す寺院なし例に依り村長の家に投ぜんとす此時鉄脚 (岩本千綱)、「三無」(山本鑑介)を顧みて曰く君暫く待て一の緊急動議ありと三無何事かと驚て路傍の草上に坐す鉄脚徐に説出して曰く回顧すれば盤城 (盤谷) を出でてより此に三旬余幾多の危難災厄を凌ぎ死に瀕すること亦一再ならず然れども幸にして暹境を踏破し明日は其北端なるノンカイ市に達すべし豈祝賀すべきの至ならずや今宵は宜しく禁酒の戒を破り土人を欺きて聊か祝盃を挙ぐべしと此意外なる動議には流石の三無も驚くかと思ひの外満面顧る許りに打ち喜び双手を挙げて賛成せり左れば之より其準備に取掛らんと先づ村長の家を叩きて番小屋 (此辺各村とも村頭に番小屋あり) 借用の儀を申入れ其承諾を得て更に曰く坊等が俗家の宿泊を避け

て汚穢 (むさ) き番小屋に一夜を明す所以のもの蓋し衆生清度の重きを知ればなり村内若 (もし) 熱病に罹り居るものあらば釈尊直伝の妙薬を与ふるを以て坊等の宿処に参拝せしむべし尤も同妙薬を酒に混じりて飲むものなれば望のものは一瓶の酒を持参すべしと告げ終て村端の小屋に入れり愚直なる村長は坊等の言を信じ村内へ触れ廻りし者と見え良 (や) や久して五名の土人各々一瓶の酒を携へ来り只管 (ひたすら) 妙薬を得んことを乞ふ鉄脚曰く微言祈願して然る後授与すべければ明旦を以て来るべしと土人三拜九拝し去る此に於て二坊は突然本質を顯はし計略の図に中りしを祝しつつ鉄鉢の蓋に酒を盛り鉢中の塩魚を取出し且つ飲み且つ談じ夜半肱を枕にして睡る其愉快なりし情勢は恐らくは二坊の外之を知るものなからん本日の行程十一哩余

二十一日晴 釈尊直伝の薬取りは早や玄閣番小屋へ寄来れり二坊は早起飲残りの瓶中へ水を盛りキニーネと宝丹とを打込て来客を待ち居たれば勿体らしく之を目八分に搾り扱て土人等

に告て曰く汝等何の仏縁ありてか此の妙薬を戴くを得る病者一たび之を服すれば病立 (たちど) こるに治すべし尤も不信の輩には毫も効驗なかるべしと甘 (うま) く一道の通辭を設け化の皮の剥ける間に土上に睡して礼拝する土人を跡に番小屋を出たり」。

本稿は、岩本の嘘を穿鑿して糺弾しようなどという考えは毛頭ないが、浄土宗本校での講演の自己紹介には、外にも間違がある。一つは、1888年に陸軍の将校を中尉で辞めた理由。彼の言うように政治問題に絡んで辞職に追い込まれたものではなく、借金などの私生活上の素行不良が原因となつて免職されたのが真相である。しかし、世間体を繕うためにはこのような言い訳が必要であつたのである。これについては、本シリーズの最初の方で既に説明した。

もう一つは、タイへの渡航歴である。彼は明治25 (西暦1892) 年にタイに初渡航して以来、1897年11月半ばの講演時まで、「明治」廿五年初て彼地に渡り爾來往復前後十回」と語っている。1往復とは、往

路復路各一回を以て初めて1往復と数えることは言うまでもないことである。岩本は、この間、10往復したと語っているが、実際は次の旅券下付記録に見るように5往復しかしていない。ここだけではなく、他でも10往復と語っているのが、不注意による言い間違いではなく、故意に倍に水増ししたものである。

#### 旅券関係法規の歴史と岩本の旅券

ここで、今後の岩本の活動を理解するためにも、彼が一生涯のうちに受領した旅券について、当時の旅券規則を踏まえて一括して説明しておこう。

日本において、旅券という用語が法律用語として最初に使用されたのは、明治11年 (1878年) 2月20日に外務卿寺島宗則が公布した、外務省布達第一号「海外旅券規則」においてである。海外旅券希望者は、姓名、年齢 (何年何ヶ月)、渡航目的、渡航先、本籍又は寄留地、族称 (華族・士族・平民)、職業を記載して外務省又は開港場官庁 (開港場のある府県庁) に出願

することを要した。旅券は基本的に一次旅券で、一度海外に出ると帰国後は30日以内に最初に受取った官庁へ返納することが義務付けられていた (法令全書「明治十一年、1931194頁」)。1878年海外旅券規則で数次旅券の扱いを例外的に認めたのは、郵船等の海員で常に旅券を要する者のみであつたが、同年3月22日付の開港場のある府県に対する外務省達達第二号によって、「清国諸港香港朝鮮国并露領ウラシホストツク、コルサコフ (樺太の大泊港) との間を往復する者は、3年間の数次旅券が認められた」(内閣記録編「法規分類大全第二十四巻」(外交門 (3)、複製版1977年刊、原書房、4861487頁) 。その後数次旅券が認められる地域は、後述するように、より縮小された。

1897年11月15日に施行された外務省令第5号、6号によつて、海外旅券を希望する者は、「開港場官庁」(開港場のある府県庁) だけでなく全国全ての「地方行政庁」(府県庁) に願ひ出でるように変更された (加えて長崎県対馬国より韓

国へ渡航する者に限り対馬島庁へ出願も可能に) (法令全書「明治30年第10号、3531354頁、同第11号、391頁」)。

1900年 (明治33年) 7月1日に、新たに明治33年外務省令第2号「外国旅券規則」(法令全書「明治33年第6号、3351338頁」) が施行されたことによつて、1878年海外旅券規則は廃止された。1900年外国旅券規則は、「海外旅券」を「外国旅券」と名称を変更した。その後、外国旅券規則は、同じく外務省令により1907年、1929年、1935年の3回変更された。最後の1935年の外国旅券規則は、戦後の1951年1月1日現在も依然有効な法令とされている (国立国会図書館調査立法参考局「現行 (昭和26年) 法令索引」大蔵財務協会、339頁)。1951年11月28日に「旅券法」が公布 (同年12月1日施行) され、「外国旅券」は、単に「旅券」とい

う名称に変更され、今日まで続いている。

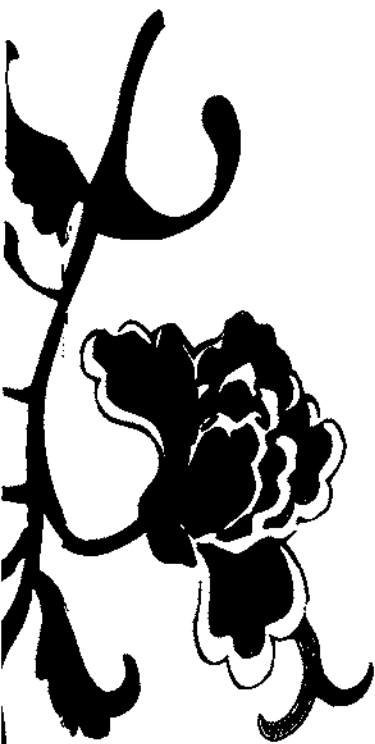
さて、1900年外国旅券規則が、それ以前の1878年海外旅券規則と異なる点は次のような点である。

第一に、1878年規則では本人の本籍地や所在地を問わずどの府県にも、あるいは外務省にも申請できたが、1900年規則では、国内の出願先は、申請者の本籍地もしくは所在地 (現住所) の地方上級行政庁 (基本的に府県庁) に限られるようになった。外務省に出願できる制度も廃止された。

第二に、1900年規則では、申請書の記入事項として、①本籍地の記載が必須となり、本籍地と所在地とが異なるときは所在地の併記も必要となつた。および②身分 (戸主或は家族員の別、家族員の場合は戸主の氏名及び戸主との続柄を記載するこ







岩本千綱が、浄土宗学本校で講演をした1897年11月当時、タイ渡航を準備していた同

浄土宗学本校卒業生  
概旭乗と真如法会

るいは生年月日とするか、どちらとも認められている。それゆえ、岩本千綱の年齢も二つの方式が混在している。但し、注目すべきことは、岩本が自らの生年月日がある時は、安政4年9月「西暦1857年10月又は11月」と記し、ある時は安政5年5月「(10日)」「西暦1858年6月20日」と記していることである。自分が1857年生まれなのか1858年生まれなのかは、岩本自身も判らなかつた可能性がある。本籍地に関しては、岩本は常に「高知県高知市南新町」と記している。南新町は現在の桜井町1丁目および2丁目に当たる。

校卒業生がいる。  
浄土宗学本校高等正科5年生を1897年7月8日に卒業したばかりの、概旭乗(1871-1937)である。彼は、明治4年2月3日生、佐賀県三養基郡みやき町の西念寺住職概旭の養子であった。当時、寺の後継者がいない住職は、幼少の子どもを養子に貰い取りとして育てるのが一般的であった。旭乗もそのような目的で養子に貰われたものと思われる。旭乗は浄土宗学鎮西教校(熊本)で中等教育を受けたのち、東京にあった浄土宗の最高学府に進学した。  
1897年に彼と共に卒業した者は11名、彼の席次は5位であった。この学校では、仏教関係の教科の外に、哲学、漢文、英語、歴史、理数の各教科も必修であり、席次はこれらの科目の平均点で決まった『浄土教報』明治30年(1897年)7月28日、第295号)。

旭乗のタイへの関心はどこから生じたのであろうか。後述のように、来タイ当初の彼は岩本千綱や生田(織田)得能に言及する発言をしているので、両者の影響があったことは間違いない。  
旭乗のタイ行きに関する最初の記事は次のものである。  
『概旭乗氏通暹に発す』宗学本校専門科第一年生概旭乗氏は兼てより入暹の希望ありしが、今岩本氏の真如法会設立の事を聞き遂に奮然決する所あり先づ同国盤谷府にて暹羅仏教の講究と同国語とを講究し傍在留の日本人伝道をなし次で同地に浄教を布かん希望にて一先五年を期し自費留学の筈にて来月中旬岩本氏の一行と共に壮遊の途に上るよし目下教門の元氣消耗して殉教的精神の甚乏きの時此快男子の起つを見る真に一宗の慶と云ふべし氏たるもの希くは牢固強大の志象もて赫々の偉業を前途に期せよ敢て祝し且つ望む  
同氏の送別会 本校同窓諸氏は同氏今回の壮遊を美にせむが為に来る廿日午後一時より小石川伝通院大蔵に盛大の茶話会を開き本校長教職員学友会等も

臨席し痛快なる演説送序詩歌の朗読十数に上り午後四時散会したりといふ『浄土教報』第307号、1897年11月25日号、6頁)。  
ここに言う真如とは、高岳親王(たかおかしのう、799-865)の法名である。高岳親王は平城天皇の王子で、809年に皇太子に立てられたが翌年廃された後、出家して弘法大師の弟子として修業した。終には高僧にも拘わらず入唐求法を志し、862年太宰府を立ち、864年には長安に到着、更に翌865年天竺を目指して広州を立ち羅越国で死亡したと言われる。羅越国とはラオスにあつた国であるという北澤正誠の説が存在しており、1897年に三国探検から帰国した岩本千綱は、ラオスで高岳親王(真如)の遺蹟を本格的に探索するという目的を掲げて真如法会なる団体を立ち上げようと試みた。  
岩本は、真如法会設立の趣意について、1897年11月半ばの浄土宗学本校での講演で、次のように語っている。  
岩本が1896年末に三国探検に出た理由の2番目は、「信

と」の項目が追加された。ところが、第1表にみるように、1900年規則施行以後の岩本の旅券下付表には本籍地のみが記され、所在地(現住所)は省略されている。岩本の申請書類には、規則に従い所在地も記されていたはずであるが、府庁が旅券下付表に転写する際に省略したものと思われる。1900年以降も、岩本は本籍地の高知県に外国旅券下付を出願したことはい度もなく、現住所があった東京府もしくは京都府に出願している。1903年に京都府に出願していることから、この時、京都に住所があったことが判る。  
第三に、帰国後返納までの期間が6ヶ月以内と改まり、更に「領収の後六箇月以内に出発せざるときは旅券を返納すべし」と6ヶ月以内に旅券を使用しなかつた場合も返納義務が生じたことである。使用可能期間の限定は、1878年海外旅券規則には存在しなかつた。それ故、同規則下では、岩本千綱が、1889年に取得した海外旅券を、3年後の1892年7月のタイ初渡航の際に使用したり、

1895年6月14日に取得したものを、翌年1896年3月に使用したりすることができたが、1900年規則で不可能となった。  
第四に、数次旅券に関する広汎な規定が設けられたことである。即ち、同規則第10条は、「商業漁業其の他職業の為数次往復する者は帰国若し「もしく」は帰著毎に其の旅券を返納することとを要せず但し旅券領収の日より三年を過ぎて帰国若し帰著したるときは之を返納すべし」と定めた。同条は地域を特定することなく3年間の数次旅券を認めただものであったが、1905年外務省令第5号により廃止された(『法令全書』明治38年第8号、487頁)。その後、1907年外務省令第1号で、外務省告示で指定される特定地域に關してのみ3ヶ年の数次旅券を認めることとなり、具体的には、外務省告示第7号(1907年4月1日)によりロシア領サハリンと沿海州のみが認められた(『法令全書』明治40年第4号、419頁)。  
なお、出願時の年齢の表記は、何年(歳)何ヶ月とするか、あ

第1表 岩本千綱が取得した海外旅券・外国旅券一覧(合計13回)

旅券番号 (省・府県)	海外(外国) 旅券下付 年月日	海外(外国) 旅券返納 年月日	年齢 (何年何ヶ月) 又は生年月日	本籍(又は 居留地、所在地)	職業・族称	旅行地名	渡航目的
20186 外務省	1889	1893.5.19					
3809 外務省	1893.5.20	1894.12.21	35.4	高知市南新町3丁目 24番地、東京市麹町区 平川町4丁目12番地寄留		シヤム	商業
25931 兵庫県	1894.10.30	1895.6.12	37.2	神戸市海岸通 5丁目16番寄留	高知県士族	暹羅	農業研究
43164 兵庫県	1895.6.14		37.10	同上	高知県平民(?)	暹羅	殖民並に商業
78727 兵庫県	1895.10.8	1897.6.5	39.2	神戸市元町 1丁目46番寄留	同上	暹羅	会社設立
親8 東京府	1898.9.6		安政4年9月生	麹町区上6番町 35番地福沢重香方	高知県士族	清国・東京・ 老婦・緬甸	漫遊の為
13373 東京府	1900.3.5		同上	同上	同上	暹羅国	仏教視察
15685 東京府	1901.3.14		安政5年5月生	高知市南新町 17番屋敷	同上	暹羅	仏教視察
73563 京都府	1903.9.14		43.4	同上	同上	暹羅	商用
40542 東京府	1906.9.3		安政5年5月生	同上	同上	緬甸国	商業視察
104617 東京府	1907.9.4		安政5年5月10日生	同上	同上	清国及安南	商業視察
124705 東京府	1908.4.18		同上	同上		清国	商用
231169 東京府	1912.9.25		54.5	同上		緬甸經由支那	帰任
317710 東京府	1916.2.8		58.9	同上	士族	仏領印度支那及支那	商工業視察

出所：筆者が外務省記録旅券下付表より集計した。なお、空欄部分は旅券下付表に記載がない。



州松代藩士北澤正誠氏修史局三等出仕たりしとき明治八年(マ)に高丘親王羅越国墳墓考の著ありて羅越と老嶋と同国なることを攻証し其墳墓所在の地を広く世界に問ふも誰も之に明確の的をなしたるものあらず是予が最遺憾とする所なりき加之予が嘗て地学協会にて一席の演説を試しとき榎本島尾曾我等の人々より其探検を依頼せられたれば予が羅越探検の目的は益確実となり遂に今般の探検を試みるに至れり」『浄土教報』第310号、1897年12月25日号、5頁)であつたが、簡単なラオス踏査では発見に至らなかつたので、真如法会を設立して本格的な調査を実施したいといふのである。

岩本は真如法会設立の名で寄付金を集めようとしたのであろうが、思うようには資金は集まらなかつたためか、沙汰止みとなつてしまつた。上記概旭乗のタイ行きの記事は、真如法会関係で渡タイする岩本に同行する

と書いてあるが、第1表に見るように、岩本はこの時期に渡タイしてはいない。旭乗自身も後述のように岩本の真如法会とは無関係と述べている。

#### 概旭乗の渡タイ

旭乗は、1898年1月2日門司港を発ち、21日にはバンコクに到着した。2月半ば、旭乗は東京に次の書信を寄せた。  
「入道學僧、概旭乗氏は一月二十一日無事暹羅國盤谷府に入り目下暹羅公使の手を経て入寺の手続中なりと云ふ本月中旬同氏が記者に寄せたる書信に依れば

……一月二日門司港出港同七日香港へ着仕り四日間滞在の上十一日午後英國船へ便乗廿一日午前盤谷府に上陸……目下文部大臣を経て入寺する手続中にて

候……聞くが如くんば暹羅語に自由になるまでは二年を要し其上僧侶に付きてパーリ語を研究して而る后宗教大学へ入校するものとす然る時は小生が初め期したる如く五年以上は如何に勉強するとも時日を要す二年か三年暹羅へ渡るも何の益なし……日本人にて一年二年にて帰国するものも多し而して彼等放言するらく暹羅の仏教研究するの価値なしと、なきにはあらで見出す能はざるものと愚考候尚氏は入寺するまでは当分彼の所へ滞錫の筈  
暹羅、盤谷府チヨルンクルン街阿川方  
T. Agawa, Chot-ungkuln street Bangkok, Siam」『浄土教報』第316号、1898年2月25日号、4頁。なお、引用文中の……は原文通り、以下同じ。

ローマ字表記がおかしいが、旭乗は当初、チャローンクルン(Chaoen Krung)通りの阿川太良(函南商會)宅に宿泊した。続いて、次の報道がある。  
「概旭乗氏の近況 前号に報

ぜし如く同氏は入暹以来暹羅公使の尽力にて暹羅國文部大臣チャオ、パスカロングセ「チャオフラーヤー・パーサコーラウオン」氏の愛顧を得て同國の一大宝物とする仏陀聖骨を安置する一巨剎ワット、ワツサケー寺に入り専心パーリ聖典研究中といふ同寺は暹羅のシエルザンム「Jesaborn」仏陀伽耶とも云ふべき有名の靈地にて信男信女の参拝絶ゆる時なく且同寺の管長は有名なるパーリの大学者なれば同氏の成效も刮目見るべきものあらん」『浄土教報』第322号、1898年4月25日号、3頁。

ワット・サケート寺院(Jesabornwatsanich)に移つた旭乗は、次の書信を寄せた。なお、以下の2引用文には、多数の誤植があるが、明白なものは修正している。

「概旭乗氏の近信 前号所報の如く概旭乗氏は目下暹羅のワット、ワツサケー寺にありて連「じき」りに暹羅語及巴理梵文研究中なるが今同氏の近信を得たれば左に掲げて読者の一察に供す文中大に参考となるべきものあれば

……余は着後暹垣公使に非常の信と愛とを得て万事好都合にて入寺の時文部大臣の二頭馬車にて鞭を操るものは馬來人前驅するものは暹羅人にて意氣得意に入寺候……寺院は盤谷の区中にありワット、ワツサケーと稱すワットは寺の義ワツサケーは処の名也、暹羅國唯一の巨剎にて僧侶は何時も二百五十人は常住に候とぞ、寺のソムデツチャウ即大僧正は皇族にて飛ぶ鳥を落す勢あり、次にプラクルー(學頭)二人ありて其一人は小生が主任教官なり、已下の階級にバラット、マハー、スムウ、パリカ、ブラソン(普通僧)ネーン(沙弥)等有之宛然觀峯三千の学房を見る感有之候小生は日本の客僧とてワラ、ジッポン(居室は十畳器具凡て完備せざるなく予想外に幸福に有之候……小生は固より岩本「干綱」氏の真如法会とは初めより関係なく其目的も彼が如き漠然たる間接のことにあらずして直接のことにて候即ち直接同國語を研究して巴

理を研め同國佛教の精華を講究する考に御座候、右は特に一言申上候本校蔵書のパーリ文典などにて御存知の通の文字にて中々面倒に候へ共少しく外國語の素養あるものには同國語の至りて容易に候、乍去此三十にして手習をなすが如き小生は何時も妙なる言語の失策をなし、或時邪嬌戒の聖文を誦するとして、「行水をす」と云ふ義の語を誦し出し大衆の大笑を招き候何事もかかる有様にて大衆の愛嬌者と相成居候……盤谷府は全く人類博覧會場にて候、歐米人民は云ふに及ばず印度人馬來人爪哇人領馬人(ママ)老嶋人安南人支那人の如きは三分の二の多数を占む、此等の外國人は農商工の実権を握りて、暹羅人は多くは所謂居食を為すものなり、婦人の新髪は見馴れぬ余は異様に感ず、小児の前頭部(他は剪り落す)に結髪するは最も愛らし中以上は腰巻に洋服の上着を着すれども以下は皆裸

体なり婦人は乳房を露はすを非常の恥とす人民湯を浴びるなく皆水を浴び亦た摩擦することなし、左れば彼等は赤児の時からの垢を負ふなるべし。万事に就て支那人より數等清潔を好む男女共齒は真黒色なり是れマークと稱して檳榔樹の実を噛むが故なり、賭博と屋敷は彼等の大好物にて、賭博場の如きは公然税を出して金看板を掲ぐ  
名物 文明とは埃の立ち昇ることなりと定義せし變り者もありとかや我國の文明の中心たる東都の名物は御存(ママ)の塵埃と火事、暹羅文明の中心たる盤谷府にても塵埃は第一の名物にして第二は湄南河兩岸の浮家第三椰樹の実芭蕉の実と共に盜賊も其の内に数へらる  
旧都 アユチャ「一部筆者略す」今の王都盤谷を隔つる七十哩鐵路に依りて往くも可、混々たる汚濁の長江湄南河を汽船にて遊るも亦一興なり、  
……余り學問計りに没頭

するも興なければ文部大臣と内談いたし当府貴族学校の数学教師と出かけ候貴族学校と云ふ大層なれど進歩したるは外國語學のみにて数学の如きは分數幾何が最高級の學問に候代數幾何など解説の語さへ之なく候、小生の数学教授として意欲居り候は此故に候……予輩は希望す圖「すべて」宗教友諸君が大に同氏が這般有益なる講究を助けて研究に要すべき資料を統々同氏に惠送せられんことを而して同氏に音信其他は前号記載の如く暹羅王國盤谷府大日本公使館宛にて到着すべし」『浄土教報』第323号、1898年5月5日号、516頁。  
二頭馬車云々など何とも俗氣の多い書信であり、仏教研究もそこそこの、来タイ3ヶ月程度で数学教師を志願するとは先が思いやられる。浄土宗学校高等正科で、仏教のみならず英語や理數系の教育を受けた旭乗は、英語で数学を教えることができる基礎はあつたのであろう。但し、次の引用文に彼が付した英單語の読みを見ると英語

372

371

力は疑問なしとはいえないが。  
ワット・サケートで、彼は「日本  
の客僧として（アラ、ジッポン）  
であり、次の引用文には托鉢に  
遠くまで出かけていることが記  
されているが、上座部仏教の出  
家者となつたのかどうかは判然  
としない。

#### 概旭乗の暹羅近信

1898年8月、旭乗が送つ  
て来た近信が編集者の前書とと  
もに、3回に分けて浄土教報（第  
334号、第336号、189  
8年8月25日、9月5日、15日）  
に掲載された。半可通の知識で  
誤解や間違いが多いうえ、意味  
不明の箇所もあるが、以下その  
まま引用する。

暹羅近信 概旭乗

已下掲ぐる所は暹羅盤谷府ワ



ツトワツサケー大寺院滞錫  
概旭乗氏が九州同人及学友  
一統に寄せたる近信に係る  
文中、前に本誌に掲載せし  
と重複の所なきにあらずと  
雖も今は詳なるに随ふて更  
に之を掲ぐることにせり、  
而して文中挿入する所の暹  
羅文字は印刷の都合により  
之を省簡したり、読者之を  
諒せよ（笑）

緑りなす湄南河畔、そよ吹  
く風に心思を遣まし、往昔は互  
に嫌悪して河を分ちて水を呑み  
してふ小乗の学人と席を同くし  
て法を談ずる宿縁の深さに、多  
血多恨の情さへ交へて、専心貝  
葉を研むる身に亦何の不足かあ  
らん、されば夢に東海を見る的  
の懷郷病（ホームシック）は骨  
て未だ寝ひ来らず諸君を幸に  
意を勞する勿れ。

僕が多くの知己多の友人より  
負はされたる殆ど堪へ難き迄の  
重荷を両肩に担ふて國を辞した  
るは実に一月二日、今日此頃の  
音信に通信よ、通信よと繰り返  
へし強ひらるるも道理也、僕は  
確かに年の半者を目的の土儀上  
に告別し終りぬ、然るに其時間  
は殆ど語学研究に消費し去りた

ることを先づ記憶せられよ而し  
て諸君は僕が通信の材料に乏し  
き所以を推察し玉へよ、三年飛  
ばず鳴かず、飛ばば將に天を衝  
かん、鳴かば人を驚かさんて  
ふ洒落た者は毛頭無之、さりと  
て某高僧を習ふて英文……而  
も誤謬多き書物を翻訳して吾物  
類に暹羅仏教事情等を吹聴する  
勇氣もなし、敢て高僧を申すに  
あらねど、僕は暹羅仏教の表皮  
のみを觀察するが目的にあらず  
其五臟六腑を伺ふには、なんぼ、  
暹羅仏教が六識設立の半字淺近  
の教なればとて半日仕事に簡単  
に行くものにはあらず、然れど  
も一定の方針を立てて進むべき  
の行路文は発見したれば異日諸  
君の高批を仰ぐの時あらん、事  
若し「もし」心と齟齬して骨を大  
陸に曝すも快ならずや、爰に諸  
君が切情黙止し難く、隣家の黒  
猫が三毛を産めり」流の記事二  
つ三つ列らね、幸に焼芋と共に  
諸君の卓子に学窓の余鬱を散じ  
なば僕の幸之に過ぎず、  
此地の國人は暹羅國、暹羅人  
（San, Siamese）と云へど、  
此國の人はムアンタイ、コンタ  
イ（Mantai, Kontai）と云ふ、「自  
由の國」「自由の民」といふこ

となり、いでや其出所をたださ  
ん、今の暹羅王朝は建国以來一  
百十七年前王朝（アユチャに都  
城を築き居住せり、アユチャは  
日東帝國の快男子山田長政が倭  
武士の雷名を轟せし所なるは人  
よく知る）の一將官國衰の到  
底救済すべからざるを察知し、  
湄南（メナム、正しくミヤ  
ナム（Mekong）母水の義なり）  
河口シヤム口灣の東岸に奔り此  
処に土豪海賊を集めて軍隊を組  
織し威近隣に震ふ而して翌年遂  
にアユチャは緬甸兵の陥る所  
となれり此人即ち是今王朝の先  
祖なり、第二世をヨーヂ  
（Jorj）と云ふ、時恰も北米の  
諸州は愛國の熱血を野草に染  
め、自由の凱歌は世界の到る處  
にひびきて「大父華盛頓」の名  
雷の如く轟けり、第二世ヨーヂ  
は英文に巧みなりしかば歐米  
の時事にも通じ華盛頓を慕ふ  
特に甚しく一にも華盛頓、二  
にも華盛頓、げに王は一種の  
（Washington mania）にてあ  
りき、茲に於てか赤髯先生等は  
此王に華盛頓の尊号を捧呈した  
りける、而るに暹羅語系には  
（Jo）シヨ（Jo）シの発音な  
き故、ヨージと云へり、此棕色

黒髪のヨージワシントンが東洋  
の一部に自由國を建設し自由の  
民を住ましめけり、是、ムアン  
タイ、コンタイの有難き縁起也、  
而るに果して自由國にして自由  
の民存するかと云へば、貴族專  
制國、奴隸服従の民のみ、今王  
第五世の王統を受け、大に力を  
救済に用ひ軍事教育見るべしと  
雖も未だ幼稚なるが如し、而も  
王室の基礎は大抵定まれる如く  
見えて目出度き限りなり

ることなく、幾多の美人黄土と  
なり、幾多の青壯枯骨と化し、  
老幼此道場に於て差別なく、あ  
だし野、鳥辺山、さては日暮の  
里に幽凄悲慘を添ゆるなれ、亦  
夏草の繁れる中より陣々吹き来  
る腥風はレンゲ（Jeng）と云  
へる鳥の人の死肉を囓むなり、  
無常の觀念恐しき迄咀嚼したる  
暹羅人すら目を掩ひ足を急に  
す、五衰を知らぬ天上の佳人も  
此慘劇に逢ひては首を垂れて生  
者必滅の道理を悟るべし此寺院  
は有名の大寺にて僧侶常に二百  
人を降らず、兩期中は三百人を  
養ふ兩期（Kandass, Pan  
sa）は兩の義梵語なり、カウ  
は内の義なり雨の内と云ふ  
義）は三ヶ月なり、大僧正  
（Sontethyuan）ソムテツチャ  
ウは王と尊号を一にす、次にフ  
ラクル（Phrakul）二人あり、  
クルは梵語の瞿魯即ち師と云ふ  
字より来る日本僧徒の勳字に當  
る、されば暹羅語にては司法議  
員の意義を正しとす是今は別に  
歴々裁判官の備具するなれ元は  
僧侶の意見を聞きて訴訟事件の  
黒白を判定せしこと明なり、而  
して大小の寺院無數、僧侶亦多  
く大僧正の数亦随て多し、此等

大衆は在俗の信徒によりて生活  
す、三宝尊信は悉く仏教國の何  
の國も此右に出づるなかるべし  
実に該國の仏教は盛大と云ふの  
外なき也、一人の僧ありて布教  
するなくして今日の盛なる怪む  
に足らず、豈故なくして然らん  
や、今其原因を数へば  
1. 上は王侯貴人より下庶民に  
至り一たびは必ず家を出でて僧  
となるの慣習は、臘臘にも仏教  
教理を了得し自然の布教布隆  
盛の一因たるべし  
2. 一種淫猥なる人情小説の外  
俗話、戯曲、学校教科用書、凡  
て仏理を釈明せざるなし、是布  
教の第一義にあらずや  
3. 各寺院に必ず小学校を有し、  
多きは三個を有する大寺院もあ  
り以て児童を集めて教育を施す  
云ふ勿れ大日本の僧侶は伝道活  
発也、小乗の仏徒は頑愚甚しと、  
第三の如き徒らに神儀法事形式  
的布教を以て得たる本邦仏徒  
の大に慚て又恥づべき所なら  
ずや、乞ふ少く反省して着実な

る伝道方針を立てよ  
僧侶 人は云ふ暹羅僧は頑愚也  
と、由来暹羅國民一般に頑愚な  
り豈独り僧侶のみを之れ責めん  
や、僧侶の種類は大略之を三分  
すべし

第一種 生涯僧たるもの  
換言せば僧侶夫自らを目的  
としつつあるもの、其數暹  
羅の如し、真に仏教を研究  
し道を得むと期するもの此  
種の僧にあるのみ、  
第二種 社会に対する信  
用と自己の位置とを保たむ  
が為に仏門に潜むもの  
第三種 我日本の職工或  
は技術家が水行操行既し参  
りをなして神仏の加護を仰  
ぎ其道の発達を希望するも  
同一の意味にて出家するも  
のされば短きは六ヶ月にし  
て俗に還り長きも二年三年  
の間持戒苦行するのみ





僧侶は職務の如何に拘はらず円頂黄衣、受くる所の戒法は二百二十七戒なり、其根本は十戒にして殺、盜、淫、妄、飲酒、非時食、見聞歌舞管絃、裝飾莊身、持金銀、寢高床を誡む、仏陀は悪にもあれ善にもあれ、吾人が為す渾「すべて」の行為を知り玉ふとは、一般僧侶の深く信ずる所にて、実践修行の点に於ては吾人実に忸怩たらざるを得ざる也、嗚呼縋弱衣に勝へざる如き乙女の信仰さへ、往々にして英雄豪傑をして消滅せしむるにあらずや、吾人は日本仏教者の徒らに空理の一方に耽せて信仰に遠ること日に甚しきものあるを哀む也、彼等常に誇稱するん、大乘の極意は心靈の上にあり、豈区々たる形式上の戒に之を問せんや、形式上の戒は山師坊主の道具のみと、何ぞ妄なるや狂人の所行とて大路を走るもの狂人ならざるか、舞の所行とて舞を学ぶもの舞にあらずるか、妾を蓄へ酒色に沈溺し曰く僧正曰く僧都而して心靈上の事を云々すと雖僧侶たるの模範より脱せり、嗚呼亦仏徒たるの資格なきを如何せんや

く遍羅仏教者の言行は一点の非難すべきなし、恐くは釈尊の理想に幾「ちか」からむ、罵るものは曰く、化石的、陳腐頑迷取るに足らず更に之を研究するが如きは三文の価値だになきものなりと、吾人は此等馬車馬的觀察者の批評に対しては何れも賛同すること能はざる也、何者則、前者は実行の一点を評下(ママー)、后者は理論の一面のみを局観すれば也、而して從來此等外觀を離れて其中核(ニユクアス)を討究したるものあらず、況むや二大宗派に依りて教理上教式上幾多の異点あることの如きをや、吾人は今少く此等に付きて討究しつつあれば詳細は之の結果の諸君の前に提供せらるるの時を期し、今は唯二大派の概要のみを茲に一言しをかん

ち集の義にて或は難集、賤人の義を含めり、大衆派と訳せば適訳ならむ、此派は非常に進取(フログレスシブ)氣象に富み、寛容の量を具し俗界に出てて世を徳化せむと力む、而も此派の美点なると共に亦惡しき点にて不識不知の間に俗化しつつある傾向は此派の爲に窃に惜まざるを得ざる所なり

或人曰く、此二宗派は教義上区分すべきものに非ずして教式上の分派たるに過ぎずと、然れども宗教上に必須なる神聖なる儀式が既に差異を見るときは、其特に異なる文、其文教義にも異点たるは研究に着手せざる已前すら洵に明なる所にあらずや、況むや二宗派は其經典に於て

1. 旧派は全くパーリ三蔵のみを用ひ

2. 新派はパーリと梵文との三蔵を用ゆるに於てをや、由是觀之、此新派は遍羅に於て分派したるにあらずや、印度に於ける異宗派ならざるやの疑存する也、而も遍羅人は新派は遍羅に於て分裂したりと確信せり、新派が一見其根本に於て教義上に特異なる此の如し、尙其詳細は異日の討究に譲ることとなさん、而して茲には唯儀式の小異なる点

を示し置かんのみ、兩派共に袈裟は黄衣に相違なきも兩者大に其着用の様式を異にす、(一)旧派は日本の仏画に見ゆる弥陀の立像に毫も相違ふ所なければども(二)新派に至りては其細ひ方吾人未だ仏画の類に於て瞥見したる事なく簡單此上なし、大なる七條を造作もなく纏付するに止まる、

次に旧派に於ては動行に一定の法式あるなく朝夕、持仏に向ふて祈禱をなすのみ、本堂に出でて觀經すること希れ也、勿論十五日毎には髪を剃り爪を剪り、清淨に戒の具欠を換することとはあれども、特更布薩懺悔の法式あるにあらず、而るに新派に於ては朝夕の動行非常に嚴肅鄭重を極め、特に布薩式の如き最莊重なる法式ありて半月中自己心口意の罪業を隠すなく阿闍梨耶(Acharya)の前に跪露懺悔するなり、新派の嚴格なる此の如くなれば托鉢と齋食の招に應ずると両親の急病を見舞ふとの外は如何なる事故あるも外出を禁する也唯兩派の同じき点は食物に制限を設けぬことにて、自ら殺屠するにあらずれば牛豚魚肉毫も支障あるにあらず、此他亦特点の一に挙ぐべきは新派は僧侶となりて後は誦經修禪の外他なければども、旧派は管て俗界にありし時の職業をなすを常とす、されば旧派の寺院は全く一種の職業学校たるの觀あり、或る室(一僧一棟の室を有すと知れ)にて飽「かん」を弄し大工をなすあり、或は左官あり、銀細工人あり、靴師あり、監獄と寺院に至り見れば此国社会の職業は見たり去るを得べし、但し寺院に於ては、流石は名物の竊盜賭博を見る能はざるは実に有難し、

飲酒 寺院に於て之を嚴禁するは勿論、俗界人生の最大礼典なる婚禮を初め、苟くも衆人の群衆する公会席上に於て飲酒するを恥づるは國人一般の風なり(美風と云ふべし)西洋風の酒舖市街に存すれども支那人及他の外國人にあらざれば最下等の人民殆ど人間外と見做され居る通人の入るを見るのみ

托鉢 此国に於ては此上もなき神聖なる行なる丈其文嚴肅にて施主も被施主も日頃の滑稽的人物に相似ず極めて真面目也、其時に當りて出逢ふ人の如何なる高位、如何に親近なる人なるに

関はらず一挨拶をもなさずして過ぎ行くなり、其時間は極めて簡短にて最長時間にて、被施主は如何にも仏の位置にある如き風采にて懇く言へば最とも傲慢なる体裁なり、諸君試に思へ、黄衣棕色の比丘來る時には緇紳富豪或は眞鍮製の飯器を捧げて黙礼支那語の転訛せる音にてホウシヤと呼びつつ盛饌に施す様の盛なるを、此の如きは毎日定りて施す家甚だ多くあるなり、皇族華族富紳の如きは二十人乃至三十人の僧侶に施すなり、而して特に感すべきは主人病氣にあらざる限りは決して從者を使用せず自ら比丘に施すことは是也、施の役目を担任するは一家中の年若き夫人とか令嬢とか云ふ人之に當る也、之に就き流石は仏教繁昌の国だけに面白き逸話もある也、妻君を娶る時に第一に研究すべき問題は彼女が美しくして賢なれど杓子の採り方、托鉢比丘に施す礼式を心得るや否やなり、されば令嬢なほ奮て比丘に施すは自然のことなりと知るべし、時によれば被施者よりも能「よく」施者の数多し、仏日の如き日即是也、此国にては一月を錫蘭の如く

上半下半に分ち八日十五日をワソラ(Wasara)と云ふ聖日(サクレットデー)と云ふ義也、僕は例の運動好なれば毎日の托鉢修業には遠方に出かくると雖、此日は遠足無用なり、何者則前に云ふ如く被施主より施主の方多き故中に施す能はざるもの出來る事あり、此事実は其人に取りて無上の恥辱なり、宿因薄き果報無き人なりとの誹を受くる故、出來る丈速に競ふて施す傾向なり鉄鉢充滿して容るるに余地なければ蓋にまで押し詰めるを常とす、一種の押し付け売をする也、小供の小学教科書に「人あり、施の徳を積みて天に往かんことを希望す」と皆此類なり、

筆の序に一言すべし遍羅仏徒の至上善は勿論涅槃那に入るにあると雖、一先天に生ずるを願するが功德を積むの目的也、施をなすを遍語にてタムブン(Tam Bunn)と云ふブンは果

報のこと、善因あれば善果あり、惡因あれば惡果あるは國人の一般に信じて疑はざる所也之を暹羅語に「(unpunished sin)」タムフンタムカルマとて一の格言となれり、業によりて果報に善惡あるの義なり羯磨は諸君の僕よりもよく研究せられし學語なればよくは申さず英人之格言に訳して「(Be as it may)」とせり、以上は陸上の托鉢なれど、水上は小舟を以て托鉢する僧侶あり、げに此國は托鉢僧の至らぬ限なき有様也

火葬の資格を剥奪せられたる罪障深重の人なりとなす、而して之を土葬に付する也、葬式に際して僧侶の施す宗教上の儀式は実に簡單なり、棺より白布を出して之を各宗(マヤ)の手に連絡せしめ「何処より来りて何処に行かむと云々」の二三偈を誦するのみに止る、結婚 僧侶は此華燭の典の正客也、新夫婦は僧侶の前面に出て来り、僧老の契り終世「かむ」らざるべきを誓約し握手すれば僧侶は經文を誦し乍ら其上に甘露水を洒「そそ」ぎかけて自出度結婚の式を終る也

む、暹羅の事吾人の目より見れば渾て滑稽ならざるはなしと雖、此祝典は就中尤も滑稽なるもの也、先敷「りゅう」の旗を立て小供の花籠を以て列するあり、次に妙齡の女子花皿を以て列をなし親戚朋友悉く異様異種の装をなし次ぎに本人は髪を剃り加藤清正の烏帽子より一層長き冠を着け長柄の傘をさしかけ次に衆人其次に種々の芸人あり寺院の廟前に練り行く様全然一種の茶番に似たり終日意味もなく騒ぎまわり日暮に至りて解散す

も不拘仏陀の渡邊を確信し「バー」ト」と稱する所には仏足あり、長きこと一問半なり、暹羅人の奇跡信仰や概ね如斯(下略)(終)

上記書信で、旭乗は、生田(織田)得能の暹羅仏教事情を暗に批判している。得能の著書は、質の悪い英文文献からの翻訳であり、また得能のタマユットとマハーニカーイについての説明も間違っていると思われている。得能の暹羅仏教事情を高く評価している筆者は、旭乗の批判が当たっているとは思わない。

旭乗のように自ら何ら研究成果を出していない時期に先行研究を悉く様に批判するのは、初学者に許された特権であろう。しかし、それを単なる高慢に終わらせないためには、先行研究を超える成果を出さねばならない。

旭乗は7年間の在タイのうち、1905年2月27日に一旦バンコクを離れたが、その間彼が保守的タイ仏教といかに格闘したかは、機会があれば紹介したい。

連載 60  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(46)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

7月7日  
2015年7月

前号で紹介した概旭乗(1871-1937)は、政尾藤吉衆議院議員に国会で「日本の国宝」と持ち上げられたことがある。

政尾藤吉(1870-1921)は1897年から1913年8月まで16年間タイ政府に法律顧問として雇用され、同国最高裁判所判事の任も務めた人物で、帰国後1915年3月25日の第12回衆議院議員総選挙で政友会(原敬総裁)に所属して郷里の愛媛県から立候補して当選、1917年4月20日の第13回総選挙でも再選された。

「日本の国宝」にされた概旭乗

1917年6月30日の衆議院予算委員会(予算総会)で、代

議士の政尾藤吉は日本がタイに對して領事裁判権を持つていた1898年2月25日調印の日暹修好通商航海条約は、却って現在の日本の利益に反している、条約改正をすべきであると、寺内正毅内閣の本野一郎(1862-1918)外務大臣に質問した。更に、同年7月3日に開催された、予算委員第一分会(外務省・司法省・文部省所管)で、政尾藤吉は概旭乗が現行条約の欠陥のためにタイに帰化せざるを得なかった例を挙げ、日本の損失であるとして次のように発言した。

「○法学博士政尾藤吉君 私は外務大臣に御尋ねして置きます、先日「6月30日」の予算総会で外務大臣に御尋ねしたのでありますが、暹羅と日本との条約締結

結の当時と今日とは、大分事情が異つて居つて、今日では速に現行条約を改正するの必要を感じられて居ると云ふ事情がある、其一是現行条約締結の當時には、欧米各國が悉く暹羅で治外法権を有つて居りましたから、日本人も同じく治外法権を有つて居つた、暹羅が其治外法権に伴ふ制限、即ち治外法権を有つて居る人民は、或区域外には移住することが出来ぬとか、或は其國の土地を、或区域以外で獲得すると云ふ「二こと」制限を履行して居りませぬかつた所が、先日予算総会で質問致しました時に、私が申述べました通りに、明治四十年に仏蘭西が暹羅との条約を改正し、又四十二年に英國が条約改正を致しまして以来、是等の國は治外法権

を棄てましたから、其報酬として、暹羅全國に向つて何処へでも其國の人民が移住することが出来、又土地の獲得が出来るやうになり、それと同時に是等の國の外の日本又は獨逸の如き、尚ほ今日でも、暹羅で治外法権を有つて居る國の人民は内地に行つて移住するとか、土地を獲得すると云ふことに付ては苦情を言ふ、それであるから暹羅は今日では条約に規定されて居る制限を履行するやうになつて、日本人が暹羅の内地で事業をやうと思ふ場合には、日本の国籍を脱して帰化せねばならないことが出来ぬ、さう云ふことになつて居る、其事は外務大臣は御存じであるかないか知りませぬが、一例を挙げて申しますれば、此処に御出席になつて居る藤田

「敏郎」政府委員は能く御存知であります、明治三十年藤田君も私も暹羅に居りました時に、概旭乗と云ふ人が暹羅に参りました其人は明治三十年以来暹羅に居って、今でも暹羅に居ります、此人は元と坊主でありまして、暹羅に参ったときには、寺に入つて真面目に暹羅の文学仏教等を研究した、それから今では僧籍を脱して還俗して居りますが、先づ此人位真面目に暹羅の事を研究した人は日本人では極く少ない、非常に暹羅の事

情にも能く通じて居る、日暹間の事情を疎通する為めに、洵に便宜な人でありますから、それで暹羅のチャンタボン「チャンタブン」と云ふ処に、稍々規模の大きい護謨椰子等の栽培を目的とする所の会社が出来て居ります、其会社の総支配人として暹羅人側の株主から希望されたチャンタボンと云ふ処は、治外法権を与ふる条約に依て規定された区域以外でありますから、概旭乗が其処へ行つても永住することが出来ぬ、併し会社の事

業を監督する為めには其処へ永住しなければならぬ、そこで已むを得ませぬから、概旭乗は遂に暹羅の帰化法に依て帰化致しました、そこで永住して其事業を監督して居ると云ふ有様である、概旭乗一人が我帝国の爲めにどれだけの値打がある者と云ふことは言ひませぬけれども、少なくとも今日帝国が海外へ発展する上から申しますと、斯う云ふ人間が多々益々多いことを希望しなければならぬ、斯う云ふ真面目な人が人の余り好ま



概旭乗が佐賀県三根町の西念寺に請来したタイ仏像  
(出所：『藤吉藤海壽海記念仏教学・浄土学論集』1992年)

ない国へ行つて永住して、其国の事情を真面目に調べて、其国と日本とを結付ける連鎖となる人間と云ふ者は、多々益々多いことを希望しなければならぬ、然るに条約が今日の事情に適して居りませぬが為めに、斯う云ふ——形容して申せば日本の国宝と数へねばならぬやうな人間が、日本の国籍から脱して行かなければならぬ、是等の事は外務大臣は御存じないかも知りませぬが、此一例に依て見ても、さう云ふ現今の有様は速に改良しなければならぬ必要に迫られて居ることが分ると思ふ、外務大臣はどう云ふ御考を御持になつて居りますか

○國務大臣（法学博士子爵本野一郎君）先頃も申上げました通り、此暹羅との条約のことは、外務省の方で折角調査中であり、まず、そこで一つ御閑の時に貴方から緩つくり暹羅の事情を承りたいと思ひます、殊に貴方は暹羅のことは能く御承知であり

ますから、外務省の方でも十分調べて居りますが、尚ほ御心付の事も御坐いますから、是非御越して請ひたいと思ひます、何時か緩つくり御話を願ひたい  
○法学博士政尾藤吉君 もう一つ御尋したい、此暹羅と日本と条約関係が始まりまして、公使館が暹羅に設置されましたのが明治三十年であります、第一回の帝国公使として赴任した人は今故人になつて居る稲垣満次郎と云ふ、此人は其当時は外務省へ横槍に飛入した人として、所謂外務省の方から甚しく嫌はれた人、排斥された人であり、又此処に居られます藤田政府委員にしても私にしても、偶には此人と争ふたこともあり、但し、此人が暹羅に於ける間にした仕事を考へて見ると、中々成績が挙つて居る、川崎造船所又三井物産会社など、暹羅で確乎たる根拠を得て大きな商売をして居るのも、稲垣公使の斡旋の結果であると云ふことを

私は断言致して憚らぬのであります、然るに稲垣公使以後暹羅に赴任しました所の公使は、皆な外務省子飼の人であつて、二回目に公使となつて行つた人「松方正作」も五箇月暹羅で公使をして居つて、それで逃げて帰つてしまひました、其人が帰りますときに私も出て送りましたが、晩餐会で暹羅の大官に向つて、一寸日本へ歸つて参りますが、何ぞ御用は御坐いますか、何ぞも求めて歸つて宜い物があれば、私に御遠慮なしに仰付けられるやうにと云ふ挨拶があつたけれども、實際暹羅を逃出して歸つて来るので、暹羅へある、たつた五箇月で歸つて来るから申訳がない、それで態々拵へ事を挨拶して居つた、私はそれを傍で聴て、おかしい事と思ふて心中で笑つて居りました、それから其次に第三回目に公使として暹羅に赴任された人「吉田作次」は……総て名は申

しませぬ、其人は四年程暹羅に居りました、居りましたが日本公使は公使館に居るのかどうか、殆どそれすら人も知らぬ位である、公使館で投網を編んだり、箱を拵へたり、筆筒を拵へたり、其人は網すが上手であります、さう云ふことをして四年程費重なる日月を費してしまつて、それから第四回目の公使「西・源四郎」に付ては斯う云ふ訴を聴いて居る、其実際は自分で見たのでありませぬが、暹羅に居る我帝国の臣民即ち吾々の同胞から聴いたが、それは其人は公使館から夕方になると毎日自動車で運動に出られるが、併し町に出て伝染病にでも取付かれたら危険だと云ふので、公使館の門から出ることは出るが、郊外に出て決して町には行かない、外務省へ用があつ

て行く時でも、町は通らないで態々遠道をして郊外から外務省に出掛けて行く、斯う云ふことを聴いて居る、是は私自分で知つて居る訳でないが、兎に角五箇月で逃出して来るやうな人や、四年も五年も居つても、其間毎日毎日投網をすいたり、抽斗「ひきだし」を拵へたり、筆筒を拵へたりして、公使館に居るのやら居らぬのやら全然存在を認められて居らぬと云ふやうな公使、或は町を通ることを避けて態々郊外から外務省に行く、大廻りをして出掛けて行く、と云ふやうな人を無理やりやらぬでも、外に外務省の隅以外から人材を登庸して、稲垣満次郎君のやうに閣外から人材を登庸すれば、幾らでも立派な人が



あると思ひます、此点に付て外務大臣の御意見を伺ひます

○國務大臣（法学博士子爵本野一郎君）外務省以外から公使を採る採らぬに付ての私の意見であります、人材養成の要は昔から感じて居ることでありまして、成るだけ多くの人材を外務省に集めたいと云ふ希望は有つて居ります、唯々一番困難な事は、人を物色すると何時でも困難がありまして甚だ困る、そこで実は就職以来人物養成と云ふことは中々急に行くものでない、急に行かないが、年を掛けても是非やらなければならぬと云ふ考で常に案を立て（ママ）居りますが、人材がありましたら、大使にでも公使にでも採ることは少しも躊躇しない考であります、必ずしも外交官は外務省で育つた者でなければ務らないと云ふ狭い考でない、併し残念なるかな、中々六ヶ敷い、さう人間が無い、あなたは天下に幾らでもあるだらうと云ふが、

さう人間が無い、それは私今日に始らないことで、私が外務省に入つて以来其議論は屢々しました、前任大臣に向つてやかましくさう云ふことを主張して、何時でも此問題で誰と云ふと、あれは是れ々々と云ふて物色すると、詰まり外務省に居る人間が役に立つと云ふことになつて、多くの場合はさうなのであります

○法学博士政尾藤吉君 それは外務省の自分免許であります、唯々一例を以て見ても分る、外務省閣（ママ）から飛入りして外務省の人以外外交官試験出身以外の人に、お前私の書記官として附いて来いと云ふと勿付「はねつ」けられて仕様がなから、翻譯官「篠野乙次郎」を一等通訳にして連れて行かなければならぬと云ふ困難に遭遇した稲垣君は成績を挙げて居る、外務省子爵の人間が五箇月で逃出して外に……

○國務大臣（法学博士子爵本野一郎君）私は天下の人材を外務省に集めることは異存はな

「一郎君」其人「松方正作」は外にも行きませぬ

○法学博士政尾藤吉君 行かないか知れませぬが……

○國務大臣（法学博士子爵本野一郎君）御説の趣は深く感じて居ります、又飛入りにも宜いのも悪いのもあります、外務省も色々経験して居りますから、飛入りして稲垣君は天下の英雄で、さう云ふ英雄は世の中に一口口して居らない、所が英雄と思つて外務省で使つて見て、甚だ外務省は後悔した事があります、それは人は言ひませぬが、随分天下の英雄「大石正巳」などを採つたことがあるが、英雄必しも好外交家でない

○法学博士政尾藤吉君 外務省子爵の人、必しも好外交家に非ずであります

○國務大臣（法学博士子爵本野一郎君）私は天下の人材を外務省に集めることは異存はな

い、貴方が候補者を持つて御出でになれば、必ず銓衡して採用します（第三九議院（一）（大正六年）帝國議會衆議院委員會議録第12巻）臨川書店刊、1982年、136・137頁。

出しに使われた概旭乗

政尾は、稲垣満次郎初代公使を除き、2代、3代、4代目の駐タイ公使を殆ど仕事らしい仕事はしなかつたと痛烈に批判している。公使名は伏せられてゐるが、パンコクの日本大使館のHPを見れば、一目瞭然である。稲垣公使離任以降、日タイ関係が大きく停滞・後退したことは事実である。それには、公使個人の資質や積極性の欠如がある程度関係していることは間違

いあるまい。しかし、当時の日タイ関係は大枠として、日本政府が、シヤムは英仏の勢力圏であるとして、積極的な外交を手控えていたこと、一方でシヤム政府の指導部を成す、チュラーロンコーン王の王子世代（6世王世代）は総て欧州留学組であり、父王の世代の指導者に比して欧州志向が強くその分日本への関心は弱かつたことも指摘して置かねばならない。

実は、政尾藤吉は第5代目の駐タイ公使に、1920年12月20日に原敬内閣によつて任じられた。原敬は、自らが大隈重信外相を嫌つて、外務次官を辞した、その直後に稲垣がシヤム公使に任じられたことを、「稲垣の如き法螺を吹きて世に阿り官に諛（へつら）ふものにして然かも外交に無経験なる人を採用

せり」とその日記で批判したことは、本誌2013年6月号で紹介した。しかし、原敬は外務官僚上がりではあるが、稲垣を外交無経験者と批判できるほどの経歴もなかつたことは、本誌2014年8月で言及した。兎に角、原敬は自らの稲垣任命批判の前言に反して、外交無経験者の政尾藤吉をシヤム公使に任じたのである。

こうして見ると、概旭乗は、政尾の親官運動の出しに使われた感が否めない。また、政尾は、自らシヤムに棉花栽培農場を開くことも企図していた。そのためには、邦人の居住地制限のある、1898年日暹通商航海条約はビジネス上不便であった。政尾の棉花計画の全貌を描くだけの誌面はないので、台湾日日新報の次の記事のみを引用しておこう。

「有望なる暹国棉作業（上）、法学博士 政尾藤吉述、▲棉花の発見と研究 前後十七年間我輩

は暹羅國に居つて、彼地をば第二の故郷と思つて居るが、暹羅國したのは我輩の任務が漸く完成を告げたためである。在暹中先年偶然にも同國で綿の出来ることを知つたが、それは斯う云ふ次第である。同國の東海岸なるスライジャに在る慈善病院の院長は日本人であるが、同人は其処で野生の棉樹を発見した。此時は恰度日露戦役後であつたが其頃我輩も此棉花の問題に就て研究して見ると、之は我邦の國家經濟上重大なる問題たることが解つた。我邦の紡績工場は綿数は当時百三十万程で、外國棉花の輸入が年々一億圓以上に達し而も其綿数が増加する一方で、随つて棉花の輸入額も逐年益々増進することを聞いた故である。又現今棉花を輸入するのには暹米利加とか印度とか云ふ紡績國で、我邦と競争の位置に立つて居る國から購入するのであるが、それでは如何（どう）も安心が出来ない。万一此等の

國が紡績國としての競争上、若し何か意地悪い事をした場合には、我邦多數の紡績工場は原料欠乏の爲め休業しなければならぬと云ふ不幸を見るべく、右は吾に不安心なるのみならず、元來一億圓とか二億圓とか云ふ大金を棉花料として外國に支払ふのは國家經濟上甚だ面白からぬ現象である。故に暹羅で棉作が出来たならば我邦の經濟上余程好都合であらうと思ふた。

▲棉花は相互の利益 暹國の面積は我邦の二倍であるが、人口は我邦の十分の一に過ぎざれば、棉作の余地は幾許もある。而も暹羅人は非常な怠惰者で、必要巴むを得ないだけしか働かず、或場合には全然働かぬ事もある。畢竟彼等は安閑として芭蕉樹の下に寝転んで居ると、鳥類が熟したバナナを落して呉れるから、寝転んだ俤それを食ふと云ふ訳で、彼等は全く自然に打勝つて勤勞する念慮のない民族である。故に同國人を棉花の



栽培に従事せしむることは中々望み難く、矢張り日本人が行つて着手し経営しなければ無効（だめ）である。又日本人が行つて棉花を栽培し、之を日本人が購入する事とすれば、日本人はそれ丈暹羅に於て発展し得る訳で、換言すれば、貿易上から考へて見ても、日本人が暹羅に於て棉花栽培に従事することは非常な利益である。其上又暹羅の様な地に投資して置けば危険な事は決して無い。若し何か危険な事が起つたならば、其筋は日頃巨大な資金を投じて備へて置く所の我海軍や陸軍が働く秋である。其時分には日本が投下して居る資本が幾十倍になつて償還されるかも知れない。斯る場合には面白い事が出来るものだ。兎に角暹羅で棉作業の興起

することは、我日本の為にも得策であるし、又暹羅国自身の方から考へても、態々日本人が渡暹して資本を投じ、土地を開き、棉花栽培に従事することならば、彼地でも莫大な利潤となるに違ひない。何故ならば暹羅人中でも職業を求める者は、日本人の配下に属（つ）いて仕事が出来からである。それ故彼のアドミラル・リシエリユーが暹羅の為に尽し、又自国の為に尽した様な風の事をすれば、我輩も日暹両国に対し大に酬い得べしと思ひ、其後暹羅の皇帝に此事を奏上したるに皇帝もそれは暹羅の利益なりとて同意せられ、特に予に一万ライの地面を賜つた。暹羅の一万ライは丁度我邦の一千五百町歩乃至二千町歩位のものである（以下、筆者略す）（台湾日日新報 1914年9月26日号）。

概旭乗に関する情報の大部分は、藤吉慈海によって発信されている。藤吉慈海（1915-1993）は、佐賀県の西念寺出身で最後は大僧正まで昇進した浄土宗の僧侶である。彼は日本の浄土教や禅について多数の著作を有するだけではなく、セylonで具足戒を受け比丘出家をしたこともあり上座部仏教についての著作も少なくない。彼は京大文学部卒業、同大学院に在学後、長らく京都大学人文科学研究所助手として研究に従事し、1986年3月に退職するまで20年間を花園大学教授として勤務した。

藤吉が概旭乗に強い関心をもった理由は、概旭乗は彼にとつて法伯父であるからである。即ち、藤吉の父藤吉辨量（1872年5月生）と概旭乗（1871年2月生）は、ともに西念寺住職、概辨旭の弟子であり、本来概旭乗が、西念寺を継ぐ筈であつたが、シャムに行ったま

383

しくは同年11月28日「タイ国人に帰化し、その生涯をタイやカンボジャですごした法伯父概旭乗上人の事を知ることができた（同上論文、16頁）。また、概旭乗は明治三十一年一月二日、浄土宗の海外留学生としてシャム国に渡り、テラバーダの比丘となり七年間その研究と修行に「はげみ」（藤吉慈海「概旭乗の生涯」、『仏教論叢』第12号、1968年3月、174頁）とも書いている。

浄土教報によれば、概旭乗は、1898年1月2日に私費留学生として渡タイし、在タイ1年半にして1899年7月12日付

で浄土宗の正規の派遣留学生に任じられた。浄土宗の海外留学生は、同宗では大変なエリートで、1902年時においても、シャムの概旭乗の外にドイツの萩原雲来と渡邊海旭、米国の萩原得定の計4名のみしか存在していない。概以外の3名は浄土宗の著名の人物である。概旭乗に与えられたテーマは「暹羅仏教研究」であつた。

7年間在タイして結局研究成果らしきもの一つ公表していない。当時、タイには大学もなければ、真正の仏教学専門家も皆無に近く、なみの精神力で立ち向かうには障壁が高すぎたことは事実であるが、また、藤吉慈海は、概旭乗は上座部の比丘に出家したと記しているが、概旭乗が具足戒を受けた証拠はない。

1905年3月21日長崎に帰着した概旭乗は、翌1906年2月16日、シャム開教を旗印に長崎を發つた。ランシット地区に農地を借りて米作農場を開き、日本から浄土宗信徒の移民を迎える基地を作るという計画であつた。彼が学んだ学校（当時は浄土宗大学に昇格）の師や同学は、心儀しくも150円以上を募金して概旭乗に送った。しかし、その農場も1908年6月には閉鎖した。（一）土地の選定を謬まり洪水に際して氾濫を



免かるる能はず早魃に當りて貯水するに由なく稻の發育不良収支相ひ償はず（二）近傍の住民に不良の徒多く財産の保安期す可からざるに依る（外務省記録318121261「暹羅国移民関係雑件、自明治四十二年」が理由である。

5年余宗門から在タイ奨学金を支給されたにも拘わらず、研究で宗門の期待に答えることができず、シャム開教の方も早々に抛棄した概旭乗は、日本に帰るにも帰れなかつたに違いない。藤吉慈海は、1965年12月にバンコクで概旭乗の遺族に面会している。遺族は、オオムネ「ミミ」をそのままタイの姓として使い、ウェブ検索でも、数名この姓のタイ人が存在する。その一人、概旭乗の四男アートの氏（1930年8月1日-2005年6月1日）はカトリック墓地に埋葬されている。

384

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (47)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

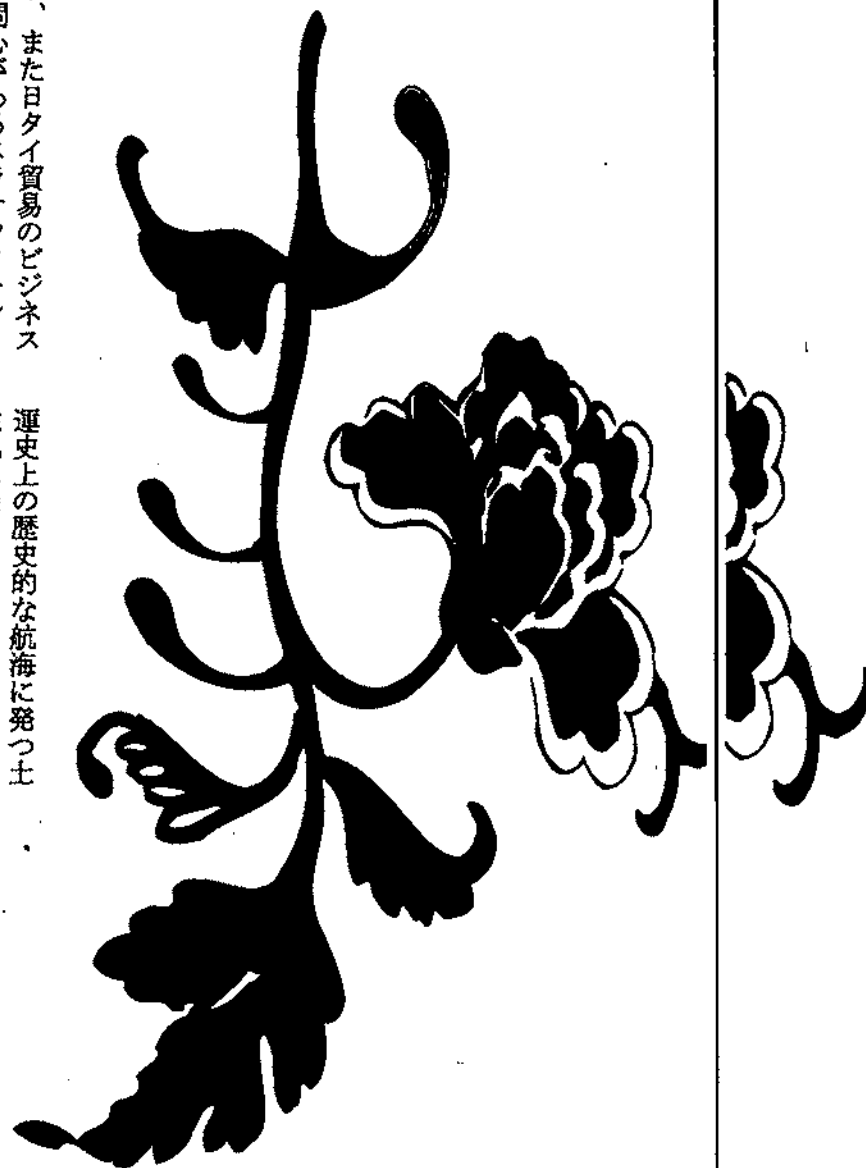
## 1年ぶりの渡タイ

岩本千綱の話から派生して、1年近く1880-1890年代の在タイ日本人商人や僧侶の話などを書いてきたが、ここで岩本千綱の話に戻りたい。本誌2014年7-9月号に記したように、1896年に入ると、日本政府からタイへの修好通商航海条約締結の提案、チュラーロンコーン王の訪日希望、衆議院におけるバンコクに日本領事館設置の建議案の可決など、日タイ関係は急速に動き始めた。1896年2月29日には衆議院で「我帝國領事館を暹羅國に設置する建議案（山下千代雄君外四名提出）」が賛成多数で議決された。この建議案は、岩本の衆議院議員への働きかけが奏功したものである。衆議院傍聴席で決議案成立を見届けた岩本千綱は、前年95年3月に帰国以来、1年ぶりにタイに旅立った。こ

の時使用した一次旅券は、95年の6月に取得していたものであった。1895年2月から96年2月までの岩本の行動を復習しておこう。95年2月に、バンコクで岩本が石橋萬三郎、大谷津直磨らと共に創設した暹羅殖民会社は、バンコク・ドック会社との間に日本人熟練工を供給する契約を結び前渡金を受領した。これら熟練工を含む日本人移民の大募集、日本商品買付などを目的に同年2月27日に、岩本と大谷津はバンコクを出発した。この時、岩本はスラサックモントリ農商務大臣が前外務大臣から預かった日本刀の装飾を依頼され日本に携行した。なお、岩本らはバンコク・ドックとの契約を履行せず、またスラサックから預かった日本刀も質に入れたうえ流してしまっただけ。そのため、97年5月に稲垣満次郎が初代日

本公使として公使館を開いてのち、稲垣公使を通じて前渡金と日本刀の返還請求を受けた。95年3月に帰国した当初、岩本は95年7月には応募した移民と共にタイに戻る予定であり、旅券も取得した。ところが、広島市の海外渡航株式会社と提携して熊本県で募集した移民は、思うようには集まらず、出発を日延べしているうちに岩本は腸チフスを患って床に伏した。応募者中、あくまでもタイ行きに固執する20名に対し、海外渡航株式会社は、移民保護規則に従って宮崎寅蔵（滔天）を代理人として雇用し同行させた。フランス側からの日本外務省への働きかけで、在タイ日本人は1895年9月14日より在タイフランス領事の保護下に置かれた。当時のタイ人の反仏感情の強さを知る在タイ邦人は、これに反対した。この解決のためには、日本領事館をバンコクに

設立するしかない。在日中の岩本は、バンコクの石橋萬三郎からの要請もあって、日本領事館をバンコクに設立する運動を起こし、衆議院での領事館設立の建議案可決を成功させた。さて、96年3月の岩本の渡タイを朝日新聞は次のように報じている。  
「岩本千綱氏出発 暹羅國に帝國領事館を設置するの建議案は已に議會を通過したるを以て同國より一時帰朝中なりし岩本千綱氏は明日京地出發大阪に向ひ神戸に於て仏國郵船メーブル号に乗組み香港にて他船に乗換へ直に盤谷府へ向ふ由但し氏は通商條約の程度其他の取調をなし場合に依ては暹羅國農商務大臣「スラサック」を同行し再び上京する都合なり」と（朝日新聞1896年3月4日）。  
1年ぶりの岩本の渡タイの目的は、日本側がタイに打診した通商航海条約協議の下調べであ



り、また日タイ貿易のビジネスに関心があるスラサックモントリを伴って帰国する可能性もあると言われている。この情報は、岩本自身が朝日新聞の取材に答えたものであるが、岩本が日本の外務省から取調の任務を託されたのか否かについては資料がない。

## 記念すべき 日本船欧州航路初航海に搭乗

実際に岩本が横浜もしくは神戸で乗り込んだ船は、上記報道とは異なり、日本郵船会社の土佐丸であった。岩本は、日本海

運史上の歴史的な航海に搭乗した土佐丸に乗ったのである。1896年3月15日正午に横浜を解纜し、3月21日に神戸を発った土佐丸の欧州行きは、日本の海運会社による欧州定期航路の初航海であった。

土佐丸は、貨物船であり、それに少数の客室が付されている。横浜港での出発は次のように報じられている。  
「土佐丸の出発 日本郵船会社の汽船土佐丸は予期の如く愈々一昨十五日正午を以て横浜を出発し欧州初航海の途に上りたり当日横浜の光景は平常よりも賑はしく波止場の付近は早朝

より人車の雑踏云ふばかりなく横浜貿易商百五六十名は午前十時より棧橋に集合して其出発を待ち又貿易商有志者よりは五葉松の大鉢植一基を賜（おく）り棧橋の上は見送人と乗組人と入交（かは）り互に手を握て無事の航海を祈り将来の盛運を祝し我日章の国旗を大西洋より吹来る海風に翻へして倫敦に乘込む時は如何に壮快ならんなど語合ふうち早や出発の時刻となり音響起り烟花（はなび）場り、帝國萬歳土佐丸萬歳の声は山海に響きぬ此に於て土佐丸は徐（し

づか）に進行を始め暫時は萬歳の声、手巾を振るの影と相応せしが頃（やが）て船は白波を蹴り黒煙を曳き煙波漂渺の裏に没せり」（朝日新聞1896年3月17日）。

「土佐丸搭乗荷物 一昨十五日横浜解纜欧州初航海の途に上りたる土佐丸搭乗荷物に付近藤社長の説を聞くに最初会社が今回の初航海に付ての予期は搭乗貨物などは逆も充分に依頼するものあらざるべく先づ本船噸數三分の一を得れば満足なりと思惟せしに豈圖んや搭乗依頼貨物は忽（たちま）ちに満船し遂には貨物主に折角の依頼を謝絶するの已むを得ざるに至れり是実に会社員等の予期に反せし好結果として而かも其貨物三分の二は外人の依頼に係れり斯く内外の委信を以て此航を継続せば将来益々多量なるべし云々と斯る情勢なれば今回初航海の好結果は独り会社の幸福のみならず國家の爲め誠に慶賀すべきなり」（朝日新聞1896年3月17日）。  
土佐丸は、3月29日香港着、31日香港発、4月12日コロンボ着、5月22日ロンドン着、28日

710-77  
2015 8A



同地を發つて、終点のアント  
ワープ（ベルギー）に向かった。  
6月21日には、アントワープを  
發ち帰途に就いた。

日本郵船会社の欧州航路は当  
初、月一回で始まり、4月18日  
には、「日本郵船会社の欧州線  
第二回航行汽船和泉丸は第一回  
の土佐丸同様貨物を満載し昨十  
八日午後零時三十分欧州へ向け  
勇ましく横浜を解纜したり」（朝  
日新聞1896年4月19日）。

その後の土佐丸と和泉丸の動  
静は次のように報じられてい  
る。  
「欧州に向て初航海をなしたる  
郵船会社の土佐丸は去る廿一日  
「6月21日」白耳義國アントウ  
エルブ「アントワープ」港を解  
纜し帰航の途に就きたるが途中  
ポートセツト「ポートサイド」  
新嘉坡に寄港して石炭を積込む  
筈なり尤も貨物は既に満載し居  
る由一昨日同社へ電報あり又第  
二回航海の和泉丸は廿二日の朝  
倫敦へ安着したる旨是亦同社へ  
電報ありしと」（朝日新聞18  
96年6月24日）。

さて、3月29日に土佐丸で香  
港に着いた岩本は、朝日新聞に

早速、土佐丸搭乗記（下記）を  
送った。

「暹羅紀行 岩本千綱氏の第四  
回暹羅紀行は昨日日本社に達せり  
然るに余白なきを以て其中の一  
部を左に摘録す

廿九日「3月29日」午後第六  
時香港着旅店東洋館に投宿す  
予ては航海中のことを詳細に筆  
記する積なりしも竹内事務長  
「日本郵船会社社員？」の語に  
よれば其出来事は同氏より悉數  
くわしく、郵船会社に報知し  
会社は之を各新聞紙に掲載する  
とのことなれば重複を恐れ船中  
並に香港の様子二三を左に略記  
するに止むべし

元來土佐丸は五千八百余噸の  
大船なれ共其構造荷物積載の爲  
めにしあれば之を他の客船に比  
すれば無理なる注文と考ふ左れ  
ば船員諸子も余等に対し万事不  
行屈きにて御氣の毒です云々と  
丁寧なる申訳ありし位なりしが  
何ぞ計らん初航には似ざる行屈  
方にして毫も不都合不便利を感  
ぜず船客悉く満足を表し居たり  
船客は上等五名中等八名下等十  
名にして中に就き中等洋客一名  
下等印度人二名なりし上中等は

素より洋食なれ共下等客の洋和  
折衷食の如きに至ては到底外國  
船の夢にも見る能はざる所なり  
き

余は海に往復すること前後七  
回（ママ）一昨年香港より澳中  
「八三郎」氏所有の汽船東洋丸  
にて帰朝せしを除けば總て仏の  
エムエム英のビーオー両会社船  
に乗り（香港港又は新嘉坡迄）  
今土佐丸を以て以上に較するに  
勝るとも劣ることなし去此の  
上の希望を述べれば香港新嘉坡間  
に於る中下兩等の運賃に付一顧  
を煩はし度と思ふ蓋し仏のエム  
エム船の三等に乗せし人にして  
余が此希望を聞けば思ひ半に過  
るならん好し多少の不完全なる  
にもせよ海外万里に航するもの  
光輝ある旭日旗の下に立ち日夕  
同胞と歓談するの愉快は他の不  
完全を補ふに余りあるべし況ん

や懇切完全なる郵船会社の汽船  
に於てをや今後海外に渡航する  
日本人は斷じて之に乗ずべし會  
社亦成し得るだけ賃銀を減じ取  
扱ひを懇切にせられんこと余は  
希望に堪へざるなり

香港黒死病沙汰は余が日本に  
於て耳にする所なれば当港に着  
するや知人に就て之を質し殊に  
医師松尾氏に聞く所次の如し  
当年の黒死病は一昨年と異にし  
て大概類似なり夫れも下等支那  
労働者中一日に三四人宛（つづ）  
罹りしものにして現に避病院に  
ある患者中一人の黒奴を除けば  
他は悉く支那人なり彼の八ヶ間  
敷仏エムエム会社汽船の如きも  
当港にて船客の昇降を禁ぜざる  
を見て一斑を知るに足る  
云々」（朝日新聞1896年4  
月11日）。

岩本は、香港まで土佐丸の中  
等か下等に乗ってきたが、「香  
港新嘉坡間に於る中下兩等の運

賃に付一顧を煩はし度と思ふ」と  
書いてあることから見て、香  
港—新嘉坡間の船賃が他社のも  
のとは比して高すぎたのも一因  
で、香港で別船に乗り換えバン  
コクに向かったようである。彼  
は96年4月上旬には、バンコク  
に到着したはずである。

### 岩本の変わらぬ ビジネスへの関心

岩本がバンコクを離れていた  
1年余の間に、彼が1894年  
末に連れてきた第1次移民32名  
の半数近くはプカヌン金鉱山  
（フランス人経営）で1895  
年半ばに惨死、1895年10月  
に宮崎滔天が海外渡航株式会社  
の代理人として連れてきた20名  
の第2次移民にも、96年4月に  
は、コーラート鉄道建設現場で  
工夫として働いていた者のうち  
2名がマラリアで死亡するな  
ど、死者が出始めていた。岩本  
は移民の死亡について弁解する  
次の手紙を日本に送った。

「暹羅近信 暹羅に在る岩本千  
綱氏より此程或人に贈りし書信  
の要に曰く余の東京滞在中曾て

某新聞は暹羅に在る我出稼人の  
ことに就き甚だ不利益なる通信  
を掲げたることありしが当地に  
來りて實地見聞する所に依れば  
此通信は頗る事実と相違せり成  
程一時我出稼人中に死亡者のあ  
りたるは相違なきことなれども  
要するに土地に不慣れなると及び  
衛生法の充分行届かざるとに帰  
するものにて其後然る事実もな  
きが如し余は此儀に就き當國の  
農商務大臣へ上申し置きたるこ  
ともあれば不日尚現地に就きて  
充分の取調を遂ぐべし已にコ  
ラット鉄道に雇はれ居る人夫の  
如きは一日の労働賃銀二末（バ  
ツ）（我一円二十銭）は容易に  
収入あり少しく骨を折れば一円  
八十銭までを得らるべきは實地  
取調べたる所なり労働者の賃銀  
にして一日一円八十銭を得るは  
世間余り類のなきほどなるが當  
地は農業も亦大に見込あり當國  
の農商務大臣にも本邦人の爲め  
に充分の補助を仰ぐことに依頼

し置きたれば何れ帰朝の際充分  
の調査を携ふべし云々と」（東  
京朝日1896年5月31日）。

岩本が書信で言わんとしてい  
ることは次のようなことである  
う。第1次移民に多数の死者を  
出したと某新聞で批判され大變  
迷惑したが、バンコクで見聞し  
た結果、極端に誇張されたもの  
であることが判明した。しかし、  
プカヌンで死者が出たことも事  
実なので、自ら現地調査をする  
つもりである。一方、コーラー  
ト線の建設工夫として働いてい  
る、第1次、第2次移民は、破  
格の高給を得ていることは實地  
に見た、と。

岩本は、この書信執筆時点で  
も、第2次移民のコーラート線  
建設工夫2名がマラリアで死亡  
したことは知っていたに違いな  
いが、そのことには全く言及し  
ていない。また、6月1日には

離タイしているの、プカヌン  
に調査に行く余裕があったとは  
思われない。

同じく「暹羅近信」と題した  
下記の記事が、東京朝日189  
6年6月25日号に掲載された。  
この記事中の「余」が誰である  
のかは明示されていないが、岩  
本が当時、朝日新聞と常時連絡  
を取っていたという事実、及び  
記事中の「余の當國にあらざる  
は纔に一年許りの間なりしも」と  
いう表現から見て、余とは岩  
本千綱と考えて間違いない。

「暹羅近信 國王の爪哇漫遊  
暹羅國王は去五月九日皇族大  
臣其他屋外人等數十人を随て新  
嘉坡を經、和蘭領爪哇國に漫遊  
ありたり 此行に対しては種々  
なる説を爲す者あり或者は曰く  
國王の漫遊は単に病氣加養の爲  
めなり先年も曾て新嘉坡まで旅  
行せられたることあり此度も亦

同様にて他に深き意味を有するにあらずるべし云々 或者は曰く国王の此行は親しく新嘉坡爪哇等の文化を視察せん為にして雇外人を伴ひたるは其顧問に供するなり 又或者は国王の此行外交上一種の意味あり表面上何事を云ふとも其裏面に埋伏する所のもの頗る重大の事件なり云々 当国の新聞界にて此事に關して記載する所あれども要するに単に加賛の爲のみにあらずることは明白にして今より一ヶ月半にして還幸せらるべし。

王弟王子歐洲漫遊 王弟陸軍大將クロマブラ「パーメランシー」親王殿下は兩名の王子と共に歐洲漫遊の途に上らる 同行の王子等は英國に留學の筈なり クロマブラ大將殿下は前年「1890年」曾て日本に遊ばれたることあり 暹羅皇族中屈指の人物なるのみならず親王の漫遊は主に仏國を目的とせらるることとなれば国王の爪哇行と云ひ旁々親王の此行も外交上に關係を有するが如し。

各國公使と英語 余の當國にあらざるは纔に一年計りの間なりしも外交上の形勢は大に前年と

異なりて兎に角強持てに持て居るは仏國公使にして獨國公使も一方の重鎮となり居るものの如く英國公使は黙々として齒切れせざるが如き觀あり 其他は論ずるに足らずとは當國某氏の批評なるが中(あた)らずと雖も遠からざるべし左れば此処の夜會彼處の宴席到る所概ね仏國外交官を見ざるはなく仏國風近頃大分に吹廻はり居れり仏國の勢力此の如くなるに前記王子の留學を英國に爲したるは聊か世人の疑なき能はざる所なれども暹羅國の上流社會は英文を読み英語を話すを一種の仕事となし居たるゆゑ英語に通ぜざれば交際社會に顔出しの爲し難き有様なれば内閣大臣中に在りても英語を解せざるもの纔に一兩名に過ぎず此の如くなれば當國人の英國に留學するは蓋し一つの慣例にして王子の英國行も亦慣例に由りたるなり。

仏人の勢力 仏國人の此地に於て跋扈するは今に始めぬことにて昔日彼の勢力の強大なりしは當國人が他國の人を呼ぶに日本人を「ジッポン」支那人を「チエツク」歐米人を總稱して「フ

ラン」といふにて知るに足らんか。

日暹條約 日暹條約のことに就ては當國の内閣に於ても種々協議を盡したる結果文部大臣パスカラウラングス侯爵「パーサコーラウオン」を正使となし副使は多分陸軍次官中將デチヨー伯爵なるべく此正副使は國王の爪哇より還幸するを待て日本に特派せらるることに内定し居れる趣なり 兩氏は去る二十一年曾て日本に來朝したることあり侯爵は當國外交家の一人に數へられ随分如才なき交際上手の人物、伯爵は曾て英國の陸軍學校を卒業し且つ彼の父は當國の大宰相となり頗る權勢ありし人にして今日にてもカラホン大宰相と云へば誰知らぬものなし 日暹條約の事に就きては今日に於て公言すべき限りにあらずるも暹羅國よりして使臣を出すを見

て考ふれば頗る好望ならんか。

輸出入品 昨年度の輸出入調査は政府に於て発表の期に至らざるに依り今之を詳報する能はざれども前年度よりは無論増加の由なり 當國に於ては商業機關未だ備はらざるを以て商業上の調査を遂ぐるは頗る至難のことなり 余は僅少なが今回實地に取引を試みて覺る所ありたり日暹間の商業は暹羅より日本に輸出するもの(金額)多くして日本より輸入するは少し 就中米は當國唯一の産物にして其品位亦頗る良し 當時「現在の意」日本に於ける所謂暹羅米なるものは當國に於ては第三等以下に位するものにして此地の一等米なるものは日本の肥後米筑後米等に比して更に遜色なしと信ず 余暹朝の節は試に其見本を携て諸君に示さん チーキも當國特有の産物にして海軍拡張

船艦製作に忙はしき我國杯にては之を直輸入する頗る適當の業と考ふれども此チーキの買入は頗る面倒にて中々素人仕事にては出来ず 現今は涸水の爲め「水流による北タイからバンコクへの運搬が難しく」値段騰貴し居れども十一月より翌年二月頃までの間は常価に復するなるべし(東京朝日1896年6月25日)。

この記事には、岩本の訪タイ情報収集の成果が盛られてい

は、本誌2014年9月号で紹介した。

また、この記事からは岩本がビジネスに依然として強い関心も持ち続けていることも窺うことができる。

岩本が副社長となつて1895年2月の帰國直前に大谷津や石橋らとバンコクで創立した暹羅殖民会社は、移民事業のみならず、日タイ貿易も事業目的としていた。ところが、暹羅殖民会社の用務で、一時帰國した岩本は、同会社の名でバンコク・ドックから前渡金まで受け取つた日本人熟練工供給契約を誠実に履行せず、またスラサックモンتریの出資金を使つて日本で買い付けてバンコクに送つた日本商品も、仕入値が不自然に高く出資金の半分程度の価値しかないものであつたの

で、暹羅殖民会社の在タイ責任者として苦情の矢面に立つた石橋萬三郎は、95年9月に同会社を解散した。

同会社は潰れてしまつたが、岩本の日タイ貿易事業の関心は継続した。96年3月の渡タイ時にも、日本から商品を持ちえ、「實地に取引を試み」、また帰國に際してはタイ米等の商品見本を持ち帰つた。

岩本がビジネスで、出資者として頼りとしていたのは、スラサックモンتریである。読売新聞1896年5月7日号の記事にも、「暹羅農商務大臣來朝せん」とす 暹羅國の農商務大臣たる陸軍中將ピアスリサク氏は昨年春「1894年12月195年

1月」一旦我國へ來遊を企て香港まで来りしも會(たまた)ま同國皇太子薨去の訃音に接し中途より帰國したるが本年秋迄には我國より同國に渡航し居る岩本千綱氏と共に來遊する筈なりといへり」と、あることからみて、岩本は日タイ貿易に関心があるスラサックモンتریを日本に伴つて帰るつもりであつたようであるが、実現しなかつた。

武人出身でチュローロンコーン王の信賴あつたスラサックは、同時に抜け目ないビジネスマンでもあつた。岩本は依然スラサックを賞賛し続けていたが、スラサックの方は、既に岩本への信を失いかけていたようである。

96年6月1日、岩本千綱は、官崎寅藏(滔天)、益田三郎とともに、タイを離れ帰國の途に就いた。官崎の帰國は、雇い主である海外渡航株式会社から託された、移民の保護監督職務を中途放棄したものであることは既に書いた。

日本人による最初の  
タイ内地経済調査

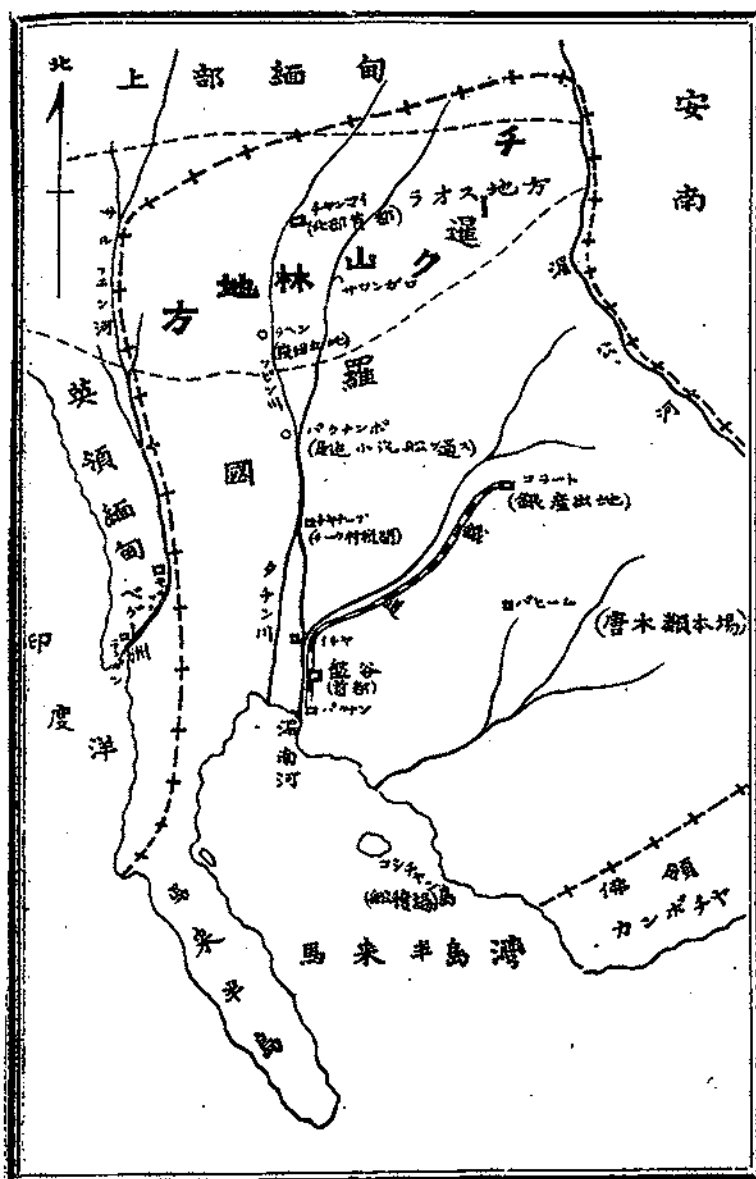
た。バンコクに留まった宮崎には、その後コレラの症状が現れ、生死の間を彷徨つたという。

平山らは、5月8日にバンコクに無事戻つてきたが、宮崎は平山から、内地調査の模様を聞き取りして国民新聞（1896年6月13日、7月12日に8回連載）に「暹羅内地探検」と題して、自分の名前で投稿した（それ故、文中の主語（私）は平山なのに、著者は宮崎という不思議な文章になっている）。

それによれば、平山、益田は、4月15日正午バンコクを定期船で出発し、海に出た後、バーンパコン河を遡り、16日午前2時にはペートリウ (Pattani) 即ちチャチョンサオのツンチャーイン (多分現在のバーンポー郡ター・ブラップ) の町に到着した。この地で水田、果樹園などとともに、プレーヤー・サムットブラーヌラック (サムットブラカーン知事) 所有の大規模な精米所も

見学。この精米所は、1877年頃創設された、バンコク以外では最初に蒸気機関を用いた精米所である。平山は、「茲に暹羅国第一等金満家の評あるピヤソムード「フラー・サムット」氏の精米場あり。規模広壮にして欧人、馬來人、暹人等三百人を使役す。而して蒸気機関の燃料は悉く糊穀を以て之に充つ」と述べている。18日には、パーン・コン河本流から別れて、現在のパーンクラ郡で支流のクローン・ターラート (Klong Traat) 川に入った。この川の流域の住民の殆どは、18世紀末から19世紀前半に、ラオスのウイエンチャン辺から強制移住させられたラーオ人である。川を2マイルほど遡った所に「西岸に一戸東岸に二戸、欧人の家屋あり。彼等は此地に有りて暹人の盜賊より水牛を買集め盤谷近傍なるパーン・カビーの市場に送りて売却するものにして、所謂賊売

者なり。邇人甚だ其所業を惡む。此近傍及び上流数十里の間水牛を産すること甚だし。翌19日には、ムアン・スナムのバツクロンモアン（多分現在のパノムサーラカム郡のバーク・クロムムアン Phnom Krom）の町に（到着した。ここで珍木仲買商（4軒あり）を訪ねて、22日まで休憩。奥地で測量実習中の陸軍士官学校学生のために食料の買い出しにきていた、同校教官ナム・ラチャーウオングス「モムラーチャウオン」サナムと知り合いになり、23日から25日まで、彼に同行して騎馬にて川の上流に向かった。平山らは、この教官を王族殿下と誤解しているが、モムラーチャウオン（国王の曾孫世代に付されるタイトル）は、タイでは王族の扱いを受けてはいない。とにかく、「殿下」と別れた後、26日に、初めて山林に立ち入ると、「朱檀の一種なるデーンサーオ、デーンチーン、



タイ森林 (大日本山林会報174号)

本を見る。土人時々伐採してムアン・スナームのバックロモアン(ママ、バックロンモアン)に運送して之を売却す。此山林連綿として数十里に亘り、深く入るに従ひ樹愈大に益多しと云ふ。

唐木の名称は、道案内に雇ったタイ人の発音に従ったものであろう。林学士の杉原亀三郎は、この地の唐木について、1897年5月23日に大日本山林会で「シタン、コクタン、タガヤサン、及ロースウッド、パツウーウド、

サバンウッドなどは盤谷を距る百哩内外の地に産しまして皆同じく盤谷に出て居りますが、「北タイから来る」チーク材の外は余り大材はありませぬ漸く直径一尺以下の丸太材に止まります山の方に往けば、立木には尚大なるものはありますけれども販路の十分でない為めに出材せないものと考へます之に反してチークは頗る大材多く用途も又頗る広くあります是必竟其材質の良好なるに外ならぬ訳であります」(杉原亀三郎「暹羅の森林」、『大日本山林会報』第174号、1897年6月15日、5頁)と講演している。杉原は、1897年1月末から3月半ばまで、材木商人としてバンコクに滞在した。本頁の地図は、杉原がこの日の講演のために用意した、タイの森林地図である。このタイ地図の形は、相当いびつではあるが、平山、益田が踏査したバーンパン河の上流地域が唐木類本場であることは判る。

7NVT-7 2015 9A3



た。彼等が訪問した村のうち、その名が20世紀初頭の地図上に見当たるものとしては、バーン・ノンカボン（Ban Nongkaban）、バーン・タカダーン（Ban Takadan）、バーン・ワンズツウ（Ban Wansu）などがある。5月2日にバックロンモアンに戻り、8日に無事バンコクに帰着した。

平山、益田のこの調査は、日本人による、初めてのタイ内地経済調査と言ふことができた。『宮崎滔天の『二十三年の夢』（1902年初版、104頁）は、この調査をもとに事業化が有望であると考え、日本にその準備のために帰国したことを次のように記している。

「南万里『平山周』の益田君と内地探検に赴くや、其主要なる目的は山林事業の調査なりき。南万里が一歩に三本の朱檀ありと云へば、益田君以て三百本ありと為し、二人の報告互に大差ありと雖も、本（もと）無代価の山林なれば、兎に角以て有望の事業なりとなし、共に協力計画する所あるに決し、余は益田君と船を同ふして帰国することとなれり。当時若本『千

綱』君も病癒えて暹羅に來り居りしが、亦余等の行に加はりて帰国することとなり、共に『磯長』海洲君の援助によりて香港までの船券を購ふを得て、三人相携へて帰国の途に上れり。」  
若本が宮崎滔天、益田三郎とともにバンコクを離れたのは、1896年6月1日であった。益田三郎（1863-1932）の経歴は、若本千綱に似ているところがある。葛生能久『東亜先覚志士伝 下巻』（黒龍会出版部、1936年）の益田三郎の項（同書520-521頁）によれば、『文久三年福岡に生る。家は世々黒田家の重臣で、祖先は黒田家二十五騎の一人として知られた功臣である。三郎は早熟の穎才で年少の時から自由民権の政客と往来し、或は松村雄之進等と福島県に開墾事業を起す等、弱冠にしてその活動大人を凌ぐものがあつた。二十一歳にして陸軍士官学校に入り、業成りて歩兵少尉に任じ、才幹優渾「ともがら」を圧したが酒癖の爲めに上官を斬り、遂に軍職を去つて上海の日清貿易研究所幹事となり荒尾精を助

け、次いで明治二十六年暹羅に渡航し、木材事業に従ひつつ画策する所あつたが志を得ずして朝鮮支那の間を放浪し、支那の第一革命には未永節と共に山東で活躍を試みた。しかし彼の革命援助も南北妥協の爲め殆ど徒勞に帰して爾來事多く志と違ひ、久しく雌伏して鳴かず蜚（こ）ばずの状にあつたが、満州事変勃発の後支那方面に於て老來の意氣を発揮すべく東都に入つて同志の間に奔走してゐる裡病魔に冒され、友人未永節の庇護を受けて療養に従つていたが、昭和七年七月四日遂に不帰の客となつた。享年七十。旧友相聚つてこの不遇の老志士の爲め懇るなる葬儀を営んだ。酒好きの若本が依願退職を迫られた理由は、借金など私生活上の問題で職務が疎かになつたことであつたが、陸軍歩兵少尉

正八位益田三郎は上官を斬り付けてという無謀な行爲によつて、1891年6月2日付けで免職となつただけでなく、正八位の位階も剥奪された（国立公文書館、本館12A1018100・任A00251100）。益田は、1893年に來タイし、タイ語を學んでゐた。彼がチャチョンサオのサナムチャイケートでの林業事業の準備のために、帰国したことは次のように報じられてゐる。



業家等に締めて深く同地の事情に通ずる人 氏今回同国の官吏クンクラン氏と結んでスナム「サナムチャイケート」地方に珍木伐出の計画整ふたるを以て要を帯びて去る一日「6月1日」盤谷発帰国の途に就けりと云ふ」（『国民新聞』1896年6月20日号）。

日本の日通協会と日通貿易会社

帰国した若本千綱は、宮崎、益田らとともに、日本における日通協会の組織化、および日通貿易会社設立に努めた。一見事業とは無関係な日通協会の組織化は、その名を使うことができれば信用も高まり、事業資金集めも、容易になるだろうと考えたことだろうか。

1894年8月26日に、バンコクのバーン・サーラーデーン（暹羅）で、6-7名の日本人が会合し、「日通両国間の親和公益を謀り併せて在留日本人の保護団結を主とする目的」で日通協会の発会式を行ったことは既に、泰日日本人会100年史の拙稿等でも述べたが、若本は、

日本国内でも同会を組織しようとした。

朝日新聞1896年7月16日号には、「日通通商貿易に着眼して数回の渡航を試みたる若本千綱氏等は其目的を達せんとて盤谷居留の本邦人を糾合して日通協会といふ社交的団体を設けて時機の至るを待ちつつありしが今や領事館設置の議も決し其時機已に到來したれば従来暹羅国に關係ある宮崎寅蔵「滔天」益田三郎山本安太郎諸氏及び目下在留中の暹羅人ウオム氏等と共に東京にても日通協会の設立し盤谷協会と氣脈を通じて両国間の通商上に利益を与へん計画にて愈々其成立の上は朝野名望家の賛同を請ふ善なり」と報じた。『国民新聞』1896年7月17日号も同内容を報じ、「暹羅に於ては同協会にして成立する曉きは皇族一名並に三大臣其他朝野の名士数名は直に入会するの内の約整ひ居れりと云ふ」と付け加えた。

9月4日には、若本は、愛宕下青松寺で日通協会設立の趣旨説明会を開き、発足までの世話人13名を依頼した。即ち、「一

日通協会と日通貿易会社との表裏一体の關係が判るのは、次の九州日日新聞1896年8月23日号の記事である。同紙は熊本で発行されており、7月22日号にも日通協会に関する記事が掲載されているので、ソースは宮崎滔天と推測される。

同紙8月23日号に曰く、「日通交通事業 近來本邦に於て暹羅のことに注目する者次第に多く隨て種々の計画を為す者あり既に同国の事情に通ぜる人々にして日通協会なる者を設立し両国の國利を計らんとする計画ある由は當て記す所ありしが爾來此議も多くの賛成者を得遠からず總會を開きて公然設立の運に至るならん又別に日通貿易会社な



る者を設立せんとすの計画もあり此議も大に其歩を進め資本金九万円を以て会社設立のこと不日発起者たる河合萬五郎其他の諸氏より願書提出すと云ふ。

即ち、岩本から日通協会の世話人を依頼された河合萬五郎は、日通貿易会社の発起人も兼ねていたのである。多分、他の日通協会世話人も、日通貿易会社に関係があつたものと思われ、彼等の経歴を判る範圍で、「」内に上記してゐるように、殆どが政治家か文筆家であり、資金がありそうなのは河合萬五郎なので彼の名が代表として挙げられたのであらう。河合は東京に於ける牛肉商の始祖の長男に生まれた。

原田道寛編『大正名家録』(1915年、二六社)の力の部の49頁の、河合萬五郎の項には、次のように書かれてゐる。

「氏は先考勇の長男にして幼名縫之助と云ひ明治十八年家督を相続すると同時に襲名して二代目萬五郎となる即ち市内屈指の牛肉商たり同家の開業は慶應二年に係り実に東京市に於ける牛肉商の始祖にして始め京橋区三十間堀に居を卜せしが明治二年現住所に移れり

當時横浜より鮮肉を取寄せ之れを市中に搬送しが未だ西洋文物の輸入せられざる以前のこととして一般の思潮頭真上下與に牛肉を〇「二字消失」にするを恥とし之を忌み嫌ひしを以て其需要頗る乏しく僅に築地ホテルに供給する位に過ぎざりき明治戊辰の役に際し各藩兵の入京するや需要漸く増せしも乱治るや依然として振はず市中よりも市外の売行却つて好況を呈せしを以て氏自から騎馬にて牛肉を売り廻りしと云ふ當時近江国より牛

肉の味噌漬を出せしが初めて滋養に富めりとして漸次に需要を増す偶々明治四年二月某外国大官の来朝して宮中御膳の奉あるや同家は牛肉の御用達を仰付けられ爾來引続き宮内省御用を勤め居れり明治十年傍ら煮売りを始め漸次好評を博し其後時代の推移は肉食を嗜むに至りて業況勃然として振ひ遂に今日の盛運を見るに至れり

氏人となり學業卒直ちに人に許さざるも一片稜々の快骨あり予て同区會議員として貢獻する所頗る大なりと云ふ又慈善事業に尽すを樂しみ家にありては能く使用人を劬「いた」はり一面家業に熱誠にして得意次第に増加し諸官衙会社銀行等の御用日に多きを加ふ殊に築地精養軒の始めて起るや氏の亡父の援助

与つて力あり為に今尚同軒の牛肉は河合家のものをを用い居れりと云ふ  
夫人をフク(元治元年)と呼び貞淑温良の聞えあり一女あり名をひで(明一四生)と云ふ。

日通貿易会社と馬場新八

「岩本氏の暹羅行 疾」とく暹羅に赴くべき予定なりし暹羅「日通」貿易会社の岩本千綱氏は同会社拡張計画等の為め出發延引し居りしが昨一日夕汽車にて先づ阪神地方に赴き来る七日神戸発の山城丸「日本郵船」にて暹羅行途に上るよし又此度は岩本氏と同行し商業上の用務を以て暹羅に渡航するもの數名ありといふ(朝日新聞1896年10月2日号)と報じられてゐるように、日通貿易会社を立ち上げた岩本は、1896年10月、馬場新八らと共にタイに旅立つた。

しかし、在タイ1ヶ月にして、日通貿易会社は空中分解してしまつた。これを岩本は、次の告別の辞の中で告白してゐる。  
「冒險的遠征 久しく暹羅事

業に力を致し今日まで九年間(ママ)両国の間を往復する九回(ママ)に及びしといへる夫(か)の岩本千綱氏は今度冒險的遠征を試みんとて其発するに臨み盤谷府の日本人に対し告別せし辞は以て其意の在る所を見るに足れり即ち左に出す  
告別の辞 於盤谷 岩本千綱

諸君余は素と南海の頑夫嘗て陸軍を辭し暹羅の事に従ひしより茲に九年此間慶事を企て敗れ或は無鉄砲と嘲られ或は山師詐偽師と罵られ四面楚歌聲裡に埋没せらるゝ雖も独り自ら信じ緘黙して人の評に任せしは諸君の熟知する所なり

然るに我が帝國は第九議會に於て暹羅國へ領事館設置の建議を可決し今や進んで兩國通商條約の商議を開けりと聞く謂「おも」ふに其完成を見る亦遠きにあらざるべし況や近者日本の政事家実業家頗る此國に着目するに至れるに於てをや於是乎我れの此國に対する事業は建設的に傾き来り吾が事殆んど畢れり殊に余は今回馬場「新八」氏と意見を異にし日通貿易会社との関

係を絶ちたれば彌以て閑散の身となれり

由來暹羅に來る日本人を見るに足盤谷府外百里の地を踏まずして喋々全國の形勢を説く是所謂言者鼎の一足を探りて其全形を評するが如し杜撰も亦甚しといふべし

乃ち余は此無用の身を以て有用の業に充て是より冒險探検を試みんとす其目的次の如し蓋し暹羅に重大の關係ある隣邦安南、緬甸、支那の地方を探検する決して無用ならずと信すればなり

第一 暹羅國の屬邦たる北方老撾「ラオス」に入り詳細に之を探検し久しく此地に留るか  
第二 老撾大體の探検をなし西の國境を越え英領緬甸に入り転じて支那の雲南貴州二省を経て重慶に出で揚子江沿岸を下り漢口より上海に到り海に航して日本に帰るか

第三 老撾より東の方國境を越え仏領安南に入り転じて支那の広西江西二省を経て南京に出で上海に到り海に航するか  
余は此の如き目的を予定す聞く老撾は地味豐饒居民勇健人口

二百万を有し稱して北方の宝库と云ふ東は安南に接し西は緬甸に連り北雲南に疆「さかい」し当首府盤谷を距ること八百里其間深山幽谷道も險惡にして人跡未到の処多し甚しきは樵徑だ路通せず行々樹木荆棘を斬伐して纔に自から路を開かざるべからず加ふるに激烈なる深林熱は毎「つね」に人を襲ひ一たび之に触るれば十中の八九必ず命を限「おと」すと独り此無形の勁敵のみならず虎豹犀象の族毒蛇惡虫の類白昼道に横りて行人を害し群盜亦往々人を殺し財を奪ふ故に人の此地を過ぐるもの必ず數十人相集りて隊を作し薬品を携へ武器を帯び且つ飲水糧食を備ふるにあらざれば寸歩も進む能はずと云ふ

此く危険極まる地方を跋涉すべき余は如何なる準備がある暴虎馮河の勇を好むにあらずと雖も亦貧乏所を得ざるを以て方便上髪を削り僧となり一衣一鉢の他に携ふるもの次の如し  
毛布一枚 蠟燭一本 藥品若干 紙筆類 地圖 磁針  
身に寸鉄を帯びず僅に一銭なし行々食を乞ふて此危険なる四

千余里の長程に上る瘴癘と戦ひ炎熱と戦ひ猛獸毒蛇と戦ひ飢餓疲勞と戦はざるべからず生命の危きこと風前の灯火の如し狂骨を山野に曝すに至るは予め期する所なり若し夫れ幸に恙なく上海に達し海を越えて我が帝京に入るを得ば更に盤谷に來りて諸君と旧盟を尋「つ」ぎ厚誼に酬いん然れども此れ実に万一を僥倖するものにして此一會永訣とならんも亦未だ知るべからず諸君謂ふ國家の為に自愛せられよ(朝日新聞1897年1月10日号)。

馬場新八は、現役の海軍造船少監(少佐レベル)であるだけでなく、氣球で空中に浮上した最初の日本人でもあつた。



# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (49)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

岩本千綱は、1896年10月、日暹貿易会社を設立してタイ事業に着手するため、馬場新八(1852-1922?)、今井庄兵衛などとタイに向かった。彼の訪タイは、1892年7月、93年9月、94年12月、96年3月に次いで第5回目である。

この旅行では、彼は「第九回暹羅渡航記」と題して下記の旅行記を、香港とバンコクから国民新聞に投稿した。岩本は頻りにタイ訪問をしていることを誇張するためか、タイへの1回の往復を、2回の渡航と計算しており、彼の数え方では第5回目のタイ行きは第9回になるのである。日暹貿易会社の成功を信じて心も軽かったためか、或は元来楽天的な性格であつたためか、旅行記は澁刺として生気に溢れている。また、その文体は、半年後に執筆した三回探検実記に相通じるものが

あるのは当然であろう。

## 岩本の第九回暹羅渡航記

「第九回暹羅渡航記 於香港旅舎東洋館 暇水生 岩本千綱、余が暹羅に往復すること前後已に九回なれども筆無性「精」の事とて未だ一回も旅行記を作りたることなかりしが今回は破格を以て竟に完筆「とくひ」を執ることせり

十月八日晴 午後第七時神戸に於て、高田義丸氏所持の小汽船正義丸に乗る。乗客は昨日馬場「馬場新八」、今井「今井庄兵衛」二氏と郵船会社の山城丸に同乗する客なりしが旅券のことに少しく手取り止むを得ず一日遅れたり。同行は井上「井上忠常」、藤田「藤田常松」二氏なり。尤も山城丸は馬関、長崎二港へ二日間碇泊する筈なれば好(よし)一日遅るるも十一日長崎出発迄には充分山城丸に追及すべしとの予算を立て居るが為なり

上征途  
同日午前第十時五十分船は讃州多度津に着し十一時四十分同津を発す四國の山は雲煙模様の間に在り  
十日晴 午前第三時船は馬関に着し同四時五十分発し博多に投錨直に上陸旧知津田勝吉氏を訪ひ箱崎八幡宮に詣つ津田氏は嘗て暹羅に遊び去月帰朝せし人にして余を得て或割烹店に到り痛飲漏刻午後第二時辭して船に帰る第五時出帆す此日風伯威を逞ふし波浪天を衝く玄界洋上夢数々驚き眠に到て風漸く止む  
十一日晴 午前第二時長崎港に入り上陸三原屋に投ず此日諏訪神社祭にして市中の雑踏甚しく午後第二時例の山城丸に乗る  
午後第四時漳州初航の汽船一千五百六十噸の山城丸は四十余人の旅客と貨物を満載し徐々長崎を發して南に向ふ  
十二日暴風雨 西北の風に追手なれども怒濤山の如く船の動揺甚しく潮水屢々甲板を洗ひ去り船客爲めに眩暈「げんうん」するものあり  
十三日晴 浪尚高く動揺依然  
十四日晴 右方或は近く或は遠く大

陸若くは島嶼を見るの他記すべきことなし  
十五日晴 前日に同じ午前第七時三十分香港に着し直に日本旅舎東洋館へ入る  
暹羅へ同行の諸氏  
余や自ら驚駭「どたい」を斗らず窮に期する処あり明治二十一年官を辭し野に下り暹羅事業に従事してより星霜茲に九十年過暹へ往復すること前後已に九回此間毎に逆境に立ち世の衰敗を顧みず己の利益と名譽と身命とを犠牲に供し一片の榮志只だ希ふ処は日暹兩國の交通を開き其親密を温め其連結を完ふするの階梯にても作らんとするにありしが今や氣運際会兩國の通商条約將に成らんとし日本よりは彼の國に公使館領事館を置くの議あり民間に在ては又た日暹貿易の壮挙あり今後更に進で殖民並に航海の実行を見るに到らば此れ實に余が宿昔の志を達するものと云ふべし余や能く自ら無力成す能はざるを知る余は暹羅事業の爲めに甘じて奴隸となり日本國の有力者をして之を大成せしめんと誓ふ安そ自ら其間に投じて名利を貪るが如き卑劣野

心あらんや若し夫れ幸に日暹兩國間の事業成り余が恩人殊に無限の知遇を蒙「かたじけな」ふせし暹羅農商務大臣陸軍中將セリサクヂー「スラサック」侯爵が實めては一回なりとも破顔愉快の温容に接するを得ば余が願ひ茲に足る今や諸氏と同行第九回の征途に上るに際し聊か感を發すと云

馬場新八氏 海軍少技監にして今回輻地療網の爲め暹羅國に赴く  
今井庄兵衛氏 神奈川県横須賀の人にして年廿氣鋭日暹貿易会社の用事を兼ね商業の爲め暹羅國に赴く  
井上忠常氏 高知の人留て土木業に経験あり今回本業視察の爲め暹羅に赴く  
藤田常松氏 神戸の人年齒僅に十四歳留學の爲め強て余に乞ふて暹羅に赴く

以上諸氏を(ママ)初めての暹羅にして余は之が東道主人「案内係」たり(国民新聞1896年11月13日号)。

「第二信」明治二十九年十月二十三日晚午前第八時暹羅行き汽船孔明号に乗り込み申候此船は昨夕出帆の筈なりしが荷物の都合にて今日迄延引致候ものにして同行者は日本より同行したる小生等四名と昨日日本より新着せられたる中村弥六、杉浦五郎、

高城善四郎の三名を加へ連中は茲に八名と相成申候由來日本人が二十名以上も同時に暹羅へ参りしこと有之候得共悉く此れ労働者にして今回の如く地位貴力中等以上の先生加之も自費を抛(なげう)ち打撈て盤谷に入り込むは此れを始めと爲すべく此れ必竟氣運の然らしむる処なりとは申ながら今後日暹兩國間の仕事に一生面を開き宿昔の志を遂る点に近付き来るやと思へば心中愉快に不堪候乍此上諸君方の御尽力あり度ことを私「ひそか」に相折居申候

出帆号旗は高く前櫓に掲げられたり午前第十時四十分孔明号は我等八名の日本人と三十名の支那人とを載せ暹羅を香港に抜き南方暹羅に向て出発致候小生は兼て旅館より用意し來れる日本酒を開き諸君と之を傾け聊か祝意を表し帝國萬歳航海萬歳を唱へ申候  
此日は天氣晴朗なりしも昨夜來の暴風余威未だ息まず夫れが爲め船の動揺亦甚しく候得共兎に角連中大勢なれば別段苦にも成らず笑談百出時間の移るを覺へず候  
夕陽已に波上に落る頃只だ看る満天雲を流せし如くアワヤと叫ぶ間一變疾風猛雨勢を合し俄然孔明号を襲來し素より甲板上には天幕の嚴重に張りあるにも関はず櫓さまに降り込む雨は車軸を流し恰も露天にあるが如く山なす激浪は舷「ふなばた」を

打越し雨と汐との爲め甲板上は忽ち溜池の如く深さ二尺に垂んとするに到り椅子は漂ひ革靴は流る馬場、中村の二氏は上等室にありたれば幸に此の奇禍を脱し候得共小生等六名の下等甲板旅客は身体丸で濡れ鼠と化し毛布を捲て雨中にある有様は実に目も当てられず小生が九回の航海中ケ様のことは稀に逢ふ処に有之候今井氏は最早致方なしと諦めめすう敷も毛布を頭より捲ひ椅子に横臥しながら小生を呼んで曰く岩本君候は都々一作り下の句丈け考へ出せり君上の句を添へ呉れ賜へとて

波の蒲団に雨の夜具  
小生不取敢上の句を  
かわひそうだよ甲板旅客と固自付け候素より綿々胸中余裕あるでも何んでも無之候之れ実在當時の眞況を写せし者にして如何に困難

なりしかは想像に余りあることと存候

殆んど終夜此の二勳敵と戦ひ勞れたる小生は何時しか困眠して曉に到るを覺へず居候  
同月廿四日半晴 幾点の鐘声枕に響き驚き覺れば夜は已に明け放れ雨も亦た終に止み居候得共密雲は未だ修まらず舷の動揺前日に異り不申候時々四十度位左右へ傾斜致候事あり同行中椅子と共に傾転「てんでん」甲板に投げ出されたる先生も有之猛雨終日晴陰定まらず薄暮に到り雨全く止み浪亦た穏に相成候此夜は丁度旧曆十八日に當り見渡せば水天一色満眸「まんぼう」又た山をも雲をも看す半空の大月は山へ渡りて波上錦を布「し」きたるが如く其景色中々名画も難及候之を前夜の大騒動に比すれば實に別天地の感有之連中興に





乗し笑談夜の更(ふく)るを知らず  
井上氏の義太夫小生の軍談環最も喝  
采を博し候

同日二十五日晴 風死し波亦た穏に  
船中さながら船上に在るが如くに候  
此日午前第九時船は安南沖北緯十六  
度三十分の処を過ぎ申し候華氏寒暖  
計八十六度(未元) (国民新聞) 8  
96年12月23日号。

「元來甲板旅客の運賃は香港より通  
羅迄十五兩にして支那流の食事附屬  
致し居候得共粗悪汚穢人間外の食物  
なれば到底日本人の食に堪へずと同  
行乗客連中も流石に辟易しボーイに  
相談して一日六人分三兩を払ひ別仕  
立の食事を出すことに相成候初て本  
日は口開きなれば如何なる御馳走出  
るか待ち揃へ居たるに持ち出でた  
る膳部を見れば白粥に玉子煮とスル  
メ梅の三品を添るのみなれば此れが  
一人前廿五兩の膳かと一同呆然候  
膳にも可愛子に旅をさせよと申すこ  
とあり更に世間の贅沢者をして一度  
此の甲板旅行を致させ度候午後馬場  
氏の周旋にてフランチー一瓶饅頭  
ル小瓶半ダースを購ひ各々大喜びに  
て満酌微酔を買ひ饅頭に頃日の困却を  
慰め候併し饅頭の小瓶三十銭は少し高  
価にあらずやと存候  
此日は暑氣漸く加はり単衣にて熱き

を覚へ旅店より贈りし団扇を手にし  
て銘々涼を貪り申候日本にては最早  
不用と存候に此夜驟雨復た到れ共前  
夜の如く甚しからざれば大幸に有之  
候

同日二十六日晴 曉起頭を盥(もた  
ぐ)れば船は北緯十二度の処にあり  
てバタラン灯台下を過ぎ居候時に午  
前第六時十分にして交趾山頭残月  
白、小生は幾度か此の海上を過ぎて  
未だ嘗て懷然「悲しみに沈む」たら  
ずんばあらず醒起す言て此の百里の  
江山一度大羊「つまらぬ者」に附し  
去てより仏蘭西は柴根「サイ」に  
を以て東洋の重鎮となし陸海の軍備  
整然として三色旗影の根拠と相成候  
幾多血性有情の男児果して半滴の熱  
涙を瀧「そぞ」くものありや否感慨  
極つて此に一言す  
午後零時三十分華氏寒暖計八十九度  
此夜亦々例に依り甲板上に集談し端  
歌、都々一、義太夫、軍談、各自得  
意の臨し芸を出し無聊を慰し最後に  
謎と相成小生が  
甲板旅客の禁物と懸けて演

の高祖と解く意は項羽(降雨)に恐  
れる  
此れ実に当夜の白眉に有之候蓋し甲  
板旅客の恐るるは風浪より寧ろ降雨  
に有之候

同日二十七日半晴 午前第七時二十  
分船はコンドル群島の一部フランチー  
嶼と称する東緯百六度北緯九度二十  
分の処を進み申候中村君は小生等甲  
板旅客の実況を写せし左の天津繪替  
へ歌あり  
おおいおおい ぼーいさん  
米粥こつちへたいてをくれ  
豚尾漢(ちゃんちゃん)は 何  
んだか喋々しいへいへおかゆ  
はできまん 手島で仕(し)て  
あける 料理のくさいめし  
どうしてお酒が参りましよや  
れやれしふといちやんちゃんめ  
と直(ち)き話し 何の苦もな  
くひと賄賂 命を金での運羅を  
指しての六人(むたり)づれ  
小生亦た航海中の有様を夕暮暫歌に

疑し申候  
夕暮にながめ見あかね 四方(よも)  
の景、月のふせいは支那の山 帆か  
げにあまりが見ゆるぞへ あれ笛が  
なる船がつく 港に名所があるわい  
な (国民新聞) 896年12月24日  
号。

「十時西方遙に垣々たる大陸を望む  
之れは交趾支那の東南端にして所謂  
累茂岬に有之候此所東緯百四度五分  
北緯八度二十五分にして海水黄色を  
帯ぶ本日午前第十一時華氏寒暖計八  
十七度此夜亦た例の暴風雨の御見舞  
を蒙り殊に御丁重に大雪の御加勢も  
あり殆んど寒胆閉口致候甲板上は居  
る処なく椅子を担(かつい)で此処  
彼処に立騒ぐ風情自分ながら慙(あ  
は)れなる有様に候。

同日二十八日半晴 小生は昨夜風雨  
の二大敵と激戦し終宵殆んど一睡を  
も致さず雨晴れ雷止みし頃は午前三  
時過ぎにして之れより饅頭に飯腹を貪  
りしも須臾にして甲板掃除の爲め可  
憐夢を破られ眼を擦りながら起て天  
の一方を眺れば金光半月在欄頭時に  
午前第六時二十分船は北西方に向て  
駛「は」す昨日來進行の速度十二海  
里宛なりと聞く。

午前第八時華氏寒暖計八十一度にし  
て涼味掬すべく懽むべし一昨日來殊  
麗に誇りし団扇先生も終に排斥の悲



海軍造船少監の馬場新八  
馬場新八は、1896年10月  
3日外務省で旅券を得た。彼の  
肩書きは海軍造船少監、渡航目  
的は「病氣療養の爲め」と記さ  
れている。

アジア歴史資料センターのサ  
イトで、馬場新八を検索すれば  
66もの文書がヒットする。その  
66番目の文書は、1897年12  
月末に予備役に編入された馬場  
が、98年1月9日付で海軍大臣  
侯爵西郷従道に宛てた恩給下賜  
請求文書であり、それには詳し  
い履歴書も付されている。

履歴書によれば馬場は嘉永5  
(1852)年1月8日に生ま  
れ、1871年9月に海軍兵学  
寮へ入寮、75年10月同校を卒業  
と同時に海軍機関士補に任官、  
77年4月17日には軽気球製造掛  
を申し付けられた。同年5月21  
日、彼は軽気球に試乗、空中に  
浮揚した最初の日本人となつた。  
彼の出身地米沢の記念誌は  
次のように記している。

「明治四十六年に海軍兵学寮に入つ  
た米沢出身者は、馬場新八(造船少  
佐)、石原忠俊(少佐)、大瀬新十郎、

運に逢ふ此れ亦た狡兎死して走狗煮  
らるるの類か墓なきは浮世なり。  
同日二十九日晴 午前第三時二十分  
船悉なくバクナン沖に着して投錨す  
香港を発してより五昼夜と十七時間  
を費し候今回の如く速なりしは更に  
稀有のことに候。

午前第十時進潮に乗じ河口を入り湄  
南河を遡つて海関の下流に投錨せし  
は午後第三時にして旧知の江山は笑  
て小生を迎ふるが如く相見へ候。  
回顧すれば本月八日神戸港を辭して  
より今日迄二十有三日の長旅行も無  
恙相終り申候。

小生は着後直に外務大臣デバウラン  
グス親王、宮内大臣ブラウランチャ  
イヤン親王、王弟クロムラーチャ  
サクク親王各殿下、文部大臣バスカ  
ラウラングス侯爵、農商務大臣スリ  
サクチー侯爵等を始め其他三四の皇  
族貴族を往訪致候得共皆な來通挨拶  
の爲にして別段六ヶ敷囁しも致し不  
申候此れより追々用事に取掛る都合  
に有之候尤も日通協會のことは前記  
皇族達も悉く賛成にして何れ其他  
を勧誘の上にて公然協會に申込み皆  
に候。  
小生は非常の繁忙故自然日本の旧知  
各位へ安否の御報も不行届候間可然

御高祖を仰ぐ。  
明治廿九年十一月二日通羅國盤谷  
府に於て (国民新聞) 896年12  
月25日号。

岩本が、日通貿易会社の用事  
も兼ねて渡タイした年壮氣鋭の  
人と書いてある今井庄兵衛は、  
旅券下付表によれば、24歳4ヶ  
月、平民で神奈川県横須賀町に  
住所を有した。彼の渡航目的は  
「商業視察」と記載されており、  
神奈川県庁で1896年9月16  
日に旅券を得て、97年2月18日  
には返納している。  
岩本千綱、井上忠常、藤田常  
松の3人は、兵庫県庁で1899

6年10月8日に暹羅行き旅券  
を取得した。旅券下付表によれ  
ば、岩本と井上忠常の神戸の寄  
留地は同一、39歳2ヶ月の岩本  
の渡航目的は「会社設立」であ  
り、この旅券は97年6月5日に  
返納している。井上は、42歳  
11ヶ月の高知県士族で、渡航目  
的は「土木事業」、旅券は97年  
3月16日に返納している。藤田  
常松は、未だ14歳1ヶ月の兵庫  
県平民で「語学研究」が渡航目  
的である。彼が何時旅券を返納  
したかは記載が無く、彼がタイ  
語を習得したかどうかも判らな  
い。

高津精一郎（病氣退院）、下條英丸（少将）の五名である。馬場新八は明治三年に上京して鳴門義民の英学塾で英語・数学を中心に修学後、兵学校に合格、明治十年五月、日本で初めて軽気球の飛行に成功し、後世にその名を残している。（『米沢百年』、米沢市制百周年記念事業実行委員会、4頁）

前述の履歴書及び内閣官報局『職員録』によつて、その後の馬場の経歴を追ってみると、77年6月に海軍少機関士（少尉）に昇進し、同年7月に海軍少技監（少佐）に昇進、同時に艦政局機関課僚（課次長）に補せられた。89年5月には横須賀鎮守府造船部製造科主幹、加えて同年6月には海軍技術会議議員にも補せられ、海軍造船工学校長を兼任。93年5月まで94年間これらの職にあった。93年5月には鎮守府条例改正により、本務は横須賀鎮守府造船部造船材料倉庫主管に変更、海軍技術会議議員と造船工学校長（93年末に造船工学校廃止され技術練習所長に）の

兼務は継続した。しかし、こうした訳が95年10月14日付でこの3職とも解任された。96年2月には慢性関節リウマチで15週間病休していることから見て、体調不良が原因だと思われる。96年4月には海軍武官階級改正により、肩書きは海軍造船少監と変更されたが、実質的な仕事はなく、9月29日付で、多額のリウマチの診断書を付して「小官儀病氣之処別紙診断書に因り暹羅國盤谷府に転地療養仕度往復日数三十日滞在日数二週間に候間御認可相成度此段奉願候也」という転地療養願を海軍大臣に提出し、10月1日付で許可された。そこで、10月3日にバンコク行きの旅券を得たのである。このような経歴の馬場新八が、どうして岩本の日通貿易会社に加わるようになったのであろうか。それを記した文獻は見当たらない。馬場に、河合萬五郎のような資金があつたとは思われない。馬場の息子の由雄は、東大法学部を出て農林省の課長レベルで死亡、その子、即ち新八の孫の一人は、東大医学部を出て日大医学部の小児科教授を

長年勤めた一雄（1920-192009）や東大法学部在学中に学徒出陣し1945年3月に仏印沖で戦死した充貴（1922年生）など優秀ではあるが、資産家とは思えない。

馬場と岩本を結びつけたものは、海軍造船関係の重要ポストに8年近く在職した馬場の経歴が関係ありそうである。軍艦建造には、チーク材が不可欠であつたが、岩本の日通貿易会社は、馬場の海軍造船部とのコネを使つて、タイ産チーク材の注文を取るのみならず、海軍からの前払金をも得てこれを事業資金に充てようとしたものではなかつたろうか。1896年12月に岩本が三國探検に出発するに際しての告別の辞に「余（岩本）は今回馬場氏と意見を異にし日通貿易会社との関係を絶ち」と書いたことは、前号に紹介した。これによつて同社は早々と空中分解してしまつた。本誌201

4年10月号に掲載した「バンコクの日本商店一覽」にも示すように、日通貿易会社は、96年11月に開店し1ヶ月で閉店している。

何故、岩本と馬場新八は対立し、同社は早々と失敗に帰してしまつたのだろうか。原因は馬場にあつたのではなく、岩本にあつたように思われる。馬場が、バンコクで露見した岩本の杜撰さ、大法螺に愛想を尽かしたように思われるのである。岩本は日本でタイ事情に精通しているだけでなく、タイの有力官僚貴族に協力者や出資者がいることを売り物にしていたのに、実際にバンコクに着いて見ると、協力者は現れず、会社設立準備も何ら具体的な進展を見せなかつたということが真相ではないだろうか。

連載 ④  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱（50）

早稲田大学アジア太平洋研究科教授

### 村嶋英治

#### 異域同舟のタイ渡航

前月号に、1896年10月に衆議院議員で材木商の中村弥六（1855-1929）、日通貿易会社立ち上げの目的をもつた馬場新八（1852-1922）及び岩本千綱は、香港から同じ船に乗り合わせてバンコクに渡航したことを書いた。

中村弥六も日通貿易会社も別個にタイから木材を直輸入することを計画しており、彼等の同船は、正に商売敵の異域同舟であつた。

中村の口述自伝『林業回顧録』（大日本山林会、1930年）によれば、彼は、信州高遠藩（現伊那市）の儒者・教育者の家に生まれ、1870年に開成学校（東大の前身）に入学してドイツ語を学び、76年から2年間ドイツ語教師や大阪師範学校教師を勤めた後、78年に内務省地理

局に転じてドイツ語の林学文獻を翻訳する職務を担当した。中村が林業に関心をもちた端緒である。翌79年7月には官を辞して、林学を学ぶためドイツに私費留学、翌年大蔵省の官費留学生に採用されて、ミュンヘン大学で林学の学士号取得、82年末に帰国した。帰国後は一時大蔵省で働いたのち、83年10月から西ヶ原の山林学校（農商務省所屬）の教授に就任、86年に山林学校は駒場の農学校に併合され農林学校となったが、駒場でも教授を続けた。89年2月に農商務省山林局に技師として戻つたが、間もなく退職して、90年7月1日の第1回衆議院選挙に長野県から当選した。

中村は第1回から第7回総選挙（1902年8月10日）まで連続当選し、更に第10回総選挙（1908年5月15日）でも返り咲いている（衆議院事務局『第一回乃至第二十回総選挙衆議院

#### 議員略歴』

1940年10月、325頁）。中村弥六という名で、近代日本アジア関係史に関心がある人が、まず想起するのは、布引丸沈没事件であろう。フィリピン領有をめぐる米西戦争中の1898年6月、アギナルド将軍がフィリピンの独立を宣言し、自らを大統領とする革命政府を樹立した。スペインに勝利したアメリカは独立付与の約束を反故にして、フィリピンの独立を認めなかつたので、99年2月に革命政府は対米戦争を開始した。革命政府は、日本にボーンセを派遣して物的援助を求めた。その援助の中心人物となつたのが、中村弥六であり、彼は日本陸軍から大量の武器弾薬の私下を大倉喜八郎の会社名義で受け、またドイツ商人に依頼してドイツ商の輸出品という名義で送り出すことにした。そのための輸送船として、苦心の末、老朽船、布引丸を購

入。同船は、武器弾薬のほかにフィリピンの戦いに参加する同志も乗せて、1899年7月19日に浪高い長崎港を出港したが、7月21日には東シナ海に沈没し、同志の一部も犠牲となつた（森下政夫『中村弥六物語』、高遠町図書館、1997年）。

1896年6月にタイを発つて日本に帰着後上京した宮崎滔天は、益田三郎、平山周らと共にタイで山林事業を起す計画を、政治家の大隈毅に相談した。大隈は、にべもなく宮崎に、その顔では出資話に乗ってくるような材木屋はいないと、断言した。そして業界の実状を知りたければ、半紳半商の材木商、中村弥六に会つてみようといふ紹介をした。即日、宮崎、平山は中村を訪問した。「現れ出でたるは文高く顔面平かに、綢緞を着け、金縁眼鏡を掛けたる見え好（よ）き紳士なり、乃ち談するに暹羅木材の事を以てす、彼は本職だけに謹言せり、根

ほり業ほりして問ひ訊せり、而して後に材木商のズルき事より、自己の此間に於ける経験談をなして、到底素人の手にて行ふ可からざる事を説

刺せり、余と南万里「平山愚」は少しく類にさはれり、世に所謂ギザ氣紛々たるものなればなり、遂に要領を得ずして辞し去りぬ」(宮崎滔天

「三十三年の夢」、1902年、115頁。  
材木商の中村弥六は、それ以前からシャムの木材へ関心を



中村弥六 1855-1929 (松下重次「信濃名士伝初編」、1894年より)

もつていたので、宮崎、平山の話を熱心に聴いたものと思われる。

朝日新聞1896年9月12日号は、「通羅貿易事業 通羅に於ける貿易事業は益々人の注目する所となり日通貿易会社の外に南宮敬次郎氏も同地の事業に従事せんとの企てあり中村弥六氏も亦同地産木材等買入の爲め不日同地に赴くべしと云ふ」と報じている。

中村は、その1、2年前に、東京の深川木場に貯材堀を獲て東京木材株式会社を起し、材木の販売のみならず生産もするという方針を以て営業を開始していた。中村は、前掲「林業回顧録」163、167頁に、東京木材株式会社の経営方針を次のように説明している。

江戸時代に木材を河川輸送できる便があり、且つ大消費地でもある江戸、名古屋、大阪の三ヶ所が、日本の三大木材集散地として発展し、東京の深川、名古屋の熱田、大阪の長堀に木材問屋が軒を並べた。名古屋と大阪の木材問屋は、単に木材生産者からの出材を買い入れて販売するだけではなく、安価な入手と

需要への迅速な対応のために、「自から進んで伐木事業を営み、資材の準備をする様に発達した」、木材売買業者であると共に之れが生産者である様に発達した。一方、東京では問屋は関東平野近在の荷主が送ってくる木材を販売するだけで、生産業を兼営するものは一軒もなかった。「現に我國も泰西文化の東漸から、我が材界も多事となり、大阪でも名古屋でも既に築港が出来て彼地木材業者の商業振も進展するに、却つて首都である東京は東京湾の修築も未だ出来ず、木材問屋も江戸が東京と変わり、改まり行く時勢に気付かず、昔ながらの営業振に少しの進展を見ないのは余りに迂愚だと感じた自分は、野に下つた当時(明治二十七八年と思ふ)深川木場に貯材堀を獲て東京木材株式会社を起し、生産業兼営の方針を以て営業を開始したので在った。此会社は初め同志と共に株式会社として成立したのであるが、後には自分個人として経営するに至つた。其当時を想起して木場の現況を見ると、製材工場も多数に出来て羽柄物「はがらもの」を自営する問屋もあり、山元に資材生産の事業を兼

営するものが多くなつたものである。而かも之が種時は自分が起した会社の成立からで在つたと思へば、昨夢に在つた問屋連中に覚醒の鐘の響を与へたものだ、私に微笑を禁じ得ないのである。

中村は、第1回から第7回総選挙まで連続当選し、1890年から1902年末まで野に下つたことはないが、上記引用では、野に下つた当時、明治27、28年(1894、1895年)頃に東京木材株式会社を起したと回想している。中村の記憶違いか、あるいは1894年夏の議院解散から総選挙までの期間のことを野に下つたと言っているのであらう。

1896年10月12日に日本を脱した中村は、タイから12月20日頃には東京に戻り、次の広告を国民新聞の12月24日号に出した。

「内外国産木材販売

社長中村弥六通羅國へ渡航自今チルク材及紫檀黒檀其他良材直輸入致し且米利堅松材も引続き直輸入尚本邦諸材の販売は一層拡張孰れも廉価販売候に付御注文を乞ふ  
東京深川区扇橋町二丁目番地  
東京木材株式会社

前掲「林業回顧録」の付録で、宮崎精允は中村の逸話を披露しているが、その一つとして「チルク材の直輸入」の小見出しで、「船艦材として横須賀、呉等の海軍造船所でチルク材の購買が折々ある、日本商人の手を以て納入はしていても、それが輸入は一に外商の手に頼らなければならなかつたものだ。將軍「中村の綽名」慨然として起ち、自ら通羅に航して直接彼地に於て仕入をなし、直輸入の先鞭を付けられた……何にしろチルクといひ米松「アメリカ松」といひ、東西から重要材を直輸入の先陣戦をさ

れた將軍は、材木商としての最新人であつた」と書いている。

中村弥六の見たバンコク

中村弥六の「通羅の視察」が『太陽』第3巻5号(1897年3月5日刊)の141、147頁に掲載されている。19世紀末のバンコクを知る貴重な記録なので以下にその一部を紹介しておこう。

「余は材木屋なり、余の通羅に赴きし事は本業の材木輸入の爲にせるなり、而して余の通羅國に滞在せるは三十余日に過ぎず、其間觀察する所少しとせざるも、多くは記録して手帳の中にあり、今其の手帳を披(ひら)いて見聞する所を諸君の前に述べんと欲するに当り、専門の材木談は興味なく、又諸君を益することも少なかるべし、而して余は一面には議院の一員として政治界に立てば、傍ら其觀察を為せり、故に今は政治上社会上彼地に於て見聞する所、感ずる所につきて、思ひ出る儘に述べんと欲す。

余は平生性(おも)へらく、歐羅巴の土耳其と東洋の暹羅朝鮮は、世界禍乱の噴火口なり、故に之を固基に例へば、一目的の効を打つならば、他日或は二三日の益を得るの望あ



り、故に通羅の形勢は詳かに視察するの要あり、又同国には世界に名だたる材木に富み、而して我内地の形勢を視れば木材の欠乏は年一年に甚しからんとす、此に於て余は政治上及経済上より彼国に赴きて實際を視察し、且つ彼国の木材を我國に輸入せんと企てたる所以なり、

從來通羅産の紫檀黒檀等の材木にして、我國に輸入する者、支那人又は西洋人の手による、而して彼等の収むる口銭は甚だ不廉なり、例へば亞米利加松一噸につきても、之を直輸入するときは十五円を廉にするを得、之を重艦一隻の材料に就て算するも、殆ど二万円を廉にし得べし、是れ同国材木の直輸入を実施するの必要にしてまた有利なる所以なり、……メナン「メナム」河は其河口チャンタブーン「ママ、パークナム」の誤記より盤谷府を経て上流八百哩に遡り、其の附近には古来未だ留つて斧斤の入らざる森林蒼鬱として連なる、皆チーキ「チーク」、紫檀黒檀等の良材なり、チーキは我國の櫟（けやき）に類し、其質堅く、鉄道客車の用材は多く之を用ふ、また船艦の用材に適す（「141-142頁」）。

「元來通羅人は中央亜細亞より出

で、体格は北方の蒙古人東方のマレー人よりは弱く、一見日本人に類す、彼等の中に難れれば、余の如きも稍や骨格の優勢なるを覺へたり、勿論通羅國中北方のラウ「ラウ」人種は悍悍にして骨格は他に優るもの如し、

食物は米と菓物にして、常食はライスカレーに胡椒を撒（ふ）り懸け、箸を用いず、手指を以て摘み食す、家屋は極めて粗造にして、屋脊は瓦を暴露し、周囲に雨戸あるも、雨期の外は之を閉さず、衣服は概ね裸体に似て、唯だ腰間に少許「すこしばかり」の織物を纏ふ、其状画ける鬼の褌の如し、故に洗濯の準備として二個の褌だにあらば、下等社会は此れにて足る、故に生活の費用は甚だ廉なり、但し生活上の二大別を為し、中等社会なく、下等の生活は爾（じ）かく廉なるも、上等の生活は非常に高価なり、

方今日日本人にして通羅に在る者、多くは職業婦にあらずれば所謂無賴

悲歌の士「時世を悲憤慷慨する者」、

常に下宿屋の一室に起臥して徒らに山田長政の事蹟を夢みるのみ、故に其生計の如き極めて低く、一ヶ月の下宿料三円を払へば、稍や上等なるも、一日の宿料を三錢づつに定めたるに、尚ほ之を一日一錢五厘づつに下（し）た受けせしめたるものありと云ふ、以て其他を推知すべし、蓋し米を産すること多くして、廉価なるが上に、衣服を要せず、跣足裸頭に甘んずれば、生活の容易なるは言ふを待たず、然れども是れ通羅人の状態なり、別に西洋人の盤谷に住するもの七百人許あり、ホテルに住し馬車に乗る、其費用は甚だ大にホテルは東京の東京ホテル位にして寢室（ベッドルーム）の外なきも、一日

六弗乃至七弗を要し、馬車の借賃の如きは方外（ママ）に高かし、故に普通に一日十五円位を要す、一方に一日二錢にて足るものあれば、一方に一日十五円を要するあり、懸隔もまた大なりと謂ふべし、

國民三分の一は奴隸なり、其の奴隸は売買によりて得るあり、負債の抵当流れあり、國務大臣の如きは少きも二十三人の奴隸を有し、貴族は皆之を役使して土地を耕作せしむ、而して此国の労働者は皆婦人にて、男児の働らく者は甚だ少なし、又此国の風俗として、最も驚ろくべきは一夫多妻の制なり、普通人も十五六人の妻を有し、國王の如きは二百人と稱するも、實際四百人許は優に之ありと謂ふ、説て此に至らば、或は諸君の中にも試みに通羅に行かんことを欲せらる人もあらんか、

國民は生活の容易なるが為、甚だ懶惰にして体格不良、記憶力も甚だ鈍く、上流の紳士と雖ども對話半時間に亘れば既に頻りに欠伸を為し、自ら問を発しながら之に答ふる時は既に忘れて他を言ふ、また彼等紳士日常の風俗は、矢張り褌を以て腰間を纏ひ、長き靴下を股まで穿ち、腰より上部は歐風の服を纏ふ、一見また甚だ奇なり、

宗教は仏教を以て國教と為し、僧侶の数は甚だ多し、彼等はまた常に

跣足裸頭なるも、全身は法衣を纏ひ、宛然たる羅漢の如し、而して流石に仏教の旧国だけに、僧侶には其の僧侶として敬すべきものあるが如く、彼等の難行苦行また敬すべきものあり、去れば國民の僧侶を尊敬すること亦甚だし、……又國王の兄弟は方今三十余人あり、其の大概は皆留つて一回僧と為れるものなり、蓋し他に適當の學校なし、僧となるは或は教育を受けるに便なる理由もあるべし、又盤谷にはワツサック「ワット・サケート」ウはワの誤植と名（なづ）くる寺院あり、此所は罪囚の死者を棄てて鳥に啄（つ）ばしむる所なり、特「ひと」り罪囚のみならず、貧民の葬儀費なき者はまた此所に棄てて鳥の啄むに任す、余また曾て其鳥の群がりて死屍を啄むを見たり、頗る慘風に堪へずと雖も土民は之を怪まざるなり、

旧時は國王に正副ありし由なるも、今は一王にして宗教上の首長と政治上の首長を兼ねるが上に、また財産上の首長なり、國中最も富む者は彼れにして、阿片税、海關税、賭博税等を併せて王室の収入は毎歳一千五百万円あり、之に次ぐ富者は貴族なり、而して其多数は皇族にて現に方今の政府中農商務の二省を除けば、他の大臣は皆皇族なり、而して前代の國王は進歩主義の人な

りし由にて、皇族は皆割合に智識を有す、……亦皇族と云へば甚だ嚴格なるに似たるも、彼等はホテルへも來訪し、其の智識は、曾て歐羅巴に遊びて彼国の事情を自瞭したりと云ふに過ぎずして、胸中に蘊蓄する所は殆ど無し、乃ち苟くも英語を談ずる者は、國中有数の傑物として推さるるなり、

余は一日博物館を見たり、列品には通羅語の解説を付す、余は解せざる故特に英仏独何れの國の語にても之が説明を為すべき訳官を得んとて、之を政府に請ひたるも、数日を經て終に其人を得ずして止みき、而して其陳列品の如きも、徒らに秩序なく之を羅列したるのみ、中に我國美瀝産の陶器あり、而して博物館長自身も其の如何にして此に置かれたるを知らざるなり、余は又陸軍大學を參觀したり、而して其の学科中算術の最高等なるは割算（アレジジョン）なりき、此れだけの程度ならば、余輩の如きも直に同大學卒業生たるを得べきなり、又同國の事情を書したる書籍を得んと欲し、普（あま）ねく雪林を探がしたり、然れども滞在

三十余日間、終に之を發見せざりき、唯だ一の圖書館あり、就て之を見れば、我國の新聞雑誌所の如きもの、中に見るべき圖書は殆ど有るなきなり、盤谷府には新聞三種あり、其中二は英語にして、一は英語通語を以て記す而して其発売部数は各三百合計九百枚といふ、同府の住民四十万人、而して新聞購読者は九百人に上らず、同國文運の度想見すべきなり、

然れども表面上の事物は、文明國に模倣するもの多し、電灯あり、電氣鉄道あり、電信もあり、電話もあり、然れども電話電信は夜間と日曜には取扱はず、また前には瓦斯灯もありし由なるも、電灯の成立と共に廃したりと云ふ、而して製造業は全國殆ど絶無にして、僅かにメナン河辺に煙突を望み見し、是れ政府の事業なりとか、其他商業は一に支那人によりて営まる、……

金利は不明なるも、低きは二朱乃至三朱にて、質屋より借るには一割

乃至一割五分位なるありといふ、而して外國商人の此國に入る者は、主として王室を顧客とす、弱國なるも國帑は富み、而して王室は最も資産に富む故、裝飾の奢侈は驚ろくべきものあり、ダイヤモンドの如き高価品は、多く身辺に纏ふて豪華を競ふ、故に王室を顧客とすること最も利あり、之を為すには女官に擢擢「たよること」すること第一捷徑なり、故に女謁盛んに行はるといふ、

此國に於て殊に驚ろきたるは賭博の盛行なり、首府の中公許の場七所あり、日々一所に集まる者一千人許、而して各所皆公許にして其特許料の収入一年五十万円許なり、場中には芝居を興行し、人の觀劇に赴く者あるに當り、入口に賭博を演じて觀者を誘ひ、以て其の伴侶に加はらしむ、此の如くして人毎に賭博に耽り、瀟々風を為し、賭博と阿片との余毒は、全國民に浸潤して今は之を除くに由なからんとす、……」

タイで森林伐採権を得ようとした日本人

中村弥六は、教えずで東京木材株式会社の幹部である林学士杉原亀三郎を、1897年11月3月に材木取引のためバンコクに滞在させた(本誌9月号参照)。中村は516年で木材会社経営から身を引いたが、タイではバンコクでの買付に限り、伐採(生産)にまで手を広げることができなかった。

しかし、この時期にタイ政府から森林伐採権(コンセンション)を獲得して、木材の切出し、即ち生産をしようと計画した日本人が存在した。その中心人物は、これまでも何度か登場した山崎喜八郎であり、山崎は1894年5月19日にバンコクに初渡来、翌95年8月8日から桜木商會を開いていた。

1898年5月、山崎らは次の2通の陳情書を稲垣満次郎公使に提出し、タイ政府への伝達を求めた。即ち、(一)、一木斎太郎一人の名でタイ内務省宛に、ムアン・チョンブリーのコ・

クラム島とラヨーンのコ・サメット島で6年間、諸種の木材(除くチーク)を伐採するコンセンションを求め、98年5月2日付文書、(二)、山崎喜八郎・門司軌(もんじ・わだち)両名がタイ内務省宛に作成した、ラヨーン市と現在のパタヤー南方のチョームティアンを結ぶ線(1700センチ68キロ)の南側全域の伐採権を求める同年5月4日付文書(但し、タイ政府が与えることができる範囲で結構という追加説明文書付)である。

旅券下付表で見ると、一木は熊本県士族で、農工商業視察を目的として1897年9月4日に、東京でタイ行き旅券を取得した(年齢は記載がない)。門司は福岡県士族で、同じく農工商業視察を目的として同年11月14日に福岡県で旅券を取得している(この時36歳6ヶ月)。

稲垣公使は両陳情書をそれぞれ5月3日、5日にテワウウォン外相に提出した。外相は5月10日付で、両文書を国王秘書のソムモット親王及び内務大臣代行のプラー・ラーチャワラー

スクーンに移牒。5月14日に、国王は内務省に許可できるかを調査せよと命令された。同月29日付で、内務大臣代行は、森林局長の監サレットに意見を求めている、彼の意見が出たら私の判断も加えて国王に見解を奏上すると答えた。

一方、外相は5月21日付で稲垣に、両陳情書を主管官庁の内務省に送ったと回答。そして、8月31日付で外相は、内務省の次の回答を臨時代理公使に通牒してきた。即ち、一木、山崎、門司の3名が伐採権を求めている地域は、3名より前にシヤムの会社「シーラーチャー社」が伐採権の申請をなしており、現在同社と内務省との間で協議中であるので申請は受理できない、と(タイ国立公文書館 Ro.5 No.16.2/12, Ko.To(Uo))

2: Japan).

山崎は陳情書提出後、日本に帰り森林事業への出資者を探していた。不受理を知らされた山崎は、申請はスラサックモン・リーのアドバイスを得たものであったのに、スラサックの会社(シーラーチャー社)が先に申請を出しているというのは不可解だと訝った(山崎喜八郎『図南策実歴譚』1899年、40-41頁)。なお、筆者は本件に關しては、これ以上の文書には接していない。

連載 ⑤  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(51)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

山崎のプロファイルは、本誌2013年2月号に書いたもので、ここでは武闘派権派から壮士の親玉・法律家業に転じて悪評紛々たる熊本県士族一木斎太郎と博多の有力商人であった福岡県士族門司軌について、判る範囲でその人物像を見ておきたい。

門司軌(もんじ・わだち)

実は、門司軌については詳しい資料に乏しい。門司の略歴は、石瀧豊美『増補版玄洋社発掘 もうひとつの自由民権』(西日本新聞社、1997年)の365頁に「門司軌、明治13年福岡区議。21年県議。24年筑紫銀行支配人。福岡商業會議所議員。大正11年12月1日没」と記載されている。石瀧氏が同書中に引用している文書によれば、門司は博多官内町(現、福岡市博多区中興服町)の荒物商であり、明治15年の玄

洋社社員名簿に門司軌の名がある。なお、門司の名「軌」は、「わだち」と読むことは、彼がタイ政府に提出した出願書より明白であるが、石瀧氏は「のり」と読んでいる。

日本の主要都市に電灯会社が設立されたのは、1889(明治22)年頃だそうであるが、博多でもこの年から電灯会社設立の動きが始まった。明治24年7月に設立された博多商業會議所の発起人の一人であった門司は、同會議所が明治27年6月に選定した博多電灯株式会社の3名の発起委員の一人にも選ばれている(九州電灯鉄道株式会編『九電鉄廿六年史』、1992年、112頁。福岡商工會議所『福岡商工會議所百年史』、1982年、82頁。門司は、石炭採掘を目的とした筑前鉱業会社を他の福岡の有力商人とともに発起し(迎由理男・永江真夫編著『近代福岡博多の企業者

活動』九州大学出版会、2007年、28頁)、また明治26年7月制定の取引所法に従って制度化された株式会社博多米穀取引所の理事の一人でもあった(小田部博美『博多風土記』、1986年、327頁)。なお、県議には明治21年1月に当選したが、同年10月には辞任している(『福岡県議會議史 明治(上)』、1952年、573頁)。

一木斎太郎

一木斎太郎は、結構名の通った人物であったようである。半月刊の『日本及日本人』誌が、1907年4月1日から10月1日まで無類庵(肥後人物評論)を連載した時、清浦奎吾、徳富蘇峰、徳富蘆花らとならんで、一木斎太郎にも相当のスペースを割いている。一木斎太郎の項は、次のように書き出されている。

前月号で1895年5月にバンコクで一木斎太郎(1859-1910)が一通、山崎喜八郎(1867-1912)と門司軌(もんじ・わだち、1861-1922)が連名でもう一通の森林伐採権の出願をタイ政府にしたことを述べた。この主筆者は、山崎であった。山崎は一木、門司を「二氏は、実力経緯固つながら備はり且つ大に公義心に富み決して普通商人輩と日を同ふして論ず可からざる」人物と見込んで同盟を結んだのであった(山崎喜八郎『図南策実歴譚』、1899年12月25日発行、39頁)。3人のバンコクの住所は、Japan Mon, Ban Moh (asamun junda)と出願書に記載されている。出願の結果が判明する前の98年7月16日、山崎は一先ずバンコクを立ち資金集めのために日本に向かった。この時、一木と門司も同行して日本に戻ったものと思われる。

2015年12月

「肥後に於ても東京に於ても、一木斎太郎と云へば大悪漢の代名詞の如くに思惟せらるゝ、怪むこと無し、彼は天下に公表して悪事を敢行す、而してその御面相も亦甚だ悪人たるに適す、満面土色を帯びて痘痕疎らに、前額狭小にして鼻頭扁平に、口元締りて眼球陰に輝くところ、何処から見ても悪役顔なり、シカモ一たび其人に接するや、十二分の警戒を加へながらも、何時ともなく自ら知らずその案牘中のものとなりて、彼の技倆に因ると云ふと雖も、独得天資の力あるにあらずんば焉「なん」ぞ能く此の如くなるを得んや。彼は狼の如き猛悪な性と鳩の如き溫柔の性とを兼ね有す而して此の矛盾せる両性を發揮するに比類なき智勇并力と無制限なる感情の烈火を以てす……妄幻無端端可からざるは彼の特色也、路傍の乞食に涙を流しつつ衣を脱ぎ与へる其手を騙して友人の妻を擁にして姦するは彼の常情也、曾て人あり故中江兆民先生に問ふに「一木斎太郎の人物如何を以てす、先生答へて曰く「奴は心理学の

問題物じや」と、蓋し解し難きを謂ふなり、彼れ果して解す可らざる乎」(日本及日本人、第466号、1907年9月1日、29頁)。

この記事なども下敷きにして、上村希美雄(うへむら・きみお、1929年生)氏は、一木の伝記を次のように書いています。

「一木斎太郎(号燐水、弄鬼斎、乾坤燐水主人、1859-1910)一木斎太郎は西南戦争で西郷軍を扶けて勇戦した熊本協同隊の生き残りである。

協同隊は西南戦争を第二の維新革命戦争として戦った熊本民権党が組織した戦闘部隊であり、一木はその中心人物宮崎八郎(宮崎滔天の長兄)を少年期から生の指標として育った。1859(安政6)年4月7日、玉名郡牛水村(現長洲町)の漢学者一木格次の長男として生まれた彼は、柳河藩主の進講役だった父を少

年期に失ったあと、またいとこにあたる八郎が1875(明治8)年に開く植木学校でルソー流の天賦人權思想を学び、専制政府打倒の志を叩きこまれた。幼くして神童の名を謳われ、胸白さの方でも人一倍だった彼も、ただ八郎だけを畏敬すべき人物と慕ってきたという。その彼が二度の重傷から蘇ったとき、八郎は戦死し、天下を取るべき戦いは惨敗に終つていた。満18歳の青年だった斎太郎の運命の狂いは、そこから始まる。敗北を是認しないためにも、彼は明治の日本に背を向け、いわゆる「ヤケの化身」としてその人生を出生しなければならなかった。死にそこなつた人生を、これからは我儘勝手主義に使い切る——硝煙の匂いに代る文明開化の穉あけを、彼はこうした思いで迎えた若者だったのである。

もっとも、戦後の自由民権運動が一木の欲するほどの革命的エートスになおみだされていたら、彼の挫折もある程度軌道修正されたかも知れない。敗戦の翌年、彼は中江兆民の仏学塾に交を交し、1年後には帰郷して協同隊の残党たちが組織する相愛社にも参加しているからだ。だが、八郎の師友だった兆民も斎太郎の奇行奇行にはただ首をひねり、諷刺や言論の力で国会を開かせようとする民権結社の運動は、この異端の反逆児にせよこましすぎるものに見えた。官といえは泥棒と思え、実行できないことは口に出すなという、彼が育った初期民権派の不文律からすれば、奇矯過激で喝らした相愛社の演説会も、一度政府の武力に屈した者のなお残る名譽欲の衝動としか思えなかったのだ。1879(明治12)年8月、一木は相愛社長池松豊記「1846-1921」の、ち代議士に3回当選」に反旗をひるがえして退社を宣言し、2年半後には鹿児島に葉英社を起こして週刊『錦江新誌』の社長兼編集長におさまっている。『鹿児島県史』によると、同誌は「輿論の精華と思はれるものを集編して社会の弊癥を矯正する」ことを目的とする月五回刊の小新聞だったが、82年3月2日発行の号外に梅井藤吉「1850-1922」

409

奈良県出身、1882年5月25日長崎県島原で財産均等、支那朝鮮への思想宣伝などを掲げて日本最初の社会党、東洋社会党を結成、集会条例違反で投獄される」の演説筆記「東洋ノ虚無党」を掲載して世の耳目を驚かせた『明治文化全集』第6巻所収)。その前月、長崎での演説討論会で、一木は梅井と共に二度登壇しているから、長崎発行のこの号外は疑いもなく彼の企画にかかわるものだったにちがいない。

征伐を始めとする全社会との戦闘を開始したのである。親類中からの見放され者だった斎太郎の西南戦争のホラ話を、少年期の子守唄のようにして育った宮崎滔天は、しかしこの一廻りも年長のまたいこの体内に果食う時代への絶望感を、いち早く感知していた一人だった。乱髪のおぼた面にギョリと光る金盞まなこ、どこから見ても立派な悪役人顔だったという一木は、88、89年の滔天の長崎遊学時代、そこでも製菓社と呼ぶアウトサイダーグループを作つて世の中を睥睨していた。大阪事件の日下部正一「1851-1913、熊本出身、1885年大阪事件に連座」を始め、彼らは一度は明治政府を顛覆させようとした謀叛人どもだったが、滔天は憲法や代議政体による近代国家の成立が、裏を返せば人民を抑圧する装置の完成にほかならないことを教えられている。一木らはそうした視点から、自分たちの志を封殺した明治社

会に反抗することを唯一の生きがいとしていたのだ。

1890(明治23)年、熊本随一の名妓手遊(おもちゃ)をかつさらって東京へ逐電した一木は、今度は大隈や大隈、加藤高明といった政界の名士連とつきあうことで、権略ブレイクのおもしろさに浸ることを覚えたようだ。その翌年夏故郷へあてた手紙には松方、大木、陸奥、高島らの名前がそろそろ出てくるし、土方宮相の助力で天皇に教育上の意見を具陳するかも知れぬという一節さえ見える。これらが一木一流の大ボラだったとしても、たしかに彼は女ばかりか、政・財界の海千山千までコロリと信用させてしまふ不思議な能力を身につけていた。その代り、彼の方でもそれ相応のサービスには努めたらしく、第二回選挙の際大隈の壮士隊長をつとめた時の勇猛さは永く岡山での語り草となつたし、大隈を説いて北海道の渡志別原野の払い

410

下げに成功した話も伝えられている。ただ彼は当面の目的さえ達すると、得た金は一夜に散じてまた次の獲物を狙った。つまり一木はいかにうまく相手を自己の智力で征服するかということに人生の快を感じていた利那主義者であり、名利は愚か、事の成否も眼中にはなかった。いわば棄鉢となつて世も人も共に弄ぶ男——それが若き日の一木の生の本領であり、弄鬼斎という号のいわれでもあったろう。民権革命の挫折のなから、明治社会はこうした鬼子を世に産みだしていたのである。ただし一木の名譽のためにはいえ、無軌道を生の原則とするこの男が、ただ一度だけ真に激怒したことがあったようだ。1897(明治30)年3月3日、谷中村の被害農民が初めて日比谷原頭に姿を現わし、飢餓救済の血の叫びを挙げたときのことである。大隈卓著「渡良瀬川」(1972年復刻)によれば、その3日前「1897年2月28日」キリスト教青年会館で開かれた第一回飢餓事件演説会でも、一木は古河側の妨害に対抗して配下の壮士を会場に配置したが、数日後田中正造を交えた相談会では、冒頭まず発言して難民支援団体の速かな結成を訴えている。この勧諭は直ちに採択され、彼と山口弾正がその組織に当たった。……



翌年二、三月ごろの田中正造の日記にも彼の名前は散見できるが、それは鉾毒事件に体を張った情熱を注いだ「愚漢」一木の、人知れぬ生の片鱗だったといえよう。……一木の以後10年間の軌跡は断片的にしかわからないのだが、1905（明治38）年前後、宮崎民蔵の土地復権会は京都の徳永淡宅をアシトの一つにしており、相良寅雄は京大の夜警に雇われていた。東京を食いつめたあげく本願寺の法律顧問に転身したという一木の京都時代が多分これと一致しており、熊本大水害のあと無一文で上京しようとした新美卯一郎（1879-1911、幸徳秋水（大逆）事件で絞首刑）が旅費を恵まれるという挿話（飛松與次郎「一木燐水」）は、あるいはこのころの誤聞かもしれない。彼が本願寺にとり入ったのは、シヤムから仏骨を持ち帰る一件がその端緒とされており、当時の一木は本宅のほか別宅まで構える豪勢さであったという。……（岡本宏・上田雅一編著『大逆事件と熊本評論』、三一書房、1986年、195-198頁）

毒問題の解決に積極的に関わった一木が描かれている。確かに上村氏が引用している、大鹿卓『渡良瀬川』（1948年講談社版、なお初版は1941年）には、1897年2月28日に東京で最初の鉾毒事件演説会が神田美土代町の基督教青年会館で開催されたが、鉾毒源の古河が銅山の鉱夫に殴り込みをかけるといううわさが立ち、実際にも演説会場の中央に鉱夫や古河側の壮士らしき者が居座った時、するとまた正造に味方する一木斎太郎が門下の壮士五六十人を引き連れて、それとなくその囲りを取り（同書、116頁）かこんだという話や、3月7日前後に正造を支援する知識人が第一回相談会を開いた際、その席上「まづ一木が、鉾毒事件を解決するために社

会的に有力な団体を組織することが急務であると提案した」（前掲書129頁）ことが記されている。続いて、上村氏は、1898年2、3月ごろの田中正造の日記に、一木の名が散見できると書いている。しかし、筆者が1898年1月から1899年3月までの田中正造の日記『田中正造全集、第十巻、日記二』岩波書店、1978年所収）を調べた限りでは、どこにも一木への言及は見当たらない（なお、1897年の田中正造日記は全欠となっており存在しない）。上村氏の単純な勘違いなのか創作なのかは理解に苦しむところ

である。一木は、1897年3月に東京で鉾毒事件に関わったのち、半年後の同年9月4日には東京でタイ行き旅券を取得、渡タイした。一木はバンコクでは98年5月3日付で、2島（クラム島とサメット島）の森林伐採権のコンセッションをタイ政府に出願した。一木は、少なくとも1897年末から翌98年7月半ばの間は在タイにいたもので、この間、田中正造と日本で行動をとることは不可能である。日々の行動と感想を記しているだけの正造の日記に、一木が登場する余地はないのである。さらに、上記引用文の中で、上村氏は、飛松與次郎（1889-1953、熊本出身、幸徳秋水事件で無期懲役、1925年5月仮出獄）の回想に依拠して、新美卯一郎が熊本大水害のちに上京途中、京都在住の一木から旅費を恵まれたことを紹介している。その上で、上村氏は宮崎民蔵の活動のアジトが1905年ごろ京都に存在したという別の情報を根拠として、一

木が京都に居たのも1905年頃のはずであり、それ故、新美の一木訪問は、1900年7月の大水害直後ではなく、1905年ごろかも知れないと推測している。

飛松の回想とは、彼が獄中で書き溜めたものを仮出獄後、九州新聞（熊本）に連載したものである。大逆事件で飛松は新美とともに熊本で逮捕されたが、その前に新美から詳しく昔話を聞かされており、それを回想して書き留めたのである。それに

よれば、熊本の白川のほとりに生まれた新美（1879年生）は、父子家庭に育ったが、20歳の時大水害に遭い家を流され、父も溺死した。途方にくれた彼は、東京の知り合いに手紙を書き、新聞記者の職があるというので上京を決めた。金をかき集めて京都までの旅費を作り、京都駅で降りたが、その先の切符を買う金がない。そこで、同郷の一木燐水が京都に居ることを思い出し、初対面の一木から援助を得たのである。新美は一木のこの時の援助を徳として一木の晩年まで訪問した（飛松與次郎「熊本の梁山泊（1）、（2）」、九州新聞1925年8月30日、31日号）。新美20歳の時の大水害とは、熊本市HPの「熊本市のあゆみ」の、1900年7月の項に「市内に大水害、白川の橋ほとんど流失し、子飼橋付近溺死者多数」とある大水害であることは間違いない。

上村氏は、一木が京都の本願寺に取り入ったのは、「シヤムから仏骨を持ち帰る一件がその端緒とされており」と書いている。これも飛松の一木からの聞き書きに依ったものである。飛松は次のように書いている。上京した一木は、大隈重信を訪ね、朝鮮公使にして欲しいと頼んだが、「一木がこの希望は大隈も聴き入れて呉れなかつたので東京を去り京都に來り本願寺の法律顧問となつたのだ。この京都に居つた頃の話は先づ第一は彼の仏骨の事だろつ、其頃印度で仏骨が発見された、これは英國から取るうとしたが、日本の本願寺からも取るうとする。暫くは悶着が起つて紛紜を極めて居たさうだが、一木が策略で日本の本願寺へ迎へる事に決定した、これが一木の第一の手柄であつたさうだ、此京都に居つた時代が一木の一生涯中の全

盛時代で随分贅沢な生活をして居た、本部の外に別荘まで構へ妾等を持つて居た、幾多の浪人や貧乏僧生やらに金品を施し多くの人を助けた、彼の新美卯一郎が助けられたのもこの時代である」（飛松生「一木燐水（3）」、4）、九州新聞1925年9月7日、8日号）。

シヤムから仏骨が日本に來る経緯についての上記記述は、相当錯綜しており、事実ではない。チュラーロンコーン王が日本の仏教徒全体に与えられた仏骨（仏舍利）を奉迎するために、1900年6月に、日本仏教界の代表団がシヤムを訪問した。この代表団の長は、真宗大谷派（東本願寺）の新法主大谷光演（1875-1943、句仏の俳号で知られる。法主就任期間は1908年から1925年まで、私的浪費から借金まみれとなり引退を余儀なくされた）であった。法主継承予定者とは言え年若き大谷光演が団長に選ば

れたのは、大谷派（東本願寺）が仏骨奉迎に最も熱心であったからである。その理由は、同派の最有力者、石川舜台が、仏骨を手に入れて日本の全仏教宗派のセンターを建造しようという遠大な計画から強力に推進していたことにある。一方、西本願寺派は藤島了穂（1852-1918）を仏骨奉迎団に副団長として参加させはしたものの、代表団の在タイ中から早々と仏骨奉迎事業から手を引く決定を下した。それ故、一木が仏骨奉迎に貢献し羽振りよきとした本願寺とは、東本願寺のことと考えて間違いないまい。岩本千綱は、東本願寺の石川舜台に雇われて仏骨奉迎の準備に1900年3月に来タイしており、一木と東本願寺の間をつないだのは、岩本千綱であった可能性も考えられるし、逆に一木が岩本を石川舜台に紹介した可能性もあり得る。

このような時系列でみると、新美が京都で一木から援助を受けた時期は、上村氏が推測するような1905年よりも、オリジナルの資料に記載されている熊本大水害(1900年7月)から間もない頃の方が妥当である。

#### 歴史研究者の誤推測

上村氏の一木斎太郎調査は、他に類のないものであることを認め、かつ私自身もまたしばしば間違ったことを書いておられる。上村氏は自分の手持ちの限られた情報内で、当を得ているとは言えない推測を加えてしまいう傾向が強いようである。本連載内容に関わることで、上村氏の誤推測の明白な例を指摘しておきたい。

上村希美雄著『宮崎兄弟伝(日本編上下)』(華書房、1984年)は、毎日出版文化賞も受賞した、宮崎八郎、民蔵、彌蔵、寅蔵(滔天)の4兄弟の詳細な伝記である。上村氏は同書執筆のため、バンコク時代の宮崎滔

天を求めて、バンコクでも調査されたほどである。それでも本誌2013年5月、7月号で紹介した、1895年初めに岩本千綱らが創立した暹羅殖民会社(岩本千綱は副社長)の顧問に、大谷津直亮という人物がいたことは判らなかったようである。上村氏は宮崎滔天著『暹羅殖民始末』に多くを依拠している。同始末で、滔天は暹羅殖民会社の顧問大谷津直亮を「大谷津直亮」と誤記している。滔天は、「歴」を「亮」と1字間違えただけに過ぎず、同社の顧問は大谷津一人だけなのだが、大谷津直亮の存在を知らない上村氏は、「大谷津直亮」は、「大谷某」と「津田直亮」の2人の氏名が合成されたものであり、同社の顧問には「大谷某」と「津田直亮」の2名から成っていたと誤解し、次の注記をしている。即ち、「なお滔天の『暹羅殖民始末』では顧問の2人を「大谷津直亮」と一人の人物に合成する過ち(印刷ミス?)を犯している。津田直亮はいうまでもなく熊谷直亮である。(上村希美雄『宮崎兄弟伝(日本編上下)』(華書房、1984年、321頁)、と。上

村氏は自分が知っている「津田(熊谷)直亮」という名から、1人の名前を2人分に分けてしまおうというトンデモない推測に走ったのである。

なお、熊本県土族で国権党の暴れ者であった熊谷(旧姓、津田)直亮(1863-1920)が、1893年12月に岩本千綱を頼って、殖民調査のために来タイしたことは本誌2012年8月号に記している。

上村氏のミスは、歴史研究で完璧を期すが、困難なことを示す一例でもある。

蛇足ながら付け加えれば、最近、内外の歴史学者を自認する人達が、金魚のフンよろしく数千人も、数百人も連署して東アジアの問題に意見書を公表することが流行っている。彼らのうち、署名した文書に書かれてい

ることを、資料に基づいて自分で検証したことがある人は何人いるのであろうか。また、日本以外の東アジアの人々と日常的に接した経験もなく、彼らの生の行動や規範意識についても知らない人達が、大胆にも日本の対東アジア政策について提言するとはおこがまし過ぎはしないだろうか。筆者には、厳密な検証作業を自らすることなく無責任に付和雷同する人や、判りもしないことを大言炎炎として発言する人は、歴史研究者とは認め難い。

連載 ⑥  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(52)

早稲田大学アジア言語研究科教授  
村嶋英治

### 三国探検実記の復活

岩本千綱著『暹羅老撾安南三国探検実記』(博文館、1897年9月刊、以下『三国探検実記』と略す)は、岩本の著作の中で、現在最も広く知られているものである。

その歴史を振り返ってみると、刊行後間もなくして、同書も岩本の名も、一般の日本社会から忘却されてしまったようである。彼の名が、紙上に再び現れたのは、日本軍の南進時代である。1943年9月に、堀場正夫の「東亜の先覚者」という解説付で、三宅書院が『三国探検実記』を再版した。同時期には、岩本千綱の名をタイトルに掲げた唯一の伝記であると思われる、住江明『南進の偉人、岩本千綱』(室戸書房、1943年)も刊行された。住江については、

高知県在住の小学校教師でアマチュア詩人、同県出身の山下奉文と岩本千綱の伝記を書いたという点にしか判らない。住江は同郷の利点を生かして、岩本に関する資料を発掘したのではないかと期待が生じるのは当然だが、読んでみると全くの期待外れで、内容に新味はない。タイトルだけが魅力的という、タイのみならず日本でもしばしば見かける、中身の薄い出版物の類である。

『三国探検実記』が、三度目の脚光を浴びたのは、植村直己などの冒険が日本のマスコミを賑わした1980年代である。注目されたのは、戦時中の南進とは異なり、今度は、岩本の冒険探検であった。

紀田順一郎氏が『生涯を賭けた一冊』(新潮社、1982年)で、「初期探検家の栄光と挫折、

岩本千綱『三国探検実記』(同書33158頁)を取り上げた。同氏は、ほぼ同一文章を、自著『名著の伝記』(東京堂出版、1988年)および『紀田順一郎著作集、第6巻』(三一書房、1997年)に再録している。但し、この3点を通して驚くほどの新事実は何ら含まれていない。

同じく1982年には、『人はなぜ旅をするのか 第八巻 残された空白への挑戦』(1894-1920)『(日本交通公社出版事業局、1982年)の112-1128頁に、あまり正確とは言えない解説を付して『三国探検実記』の要約が掲載された。

1988年には、1897年版の『三国探検実記』そのものが、『明治シルクロード探検紀行文集成 第13巻』(ゆまに書房、1988年)として復刻された。

復刻版は、当然オリジナルと同一であるから、原本が読みたい読者には便利である。但し、何の解説も付されていない。

更に1989年11月には、公文庫の一冊として、『シャム・ラオス・安南 三国探検実記』が、金子民雄氏の解説付きで発行された。この文庫版は、難読漢字を減らし、句読点も付するなど原本より読みやすくなった利点はあるが、一方で著者である岩本の用語を尊重せず、注記もないまま別の意味の語に変更している箇所も僅かといえ存在するので注意が必要である。また、金子氏の解説には、1980年代のタイの地理や事情に少しでも通じた人なら誰でも首をかしげざるを得ないことが書かれている。例えば、「ここ「コーラート」からは真北のメコン河畔のノンカイまでの間に見える、大きな町チャ

ナボット、マクヘンもいまは地図には見えない」(同書207頁)、「この十年間に限っても」即ち、1980年代、私「金子氏」のタイ内陸部の旅はざっと数万キロに及ぶはずであるが、私の乏しい体験からしても、ジャングルや草原地帯ではいつも水不足で苦しめられた。森林地帯は減ったとはいえ、幾日も人に会わないことも珍しくなく……」(同書208頁)、と。筆者も30歳代の1980年代には、10万キロ位はタイの田舎を旅したはずだが、水不足で苦しめられた経験などは一回もないし、チャナボット(正しい発音はチョンナボット)に至っては、1975年2月の東北タイ初旅行で通過して以来、何度も立ち寄った。この地名を欠いた地図帳を探す

方が難しいだろう。  
なお、この文庫本は現在絶版だが、古本は「日本に古本屋」や「アマゾン日本」などのサイトで、送料込みでも千円未満で容易に入手できる。  
三国探検実記はその後も時々、雑誌等で紹介されているが、省略する。

### 三国探検の理由

1897年初版『暹羅老撾安南三国探検実記』の緒言は次のように始まっている。

「余は明治廿九(1896)年十二月廿日山本銀介氏と俱に暹羅國盤谷府を發し翌二十年四月九日安南國東京(トンキン)河内(ハノイ)府

に出でたり此行通過せしは暹羅、老撾、安南三国跋涉せし山河は無慮一千二百七哩(約1942キロ)の間に一百十一日の日子を費しぬ

由來此地は日本人の足跡未だ到らざるのみならず歐洲人の稀に旅行する者あるも數十人の護衛兵を随へ天幕、糧食其他の日用品を携帯するを以て例とせり蓋し猛獸、毒蛇の害は言を待たず群盜屢出でて人を殺し時に森林熱「マラリア」猖獗を極め、命を預(おと)すもの十中八九なるを常とすれば勢ひ之れが防禦法を講ぜざる可からざればなり而して翻(かへ)つて余等が此難境苦域を通過せし情態如何を顧れば身に寸鉄を帯びず藁に一錢を貯へず純然たる

二個の乞食坊主に過ぎざりし調(おも)ふに世人は此行を評して或は無謀なりと笑ひ或は山師なりと嘲るものあらん然れ共今日に於て余は之を弁するの必要を見ず茲に聊か此行を想ひ起せし願末を述ん

続いて、岩本は生い立ち、陸軍将校を辞した経緯、来タイ後の経験、殖民事業の失敗、領事館設置運動などを述べている。これらは、本連載で詳しく検証してきたので省略したい。更に続けて、ビジネス志向から三国探検に転じた動機、同行者、資金、準備などについて次のように述べている。

「同年(1896)東京の某々氏等暹羅國と貿易を開かんとして余をして其事に与らしむ仍(よつ)て余は東道主人となり主任者某氏「馬場新八」と共に盤谷に到る事成るに垂(な)んなんとて余は某氏「馬場新八」等との間に意見の衝突を來し其結果終に相互の關係を絶つに到り隨て計画亦た敗る

於是か静思黙考(おもへ)らく從來余が為し來りしものは毎(つね)

に其長所を棄てて短所にのみ走りしを以て屢々企て屢々敗れ事終に此に到る之れ予め期する所にして又た誰をか恨みむ一に余が所為の方向を變ずるに坐するのみ眼を放てば今や東方の形勢益々切迫し來り就中暹羅の國歩日々艱難に陥る而して此の國の存亡は東方の大勢に關する所実に妙からず然れども未だ一人の実踐上之に對する方策を講ずるものあるを聞かず余は素より熟知す殖民の事業商業の計画は疎放余が如き者の能く為す所にあらず加(し)かず將來余は得意の点に向て運動せんにはと心終に此に決し先づ進んで暹羅の内地に入り此國に重大なる關係ある北方仏蘭西新殖民地老撾を跋涉して轉じて東方安南東京(トンキン)に向ひ到る所の人情風俗地理宗教其他万般の實況を視察し一は以て自ら資すると共に同感者の參考に供する所あるらむと胸中の画策已に成れども只た之に要する資金の出所なきに苦しみしが百方熟慮の末終に意を決して湖南「メナム」河畔のバンケラ寺に投じ髪を剃て僧と成る蓋し余が今回跋涉せんとする地方の人民は何れも大に

仏教を尊信し僧侶を遇する甚だ厚く苟も僧籍に身を投ずるものは托鉢によつて旅行を為し且つ盜賊等の危言を避るを得る事を知ればなり

同行者山本銀介氏は名古屋の人明治廿年(マ)始めて暹羅國に遊び同國實業學校に入り専ら文学言語を學ぶ方今日本人中暹羅の人情風俗に通曉し其言語に習熟するもの蓋し氏を以て第一となす氏会々(たまたま)余が遠征の企てあるを聞き進んで其行を俱にせんとす蓋し氏は日本東京に在るの日榎本子爵北澤正誠氏等より高岳法親王の御遺跡搜索の依頼を受けたる事あれば其事を知るの便を得んとしたるものにして余亦た日本臣民の本分として相共に極力搜索に従事する事を約し氏は余と同じく僧侶となれり

余は北進の途に上るに先づ余が第一の恩人たる農商務大臣陸軍中将スリサクデーモントリ「スラサックモントリ」侯に問ふに此行に對する侯の意見を以てす蓋し侯は皆て老撾

の土匪「ホ」を征し五ヶ年間該地方の各所に転戦し頗る其地理風俗等を詳知すると余が從來暹羅に於て為せし仕事は悉く侯の指教を乞ひしとを以てなり然るに侯は大に此拳を費し懇切に指導する処ありしが又た行路の危難を慮て曰ふ此の道中たるや數十人の護衛と万般の準備とを整へて行くにあらざれば種々の危険を脱(のが)れ難し然るに今や足下等は身に寸鉄を帯びず同行(わすか)に二人を以て此途に上らむとす其危険固より知るべきなり恐らくは足下等未だ暹羅國境を超へざるの前に於て命を預(おと)すに到らん乍去足下等強て之を為さんと欲すれば文部大臣寺院局長バスカラウラウングス「バーサコーラウオン」侯に乞ひ治道の各寺院に告示書を發せしめ行途の便を計るを上策とすと余等謹で其

教に従ひ去て寺院局長バ侯を訪ひ備(つふ)さに語るに余等が希望を以てす侯曰く余は能く足下等を知るものにして又た其拳を費す然りと雖も僧侶として旅行するには一通りの説經儀式位は知らざる可からず否(し)か」らざれば余は寺院局長の職務上告示書を出し難し若し是非共足下等の志を遂げたくば幸に余に屬する寺院「ワット・フランユン」あれば三四ヶ月間之に滞在し僧務を修めて然る后出發さるる方得策ならむと余等此に到り頗る困却せしも侯の性質は兼て知る所に於て懇請の到底徒勞に屬するは明なれば心(ひそか)に決する所あり獨に諾して其場を去り翌二十日(1896年12月20日)一封の書を侯に残し突然盤谷府を發足





し此に千里遠征の途を開けり  
余等盤谷を発足するに際し行李と  
して携帶せしは

鉄鉢一個、毛布一枚、編纂一本、  
キニーネ、口口エン各一瓶、宝丹一  
個、磁針器一個、地図一葉、及び日  
記用の紙筆墨のみ

この記述は、本誌9月号25頁  
に掲げた岩本の告別の辞と大体  
同内容である。

### 宮崎滔天筆の三国探検の背景

岩本千綱・山本鑑介の三国探  
検の背景を語つたものとして  
は、宮崎滔天のものもある。上  
記の岩本自身のものとは大部  
ニュアンスを異にするが、宮崎  
が南蛮鉄の筆名で、国民新聞1  
897年2月3日号に載せた、  
以下の「盤谷雑話(二)」である。

#### 「新米の日本紳士」

昨年「1896年」は暹羅に取つ  
ては実に好望なる年にて從來未だ曾  
て其例なき程の紳士は来遊せられた  
り 此れ唯在留日本人の名替たる而  
已ならず実に日暹兩國間の将来に於

ける好運の先驅とこそ言ふ可し 其  
人を誰とかなす 一つを独逸林學博  
士代議士中村弥六君となし他を海軍  
少佐馬場新八君となす

中村弥六君は昨年十二月(マ)  
馬場新八君と船を同ふして来り盤谷  
第一等の旅館なるオリエンタル・ホ  
テルに投宿せらる 其目的は軍艦材  
買入の爲めなりと注せられたれども  
漫に商用の爲め而已ならず大に其他  
にも又意味ありしことは我輩が推察  
する處なり 氏は先づ盤谷に於ける  
各国公使領事を訪問して其暹羅に對  
するの意向を伺ひ而して後に暹羅の  
現大臣を歴問して談する處ありしもの  
の如し 其何事を談じ何等の觀察  
を遂げて帰國したるや我輩原(も)  
とより窺知する處にあらずれども  
兎に角日本の代議士として政治家と  
しての地位信用は十分保持して帰國  
せられたることは疑を容る可からざ  
るが如し 其材木買入契約の一条よ  
りして裁判沙汰となりたるが如きは

或ひは是をハケ間敷論するものあら  
んなれども原より左様に氏の地位と  
信用とを損するに足らざるが如し

馬場新八氏は岩本千綱氏を嚮導と  
して来り五十万円を以て組織せられ  
たる日暹貿易商會「正しくは日暹貿  
易會社」の代表者として吹聴せらる  
其嚮導則下の運動に至つては敏捷  
活発大に好況を呈し来りしと雖も  
中頃岩本と馬場の間に利害感情の衝  
突を生じ 其上偏僻狹量なる在留日  
本人の私意的妨害に逢ふて殆んど補  
綴強辯す可からざるの醜体を暴露せ  
り 其事情由來を一々細々と説明  
するの要なき而已ならず 是をなせ  
ば他の私行を摘発するの部に陥るを  
以て今是を言はず 併し中村氏の成  
効と馬場氏の失敗を以て合せて是を  
差引勘定すれば暹羅人の日本人に對

する感情に於ては寧ろ得る處多くし  
て失ふ所少からんと思はる 詰り幾  
分の益ありしや疑なし

岩本千綱山本鑑介「二氏僧となつ  
て千里の遠行を企つ

二氏世を棄てて僧となる 其由縁  
相同じからず 岩本氏は事業に失敗  
したるが爲めにして山本氏は失恋の  
人となり世を果なみて斯くは発心し  
たるなり

岩本氏が落髮して僧となりしは已  
に暹羅と云ふことに断念したるなり  
已に暹羅に断念したりとすれば我が  
農商務大臣「スラサック」より受  
けし浅からぬ知遇に對しては何を以  
て是を酬ゆる可が 幾千の金員を与

へて殖民の事業を計設せしめたるス  
リサック「スラサック」侯に對して  
は何を以て其責を逃(のが)る可き  
か 氏は如何にもして捲土重來の策  
を建てて前敗を償ふに足るだけの事  
業を挙げざる可からざりし也 是を  
以て苦心經營して終に五十万圓の資  
本を以て日暹貿易商會(マ)なる  
ものを組成せり 我輩は日暹貿易の  
爲め又日本人の信用の爲めに此業の  
成功を祈りたり 而も惜む 禍(わ  
ざはい)終に墻(かき)の内に起り  
岩本氏をして起つて自ら將に成功の  
緒に就かんとするものを破壊せしむ  
るに至る 已に破壊せらる 馬場氏  
は勿々帰國の途に就く 岩本氏は如  
何に我身を処す可きか 帰らんか氏  
將「は」た何の面目あつて日本に帰  
る可き 留まらんか何の面目あつて  
暹羅に留まつてスリサック侯に見  
(みま)へ在留日本人に對せんや  
是に於て氏は断然決して寺院に入り  
髪を剃り肩を落し法衣を着けて仏界

の人となれり 是れ氏が暹羅の恩人  
に對し日本の知己に對するの申訳な  
り謝罪なり 今に於て氏の失行を列  
挙して世間に暴露するが如きは是屍  
に鞭つの類なり 我等は寧ろ其人の  
無情冷血無神経を憐れんと欲す  
山本の出家は甚風流なり小説的な  
り 今其以爲(マ)を語らんに天  
草出来の醜態婦にお鶴とやら云ふ女  
あり 丈短く鼻低く口大に前額突出  
して色黒けれども盤谷四十人の醜業  
婦中にて第一の美人として名聲甚だ  
喧し 山本此女に恋愛の情浅からず  
屢々足を運び文を以て心情を訴ゆれ  
ば彼亦大に意あるが如き有様にて一  
時は山本も大に得意となり百二十度  
「授氏約49度」以上の上臈なりしが  
能く能く儲(たしか)めて見るに  
彼の女実山本に意あるにあらず

山本と同居し居る美少年君に愛情甚  
だ切なるあり 唯山本を介して其美  
少年君に近かんことを希望したる而  
已之を聞いたる山本如何でか驚か  
ざらん 一時は無念の涙にかきくれ  
て狂氣の如くになりたれども 頼む  
女は吾が恋人先きの少年は吾友人の  
ことなれば我れ今中間に挟まれてぶ  
ちこわすも男氣なければとて無念を  
押へ涙を隠して兩人を引合せ首尾能  
く三々九度の盃を済ませた處でサデ  
は我が身も世に望みなければとて髪  
を剃り肩を落して法界に仏心を祈る  
の人となりたり

鑑介と云へば在留の日本人皆目し  
てチボの提灯持の如くに日(原  
(もと)より一種の悪徒(しれもの)  
に相違なけん しかも女に對して真

念未だ減せずとすれば彼も亦可憐の  
人なる哉

敗軍の入道岩本千綱失恋の出家山  
本鑑介も其得意の時代には同じ日本  
人中にも言を卑ふし礼を辱ふして来  
り求むる人こそありたれ斯く成り果  
つれば誰一人の顧みるものなく甚し  
きに至つては却て以て快となすの人  
さえあり 惜も人情輕薄の世にあらず

岩本が得意の虎髯もイカクリの頭  
髪もオボツカナキ眉毛も見事に剃り  
落し身には法衣を着けて他の鑑介出  
家と共に悄然とし我(マ)を来り  
訪ひし時は余(マ)は氏が前非を  
忘却して同情の感に堪へざるものありたり

氏は斯の如くにして農商務大臣ス  
リサック氏及文部大臣ビヤパー「フ  
ラヤー・パーサコーラウオン」を訪  
ふて從來の厚情を謝し告別の意を告  
ぐ スリサック氏は氏を見て其心底  
を察して大に同情を寄 前途の事な  
ど語つて其行を壮(さかん)にし且  
つ種々の便宜を与へて其意を慰めたり  
と 在留の日本人が岩本氏に對する  
の感情と農商務大臣の氏に對する



の感情其差異果して如何 一つの同胞日本人にして彼の如く 一つは異郷の人にして猶且岩本の為めには少なからざるの損害を受けたるものにして斯の如し スリサツク侯の如きは実に得難き人傑なる哉 ビヤパー氏は氏を見て三洋九洋して(暹羅に於ては僧侶は俗人に対して礼をなさざれども俗人は貴族と大臣を問はず皆敬礼を施さざる可からず)一度は驚き一度は恐れて遂に言なかりしと云ふ

同氏等出発の前夜は来つて我等の寓に一泊せり 一同眠に就て時正に夜半ならんとする頃何か物音して余が目を醒す 何事ぞと声掛ければ飯介物音に「一寸衣物を貸して呉れ」と云ふ 何を為すと問へば「今一度お鶴の顔が見たい 許して呉れ衣物を貸して呉れ」と云ふ 此生奥坊主と曰ひざま手近の得物を以て打一打すれば合掌頓首して此法身に対して打つことだけは許して呉れと曰ふ 岩本は此物音に驚き目醒して飯介何事をなすと曰へば「イヤ今一度お鶴の顔を見んと欲す」ヨセヨセと岩本之を制すれども聞かざるを以て遂

に八ネ起きて飯介を踏付け是を打ち懲す 飯介泣いて憐を乞へども聞かず 力を極めて之を打ち恐怖閉口して言なきに至つて止め一夜を言い明かし夜の明るを待つて飯介を携へて飄然として去る 嗚呼彼等今果して何の処にか漂ふ 其初心を貫徹し探検の目的を達するや否や一つ疑問なりと雖も兎に角此一般の活動は彼の生涯の一階段なるに相違なし余は実に彼の成功を祈つて止まざる也

上記「盤谷雑話(二)」の筆者は、前半では「我輩」、後半では「余」と称している。普通の文章なら、「我輩」も「余」も、官崎のことである。しかし、ここでは、「余」が官崎ではないことは確実である。なぜなら、文中で岩本千綱と山本鑑介は、パンコクを出発する前の晩(即ち1896年12月19日夜)に、

「余」の家に泊まったと書かれているが、本誌2014年6月号にも書いたように、官崎は1896年6月に海外渡航株式会社(の在バンコク代理人の任を授け出して日本に帰つたままであつたからである

官崎滔天は、平山周・益田三郎のチャチャンサオ山中の探検談を、あたかも自分が探検したかの如く書いていたことを、本誌9月号で指摘した。この文章も複数人(その内の一人は岩本の筈)のバンコクからの手紙を使って、恰も自分で見てきたかの如く書いたものである。官崎が岩本の手紙を使ったと

推測する理由は、日暹貿易会社設立に失敗したのちの岩本の気持ち、例えば、もうタイに関わることはやめたとか、日本に帰るに帰れず、バンコクにも留まるにも留まらない苦境など、は岩本からの手紙がなければ書けないことだと思われるからである。

岩本がこの時点で、一時的ながらタイに完全に見切りをつけた事実は、次号以下で紹介したい。

なお、中村弥六が「其材木買入契約の一条よりして裁判沙汰となりたる」と、官崎が書いている件は、中村が「自ら暹羅に航して直接彼地に於て仕入をなし、直輸入の先鞭を付けられたはいいが、根が商売慣れた人でないから、ビルオフレディングであつたかインボイスであつたか欠けたものがあつて、横濱の税関でこたつた」(吉田義季編『林業回顧録』、大日本山林会、1930年、官崎彌九の回想11頁)ことを指しているのであらう。

連載⑦  
パンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(53)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

2016年2月

1月号で、岩本千綱と山本鑑介が、1896年12月に三国探検に出た背景について、①岩本の三国探検実記の緒言と、②官崎滔天の盤谷雑話とを紹介した。両者の間には、山本鑑介の評価、パーサコーラウオンの反応など、について大きな隔たりがある。その当否については次号以下で検討することとして、その前に、もう一つ、三国探検から100年近くを経た1990年に書かれた、岩本・山本の三国探検の理由を述べた文章を紹介しておく。

### 岩本千綱の最初の妻

従来知られてはいなかったよ

うだが、岩本千綱は軍人時代に、勝村米(よね、1867-1919)と最初の結婚をし、その間に一人娘千代子(1886-1907)が生まれた。千代子は大坪元治郎と結婚し長男元治(もとむね、1906-)を産むが、翌年乳癌で早世した。元治のむすめが、大坪治子氏である。

治子氏は、『暹羅老婦安南三国探検実記』岩本千綱の身辺(『新人物往来社』歴史研究、第351号、1990年7月号、58-64頁)と題した論文の中で次のように書いています。

千綱の妻千綱の妻の名は「米(よね)」、慶応三年東京麹町平河町に勝村鉄次郎、津(つ)の一人娘として生まれた。生家は古くから麹町で「蜜鉄(むらてつ)」と称した人入(ひといれ)稼業で、白井権八の手紙が残されていたのを見ると徳川中期以前から続いていたらしい。旗本の次男三男を大名各家に就業させたり、

参勤交代の大名江戸入りに際し所定人員の臨時の調遣給仕をするなど民間の職安の役目である。母津の女は旗本から養子を迎え娘米をもつたが夫の若死で未亡人となり家業を継いだ。気文な津の女は、丸儲を島田にかえて床几に腰をかけ若者に槍の振り方や草履の投げ方等御屋敷奉公に必要な技の稽古などをさせたという。一家の墓は四ツ谷駅近くの心法寺にあり格のある土地に建てられていた。今も子分の墓二基に守られている。

一人娘 米はおつとりとした江戸前の美人で何と自由なく育ち、千綱とうぐいすが縁で恋愛結婚をする。その間の経緯は当時一世を風靡した大島伯鶴の講談「明治の快男子」のモデルに書かれている。この本の舞台となった菓子屋と隣りの屋敷とは現在の麹町平河町二丁目で、平河天神の西隣りの辺と考えられる。主人公「仁礼半九郎二十歳陸軍中尉」と同じく千綱も二十七歳で中尉になっており、この年あたりで十八歳

の米と結婚したものと思われる。明治十九年一人娘「千代子」の誕生、翌二十年一家が新潟新井田に在った時、事件が起きて停職となり、翌二十一年東京にもどつて来た。千綱と一家の苦難の歴史がここから始まるのである。

その後の千綱の動きは種々の本に記されているように、しばしばアジア諸国を訪れ南方経緯者として活躍、国内でもその志をアピールするが彼の言葉に耳をかく者が少なかった。しかし国内外の要人の援助協力のもとタイ国との間に種々の交流交易の実現に尽力することがよく失敗に終わる。己の不明を顧み見最後の仕事に命を賭けた千綱は意を決して出発に際し妻を離別、戸籍を抹殺している。

離別された米は娘をつれてすでに廃業していた麹町の母津の女のとこへ帰り旧姓勝村に戻った。米は千綱の行動については何も知らされていなかったが、西郷従道(陸軍大臣、明治十八年には農商務大臣)の口き

きで大隈重信や上流階級の家庭にお茶・生花・礼儀作法を教えるとの名目で生活の面倒が見られた。皆当時日本を代表する陸軍の要職を占めていた人々である。当時女の髪結は女中の役目であったが、手の器用な米がついでに髪を結ってあげたのが縁で、大正時代美容師としてならした荒木トキ女史は米の助手として良家に入りし、後の仕事の基礎を作った。後年娘みよさんの「当時の勝村家について」の思い出話に、トキさんは最後まで米につくし、「旦那様は御国の犠牲になられたお方です」と語った。娘千代子が成長するまで千綱から送金があったが、ある時は遅れて、できたての背広を送られて来て「お金がないのでしょ」と米が涙ぐんで抱いていたとも語った。これらの話を総合し、また『三國探検実記』の中に日本より帰国要請をハノイにて受け取ったとの記述など

考え合わせても、この旅はアジア情勢把握のため陸軍上層部よりの特命であつたと考えられる。  
一人娘千代子は日本メタル原型彫金の草分け大坪元治郎(号小山秀民)との間に明治三十九年長男「元治」(もと)と「る」をもうけ、翌年二十一歳にて乳癌で死亡。翌四十一歳母津るにも先立たれた米は千綱の血をひくただ一人の孫元治を麹町平河町で育て、学齢期に達すると新しい母の待つ父の家の大坪家に返した。その後米は大正五、六年頃大阪に知人を頼って移ったといわれているが、大正八年大阪市上本町で五十三歳で没している。麹町のお嬢様育ちの米がどうして大阪に縁があったのか知る由もないが、千綱が大阪堺で死んだらしいと後年聞いたことがあるので(未確認である)それが事実であるなら晩年二人は何らかの接縁があっ

たのかも知れない。米の死んだ翌大正九年十二月十九日千綱は食道癌を病んで没す。六十三歳。その場所、墓、戒名等は不明である。(同上論文62頁)  
364頁 本誌2015年6月号に示した岩本千綱の旅券取得の記録では、2回目のタイ行きのために1893年5月20日に下付を受けた旅券の申請書の住所は「東京市麹町区平河町4丁目12番地寄留」と書かれており、これは妻よねの生家である可能性が高い。

仁礼半九郎のモデルは岩本千綱?

治子氏は、千綱とよねのウグ

イスが縁での恋愛が、著名講釈師大島伯鶴(1879-1946)の講談「快男児」の仁礼半九郎と雪子の恋愛のモデルになった、講談中の恋愛の舞台は、よねの住所であった麹町平河町であると断定しているが、これは講談「快男児」の成立の経緯を見ればはなはだおかしい。

越智治雄(1929-1998) 3) 東大教養学部教授の遺稿に、「快男児と快男児」(『国語と国文学』第60巻12号(通巻719号)、1983年12月号)という論文がある。その中で越智は

次のように記している。

『昭和二十年の新聞のラジオ欄を見ると、今とは違って、片隅に小さく詰め込まれているのだが、夜七時の頃に報道後としてしばしば講談が取り挙げられているのが目につく。その中で、五月三十一日に「連綿講談「快男児」(一)」とあり、以後六月十九日に「快男児」(終)」と出るまで、連日ではないが、数回にわたって「快男児」の名が見える。演者は大島伯鶴、昭和二十一年四月に没したこの人の高座に実際に接する機会が多くなかったが、伯鶴の名を記憶し、講談の面白さを知る契機はこのラジオ放送においてであった。無骨な仁礼半九郎がふとしたことで隣家の娘雪子に恋をするという、この講談の初稿はよく出来ていて、講談の魅力に富んでいるから当然としてもほかにも一席だけは「快男児、待て」という切り場の口調も記憶に残っている。

「快男児」は一般に好評だったらしく、早速、山本嘉次郎の脚本・演出により藤田進・原節子の主演で「快

男児」として映画化された。ところが、完成したのが「昭和」二十年九月六日、敗戦後だったから、「占領軍により公開延期」を命じられ、恋の風雲児」と改題の上、封切られたのは二十八年四月四日だった。……

ところで、講談「快男児」には、れっきとした原作がある。著者は西村天囚居士、書名は「怪男児」、明治二十六年四月の刊である。「怪男児」は政治小説の一つに数えられているが、その講談「快男児」は現在も読まれる唯一の政治小説に基づく講談である。『怪男児』から「快男児」まで、題名の変容が示すように、この作品は八十年の余を生きつづけてきたのであって、今日、天囚の原作を知る人は必ずしも多くはないだろうが、語り継がれた快男児仁礼半九郎のイメージはなお鮮かなのである。「怪男児」は明治二十五年「大阪朝日新聞」掲載の新聞小説である

……新日本島の部分に明らかになように、「怪男児」は南進論に根ざした政治小説であると共に、プロットが変化に富んで物語的興味が大きいから、次第に享受者の層を広げて行くことになった。

原作の西村天囚『怪男児』(明治26(1893)年4月刊)に添って、粗筋を見てみると、

時は、明治6年(1873年)9月24日に西郷隆盛が征韓論に敗れて参議・近衛都督を辞する直前。女嫌いで知られた、25歳(1931年版講談では27歳)の薩摩人、怪力無双の陸軍中尉仁礼半九郎は、練兵場がある市ヶ谷本村町の駄菓子屋の二階に下宿していた。ある日、恋人の如く可愛がっていたカナリアが逃げて、隣家の庭に飛んで

いった。隣家は、長谷部という大きな酒屋で、庭には本村小町と評判の高い女学生の雪子がい。仁礼に頼まれて、雪子はカナリアを捕らえてやろうとするが却って迷がしてしまふ。一連の雪子の仕草に、仁礼は恋煩いにかかつてしまふ。大隊長に告白して、その仲介で雪子と婚約することができた。結婚式を間近に控えた日、師の西郷隆盛が下野し、仁礼も従って鹿児島に帰らざるを得なくなった。雪子は自分の櫛を贈り、何年でも待つと約束した。しかし、仁礼は帰京することができない。明治10年の西南戦争で奮戦及ばず、西郷らと城山に追い詰められた仁礼は、自害に一人反対して敵の重包囲を逃れて生き延びた。その後、14、15年間、島々で漁夫や屋久島で炭焼きとして身を隠した。屋久島で官有林盗伐の罪で逮捕にきた横柄な巡査を山中で殺したことから同島を逃れ、九州本土に渡って小倉の帆柱山の洞穴で10数日間、自炊。人里離れた山中から発する煙を村民が恐れ、遂に小倉署の搜索を受けて引張られてしまった。取



り調べに唾の振りをして釈放された仁礼は、尾行を巻くため関門海峡に飛び込み、山口側に泳ぎ着いた。岡山の後楽園まで来た仁礼の前を、大足遊び中の山崎が、何人もの芸妓を連れて行き過ぎようとした。その中に、雪子と瓜二つの芸妓、糸遊を見つけた仁礼は、山崎らの後を追った。山崎の泊まる一流旅館に何とか上がり込んだ仁礼は、糸遊に確かめて雪子の娘ではないことが判った。しかし、芸妓衆にせがまれた仁礼は、雪子との馴れ初めから別離、その後の長い逃亡人生を語る羽目になった。襖の陰で仁礼の話を聞いていた山崎は、仁礼の話にすっかり参ってしまった。山崎は、深川木場の羽振りのよい材木屋と称していたが、実は盗賊であり、英雄崇拝者であった。山崎と仁礼は、海外雄飛を約して結盟の同志となった。山崎の金で紳士然とした服装に替えた仁礼は、山崎と共に大阪の某高級旅館に

泊した。その女将が実に別人と結婚していた雪子であった。しかし、仁礼の問いに、雪子は知らぬ存ぜぬを通した。怒った仁礼は、別離以来肌身離さずにいた、雪子の櫛を折って投げ捨ててしまった。間もなく運悪く仁礼は警察に捕らえられ、終身刑となり他の極悪囚人とともに九州の炭鉱で働かされた。ところが、囚人同士の喧嘩が絶えず、仁礼を含む百人の囚人は、北海道空知に送られることになった。博多からの多々羅組の汽船「隠岐丸」(1931年版講談ではロシア船)に積み込まれた。神戸では更に別の囚人グループも加えられたが、その中には偶然山崎も含まれていた。囚人たちは、仁礼を頭目として船中暴動を起こして

20数名の看守を皆殺しにし、船を奪って南に逃げた。そしてニューカレドニア島とニュージランド島の中間の百平方里「約1600平方キロ」程度の無人島に流れついた。囚人らは仁礼の指揮の下、この島を新「ニュー」日本島と名付け、椰子林や石炭を開発すること8年。生活は豊かになったが、運行できる船がないため、日本との連絡は不可能であった。嵐にあったドイツ軍艦を助けた際、仁礼は日本政府宛に新日本島を日本領とするようにという嘆願書を託した。その文書に曰く、「今や鋭意進取の時にして姑息優安の秋にあらず国威を海外に輝す実に版土

の拡張に在り況んや其富比なき新日本島の天与に出るをや天の与ふる之を取らずんば我に損あるのみならず糧を敵に資するの愚を見ん且つ人口は日に増し月に殖ゆ四千万は五千万に至らんこと期して待つべし僅々二万四千余方里の島國能く之を容る可らず早く殖民地を海外に求めて威と富とを並取めざる可らず其地我新日本島より便宜利なるはなし」と。仁礼とその手下の囚人は、全員新領土獲得という功績により恩赦を受けた。日本に帰った仁礼は、貴衆両院議員に向けた新日本島に関する講演に向かう途中、弊衣をまとった老女とその孫に遭遇した。嫁ぎ先の高級旅館が火事に遭い零落した雪子であった。仁礼は、有り金を渡した。その7、8日後、仁礼は鹿児島島の西郷隆盛の墓前にて自刃して果てた。

著者の西村天因(1865-1924)は、種子島生まれで1887年に東大中退後、90年に大阪朝日新聞に入社し、92年同紙に怪男児を連載、93年に単行本として出版した。西村はその後同紙の主筆等を務め、また、朝日新聞のコラム「天声人語」

の名付けの親でもあるようだ。

前掲越智論文によれば、西村天因原作の刊行直後から『怪男児』は新派壮士劇で演じられ、講談でも取り上げられ、何人かの講釈師が演じたようである。大島伯鶴の講談怪男児が確認できる最初は、1913年1月号の『講談世界』に於てであるという。そして残っている伯鶴の最古の怪男児は、大島伯鶴講演・今村次郎速記「怪男児 仁礼半九郎」『娯楽世界』第3年11号、1915年11月号、113-126頁)であるという。

この1915年版では仁礼中尉は、25歳、下宿先は麻布本村町となっている。

『評判講談全集第十二巻』(大日本雄弁会講談社、1931年9月、1-220頁)に収録されている、大島伯鶴「快男子」では、仁礼は、27歳、市ヶ谷本村町の湖月堂という駄菓子屋の2階に下宿している。

そこで問題は、西村天因が1892年に自分が働く大阪朝日新聞に連載した『怪男児』において、岩本千綱とよねとの間に1886年以前に麹町平河町で

生じた恋愛をモデルにしたかどうかである。天因の原作にも、1915年版以降の大島伯鶴の講談にも、治子氏が言うような麹町平河町という地名は出てこない。更に、西村の執筆地となる大阪と東京は遠く離れているし、時間的にも6年以上の隔た

りがある。モデルにされた可能性は、殆どゼロだと思われる。治子氏の両親の世代が、1920-40年代に伯鶴の快男子の講談を聞き、伝え聞いている千綱とよねの実話に似通った部分もあることから、元談半分は快男子は千綱とよねがモデルだと語ったことから、治子氏がそのように思い込んでしまったものではないだろうか。

千綱はホンモノの軍事探偵?

冒頭に引用した治子氏の文章で、もう一つ合点がいかないのは、岩本千綱は軍上層の特命を受けて、即ち日本国の軍事探偵として三国探検に1896年末に出発したという話である。そのために千綱は、「妻子を離別、戸籍を抹殺」し、軍の要職者が、国に殉じた千綱の妻よねの「生活の面倒」を見たという。小説の世界ならあり得る話かも知れないが、現実の資料をもとに考えると正に荒唐無稽である。まず、千綱の戸籍は抹殺され

たことはない。千綱は1896年の後、1916年まで少なくとも9回旅券の下付を受けている(本誌2015年6月号参照)が、その大部分で申請書に高知市の本籍を明記している。また、この時代、軍が官命で海外に機密任務の人員を派遣する場合、参謀本部は秘密保持のため外務省から白紙旅券を取得したのち、参謀本部の手で氏名等の必要事項を記入していた。もし、岩本が本当に軍事探偵として1896年末に三国探検に派遣されているのであれば、彼の名が旅券下付表に残ることはあり得ないのである。しかし、岩本千綱が会社(日通貿易会社)設立

を目的として暹羅に渡航するた  
めに、1896年10月8日に実  
名で旅券下付を受けたという記  
録は、外務省外交史料館所蔵の  
旅券下付表のなかに厳然として  
残っている。

更に、大隈文書A783に外  
務省に対する「岩本千綱氏暹羅  
国旅行目的報告書」(www.wu.  
wasada.ac.jp/kotenseki/html/  
114/114\_a0783/index.htm)が  
保存されている。もし岩本が、  
軍命を受けたホンモノの軍事探  
偵であれば、三國探検から帰国  
後外務省を訪ねて、以下の文書  
に記されたような売り込みをす  
る必要もなかった筈である。

「岩本千綱氏暹羅国旅行目的報  
告」(明治30年8月10日)

政務局

大臣、小村(印) 秘書官 三  
橋(印)

乙秘第七九一号 八月十日

岩本千綱暹羅国に於ける心事

岩本千綱は暹羅国内を盤谷より出て  
中央を通過して仏領ラウス「ラオス」  
地方へ入り百三十日間無銭徒歩  
(二僧の姿にて)ハイボンに出て夫  
れより香港に渡りて日本に帰るた  
彼の目的とする所なりと云ふを聞

くに仏国をして暹羅国を占領せしむ  
るにありと云 其の理由は仏国は安  
南地方並に先年占領したるラウス地  
方のみにては年々費す所莫大にして  
得る所極めて少なるに依り到底暹  
羅全国を占領せざれば止まざる目的  
を以て該政府は常に其の用意を怠ら  
ざるなり現にラウス地方へ仏国より  
派出し居る地方官の談話と云ひ又其  
の土人を以て頻りに兵備を為す等  
を見ても其の占領に意あるは明白なり  
其の機に乗じ岩本は仏人と謀り白  
仏(人民相互に)結合將に大に為  
すあらんとする所あり 事既に急に  
迫り居れるは英國は或は暹羅国皇子  
を其の本国に引寄せ或は女皇六十  
年祭を奇貨として暹羅国王を倫敦へ招  
き將來の爲め密約をなす杯 之を占  
むるに余念なし 仏国にして早く決  
行せざれば遠からずして英國の先  
行する所たるべし 今日本にして仏国の  
急を助け置かば仏国亦日本に対する  
暹羅国内の殖民其他百般の事業に付  
快く報ゆる所あるならん 来る十  
月再び僧徒数名を従ひ彼の地に渡り  
仏人と謀り為すあらんとするにあり  
と云 彼は無銭徒歩シヤム口「暹羅」  
国通過の際仏領地内地方官知事其他  
軍務官等に面せし折りも彼等は皆岩  
本を目するに決して僧視せず軍人の

僧化したるものとして皆厚遇し暹羅  
国占領談に涉りたることも数度あり  
しと云。  
これは岩本が1897年8月  
10日に外務省政務局を訪ねて  
語った内容を大隈重信外務大臣  
に報告した文書である。この文  
書には、三橋信方(1856-  
1910)秘書官、小村寿太郎  
(1855-1911)外務次  
官の認印がある。岩本はフラン  
スの更なる暹羅奪取に協力し  
て、分け前を貰うべきだとい  
う陰謀話を打ち明けた。  
もしこの話が、岩本の心事な  
らば、岩本は、タイ高官の世話  
になりながら、平気で裏切った  
ことになる。宮崎滔天が盤谷雜  
話の中で、「岩本氏が落髮して  
僧となりしは已に暹羅と云ふこ  
とに断念したるなり」と書いて

いることを、前月号で紹介した  
が、岩本はただ暹羅に見切りを  
つけただけでなく、恩を仇で返  
す陰謀までも企んだことにな  
る。岩本は、暹羅と仲良くする  
のも暹羅から奪うのも日本の利  
益のためだと答えるであろう  
が、その行動の一貫性のなさ  
は驚くばかりである。  
出発予定を2ヶ月後に控えた  
岩本の外務省訪問の意図は、外  
務省に資金をせびるためだった  
と見て間違いないであろう。岩  
本が軍の支援を得ているなら、  
必要のないことである。三國探  
検から帰国後の岩本の支離滅裂  
な行動と信用失墜については、  
次号以降に記したい。

連載 ⑥  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(54)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

記、アジア歴史資料センター  
レファレンスコード  
03030117000。

宮内庁編明治天皇紀 第六  
(吉川弘文館、1971年)の  
明治19年(1886年)10月2  
日の項にも、「彰仁親王軍事視  
察のため、其の妃頼子を同伴し  
て横濱港を發す、親王先づ米國  
を経て、英・仏・獨逸に抵「いた  
り、更に露・澳・伊諸國を歴遊  
せんとするなり、而して各國歴  
遊には陸軍中將の資格を以て  
し、各國帝王と交歓の際には皇  
族の資格を以てせしむ」(同書  
639頁)と記されている。

前月号で、1896年末の三  
國探検時の岩本千綱は日本軍が  
派遣した軍事探偵であつたとい  
う、岩本千綱の曾孫大坪治子氏  
の推測を紹介し、その推測は当  
たつてはいないことを説明し  
た。更にこれから数回で、18  
93年から97年にかけて日本陸  
軍参謀本部(川上操六参謀次長  
が実質責任者)は、タイに4組  
の軍事情勢視察員を派遣して、  
現場で収集した豊富かつ確度の  
高い情報を有しており、188  
8年4月停職処分を受けた後同  
年12月に「依願免本官」となつ  
た、はぐれ者岩本千綱に軍事探  
偵を依頼する必要性には乏し  
かつたことを示したい。

4組の視察団とは、1893  
年の①上原勇作少佐・山田良國  
(よしまろ)中尉 ②大迫尚道少  
佐、1896年の③川上操六中  
将一行(伊地知幸介中佐、村田  
惇中佐、明石元二郎少佐)、1  
897年の④福島安正大佐であ

る。日本近代史に関心がある人  
には、山田を除けばなじみの将  
星たちであろう。4組ともチュ  
ラーロンコーン王に拝謁の機会  
を得ている。  
近代日本とタイとの軍事交流  
の始まりは、1887年11月の  
前近衛都督小松宮彰仁親王の訪  
タイにまで遡る。一方、タイ側  
からは、1890年7月にチュ  
ラーロンコーン王の実弟パーヌ  
ランシー親王が軍事視察のため  
訪日したことが始まりである。  
上記4組の訪タイについて紹  
介するに先立ち、話の順序とし  
てここでは先ず、小松宮彰仁(あ  
きひと)親王(1846-19  
03、小松宮という宮号は18  
82年から)の来タイについて  
見ておこう。

小松宮彰仁親王の訪タイ経緯

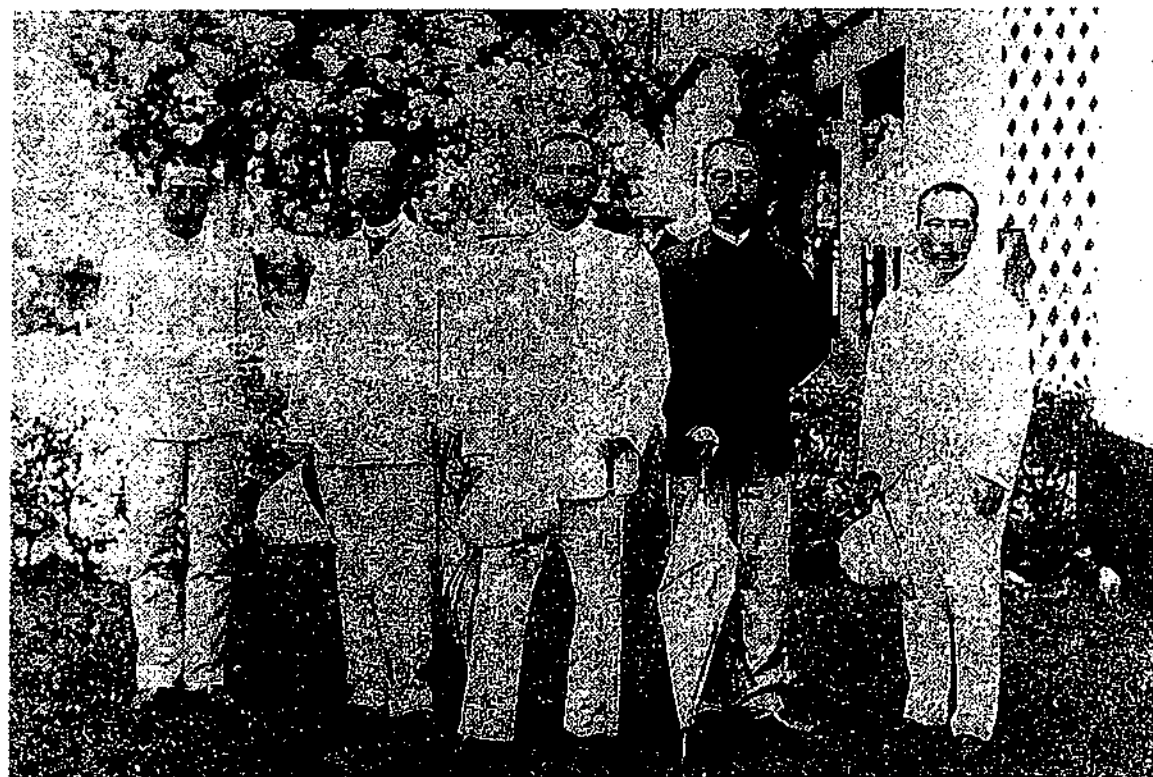
小松宮の当初の計画は、「明  
治19年「1886年」10月2日

横浜出帆、米國を経て英國、仏  
國、獨逸、露國、奧國「オース  
トリア」、伊國、巡回、20年11  
月仏國馬耳塞「マルセイユ」出  
帆歸國」という、欧州軍事視察  
であり、タイ訪問は予定されて  
いなかった。小松宮は同紀連れ  
で、別当三宮義胤(さんのみや、  
よしなね、1844-1905、  
近江國の真宗の寺に生れ、幕末  
尊皇攘夷の志士として岩倉具視  
らと交流、1870年彰仁親王  
の英國留学に随行、1877-  
1880年ドイツ公使館勤務、  
1883年宮内省に移り、18  
95年式部長、1896年6月  
男爵、陸軍歩兵中佐立見尚文  
(1845-1907、桑名藩  
士、戊辰戦争で幕府側の指揮官  
として名を上げる、投降後西南  
戦争・日清日露戦争で軍功あり  
男爵、大將に)、陸軍歩兵太尉  
伯爵坊城俊章(1847-19  
06、公家)等が随行した(防  
衛省防衛研究所、「陸軍省大日

小松宮一行は欧州からの帰路、  
タイに立ち寄って大勲位菊花大  
綬章をチュラーロンコーン王に  
捧呈することを命じられた(國

426

2016年3月3日



1897年1月10日、バンコクのオリエンタルホテル前の参謀本部員（磯長海洲撮影）、左から明石元二郎少佐、伊地知幸介中佐、川上操六中將、村田惇中佐、福島安正大佐（村田保定編『明石大將越南日記』日光書院、1944年）

て一大勢力を成し隠然たる可からざる者あるに非ずんば、能く此の如きを得ん而して軍人の士氣能く此極に達する所以の者他なし。獨乙皇帝は兵權を主裁するの義を明にし、武官の進退黜陟「ちゅつちよく、功無き者を退け功有る者を用いる」を親らし、又其待遇を厚ふし其愛撫を尽くすを以てなり」として、続いて兵權を一手に握る獨皇帝が、文官に比して軍人に如何に名譽を与え、優遇しているかを具体的に述べている。

ドイツは日本の軍國主義の主要なモデルであったようだ。帝王の無制限な兵權、即ち天皇に直屬する軍部は誰からも干渉されない獨立した統帥權を持つてゐるという理論が、その後半世紀もしないうちに、國を誤る根源となり、日本近代の榮光を悉く失う亡國に至ることにならうとは、彰仁親王も思い至らなかつたであらう。

『歐國軍事見聞録』の716-720頁に、「暹羅國軍」と題して、タイ軍隊について、ドイツ、ロシアに比せば極めて簡単な以下の記述がある。

「全國常備兵五千人、内千人を近衛兵とす」

從來壯兵の制なりしを本年より（二千八百八十七年）徴兵の制を定むと云ふ

男丁十八歳より四十一歳に至る迄兵役の義務を有せしむ

現役 四年  
予備役 七年  
常備役 十三年

當國產出の馬匹は小にして軍用に適せず（我對州「對馬」産の馬匹に均しかるべきの想を為せり）然れども馬車を挽き又は乗用と為に足る我一行盤谷府に着するの際警部の如き者軍馬に騎し先驅を為し或時は文武の官僚等此馬に騎し打獵の遊びを為しあるを見受けたり

騎兵凡一小隊盤谷府に在り此馬匹は歐洲産を用ゆ然れども往々病を發し毛色を變じ久しきに堪へるもの少しと云ふ蓋し氣候炎熱飼養未だ其法を極めざるに因るなるべし

軍事小銃はスナイデル、マルチニの二種混交す

野砲はクルップ、アルムストロングの二種とす

砲車を挽くに未だ一定の制規なく象を以てすると車馬を用ゆると或は人力に因る等時の便宜に付すものと云ふ或る式日に砲み祝砲を發するに當り現に兵卒等繩を以て砲車を挽き出すを目撃し戊辰の昔時を想ひ起したるにき

立公文書館2A/18/任A19  
2『明治二十一年、官吏進退、外國人叙職一』、『暹羅國式部長官クロムーン、プラー、チャク親王外八名叙職の件』。即ち、彰仁親王の訪タイは、出發後追加された用務であつた。

出發から14ヶ月後の小松宮一行の帰國は、前掲『明治天皇紀第六』の明治20年（1887年）12月5日の項に、「彰仁親王及び其の妃賴子歐洲より帰朝し、入京、參内す、天皇、皇后と俱に御内儀に於て親王・同妃に謁を賜ひ、又表御座所に出御、隨員小松宮別當三宮義胤・陸軍歩兵中佐立見尚文・同歩兵太尉伯耆坊城俊章等に謁を賜ふ、又親王の第に就きて樽酒・交肴を賜ひ、帰朝を祝したまふ」（同書848頁）と記されている。

小松宮及び同妃の出迎へのために、チュラーロンコーン王はバンコクから船を派遣した。1887年10月30日にシンガポール着予定の小松宮一行を迎えるべく、バンコクを出迎船バンコク号が発ったのは、10月25日である（『タイ官報、第4巻』240頁、1887年10月31日号）。小松宮及び同妃は、11月9日にバンコク着、宿泊所はサ

ラーナロム宮殿であつた。

翌10日に隨員5名（三宮、立見、坊城、有馬、松岡）を従えてチュラーロンコーン王に拝謁し、國書と大勲位菊花大綬章を捧呈する任を果たした。11月12日には、王族及び文武百官が出席したチュラーロンコーン王の即位記念日（チャトラモンコン）の式典に招待されタイ王族の紹介を受けた（『タイ官報、第4巻』257-259頁、1887年11月15日号）。11月14日には、小松宮及び同妃のために國王はグラントパレスで晩餐會を開いた。16日小松宮一行は、バンコクを發つてサイゴンに向かつた（『タイ官報、第4巻』261-262頁、1887年11月23日号）。

小松宮一行は1週間の在バンコク中、チュラーロンコーン王から極めて盛大な歓迎を受けたのである。

小松宮一行の見たタイの軍隊

帰國の翌年刊行された、彰仁親王編『歐國軍事見聞録』（出版者記載なし、1888年12月

序）の序文1-4頁で、帰國後再び近衛都督に復職した同親王は次のように述べている。

「彰仁軍事視察の命を奉じ明治十九年十月閣下「朝廷」を辭して歐米各國を巡視すること凡そ十有四月月明治二十年十二月を以て帰朝す其初め命を受けるに當てや竊「ひそか」に以為らく軍事視察の事たる範圍廣大固より僅少の日子を以て能く其詳細を尽す可きに非ず宜く難重を考へ緩急を慮り其重くして急なるものを先にすべし況や身皇族の末に列し職近衛都督を忝ふす須く帝室と軍隊との關係を明かにし其維持の方法を審みすべし是に於てか到着の處専ら之が調査に従事し其要領を得んことを勉めたり」

夫れ帝王の宣戰調和の全權を掌握し以て國軍の大元帥たるは共和國を除くの外世界普通の制法なり彼の英

國の如き政治の大部は幸て内閣主相（マ）に一任したるの政体と雖ども兵權に至ては決して之を他に委せず陸軍總長は必ず皇族を以て任ずるの制たり而して皇族は多く身を兵籍に列ね兵馬の實力は一に皇室の掌握する所なり英國にして已に此の如し其他諸國は推知すべし而して今回の視察中最も彰仁の希望を充たし又我に適切な模範を与へたるは獨乙國の右に出るなく獨乙國に次ぐ者たり是調査の特に獨乙國に精しくして他國に略したる所以なり獨乙帝國の歐洲の中原に蟠踞し古來已むなきの戰亂に凋弊せず以て今日の隆盛を極め觀望あること獨乙國の如く強兵あること獨乙國の如く文物の富盛なること獨乙國の如く而して未だ一歩も侵し得ざる所以の者素より賢相良將の明主を輔佐するの致す所なりと雖ども然れども軍人の忠君愛國の精神凝集し





他國に比類なきは象徴とす往昔は之を戦列に用ひ今を去る百余年前ヒルマ國との戦に當り象徴の功最も多きにありしと云ふ當今に在つては輜重用に供するのみ象の大小に従ひ六人乗り若くは四人乗りなるあり弓矢劍戟等の兵器を携持し首筋、背、臂に分れ乗るものとす

現に十余頭の象武装し分別式の如く行進するを一見したり此際其傍らに近づくを禁じたりし若し見馴れざる者に出て進歩時は鼻を以て擁護すことありと云ふ

陸軍一ヶ年定額二十万磅

兵食は米食にして炊爨「ママ、饅」の方法等我國に異なることなし唯補食は油を用ゆるもの多きが如し

兵舎の構造(官府盤谷に在るを云ふ)及服装は歐洲風に從ふ

當時丁抹「デンマーク」國人大尉某を聘し陸軍の教育を任す官府盤谷に在り其教育を受ける生徒凡百名あり此生徒卒業の後之れを各地方に分ち各地方兵團の教育を任せしむるの計画なりと云ふ當國上流の人を除く外概ね満足なり右生徒の如きも練兵を為すに満足にてありし然れども其室

内には靴の装飾しあるを見たり

往昔日本人の當國に居留し在る者等國風に臨み今「ママ」の王家に力を致し其功不鮮「すくなからず」其由緒を以て或る地方軍隊の内に日本義勇兵隊の名稱今日に存すと云ふ蓋山田長政の事なるべし

毎年十一月十二日當國の記念日にして我紀元節の如し當日の式場は宮殿の傍らに在る寺堂「エメラルド寺」に於てするを例とす新たに敷等に叙し若くは進級するの類必ず此日に於てす此日國王始め武官の百官式場に臨むに當り大礼服の上に被ふに日本服「ママ」を以てするを旧例とすと云ふ幸ひに我一行滞在中此式日に際會するを以て式場に臨み所謂日本服と稱し来るものを目撃するを得たり

其日本服とは地質紗「シヤ、目の粗い絹織物」又は絹「口、透き目のある薄絹織物」の類にして(熱帯地方の故に地質は薄を用ゆ)金糸を以て種々紋様を縫付其形は我陣羽織に似て袖の有るあり袖の無きあり日本

服と稱するも敢て由縁なきに非るべく見認めたり。

上記に言う「日本服」とは、チュラーロンコーン大学の学位授与式で卒業生らが着用している薄く透けたような白色のガウンに金ピカの長い布帯を付した、クルイ(クルイ)のことである。確かに見方によつては、和服に似ていないこともないが、当時これを一般に日本服と言つていたものかどうか。日本人の國情なので、和服の知識があつたタイ人通訳が日本服と表現しただけではないだろうかと思われる。

よつてピークに達した。

同年7月13日夕刻、フランス軍艦2隻はタイ側の禁止にもかかわらず、チャオプラヤー川河口に強引に侵入し、河口のタイ砲台と交戦、撃破したのち、バンコクまで進出した。これがパークナム(河口)事件である。すでに3月からバンコクにあつた一隻を加えた、3隻の砲艦を背景に、フランスは7月20日に、メコン川左岸(現在のラオス)の割譲、200万フランの賠償金などを内容とする最後通牒を突きつけ、受諾しない場合は、海上封鎖をすると言言した。(詳しくは村嶋英治「タイ近代國家の形成」、『東南アジア史① 大陸部』山川出版社、1999年、参照)。

事情に通じぬ人は、パークナム事件は、日本から遠く離れたバンコクで生じた小規模な局地紛争であり、日本にとつては対岸の火災に過ぎなかつたと輕視するかもしれない。しかし、それは大なる見当違いである。タイとフランスの戦争の帰趨は、東アジア情勢を大きく変化させ、日本に与える影響は大き

1885年6月に清仏戦争に勝利したフランスは、ベトナムを獲得した。間もなく、フランスは、タイ領土であつたラオスに食指を伸ばし、1888年からタイとフランス領土との境界地域で両軍の小規模な衝突が始まつた。両國の緊張は1893年7月のパークナム事件に

### 1893年7月 パークナム事件の 日本への衝撃



在盤谷仏國公使館引込之義に關し本日仏公使來省本國政府より別紙之通電報に接し候趣き陳述致候

暹羅國政府は仏國政府の要求を承諾不致候に付仏政府は盤谷駐劄公使に公使館引込を命じ暹羅國海岸之封鎖を命じ候

右は追て正式公書を以て日本政府へ照會可致害に候得共不取敢口頭を以て及御通知候

同草案1893年7月29日の項、

乙の二

在独逸大迫少佐より總長宛左の電報を發す

仏蘭西暹羅事件遅れり小官は後任者を待つ過なし而して直に暹羅に発するを命ぜられんことを希ふ旅費は何卒電報を以て御送付ありたし

乙の二

右に對し左之通り總長より大迫少佐に電令す

仏蘭西暹羅事件に付ては別に將校を派遣し置けり貴官は後任者の着を待つべし(七月三十日)

乙の三

暹羅事件に關し左の通新嘉坡齊藤領事代理より電報ありし旨陸奥外務大臣より川上參謀本部次長に通報す

仏國水師提督は暹羅の封鎖を布告し七月廿八日より実地之を施行す右

いと判断した日本陸海軍は直ちに行動を起こした。その緊迫感、数奇な運命によつて敗戦の亡國時にも日本軍による自己湮滅を免れて生き残つた貴重な史料、參謀本部歴史草案(防衛研究所圖書館 中央/作戰指導その他)9「明治二五―二七年參謀本部歴史草案(15―17)」中の、「明治二十六年參謀本部歴史草案 十六」から十分に窺うことができる。

同草案の1893年7月26日の項、

乙の二

參謀總長より左之通り上聞す

一、今般獨逸國公使館付陸軍砲兵少佐大迫尚道公使館付被免歸朝被仰付候に付歸朝途次來廿七年三月歸朝の目的を以て暹羅安南及ヒリピン島を巡視し兵事に関する事項視察調査せしめ候事

同草案の1893年7月27日の項、

乙の二

仏國公使盤谷引込に關し陸奥外務大臣より有栖川宮總長より「ママ」左之通り通報す

乙の三

暹羅事件に關し左の通新嘉坡齊藤領事代理より電報ありし旨陸奥外務大臣より川上參謀本部次長に通報す

仏國水師提督は暹羅の封鎖を布告し七月廿八日より実地之を施行す右

之為めシンガポールに於て米価大に動揺す

參謀本部歴史草案のなかで、上記パークナム事件のよう、外交電報まで引用して參謀本部の動きを詳しく記した事件は珍しい。

タイ仏の衝突の報に接した陸軍參謀本部は、直ちに同部員の陸軍工兵少佐上原勇作と陸軍歩兵中尉山田良國(よしまる)にタイ・ベトナム出張を命じ、またベルリンの日本公使館付陸軍武官であつた陸軍砲兵少佐大迫尚道に帰任途中にタイ・ベトナムなどへの立ち寄りを命じたのである

一方、海軍も1893年8月2日に「常備艦隊軍艦高千穂軍事視察の為暹羅國へ派遣」を決定し、また、「海軍大尉藤井較一軍事視察の為暹羅國出張」させ、タイに3ヶ月間滞在させることを決めた(アジア歴史資料センターレファレンスコードB07090484900、C10125436400、C10125341900)。

しかし、上述參謀本部史草案の1893年8月6日の項に記す、下記の外交電報が届いたこ

とで、タイ・フランス間の緊張緩和を知った海軍は、高千穂艦の派遣と藤井較一(1858-1926、岡山藩出身、日露戦争海戦で功績、最後は大將)の出張を取りやめた。

『明治廿六年八月六日』

暹羅国の封鎖撤去之儀に際し在香港宮川領事代理より左之通り電報ありし旨陸軍外務大臣より有栖川宮参謀総長に通報す

仏国水師提督より当港駐在回國領事へ電信を以て本月三日暹羅の封鎖を撤去せし旨通知あり而して暹羅は仏国の要求を全然承諾して平和回復せるに依り暹に日本より香港に來航し一令を待て即時南航すべき準備を整へ居たる英國軍艦も速に北帰すべし

### 上原勇作少佐 山田良圓中尉の訪タイ

陸軍の上原勇作・山田良圓は既に7月26日にタイに向け旅だつていた。

元帥上原勇作伝の年譜には次のように記されている。1893年7月22日「安南及び暹羅国

に派遣せらる、同年7月26日「東京出發、安南行に上る」、同年11月12日「安南暹羅の視察を終へて帰朝す」(荒木貞夫編『元帥上原勇作伝 下巻』、1993年、元帥上原勇作伝記刊行會)。即ち、日本を發つてから日本に戻るまで、110日間の出張を実施した。

また、当時参謀総長であつた有栖川宮熾仁親王(1835-1895)の日記の明治26年(1893年)7月24日の項にも、「参謀本部副官陸軍工兵少佐上原勇作・同第二局出仕陸軍歩兵中尉山田良圓を今般暹羅安南地方へ出張被仰付、明後廿六日出発之事」(熾仁親王日記 卷八、高松宮藏版、1936年、257頁)と記されている。

上原勇作(1856-1933)は、宮崎県都城出身、1879年12月士官学校卒(旧3期)、81-85年フランスに派遣留学し、帰国後工兵の近代化に努めた。1892年8月参謀本部副官へ、後に1912年陸軍大臣、1914年教育総監、1915-1923年参謀総長、1921年元帥・子爵であり、軍閥の中心人物の一人である。

石光真清(いしみつ・まきよ)『城下の人 石光真清の手記』(龍星閣、1958年)は、1890年当時、近衛歩兵第四連隊に所属していた山田良圓について次のように描いている。「私(石光)が所属した中隊は第一中隊で、中隊長は小林大尉、中隊付には沢崎正信、山田良圓と云う二人の中尉がいた。この山田良圓中尉は語学が好きで独仏語に通じていたが、戦術には一向に興味がなかった(同書213頁)。

に仕え同殿下に好印象を与えたこと(同殿下は帰国後そのように報告している)が、1893年7月のタイ派遣員に選ばれた理由となったものと思われる。奇しくも、上原も山田も陸軍士官学校旧3期生(1879年12月卒業)であり、岩本千綱と同期である。山田に至つては1873年2月に土佐から岩本らと共に土佐藩の洋学校海南私塾入学のために上京し、その後も陸軍幼年学校、士官学校を岩本と共に過ごした人物であつた。



連載 ⑤  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(55)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

1893年7月のタイ・フランス衝突に際し、参謀本部は上原勇作少佐・山田良圓中尉の2名を、タイ・ベトナムに派遣し3ヶ月間調査させたことを、前月号で紹介した。上原少佐と山田中尉は、岩本千綱と陸軍士官学校同期生(1879年12月卒、旧3期)であつた。

川上操六中将一行の来タイ

川上操六中将一行(伊地知幸介中佐、村田惇中佐、明石元二郎少佐)の出張を、明治天皇紀の1896年9月25日の項は「参謀本部次長子爵川上操六を台湾及び安南・東京(トシキン)地方に差遣せらる、蓋し戦後の経営並びに施設に資せんとするなり」(官内庁『明治天皇紀、第九』吉川弘文堂、1973年、126頁)と記している。ここに言う戦後とは、日清戦争の戦後のことである。即ち、1895年4月17日の下関条約で、清国は朝鮮の独立を承認し、台湾・遼東半島を割譲した。しかし直ぐに起こった露独仏の三国干渉で日本は5月4日には遼東半島を清に返還することを余儀なくされた。一方、新領土台湾に対しては、日本軍は95年5月から11月にかけて平定戦を行った。

その後、1896年4月1日に大本営が解散された。その僅か半年後に、川上一行は、台湾の経営、台湾への施策のヒントを得るべく、フランスのインドシナ植民地を視察したのである。一行のタイ訪問は、インドシナ視察の付けたしのように見えるが、テーフウオン外相に会つて日タイ通商航海条約締結交渉の進展を促すことなど、それなりの重要性を有していた。

なお、タイには未だ日本公使館が存在していなかったため、川上一行のタイ視察は、全て駐タイ・フランス公使を通じてテーフウオン外相と連絡のうえ行われた。三国干渉でロシアのお先棒を担いだフランスには、日本国内でも反発が強かった。それにも増して、タイではタイ仏事件とその後のフランスの横暴、進行中の圧迫に極めて強い反感、今風に言えば極度の嫌仏

感が上下に燃え上がつていた。そのなかにおいて、フランスに頼つたのである。川上一行がタイのフランス公使館の世話になつたことは、次の叙戦からも判明する。

「暹羅國總督府駐劄法國西「フランス」國井理公使ドフランス以下三叙戦の件

暹羅國總督府駐劄法國西共和国井理公使ドフランス以下別紙三名は先般参謀本部次長陸軍中将子爵川上操六暹羅國へ軍事上視察として被差遣候際懇篤なる待遇を為し且つ予て同國在留帝國臣民の保護は仏國公使に委任せられ居候事故同國政府に対する紹介は勿論其他諸般の便宜を与へるに平素熱心に我國民の利益を計る等其尽力不効依て此際叙戦の機陸軍大臣子爵高島綱之助より申立候に付御報酬の聖意を表彰被遊夫々頭書の通り叙戦被仰出候様仕度此段謹て上奏す。

明治三十年三月十五日外務大臣伯爵大隈重信  
勲二等瑞宝章、暹羅國總督府駐劄法國西共和国井理公使ドフランス

7月7-10  
2016年4月

[L'Affaire]  
勲四等旭日小綬章、同国同府駐在公  
蘭西共和国領事シャルル・ハルドワ  
ン [Charles Hardouin]  
勲五等瑞宝章、同国同府駐在公蘭西  
共和国領事、ルフェヴル、メラー  
ル (国立公文書館 2A/17/勲24  
「明治二十年、叙勲、外国人、巻三」)  
本上奏は、3月19日に裁可さ  
れた。なお、叙勲理由の一つ、  
在タイ日本人の保護をフランス  
に委任している件とは、日本政  
府が1895年9月14日から在  
タイ日本人の保護をフランス政  
府に委託した件である(クルン  
テープ2014年7月号の拙稿  
参照)。  
明石元二郎少佐 (1864-  
1919、福岡藩出身、日露戦  
争時の対露謀略で有名、大将・  
男爵) が、川上中将に随行して  
台湾、仏領印度支那、暹羅を巡

視した際の備忘録的日記が残さ  
れている。この日記は、189  
6年10月13日に始まり、翌年1  
月29日(帰路上海着)で終わっ  
ている。  
明石元二郎の上述日記は、崩  
し字の手書きであり、判読は必  
ずしも容易ではないようであ  
る。この日記は、2回印刷され  
ている。1回目は、村田保定(当  
時貴族院議員、男爵)編『明石  
大将越南日記』(日光書院、1  
944年11月)という名称に  
よってであり、2回目は、中京  
大学社会科学研究所台湾史研究  
センター編(檀山幸夫・東山京  
子編著)『明石元二郎関係資料』

(中京大学社会科学研究所、2  
010年3月)の第2部に「明  
石元二郎日記」として、である。  
後者の説明では、前者村田保定  
編『明石大将越南日記』の刊行  
は、戦時中であり検閲により省  
略された部分もある、遺族  
から日記のオリジナルの提供を  
受けて読み直して再刊したとの  
ことである。しかし、両者を読  
み比べたところ、前者の暹羅の  
部分には省略はなく、かつ後者  
の判読者は、崩し字解読力が不

十分で、明石の崩し字を誤読し  
て、意味を為さなくなった部分  
が相当箇所あるので、前者の方  
から主に引用する。  
さて、『明石大将越南日記』  
によると、川上操六中将一行は  
1896年10月15日に神戸を出  
帆、22日台湾基隆着。日本領有  
間もない台湾各地の軍隊、治安  
行政、学校等を視察。澎湖島を  
経て11月15日厦門、19日  
汕頭、11月20日香港に滞  
在。25日香港を発ち、28日朝ハ  
イフォン着、ハノイ及び清国と  
の国境に近い「Bassac」(諺山)  
省で要人と会い、軍政・民政、  
兵士リクルート、軍事情報、兵  
營、産業、病院、工場など視察(ハ  
ノイでは邦人に会ったという記  
録はない)。12月7日にハイフォ  
ンを船で発ちツーラン(現ダナ  
ン)へ、10日サイゴン着。当時  
未だタイ領であったアンコール  
ワットに向かうため16日サイゴ  
ンを鉄道で出発しミトーより川  
船に、ブノンペン(南旺)を経て、  
18日シエムリアップ着。19日  
日牛車でアンコールワット、ア  
ンコールトムなど見学、タイ側  
官吏がバンコクからの訓電で換

撈に来た。22日船でPrestを  
経てメコン河を通りブノンペン  
に戻り、ブノンペン・ホテルに  
泊まる。12月23日の項に、ブノ  
ンペンの王宮の貧弱さ、大臣達  
の服装の粗末さを書いたのち  
「日本婦人五六名当地に在り」  
(96頁)と記している。  
ブノンペンにも、からゆきさ  
んが営業していたのである。な  
お、近代日本人のアンコール  
ワット訪問史において、川上  
一行の1896年12月訪問は、最  
も早い部類だと思われるが、明  
治期に一番最初にアンコール  
ワットを訪ねた日本人は誰なの  
だろうか。  
一行は1896年12月26日に  
船でブノンペンを発ち、27日サ  
イゴン帰着。31日サイゴンの印  
度支那銀行で4000円をメキシ  
コ銀に交換、ドナイ号(396  
トン)でバンコクに出発。18  
97年1月3日チャンタプリー  
着、4日バンコク着、フランス  
公使館近くのオリエンタルホテ

ルに入った。「日本の写真師にて  
磯長(海洲)と云へる人あり中將(川  
上操六)を知る。迎への為め来り居  
れり」とあるように磯長海洲が  
ホテルに出迎えた。磯長も川上  
操六中将も、共に鹿児島県士族  
であり旧知であったので、事前  
に連絡が取られていたのであ  
る。  
1月4日の項に磯長から聞い  
た次の話が記載されている。  
「フカノン(フカヌン)に若本(宇綱)  
の連れ来る三十余名の内、十八名行  
く、内生きて還る者僅に五人(鉢山  
試堀の為めなり)。若本は先達でコ  
ラット(コーラート)の方に赴くと  
て行けり。元来同人当地にて失策し  
たる故、罪滅しのため僧となり行く  
とて、吹聴せり。然れども實際は当  
地に彷徨し居るとの説あり。日本商  
人の当地に居るもの五軒、即ち都筑  
(雑貨店・桜木(雑貨店)・阿川(雑  
貨店、ヨモチャ多し)・大山及其支

店(雑貨店)是なり。大山は自金に  
あらず、日本に行き人を説き金を出  
さしむる。大阪より帽子屋杯(三人  
来りたることあり。鉄道は盤谷より  
バクナン(バークナム)に通ず。  
距離二十吉羅(キロ)。之をバクナ  
ン鉄道と稱す。ヘンラップ(ピンラッ  
プ)迄工事鉄道運轉す。距離二百八  
十キロ。盤谷よりアジッチャ(アユ  
タヤ)迄六十哩。日本人は賤業婦を  
除き、二十人内外なり。バンバイ  
ンに難民あり。磯長(海洲)の談  
(107-108頁)。  
若本が参謀本部の軍事探偵で  
あったなら、参謀本部幹部のバ  
ンコク到着(1897年1月4  
日)を待つことなく、その2週  
間前(1896年12月20日)に  
バンコクを発つて三國探検に出  
ることがあり得るだろうか。

また、明石は「暹羅風土・人  
情及兵備・国力の判断」と題し  
たメモの中で、バンコクの日本  
人の境遇に付いては、上記1月  
4日の記事を見るように指示し  
たうえ、「目下当地の主なる者を  
挙げれば写真師磯永(磯長)海洲、  
建築師佐々木寿太郎(伊太利人と組  
合ひ政府の請負をなし居れり)其他  
大山周造(周蔵)外数名の雑貨商あ  
るのみ。是れとても素より充分の力  
はあるまじと考へらる。日本人中尤  
も長く居るものを山本某(安太郎)  
となす。文部大臣(バーサコーラウ  
ン)の奴隷なりとて、余り評判は宜  
しからざる如し。其他当地にて為す  
べき事業は、家屋外の労力は到底我  
日本人に適せず。寧ろ手先の仕事及  
家屋内の仕事が適当なるべしとの事  
なりき。若本(宇綱)石橋(馬三郎)  
等の事は、頗る評判悪し」(124頁)  
と記している。  
1月5日の項「午後七時頃旅  
館に帰り、磯長海洲の家に日本食を  
なす。同人(磯長)は当通羅駐在の  
日本人中には最も有力にして、其産  
業も亦た日本人中には殆んど首位を  
占むる者の如し」(114頁)。  
1月8日の項「帰宅の後磯長  
海洲及佐々木寿太郎来訪し、長椅子  
に倚り平間に談話す」(117頁)。  
1月9日の項「午後磯永(磯長)



と共に写真を取るため、舟にて瀾南「メナム」川を下る。午後七時より磯永の家に晚餐す。佐々木寿太郎来り居る」(一七頁)。

1月10日の項「佐々木寿太郎訪問す。正午福島「安正」大佐新加坡より来る。……午後九時兼て日本人一同と約束しありしを以て、日本人会に臨む。会合したる者一行及福島大佐を合し総計十八名なりし。大山周造「周蔵」の家にて此会をなす。可なり立派なる家なりし」(一八頁)。

1月11日の項「午前磯永・佐々木・大山及「安正」来訪し、乗船準備に急がし。農商務大臣「スラサックモントリ」来訪す。仏国公使を訪問す。乗船の際福島大佐は機嫌悪。磯永・佐々木は船にて、其他日本人にて見送る者多し」(一九頁)。

### 泰國日本人会の 本会の起源は1896年

右記1月10日の項にある「日本人会」とは何であらうか。  
1894年8月26日に、石橋

禹三郎、佐々木寿太郎、山本安太郎、大山兼吉、島崎天民、田山九一、松野恭三郎(岩本千綱は帰国中)らによつてパーン・サーラーデーンで発会式を行った、在タイ日本人の最初の団体である日通協会については、『タイと共に歩んで』(泰園日本人会百年史)(2013年)の拙稿にも記している。しかし、1896年後半にバンコクで結成された「日本人会」については、未だ十分には紹介してはいないので、ここで説明を加えておきたい。

『盤谷雑話(一)』南雲鉄「宮崎達三、同入南斗星「末永節」近頃暹羅盤谷より帰来り一々吾が寓を訪ふ南斗星「平山周」亦在り矣。共に火鉢を囲み酒を呼んで大に既往を談じ現在を説き将来を談ず。南斗星「末永節」の話中盤谷の近状に関するものを摘録すること左の如し  
○日本人会の組織  
從來盤谷に於ては在留の日本人相会して日通協会なるものを「1894年8月26日に」組織し一切日本人の對暹羅的動作及諸外国に対する云々「うんい、言論と行為」に就て協商たるの便宜を設け居たれども年々星移ると共に種々の事情弊害を醸生(マ)して兄弟鬩牆「けきしやう」

相離反して殆んど其名あつて実なきの有様となり在留日本人の一致協力を欠く而曰か反目嫉視して往々齟齬を外人中に暴露するの面目を呈すること尠からざる次第と成行きたれば今度有力なる日本人更に相会合して新に日本人会なるものを組織したり其趣意は在留日本人の交誼を厚ふし日本人たるの名誉と其勢力を増進して暹羅事業を大成するにあり故に若し日本人にして此目的に乖反するの行為あるものは飽まで之を排斥するは論を待たず新たに來りたる日本人に對しては充分の便宜方法を与へて其希望を遂げしめんことに力を致すは本会の重なる責務なりとする処なり会長には阿川太郎「正しくは太良」氏當選したれども同氏は今度商用を帯びて帰国するの都合となりたるを以て磯永「正しくは磯長」海洲氏其後を承けて会長の任を帯びたり現今我が公使館とか領事館とか云ふ國民の思想を代表し及び同國人の協同を計り新來の士を導くの機關なき國柄に於ては如斯もの基必要を感じずる処なり。  
○日本人の商店  
現今盤谷に於ける日本人の商店は國南商會校木商店大山商店都築(つづき)商店の四となす從來校木商店は盤谷に於ける最古(マ)の商店にして亦其商店の規模より云ふも第

一の地位を占め居たれども昨年「1895年」十一月國南商會主阿川太郎氏の帰盤以來は同氏が非常の敏腕と多数の商品を輸入したることによりて意外の聲譽を博し今は盤谷府中日本商店の牛耳を握るに至れり且つ同氏の信用は暹羅の貴族大臣等に重く今度は色々諸種の注文品を引請けて帰國したれば同氏にして善く其注文に應じて彼國の貴族大臣等を満足せしむるを得ば將來益此商店の好況を呈し来ることは疑ひを容れざる可し我輩は同君のため日暹兩國貿易の爲めに其成功を祈らざるを得ず他の商店も夫々追々土人の信用を得て益々盛大に趨くの徵あるは実に喜ぶ可きことなり」

上記「盤谷雑話」は、1896年6月1日に離タイした宮崎滔天が、末永節(宮崎の帰國後もバンコクに残つて農耕の実験をした)から聞いた、1896年後半のバンコクの日本人について書いたものである。1896年後半に、バンコクで阿川太良、磯長海洲らが中心となつて日本人会を結成したこと、初代会長には阿川が當選したが、仕入のため帰國したので、磯長海洲が跡を継いだことが判る。  
泰國日本人会は、1913年

9月1日を創立日として2013年に100周年を祝つたが、上述泰國日本人会百年史の拙稿にも書いてるように、創立時の模様、規約、会員、タイ政府への登録等に関する同時代資料は何等存在せず、本場に1913年9月に創立されたのかどうかを確定することができる根拠は存在しないのである。そうであれば、バンコクの日本人名士(磯長海洲、阿川太良、佐々木寿太郎、大山周蔵ら)によつて結成され、同時代資料も存在する1896年後半に創立された日本人会を、泰國日本人会の起源とした方がよるしいのではと考えるのは筆者一人であらうか。泰國日本人会が、1895(1896年にコーラート鉄道建設やプカナン金鉱山の工夫などとして働き病死した18人の日本人の慰霊祭を、サラブリーの

グリーンコーイ寺で定期的に実施していることを考えると、なおさら日本人会の創立を1896年とした方が適切なように思われてならないのだが、もしそうすれば、今年は泰國日本人会創立120周年の記念すべき年に当たる。

1896年後半に結成された日本人会は、実際にその後も連綿として続き、1913年若しくは1914年に結成されたという日本人会につながっている。この件については、資料に基づいて後日、詳説したい。

川上一行の5世王拝謁  
川上一行は、1897年1月8日にチュラーロンコーン王

(5世王)に内謁見した。『明石大将越南日記』の1月8日の項に曰く、「午前八時式部長より通報あり。曰く、本日午後四時半内迎の爲め、馬車を宮内省より差廻すべし。午後五時内謁見を賜ふ筈なり。……午後四時半出発 Luang Kosa の案内に因り宮内省に至り、國王の秘書官長皇子某方を周旋す、年齒廿一なりと云ふ。謁拜のときも通弁の勞を執り」(一六・一七頁)と。

この謁見は、内謁見であつたためか『タイ官報』に全く記載がない。また本稿でも何回か引用した、國王秘書長のソムモツト親王(上述の皇子某とは異なるようだ)の日記の1月8日の項は、空白のままである。  
5世王と川上操六中将の会話

の大意は、次の通りである。

○外臣「川上操六」今日陛下に咫尺「しせき、すぐ近く」の意」し拝謁するを得るは、外臣が深く光栄として、陛下の寵遇を謝し奉る所なり。

△朕も亦た貴官並に其随行員を引見するは深く喜ぶ所なり。貴国皇帝・皇后両陛下は如何に遊せらるるや。○陛下の御厚意を謝し奉る。幸に我両陛下も常に御健勝に在せらるることなれば、聖恩を寛ふせられんことを。

△乞ふ、朕が敬意を貴国皇帝に伝奏せられよ。

○度「つつし」んです。

△小松宮殿下は如何に在せらるるや。

○是れ亦た頗る御健勝なり。外臣当に職を殿下統制せらるる参謀本部に奉じ、次長たり。

△三宮「義胤」男爵は、今回朕に美事なる短刀を送りたり。貴官に乞ふ、朕の爲め同男爵に謝せられんことを。

○度んです。

△我國と貴国とは三百年以前、既に交通を開き互に好を通ぜり。然るに中道にして断絶するも執近亦た旧好を修め、益々親密ならんとす(國王は温顔笑を含み語り給ふるを喜ぶ。今回は何れを旅行せられしや、又た尚是れより他の国土に旅行を継続せ

らるるや。

○此度は、台湾、東京(トウキン)、交趾支那、東埔寨を経てアンコール等を巡歴し来れり。是れより直に帰國致す心算なり。

△亜細亞に於て独立せる国は誠に少し、貴国と我國あるのみ。朕も一度日本に巡遊せんと欲するの希望は切なるも、国事多端の爲め未だ遺憾ながら日本に遊ぶの機会を得ず。

○陛下若し日本に御巡遊あらせられなば、我皇帝陛下は必らず大に御喜びあるべきこと察し奉る。又國民も、陛下の御巡遊を喜び歓迎すべきと、外臣は今日より想像し居り。

(此間温顔笑を含み語らる。応答致歉の間自ら慷慨の状を見受けたり)△朕は日本国と親密ならんことを望む。貴国皇帝陛下に宣敷伝奏せられし。

○度んで聖意を了す。

一昨日来外臣兵營、学校等を巡視するを得、其整頓せる、其軍規の正しき誠に感歎せし所なり。

△否、陸軍は未だ幼稚にして、朕は未だ満足し居らず。

(随行員を顧み、何國の語を話すかを問はせらる。村田中佐曰く、伊地知中佐は仏語を話し、殊に独乙語は頗る熟達なりと答へ、予「明石」を指し、仏語、独語を話す云々。又曰く、中佐予並に自分(村田中佐を指す)

共嘗て歐洲に留學したり云々)

△貴國將校は仏語を専ら話すや。

村田中佐曰く、仏語及独乙語を談す云々(此時中將曰く)

○海軍將校は、悉く英語を話し又國民は殆んど皆英語を話す。陸軍將校のみは専ら独語、仏語を話す。

△当地にては、皆英語のみを話す。

○皇帝は何語を話さるるや。

△別に外國語を話さるることを承り居らず。「村嶋」注、これは通訳の井と思われ。

此時皇帝將に入らんとし、中將の手を握り曰く

本日、日本將軍と知己となりしは、朕が喜びに堪へざる所なり。

尚終りに再言す。貴国皇帝に宣敷朕が敬意を伝へられよ。終・午後五時三十分(157-1159頁)。

本誌2014年9月号に、5世王が1896年4月に訪日を意図されたことを書いたが、川

上中將との会話からも同王の訪日の意欲が伝わってくる。

また、三宮義胤男爵は、1887年11月に小松宮彰仁親王の別当として来タイした人物である。三宮は、川上中將に託して、5世王宛の1896年10月10日付の書状とともに短剣を献上した。5世王はお返しとしてマレー貴族が使用するクリス(Cris)を川上中將に託された(タイ国立公文書館 N.S. 82 a/16)。

連載⑦  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(56)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

明石日記に三谷足平なし

前月号で引用したように、村田保定編『明石大將越南日記』(以下、明石日記)によれば、川上操六参謀次長一行が、1897年1月4日から11日まで1週間在タイし、8日には5世王に内謁見した。10日には、日本人会のメンバー13、14名(磯長海洲、佐々木寿太郎、大山周蔵など)は、川上一行及び福島安正大佐を招いて懇親会を開いた。川上一行をバンコクで世話した日本人は、前年に生まれたばかりの日本人会の会長でもある写真師磯長海洲(1860-1925、鹿児島県土族、駒場農学校(東大農学部の前身)中退)であった。

岩本千綱が川上来タイの情報を得ていたかどうかは判らないが、彼は川上一行と顔を合わせることなく、一行の来タイ2週間前に三谷探検にバンコクを

発っていた。明石日記には、川上一行がバンコクの日本人から、岩本千綱の悪い評判を聞かされたことがコメントなしに記されている。これから見て、当時の岩本千綱と参謀本部とは全く関係がなかったと考えるのが妥当である。

ところで、明石日記には、1913年もしくは1914年に日本人会初代会長に就いたという元軍医三谷足平(1860-1924)の名は出てこない。これまで何回か書いたことであるが、三谷は1894年から在タイしていた。当時の三谷は、日清戦争に軍医として召集されたが命令に応じず、逃亡者としてお尋ね者の身(欠席裁判で2ヶ月の軽禁錮)であり、そのうえ、コーラート鉄道建設に日本人苦力を紹介して多額の報酬を得たにも拘わらず苦力の保護監督義務を全うせずに早々とバンコクに戻ったので、建設会社

からフランス領事(日本政府が日本人保護を委任)に詐欺を訴えられ、そこでもお尋ね者(フランスの領事裁判で私財差押)になっていた(本誌2014年4月号拙稿参照)。

その後も三谷は、バンコクの重要な行事に日本人社会の代表の一人として名を連ねることはなかった。例えば、5世王の崩御への哀悼、6世王の即位のお祝いなどで、日本人社会の代表団が王宮を訪問した際にも、三谷の名はない。

三谷の旧悪を知る磯長海洲(1895年初来タイ)、建築士佐々木寿太郎(1890年来タイ)、シヤム政府法律顧問政尾藤吉(1897年来タイ)ら、バンコクの日本人名士たちは、三谷を仲間に加えることを嫌ったのであろうか。三谷がバンコクの日本人社会で大きな顔ができるようになったのは、磯長、佐々木あるいは政尾らが、バン

コクを去るか死亡した後のことである。勿論、これらの名士がバンコクから姿を消した後に、1890年代半ばからバンコクに住んでいた日本人が居ることはいた。例えば、岩本千綱が1895年初に連れてきた第1次タイ移民団の一人で、山口県大島郡出身の理髪師面田利平など。しかし、彼等の社会的地位は高いとは言えず、また医師である三谷の世話になっていた者もいたのであろう。

何等資料はないのであく迄も推測だが、「鳥なき里の蝙蝠」となった三谷は、子分等から成る自分のグループを中心に1913年もしくは1914年頃に日本人会を再編し、自ら会長に納まったのかもしれない。

タイ外交文書を求めて

さて、川上中將訪タイの重要な任務に、日本側の示した修好

通商航海条約案覚書についてタイ側の見解を探ることがあった。

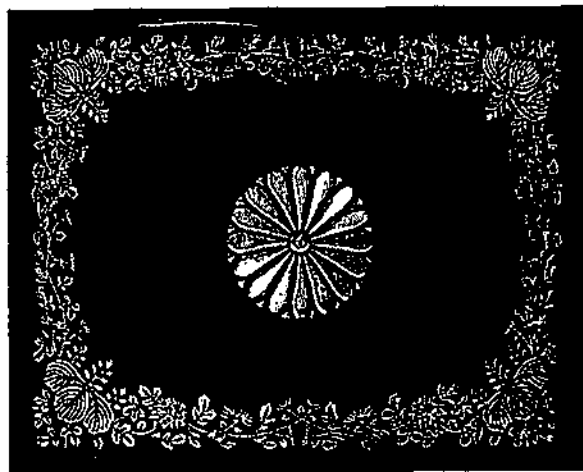
1896年2月13日に第2次伊藤内閣は、西園寺外務大臣臨時代理の提案により、タイに対し修好通商航海条約締結交渉開始の打診をすることを閣議決定し、2月17日付で西園寺はデーワウオン外相宛てに打診の文書を送った。日本がこの時点で打診した背景には、日清戦争開戦直前の1894年6月に、イギリスとの間に条約改正が成功したのを皮切りに欧米諸国との条約改正（領事裁判権の撤廃）に成功し、欧米諸国と対等の地位に昇ることができたので、欧米諸国と同じ立場でタイに臨むことができる条件が整ったことがある。

日本側からの打診を5世王は大変喜ばれ、御自身の訪日のための準備さえも指示された。デーワウオン外相は、96年5月6日付で、条約交渉開始を快諾し、そのために東京に全権委員を派遣してもよいと回答した。さらにジャクメン・タイ政府総顧問の女婿で、タイ政府の法律

顧問でもあったキルパトリックが、6月に訪日した際、東京の外務省を訪ねさせた。6月25日に西園寺外相はキルパトリックに覚書を渡し、その中で日本政府は日暹（タイ）条約において治外法権（領事裁判権）と最恵国待遇を求めることを明示した。キルパトリックは、その場で覚書の内容では、タイ政府の同意を得ることは困難であろうと述べた。案の定、日本側の覚書はタイの期待に反したものであり、東京に全権代表を派遣するとまで言っていたタイ政府からは何の音沙汰もなくなった。

日本側のイニシヤティブで始まった条約交渉の過程を、本誌2014年9月号で紹介した際に、96年6月末に日本側がキルパトリックに託した覚書に、タイ政府がどう反応したのかを知るには、タイ側の条約交渉に関する文書を見る必要があるが、それらの文書がどこに残っているのかは不明である、と書いた。実は、その直後に、日暹条約交渉に関するタイ側外交文書には辿りついたのだが、残念ながら期待した資料は見つからなかった。

2014年7月に、タイ国立公文書館で外務省図書室（「チェーンワタナ通り」の室長に偶然会った。私が1991年から93年にかけて、実質1年半近くの日数を費やして外務省図書室（当時は王宮前の旧庁舎内）に通って、第2次大戦期のタイ外交文書（この文書は、その後国立公文書館に移管され、整理も終わっている）の間もなく公開予定という。第2次大戦期の日タイ関係研究の基本資料である）を閲覧した際に、親切・丁寧に文書を出してくれた若いライブラリアンが、20余年を経て今は室長に昇進していたのである。これ幸いと、19世紀から20世紀初頭にタイが締結した条約に関する文書の所蔵について尋ねた。彼女の答えは次のようなものであった。



流出した、日本暹羅修好通商航海条約（1896年5月31日にバンコクで批准書交換）の批准書と批准書が入った箱



で保存していた当時も、状態が悪いために閲覧は許可していなかった。国立公文書館では、修理・保存作業に時間がかかっているために未だ公開には至っていない。公開までには、なお長い時間を要するであろう。条約のうち領土に関する重要なものは、19世紀や20世紀初めのものであっても、依然外務省条約局が保管しており非公開である。また、領土関係のものは、たとえ国立公文書館に移管したものであっても非公開である、と。

私が見たい日本暹羅修好通商航海条約（1898年2月25日に稲垣満次郎公使とデーワウオン外相間にバンコクで調印）関係の外交文書は、未公開ながら国立公文書館にあることが判った。公文書館の受付で日暹条約関係の文書を見たいと話してみたら、外務省からのレターがあれば見せることができる、との返事。外務省図書室に連絡して見ると、外国人研究者だから国家研究協議会（NRCIT）から外務省宛の文書が必要であり、それさえ出れば、外務省は許可することであった。タイの国立公文書館に移管され、整理も終わっている）の間もなく公開予定という。第2次大戦期の日タイ関係研究の基本資料である）を閲覧した際に、親切・丁寧に文書を出してくれた若いライブラリアンが、20余年を経て今は室長に昇進していたのである。これ幸いと、19世紀から20世紀初頭にタイが締結した条約に関する文書の所蔵について尋ねた。彼女の答えは次のようなものであった。





外国人である私は文句を言うわけにもいかない。  
タイの公文書の保存は極めてよい。役所毎に適当な規則を作つては多くの価値ある文書を処分してきた日本の官庁のやり方とは大違いである。日本では国立公文書館(東京竹橋)に見に行つても、既に官報等で印刷されている任免の記録や叙勲の記録のオリジナルを見ることのできるだけで、戦前の内務省をはじめとし国内各省庁の公文書は殆んどない。日本研究者は、日本の各省庁の政策立案プロセスが判る内部文書は残っていないことを当然視しているようだが、タイの国立公文書館には、外務や陸海軍以外にも、内務、文部、農商務、財務、建設、交通など殆どの省庁の創設以来の細々した文書までが残つており、タイ近代史研究者には宝の山である。

そうではあつても残念なが

ら、金目があると思われる公文書は、誰かが持ち出して流出しているようだ。私が最近売りに出されているのを見たのは、何と、1898年4月30日に明治(睦仁)天皇が批准書に署名し、5月31日にバンコクで批准書を交換した、日本暹羅修好通商航海条約の批准書及び批准書が入った立派な箱である(写真参照)。

因みに、日本とブラジルは、1895年11月5日にパリで日伯修好通商航海条約に調印し、1897年2月に批准書を交換した。この3月末まで東京の外史料館で、「日本とブラジルの120年」という特別展示が行われたが、そのポスターでは批准書と批准書を入れた箱の写真が真ん中を占めている。それほど、二国間関係の記念すべき

物品であるにも拘わらず、タイの公的な場所には、日暹条約の批准書はもはや保存されてはいないようだ。来年に日タイ修好130年(1887年9月26日調印の日暹修好通商宣言から数えて)を迎える両国であるが、何とも残念な話ではなからうか。

#### デーウウォン外相と川上中將の会見録

徒勞の末、私は1988年に国立公文書館で筆写したノートを見返してみた。何と、その中から、デーウウォン外相と川上操六中將との間の条約に関する、1897年1月6日の会見録を見つけた。

明石日記には、1月4日「午後二時藤田領事より廻はしたる大隈外務大臣宛川上中將宛通商条約に関する電報送達し来る」(同書112頁)とあり、東京の大隈外相からシンガポールの藤田敏郎領事を通じてバンコクの川上操六中將へ、タイ側からの条約交渉の応答が立ち消えした原因を調べるように依頼が来た。

1月5日には「午後五時より仏蘭西公使同道にて、先づ外務省を訪問す(一行通帯礼服)大臣デボボン「デーウウォン」親王に面会す。村田中佐及「Jang Chantong」中に入り、中將及大臣の間に通弁す。談話は尋常の挨拶及中將は明日通商事件に付相談致度旨相談あり。外務大臣明日午後五時半面会を約す。村田中佐は「仏」公使の許に至り、通商条約に關し取調への必要より、仮条約を写す為め早く辭し去る(公使、權利問題に付注意を与へたりと云ふ)」(同113-114頁)。1月6日には「既に午後五時に近づく、因て中將は伊地知中佐、村田中佐を従へ、外務省に至り、外務大臣と通商条約の件に付協議する所あり」(同115頁)。

この1月6日の川上中將との会見をデーウウォン外相は、同日付けで5世王に次のように報告した。

本日5時半に川上中將及び2名の日本將校が、アポイントメント通り私を訪問し、条約の件を話した。村田中佐がフランス語で通訳をし、私はルアン・チャムノン・ディカーンに通訳をさせた。もう一人の日本人將校は静かに座つて日本語でメモを取つていた。2時間以上会話したが、何重にも通訳「タイ語—フランス語

「日本語」を間に入れていたので、話が通じにくく、双方とも何度も聞き返した。通訳が入つていたので一言を語つても、三言を語つたに等しかった。会話の骨子は次の通りである。

川上中將「今回日本から近隣諸国の軍事觀察に来るに際して、外務大臣大隈伯爵からシヤムで貴大臣を訪問してシヤム政府の条約締結に關する意向をうかがうように依頼された。日本政府は次のように考えている。即ち、両国間には300年以上に亘つて親密な友好關係が存在したのに、現在では疎遠になり昔のような貿易はなくなつてゐる。東アジアの獨立國は、日本、タイ、中国の3ヶ國しか残っていないのであるから、友好通商を發展させるように努めるべきである。日本政府は、それ故両国間に通商条約を締結して貿易を促進すべきであると考えてゐる。この条約では、タイが他の國に与へてゐるのと同様の最惠國待遇を日本に与へら

れることを希望する。

デーウウォン外相「両国間の友好については、シヤム政府は日本に全く同感である、一層親密になるべきだと考えてゐる。古い時代には両国間の友好と貿易は極めて盛んであり、首都だけではなくナコンシータマラートやバツターニーなども盛んに行われた。今日そのような貿易が存在していない理由は、タイ側が面倒を起したからではなく、日本の徳川將軍が暹洋航海に出ることが可能な大型船の建造を禁止し、そのためシヤムとの間を行き来する日本人もいなくなつたからである。しかし、10年ほど前、友好的提携の実現に強い意欲を有されてゐる5世王は、私を日本に派遣された。その結果、短い修好通商宣言に調印した(1887年9月26日)東京で、日本側全權青木周蔵子爵(外務次官)と暹羅側全權デーウウォン外相との間に調印された「修好通商に關する日本國通

羅國間の宣言」。當時は、未だ直接貿易はなく人の往来もなかつたので簡単な合意で済ませたが、貿易が發展すれば適當な時に、条約を締結するつもりであつた。それ以後、次第に貿易も盛んになり、シヤムに入國した日本人も、シヤム人同様に最良の保護をシヤム政府から受けてゐる。私は、在タイ日本人がタイ側からひどい扱いを受けたという事件は一度として発生したことはないことを敢えて誰にでも斷言できる。なお、最惠國待遇に關しては、シヤム政府と日本政府との間に最も基本的な見解の相違があるので、現在両政府間で文書のやりとりをしてゐる。

川上中將「文書のやりとりとは在タイ仏公使を通じてのものか?よく知らないのをご説明をお願いしたい。デーウウォン外相「日タイ間の条約については、仏公使は全く關係しておらず、日本政府と直接やりとりをしてゐる。1896年2月頃外務大臣臨時代理西園寺侯爵が私宛てに書翰を送り次のように言つてきた。即ち、1887年に修好通商宣言に調印した時の考えに従ひ、詳細な通商条約を締結すべき時機に達したと考へる、もしタイ側が賛成ならばどこで交渉すべきかを提議して欲しい」と。私は1896年5月に次のように答へた。シヤム政府は十全な条約

を締結することに賛成し、東京に使節を派遣して交渉することにした。日本政府はこれを受け入れるか、と。8月になつて日本政府は受け入れると答へ、且つ日本政府は次の見解を付け加えてきた。締結する条約においては、國家の裁判所とは別に裁判所を設けないというタイの考えは理解できる。とは言へ、他の國がこの權利「領事裁判權」を有している限り、日本も求めざるを得ない。しかし、條約に、他の國がこの權利を放棄すれば、日本も直ちに放棄する旨を規定してもよい(6月25日に西園寺外相がギルバトリックに託した書翰を8月にデーウウォン外相が落手したことが判る)。と。締結する條約において、このような基本的な重要事項について兩國の見解が異なるのである。使節を派遣して交渉に入る前に、まず文書でやりとりをして合意に達しておく必要がある。

川上中將「たとえ見解が違つていても、使節を派遣して交渉し口で説明する方が、文書の往復よりも理解が進みやすいと思うが。兎に角、シヤム政府の意のある所を聞かせて欲しい。私は調査するように訓電されてゐるので、成功に向けて何か助けることができるかもしれない。私は1月9日には、バンコクを発つ予定で

ある。

デーワウオン外相・シヤム政府も急いで条約を締結したいと考えていることは同じだ。最惠國待遇については、シヤムは日本に与える権利や利益を他國に与えたものより少なくしようとは考えていない。しかし、領事裁判権という重要事項については、事前に十分に諒解しあつて置かねばならない。そうでなければ、使節を派遣して交渉してみたが合意できず、交渉を打ち切つて帰つてくるという、諸國に対して恥ずかしい結果になる虞がある。領事裁判権からどれほどの困難が生じるかは、日本も十分に経験されたことである。我が政府の考えでは、領事裁判権を与えた諸國との条約は40年以上まえに締結した古いものである。当時は東洋に外國人「西洋人」が現れたばかりの時代であり、我國も今日ほどには発展していなかった。その時代には、領事裁判権は、相応のものであつたかもしれない。しかし、現在では、諸國との対立紛争を生じさせる困難の殆ど全ては領事裁判権に起因している。それ故、古い条約は全て改正しなければならぬと考えている。私の希望は、シヤムと同じ大陸「東洋」に位置し、同じく独立した國である日本と互いに助け合い、同じ困難から脱却することである。古い条約

約を基準とはしないで欲しい。タイとイギリスとが13年ほど前「正しくは1883年9月3日」に結んだ条約、即ちチェンマイ条約は、現在北部タイ全境（あるいはタイ内陸部全境と言ふ可）に適用しているが、この条約では領事裁判所ではなく、タイの特別裁判所を設置して英籍人とタイ人の紛争を処理している。但し、英領事は裁判を傍聴でき、被告が英籍人もしくは原告被告ともに英籍人の場合で不当な判決であると見做した場合に、領事裁判に移審することができるといふ保証を付している。特別裁判所が開かれて以来、未だ曾て英領事が移審権を行使したことはない。もし、この方式で日本と合意可能な使節を派遣して条約を協議することができると、その他のことは枝葉末節に過ぎないので交渉で合意することは難しくないはずだ。私は日本の外務大臣に、この趣旨を文書で送るうと考へていたところだ。このような条項は時代に適合しているし、双方に取つて何の不都合もないことだ。

川上中將・特別裁判所で用いている法律は、古くからのタイの法律なのか、西洋式の新しい法律なのか。日本はタイの法律がどんなものかを知らないのだが。

デーワウオン外相・チェンマイの特別裁判所（外國裁判所と稱する）で用いている法律は、純粹にタイの法律であるが、諸外國と交際する現代に適合するように改正を加えたものである。タイ側は日本が制定したものと同じような法典の編纂を計画しているが、すぐにはできない。私は、日本が編纂した法典を知っている。それは、歐洲で施行されている法律と同じように優れたものであるし、タイの法律とも大きくは異なつてはいない。私は外務大臣という立場ではなく、私的立場で言うのだが、もしチェンマイ条約に似た内容で合意できるならば、それに基づいて設立される特別裁判所では日本の法律を用いて日本人とタイ人間の紛争を処理するという特別法を、タイ側が制定することも可能である。

川上中將「うかがつたことを、日本に持ち帰つて外務大臣に伝達する。しかし、どうか条約締結を急いで欲しい。」

デーワウオン外相「私も大隈外務大臣に書翰を送るつもりだ。（タイ国立公文書館 No. 3366/8）。

明石日記の1月9日の項に「Chengmai 来訪し十二時頃迄条約一件に付、閣下「川上」と相談あり」とあるので、デーワウオン外相は大隈外相宛ての伝言の文書を確めた可能性がある。川上一行は、1月11日にバンコクを發つて歸國した。結果的には日本はデーワウオン外相の提案を受け入れなかった。

443

連載①  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (57)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

1897年1月初旬に来タイした川上操六参謀次長は、大隈重信外務大臣より日暹修好通商航海条約締結に關し、タイ側の態度の打診を依頼された。川上一行は1月6日にデーワウオン外相と面談した。その内容については、デーワウオン外相のチュラーロンコーン王への報告を前月号で紹介した。

領事裁判権獲得執着の  
近視眼

デーワウオン外相には、タイにおける条約國の領事裁判権は本當に頭痛の種であつた。中でも、バンコクのフランス領事館は、フランスとは何の關係もないにも拘わらず、先祖がインドシナ出身であると稱する者や華僑やその子孫など1万人以上の在タイアジア人にフランス保護民としての地位を与え、彼等をフランスの領事裁判下に置いて

いた。これらアジア人保護民の中には、タイ側の司法権や警察力の及ばないことをよいことに、不法を働き、またフランス領事に頼つてタイ政府に不当な圧力を加える者も存在した。

このような困難に直面していたデーワウオン外相は川上中將に、イギリスとの間の1883年のチェンマイ条約をモデルとして、在タイ日本人の裁判を管轄するタイの特別裁判所を設立したいこと、特別裁判所の裁判に不満がある場合は領事裁判に移審できること、更には特別裁判所では日本の法律を適用することにしてもよいとまで提案した。

バンコクの川上中將は、1897年1月10日午後、東京の参謀本部に次の電報を發した。「明日シンガポールに向て出發す左の事を大隈大臣に告げよ。暹羅政府に意見あり委細暹朝の後具申す」と。参謀本部は同

日深夜に受電し、翌11日には大隈外務大臣に伝達した。

川上一行の歸國は2月初めである。彼がどのような具申を大隈外相にしたのかが判る資料は未見であるが、川上から大隈外相に領事裁判権を嫌うデーワウオン外相の意見が伝えられたことは間違いないまい。

しかし、それから2ヶ月後の3月31日に、修好通商航海条約締結交渉を主たる任務として稲垣満次郎が初代駐タイ公使に任じられ、翌4月1日に大隈外相は松方正義総理大臣に次の文書（機密送第49号）を送つた。

「内閣総理大臣伯爵松方正義殿  
大隈外務大臣

日本通暹修好通商航海条約締結に關する閣議請求の件  
帝國と暹羅國との修好通商航海条約締結の議は昨年「1896年」二月中國議決定の上帝國政府にて右条約を締結せんとするの意志を彼國政府に通知し彼に於て我希望に應ずる意向有之に於ては条約案を調製し更に

同國に照會可致事と相成居候に付、四月（マ）十七日付書翰を以て前任外務大臣「西園寺」は暹羅國外務大臣に照會し明治二十年修好通商に關する宣言に基き条約締結の爲め談判を開始する意向の有無を問合候。暹羅國政府は欣然談判を開始すべき旨回答致來候而して同年六月中國政府法律顧問ギルバトリック氏の來朝に際し前任大臣は一の覺悟を同氏に交付し兩國間に締結すべき条約の基礎に付帝國政府の希望する處を予め開示し彼國政府の贊同を請求致置候就ては右交渉の次第を逐ひ亦々条約締結の談判を開くことと致度尤今般帝國政府より提出すべき条約草案並に議定書案は主として右覺悟の趣旨に準拠し起案致したるものにして条約案は彼我國國間の通商及航海に關し全然對等の規定に有之又附屬議定書案に於て暹羅國貿易規則並に關稅目規定を帝國臣民も遵守すべきこととなしたるは同國と締結の歐米諸國の例に倣「なら」ひたる次第に有之但目下歐米諸國の暹羅國に於て保有する領事裁判制度に至ては他各國の之を全廢するに至る迄は帝國政

444

7117-70  
2016年6月

府も亦た之を保持し置くこと至当と存居候に付其主意を以て立案致候因て右の条約並議定案相添閣議に提出候也」(外務省記録2517「日暹修好通商航海条約締結一件、自明治十三年至明治三十一年」)。

閣議に提出された条約案・議定書案は1896年6月にキルパトリックに与えた覚書に従い、同年9月5日に作成した英訳と殆ど同一で、僅かに語彙を修正しているのみである。1897年1月6日の川上中將・デーワウン外相会談において、後者が提起した領事裁判権に代わる案(イギリスとの間のチェンマイ条約がモデル)は、全く反映されていない。日本外

務省は、デーワウン外相の意見に何の顧慮も与えなかったのである。

1897年5月にバンコクに着任した稲垣公使は、デーワウン外相との間の予想以上に長引いた交渉の末、1898年2月25日になって、日本政府案に沿った条約調印にこぎ着けた。

西洋文明国は遅れた国に対し領事裁判権を有しており、西洋文明国の仲間入りをした日本も当然、タイに対し領事裁判権を持つべきであるという固定観念

に、当時の大隈重信外相、小村寿太郎外務次官それに稲垣公使自身も、強く囚われていた。

しかし、日本が獲得した領事裁判権の行使については、本シリーズでもいくつかの例を紹介したことがあるが、日本国籍(含む台湾出身者)の少数の犯罪者を助けただけで、日本に実益をもたらしたとは言えない。日タイ条約締結後10年を出ずして、条約は日本人の土地所有権をバンコク周辺までに限っており、

日本人のタイにおける経済活動の障害となつてゐる、改正すべきであると言つた意見が、タイに關係する邦人から高まつた。

抑も、日本が肩を並べたいイギリスは、既に1883年のチェンマイ条約でタイ北部におけるイギリス臣民に対する領事裁判権を放棄し、見返りに同地方における土地所有権などを得ていた。同じくフランスも、日タイ条約締結後数年にして、アジア人保護民への領事裁判権を放棄してタイから領土の割譲を受けた。日タイ条約締結時に、西洋主要国のタイにおける領事裁判権制度は、既に崩れかかつていたのである。当時の日本当局者が、古い考えに囚われて領事裁判権獲得を金科玉条とするような愚策を採らず、デーワウン外相の提案を十分に検討し、交換条件として地方の土地所有権や森林伐採権などを獲得する交渉をしておれば、日本の在タイ経済利益が拡大した可能性が高い。それ以上に、その後の日本の進路を誤らせることになる、アジア人やアジア諸国に対する日本人の一方的優越感や思い込

みに起因する態度を、その形成初期において少なからず是正することもできたはずである。

### 情報将校 福島安正大佐の在タイ

さて、川上中將一行の離タイ前日、1897年1月10日にバンコクに到着した、明治陸軍きつての情報将校福島安正は、タイで何をしたのであろうか。

福島のタイ訪問は、下記に言う彼の三大旅行中の第3回目の旅行の、しかもその行程の末期の出来事である。

「其の軍人生活の全部を参謀本部と海外とに送つた福島安正将軍は、渾円球上殆んど足跡の到らざる処無いものであつたが、殊に其の著しい海外の踏査に、所謂將軍の三大旅行なるものがある。其の第一次は印度旅行であつて、明治十九年(大尉当時)、早く既に印度に差遣せられて、査察の足跡其全土に及んで居る。

第二次に於けるものは、歐亞橋斷の半騎遠征であつて、所謂福島中佐の西伯利亞「シベリア」横斷を以て謳はれた明治二十五年より同二十六年に亘る一大遠征旅行である。

第三次に於けるものは、明治二十

八年より同二十九、三十の三ヶ年に跨つて行はれた亞歐兩州及阿弗利加「アフリカ」に及ぶ大旅行であつて、日清の役其の局を結ぶや、予ねて世界の大勢を洞察し、東亞の將來を考慮しつゝあつた將軍は、時の参謀總長小松宮彰仁親王の命を奉じて、安南・暹羅・緬甸・印度・阿富汗斯坦「アフガニスタン」・波斯「ペルシア」・高加索「コーカサス」・中央亞細亞・亞拉比亞「アラビア」の各地、全東亞西南一帯の大陸に連なる未開半開の境、將來問題を豫すべき地域の悉くに亘つて之を踏査し、更に之れと関連を有する歐阿兩州の地、土瓦古・埃及「エジプト」に及んだので、將軍の三大旅行はこれを以て最終最大のものとされて居る。(太田阿山編「中央亞細亞より亞拉比亞へ」：福島將軍遺稿、東亞協會、1943年12月刊、1・2頁)。

福島自身が帰國後、「亞細亞旅行談」というタイトルで書いたものによれば、第3回目の旅行は、明治28(1895)年10月5日に東京を發ち、旅程の最後に近い明治30(1897)年1月10日にバンコクに入り、その後安南、トンキンを経て同年3月25日に帰朝した。「此行通計18ヶ月53日、経る所の國12、哩程合計4万3531哩にして之を

内訳すれば、汽船2万7844哩、河汽船3256哩、小舟32哩、汽車9168哩、馬車1411哩、騎馬1820哩とす」(福島安正「亞細亞旅行談」、『地学雑誌』第10集109号、1898年1月15日号、6・7頁)。

しかし、彼の「亞細亞旅行談」の連載は、タイ旅行が取り上げられる遙か前に、僅か2回分、計20頁の前文段階で立ち消えとなつてしまつた。

福島は、参謀本部に、第3回目の旅行報告として、「亞細亞略報三十二回、歐亞日記十回」を提出したという(前掲太田編著、6頁)。

前掲太田編著は、口語体に改めた亞細亞略報のかんりの部分を採録し、加えて福島が退任した後帝國在郷軍人会副会長時代の講述をまとめた「鴻図雄志」も併せて印刷している。ところが、太田が採録した亞細亞略報には、残念ながらタイ訪問に關す

る報告は含まれていない。福島が1897年1月10日バンコクに上陸する直前の「明治三十」1897年一月九日、暹羅灣航海中」という日付がある「印緬歸航雜記」で終わっているのがある。「鴻図雄志」の中には、2カ所だけタイ旅行中の経験への興味ある言及(後述)があるが、もし福島の亞細亞略報中に含まれているに違いないタイに關する報告を讀むことができれば、我々は1897年初頭のタイの様子を詳細に知ることが出来るのにと悔やまれる。

前掲太田編著の凡例に、「本書の編纂に當つては衆議院議員松本忠雄、岡田忠雄氏夫人操子の阿氏に負ふ所尠ならず、誌して以て謝意を表する」と記されていることから、太田は亞細亞略報を福島の娘である園田操子(園田孝吉



男爵の次男園田忠雄の妻)から得たようである。また、福島安正と同県長野県衆議院議員松本忠雄(1887-1947)の韓旋もあつたように読むことができる。

これだけ手掛かりがあることから、タイについての報告を含むはずの、福島安正の亜細亜略報32回分へ接近は、同略報が戦災にでもあつて消失していない限り、それほど困難があるとは思われない。しかし、福島の第3回目の遠征に關して戦後印刷された、次の2書は、オリジナルの亜細亜略報を参照することなく、前掲太田編著から孫引きしているに過ぎない。たとえば、金子民雄訳『シルクロード紀行1 海外渡航記叢書3』(雄松堂出版、1990年)は1943年の前掲太田編著に掲載されている福島の「波斯紀行」を現代文に訳して再録している。太田編著で、福島の原文は既に口語体に直されているのだが、それを金子は更に訳したというのだから不可解である。金子は更に、訳書凡例において「福島安正の旅行報告は、最初から発表

を目的とせず、旅行先より参謀本部に送ったものであつた。『亜細亜略報』(三十一回)、『亜細亜略報』(三十二回)、『亜細亜略報』(三十三回)がそれぞれ、秘密報告だつたため、その原本が大半現存せず(未発見)かろうじて太田阿山編著でしかうかがい知ることができない」と断っている。1943年時点で太田はオリジナルを利用することができたのに、何とも意味不明な弁解である。

また、前掲太田編著をそのまま復刻した、『伝記叢書 247 中央亜細亜より亜比連へ』(福島将軍遺稿 続)(大空社、1997年)の解説で、横田順彌は次のように述べている。

「本書編纂者の太田阿山については、筆者『横田』の力不足で経歴など、まったく調べがつかなかった。奥付を見ると発行者の太田孝作と住所が同じであるので、同一人物かもしれない。また発行所の東亜協会も同住所というところから、本書は太田阿山の個人出版に近いものかとも推測できる。しかしながら、序文、凡例などを読むと、福島の息女『操子』をはじめ、多くの関係者から、散逸していた資料を丹念に収録し、シベリア半島遠征報告書をはじめとし、その後のあまり知られていない

探検行の自筆資料を、熱意と努力によって、これだけ収集し本書にまとめた力量は敬服に値する」と。

戦後出版の上記2書は、十分な調査を怠つたまま出版を急いだことを、自ら告白している。

さて、前掲太田編著に採録されている、福島の「鴻図雄志」中の暹羅に關する二つの記述を次に紹介しておこう。一つは、『支那人の拜金宗、実に支那人の拜金宗には驚く。頂点立地絶て黄金である。尤も之は今更珍らしい話ではないかも知れぬが、然しながらその微頭徹尾黄金国民であるには驚く。然らざるを得ないのである。私が留て暹羅にいたときにも、この国民性を遺憾なく發揮した事実に出会したことがある。それは恰度盤谷の北方へ鉄道工事を見に行つた際であるが、もと此の辺は御承知の通り一帯に暑の上に風土が熱く、屢々マラリヤ熱の流行が猖獗を極める処である。で日本人なども最初は幾らか此鉄道工事に働いて居たさうであるが、多くは病に斃れ、私の行つた時

には一人も居ずに、只支那の苦力と、多少の独逸人の技師とが働いて居るばかりであつた。而して彼等は火の森とさへ云はれる処に天幕を張り、燃えるやうな炎熱と戦ひ、蜜煙繚繞と戦ひつつ働いて居るのであるが、その氣根は実に敬服に値するものである。が然らば彼等が安心立命の根拠は何であるか、如何なる信念によつてそんな物凄い生活を敢てして居るか云ふと、それは仏教でもなく、基督教でもなく、全く黄金である、金銭なのである。

で支那苦力の天幕内へ這入つて見ると、正面には財神を祀り、其前に線香を立て、付近の柱には紅紙に「黄金萬両、司天下財政」等の好文字が大書してある。仏蘭西宣教師の談に

よると、以前に一人の支那人苦力が汽罐車に轢かれて死んだ事がある。

処が轢かれて重傷を負ひ、路傍に仆れて將に呼吸(いき)を引取らうとするとき、彼宣教師は懇に、『何か遺言はないか』と訊ねた。すると垂死の苦力の云ふやう、『別に遺言は何にもない、が傍に一非金貨が一枚落ちてあるから、それを手に握らせて貰ひたい』それでその通りにしてやると、彼は如何にも嬉しげに、又満足そうにそれを固く握つたまま死んで行つたと云ふことであつた(前掲太田編著、289-290頁)。

もし、福島や仏人宣教師が、死を直前にして、もう使うことはできない金銭にまで執着する中国人苦力を見て、習性となつた拜金宗を嘲笑しているのなら、この苦力の行動の文化的意味を誤解しているように思われるが、どうだろうか。

もう一つ、

「暹羅の悪水、水に就ては吾国は大いに恵まれて居るが、広い世界にはなかなか吾国のやうな佳い国ばかりはない。現に暹羅などがさうである。明治三十年の二月十一日(ママ)、私は此の国の首都盤谷に滞在していたが、御承知の通り此国は非常に暑い国である。然も飲料水が乏しいと来て居る。暑いならせめて佳い水に

でも富んで居るとよいが、無闇に暑い上に水迄が乏しく、加之(おまけ)にその水がまた非常に悪いのであるから申分がない。で上流社会の饒る都合の豊かな者には、新嘉坡で出来る例の「日本の進歩と世界の短縮」中に話すやうな砲弾の形をしてポンと音がして煙の出る水を用いて居る者もあるが、下層の土人は多く家の根の上へ大桶を上げ、雨水を蓄へて飲用に供するやら、メナン河の河水を飲用に供するやらして居る。ところが此のメナン河の水が大変に悪い。俗にメナン河の水コップ一杯は、外国人六人を殺すと云はれて居る。それでも飲み馴れた土人は平気で飲んで居るが、こゝろを考へても、吾国程良い国はなく、我々人程幸福なものはない(同上書、281頁)。

福島の前掲「亜細亜旅行談」の第1回目を掲載した『地学雑誌』第10集109号の最初の部分には、福島の行路を示した地図が付されている。その地図を見る限り、福島はタイ国内ではナコンサワン辺りまで遡航し更に北東へ内陸部を上つたように見えるが、コーラート鉄道建設現場に關する上述の回想からして、福島のタイ国内視察は、サラブリーから鉄道建設現場まで

であつたと思われる。

#### タイ側資料に見る福島安正

さて福島の来タイは、タイ側資料にどのように記されているだろうか。

福島の来タイを、タイ政府に伝えたのは、川上中将の来タイの場合と同様に、フランスの弁理公使ドフランヌ(A. Delaunay)であつた。1897年1月13日、ドフランヌはテールワウン外相に、次の文書を送つた。

日本陸軍参謀部の福島大佐が数日前にバンコクに到着した。川上將軍がバンコクを發つ前に、私に福島大佐を激賞した。且つ、福島大佐は、日本の外務大臣が貴大臣に宛てた書簡(1895年10月1日付西園寺外務大臣からテールワウン外相宛フランス語書簡)を携帶している。随つて、福島大佐を伴つて貴大臣を訪問したいので、日時を指定して頂きたい、と。

これに対し、即日テールワウン外相は1月15日の17時30分を

指定した。

1月15日に福島大佐とドフランヌ公使に面会したテールワウン外相は、直ちにチュラーロンコーン王秘書官ソムモット親王に報告書を書き、福島の国王拜謁の希望を伝えた。1月17日にソムモット秘書官は外相に、国王の回答を次のように返事した。

福島の在タイ時間が十分であれば、会つてもいい。しかし重要性があるとは思われないので、福島が急いで出発するのなら、会う時間はない、と。

福島を担当した外務省員ルアン・ウィーストゴサーの手配により、福島は1月19日15時に陸軍の兵舎、士官学校、其の他を視察した。1月21日になつて、テールワウン外相は再びソムモット国王秘書官に宛て、福島大佐は1月31日にサイゴンに向けてバンコクを出発するようにだが、国王の謁見は可能かどうか国王に伺つて欲しいという旨の文書を送つた。1月23日に、ソムモットはテールワウンに、国王から福島との謁見は中止できればそれに越したことはない

448

447

の御回答があったことを伝え  
た。デーワウオン外相は、福島  
は国王から謁見を賜ることな  
く、31日に離タイすると見たた  
めか、1月29日付で、福島がも  
たらした西園寺外相の1895  
年10月1日付書簡に対する返信  
を準備した。

しかし、福島は離タイの日を  
延期して粘った。2月1日の17  
時に外務省にルアン・ウィス  
トゴサーを訪ね、国王謁見の  
件を質問した。ルアン・ウィス  
トは、デーワウオン外相には報  
告しているが、何等回答に接し  
ていないと答えた。福島曰く、  
それでは謁見できないことにな  
りそう。日本政府の公務で入  
国したのに極めて残念だ。帰国  
すれば天皇から質問も受ける  
だろうに。それに謁見は私自身  
にも大きな名誉となるのだが、  
と。

謁見できるかどうかは何とも  
言えない。まだ明日1日あるで  
はないか、と答えざるを得な  
かったルアン・ウィストは、  
福島の来訪を直ちにデーワウ  
オン外相に報告した。  
翌2日、デーワウオン外相は、

本日午後5時アンダーソンが謁  
見することになっている、その  
前か後にほんの短時間でも福島  
大佐に謁見を賜うことはできな  
いだろうかとの問合せて、国王か  
らアンダーソンの前に来るよう  
にという回答を得た(タイ国立  
公文書館339663)。福島は、  
離バンコクの前日夕刻、やつと  
念願の国王謁見をかなえた。こ  
の謁見は内謁のため官報には記  
載がない。

1897年1月8日における  
川上中將一行の国王謁見時の会  
話録を前々月号で紹介したが、  
この時も、国王は謁見にそれほ  
ど積極的ではなかった。その一  
因は、川上一行が、当時のタイ  
エリートが忌み嫌っていたフラ  
ンスとべったりであったという  
点にあった。

1月4日にデーワウオン外相

はドフランス公使から、川上將  
軍が来タイしたので連れて訪ね  
たい、かつ国王にも謁見させた  
という文書を受領した。同外  
相は国王に上奏して曰く、私と  
の面会は明日(1月5日)で了  
承した。国王謁見については国  
王次第である。明日私が会った  
際に、滞在期間が短いという相  
手側の言葉尻をとらえて、断つ  
てもよい。つまり、在タイ期間  
が短いのは残念である。国王は  
謁見を賜われることを望んでお  
られるものと思うが、ご多用で  
ある私にも今のところお時間が  
あるかどうかは判らないが一  
応上奏しておく、と言うのであ  
る、と。

1月5日に川上一行に会った  
外相は、日本側が同席したドフ  
ランス公使に促されて国王謁  
見の件を質したので、昨日上奏し  
たような内容の回答をした。  
外相からの上記1月4日、5  
日の両上奏書を読んだ国王は、  
「私も会いたいと思う。ただ、顔を  
見てみたいというだけの興味だが。  
但し、ドフランス公使が連れてくる  
のではなく、単独で来るのであれば  
満足だ。しかし、そういう具合に行  
かない虞がある。そのようなこと  
になりそうなら断つてもよい」(タイ  
国立公文書館339663)と指示さ  
れた。



連載 ⑫  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(58)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

1890年代に日本の参謀本  
部は、4組の軍事視察団をタイ  
に送ったことを、本誌3月号に  
書いた。このうち、1897年  
1月初旬の参謀次長川上操六中  
將一行の来タイについては、4  
月号、5月号で紹介し、189  
7年1月から2月にかけての福  
島安正大佐の来タイについては  
6月号で紹介した。

本号では、1893年7月から  
11月の上原勇作(1856-1  
933)少佐・山田良國(よし  
まる)中尉の来タイ、同年12月  
の大迫尚道(1854-193  
4)少佐の来タイについて紹介  
したい。

上原、山田二人のタイ訪問に  
ついては、4月号では陸軍大將・  
男爵荒木貞夫編『元帥上原勇作  
伝(上下)』(1937年10月刊)  
にも、上原のタイ訪問に関する  
記述があるが、他の資料が混入  
していると思われるので、調べ  
てみたいと述べておいた。

荒木貞夫(1877-1936  
6)大將は、言うまでもなく昭  
和の軍閥、皇道派の巨頭であり、  
一時は青年将校に圧倒的な人気  
があった人物である。1931  
年末から34年初に陸軍大臣、35  
年末男爵位を授けられた。19  
36年の2・26事件後予備役と  
なり、1938年5月から1年  
余文部大臣を務めた。敗戦後A  
級戦犯として逮捕され、終身刑  
の判決を受けた。

このような有力者を編者に担  
いで出版された上原勇作伝は、  
参謀本部員上原勇作の訪タイを  
次のように記している。

元帥「上原」と  
暹羅安南地方視察

元帥は、明治二十六年七月二十  
日、歩兵中尉山田良國と共に、安南  
及び暹羅視察の為に、其の派遣を命  
ぜられた。  
是より先に、仏國と暹羅との間に

於て、眉公「メーコン」河左岸占尊  
問題に關し、葛藤を生じ、終に砲火  
を開き、仏國艦隊は、暹羅の海岸を  
封鎖するに至つた。蓋し仏國は、交  
趾支那を領有してより以來、眉公河  
を遡りて南支方面に對する通商路た  
らしめんとしたが、眉公河は急湍  
「きゅうたん」、急流、激流の為に舟  
楫の便に乏しかつたので、其の方向  
を転じて、暹羅國境に侵入し、葛藤  
事件が繰出し、終に明治二十六年(西  
曆一八九三年)に及んで、暹仏の交  
戦を見るに至つたのであつた。

當時仏國の砲艦は、メーナム河口  
の砲台を撃破し、江口に遡りて盤谷  
に至り、王城に逼りて強硬談判の結  
果、償金と共に東蒲里「カンボジア」  
正しくは「ラオス」の一郭を割譲せし  
めた。英國は、明治十三年以來、緬  
甸を併呑し、馬來半島の南半分を占  
めていたもので、暹羅は、一方は南西  
北より英國の爲め、他方には東北よ  
り仏國の爲に蚕食せられ、暹羅を中  
心として英仏兩國の關係が緊張する  
に至つた。其の結果如何は、日支兩  
國の利害に關係すること少しならざ  
るものあるを免れぬ。當時参謀次長

川上中將は、適々「ちようど」歐洲  
より新に帰朝した大迫少佐(後の陸  
軍大將大迫尚道)の報告に接したの  
で、南支方面の形勢を探索するの必  
要を感じた。是れ實に元帥「上原」が、  
特に参謀本部より選拔せられて、暹  
羅及び安南地方に派遣せらるるに至  
つた所以であつた。

元帥は、山田中尉と共に「189  
3年」七月二十六日、東京を出発し、  
往復行程、凡そ百八十余日。十一月  
十二日、其の使命を終へて帰朝した。  
其の旅行日程は大略左の如くであつ  
た。

盤谷滞在附近旅行	十日
盤谷西貢間旅行	三十日
西貢附近旅行	十日
西貢より眉公河を遡り、ボツルテ ンを経て河内に至る旅行	三十日
河内滞在	七日
河内香港間	五日
香港滞在	五日
香港、馬尼刺渡	五日
比律賓滞在	九日
元帥は七月二十六日、東京出発、 横浜より郵船に搭じて香港に航し、 是より広東省に著し、広西省の鎮南	

2016年7月29日

関を経て、安南に入り、首府順化「フエ」府に著し、交趾支那の首府西貢に駐まりて同地方の視察を終り、東藩塞の首府フノンペンに至り、同地方を一巡して、一旦新嘉坡に出で、是より暹羅に航し、首都盤谷府に著した。然るに、当時、暹仏の調和条約締結「1893年10月3日調印」されて、平和が漸く克復したる直後であつて、仏國は猶疑の眼光を以て、日本の態度を注視していた。元帥一行の盤谷府著が恰も此の際であつたので、元帥は、仏國官憲の警戒裡に辛うじて視察を遂げた程であつた。

當時日暹間には、通商条約が締結されず、公使館も設置されていなかった。元帥は自家談判「判」にて事を辨じ、兵官や公式の回覧には差支も無かつたが、公然暹羅皇帝の謁見などは許されなかつた。但し昔時山田長政の旧居と称するアユチュカ「アユタヤ」に、離宮「バーンパイン」があるので、其の内覧を許されたのであつた。而かも元帥一行の赴く所には、仏國の官憲が必ず之に随伴して、一刻の油断さへも与へず、其の警戒は極めて厳重であつた。

この節の記述は、矛盾が多い。『元帥上原勇作伝（上）』は、上原一行は、7月26日に出發して、11月12日に帰京した（合計日数110日）と記しながらも、一方で、この行程を180余日と明記している。更に同書掲載の行程表では、バンコク・サイゴン・ハノイ・フィリピンの順序で記し、かつ記載日数を合計すれば192日となるが、同書の叙述では上原一行の行程はハノイ・フエ・サイゴン・フノンペン

・バンコクの順となつてゐる。正に逆さである。加えて、行程表に「西貢より順公河を遡り、ボツルテンを経て河内に至る旅行」に30日、と書かれてゐるが、この地名と経路は理解しがたい。また、3月号に根拠を示したように、出張は3ヶ月の日程であり出張先として命じられたのは、ベトナムとタイの2国だけなのに、行程の半分以上に当たる90日を命令にないフィリピンに滞在したという内容も不可思議である。

参謀総長熾仁親王の日記の1893年11月13日の項にも「陸軍工兵少佐上原勇作去七月廿四日出発、暹羅・安南地方へ出張視察の処、昨十二日帰朝に付、……面謁之事」熾仁親王日記 卷六「高松宮蔵版」1936年、304頁とあるので、上原一行の帰京は、1893年11月12日である。それ故、旅行の総日数は110日にしかならない。次に述べるように、上原等は1893年9月26日から10月8日まで、間違ひなくバンコクに滞在しており、11月12日には東京に帰着しているの

で、バンコクを離れた後、フィリピンに90日間滞在することは不可能であり、立ち寄る時間的余裕があつたかどうかさえ疑わしい。

また、同書の記載によれば、上原等への出張命令は、川上参謀次長が、ベルリンから帰朝した大迫尚道少佐の報告を受けて出されたことになつてゐるが、これも明らかに事実と反する。既に3月号に見たように、1893年7月13日のパークナム事件直後に、参謀本部は、上原・山田にタイ・ベトナムへの3ヶ月出張を命じ、同時にベルリン駐在武官の大迫に帰朝途中にタイ・ベトナム・フィリピンへの6ヶ月立ち寄り調査を命じてゐる。大迫のバンコク到着は、1893年12月、ベトナムを経てフィリピン調査のち日本に帰着したのは、94年6月初めである。バンコクに到着した時期だけ見ても、大迫は上原等に2ヶ月遅れている。大迫の帰朝後の報告を受けて、上原等に出張命令を出すことは、時間が前後に逆転しており不可能である。

『元帥上原勇作伝』の暹羅安南への出張の項は、上原山田の

ベトナム・タイ3ヶ月出張と、大迫のタイ・ベトナム・フィリピン6ヶ月出張との記録がどうも混交してゐるよう思われる。これを証明するには、同書掲載の行程表が、大迫の帰朝報告の一部であることを示せばよい。加えて、93年11月30日には、上原は熾仁参謀総長に暹羅・安南地方視察の実況講話を行い、同年12月20日も参謀本部の講義室で熾仁親王臨席の下に暹羅・安南地方視察の状況講話を行つてゐる（熾仁親王日記 卷六「高松宮蔵版」1936年）313、324頁）ので、講義録が残つていれば、一層正確となる。

しかし、敗戦直後占領軍上陸前に、日本軍は明治以来の全文書（但し人事記録などを除く）の湮滅を命じた。この命令によ

り極々一部が隠匿された以外は全てが失われた。帝国陸海軍の消滅とともに、その歴史資料も灰燼に帰したのである（外交文書は、大体1930年代半ばから敗戦までのものを破壊）。敗戦直後燃やされた文書の中に、上原や大迫のタイ出張報告が含まれてゐたのか、或はそれ以前に杜撰な文書管理によつて散逸してしまつてゐたのかは判らない。

それでも個人保管の文書の中に、何か残つてゐる可能性はある。首都圏大学東京の図書館に『上原勇作関係文書目録』があることを知つて、南大沢まで足を運んでみたが、この文書中に

あるものは明治末期に上原が陸軍大臣になつて以降死亡する1933年までの私的来翰と大正期以降の殆んど価値のないような私的雑書類に過ぎなかつた。

#### 上原・山田来タイのタイ側記録

上原勇作・山田良圖の訪暹について、タイ側の記録としては、1893年10月21日付陸軍司令官バーヌランシー親王から国王秘書官ソムモット親王に宛てた次の書翰がある。

先月、上原勇作少佐と山田良圖中尉の2人が、日本政府の命令でシヤ



ムの軍事視察に來訪した。彼等は  
テ・ウ・オン外相を訪問した後、私  
を陸軍本部に訪ねてきた。しかし、  
その時、私はバーンバインに居たの  
で、会うことはできず、陸軍副司令  
官フラー・シー・ハーラー・チャー  
チー・チャイ少将が丁重に應對し  
た。彼等は兵舎の見学を希望した。  
陸軍副司令官は、上司の許可を得な  
ければならないとして、私に報告し  
てきた。私の考えは次の通りであつ  
た。日本將校に我々の軍隊を見せな  
いことはよくない。我が軍の現状は、  
未だ十分には整わず強固とはいひ難  
くとも、既に持っているものは良い  
状態にある。もし、見せなければ、  
友好關係を断ち、日本將校がよくな  
いことを報告する道を開いてしま  
う。そうならば、國王の名譽は、軍  
隊の實情を見せた場合以上に損なわ  
れてしまう。そこで、私は國王の許  
可を得たのち、陸軍副司令官に、外  
務省と合意の上視察させるように命  
じた。

9月24日付けで外務省から当方宛  
に日本將校に軍隊を視察させること  
を依頼する文書が発遣され、同月26  
日に日本將校は軍隊視察に現れた。  
陸軍副司令官は部下に命じて、騎兵  
隊、近衛隊、士官学校、近衛隊、下  
士官学校を案内させた。各部隊の視  
察は無事終了し、國王の名譽を汚す

ようなことは何も生じなかった。

10月6日に外務省員が、2人の日  
本將校をバーンバインで國王に拝謁  
させた。それから同將校は、私に面  
会し、軍事について意見交換をした。  
日本將校は我が方に対し同情的態度  
であり、近隣國の軍人同士として  
様々のことを語りあつた。日本將校  
が、我が軍隊を視察し、國王に拝謁  
した際にお言葉を拝聴し、加えて私  
に会ったことは、日本政府及び日本  
軍上層部により報告をさせるだけの  
満足感を与えたものと思う。(タイ  
國立公文書館「5013176」)

10月6日のチュラーロンコー  
ン王拜謁は、内謁であり、官報  
には記載されていらない。また、  
同王の日報を記した「王事日誌  
記録」の当日欄も空白のままであ  
る。この時期、國王は殆んど  
バーンバインで過ごされてお  
り、上原等に同地で内謁の機会  
を与えられたことには特別の意  
味はない。

10月8日にはバンコクの  
ワット・プラケオで誓水儀式  
を挙げるため、國王はバー  
ンバインから一時的にバンコ  
クに戻られた(『タイ官報』第  
10巻29号、1893年10月15日、  
311-312頁)。誓水儀式

(Westernisation Movement)  
とは、國王に対して一心なく  
絶対忠誠であることを誓つて、  
文武官僚が、ヒンドゥー祭司が  
呪をかけた水を國王の面前で飲  
む儀式である。下記するように、  
上原等は、この儀式を見学する  
ことができた。

上原元帥が語つた  
タイ・仏印の回想

『上原勇作伝』には、上原が  
加藤純吾に語つたという次の回  
想が引用されている。

元帥の語る處に拠れば「安南の首  
府順化「フエ」府は山間ではあるが、  
其の港灣は、昔時開放されて日本人  
が此の地に植民し、徳川氏領國の後  
に至るまで繼續していた。日本の市  
街も日本の家屋も存在し、日本人の  
墓地も見られた。東藩藩の首府フ  
ノンベンの方一里許、旧日本部落  
に沿つて流れる河を指して、日本河

と云ふが如きは、如何に日本人と深  
き關係を有していた乎を証するに足  
るものがある。暹羅に於ける山田長  
政の事蹟は、當時分明を欠いていた  
が、今や歴史家の研究に由りて大に  
明瞭となつて來た。暹羅に於て、一  
年一回、内外人に対して、其の忠実  
を誓はしむる儀式がある。是れは王  
室に属する寺院「ワット・プラケオ」  
に於て行はれるものにして、神水を  
黄金製の盆に湛へて御剣を其の水  
に浸し、之を飲まして誓ふ所の式  
である。予も亦陪觀者として、「1  
893年10月8日」此の式に参列  
したが、一見我等の眼光に映じたも  
のは、同國大官の佩る刀剣が、昔  
時の日本刀と同一であつて、鞘は勿  
論、銀糸の捲き方も同じきも、唯其  
の異なる所は、金箔を塗りたるのみ

である。蓋し山田長政の遺風を存し  
たのであらうと思はれた。盤谷府の  
圖書館に所蔵している仏文の書籍を  
一読したるに、日本人の船體三百艘  
とある。同國の風俗は、貴賤の區別  
整然として、上流階級は剣を佩びて  
威嚴を莊ふも、時に相ひ合同して、  
一揆を起すことがある。婦人の裝飾  
を施さぬは、東洋人として珍しき風  
習であるも、宜しくないと記してあ  
る。東京「トンキン」の支那國境な  
る紅河の沿岸は、往昔日本種族の繁  
榮したる處、今や一里余も陸地に入  
り込んでゐる。此の地方は美人の産  
地として有名であるが、是れ亦日本  
人種の後裔である。

又た元帥の語る所に拠れば「鎮南  
関「現、友誼関、中國ベトナム國境」  
に入つたときに、仏國案内者が、珍  
らしきものを見物させるとて、我等  
を一茶店に案内し、日本婦人三名を  
呼んで來た。此の婦人は、肥前天草  
の産である。我等は「何故に此の土  
匪多く、危險千萬なる山奥に住居す  
るか、早く日本に帰れ」と勧めたが、  
彼等は「土匪と雖も、女性の命を奪  
ふものは無い」と云ひ、満足してい  
るやうであつた。彼女等が此の山奥  
に來るにも其の地の長官と直接談判  
し、許諾を得て少しも恐れず、益々  
奥地に進出する大胆さには、流石に  
軍人たる我等一行も喫驚した程であ

る。

「或る日フノンベン市に於て日本  
風の下駄を穿ち居る一女子を見し  
たので、汝は日本人であるかと問ふ  
た。彼女は我等に対して日本の御方  
であるかと云ふ。彼女は馬尼刺「マ  
ニラ」人と結婚し、此の地に生活し  
てゐる。外に今一人の日本婦人がい  
るが、彼女は是非とも、我家に來て  
呉れと云ふに任せて行つた。其の住  
家は日本風に似て、床高く梯子とも  
云ふべき階段を上りて案内され、番  
語にて其の亭主を呼び、我等に紹介  
した。彼女の云ふ所を聞くに、彼は  
元と上海に住居していたが、暹羅(マ  
マ)宮廷の樂師として傭はれ、王宮  
構外に其の邸宅を与へられてゐると  
云ふ。彼女は元と神戸市外に生れ、  
郷里には母と兄弟もいる。先日も金  
を郷里に送つたが、果して届きしや  
否やと云ふ。我等は如何して、送金  
するかと問ふた。彼女は一年に一度  
新嘉坡から日本商人が來るから、彼  
に託して送金する。又た其の履く所  
の下駄も亦其の商人より買ふたと云  
ふ。我等は彼女が文字を知らぬと云  
ふから「亭主は英語が出来る趣ゆゑ、

日本語其の儘を羅馬字に綴りて、通  
信すれば、母兄弟に届くから其の機  
に致せよ」と教へて別れたが、前の  
鎮南関の女性と此の地の女性とは、  
好一對の日本婦人であらう。

東藩藩にあるアンコールワットの  
廢墟は、世界的著名の建築物にして、  
埃及のピラミッド以上、宏壯であり、  
又た美術的である。……元帥は此の  
旧蹟を回覽せんとしたが、湖水を隔  
てた地方にあるを以て、其の見物容  
易ならざるを知り、其の行を断念し  
た(前掲「元帥上原勇作伝 上巻」  
143-146頁)。

上原勇作、山田良圓と岩本千  
綱は士官学校同期(旧3期、1  
879年末卒)であり、彼等の  
時代の士官学校の教育はフラン  
ス人教官によつてフランス語で  
行われた。その上、上原は士官  
学校をトップの成績で卒業し、  
フランスに3年間留学した。山  
田は職務中にも、欧文に熱中し

ている語学マニアであつた。彼  
等にとつて、バンコクの圖書館  
のフランス語文獻を読むくら  
い、正に朝飯前であつたのだら  
う。

大迫尚道の6ヶ月の  
東南アジア調査

大迫尚道少佐は、1891年  
12月15日に福島安正少佐の後任  
としてベルリンの公使館付武官  
に任じられた。93年7月22日付  
で、同職を免じられ、帰朝途中  
6ヶ月間、タイ・ベトナム・フィ  
リピンを視察するように命じら  
れた。大迫はすぐにでも離任し  
てタイに出発したかつたが、後  
任の落合豊三郎少佐着任まで待  
つよう指示され、ベルリンを  
発つたのは10月後半になつてか  
らであると思われ。

大迫のタイ軍事視察への協力  
依頼は、ベルリンの青木周藏公  
使から駐ベルリンタイ公使のプ  
ラー・ノンタブリーを通じて  
行われた。テ・ウ・オン外相か  
らの問合せに、タイ陸軍は9月  
26日付で大迫の視察を受入可と  
返答して來た。11月3日にノン

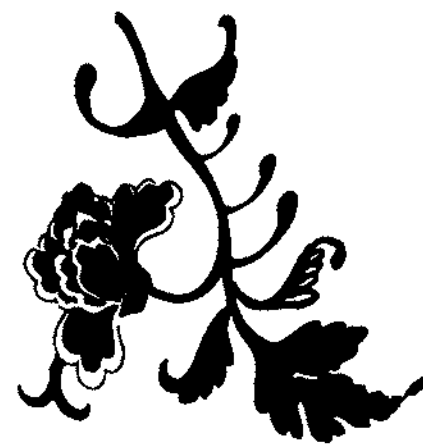


タブリー公使が青木公使を訪問した際、青木は、今頃大迫はアデンに到着しただろうと語っている。また、青木はフランスから圧迫されているタイは、中国（清）と友好関係を結ぶべきであるとアドバイスをしている（タイ国立公文書館蔵33636）。大迫は、12月にはバンコクに到着し、テークウオン外相にも面会した（外務省記録9110）。「帝国陸海軍将校海外派遣雑件 陸軍の部」に大迫の来タイ時に、丁度在タイしてパーサコーラウオン邸で岩本千綱と同宿していた熊谷直亮は大迫のタイ軍視察に同行した（九州日日新聞1894年2月4日号）。多分岩本も同行した可能性が高い。

香港の一等領事中川恒次郎（1862-1900）は、外務省の原敬通商局長宛の1894（明治27）年5月10日付私信の追伸に、「近來は海軍陸軍とも共に移民熱が外国事件に注意するものか、現に陸軍少佐大迫は呂宋（ルソン）島巡回をなし居、当港（香港）には海軍大尉黒井徳二郎（東文三と仮称し）参り居候。尤も黒井は小生知友に付、同人の仕事を知するに都合よろしく御座候」（原敬文書研究会編『原敬関係文書 第二巻 書翰篇二』日本放送出版協会、1984年、402頁、本書編者はこの中川恒次郎を明治28年5月10日付と誤解している）。大迫は94年5月14日に香港に戻ってきた。中川領事は、大迫から聞いたフィリピン

調査の様子を、翌5月15日付私信で原敬に次のように報告した。『予て呂宋島へ参り居候陸軍少佐大迫は昨日帰港、同人はマニラより南北を数哩旅行候処、途中地圖を描し地景を写したる等より嫌隙を受けたるもの歟、而度まで地方官憲兵等に拘留されたる様子にて、或は帰朝の上謝罪の儀先方へ照会を要求するやに申居候へ共、又太守より仏領事まで謝罪の意を大迫へ伝言依頼したれば、此上公然の照会等は極当に有之間敷と存候。尤も同人拘留も甚しき虐待を受けたる儀に無之候。兎も角もマニラ領事館撤去の事は、該地へ参りしもの之を不賛成を唱へ

居る儀に御座候。御一考煩し度候。不斷は公使館領事館の悪評を奉ぜしも矢張り頼む処有之、奇妙に被考候。大迫の考に呂宋の軍事上専ら取調ぶるには、一人商業者に変じ二三年を期するにあらざれば、急激には取調難き由申居候。或は参謀本部も右様の計画に出づべき歟。又該地にある本邦人の多くの不体面に驚き居候」（同上『原敬関係文書 第二巻 書翰篇二』402-403頁、本書編者はこの書翰も明治28年のものと誤解している）。大迫が訪問した当時、フィリピンには日本の領事館はなく、日本人保護をフランス領事に依頼していたので、スペイン人統治者から仏領事を通じて謝罪文が届けられたのであろうか。大迫は94年6月初めに日本に帰着した。



連載③  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱（59）

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

軍事探偵ではなかった  
岩本千綱

本誌の今年の2月号に、岩本千綱のひ孫に当たるという大坪治子（はるこ）さんが、岩本千綱は軍上層の特命を受けて、日本軍部の軍事探偵として1896年12月20日に三國探検にバンコクを発ったこと、軍事探偵として生きるために岩本は、「妻子を離別、戸籍を抹殺」したこと、岩本が国に殉じたのでその妻よねの「生活の面倒」は軍の要職者がみた、と書いていることを取り上げ、小説の世界ならいざ知らず、現実の資料をもとに考えるとあり得ないと評した。

そのように考える根拠の一つとして、本誌3月号から先月号において、1890年代半ば、日本の参謀本部がタイに送った四つの軍事訪問使節について紹介し、日本軍はこれらのタイ派

遣者が収集した情報を持っていたので、陸軍を不品行のために辞めた岩本にわざわざ依頼する必要はなかったことを述べた。本誌7月号の末尾に記したように、在香港領事中川恒次郎は、原敬外務省通商局長に宛てた1894年5月の私信の中で、香港に変名で海軍大尉黒井徳次郎（1866-1937、のち海軍大将）が潜んでいる事実や、フィリピン出張ののち香港に戻ってきた大迫尚道少佐が、ルソンの軍事調査を全うするためには、商人に化けて2-3年間は潜む必要があると語ったことを報告している。これから日清戦争直前の1894年前半の時点でも日本軍は軍事情報収集のために現役の将校を東アジアに潜行させていたことが判る。その場合、本号の写真に示すように、参謀本部は外務省に無記名の旅券の提供を求め、実名とは異なる名を書き込んで派遣将校

に与えていた。もし、岩本千綱が軍部から、この種の任務を託されていたのなら、彼も変名の旅券を与えられたはずであり、旅券の下付記録の中に、岩本千綱という実名は存在しないはずである。ところが事実は、本誌2015年5月号に示したように岩本は海外渡航の都度、実名で高知県の本籍地を書いて旅券の下付を受けている。大坪治子さんが言うような戸籍の抹殺などは考えられないのである。

これらの見解を一応大坪さんにも伝えてみようと、彼女の論考に記載された連絡先宛に照会の手紙を郵送してみたが、宛先不明で返送されてきた。25年も前の住所であるから、仕方ないことであろう。

1897年1月4日にバンコクに到着した川上操六参謀次長一行は、当時バンコクで日本人会第2代目会長をしていた、鹿

児島県士族磯長海洲（写真師）から、「岩本は先達でコラット「コーラット」の方に赴くと行けり。元来同人当地にて失策したる故、罪滅しの為め僧となり行くと、吹聴せり。然れども実際は当地に彷徨し居るとの説あり」という話を聞いている。もし、岩本の三國探検が本場に軍に依頼されたものであれば、2週間後に来タイすることが判っている参謀本部の実質責任者、川上中将に顔を合わすことなくバンコクを発つことが考えられるであろうか。また、参謀本部が岩本に依頼していたのであれば、川上中将一行が岩本の動きを把握していないとおかしいが、彼等は岩本がどこにいるのかさえも知らなかった。

岩本千綱著『暹羅老猫』（ラオス）安南三國探検実記（博文館、東京、1897年8月30日発行）は岩本千綱と山本鑑介がバンコクを発ったのは、189

456  
14

6年12月20日の早朝と記している。同書は、12月22日に岩本等がサラブリーでチュラーロンコーン王一行のお召し列車に遭遇した際の状況を詳述しているが、その内容は正確な記録が残るチュラーロンコーン王のコーラート鉄道建設地御訪問の行程と一致している。バンコク・サ

ラブリ間は約110キロ。12月22日には岩本等はサラブリーに到着していることは争えないから、逆算して、20日早朝にバンコクを発ったことは間違いないはずである。

さて、本稿では岩本等が跋涉した三国（タイ、ラオス、ベトナム）中、タイ部分の旅行についてのみ通過・滞在地名や道中の様子を具体的に検討するつもりである。タイ部分に限定するのは、前述岩本千綱著『暹羅老撾安南三国探検実記』に記されている地名の多くは実際の発音

と乖離しており、かつ小村落は地図に見あたらないものもある。タイ部分の地名の多くも当時の詳しい地図と丁寧に照合して推定しなければならぬからである。それ故、ラオス、ベトナム部分で同様の作業をすることは、筆者の能力を超えている。

無記名海外旅券  
五通  
右者至急入用之義有候也  
明渡相成度及中照會候也  
参謀總長彰仁親  
外務大臣臨時代理  
文部大臣侯爵西園寺公望殿  
暹王差掛、義有之儀、同本、日、中、  
暹王相成、候、様、致、度、申、添、也、

出所：外交史料館旅券下付表（マイクロフィルム、リール旅12）

岩本等は12月20日にバンコクを発ち、翌年1月21日にラオス国境の町ノーンカーイに到着した。三国探検実記は、この行程は約437マイル（約703キロ）、33日で踏破したと記している。なお、バンコクからノーンカーイまでの直線距離は515キロ、今日陸上を道路で移動した場合の距離は、約388マイル（約624キロ）である。彼らはチャオプラヤー河畔のバンケラ寺で出家し、僧形で托鉢をしながら三国探検をしたこと、しかし上座部仏教の正しい出家者と言うには無理があることについては、既に本誌2015年4月号に記した。この外に岩本等の三国旅行の特徴として二、三指摘しておきたい。

457  
15

要な正規の許可手続きを取らなかったことである。そのため、コーラートまでは、役人の目を避けながら進まざるを得なかった。彼らの旅行は、条約により外国人が自由に往来できる「首府外4哩の点より小舟行程20時間の圏内」を越えるものであるから、日本政府の依頼により在タイ日本人の保護を担当しているフランス領事を通じて、タイ外務省に国内通行免状（パスポート）の発給を求める必要があった。しかし、山本等はこの手続きを踏まなかった。

タイに限らず、日本でも1899年に外国人が自由に国内移動（内地雑居）できるようになるまでは、居留地毎に定められた「外国人遊歩規程」によって、居留地とその周辺しか自由に移動することはできず、その奥の内地に入りた外国人は、外務省から「外国人内地旅行免状」を受けなければならなかった。国内通行免状なしにバンコクを離れた岩本等は、12月30日の夜、コーラートで野宿中に、泥棒に遭い、結局同地のフランス副領事館に保護を求めて駆け込

まざるを得なかった。因みに、資料で判明する限り、タイ内地旅行の免状を得た最初の日本人は、拓植廣海（つげひろみ、1876-?）である。外務省記録の旅券下付表によれば、拓植は長崎県平民で、19歳2カ月の1895年12月17日にタイ渡航のために旅券の下付を受けた。

1896年4月初め、2度目のタイ渡航でバンコクに到着したばかりの宮崎滔天はコレラもどきを患って苦しんだが、その時手伝ってくれた一人に「拓植香港」なるものがいたことを自著『三十三年の夢』に書いている。この「香港」は誤記で、正しくは「廣海」であろう。拓植廣海は初代駐タイ公使が、1897年6月初めにバンコクに着任した。1897年9月14日に拓植はデーワウオン外相に、拓植廣海にコーラート行き免状（パスポート）の発給を依頼し、同外相は9月18日付で免状を拓植に送付してきた（タイ国立公文書館蔵）。拓植が直ちにコーラートに出発していれば、岩本等に遅れるこ

458  
16





あるハマダラ蚊の発生も少ない。最も快適に徒歩旅行ができるシーズンである。

とは言え、猛虎を避けることはできなかった。岩本・山本の2人組は、ノーンカイまでの行路で、2回恐怖の体験をして

いる。  
1905年から1912年まで日本最良のワット・サケート寺住職のお蔭で同寺の僧坊に宿泊を許され、住職に随行して各地を回った、黄檗僧漢道元(1877-1966、1956年に黄檗宗大本山萬福寺52代住持)は、1908年10月1日から4ヶ月間に亘る、コーラット、ピマ、プリアム等の東北タイ旅行の報告の中で、虎害防止のために多数の集団で移動した様子を次のように書いてい

る。  
陳者小生儂當田舎地方の情況視察の爲昨午「1908年」十月一日より東北行脚仕り本月九日帰盤仕候。此前後四ヶ月間に於ける旅行中に於て最も小生の感ぜし事並に未だ本邦人士に多く知られ居らざる事案のみ二三を記して差送り申上候先づ順序としてコーラット「コーラット」州より御報道申上候。當

コーラット市は盤谷府より僅かに二百哩の距離に候へ共氣候及人情風俗等は余程異り居り申候。當市は暹羅東北部中第一の都市にして北緯十四度五十九分東經百四度十分の処にあり。仏領老樹の園境なるノンカイ市迄は徒歩十二日間にして達し得べく候。戸数は四千計にして人口は約二万と称し居り申候。市中に十ヶ寺余の寺院あれども何れも古跡として見るべきものなく各々百年以後の建築にして僧侶も盤谷府の各寺院に於ける僧侶に比し智識は劣れる方に御座候。此辺の寺院は総てマハニカイ(旧教)にして自然戒律も厳重に無之。僧侶の勤めとしては毎朝一度行鉢に出するのみ朝暮之誦經も致さず寒に香気なものを御座候。當市にて第一の地位を有しつゝあるはワットクラング「Wat Klang」と稱する寺院にして住職は(ハラサツサマーン)師。當府第一の高僧として人民の崇信教し居るものに御座候。當寺のみは毎月四回のワンプラ(仏日)には説教も致し居り且つ小学校の設けありて児童教育に従事致し居り候。其他にも付属小学校の有るもの一ヶ寺有之候。重なる教員(僧侶)は盤谷府より雇ひ来り候るものに御座候。……當コーラット市よりノンカイ街道を北に距たること約二十哩の地にピマ、イと稱する處有之。茲に石造

建築にて広大なる寺院有る由を聞きコーラット市在中此地に遊び申候雨氣中の事として道路險悪行通最も不便に候へ共或は牛車に乗り或は騎馬にて二日間を費し漸く目的の石造院に宿仕り僧房にて一宿仕り候。……小生はコーラットにて雨氣の晴るを待合せ居り。十二月十五日ブリアムに向て発足仕候。コーラットよりブリアムに達する迄の道路は尤も危険なる旅行にして広漠たる森林と原野のみ人家至て稀にて猛獸及強盜多く土人は此間を通行するには何れも牛車隊を組織して十人若くは二十人位。隊を組み一切の食料及飲料水等を用意し武器を携帯して通行するものに御座候。小生もコーラットより五名の牛車隊と同行を約し其夜森林と森林との中間なる原野に露營地を設け牛を中央に臥さしめ其周囲に牛車を円形に連ね城壁となし数ヶ所に篝火を燃し終夜火の消へざる様各自交代にて火の番をなす。即ち猛獸の來襲を防ぐ爲に候。余は何れも牛車の上又は其傍らに寝を敷き睡眠するものなれども夜中遙かに猛虎の吼く聲を聞ては余り快く眠りも就き不申候。野に臥してかすかに睡り虎の聲を聞ては余り快く眠りも就き不申候。翌朝未明に出立して約十五六丁「約一・七キロ」も歩みしと思ふ所に之も小生等先立て露營せし十名計りの牛車隊ありしが今朝未明に水牛一

頭猛虎の爲に尊はれしとかにて大いに騒ぎ居り申候。小生等は僅か五六人の連れなりしも何事もなく無事なりしは幸ひのことなりしと一同喜び合ひ申候。其れより此一隊と俱に同行を約す。今度は十五六名の一隊と成りし事故大いに賑はしく最早危険の恐れもなく日々同じ様なる森林又は原野など無趣味の行程六日間にして無事ブリアムに宿仕候。此地はコーラットよりウボンに通ずる中間の一小市街にして此地にもコーラットより約一ヶ年遅れて露營所を設け目下本邦人一名(昨冬迄は二名なりしも目下病氣の爲め一名帰朝中)監督の下に露營専門にて事業に就事致し被居候。本年よりは当地を露營の開闢所となし数ヶ所に支部を開闢する筈なりと聞けり(漢道堂(道元)「暹羅國北部の宗教狀態」(「禅宗」第170号、1909年5月号、44-47頁)。  
牛を真ん中にして牛車で囲み、外側にかがり火を焚いて猛

459  
17

虎を防止するやり方は、東北タイを舞台とした、1970年代末から80年代の映画で見たのと同じ光景である。なお、漢道元師は在タイ時、バンコクのソーイ・キヤブテンブッシュにあって日本人会の施設、日本人倶楽部の管理人を務めており、日本人会とも縁の深い方である。

岩本等が通行した時代のみならず、1930年代に至るまで東北タイの通行には虎の恐怖がつきものであった。

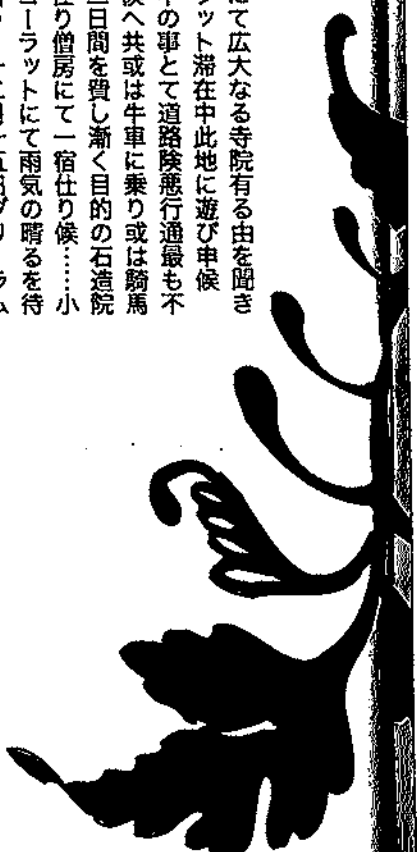
1934年にバンコクの文部省員からウドンの視学官への異動命令を受けたマーニット・チュムサーイは赴任途中の様子を次のように回想している。當時、国鉄はコーンケンまでしか達しておらず、コーンケンからウドンの間は牛車で2日かかった。途中に虎の棲息地である「うっかり虎」という山野があり、うっかりしてこの山中に野宿でもすると、虎の餌食にならぬとも限らなかつた(「マーニット・チュムサーイ72歳記念本」1980年、56頁)。また、1935年3月28日の国会で、クン・ウオラシットダラン

ウェットというノーンカイ県選出の民選議員が、郡庁に出向いて人頭税を納付しなければならぬ人民の苦勞の實情を説明し、徴税官が村に来ることはできないかと政府に質問したが、その中で、郡庁から離れてゐる村では、郡庁への往復に徒歩で2-3日を要するが、そのためには必ず仲間連れで行かねばならず、虎や野生象からの危害にビクビクしながら山中を通過することになる(「タイ官報」第52巻(仏曆2478年)39-41頁)と、述べている。

外務大臣男爵 幣原喜重郎殿  
暹羅國在住田邊嘉蔵變死に關する件報告  
暹羅國在住田邊嘉蔵の死亡に關しては7月12日付往信第75号を以て所定の通り転送致置きたるも右田邊は從來盤谷より東方行程約六日を要するチヨンプリ県ニコン郡ボート村に居住し樹膠林の經營及雜貨商を営み居りたる處客月13日夜猛虎に襲はれ惨死せる旨別紙の通當國外務省より通報し越せるに付右田邊と數ヶ月間同居せる中川重助なる者の歸來を待ち右中川より詳細別紙の通り聴取せり就ては委細右調書及外務省來翰等にて御承知の上可然御取計相成度此段申進す

で食料品と雜貨の行商に出掛けました。ところが翌十四日午前二時頃進行せる通人が色を失ひ帰宅し嘉蔵は途中山の中の空小屋に自分と共に飯寝中虎に襲撃され喰殺されたと云ふ急報を受けると同時に非常急報用の竹筒を乱打致しました。  
急變の告知筒音を聞た村人は嘉蔵方に四十人位集合しましたが協議の結果各自武器を携へ現場に行くこととなりしました。  
總計四十七人内官吏四名に私も随行して十四日の午前十時頃出發し同日の午後一時三十分頃被害地に到着致しました。現場は周囲樹木生ひ茂り五、六間隔た所に家根「屋根」ばかりの最近人の住た事のない小さな建物があり、また之れが嘉蔵が飯寝し被害を受けた場所でありました。其の小屋より三間隔た處に蚊帳が一枚、其處より五間隔た處に上層一枚更に三間隔た處所にはズボン一枚、其の處より又五間隔た處所にはシャツ一枚が皆血に染て散乱し更に約一丁半位の地点にて首を発見しましたが頭髪は勿論顔は皮肉共に喰はれて白骨が残つて居りました。前齒の並行している点から推斷して嘉蔵の首であることを知り其處に埋葬して一同と共に引揚げた次第であります。  
暹羅の官吏が嘉蔵に同伴せる通人に

460  
18





対し取調たる処を聞きますと  
羅蔵等が小家に仮泊中午後十時前後  
小家の程近き処に異様の足音が聞へ  
るの不審に思ひ起上らんとする瞬  
間に一匹の虎は羅蔵に飛び掛りたる隙  
に乘じ危険を脱し帰村せる旨を陳述  
して居りました  
十四日は近來になき強雨であつたに  
も係らず蚊帳のあつた付近は流血が  
最も多量で最も鮮明に血跡がありま  
した通羅官吏の推定では羅蔵の致命  
傷を受け虎に喰はれたのが此処だろ  
うと話して居りました  
羅蔵が被害を受けます二十日位以前  
に矢張り同村で一通人は(ママ)虎  
に喰殺されたため付近のものは非常  
に怖れ近村との往復さえ絶へ辺鄙の  
場所にては日常の食料にさへ困る状  
態になりましたのに大胆にも羅蔵は  
好期逸す可からずと最も辺鄙なる山  
間に樹より油を搾取る処を選び同  
所にて物品と油とを交換し利益を得  
んとして出掛けました結果が斯様な

悲惨事に遭遇せるに至りました事と  
実に氣毒に堪へません  
問 羅蔵の同伴(召使)せる通人の  
姓名と年齢を知らるるや  
答 姓名は存じませんが年齢は四十  
七八才位の男子です  
問 羅蔵の面の特徴ありや  
答 左様特徴がありません前歯は少い  
方で行儀よく並行して居りました  
通人は一般に男女共齒を黒くして居  
る事は御承知の通りですが私が見た  
中の齒は白色で少かつたから羅蔵と  
推定することが出来た  
問 羅蔵が所持せる物品は紛失し居  
らざりや  
答 紛失した物はありません提帶し  
た物品の内に阿片が発見されなかつ  
ただけです  
問 被害現場付近に散乱せる物品は  
羅蔵のものに違ひなかりや  
答 左様相違はありませんでした  
問 羅蔵とは何時頃から識合になり  
たるや  
答 大正二年頃と思ひます其の当時  
羅蔵の実父長蔵が滋賀県高島郡新木  
村に魚屋を営んで居りました其時分  
蔵は実父に宛て自己の事業拡張上人  
手を要する故に數名を世話して渡通  
せしむる様にとの音信があつたこと  
を羅蔵の父から聞かされ同人を頼り  
て渡通したのが初めての対面であり  
ました

問 其後羅蔵と共に事業に従事した  
るや  
答 渡航以來私は非常に失望したの  
であります  
理由は羅蔵が実父長蔵に宛た通信と  
實際とは大なる違で生計の余裕さ  
えなき始末で私は當惑させられた次  
第ですが兎にも角にも生計の途を得  
るために日傭人となり又は店員とな  
り働いて居たのであります  
問 當時羅蔵は如何になし居たるや  
答 羅蔵は私が当地に来りますと聞  
もなく田舎に行くといふので別れま  
したが其後數回鎌谷市に出て来り其都  
度私を尋ねて来て呉れました  
問 貴方が羅蔵の住所たるチョーブ  
リ県ニコン郡ボートン村宇ハクタ  
ン、チョラアーキに一緒に居住せ  
しは何日頃なりや  
答 本年四月十八日からであります  
羅蔵は四月十九日(ママ)私方を訪  
問して事業拡張上人手を要する故に  
非一緒に居るべしと切なる懇願であ  
りましたから之を承諾し四月十三日  
二人は鎌谷市を出発し四月十八日に  
前に申上た通りの羅蔵の住宅に到着  
しました  
問 羅蔵の事業及資本生活状況は如  
何なりや  
答 左様羅蔵は鎌谷市で話した様な  
事業らしい事業に従事せず僅かなる  
資金(三四十円以内)で雜貨と雜食

料(火燭「マッチ」、煙草、阿片、酒、  
塩等の小売兼行商を営んで時々泊り掛  
けで被害を受けた方面にも旅行する  
ので其の留守居を私がするのであり  
ました  
要するに私は羅蔵に欺されて行たの  
であります  
生計とても余裕のある生活でありま  
せん  
羅蔵の住で居る建物は付近に居住せ  
る土人と同様竹で作つた極く粗末の  
もので建物の周囲に僅かばかりの畑  
地がありました  
問 遺産の処分は如何にせしや  
答 通羅官吏が保管して居りますが  
勤、敏、銀及其他銀具類で約二萬位  
の時価二十円内外の物品であります  
が羅蔵は通人を内縁の妻にして居た  
關係上多分妻に交付する事になるだ  
らうと思ひます  
右陳述を録取し本人に説示したる処  
之れを承認し共に署名したり  
陳述人 中川重助  
大正十五年六月廿六日  
於在鎌谷  
日本領事館書記官  
外務省警務部補 木村道徳  
(外務省記録 3.8.7/23-7「在外  
本邦人身分關係雜纂 亞細亞南  
洋之部」)

461

連載 ⑦  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(60)

タイにおける鉄道の始まり

タイ語で汽車は、ロット・フア  
イ(รถไฟ)である。ロットは車、  
ファイは火なので、「火車」と  
なる。汽車を意味する中国語も、  
火車なので、ロット・ファイと  
いうタイ語訳は中国語の影響で  
あるうか。

岩本千綱著『暹羅老樹安南三  
國探検実記』(1897年8月  
30日発行、博文館)には、ナ  
ンラーチャシーマー(以下、コ  
ーラー)鉄道についての言及が  
多数ある。彼と山本銀介が僧形  
で歩いた道は、アユタヤから  
パークチョンに至る間の殆どは  
建設中のコーラー鉄道の路盤  
であつたし、彼等は1896年  
12月20日の出発の日から3晩連  
続して、路盤上もしくはその脇  
で野宿している。抑も三國探検  
の目的の一つには、コーラー  
鉄道建設に関する実地調査が  
あつた。

それ故、岩本の三國探検実記  
を理解するためには、コーラ  
ー鉄道の建設史についての知識  
が必須である。

タイの初期鉄道建設について  
の、最も詳細な研究は、David  
Frederick Holm, "The Role of  
the State Railways in Thai  
History, 1882-1932" (1977  
年 Yale 大学博士論文)であ  
るが、これに1897年3月26  
日のバンコク・アユタヤ間鉄道  
開通式におけるベートグ鉄道局  
長の報告『タイ官報』第14巻、  
15-21頁)およびその他の資料  
を加えて、コーラー鉄道建設  
の経緯と岩本の東北タイ旅行時  
の建設状況について見てみよ  
う。

チュラーロンコーン王は、1  
886年9月13日にタイ最初の  
鉄道敷設免許としてバンコクか  
ら東方のバーンパコン河に至る  
免許を出したが、事業者は資本  
を調達することができず実現し  
なかつた。同王は、1887年  
にはお雇い外国人で海軍将官の  
デンマーク人リシニョリニョ  
に、バンコク市内電車、バーン

パコン鉄道、パークナム鉄道  
の三者の建設免許を与えた。こ  
の内、市内電車は1889年1  
月に開通した。

1887年に訪欧したデー  
ウオン外相(帰路日本に寄り  
1887年9月に友好宣言に調  
印)は、ドイツにおいて鉄道車  
輦で有名なクルツ社、イギリ  
スにおいても有力な実業家たち  
を訪問した。その結果、デー  
ウオン外相は、フランス以外の  
欧州資本のタイ鉄道への投資を  
呼び込み、鉄道によってタイ軍  
隊の派遣や中央官僚の地方派遣  
を容易にするとともに、フラン  
スの対タイ侵略が生じた場合に  
は、投資国の政府が自国資本の  
保護のためにタイの独立維持に  
協力することを期待していた。  
デーウオン外相の働きかけ  
もあって、欧州人のタイ鉄道投  
資への関心が高まり、1888  
年3月16日(又は6日)に、イ  
ギリスの建設業者パンチャー  
ド・マクタガート・ラウザー社

村嶋英治

7月17日  
2016年9月

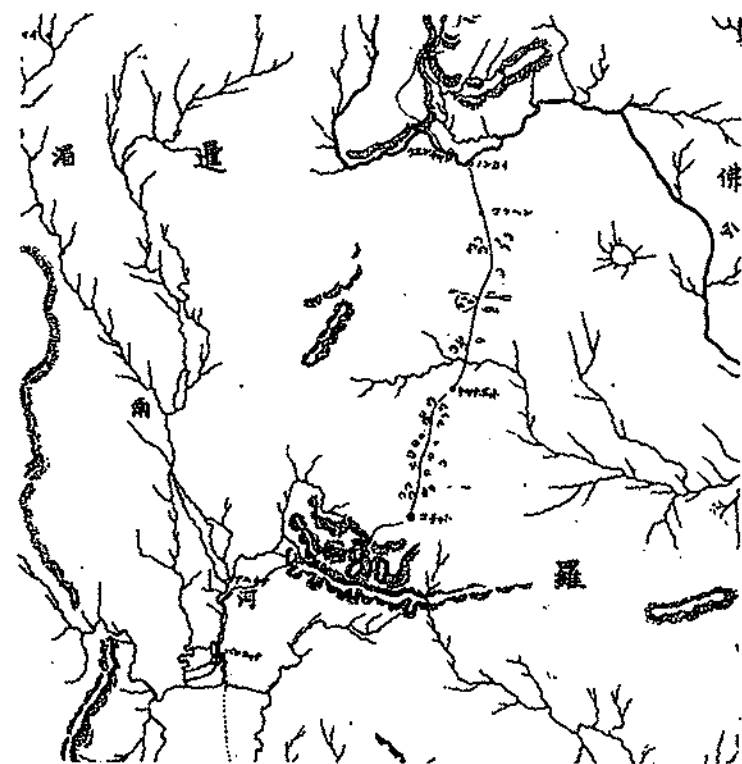
462

年2月にベートゲは、サラブリー経由の方がよいという判断を示すとともに、駅、標準軌道の採用、貨物料金、資金調達方法、所有形態等についても提言した。

1889年12月に国王は土木建設事業担当局(グロム・ヨータイカーン)を新設し、ナリット親王をその長に任じた(『タイ官報』第6巻39号、18

89年12月29日号、339頁)。その管轄下に、1890年10月にベートゲを長(Inspector)とする鉄道局が創設された。鉄道局の任務は官営鉄道建設の監督、今後開業する私鉄の規制検閲であつた。

国王はベートゲの提案したコーラート鉄道に標準軌を採用することを決めた。ベートゲは、コーラート鉄道で徴収可能な貨



岩本千鶴のシャム内の通過地点(アユタヤの位置が間違っている)

物運賃額を最高の、1トン当たり10バーツとした場合でも、鉄道によらない従来の輸送コスト(1トン当たり60〜80バーツ)に比し、大幅に安くなるので重い農産物の移出が可能となると予測した。

#### コーラート鉄道建設布告

1891年3月1日付で「バンコク・ナコンラーチャシーマー間シャム鉄道建設布告」(『タイ官報』第7巻51号、1891年3月22日号、456-461頁)が発表された。

同布告は、バンコク・ナコンラーチャシーマー線を最初の鉄道路線として建設することを決めたことを公表し、鉄道建設の理由として、従来往來に苦勞が多い上、長時間を要していた地

方へのアプローチの困難が軽減され、同時に産物の移動も容易になるので、人民の生産活動の増大が見込まれ国富を増大させることができること、また、行政の指揮監督上にも利益があり人民の福祉幸福の増大に役立つことを挙げている。

布告では次の10項目が示された。

- (1) 1891年9月までに着工し、ラッタナコーシン暦1155年末(1897年3月)までには完工する。
- (2) 建設費は、1株100バーツとして最大1600万バーツ(16万株)を政府及び民間の出資で集める。民間の出資には、1901年3月末までの10年間は政府が最低5パーセントの配当を保証する。また、国王は大蔵省に民間所有株の買い戻しを命じることが出来る。
- (3) 出資者は大蔵省と契約する。
- (4) 株式は自由に売買もしくは担保にすることができ、且つ相続させることができる。
- (5) 大蔵省は年2回(3月、9月)、新聞に財務情報を開示し、その都度配当金を支払う。
- (6) 50年間(1941年3月末)

経過後の出資金の買い戻しの規定。

(7) もしコーラート線を延長する場合、コーラート線の利益を延長線の建設費に充てることはできず、建設費は新たに募集すること。

(8) コーラート線の建設及び維持は、建設省の責任であり、同省大臣は総てに亘って国王の承認を得ることを要する。

(9) 建設省が月単位で支出予算を定め、国王の承認を経たのち大蔵省から支払を受ける。建設省は半年に1回バランスシートを大蔵省に提出し監査を受ける。

(10) 建設省は、鉄道敷設地及び関連施設建設地にある家屋、商店、工場、果樹園には、土地代、建物代、果樹料金を補償するが、保有者に儲けを生じさせるほどの高価である必要はない。他方、鉄道敷設地等として使用する田畑・原野に関しては、家屋撤去

料のみを支払い土地の補償金はない。建設省が決定した補償額に従わねばならず、指定日までには立ち退くこと。鉄道の両側、それぞれ5セン(200メートル)については、所有者のいない土地は国有地とする。

なお、上記第2項に定める1600万バーツの資金を必要とする根拠は、1897年3月26日のベートゲ報告では、ゼネコンへの支払いに加え、木橋を鉄橋に替えた追加経費、鉄道局による土地購入費、オフィスの諸費用、駅舎職員宿舍等建設費、医療関係費などの合計であつた。

1891年4月4日号のバンコクタイムズ紙に、コーラート線264キロ建設のためゼネコンに入札を求める広告が掲載された。

1891年7月16日にチュラーロンコーン王は、タイ最初の鉄道であるパークナム鉄道の起工式に参加された。王宮を出てチャロークン通りを進まれ、バーンラックで左折し、シーロム通りに入られ、現在のラーマ4世通りとの交差点(當時はサバトゥムの水田)が会場であつた。この鉄道会社に出資

した外国人男女たちが多数集まっていた。国王は、前出のリシュリユーが捧呈した鉄で形ばかりの鉄入りをされた。続いて、会社に入社した中国人工夫が仕事を開始した。国王からは「今回の着工は最初の出来事であり、私が長らく待ち望んでいたものである。完工すれば国家への利益は大きなものがある」というお言葉があった(『タイ官報』第8巻、16号、1891年7月19日、137-138頁)。

コーラート鉄道は、民間からの資金調達も行われたが経営は政府が行う官営鉄道であるが、他方、パークナム鉄道は民間会社(会社)によって経営された。この会社に対する国王の出資比率は半分を占め、リシュリユーなどの外国人やタイの王族貴族も出資した。20キロのパークナム鉄道は、1893年4月11日に国王を迎えて開通式を挙行した。

#### イギリス人キャンベルの落札

さて、1891年10月15日のコーラート鉄道建設入札締切までに、入札したゼネコンは、イギリス人のジョージ・マリー・

キャンベル(George Murray Campbell, 1845-1942)とメイソンのシャム鉄道建設共同出資会社の2社に過ぎなかった。前者は弱体業者で、入札額は974万余バーツ、保証金や建設費用はジャーディン・マセソン商会からの融資に依ることになっていた。後者はドイツの3銀行が設立したもので、入札額は1197万バーツであつた。ドイツ人の鉄道局長ベートゲの目から見ると、後者は前者より223万バーツ高いが、上質の資材を使用するためにはこれくらいが現実的で妥当な額であつた。英独双方の外交官はデーワウオン外相を訪問して、自国の業者を採用するように迫った。

10月21日、国王はキャンベルを採用する方針を決定した。建設大臣ナリット親王とベートゲ鉄道局長は、国王に翻意させようと努めたが、国王の考えは変わらなかった。国王は駐英タイ公使を使って、ジャーディン・マセソン商会を説得させキャンベルに保証金を融資させることに成功した。同商会の保証金を得たキャンベルは、1891年12月12日にタイ鉄道局との間にコーラート鉄道建設





契約を締結した。1892年3月までに着工すること、着工後5年以内に完工することが条件であった。

1892年3月9日に、建設省はチュラーロンコーン国王・皇后御夫妻を現在のフアラン・ポーン駅の地に迎えて起工式を開催した。

しかし、着工の当初から、独人ベートゲ局長下の鉄道局とゼネコンの英人キャンベルとの間には、対立が繰り返された。キャンベルは、鉄道後半部分の設計図や平野部に架設する鉄橋の詳細な製図が遅いと鉄道局を批判した。一方、鉄道局は、①キャンベルが中国人工夫に十分な給与を払わないので彼等に逃げられ工事が遅々としている、1892年10月から1年間の進捗スピードでは完工まで5年ではなく7年を要する、②工事は契約の仕様書に合致してはおらず、注文した機関車の馬力は弱く、橋桁が曲がり、路盤は狭すぎて不完全である、などと批判した。

ベートゲは、キャンベルの請求額通りには支払わず、これに対しキャンベルは仲裁裁定を要求したが、ベートゲは応じなかった。

ベートゲ局長の日本人技師雇用批判された製図の遅れを補うために技師の数を増やす必要を痛感したのと思われる。彼は日本本で働くドイツ人を通じた、日本人技師にも食指を動かした。その誘いに乗ったのが、野邊地久記（のべ・ひさき、東京府士族、1860-1899）である。1882年に工部大学校土木工学科を卒業した彼は、1891年当時九州鉄道の技師長であった。同鉄道が雇っていたドイツ人の紹介を受けた彼は、ベートゲとの間に書面でもやり取りをしたが、明確な契約を結ぶ前に、至急来タイしてくれと言われて、92年6月10日にバンコクに到着した。しかし、丁度ベートゲはドイツに帰国中で会うことができず、局長代理者からアユタヤに派遣された。多分待遇への不満から契約締結を要求したが代理者は取り合

ず、関係がもつれて野邊地は半年後の92年12月に帰国し、日本から辞表を送り付けた。タイ政府は、タイへ往復渡航旅費は2年半勤務した場合のみに支給されるという合意が存在していたとして、日本の外務省を通じて野邊地に旅費の返還を求めた（外務省記録「Foreign Affairs」）。各政府本邦人雇員事件 第一巻。なお、野邊地は1894年から早世する1899年まで東京大学で土木工学の教授を務めた。

#### キャンベルとの契約解除

1893年7月13日にフランス・タイ間のパークナム衝突事件により、パークの対ポンド換算率が急落すると、キャンベルは赤字を恐れてやる気を失った。

パークナム事件に関しては、英政府は積極的にタイ側に肩入れするという態度は見せず、英資本をタイに引き入れてイギリスの在タイ利権を大きくすること、英に独立タイの重要性を認識させ、対仏抑制力に利用しようという国王やデーワウオン外相の構想は成果がな

かった。

キャンベルは1893年8月24日に英外相にタイ鉄道局に対する不満を述べた文書を提出し、英外相がタイ鉄道局との間の仲裁実現に尽力するように求めた。キャンベルは英政府が協力してくれないなら、鉄道工事を停止すると付け加えた。これを知ったジャーディン・マセソン商会は、キャンベルへの融資を打ち切る可能性を発表した。同商会からの融資がなくなれば、キャンベルの請負事業が中断することは明白である。10月、英政府はタイ政府に仲裁受入を迫り、翌94年2月15日にロンドンで、キャンベル側の英人鉄道技術者とタイ鉄道局側のドイツ帝国建設大臣顧問が出席して仲裁が開始され、3月3日に裁定が下され、鉄道局の製図の遅延によって生じたキャンベルの損害の代償として、17万2000パークと工期の1年延長が認められた。しかし、この裁定額はキャンベルの期待を遙かに下回るものであった。その後、タイ政府はキャンベルとの契約をやめようとして交渉は3度に及んだが、条件が折り合わなかった。1895年半年はキャンベルに融

資しているジャーディン・マセソン商会は、香港からバンコクに代理人を派遣して調査を行った。代理人は直ちに建設を中断し、再び裁定に持ち込むべきだと進言した。同商会は英外相に働きかけたが、同外相は建設中断には賛成しなかった。

キャンベルは鉄道の後半部分の工事に着手すると間もなく、バンコクから131キロを越えたあたりから始まる不健康な山地では労働力の確保が不可能であり、完成までにはあと5年以上を要することを認識した。彼は、1896年3月に新たな仲裁を鉄道局に要求した。同年4月7日、ベートゲ局長は応じる旨答えたが、翌日工事を急がなければ契約に従い契約を解除する可能性がある」と警告した。4月後半には、キャンベルは、鉄道局が求めた橋梁の基礎工事を拒否して、一悶着が生じた。鉄道局は、1896年8月6日を以てキャンベルとの契約を解除した。この後、鉄道局とキャンベル間の仲裁は、契約解除の是非、双方の責任と損害に関して行われることとなった。ジャーディン・マセソン商会は英政府を動かして、英政府の強力な介入

により、1901年3月28日の最終裁定は、タイ鉄道局の契約解除は不当であり、19万8千余ポンドをキャンベルに支払えという、タイにとって厳しいものとなった。

チュラーロンコーン王が、英人のキャンベルをコーラート鉄道のゼネコンとして採用し、ドイツ人のベートゲ鉄道局長の監督下に置いたことは、対抗する英独両方をうまく操ってタイに最大の利益と自立性を確保する意図があったものと思われる。しかし、両者の対立、それにキャンベルの事業力は弱体で能力が伴わなかったことも相俟って、スムーズな鉄道建設は実現しなかったのみか、タイは極めて高い代価を払わされることとなったのである。

キャンベルとの契約解除後、鉄道局が自らの手で事業を継続することとした。また同時に、タイ政府はコーラート鉄道の完全国有化を発表した。1891年3月1日の布告では、民間出資を予定していたが、民間出資には年5パーセントの金利を払う義務が伴っていた。建設大臣は、金利負担をなくするため、これまで政府出資金のみを使用し

てきたのであった。更に、1898年2月24日、タイ政府は今後建設する鉄道幹線は、総て鉄道局が建設し所有し運営する方針を定めた。これは鉄道における外国資本の横暴を避けるためであった。

#### 鉄道労働者

「吾」は鉄道工事の工夫について、次のように書いている。鉄道建設において、単純労働の大部分及び熟練労働の殆んど全部は、中国人によって担われた。バンコクから離れた地域では、森林を切り開くためにタイ人が雇われ、タイ人女性は路盤工事に従事した。コーラート台地の入り口からコーラートに至る55キロの鉄路工事の大部分は、ラーオ人が担った。しかし、ラーオ人は山地で長時間働くことは拒んだ。山地での岩石掘削は彼等には重労働過ぎたし、病氣も多かったからである。タイ人は橋脚建設、コンクリートの攪拌、資材の梱包解き等の仕事でも働き、1899年時点で0・625パーセント程度の日当を得た。キャンベルもその後を継いだ鉄道局も、中国人よりもタイ人を

好んだ。タイ人の方が知らぬ監督に対し臆病で、訓練すれば規律を遵守するからであった。

中国人労働者は重労働に耐えることで有名であるので、出来高制で支給され、1895年当時よく働く者は一日に大体1・25パークを稼いだ。それでも中国人労働者は慢性的に不足していた。キャンベルは着工から数ヶ月間はバンコクの中国人を雇い、彼等への支給額は1日1・5パークに達した。その後、キャンベルもその後を継いだ鉄道局も、ブローカー（ブローカー）を使って清国で労働者を募集した。中国から来た労働者は、バンコクの方が、日給がよいことを知ると逃亡した。その上、山地ではマラリア、コレラ、赤痢などが労働者の命を奪った。乾期の飲料水の不足、偏った食事、不衛生な生活環境などが、病の原因であった。鉄道局が工事を担当するようになると、医者を雇って保健サービスを行い、各建設現場に1名の助手を置いて無料で薬を与えた。それでもこの医者の報告によれば、1897年、98年に山中の建設現場で雇った2091人中、毎月の罹病率は16・18パーセント、また209

1人中9パーセントが死亡した。コーラート鉄道建設で死亡したアジア人労働者数についての統計はないが、少なくとも1000人、多分その倍の人数が死亡したと思われる。

哥旨は、1896年初め、在バンコクの医師三谷足平がブローカーとなってキャンベル側に供給した日本人工夫について言及していない。なお、日本人工夫は、1896年4月に2名がマラリアで死亡したこと、本誌2014年6月号に述べている。

### コーラート鉄道の開通

1897年3月26日、国王皇后ご夫妻臨席の下、フアランボーン駅で、バンコク・アユタヤ間、約70キロの開通式が行われた。運行開始したのは、午前と午後各一本の客車のみであった。貨物輸送については、アユタヤ・ゲーンコーイ間約54キロの開通を待って、開始する予定であった(1897年3月26日のベートグ鉄道局長報告)。

定期蒸気船に搭乗した。もし、1897年3月26日まで、あと3カ月間待つていれば、バンコク・アユタヤ間の鉄道を利用することもできたはずである。その後、1897年11月1日、アユタヤ・ゲーンコーイ間開通(バンコクから125キロ)。

1898年3月3日、ムアクレックまで開通。

1899年5月25日、パークチョンまで開通(バンコクから180キロ)。

1900年12月21日、コーラートまで開通(バンコクから264キロ)。

をかけて苦勞しながら徒歩通行せざるを得なかったが、今後はバンコクとコーラートの間の交通は便利に、且つ費用も安くなる。この山地での難工事中に多数の人命が失われたことは痛ましい。便利な鉄道を建設するために最も高価なものが失われたと言わねばならない。尽力した技師や職員がこの日を見ることなく途中で死亡したことに深い悲しみを覚える。彼等の善行を忘れることはできない。

例えば前の鉄道局長ベートグ氏「1900年4月11日バンコクで、コレラで死亡」は正しいことを堅持する心持ちの人で動機がまわりない人であった。この鉄道の完成は外国人技師職員の機敏さと努力にあずかっている。我人民も機敏さと努力を身につける必要を刺激されたものと期待する。

また、鉄道によって人々の交流が増大すれば、相互の親愛も増し、愛国心も強固になることを期待する。『タイ官報』17巻、589頁。

ヒンラップ(หิราลัပ္)・クロリンバイ(ครอลินบาย)の間で、工事のみならずマラリアの害が酷かった。バンコク・コーラート間には、1級駅3ヶ所、2級駅4ヶ所、3級駅20ヶ所、外に停車場11ヶ所がある。コーラート鉄道の建設費は、1758万5000バーツ。現在機関車19台、客車38台、貨車211台を所有している。『タイ官報』17巻、587-588頁。



連載 ⑤  
バンコクの日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(61)

Asst. Engineer の肩書きで、Totoki (漢字表記及び経歴等は未調査) という人物も雇用されている。野邊地とTotokiは、1892年6月10日に来タイした。到着当日、野邊地は鉄道局長代行の P. Roms から、来航のための旅費(一等汽船使用)を受領した。その内訳は、横浜→香港50弗、香港→シンガポール60弗、シンガポール→バンコク40弗、および香港の宿泊費(1泊分) 5弗で、合計155弗(258・33バーツ)であった。同時に後日来タイ予定の妻の旅費として同額を領収した。来タイ時には、妻を呼び寄せてタイに腰を据えて働くつもりであったようである。

野邊地は、亜細亜協会会長の肩書きで書かれた榎本武揚(榎本は当時外務大臣)の1892年5月18日付テロウウォン外相宛て紹介状を持参していたので、翌6月11日に、P. Roms は野邊地とTotokiを同行して同外相を訪問した。

野邊地はアユタヤで設計に従事しようとしたが、妻が来タイすることもなく半年後の12月14日にバンコクを発つて日本に帰った。野邊地の在タイ中、ベートグ鉄道局長は下賜休暇中で不在であった。その後帰任したベートグによれば、野邊地の突然の帰国は、父親の重病を理由にして、一時帰国の許可を建設大臣から得たものであり、日本から野邊地はタイ鉄道局に辞表を提出したという。

ベートグは1893年の2月と6月に、2年半以上勤務した時にはじめて渡航旅費を支給する

という条件で雇用したのであるから、上記夫妻の来タイ渡航費310弗を返還するように野邊地に請求する文書を郵送したが、野邊地は何等返答を寄越さなかった。

1893年9月14日になつて、ベートグは「不誠実な」野邊地に渡航費を返還させるようテロウウォン外相に助力を依頼する文書を出した。その文書に曰く、ベートグが、一人の日本人(名は挙げず、Totoki か)から聞いたところでは、野邊地には離タイ時から既にタイに戻つて来る意思はなかったが、父親の重病という作り話で一時帰国の許可を得たものであり、何等の同情にも値しない、と。更に、9月19日にベートグはテロウウォン外相に、野邊地雇用の際の野邊地との往復文書の抜粋を示した上、野邊地は日本の榎本外務大臣のテロウウォン外相宛推薦状を持参したので外

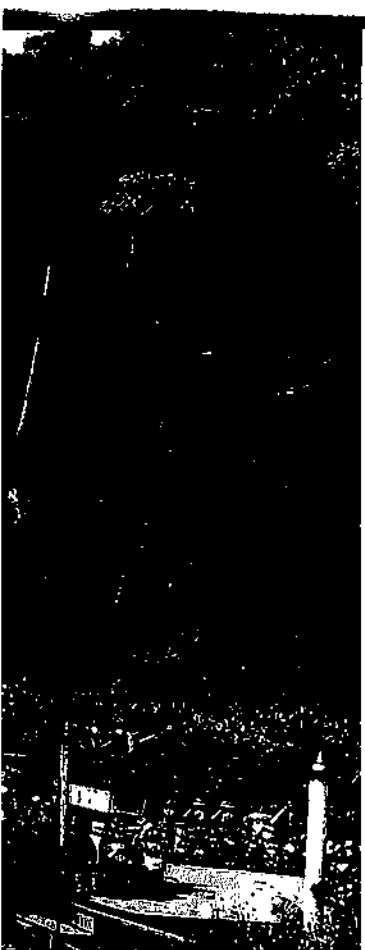
早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

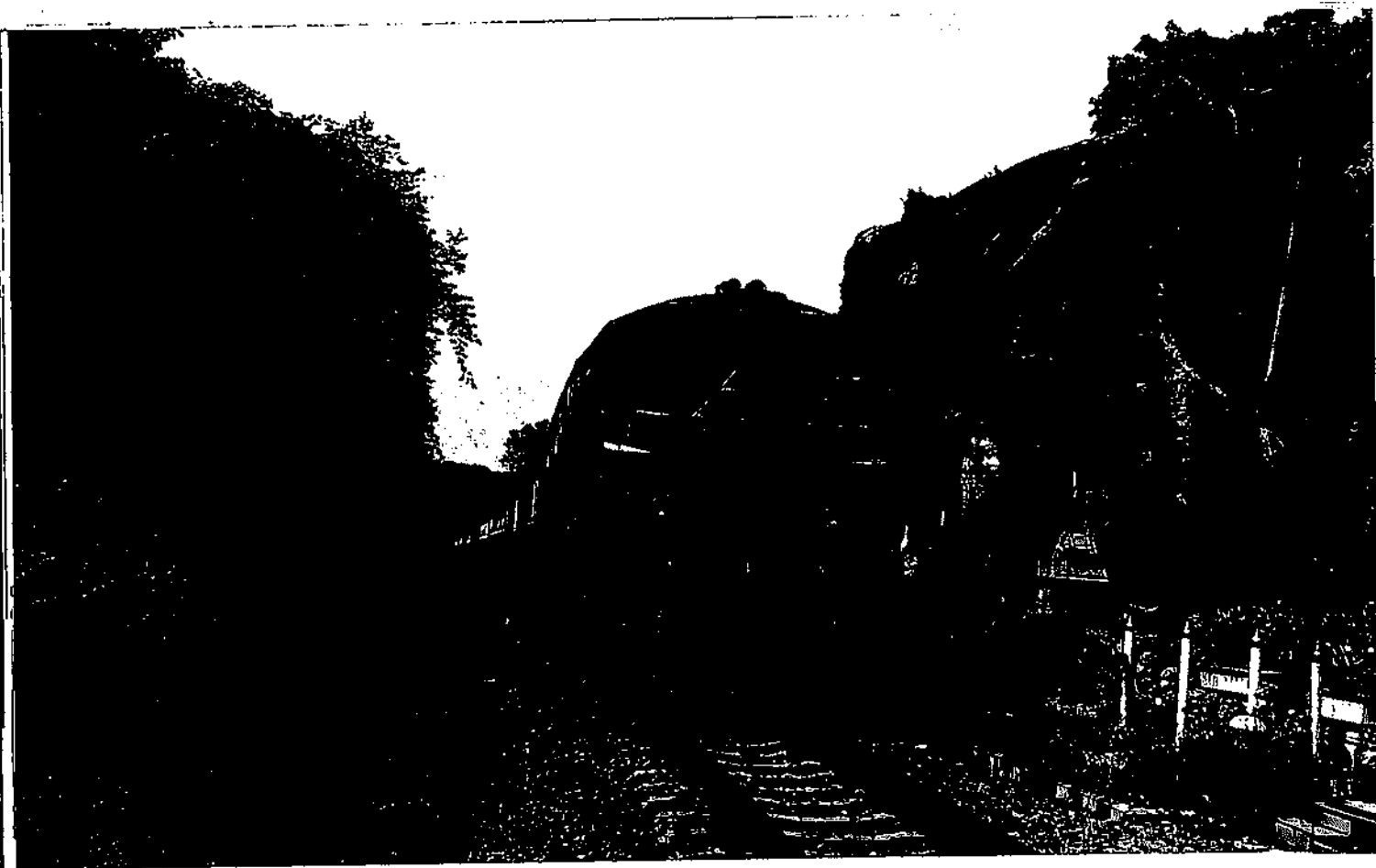
2016年10月

### 近代タイ政府が雇った 最初の日本人野邊地久記

前号で、1896年12月に岩本千綱と山本銀介が、その路盤を歩いたコーラート鉄道建設の歴史を紹介した。そこで、日本人技師野邊地久記が、タイ鉄道局に雇用されて1892年6月10日に来タイしたが、6ヶ月後に突然帰国したことと言及した。今年の8月に筆者がタイ国立公文書館で見た資料(358,910)によつて、前月号の野邊地に関する記述を追加修正しておきたい。

タイ鉄道局に雇用された日本人は野邊地一人ではなく、同時





バー・サデット・バックを通過するワボン行列車 (2016年8月14日撮影)

相から意見を賜っている。"his behavior appears more than unfair and should not remain unpunished"と決め付けた。抜粋からは、渡航費は2年半以上在職した場合に支払われるという。ワットゲの1892年1月7日付書翰に対し、野邊地が2月13日付で "I beg you to understand that as I am totally unacquainted with the country, climate, people, Government etc. of Siam. I am rather at a loss in specifying my demands. Therefore risking all items on which to base my demands, and about which there is no time for me to get sufficient informations, I venture to make the following demand."と前置きして、渡航費については2年半後ではなく、前渡しとすること、但し、任期の半分を待たずに離任する場合は返還するという修正要求を出したことが判る。

野邊地に鉄道局との契約を履行させるよう、陸奥外相の尽力を要請した。この書翰を受領後、日本の外務省は、豊田鉄道(事務所は福岡県小倉)に勤務中の野邊地に説明を求めた。10月28日付で野邊地は、鉄道局との正式の契約はなかったこと、帰国前の12月9日に鉄道局長代行に辞表を出しており一時帰国ではないこと、ワットゲ鉄道局長から渡航費返還の請求が来たので、自分をワットゲに紹介したドイツ人に数ヶ月前にワットゲへの説明を要請したこと、榎本外相の紹介状は、亜細亜協会の会員であるテールワゴン外相に同協会会長の榎本が出した私的文書に過ぎない、などと説明した。

陸奥宗光外相は、野邊地の説明を英訳して、この説明で満足でしよう、と11月24日付でテールワゴン外相に回答した。陸奥は、野邊地から渡航費を取り立てる労は取らなかった。テールワゴン外相は12月20日付で陸奥の回答を建設大臣に伝えた。鉄道局は野邊地に直接請求する道しかなかったが、そ

の後タイの鉄道局が野邊地から取り立てようとしたかどうかは不明である。野邊地の貰い得で終わった可能性もある。後者の場合は、赴任前に日本ではタイの状況が判らないので正式契約は来タイ後にしたいとして来タイしたが、長居は無用と早々とタイ勤務に見切りを付け、妻の渡航費を受領したにも拘わらず妻も呼び寄せず、不利な契約締結は引き延ばし(野邊地は、鉄道局長代行側が一方的に契約締結に応じなかったかの如く説明しているが、却って野邊地の方が、渡航費が無料支給となる期間や任期の規定等で縛られないように逃げ回った可能性も考えられる)、在職半年を期として口実を設けて帰国した、野邊地の勝利である。

何れにしても、野邊地久記は近代日本でタイ政府に雇用された最初の日本人であり、来タイ前に、日本でタイに関する情報を入手することは極めて困難であつたに違いない。彼のタイでの経験、当時のバンコクの様子などを書いたものが、どこかに残されていないだろうか。

さて、岩本千綱の『暹羅老撾安南三國探検実記』(1897年8月30日発行、博文館)から、コーラット鉄道に関する記述を取り出してみよう。

これまでも指摘したように、同書で書かれている地名の発音は、実際と乖離したものも少なくないので、そのタイ語表記および実際に近い発音をカタカナで判明する限り併記したい。

鉄路を歩く

1896年12月20日早朝バンコクから定期船アドミラル号に乗ってアユタヤに向かい、マー村(マウ、バーン・マー、国鉄アユタヤ駅から1キロの地点)で下船すると、

「通に日本村の旧跡に向ひて」「山田」長政以下の英霊を拝し心竊に此の行の安全ならんことを祈念しつつコーラット「コーラット」鉄道路線を東方(マム)に向ひ此に愈々徒歩旅行の序幕を開けり左右に茫々たる水

田を眺め遠来の珍客を訝気に見遣る水牛に送られて直行矢の如く然も凸凹多き鉄道を進み行け共行け共満目同景観はんに家なく道を問はん人に出逢はず。線路上を歩き20日の夜は「線路上に毛布を布きて法衣に夜露を浸き名詮自稱の枕木を枕として過去未来を語らひつつ睡魔に駆られ」(同上書、以下同じ、12-13頁)、眠りに就いた。

12月20日の項の末尾に、コーラット鉄道路建設の簡史を記し、建設中の鉄路を歩く目的を次のように書いている。

「盤谷」コーラット間の鉄道は数年前より其布設に着手せしも謂負者たる英人某「キャンベル」が唯自家目前の利を計り一時誤謬化しの築造を為すに過ぎざれば随て其損所も多く結果終に曲直を法廷に争ふに至りしが彼狡徒は之を奇貨とし自ら倫勳(ロンドン)に赴き弁明する処あるべし

しと揚言し殆ど工事を中止して英國に帰る今に帰還せんと云ふ此鉄道は目下暹羅國の一問題として同國に於ける内外有識者の着眼する處となり其成否は將來の政略商略に影響を及ぼす事寡(すくなく)からざれば坊「岩本」は殊更に既成未成の本線路を踏査したりしなり盤谷よりコーラットに至る約二百哩の短距離に比較し露宿の多かりしもの之が為なり此鉄道に関する見聞の詳細はコーラット府の章に詳述すべし(13-14頁)。

前号で見たように、タイ政府は1896年8月6日に、紛争が絶えない英人請負業者キャンベルとの契約を解除しており、岩本等がコーラット鉄道路建設地を歩いたのはその4ヶ月半後のことである。この時は、鉄道局が鉄道建設を引き継いでいたはずである。なお、岩本が歩いた



鉄路は、2本のレール間の内側幅が1・435メートルという標準軌であった。しかし、その後、南タイ線が1メートルという狭軌で建設され、1920年代にタイの鉄道は全て南タイ線と同様の狭軌に改軌された。

12月21日「水牛の吼る声に飯寝の夢を破られ頭を揺る(もたげ)れば日は早や三竿の上にありて」「高く昇った様」水牛を逐ふ牧童農夫の鉄道線路を往復するもの数人ありたり此辺の土人本道の屈曲迂回(うかい)せるを嫌ひ多くは鉄道線を利用するも聊か危険の憂なし、「九時頃ブラケーア村」(14頁)、「九時頃ブラケーア村より12キロ」に着す人家三四軒停車場あり(14頁)。ここで初めてト鉢らしきことをなし、その後歩いて「正午頃」橋の洋風家屋を見る。思ふに鉄道線なる洋人の住居ならんか。此辺総て森林田畑にしてまた一軒の人家を見ず鉄道線路は遙に村落の南方を馳するを以て人家は孰れも三哩乃至一哩余の北方に点せり。此日も亦た行路れて寺院もなく人家も見当らざれば又候道傍の畑中に饅頭(16頁)。

### 国王のバー・サデット・バック御幸に遭遇

12月22日「露宿地を築して例により鉄道線路を辿(たど)り午前十一時頃ベトリヲ駅(ママ)に達す此処は人家七八十戸あり素より粗糲(そそこ)を極めたる茅屋なれ共暹羅の内地に取ては先づ中等の村落と云ふべきが扱当駅には前日より国王殿下の滞在あらせらるるとて俄か作りの飯宮殿あり暹羅の皇族大臣等は多く寺院に宿泊せり」(16頁)。岩本等は朝から食事をしておらず食を求め町に入ろうするも、「思ひ直せば寺院局長の許可を得ず穀谷を飛び出したることの後めたく万一外務大臣を始め面識の皇族貴族達に邂逅せば事体面倒となりて盤谷引戻の辱めを蒙るることなしとも云ふ可からず」(17頁)と考え直して諦め、タツプクワン方向に郊外を歩くと運良く食事の寄進を受けた。その後食べ残しを、森林の中で食べ、「早や発足せんとする一刹那一列車の轟々黒煙を吐て飛来するあり樹陰に隠れて窺へば是れなん国王殿下がタツコン村「タツプクワン」(Mung)へ巡遊する一行にぞありける」(18頁)。

グリーンコーイ駅からコーラート方向に6キロの地点に、現在のタイ国鉄のタツプクワン駅は位置する。このタツプクワン駅から現ヒンラップ駅まで13キロの距離がある。この日国王夫妻のお召し列車が向かったのは、現タツプクワン駅を通り越して更に約6・5キロ進んだ、レールが敷設されている最終点であった。後述のようにタイ官報は、この最終点をヒンラップと記している。そこから国王夫妻は徒歩で路盤の上を480メートルほど進まれて、路肩の左手にある石灰石の大岩を見学され、バー・サデット・バック(ミヤウキ、国王ご休憩の岩)と命名され、国王夫妻のイニシャルと115年(ラッタナコーシン暦)という年号を刻まれた。

最終点から更に6キロほどグリーンコーイ駅に進むと現在のヒンラップ駅に達する。それ故に国王が列車で行かれた最終点は、現在のヒンラップ駅とタツプクワン駅の間にある。この位置から見ても、岩本が国王は列車でタツコン(タツプクワン)村まで行かれたと書いていることは誤りではない。

なお、タツプクワンからヒンラップにかけては石灰石の山で、今日セントメント工場が林立している。国王が訪問された岩(本号写真参照)も、石灰石の塊だが、日本人から見れば珍しくもない程度のサイズである。

12月22日の夜も露宿となったが、「此夜国王殿下はタツコン村よりベトリヲ村(ママ)へ還啓ありたり本日里程十二哩位 本日の鉄道線

路亦昨日と同じく直行東北に向ひ傾斜なき築道なり左右は八分通り水田にして一望千里間ま森林村落を散見するのみ」(19頁)。

岩本は12月22日午前11時にベトリヲ駅に達したと書いているが、これは明白な間違いである。ベトリヲ(Mung、華僑は漢字では北柳と書く)は、チャチャンサオの別名であり、パンコクの東方に位置している。一方、岩本等が歩いたのはパンコクの北方であるから、完全な方向違いである。

岩本は、パークプリア(Parkprua、漢字では北標、サラブリーの別名)と書くべきところを、少々発音が似ているベトリヲと書き間違えてしまったのである。

このような地名の取り違えは岩本の記述の信憑性、更には、彼は本当に三國探検をしたのであるのか、という疑念さえも生じさせ兼ねない。しかし、1896年12月22日午後には彼がパークプリアからタツプクワンに向かつて歩いていったことは、間違いない。同日にチュラーロンコーン王はタツプクワン・ヒンラップ地区に、お召し列車で

訪問されたが、同じ方向に向かつて歩いていった岩本等は、この列車に遅い昼食後(15時過ぎ)に追い越され、また、帰りの同列車とも夜(19時前)にすれ違った。岩本が、お召し列車と遭遇したと書いている時刻は、2回ともタイ官報の下記記録とほぼ一致している。これは実際に通行していなければ判らないことである。

タイ官報によつて、1896年11月12月の国王の日程を見ると、次のようになる。

1896年11月18日に、国王ご夫妻はパンコクの王宮からフアラシポン駅に向かい、そこからお召し列車で1時間余の場所、ランシット運河の西水門(チュラーロンコーン水門と命名された)の開通式に臨席された。同運河はシャム運河用水路掘削会社が新田開発のために国王から特許を得て、西側のプリームプラチャーゴン運河から東側のナコーンナヨック川まで幅16メートルで、1137センチ(45・48キロ)を掘削したものである。西水門を開通された後、国王ご夫妻は運河を東に

向け航行され、夕刻にナコーンナヨック側の東水門(皇后の名を取つてサオワバーボンシー水門と命名)の開通式に臨まれた。翌19日、再びランシット運河を航行して西水門に戻られ、そこから汽車でバーンバイン宮殿に入られた(『タイ官報』第13巻35号、1896年11月29日号、430-433頁)。

国王はそのまま同離宮に滞在され、近隣の船遊び、外国使節や官吏との晩餐会、官吏の謁見などに日を過ごされた。

12月16日12時半、国王ご夫妻はお召し列車でバーンバイン駅発、14時半にサラブリーのプリヲ停車場着、河岸に繋留された船をご宿泊所とされ夜はサラブリー市内見学、17日は9キロ余離れたブラブッタチャーイ寺に遊ばれ、19日は鉄路上を台車に乗って5キロ余離れた川岸の探砂場を見学された。20日はグリーンコーイまで汽車で行かれ、それから乗馬されて近くの山林中の滝や洞窟を散策された。

22日15時過ぎ、サラブリーのご宿泊所を皇后とともにお召し列車で出発、当時汽車で到達で

日本人タオケー（頭家）と  
鉄道工夫

12月23日「早発途上にて水粥を食し午前八時ケンコイ」(Thee, Green Coi) 駅に達する人家五六十停車場は頗る見るべきものあり聞く処によれば他日チャンマイ「チエンマイ」鉄道を布設する時は此地より分岐する計画なりと云ふ夫れからあぬか停車場の規模は首府盤谷よりも宏大に洋人三四名常に爰に住居せり……十二時過タツコン「タツプクワン」村に入る人家三四悉く鉄道係員なる土人の住居なり嘗て日本より渡来せし鉄道工夫中此地に於て死亡せしものある由を聞き居たれば其墓所を訪はんものと一農家を叩きたるに其家婦は非常なる信心家と見え懇切丁寧に坊等を遇し飯を炊き牛肉を焼き玉子を煮る等馳走を馳せざるなく坊等は固らず望外の美食に飽けり而して最(い)と遺憾を極めしは

日本人死亡当時の係員不在の爲め終に其埋葬地を知るに由なき一事にて鉄脚「若本千鶴」乃ち小斧を借受け路傍の大樹を白し鉛筆を以て左の数字を記す

南無日本鉄道工夫之靈頓生菩提  
日本行脚僧 鉄脚坊 若本千鶴  
三無坊 山本飯介

皇曆 明治二十九年十二月二十三日

書し終りて一掬の冷水を供へ数茎の草花を手向け以て同胞の幽魂を天外の異域に祭る

明治二十八年熊本県下の農夫饒谷に渡航せしもの数人コラット「コラット」鉄道工夫となりタツコン近傍の工事に出張せしに風土の異なるが爲め端なく病死せしものありて骸を此山中に葬りしこと鉄脚坊帰朝中に其詳細を知らず

夫より二僧は家婦に向て親切なる待遇を謝し行李を肩に再び鉄道線上に出たり

饒谷よりケンコイ村に至る地は概ね平坦にして鉄道亦た多くは直線なれどもケンコイよりタツコン村迄は漸く緩なる傾斜をなし所謂爪端(つまさき)き上りにて線路の左右に深林多く又一軒の人家なしタツコンよりは純然たる山中にて鉄道の構造亦た粗悪を極め築造半ば崩壊し甚しき処は枕木左右に傾き軌道著しく凹凸し車輪を這るに頗る危険を覚ゆ且つ処々に岩石を切り開きて路を通せし処あり(19-21頁)。

上記引用部分は本誌2013年12月号に既に引用しているが、話のつながり上、再度引用

しておく。  
2013年12月号では、更にチュラーロンコーン王から1894年12月6日にコーラット鉄道建設の責任者である建設省大臣心得の王弟ピタヤラーブ親王へ次のご下問があったことも紹介した。

国王が、「鉄道建設の視察結果はどうだった。建設はどこまで進化したのか」と問われたのに対し、ピタヤラーブ親王は、「タツプクワンまでです。しかし、現在労働者の中国人は逃走したり死亡したりする者が多く、毎日1人死んだり、2人死んだりしています。以前は900人の中国人労働者がいましたが、今残る者は300人だけです」と答えた。

国王の「あと何年くらいかかるのか」という問いには、「あと2年の見込みでしたが、現在中国人が十分に働けないので、『キャンベルとの請負』契約を3年に延期します」と答えた(タイ国立公文書館 55.11/62)。前述のように1896年12月22日の御幸の時点で、レールが敷かれていたのは、現在のタツ



ブクワン駅からは6・5キロの地点である。仮にピタヤラーブ親王の言うタツプクワンが現在駅のある場所だとしても、94年12月時点から丸2年がかりで、鉄道敷設は最大でもわずかに数キロしか進捗しなかったことになる。

さて、タツプクワン周辺で死亡した日本人鉄道工夫は、1895年10月に宮崎滔天が海外渡航株式会社(広島市)の代理人として率いてきた第2次タイ移民20名(熊本県人)中から、三谷足平が引き抜いてキャンベルの建設会社に供給した者の一部である。

宮崎滔天は、国民新聞の1897年8月3日号で三谷足平の引き抜きを激しく糾弾したことは、本誌2014年4月号で既に紹介した。要約すると、三谷の妻は醜業婦上がりであり、同じく日本人醜業婦を妻とする「鉄道工事受負人スミソン」と妻同士につきあいを通じて親しくなり、スミソンから日本人工夫の供給を依頼された。三谷は工夫1人当たり1ヵ月30円という計算でスミソンと契約した。

一方、三谷は、集めた工夫との間には、①1日労働時間10時間、②月給15円、③食事は三谷が提供、④2日以上病休した場合、日数に応じ月給から差し引く、⑤病で帰国する場合は帰国旅費を貸与するという契約をした。しかし、「三谷氏は移民月給をスミソンより受取り、之を懐にして盤谷に帰り去りし事、及スミソンより托せし金員を消費して自家の用に供し去りしこと、此二件によりてスミソンは大に憤激し、三谷氏との契約を解除し、移民をして同氏との関係を絶たしめた」。

スミソンなる人物は、キャンベルが雇った工夫募集担当者だと思われる。宮崎は三谷が労働者1人当たり30円の計算でスミソンと契約したのに、その半分以上が日本人工夫に渡さず、「十五円は、氏が収めて以て懐中のものとなすものなり」と三谷が同胞から多額のピンハネをしたかの如く憤慨している。しかし、三谷は、宮崎が挙げた契約内容でも、工夫に対して食事の提供や帰国費用貸与などの義務を負っており、単純な手配師やブ

ローカーではない。三谷は、前号の鉄道建設労働者の項で書いた、タオケー(Thao Kae、「頭家」の潮州語発音)なのである。但し、前号ではタオケーを、不適切にもブローカーと訳したが、親方と訳すべきだろう。

タオケーは雇主と仕事の内容につき契約を結び、配下労働者の賃金・食費も含む報酬を定期的に受け取る。タオケーは契約履行のために、必要な数の労働者を集め、彼らと共に建設現場に泊まりこんで食事は勿論全般の面倒を見る必要がある。この当時のタイ建設業におけるタオケーの役割について、その一例を次号で示すつもりだが、三谷

は、自ら集めた労働者を見捨ててスミソンからの報酬を持ち逃げした。タオケーの風上にも置けないことをしたのである。

三谷の立場で考えれば、建設土木業のタオケーには自らも職工出身で仕事の内容に通じた人物が就くもののようなだが、三谷にはそのような経験はなく、しかも、マラリアに怯えながら工夫たちと最低の住環境の中で寝泊まりを共にしなければならぬことは、大変な苦痛であったのだろう。

連載 ⑦  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (62)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

カンテア  
2016年11-12月号

### 建設業のタオケー (頭家)

前月号で、三谷足平の日本人  
鉄道工夫集に関連して、19世  
紀末のバンコクの建設土木業に  
おけるタオケー (親方) につい  
て書いたが、紙数不足で書き切  
れなかったので、先ず少々追記  
しておきたい。

バンコクのパトゥムワン宮殿  
(サヤームセンターの裏、現在  
はシリントン王女の官邸) は、  
1880年代初期に建設された  
もののようだが、建設を請け  
負ったのは、トラシーという名  
のオーストリア人であった。ト  
ラシーは、1881年5月、周

(大工、劉 (左官) という2人  
の広東人を自宅に招いてタオ  
ケー (親方) として雇う契約を  
結んだ。2人のタオケーに職工  
の労賃、食費等のため月額80  
0バーツを支払うことを約し  
た。そこで両タオケーは70人の  
中国人の大工・左官を集めて、  
工事を開始した。両タオケーも  
職工も全員建設現場に泊まり込  
んだ。ところが、1882年末  
になると、トラシーから両タオ  
ケーへの支払いが滞るようにな  
った。両タオケーは何度も支  
払いを催促したので、トラシー  
は旧正月 (1883年2月18日)  
の前には支払うと約束した。と

ころが、旧正月の直前になって  
トラシーは在タイ・オーストリ  
ア領事に、タイの警察の力を借  
りて建設現場に泊まり込んだま  
ま立ち退こうとしない両タオ  
ケーと職工たちを追い出して欲  
しいと要請した。この時、トラ  
シーは既に別の新しい中国人タ  
オケーを雇う話ができている。  
依頼を受けたタイ警察が籠城中  
のタオケーに事情を聞いたところ、  
トラシーが約束の金を払わ  
ないので職工に労賃を払うこと  
ができない、金を払ってくれれ  
ば直ぐに退去すると答えた。同  
年5月末になってもトラシーは  
金を払わず、当然職工は籠城を  
解くこともなかった。タオケー  
はオーストリア領事裁判にトラ  
シーを訴えたが、その結果がどう  
なったかは不明である (タイ国立公  
文書館 <http://ajl.jhu.ac.th/ajl/ajl.asp?doc=379379383386389400>)。

以上のような性格のタオケー  
は、19世紀末のタイに限らず、

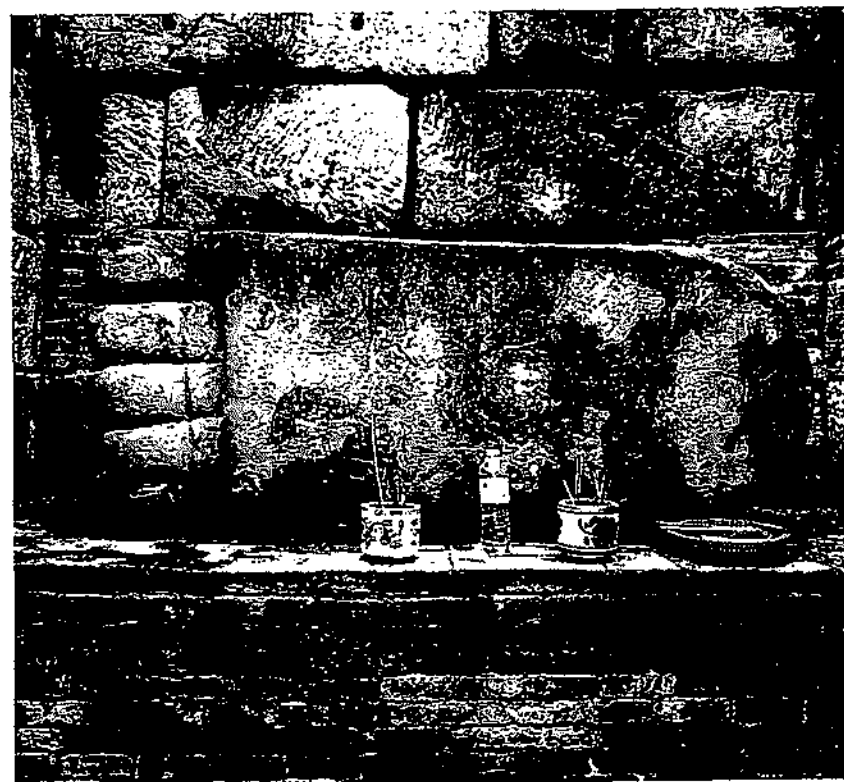
今日でも、世界各地の建設現場  
で見られるものなのかも知れな  
いが、筆者には全く無知の領域  
である。

岩本が引った日本人鉄道工夫

筆者は、本誌2013年12月  
号ではコーラート鉄道建設中に  
死亡した邦人数を6名と推定し  
たが、その後、別の資料からこ  
の数は過大に過ぎることに気づ  
き、本誌2014年6月号で訂  
正した。

以下、念のため、もう一度整  
理しておきたい。

宮崎滔天『三十三年の夢』(国  
光書房、1902年、97-110  
2頁) の記述からは、1895  
年10月に宮崎が海外渡航株式会  
社 (広島) の代理人としてタイ  
に率いて来た20名の第2次タイ  
移民の一部は、宮崎の一時帰国  
中の1896年初めに、三谷足



1897年1月2日岩本千綱が訪ねたパナムワン寺の石壁と石壁内の仏足石 (2016年8月14日筆者撮影)



平の口車に乗せられてコーラ  
ート鉄道工夫として就業したが、  
このうち6名が、マラリアに  
罹ってバンコクに戻り、宮崎が  
再来タイした頃 (1896年4  
月) に死亡した、と読むことが  
できる。宮崎は、他の死亡理由  
や他の時期に死者が出たことに  
は言及していないので、第2次  
移民中の6名の死者は恰も全て  
が鉄道工夫として死亡したかの  
如く読者には理解されるのであ  
る。

しかし、海外渡航株式会社は、  
移民保護法を管轄する外務省に  
提出した報告書 (外務省記録  
38233) 「帰国者、死亡者名  
簿」とバンコクの泰人日本人  
会納骨堂過去帳の記載とを検討  
したところ、死亡した6名は死  
亡時期、死因、死亡地によって、  
次のA、Bの2集団に分けるこ  
とができることが判った。A集  
団は、96年4-5月に風土病 (マ  
ラリア) で死亡した3名である。  
3名中、過去帳の職業欄に鉄道  
工夫と明記されているのは、1  
896年4月16日に死亡した島  
田慶太郎 (30歳9ヵ月) のみで  
ある。職業欄は空欄ながら、同

年4月27日に徳永米作 (22歳  
8ヵ月) が風土病で死亡、同年  
5月5日には山下卯三郎 (31歳  
1ヵ月) が風土病で、シンガポ  
ールで死亡している。山下はタイ  
でマラリアに罹り、急遽帰国し  
ようとしたが途中で客死したの  
であろう。島田、徳永の2人に  
ついては死亡場所の記載はな  
い。

他方、B集団は、96年8-9  
月にバンコクでコレラ、赤痢で  
死亡した3名である。この3名  
の死亡場所は、全てバンコクの  
邦人の居所においてである。こ  
の中にも、A集団の3人と同時  
期に鉄道工夫として働いた経験  
がある者も存在するかもしれな  
いが、死亡時期はA集団とは  
4ヵ月の乖離があり、また、彼  
らはコレラや赤痢なので、もし  
鉄道工事現場で発病したのであ  
れば、そこからバンコクに戻る  
余裕はなかったと考えられる。  
以上からB集団の3名はバンコ  
クで罹患発病して死亡した蓋然  
性が極めて高い。

岩本はタップクワンで死亡  
した熊本県出身の日本人鉄道工  
夫数を数名と書いている。岩本



等が、タツブクワーンで慰霊した、同地で死亡し同地に埋葬された鉄道工事に該当するのは、多くとも島田慶太郎、徳永米作の2人だけである。1896年8月6日に、鉄道局はキャンベルとの建設請負契約を解除している。岩本は「日本人死亡当時の係員不在」で、埋葬地を聞くことができなかったと記しているが、日本人工が死亡したのはキャンベルとの契約解除以前のことであり、契約解除によってタツブクワーンの係員も交替したものと思われる。泰国内国会が1966年3月21日にサラブリー県のゲンコイ（ゲーンコイ）寺に建立した「日本人第一回移民の碑」の碑文に言う「日本人第一回シヤム移民山口県人鐵本作造氏外十七名の霊此地ゲンコイに眠る」は事実とは

合致していない。鐵本を含めた18人中、ゲンコイ（より正確にはタツブクワーンだが、両者の距離はわずか6キロなので許容範囲である）に眠る霊は、多くとも島田慶太郎と徳永米作の2人に過ぎない。この2人以外は、1894年12月に岩本千綱が連れてきた第1次移民の中でブカヌン金鉱山（ナコンラーチャーシーマール山）ナナムキオ郡タムボン・ワンミ、ターワンサイ村）にて死亡した12名程度（碑文にある鐵本作造「新藤」を含む）及びバンコクで罹患して病死した3、4名程度のはずであり、彼ら15、16名はゲンコイとは何の関係もない人たちである。

#### 1904年 日本人鉄道工夫売込の失敗

なお、タイ鉄道建設に日本人工が働いたのは、コーラート線（東北線）の建設時に限られている。しかし、実現はしなかったが、その後の鉄道北線の建設の際にも、日本人工夫供給を鉄道局に売り込んだ日本人がいる。三根（みね）織次郎がその人である。外交史料館の旅券下付表によれば、三根は1869年7月生で佐賀県土族、1898年初めに商業研究の目的で来タイした。

1904年6月3日付けで建設大臣ナリット親王は、チュラロンコーン王に次のように奏上した。即ち、三根という日本人が在タイ日本公使館の紹介状を持って鉄道局長を訪ねてきて、鉄道工事に使う日本人苦力を日本から連れてくる用意がある旨を告げました。鉄道局長は、もし日本人苦力を雇用できれば工夫の不足を解消できるだろうと乗り気になっていますが、国王の御意に合うものでしょうか、と。

これに対し、6月6日付けで国王は次のように下命された。「日本は我が国との間の条約で、領事裁判権廃止の約束をしてはいるが、タイの法典の整備ができてのちに約束を実行するという条件を付けている。法典が未整備の間は、日本は他国と同様に領事裁判権を保持している。それ故、法律紛争が生じた場合に、日本人を制御することは困難である。もう一つには、日本人は熱帯の気候に耐えることができないのではないかと懸念もある。それ故、清国からシナ人苦力を連れてくることを考える方がよい。かつてこの業に携わった華僑たちが存在するので調べてみよう。ジャワ島でも、シナ人苦力を使っているほどであるから、ジャワ人苦力を連れてきてでも、シナ人苦力には太刀打ちできない。それに、タイのイサーン州とウドン州のラオ人をできるだけ多数雇用することがポリシーとしては優れている」（タイ国立公文書館 No. 56/5/19）。

タイと近代中国との間には、1946年まで条約は存在せず、欧州籍をもっている華僑以外の在タイ華僑はタイの裁判権に服していた。

コーラートまでの道中

前月号に記したように1896年12月22日のチュラロンコーン王夫妻御幸の時点で、レールが敷かれていたのは、現在のタツブクワーン駅からは6・5キロの地点である。

以後、岩本等はレールが敷設されていない、路盤の上を歩くこととなる。

12月23日（続）「タツコン村（仮停車場あり貨車運搬の終点地）より東北に進むと凡そ一時間鉄道線あり右折して小径に入り（軌道の敷設中に通行を許さず）或は深水を渡り或は峻坂を下りし路盤（うっそうたる樹林を辿る）凡そ二時間ヘンラップ（ヒンラップ、Heng Lap、タツブクワーンから13キロ）村に出づ鉄道掛洋人の家三軒鉄道工夫なる支那人の破れ小屋二棟あり二坊はタツコンに於て研究の結果今夜は此地に一宿するの心組なりしかば先づ洋人の家を訪ひしに生憎不在にて要領を得ず試に支那人夫の小屋に行きて水を乞ひしに其待遇の冷淡なる頗る無礼を極めれば失望の余り寧（い）そ

露宿と思ひしが此辺には虎豹多く往々人を害することありとの人夫の言に肝を消し進退此に谷（きはま）りしに恰もよし行先なるサータケンヤ（ママ）村に帰るといふ二名の土人に出遇ひしかば天の助と同行を乞ひ珍らしくも同行四人となりて且つ語り且つ行き或は半成の鉄道線上に出で或は虎豹の通ふ難徑を辿り難く漸くサータケンヤ（ママ）に到着せり盤谷より出でてより第四日同行土人の家に投じ始めて雨露を凌ぐを得たるものの前三日は土地平坦にして疲れながら無理の歩行を続けしが此日経過せし処は概ね山路なるが上に屢々深水を徒渉せしかば二僧とも足に三四の血腫を生じ（21、22頁）た。24日「厚く主人の施行を謝しタケヤン（ママ）を免す此辺朱檀黒檀其他坊等が名を知らぬ数多の樹木に富み鉄道枕木の黒檀を以て製せられたるものあるを見たり十時頃サータケンヤン村に入る人家三戸ありモクレック（Mok Lek、ムアクレック）を経て午後一時パーソー（Pa Sao、パーソー）に達す一破屋あり電信柱伐出の人夫四五名此に住す就て前途の難易を問ふ彼等曰く此よりは深林にあらずれば幽谷にして猛虎の出入常ならず白昼尚人を害することあり賃賃等より進まんとすれば宜しく此に一泊し明朝旅人の集屯するを俟て旅隊を組で進行するを上策とす」と其説く所理あるを以て日尚高きには拘はらず此に一宿することに決したり……今坊等が憩ふ所の小屋は方二間（約3・636メートル）余にして人夫の坐臥にも狭隘を告ぐる程なれば到底客僧の臥床に充つるの閑地なし人夫等は早くも此に懸念したるものの如く遙か前方に在りて殆ど崩壊せる方十数間の小屋を指し語りけらくアノ小屋は今より四五日前鉄道工夫たる支那人数十人の居住せし所なるが一日彼等の一人フト名も分らぬ草葉を摘み来りて之を美として自己も喰ひ人にも勧め頻りに其美味を賞せしが可憐其草葉は非常の毒物なりしと見え暫時にして吐血を始め全人数の三分の二は枕を並べて狂ひ舞れ残るものも亦た健康を害したれば今や西の方ヘンラップ迄引揚げたり而して個々（かやう）に多数の人間

が突死を遂げし小屋なれば恐現今に此地を去らず深夜往々鬼哭の耳に感ずることあり然れ共賃賃等は有徳の知識におはすべければ何の恐れ給ふ処かあらん苦しからずば彼所にて一夜を明させ給へと息をもつかず演じたり二坊は彼等の率直にして且腹味なるを心中に笑ひつつ快く之を諾（うけが）ひ初て其小屋に至り見れば蓋葺屋根九分通り吹き放たれ竹製の壁と床とは半ば破損し支那人が狂死の当時布きたると覺しき糞及び汚物を拭（ぬぐ）ひたりと思はるる布片所々に散在し惨状の當時を想像されて余り快くもあらざりしが人夫等の信する高僧知識を蒙るは此時なりと殊更に落付はらひ小屋の一隅に毛布を敷き破屋を漏れ来る星を見ながら物凄き家に鼾声を放ちたり里程大凡十三哩（24、25頁）。

ヒンラップからムアクレックは鉄路で8キロ、ムアクレックからパーンソークまでは13キロである。ヒンラップとムアクレックの中間にあるサータケンヤン村に關する岩本の記述は混乱している。村名も3通り（サータケンヤ、サータケンヤン、タケヤン）で書いている上に、12月23日の夜に同村に宿泊し、翌24日朝に同村を免つたと記しながら

479

ら24日午前10時に再び同村を通  
過したというのである。同村は、  
ヒンラップからムアレックの  
間の鉄道沿いに存在するはずだ  
が、地図で確認することができ  
なかった。ヒンラップ駅前に住  
民に尋ねたところ、タータキア  
ンという村があることが判った  
が方向違いである。タツコン(正  
しくはタツプクワン)、パー  
ソー(正しくはパーンソー)の  
などの例に見るように、岩本の  
地名表記は大体の発音を記して  
いるに過ぎず、不正確であるこ  
とに加えて、後述するような印  
刷時の誤植も少なくない。

今年の8月にコーラートまで  
鉄道沿いに車で日帰り旅行をし  
た。ヒンラップ駅の前には町は  
なく、数軒の家が散在するのみ  
である。但し、駅近くにセメン  
トを運ぶ多数の貨車が並んでい  
た。岩本は、ヒンラップからム  
アレックの間は、朱檀黒檀な  
どの唐木が繁っていると書いて  
いるが、今日では、その面影は  
なく、メイズやキャッサバの畑  
が広がっている。

ムアレック市街に入ると大  
きな郡庁所在地規模で、都市の

景観を為している。町の小高い  
丘の上にムアレックの国鉄  
駅がある。駅舎側から鉄道を挟  
み、右手(コーラート方向)斜  
め前の大きな菩提樹の下に、デ  
ンマーク人の墓地がある。白い  
墓標に「KALD LING RABBEK,  
Born in Denmark 13th Febru-  
ary 1878 Died at Muk Lek  
18th June 1897」と刻まれて  
いる。満19歳で死亡したこと  
になる。駅員の話では、デンマ  
ーク人の鉄道技師の子供で、マ  
リアで死亡したそうだった。時々、  
見学者も来るそうである。この  
不運な青年が死亡したのは、岩  
本等がムアレックを通過した  
半年後のことである。この駅員  
の話では、コーラート鉄道建設  
関係者の墓は、パークチョンに  
もあるそうだった。

25日、人夫が虎害を説いて2  
人だけでは行くと止めるのも  
聞かずパーンソーを出発、深  
山の狭路で50メートル程前方に  
虎が横たわっているのに出会  
し、後方に逃げる。偶然旅隊に会  
って隊伍に加わり「正年頃バク  
チョン(正しくはバークチョン、  
以下同じ)村に到着せり此村土人

家屋三戸鉄道係洋人の家二棟あり坊  
等は旅隊と袂を分ち幅三十間「55  
メートル程度」余の谷川を徒渉して  
コラット府の本街道に出たり」(27  
頁)。この夜は別の牛車隊と林  
中に露宿した。

以後は鉄道路盤ではなく、街  
道の旅である。コーラートまで  
の行程を簡略に書くと、12月26  
日にチャンソー(チャントウク、  
Chantouk)村を過ぎ、27日にはラ  
イタマー(パーンタツプマー、  
Pantapmar)村に泊し、28日はシ  
キユー(シーキユウ、Seikyu)泊  
29日「前六時林中を出づスノー  
ン河は幅百間「180m」余にして  
飯橋あり此橋水過れて徒渉すべし飯  
橋を渡り九時頃スノーニン(スノー  
ニン、Snonin)村に入る」(30頁)。  
筆者はスノーニンの現地に  
行って調べて見たが、幅180  
メートルの大河は存在しない。  
精々幅10メートルほどのラムタ  
コーン川(Ramta Koon)が存在  
するのみである。この川の上流  
にダムが建設されたため、川幅  
が幾らかは縮まった可能性はあ  
るが、10分の1以下に縮むこと  
があるだろうか。寧ろ、岩本の  
書く百間は誇張に過ぎるもの

ようだ。30日ルア(フンタール  
Aungmye)村を通過してコー  
ラート市に到着した。

岩本が訪ねた  
パノムワン寺の石室

岩本の三國探検実記のタイの  
部分で、彼が立ち寄ったとして  
固有名詞を挙げている寺は、次  
の二つしかない。一つはコー  
ラートのノムアン寺、もう一つ  
は、ノーンカリーのシクモン  
寺(シクンムアン、Sikunmuan)  
である。ノムアン寺については、  
次のように書いている。

1897年1月1日「左右に  
茫茫たる水田を眺め垣「垣」の  
如き道路を北に向ひ五時頃ワン  
(マ)村に着し副知事の告示を出  
して村長の家に投ず村長名をメイ  
ン(マ)と云ひ能く坊等待遇せ  
り」(40頁)。

1月2日「食事終りて此家を辞  
し釈尊の足跡をノムアン(マ)寺  
に詣(み)る。寺はワンセンを距る  
里余に在り二村童に導かれて寺門を  
入れば庭の西隅に一石屋あり広さ凡  
そ八畳許りを敷くべし此に所謂足跡  
を安置す踵より趾に五尺一寸「15  
5cm」踵の径二尺七寸「82cm」な

る足跡を大石に印したるものなり土  
人が此足跡を信仰する極めて深く香  
華絶ゆることなく四名の僧ありて之  
を守る就て其由来を問ふも知るもの  
なく製作の年代及び作者の名を知ら  
ず単に釈尊の足跡なりと云ふに過ぎ  
ず」(40頁)。

三國探検実記の1897年2  
月21日の項に、ルアンブラバン  
のプラバット寺に關して「プラ  
バット寺に至る此寺にも通羅ナム  
アン(マ)寺と同じく釈尊の足形石  
あり寺は中央小丘の上にありて府の  
内外を眺望すべし」(117頁)  
とある。ここでは「ノムアン」  
は「ナムアン」となっている。

三國探検実記が記す、コー  
ラートのワンセン村の近くに  
あつて仏足石で有名なノムアン  
寺(またはナムアン寺)という  
具体的な情報から、同寺を特定  
することは極めて容易であると思  
われたが、実際に調べて見ると  
この情報に合致するような寺  
は存在しなかった。ワンセンと  
いう名の村もノムアンという寺  
もコーラート市近くには存在し  
ないのである。

そこで、コーラート市に近く  
石屋のような遺跡がある寺で、  
寺名も似たものを探すと、同市

から17キロほど離れたパノムワ  
ン(Panomwan)遺跡に行き当たつ  
た。しかし、ここに仏足石があ  
るかどうかは実際に行つて見る  
しかない。

今年の8月14日午後4時過ぎ  
に閉門時間を気にしながら同遺  
跡に到着した。タイで5番目に  
規模の大きいクメール遺跡との  
ことであるが、管理人はおらず  
囲いもなく、一日中出入り自由  
であった。平坦な地形の上にあ  
る遺跡の周辺には、ボケモンG  
Oで遊ぶ3人の少年以外、誰  
もいない。少年たちにたずねる  
と、回廊内の石屋(Chitthouk)  
内に仏足石があるとのこと。急  
いで門を入ると、南西隅に石屋  
があつて、のぞき込むと岩本が

描いているような仏足石(写真  
参照)があるではないか。遺跡  
から近くの村に至る村道の標識  
を冒してワンセン村(Wansan  
village)と書かれていた。

これから、三國探検実記に、  
「ノムアン」又は「ナムアン」  
寺と書かれているものは、正し  
くは「パノムワン」寺、岩本が  
宿泊した村の名は、「ワンセン」  
ではなく「ワンシン」だと判明  
した。また、彼を世話した村長  
の名は「メイキン」ではなく「ナ  
イキン」のはずである。ナイ(正  
しくはナイー)は男性に対する  
タイ語の敬称である。

岩本原稿では「ノムアン」と

なっていたのか「ナムアン」と  
なっていたのかは定かではない  
が、岩本は先頭の「パ」の字を  
落としてしまい、その上、印刷  
者は、「ノ」または「ナ」のい  
ずれかを誤植したのである。ま  
た岩本原稿では「ワンシン」村  
であつたはずだが、印刷者は「ワ  
ンセン」と誤読し、同じく「ナ  
イ」だったはずのものを「メイ」と  
誤読したものと思われる。この  
ような誤りから、岩本が自著三  
國探検実記の校正作業や編集の  
手を抜いたことは明白である。

480



連載⑦  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (63)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

2017年1月3日

アンリ・ムーオに倣った?  
岩本千綱

岩本千綱と山本銀介は、1896年12月20日にバンコクを発ち、翌97年4月9日にハノイに到着するまでの111日間の三国探検の旅で、寄り道することなく、ひたすら街道に沿って急いでいる。三国探検実記を読む限り彼等の旅で、わざわざ立ち寄った場所は、ルアンパバーン(ルアンプラバン)を除けば殆ど存在しない。その中であって、コーラートのパノムワン寺院は

例外的で、岩本は意識的に少々脇道にそれてまで寄り道したのではないかと思われる。

もし、この推測が当たっていれば、岩本は事前に、パノムワン寺院について知っていたことになる。岩本がこの寺院について予備知識があったとすれば、その情報ソースとしては何が考えられるであろうか。

そこで思い当たるのが、時には大袈裟にもアンコール・ワットの再発見者とも言われたりする、フランス人アンリ・ムーオ(1826-1861)の遺著

である。

フランス生まれのムーオは18歳でロシアに渡り、フランス語の家庭教師として働きながら博物学の研究を開始した。クリミア戦争で帰国。イギリス人と結婚して、英仏間にある英領のジャージー島に落ち着いた。彼はインドシナ半島(シャム、カンボジア、ラオス)の博物研究に関心を高め、ロンドン科学協会の資金援助を得て、1858年4月末にロンドンを出発、4ヵ月後にバンコクに到着した。爾来1861年11月10日に

ルアンパバーンで35歳を一期としてマラリアに斃れるまでの3年間余、バンコクを拠点として、上記3国の各地を調査旅行し、哺乳類、鳥類、昆虫、貝類、植物などの標本収集を収集しては、ロンドンに送った。調査費は、十分だったようで、各地で国王や行政の長を訪ねて様々な欧州製品(銃、酒など)の贈り物をし、代わりに象牙や車などの交通手段をはじめ様々な便宜供与を得て、王侯並の旅行をする事ができた。また、既にシャムやインドシナ各地に仏人カトリック神父が駐在して布教活動をしていたが、彼らはムーオの重要な情報源であった。

1858年12月海路バンコクを発った彼は、チャンタブリーを経てカンボジアのカンボット

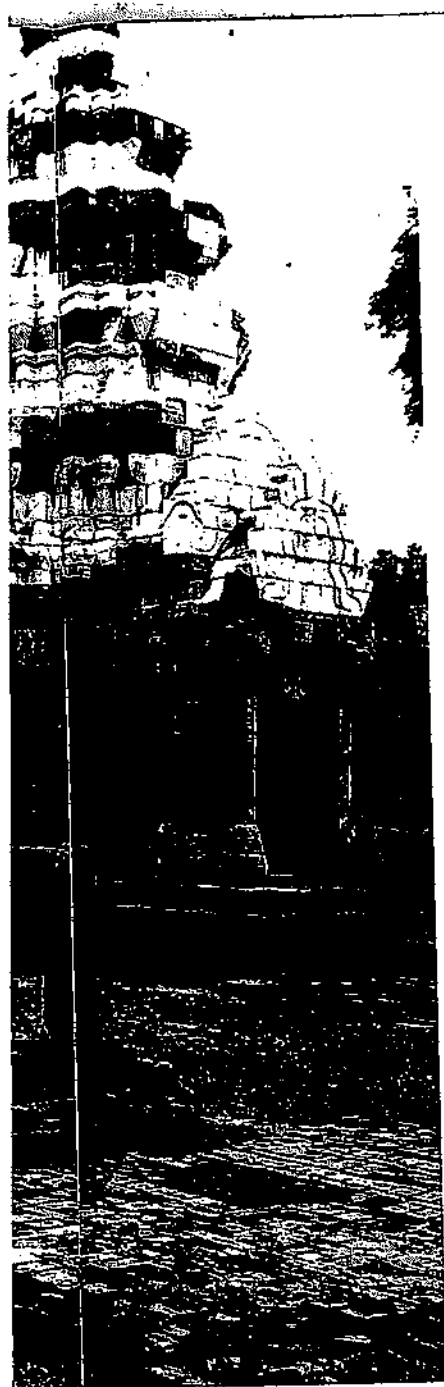


パノムワン寺院の主屋遺部(左手側が本堂、右手側が石塔)

に上陸、陸路カンボジアの首都ウドンを訪問後、メコン河をコンポンチャムまで遡航し、そこから再び下ってトンレサップ湖に入り1860年1月にアンコール・ワットを見学した。この後陸路タイ東部のカピンプリーに出て4月にバンコクに帰着した。

この時のアンコール・ワット訪問の様子は、彼の死後、手記や家族に宛てた手紙をもとに後述のように編輯出版され、この出版によりアンコール・ワットが世上に広く認知されることになった。

最後の旅となった、バンコクからルアンパバーンへの調査旅行の途中、1861年4月に、ムーオはコーラートに立寄り、パノムワン寺院を訪問した。ムーオは、この寺院をブノン・ワット(Phnom Wat)と書いているが、それがパノムワン寺院であることは、彼が示した所在地から容易に判明する。





パノムワン寺院に関する考古学的研究、ボントン・バントナム著『パノムワン石塔』(タイ国芸術局第9(ナコンラーチャシーマー)考古・博物館事務所発行、2001年、タイ語)の16頁も、ムーオが訪問した寺院はパノムワンであることを明記している。

ムーオは岩本のようにチョンナボット、コーンケン、ウドン、ノンカーイを経てルアンパバーンに至るルートを取らず、1861年4月13日にパンコクを発ち、ゲーンコイから10日間をかけてコーラートに到着。ここでパノムワン寺院を訪問したあと、チャイヤブーム、プーキオ、ルイ、パークライ経由でルアンパバーンに到着

し、同地で没した。

ムーオが1861年11月に死亡した後、彼の報告や日記を編集して、Henri Mouhot, 'Travels in the Central Parts of Indo-China (Siam), Cambodia, and Laos During the Years 1858, 1859, and 1860' 2巻本 London, John Murray, 1864 が、まず英語で出版され、続いて1868年には、フランス語版(邦訳は、大岩誠訳『インドシナ王国遍歴記、アンコール・ワット発見』、初版1942年改造社版、200

2年中公文庫)が出版された。更に1世紀を経た1966年になつて、1864年英文版の縮刷版、Henri Mouhot's diary: travels in the central parts of Siam, Cambodia and Laos during the years 1858-61, abridged and edited by Christopher Pym, Oxford University Press (邦訳は、菊池一雅訳『アンコール・ワットの発見』、学生社、1974年)が出版された。但し、パノムワン寺院部分については、186

4年版(第2巻、115-119頁)と1966年縮刷版(138-140頁)とは、全く同一である。両者の邦訳を比較してみると、後者の方がより信頼がおけるので、後者からムーオが描いたパノムワン寺院について引用すると以下のようになる。

「コーラート」「コーラート」東方九マイルの地点にあるフノン・ワット「パノムワン」という寺院を見物にいった。この寺院は、壮大さと美しさの点ではアンコールの寺院にははるかに劣るが、たいへんすばらしいものである。二回目にあつた「コーラート」知事は、私に小馬と案内人を貸与してくれた。われわれが燃えるような太陽を真上からうけて、粗放的な稲田を通り抜けた後に着いたところは、私の好奇心を強くかり立てた。というのはそこではココナッツの木の豊かで新鮮な緑がはるか後方に望まれ、まるでオアシスのようであつたからだ。……フノン・ワット「パノムワン」は長さ三六メートル

ル、幅は四〇メートルの興味ある寺院で、輪郭はかなり正確な十字架に似せてつくつてある。寺はアーチ形をした石の屋根と、優雅な円柱廊をもつ二つの楼閣から構成されている。屋根の高さは約七、八メートル、回廊の内部は幅が三メートルで、壁の厚さは一メートルである。回廊の正面にはそれぞれにねじれた横木をはめ込んだ窓が二つずつある。

この寺院は赤とグレーの色をした、粒のあらい砂岩で建てられているが、ところどころ崩壊しかけている。一枚の扉には長い碑文が刻まれ、その上には彫刻があり、これはアンコールやバセットのものと同様同様の主題を表わしている。

楼閣の一つにはいくつかの石造りの仏陀の偶像が安置され、そのうち一番大きいものでも高さは二メートル五〇センチで、現実にほろの遺物をまといっている。

この楼閣に入ると、アンコールの遺跡の中にあるような気になるかもしれない。というのは、アンコールと同じような建築様式、同じように

配合された趣味や、大理石のように磨かれた同じような大きなブロックが誠に美しく調和しているからだ。しかし私には非常に多くの厚板の組み合わせや設計が比較できるだけである。

この寺院はたしかに、建物全体がクメール王朝期の作品であつて、模造ではない。寺院はこの帝国の各地でみられるあの荘厳さの痕跡をいまなお残している。建物はある光輝ある治世のものと同じくらい古いものに相違ない。だが、外観は内部に匹敵するほどのものではない。シヤム人によると、このフノン・ワットは女王の寺院であつて、彼女の夫である王の寺院は、コーラート東方約三〇マイルの地点の「ピーマイ」[「マイ」]にあるとのことだ(前掲

菊池一雅訳『アンコール・ワットの発見』169-171頁)。

岩本千綱が学んだ初期の陸軍幼年学校及び陸軍士官学校(1879年12月卒)では、殆どの授業をフランス人教師がフランス語で行つた。両校を優秀な成績で卒業した岩本千綱にとつて、フランス語を読むことはお手の物であつたはずである。彼が1868年にフランス語で出版された上述のムーオ遺稿をパンコクで読んで、パノムワン寺院に興味をそそられ、ムーオに

倣いコーラートでわざわざ寄り道して同寺院を訪ねたのではないだろうか。このように推測しても、あながち間違つていないと思われぬ。それどころか、ルアンパバーンを経由する岩本の三国探検の旅の構想自体が、ムーオの遺著に刺激され触発されたものではないかという疑問さえも生じるのである。

とにかく、ムーオに遅れること35年とは言え、装備が整つた王侯並の旅を行つたムーオとは異なり、岩本・山本は二人だけで貧乏徒歩旅行を続け、ムーオが病死したルアンパバーンを超えてハノイに至るといふ偉業を成し遂げたのである。

#### パノムワン寺院 仏足石の不思議

パノムワン寺院という表現からは、僧侶が住む、活きたお寺のように誤解されかねないが、実際は誰も住んではいないク

メール式石塔遺跡である。しかし、隣接する敷地には、多数の出家者が止住する、立派で清潔なパノムワン寺が存在している。

ムーオはパノムワン寺院の中にある仏足石については、何等言及していない。一方、岩本はパノムワン寺院を、仏足石を中心に次のように紹介している。

1897年1月2日、食事終りて此家を辭し釈尊の足跡をノムアン「パノムワン」寺に詣（み）る寺はワンセン「ワンヒン」を距る里余に在り二村重に導かれて寺門を入れば庭の西隅に一石屋あり広さ凡そ八疊許りを敷くべし此に所謂足跡を安置す踵より趾に五尺一寸「155cm」踵の径二尺七寸「82cm」なる足跡を大石に印したるものなり土人が此足跡を信仰する極めて深く香華絶ゆることなく四名の僧ありて之を守る就て其由来を問ふも知るものなく製作の年代及び作者の名を知らず単に釈尊の足跡なりと云ふに過ぎず（岩本千綱『暹羅老撾安南三國

探検実記』1897年、40頁）。

パノムワン寺院、なかでも仏足石が安置されている、石屋について、タイ芸術局が出版した2冊のタイ語資料、即ちマニット・ワンリポードム著『パノムワン寺院石塔』（1960年刊）と前掲ボンタン・バンナム著『パノムワン石塔』（2001年刊）に拠って簡単に見ておきたい。

パノムワン寺院（石塔）は、コーラート市内から東北17キロに位置し、西暦11世紀頃に建造されたクメールのヒンドゥー寺院で、後に仏教に転用された。西暦1990-2000年に修復されて現在に至るが、修復以前は、遺跡には1m以上の土が堆積していた。四角形の回廊（長さ60m、幅50m）で囲まれた内部の中央に、東側に本堂（prang）、西側に石塔（stupa）が置かれ、両者が廊下でつながっている主建造物が存在する。この主建造物は、全長25・5m、幅10・2

mである。石塔内の門柱には、クメール語で書かれた、西暦11世紀の八つの碑文が存在する（現在碑文は博物館に移されており、現地には存在しない）。主建造物からは独立して、回廊内部の南西角近くの草地の上に小石塔（stupa）が存在する。この小石塔こそが、岩本千綱が石屋と称している、仏足石が安置されている所である。

この小石塔「石屋」について、マニットは次のように書いている。

主建造物南側入口の外側の広場に、砂岩で作った石屋がある。未だ作りかけの状態である。主建造物と石屋の建造時期は異なっている可能性がある。石屋の内部に仏足石が置かれている。赤い砂岩で作られ、長さ1・63m、幅66cmで横向きに横臥状態で置かれている。石工の彫り方から見てアユタヤ様式であると思われる。仏足石を仰向けに裏せて置くのではなくこのように横に立てる置き方はアンコール・ワットにもある

という話である。もし、二つの仏足石が同じ様式か同じ頃作られたものであれば、カンボジアがアユタヤの属国であったアユタヤ初期に作られた筈である（前掲マニット著書、11-12頁）。

一方、ボンタンは次のように書いている。小石塔「石屋」は、縦横9×9mで主建造物の南西側の角にある。入口は一つだけで東側にある。ラテライトの基礎の上に赤い砂岩で建造されている。上部の四隅に丸い穴があるので、木造の屋根があったと推定される。部屋の中には西側壁に接して高い台座があり、その上に仏足石が置かれている。この仏足石は後の時代に運び込まれたものである（前掲ボンタン著書、87頁）。

また、小石塔「石屋」前に現在置かれている、タイ芸術局の解説プレートには、ラテライトの基礎の上に砂岩とレンガで建築されている。構造は四角形で、縦横各9mある。仏暦16-17世紀頃に建設された。入り口は東向きである。

内部には、砂岩でできた仏足石があり、仏暦23-24世紀頃（アユタヤからラッタナコーシン初期）の作である、と書かれている。

通常仏足石は仰臥状態におかれているが、この仏足石は横臥状態に置かれている。この点を指摘しているのはマニットだけである。

この石室の外側基礎部分は、タイ芸術局の解説文のように縦横各9mあるのかもしれないが、実際に見てみると石屋内部は、2・5メートル四方、4畳足らずの広さしかない。しかもその半分は仏足石の台座が占めている。岩本は「石屋あり広さ凡そ八疊許りを敷くべし……香華絶ゆることなく四名の僧ありて之を守

る」と書いているが、石屋内部は8畳どころか、その半分以上の広さしかなく、しかも同内部の半分は仏足石の台座が占めているので、人が座ることができない面積は2畳もない。4名の僧が四隅に座することは不可能である。あり得るとすれば、修復で1m掘り下げる以前は、石屋の外側と、石屋の床との間には段差がなかったのだ、4名の僧は、石屋の外側の地面に座していたのであろうか。

もう一つ不思議なのは、「香

華絶ゆることなく」という岩本の記述からは、参拝客で相当に賑わっているような印象をうけるが、2016年8月14日に筆者が実際に行って見ると、4名の僧侶どころか仏足石の前には数週間前に上げられたと覚しき、ロウソク線香の残骸があるのみであった。或いは、岩本等が訪問した、120年前は今以上の賑わいがあったのかもしれない。または、岩本が訪ねたのは、1年に何回もないお祭りの日に当たり、多くの村民が集まっていた例外的な日であったと考えられないこともない。隣接するパノムワン寺の僧侶に聞くと、同寺の僧侶たちが1年に1回、パノムワン石塔で延命（samrit）の儀式をしているという。しかし、岩本等が訪問した1897年1月2日をタイ暦で見ると、小暦1258年（申年）1月黒分第14日に当たり、閑夜である。このような日に仏教のお祭りがあったとは考えられない。

（追記）クルンテープ誌に連載しております岩本千綱記事をもとにして、次の二つの論文を刊行しました。筆者名もしくは論文名を入力されますと、ウェブ上で簡単に読むことができます。ご関心のある方の一読を得ることができれば幸いです。

①村嶋英治「1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業・渡タイ（シヤム）前の経歴と移民事業を中心に（上）」『アジア太平洋研究』26号、2016年3月

②村嶋英治「岩本千綱の『暹羅老撾安南三國探検実記』をめぐって：探検の背景と実記の質」『アジア太平洋研究』27号、2016年10月

なお、昨11月に岩本千綱のお孫さんにお会いする機会を得、新しい資料の提供を受けました。これらも加えた、上記①の続編をアジア太平洋研究28号（2017年3月刊行予定）に掲載する予定です。



連載 ⑧  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (64)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

7月20日  
2017年2月

コーラートから  
ウドンへ

1897年1月2日、岩本千綱と山本銀介はコーラート市郊外にあるクメール遺蹟パノムワン寺院で仏足石を見学したのち、マークケン(ウドン)、ノーンカイに向けて旅立った。この夜、彼等はサノントア村(正しくはタノントウア *Tha Nong Thua* *Sanong Thua*)のあばら家に泊まったが、三無(山本銀介)が夜中に用便のため屋外に出ようとして床を踏み外し、床下の水牛と豚の糞尿の上に落ちるといふ悲喜劇が生じた。1月3日の夜は野宿。1月4日には岩本が大森林と訳しているトンヤイ(ドーンヤイ *Don Yai* *Don Yai*)を通り、ポンタクロ村(バーン・タクロ *Ban Thakro* *Ban Thakro*)の入り口に野宿。5日朝4軒しか人家がない同村を

食はボアノエ村(ブアノイ *Bua Noi* *Bua Noi*)で寄進を受けた。

ボアノエ村にて午食す施主は熱心なる仏教家に於て懇る坊等を通し飯、魚、砂糖、煙草等を饗せり是より北端米(もちめ)を常食とす又居民は概ね老弱(ラオス)人にて通羅人に見ること稀なり此夜亦た林中に露臥す行程十四哩(岩本千綱『暹羅老樹安南三國探検実記』1897年、42頁)。

ボアノエ(ブアノイ)村はブアノイ郡タムボン・ノーン・トーン・ラーンに属す。同郡はナコンラーチャシーマー(コーラート)県の北端に近く、コーンケン県に隣接している。ここからは、糯米を常食するラーオ人の世界に入るのである。コーラート人とラーオ人の居住地の境界線は、今日でもこの辺の筈である。

1月6日糯米を炊いて食事をした後、道とも藪とも区別しが

たい中を通って北に向かう。かんかん照りの太陽の下、人家なく水もなくて苦しめられるが、ノーンカイからコーラートに

獣皮獣骨等を売りに行く数十頭の牛車隊に出会い、水を分けてもらうことができた。この夜も野宿。翌7日水がないので炊飯はできず、生米を噛み、木の葉の露を舐めながら磁石に頼って萱原を進み、正午頃道普請の人夫に会って少しばかりの食料、水を得た。5時過ぎにマイナビヤン村(マイナービヤン *Min Bhiang* *Min Bhiang*)に達し、同村の寺院に泊めてもらった。同村は現在コーンケン県ウエーンヤイ郡に属している。岩本等が寺院に泊まったのは、バンコク出発以来初めての経験である。

「此辺嶺寸(マツチ)及び燧器(火打ちの石と金属)なし土人が二本の木を繋ぎ出して火を出すこと南洋諸島の土人に異ならず」(同上、44頁)。

れた。

州総督  
ブラチャク親王との遭遇

1月9日、正午頃サナボット(サナボット *Sana Bot* *Sana Bot*)市に入る戸数三百許(ばかり)人口二千四百あり、屋敷後北進凡二哩余(たまたま)老樹園モン・トラウ・ボアン州知事クローマパチャック殿下の盤谷に赴くに追(あ)ふ随行員二坊の園地を怪馬を下りて来り問ふ所あり三無(山本銀介)巧に暹羅語を操りて旅行の目的を告げ且つ暹羅にコラット府副知事が認(した)たため呉れたる告示書を示せしかは彼等大に安心の体にて相成の挨拶を為し一鞭を加へ去り午後九時頃ドン村に入り一寺院に投宿す(暹羅老樹安南三國探検実記、47頁)。

岩本は、ここではサナボット(後ろの方ではチャナボットと記している)市と書いているが、当時のサナボットは統治者を有する一國(国 *Country*)であった。クローマパチャック殿下とは、チュラーロンコーン王の異母弟で同王より2歳半年下のグロママーン・プラチャックシンラバーコム(*Prachachaksinrabakom*)

1856-1925)親王のことである。

当時同親王はマークケン(ウドン)に本拠を置くラウボアン(ラーオ・ブアン、*Lao Ban*)州の責任者であった。岩本は親王の肩書を知事と書いているが、タイ語の意味はもっと重く *vicoy* (副王もしくは総督)と訳すべき地位にあった。モン・トンとは *Chong* と英訳された州のことである。岩本は「老樹園モン・トラウ・ボアン州」と書いているので、この州は仏印の老樹園の一部かと誤解されそうだが、同地がタイの領土であることは言うまでもない。但し、当時、中部タイのタイ人は北タイや東北タイ地方の国々をムアン・ラーオ(*Lao* 老樹園)と呼んでおり、この地方の住民も自分をラーオ人と認識していたためにこのような表現となったのである。

ブラチャック親王は、兄王が



ラーオ・ブアン州総督プラチャック親王  
(1856-1925)

より大津絵節を始むべしと三無に通じ声を揃へて「オーイ・オーイ老嬰(おやじ)どの」を一語ずつに面白半分には太閤記十段目のさばりに移り恰も「もつそふ飯の切米も百万石にまさる」といふ處に至り衆僧の説経漸く終りし体なれば二坊亦た「南無」と唱へて経を誦へたり此時若し一人の日本語を解するものあらば其人の感情果して如何今日より當時のこゝとを回想すれば有(さ)すが、の鉄脚も冷汗に腹下に滴るを覚えざるなり看経終りて衆僧托鉢に出づ二坊亦之に従はざるを得ず嗚呼明治二十年一月八日は是れ如何なる日ぞ鉄脚三無の二坊は終に此日を以て正式の乞食仲間に入り了め帰院後朝飯を終へ本寺を発す(同上、44-45頁)。

コーンケーンの寒村で初めて托鉢を経験したと書いていることである。バンコクのパンケラ寺での出家が、たとえ短期であつたにしてもパンケラ寺に居た時には、托鉢に出るのが普通だと思われるのだが、なお、岩本が御経一つ知らなかったのは、彼の家が神道で日本の仏教的伝統とは縁が薄かったことが大きな原因ではないだろうか。岩本が1920年12月19日に死亡した際は神道式で葬儀が行われており、現在松戸市の都立八柱霊園にある岩本家の墓(岩本千綱の長男正男夫妻が昭和52年に建立したもの、千綱の遺骨も入っている)の墓石にも、神道の墓を示す「岩本家之奥都城」と刻まれている。

1月8日の夜は、そうとは知らずに、4人の山賊のアジトにころがり込んで肝を冷やしたが、翌朝山賊どもはニワトリを造って(この語は方言かも知れないが絞め殺してさばくなどという殺伐たる表現よりも適切だ)と思う。タイでも殺すなどとは言わず *sa* と言っている筈である、食事をタンブンしてく



らその才能を高く評価され、若年から重要任務を与えられてきた。王宮警護隊の司令官、ホー征伐軍の司令官、宮内大臣を歴任後、7年間ウドンにラーオプアン州総督として滞在。続いて1899年9月2日に国防大臣及び海軍司令官代行に就任したが、1901年8月8日には病氣を理由に辞職した。後任の国防大臣は、チュラーロンコーン王の実弟パーヌランシー親王(1860-1928)であった。この頃、国王の実弟派と異母弟派など複数の派閥の間に勢力争いが存在していたことを、駐シヤム日本公使も報告している(外務省記録1.61/44「各国内政関係雑纂 暹国 第一巻」)。同親王は、別の事件でチュラーロンコーン王在位の最後の年には、王宮立入禁止の勅命を受けた。

バンコクの中央政府は、隣接するフランス、イギリスの侵蝕から国土を防御するために、1890年に仏印国境及び北タイに4州(モンソン)を設けて、それぞれの州にバンコクから文武両官を付して総督を常駐させ

ることにした。この4州設置の趣旨を該当地域の地方統治者に説明した勅書に曰く、バンコクは諸外国と友好条約を結んで既に久しく、次第に発展してきた。フランスは安南、カンボジア、トンキンを征服して支配下に置き、その領域は我々国東部の南から北まで隣接するようになった。バンコク王朝の領民であるベトナム人、クメール人、蛮族カークが国境の末端地域に居住し、彼等はフランスが統治している国外地域の住民と混じり合っている。一方、イギリスはシヤムの西側のビルマを南から、北方の赤カレン人地区、シヤム人地区、チェンソン地方に至るまで行政を布いている。住民も領土も未だ分割されてはおらず、シヤム政府は、今後英政府や仏政府と協議して、平和

友好裏にヒトと土地を分割しなければならぬ。そして賊を鎮圧し、商売を盛んにし、国を繁栄させ民力を均しく強化しなければならぬ。しかし、中央から遠く離れ、知事や伝統的領主の統治下にある国境地方の行政は、隣国と友好を維持できるほどには整っていない。能力の高い高官をこれらの地域に駐留させて隣国と交渉する必要がある。と。それ故、これ等の国境地方を4区に分け、ラーオプアン州の外にも、チェンマイ地方にラーオチアン(Chiang Mai)州、ルアンプラバン地方にラーオプ

ンカーオ(Chiang Rai)州、チャンパーサク地方にラーオガール(Chiang Saen)州が置かれた(タイ国立公文書館の文書)。このように、州の名には、ラーオという名がどの州にも入っている。

ブラチャック親王が総督であるラーオプアン州は、1890年の設立当初はメコン河の両岸に亘り、ノーンカーイ、シエンクワン、ボリカムサイ、ナコンパノム、サイニャブリー、サコンナコン、ムクダーハーン、クムタサイブリーラム(現ノーンプアラムプー県域)、ノーンハーン(現在のウドン県域)、コーンケーン、ロムサックなど13の大きなムアンとそれに付属する36の小ムアンからなっていた。但し、1893年のパークナム事件後、仏はシヤムからメコン左岸(現ラオス)の地を奪った。

ブラチャック親王は、1897年1月24日にバンコクでチュラーロンコーン王に拝謁した『タイ官報』第13巻、536頁、1897年1月31日号。拝謁前に、同親王はウドンからバン

コクに出かけておかねばならない計算になるから、岩本等が97年1月9日にチョンナボットでバンコクに向かう同親王一行とすれ違ったのは、この時の出来事に違いない。

バンコク訪問からウドンに戻った同親王は、内務大臣ダムロン親王の1897年6月29日付けの書翰を7月20日以前に接受し、7月20日付けで返信を書き、バンコクのダムロン親王はそれを8月28日に受領した。これらの日付から見ると、バンコクのダムロン親王からウドンへの文書は、20日間であつた。ウドンからバンコクへの返信は倍の40日を要している。岩本等は1896年12月20日にバンコクを出て、翌年1月18日にウドンに到着しているの、バンコク—ウドン間に30日を要してい

る。岩本等は徒歩ながら、公文書の運搬に要する時間とほぼ同じスピードで進んだことになる。

最前線でフランスと対峙するブラチャック親王

さて、ブラチャック親王が、6歳も年下の異母弟ではあるが、今や自分の上司となった内務大臣ダムロン親王(1862-1943)に宛てた、上記7月20日の返信は私信であり饒舌に様々な話を書いている。彼は、フランス人マッサーが「現在チュラーロンコーン王はパリに

滞在中だが、誰からも相手にされてはいない」と発言していると書き出し、自分は外国旅行の恩沢に一度たりとも浴したことがないので、見聞は純然たるタイ式のうえ古いがとして、次のような要旨の文を書いている。

植民地主義者は様々理由をあげつつて国王のフランス訪問を妨げようと努めたが、我々の方々は歓迎されるかどうかを問わず、兎に角訪仏することを目標とした。訪問して警察に逮捕されるといふようなことがない限りは、どんな待遇でも訪仏しようとしたのである。パリで相手にされない国王を市中の人形

シヨッピングで時間を潰していると世間の人々が責めることはあるまい。責められるべきはフランスの方だ。フランス側は、国境でタイ側から先に攻撃を仕掛けさせようと挑発したり、タイ側に戦争の準備をさせようとして刺激的なことをしている。しかし、このような事実は外国には伝わっておらず、逆にタイ側が侵攻しようとしているとフランスに伝わっており、そのようなニュースがある度に、フランス国民はいきり立ちタイを憎悪している。毎回フランス側は我々の頭を叩いては大騒ぎし、我々は怪我し損で終わっている。連中にこのようなことをやらせないための方策はないだろうか。我々はフランス側に侵攻しようなどと考えたことは一度としてない。現在の準備は、防衛のためだけである。州の幹部たちと協議して理解し合っていることは、現在我々が支配している領土には、メコン河から25キロ以内の地域とそれ以外の地域の2種に分けられるが、前者の25キロ以内の地域はただ徴税して大蔵省に納めることしか考

えていない。後者の25キロ以外の地域は武力で防衛する地域であり、武器をもった兵士が入ってれば敵と見做す。

目立たないように兵士を準備することについては、我々の将校たちはよくやっている。訓練は森の中で小グループに分けて実施している。しかし、我々が兵士の訓練をしていることや兵士が存在することを秘匿して誰にも判らないようにして置くことは、私の能力を遙かに超えている。何となれば訓練した民兵やボランティアは300人を超えており、各人には少なくとも一人の親類がいるとしても兵士の訓練を知っている人数は倍になる。また訓練地では人の数も増え、宿舎も建てるので、どうしても商売に來た人に気付かれしてしまう。メコン河の兩岸に、親子、親族がおり、常に行き来しているのに、秘密が漏れるのは避けられない。訓練の服装に關して様々な意見がある。兵士の制服が不足しているのに、制服にあふれた者は鳥撃や獵師の恰好をさせている。フランスは我方の兵士の存在について言い

掛かりをつけてくる。マッセーが訪ねて来て、いの一に兵士に關して文句を言い、どうして兵士の訓練をするのだ、誰を敵視しているのだと問うた。我方は文書で、兵士の訓練を毎日やるのは当然だ、兵士は国内に生じる盜賊を抑止するためのもので、シャムと友好關係にある英仏と戦うために訓練しているのではない、と抗議した。パンコクから兵士を送り込んで増強することができれば大変よい。但し、その場合はウドンの兵士は年間もここに留まってきたので、交替も必要だと言つて、表向きは交替だと説明するのがよ

からう。フランスが未だにメコン河岸（即ちタイ領）を奪取しないのは不思議だが、奴らは突然噴出して来る。もし防衛力が不十分なら名譽の失墜も甚だし。州の幹部たちは、防衛のことしか考へておらず、絶対に攻勢をかけることはない。「私的には今年是不運な年である。今回パンコクから戻つて來る時は雨期の始まりに当たり、加えて腐った家畜の悪臭に苦しんだ。旅の途中では乾燥が続き、牛が斃れた。ある所では水が腐り悪臭を放つて顔を洗うこともできなかった。飯炊き用の水は不足すれば飯が炊けなくなり飢える

心配があつたので、洗面に使う訳にはいかなかった。生まれてから今回ほど苦痛を味わつたことはない。牛車を曳かしたり食料とする牛や乳牛のうち、途中で23頭の牛車用の牛（40、50バーツする）が倒れて死に、また娘たちに飲ませる乳を搾るためにパンコク等から運れてきた乳牛も死んだ。マークケン（ウドン）に戻つてからは嵐が吹き荒れ、宿舎も全壊した。マッセーが訪

ねてきた時には、座らせる場所もなかったほどである（タイ国立公文書館 no. 40.29/20）。上記書翰中のフランス人マッセーとは、岩本等がノーンカーイからメコン河を渡るに際し、世話になったノーンカーイ駐在の仏国コンシッセル、ポール・マッセーのことである。

岩本等は、1月10日はノーンウエン村（*nuan-ueng a-wedh a-wedh*）の空寺に泊まり、11日にはニュー村（古い地図に *nuen* とあるが現地地名不詳）の寺院泊、12日には旅人用に造られている高床のサーラーに泊したが13日朝明け時、大虎に襲われ天井にしがみついて危うく難を逃れた。この日コンケン（コーンケン）村を過ぎてピンヘン村の寺院に泊まった。14日は途

中のサーラーに泊まり、15日はコンタン村の寺院泊。16日にはハコー市（*panu huale a-wedh a-wedh*）を経てサンホー村の寺院泊、17日はカンキン村（カムグリン *kan-kin a-wedh a-wedh*）の村外の番小屋泊。

18日午前11時頃、暹羅領下老蠟（*lam*）*メコン*以北を上老蠟と云ひ以南を下老蠟といふ。モントラウボアン州マクチン村（*mak-tin*）*nuen*、*nuen*、現ウドン市）に着す戸数八十余比較的に大家屋ありコラット府チヤナボット（*ma*）市に次ぐ繁華の地に市場の如きは多少市街の体裁を為せり県庁あり郵便局あり電信局あり知事は皇族クロマバチヤック殿下にて坊等がチヤナボツ

ト市の北方に於て邂逅せし人なり二坊は今より四五日程にして仏國の新領地に入る筈なれば此間暹羅の官吏に出会ひ交渉など惹起しては馬鹿らしと当市を素通りせんとせしに白の上着を被（き）たる一小官吏坊等と呼び留め県庁まで同行すべしと云へり三無 鉄脚に耳語して曰く是れ或は警谷なる寺院局長より電報來り我等を引戻す為めにはあらざるかと鉄脚も或は然らんと思ひたれ共事此に至りて疑はるるが如きことありては却て得策にあらず返隙（へんすう、辺境）の俗吏何程のことかあらんと恰も安宅の関の弁慶を氣取り小吏に導かれて県庁に到れば書記官ランヤーエ子爵立ち出て先づ坊等の暹羅

人なるか將た外国人なるか而して何地より來り何地に至るを訊問せり乃ち答て二坊は日本人にして警谷府パンケラ寺に於て僧となり暹羅内地の靈場を巡拝する為め行脚するものなり首府出發の時寺院局長の免状とラーヤヤサツク親王の添書を所持せしがコラット府外にて盜難に罹り止を得ずナコンジャシマ（*ma*）州副知事の告示書を得たりとて出して之を示し尚ほ言を巧に虚実混淆の陳述を試みしに書記官の意（*conco*）は忽ち氷解し俄に茶菓を出して饗せり且つ曰く貴僧を抑留せしは不得止次第にて実は知事殿下より近來外国人種々に形を變じて内地に入り込む者往々あれば荷も風体の怪しきものを認むれば一応取調へ警谷府へ照会すべしとの命令あり然れども本官の見る処に拠れば貴僧等は是れ純然たる巡拝僧にして別段取調へを為すに及ばず又警谷へ照会するの手段を取るにも及ばざるべく信すれば隨意に出発せらるべしと二坊は虎口を遁れし思ひにて早々県庁を出で晚鷄の鳴（*ne-ku*）に帰る頃タートン村に入る（前掲三国探検実記、56-57頁）。

岩本等は正にタイ・仏の対立の最前線に踏み込んだのである。

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (65)

ノーンカイ

岩本千綱・山本銀介が、1897年1月18日にマークケーン(現ウドン市、三國探検実記では誤植により、マクケンではなくマクチンと印刷されている)を通じたところ、前号は終わった。

1月18日の夜は、タートン村(タートウム、Tatoum)の村長宅に泊まり、19日は林の中を歩いて村はずれの廃屋泊。20日は、コンタン村(コムターン、Khanthan)の番小屋に泊し、希望者には薬を与えるが、薬に混ぜるために酒が必要だと村民に詐って、酒を持ってこさせて、タイ領完歩の祝杯として呑み干した。

タイ側からウイエンチャンに直接渡るには、ノーンカイより上流にあるシーチェンマイまで行かなければならない。ノーンカイで対岸に渡してもらった岩本・山本は、ラオス側をウイエンチャンに向けて歩いた。マッセーの指示があったので、ラオス側の村長が荷物運搬人夫を提供し、身軽になった両人は、1月22日「午後5時過ぎタツロアン」(タートルアン、Tatouan)村に入り同名の寺院に投じ、(同上書、79頁)。タートルアン仏塔はラオス国の象徴だが、この仏塔のある寺に泊したのである。

ル、Commissaire)としてノーンカイに駐在させていた、ポール・マッセーを訪ねて、ラオス旅行への便宜供与を求めた。

1月22日、マッセーは通行許可証(旅券)を発給してくれただけでなく、官船に乗せてラオス側に送ってくれた。

岩本はメコン河について次のように書いている。  
此河元(もと)と通羅に属せしが明治二十六年通仏交戦の結果終に仏国の割取する地となり且つ此河の右岸「西岸」より通羅内地へ二十キロメートルの間は殆んど中立地の如き姿を為せり。(岩本千綱『暹羅老撾安南三國探検実記』、1897年、79頁)。

上記20キロは、岩本の勘違いで、正しくは25キロである。  
1893年(明治26年)10月3日に、フランス・シヤム間に締結された条約(タイ語版)は、次のように定めている。

第3条、「シヤム政府は、バツタンバン州、シエムリアップ州、およびメコン河の西側右岸の25キロメートル(625セン)の地域には、軍の哨所、キャンプ、堀、或は兵士の居住施設を設けない」。

第4条、「第3条にいう地域においては、その地方の警察隊を必要最小限置いて治安維持等に当たらせることとし、武装した軍官若しくは徴兵した兵卒を置くことはできない」。

第5条、別の合意が成るまで、第3条にいう地域においては、シヤム政府は関税を課することはできない、同様に同地域内で生産された物品をフランス領側で販売する場合、関税を課さない。

第6条、フランスがメコン右岸(タイ領)に港、船着き場、燃料庫を設ける場合、シヤムは協力すること。  
第7条、「第3条にいう地域

のフランス側官吏が発給した旅券を有する場合、フランス人若しくはフランス保護民は、同地域内で支障無く商業を営むことができる。同様に、同地域内に居住するタイ側人民は、フランス領側で商業を営むことを認め

る。  
この条約により、東北タイのメコン河から25キロまでのタイ領においては、軍隊を置くことも、フランス側の商品に関税を課すこともできず、また、フランス人若しくはフランス保護民が自由に商売することを認めた。  
前号でラオプアン総督、プラチャック親王がこの25キロ地域では、タイ側はタイ人民から徴税する以外、何の手出しもできないと述べたことを紹介したが、岩本は、この状態を中立地帯と表現したのである。

ウイエンチャンから  
ルアンパバーンへ

トルアン同様シーサケート(ワット・シーサケート、Wat Si Saket)も、ウイエンチャンの最重要観光スポットである。タイ国と対を成すと言われる至宝エメラルド仏像は、かつてこのシーサケート寺に安置されていたが、18世紀末のタークシン王時代に遠征軍によってバンコクにもたらされた。

第2次大戦後直後の1945年9月末、タイ政府代表が、セイロンのイギリス軍東南アジア総司令部に出頭し、戦争終結協定を協議した際、フランス代表も姿を現しタイ側代表と会見した。

フランス代表は「フランスと

タイとは敵対的地位にあるとみなしている。1940年6月以前の状態に戻るといふ原則の下に、関係回復を協議する用意がある」という文書をタイ側に渡し、1941年に日本の調停でタイが仏印から回復した全領土の返還、及びエメラルド仏像の返還を要求した(村嶋英治「1940年代におけるタイの植民地体制脱却化とインドシナの独立運動」、『ベトナムとタイ』、大明堂、1998年、168頁)。エメラルド仏返還要求は、フランス側が駆け引きの道具として使ったのみで終わり、実現しなかったことは言うまでもない。

ワット・シーサケートでも、もう一つ、ラオス側のタイに対する複雑な感情を印象付けられるものは、1820年代の所謂アヌの反乱の時、ウイエンチャンに侵攻したタイ軍が、眼珠(宝石)を抉り取ったという数多の仏像が、眼孔周辺の痛々しい傷とともに、そのままにされていることである。

ウイエンチャンでもフランス側のコミセール、モーランに優遇された岩本等は、気を良くし

て、1月25日朝、更なる通行許可証を受領してウイエンチャンを出発した。

ノーンカイ、ウイエンチャン、ルアンパバーン、更にハノイに至るまで、岩本等はフランス官憲から優遇され、便宜供与を受けたが、これは長身イケメンの岩本のフランス語によるコミュニケーション力が大きく与っていると思われる。岩本は「不完全なる仏蘭西語」(同上書、78頁)と謙遜しているが、陸軍士官学校に入学するための旧土佐藩の予備校(海南学校)、幼年学校及び士官学校において、殆どの課目をフランス人教師からフランス語で学び、優秀な成績を挙げた岩本のフランス語は、その後少しは錆び付いていたかも知れないが、完璧に近く、フランス官吏に一目置かれたものと思われる。

ウイエンチャンでメコン河本流と別れた岩本等は、メコン河の支流に沿って北上し、まずはルアンブラバン(ルアンパバーン)への通過点なるカシー市(Kasi, Khamthiung)を目指した。岩本等がウイエン

村嶋英治

2017年3月





チャンからトンキンに至るまで歩いた道は、メコン河に流れ込む、いくつもの支流に沿った街道であり、別の支流に移動する必要があるときは、峠越えで山を跨いだ。

カシー行きでは誤って迂回道を歩き、カシーに到着したのは、2月7日になっていた。岩本は、ウィエンチャンからカシーに至るまでに通過した多数の村名を記している。地名の表記には一部混同もあるようであるが、岩本等が通過した村は、それがどこにあり、現在の地名はどうなっているのかは、詳細なラオス地図で対照する必要がある。これはラオス研究者にお任せしたい。

「カシー市は戸数二十に満たず、一村落のみ然るに之を市[Inang]と称するは蓋昔時は繁なる市街なりしが故なり」と(同上書、102頁)。

カシーを出て2月8日から10日にかけて、街道中第一の高山ラオピー(Phou Lao Pi)越えを行なった。ラオピー山は標高1100メートル前後のようである。現在、ウィエンチャンを発

ルアンパバーンに向けて国道13号線を車で来れば、この辺りの曲がりくねった山道で車酔いに苦しむ人が多い筈である。

岩本等が通った当時でも、道幅は4.5メートルはあったが、乾期で水場のないラオピー越えは、濁水に苦しんだ。

2月11日は、ラオピー村で休養。村民たちが、村外れの川はルアンパバーンに注ぐカーン川(Khan)に繋がっているから、水路で行けば2日で到着できると勧めたが、「若し之が普通の旅行なれば無論陸行の險を捨てて水行の易きを取るが適当なれども元来坊等は徒歩旅行を主眼とし行く土地の風俗人情物産兵事等を観察する目的なれば村人等が懇切に旅行を勧むるに拘はらず山路を徒行することにし決し就眠せり」(同上書、106頁)。

2月12日朝、ラオピー山麓に劣らないカサツク(Kasak)山の南麓をルアンパバーンに向けて出発。

「ラオピー山より北方老嫗の地方に力一なる一種の人類あり骨格に於ては別に老嫗人に異なるなしと雖も言語は全く相通せず女子は腰巻の上部に黒色のコートを着し長き頭髪を

不規則なる束髪として細「かんざし」様のものを挿み男は年中裸体にて一帯の褌(ふんどし)其陰部を掩ふのみ其女子と同じき長き頭髪は小櫛に依て頭上に束ねられ男女共に裸足なり身体強健山谷を行く平地の如く其軽捷なる猿猴の姿を呈するに異ならず文字宗教共に無く只た奇体なる土偶を作りて祭れり好んで山中の高処に住し糲米(もちごめ)と獸肉とを常食とす別に職業なし獸獵又は伐木を以て日を送る性質は純良にして能く事に堪へ坊等時々之を人夫に雇ひしが手真似の談話も能く解し甚だ愛らしき人類なり」(同上書、107頁)。

出発はしたものの、その日から山本銀介が発熱して山中野宿。13日「其真率淳朴なる中々文明人の及ぶ処」でない3人の旅人に助けられ、その中の一人は山本を背負って近くの村まで運んでくれた。17日に出発できるようになるまで、同村の世話になった。

#### ルアンパバーン滞在

原地帯を走り、ウィエンチャンに到着したのは18時半であった。この車でのルアンパバーン往復行では、運転手は行きも帰りも、出発前に食パンを何袋か買い込んだ。これは、山中で検問するラオス兵へのお土産であった。何もお土産がないと、検問のラオス兵が山賊に豹変するので、アプナイイそうだ。

さて、岩本・山本の旅に「戻ると、1897年2月19日「午後四時ルアンパバーン府に入る先づ仏蘭西總督府を訪ひ総督バツクル知事グランニ氏に面会し其厚意によりて当府第一の寺院ワットマイ「Wat Mai」に案内せらるる住職は大僧正クータン殿下にて厚く坊等を遇せられ一室と二名の沙弥を附せらるる坊等は四五日滞在することに決す」(同上書、111頁)。

岩本の説明では、ルアンパバーン(ラオ語発音では、ルアンパバーン)という地名の縁起は、「ルアンパバーンとは仏の国と云ふ義にてルアンは国パバーン

1897年2月19日にウィエンチャンから直線距離では220キロ足らずのルアンパバーンに到着した。1月25日にウィエンチャンを発って、26日目である。途中山本の発熱で空費した4日を差し引いても3週間を要したことになる。

岩本に遅れること1世紀、筆者が初めてルアンパバーンを訪問したのは、1994年の正月。ウィエンチャンからプロペラ機で35分の飛行だった。この時のラオス旅行は、ウィエンチャンの旅行会社と事前に契約して初めてラオス入国ビザの発給を得ることができ、旅行会社が用意するガイド付きでなければ国内旅行はできないという、面倒かつ高つくものであった。(この頃、雲南のシブソンパン

ン」は仏像の名なり伝へ云ふ此国の開闢と同時代より此地に二体の黄金仏あり一をプラケア他をアラバンと云ふ共に体中に釈尊の遺骨五個を納む而してプラケア「Phra Kea」は坐像にしてアラバン「Phra Ban」は立像なり

今より数十年前故ありて之を暹羅盤谷府ワットサンブルームの寺院に移す爾來府内騒事多く易者占て云ふアラバン仏の為す処なりと國王大に恐れ直に之を老嫗に返せしが其途次渡舟顛覆して仏体河中に沈み搜索効を奏せざりしが後三年ウエンチャン市の河浜に出現せしを土人は奉迎して当府に致し今や坊等が寄寓せるワットマイ寺に安置すと」(同上書、113-114頁)。

「ワットサンブルーム」はタイ語で書けば「Wat Suan」(ワット・サムブルーム)、その正式名称はワット・チャカワット(Wat Chakawatt)である。岩本の三國探検実記に、パンコクの固有名詞が登場する

ナーを旅したが、同様の手続が必要であった。」

ルアンパバーンは観光開発が始まったばかりの時期で、メコン河沿いのメインストリートを朝方歩いて、殆どの家は無人のよう戸口は固く閉ざされていた。道に面した戸口が開いている家は数軒もなかった。やっとカーン川がメコンに注ぐ付け根近くまで来て、戸外で七輪で炊飯している場面に会った。

1994年初のルアンパバーン市中は、正に人煙まれな廃墟の趣があった。町の中にある観光客相手の店は、織物を売る2-3軒と銀細工店1軒に過ぎなかった。

王宮近くから328段の階段を上り、ルアンパバーンを一望できるプーシー(Phou Si)の丘の頂には、未だパテトラオ軍が設置した機関銃が残っていた。

あった。この老人は、革命でルアンパバーンの上品で礼儀正しい古都の住民は国外に逃げ出し、代わって田舎から新住民が入ってきたため、かつての優雅さが失われたと嘆いた。また、最後の國王であるサワンワタナー王は、王妃及び皇太子など二人の息子とともに、革命政権に北方に連行されたまま消息はない、皇太子妃はルアンパバーンで生活している、とのことであつた。

ラオスの窮屈な外国人旅行規制は間もなく廃止された。2000年3月末の再度のルアンパバーン訪問に際しては筆者は、ウィエンチャンで車を借り上げ、国道13号線を8時間走ってルアンパバーンに到着した。通過した山地では、焼畑耕作準備のため山焼きの最中で、灰が空から雪のように降り注いで来た。前回の訪問からわずか6年だが、観光都市化したルアンパバーンの変貌に仰天した。帰りは、11時にルアンパバーンを出て、山越えのち14時半には三叉路を過ぎ、16時にはワンウィアンの洞窟に到着。同地から平





1897年2月22日に岩本等が拝謁した  
サカリン王

「バノムワン」寺と同じく釈尊の足形石あり寺は府の中央小丘の上にあつて府の内外を眺望すべし」(同上書、117頁)。  
上記「府の中央小丘」はプーシー(Phu Si)のことであり、その中腹にプラバット寺(Wat Phra Pratt)を指すものか)が建てられているのである。筆者は、この寺に参拝したことはないが、ラオスの旅行案内書(Lonely Planet, Laos)によればプーシーの丘の北東側面に「仏足石のある場所に元々1395年に建設されたワット・プラバット・バートの遺蹟」があると書かれているので、廃寺だと思われる。いずれにしてもワット・プラバット・バートは、丘の横腹にあつて山頂にあるのでは

ないので、眺望には不適な筈である。岩本の記述では、プラバット寺は山頂にあることになるが、これはプラタートプーシー(Wat Phra Pratt)と名称を混同したものである。岩本は丘の斜面で仏足石を見学した後、更に上つて、山頂にある仏塔プラタートプーシーから市街を眺望したものであると思われる。  
2月24日にルアンパバーンを後にする日、「名残惜しくもワットマイを立ち出でしは午前九時頃なりし鐘(やが)て府の東端を流るるカン「カイン」河を渡り東北に進む本道は目下普通道中にて坦途の如く又た一条の電線道に添て馳す行くく后方を顧ればプラバット寺の塔高く雲霧に聳へて坊等に別れを惜むもの如く坊等亦た五日間の滞留に幾多の知人を得たる事故(ことゆへ)何となく恋々の情なき能はず振返り振返り歩む」(同上書、126頁)と書いている。岩本の言うプラバット寺を、遠くから仰ぎ見たのであるから、これも山頂の仏塔プラタートプーシー以外には考えられない。  
2月22日朝、フランス総督府を通じて「旧王カサリンタ殿下」への謁見希望を出したところ、

早速同日15時に僧正の札を以て謁見が許された。岩本は旧王と書いてあるが、ラオスはフランスの保護国になったのであるが、王制は存続していたので、拝謁したのは現役の国王サカリン王(King Sakarin or Zakarine Phra Ketsarong, 1840-1904、在位1895-1904)であつた。岩本は王名をサカリンではなくカサリンタと誤記しているが、印刷時の誤植なのか岩本の書き違いなのかは判らない。  
「宮殿はワットマイ寺を距(さ)る四丁「400メートル」余、許に在りて門前には二人の衛兵三色旗下に立て坊等に肩統の札を為し門を入り左折宮殿の入口に至りし時使者先づ入て二坊の参殿を通じ侍臣出でて坊等を応接間めきたる一室に誘ふ待つこと凡十分侍臣再び来りて客殿に導けり正面一段高き処の南北に各坐席を設け坊等は北面して南方の坐に着き殿下は南面して北方の坐に着くべく準備され南方には二個の坐蒲団を敷き前に黄金製の喫煙具を置けり侍臣の指図に依り其席に着くと間もなく殿下も出でて着せらる殿下は年齒五十七容貌温和鼻下に疎髭を蓄へ長身豊体金釧「金ボタン」燦爛たる

白の上衣に老縞縞の袴を着し白の袴を穿たれたり後には三名の侍臣麗居「すくまる」威儀堂々明かに数年前迄此一國の主權者たりし名残を留められぬ三無先づ口を開き通譯語を以て  
大日本帝國の僧岩本鉄脚山本三無仏教取調として当府に來り此に殿下の拜謁を賜ふ二僧が深く光榮とする処なり  
と述べしに殿下亦通譯語を以て  
日本は東洋唯一の文明國にして其人民は純良敏捷又深く仏教を信ずるは兼て聞及ぶ処にして実に欽慕の情に堪えざりき今日計らず貴僧等に見(まみ)ゆるを得しは余が深く欣喜する処なり  
と答られ夫れより殿下は日本の風俗人情より教育宗教軍事等の事を尋ねられ三無一々奉答して相互の問答凡そ一時間余」(同上書、119-120頁)。  
翌2月23日、岩本等はフランス総督府にグラン知事を訪ね、写真を撮影され、またバックル総督からは、沿道各地の村役人等に宛てた諭告書を受けとつた。  
2月24日、岩本等はルアンパバーン州、フアパン州を通過してトンキンに向う旅に出発した。

ことは稀だが、彼がこの寺名を記しているのは、この寺は彼にとつて馴染み深いものがあつたからであらう。1892年の初来タイ以来、1894年にプーラー・スラサックモン・トリのサーラー・デーデン邸に引越すまで、岩本はトンブリー側にあるチャオプラヤー・パーサコーラウオンの邸宅に居候したことは何度か書いた。河に面したトンブリーの居候先から、バンコク側に小舟で河を渡る時、バンコク側の上陸地は、このワット・サムブルームであつたのだ。岩本の言うプラケアは、バンコク王宮寺に安置されている、前出のエメラルド仏である。  
さて、岩本の上記プラバンの説明は、簡単に過ぎるうえ、いくつかの話が混合されているようである。タイ語ウィキペディアの説明や「ワット・チャカワット史」(これらの信頼度は、筆者の知識不足のため保証の限りではない)に依り、プラバンとルアンプラバンの由来の大体のところを紹介すると、  
プラバンは西暦13世紀半ば、クメールで製作された後期バ

イオン様式の114センチほどの仏像である。西暦1359年頃ラーンサーン王国のフア・グム王が、仏教弘布の目的のため、妻の親族であるクメール王から譲り受け、チェントーン(ルアンパバーンの古名)まで運ぼうとした。ところがウィエンチャン近くまで運んで来たが、それ以上は動かすことができなかった。ウィエンカム国(現ウィエンチャン地域)に、一先ず安置することにした。1512年頃になって、やつとチェントーンまで運ぶことができた。チェントーンはルアンプラバンと改名された。1779年タクシン王の軍勢はラオスに遠征し、当時ウィエンチャンに移されていたエメラルド仏とプラバン仏をトンブリーに持ち帰った。  
チャクリー王朝のラーマ1世は、即位後1782年に、プラバンのみウィエンチャンに返還した。1828年アヌ王の叛乱鎮圧に向いたチャオプラヤー・ボディンデーチャー大將は、ウィエンチャンから再びプラバンを持ち帰り、自らが建立

したワット・サムブルームに安置した。ラーマ4世の即位後、何年も早魃が続いた。民衆は、ソリの合わないエメラルド仏とプラバン仏の両方がバンコクに並存していることが原因であると怨嗟の声を上げた。1866年に、4世王は当時バンコク王朝の風國であつたルアンプラバンにプラバンを移させた。  
現在プラバン仏は、ルアンパバーンの旧王宮(現博物館)の近くに建設されたお堂(Hongnue)に安置されているようであるが、1994年初に筆者が同地を訪れた時は、旧王宮本館の一室に鉄格子に囲まれて置かれていた。

さて、岩本等はルアンパバーン到着の翌日2月20日に、フランス総督府にバックル総督を訪ねて歓談した。  
2月21日には「托鉢後府内を巡視せんとせしに会(たま)た」長老鳩皇族チャウビン氏來訪せらる氏は旧王カサリンタ殿下の近親にして曾て三無「山本銀介」と共に盤谷の貴族学校にあり又たハノイ府の仏蘭西学校に学びて通仏蘭西語を語る依て相伴ふて寓寺「ワット・マイ」を出で処々を散歩したプラバット寺に至る此寺にも通譯ナムアン「正しくは



連載 ⑧  
バンコクの  
日本人

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (66)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

## 三国探検出発直前の 遺書の自伝

岩本千綱、山本銀介の三国探検も、ルアンパバーンを出発し、フアパン県(州)に向かうところまで行き着き、先が見えてきた。

タイ領の東北タイでは、虎や匪賊などへの恐怖と同時にタイ役人の監視にも恐れをなし、緊張の連続であった。一方、仏領ラオス領に入ると、意外にもフランス人官吏は協力的で、様々な便宜供与をしてくれた。お蔭でラオスの旅の大半は、道案内や運搬人夫が同行する、比較的安楽なものとなった。死を覚悟した出発直前の悲壮感は次第に薄れていったものと思われる。

筆者は昨年11月に、幸運にも岩本千綱の孫で、千綱の遺文を一括所蔵されている奥・絵美氏にお会いすることができ、千綱

の自筆文書を拝見させて頂くことができた。

その中の最も古い文書の一つは、千綱が三国探検にバンコクを出発直前、1987年11月29日から出発日の12月20日までの間に認め、バンコクの友人に託すか、日本に郵送したと思われる「限水先生の略伝」と題した遺書の自伝である。

この略伝を一読すると、従来の岩本千綱について書かれたものにはない、彼の生い立ちからタイ事業に至る、様々な新事実が記されている。しかも、死を覚悟しているためか、隠したり削ぐことなく、正直、赤裸々に事実が書かれているようである。

本号では「限水先生の略伝」の全文を先ず紹介し、続いて略伝の注目点について解説を加えたい。

## 「限水先生の略伝」

先生姓は岩本名は千綱限水又は南狂と号す安政四年九月二十二日「西暦1857年11月8日」土佐国土佐郡久万村に生る同姓御納氏の長男なり先生歳十二藩立教道館に入り剣術を馬結某に砲術を清淵某に文学を松村某に学ぶ 明治六年藩主山内氏私立の秀俊を遊学せしむ先生故植木「植木枝盛」代議士等と撰に当り上京す此歳六月先生父母の喪に逢(ひ)帰郷十月再び上京す 十七年陸軍幼年学校に入り翌年副幹事となる先生衆生徒中最年少にして此職を命ぜらる蓋し異数なり 十年卒業陸軍士官学校に入り十二年優等を以て士官学校を卒業し歩兵少尉に任ぜらる 先生幼年士官学校に在り断然「さんせん」ひととき目立ち優れてゐる「頭角を現し」直方正を以て称せられ常に同輩の推尊するあたり 十三年二月熊本鎮台に奉職す之を先生が仕官の始

めとなす時に歳二十二 十五年命を奉じて熊本鹿兒島二県を巡視す

此行人跡殆んど未到と称する処謂平氏の落武者の住家なりしと云ふ五家山中に入り有名な玖球「玖球」川の水源を探り流に沿て肥后「肥後」国八代に下る 同年自費を抛「なげう」て更に九州一圓の巡遊を企て再び五家山に入り転じて耳津「美々津」川の水源に出で深山幽谷を跋涉し備「つぶさ」に艱難を嘗め甚敷は一七(ママ)日間米糲を食はず木実を以て糲に餓を凌ぎしことあり終に耳津「美々津」川の沿岸を下り日向の国耳津に出で大隅薩摩肥前筑前筑後豊前を巡遊し五十余日を費し熊本に帰れり当時先生を称して冒險の旅行者と曰ふものあり 十六年二月東京鎮台に転じ幾干「許」なく陸軍士官学校附となる十七年先生上書左「次」の四事を云ふ

第一 士官学校生徒に帯剣せしむること

第二 生徒の被服を難妙地となすこと

と

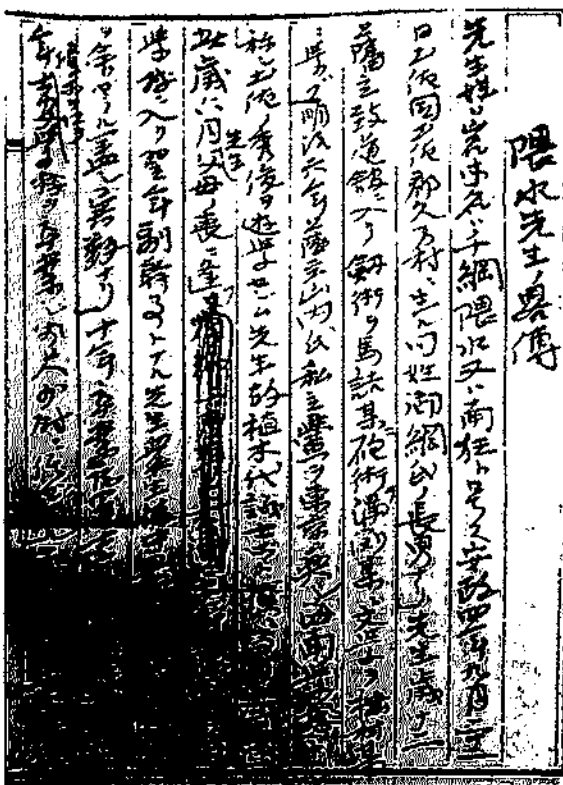
第三 付属将校を精撰すること

第四 学校長一たび欧米を巡視すること

議論適切懇く採用せらる此歳秋校長陸軍中将三浦梧棲氏歐洲に遊ぶ 始め先生頗る中将の知遇を蒙り献替「けんたい」、上司を補佐することする処々多く聞かれ却て某上官と隙ありしを以て中将の歐洲行に会ひ先生孤立す 十八年四月突然命あり先生を宇都宮に転職せしむ 蓋し某上官の爲す処にして実は貶謫「へんた

く、官位を下げ遠方に流す」の如し先生頗る不平に堪へず先生曾て米國史を読み彼の仏將ラファエツトが孤剣米國に渡り独立戦争を援け或は伊將カリバルチーが仏國の難に投ぜし等の快義を感ず然るに当時適々清仏齟齬「そご」(「きんげき、不和」)の際なりしを以て鬱屈せる不平は終に先生を馳て渡海の念を生ぜしむ於是乎先生奮然決を揮て起ち潜行中仙道より長崎に出で將に支那沿岸に渡らんとす然れ共事中途にして発見し物色急なるを聞き熊谷駅に潜伏友人某の爲めに

## 限水先生手記



岩本千綱手記「限水先生の略伝」(バンコクにて、1896年末)

捜出され其苦諫により東京に帰り実を述べ官に自首し陸軍の獄に投ぜらるること四旬餘に及ぶ蓋し意外の僥倖なり 此歳八月仙台鎮台に赴任し翌十八年越后「越後」新発田に転ず先生身軍籍に在りと雖も密に期する処あり其任地にあるや毎「つね」に好んで各種の人物と交り毫も阻隔する処なし此れ偶々奇禍を買ふの原因となれり 二十年十二月中央政府は保安条例を発し在京志士を逐ふ越後の志士八木原繁趾富田精策氏等亦た遂中にあり先生曾て同氏等と相知るを以て帰郷の途次先生の家を訪ふ偵吏二氏に尾するもの之を官に密訴す官之を聞て大に驚き頗る警戒を加ふ聯隊長長谷川中佐亦た先生の行為を非とし懇諭謝表「上司に対する感謝文」を出さしめんとす先生堅く執て聞かず曰く政事犯者は常事犯者と異なり之と会する何かあらんと并難抗論先生其煩に堪へずして曰く官に在ればこそケ様「固様」の面倒もあり重なる掛冠「かいかん、辭職」野に下るに加「し」かずと終に官職位階奉還願を呈す省せられ二十一年四月却て停職の命あり蓋し抗命の罪によるなり 先生の職にあるや頗る部下を撫愛す部下に死せんと希ふも

の多し其停職の命下るや部下奮然として起ち大に聯隊長の処分を非とし或は之を刺んとするものあるに到る爾後先生に投書するもの多く悉く追慕の意を表す其志を得たる大概如此 当此時東京に於ては二個の水産会社興る一を帝國水産会社と名け河野某の企る処他を日本水産会社と稱し岩谷某等の画する処にして宮内某は貴顯數人の添書を持ち河野某の爲め越后に來り株金募集を爲す当時越后は自由党の巢窟なりし故此官辺に縁故深き水産会社に資金を投することとを嫌ひ地方有力者は却て独立の事業を爲んと欲し後藤伯の助力を借んと希ふ蓋し伯は大同團結を唱へて勢力頗る隆なりしを以てなり 先生北越有志者の依頼により伯に計らんと六月同盟同愛「愛」(「妻子」)を携へ上京 尔來屢々后藤「後藤」伯を訪ひ終に鉾山会社設立を議決し同志某を越后「越後」に先発せしめしも某事を誤り一敗地に塗「まみれ」る 此歳十二月先生上野鐵三氏等が計画ある通羅事業の爲め客將となり之を援くるを約し終に陸軍中尉を辭して野に下る時に歳三十二なりし 先生明治六年父母の膝下を辭し始めて東京に出で翌年陸軍幼年学校に入り十二年

2017年 4月3日  
フルンター  
499



士官学校を卒業して陸軍少尉となる迄前後七ヶ年間は無邪気なる好学生にして之を先生が生涯の第一期となす十二年より二十一年迄前後十年間は淡泊洒落なる軍人氣質に聊か野心を加味したる一種特別の人物たりし此れを第一期となすや戎衣を脱し軍刀を棄て一躍して紛々たる俗界に入る之を乃ち第三期にして先生が逆境に立つの門出となす 明治二十二年上野氏等と外人との間に商業上の紛議生じ先生客將たりと雖其關係極密なりし為め忽ち累禍を得一時獄に下りしことあり此の争論は三ヶ年を経始めて和解せり然るに上野氏は病死し他の彼れと事を供にせしものは事体の困難を見るや去て顧みざるに到る先生奮然茲に始めて黒幕を切落し對通事業の舞台に現れ幾多の繁累を一身に負担し一方には上野氏失敗の善后策を講じ他方には事業進行の計を画し左防右擊大困難の大渦中に立つこと三ヶ年此間の悲境は紙筆に尽し難し而て此悲境に沈みながら通羅事業の計画を続けしは勝村老夫人の助力与て大に功あり

明治二十五年九月(マ) 先生初め

て通羅に航す昨年十二月先生千々和某氏等と某秘事を企て東西相応じて事を舉んとし先生は坂地にあり事成るに垂んとして敗る 警吏先生に着目すること頻りなり先生は是乎此嫌疑を避んぬめ坂地北郭に遊ぶ偶々妓某と押る某は素と東京名家の女一家の沈淪「零落」より終に身を煙花に移すもの快気あり先生の不幸を憐み誠心之に奉侍す尔来今日に到る迄五ヶ年間先生が赤貧を以て屢々通羅に航し或は内地に奔走を為す等妓が三弦より得る処の資与て頗る力あり妓姓は勝田蓋し此の事蹟は殆んど小説に類せしことあるも今略す 先生の初めて通羅に航するや貧困骨に徹するときにして其下等船客となりて新嘉坡に着するや機中機に四円を携へ新嘉坡に止ること三十有余日進んで通羅に入らんとするに一銭のあるなし止を得ず衣を典「買入」し

六円を得其盤谷に着せしときは貧なく服なく垢衣蓬髮底残す處は実に五十銭銀貨一枚なりし此の一斑を見ても如何に當時困難の甚しかりしかを知るに足る 先生已に盤谷に入るや同国文部大臣の邸に到る當時在留日本人の重なるものは大山崎崎伊藤西山本佐々木田山の七氏に過ぎず先生頗る此れ等日本人の優待を受け且つ大臣の扶助を得て同邸に寓す 二十六年二月初めて帰朝大に對通事業の怨緒(マ)「怨緒、こつしよ、なおざり」に附す可からざるを説く當時日本に於ては未だ通羅の何たるを弁ぜざりしに今や先生が外交商業

殖民等に関して對通策の急務を説くに會ひ其説頗る新奇にして東洋の大勢に注目するものは素より其他苟も海外志操あるもの争て之を賛し名聲一時朝野に轟「かまびす」し偶々先生事を以て神戸に出張中七月三十一日飛報あり仏國軍艦三艘通羅の都府盤谷に進入すと先是通仏關係「かいきん」兩國の兵士東方瀕公河畔に争闘するの間忽然として仏艦長砲直に國都を指し一戦してバクナン河口の砲臺を陥し終に盤谷に進入して城下の盟を為さしめんとするものなり先生報を得慨然として起ち朋友に計らず家児に告げず翌八月一日孤劍單身神戸港を発し此の國難に赴き途石橋氏と逢ひ相携て盤谷に入りしは其月十八日にして戦ひ已に罷んで媾和の議將に成んとす先生奮慨策を当路の大臣等に建するも用ひられず独り農商務大臣中將スリサクヲモントリ伯は大に先生の快義を喜び厚く謝意を述べ此れ後先生が伯の知遇を蒙る原因となす



一半は先生之を并じ一半は彼れ等自ら并せしむ先生は此の金を浪費するの恐あるより友人某に托し期に到る迄保管せしむ然るに出発前一日某突然先生の寓に來り死色叩頭謝して曰く僕貴下の托せられし金六百円を費消し尽したり死罪「恐れ入って」謝する処なり何卒寛大に処せられたし云々事焦眉に迫る出発の準備已に成り香港迄の船賃も亦た悉く払ひたる后にして之を如何ともする能はず先生於是乎進退谷「きはま」り終に意を決して香港に到り暫て約する某俠客に對て金を借り若し譲協「かな」はずば一死以て最後の策を取んと乃ち故に無異を装ひ十九日神戸港を解纜す嗚呼當時先生の心情果して如何二十八年一月一日は先生が生涯忘る可からざる記念日なり去年二十八日香港に着するや農夫三十余人を引ひ機中機に三五百十銭の残すのみなり先生某俠客に就て金を借んとす某曰く貴下果して死を決するも通羅業を為すと云ふ決心ありや疑し希くは其

証を示せ僕等其費を并せんと先生佛然「むかつとして」曰く諸君其証を示すべしと寓に獨り独り謂「おもへ」らく証書証言何ぞ用ひん一死以て其誠を現すべしと意已に決する判那郵書あり通羅より來る曰く農商務大臣今日本へ邊遊する為め昨新嘉坡に向へりと先生書を得て意少く惑ふ指を屈すれば新嘉坡より香港に來る船は來年一月一日なれば幸に農相にして此船にあれば就て金を借り一時の急を救はん事若し成ずんば死するも遅きことなしと乃ち其日を待つ然るに此日前第九時農相船着港す先生於是乎喜び極て殆んど泣涕す農相情を聞き快く八百金を出して先生に与へ終に三十余名の農夫をして悉く盤谷に到らしむ當時先生の境遇実に想像外にありたり

先生素より農商務大臣の知遇を蒙ること深し大臣為に資を授け先生之を主宰して通羅殖民会社なるものを設立し盛に日本農夫を通羅に移さんとす此歲四月先生日本に歸り計画將に熟し六十余名の農夫と巨多の貨物を携へ八月十四日神戸港を發せんとす前四日先生突然熱病に罹り頗る重症に陥り医師亦た生命の危きを云ふ幸に病癒ると雖も九十余日の間殆んど人事不通病褥にありしを以て此際農議「かんけつ」の徒種々愚策を画し事業頗る困難を極め先生漸く機を離るるも計画せしことは支離滅裂殆んど着手の法に迷ひ独り之れのみならず通羅に於ては先生の帰期遅き為め統率者と農夫との間乖離を來し或は去て他に行くものあり於是乎内憂外

患交も到り折角の計画も一敗水泡に期「漏」す先生遂も屈せず益々恢復に勉む先是我日本政府は通羅在留邦人の保護を仏國に依託するや通人頗る之を恨む蓋し通仏の間は犬狸も營ざる仇敵なるを以てなり當時先生病を大坂に養ふ報を得て翌起二十九年一月東京に來り先づ仏蘭西和蘭兩國の公使を訪ひ外務当局者に迫り代議士諸氏に説き終に日本政府をして通商条約の照会を通羅に為し衆議院に於ける山下鈴木栗原佐々木柳田の諸代議士より通羅國へ帝國領事館設置の建議をなすに到る先生の意蓋し此の機に乗じ大に對通の策を講ぜんとするを以てなり衆議院は殆んど全会一致を以て此建議を可決し四月先生三たび通羅に航して此実行を斡旋し頗る要領を得七月帰朝す 先生謂「おもへ」らく今や對通の機運殆んど熟し國家已に条約に着手す此時に於て民間有力者を奨励して貿易殖民の業を起すべしと乃ち一方には日通協會なる社交的團體「団体」を作り他方には兩國間の貿易團體「団体」を作らんと欲し奔走遊説の結果終に有志相結んで資本金五十万円を以て日通貿易株式會社を發起するに到る十月先生會社代表人今井顯馬場二

氏と四度暹羅に入る然るに先生の意見馬場氏と合はず蓋し先生は東洋大勢上より暹羅扶植の目的を割り出したる商業にして馬場氏は此の国民孤弱を寄貨とし自家に利益を収め暹羅の存亡は眼中に置かざるにあり此れ衝突の重なる原因なり先生は是乎断然決を擲て会社との関係を絶つ時に二十九年十一月二十九日なり

可憐先生有為の資を以て非常の志を抱き曩に殖民会社を興して一敗地に塗「まみ」れ今又商事会社を企て中道にして去る回顧茲に九星霜先生常に逆境に立ち専ら力を対暹策に尽し頻に企て屢々敗る加「し」かも諷諷諷諷「さんぶひき」事実でないことを言い立てそしり咎める」交も到り先生の心事を知るものをして転た其不遇を悲ましむ然れ共先生平然として感色「つれい悲しむ」なく毎「つね」に曰く余が半世「生」の事業は悉く失敗に終らん余は失敗の歴史を作り後人に資せん余は地球上一人の知己を得れば可なり否得ざる亦た足れりと其難難に処し悠然迫らざる如此其抱負尋常人の知る処にあらず

先生曰に会社と関係を絶つ会社の景況曰々に非なり先生之に向て友誼上の勧告を為す數回聞かず一日先生突るうか。

新発田で在勤時に停職処分を受け陸軍を辞職することになった理由について、既存刊行物においては、千綱が保安条例に触れて東京から追放された自由民権運動家と付き合ったためだと書くのみで、具体的に誰と付き合ったのかは明記していない。そのため、岩本千綱についての従来の解説者たちは、想像逞しく著名民権運動家の名を挙げて、恰も事実かの如く書いていく。しかし、筆者はかつて、それらは事実ではなく、千綱停職のきっかけとなった人は新潟に帰省した地方民権運動家であるはずだと、富田精策の名を挙げた。略伝には千綱が付き合ったのは「越後の志士八木原繁趾富田精策」であることが明記されており、手前味噌ながらこの点でも筆者の推測は正しかったことになる。

話は前後するが、千綱は熊本のうち、東京の士官学校に転勤し、校長陸軍中将三浦梧楼の知遇を得て出世コースに乗ったかに見えた。しかし、三浦校長の

然髪を剃り「せん、ほおひげ」を斬り僧となる友人驚て其故を問ふ受て曰く此れより北方老拙地方を漫遊すと飄然として盤谷を去る身に寸鉄を帯ずるに一銭なし真に「一衣」鉢なり時に二十九年十二月「空白」日先生歳四十

#### 「限水先生の略伝」の見所

上に全文引用した「限水先生の略伝」(以下、略伝)の原文は、漢字カタカナ表記であるが、筆者が漢字ひらがな表記に直した。これ以外には一切、手を加えておらず、オリジナルそのものである。なお、略伝中の「」内は筆者の注記である。限水とは南狂とともに、千綱が鉄脚という号を使う前に使用した号で

転出後、先輩のパワハラはじめに遭い左遷されてしまった。この事件を境にして、千綱の勤務態度は一変したようである。彼が立身出世への粘りを欠いた一因は、16歳で両親を失っており、父母郷党からの期待やプレッシャーが少なかつたためであるうか。或は軍人よりもビジネスへの関心が強かつたためであるうか。

千綱が記している、ビジネスとの最初の関わりは、停職後新潟の投資家と東京の後藤象二郎との間をつなぎ、鉾山会社が設立されるところまでこぎ着けたが、不成功に終わった事例である。この幹旋のため新潟と東京の間を往復中、東京で上野鑑三が外人と企てたタイビジネスの客將軍ともなり、1888年12月には妻子を連れて東京に引き上げた。彼は軍人として復職する道を断った。

上野鑑三のタイビジネスについては、残念ながら資料が見つかからないが、兎に角、上野の病死後、千綱はそのタイ事業の善後策を担当した。即ち、1888

ある。略伝には、パンコクで馬場新八と袂を分かつた日が1896年11月29日と明記され、三國探検に発つ日は、「十二月」と空欄になっている。これから同年11月29日以降、出発した12月20日までの間に書かれたものであることが判る。

略伝からは次のような新事実が判明する。

まず、岩本の生年月日についてである。岩本自身は安政四年九月二十二日と記している。筆者はかつて千綱の旅券下付の記録を集計した際、岩本が旅券申請書類に書き込んだ生年月日は幾通りかあることを示し、最終的には安政五年五月十日に収束したことを指摘した。

筆者が、千綱の孫の奥蔵氏に見せて頂いた千綱の戸籍では、生年月日は安政五年五月十日である。旅券申請に対する官庁の審査が次第に厳格になり戸籍記載事項と一致させることが求められるようになったために、この日に収斂したものである。岩本の本当の誕生日は、1857年11月8日であり、戸籍上の

8年12月から92年の初渡タイまで、タイに関係した仕事をしたのである。これで、千綱とタイとの関わりが発端、また、初渡タイまでの間、彼が何をしていたのかが明らかにになった。

92年9月(タイに到着の月?)にタイに初渡航し、93年2月に日本に帰った。暹羅のことを知らなかつた日本人に、外交商業殖民などの暹羅策を説き、その新奇さで注目を集めた。

千綱の92年から97年にかけてのタイ渡航は、三等客であつても相当の出費を要したのは言うまでもないが、それを用立てたのは、官の機密費などではなく、大阪の遊郭で懇ろになつた女性

誕生日より8ヶ月近く早いことになる。

千綱は、植木枝盛と共に土佐藩旧藩主が東京に開設した士官学校の予備校、海南学校に入學したことを明記している。筆者はかつて、千綱が植木枝盛ら計20名中の一人として同校一期生として入學したことを、他の資料に依り推測したが、この推測は正しかったことになる。

千綱は幼年学校時代、副幹事に任命されており、幼年学校・士官学校時代を通して、成績優秀、極めて真面目な学生であつた。筆者はかつて千綱の士官学校卒業時の成績を示し、千綱が、例外的に一回も罰を受けていないことを訝つたが、彼は本当に真面目な学生であつたことが判明した。

士官学校を出て、熊本鎮台時代、千綱は九州の熊本、官崎地方の山岳に入つて探検を試み、早くも「冒険的旅行者」の名を得ている。千綱は三國探検に出発するに当たつて、にわか冒険家ではなく、冒険の経験者であることを主張したかつたのであ

(勝田)の細腕であつた。

94年に勝村よねと離婚。この年、最初の移民事業を手掛けた。移民者から集めた資金を早々と在日中に失い、殆ど無銭のまま切符購入済みの香港まで移民者を連れて行つたが、同地での金の工面は思うに任せず95年の元旦には自殺寸前にまで追い込まれた。この窮地を救つたのは、香港に立ち寄つたスラサックモンツリーであつた。

この外、略伝には千綱が印刷物で行つたような渡タイ回数の水増しはない。



# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱 (67)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

PRINT-79  
2019.5.13  
2017.5

岩本・山本一行が、ルアンパバーンを発つてハノイに向かう様子を述べる前に、数回に亘って、岩本千綱が三國探検実記に記している、タイの農業・農民について検討してみたい。岩本は、次のように書いている。

農業は到る処概ね同一にしてタツコン「タツクワン」以南は未墾野驛の平原相運なりタツコン以北コラット「コーラット」府迄は深山にあらざれば大概ね森林なり其以北は森林原野及び沼沢犬牙錯雑地少しと雖も概して地勢は平坦なりとす鉄脚「岩本千綱」が目撃せし処に拠れば四百余哩中森林は三四分にして他は皆な茫々たる沃野なり治水の法宜しきを得ば一年三度の收穫難きにあらざるも政府は之を度外視し居民亦其法を講ぜず目下只一度の收穫を為すに過ぎず耕田は水牛を用ひ植付は雨期の初めに於てす而して一旦植付を終れば之に肥料を施すの要なく又草取を為すの勞を要せず然も尚ほ一反歩の收穫五俵より八俵に上る租税は一ライ(一ライは我國の四百九

十二坪弱なり)に付二十錢より二十四錢迄なり(コラット以北白米一石の価銀谷に於て八円内外の時二円四十錢より三円位なり)又最も牛馬の牧場に適すべしと信ず只だ雨期河水溢れて平地を浸し深き処は一丈余浅き処も二三尺に到るを常とす(コラット附近并に其以北は浸水せざる処あり)想ふに今後日本人にして當國に殖民若くは牧畜事業を為さんと欲するものは須らくコラット府以北を選ばざるべし此辺にては年八十石の收穫ある良田を十二円内外にて購入することを得べし此言殆ど虚妄に似たるものありと雖も其由來する處を究れば最も怪しむべき處なし夫は後項地方制度の部に於て叙述すべし(三國探検実記、1897年、66-67頁)。

1894-1895年当時のタイ米作についての日本人の報告が、タイに於ける平均収量に比して過大で、岩本千綱が1895年初めにバンコクに率いてきた日本人農業移民に頼った期待を持たせた可能性があること

を、筆者は本誌2013年9月号などで指摘したことがある。上記の岩本のタイ米作と収量についての、「一旦植付を終れば之に肥料を施すの要なく又草取を為すの勞を要せず然も尚ほ一反歩の收穫五俵より八俵に上る」という記述や土地価額は、彼の言う五俵がモミなのか玄米なのかで話は大部違ってくるが、樂觀的に過ぎないだろう。

また、岩本は、地価の低廉な東北タイに日本人が入植するよう勧めているが、1898年6月24日の日タイの修好通商航海条約批准により、日本人の土地所有はバンコク周辺の地に限定されたので、日本人が東北タイで農地を所有することは不可能になった。ところが、後に紹介する三島敏行の記述の中にあるように、無条約の清国人は、タイ人と同一待遇であり、東北タイでも土地を購入することができた。日本がタイと条約を締

結する以前ならば、日本人は清国人と同様、無条約国アジア人として、タイ人並に遇されたのだが。

タイ政府が雇聘した  
日本人農業技術者

岩本がコーラットを通過したのは、1897年の正月である。1900年12月21日には鉄道がコーラットまで開通し、1902年になると、即ち岩本通過後5年余になると多数の日本人農業技術者が、バンコクやコーラットに滞在するようになった。タイ政府が1903年に新設することになる蚕業局(sericulture bureau)蚕糸局なども設けられている(雇聘された外山龜太郎(1867-1918)、1892年東京帝国大学農科大学学士、在タイ期間1902年2月から3年間)、横田兵之助(滋賀県虎姫村生、1868-19

43、在タイ期間1902年9月1-1912年7月)、三島敏行(としつら、熊本県菊池郡原水村生、1876-1925、在タイ期間1902年9月から2年間)等である。

岩本は1890年に東京帝国大学農科大学乙科を卒業し、三島は後輩で1902年に同校を卒業した。外山も、東京帝国大学農科大学卒だが、本科(甲科)卒で農学士号をもっていた。一方、横田と三島が卒業した乙科(実科)は、旧制高校、高等専門学校レベルで、卒業しても学士号はもらえなかった。乙科には5町以上の田畑所有者またはその師弟であることを要すると

いう入学要件があった。豪農の子弟に農業教育を施し、地元で農業指導者として活躍することが期待されていたからである。

横田は1890年に乙科卒業後、北海道で農業にチャレンジするが、2年足らずで父の病気で地元の滋賀県に帰り、滋賀県農事試験場の新設に伴い、1895年に技手に就任し、滋賀県の農業発展のために調査研究に従事した。1901年には母校農科大学の助手として転任。タイに出発する前日の1902年7月11日付けで農事試験場技師(高等官七等)に任じられた。最後のポストは、タイに行くために箔を付けたものと思われる。外山もタイに出発直前19

02年2月7日付で東京帝国大学農科大学助教授(高等官七等)を拝命している。三島は1902年に乙科を卒業後、直ちに農科大学助手の肩書きをもらって、7月12日に横田等とともに東京を発つてタイに向かった。

横田、三島は養蚕について専門的知識は深くなかったようである。両者が雇聘されたのは、当時のタイ政府は、単に蚕業だけではなく、広い分野の農業指導・改善を日本人農業専門家に期待していたからである。特に10年間在タイした横田は、当初から外山に代わってサバトウムにおける蚕業局の立ち上げや行政面での諸事を担当した中心人物であり、タイ農務大臣の信頼も高かった。

三島はタイ到着直後の1902年9月8日から、外山、同じく蚕業に雇聘された高野与祖次郎(外山が福島蚕業学校校長であった時代の学生、1874-1962)、修学旅行に来タイしたという東京高等商業学校(現一橋大学)学生の高木「舜三?」、沼野「安太郎?」とともに、桑苗、蚕種、蚕児、繭等

の採集のため、鉄道でコーラットに向かった。途中通過したムアックレック駅では、本誌2016年12月号で紹介した、1897年に19歳で死亡した、デンマーク人鉄道技師の子の墓を見て、「停車場前一墓標あり何人が寂しく永く眠れるや更に知る由なし」(三島敏行「暹羅内地紀行」、『講義会報』第59号、1903年5月、25頁)、と記している。翌9月9日午後、5人揃ってコーラット州副総督を訪ね、次の説明を受けた。

マンドン「モントン」コーラットの人口は支那人シヤム人ラオス人を合して四十万あり其内支那人の数は一千余なりと云ふ コーラット市は人口一万余にして内支那人最多数を占め商業も大抵支那人の手に依りて営まれシヤム人は僅かにマアケツト(朝市場)を営むに過ぎず 田地価 One Acre (四百坪) につき 4-8 Ticals (One ticals 我五十銭余) 人の土地所有権、支那人は外国の保護民を除き凡て許可するを常とすれども其他の外人には一切土地所有権を許さず 米田一ライの平均收穫高、一ライの田地より初五十 Basket (一バ



スケツトは我七升余の収穫あり玄米にして一石七斗五升(五分増)田租一ライ毎年二十四アツ(一アツは八厘)を課す牧草地は租税なし菜園及び花卉園の租税は米田と同じ(同上、27頁)。

### 低湿地サバトゥムの養蚕局

5世王の第41子ベンパタナボン親王(Prince Bhanupatana) 1882年9月-1909年11月)を局長、外山を技師長として、蚕業局が1903年に開設された。

蚕業局が置かれたサバトゥム地域は、今日のバンコクの中心部に当たり、BTSのラーチャテウィー、サヤーム、チットロム、プルンチットの線と、地下鉄のフアラムボーン、サームヤーン、サーラーデーン、ルンピニーの線との間の地域、即ちマーブンクロン、サイアム、スクエア、チュラーロンコーン大学、ルンピニー公園などを含む地域である。ここは、岩本千綱が1895年初に日本から率いてきた農業移民を入植させようとした地域である。

20世紀初頭のサバトゥム地域は、低湿地でかつ肥沃であったことが、下記の横田兵之助の回想や、後述のように三島敏行が、この地に建設された蚕業局の脇では浮稲が植えられ3メートル以上に伸びたことや、雨期には蚕業局官舎の2階から魚釣りをしたと書いていることから判る。

横田は次のように書いている。蚕業局は盤谷市に接した通称サバトゥム「サバトゥム、satun」と称する郊外地に置かれた。此の辺の土地は低湿なる草生の平原地で、日々満潮の時刻には一面に水を湛へて、桑樹の栽培には不適当である。之は雨期中溜雨「メナム」河より濁

流が常に氾濫して沈澱沖積したる微細土より構成せられ、表土の深さ二メートル以上、心土に於ても同様重粘の土層で、甚だ肥沃と思はれたが、土壌の取扱ひは困難であらうと感じた。此の場所の開拓には農務省直営の事業として支那人に請負はしめ、道路並に堤防の新設に当らしめた。而して其面積五ライ即ち我八反五畝歩余の土地を局舎の敷地に充て、半永久的に二階建オフィス一棟、養蚕作業室一棟の外二棟の住宅が建築された。

桑園としては右用地に沿ふ場所に二十ライ即ち我が三町四反歩の土地を、支那人に命じて請負仕事として、畔形の畑を作らせた。其の畔市は二メートル、高さ一メートル半、溝市一メートル半とし、充分日光による風化作用を待ち、土塊を砕き上げて、其上に桑苗を移植した。元来暹羅国に於ては桑苗として販売しているものもなく、随つて新たに作り上げた畑に移植すべき苗木もなかった。依つて赴任の当時日本より携へて来た桑苗を(一時は我日本公使館邸内片隅に束も解かず反に活けて置いたのであるが)畑の整地を待ち植付たのである。

熱帯農業に無経験である我等は桑園の開墾に当り、重粘質の土層の心土を掘り、高く畦形に盛り上げて作

つたのであるが、桑園として当初は多少の肥料の施与は当然必要であると想像して居たが、前記日本公使館邸内に仮植の桑苗の発芽伸長の旺盛なるに驚き、要は唯無肥料の低植付けても敢へて差支ない事の自信を得た訳である。特に考へた事は熱帯地は温帯地に比し四季寒暑の区別なく、年中高温なるに加へて地下水の高き盤谷附近平原にあつては、樹木は年中落葉なく、桑樹の如きも同様である。蓋し溜雨の流域に於ては永年月を経て其濁水より自然肥沃の土壌として構成せられて居り、我日本の四季変化ある土地とは全然其趣を異にする事を感じたのであつた

(横田兵之助「暹羅国懐旧談」(其

二)、「暹羅協会会報」第10号、

1938年3月、118-111

9頁)。

横田は、桑の葉が日本と違つてバンコクでは落葉せず、年中緑であることを指摘している。私が氣になつて居るのは、バンコクのザクロ(石榴)の葉である。ザクロの枝葉は、中国人の道教廟(サーンチャオ)の儀式に欠かせないもののようで、バンコクの裏道を歩けば、ザクロの細木が植えられて居るのを、しばしば目にする。日本や中国

のザクロは言うまでもなく冬は落葉するのだが、バンコクでは落葉がないように思うのだが、どうだろうか。

### 三島敏行の見たサバトゥムの米作

三島は在タイ2年で(三島敏行「暹羅遠征」、『講農会会報』第65号、1905年1月、20頁、1904年後半には帰国したが、彼が住んだサバトゥムの蚕業局官舎の様子を次のように書いている。即ち、

熱帯は其の天産物の豊富なる、実に宝庫たるに恥ぢず、氣候の暖熱、地味の肥沃なる、植物の生長速かなる、実に驚くに堪へたり、吾人は盤谷に於て、桑の生長を試験せしに、一年間に長さ四メートルに達するを得たり、魚族の繁殖の盛なる、又驚くべきものあり、吾人の官舎は盤谷附近 Satatoom の郊外にありしが、家屋は平坦なる水田の中に建築せられたり、故に雨期に入らんか、家の周囲は皆水を以て満ざるに至る、故に此の時期に於ては自然の池を作りたるが如く、魚族は盛に繁殖を逞ふす、甚だしきは二階に居ながら魚釣を為すことを得可し、実に虚言の

如しと雖も、實際吾人が実行せる処なるを奈何せん(同上、23-24頁)。

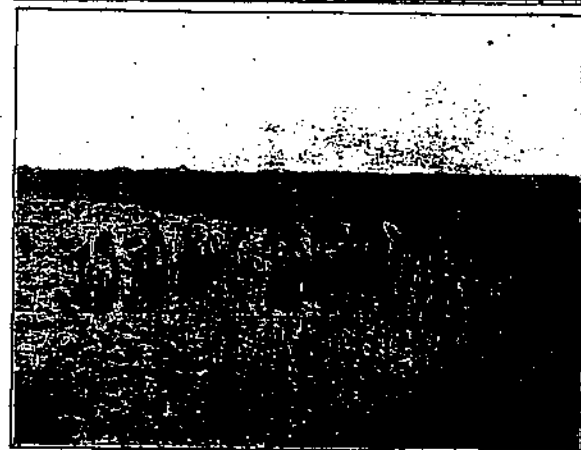
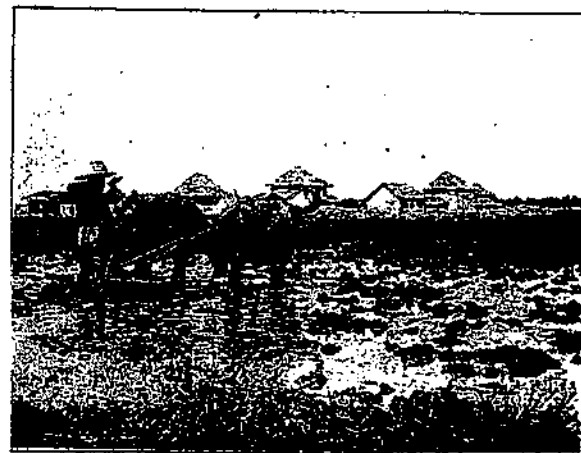
蚕業局が雇傭している苦力頭(Chief Coolie)は、同局の近くに広い田地を有しており稲作を行つて居るが、三島は蚕業局近くの米作の観察や苦力頭から聞いた話としてサバトゥムの米作を次のように書いている。

先ず植付け面積は「三ヶ月以上に渡る長期の播種及挿秧(田植)期を有せる、暹羅の氣候は、是れが米作國たるに、非常なる恩恵を有せる故に、乞食小屋に等しき農家にしても、二十町歩より多きは百町歩も植付」(三島敏行「暹羅遠征(承前)」、「講農会会報」第66号、1905年3月、44頁)け、「此の國に於ては挿秧には婦人多く従事、大抵一枚の田に數十人入りて、節面白き童歌を唱ひつつ挿秧に従事せる有様は、誠に勤勉なるものにして、平日の怠惰なるに似ず寝食を忘れて、余念なく働く、又た年によりて降雨少なき時は、溝又は池より水揚器によりて日夜灌水する有様は、日本人でも及ばざる位なり」(同上、44頁)。「一枚の田に數十人もの多数で田植えするのは、近隣の百姓の助け合い、結い(ロンケ)

クがあるからである。灌漑水は自然の降雨に頼り、肥料も全く使わない。「暹羅の米作は全く無肥料である、土人の肥料と云ふ觀念は、皆無である、住家の周囲に水牛の糞が堆積して居るにも係らず、汚ないとも思はず平気で居る、吾人が曾て、「サバトゥムの」桑園に肥料を施さんと思ひ、Chief Coolie に牛糞の有無を尋ねしに、彼は余を導いて我家に至り、其の近傍に桑山の如き堆積を指して曰く、彼れが水牛の糞であると、余は幾度か反問し大に疑を起せり、何となれば殆ど全部土化し臭氣も少なきに依る、然し能く検すれば、糞もなく水牛の糞たるを知れり、此の如く、有用なる肥料を有し乍ら、使用することを知らず、自然に放棄せり、此の事実を見ても、肥料の觀念のなきことが明かである、是れも自然が斯く然らしむるものかメナム「メナム」の兩岸は非常の強粘土で実に肥沃なる土地である、夫れも一年に数回収穫を挙ぐる

様にすれば、無論施肥せざれば、好結果を得ることは困難なれど、暹羅に於て、當時行はるる米作は、一年一回より外は収穫を挙げないので、天然の肥料にて十分である、是れに肥料を施す時には、労働費も増すので、却て経済が立たないので例ひ知りつつも、肥料は用いない様である」(同上、45-46頁)。除草及び手入れについては、「除草及手入れの如きは、実に粗放なるものにして、盤谷附近に於て、一二回は除草せるを見せり、其の他の手入れの如き、殆んど顧みざるなり」(同上、46頁)という程度で、病害虫については、「雨期に入れば夜間屋内の灯点に、群集せる浮遊子「ウンカ」は、実に夥しきものにして、吾

人は、電灯の下にて、談話さへもなすに堪へず、夜、早く床中に逃げ込みしことありしが、此れによりて見れば浮腫子は、其の害莫大なるものならんと、思はるれども、實際其の害の少なきは、不思議の至りなり、土人は全く害虫の觀念は皆無なり、是れ其の害を受ける事の少きに依るならん」(同上、46-47頁)。「収穫は十一月より二月に至り、漸次成熟せるものより収穫を始め、収穫するには茎の中より刈り取り、之を刈り株に掛く、之れ未だ田面に雨水停滞せるを以てなり、又処によりて土地低き場所は小舟を浮べて、収穫



サパトゥム蚕業局前の米作 (1904年)

す、養蚕局の桑園の溝に生ぜしものは、長さ一丈(約3メートル)以上に達せり、是れ降雨毎に水量の増すにより、上へ上へと生長し乾季の初めに、成熟するを以てなり、故に水中処々の節々より、蠶根を出し居れり」(同上、47頁)。「パンコクのサパトゥムの低湿地では、アユタヤと同じ様な浮稲を耕作していたことになる。前に横田が書いていたように、サパトゥム地区には雨期にはチャオプラーの濁水が流れ込み、相当の水深になっていたのである。三島が書くように、官舎の二階から魚

釣りができるほどであった。当時はパンコクに流入する水をコントロールできる設備がなかったからであろう。以上のように肥料も使わず、草取りも害虫駆除もしない粗放な米作で収量は、「暹羅にても土地の肥瘠により、相違がある、Siam地方にては、一ライ(一反六畝歩余)に付、三十八スケツト、凡そ日本の一反歩に五倍余りである、盤谷附近の豊沃なる土地にては、四十八スケツトより五十八スケツトである。即ち一反に八倍余り収量がある、無論是れは無肥料であるから、日本に比すれば収量が多い訳である」(同上、47頁)。「というのである。この収量は、岩本が冒頭で引用した部分で述べている収量とはほぼ同じである。但し、三島のいう収量はモミのよう

で、白米に換算すれば半分になる。また、地価は「Siam地方の田舎にては二田より四田位である、然し盤谷附近にて、養蚕局のある近傍にて、新たに土地を買入れんとせしに、土人は三百銖即百五十円余にあらざれば売らずと主張せり」(同上、48頁)。

横田もタイの米作は一戸当たりの耕地面積が廣大で、粗放であるが全体の合計収量は悪くないとして、次のように述べている。

# タイ国日本人会の初代会長は小牧太次郎氏

1910年頃タイの米作で成功した最初の日本人に江畑弥吉がいる。中井喜太郎は江畑と思われる人物との会話を次のように紹介している。

を以て、其賃金食料雑費総計一万円を要する訳なり、然るに一ライより生ずる米は平均玄米四石「10匁」にして、其価格は本年三十七円なりし故、二千ライの玄米八千石は七万四千円となるべく、之より生産費を差引くも、六万円の利益を得る筈なりと、猶ほ彼の所有する米田は、暹羅国内の最上田なるも、其の一ライの買入金は、僅に日貨の十五円なりしと云ふ、又以て暹羅に於ける米作の利益を知るべし、今や日本の文明は次第に進歩し、既に菜「すで」に食物欠乏の國となり、米穀の不足は之を外國より補填せざるを得ざるが、若し其の不足米を日本人の資金にて耕作し、日本の船舶にて輸送することとすれば、國家の経済是より利益なるあらんや、但だ暹羅に於ける日

本人の居住区域が、二十四時間内に盤谷に退去さるべき範圍と定められたるは、大に米作の地区を制限するものにして、速かに条約改正を促すべきなり(錦城生(中井喜太郎)「暹羅も日本人の成功地なり」、読売新聞1913年9月20日朝刊)。

江畑が米作を行ったのはランシットであるが、ここで一ライ玄米4石(一反に換算すれば2.5石、6.25畝となり殆んど日本と同収量、本場に収穫できたかどうかは疑問が残る。

江畑弥吉は、タイ国日本人会の第9代会長である。但し、「タイ国日本人会百年史」(2013年刊)も含め、戦後に不確実な記憶に依つて復元された戦前の歴代日本人会会長名からは、残念ながら、彼の名は落ちていない。更に言えば、初代日本人会会長とされている三谷足平は、実は第2代会長であり、本当の初代会長は、小牧太次郎(1877-1931、三井物産)であることが、1932年6月に出版されたタイ国(当時は暹羅国)日本人会の会報(筆者が最近入手した)から明らかにな

た。これらの詳細については、いずれ本誌で紹介する予定である。

江畑弥吉はタイ人女性と結婚し、長男江畑朔弥(タイ名はスリヤ)などを授かった。1942年から終戦にかけて、江畑弥吉と長男朔弥は日本人としてタイ駐屯日本軍憲兵隊に積極的に協力した。しかし、そのお蔭で、戦後タイに戻る事ができなかった。江畑親子の献身的な協力は、在タイ憲兵隊のナンバー1、ツィであった堀井龍司中佐の手記に詳しい。同手記は、筆者の編集・解説で『堀井龍司憲兵中佐手記、タイ国駐屯憲兵隊勤務(1942-45年)の想い出』(早稲田大学アジア太平洋研究センター研究資料シリーズ第7号)として本年3月末に刊行された。非売品ではあるが、間もなく早稲田リポジトリで全文公開されウェブ上で読むことができる。

連載②  
バンコクの  
日本人

# 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(68)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

タイ蚕業事業に雇われた日本人

岩本千綱の活動とは、離れてしまいが、前号の続きで、1902年～1912年の間にタイの蚕業局で働いた日本人について、もう少し見ておこう。

彼等に関しては、聘請者の一人である中村辰治を父にもつ中村孝志の、詳細精密な調査研究が存在する(「シヤムにおける日本人蚕業顧問について」明治期南方開拓の事例、「南方文化」第5輯、1978年11月号)。また、吉川利治のタイ語資料を用いた研究(「暹羅国蚕業顧問技師・明治期の東南アジア技術援助」、『東南アジア研究』18巻3号、1980年12月)もある。

両氏の研究成果に、外交史料館旅券下付表、内閣印刷局『職員録』などの別資料を加えて、蚕業局事業で雇われた日本人

のリストを作成すると、その数は19人にも上る。蚕業事業は、正に近代日タイ関係史における重要な一頁なのである。

左頁リストの渡航目的の欄は、旅券申請書に申請者本人が記載したものそのままを転写した。石田、河田、概の3名は現地採用である。浄土宗僧侶の概は、2度目の来タイ後、短期間バンコクで高野の通訳として働いたが、昇給希望をタイ側に断られた。ランシットでの米作に転じた。しかし、本誌2015年7月号で紹介したように、ランシットの農耕は1回きりで1908年6月には止めてしまった。

5. 人もの若い日本女性工女教師として雇われ、来タイした。彼女たちの来タイ実績は、日本人職業者には好都合であったようだが、職業者と疑われるような渡航目的では旅券の下付を受けることはできなかったが、

渡航目的を「蚕業従事」と書けば、旅券を取得し、若いむすめをタイに連れ込むことができるようになったからである。例えば、1909年12月に熊本県天草郡の井上ユキヨ(28歳)は、2人の同村の女性(兩名とも17歳)とともに「蚕業従事」の目的でタイ行きの旅券を取得している。井上は、1914年、17年にも蚕業を理由にタイ行きの旅券を取得しているが、井上に同行した女性への帰国後の調査(森克己『人身売買』至文堂、1959年)から、彼女らは蚕業とは何の関係もない、からゆきさんであったことが判明する。

さて、多数の日本人を雇った蚕業局事業の概観として判り易いのは、「暹国蚕業局の状況」と題した、公使館書記生山口武の1910年初めのコーラート出張の報告書である(外務省記

録6.1.6/24-122「帝国官吏出張及巡回雑件 復命書之部 在外公館 大公使館 第1巻」)。以下、この報告書を引用する。

## 暹国在来の養蚕製糸業

茲に暹国蚕業局の状況を報ずるに先ち暹国に於ける養蚕製糸の現況に付き少しく説明を試みるところあらん。抑も暹国に於ける養蚕製糸の業は其起源極て古きものの由なれども最近に至る迄官民共に何等の改良方法を講ぜざりしを以て現今尚未だ初步の情態を脱せず盤谷市を北に去る約170哩行程なるコーラット州及之に東隣するイサン及ウドンの両州の如きは暹国に於ける養蚕地として知られつつあり。統計類の不備なる暹国に於て生糸産額の精確を知ることは困難のことなれども鉄道の終点にして老蠶、暹羅北方地方

タイ農務省蚕業局(のち作物栽培局)で働いた日本人一覧表(1902年-1912年)

旅券年月日 蚕業奉職 期間(年・月)	氏名(学歴)	本籍地	出生年	前職	渡航目的
1899.2.25 02.9-08.10	石田勝衛	福岡県京都郡 今元村	1876年		商業のため
1902.2.4 02.3-05.1	外山亀太郎 (農学士)	神奈川県 愛甲郡小站村	1867年	農科大学助教授	蚕業技師として
1902.2.6 02.3-07.6 ブライラムで病死	永島安太郎	神奈川県 愛甲郡小站村	1867年	小站村長	農商務省顧問 外山氏に随行
1902.6.28 02.9-12.7	横田兵之助 (農科大学乙科卒)	滋賀県 東浅井郡虎姫村	1868年	農商務省 農事試験場技師	技師
1902.7.7 02.9-04.7	三島敏行 (農科大学乙科卒)	熊本県 菊池郡原水村	1879年 [実際は1876年]	農科大学助手	農事顧問として
1902.7.10 02.9-10.7	高野与次郎 (福島蚕業学校で 外山の弟子)	福島県 相馬郡八沢村	1874年	農商務省 横浜生糸 検査所技手	シヤム国雇
1902.7.10 02.9-05.9	国分セイ	鹿児島市	1883年	農商務省 横浜生糸 検査所工女	シヤム政府雇 [教婦]
1902.7.10 02.9-05.9	平野キク	群馬県 勢多郡粕川村	1883年	農商務省 横浜生糸 検査所工女	暹羅国雇 [教婦]
1902.7.11 02.9-09.7	細谷善助	山形県 東置賜郡高畑町	1873年	郷里の長谷川製 糸所	蚕技師
1903.12.4 03.12-08.4	中村辰治 (福島蚕業学校で 外山の弟子)	福島県 偕夫郡余目村	1870年	台湾總督府技手	
1904.5.12 04.6-07.4	田原休之丞 (農学士)	東京市	1865年	農商務省 横浜生糸 検査所技師	養蚕技師として 暹羅政府招聘
1904.9.10 06.8病死	河田直雄	埼玉県 大里郡中瀬村	1886年		農学研究
1905.4.11 05.5-07.6	高橋元助	福島県 伊達郡飯野村	1869年	農商務省 横浜生糸 検査所技手	技師
1905.8.15 05.9-08.2	岡田健[トク]	京都府 熊野郡海部村	1878年		製糸教婦として
1905.8.15 05.9-08.9	小金澤さわ	群馬県 北甘楽郡馬山村	1883年		蚕業教婦として
1906.1.16 7-07.3	概旭榮	佐賀県 三養基郡三川村	1871年		布教
1908.6.5 08.8-12.8	飯塚亀吉	群馬県 山田郡桐生町	1866年	(織物技師)	暹羅国政府の 聘に依り
1908.6.5 08.10病死	飯塚ハナ (亀吉長女)	群馬県 山田郡桐生町	1866年	(織物技師)	暹羅国政府の 聘に依り

出所: 上述資料より筆者作成

ワケルンテ-79  
2017年6月号



物産の集散地なるコーラット市（コーラット州に在り）に於ける1ヶ年の出廻り生糸の概数500余担を標準とし暹全国の生糸産額を窺ふに1ヶ年1500担内外と見て大差なかるべし熱帯地なる当国に於ては養蚕は1ヶ年8回乃至10回を試し得べきも乾燥時期たる12月より翌年4月頃迄は桑の供給充分ならざるの恐あるを以て毎年7月より11月に渉る期間の飼育を尤も適当とす 蚕児の経過は掃立より上簇「そう」に至る迄通常25、6日位にして結繭し其後10日間にして発蛾産卵す 産卵10日目をして稚蚕発生飼育す 土人は蠶と蠅の害を恐れ予防として陋屋内に置かれたる蚕坐（普通丸形径約3尺位の竹籠を用ゆ）は綿布を以て被ひ天井より釣り下げ若くは水を盛りたる器物に浸したる柱を以てする蚕架内に置くを常とす固より蚕病の予防等に付き何等の智識経験を有せざるを以て熱帯産蚕に最も普通なる膿蚕軟化病等の発生を聞くは稀ならざるも全く放任の姿なりと云ふ 桑樹は自宅前後の空地に必要分量だけ植付け之れ又何

等の肥料を与ふることなし害虫の発生し其損害大なるに至るや桑園地を變更するにあるのみ熱帯地園内に位するを以てする天然の恩恵は斯くの如き場合にも桑樹の成長急速にして暫くにして又青々たる桑葉の茂るを見ると云ふ 斯くて得たる繭は白及黄色の二種ありと雖も白繭は繊維の量少なきを以て一般に嫌はれ黄繭主として飼養せられつつあり 尤も白繭とても日本種の如く純白にあらずして極めて淡き青黄色を帯ぶるものにして比較的微小形をなし 毛羽多く純量なる繊維の数量は本邦繭の約3分の1乃至4分の1に相当するに過ぎ 市場に於ける繭の相場は普通1担25銖内外なり 現在一般に行はれつつある製糸法は我國に於ける昔時の手引法と称して太糸を作りしものよりも尚幼稚なるものにして只1個の土鍋と木杵あり 鍋内にて煮られたる繭の繊維は指頭にて綴を施しつつ上部に装置しある竹の横木を超えて籠に手繰り込み後更に杵に取る一総「かせ」の

量は大小一様ならずして28匁乃至32匁を普通とし大なるものは35匁をも超ゆることあり 斯の不完全なる製糸方法を以てせられたる生糸は其結果として甚だしき大細あり節多く手触り粗硬にして其低燃糸として織物に用ゆるに充分ならず 現今コーラット市に於ける相場は1担200銖乃至400銖に過ぎず之を仏領印度支那に於て製せられ西貢糸の名を以て当市場に売買せられつつある生糸の価格1担800銖乃至1000銖に比し非常なる相違あるものとす 蓋し後者に於ては多年試験の結果広東種を以て土着繭の改良を謀りたるが故なりと云ふ 印度及新嘉坡經由印度行を主とし其地各地へ毎年40万銖内外の暹羅糸の海外輸出あるは紡績用糸として使用せらるるものなりと

云ふ 国内の用途としては云ふ迄もなく当国人の日常使用するパノング及サローングの織用として輸入西貢糸と共に「併せて」使用せられつつあり 而して此等地方に於て斯業に従事しつつあるものは暹人よりも寧ろ老嫗人、柬埔寨人多きを観る

#### 養蚕局の沿革

暹国政府が養蚕局を設置したる目的は云ふ迄もなく前述せし此の幼稚なる国内養蚕製糸事業の改良発達を謀らんが爲にして同政府は1902年3月初て農務省の一局として養蚕局を設け



たり 而して農務省は東洋に於ける養蚕業に關し先進國たる我國に範を採らんとし其が技師として農學士外山龜太郎氏外助手数名を招聘し先づ盤谷の西南約1哩のサツバトム村に事務所、官舎等を新設し付屬桑園29ライ（1ライは我約1反6畝に當る）を作りて文明式に依る養蚕製糸の試験をなし1905年1月より同所に養蚕學校を設け將來斯界の指導者たるべき者の養成をなしたり 其間1903年中当國王室女官連の本業を修得せんとするもの10数名ありしを以て別に王城内に一學校を開き養蚕製糸の實地教授を約2ヶ年間試みしことありと云ふ 1904年に至り養蚕地の中心点たるコーラット市に一支局を設け近傍農家の子女を募集し養蚕製糸の實地教習をなし統て1905年同一希望を以て尚一ヶ所支局をプリラム市（コーラット市を東に去る約三十哩の里程なり）に設けたり 1908年に至り盤谷の事務所及學校は都合上閉鎖したりしも昨年「1909年」よりコーラット及イサン州に於て土人の製糸業に従事し居るも

の多き地方町村八箇所を選び極めて簡單なる方法を以て製糸術を教授する伝習所を設けて一層汎「ひろく」製糸の改良を奨励しつつあり又同年「1909年」よりコーラット支局に於て日本式機械による織物の試験をなしたり而して現今の職員は局長（暹人）の下に技師として日本人3名（内一名は織物技師）及盤谷養蚕學校卒業生13名其他事務員等合計29名あり目下盤谷に於ては養蚕局に關する一般の事務を採るのみにして事業は全く地方に於て成されつつあるを觀る之を暹國養蚕局の設立沿革の大要なりとす

#### 過去の事業

創立時代より養蚕局は事業の第一着手として先づ暹羅産蚕の身体、飼育法、繭の性質、蚕病、害虫其他に關し試験をなしたりしが其結果暹羅産蚕は大体に於

て其質は強壯なるも繭は之を我國繭に比し品質劣等にして優等纖維を得ること難きものなりとの事實を示せしを以て我國優等産を移植せんとし之が試育をなしたるも氣候風土の關係上不幸にして發育良好ならず茲に於てか暹羅産蚕と日本産蚕との掛合せを試みたり本事業は養蚕局數年間熱心に従事し一般人士も其結果如何を注目しつつありしも之れ又不幸にして今日迄予想の如き好繭を得る能はず概して弱質にして実用に適することを得ざりき依て其後方針を變じ専ら暹羅産蚕を漸次改良し來り健全良好なる蚕を作ることなし現今もコーラット及プリラムの兩支局に此種蚕を飼育し蠶種を人民に頒布しつつあり掛合せ業の

成功せざりしは極て遺憾のことなれども改良蠶種と雖も在來の土着蚕に比し尙數倍優等なるは明にして左の表により知ることを得べし

繭1000匁より收穫する生糸の重量	
アンパー・クラング地方繭	17.15グラム
アンパー・パクトンチャイ地方繭	17.93グラム
アンパー・ソナング地方繭	14.67グラム
コーラット局飼育繭	41.20グラム
プリラム局飼育繭	40.20グラム

即ち改良蚕は普通蚕に比し約3倍の多量を得つつあるを見れば

又満足して可ならんか  
盤谷に於ける養蚕学校は1905年の開校に属し学年を2ヶ年(後3ヶ年に改めし)となし我國甲種養蚕学校と略ぼ相似たる程度を以て養蚕に關する教育を主とし副ゆるに農學に關する智識を施し來り既に計17人の卒業生を出したり 卒業生の成績は之を同局雇日本人技師に付き聞くに概ね可良にして大部分は目下養蚕局役員(ママ)となり居れり1908年4月より農務省は都合上本学校を閉鎖し之を農務省管轄にして測量、運河二局の練習生を教育する農務省学校に合併し同校の一分科として教授なしつつあるが現今養蚕専門の学生数は14名ありと云ふ

#### 現況

養蚕局現時の事業としてはコーラット及プリラム両支局並に之に付屬せる數箇の伝習所なりとす而して前記兩局は現今本事業の中心点たるの概あるを以て茲に聊か其建築構造を述んに局はコーラット市の城北門外一河に沿ひたる右岸一帯の高地中

に設られ2階造り木造事務室(240坪)平家蚕室(300坪)トタン葺製糸場(200坪)煉瓦作り殺蛹室(32坪)を始め生徒寄宿舎、厩舎、農夫舎等の設備完全し之に付屬するに開墾せし桑園1700ライを有し当国内地に在りて饒然たる一大建築物なりとす プリラム局も其建物にコーラット局と大同小異にして只付屬桑園は1000ライを有するのみとす 兩局とも設立以來附近の各村落より見習生として農家の子女を募集し男子は主として養蚕を又女子には日本式足踏器械を使用し製糸の術を教へ今日迄養成せし生徒數男子36名女子86名を得たり同時に又改良養蚕種を製造し之を直接地方農民に配布し以て養蚕の改良を謀り來りて昨年コーラット局に於ける蚕の飼育は繭600キログラム余にして約24キログラムの生糸を得又3500蛾分の養蚕の分配をなしたりと云ふ而して之が指導をなすものは日本人技師と盤谷養蚕学校卒業生とを以てしつとあり 然れども亦斯の如き少數の卒業生のみを以てし或は亦限りある養蚕の分配に拠り

当國養蚕界の隆盛を期するは前途尙遠のことと云ふべし昨年より兩州内に製糸伝習所を設けたり此の伝習所は後段地圖「略す」に示す如く其數計は8箇所にして所在地は兩州に於ける主たる養蚕地を選びしと云ふ其が構造たるや只一時的の草葺通風の家屋にして能ふ限り簡單を旨とし茲処に於て十二三才以上の地方女子を集めコーラット及プリラム局にて試みられたる器械よりも尚一層輕便なる坐繰器を以て製糸の教授をなしつつあり之が主任者には盤谷養蚕学校の卒業生をして命じコーラット或はプリラム局の見習生助手として勤務なしつつあり而して製糸の原料たる繭は各伝習所に在る役員地方民家より相當價格を以て買求め來るものとす 然るに此舉は其組織の簡單なる点に於て又懸々遠く隔りたるコーラット若くはプリラム迄赴くの不便を要せざるの点に於て大に地方人の氣に投じ何地伝習所も終始四五十名の生徒を有し各自熱心に教授を受けつつあり糸取術の課程は二三ヶ月を以て練習を終るを普通とし既に1000名

以上の修業生を出せし由なるが卒業期には普通1人1日30グラム内外の製糸をなすは容易なりと云ふ而して彼等の去るに際してや伝習所は其使用し來りし坐繰器械一組を附屬品と共に与ふ 彼等の採りたる生糸は全部コーラット局に送られ同局に於ける織物試験用に使用せられつつありて未だ一般市場には売買せられざるも1担10000銖乃至12000銖の値は充分あるべしと云ふ 之等の伝習所はコーラット及プリラム兩局の管轄に屬し支局技師(日本人)時々巡回監督をなし居れり 又伝習所在勤の役員は親しく地方農民と接近し養蚕予防其他に付き紹介助言をなしつつあるを見る 要するに此の伝習方法たるや開始以來未だ一ヶ年に経(ママ)ぎざるを以て顯著なる効果を見るは困難にして之に對し何等の断言を下す能はざるも當國の如き一般土人の文明程度の低きところにおいて簡單を旨とする此方法を以てする製糸の改良は策の得たるものと稱すべし

#### 織物の試験

養蚕局は前述事業の外昨年より新に機業部を開始し各地伝習所より送り來る生糸を以て絹織物をなしつつあり 蓋し當國に於ける織物産地は生糸集散地と同じくコーラット及イサンの兩州を主とし其の産額は全國を通じて1ヶ年約70万銖内外あるべきが在來の機業は製糸業と同じく尙未だ初歩なるものにしてコーラット附近民家に間々二三若くは四五の機台を備え付け自家用織物をなし其糸を市場に売出すに過ぎず機台の構造は竹幹若くは木材を以て主要フレームとなし之を直ちに室内の支柱に緊束して不動となす其巾5呎「フイート」長さ十呎内外なり杼「ヒ」は支那よりの輸入品を用ひ附屬裝置を合せ機台一箇の製造費約十五六銖内外なりとす 多くはパーノング及サローン(共に當國土人の常用する衣裳の類)の製造を目的としつつありて通常土人1人を以て幅約40

吋「インチ」長さ十二三呎のパーノング一枚を織るに凡そ十日以上十二三日間を要す 製造品の市価は概して百匁内外の絹パーノングにして西貢糸6分土産糸4分見當のもの1枚の相場は20銖、80匁のもの18銖又百三十三匁付に至つては廿三四銖内外なりとす 然るに當國生活程度の漸進と共にパーノング其他絹物の需要も益々増進し來るは明なるを以て政府は本業を奨励し以て將來一國の産業たらしめんとし昨年中日本製機台10台を購入し同時に我國より織物技師「飯塚亀吉」を雇ひ入れコーラット局に於て試験をなしつつあり 機台は我國に於て所謂洋式と稱する巻取り式機台にして現時の我國にありて寧ろ旧式に屬すべきものなれども當國に於ては尚最新式として認められ織者は或

#### 所感

既に養蚕局の情況に付き大体

の説明を終りしを以て所感として當國の生糸及織物業が將來果して發達の見込あるや如何若しありとせば如何なる奨励法を施すを以て適當とする哉の一点に付き研究するところあらんか 當國蚕の種類は既に記したる如く之を我國産に比し品質は劣等なるも強壯質のものなることと當國の氣候風土が一ヶ年數回蚕の飼育を為し能ふこと及び當國北部地方に於ては養蚕製糸業が古くより一般に行はれ來つて土人は既に本業に關しては不知々々の間に相當の經驗を有するものなることは自働的に斯業の發達を援くるものなるが加ふるに養蚕業が農家の副業として適し且つ強て多大の資本を投ずることを要せざるの点に於て資力少なき土人職業としては極めて適當なるものと云ふべし 又世界市場に於ける生糸の需要云々は暫く措くもコーラット市場に於ても尚輸入西貢糸は平素1担10000銖内外の價格を有して需要少なからざるの事實は直接に本業の發達を喚起しつつあるものに非ざるなきか 然らば進んで之が奨励法は如何と云ふに



良好なる生糸を得るには云ふ迄もなく蚕種の精選を第一とす蚕業局多年の継続事業たりし蛾の掛合せが満足を得るに至らざりし切に遺憾とするところなるも亦致方なしとし現今実行しつつある改良蚕種の頒布は将来としても益々広く一般人民に分配するの必要あるべくコーラット及びブリラムの二局のみを以てし之が製造に不十分なりとせば各地方伝習所にも夫れぞれ必要の桑園を設けて直接に改良蚕種を製造分配すべく斯くして初めて国内に於ける蚕質の改善を見能ふべきか 同時に製糸法の奨励として目下の伝習所を拡張又は増設し輕便なる方法を以て出来得るだけ多数の生徒を養成し且つ各地にある教師は屢々農民と近接し終始一貫蚕業指導の任に當らざるべからず 聞くが如くんば蚕業局の方針又茲に在る由なれば通国生糸も将来は一種の重要物産となり得るのがあるべし 翻て絹織物に付き觀るに其事情少しく異なるものあり廉価にして体裁能き外国製絹織物の輸入ありし以來一般の需要は漸次此の方面に傾き来り最近自19

08年4月至1909年3月年度の如きは輸入額総計3,720,000銖に達せり 然るに当国に於ける絹織物類輸入税率の低きことと(現今率は従価三分なりとす) 近年幣制改革の結果人為的に然も殆んど永久的に鉄銀相場の高められたることは今後益々本品の輸入を誘ふべく現に盤谷市場の如きは今日全部外国品を以て満されつつあるが如き有様なり此際国内の絹織物業は如何と云ふに原料生糸供給上の不利益なること、労銀の比較的高率なること、及び土人文明程度の低くして機業に關する智識の乏しき原因は茲に大なる勢を以て輸入せらるる外国製絹織物と相待て乍遺憾漸次土着の当国生糸が品質粗悪にして織物原料として不適当なることは前述せしところなるが左りとて蚕業局奨励の効果を見く見るは前途尙遠慮のことと云はざるべからず之が為め絹織物業を為さんとせば先づ他國に原料生糸の供給を仰がざるべからざるの不利あり然るに当国に於ける労銀は比較的高率にして織物の織上

賃金は普通バーノング1枚に付三、四銖内外を要求すと云ふ1枚20銖内外のバーノングを織るに斯の如き高価の織賃を支出するが如き局外者の意外とするところなるべし又織物は養蚕に比し相當の技術と資力を必要とす而して現今当国土人智識の程度に於ては未だ精巧にして高価なる新式機械の使用の如きは不可能のこととせざるべからず 兎に角一方に於て輸入絹織物は幾多の優勝の地位に在るにも不拘国内絹織物業の現況斯くの如き場合に之が将来発達を期するは困難のこととなるべし 現今コーラット局に於ては新式織物機台の備付運轉をなしつつ

あるを見る而して其製品の民間普通のものに比し良好なるは蓋し事業の官營にして収利を目的とせず日本専門技術家教導の下に精巧なる機械使用の結果にして之を以て一般土人に適應する能はざるは明のこととす 暹羅國蚕業局が今日主として力を注ぐべき点は国内生糸の改良を目的とする優等蚕種の製造分配と糸採法を汎く一般に知らしむべき伝習所教授制の拡張にありと云ふべし。



連載  
バンコクの  
日本人

## 日本人タイ研究者第一号 岩本千綱(69)

早稲田大学アジア文化科学研究科教授  
村嶋英治

岩本千綱の活動とは離れてしまふが、タイ農務省に蚕業関係で聘された日本人中、在タイ勤務最長の横田兵之助(1868-1943)について、もう少し見ておこう。横田は、1902年9月から1912年7月まで10年間、タイで勤務した。タイ蚕業事業の開始時の責任者であった外山龜太郎は、蚕業開発の外にも、一般農業方面にまで手を伸ばす筈だから農業方面のことは横田に任す旨の話をしたという(横田兵之助「暹羅國懷旧談、其一 蚕業開発に就て」、『暹羅協會会報』第9号、1937年12月、93頁)。

部省に属する東京帝国大学農科大学の助手に異動し、更に1902年7月11日付けで農商務省農事試験場技師(高等官七等)に異動し、7月12日にタイ赴任のため日本を發つてゐる。6年間の滋賀県農事試験場時代に横田が作成した報告書の内容から見て、彼の仕事の中心は蚕業ではなく稲や麦に關係したものであったようだ。

横田のタイ聘備当初の月給は、150円。日本時代の約3倍である。1906年版の『職員録』(明治39年5月1日現在)まで、農商務省農事試験場の項に「技師七等 横田兵之助 外國政府応聘中」の記載があるので、最初の5年間ほどは、横田は農商務省からの出向扱いであったことが判る。しかし、1907年版『職員録』(明治40年甲(同年5月1日現在)からは、横田の名は消えた。1906年版『職員録』まで、農商務省横

浜生糸検査所の項に、「技師三 高橋元助 外國政府応聘中」、「技師八 高野与祖次郎 外國政府応聘中」と記載されていた、高橋と高野についても、1907年版からは名前が消えている。以後職員録には、横田等の名は見当たらない。

しかし、横田は在タイ中の1911年7月5日付けで「叙勳六等授瑞宝章 農事試験場技師正七位 横田兵之助」(『官報』1911年7月6日号)という叙勳受章を受けているので、日本の農商務省の籍は継続していたことが判明する。

蚕業局があった場所

横田は聘備当初、バンコクの蚕業局に勤務し、その後の大半はコーラット、ブリラムで勤務したようである(1906年正月にブリラムで書いた横田の年賀状参照)。

本誌の本年5月号に、サパトゥムの蚕業局、雨期の増水時には2階から魚釣りができたという官舎、桑畑、附属の農学校等の写真を掲載したが、その地は、下記の資料より現在のチュラーロンコーン大学講堂辺りであったと考えられる。

まず、蚕業局等が、現在のチュラーロンコーン大学の敷地の相当部分を占めていたことが、次の資料から判明する。それは、1913年1月29日付けの同大学建設協議会の次の記録である。即ち、

皇太子時代のワチラーウット王(6世王)が中心となつて、父チュラーロンコーン王(5世王)の騎馬銅像(アナタサマーム宮殿前の広場に現存。この騎馬像正面の直ぐ右手の路上に埋め込まれていた。1932年6月24日の立憲革命宣言の地を示す記念碑が、今年になつて何者かによつて取り換えられてい

ワチラーウット  
2017年7月





1906年正月に横田兵之助がブラジルで書いた年賀状

たことが判明して一騒ぎとなつてゐる。建設のために大規模な募金活動を実施された。銅像完成後、余った80万バツツを、6世王は5世王を記念する文官学校(後チュラーロンコーン大学と命名)建設のために寄付されることになったので、学校建設計画のために協議会が設置された。協議会は、学校の敷地として、東は競馬場通り(現アンリドゥナン通り)、西はスワンルアン運河(現存する、並行してパンタットトン通りが建設されている)、北はバムルンムアン通り(現在はラーマ1世通りと改称)、南は外フアラムボーン通り(現在ラーマ4世通りと改称)で囲まれた王室内務局所有地を選定した。選定敷地内には、パヤータイ通りが貫通し、パトゥムワン宮殿(かつて田圃の中の宮殿とも呼ばれた、国立競技場建設のために取り壊された)、元農学校が存在する(『タイ官報』第29巻、2566、2569頁、1913年2月9日号)。

この元農学校とは、本誌6月号で引用した山口武書記生の報告にあるように、蚕業学校を改称したものである。故に蚕業局等の敷地は、現在のチュラーロンコーン大学に含まれることが判る。

同大学の敷地は広大であるが、そのどの辺りであろうか。外山亀太郎は1903年1月8日付けで、タイ農務大臣宛に提出した『シヤムに於ける蚕業試験報告』(タイ語、1905年刊行、38頁プラス付表)の書き出しで、「前に提出した報告書第一号で私は実験施設建設と桑園造りが必要である理由を説明し、大臣の賛意を得た。それで競馬場脇のパトゥムワン田地(Phatthana Wattana)に実験施設を建設し桑園を開くために盛土をすることを決めた」(同書1頁)と述べている。即ち、蚕業局や学校の建物が建設されたのは、競馬場脇の田圃の中である。

この競馬場は、Royal Bangkok Sports Clubの土地である。

チュラーロンコーン王が1897年の最初の訪欧から帰られた後、龍臣の一人が国王に競馬場の開設を願ひ出た。国王の当初の反応は、バンコクには、既

に多数の公認賭場があるのに、更に賭場を増やすのか、というものであった。この龍臣は、競馬は馬の改良のために必要であることを説明した。結局、国王は、50年間無償で好きにだけ広さの土地を使うことを許可された。パトゥムワンの水田が、その場所に選ばれ、Royal Bangkok Sports Club 設立が1901年9月6日付けで国王より許可された(The Royal Bangkok Sports Club Seventh Cycle Commemorative Book, 1985)。

この競馬場は、ラーマ4世通り側でチュラーロンコーン病院、サヤーム側で警察病院に接し、アンリドゥナン通りを挟んで、チュラーロンコーン大学講堂や文学部図書館などの対面に位置している。これから、外山の報告書にいう「競馬場脇のパトゥムワン田地」とは、現在のチュラーロンコーン大学講堂周辺であったと考えられるのである。

# 横田兵之助と政尾藤吉

1911年12月2日の6世王戴冠式に、明治天皇の御名代として伏見宮博恭王(ふしみのみやひろやすおう、1875-1946、日本の海軍兵学校を中退して1889年から6年間ドイツ海軍に留学、1932年から41年まで海軍軍令部長・軍令部総長として海軍のトップ)が、御召艦伊吹(装甲巡洋艦、1万4600トン)で来タイされ、11月28日から12月9日までバンコクに滞在された。日本の新聞社で、戴冠式取材のために特派員を派遣したのは、大阪毎日新聞のみであった。伊吹に乗って来タイした同社の特派員、三宅松郎は、12月5日に次の電報を打った。

「御名代宮御招待、五日夜我吉田「作」公使および同夫人主催となり同公使館に御名代宮殿下を御招待申し上げ晩餐会を開けり余(三宅特派員)は政尾「藤吉」通譯顧問四本「萬二」川崎造船所営業部長横田「兵之助」農商務省嘱托等と共に陪食の栄を得たり」(暹羅国盤谷來電、五日三宅特派員)(大阪毎日新聞1911年12月6日)。

このように横田は政尾藤吉と

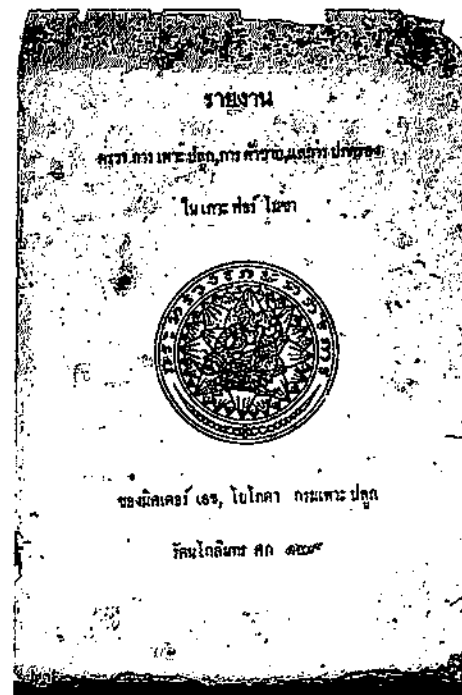
ともに、バンコクの邦人中の名士であった。この時期の横田で特筆すべきことは、彼の著作がタイ語で刊行されていることである。

横田は1910年一時下賜休暇の機会に台湾に立ち寄り、調査を実施するようにチャオプラヤー・ウォンサーヌプラパット(1866-1940、1911年11月にチャオプラヤー位に昇格、農務大臣に依頼された。その調査成果は、タイ語で横田兵之助『台湾の農業、商業及び行政調査報告』(รายงานการตรวจราชการไต้หวันในสาขาการเกษตร การค้า และการปกครอง) 129、全

136頁、1911年2月刊)と題して、農務省により出版された(本号写真参照)。その前文で、同農務大臣は、次のように賞賛している。

良いタイ語で、内容も明瞭である。恰も自ら台湾を旅行しているように感じられる。出張した本省官吏が上司に提出する報告書も、こうあるべきであり、本書は模範となるので刊行する。また、タイ語の書物で読者の利益になるものは未だ少ないので、読書家であれば、興味深いことが書かれている本書を好んで読むであろう。我國の統治方式は十全なものではあるが、行政に関心ある者には、他国の統治が判るので面白く読めるであろう、と。

1911年にタイ語で刊行さ



横田兵之助著『台湾の農業、商業及び行政調査報告』(1911年刊行)

れた横田の本著作は、タイ語で刊行された日本人の著作の嚆矢であろう。

一方、政尾藤吉は、タイ大審院判事も兼務したので、多数の大審院の判決文に政尾藤吉の署名があり、タイの公文書にも政尾はしばしば登場するが、公文書以外のタイ語文献で政尾藤吉に言及しているものは、筆者が目にした限り次の二書のみである。

一つは、プラー・テープウィトウン（1889-1949）の葬礼記念本の中の記述である。彼は、スワンクラブ校（Royal College）を卒業し、1903年4月に法務省の通訳官研修生に採用された。僅か4か月で研修を終え、司法省英語通訳官に任じられ、「1903年8月1日」「4歳2ヶ月」に、日本人政尾藤吉博士の通訳に任じられた。政尾氏は、当時、司法省法律顧問兼大審院判事で、後にプラー・マヒットン（Wichitwongthongtham, 1911年3月1日に6世王から下賜された）という官位を授けられた人物である。政尾氏は、法律と英語についての知識が深かった。プラー・テープウィトウンは口数が少

なく沈着な性格であったので、政尾氏の大変なお気に入りとなった。政尾氏と仕事をすることになった。英語力が向上した（『プラー・テープウィトウン葬礼記念本』、検察局刊、1950年、3頁）。その後、テープウィトウンは、1906年1月（16歳半）に司法省からイギリスに留学派遣、20歳でバリスターに合格して帰国。1923年5月28年末まで内務省検事局長、続いて32年6月の立憲革命まで大審院長、立憲革命後1年間法務大臣を務めた。

この記述からは、政尾は英語通訳を使って仕事をしていたことが判る。彼のタイ文字での署名が、少々稚拙に見えるのは常用はしていなかったためであろう。政尾に言及したもう一冊は、1912年12月1日付けの前文を付して、タイの法律学校卒業生、ナニー・シアンが印刷した『相続法解説』の表紙に「プラー・マヒットン（政尾藤吉博士）の弟子、バリスター、ナニー・シアン著」と印刷しているものである。

なお、横田を高く評価したウォンサーヌプラバット農務大臣は、本誌2012年10月号で紹介したランシット運河等を開鑿したサー・イ親王の二男である。16歳でデンマークに留学し、陸軍士官学校、参謀学校を卒業し、フランスで半年の軍事視察ののち、1893年に帰国。外国語に強い軍人として5世王に重宝され、1904年から3年に亘ってフランスとの間の国境画定作業のタイ側の責任者、1907年のハーグ万国平和会議のタイ代表などを務めた。1902年半は陸軍士官学校長（中佐）でモームチャートデットウドムという飲酒名の時、タイ政府が日本に注文した武器検査団の長として7ヶ月在日した。陸軍中将で陸軍参謀長であった彼に、5世王は、テウエートウォンウィット農務大臣（1899年9月から在職）が病のため停泊していた農務省の立て直しを命じた。1909年5月13日に農務大臣代行に任じられ、同年12月16日から1912年3月14日まで農務大臣。2年10ヶ月農務省のトップに在職した。彼

の後任は、ラートブリー親王（ラビーの名で知られる。5世王の第14子、1874-1920）である。一方、彼は交通省大臣に転じ、1926年3月23日に7世王の緊縮財政政策で交通省が廃止されるまで、14年間同省大臣を務めた。横田兵之助を高く評価したウォンサーヌプラバットから、ラートブリー親王に農務大臣が交代することになった契機は、次号で述べるように1912年3月初めに青年将校団による王制顛覆叛乱準備（ラッタナコーシン暦130年叛乱）が発覚し、王室を震撼させたことである。横田は大臣の交代によって、同年7月の契約満了時に更新はされず、帰国することとなった。ウォンサーヌプラバットの異母兄のヤイは、イギリス留学で医者の資格を得たが、医業に関心がなく、父が創業した掘割会社の経営の外に、1910年当時ランシット運河開通によって開発されたナコンナヨックのドーンラコンでパインアップルのプランテーション生産を行っていた。欧米の植民地で

あった他の東南アジア諸国と違って、タイの農業は小農経営が中心で、大規模農園の存在は無視されてきたが、タイにもタイ資本の大規模農園が存在したことは注目される。

ウォンサーヌプラバット（サニットウォン姓）のむすめ、プーはシリキット皇太后の母、また息子たちには、人民党に参加して立憲革命を起こしたウドム、農務大臣枢密院議長など歴任したデット、また、長期間交通大臣であった父の跡を継いでイギリスで工学を学んで技師として任官し、最後は交通省次官であったジャラン（トンブリー側をチャオプラヤー河と並行する長い道路、ジャランサニットウォン通りは彼の名から命名など多士済々である。

三宅松郎記者が見た  
1911年末のバンコク

1911年12月2日を中心とするワチラーウット王の戴冠式を、日本の新聞記者としてただ一人取材した、大阪毎日新聞の三宅松郎（みやけ・まつお、1885年12月岡山市生）記者は、

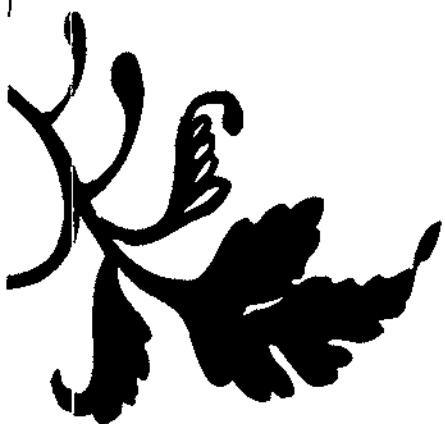
英語フランス語に堪能な満26歳。三宅については、彫刻家イサム・ノグチの母であるレオニー・ギルモアとは、19歳の在米時から交流があった（エドワード・マークス著、羽田美也子等訳『レオニー・ギルモア・イサム・ノグチの母の生涯』彰流社、2014年）こと、彼が翻訳した『モーパッサン短編集』は、1910年6月に警察に販売頒布禁止に処せられたこと、また、彼の翻訳でモーパッサン原作『女の髪』が1914年に刊行されたことくらいしか分からない。

三宅は帰国後、『暹羅物語』を連載したが、そのなかから、当時のバンコクについて書いたものをいくつか以下に拾い出して見よう。

▲御召艦「伊吹」に同じく便乗の栄を荷（に）なふた川崎造船所四本「第二」営業部長に盤谷に着いたら宿は何処がイイでせうと聞くと宿といつてはオリエンタルホテルが一軒あるばかりとの事、氏は軍艦の注文取に暹羅に渡航する事既に数回吾等上陸の日は暹羅の古銀貨を其俵細工した胸ボタンを三つ付けた整飾絹紐「つむぎ」の夏服を着込みながらこれがシャムのハイカラーと一種

の雅緻ある胸ボタンを指しつつ完顔とした程の大通なれば万事宜敷くと宿の件万端氏にお願ひする事にした……▲オリエンタルホテルは雑（ざ）ごとと我が大阪ホテル位の大ささの二階建の木造なり主人夫婦は独逸人なるが……▲さて客室はいづれも八畳計の床板は勿論のチーク張にワニスを塗つたがカーベットの切れつ洗面台にお粗末な角テーブル一つと白レースの蚊帳にて包みたるベッドあるのみ至極お粗末さはどうしても田舎の宿屋なり而も盤谷のモノポリ、ホテルといふ有難さはこれにて一日十五チコロ「バーツ」我が約十一円とは儲け物なり▲而も此熱帯のホテルとして浴場（バス）の案内の随分ないのはさても不思議と断へると四本氏は完顔としてソコが暹羅（サイアム）名物だと仰せある。飛んだ名物もあればあるもの此暑さ此汗此塵埃をああ何せんと思大息も詮方なく洗面皿の果敢（はか）ない水で冷水濯顔を日に幾度（三宅生「暹羅物語」）（八）、大阪毎日新聞1912年1月19日。

▲自動車風の風を切る一方に暹羅には水道といふものがない。其上に盤谷には井戸さへない。そして暹南（メナム）河の水は例の泥水。これでは全くの水攻めである、二千七百



ひらけ「湯水のやうに還る」とさへいふ日本人として盤谷に来て何が苦しいとて此水攻めほど苦しい事はなく後数日日本人倶楽部の「道」の日記の親切に石油の空缶で湯を沸かして貰ひ盤谷後初めて湯の全身摩擦をなした時の嬉しさは何日か忘れん▲随てフレイザー、エント、ニール、蒸留水商會は大繁盛にて同商會一手販売の日本のラムネ壺と同じ式の二倍大位なる湯のソーダ水及びモネードは何処の家の食卓にも付きものにて我等は朝起きるなりまづ一杯 暑いといつては又一杯と明茶の代り水の代りに之を啜（あぶ）り忽ち空の死骸山を築きつ（三宅生「通羅物語」七）、大阪毎日新聞1912年1月22日。

▲運河より七八町政尾「藤吉」博士ワット、デフシリ「デーバシリ」を経て大通に出れば椰子樹並木の道より急転直下紅緑の光明世界、十間幅の自然道路を兎も角も人道車道と区画し王宮通「ラーチャダムノーン」付近の数町は並木さへ左右を縫ふて彼方此方の十字路には木造ペンキ塗の門を建て之にイルミネーションを点じ軒より軒に往來を横ざまに白象旗「當時の国旗」を繋ぎ渡し提灯をともし列ねたり▲此提灯こそは遙々我大阪よりの輸入品にて所謂紅提灯は見掛けず岐阜提灯型

の赤地に白象を現はせるもの秋草を雑に描いたものさては走りがきの花鳥模様などいづれ俄造りのお粗末ならぬはないながらに日本品わけて大阪製と聞かずに心癒し▲而も其数凡そ五百万とはゆめゆめ懸値にては候はず吾等通羅入りの第一軍艦淀に御名代宮に臨し瀨南河口に入つてより盤谷王宮棧橋迄の約四哩の間左右の岸の家々に此提灯を吊し列ねたるを見やがて市中に入つて愈々其なるに驚いた位、而して一個の市価概ね一サタン、我が凡そ七錢五厘也▲電灯の光と提灯の光と相結ぶ不夜城の大通一哩許の間には夜半過ぐる迄自動車、馬車、支那人力車絡繹たる左右を半裸体の平民、結核白リンネルに納戸袴（土語にてパノン）といふにキッド短靴のハイカラ青年、白レースの胸衣に白襪（くつした）白靴のハイカラ女、金モール襟たるお役人衆に氣傲つたる英独仏人、しなり顔の葡萄酒人、汗臭い支那苦力など織るが如く行き交ふ。▲白象旗の赤と色提灯の赤との混がらかつた間を縫つて紙製の花つなぎの薄紫が続く、此花つなぎも色提灯と齊しく我が大阪製品たる事は少からず吾等の心を強からしむるので数間を隔てて並立てる紅白段々染の支柱と相映つて満目の街飾は全く日本

式の一語に尽く▲三井物産、山口洋行、大山商店、池崎父子商店はいづれも此大典に祝意を表して店飾に日本式を發揮せる中に渡辺商會の活動写真はアーチにイルミネーションを点じ奏隊の奏樂勇ましく廿間「約36m」に六十間「約110m」許の木造建物に紅提灯を吊し連ね盤谷市の一偉觀たるを失はず、而も其機敏なる御名代宮王宮棧橋御上陸の光景を早速フィルムに収めて珍し物好きの通羅人の喝采を博せり▲と書き来れば限りはなけれど盤谷市中の道すがら吾等異邦人の目に最も深き印象を与ふるは黄燈の雲を起して行き交ふ自動車の光景也、統計の不完全なる當國なれば其数幾何なるを知るべからざれど日本全国の總てを以てしても尚且一盤谷市のそれに及ばずと斷言すべし▲而して絡繹として続く自動車列は眞に極東一等國民の吾等をして後（しり）へに驚着（驚かす）たらしむるものあるが而もその乳巻と腰巻一つに洗足（はだし）といふ半裸体に「髪」の毛が「男」列の通羅女を乗せて風を切る景色は恐らく世界一といふべく文明野蠻背中合せの此一事通羅を説明すといはばいふべし（三宅生「通羅物語」二）、（三）盤谷の賑ひ、大阪毎日新聞1912年1月13日、14日。

以上より現在の国王王妃生誕祝と変わらぬイルミネーションが1911年当時から行われていたことが判る。当時、在タイ日本人中の最大の成功者と言われた、渡辺知頼は宣伝上手で、彼の巨大な活動写真映画館は、イルミネーション装飾だけでなく楽隊付きでお祝いを盛り上げた。彼は、伏見宮のパンコク上陸の模様も撮影して、直ぐに上映するという手回しのよさであった。

日本人居留民は、彼の活動写真映画館で、伊吹艦水兵の歓迎会を挙行し通羅芝居を見物させた（大阪毎日新聞1912年2月4日）。伊吹とともに来航した淀は千余トンの小艦（通報艦）なので、河口の浅瀬を越えてパンコクに入ることができた。オリエンタルホテル前に碇泊し、戴冠式では祝砲を轟かした。

連載 ⑧  
パンコクの日本人

## 在タイ10年の明治の農業技師 横田兵之助（一）

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

2017年8月

明治35年から同45年まで、10年間タイ農務省に傭聘された日本の農商務省農業試験場技師、横田兵之助（1868-1943）について、既に3回続けて書いてきた。前号までは岩本千綱の看板の下で紹介したが、岩本千綱の話とはかけ離れているので、岩本の連載は先ず中断して、内容に即した看板に替えることにしたい。

2011年10月号以来69回に亘って岩本千綱の看板の下で、明治期の日タイ関係の様々な局面に光を当ててきた。岩本千綱とタイ或はタイ族との関係は、その後も尽きることはない。1900年に東本願寺実力者の石川舜台に頼まれて仏骨奉迎事業関係で渡タイした。1903年後半には、大阪で大量のタイ紙幣を偽造してパンコクに持ち込み逮捕されたが、日本の領事裁判権により長崎に送還されて裁かれた。その後は、さすがにタ

イ訪問はできなくなったのか雲南省千崖のタイ族指導者刀安仁の顧問となつて千崖に渡つた。これらについては後日を期すこととしたい。

今後、横田兵之助関連で数回連載したのち、続いて、戦前の日本人会の実像に迫る、新たな史料を紹介する予定である。

横田が見た  
タイの衣食住（1908年）

横田は1908年に一時帰国した際、自分も会員である東京帝国大学農科大学乙科卒業者の同窓会誌の求めに応じ、当時のタイ人の衣食住について話をした。以下に全文を掲げる。

先づ衣服から申すと通羅の衣服と言へばパノンである。パノンは日本の袴とズボンとの中間のもの、即ち我が古のたつかけのやうで其に腰紐「じわひだ」のないものと思へば大

差がない。縞物はなくて無地に限る。色合ひは曜日によつて異なるので日曜は赤、火曜は緑（正しくはピンク）、月曜は黄、木曜は萌黄（正しくはオレンジ色）である。死亡の際などは黒色である。地は金巾「かなぎん」又は更紗が普通で上等のものは絹である。貴顕になると必ず銀引きである。パノンは貴族男女の別なく着るので一日には必ず一回取り換ひて洗濯をする。男子であれば下半はパノンで上衣は薄き襦袢「はだぎ」を着ける。斯様であるから金巾は非常に需要である。従て輸入高も大したものである。現在では英國品と日本品と競争の勢である。パノンの外に女の衣類としては、サルンと称するものがある。絹地であつて腰巻のものである。平生衣として着用する。地は木綿が普通である。尚女は14歳以上になると必ず乳帯をする。多くは更紗地である。而して既婚者で人の親となれば最早乳房を露出するも咎めぬ。

官吏は下はパノンで上衣はボタン付の白衣を着ける。此の式はキングより下は村長区長に至るまで同様である。

ある。服物は盤谷の上流社会では男女共に靴を穿つが、田舎に行くとき常に跣足である。如何なる草履沼沢に入るとも履物は用いない。

婦人は肩掛けを着ける。巾は太巾で長さは4尺許りである。日本品が非常に歓迎される。主に絹製である。帽子は男子は一般に用いる。普通は麦稈製或は羅紗、中流社会になると必ずバナマを用いる。

装飾品としては指輪、腕輪、耳輪である。其贅を尽すこと大したものである。腕輪の如き田舎の下婢輩すら十円以上のものを用いる。少し贅沢する人になると百円以上のものを用いる。指輪は大抵金製のものが銀製のものは殆ど無い。稍々高価なるものになるとダイヤモンド或はルビーの如き宝石入れとする。元来之等の装飾品は彼等唯一の財産で其他には一文なしである。故に家宝は常に己が身に纏つて居ると言ふ次第である。従つて時、処の別なく売却することが出来る。事実其点に於て彼等の質しとるところである。

次に食物である。世人は彼等を目



して非常なる粗食するが如く考へるが決して想像の如く甚しいものではない。却て日本人以上の肉食を嗜んで居る。又彼の地の旅行者の最も眼に就くは彼等の食物中に大蒜「ニンニク」及び蕃椒「トウガラシ」の多いことである。此は上天位より下は人民に至るまで同様である。暹羅人は獣肉よりも魚肉を好むので而かも魚肉は実に豊富なのである。野菜は盤谷附近では支那人の栽培するものであるから不足することはない。大根あり冬瓜あり甜瓜「マクワリ」ありで盛んである。然かし田舎へ行くと野菜には乏しく唯自然生の苜蓿、野草の嫩芽「わかめ」或は水草等を以て満足せなくてはならぬ。

主食物は日本と同様で米であるが、粘り極めて強い。彼の「もち」は我が「うるち」に匹敵する程である。故に消化は頗る可良である。暹羅人中にラオス人種と言ふのがあふ。此は常食として糯を用いて居る。糯にては到底労働に堪へ切れぬと言ふ。此人種は腕力強く又忍耐力もあふ種族である。米は虫雪を被ること甚だしいから皆「もち」にて貯蔵する。必要に応じて穀田「唐田」に入れて掘き白「しら」ける。米粒は長形であるから多少折れる。米糠及び粉米は豚の唯一の飼料である。食事は箸を用ゆることなく、五本指を以てする。故に飯はバラバラであるも決して困ることはなく口中に投げ込むのである。稍々ハイカラ連となると匙「さし」及びホー

ク「ホー」を用いる。最も他人なきに至れば直に本性を顯はし、五本に取り替ゆるのである。食物は単純ならず、種々の香味を混する。大蒜「ニンニク」を以てホー「香る」「さす」と名けて賣ひ喜ぶ。沢庵、味噌、醤油の如きはメーン「臭し」「臭い」と称へて排斥する。田舎のものは衣食住共に自給主義で、自ら養蚕をなし、糸を繰り機にて織りパノンを造る。又自ら田を耕し稲を栽培して米を炊「かし」ぐ。魚は或る時期に於て捕獲し、燻製として貯蔵し置くのである。果物は沢山ある。併し吾人は最初は不味であるが、慣るるに従ふて美味と感ずる。

料理は日本以上と思はれる。併し支那臭い所が多い。菓子製造は巧妙で何れも皆卵と米堅粉「メリケン」を用ゆる。凡て味付けには塩と砂糖を用いる。饅頭は木の魚と称へて非常に美ふも亦おかし。終りに住宅である。都と田舎とは全く異なつて居る。都は全く西洋式で而も暹羅はチーク材の名産地であるから、実に立派なものである。又煉瓦造りも少くない。紫櫓は貴重ではなく普通の柱は皆此材である。杵又然り、車輪又然り、一向有難くない。田舎は其形状天照皇大神式である。屋根は屋根葺草あり葉を用いることなし。トタン葺も近來流行して來た。

用器では、鐵なく鉋「かんぱ」なく鑿「のこ」の如き無論無い。唯「な」と「斧」の二である。以て建物の大槪を推察する事が出来る。竹は日本のものと異つて繩の代用をする。何なるともよく纏める事が出来極めて重要なものである。太き竹は割て系に代用され、細きは其俣繩の代りとする。そこで田舎の家屋は全く掘建て小屋で、高さは中位で水牛の入り得る位である。割り木を立て、綴て竹と釘「くぎ」とを用いる。暹羅人は修繕と云ふ事は全く知らないから雨漏りなどが出来ると其俣放棄して別に新奇に建築するのである。夜

分就寝は二階に於てする。戸じまりをなすにも戸がないから全く明け放しである。其の代り犬が夜番をする故に夜分訪問を為す時は、先づ人を呼び犬を捕へて後、上らなくてはならぬ。然らずば向座の二三ヶ処も噛み付かる事稀でない。

來客の際は、先づ檳榔を出すので殆ど我國の茶か煙草の如きである。客はガリガリ之を噛むのである(横田兵之助「暹羅國の衣食住に就て」、『講義會報』第75号、1908年12月、56-58頁)。

### 在タイ4年余の中村辰治のタイ觀察

台湾總督府に技手として勤務していた中村辰治(1870-1938)は、外山龜太郎が福島養蚕学校校長であった時代の教え子であり、外山に誘われてタイの蚕業プロジェクトの一員に加わった。1903年12月末にバンコクに到着した中村辰治は、1年半バンコクの蚕業局で働いたのち、1905年半ばにコーラート支局に移った。任期満了で台湾に戻った直後の1908年5月7日に次のような講演を行った。中村は部分的なが

ら、横田の上述の話が、必ずしも一般的ではないことを示唆している。

農業、国土の広い割合に人口が多くありませんで、農を以て國民の重要な職業として居ります。従て農業に關することには種々の施設がありまして、私は蚕業の改良に従事して居つたのであります。米は此の國の重要な産物にして亦チーク材は有名な産物の一つであります。他には農事上見る可きものはあります。米作法の如き灌水の便もなく手入も甚だ不充分にして、雨期になつて雨が降れば苗代に粉を蒔き、それから挿秧「田植」するのであります。従て収量も本島「台湾」二期作の半分位であります。其他の作物も甚だ簡単な栽培法で肥料の如きは殆ど天然に放任してあります。尤も都會近傍の農家は肥料「中国人が野菜畑

に撒く人糞と思はれる」を施すことを嚴禁せられてあります。市街近郊は歐米人が散歩する故肥料を施すときは臭氣を放て散歩の妨害になると云ふので、市街を去る二哩間は施肥を禁ぜられたのであります。

農業教育、私の居りましたコラート「コーラート」は最初外山博士の居られました所で、一養蚕場と之れに付随した農場があります。其の農場は面積百七十來「ライ」ばかり(一來は日本の一反六畝に當る)ありまして、此處で生徒を養成してあります。其の生徒は卒業後各地の支場に雇はれ働くことになつて居ります。既に第一回の卒業生を出してあります。普通教育は実に不完備にしてバンコクに於ては各國より教師を招

き研究中であります。其他は寺小舎に生徒を集めて教へて居りますが、田舎に參ると一人として文字を読むものがなく、庄長サンが命令を受取ても読むこと出来ないから配達人が読むで聞かせてから帰ると云ふ有様で、教育の程度が甚だ低いのであります。

氣候、氣候は赤道より遠くありませんため私の居つたコラート「コーラート」の如きは非常に暑くあります。而して年中が雨期と乾期とに別たれ雨期は五月から十月迄其の他は乾期で、雨期には旅行が甚だ困難で地面は殆ど水で覆はれて舟を使用すると云ふ有様、乾期になると反対に水は全くなく飲料水にも欠乏するのであります。又田舎には宿屋なきため寺の一室を借りて宿るのであり

ます。

旅行する人は寝具や蚊帳食品等一切を牛車に頼んで旅行しますが、其時は乾期でありますから飲料水に窮するのであります。……

風俗、暹羅は暑いから殆ど衣服の必要なく白衣一枚あれば充分であります。男は常に腰巻のみを巻き女は頭巻を一寸ばかりに伸し日本の手拭の様なもので、乳房や腰を露「かく」すのみで極端なものであります。が、貴族の人は皆派手で土曜日には紅い「正しくは紫の」服、日曜日には水浅黄「正しくは赤」と云ふ様に一週間毎日変更するのでありますが、其れは僅かの貴族に限るのであります。

宮で外山博士が日本の養蚕業をさされまして、日本では国母陛下御手づから養蚕をやられて居ると申しましたので、今日は暹羅農務次官がやる様になりました。私も貴族や人民を集めて話した事があります。或る人は暹羅国は非常に貧乏で百姓でも紫檀や黒檀を使つて建築して居ると云ふて居りますが、それは昔の事で今は深山に行かなければ見当る事が出来なく、私は余り見当りませんでした。

国情、……日本人は欧米人と同様に治外法権を持ておるので、仮令悪事をしても暹羅の警察権で処罰せらるる事がないのであります。「この

部分は中村の来タイ前後に生じた若干本千網の偽札持込事件を意識しているように思われる」……

日本人は欧米人と同様に治外法権があります。支那人は其の権利なく只今の所々領事館もなく、実に気の毒な有様であります。本島「台湾」人は其処に八人居りましたが、其の一人は大稲埕の茶商、一人は台南の人、一人は彰化の砂糖商人等皆日本政府の保護を受け治外法権により自由に商売して非常に便宜を得て居りますが、支那人には其の特典がないのであります。

昨年ニユラット「誤植、コーラート」にベストの流行甚しく停車場附近の市街を焼き払ひましたとき、支那の或る米商は倉庫の米を皆焼かれて数千円の損害を受けました。然るに印度人にして同様の損害を受けたるものは其の損害を弁償されました。印度は英領であるため英人同様の取り扱ひを受けて居るも、支那人は治外法権を認められないから非常に不利益であります（中村辰治「暹羅国一斑」、『台湾農事』第18号（1908年）、11、14頁）。

### 安井哲子の見た シャム貴族の風俗

本誌2011年3月号で紹介したが、安井哲子（本名テツ、1870-1945、後に東京女子大学学長）は、サオワパーボンシー皇后が創立された皇后学校（Queen's College）に招聘された3名の日本人教師の長として、1904年2月から3年間に在タイし、タイの貴族層の子女教育を担当し、親しくタイの貴族社会に接した。彼女がタイで過ごしたのは、横田や中村と同時期であり、その時代のタイ貴族の衣食などを次のように語っている。

服装のこと、服装のことを申ししますれば暹羅の女は貴族を問はず腰部には長さ九尺「2.73m」巾三尺「0.91m」位のサルーンと呼ぶ一枚の布を巻き付けて居ります。習慣と言ふものは恐ろしいもので、それを巧みに両方の腰から大腰部に巻きましてその端を後に挟むのであります。

それがそれで立派に股引を穿いたやうになりまして腰まで掩はれることになるのであります。サルーンの品質は上流の婦人の使用するものは絹布であります。下流のものは勿論木綿であります。サルーンに就いて面白いことはその色が曜日によって違ふこと、日曜日には赤、月曜日には黄などと言ふことになつて居ります。それで子供等などは母のサルーンの色に依つて今日が何曜日であるかを知らないのであります。

胸はやはり長い布で巻いて居ります。乳房を現はすのを非常な失礼と考へて居りますからであります。

上体には何を纏へるかと思しいますれば上流の婦人は西洋婦人の上衣のやうなものを着ます。これをブラウ

スと申しします。只違ふのは西洋婦人は上衣を着てその上でコーセットを着けますが、暹羅の婦人はサルーンを巻いてその上に上衣を着流しにするのでありますから上衣の裾が腰部まで長く下つて居ります。それですから暹羅の婦人の着る上衣にはその裾が縁をとつて装飾を施してあります。上流婦人の上着には随分立派なのがありまして従てそれを作るに沢山費用もかかることと思はれます。下流の婦人は大抵洋服の下着のやうなものを着て居ります。暹羅は非常に暑い国であります。暹羅は非常に余程熱い階級の者でなければ裸体で居るものはありません。

足は労働者などは跣足ですが、中流以上の婦人になりますと長い靴足袋を穿きまして靴を穿きます。ここは西洋人と少しも違ひません。

次に頭髪のことを申ししますが、成人せる暹羅婦人は散髪でありまして日本の男子の五分刈よりは少し長くありましてそれを撫で上げて恰好よくつくらつて居ります。併し幼時は髪を剃つてしまひ、その残した所の毛をぐるぐる巻いて拳のやうに固めて置きます。この結び玉をトップノット「topknot」と申しますが、成人すればこれを切つてしまひます。その時に盛大なる元服の式があ

ります。上流になるほど元服をするのが早くありまして、大抵十一三歳の頃であります。元服の式は一生中の大典であります。その式は三日に亘ります。それでその三日間も毎日その子供の着物が変わるものであります。上流の者になりますれば金色燦爛たる飾を施します。式は仏式でありまして僧侶が来て読経をしましてその第一日に近親の者がトップノットを切るのであります。私が自分の教へて居つた子供の元服の式に招待されて参りましたのは二日目でありましたが沢山の来客がありました。非常にご馳走になりました。暹羅の婦人は散髪をし居るのは歴史上の故実に基くのださうであります。昔暹羅の国が外国から征（せ）められて国危かつたとき、婦人の髪を切らして戦場に出して味方の多いやうに虚勢を張つたことがあるんださうで、それ以来の習慣だと言ひて居ります。勿論氣候の上から言つても散髪の方が自然身体に適するのであります。

からその関係もあることと思はれます。

食物のこと、食物は主食物は米で、副食物の種類は鳥獸魚肉野菜など大体日本と違ひませんが、一座の中央に共同の大皿に総ての食品を盛つて置いてそれから各自小皿に分（わ）かちながら匙（さし）で食べるのであります。所が下流社会になりますと右の手の指で掴んで食べます。外人から見ますれば不作法であります。がなかなか巧妙なものです。所で一家で食物の調理は誰が司るかと思しいますれば下流社会では勿論一家の主婦がいたします。これは大道で下等社会の婦人が食物を調理しながら売つて居るのを見ても分ります。併し上流社会になりますれば料理人がありまして調理するのであります。それは暹羅と言ふ国は一家に非常に奴婢の多い処でございまして、それ等の奴婢は邸内の主人とは別棟

の家に住んで居るのであります。其処に庖厨があります。そして主人は勿論主婦たる者は雇人の住所へは一年に一度も顔を出しませんから従て食物の調理などに干渉などする筈がないではあります。つまり暹羅の上流社会の家は極めて貴族的で主婦は雇人と伍することを以て自分の価値を傷けるものと考へて居るのであります。併し家庭内のことは其の深窓でありますから詳しいことになりますると到底知ることが出来ません。

暹羅の婦人は一般にその性質が剛巧であります。何でもよく了解いたします。手先の仕事などもなかなか器用であります。自分で着る洋服の下着なども家へミシンを置いて作つて居ります。教育は男女共に極

めて幼稚園でありまして日本の普通教育より上の教育は国内では授けて居りません。これで婦人の知識の程度も推し知るべきでありませう。社交のこと、暹羅には婦人の社交と言ふことは殆んどありません。勿論外交官などの仲間では婦人も往々交際場に立ちますが一般には、月に何度かの仏教上の集会有るのみでありまして、婦人会の集會とか又その事業とか言ふことは一更耳にしたことはありません。併し暹羅の婦人でも外国に行つて居つた者は非常に外国語が上手であります。前に申しました通り暹羅では教育が進歩して居りませんものだから皇族や貴族や金持などは外国に永年留学して勉強して来ますので、夫と同伴して外国へ行つて来ました夫人方はなかなか流暢に外国語を話されます。(安井哲子「暹羅の女」、『新日本』第3巻11号(秋期増刊号)、1913年11月、278-280頁)

ようであるが、今日でも広く行われているのは前国王の誕生日である月曜日の黄色、皇太后の誕生日である金曜日のブルーくらいである。しかし、110年ほど前のバンコクの貴族社会では、安井が子供達は母親のサールの色でその曜日が判つたという程に、曜日毎に決まった色の服を着用していたことが判る。但し、それは中村が書くように、貴族社会に限定されたものであつた。曜日の色を、正しく言えたのは貴族社会に最も近かつた安井だけで、横田も中村も覚えてない。

横田と安井が語っている男女の腰帯は、チョーンカパーン(Choonkapan)という方法で穿いている。チョーンカパーンの着用方法は、いくつものタイ語ユーチューブで見ることが出来るが、それによれば、横3・5mほど(安井は長さ2・73mと書いているがこれは彼女が教えた子供達から取つた長さのよう、ユーチューブでは大人用の標準的な長さは3・5mだと言っている)、縦1mほどの1枚の長方形の太布を横にして真

ん中で折つて、腰・大腿部分に一回巻いたのち、布の両端を合せて体の前面に伸ばす。次いで両脇から出て来た布の上部を揃まして、残りの長く伸びた布は裾から折りたたんだり巻いたりして丸めたものを、股の下を通して背中側に出し、その先端を腰布に挟み込んで絡める、というものである。

1940年代のビブーン政権の新文化運動によつて、チョーンカパーンは、クメール伝来の遅れた外来文化でありタイ本来の文化ではないとして排斥され、今日ではタイの伝統文化によつた式典や行列あるいは時代劇などでは見る機会はない。

今日タイ料理は、スプーン(匙)とフォーク(箸)の組み合わせで食べ、手づかみで食べるタイ料理は、イサーン料理の糯米ぐらいしか残っていない。右手の指を用いて手づかみで食べるのが、タイ古来の食べ方だが、横田の談話から20世紀初頭には貴族中のハイカラ連に、スプーンとフォークを用いた作法が広がり始めていたことが判る。同

じく1940年代の新文化運動で、手づかみの食事は排斥され、スプーンとフォークの組み合わせが推奨された。その際、両者の組み合わせは、他国に例を見ない、タイの独創であると自慢された。

女性の短髪、髪型、靴履、横帯を巻くことなども、同じく新文化運動で排斥された。

詳しくは拙稿、「タイ国の立憲革命期における文化とナショナリズム」、『岩波講座 東南アジア史第7巻』(2002年)をご覧下さい。



連載 ⑧  
バンコクの日本人

## 在タイ10年の明治の農業技師 横田兵之助(2)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授

村嶋英治

クルンテープ  
2019年9月

### 日タイ修好 130周年記念特別展

東京国立博物館で、8月27日まで開催された、日タイ修好130周年記念特別展を見学した。そこには、本誌8月号で紹介したチョーンカパーンに用いる一枚布も「腰巻」という名で展示されていた。その作品解説に曰く、

「腰巻 赤地火焔形花文様金更紗」1枚 19世紀、インド・コロンデルコースト産、木綿、手描、金箔、長367・0〔cm〕、幅110・0〔cm〕、東京国立博物館所蔵、

インド西で染めた赤色が鮮やかな、パーヌン(Phannung、巻き布)と称される、腰に巻いて用いる巻きスカートである。ボーダーが複数段になっていることから、男性用である。中央のフィールドに繰り返される火焔形を連ねたような模様はライ・イ・チョンカパーン、あるいはライ・イ・ブナーカーオン(Thai Phum Kaedon)

と呼ばれており、染織のみならず、タイのさまざまな工芸品や建物の装飾に見られる模様である。この更紗もまた南インドのコロンデルコーストで染められたものだが、タイに運ばれたのちに、さらに模様の輪郭に沿ってゴムの樹脂を接着剤とした金箔の模様を加えている。このように金箔で加飾された更紗をパー・キエントーン(Pha Khiao Thong、金で描かれた布)と称する。金箔を施した更紗は国王や王妃といった王族のみが使用できた。表面は滑らかにされて光沢があるが、これはタピオカ粉と小麦粉を混ぜて水に溶いた液に布を浸して乾かしたのちに、布をたたき、寶貝の背で磨いて加工したためである。この加工もまた、インドからタイに輸入されたのちになされたものである。このような光沢のある更紗は日本にも輸入され日本では「蠟引更紗」と称された(小山(図録『タイ・仏の国の輝き』、2017年4月発行、233頁)。

これから、8月号で述べた、チョーンカパーンに用いる一枚布

のサイズが大きなことや、横田兵之助が書いている「蠟引」の意味も判明する。

この特別展には、本誌2015年3月号で紹介した、生田「織田」得能が1890年にタイから持ち帰った貝葉と貝葉の包み布(包綴)も展示されていた(現在大谷大学所蔵)。

筆者が関心をそそられた展示は、1616年に尾崎九郎左衛門がタイから持ち帰ったのではないかと考えられる、平戸市是心寺の仏陀立像(35センチ)(前掲図録、230-231頁)である。これは日本にある最古のシヤム仏像ではなからうか。

日本にあるシヤムの仏像は、この外にも数例あるがタイから1908年11月に請来した横濱三會寺の2体の仏像(仏陀涅槃像、仏陀坐像)も展示されていた。涅槃像は大人の人間に近い大きさである。一方、仏陀坐像は10歳くらいの子供の大きさ

で、台座には仏暦2446年(西暦1903/4年)に3人(僧侶と多分僧侶の両親)が建造したことが記されている。

曜日のタイ仏像も展示され、同時に8月号に記したと同様な曜日の色も説明されていた。色について、ただ一つだけ8月号記載の説明と異なつた曜日は水曜日であつた。展示によれば、水曜だけは日中と日没後の色が別であり、日中の色は緑、日没後の色は黒だそうである。

1911年12月初めのラーマ6世王の戴冠式参列のために、日本から伏見宮博恭王が御召艦伊吹で来タイしたことは本誌7月号で紹介したが、「伊吹乗員の土産 薩摩は暹羅産猫および鶏哥(インコ)などを買ひ且一人として殆ど仏像を携帯せざるものなし」(大阪毎日新聞、1911年12月20日)という記事に見るように、殆ど全乗組員が、シヤム仏を持ち帰ったという。かつてタ



イを訪問した日本人が、日本に持ち帰り、日本に残っている仏像の数は相当なものである。横田兵之助も多数のシャム仏を持ち帰ったが、その中の特別の由緒がある一体を、長野の善光寺に寄贈した。この仏像については、後日詳細に紹介したい。

### 1906年末の横田のシルク立国のための意見具申

シルクは戦前日本の主要輸出品であり、ピーク時の1929年には約220万戸の農家が養蚕に従事していたというが、農林省統計によれば2013年の全国の養蚕農家はわずかに486戸である。2005年には1590戸あったが、8年間で3分の1以下に減少している。まさに絶滅寸前である。

筆者の住む小金井辺りも、かつては桑園が広がっていたようである。自宅の狭庭にも桑が天竺(てんとう)生えしている。近くの広場には、桑の太木が数本残り、毎年6月半ばには大量の実を付けている。今時の子どもたちは、赤とんぼの歌詞のように「小籠

に摘むこともしないので、野鳥の天国と化している。

久しく本物の桑畑を目にしないので、東京で桑畑を見ることが出来る場所はないだろうかと考えて、思いついたのが、45年ほど前に通学の途中に目にしていた東大農学部弥生キャンパス内の桑畑である。久しぶりに訪ねてみると、枝葉を刈り取られた膝丈くらいの太い株(新芽が吹いている)の列と、低い株から長くたわわに枝葉が伸びた列とが整然と分かれて並んでいた。都心の桑畑は、東大と皇居ぐらゐにしか残っていないのかも知れない。

さて、横田兵之助(1868-1943)がタイ農務省に雇用されていたのは、日本のシルク産業が最盛期の時期である。

横田は東北タイの養蚕地帯の農民生活を具に視察し、この地帯では、自給自足の米作から現金収入を得ることが出来る可能性は殆んどなく、養蚕が有利な道であることを確信した。そのためには、改良養蚕の普及が必要だが、それに成功し輸出産業になれば、個々の農家の収入が

増し、悲惨な生活を改善することが出来るだけでなく、政府に多大な税金収入をもたらすと考えた。横田は、富国強兵時代の明治日本の官吏らしく、タイでも、養蚕を発展させ、輸入代替どころか輸出産業にまで育て上げ、財政収入を増大させることで、近代国家の建設に貢献しようと考えたのである。

横田は、単なる養蚕技術者を越えて、シルクによりタイを発展させる道筋を考えていた。彼の国士的情熱は、養蚕局長のペンパナボン親王に評価されたものと思われる。

1902年9月に着任した横田は、病気がちな外山が1905年1月に帰国する前から、タイ政府の養蚕事業に雇用されている日本人たちの実質的なリーダーであった。1905年にコーラート支局が開設され、続

いて1906年にプリーラム支局が開設されたのち、1906年末、横田は次ぎに必要なのは各郡に製糸伝習所を設け、養蚕農家への普及を図ることであると、自分自身及び日本人被雇用者全員の進退を賭けて、ペンパナボン親王に次の意見具申を行った。

この意見書の日本語版は、横田兵之助「暹羅蚕業改良策に就て」のタイトルで、『講農会会報』第73号(1907年10月、11-18頁)に掲載されている。講農会は、東大農科乙科の現役学生及び卒業生を会員とした会である。1902年9月に横田と共にタイに赴任したが、2年足らずで帰国した三島敏行が、同会幹事であったので、その会報に掲載したのである。

三島は、この意見書を「左の一編は暹羅なる熱帯の蚕域に於て幾多の辛苦困難と奮闘し今や同国成功者として政府の信任浅からざる横田兵之助氏の養蚕改良意見として頗る適切を極む

今般政府に献策せる原文を得たるを以て之を反訳して本誌に載する事とせり(三島生)」と紹介している。掲載された日本語版は誤植誤字が少なくないもので、修正して下に引用する。

不肖職を当局「養蚕局」に奉ずる茲に四年其間日夜当国蚕業の改良に就き考慮する所あるも未だ以て政府の希望を充し人民の満足を与ふる場合に至らざるは不肖の最も遺憾とする處なり。回顧すれば不肖赴任の約二ヶ年間は凡ら Bangkok に在動し技師長外山博士の下に Seraboon 局の創設を助け内地の蚕業視察するの好機を得ず会々「たまたま」内地出張の被命に接するも此は只特殊の命に依り一小区域を短時日に旅行するに止り普く当国蚕業の中心点を視察する能はざるに依り自ら当国蚕業改善策に付献策する處あるも間々適切を欠き杜撰の議を免れざるものあるは又止むを得ざる處なり

当時不幸にして技師長外山博士は任期中病魔の襲ふ處となるや全局の

責任を一身に負ひ計画を立て「ラツタナコーシン」123年度「1904年4月-1905年3月」の予算編成の任に當り Seraboon 局は教育部を設け凡そ此業の中軸たる人物養成を主眼とし傍ら研究部を設け当国に最も適当なる蚕種を作り出さしむる事となし更に事業部として民業開発を主とし Bangkok 市に一模範場を設置する方法を講ぜしに幸にも当局者の採用せらるる處となり不肖暫て Bangkok 局創立の重任を帯び爾來約一ヶ年にして桑園の開墾より建築物等殆ど完成の域に進めたり

不肖其間に曾めたる実験は共に内地事情の幾分を了解するを得たるも元來 Seraboon は当国蚕業の主産地を去る遠く隔り自ら斯業の誘導奨励上不便少なからざるを以て一層進んで主産地に接近する Burin を選定し一局の設置を企たるに幸又露納せらるる處となり此不便にして生活上最も不快なる場所たるを顧る迄なく進んで当局の創設に力を尽し今や桑園及工事も又將に完了を告げんとするに際せり。然るに当国蚕業は去る六月來多数の女生徒を募集し創業當時設備の不備なるにも不拘十數回に大飼育を試み局員の指導其宜しきを得今や殆ど予定額の取揃高を取むるに至れり。不肖其間に得たる幾多の至驗と共に蚕業主産地の視察により茲に

全く民情並に蚕業の真況を詳知する事を得たり。然るに茲に此実験を重ね民情に明なると同時に又幾分か失望の感なき不能。今茲に急遽なく卑見を開陳して猛省を煩さんとする。一

体内地の人民は性来情急にして愚昧なる事到底不肖等の想像外にして今日迄実行し来りし方法即ち Seraboon 兩模範場に於て如何に進歩したる養蚕製糸の術を示し之が改良を促し誘導を試するも此方法にては逆も一般人民に普及し改良法を実施する等の事は殆ど不可能の事に属し近き將來に於ては全く絶望とも云ふべき悲しむべき報告を呈するに止むを得ざる場合に遭遇せり。現に本年度商局にて養成す可き女生徒迄最初の計画にては広く各村落より集め來り養蚕の方法より製糸の術を練習せしめ修得したる際には各自の村落に帰らしめ此等のものに依り民業の改良端緒を開かんと欲せしも此等女生徒すら集めるに中々困難にして現に Seraboon 局に於いて練習しつつある女生徒の如き概同市内の子女にし

て未だ曾て蚕家に従事したる事なく従て此等のものには其技術を教へ或は年限の後に至り各自家に帰らしむるも進んで斯業に従事するか大に疑はし否恐らくは之れなからんと思はる。

Burin 局の女生徒の如く又当市内若くは付近村落のものなれ共此等は現に各自宅にて従事しつつありし業なれば修業の後も斯業に就事するの疑なし。然りと雖ども之れ只一小区域に止り到底政府の望を達し広く一般人民に普及し能はざる現況夫れ如何。而して其生徒募集の方法の如き自ら出張して人民に説き或は地方官吏をして説諭せしむる等種々の手段を講ずる所あるも未だ一名として重なる産地より来るものなし。斯る実況にして年々多大の費用を商局に投じ居るも其効果の及ぶ所を思ひ来れば転々寒心に堪えざるものあり。一休蚕業局を設けられたる目的の要は政府自ら利するを期せらるるは勿論なれ共如何に商局に於て養蚕に製糸の大成功を告げればとて



一ヶ年に二三万余の純益を得るは殆ど難事に属す。今仮に一ヶ年二万余の収入を此両局に依りて増せば、政府の財政上より見る時は、大湖の一滴にも似せざるものにして、畢竟当局設立の目的大主眼は、当国蚕業を刷新し改良法を普及し将来に於て幾十百万の富源を此蚕業に依り開発するの望る国家として当然務むべき責任なりと信ず。単に政府は此局に依り所得の増加するの目的なれば、何をか苦んで斯る迂遠なる方法を採るの要あらんや。

然らば当国の蚕業は他の蚕業国に比して不利なる原因の存するに、此は大に研究を要すべき問題なり。此問題に付聊か解説を試みん。元来生糸は蚕の生む処にて其蚕たるの生命全く蚕業にあり。苟も此蚕業にして之が生産に要する入費高価ならんか到底蚕業の経済は得て望む可らず。余は茲に蚕糸を以て国の命脈を維持する日本帝國の例を採り比較せんに日本の蚕業者は桑葉一キログラムに要する生産費は通例七セロ強「0・11バーツ」に当り斯る高価の桑代を払ふても尚年々発達進歩を遂げつつあるは、実に明かなる事実なり。然るに余の當国に於て実験せし処に基き調査したる桑葉の生産費は殆ど日本に比し其半額だにも過せず。値に三セロ弱「0・046バーツ」

に止る。豈驚かざるを得んや。斯の如き低廉の桑葉を使用し蚕を飼育して何ぞ利益なきの理なからん。日本の蚕は二化性若し三化性なるを以て、爾は堅実に糸質優美なる。遠く当通産の及ぶ処にあらざるも、当国蚕は年中絶えず飼育し得るの利あると共に、吾見強健にして飼育容易なるの利益ある点より考ふれば、優に当国蚕業の前途有望なる又明なりとす。況んや当国の蚕業は農家唯一の副産業にして従来より自家用として戸毎に飼育せらるればなり。恐くは當国農家に於て米作と養蚕一般に行はる業は他になからん。従而之が改良は今日の最大急務にして又無限の富源たるは深く信じて疑はざる處なり。

今茲に養蚕と米作経済に就て内地の景況を曰はん。米作の収益は下記の如し  
收穫 一畝に付 20 Sato  
粗「毛」 價 100 Sato に付  
「S」バーツ 20・00  
米作反別 12 Sato に付 收穫 240 Sato  
此の價 T\$ 48・00

此の計算は当地方上田にて豊作なる年柄の收穫とす。初の売買は内地には余り行はれず。如何となれば米は各戸に耕作するを以て殆ど其需用なし。交通の不便なる所にありては、鉄道の便開くるにあらざれば到底其販

路を見出す能はず。只僅に市内に接近する場所に於てのみ自家の需用の外他に耕作して収益を挙げ得るも、其努力に於ては苗代の播種より本田の耕作地は除草收穫等に至る迄、凡て日中戸外の労働にして之を蚕家の室内労働に比較し其難易の差、実に霄壤も雲泥ならず。『雲泥の差あり』今一農家に於て一ヶ年六十瓦「グラム」の蠶量を生くは、はたきたて飼育して製糸するには僅に婦女子一名にて足る。其蠶園の如き屋敷の近くに設くるに於ては朝夕婦女子等の手入位にて足り多くの労を要せずして而も其收穫したる蠶を改良法に依り製糸したるには少くも4200「バーツ」以上の収入ありて水田12 Satoの収入に伯仲し加も蠶は一旦生糸に製せんか各種目方も少く運搬に便に貯蔵容易なる等何れの点より觀察するも、当国蚕業界の有望なる論を待たざるものなり。

余は内地数百哩に渉る沃野を跋涉し空しく雑木雜草の繁茂に任せたるを顧み一方國民の生活情態を視察する毎に可憐の情禁する不能。農民は身に弊衣を纏ひ其住宅の如き辛じて雨露を凌ぐに止り、更に衛生の何たるを解せず一旦病に罹れば医費なくして只死を待つの外なき其慘憺たる実況余は茲に詳記するに忍びざるものあり。

余更に一步を進めて政府の財政策に就き一言せんに、國運の進歩に伴ひ財政は年と共に膨脹して停止する處なきは、予内列國殆ど其軌を均する處なり。而して其財源たる國民生活の程度は實に上記の情態にあり。政府は將來此膨脹して停止する所なき國費の財源を果して何れの方面に向つて求めんとするか。若し今日の俾推移せんか邦家の前途は大に憂慮する所あるを恐る。当局為政者たるもの深く前途に鑑み今に於て民衆開闢の策を講じ國家百年の大計を立て其基礎を鞏固にせざれば後日大に悔ゆるあらん事を恐る。

凡そ一國獨立を為すには各其特色なからざる可らず。英の商工に於ける米の農工に於ける。何れも其國情に鑑み一定不變たる國是を楯とし國家は競て民衆に保護を與へ獎勵を施しつつあるは明らかなる事実なりとす。然るに當國は工業を以て立つべきが將又商業に依るべきか。國民

の性質其他萬般の狀態に照せば到底商工を以て國是たるべきを許さず。只々當國は農業あるのみ。凡て蚕業に限らず米作に留らず麻其他纖維植物の如き煙草の如き其他の染色植物の如き「ム」栽培の如き將又牧畜の如き農業方面にて多々有望ならざるはなし。然るに従来に於て當局者は農業上如何なる保護政策を加へ獎勵を施したるやを疑ふ。財政策の要は如何にすれば政府の歳入を増加し得べきやの点にあらざりて如何にすれば政府は財源を豊富にするやの点にありとす。諺に曰はすや幹根枯れて枝葉の繁茂を望むべからず。畢竟國家の富は國民の富に基づくや多言を要せず。為政者たるものは深く反省せられん事を望んで止まざる所なり。

不當幸に賢明なる殿下の下に加も此前途有望なる蚕業國に職を奉じてより四ヶ年其間深く當国内地の民情を視察すると同時に蚕業に精通し茲に當国蚕業の刷新上最後の一大斷案を案出し殿下に呈するは、不肖の責任と信ず。徒らに事業の成否を顧みず俸給に安んずるは不肖等の本心にあらす。幸に殿下にして別記の自説を

採用せられ實施を速かにせらるるに於ては當国蚕業界を一新するのみならず又一一大財源を開闢し國家を安寧ならしむる唯一の良策と信じて提出する所以なり。

一、當分の内主なる蠶業地に対し法律命令を發布して一定の蚕を飼育せしめ改良器械により蠶糸をなさしむるべき事

一、製糸伝置所を設け改良器械により蠶糸の練習をなさしむる事

今之れが理由及び方法につき聊か解説を試みん  
抑も蚕の飼育は蠶の種類、家屋の構造、人手及桑葉等種々の点より割出すべき問題にして當国の蠶種は幸ひ多化性にして桑の如きも五六月の頃より十二月の頃迄は絶えず繁茂するによりこれを數回若しくは數十回に分ち飼育することを得自ら一時

に人手を要することなく住宅の一部にて飼育し得るの便あり且其の飼育蠶量の如き年と共に増加せしむるを以て適當と思はる。一、蠶糸を飼育せしむるに法律命令を以てするは随分突飛なる政策にして又聊か圧制の嫌あり。一見實施上余程難く感ぜらるも此は全く内地の民情に通ぜざるの見にして不當等は信ず。此方法の實行は頗る容易にして彼等人民に不平の起るべき理由も認めず。現に蠶糸は從來より戸毎に行はれつつあるをなれば政府はこれに一方相當の補助を與ふに於ては彼等は喜んで之に従事するや疑なし。補助とは何ぞや各村落毎に當分の内一二台宛の製糸器械を配布し之れによりて收穫したる蠶を練糸せしむるなり。これが練習の如きは各地 Amphur 郡役所の在地に製糸伝置所を設け當局にて養成したる女生徒を一名若しくは二名宛派遣して各村落の子女をあつめ各自收穫したる蠶を持ち來らしめ蠶糸の練習をなさしむる時は、彼等は頗る Korat Burum 等の遠距離の地に來るの必要なく容易に來り其技を練習するや疑なし。然る時は法律命令により飼育せしめ收穫したる蠶は凡て改良器械により蠶糸をなさしむる事を得。其の生糸の市価の如き今日のものに比して三倍若しくは四倍となり。其労少なくして結果

大なれば初めて彼等も其必要を認め利益を知り年と共に其産額を増加するは理の見易き所なり。初めこの方法を行ふに當り政府は無代償にて多數の器械を配布する為多大の費用を払ふ所あるも、これらの損失は他日大なる利益を生み返して來るの時あるべし。即ち一旦改良發達の域に達せば其の時に當り生糸生産に對し相當の課税をなすも人民は一点の不平なきは明らかなる事實なりと信ず。現に今日に於ても商品としての生糸に對しては八分以上の課税を成しつつあるにあらざるや又其器械の如きこれを遠く外國に仰ぐの要なし。各地の監獄にて製作せしむる時は非常に低廉に製する事を得べし且つ實用に適し得べきものなり。今この方法を Burum 州内一二の Amphur 所轄内に施し其効果如何に鑑み他の蠶蚕の行はるる諸州に實行せんか。余り多くの手数と費用とを要せずして容易に蠶地全般に應用し得べきものなり。若し此方法にして全 Monthon Korat Monthon Ubon Monthon Udorn の三州に遍く實施せられたる場合を想像する時は其効果の膨大なる望るべく産額に達し優に世界の一大蚕糸國の班に列するや明なりとす。今其効果を一層詳説せん

Burum 全州の人口は八万九千





余にして其の戸数二万余戸とす 今  
飯に一戸の飼育費を一年六十瓦  
とする時は其取酬高は五十瓦「ギロ  
グラム」となりこれより製糸せらる  
べき生糸量は二匹乃至三匹半となり  
其価は四十二銭「バーツ」余となる  
彼等人民の生活程度よりすれば四  
十二銭は僅に一戸の生活費を支へ得  
て余あり 然る時は他の業により得  
たる分は全く剰余となる 此を以て  
租税其他の雑費を支払ふに於ては何  
の困難もなく安泰に生活する事を得  
べし 若し一戸四十二銭宛の収入を  
Butun 全州に計算する時は其収  
入合計実に八十四万銭にして この  
巨額の額は単に蚕業に由り同州内の  
収入となる 仮りに此中五割を納税  
せしむるものとする時は四万二千銭  
に上り 即政府は年々此生糸より  
Butun 一州より四万二千銭の財  
源を得る事となり茲に初めて政府人  
民共に利益を得るの結果となる。

座ながらにして價格の適当と思ふ時  
に販賣する事を得るものなり 然る  
に當國に於ては未だ度量衡の制度完  
からず爲めに狡猾なる支那商人に不  
正の利益を占めらるるの恐れあれば此  
等の商品は予め Butun 局々員立  
会の上内外市場の相場を参照し此が  
價值を定め同時に政府は各商人に競  
買せしむる時は自ら売品に對し商人  
に棄ぜらるる恐なく又政府は別に一  
定の商人を選定し一手買入を爲さし  
むるも可なり 要するにこれが売買  
は凡そ各地方 Agent 役所に於て  
官吏立会の上日を定め製品を人民に  
持ち来らしめ賣買を爲さしむるもの  
とす 斯くの如く政府の保護行き届  
くに於ては徒らに商人に法外の利を  
占めらるるの恐なく人民も亦賣買上  
の智識を得る事なく (ママ) 一挙兩  
得の策とす。

此計画実施に先立ち来るべき年度  
に於て「一」主なる養蠶地を選び  
Agent 役所所在地に於て速かに  
製糸伝習所を設け在米飼育し収め来  
りし蠶を持ち寄り改良器械により綠  
糸の伝習をなさしめ予め各村落に工

女の養成を務め以て本計画実施の準  
備を爲さしめん事を希望して止まら  
ざる所なり 今伝習所一ヶ所に要する  
費用を掲げん

製糸器械附屬品	20台	1500銭
各村2台		
揚返器械	20台	1500銭
各村2台		
製糸用具雜品	1500銭	
乾燥室	1台	6000銭
製糸に要する木炭其他雜品	1500銭	
製糸教場2名月給25銭宛	6000銭	
製糸伝習所職員並苦力賃	6000銭	
製糸伝習所仮建物	10000銭	
合計	34000銭	

製糸伝習所一ヶ所に要する全費大  
要夫れ斯くの如し 若し此伝習所設  
立の曉には年を出でずして改良器械  
により改良糸を自由に繰糸するべき  
工女を得茲に至りて何時法律命令を  
發布し一定額の蠶を飼育するも毫も  
差支なく 一は他に模範を示し改良  
法実施の緒を開く事を得 漸次年を  
逐ひ全般に普及せしむる事を得るも  
のなり 此の方法により効果を待ん  
では政府は只蠶業の一に止まらず進  
で他の産業に及さんか 當國の産業  
は数年を出でざる内に著しく其産額  
を増加し来り 從來捨てられたる沃



連載 ⑧  
バンコクの  
日本人

# 在タイ10年の明治の農業技師 横田兵之助 (3)

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

## 東北タイ中部に 8製糸伝習所の設置

本誌先月号で紹介した横田兵  
之助 (1868-1943) の  
シルク立國論の意見具申は採用  
された。意見具申に従い、19  
08年5月に③ブツタイソン  
(フリーラム県)、④パヤカプ  
ムピサイ (マハーサーラカム  
県)、⑤ラタナブリー (スリン  
県)、⑥スワンナブーム (ローイ  
エット県) の4郡に、続く19  
09年には①チャトウラット  
(チャイヤブーム県)、②チャイ  
ヤブーム、⑦ローイエット、⑧  
シーサケートの4郡に、合計8  
郡に、日本の坐繰器械を導入し  
た製糸伝習所が開設された。こ  
こで生産された生糸は高品質で  
サイゴン生糸と同一の価額で取  
引されたという (吉川利治「暹  
羅国蚕業顧問技師・明治期の東  
南アジア技術援助」、『東南アジ  
ア研究』18巻3号、1980年

12月、24頁)。  
上述した郡名の前に付した数  
字は、本誌6月号に引用した、  
駐シヤム公使館書記生山口武の  
1910年初めのコーラート出  
張報告、「暹羅蚕業局の情況」  
の中で、製糸伝習所の位置を示  
すために用いているものである  
(本号掲載地図参照)。地図中の  
数字の位置は、実際の郡の所在  
地から少々ズレており、大体の  
場所を示すに過ぎないが、八つ  
の製糸伝習所は、東北タイ中央  
部を占め、現在の6県にまた  
がっていたことが判る。

当時既にコーラート、フリー  
ラムに蚕業支局が置かれ、官營  
の模範蚕業が実施されていた。  
横田は、この両支局の官營事業  
を越えて、蚕業地帯の各郡に製  
糸伝習所を設置して、実際に蚕  
業に従事する女性たちに上質の  
生糸を生産できる技術を普及す  
ることを計画した。これによつ  
て、高価で販売できる生糸が採

きるようになれば、当時の日本  
経済に於けるシルク産業のよう  
に、タイでもシルクは輸入代替  
だけではなく主要輸出品とな  
り、東北タイ蚕業地帯の所得は  
増大し、自給自足的経済から貨  
幣経済へと発展できると考え  
た。

横田は、更に絹織物の改良に  
着手するため、1908年4月  
に一時帰国し、同年8には織物  
教師として飯塚龜吉・飯塚ハナ  
親子を伴ってタイに戻った。そ  
の際、日本から織機10台を輸入  
した。飯塚ハナはタイ到着の月  
に、20歳で病死したので、父の  
龜吉一人がコーラートの織物工  
場で指導に当たり、1910年  
度には勲章に付けるきらびやか  
な絹地も織り上ることができた  
(前掲吉川論文26頁)。

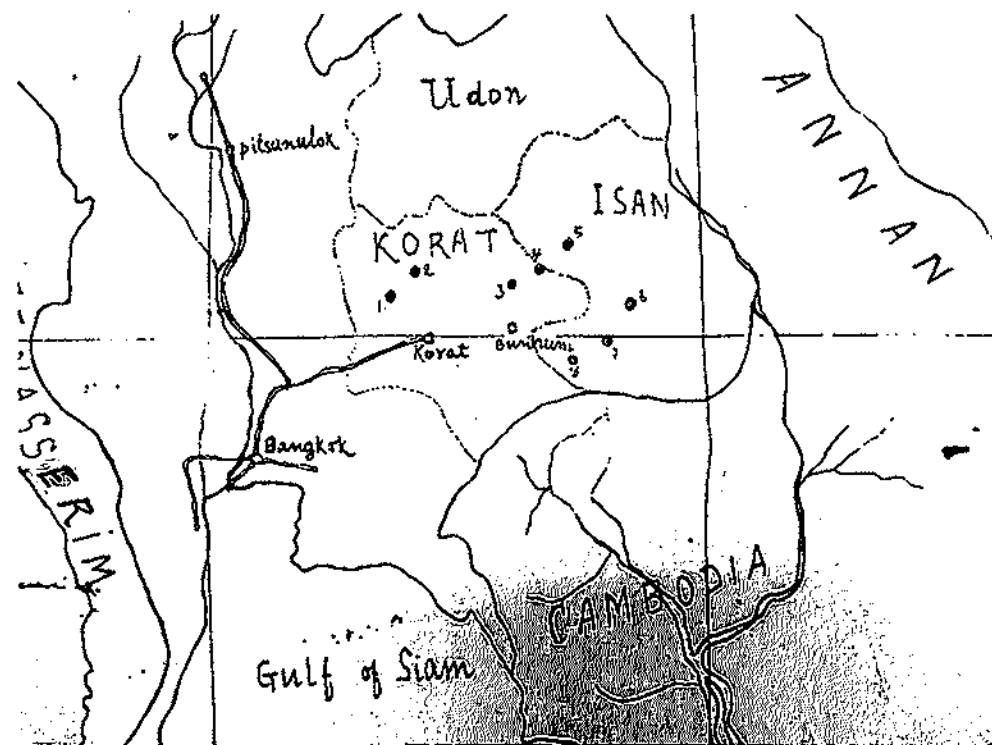
まず、質量ともに優れた繭を  
生産できるように蚕の品種改良  
を行い、改良した蚕を生産農家  
に配布し、続いて均質な糸が採

2017年10月3日



員名中の一人に、それぞれ任命されている(『タイ官報』第27巻、355、371頁、1910年6月1日号)。また、1910年6

月9日付けで、農業省栽培局畜業技師課 (assistant master of husbandry) の横田兵之助は、白象5等勲章を授与され、



横田兵之助の具申で設立された東北タイ8郡の製糸伝習所

同じく同課の高野与相次郎は王冠五等勲章を授与された(『タイ官報』第27巻、421頁、1910年6月12日号)。

1910年6月後半横田は下賜休暇を得て日本に一時帰国したが、その際、台湾に立ち寄り調査を実施した。その報告書「台湾の農業、商業及び行政調査報告」(タイ語)が、1911年にウオンサーヌプラバット農業大臣が賞賛の前文を付して刊行したことを、本誌7月号で紹介した。この一時帰国では、横田は農業大臣より棉作関係の調査も依頼されていたようである。

当時、日本では、タイ国王からシーラーチャーに広大な棉作予定地を借り受けたという政尾藤吉法律顧問が、タイにおける棉作の有利なことをPRして、日本の投資家を募っていた。これは、更なる発展をめざす日本の紡績業界が、綿花の安定供給地を求めていることに目を付けたものであった。政尾の提案に、紡績業界のみならず、小村寿太郎外務大臣も強い関心を示し、政府・民間によるタイ棉作フリージビリティ調査が行われ

ることになった。この調査については、次号以下で詳しく紹介する。

日本の綿業界は暹羅棉花調査会を立ち上げ、更には早くも暹羅棉花株式会社設立趣意書を作成した。1910年11月11日には、暹羅棉花調査会委員日比谷平左衛門、中澤彦吉の両名は、委員を代表して、外務、農商務両省を訪い、同会社設立賛成人名簿を申請すると同時に、更めて調査のため技師の派遣を要請した。これに対して、農商務省下岡農務局長は、「派遣すべき技師は目下公務の為に前橋共進会にありて来二十三日の出帆に間に合ふは困難ならん可成助手丈にても先発同行せしめたい、暹羅暹羅政府の横田技師帰朝せる故来訪あらば聞く処あらんとせしも何か徳義上擧る処ありて来らず、蓋し暹羅政府にても大に棉花を奨励しつつあり其要件にて帰朝せる由なれば十分の報告をなし能はざりしものと思はるる」(外務省記録352765「棉作地及棉花栽培業取調雑件」(自明治43年至大正3年)と述べた。

横田は、1910年6月の一時帰国において、棉作関係の調査をするように、タイの農業大

臣から特命を受けており、日本側に洩らすことができない事柄もあったのか、古巣の農商務省を訪問することも避けたようである。

しかし、同年9月20日には、東京の外務省に駐シヤム公使吉田作弥から「横田農商務省技師が暹羅農務省に提出したるナコンラーチャシマー州内棉花栽培業保護処弁案及タブコウワーン」(「タブコウワーン」は、プラウエーツ園に於ける棉花栽培調査報告)の和訳文が到着した。横田は、タイの農業大臣への棉作調査復命書を日本の吉田公使にも提供したのである。

その復命書の中で、横田は数字で詳しくデータを示したのち次のように述べている。

予は暹羅産の棉花に就て知識に乏しく且つ其の価値も確知せず、然れども考究の結果最優等種を選挙して深く栽培に注意し培養宜きを得ば印度棉と同等品を得るは予の信じて疑はざる所なり、此処に指名する能はざるも棉花栽培に堪能なる某氏の談に曰く西貢種の棉花を注意して培養するときは米國棉と同額の収穫と同等質のものを得べしと、此の事に就ては予未だ確信なしと雖も西貢

棉花は印度棉花より良好なるや必せり、次に日本が外国より購入する棉花の量は一年100,000,000,000円通銀132,000,000,000円にして暹羅産に印度棉に匹敵する棉花を産出するに至らば其の売捌や容易なり

め一担に付き運搬費3銖を牛車賃に支払ひ更に商人との取引にて価格を減ぜらる、一方仲買商人に於ても仮令最低値を以て買入れるにせよナコンラーチャシマーより日本に輸送する運賃を見積るときは悉く利益なからん、何となれば汽船賃、汽車賃、関税及保険料を支払はざる可からず、以此仮令暹羅産は風土季「風」候棉花栽培に適する地なりとするもフリーデーツ種の棉花栽培を保護奨励して好果を挙げ可からざるを知るに足る、其は売買人、生産者共に毫も利益の受く可き無ければなり

上述の如く今日商品運搬の途は汽車なく河川なく溝渠の便なく唯一牛車を用いるに於るのみ故に其の運搬費や莫大なり、フリーデーツ種棉花栽培保護奨励は目的を果す能はずとするも民衆を利用すること多き他の有益なる農業を保護するの途を講ずるを要す、棉花栽培の事たるや試験の基礎の上に立たざる可からず先づ土壌は棉花栽培に適するや否やを試験すること、各種棉花の試験栽培、最良

種を選取すべきこと、米國種の如き良種を選取する能はずんば印度種より優等種たらしめざる可からず、試験の結果土壌は棉花の栽培に適し品質良好、値亦た高値なるを知りたるときは初めて生産者及取扱人は利得ありや否やを知り又た政府の保護奨励は其功ありや否やを知り得べし、此外暹羅国内鉄道運賃は日本の運賃に比し二三倍高し、此れ貨物の増加せざる所以なり、汽車運賃高値なれば産物の増加得て望む可からざるは見易き理なり、何となれば何人とも利益なき商品を産出販売する勇氣なければなり、予此に日本に於ける例を挙げんに若し政府にして或る種の農業若しくは産物を保護奨励するの意あれば其の特種産物に対し鉄道運賃を引き下げ而して或る農業の起りたる場所又は貨物産出所には鉄道を延長し運輸の便を計るを常とす。之れ鉄路は貨物の運輸を敏活ならしむる機關たることを熟知するが故なり、以て予は当政府は其の奨励する産物に対し鉄道運賃を引き下ぐるの





適切ななるを思ふ、其他内地より輸送する産物に対しては一般の運賃引き下げの要あり、而して不必要品にして内地に向け輸送するものに対しては重き運賃を課す可し、若し鉄道運賃を變更し貨物運搬の業を補助するときは久しからずして内地の産物新興するもの多からん凡そ鐵路と貨物とは密接の關係あり鐵路あるも貨物なければ鐵路は利の受く可きなく収支賸「あがな」はざらん、若し又鐵路なければ産物の増加望む可からず、此の兩者は車輪の如く互に相倚りて作用をなす、故に政府は余財あらば可及的各方面に鐵路延長の急務なるを知る可し

(九) 暹羅国内農業奨励法

世界中米國は農業に依り最大の利益を受けるの國なり、何となれば米國は季「氣」候温暖加ふるに人民資本に豊富なるを以て諸種の機械を使用し大仕懸の農業を計畫「マ」するに堪ゆるが故なり、他方日本は季「氣」候寒冷なれば農業より受くる利益僅少なり、日本の農民にて現時受くる所の利益は単に自ら耕作に従事する労働費に過ぎず之より以上は望み得可からず、以此日本の農業は大仕懸なる能はざるなり、何となれば民貧にして試験の資本に乏しく自ら労働者の代りに労働費を得るのみ、暹羅は日本に於けると同く特

に人民今尚遊惰にして機械を使用し大仕懸に農業を営まんと欲するもの絶えてあるなし、故に知る政府は小規模に適宜の産物にして有益なる農業を奨励す可きことを即ち人民を促がし自ら勉勵業務に従事せしめば大農法を保護奨励するに勝りて有益ならん

尚暹羅の農業中米作は最も重要なれば苟も之を放棄するは不可なり而して米作以外正に補助奨励す可き或る種の事業あるときは、例せば牧牛、牧馬、養蠶、養鶏、養家鴨、養蚕棉花栽培及其他の農業にして補助奨励すべきものあらば農民の分に應じ各地の風土季候に従ひ民をして従事せしむ可きなり、此の如き些細の産物も衆相擁して従事するに至れば果まりて大産物となり、重要産物たるに至るや明かなり、又工業は起業も容易にして利益も農業に勝るとは一一般の承認する所なりと雖も紡績業を奨励せば英に企及はざる可し然るに若し棉花栽培して販売するにせば英、獨、魯、支那、日本等の諸國は暹羅に及ばざる明けし、何となれば暹羅は季候温暖棉花栽培に適すればなり加ふるに棉花の栽培は植付けより培養採取に至る迄左程困難の業にあらざる況んや民衆は既に従事せる經驗あるをや、政府にして小規模にても着手したれば棉花栽培行はれ棉花

は重要産物たるに至るや必せり

(一) 棉花栽培保護奨励に着手する以前試験を要す

棉花栽培に付き予の意見は概略之を述べたり、今や遑りてタプコワン、ブラ・シー・アイソワン氏のプラウエーツ園棉花栽培に付き述べたる所あらんとす、該園にては一ライ、一千本を植へ付け一本に百顆宛を収獲すと管理者の言果して真なりや否や未だ之を確信せず、何となれば予は培養宜きを得一ライの植付け株数を減せば此より多数の棉顆を得べしとの意見を有すればなり、此他尚ほ種々の信す可からざるものあり、試験を経たる後にあらざるは確知し難し、又たフワイテーツは品質悪く纖維少く値亦た高貴ならざるは事實なれども他種と比較するときは試作の価値あるを知る、何となれば他種は年々植付くるの面倒あり且つ培養保護に多大の注意を要すればなり、然るにフワイテーツは植付けより左程手入を要せずして三年に亘りて收穫あり、故に何種の棉花が多くの資本と努力を要するかは不明なり、之を知るは試験の結果に拠る可く而て初めて何種の棉花が良好なるか何種の栽培が資本を要する少くして価値貴きかを知り得べし、

要するに試作の目的は何種の棉花を栽培すれば最も利益多きかを知るにあり、仮令曾てプラバトムに於て試験せしことあれども是れナコンチャイ州内の棉花栽培業の爲めに行ひたるに過ぎず、ナコン・ラーチャシマー州内の棉花栽培を補助奨励せんと欲せば宜くナコン・ラーチャシマー内に試験所を設け將來棉花栽培の模範に供す可し、ナコン・チャイシーに於ける試験を直に取りて以てナコン・ラーチャシマーに適用すること不可能なり、何となればナコン・チャイシーとナコン・ラーチャシマーは風土季候を異にするを以てなり、故にナコン・ラーチャシマー内に棉花栽培を補助奨励するに當り最初に着手すべき重要事項は諸種の棉

花を栽培試験するにあり (同上外務省記録 3.5.2/195)。

暹羅棉花栽培調査会の調査員として東京から来タイした富坂與八が、1910年12月26日にコーラート養蚕試験場の棉作試作地を視察した際、横田は技師長として1910年における各種綿種の棉作試作の状況を「去る六月「1910年6月」余の帰朝の際七月一日より播種すべく命令せしに雨量の少なき為め九月一日より漸次播種したると一面種子の選択充分ならざりし為め時き付けたる種子は三分の一より出芽せず」と説明している (外務省記録 3.1.6/84 農商務省技師岡田鶴三郎暹羅国巡回視察一件 (自明治42年10月至45年4月) 中の、富坂與八「暹羅国棉花栽培地調査報告書」)。

これから、1910年からコーラートの養蚕試験場で、横田は棉作試作を行ったことが判る。

1911年  
農業省本省への異動

1911年1月に、横田はコーラートからバンコクの農業省本省に異動となった。こゝでも横田は、棉作調査に従事したようである。

1911年初めの乾期と考えられるが、横田はピサヌローク州の棉作調査を命じられた。水量が減つて浅くなった川を小舟で移動中、横田は仏像の手先だけ岸から出ているのを見付けて発掘した。その仏像は「御身丈け1.10メートル御台座共なれば2メートル以上あり此尊像重量16貫目、金質唐銅」で、ワチラーウツト王(ラーマ6世)から勅許を得て日本に請来し、1936年6月には長野善光寺に寄進した(本号写真参照)。この仏像発見について横田は次のように語っている。

此発掘の由来は頗る不思議の因縁に基く、靈像であります、私が官命を奉じ、同国「ピサヌローク」「サヌローク」州内棉作の調査として同州内「ピチット」「ピチット」国へ出張しました時、恰も氣候上乾燥期中で、一般河水は甚しく減水して居たため、小舟で辛うじて同州内を流する湖南「ヌナム」川を廻りました。其河岸の中腹に、仏の御手先き

が露出して居るを認めましたから大騒ぎをして直に同州の總督に報告の上許可を得、多数人夫の加勢を求めて同國特産たる藤簾「とうづる」で急製の階梯を作らせ、之を河の岸壁より下し、埋没されたる仏体を危険を冒し(土手の高さ四丈「約12メートル」)丁寧に発掘させ、藤簾で結び付け漸く小舟に移し、總督府まで運び附けさせたのである。總督は直に付近の高僧多数の参集を求め一大供養を厳修せられた (元シヤム國政府顧問横田兵之助氏談「仏教史上の豪華版・善光寺雲上殿本尊仏由来」、『近江と人』第18巻第1号、1937年1月1日発行、20-21頁)。

横田に棉作調査を実施させたウォンサーヌプラバット農業大臣は、1911年6月のタイの地方官會議で、棉花栽培に関する諮問案を提出し、同會議は次のような決議をしたことを、1911年7月3日付けで、在バンコク野間政一領事が小村寿太郎外務大臣に報告した。

公信第86号  
明治44年7月3日  
在盤谷  
領事野間政一  
外務大臣侯爵小村寿太郎殿



件  
暹國に於ける棉花栽培に関する  
本年6月盤谷府に於て開催せられたる地方官會議に棉花栽培に関する諮問案提出せられ別紙之通大略決議相成直に実行の趣に聞及候御参考迄及報告候敬具

棉花栽培に關し地方官會議決議の件當國の風土は棉花の栽培に適し就中「ピサヌローク」「ピサヌローク」、パヤップ、ナコンサワン等の諸州は古來棉産地として著名なるも如何せん交通の不便と売買の機關具備せざるに依り折角の産棉も会々支那人等の欲心を充たすに過ぎずして動もすれば農家の収支償はざることあり為に漸次耕作反別を減じ近年に至りては僅かに其餘端を保つに過ぎざる有様なりし然るに近來棉花栽培は漸く世人の注目する所となり政府も夙に有利事業たることを認知し密に計畫する所ありしと聞きしに農務大臣は



横田兵之助が発掘し長野善光寺に寄進した仏像（写真は善光寺からご提供を受けた）

本年6月盤谷に於て開催せられたる地方官会議に棉花栽培に関する諮問案を提起し種々討議の末此際之れが栽培を奨励し大に斯業の発展を期することとし大要左の方針を決議せりと云ふ

視し産出高は時々之を農務省に報告すること  
一 政府は農事試験場を新設し当分は専ら棉花を試植し栽培上の知識を養成すると共に良種を得て之を各地方に分配すること  
一 各地方に小規模の棉花展覧会を設け自由に出品を品評せしめ漸次品

質の改良を謀ること  
一 農務省は各地方の産棉在荷高を時々盤谷府の新聞紙上に広告し売却上の便宜を謀ること  
一 農務省は棉作上必要なる各種の機械又は棉繰器機を運搬し之を地方農民に紹介すること  
一 農務省は棉花売買上双方の利益

を保護し適當の値段にて取引せしめ若し値段折合はる果を農家に及ぼす場合あらば政府は時価を斟酌して之を買上げ農家をして毫も後顧の患なからしめ安じて之れが耕作に従事せしむること  
一 棉花輸送上交通機関が官有なる場合には務めて其運賃を低下すること  
一 内地税（一割）は免除を期すること但全然免除し能はざるときは極めて少許の課税をなすこと  
地方官は以上の主意を体し地方農民を誘導して直に実行に着手すると云へば本年末より来春に亘り当国棉花の収穫高は平年に比し頗る多額に上るべし而して政府の買上げたる棉花の処分は付ては目下尚ほ未定なるも恐らく之を日本に供給するの途を開く外策なかるべしと云ふ  
明治44年7月3日 在盤谷領事館（前場外務省記録第52166）棉花地及棉花栽培業取締案件）  
このように横田は、やる気満々の農業大臣の片腕として、大臣が重視する棉作事業の調査を担当した。  
もし、大臣の在職が続けば、タイ農業省における横田の役割は増大し、地位は上昇したことであろう。

連載⑧  
バンコクの日本人

## 在タイ10年の明治の農業技師 横田兵之助（4）

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

2017.11月

横田兵之助は1911年にコーラートからバンコクの本省に異動となり、やる気満々のウォンサーヌプラパット（1866-1940）農業大臣の片腕として、大臣が重視する棉作事業の調査を担当した。もし、同大臣の在職が続けば、タイ農業省における横田の役割は増大し、地位は上昇したことであろうと、先月号に述べた。

この出張が、実際に実施されたのかどうかは判らない。もし実施されていれば報告書が提出されたはずであるが、筆者は未見である。

### 農業大臣更迭

ところが、横田の旅券取得後、1ヶ月もしない1912年3月初めに青年将校団による王制顛覆叛乱準備（ラッタナコーシン暦130年叛乱）が発覚し、1911年12月に盛大に即位式をしたばかりのワチラーウット王（6世王）を震憾させた。同王は冷遇していた異母兄ラートブリ親王（ラビー・パタナサック、1874-1920）を、急遽農業大臣に登用した。叛乱将校団が、同親王を新共和国の大統領として推戴する予定であったという情報に衝撃を受けた結果である。

ラートブリ親王は11歳でイギリスに留学、法律を学び20歳でオックスフォード大学（クライストチャーチ）の学士号を得て帰国した。当時、タイは列強との通商条約で領事裁判権を与えており、条約改正のためには司法制度の西欧化は急務であった。同親王は父王に命じられた地方司法制度の整備に尽力した。満22歳の1897年3月3日には司法大臣に任命された。彼は法律学校を創立し、自ら授業を担当して裁判官・法律家を養成して、各地の新設裁判所に供給した。

ラートブリ親王は、13年間に亘って法相を務め、タイ司法制度改革を主導した。この功績により、司法試験合格者から成るタイ法曹協会（Thai Bar Association）は、1954年に彼に「タイ法律の父」という尊称を与え、命日の8月7日を「ラビーの日」（Rabi Day）と称して毎年記念式典を行っている。

ラートブリ親王は、病氣を理由として司法大臣を辞し、1910年6月26日付けで退任が許可された。辞任の背景には、後述のように、5世王末期の宮廷内の事情があったという。叛乱準備発覚後わずか3日の1912年3月4日に、ワチラーウット王は異母兄ラートブリ親王を同年4月1日から農相に就任させることを発表した。同時にウォンサーヌプラパット農業大臣は建設大臣に異動となった。ラートブリ親王は、7年半農相を務め1919年9月15日に病氣のために休職。翌20年8月7日に治療中のパリで腎臓病のため、満45歳の生涯を終えた。

1912年4月の農業大臣の交替で、横田兵之助の進路は大きく変化した。  
新農業大臣は法律家であって農業については見識がなく、来省することもほとんどなかった



という。新大臣の下で産業振興政策は全廃され、横田の雇用契約は、1912年7月に満了したが、更新されることはなかった。

横田の意見具申で開始された、東北タイの製糸伝習所も、僅か4年で廃止され、日本人農業技師の10年に亘る産業振興プロジェクトは水泡に帰した。

日本人の努力は、一見無駄に終わったようであるが、プロジェクトに関わったタイの農業省官吏には、早すぎるプロジェクト中止を惜しむ者も少なかった。

彼等の声を紹介する前に、ラートブリー司法大臣の辞任、農業大臣の更迭等の原因となっ

た、5世王末期から6世王初期の不穏なタイ国内情勢を当時の日本の報道及び外務省の公文書から見ておこう。

1912年3月初めに生じた叛乱計画事件を、日本の新聞で最初にかつ最も詳細に報じたのは、大阪毎日新聞である。同紙は前年12月初めの6世王戴冠式に、日本の新聞では唯一特派員(三宅松郎)を派遣したことは、本年7月号に紹介した。4ヶ月後に発覚した叛乱事件につき、三宅松郎は日本での取材やタイでの見聞等をもとに次のように書いている。

#### 醒めた暹羅(一) 三宅生

盤谷来電「暹羅政府顛覆の陰謀」が我編輯局に飛び込むで当直子を驚かしたのは六日の夜半過ぎであつた、随て翌七日朝迄早く此大事件の報道に接するの特権を有せられたのは我大阪の読者であつた。

敢て乱を好むといふではないが新聞記者としては事件あれかしと思ふのは僕等の偽らざる予ての情である、此情を以てすれば僕が旧暹羅谷の空からかの戴冠式の電報を頒発した時の快感よりも、通信員盤谷生君が此「暹羅政府顛覆の陰謀」を打電

する刹那の快感を幾ますにはいらなかった、殊に此電報を掲げたのが日本否恐らく東洋を通じて独り我大阪毎日なるのみなる点において。

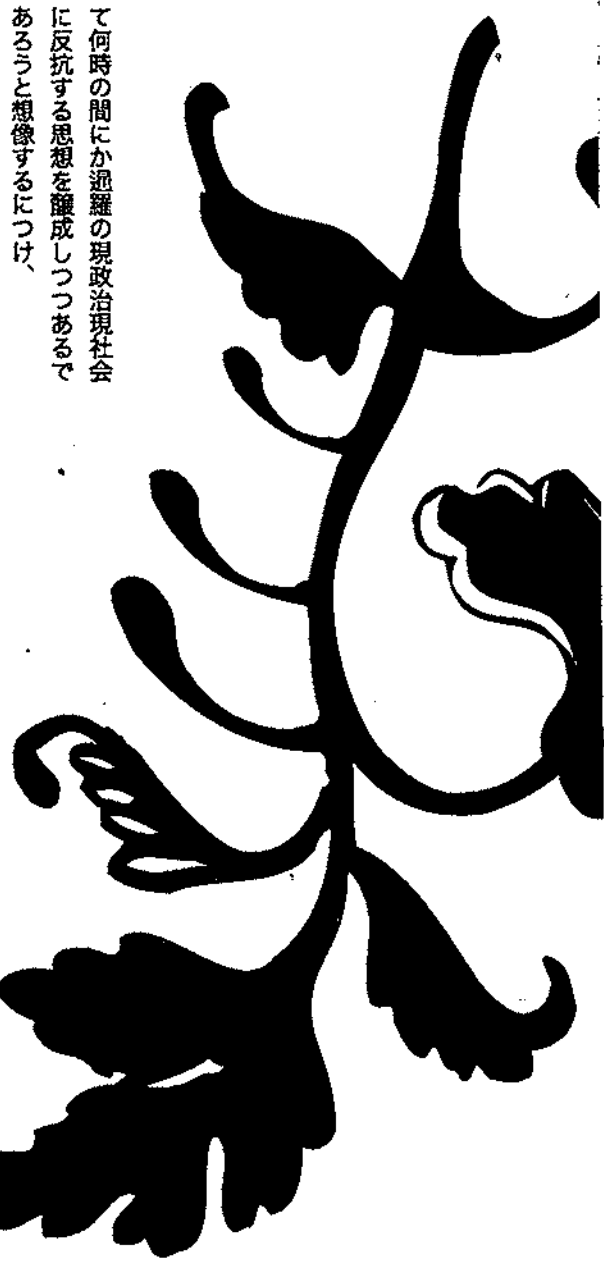
既載の拙稿「暹羅物語」中「暹羅海軍」の項において、前海軍次官チンポン殿下が嘗て海軍兵学校卒業式に臨まれ一場の演説を試みられた際たまたま殿下の演説が共和政治的色彩を帯びたりとて裁判に附せられ一時死刑に処すべしとの讞さへ起つた揚句殿下は遂に休職となつた事、英國で海軍教育を受け嘗ては水雷艇に士卒と生活を共にせられ水雷教育官たりし事さへあらせられた程の殿下は全く現在暹羅海軍の最高智識なる事を書いて置いたが殿下の共和政治的演説は「水雷艇に士卒と生活を共にせられ」たる事実によつて正しく裏書きするといはねばならぬ。

元来社会上下階級の懸隔が馬鹿に甚しい暹羅の国柄としてかりにも皇族が水雷艇の狭い天地に士卒風情と膝突合せて起き臥しを共にさるといふ事は恐らく暹羅開闢以来の大大の出来事たるに相違ないと同時に、少くも殿下が英國遊学の間に知らず知らず欧州の自由主義平民主義よりして社会主義の一角に迄触れられた

事を信ぜずにはいられぬ。

のみならず先帝チヌラロンコン「チヌラーロンコン」陛下の皇子で現帝ウァシラワート「ワチラーウット」陛下の弟君(マム)なるチンポン殿下(Krom Man Chumpon)は同じ先帝の皇子の中でも一段御身分の低位にある事殿下が次官休職以来徒に英才を抱いて失意の境遇にある事の一、方、現海相ナコンサワン殿下(Krom Khun Nakon Sawan)は先帝の皇子としては現帝と同位の御身分であり且殿下の御生母先帝に殊寵ありために当時殿下の声望は現皇太后ソウアバボンシ「サオワバーボンシ」陛下の御生子たる皇太子(現帝)を圧して殆ど殿下皇位を襲はれんかと迄取沙汰された位であつたのと、

今一つは四艦長、海軍病院長、同軍医長、海軍船渠機関長及び海軍工廠検査官の八外人が殆ど暹羅海軍首脳者たるかの状態においてナカナカ幅を利かせ居るよりして幾世紀の久しき専制政治の下階級制度の桎梏に圧搾されて小さく小さくなつていた彼等平民海軍水兵の頭脳が知らず識らず是等欧米士官の口より進「ほとばし」る自由主義、平民主義乃至社会主義的欧米思想の美酒に酔はされ



て何時の間にか暹羅の現政治現社会に反抗する思想を醸成しつつあるであるうと想像するにつけ、

若し後年暹羅に政治的変革起るとせんかソハ必ずや先づ海軍の一角よりせんとは僕の観察であつたので今暹羅海軍によつて政府顛覆の大陰謀が企てられたとの報は僕としては全く意外の事なのであつた、それに就て暹羅の皇室、暹羅の政治、暹羅の陸軍其他につき少し書いて見るのも此際徒爾ではあるまいと思ふ。(大阪毎日新聞1912年3月10日)

#### 暹羅の大陰謀(上) 某暹羅通の談

▲暹羅人の觀察 暹羅の軍隊内に現政府顛覆の大陰謀あること発覚し多数の嫌疑者捕縛せられプラバトムにおいて御前会議まで開かれたりといふ大阪毎日の盤谷特電を見るや余は直に在留の某々暹羅人を訪ふて

意見を交換したるが彼等は事の甚だ突飛なるに驚き且若し果して事実ならば暹羅国歴史上の事実より推測して此内乱が必ず長く継続すべきことを信ぜざるを得ざると共に現政府は必ず顛覆の運命を免れざるべしと語り居たり

▲先帝派と皇太后派 余が最近暹羅在留時に探聞し得たる事実にして而も其原因が全く政治上の軋轢に基くものなることを信ずるものなり今回の陰謀は支那革命「辛亥革命」の余波を受けたものなりと観測するものあれども余は爾(しか)く信ずる能はず暹羅における支那人は三百万人以上の多数を有し而して其多く

は革命党に属するものなりと雖も暹羅人は概して支那人を輕蔑し居るを以て漫(みだ)りに支那の革命に力づるるが如きことなきのみならず一般暹羅国民は智識の程度低く政治の何たるを解せざるなり仮に今回の陰謀成功して君主立憲若しくは共和政体となるとするも第一に暹羅国民には国会議員を選挙するの能力あるや否や甚だ疑はし要するに今回の陰謀は主として軍隊内部に計画されたものにして軍隊の陰謀は先帝派と皇太后派(即ち現帝派)との軋轢の結

果なりと觀察すべき理由ありいづれにしても暹羅國のためには極めて重大なる事件にして政府当局が如何に狼狽しつつかあるかは觀察するに難からず

▲軍隊と皇太后派 暹羅の軍隊は初め民間より募集したる義勇兵によりて組織せられたるも昨年より徴兵令を布き費用を惜まず増々改善を図りつつあり併し有名なる虎兵の如きは依然義勇兵の残存せるありて陸軍部内には少なからざる勢力を有せり而して是等の軍隊は皇太后派が頻りに先帝派を排斥しつつかあるを憤慨し之れに反抗せんがため陰謀を企つるに至りしなるべし

▲ラビ「ラビ」殿下の人物 陰謀派のために大統領に擬せられたるラビ殿下（通称ラチャブリー「ラー・トブリー」）は新進鋭銳の士にして夙に欧米に学び本年三十四五歳「正しくは満37歳」にして暹羅における親日派の首領株なり殿下は眞に司法

大臣たりし時政治上急激なる改革を實行せんとし若し現状の俛にて推移せば暹羅は結局滅亡するの外なるべしとの意見を有し断乎として諸般の大改革に着手せり而も其意見の余りに急進的にして過激なりし為多數の有力者は殿下を目するに一種の社会主義者を以てし之を危険人物視するに至り殿下は終に止むなく司法大臣を辭して今日に至れりされば殿下は固より直接に今回の陰謀に關係なしと雖も暹羅政府が陰謀派のために大統領に推されたる殿下を俄に起用したるは如何に其狼狽の甚しきかを証するものなり（大阪毎日新聞1912年3月8日）

暹羅の大陰謀（下）某暹羅通の談  
▲先帝派の憤慨 皇太后陛下は近

く日本に御來遊相成るべき筈なるが皇太后陛下は先帝在世中は皇帝の寵厚からず先帝は數十名の嬖姫を有せられ兎角現皇太后陛下を疎外せらるるの傾きありき先帝崩御後皇太后は次第に政治上に勢力を挽回し來り先帝の信任せられし有力者の大官は自ら排斥さるるの傾向を生じたりかくして現皇帝登極後の施政は軍人及び一般臣民の間に評判宜しからず加ふるに皇弟ビシヤノロツク「ビサヌローク」殿下（現參謀總長）は曩に露國婦人を娶りたるより深く先帝の逆鱗に触れ先帝は常に殿下を遠ざけて面会を避け玉へり殿下の結婚後先帝は唯一回の會見を許されしのみ妃

殿下を呼ぶにマダムを以てしプリンス（ママ）の称号を用ふるを許し玉はずために外交団の夜会の際の如き殿下の妃たる同露國婦人の席順を定むるに困却し従つて多くの夜会においてははなるべく招待するを避けたる位なり同婦人は曩に赤十字病院の看護婦にして露國人某の妾なりしとの評判もある程にて一般暹羅人は殿下の結婚を聞いて騒喜せざるはなかりき然るに先帝崩御後皇帝はビシヤノロツク殿下を直に推定皇太子と定められたり露國婦人との結婚により太（いた）く先帝の遺骸を襲りしビシヤノロツク殿下は先帝の墳墓「ふんえい」未だ乾かざるに直に推定皇太子となされたるにつき一般暹羅人は頗る疑惑の念に打たれ而して其必然の結果として將來は皇后として露國婦人を戴かざるを得ざるのみならず更に混血兒を以て皇帝となさざるべからざるに至るべしとて不満の聲漸く高まり皇太后派の跋扈に対する反感と相和して現帝の施政に対する不平の念を強むるに至れり

▲八方美人の陸相 暹羅現内閣における有力なる人物は外相デヴァウ・オーンズ「デーワウオン」、海相ナコンサワン、内相ダムロンク、陸相ナコンチャイシー等なるが皇太后派

を以て目せらるる陸相の部下より前述の如き陰謀者を出したるは注意すべき事象なり蓋し陸相は保身の術に長ぜる八方美人主義の人にして自己の主張により他人の感情を害するが如きことを避けつつあるを以て従つて軍隊内にも充分の威信なきものの如く陸軍部内先帝派は頗る陸相の行為に嫌「あきた」らずして反旗を翻すに至りしなるべし

▲狼狽せる當局 陰謀派のために大統領に推薦されたるラビ殿下が暹羅において斯る場合の慣例とも言ふべき毒殺若くは暗殺に遭はずして却て重用せらるるに至つては如何に政府が狼狽し未だに事を鎮圧するに苦心しつつかあるかを示すものにして同時に先帝派の勢力の侮るべからざるものあるを証するものなり然れどもラビ殿下既に農務大臣となり一方陰謀自謀者逮捕を見たる以上は此の騒

乱は大事に至らずして落着すべしと察せらるる元來暹羅人は愛國心なくして専主心ありと称せらるるも其専主心は日本の如き眞誠なる忠義心に基くにあらずして習慣的の屈從に外ならざれば現政府に対し反抗を繼續するが如きことは多分なかるべく結局今回の事は曖昧模稜の間に平定を告ぐるに至らんか云々（大阪毎日新聞1912年3月9日）

上述の共和制社会主義唱道の演説をして海軍次官を首切られたというチュンボン親王（1880-1923、満42歳）は、ワチラーウット王より12日早く生まれた異母兄で、イギリスに

留学して海軍で修行した。今日でも「タイ海軍の父」、海軍の親分（チャオポー・タハーンルア）として、崇拜されており、海軍関連の場所にはいくつか廟さへもある。

当時日本の川崎造船所は、タイから軍艦の注文を受けており、社員門田清実をバンコクに派遣していた。門田はチュンボン親王が1911年4月26日に自分に語った話を、在タイ公使吉田作弥に伝え、吉田公使は同年5月1日付けで機密第3号として小村寿太郎に報告した。その報告は下記の通りである。内容は、三宅松郎の記事と類似し

しており、三宅はこの機密第3号を入手して記事にした可能性もある。

機密 機密第3号  
明治44年5月1日  
在暹

特命全權公使吉田作彌  
外務大臣伯耆小村寿太郎殿  
暹羅宮中の状態に関するチュムボン殿下の御談話の件

先帝崩御以來暹羅の宮中は慘憺たる状況に在る由は數多想像せらるる節も有之候処旧海軍次長チュンボン殿下は予てより万事日本の進歩を慕慕し給へる暹羅海軍の最も有為なる士官に在らせられ今般宮中に於ける陰謀排擠「はいせい、セイは押しのける」の犠牲に供せられ給へる旨別紙川崎造船所出張員門田清実と御談話の要領愛供御一覽候尤も親王の御談話に係る事項は四月下旬に於ける状態にして爾來宮中府中の模様は日夜千變万化の有様に有之候間向後如何の成行に帰着すべき哉若しダムロンク親王一派の勝利に終らば暹羅は猶ほ旧の如く其進歩を持続し得べくも若し殿下の言の如く皇太后の好意一片に依りて内閣大臣の移動を遂げ凡庸の人入りて有為の材幹に更「か」

はるが如きことも有之候はば過難の  
為め容易ならざる候と存候  
右謹而及報告候教員

チュムボン親王が門田氏を訪問せら  
れたる際の談話要領(「1911年」  
四月二十六日)

どうも身の上が案じられる。抑も  
今回免職となりし退因を探り又反省  
を為すに促す等の処分は単に免職  
文では済まないかと思はる。更にラ  
チャワンソン(陸軍司令官少将)  
が吾等に対し不利なる証拠を提へ  
直奏せし結果として彼の適の処分を  
受けしも「カイ、其の意」は僅か  
に口実に止まるのみで其背後に恐る  
べき一大元因ありて宮中を攪「か」  
き乱し又多数皇族を危殆に陥れんと  
しつつありて自分は第一に其嫡玉に  
掲げられたものである。其元因と云  
ふものは則ち皇太后にして一方先帝  
御在世の時皇太后と寵を争ひ給へる  
第二、第三、第四等の皇妃に対する  
憤慨からして此等の皇妃と共に其出  
に係る各親王方を排斥放逐せらるる  
が為めと他の一方新帝の位置鞏固な  
らざるを憂給ひ有力なる皇族大臣特  
にナコンサワン(親王、海軍大臣)  
ダムロンク(親王、内務大臣)ナコ

ンチャイシー(親王、陸軍大臣)等  
各親王を貶し之に代ゆるに(ママ)  
先帝の寵愛深「あつ」かりし皇妃の  
出たるナコンサワンは皇太子に次ぎ  
第一位を占められたる親王なるに拘  
はらず之を排して新帝と同腹の皇子  
即ち皇太后の出たるピツナローク  
「ピヌナローク」(親王、参謀総長)  
親王を推して推定皇位繼承者となし  
又は皇太后と同腹なるデワウワンク  
セー「デーワウワン」(親王、外務  
大臣)ウチチャイ(ウチチャイ親王  
はチュムボン親王の後任者なり)を  
重用せられんとするものなり皇妃排  
斥の一例として之を挙げれば吾等の  
慈母の如きは二十四時間を期して宮  
中立除を命ぜられたり。必ずや遠か  
らずして宮中及内閣は幾多の惨状変  
動を示すことあるべし

今に至て之を回想すれば我等に於  
ても亦た皆て失言ありしことを記願  
す即ち「他年ピツナロークが皇位を  
継ぐとしても彼女は断じて皇后とは  
ならざるべし」と言ひしことあり本  
来彼女は薩國看護婦にして曾て某武  
官の妾たりし下賤の人物なり。ピツ  
ナロークが薩國留學中の御付武官よ  
り提出せし報告に依て其詳細を悉知  
せり。又先帝も其報告を閲覧あらせ  
られ決して彼婦人を宮中に近くべか  
らざることを仰せられたることあり  
然し乍ら吾等に対する表面上の罪名  
は海軍兵学校に於て社会主義を唱道  
せしと云ふに在り皇族の一人として  
固より斯の如きは殆んど想到し能は  
ざる所なり

全体「チャワンソン」に付ては若し  
や敢て復讐をも計らんには僅に一言  
せば事足りぬべし然し吾等は之を肩  
「いさぎよし」とせざるなり曾て先  
帝は彼が親欲貪婪「どんらん」飽  
くなき性質を明察せられ之を放逐  
すべきことを命ぜられしことありし  
が抑も人物に乏しき通羅海軍より彼  
程の技能ある士官を放逐するは甚だ  
遺憾なる旨を奏上して之を助け置き  
しに今や彼は走狗と為り亦た吾等を  
傷害せり

都合に依りては或は軍法會議又は  
宮中法廷に於て審判を受けることと  
もならん。さうなると吾等は總令軍  
法會議に於て分疏「ぶんそ、弁明」  
弁明に努むるとしても虚構の証拠百  
出し又審判官の公正も甚だ懸念あり  
之をラビー「ラビー」(旧司法  
大臣ラビー親王は法学造詣の著あり  
シャム法律に付ては唯一の大家なり  
昨年職を辭せられたり)に諮りしに  
若しや事件が審判に附せらるること  
とも為らば吾等の運命は殆んど予知  
し得べしと云ふ。他日若しチュンボ  
ンが宮中の獄に於て自署の自白状を  
残して自殺を遂げたりとの報に接す  
ることあらば其署名は必らず偽造に  
して自殺は他殺なりと卿一人たりと  
も之を承知し置かれんことを囑言  
す、至囑々々

云々大に平日の意気に異る所あり  
しと云ふ(外務省記録  
「1911年」各国内政關係雜纂  
暹國「第一卷」(自明治卅一年)

連載  
バンコクの  
日本人

## 在タイ10年の明治の農業技師 横田兵之助(5)

日タイ關係の14年間の  
低迷(1907-1920)

前月号で、タイ農務省農業技  
師横田兵之助の雇用契約が、1  
912年3月初めの青年将校の  
絶対王制願設計書の発覚によ  
り、農務大臣がラートブリー親  
王に交代したため、更新されな  
かったことを書いた。横田兵之  
助に限らず、翌1913年8月  
に契約が切れた法律顧問政尾藤  
吉の場合においても、契約の更  
新もしくは日本人の後任採用は  
なかった。

当時の在タイ公使、吉田作弥  
(1859-1929)が積極  
的に動いていれば、横田の場合  
も政尾の場合も別の形がありえ  
たのではないかと思われる。  
兎に角、吉田作弥の公使在職  
時代に、初代稲垣満次郎公使が  
尽力してタイ政府に送り込ん  
だ、日本人顧問や専門家のポス  
トはみすみす失われ、日本の影

響力は減少した。稲垣公使の時  
代に比せば、日英同盟、日露戦  
争の勝利などで日本の国際的地  
位が向上し、有利な交渉が可能  
であったはずなのに、この体た  
らくであった。

タイにおける日本人の発展の  
足を引っ張った(例えば政尾藤  
吉らが計画したシーラーチャー  
における大規模綿花栽培事業に  
反対した)吉田公使は、当然の  
ことながら、日本人社会との折  
り合いが悪く、1911年12月  
のラーマ6世王の即位式取材の  
ために来タイした大阪毎日新聞  
記者三宅松郎が、1911年12  
月末から3月にかけて、同紙上  
で吉田公使の失態や事勿れ主義  
を批判すると、吉田は本省に対  
して、政尾や横田などが新聞記  
者を嘘付けて、事実無根の悪口を  
書かせていると言いつつしている  
(これについては後日詳述す  
る)。

吉田公使の怠慢な仕事振りは、  
現在に至るまで泰日日本人会に  
負の影響を残している。それは、  
吉田公使が在タイした1913  
年から14年に、正式に発足した日  
本人会の成立を、本省に報告す  
ることを怠ったからである。明  
治大正期に国外で日本人会が発  
足すると、中国の小さな領事館  
を含め、世界各地から日本人会  
の成立に関する報告が、本省に  
提出されており、それらは今日  
でも容易に読むことができる。  
ところが、タイの日本人会に関  
しては、そのような報告は一切  
見つからず、日本人会の成立日  
さえ判らないのである(現在の  
日本人会は1913年9月1日  
を成立日と見做しているが)。

1908年8月から1914  
年初め迄5年半在タイした3代  
目公使吉田作弥、続いて191  
5年1月から1920年12月ま  
でこれまた6年近く在任した4  
代目公使西源四郎(1862-  
1928)、併せて1907年  
に短期間在タイした2代目公使  
松方正作(1863-1914  
5)、この3名の公使の名を日  
タイ關係史の書物において見出  
すことは稀であり、極めて影の  
薄い存在である。

当時の日本にとってタイは重  
要性の低い国であったといえ、  
このような仕事振りの公使たち  
を14年間に亘って放置した、当  
時の日本外交の質も問われるべ  
きではなからうか。

本稿では、この3人の公使は  
何者なのか、まずその経歴につ  
いてみてみたい。

盤主義を實踐した  
吉田作弥公使

本誌2015年7月号で、元  
タイ政府法律顧問で、当時愛媛  
県選出の衆議院議員であった政  
尾藤吉(1871-1921、  
5代目タイ公使在任中病死)が、

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

7/27/2019  
2019年12月



1917年7月3日の予算委員  
第一分会で、歴代タイ公使を批  
評して次の発言をしたことを紹  
介した。

○法学博士政尾藤吉君 もう一  
つ御尋したい、此暹羅と日本と条約  
関係が始まりまして、公使館が暹羅  
に設置されましたのが明治三十年で  
ありますが、第一回の帝国公使とし  
て赴任した人は今故人になつて居る  
稲垣満次郎と云ふ、此人は其当時は  
外務省へ横槍に飛入した人として、  
所謂外務省の方から甚しく嫌はれた  
人、排斥された人でありまして、又此  
処に居られます藤田「敏郎」政府  
委員にしても私にしても、偶には此  
人と争ふたこともありまして、此人  
が暹羅に於ける間にした仕事を考へ  
て見ると、中々成績が挙つて居る、  
川崎造船所又三井物産会社など、暹  
羅で確乎たる根拠を得て大きな商売  
をして居るのも、稲垣公使の斡旋の  
結果であることとを私は断言致  
して憚らぬのであります、然るに稲  
垣公使以後暹羅に赴任しました所の  
公使は、皆な外務省子飼の人であつ  
て、「二回目」に公使となつて行つた人  
「松方正作」も五箇月暹羅で公使を  
して居つて、それで逃げて帰つてし  
まひました、其人が帰りますときに  
私も出て送りましたが、晩餐会で暹  
羅の大官に向つて、「一寸日本へ帰つ

て参りますが、何ぞ御用は御坐いま  
せぬか、何でも求めて帰つて宜い物  
があれば、私に御遠慮なしに仰付ら  
れるやうにと云ふ挨拶があつたけれ  
ども、實際暹羅を退出して帰つて来  
るので、暹羅へ帰つて行くことは無  
かつたのである、たつた五箇月で  
帰つて来るから申訳がない、それで  
態々辞へ事を挨拶して居つた、私は  
それを傍で聴て、おかしな事と思ふ  
て心中で笑つて居りました、それか  
ら其次に第三回目に公使として暹羅  
に赴任された人「吉田作次」は……  
総て名は申しませぬ、其人は四年程  
暹羅に居りました、居りましたが日  
本公使は公使館に居るのかどうか、  
殆どそれすらも知らぬ位である、  
公使館で投網を編んだり、箱を拵へ  
たり、軍需を拵へたり、其人は網す  
きが上手であります、さう云ふこと  
をして四年程貴重な日月を費して  
しまつて、それから第四回目に公使  
「西・源四郎」に付ては斯う云ふ訴  
を聴いて居る、其実際は自分で見た  
のでありませぬが、暹羅に居る我帝  
国の臣民即ち吾々の同胞から聴いた  
が、それは其人は公使館から夕方に  
なると毎日自動車で運動に出るが  
が、併し町に出て伝染病にでも取付  
かれたら危険だと云ふので、公使館  
の門から出ることは出ない、外務省  
に出て決して町には行かない、外務省

へ用があつて行く時でも、町は通ら  
ないで態々遠道をして郊外から外務  
省に出掛けて行く、斯う云ふことを  
聴いて居る、是は私自分で知つて居  
る訳でないが、兎に角五箇月で退出  
して来るやうな人や、四年も五年も  
居つても、其間毎日毎日投網をすい  
たり、抽斗「ひきたし」を拵へたり、  
軍需を拵へたりして、公使館に居る  
のやら居らぬのやら全然存在を認め  
られて居らぬと云ふやうな公使、或  
は町を通ることを避けて態々郊外か  
ら外務省に行く、大廻りをして出掛  
けて行くこと云ふやうな人を無理やり  
にやらぬでも、外に外務省の閣以外  
から人材を登用して、稲垣満次郎君  
のやうに閣外から人材を登用すれ  
ば、幾らでも立派な人があると思ひ  
ます、此点に付て外務大臣の御意見  
を伺ひます (第三九議院 (一)  
(大正六年) 帝国議院衆議院委

員会議録第12巻「臨川書店刊、  
1982年、1361137  
頁」。

松方、吉田、西の三公使に対  
する、政尾の酷評は、上品とは  
言えないが、個人的偏見による  
独り善がりな見解であると決め  
つけることはできない。

例えば、1941年6月5日  
に、東京日比谷公会堂で、大日  
本仏教会(会長男爵木邊孝慈)  
は、真宗大谷派前管長大谷光演  
を大導師とし、日泰親善功労者



在タイ吉田作次公使 (1908-1914)

大法会を挙行し、松岡外相、橋  
田文相、駐日タイ公使、日泰学  
院長林銑十郎陸軍大将、大日本  
仏教青年会聯合会長安藤正純な  
どが参加した。この大法会で日  
泰親善功労者として供養された  
者は、日本人33人、タイ人3人  
の合計36名である。日本人は、  
仏骨奉迎のためタイに渡航する  
かタイと関係があつた僧侶18  
名、江戸時代の人物5名(木谷  
久左衛門、津田又左衛門、山田  
長政、島津陸奥守、徳川家康)  
の外は、大島圭介、川路寛堂、  
小松宮、山本銀介、岩本千綱、  
稲垣満次郎、政尾藤吉、松木良

助、藤山雷太、矢田長之助の10  
名である(水野梅曉編『日本文  
化与中国先賢』大日本仏教会、  
1942年12月20日発行、80-  
81頁)。在タイ公使で親善功労  
者として供養された者は、初代  
の稲垣満次郎、5代目の政尾藤  
吉、6代目の矢田長之助の3人  
のみで、既に故人となつていた  
3代目の吉田作次、4代目の西  
源四郎(1862-1928)  
の名はない。彼等は、日泰親善  
功労者とは見做されなかつたの  
である。

イギリスの公使(大使)は、  
在任国の同僚外交官について、  
助、藤山雷太、矢田長之助の10  
名である(水野梅曉編『日本文  
化与中国先賢』大日本仏教会、  
1942年12月20日発行、80-  
81頁)。在タイ公使で親善功労  
者として供養された者は、初代  
の稲垣満次郎、5代目の政尾藤  
吉、6代目の矢田長之助の3人  
のみで、既に故人となつていた  
3代目の吉田作次、4代目の西  
源四郎(1862-1928)  
の名はない。彼等は、日泰親善  
功労者とは見做されなかつたの  
である。

毎年報告することが義務付けら  
れているようで、1911年3  
月11日付けでイギリス公使  
Arthur Peel から Sir Edward  
Grey 外相へ提出された、the  
heads of foreign missions in  
Siam に関する報告では、吉田  
作次公使について次のように書  
いている。

"Japan. Mr. Yoshida has  
served at various posts in  
Europe, and was for some con-  
siderable time at Vienna. He  
afterwards returned to Japan,  
and was employed as a lecturer  
on international law. He has been  
in Siam about three years and  
leads a very retired life, the social  
functions at the Japanese Lega-  
tion being confined to a few  
large dinners during the course  
of the year. I have accompanied  
him and Baron von der Goltz  
[班逸公使] on some expeditions  
into the interior of Siam. He is an  
amiable, intelligent man, and  
extremely conscientious." (英  
国公文書館 FO 422/66, Siam  
Further Correspondence Part  
XXIII, 1911, p. 16)  
Peel 英公使は、2年後の1

913年3月14日付けの報告で  
も、吉田の在タイを3年から5  
年と修正した以外、何等の変更  
も加えてはいない。吉田はイギ  
リス公使の目にも、"leads a  
very retired life" 即ち、極め  
て隠遁的生活をしていると見え  
たのである。これは、政尾代議  
士の酷評と同趣旨である。

外交官の退屈的・隠遁的な仕  
事振りに付て、鶴崎寛城(ろ  
じょう)(本名熊吉、1873  
-1934)が次のように面白  
いことを書いて居る。鶴崎は、  
姫路出身で東京専門学校(早稲  
田大学の前身)を出て東京日日  
新聞に就職し、政治部副部長を  
経て政治評論の著作家に転じた  
人物である。

外務省は内務、大蔵と共に最も  
多く人材を網羅せりとて誇の一とせ  
るが、問々異色を放つ者ありと云ふ  
までにして将来は知らず、今日未だ  
真平の大外交家を発見するに苦む。  
一々四五の新婦朝名士と相会して談  
適々(たまたま)外務省の人物に及  
ぶや、彼等皆口を極めて在外公使  
以下外交官の無能にして且腐敗せる  
を詬罵し、外交機關の大刷新を断行  
するの刻下の急務なるを説く。然り  
彼等の多くと云ふよりも殆んど全部

は任地に在て一切交際を避け人と接触せざるより、其国の形勢に迂にして人を知らざる美に驚くべきものあり。之を称して外交官の蟹主義と云ふ。蓋し彼等の非活動強固的にして常に大公使館内に蟄伏せる、恰も蟹の人なきを見て穴中を出で、一たび人影を窺むれば勿惶として穴中に逃込むと一般にして、其本国政府に報告する材料の如きは外国新聞を渉獵して製造するに過ぎず。斯るは交際費の乏しきが為めなるかの疑ひあれど、事の実態は必ずしも然らず。故小村の駐英大使時代には機密費を余して本省に送還し蟹主義を実行したりと云へど、此の如きは寧ろ滑稽の一例と見るべきもの、甚だしきは機密費を全然自己の懐中に押入れて、何喰はぬ顔をする言語道断の者も少からず。又外交方面に出色の人

物を得ざる原因の一は外務の官僚が嚴重なる團結を作り、埒外より人物の入り来るを排斥するにあり。故稲垣満次郎の如きは通羅「シヤム」に於ても、西班牙「スペイン」に於ても相応に評判も好く又働の見るべきありしも、外務省よりは常に難児（まきこ）扱ひを受け、成績不良の部類に入れられたり。是れ畢竟排他思想より来れるのみ（鶴崎鸛城『明治大正人傑伝』成輝堂書店、1927年、110、111頁）。

吉田作弥公使の行動は、正に鶴崎の言う蟹主義を見事に実践したものと言ふ外あるまい。このように書いてくると、吉田には何の長所もないように見えるが、その経歴を見ると、な

かなか面白い人材であったことが判る。私が見た限り、吉田作弥に関する最も詳しい記述は、吉田の出身地である熊本で出版された、上村直己『九州の日独文化交流人物誌』に「外交官・吉田作弥」と題して掲載されているものである。まず、これを引用したい。

『外交官・吉田作弥』（上村直己教授著作）

明治初期の熊本には三人の傑物三兄弟がいた。吉田泰造、吉田義勝、吉田作弥である。三人を育成した父、吉田如雪は吉田家第14代に当たり、晩年、肥後藩主の令息細川建千代（のちの細川第15代藩主護国）の教育者になった人である。長兄の泰造は、明治5年実業のひとともに新学制により春日小学校を創設し、33才でその校長となり、近代教育を始めた。次いで熊本師範学校舎監となり独自の新教育法を行つた熊本近代教育の祖師であった。上熊本駅に近い京町台の往生院にある顕彰碑にも「熊本近代教育之功労者」の文字が冠せられている。弟義勝はフランスに約10年滞在し、明治の第一級の仏学者

として日本政府の教育勸諭の仏訳を完成し、最後は山梨師範学校校長を勤めた。そして三男作弥は外交官で、独逸学者でもあった。

吉田作弥は安政6年（1859）5月13日、肥後国・赤尾丸城趾（京町台）に生まれた。はじめ明治4年に熊本洋学校に入学、米国人ジェーンズから英語と普通学を学んだ。明治9年6月同校卒業。次いで洋学校入学時以来の友人である浮田和民とともに京都同志社英学校に入学した。これより先、二人は決心してキリスト教を奉ずることになった。父や兄弟たちはそれには反対したが、作弥は自分の信念を貫いた。明治12年夏、同校特別科卒業後、履歷書（外務大臣官房人事課）によると「爾来十六年二至ルマテ英語ノ習ニ依リ哲学ヲ自修」した。この間一時、大阪で宣教師について古典ギリシア語を研究した。明治13年神戸英和女学院の教師を勤めた。履歷書にはそのことは全く書かれていない。だが、浮田和民は外交官になる前のこの頃のことを「吉田作弥兄を思ふ」（創立五十年神戸女学院史）において次のように語っている。

（前略）私が君に始めて会見したのは明治四年九月熊本洋学校入学試験の当日であつたと思ひます。年齢に於て左程の懸隔はなかつたので



ありますが、君は漢学の素養に於て遙かに私の先輩でありました。家柄も肥後藩武道指南番で従て武術の達人又た碩学の士を出せる名家でありました。君は事故の爲め一年後れて明治九年六月卒業されましたが、私も病氣の爲め一年後れて同年同月に卒業し、それから明治十八年まで私は君と殆んど苦楽を共にし且つ所在を共にし、窮通相依り相助けられたのであります。

明治九年相携へて京都同志社に入學しましたが是より先き私共旧友は一同決心して基督教を奉ずることになりました。君には慈父あり、長兄あり、次兄ありて、交々君の異端を責め、且つ外間有力者の反対甚だしく君の出処進退頗る困難でありました。

君が一命を賭して其の窮地を脱し盟友と共に出発されたことは如何に私共を激励したか、今に忘れない所であります。同志社在学中も、君は最も勉強家であり、大冊ミル（John Stuart）のロジック（Logic, Ratiocinative and Inductive）なども読まれたことを記憶して居ります。明治十二年の秋、君は大阪に出て一時宣教

師に就て古典希臘語を研究されましたが、私も同時に大阪にありて、君と常に相往來して居りました。明治十三年君は神戸英和女学校教師となつて熱心教育に従事されましたが、翌年私も亦た神戸に赴き君と同宿することになりました。当時君が養成されました女学生の中には、後年社会に出て頭角を顕はし、今日に至るまで猶ほ活動して居らるる方があります。（後略）

だが、やがて人生の転機が訪れた。履歷書によると1884年（明治17）6月20日付で外務省御用係（准判任月俸金40円）を申付けられ、電信局に勤務した。そして翌年4月には在横「オーストリア」国公使館会

計主務を申付けられパリ、ベルリンを経て赴任した。1886年（明治19）3月交際官補として外務省に出仕し、ウィーン公使館付となった。この頃碩学ローレンツ・フォン・シュタインに面会し、學問をしたい、と申し入れたが、何の學問をしたいかと聞かれたので、哲学を学びたい、「と」言つたら、それには答えず、近世史を讀め、東洋の地圖を見よ、と言われたというエピソードが残っている。同郷人井上毅の引き立てにより1888年（明治21）ドイツのボン大学に留學することになった。ボン大学公文書館の資料によると、1888年11月17日に入学の登録を行い、89年の8月2日に退學している。年齢29。専攻は法律學。父の職業欄にはサムライ、宗教はキリスト教となつてゐる。最初ベートーヴェン街34番地に住み、のちポツベルスドルフアー・アレー96番地に移った。

1890年（明治23）3月同大学より法学博士の学位を授与された。帰國後、明治26年文部大臣秘書官に任じられたが、のち一時法科大学講師を勤めたが、同年11月第三高等中学教授となり法学部主事を命じられた。だが教師は性に合わぬと感じたのか辞め、再び明治31年外交官に戻つた。そしてウィーンに日本公使館の第二書記官となつた。最後は1

908年（明治41）6月特命全權公使に昇任しシヤム（タイ）のバンコックに赴任した。明治44年6月には勲三等瑞宝章を授与された。履歷書によると一九一四年（大正3）6月26日付で依願免本官となり、外交官生活に終止符を打った。そしてその後は悠々自適の生活を送つたようだ。元來彼は思案型の人間で、哲学や宗教に関する論文を雑誌にいろいろ発表しているほかに、『現代政治の社會化及産業化』（大正15年）『他界に在るジャリアの音信』（昭和2年）などの訳書がある（上村直己『九州の日独文化交流人物誌』、2005年訂正第2版、熊本大学文学部地域科学科、非売品、44146頁）。

小崎弘道は一緒にキリスト教に入信した吉田作弥について次のように回想している。

花岡山事件の後信仰を起したの私は私と吉田作弥の二人であるが、吉田の信仰に入るや彼の父は大に立腹し、是非共棄教させんとて或は道理を以て諭し、或は利を以て誘ひ、あらゆる方法を尽して迫つたけれども彼が頑として動かない所より終に威嚇手段を取り、抜刀を以て立向つた処、彼は徐ろに頸を伸べ「父の手で死するのは本望の至りである」と言ひ更に怖るる色がなかつたので、父

は「馬鹿者」と呼び、刀背にて彼の頭を叩いたとの事である。斯く彼は非常なる迫害を受けながら断乎として教の途に止つた（小崎弘道『小崎全集 第三巻 自叙伝』、警視庁小崎全集刊行会、1993年11月10日発行、18頁）。

この小崎の回想は、日本における近代キリスト教史に關する英文の書物多数に引用されておる、吉田作弥は命懸けの入信者として有名である。

同志社に入社した吉田作弥は、1876年12月に海老名正、小崎弘道らと第三公会に入会した。在学中吉田は、1877年7月8月に笠岡伝道、1878年1月に岡山伝道を行い、1879年6月に同志社第1回生として卒業後も1879年に土佐伝道に従事した。1880年1月になって浪花教会説教を辞任した（同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究』、みすず書房、1965年、32頁、551-558頁）。

同志社が開設されたのは明治八年十一月二十九日で、第一回の卒業式は明治十二年八月十二日に英学予科生十五名のために行われた。この日、卒業生全員は次のような卒業演

説を行ったのである。（一）耶穌教は税吏の友、海老名正（彈正）、……（六）使徒保羅一生の秘訣（笑）横井時雄、……（八）真正の知識浮田和民、……（十）信者の経験小崎弘道、……（十三）スペインの「スベンサー、Herbert Spencer」の説を評す、吉田作弥（青井厚「日本社会学史の一瞥（一）」、『人文学』（同志社大学人文学会）第57号、1962年3月、45-46頁）。

このように、吉田作弥は1879年6月12日に卒業した同志社の第1回卒業生15名の一人である。翌1880年、吉田は神戸女学院の教師に就職した。

その後、吉田は1884年（明治17）6月20日付で外務省御用係に転じ、交信局に勤務した。『明治十八「1885」年三月任外務書記生、埃國在勤を命じられ、1886年3月「任交際官試補、叙任官六等」、同年7月に正八位に叙された（外務省大臣官房人事課『明治四十二年外務省年鑑』210頁）。

内閣官報局『職員録』によれば、1886年12月現在、吉田（この時まで宇野姓）は、埃國維也納（オーストリア・ウィエナ「ウィーン」）公使館で西園寺公望特命全權公使の下で「奏任官六等 交際官試補 正八位 宇野作弥」である。1888年3月には、ハーグ公使館に転勤となった。『職員録』によれば、1888年12月10日現在、和蘭國海牙（オランダ・ハーグ）公使館で、吉田（既に吉田姓）は「交際官試補、奏六等（中） 正八位」である。

上に引用した上村教授のボン大学での調査によれば、吉田は1888年11月17日にボン大学に入学登録し、翌89年8月2日に退学した。

89年11月にはロシアのペテルスブルグ公使館に転勤となり、1893年5月の帰朝までの3年半、同公使館に交際官試補として勤務した。

吉田は「二十三「1890」年三月独逸ボン大学に於て法学士並に法学博士の学位を受」（前出外務省年鑑）けた。

上村教授の記述では不明瞭だが、吉田は欧州の公使館に勤務しながら、ボン大学に1年足らず在学して、法学士と法学博士（ドクトル・ユーリス）の二つの学位を得たのである。

当時のドイツの学制を見なければ、正確なことは言えないが、この時代のドイツでは学士と博士の学位は大きな差がなかったものと思われる。

博士論文は、ドイツ語で『日本における国法と封建制度の史的発展』というタイトルで1890年に刊行された。124頁の小冊子であり、見出しを見る限り、645年の大化の改新から1868年の明治維新までの法制史の概説に過ぎないと思われるが、1991年に発行された「A History of Law in Japan Until 1868 by Carl Steensup, E.J.Brill」の177頁は、吉田作弥の博士論文について「Clear description of the feudal system. Still valuable for Tokugawa studies」と評価している。



連載  
バンコクの日本人

## 在タイ10年の明治の農業技師 横田兵之助（6）

### 第3代シャム公使 吉田作弥の履歴（続）

吉田作弥（1859-1929）は、16歳年長の郷土（熊本）の先輩である井上毅（1843-1895）から薫陶を受けており、1890年3月に刊行したドイツ語の博士論文『日本における国法と封建制度の史的発展』では九一頁を使って、内閣法制局長官井上毅への献辞を大書している。

井上毅は、近代日本国家の骨格となった明治憲法や教育勅語などの起草者として知られる、制度作りの専門家である。欧州の近代哲学に興味を持っていた吉田が、博士論文のテーマに煙草の日本法制史を選んだのは、井上毅の徳性によった可能性もある。勿論、当時の欧州では知られていない日本のことを書けば、比較的容易に博士論文として認められるという便宜的

な考慮もあったものと思われるが。

吉田は、1889年11月にロシアのペテルスブルグ公使館に転勤となり、1893年5月の帰朝までの3年半、同公使館に交際官試補として勤務した。吉田は帰国と同時に、次の読売新聞の記事に見るように、当時伊藤博文内閣の文部大臣であった井上毅（文部大臣在任1893年3月7日-94年8月29日）の文部大臣秘書官に就任した。迅速な就任から見ても、井上毅に秘書官就任を請われて帰国したものとと思われる。

文部大臣秘書官の更迭、文部大臣秘書官本場貞長氏は昨日文部書記官に転任し而して其後任は目下帰朝中なる露國在勤交際官試補吉田作弥氏に任命ありたりといふ尤も吉田氏は元「井上毅」大臣の薫陶を受けたる人にて交際官中にて頗る敏腕家の聞えある人なりと聞けり（読売新聞1893年5月5日）。

ところが、吉田は半年余りで大臣秘書官を辞してしまつた。井上毅文相は、1894年3月30日に高等師範学校卒業生を官邸に招いた際の演説で、吉田に言及して曰く、

余の朋友であるが、此の間まで文部省に奉職して居つた吉田作弥氏が、埃太利「オーストリア」で名高いスタイン氏に面会して、学問したいと言ひ入れたが、其の時、スタイン氏が何を学問したいかと問ふにより、答へて哲学を学びたいと言つたらば、スタイン氏は返答もせず、近世歴史を認め、東洋の地圖を見よと言ふた、是は親しく吉田氏の話であるが、此の話は思ふべきことに考へる、スタイン氏はあちらでも、随分理論家と謂はれる人である、然るに歳少い日本人が、哲学を学びたいと言つたことが氣に喰はない、近世史を認め、東洋の地圖を見て感慨せよとの意を示した（井上毅傳記編纂委員会『井上毅傳 史料篇 第五』、國學院大學圖書館、1975年、450頁）。

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

2018年1月

スタインとは、ウィーン大学政治経済学教授のシュタイン（Lorenz von Stein、1815-1890）のことである。大日本帝国憲法制定準備のために、1882年に欧州憲法調査に伊藤博文らが派遣されたが、伊藤等はシュタインから2ヶ月に亘つて講義を受けた。シュタインは当時の欧州の社会運動や社会主義思想なども研究していたが、日本の実状に照らして日本には普通選挙や政党政治は不適であり、国家が社会改革を指導すべきであると説いて伊藤等に大きな影響を与えた。

吉田が何故短期間で、井上文相の秘書官を辞したかは判らないが、井上の上記演説では、後輩の吉田作弥を朋友と呼び、また吉田から聞いた話を援用していることから見て、井上和吉田の關係は吉田が秘書官を辞した後も依然良好であつたと思われる。



吉田は、明治27年の内閣官報局『職員録(甲)』によれば、第三高等中学校の教授(年俸1600円)となっている。同中学校は1894年(明治27年)6月23日に高等学校令により、第三高等学校に改組された。第三高等学校は、専門学部(法学部、医学部、工学部)のみを置く学校として発足した。明治28、29、30年の『職員録(甲)』には、吉田は、第三高等学校教授、法学部主事と記載されている。

月12日、13日）。吉田が第三高等学校教授から、外交官に復帰した理由は不明である。但し、1897年6月に京都帝国大学が新設されたことに伴い、第三高等学校は、大学予備教育機関に性格を変更され、吉田の所属した法学部などの専門学部は廃止されたことに關係があるのでないかと推測される。

吉田は1898年10月には、一等書記官に昇進した。翌1899年2月1日現在の明治32年の『職員録(甲)』によれば、吉田は、オーストリア公使館の二等書記官 四等三級 正六、勲六 吉田作弥」と記載されている。外務省大臣官房人事課大

正二年外務省年鑑』によれば、吉田は、1900年11月にオランダ公使館の一等書記官に異動となったが、8ヶ月ほどした翌年6月には、再度オーストリア公使館の一等書記官に戻り、1904年9月までこの職にあった。

要するに吉田の第2回欧州勤務は、6年間をオーストリアのウィーンで過ごしたことになる。注目すべきことは、吉田の後任シャム公使となる西源四郎が、1899年11月から190

9年12月まで10年間に亘つてオーストリア公使館(後大使館)に二等書記官、次いで一等書記官として在勤していることである。吉田と西は、ウィーン公使館で6年間に共にしたのである。

1904年9月に帰国命令により外務省に戻った吉田は、3年間に亘って、位階、勲等、給与も変わることなく、「公使館一等書記官 三等一級 従五、勲五 吉田作弥」として、臨時外務省の事務に従事した。具体的にどのような事務に従事したのかは、新聞の報道もなく不明である。当時の規則では、3年間待命であると、自動的に免官となったが（第2代目シヤム公使松方正作は、3年間待命の後免官となった）、吉田の場合は、待命ではなく「臨時外務省の事務に従事」したので、首はつな

1908年4月に入ると、俄に吉田の人事が新聞紙上に報道されるようになった。4月15日の朝日新聞は、外務省の「通商局長の後任は公使館一等書記官吉田作弥氏若くは倉知外務参事官之を

ところが、1898年(明治31年)4月9日付けで、第三高等学校教授吉田作弥は公使館二等書記官(高等官四等)に任じられ、オーストリア在勤を命じられた(朝日新聞1898年4

吉田は、オーストリア公使館の二等書記官、四等三級、正六、勲六、吉田作弥」と記載されている。外務省大臣官房人事課「大

要するに吉田の第2回欧州勤務は、6年間をオーストリアのウィーンで過ごしたことになる。注目すべきことは、吉田の後任シャム公使となる西源四郎が、1899年11月から190

1904年9月に帰国命令に

9年12月まで10年間に亘つてオーストリア公使館(後大使館)に二等書記官、次いで一等書記官として在勤していることである。吉田と西は、ウィーン公使館で6年間に共にしたのである。

擇するに至るべし」と書いた。同年6月10日の朝日新聞は、吉田はフランス大使館の参事官候補であり、「暹羅、智利の両公使は飯島亀太郎、能勢辰五郎、宮岡恒次郎三氏の内より其任命を見るべく二十日前後に発表する由」と報じた。一方、同じく6月10日付けの読売新聞は、外務省の6ポストの読者人事に關し、「其の候補者として目せられ居るは宮岡恒次郎氏の暹羅國公使、松方正作氏の仏國大使館参事官、國府寺新作氏の露國大使館参事官、吉田作弥氏の澳國大使館参事官、市來政方氏の伊國大使館参事官等にして智利國公使には能勢辰五郎、飯島亀太郎兩氏の中より任命せらるるに至るべしと云ふ」と報じた。

報道では、宮岡恒次郎のタイ公使任命が有力視されていた。しかし、6月18日付けで、「公使館一等書記官従五位勲四等吉田作弥」が「任特命全權公使(二等)」暹羅国駐劄被仰付」された(読売新聞1908年6月19日)。

満49歳の吉田作弥は、1908年7月29日に横浜解纜の加賀丸で栄子夫人を伴うことなく単身赴任した。吉田が持参してタ

イ國王に捧呈した、天皇の信任状には、1908年7月22日付で松方正前公使の解任と吉田作弥新公使の任命が記されていた(タイ国立公文書館蔵ナ67/20)

1908年（明治41年）は、日本の在外  
大公使館は、大使館が英、米、仏、  
独、伊、奥、露の7ヶ国、公使  
館が清、オランダ、メキシコ、  
シヤム、ブラジル、ベルギー、  
スペイン、スウェーデンの8ヶ  
国に存在するに過ぎず、吉田に  
とって在シヤム特命全權公使任  
命は榮譽であつたはずである。  
また、吉田と同格のキャリアを  
歩み、吉田の公使任命時には、  
同じく外務省の待命一等書記官  
であつた国府寺新作（1857  
- 1929）のように、公使にな  
れないまま依願免官となつた  
者もいる。吉田がシヤム公使に  
任命されたことは、幸運である  
と思われるのだが、タイに赴任  
した吉田は目立つた働きをする  
こともなく、どうして事勿れ主  
義に徹することになったのであ  
らうか。

バンコクは左遷地？

タイの公使館への異動を、左遷だと受け取る不心得者の外務官僚は少なからず存在していた。本誌2014年8月号で紹介したが、1922年11月13日に、在暹(シヤム)特命全權公使矢田長之助は、外務大臣伯爵内田康哉に宛て、「在暹帝国公使館サーピス改善に関する卑見」と題した、長文の意見具申を行い、その冒頭で次のように述べた。

一種の左遷地を以て看做され来り当館在勤を命ぜられたる者がその全部と迄は言はざるも殆んど大多数不平と不満を抱懷せんは否む可らざる事実なり 由來外務省には欧米在勤者を利ける「ぎけもの」扱ひにし当館等に勤務する者を目して田舎巡り

と呼ぶの習例を刪改し、或は当館在勤の命令を以て辭職の間接接應と感觸する者ある亦強ち咎む可らざる状態に在りき。如斯は當事者自身が時代の進展に盲目なるの致す処而して帝国外交の刷新上最も浩嘆すべき事實なり。

由來青年外交官が徒らに欧州勤務に憧憬し、國交及經濟の見地より極めて重要な新意義を有する暹羅は言はずもがな進んで支那各地南洋印度等に在勤せんとする勇氣ある者比較的に稀少なるやに觀測せらるるは實に由々敷稱神上の墮落にして此墮落を救済せんが爲には上局は宜しく從來の陋習を一擲し、當館等に対する閑寂的態度を改め、當館の地位と權威とを向上せしめ、以て從來の誤解と謬想とを一掃するに付何等剝削「がいせつ」なる方法を講ぜらるること刻下の急務なりと信ず。（外務省記錄）

16

536

15

555

6.12/6-1「在外帝国公館関係  
雑件（在亜細亜南洋支那各  
館）」。

第6代シヤム公使の矢田と稻  
垣初代公使との間には、松方正  
作、吉田作次、西源四郎及び政  
尾藤吉の4公使しか存在しない  
から、矢田の言うバンコクに左  
遷され不平不満を抱懐した者が  
公使だとすれば、外務省子飼  
の松方、吉田、西の3名以外に  
はいないことになる。

また、矢田は「青年外交官が  
徒らに欧州勤務に憧れし、シヤ  
ムを顧みないと述べているが、  
これについては、1903年に  
1年ほど在タイ公使館の二等書  
記官を務めた小松緑（1865  
-1942）の好例がある。本  
誌2014年6月号で紹介した  
ように、小松は5世王が在タイ  
日本人たちに共同墓地を与える  
ことを認めたにも拘わらず、現  
地視察には全く足を運ばず、一  
方で、タイ政府が自分に叙勲す  
るよう頑張った御仁だが、在  
米国公使館（高平公使）二等書  
記官から欧州への異動を希望し  
たにも拘わらず、シヤムへの異  
動となったことを左遷であった

として次のように書いている。  
三九 酒と女の訓戒通羅への左遷  
高平「小五郎」公使の推薦で、筆者  
は少くとも伊太利辺へ行けること  
と思つてた。  
然るに、意外にも突然帰朝命令が来  
た。この時、外務大臣は加藤高明か  
ら小村寿太郎に代つてた。  
高平公使は、裏心から筆者に同情を  
寄せたらしく、  
「どうして欧州行が聴かれなかった  
のであろう。」  
と不思議がられた。

しかし筆者としては、一日も早くワ  
シントンへ去りたかつたので、すぐ  
帰朝することが出来れば、なほよい  
と思つた。  
いよいよ東京に帰つて、本省に出頭  
すると、小村外相は珍田「捨巳」次  
官と同席で、  
「今度稲垣通羅公使が急に帰朝する  
ことになったので、後任公使の確定  
するまで、暫く代理公使として行つ  
てくれたまへ。」  
と言ひ渡され、更に言葉を改め、  
「君の技術は何人も認めるが、チト  
酒と女が過ぎるようだ。少し注意す  
るがよからう。」  
と追ひ加へられた。

外の人ならイザ知らず、その道の家  
の者として一世に隔れもない小村  
珍田両大家から酒と女の御意見を頂

戴した時、筆者はあふなく腹飯（ふ  
きだ）しさうになつたが、強ひて弁  
解する必要を見出さなかつたので、  
謹んで御訓示を守るべき旨を答へ  
て、そのまま引下つた。

その頃、筆者を最前にしてくれた山  
座「圓次郎」政務局長の語に拠ると、  
高平公使は公文で筆者の欧州転任を  
推薦しながら、別にその親友杉村  
「潜」通商局長に私信を送り、筆者  
が自暴酒をあほつて遊里に流連（い  
つつけ）した醜態を細々と報告した  
さうで、その私信が杉村局長から小  
村外相に差出されたといふことであ  
つた。

酒と女に関する外相の訓示と通羅左  
遷の由来が、それで漸く判つたので  
ある。

使として行つてくれたまへ」と言  
われたと書いているが、これは、  
稲垣満次郎辦理公使が、190  
3年4月1日にバンコクを發つ  
て4月23日に東京に帰着した時  
のことである。結局、シヤム公  
使の更迭はなく、稲垣が同年10  
月8日に特命全權公使に任じら  
れ、10月16日に東京を發ち、11  
月10日にバンコクに戻つてき  
た。

#### 在タイ日本国大使館 HPの誤り

ついでながら書いておくと、  
在タイ日本国大使館のホーム  
ページ中、「大使館案内」の「歴  
代大使リスト」には、稲垣が辨

理公使から特命全權公使に昇任  
した時期が、間違つたまま長ら  
く放置されている。国立国会図  
書館サーチに「稲垣満次郎」を  
入れて検索すると、1903年  
10月9日の官報（6083号）  
がヒットし、その官報表紙の裏  
（170頁）に、明治36年10月  
8日付けで「任特命全權公使  
辦理公使從四位勲三等稻垣満次  
郎」と明記されている。稲垣が  
辦理公使から特命全權公使に昇  
任したのは、1903年10月8  
日であることは一目瞭然であ  
る。

ところが、在タイ日本大使館  
の上記「歴代大使リスト」には、  
稲垣が特命全權公使に任命され  
た日を、1899年11月19日と  
誤記している。この誤記は、外  
務省人事課の記録が誤っている  
ことによるものようである。

例えば、外務大臣官房人事課「外  
務省年鑑 貳」1937年、51  
頁には、稲垣満次郎は弁理公使  
には1897年3月31日、特命  
全權公使には1899年11月19  
日に任命されたと記されている  
からである。  
筆者は、7-8年前から、在

タイ日本国大使館HP上の誤記  
を指摘して来たのだが、一向に  
修正されない。本省人事課の記  
録の方が官報より正しいとでも  
言うのだろうか。官報で正確認  
の上、早急に修正して頂きたい  
ものである。

さて、小松緑の経歴を見ておく  
と、

小松緑は自著「偉人奇人」（学  
而書院、1934年）に「子  
（ゲツキョウ、ぼうふら）伝」（同  
書、213-287頁）と銘打つ  
て、自分の生い立ちを載せてい  
る。それによると、彼は会津藩  
の貧乏武士の長男として186  
5年に生まれた。明治になって  
父は東京で巡査に就職した。緑  
はアメリカに留学したいという  
大志をもっていたが、父親の安  
月給に頼ることはできず、まず  
英学を学ぶために、1878年  
に慶應義塾に入学した。更に、  
洋行費用を作るために1881  
年に慶應義塾を中退して、電信  
学校に入り半年研修を受けた  
後、電信技手に採用され名古屋  
電信局、次いで桑名、横浜で勤  
務した。横浜で遊里の味を覚え、

貯金していた渡航費用を費消し  
ただけでなく多額の借金を負  
い、給料まで差し押さえられて、  
免職となつてしまった。

運良く横浜で英語の家庭教師  
を頼んでいた米人家族の世話  
で、1887年に米国に渡航。  
サンフランシスコの家庭に住み  
込み、学僕として働きながら、  
高校に学び、3年間で高校卒業。  
更に1年間学僕をして資金を貯  
めて、アイオワ州立大学、更に  
エール大学で法学、プリンス  
トン大学院で政治学を学んだ。在  
米8年で、1895年に帰国し、  
一時明治学院等で教鞭をとつ  
た。

同年、陸奥宗光外相の下で外  
務省大臣官房翻譯課の翻譯官に  
採用され、「職員録」によれば  
1895年-1899年は翻譯  
官、1899年には政務局も兼  
勤し、1900年から1902  
年は、在米国公使館の二等書記  
官として勤務した。シヤム在勤  
から、本省に戻つた後、3年間  
連続して「臨時外務省の事務に  
従事する外交官」のままで、  
1906年に11年間勤めた外務  
省を去つた。その後、明治三十

九年「1906年」、伊藤博文  
が韓国統監となるやこれに随行  
して外務部長となり、のち統監  
會称荒輔を輔けて韓国併合の事  
に當つた。次いで総督府外事局  
長、中樞院書記官長に進み、大  
正五年を以て官を辞した。以来  
専ら著述に従つたという（平凡  
社「新撰大人名辞典 第七巻」1  
938年、230頁）。

#### 三シヤを避ける？

第9代目シヤム公使として、  
1936年末から1937年前  
半に在勤した石射猪太郎（18  
87-1954）も、シヤムを  
左遷地視して、次のように露骨  
に書いている。

石射猪太郎が上海総領事で  
あつた1936年の、

五月某日、本省からの電信に「矢  
田部公使の後任として貴官をシヤム  
公使にとの内議あり、諸君同電あれ  
とあつた。総領事から公使に、は一  
応榮進ではあるが、この電信は、私  
には官歴の醜態と響いた。擬せられ  
た任地がシヤムだからである。

誰がいい始めたか、三シヤを避け  
るという言伝えが外務省にあつた。  
ギリシヤ、ベルシヤ、シヤムへの公



後付けの説明が所々に加えられているようで、取り立てて賞賛すべき作品とも思われない。

石射の回想録は、その後再刊され、また中公文庫でも3回も刊行されている。上記「三シャ」を避ける」という話は、その後多くの著書でも引用されているので、今では人口に膾炙している。欧米コンプレックスの元外交官の軽口、俗吏の戯言が、タイの人々に無用の誤解を招く、とすればその罪は少なくない。

使に就任するまでに7年足らずしかない。「言伝え」ではなく、石射が創作したのではないだろうか。

なお、1936年半ばに、日本の大使館は11ヶ国、公使館は23ヶ国で、公使館の所在国は、欧州11ヶ国、南北米7ヶ国の外に、イラン（ペルシャ）、アフガニスタン、エジプト、エチオピア、シヤムであった。

筆者の学生時代の外交史の教授は講義で、石射の回想録は外交官が書いた回想録中、最も出色の作品であると賞賛していたが、現在読み返して見れば、本書には、終戦直後の世相に投じて、軍隊を悪者扱いしさえすれば免罪されるという立場から、

使は御免蒙り度いという意味なのだ。非衛生地であり、官屋の狭小路だからであつた。シヤムはわが多年の友好国だが、日本の外交大道からすれば横丁であり、公使のポストとしてはうば捨山であつた。過去においてこのうば捨山から望まへ更生した唯一（ママ）の例外は、後にブラジル大使になつた林久治郎氏だけである。そのシヤムにお前行かないかとの本省来電なのである。自分の寿命を縮まれた気持であつた。

諸君回電あれとあるからには、拒絶の余地はあつたが、すぐ受諾を返電した。従来任地の選り好みをして、好いポストだけを頼もうとする或る人々の策動を噂に聞くことに、私はこれをいやしんでいた。人事当局からあてがわれた任地は、たとえ、望まじからぬものであつても、これに勇往するのが吏道であり、かくてこそ、外務機構の規律が保たれるのだとの持説が、いつしか私の頭に宿っていた。シヤム行きを断るのは、この持説の手前、私の潔しとするところではなかつた。

受諾の電信に対し、折返し私は帰朝命令を受取つた。事務の整理と、各方面とのお別れの行事に多忙な一ヶ月を過ごし、家族と共に上海を立つたのは、七月初めであつた。

東京に着くと、すぐシヤム公使を

連載  
バンコクの日本人

## 在タイ10年の明治の農業技師 横田兵之助（7）

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

### 稲垣公使の 日タイ関係緊密化の努力

1911年12月2日のワチラーウット王（6世王）戴冠式に、明治天皇の御名代として伏見宮博恭王（ふしみのみやひろやすおう、1875-1946、日本の海軍兵学校を中退して1889年から6年間ドイツ海軍に留学、1932年から41年まで海軍軍令部長・軍令部総長として海軍のトップ）が、御召艦伊吹（装甲巡洋艦、1万4600トン）で来タイされ、11月28日から12月9日までバンコクに滞在された。日本の新聞社で、戴冠式取材のために特派員を派遣したのは、大阪毎日新聞のみであり、同社の特派員、三宅松郎が伊吹に便乗して来タイした。この前後に大阪毎日新聞は、タイ事情を詳報しており、同紙1911年12月1日号の「暹羅皇帝戴冠式記念号」は、

1902年暮れに、皇太子ワチラーウット殿下が訪日された後の日タイ関係の発展を、「日本最良の陛下」の見出しの下で次のように書いていた。

一度日本の風光に接せられたる殿下は御帰国後も尚ほ日本の風物等を慕（いた）く御愛でさせられ片時も忘れさせ給はでありしが（やがて形となりて）願はれたものはゾースト「ドゥシット」パーク宮庭の一隅に日本式の茶室を御建築相成つたことである。此茶室は日本の建築技師に設計せしめチークの精材を選んで造られたため些（すこし）の損傷もなく緑に包まれ庭園に今尚ほ当時の記念を留めて居るのである。

次に事実となりて現はれしは明治三十八年政略「藤吉」博士夫妻帰朝の際皇太子殿下の留学生として皇族貴族の男子四名、母后陛下の留学生として女子四名派遣されたことで、男子は高橋順次郎博士の監督の下に東京高等工業学校、東京美術学校等に入学し、女子は故高橋秀夫氏の監督の下に茗溪の女子高等師範付属高等女学校に入学し或は四年或は六年

の課程を終へて今は何れも帰国して夫々国の為に裨益して居る。

又高橋屋呉服店が暹羅皇室の御用を承るに至りしも川崎造船所が暹羅政府より船艦の注文を受けるやうになりしも、三井物産会社が暹羅の陸海軍の御用を命ぜらるるに至り出張所を盤府（バンコック）に置くやうになりしも皆それからのことである。特に大書すべきは日本公使館の人気の好調なりしことである。当時バチラウット「ワチラーウット」皇太子殿下は稲垣公使とは特に御親交の間柄であらせられたが、其の一例を挙げれば「明治」三十八年十一月の頃であつたらう、三井物産会社からは例の益田孝氏の令弟益田英作氏と稲垣公使夫人の令兄山口俊太郎氏とが特派員でふ名義で金箔付はがき大の名刺を振まはして統語完達みの運動の為に滞暹中であり、又川崎造船所副社長長川崎芳太郎氏一行も皇太子御用の快速船（ヨット）注文に關して来暹中の頃であつたが一夜稲垣公使は日本公使館へ皇太子殿下の台端を仰ぎ芝居を催して台端に供したことがあつた、当夜の役者には

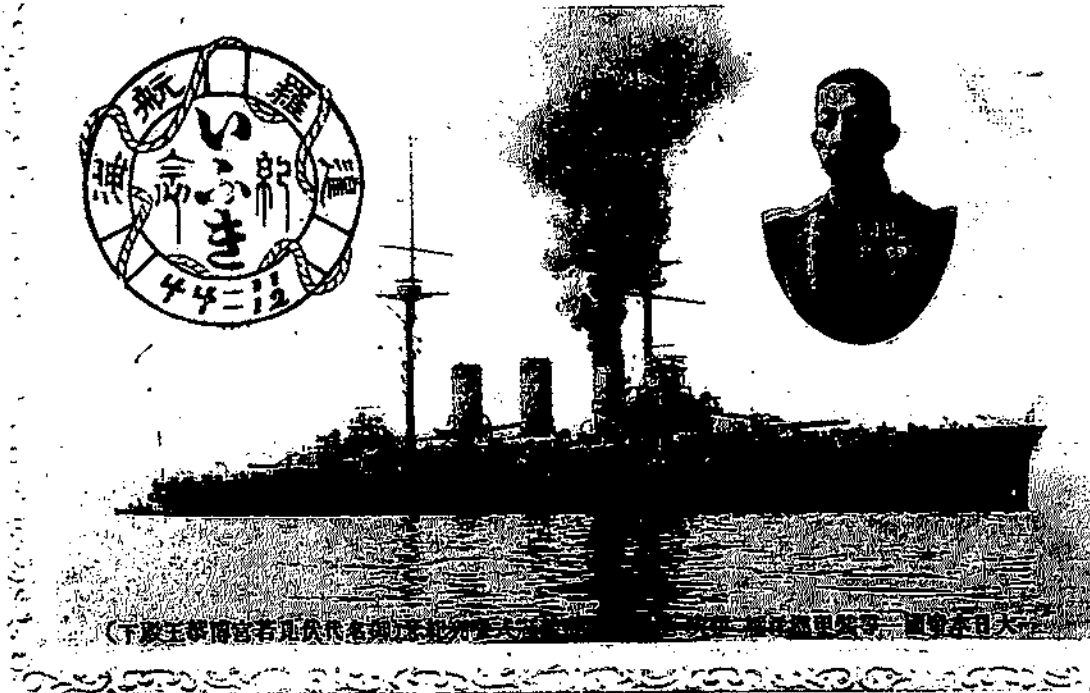
仏蘭西婦人に仮装せし益田英作氏高橋（ハイカラ）暹羅人に扮せし領事小松緑氏（現朝鮮外務部長）給仕（ボーイ）に擬せし川崎芳太郎氏等で殿下は殊の外御満悦遊ばされ今尚ほ折々其時のことなど語り出でさせらるやに承る。

翌年暹羅古来の風習として竹の園生の御身にも暫時「1904年8月21日-12月15日」僧侶にならせられ托鉢をもし給はれたことがあつたが、何がさて未来の皇帝陛下たるべき皇太子殿下の御托鉢であるから各皇族大官連中は競ふて己が屋敷へ台座を御願申上ると云ふ有様であつたが万事に掛けて抜目なき稲垣公使は此好機逸すべからずとなし殿下を日本公使館へ御招き申上げ稲垣夫妻は鎮みて御布施を捧呈したことがあつた。暹羅皇太子が外国公使館へ托鉢に赴かれしことは前代未聞のことであるので此光栄を泰なうせる稲垣公使夫妻の喜びは嚙（た）ふるにもなかりしとのことである。

斯くの如く皇太子として日本公使館に多大の御厚情を持たせられたるバチラウット「ワチラーウット」陸

クレンター  
2018年2月3日





6世王戴冠式に伏見宮博恭王を乗せて来タイした巡洋艦伊吹

下は御登位後今日に至るも日本国民に對して常に愛の御同情を持たせ給ふのである、今其一二の例を挙ぐれば昨年先帝崩御の節各國在留民が花輪を捧呈して弔意を表したとき日本人も亦十名の總代を選み花輪を捧呈したのである、此時總代一同に拝謁を賜ひ政尾博士は一同を代表して弔詞を奏上したが之に對し陛下は最も優渥なる勅語を賜つた此勅語は原文は立派なる額面として同地日本俱樂部に長（とこしな）へに記念として残されてあるが其大意は次の如くである。

朕は日本人が朕の先考の靈に敬慕の意を表せしむるに際し重なる供物をなせしを茲に感謝し併せて諸子より朕の隆昌を祈るの辭を受くるを欣（よろこ）ぶ、

日本人と我々日本人とは夙に親厚なる友誼を有し、日本人は過去並に現在に於いて通帝國の爲めに顯著なる功績を挙げたり。

朕は即ち我國に居住する總ての日本人を援護し、恒に安寧と福祉とを享有せんことを期す。

右勅語の内、過去並に現在に於いて通帝國の爲に顯著なる功績を挙げたり云々の一節は他の外国人に對しては賜はりたる勅語にはないのである、尚一例を挙げれば陛下は今年の三月十三日を以て政尾法学博士を通

羅の貴族に列し「ビヤ」の爵を賜はつたことである、通羅の貴族の爵は吾國のそれの如く五級に分れて居る、而して「ビヤ」は其第二級に位するものであつて頗る高貴の爵となつて居る、之等は陛下が如何に日本人に信頼し給ふかを証するに余あることである、聞くところによれば先帝チユラロンコルン「チユラロンコルン」陛下には政尾博士を通羅國に帰化せしめ、然る後通羅國の貴族に列する御望望であらせられたさうだが政尾博士は飽く迄日本人として通羅國に尽瘁したいといふ願望であつたために先帝御在世中は其御沙汰がなかつたのであらうか、然るに今帝バチラウット「ワチラーウット」陛下の御代となりて茲にこの高貴の爵位を授けらるるに至つたのである、これ独り博士の名譽のみならず、吾國民の名譽である、これにつけても今帝陛下の御厚意の程が察せられて吾々日本人は云ひ知れぬ有り難さを感じるのである。

通羅は古来早婚が行はれ、且一夫多妻主義の流行する國として世界に紹介されて居る、然るにバチラウット陛下は三十一歳にならせらるる今日に至つても儼然独身であらせ給ふことは世人の均しく奇とする所である、去る明治三十五年日本に御來遊の節も欧米の諸新聞雜誌は種々の取

沙汰をした或は日本の高貴の御方と御婚約するものではあるまいかと疑つた向きもあつたが皆當らなかつた名古屋、京都などで夥多（あまた）の美人も侍つて長途御旅行を勞（ね）ぎらひ奉りたることあるも婦女子に御關係あそばされなといふ噂は更に立たなかつた、御帰國後も今日に至る迄未だ嘗て婦女子に御關係あそばしたと云ふ噂が立たないのである。

1910年10月23日にチユラロンコルン王（5世王）が崩御になり、同年11月11日にワチラーウット王（6世王）の即位戴冠式が挙行された。崩御から5ヶ月足らずの翌1911年3月16日に5世王は火葬式で茶毘に付された。その後同年12月初めに6世王は諸外国の代表を招いて、2回目の即位戴冠式を盛大に挙行政した。

上記引用文中の「日本俱樂部」は、泰國日本人会の前身である。5世王の崩御に際し、日本人総代10名が弔問に参上し、6世王から賜つた優渥なるお言葉のタイ原文を額に入れて、日本俱樂部は記念として永久保存していったというが、今日これを目にすることができないのは残念である。

日本人総代の弔問について、1910年11月15日付けで吉田作次郎公使が小村寿太郎外相宛に、「暹羅皇帝陛下へ内謁見の件」と題して発した公信82号において次のように触れてい

る。新立ワジラウット「ワチラーウット」暹羅皇帝陛下は戴冠式の翌日即ち本月十二日「1910年11月12日」

各國使節長へ個々特別の内謁見仰付られ小官も同様謁見を給はり進んで最敬礼を致候処座を賜はり種々御懇話有之就中「昨日は天皇陛下より懸篤なる電報を給はり洵に感佩に不堪直に返電を呈し置きたり」又「先帝の崩御に付盛々日本在留民が致したる哀悼の辭に接し感謝する所なり」云々の御沙汰は之を其筋に報告するを怠らざるべく我が陛下に於ては必ず満足に思召さるならん其他我政府は先帝の崩御及陛下の御登極に際し深厚なる哀情を以て致次小官に電訓する所有之候旨言上し及候処陛下は「双方の皇室及政府に斯の和衷」「心の底からなごむ」あり相倚て以て起つを得べし」云々仰せられ候

右謹んで及報告候敬具（外務省記録6471-19「各國元首及皇族弔喪雜件 暹羅人の部」）。

當時のタイ官報に日本人総代の弔問と6世王のお言葉は記載されていなが、新聞の詳報を見つけたので、次号で紹介したい。

さて、旅券下付表によれば、川崎造船所副社長の川崎芳太郎（33歳）と同營業部長の四本萬二（41歳）は、印度・暹羅國を商業視察する目的で、1903年10月19日に旅券の下付を受けており（外交史料館リール旅券34、小松緑バンコク領事（公使館二等書記官兼任）が在タイしたのも1903年であるから、稲垣公使が、ワチラーウット皇太子を謁劇のために日本公使館に招いたのは、1903年末で間違いないはずである。稲垣公使夫人栄子（187

9-1966）については、本誌2010年11月号から11回連載した。稲垣公使夫人の異母兄山口俊太郎（1863年生、1887年東大土木工学科卒）は、1901年11月27日に暹羅へ商業のために渡航する目的で旅券下付を受けている（外交史料館リール旅券26）。彼が暹羅行きのため旅券の下付を受けた記録は、この一件しか見つからなかったが、多分その後何回も三井物産の武器売込のために暹羅に出張したのと思われる。山口俊太郎は、稲垣夫人の兄であるとともに、稲垣自身も大学予備門の同窓でもあるので、来タイ時には公使公邸に宿泊したものとと思われる。本誌2011年4月号で紹介

した、1905年春の益田英作(1865-1921)の訪タイ時の出来事だと思われるが、三井物産の高橋敏太郎は、1925年4月にバンコクに1週間滞在して聞いた話として次のように書いています。

盤谷出張所、日露戦争の済んだ頃、三井物産から益田英作氏と山口俊一「正しくは俊太郎」氏が、武器の商売で、盤谷へ出張されたものらしい、当時日本の公使は、稲垣満次郎氏で、稲垣夫人は山口俊一「俊太郎」氏の妹であるから、両氏は公使館に陣取って居た、所が一夜稲垣夫人と山口氏は、英語の些細な問題から遂に激論になつて、山口氏は大に憤慨し、直に公使館を引揚げて宿屋に引き移った、といふ様な話も残つて居る。

三井物産最初の出張員は檀野礼助氏で、明治三十九年(一九〇六年)に開設されて、明治四十二年まで在勤せられた、私は開設当時より引続き在勤せられた吉岡幸造氏から、其頃の状況を聞いて、同情の念を禁じ得なかつた、酷暑に加へて水道はない、メナム河の泥水をこして飲むのである、熱病や、赤痢や、コレラが流行する、檀野氏の長男礼一氏は第一の誕生日を迎ふるに到らずして帰天せられたのである、間もなく日

本から連れて行かれた其女中は、猛烈なるコレラで斃れ、店員の吉岡幸造氏も、コレラで得に斃れんとする所を、檀野氏と独逸の医者の徹夜の努力で一命を取り止めた、盤谷の店には斯様な犠牲が払はれてゐる、其後の盤谷出張は容易な事ではなかつた、さうして私が訪ふた時に、其店は隆盛の波に乗つて居た、其秋開業二十周年を祝つた、恐らく、印度の店にも、爪哇の店にも、欧米の店にも、多く此種の犠牲が払はれて、日本の貿易が海外に発展して行つたのであらう。

店の首席は、檀野氏以来屢々入れ替へせられて、私の行つた時は植木房太郎氏で、私は同氏から、徹夜通の事情を聞きながら、商売の方策について研究した、暹羅國の要人の日本に対する好意は、誠に頼もしいものがある、盤谷の店は、堅実なる成績を挙げて居るので、間もなく出張所になつた。

私は昭和二年再び盤谷に出張して、益々其店の発展するのを見て喜んだ、最近私が新嘉坡で一緒に働いた平野郡司氏が赴任せられて、益々其店は順調に発展し、盤谷支店と昇格せられた、丁度今年開設三十年である、私は盤谷の店の一層隆盛に赴く事を祈るものである、(高橋敏太郎「三井物産の思い出」)

教文館、1937年、185-187頁。

### 政尾藤吉の誇大自己宣伝

さて、上記大阪毎日新聞記事には、

今年の三月十三日「正しくは11日」を以て政尾法学博士を暹羅の貴族に列し「ジャ」「フラー」の爵を賜はつたことである、暹羅の貴族の爵は吾國のその如く五級に分れて居る、而して「ジャ」は其第二級に位するものであつて頗る高貴の爵となつて居る、などと言う政尾藤吉のPRが記されていることから見て、同紙のタイ事情報道の主要ソースは、政尾藤吉である可能性が高い。実際に、三宅松郎特派員もワット・テーパシリンの近くにあつた政尾の自宅を何度か訪問している。

法務省官吏政尾藤吉は、1911年3月11日付けで、6世王から「ジャ」「マヒットンマヌー・パコーンゴーン」の官爵位を授けられた。タイ前近代において身分の高低を示したサクディナー(位階田)の持高は3000である(タイ官報

第27巻、3103頁、1911年3月19日号)。

更に、1912年11月11日の国王即位記念日に、政尾はチュンラチョームクラオ勲章(The Most Illustrious Order of Chula Chom Klao)を授与された。

この勲章は1873年に5世王がバンコク王朝90周年に際して、同王朝を支えて来た王族・官僚及びその子孫を擁護する意図で創始したものである。特一等、一等、特二等、二等、三等などから成り、上限数が決まっている。一等は男性30人女性20人、特二等は男性200人女性100人、二等は男性250人女性100人である。他の勲章

とは異なり限定的ながら世襲できる。女性の場合、一等、特二等の保持者はターン・プージン

の称号を、二等の保持者はクンジンの称号を使うことができる。政尾に授与されたのは、二等即ち、*phra* (Knight Commander, Second Class, Lower Grade) である。

政尾と同時に、この勲章を授与された王族・高官は、特一等は3名の王族、一等は4名で、内2名は王族、残り2名はチャオプラー位の高官、特二等は1名のアユタヤ州長官のみ、二等は政尾を含む19名で、陸軍の中將1名(陸軍省次官)、陸軍少将5名(師団長クラス)、州長官3名、省事務次官3名(文部、農務、法務)、判事3名(最高裁判事2名、国際事件裁判所長)、検事局長、宮内省官吏2名の計18名のタイ人に、法律顧問の肩書きでプラー・マヒットンマヌー・パコーンゴーン(政尾藤吉)が加わっている(タイ官報第29巻、1829-1831頁、1912年11月17日号)。政尾藤吉法律顧問は、各省の次官、州長官、最高裁判事、

師団長らと同格と見なされたのである。

政尾の格付けは、十分に高官である。しかし、政尾はこの勲章の意味を(多分意図的に)歪曲して、今風に言えばフェイクニュースを自作して、在バンコクの日本の新聞社の通信員たちにバラマキ、真に受けた通信員は、本国に以下のように特電した。

本社暹羅特電、政尾博士准皇族となる、十一日盤谷特派員発、十一日の即位記念式に於て政尾博士は公爵に陞爵せられ皇族勲章の二等に叙せられたり此勲章の意に曰く「朕は卿等同志を保護し且其繁栄を祈る」と即ち博士は此勲章により准皇族の待遇を受ける者なり外国人にて今回此名譽を得たる者は同博士一人のみなりと(朝日新聞、東京、1912年11月13日朝刊)。

上記タイ官報からも明白なように、政尾が授与されたチュンラチョームクラオ勲章は皇族勲章とは言えないし、この勲章を授与された者が准皇族扱いとなることもあり得ない。勲章の儀言の和訳にある「同族」は国王の一族のことだと誤解されそうだが、そもそもタイ語原文

(*prachinrasongkhro*) には、

同族という表現はない。ただ叙勲を受けたそれぞれの一族を、国王が擁護すると言っているに過ぎない。それに政尾の「ジャ(プラー)」という官爵位は、日本の公爵には到底比定できるものではない、男爵扱いにすることもできないだろう。なぜなら、チャオプラー、プラー、プラー、ルアン、クンの5段階のタイの官爵位は、日本の華族である公侯伯子男の5爵位とは全く異なり、判任官以上の官吏総てに与えられるものだからである。軍隊の階級で言えば、少尉・中尉あたりがクン、中尉・大尉あたりがルアン、少佐・中佐あたりがプラー、大佐以上将官はプラーである。チャオプラーになると大臣クラスで数は少ないが。

タイの准皇族と報じられたことは政尾の思う壺であつたに違いない。彼をタイ准皇族扱いしたのは、朝日新聞だけではなく、多くの日本の新聞で政尾は死ぬまでタイの准皇族と報じられた。例えば、読売新聞1915年1月27日朝刊には次の記事がある。

暹羅の皇族 日本で候補、今長政の政尾藤吉博士、先年暹羅の皇族待遇たる光栄に浴し時、人をしめて文明式山田長政と絶叫せしめた東京府下下谷天狗山横法学博士政尾藤吉氏は今回政友派の候補者として其の郷里愛媛県で選挙事となつた、彼の郷里では暹羅の皇族なる伝記的(るまんちく)の美名に値がれて、ただ理由もなく普通の人間とは別扱いにして居るから当選は無論疑ひ無かるうとの話だ、ところで此の暹羅の皇族と云ふ光栄ある地位は大して有り難味のあるものでなく、現に同国王帝の叔父君に当らせらるる方などは日本人の下宿へなど時々遊びに來られ勝手に人の行李を開けて「此の襦袢(じやく)は綿織だな俺に呉れんか」とか、或る日は人の座敷で昼寝して眼が覚めると唐突(いきなり)下へ行つて泥水をお碗にしゃくつて舌鼓を打つたりなど、却々(なかなか)に平民的(?)に在らせられると云ふ、それは抑揚いて政尾氏は如何(どん)な人物であるか、彼は明治廿五年の交某基督教から米国に留学し、彼地へ渡つてから急に教会の手を離れてエール大学に入學し、研鑽多年錦を飾つて帰朝州一年頃招聘されて暹羅國の法律編纂委員となり、爾來十余年の間孜々と

して彼國法律制定に努め、遂に皇帝の信任を得て破格の待遇たる皇族待遇になつたのであるが、人物は一見別に他に傑出して居る如(よ)うでもないが、深く才氣を蔵し學殖も米國仕込みの却々(なかなか)に間口の広いものがあると、氏に就て今でも教育界の一話柄になつて居る事がある、それは氏が米國留學前、女流教育家櫻井中か子女史の令嬢と婚約して居たが、帰朝してからは「以前は兎に角今は身分が異つて居るのだから約束を履行するわけに行かん、然し私の手から他の適当なお方へお世話して上げる」とどうとう他の者へ世話してやり、自分は男爵九鬼隆一氏の女を娶つたと云ふ。

政尾藤吉君は法学博士だ、博士

と云ふと必ず帝大の出身の様に思はれるが、政尾君は米國仕込み、片仮名文字の肩書「ジャバニタイムス記者」をもつて居た、故稲垣満次郎君とふとした事から知り合つて明治三拾年頃、その周旋で暹羅政府の法律顧問となつた、博士になつたのは其の後の事で、暹羅の法典調査をやつてそれを博士論文にしたのだ。暹羅にある事、約二十年、暹羅宮廷の知遇を蒙つて、御用済と云ふ時には、准皇族の位までも頂戴し、二代目山田長政を唄はるるに至つた、尤もこの准皇族と云ふのは、皇族と云ふから馬鹿に偉く聞えるが、暹羅では功臣の終てに賜はる位で、日本の華族と同じものだ、例の熱帯地方に於ける宝物の一なる白象も、この位を頂いて居るのだから、左程騒ぐものでない事は明かだ。二代目山田長

政と云ふが、政尾君と長政とは比較にならぬ、政尾君のは余りにその吹聴が偉過ぎたが為めで、蓋をとつて見ると中味は左程ないのだ、然し乍ら政尾君は准皇族と云ふこの威(おど)かし文句によつて、故郷に錦を飾る事が出来た、意味を知らぬ日本人は、政尾君の帰朝に際しては非常なる羨望を政尾君の身辺に投かけたのだ。政尾君は博士だが、學者と云ふ部類ではない、何と云つても米國仕込み、若し暹羅に行かなかつたら、今日なほ片仮名文字を背負ふて、そこをふらふらして居つたかも知れぬ要するに運がよかつたのだ、それからその辛抱力の強かつたのが、今日の声名をかち得た所以の一だ。政尾君が、政治界に乗り出す事は吾輩

は賛成せない、暹羅と日本とは問題が異(ちが)ふ、事情のわからぬ政治界に飛び出して、うるうるその行衛に迷ふより、暹羅の准皇族法學博士で社交界の一角にその光を放つて居た方が、その値打は落ちぬ、殊に渠は才氣鋭利と云ふでもなければ、所謂大志天下を動かすと云ふ柄でもない、柄にない事はせぬ方がよくはあるまいか。愛媛の政界は、古谷君「前式部官古谷久綱」と渠とが同じ政友会から立つ事によりて、多少の混亂を惹起するのだ、曾て伊沢安藤両知事が相次いで赴任し、一時はその紛糾の狀態が天下の耳目を聳動したものだ、古谷君も政尾君も運動費はあるし、田舎者にはもつてこいの大肩書付だ、成田栄治君の如きは爲めに欄外に放り出されねばならぬだらう。かくは云ふものの、新田を通じて義士の頭振れ、真に秋風落葉の感深き折柄とて、渠等二人の立つ事は、決して悪い事ではない、政尾君に対しては吾輩余り深甚の興味を有せぬが、古谷君の將來に対しては稍触感をそそのだ、まア何でもよい御二人ともにぬけ目のない様におやりなさい(藤)。



連載 ⑨  
バンコクの日本人

### 在タイ10年の明治の農業技師 横田兵之助(8)

早稻田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

#### 稲垣公使陞任の天皇親書

本誌1月号で、大使館HPに記載されていた、稲垣満次郎公使の特命全權公使陞任年月日に誤りがあることを指摘したところ、早速ご対応を頂き感謝に堪えない。念のため、タイ側に保存されている、明治天皇からチュアローンコーン国王に宛てた、稲垣公使陞任に関する親書を次ぎに掲げておきたい。尚、親書中の稲垣評等は特別に彼のために書かれたものではなく、定型に従つたものである。

#### 暹羅国皇帝陛下

天佑を保有し万世一系の帝祚を踐みたる大日本国皇帝陛下に敬て威徳隆盛なる良友南北両暹羅国皇帝ソムデツチ・プラ・パラミンドル・マハ・チュラロンコーン・プラ・チュラ・チョムクラオ陛下に白す

位勲三等稲垣満次郎を特命全權公使に陞任し閣下に駐節せしむ 満次郎人と為り忠誠篤実事を執て勉勵し物に当て敏達なること朕が固より熟知する所にして益々陛下の寵眷を蒙るべきは疑を容れざるなり 満次郎朕が名を以て陛下に陳述する所のものは之を信用陳納せられんことを深く冀望す

茲に朕が恭敬親愛の衷情を表し併せて陛下の康寧を祈る

神武天皇即位紀元二千五百六十三年 明治三十八年十月十四日東京宮城に於て

親ら名を署し璽を鈐せしむ

睦仁 (大日本國體)

外務大臣男爵 小村 寿太郎 (タイ国立公文書館 7.5 a. 7/20)

在タイ日本人社会へ賜つた 6世王のお言葉

さて先月号に、1910年10月23日に5世王が崩御された後、日本人総代10名が(12月13

日に)王宮を弔問のため訪問し、6世王から優渥なるお言葉を賜つたこと、日本人俱樂部は、6世王のお言葉のタイ語原文を額に入れて永久保存としたことを紹介し、今日このお言葉を目にすることができないのは残念である旨述べた。

1910年12月13日の日本人総代10名の弔問について、当時のバンコクの新聞は次のように報じている。

同日16時半、17時、在バンコクの全日本人を代表する10名の日本人は、ドゥシット・マハ・プラサート宮殿の5世王のご遺体に参拝した。先ず、磯長海洲と池崎新吉が花輪を5世王のお棺の下に置き、政尾藤吉法學博士がタイ語で6世王に奏上文を読み上げた。その英訳は次のように報じられている。

May it please Your Majesty:- We who have been elected to be the representatives of all the Japanese residents in Bangkok beg to thank Your Majesty for having given us the opportunity of paying our homage in the name of all Japanese residents to the Remains of His late Majesty Somdet Phra Paramindr Maha Chulalongkorn. Even since the time of Japanese great soldier Phya Senapimok (General Yamada), who came and took service in Siam almost 300 years ago, the Siamese and Japanese respected each other as brothers. Some of us have had the honour of taking service under Your Majesty's August Father and now have the honour of taking service under Your Majesty. We all wish most sincerely that Your Majesty's reign may be long and prosperous. (Siam Observer 13 Dec. 1910, Bangkok Times 14 Dec. 1910)

871027-28 2018年3月



これに対して6世王も、同じくタイ語で次のように答えられた。

พระราชดำรัส  
เราขอบใจชาวญี่ปุ่นที่ได้นำเครื่องสักการะมาถวาย  
เพื่อแสดงความเคารพต่อพระบรมศพสมเด็จพระบรมชนกนาถของเรา  
และเรามีความยินดีรับคำให้พรของท่านแก่ตัวเรา  
จนชาติญี่ปุ่นกับชาติเราได้มีมิตรจิตต่อกันมาช้านานและชาวญี่ปุ่นก็ได้ทำ  
ราชการมีชื่อเสียงปรากฏในแผ่นดินสยามทั้งในโบราณปัจจุบันสมัย  
เพราะฉะนั้นเราตั้งใจที่จะอนุญาตนับว่าบรรดาที่อาศัยอยู่ในเมืองเราไว้ได้  
รับความร่มเย็นเป็นสุขทุกเมื่อ (Bangkok Times 15 Dec. 1910)

6世王の、このお言葉が日本人倶楽部に額に入れられて掲示されていたものである。その英訳は以下である。



We thank the Japanese community for their reverential offering in order to demonstrate their respect to the remains of Our Royal Father and have pleasure in receiving your loyal expressions. The people of Japan and our own have long been united in bonds of friendship and Japanese have performed eminent services in the work of the Siamese Government both in the past and at the present time. It is therefore our determination to cherish the welfare of Japanese residents in our country and extend to them our Royal protection. (Bangkok Times, 14 Dec. 1910)

### 1910年当時の日本人社会のリーダーたち

1910年12月14日号のサヤムオブザーバー紙もパンコクタイムズ紙も、王宮を訪問した10名の日本人総代について、

その姓のみを報じている。これに名を加えて見ると次のようになる。即ち、政尾藤吉(タイ司法省法律顧問、1870-1921)、磯長海洲(1895年初来タイ、写真館、1860-1925)、池崎新吉(池崎商店主、坂部橋三郎(三井物産シンガポール支店パンコク出張員)、瀧澤昌作(1868年長野県生、渡邊知頼の映画館Royal Japanese Cinematographの支配人)、大山兼吉(1864年生、画工としてタイ文部省に雇用され1892年来タイ、大山商店主)、河野澄一(1858年福岡県生、1899年来タイし商業)、小澤正(1875年山梨県生、1906年来タイし医業)、鶴原善三郎(工芸家、1881-1944)、それに安井某。最後の安井だけは、旅券下付表には見つからず、名も判らない。

鶴原は5世王が治世末期に建立されたベンチャマボット寺(大理石寺院の本尊(Phra Prachinrahn)に金箔を貼った工芸家で、その技術に5世王は大満足され、その完成を祝って1910年8月

5日に国王臨席の下に挙行された記念法要で多くの褒美を与えられた『タイ官報』第27巻966-967頁、1910年8月14日号)。「島根の作家・物故作家紹介」のホームページは、鶴原を次のように紹介している。

鶴原鶴羽(つるはらかく) 明治14年(昭和19年)享年64才 出雲市出身

名を善三郎といい、号は鶴羽と称した。出雲市今市町に生まれ、はじめ八雲塾を学ぶ。後に上京し、詩絵の技法を研鑽する。明治43年(1910年)、シヤム国(現タイ国)に招聘され、王室の玉座を製作し4年後に帰国する。第8回帝展に入選し、後に審査員も務めた。晩年は東京に住まいし、作品は写生を主とするが古典にも意欲を燃やし、奈良から平安時代を中心に研究し、その時代作風を作品に生かしている。重厚な中にも近代的な感覚のものが多く、(http://www.geocities.jp/arizume/kojin4.html)

王宮に用間に参上して、奏上文を読んだのが政尾藤吉、花輪を献上したのが磯長海洲と池崎新吉であることから、この3名が1910年時のパンコク日本

人社会のトップ・リーダーであったということが出来る。磯長海洲については、本誌でも何回も書いたように、来タイ以来日本人社会の世話役を務めた。池崎新吉については、これまで言及したことがないので、ここでは池崎について見ておこう。

### 池崎新吉

池崎は1855年長崎生まれ、1883年に長崎に近い上海に出店した。遠山景直著『上海』(東京、1907年)は、上海の日本商店の歴史に関して、「池崎新吉 明治十六年十月開店 籠甲細工製造販売なり」(同書223頁)と書いている。清国政府の文書には、1894年11月27日付(光緒20年)の上海の日本商人に関する報告中に、「美租界百老匯路第一千十五号玳瑁「タイマイ」店、該店東池崎新吉、係日本長崎県人、年三十九歳、身中、面長色黒、無鬚。新吉之妻名豊「トヨ」、係長崎県人、年三十四歳。新吉之女名北枝「此枝の筈、コノエ」、係長崎県人、年三歳」(中央研

究院近代史研究所編『清季中日韓關係史料 第六巻』、1972年、台北、3810頁)と記されている。この後間もなく、池崎一家は上海から長崎に引き上げた。丁度日清戦争の時期であり、同時に、三谷足平、磯長海洲らも上海を離れて、タイに移っている。

1896年9月15日に池崎新吉(41歳7ヶ月)は商用でタイに渡航するため旅券の下付を受けた。

更にその2年後の1898年9月、池崎一家4名は、タイで商業に従事するため旅券の下付を受けている。池崎新吉(43歳7ヶ月)、妻トヨ(38歳9ヶ月)、長女カメノ(13歳8ヶ月)、次女コノエ(7歳1ヶ月)である。単身先発した池崎は2年間タイで頑張って、家族を呼び寄せるだけの基礎を作ることができたのである。

日本の外務省は、1903年10月10日付けで、在外の全領事に管轄区域内の「在外本邦人の商店製造所を有し又は農業漁業

牧畜に従事する者」を、毎年取り調べて報告するように訓令した。これを受けて、在パンコク領事が提出した最初の報告は、1907年の状況に関する1908年1月27日付けの報告(公信第7号)である。訓令を受けてから、4年間も報告しなかったのは、タイには未だ見るべき邦人の事業が存在しなかったからであろうか。

兎に角、在盤谷領事田邊熊三郎から外務大臣伯嶺林董に宛てた、1908年1月27日付けの公信第7号で、取り上げられているパンコクの邦人事業は、第1表の2件しかない。

これから池崎は、籠甲細工店から雑貨商に拡大して、1907年末時点ではパンコクでは三井物産に次ぐ商店に成長していたことが判明する。

また、1911年末のパンコクの邦人事業に関する領事報告でも、第2表の通り、三井物産、池崎商店、大山商店の3店が挙げられているに過ぎない。

第1表

社名又は商号	業別	取引又は売買高	資本金	原籍氏名
三井物産会社	輸出入貿易	45万円	600万円	三井物産会社出張員植野礼助
池崎商店	雑貨小売商	2万円	1万円	長崎県長崎市十人町池崎新吉

(出所：外務省通商局『明治40年12月末現在 海外日本実業者之調査』(明治42年3月印刷、18頁))

第2表

営業主 支配人若しくは主任	称号	本籍地名	営業種別	資本	取引売買 製造漁獲高	使用人員	摘要
主任小牧太次郎	三井物産株式会社出張所	東京日本橋区豊洲	輸出入貿易	2000万円	50万株	2	
池崎新吉	池崎商店	長崎市十人町	雑貨商	5万6千株	4万4千株	3	
大山兼吉	大山商店	東京市神田区錦町3丁目	雑貨及印刷業	6万株	5万株	9	

(出所：外務省通商局『明治44年12月末現在 海外日本実業者之調査』(大正2年1月印刷、67-68頁))



池崎新吉が1907年に請来した長崎高林寺シャム仏

のである。

池崎が寄進したシャム仏

池崎新吉は、ワット・サケーの住職から貰い受けたシャム仏を1907年に郷里の長崎の寺に寄進した。現在このシャム仏は曹洞宗禅宗徳光山高林寺の本尊として祀られている。高林寺のホームページを見ると、次の説明がある。

高林寺の本尊  
本尊はシャム王朝（現在のタイ国）の勅額たるサケート寺から贈られた釈迦如来像です。

10年余りシャムに滞在した長崎の池崎新吉氏が帰国の際に譲り受け、明治40年に寄贈した。サケート寺が池崎氏にあてた贈与状は、「長崎市史地誌編纂部」に一語一語、記録されている。高林寺も鎌倉時代の仏像をお礼に贈り、二つの像はささやかな国際親善の証となった。

更に、長崎市役所編集兼発行『長崎市史 地誌編纂部 上』（1923年、長崎、671頁）は、徳光山高林寺の歴史を述べてシャム仏の由来を次のように記している。

明治四十年十一月十日（三十代）住

持）飛源の時）上長崎村中川郷なる知足庵にありし釈迦如来銅像一像を当寺「高林寺」に遷して当寺の本尊となし、入仏安座の式を挙行した。この仏像はもと暹羅國王の勅願寺たるサケート寺に安置してあったものである。長崎の人池崎新吉が十有五年間の留滞中この仏像を日本の寺院に祀りたきにつき是非譲受たしと該寺の住持大僧正プラタム・ターナーチャーン（Phra Pratham Thana, 1850-1920）に懇望して漸く之を獲たので知足庵に奉安したのである。

大僧正が池崎氏に与へた贈与状は左の通りである。

池崎新吉君に呈す此の立像の鉄鉢を持たる仏像はサムセン（Samsen）に存在する勅祭寺ツシット寺に奉安され給ひたる古仏を百五十年前サケート寺に下賜されウツパンコット（Uppanokot）に移し参らせたる高僧の御仏像なれども今回日本の寺院に奉祀するとの君の申出に付余は喜んで之を贈る就ては後相当地の札を以て奉祀されんことを乞ふものなり 茲に署名す

プラタム・ターナーチャーン  
「ラッタナコーシン」曆 百二十六年「1907年」七月十二日  
サケート寺プラタム・ターナーチャーン

池崎新吉殿

池崎新吉はこの仏像を知足庵に寄贈するに際し左の如き書簡を知足庵に贈った。

- 一、釈尊像 高六尺 一衣 一鉢
- 一、鉄鉢 一個
- 一、袈裟 一衣
- 一、仏用団扇 一個
- 一、仏用袋 一個

右は当国王室の建立御勅祭に係るサケート寺大僧正プラタム・ターナーチャーン殿より日本仏教信者に対し寄贈致度旨を以て小生に下付相成候儀に付今回貴山へ寄進仕度候条御聞濟相成可然位置に御安置御奉祭の程願上候也 追而鉄鉢以下四種の品は釈尊の附屬品として並に下付相成候ものに付書添置候

明治四十年四月二日

在暹羅國盤谷府 池崎

新吉

長崎県西彼杵郡上長崎村 知足庵御中

池崎新吉は知足庵主多比良泰心及び同庵僧徒なる八坂町佐々木達朴等と年来相識の間柄なりしを以て右の仏像を獲るや、先づ達朴等と議し、之を知足庵に贈ることなし、明治四十四年「四十一年の誤植」四月右の

明治四十年十一月八日

長崎市煙船町高林寺住職 祖源無功

本寺陪台寺住職 霧玉

仙 高林寺檀家総代「四名

略」 上長崎村中川郷知足庵

住職 多比良泰心

右僧徒總代 佐々木

達朴「他に二名略」

長崎県知事荒川義太郎殿

かくて暹羅仏安置の件落着するや、当寺の本尊たりし釈迦如来坐像（木製高一尺七寸台座四寸五分作者不詳）を暹羅國サケート寺に贈りて同寺に奉祀を求めた。

明治四十二年の冬知足庵主多比良泰心及び高林寺住職祖源無功はその筋の許可を得て、知足庵を高林寺に併合し、高林寺を知足庵の地に移動することとし移転改築の工事に着手したが、同四十五年七月に至り竣工した。

1911年12月の盤谷に於ける日本人

1911年12月の6世王戴冠の祝賀のため、日本の仏教界を代表して日置映仙（可睡斎住職

兼日蓮寺住職）と来馬塚道が来

タイした。曹洞宗の僧侶である兩人は、シンガポールから船でバンコクに着くと、野間「政一」領事に迎えられ、書記生山口武と留学生白濱「昌雄」を紹介された。山口・白濱が兩人に同行して馬車で、

池崎商店へと著（つ）く、此の商店は、池崎新吉氏の経営する所で氏は長崎の人、陪台寺「こうたいじ、曹洞宗」の檀徒で、仏教を信すること篤く、今回予等一行の宿泊に就き、自ら進んで其任に当り、繁忙なる営業時間と、惟さへ袈裟を感じ勝ちの居室とを開放して予等の宿舎に宛てられたのである（来馬塚道「南國巡礼記」、平和書院、1916年、67頁）。

盤谷に於ける日本人 曹見の序に、当地に於ける日本人のことを少し記しておかう、異境に入つては、其地に在留せる邦人は何よりの便（たより）であるから、予は、日本人倶楽部に往つて、雑話の間に其様子聞き

取つた、而して、其一斑を語る者は、今回の戴冠式に関する邦人間の準備の模様である、先づ、在留邦人に向つては、盤谷府「ナコンバーン」大臣から、磯長海洲「磯長海洲」へ来る十一月一日から四日まで店頭裝飾を施すことを依頼して来たので、目下、其方の準備に着手していることである、又、在留日本人が、戴冠式に対する祝辞捧呈のことは、欧州諸国人と聯合して行ふこととし、十一月六日、オリエンタルホテルに会議の結果、孟買通商支店長、ブライズ氏（英人）を臨時委員長として委員は、英、独、仏、瑞、西、丁、米、日、米、伊、瑞、典の各国より一名づつ委員を出し、外に英人中より別に二名の委員を加へ、計十三名にて万般の事務を執ることに決定したさうである、而して、此の催しに關する日本側の委員は、三井物産会社の小牧太次郎氏が推薦されて、之に當ると云ふことである。

次に御名代官殿下歡迎委員として、池崎新吉、石原初太郎（外務省審判部）、小牧太次郎、瀧澤昌作（渡邊活動写真商会支配人）、政尾藤吉の五氏が、選ばれて、其任に當ることになつて居る、是等の人名を見れば、粗（ぼ）ぼ諸氏の地位も解（わか）るはずであるが、更に公使館の側を見れば、吉田作次公使夫妻と、領事

兼書記官の野間氏と、石原審判部と、山口書記官との五氏が居る、而して、暹羅國政府に顧問、又は技師として招聘されている人々も多少あるが、其中でも政尾藤吉氏は盤谷に於ける日本人中の最も高き階級に居る人である、氏は暹羅利加のエル大学に留学して、夙に日本の法學博士たる學位を受け、明治卅年以來暹羅國皇帝の法律顧問として非常の優待を受け、特にビヤの位を贈られて、暹羅に於てはビヤミドルと云ふ名を使用して居る紳士である、聞く所に依れば氏は顧問ではあるけれども殆ど暹羅國人と同等の待遇を受け、大審院長の實権を握つて居られ、且つ又民法商法等の、暹羅國に於ての文明的法律的設備を爲すために非常に尽力して居られるのである、其政尾氏に次いで、横田兵之助氏が、農務省の顧問として盤谷に居られる、氏は日本農商務省の技師で、往年コーラットへ養蚕事業伝習の爲め出張して居られたが、後台湾に赴き、其農業上の視察報告を暹羅文に書いて提出したので、大に、同國官廳の稱讃を得、爾來盤谷に駐在して、農務省の顧問となつて居ることである、氏の暹羅國に在るも、亦吾人の意を強うする所である、予は、氏に初対面の時、農業上に関し

て居る。其他店舗を市中に有（も）つて居る邦人諸氏、並に店舗を有（も）たずとも、種々の事業に従事している人も多くあつて、總計約二百人に達すると云ふことである、例へば、田山九一氏の工務技師に於ける、鶴原善三郎氏の漆工に於ける、三木栄氏の美術方面に於ける、白濱徹（マ）氏の暹羅語研究に於ける、池崎氏の美術品に於ける、池崎氏の令嬢のえ子の王城内の女子教育に於ける、磯長、長塚、麻生等諸氏の写真業に於ける、面田「利平」氏の理髮業に於ける、深「道元」氏の俱樂部書記に於ける、鍋島、山口、大山等の商店に於ける、一々調査すれば、数限りの無いことである（來馬塚道同上頁84-87頁）、……其他に日本人ありや、之で盤谷の日本人諸君の狀態は粗ぼ了解したやうに思ふが、まだ、ウインザーの波止場の方で、予はアサヒホテルと云ふ屋号のある家を見た、又市の中央の地点で、富士ホテルとか云ふのを見た、此二つの語は、日本語であるので、此処にも日本人が居るのかと或人に尋ねたら、其の富士ホテルと云ふのは、上海發子と云ふ、東洋の天地を我物として居る老婦人が経営している店であつて、前のアサヒと、外に二軒ほどホテル業があるが、之等は、西洋

人向で日本人に用の無い家だと云ふ答へであつた、予は敢て之に註釈を加へないが、此一語で前に掲げた諸氏の外に、西洋人相手の職業を営みつつある日本人も少しはあることを知つたのである（來馬塚道同上頁88頁）。

上記「盤谷に於ける日本人」から、バンコクを管轄する畿内省大臣が、日本人社会に連絡する場合には、磯長海洲を通してゐることからも、磯長はバンコク日本人社会のトップ・リーダーであつたことが判る。三井物産の小牧太次郎は暹羅國日本人会初代会長である。また、横田兵之助が、コーラットからバンコクの農務省本省勤務へ榮転したのは、横田の台灣報告書（本誌2017年7月号参照）に大臣が感動したことによると説明されている。最後の部分は、当時の「からゆきさん」の様子である。

連載②  
バンコクの  
日本人

## 日本人第一回移民の碑に 関する新事実

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治

これまで、横田兵之助を副題として連載してきたが、一回毎の内容は必ずしも横田を焦点に据えたものではなかった。今後は、各号の話題に即した副題を付すことに変更したい。

さて、泰國日本人会が、1966年3月21日にサラブリー県のゲーンコイ寺に、設置した「日本人第一回移民の碑」の碑文は、事実から遠く懸け離れていることを、『泰國日本人会百年史』や本誌2013年6月号、2014年5月号などで指摘してきた。

もう一度要約すれば次のようになる。移民の碑は、戦前から日本人会の重職を担つてこられた日高秋雄（としお、1905-1979）氏が中心となつて、日本人会創立50周年記念の事業として推進されたものである。日高氏は戦前に、第1次タイ移民の生き残りで理髮業の面田

利平（1870年生-1937年9月6日没）氏から、20名近くがタイで死亡した第1次移民（1895年1月23日にバンコクに到着した32名）のために、慰霊碑を作ることゝ頼まれた。1960年代になつて、日高氏は面田氏との約束を実現すべく、第1次移民の出身地らしき山口、広島で遺族を探し、やつと「鐵本作造」という一人の犠牲者の名を得て、次の碑文を作成した。

### 日本人第一回移民ノ碑

日本人第一回シヤム移民山口県人鐵本作造氏外十七名ノ靈此地ゲンコイニ眠ル  
之等ノ人々ハ一八九四年（明治二十七年）岩本千綱氏引率ノ下ニ日本人最初ノ移民団ニ加ワツテシヤムニ渡リ農務卿スリサク侯ノ後援ヲ得バンコク市ニテ

米作ニ従事シタガ事志ト相容レズ時恰モバンコクコーラット間鐵道敷設に當リタイ國鐵道省ドイツ人技師ノ斡旋ニヨリ之ニ従事シタ稀有ノ難工事ニ加ヘ未開瘴癘ニマラリヤニ冒サレ十八名ガ異郷ニ永眠  
之等移民ノ七十年祭ニ本國ヨリ仏像一尊ヲ勸請シ碑ヲ建立シテ靈ヲ慰メ以テ其ノ冥福ヲ祈ル  
一九六六年三月二十一日 泰國日本人会

この碑文では、鐵本作造を含む18名が全員、コーラット鐵道建設工夫として死亡したことになつてゐる。

私は、第1次移民の17-18名は、カオヤイ山中のブカヌン金鉱山で斃れたのであり、コーラット鐵道の死者は少数に過ぎないことを、繰り返し述べて来た。

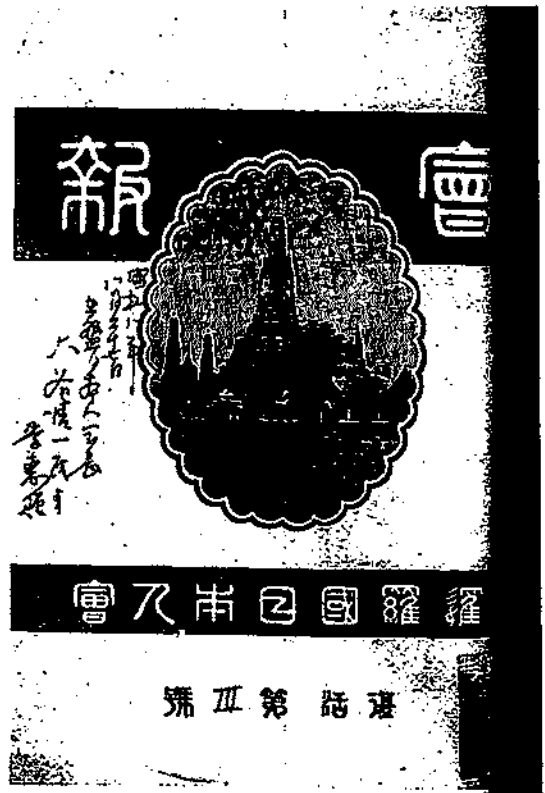
最近、日高秋雄氏が1933

年5月9日に面田氏から聞き取り、日高氏自身が執筆した、面田利平「邦人草分け時代の短聞」（暹羅國日本人会『会報』復活第3号、編輯員・鈴木宇治・日高秋雄、印刷人・宮川久治、1933年7月31日発行、41-48頁）を見出した。

これを読めば、面田利平氏は、日高氏に第1次移民中コーラット鐵道建設現場で死亡した者は、面田氏の妻と大森五郎右衛門（来タイ時満37歳）の2名に過ぎないこと、残る17名ほどはブカヌン金鉱山鉱夫として死亡したことを明言している。これによつて、日高氏が面田氏から聞いたという、コーラット鐵道建設で第1次移民18名が死亡した話は、根拠が失われてしまうのである。

日高氏が、戦前に面田氏から第1次移民の惨劇を聞いた時期は、面田氏が死亡する4年前の





會人市回國羅暹

號五第話電

會報復活第三號、1933年7月31日發行

暹羅國日本人會發行

昭和八年七月三十一日

編輯長 鈴木中  
副編輯 鈴木中  
印刷所 久松印刷所

暹羅國日本人會會報復活第3号、1933年7月31日發行

1933年5月9日に、28歳の日高氏(暹羅國日本人會編輯)が會報復活第3号に掲載するために面田氏を訪ねてインタビューした時のことと考えて間違いない。

面田氏の話を聞いた後、移民の碑を建設するまでに30年以上の年月が経ち、流石の日高氏も記憶が曖昧模糊と化し、コーラート鉄道建設現場における第1次移民の死者は2名だと面田氏から聞き日高氏自身がそれを記録した話が、間違つて18名全員がコーラート鉄道建設現場で死亡したとなつてしまつたのである。

もし、1933年7月に日高氏を編輯員として刊行(ガリ版刷)された暹羅國日本人會『會報』復活第3号が、30年後も日高氏の手許にあつたならば、日高氏がそのような間違いをされる筈はなかつた。

しかし、残念なことに戦前の1932年6月から1936年7月までガリ版印刷で7号まで刊行された、『暹羅國日本人會會報』(復活号)は、敗戦の下

サクサで失われてしまつていた。ところが幸いに数年前、私は台湾の国立図書館に1号から5号までが保存されていることを見付け、複写することができた。いづれ紹介する予定であるが、會報復活第1号(1932年6月刊行)には戦前の歴代日本人會會長リストも掲載されており、現在不明のままになつてゐる初期の日本人會會長たちの氏名も判明するし、現在初代會長とされてゐる三谷足平氏は実は初代會長ではなく、三井物産の小牧太次郎氏が初代會長であることも判る。

さて、日高「秋雄」文責と末尾に書かれた面田利平の回想を以下に全文引用する。なお、原文は片仮名表記だが平仮名に直し、明白な誤字は修正している。また、表記を統一した。例えば、シヤムと暹羅は全て暹羅に、ドクター三谷とドクトル三谷は、全てドクター三谷になど、と。「」内は、原文の誤記を修正したものである。

### 面田利平 「邦人草分け時代の短聞」

私が暹羅國にやつて来たのは明治二十八年の一月二十三日で、丁度日清戦争の真最中だつた。明治二十七年の暮神戸の旅館に山口県大島郡の者達ばかり三十二名集つて、ハワイへ移民として渡る覚悟でいた所、岩本千綱の暹羅への移民がハワイより以上「に」有利なる話を聞き遂に一同賛成して暹羅に渡ることになつた。当時神戸の水上警察に親切な方が居て皆々大変世話になつた、諸君海外で大いに発展してくれと励まされた事を今でも覚えて居る。

神戸の宿屋で一人前六十円金を岩本千綱に渡し暹羅行会計を依頼して神戸を出帆して香港までやつて来た。勿論今の様に直航船もないので一旦香港に上陸して当時有名だつた東洋館と云ふ日本人の旅館に旅装を解き、一行三十二名が暹羅行便船がないかと拾日程船待して居た処が宿屋の主人から勸定誓が廻つて来る各人とも六十円あて岩本に渡したが香港までの船賃やら其の他に使つて最早残りいくばくもない、一同寄り集つて協議したが無い袖は振られぬ

で困りはてた時しも暹羅皇太子殿下(シマ六世)「スラサック」は暹羅皇太子殿下(シマ六世)の隨行で香港に

来たのではない。スラサックは當時の暹羅皇太子ワチルナヒット殿下がバンコクで急逝された報に接し、訪日を中止しバンコクに引き返した。が日清戦争を見物に行かれる目的で香港まで當時の農商務大臣ビヤスリサク「スラサック」其の他隨員一行がやつて来た時は、よしと岩本千綱がビヤスリサクに面会を求め、日本移民が暹羅に渡る目的で当地まで来て居るが旅費の都合で行く事出来ず困つて居る事情を述べ後援を願つた所大枚二千元を貸してくれ一同大助り宿屋の私を済ますやら暹羅行切符を求めると子供の様に喜び英國船の三等で明治二十八年一月二十三日に盤谷に到着した。丁度香港から十三日かかつた様に思ふ、暹羅に到着して見ると農商務大臣の後援で日本人がやつて来たと言ふので土人達が大変歓迎してくれ、ジャボン「ザボン」を持つて来てくれるやらバナナを沢山持つて来てくれるやら吾等が珍らしいのか見物に来るもの達で毎日大賑だつた、婦人連中も九名ばかり居たので着物や帯を珍らし

がりの色の黒い土人が何かと世話してくれ、一行の宿はタチエンのマケツ「マーケット」の川向ふにあつた外務省(ママ)の脇にあつた宿に落着きそこで一ヶ月滞在した。

香港まで日清戦争見物に行つて居た暹羅人連中も皇太子が病氣されて戦争見物もオチャヤンになり、ビヤスリサクも程なく帰つて来られた、一ヶ月余りもブラブラして過したが何か仕事にかかると、ビヤスリサクの土地今のサラデーオン公園の土地を開拓に取りかかつた、今でこそ跡方もないが當時は密林でどうする事も出来なかつたのを木を切り倒すやら燃すやら皆んなして大いに働き一二町歩も畑を作つた、勿論あそこは小屋がけて居たが、ビヤスリサクの奥さんが皆んなを大変大事にしてくれて色々御馳走してくれるやら女子供達をビヤスリサクの邸宅(三年もかかつて作り上げた立派な邸宅)に招待してくるやらほんとに色々世話になつた。

暹羅米の製法と日本のが大変違ふので暹羅人の農夫三名に手伝つてもらひ試作「を」やつて見た処が大変収穫もあつたが暹羅人達にも分配してやり我々も食料にと取つておいた、丁度収穫して其の翌年の二三月頃大變暑く又言葉も判らぬ中に暹羅を引上げようと云ふ者あり二度目の米作やら野菜畑などは試作当時よりダレ気味でよい成績は上らなかつた、其の内日本へ四五名帰る者も出来又新嘉坡へ行く者も出来我々七名がコーラート「以下コーラート」線の鉄道敷設工夫となつて出かけて行



私ガシヤム國ニヤツテ来タノハ明治  
二十八年ノ一月二十三日デ、丁度其時  
戰中ノ最中アツタ。明治二十七年ノ  
暮神戶ノ旅館ニ山口縣大島郡ノ有連バ  
カリ三十二名集ツテ、ハワイヘ移民ト  
シテ渡ル覚悟ヲ示シ、岩本十郎ノシ  
ヤムヘノ移民ガハワイヨリ以上有利ナ  
レシコトニナツタ。當時神戶ノ水上警  
署ニシテコトニナツタ。當時神戶ノ水上警

ダツタ。然レ今デモ移民ニ業ハ田舎デ  
本ノ安イ所デヨイエヨリ以テ作ツタラ  
ズ一築上グル事出スルト思フツラ  
移民ニ業ハ田舎デヨイエヨリ以テ作ツタラ  
ズ一築上グル事出スルト思フツラ  
移民ニ業ハ田舎デヨイエヨリ以テ作ツタラ  
ズ一築上グル事出スルト思フツラ

内地へをくつた子供の教育に就て

宮川裕子

面田利平「邦人草分け時代の短編」(暹羅国日本人会会報復活第3号掲載、日高秋雄氏執筆)

つた、當時は独逸人が暹羅で大變幅  
「を」きかして居た時代で鉄道の敷  
設技師は独逸人だつた、丁度我々と  
コーラート線に行つた独逸人は奥さ  
んが日本人だつたので我々を可愛が  
つてくれた、又我々もよく働いて良  
い評判を取つたものだ、パフロヨ「サ  
ラブリ」の別名であるパークブリ  
ヨ」で七ヶ月滞在中丁度其の時悪性  
のマラリヤが流行して大森五郎衛門  
「大森五郎右衛門」と自分の家内を  
とうとうなくした、此の二人の死亡  
が原因で四人は鉄道工夫を思ひきり  
盤谷に帰り船便で皆日本へ帰つた、  
自分だけはコーラート線の途中パフ  
ロヨ、ケンコーイ「グリーンコーイ」  
等で尚ほ一年働いた、其の時自分の  
子供を三谷「三谷」の三谷ドクター  
に預けて置いたがそれも一年たらず  
の内に死亡最早全く遠き海外で一人  
ぼつちになつた、若し妻も死なず子  
供も生きて居たら今まで三十七八年  
も暹羅に居たかどうか疑問だ。  
其前後若本千綱が第二回目の暹羅  
移民を三百名内地で募集して居る  
由を聞いたので我々で相談して神戸  
出發の時世話になつた水上警察宛手  
紙して、若本千綱の山師なる事を説  
き、我等が喰ふに米なき幸甚數ヶ月

兼志

問を送つた事を云つてやり、岩本の  
無責任を称へ、第二回移民の中止運  
動「を」した所神戸水上警察も大變  
喜ばれて早速第二回移民を中止され  
たとの事であつた。

丁度其の前後に我々一行三十二名  
の内二十名ばかり「フカノン」フカ  
ヌン」河の上流にある錫山「正しく  
はフカヌン金鉱山」が金儲けが良い  
とて出かけて行つた処が一年も経た  
ぬ内に皆んな熱病でコロコロやられ  
二十名も行つた内僅か三名だけ三谷  
ドクターと一人の學生に助けられて

「三谷はフカヌンに救援には出向い  
ていない」盤谷へ帰つて来た、生存  
者の話を聞くとコレラ病「マ」に  
かかつて皆んな死んだ、始めは一行  
中の大工が棺を造るやら花輪を上げ  
たりして葬式したが後から後からと  
斃れるので如何ともする術なく孤に  
包んで山に捨てるを余儀なくせられ

誠に可哀想な最後を遂げたものもあ  
つたりした、盤谷に帰つて来た三人  
は婦人が一人と其の婦人の赤子、独  
身者一人で間もなく日本へ向け出發  
した、當時「日清戦争後三年」盤  
谷市に居た連中は余り判然として居  
らぬが、三谷ドクター、磯長海洲、  
桜木商會の支配人山崎利八「山崎利  
八郎」、建築士佐々木寿太郎、農商  
務省に勤めていた「マ」阿川太郎  
「阿川太郎」、建築家田山九一、画家  
の大山周三氏等が記憶に残つて居  
る。

日露が愈々開戦したと云ふ報道が  
当地に來た時はそれは大變だつた、  
今に日本が露西亜に叩きつづされ  
る、日本と云ふ國は何んで無茶苦茶  
な事をしでかしたものだらうと独逸  
人、英人が我々にも会ふ度に云つた  
ものだ、當時の盤谷オプザバーなど  
日々の戦況を報じそれはそれは号外  
号外で我が事の様を騒がせ、それが  
日本軍の大勝利なる知らせで急に  
吾々日本人の幅がききたした、日露  
戦争直後軍艦淺間に伊集院五郎「マ  
マ」大佐が艦長で外に一隻を連れて  
暹羅にやつて来た、其の時ほとん  
ど盛んな歓迎會が催され、又軍艦に  
はアットホームが開かれる、當時暹羅

の女学校に勤めて居られた安井哲  
子、中村、田中、三女師「正しくは、  
安井哲子、河野清子、中島富子」の  
手に成る二間に余る大校の造花がと  
ても見事であつた、それを暹羅皇太  
子「ラマ六世」が三千餘で御覽上  
にされた、又釣りを作つて西洋人  
や暹羅人の貴族を喜ばしたこともや  
つた、又公使館でも軍艦乗組員一同  
を招待して大國遊會を開いた、當時  
の公使は福垣公使閣下で思ひ切り飲  
み次第「放題」の大國遊會だつた  
ので在留邦人の上戸連中とても喜ん  
だものだ。

それから面白いのは日露戦争「正  
しくは日清戦争」後当地に和蘭公使  
とポルトガル公使の肝入りで日本銀  
行「日本通商銀行、ポルトガル人の  
ソーザが1895年8月にバンコク  
で創業し96年2月に開業」なるも  
のが生れた、當時の銀行と云へば香  
港上海銀行とチャーター銀行との二  
つ限りだつたので新しく生れた日  
本銀行の評判よくとても預金が増  
した、支配人はポルトガル人其の支  
配人の嫁さんが日本人と云ふ具合だ  
から日本人達は我れも我れもと銀行  
と取引して金を借りたものだ、後で  
判つた話だが資本金一文なしで初め



らくせられた。

又当地で一番な事業家だったのは、渡邊知頼君だ、今から二十数年前に当地に舊生をつれてやつて来て、始めは石炭やハンカチ其の他の雑貨を小売して細々やつて居たが新嘉坡から印度人が簡単な活動写真の機械と TENT をもつて来たのを二千餘で買ひ取つて彼方此方と小屋がけして活動写真を始めた当時は、渡邊君と妻君が技師となり機械を廻し大いに活躍した処何分珍らしいので毎日大入多少の小銭を握つた、それで今度は大仕掛に始めて見やうと日本へ機械の仕入に行った処が、先生機械は仕入したが旅費に困つた、それ友達二三名が四百百餘宛出し合つて一千餘余り日本に送金した、それで先生漸く帰郷出来た、それから、今の山口洋行の横丁になる古物町の中

にあつた小屋掛と地面を二千餘で買ひ取りサア、これから愈々開業と云ふ段になつたが肝心の御客さん用の腰掛がなくそれで日本人の家から刈り集めた、自分の家から一五六脚も持つて行つた様に思ふ、そんな具合で蓋を開けると忽ち大評判になつて毎晩押すな押すな盛況で、一晩の上り高二千五百餘から三千餘にも上り、当時の盤谷タイムス紙が毎日銀行に、二千餘三千餘と預金するは日本人の渡邊の所ばかりだと云つた事だつた、写真のフィルムは亜米利加物を専門にして居た、しばらくして、日本から活動の技師等間を迎へて渡邊夫婦はマネヤ格で通した、その当時渡邊君から金はいくらでも貸してやると云はれたが其の時はこちらも一日五六拾餘利益金が出て金に苦労する事もなく通した當時だつたので金はこちらから貸してやると渡邊に敗けず話し合つた事だつたが今なら渡邊君が恐ろしい様な氣もする。

とも離れて細々暮して居る様に聞いたが最近はどうして居るやら音信不通だ、草分け短間に自分の事はかりで心苦しいが、今から二十数年前に自分が煉瓦を焼いて失敗した事があつた。

元来自分の本業は煉瓦焼が本職で理髪屋ではない、何んとかして煉瓦焼で一旗上げて見やうと思ひ立ち、土曜日から日曜日にかけての仕事の暇々に、プラバトム、パンバイン等を巡つて煉瓦に一番よい土はないものかと索し廻つた、盤谷の土は余りきめが細かく煉瓦に焼いたら必ず小ひびが入るので此の近方を索し廻つて二ヶ月半かかつてパンバインで適当な土を発見し早速見本を製作した、其の間三ヶ月以上もかかつたが兎に角見本が出来たので新聞広告した、すると当時盤谷一流の建築業者ハワードスキン商会から見本を持つて来てくれとの事、出張して見ると、ハワードスキン商会には爪哇、新嘉坡、西貢方面から取り寄せた見本と、暹羅大蔵省の煉瓦製造所で作つた見本と皆んなで四種類が集つていた、それに自分のを加へて煉瓦の堅さ加減を試験する事になつた、レールの切り端を垂直に煉瓦の上に

落して堅さを試験して見ると一回落して新嘉坡のものも爪哇のものも皆んな毀れたが自分のだけは毀れず三回目には漸く毀れた、結局自分の煉瓦が一番よい成績を擧げて、ハワードスキン商会の支配人から、面田の煉瓦ならいくらでも買ひ取る故製造してくれとの事だつた、早速サムセンに小屋を買ひ取り製造に取りかかつたが見本を作つたパンバインの土を以て製造せず盤谷の土で製造したので製品は自分の思つた様な品が出来ず、売行きもよくなく、一方人に委した理髪業の方も段々得意先が少くなるので遂に決心して煉瓦業を思ひとまつた、煉瓦工業には稲垣公使から大要後援を受けたが成功せずして終つた事返す返すも残念だつた、然し今でも煉瓦工業は田舎で木の安い所でのよい土を以て作つたら必ず一旗上げる事出来ると思つて居る。

煉瓦工業のため自分としては少なからざる賄ひを無くしたが、本職の爲め無くしたので今でも何にも思つて居らぬ、此れからでも煉瓦工業だけはやつて見たいと思つて居る。(完)

面田利平氏を「1933年」五月九日午後五時訪問して二時間内外御

話を承りつつ速記す。 文責 日高「秋雄」

### 面田回想から判つたこと

面田回想によれば、第1次タイ移民32名は全員が山口県大島郡の出身であり、ハワイに移民するために神戸に集まつた人々である。面田は明言してはいないが、彼等は、1894年6月に移民取扱人の認可を受けた小倉幸のハワイ移民募集に応募して神戸に集まつたものと考えられる。彼等は、大島ではハワイ移民に応募したのであり、ハワイ行きからタイ行きに移民先を変更したのは、出帆する神戸に集まつて以後のことである。

ハワイ行き希望者をタイ行きに変心させるため、岩本は現実離れした有利な条件を神戸で提示した(本誌2013年5月号)。

第1次タイ移民は32名で、うち女性は9名(面田の妻も含む)であつたという。本誌2013年6月号に掲げた第1次タイ移民リストには、タイまで行つた

女性の名は、7名しか挙げられていない。面田の妻の名も欠落しており、この表は未だ完璧とは言えないことが判る。

第1次タイ移民は、1895年1月23日にバンコクに到着、1ヶ月ほどブラブラした後、現在のルンピニ公園の地(當時はジャングル)を開墾して1、2町歩の畑を開き、スラサックモントリに資金援助を頼んで野菜の種を購入して植え付けた。

この後、1895年6月ごろに第1次タイ移民は2グループに分かれた。一つのグループは、農耕を捨ててブカヌン金鉱山の労働者となつた鉱夫組の約20名、もう一つのグループは、農業を続け1895年半ばの雨期入り後、バンコクで稲作をした農耕継続組の約12名である。後者は現在のワイヤレス(ウイタニ)路周辺で水田耕作を行つた。

1895年6月頃、岩本は日本で第2次タイ移民の募集を開始したが、これを伝え聞いたバンコクの農耕継続組は、食べる米にも欠けるといふ移民生活の窮状を伝えて、岩本千綱の移民

事業の杜撰さを告発する文書を神戸の水戸警察に送り、第2次移民中止運動を行つた。

一方、95年9月ごろ迄にブカヌン鉱夫組は、婦人とその幼児および独身者1名を除き17名ほどが病没した。

12名の農耕継続組では、翌1896年2、3月頃に、4、5名が日本に帰国し、残り7名がコーラート鉄道建設の工夫と名づけた。第1次移民の7名が三谷足平にコーラート鉄道工夫に誘われた1896年初という時期は、第2次タイ移民(熊本県人、1895年10月17日にバンコクに到着)が三谷に誘われた1895年11月ごろの時期よりも2ヶ月ほど後のことである。

第1次移民の7名と第2次移民の17、18名が、コーラート鉄道建設工夫に就業した時期は重なつていた筈であるが、面田は他県(熊本)人の第2次移民に

つては全く言及していない。面田を含む第1次タイ移民のコーラート鉄道工夫は7名、このうち建設現場で大森五郎右衛門と面田の妻がマラリアで死亡したので、面田を除く4名は日本に引き揚げた。

第2次移民のうち、コーラート鉄道の建設現場において死亡した者はおらず、鉄道建設工夫になつてマラリアに罹患した者もバンコクに戻つて死亡している(本誌2014年6月号)ので、鉄道建設現場において死亡した日本人は、第1次移民の大森と面田の妻の2名のみである。故に、日本人移民の碑にコーラート鉄道建設で死亡したと記載されている鐵本作造「新蔵」は、同鉄道建設における死亡者ではない。



## 泰国日本人会の前身 日本人倶楽部の創設

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋英治

2018年5月号

日本人が互助親睦情報交換等を目的として、バンコクで結成した団体の嚆矢は、1894年8月26日にサーラー・デーの晩鐘庵で結成された日暹協会である。その中心メンバーは、石橋萬三郎（当時の日本人社会の親分格、1869-1898）、山本安太郎（シヤム文部省日本語通訳、1872-?）、山崎喜八郎（桜木商店、1867-1912）らであった。当時若本千綱は、第1次移民集めに日本に帰っていたが、もし在タイにいれば当然結成の中心人物であったはずである。日暹協会の構成員は、壮士風の者が多かった。1895年12月に石橋が宮崎滔天とともに帰国して在タイリーダーを失い、また、若本が1896年9月に東京で組織しようとした、日本側の日暹協会設立も失敗して、日暹協会は雲散霧消した。

96年8月ごろには、堅実な商人を中心として日本人会が結成された。その中心人物は、上記の石橋・若本・山本らから冷遇排斥された阿川太良（函南商会、1865-1900）であった。下の引用のように阿川の不在時には、磯長海洲（写真館、1860-1925）が中心となった。その外の主要メンバーは、大山周蔵（大山兼吉の兄、雑貨商、1854-?）、佐々木寿太郎（建築師、1890年来タイ、1910年死亡）らであった。

### 日本人会の組織

従来盤谷に於ては在留の日本人相会して日暹協会なるものを組織し一切日本人の対暹羅の動作及諸外国に対する云々「うんい、言論と行爲」に就て協商たるの便宜を設け居たれども年々星移ると共に種々の事情弊害を醸生（ママ）して兄弟間諍（けきしやう）相離反して殆んど其名あ

つて実なきの有様となり在留日本人の一致協力を欠く而己か反目嫉視して往々醜態を外人中に暴露するの面目を呈することからざる次第と成行きたれば今度有力なる日本人更に相会合して新に日本人会なるものを組織したり其趣意は在留日本人の交誼を厚ふし日本人たるの名誉と其勢力を増進して暹羅事業を大成するにあり故に若し日本人にして此目的に乖反するの行爲あるものは飽まで之を排斥するは論を待たず新たに來りたる日本人に対しては充分の便宜方法を与へて其希望を遂げしめんことと力を致すは本会の重なる責務なりとする処なり会長には阿川太良「正しくは太良」氏當選したれども同氏は今度商用を帯びて帰国するの都合となりたるを以て磯長「正しくは磯長」海洲氏其後を承けて会長の任を帯びたり現今我が公使館とか領事館とか云ふ国民の思想を代表し及び同国人の協同を計り新來の士を導くの機關なき國柄に於ては如斯もの基だ必要を感じる処なり（南蛮鉄「宮崎滔天」盤谷雑誌（一）、国民新聞1897年1月30日）

号）。1897年1月4日にバンコクに到着した、参謀次長川上操六中将一行を迎えて、1897年1月10日夜、大山周蔵宅で日本人会が歓迎会を開催し、都合20名近くが参加した（村田保定編『明石大将越南日記』、日光書院、1944年、118頁）。1900年6月18日午前日本仏教界の代表からなる仏骨奉迎団は、バンコクの日本人墓地に参拝した（若本千綱『仏骨奉迎始末』、1900年7月21日発行、60頁）。その所在地は記されていないが、この時点でバンコクに「日本人墓地」が存在したことが判る。

### 三井物産檀野禮助氏の着任

1906年8月に三井物産バンコク出張所初代首席として檀野禮助（1875-1940）が着任した。彼の詳細な日記帳



1907年7月、日本人会の松方正作新公使歓迎会  
（『檀野禮助伝』口絵より）



新嘉坡支店時代

1906年8月に着任した三井物産バンコク出張所初代首席檀野禮助氏  
（『檀野禮助伝』口絵より）

を基にして戦前に編集された『檀野禮助伝』（1945年刊）には、檀野が日本人会会長を務めたことが記されている。例えば、檀野氏は民間外交家として活動し、田邊代理公使と連絡を保ちつつ、日暹間の親善は無論、通商拡充に拍車をかけた。それがために在留民から日本人会長に推され、暹羅語を研究して事情通となった（269-270頁）、久しく欠員中であった暹国駐節公使に松方正作氏が任命、七月十日「1907年7月10日」盤谷に着任せられた。日本人会では新公使歓迎のため檀野会長は、盛んなる歓迎会を開催し、その席上歓迎辞を述べ、民団発展につき気煩

をあげ、尔後、公使、民団一体となつて活動した（283頁）、など（本誌写真参照）と。同時に檀野伝には、日本人倶楽部という表現もある。倶楽部は日本人会の建物施設を指しているようである。もし、檀野の日記帳類が今日も残っていれば、バンコクの日本人会と日本人倶楽部の関係、両者の起源を詳しく知ることが出来る筈である。本年3月26日に檀野の孫に当たる檀野統一氏に質問のメールを送ったところ、直ちにお返事を頂いたが、戦災で全て失われたようでも残っていないとのことであった。

しかし、幸運にも日本人倶楽部創設の経緯と運営方法の概要が判明する記録を、本年3月2日に京都宇治の黄檗宗大本山萬福寺文華殿を訪ねて入手できた。1905年8月、12年8月（但し、1907年3月から1年間は帰国）の間、在タイし、日本人倶楽部の書記も務めた溪道元師（1877-1966、最後は黄檗宗の管長）が残した、後述の「暹羅国行脚物語」である。

バンコクの日本人が、自前の施設である、日本人倶楽部（集会所、娯楽、宿泊等の施設）をSoi Captain Bush（現 Soi 30 Charoen Krung Rd.）に持つことができたのは、1906年に檀野禮助が日本人会長に就任した頃である。漢師によれば、三件の大口寄付が、日本人倶楽部の発足を可能にした。即ち、稲垣満次郎初代公使が1905年12月の帰国の際に寄付した五百バーツが日本人倶楽部創設の原資となり、続く神戸の川崎造船所の千バーツと三井物産の千バーツの寄付で、施設が充実にた。

明治大正期に川崎造船所がシヤム政府の注文で建造した船は、1905年5月に進水したシタマラ（264トンの快遊船）に始まり、1908年4月に駆逐艦スワートン（375トン）及び3隻の二等水雷艇1、2、3号（各89トン）が進水、1912年2月に駆逐艦スワカムロンシント（370

トン）が進水、1913年3月に二等水雷艇4号（89トン）が進水、1918年7月にはマハチャックリー（2400トンの快遊船）が進水している（阿部市助編『川崎造船所四十年史』川崎造船所、神戸市、1936年11月5日発行、298-299頁）。

三井物産と川崎造船所とは、タイに進出した最初の大手日本企業であり、両者の大口寄付によって、始めて日本人会は恒産を手にしたのである。

さて、漢道元師は、京都府官津の生まれ、大阪の従兄（軍医）を頼って14歳の時に故郷を出奔した。この従兄は黄檗宗の寺（九島院）に下宿していたが、その寺の住職は漢道元を見込んで跡継ぎになるように頼んだ。住職が学費を出して教育を受けさせることを条件に、漢はこれに応じた。漢は大阪の中学に中途編入されたが、住職が2年後に死亡。漢は東京に出て哲学館（後の東洋大学）に学ぶことにしたが、後を継いだ僧侶は約束の学費を送ってこなかった。中退した漢は、昼間は寺の手伝い、夜

は英語の夜学に3年間通った。漢はいずれ欧州まで行くつもりで、1902年春に僧侶としてまず台湾に渡った（漢道元『南亜旅行記』1962年刊、14頁）。

3年後の1905年半ば台湾を脱し、清国を巡遊したのち香港の宿（東洋館）で出会った商人、立木幸三郎（1873年岐阜県生）に同行して同年8月過ぎに来タイ。稲垣公使の紹介で僧侶としてワット・サケートに住み込み、藏長海洲の写真館で写真の技術を身につけた。1907年3月に、日本に一時帰国。日本では、自分の撮影したバンコクの写真を雑誌に持ち込んだ。『太陽』第13巻8号（1907年6月1日号）の口絵には、漢道元君寄贈として、暹羅国在留日本人青年会発会式、在暹羅盤谷府日本公使館、暹羅国華族女学校（2枚）と題した4枚の写真が掲載されている。

これからバンコクで日本人青年会が発足したのは、1906年から1907年初めであると思われ、日本人会（倶楽部）の発足と軌を一にしたものと思わ

れる。

1年後の1908年2月に、漢はタイに戻り、1912年8月に印度巡礼に発つまで4年半に亘って在タイした。漢は1908年10月にはワット・サケートの住職に同行して、ピマートを、1909年1月にはサワンカローク、スコタイの各遺蹟を訪問した（漢道元『道元』「暹羅国北部の宗教状態」、『禅宗』170号、1909年5月号）。

彼はこれら

の日本人であるかもしれない。在タイ後半の時期に、漢は日本人倶楽部の書記も務めた。彼がバンコクを去つた1912年8月前後のバンコクの日本人倶楽部の様子を含め、邦人の事情を漢道元は『暹羅国行脚物語』の中で次のように語っている。この文章には、句読点が全くなく、送り仮名も現代文とは懸け離れている。下記の引用では、読み易いように句読点を加えたが、送り仮名はそのままとした。

漢道元「暹羅国行脚物語」  
暹羅国に於ける我同胞の発展



暹羅国と申しても重なる我同胞の在留地は首府盤谷府であるが、何時頃から日本人が同国に居住しかけたかと云ふに、アユチャ王朝時代に山田長政が渡航して此地に英名を轟かせたと云ふことは歴史に記されて居る。ところが、英人にして東洋学者なるサトウ氏 Ernest M. Satow（嘗て暹國を始め日本支那にも英國公使として駐劄せしことありし人）の研究に依れば、西暦一五六九年即ち今大正三年より三四五年前にはアユチャ在留の日本人約五百人暹王國の緬甸攻撃軍に参加し勇壯絶倫の働きをなし大に日本人の武勇を示したりとしてある。併し其後暫くの間は日本人の足跡と云ふものは絶へてしまつたのである。徳川幕府時代の鎖港主義は一時國民の活氣即ち海外飛躍の大活氣は殆んど消亡せんとしまつたのであるが、維新の革新によつて始めて祖先時代の大恩恵を回復し、而して一七七八年及び三十七八年の二大戦争になつて来たのである。申す迄もなく、我故郷を富ましむるには必らずしも郷里に住して汲々たらねばならぬことはいない。寧ろ海外に飛出して

世界的活動を試みるのも又一快事である。我同胞諸氏が同国に航して再び居住し始めたのは明治二十年頃のことであるが、多少土人并に白人などに知られる様になつたのは日清戦争当時からである。無論其時代には我公使館も領事館も出来てなかつたのである。我公使館の設置されたのは明治三十年三月三十一日始めて暹羅全權公使「正しくは并理公使」として稲垣満次郎氏が任命されたのであつて三十二年二月に同全權公使「并理公使」と暹國外務大臣との間に十六條よりなる日暹修好通商航海条約と云ふものが制定されて居る。其の最後の所に第十六条本条約は之を批准し其批准は可成速に盤谷に於て交換すべし、右証拠として兩國全權委員は之に記名調印するものなり、明治三十一年二月二十五日即ちラタナコーシンドルソック第百十六年西暦千八百九十八年二月二十五日盤谷府に於て本條約を通する。

デヴァウラングセヴァアロプラ  
カ一印  
稲垣満次郎 印

其他付屬議定書なるものが出来、始めて日暹兩國の親交を見ることが出来たのである。其後稲垣公使の尽力で政府法律顧問として政尾法學博士の招聘となり、盤谷府に農學校設置の爲め戸山「外山」農學博士（當

時農學士）其他醫藥技手等の招聘となり、華族女學校へは安井哲子女史其他手芸教師二名の招聘となり、文部省へは大山園伯聘せらる（之は稲垣公使前任以前のことである）、陸軍よりは三井へ小銃数千挺の注文あり、海軍省よりは川崎造船所へ重艦注文せらる等、何れも稲垣公使時代の出来事であつて、同公使在任當時は在留同胞間に多少の批難もあつた様であるが、同公使が本邦人の為に尽力せられたことは覆ふべからざる事実である。併し只今では地政局の方に田山丸一君、漆工部の方に鶴原三郎君居られるのみで他は何れも満期解職となつて前後帰朝せられたのである。雜貨店は現今七八軒出て居るが、何れも相當に売れつつある。其内最も大きな店は池崎商店、大山商店、山口商店の三軒である。医者は日清戦役當時渡航せられ十数年間あらゆる困難と戦ひ、遂に日本医院でふ病院を設立して現今在留同胞中の牛耳を握られつつある三谷足平氏が居られる。其他小澤医院（小澤正氏）之も開業以來僅か五六十年間に二三萬の財産を造られたと云ふ評判であつたが、昨年の不幸なる横死を遂げられたと云ふ報知を得た。実に惜むべく「いた」ましいことであつた（小澤正は、1875年2月山梨県東八代郡美村（現笛吹市）

生、1906年2月19日に旅券下付を受け来タイ、1913年8月1日に汽船より墜落死亡した。会社としては三井の新嘉坡支店の出張所がある計りである。写真店は現今開業しつつあるもの三軒ある。此写真術は本邦人長技の一つであつて、大に世に誇るに足るのであるが、惜しいかな資本に欠乏して居るので歐人写真師が其店を大に居るものに対しては、到底競争の容易でないことを示して居る。支那人の写真店などは殆んど一町「60間、約109メートル」ごとに一軒若くは二軒位づつあるのであるが、多くは本國人相手である。支那人は現今暹羅國民中約三分の二位の在留者であるにも拘らず、土人より常に輕蔑されて居る傾きがある。歐人に対しては一般の土人は敬遠主義を採つて居るのであるが、其中間に立つて日本人には至つて親しみ安く且つ尊敬の意味を以て常に交際しつつあるのである。依て何商法に關せず日本人の店には通り掛りの土人と雖も必ず一度足を入れると云ふ傾きがある。是等は全く同一人種なる關係と一つは戦捷の給物である。在留同胞中独立生活をなしつつあるものの中で雜貨店に次で最も多いのは此写真師であるが、其内の多くは俄か仕上げの素人である。故に盤谷府に在て開業する程の

力らの無い者は何れも田舎地方を廻業して居る。却て金儲けは此方が多いとのことである。次に西洋洗濯であるが、目下の処一軒で一年中氣候が華氏の九十度「摂氏約32度」から百度「約38度」の間にあるので男女共に始終白服のみを着してをるので、従て洗濯の需用は頗る多いのである。此業務は多く支那人がやつて居るのであるが、仕揚げが日本人の如くよく行かないので歐人并に中流以上の土人などは大抵此日本人の洗濯店へ持て来るのである。此種の業は前途大いに望みがある。理髮店も面田と云ふ男が古くから一軒有る計りであるが、是亦洗濯店と同じく中流以上の土人及び支那人其他歐人等の客多く平均一日二十銖（二銖は我七十錢）以上の収入がある。日本人のホテル及び料理店は一軒も無い。併し表面ホテルの看板を掲げて内実売春婦を置いて、バア即ち洋酒店を開て居るものが四軒あるが、無論紳士の足を入れるべき所でない。明治三十八年の十二月に稲垣公使が同地を引揚げられるに就て五百銖を支出し置き土産として設置されたる日本人俱樂部と云ふのがある。後に川崎造船所及び三井から各一千銖づつの寄付があつて、舞台及び家具一式玉突台等に至る迄一通りの娯楽道具も揃つて、僅かの在留民にしては比較的

完全して居る。常に専任書記一名ボーイ一名居つて監督者は会員の中より幹事として名望者五名を撰挙し之等五名の幹事が監督して居るのであるが、時には専任書記に監督權一を委すこともある。故に日本人にして始めての渡航者中最上流者はオリエンタルホテル又はヨロツパホテル等へ止宿せられるのであるが、語学が不充分であるとか亦是旅費の充分で無い者は皆此日本人倶楽部に宿泊せしむることに成て居る。オリエンタルホテルの宿泊料は一日拾貳株であるが倶楽部の方は半は慈善的になつて居るので喫台料として一日壹株乃至一株半を申受ることに成て居る(但し食料は別である)。地方の状況を調べるには寧ろ領事館よりは或点に於て此倶楽部の方が便利を得られるのである。モ一層簡便なるものは前記の日本人雜貨店に宿泊を願ふのである(無論知人の紹介があればなをよい)。ソーすれば僅かの謝礼位ですむ。至極經濟である。土地の事情には過ぎず、旅費は不充分なり而も多少の權識を保たねばならぬと云ふ様な僧侶などには、其れが一番適當の方法である。先年國王の戴冠式の時「1911年12月」に來られた日置縣仙和尚來馬球道君なども盤谷滞在中は右の池崎雜貨店に宿泊して居られた。方法の奈を問は

ず単に金儲けしたものを成功者と云ふならば、渡邊知来〔正しくは知頼〕氏の如きは同胞中のチャンピオンであらう。氏は明治二十年頃渡邊世から最初相当の資本を以て居られたさうであるが、種々商法の失敗の爲め一時は余程の窮況に居られたのであるが、一朝活動写真の興行をせられたのが当り始めて僅々五六年間に数十万円もの富を造られた。今日では新嘉坡に護謨山を持って居られて立派な紳士である。近頃活動興行の權利を外人に売られたと云ふことである。氏の成功は吾輩渡邊以後のことで、明治三十八年頃にはマダ有福〔裕福〕な方で無かつた。併し人格の高かつたことは在通同胞中民間側では第一であつた様に考へる。氏は嘗て在郷中に中学校の教鞭を採つて居られた位で、相当学力もあり、気概もあつた方であるが、稻垣公使とは始終反對して居られたと云ふことである。以上申上た如く俗人には相當の成功者も出来て居るのであるが、宗教家としては未だ一人も吾輩の尊敬を払ふべき人格を有した僧侶の渡邊を見ないのは誠に遺憾千万である。前にも述べた通り通國は世界に於ける唯一仏敎國である。無論小乘仏敎ではあるが、仏敎を以て國敎と成し上國王陛下始め下方民に至るまで悉く仏敎信者と云ふ國は、獨立國として

は通國の外は無いのである。我大乘  
 仏教の高僧方も南方の小乗教などと  
 異であしらつて居られず少しは研  
 究的又は大乘教を扶植する御者へで  
 法の爲め出掛られては如何と御願め  
 したのである。必ず彼に学ぶ所  
 のものも亦少なからざることを証明  
 する。稻垣公使が吾輩に言はれた如  
 く、青年僧侶は今日迄に渡邉された  
 方が多くあつた様であるが何れも眞  
 面目を欠て居られはしなかつたか。  
 彼等暹羅人の目には縋索「シソ、僧  
 侶と俗人」共に日本僧侶に対して何  
 れも不快の念を抱かしたに過ぎな  
 い。只僅かに浄土宗の概祖兼師（肥  
 前諫早の人）は比較的眞面目であつ  
 て僧侶共に相当信用されて居られた  
 のであるが、吾輩渡邉當時から已に  
 法服を脱せられ農業に従事し、只今  
 では全く俗人と成て同國に帰化しチ  
 ヤンタブンと云ふ田舎に入り込んで  
 ゴムの栽培に従事して居られる。蓋  
 し師は吾輩が將來に望みを厲してを  
 る中の一人である。暹羅仏教に就て  
 も充分研究をして居られる。仏骨奉  
 迎の際稻垣公使に向て華迎反対説を  
 主唱したのは此概「おおむね」師で  
 あつた。併し其當時のことを悉しく  
 書くと故人と成られた稻垣公使の爲  
 に死者に鞭つの嫌いがあるから止め  
 て置くが、後に概師の意見を聞いて吾  
 輩も賛成であつた。同師は実に先見

18

583

の明があつたのである。仏骨奉迎をした爲に、一時日本仏教教家殊に正使で行かれた大谷光演法主の名は暹羅国の田舎地方にまで知られたのであつたが、今日では却て日本仏教家の信仰心薄きことを通人に知らした様なものである。其際此奉迎に關係した各宗派中、色々迷惑を蒙つた宗派もあつた様に聞て居るが、就中妙心寺派の如きは十数万円の基本財産と当時の宰相前田精拙「正しくは誠節」師を失つたことは、今尚ほ諸氏の記憶せらるる処であらう。話が段々脇道に入つた様であるが、何れの国何れの土地を問はず、邦人団体の居留地に必要なるものは、第一医者と宗教家と教育家である。其中教育の方は土地に依て不便ながら多少の方法も付くものであるが、医者と宗教家は同邦人に限る。外国語の充分話せる者ならば、只今では何れの土地でも相当人家の有る処には大底「大抵」欧人の医者が入り込んで居るから不便で無い様なものの、海外居住者と雖も十中の八九は語學に不自由な者が多い、斯に於て邦人の医者に非ずんば充分病氣の容体を話すが出来ない。其れが爲め往々取り返しの付かぬ失敗を來すことがあるからである。宗教の一日も欠くべからざることは言ふ迄も無い事であるが、暹羅には常に二百名近くの同胞

人居住し居るにも拘らず、只今では宗教家と教育家とが居られない。故に且下最大急務とする處は鐵合府に一個の布教所を設置し、在留民布教の傍ら學齡兒童の教育を爲すことである。之れは何時でもかまはん。元より各宗寄り集りの信者であるから決して何宗で無ければならぬと云ふことは無い。併し余り老年者より壯年者の方がよい。無論品行の正しい者で無くてはいかぬが、多少語学の素養「素養」があれば申分なしである。初めに先づ千円計りの資金が必要である。第一政府に願つて市中の片隅の方に沢山古寺があるから其れを無償で松下げを願つて修繕して、仏間と座敷とを造り境内の隅に火葬場を造るのである。而して一人の下男を使用して約一ヶ年位は費用を自弁する考へでなければならぬ。其上は在留民一同で維持の立つ様にして呉れる。其維持の方法も予め調じて置たのであつて、現今百四拾円計り共同墓地設置に使用すべき金が出来て居る。何宗を論せず宗門の爲に一奮発してもらいたいものである。若し右の資金を与へて呉れるで篤志家があつたなれば吾輩は今日でも直ちに渡航して一ヶ年末滿に屹度相當の布教所を設置して將來維持の方法も付けて見せる確信を有してゐる。内地の寺院に燃つて御隠居同様

に古来の習慣の布教に従事して一生を終るのも氣楽ではあるが、男兒一度海外に飛出し世界的舞臺に上つて鉄腕を振つて見るのも亦愉快ならずや焉。

之で通羅國行脚物語りは一先づ終りを告げることに致します。『鹽眼』(かつろげん)第42号、大正3年6月15日發行、12-18頁。

溪が専任書記を務めた当時の日本人倶楽部は、名望者5名が監督として共同で運営していたものと思われる。しかし、会長職はあつたようである。1911年2月15日に初めてバンコクに着いた三木栄（1938年度の日本人会会長）は、次のように回想している。

当時日本人会の前身、日本人倶楽部はブッシュレンの今の小谷龜太郎さんの住宅と思われる所にあった。管理者兼書記は現今黄葉宗大本山万福寺の管長溪道元師で会長は政尾藤吉博士法律顧問であつた『泰尾藤吉博士法律顧問であつた』  
国日本人会創立五十周年記念号、1963年9月刊、23頁。

これから檀野禮助日本人会（倶楽部）会長が1909年6月にパンコクを離れた後、政尾藤吉が会長職に就いたものと思

「在留同胞中の牛耳」を執るリ！  
ダーと述べており、三谷医師の  
信望が高くなっていることも判  
る。

溪道元師は、邦人子弟のための学校と邦人の共同墓地を兼ね備えた仏教布教所の設立の必要を述べている。実際には、溪師は、当時日本人子弟の教育を担当しており、『瞎眼』22号、1912年10月、26頁）、溪師自身が邦人用の共同墓地設立を提案し、それに賛同したパンコクの日本人たちは、費用の積立を開始した。溪師がパンコクを発った時点（1912年8月）では、140円（銖換算では約200銖）の積立金ができていた。この積立金が更に積み重なって、1935年7月16日に落成した、ワット・リアップの日本人納骨堂となつたのである。





# バンコクの日本人、 泰国日本人会の起源

村嶋 英治

7月7日  
2018年6月

現在の泰国日本人会の創立日については、1913年9月1日説と1914年3月18日説の2説があることについては「タイと共に歩んで…泰国日本人会百年史」(2013年9月刊行)に掲載されている拙稿「戦前期タイ国の日本人会および日本人社会…いくつかの謎の解明」の43頁に書いてある。どちらにしても、誰がどこでどのような会則を定めて発足したのかは、不明のままである。日本人会は、それ以前に設立されていた日本人倶楽部(バーンラックのSoi Chaiyong Roadに所在)を包摂して発足した。

その後も長らく、日本人倶楽部という呼称は生き残り、我々が目にするところでは、1937年7月11日改正の「暹羅国日本人会事業及会務規程」にも「第4章 倶楽部」があり、第19条で「倶楽部は会員集合の設備を有し図書及左の運動具及娯楽器具を常備す」と定めている。会員自身にも、日本人会と日

本人倶楽部の区別がはっきりしなかったようで、会報編輯員の鈴木宇治(1896-1979)と日高秋雄(1905-1979)が、1933年6月16日にシアマの日本人会で開催した青年座談会で、会員の「一川秀雄(1905年生、1924年来タイ)」が、日本人会と日本人倶楽部とは、どう云ふ関係にあるのか、日本人倶楽部が主で日本人会が従か又は其の正反対か、日本人倶楽部を建前としたら日本人会が存立をもつと活気ある様にしてもらいたい、又吾々もつと倶楽部を利用する様にせなければいかんと思ひます、と質問し、これに対して鈴木宇治が、日本人会の一部に倶楽部があるのであつて倶楽部の内に日本人会があるのではありません、日本人会としても又倶楽部としても今後大いに活路を発見して、在留邦人のため、より以上の貢献をせなければならぬと思ひます(「暹羅国日本人会会報 復活3号」1933年7月31日発行、85-86頁)と、答えている。

## 日本人倶楽部に抗して 青年会発足

日本人倶楽部の書記を務め、1912年8月末に離タイした、黄葉宗僧侶の漢道元師の手記に拠つて、本誌前月号で日本人倶楽部の起源を紹介した。日本人倶楽部が発足すると、それに抗して日本人青年会が生まれ、たという。青年会は、1935年の日本人納骨堂建設まで継続する墓地区を生み出した。その経緯は次のように語られている。

次に墓地の問題が残つていて、本会「日本人会」の墓地区は其の源を明治卅九年に発し中々古い歴史を持つて居るのである。明治九年「卅九年の誓」六月当時の青年諸君は老人の「日本人」倶楽部に対抗して青年会を組織し会員三十二名を糾合して甚だ意気盛んであつた。時恰も一邦人の死に際して青年会は墓地区問題を提げて老人の倶楽部に交渉したが安易を貪つて事なかれ主義の老人

連は青年会の提議に耳をかきかたつたので青年会は奮然して我々は我々の墳墓の地を造らんと僅かながらも毎月金出して其の基礎を固めたのである。尔来星移月代つて今日に至つたのである。斯る古き歴史を有し相当の蓄財を有する墓地区は本会事業の一部なるに何等之れに対する施設研究を耳にしないのは甚だ遺憾に思はれる。之れも何とか早晩巨費を開けて貰ひたい(凡聖居士「日本人会は今後何を為すべきか」、「暹羅国日本人会会報」復活第2号、1932年11月25日発行、28頁)。

漢道元師は、青年会結成の中心人物であつたようである。彼は1907年3月から1908年2月まで一時帰国したが「賭博眼」第32号、1913年8月15日発行、19頁、その際持ち帰つた、「暹羅国在留日本人青年会発会式」など4枚の写真が、漢道元君寄贈として「太陽」第13巻8号(1907年6月1日号)の口絵に掲載されている。青年会は一時32人の会員を有



ワット・サケートのウボーソット廻廊にある江尻賢美元日本人会会長の3子女の墓  
(1920年代半ばの設置)

し、会員数では25名の日本人倶楽部を凌駕したが、1年を経ず空中分解した。それは、「暹羅だより」と題した次の記事から判明する。

△居留民の親睦機関として盤谷府バングラック(Bang Rak)街に日本人倶楽部あり前公使稲垣、松方両氏三井物産の檀野氏川崎造船所松方氏等の寄付により前公使稲垣満次郎氏が帰国「1905年12月末」の間に成立せる会にして在留民中有力者連を以て組織し現今正会党「正会員」及玉突部会員合せて廿五名余を有す

△青年会と婦人会 日露戦争後俄に同胞の殖え来りたれば青年の有志者発起となり青年会なるものを創立せしに始めは非常の勢力を以て発展せしに一年を経ざるに閉会の已むなきに至れり是れと同時に西本願寺特派の宮本英龍師の設立せし仏教婦人会なるものも発展せずして中止したり、在留同胞の業としては官途にあるの外は現今雜貨店、銘酒屋と医師、理髪業及び農業を営む者あり(「東京朝日新聞」1909年7月23日朝刊)。

日本人納骨堂建設以前の  
日本人の墓

暹羅国日本人会に継承された墓地区は、上に引用したように、1906年6月に発足した青年会によって作られた。1930年代に入ると墓地区の積立金残高も大きくなり、日本人墓地区の実現性が高まった。1932年11月に発行された、日本人会会報復活2号で、K.M.生が「日本人会の将来のことども」と題して、墓地区建設に関して次のように提言している。

共同墓地区建設に関して、墓地区設問題は必然將來実現さるべき本会の最も重大な事業の一つである。此の問題に關して有力なる先頭諸氏が、数年前數回に亘つて定期總會に提出したに不拘、有耶無耶となり、其の後今日に至るまで何等の建設準備行動も運ばれて居ない。此の問題は會報に載すべき性質のものではないと思ふが「今後何を為すべきか」と云ふ提案に対して、いささか卑見を述べて見たい。会則第五十條の墓地区建設費なるものは、本会が「日本人会」と云ふ名の下に生計「産出」を上げた大正二年より以前からあつたものらしい。本会員と墓地区員合せて約九十名の人々が毎月二十五士丹「サタン」づつ營々、実に二十数年積立てて来たものが現在七千余餘「バーツ」に達して居るが、此の驚

くべき多額の積立金は毎年微細な利子を生むだけで無為に貯蔵せられていのである。墓地建設は「これしきの金で出来るものではない」と、これは尚早論者の殆んどの意見であらうが、それでは、何時になつたら実現されるか。茲に我々が考慮せなくてはならないことは、地価の騰貴率が年代と正比例するものであると云ふことである。これは絶対的とは申せないが、斯く見るのが至当と考察される。然し騰貴率がどの位のパーセンテージであるかは、勿論場所、事情に依つて異なることであらうし何人も明言出来ないが年々五分づつ騰貴して行くとすれば、時価四千株の土地は五年後には五千株に値上げれば購入出来ない勘定となる。墓地建設問題に關して私は具体的な研究や、実地調査をしたのではないが、墓地面積も大して広大なものでなくとも良いと思ふ。彼のシーロム街に散見する西洋人、支那人の墓地も精々一千坪内外である。日本人会と小学校とそれに接続して墓地を置くこと云ふことは最も理想的とするところであるが、これは昔ながら知らず現代では何れの点から見ても先づ不可能である故、全然離れた所に求めるとして、今日郊外を物色すれば比較的容易に手に入ると思ふ。然し土地は安くとも一つの荒地を手入するこ

とは予想以上に荷むものである。其の上今日までの死者百数十名合併の納骨塔とも云ふべきものを建立した。寺院、火葬場、墓守小屋等の建築費を見積ると七千餘では困難な事業とも考へられるが、最初から何も彼も整へなくともよいし納骨塔も建物も簡素なもので結構だと思ふ。確するに墓地建設完了と同時に名古屋日通寺より僧侶を派遣して呉れると云ふ。而も僧侶の旅費並に当地に於ける生活費は日通寺が負担してくれらるゝことなれば建設後の維持費は極めて少額なものと見てよからう。日本人会にある過去帳を繰いて見るに最初の犠牲が明治二十五年で今日に至る迄合計五拾三「百五拾三」名の霊魂が當國の地下に眠つてゐるのである。これ等亡き人々の病名を調べて見ると其の多くはコレラ、風土病で病名不明のもの二拾名を除いて勘定するとコレラの死亡率は二割強、風土病は二割強と云ふ統計を示している。其の昔の鎌倉は水道局もなく従つて飲料水はメナム河の濁水を明礬ですまして飲料とし、下水の設備も不完全、衛生局の設備等もなかつたのである。そうした時代に行程数千哩の異郷に渡つて酷暑、病魔と戦つて奮闘努力した先驅者の困難を思へば、今日の我々は実に申訳なき程安楽な生活ではなからうか。就

中悲惨なのは明治二十八年に山口県人の拾八名が内地の釜山に於て風土病に冒され、勿論拾八名全部が亡き敬となつて了つた一事である。恐らく一滴の涙も得られなかつたであらう。あの猛虎の出没するジャングルの孤立小屋の中で故郷を案じつつあえぎ悶へて陸續として一人残らず黄泉の客となつた彼等を想像する時ぞる涙の禁じ得ざるものがある。百五十三名の英霊、そうだが私は敢て英霊と云ふ。なぜならば、遠く南洋の舊地に雄飛して狭隘なる日本内地の外に恒久なる安樂郷をきり開かんとした愛國的心持の発露は、今日満州及上海事変で帝國のため名譽の戦死を遂げた多くの皇軍と其の使命に於て同一であるからである。此の大多數の英霊は現在日本人会会員の二倍に達している。乍併遺憾にたへないことは、是等多くの尊き靈を祭るべき何物をも存して居らぬ。我等の先驅者の靈はワッサケーに、ワッポに、ワッサムチーンに、或は半島の野に、北部の山に点々として淋しく彷徨つてゐるのである。(K.M.生「日本人会の将来のことども」、『暹羅国日本人会会報』復活第2号、58-61頁)。

K.M.生が、日本人会の過去帳を見た時点(1932年11月以前)では、そこに記されてい

た最初の人の死亡年は、明治25年(1892年)であり、合計153名の死亡者名があつたという。現存の過去帳では、最初に記されているのは明治29年死亡の伊藤ユリ子であり、明治期は59人、大正期は64人、昭和期は7年11月以前迄で14名でありその合計死亡者数は137名(鐵道工友供養のために戦後に書き加えられた18名は除く)である。即ち、153名には16名足りない。これから現存の過去帳は、戦前の過去帳に比し、明治25年に始まる最初の部分が欠落している可能性がある。

### 江尻賢美元日本人会会長の3子女の墓

さて、K.M.生は、日本人納骨堂ができる以前にタイで死した邦人は、ワッサケー「Wassakee」、ワッサムチーン「Wassumchee」、ワッ

ト・トライミット黄金仏寺院」などに葬られたと書いてある。ワット・サケートで探したところ、ウボーソット(チャククラバット)デイボン通の門から入つて最初の建物(四角形の廻廊に置かれた多数の仏像の台座に、江尻賢美元日本人会会長(在任1941年4月-1994年4月)の天折した3名の子どもたちのお墓が見つかった。廻廊にぎつしりと並べられた金色の仏像の台座は全て墓標で覆われている。その中にタイ人、華人(数はタイ人と同じくらい多い)の遺骨が収納されている。日本人のものは、江尻家のものしか見つからなかつた。墓標の多くは新しいものであるが、江尻家のものは1920年代半ばに作られたものである。墓標が堅固な金属であり、書き込まれている事項も明白に読めるので、他の新しい遺骨と入れ替へられることを免れたのであろうか。江尻家墓標(写真参照)には、大きなタイ文字でชื่อ(エジリ)と彫られ、その下に3名の名前が縦書きされている。即ち、

江尻雄二郎 千九百十八年十月生  
江尻絹子 千九百廿四年七月死  
江尻雄二郎 千九百十八年十月生

千九百廿一年八月死  
千九百十六年七月生  
千九百十七年四月死

この3名は日本人会納骨堂の過去帳にも記載がある。即ち、

江尻雄二郎 1917年4月30日  
江尻雄二郎「0歳」  
江尻雄二郎 1921年8月16日  
江尻雄二郎「2歳」  
江尻雄二郎 1924年7月19日  
慢性心臓病「12歳」と記されて

1880年5月に現在の富山市に生まれた江尻賢美(別名、武司)は、25歳の1906年1月25日に、「三谷研蔵(足平)の私立病院事務員として、シヤムに渡航するため、東京都で旅券の下付を受けた(外交史料館リール旅43)。4年後の1910年3月18日には、妻のハマ(1889年生、21歳)が、夫の呼寄によりシヤムに渡航するため、富山県で旅券の下付を受けている(同リール旅62)。賢美とハマとの間には、1912年に長女きぬ(絹子)、1914年に長男英太郎、1916年に二女京子、1919年に次男雄二郎が生まれた。ハマは、夫と同棲のため、3人の子どもを

伴つて渡タイする目的で、1916年10月6日に富山県にて旅券下付を受けている(同リール旅84)。この時、次女の京子は生後4ヶ月であり、ハマは京子出産のためともを連れて里帰りをしたものと思われる。その京子は来タイ後生後8ヶ月で病死した。ハマは、1928年7月30日にも、夫と同棲のために渡タイするため富山県で旅券の下付を受けている(同リール旅103)。その後のハマの消息は不明である。

1923年頃に来タイした、1895年生まれ、りう(タイ外務省文書課通称「55」と、賢美は再婚した。りうは、1939年7月24日に、医業継続を目的に渡タイするため東京府で旅券の下付を受けている。この旅券下付以前にも、りうは旅券下付を受けて渡タイしている(リール旅113)。

1906年に三谷足平の病院で事務員として働くために初めて来タイした時、江尻賢美が医者資格を有していたかどうかは不明である。1932年5月18日にシーバヤの盤谷日本人会俱樂部で開催された、座談会では、江尻賢美は、最

近の若い連中に独立して仕事しようと云ふ氣概乏しく皆んな月給取りに成る事を願ふ様な有様だが其に将来の事を思へば心細い次第だ、其の昔自分が三谷「足平」様の世話になつて確か二百六十餘貯蓄して田舎に入り込み一働きやつた昔もあつたが今の青年に此の元氣が欲しいものだ(盤谷座談会、在留邦人発展策に就て、『暹羅国日本人会会報』復活第1号)1932年6月25日発行、38頁)と発言している。これから見て、賢美は所謂偽医者として地方で診療をした可能性がある。その後、江尻は医師の資格を手に入れたよう



である（在外指定盤谷日本尋常小学校卒業生一覽表）。彼はバンコクのアサンブション校（Assumption College）に進学した。彼は学力優秀であつたようである。『南洋時代第八号』今日の通羅（1930年10月10日発行、161頁）は次のように書いてゐる。

日本人会の附屬事業として小学校令第一条の趣旨に準拠して文部、外務両大臣の指定を受け、児童の教育をしてゐるが、開校は昭和元年6月、爾來外務省からは初年35000円、二年目29000円、三年目より25000円宛の補助を受けてゐる。……現在の就学児童は1学年生6、2学年7、3学年4、4学年5、5学年8、計30名である……特に図抜けたものは1、2名ある。その児童の一人はアツシヤムシヨ・カレシに転校して首位を占めてゐるもの（江尻英太郎）と、母国芽ヶ崎の学校で優等生となつてゐるものである。

英太郎は自著『タイ語文典』の中で次のように自己紹介してゐる。即ち、盤谷生、1933年アツサムシヨ・カレシ卒（専門学校程度）、1944年9月当時は、慶応大学語学研究所研究員兼同外国語学校タイ語講師、善隣外事専門学校タイ科教師、

授、財団法人日泰文化会館嘱託、社団法人日本映画社タイ国向映画タイ語字幕翻訳・説明録音担当（江尻英太郎『タイ語文典』大八洲出版株式会社、大阪、1944年11月25日発行、353頁）。1948年には、江尻英太郎（編）『ほら貝王子』世界昔ばなし文庫（彰考書院、206頁）を刊行した。晩年はバンコクで過ごした。

父の江尻賢美と妻りうは、日本の敗戦後もタイ残留を希望したが、タイに進駐したイギリス軍は許可しなかつた。賢美は1965年6月5日に愛知県豊川市旭町で死去した（故郷井真水増徳院住職記録の「在タイ国日本人先亡者登録」）。

### 日本人会設立の背景

現在の日本人会は、1913年9月1日を創立日としてゐる。創立の背景については、冒頭引用の泰日日本人会百年史の拙稿で幾らか検討したが、その後明らかになつたこともあるので、ここで追加修正しておきたい。

百年史の拙稿では、1914年5月29日にラーマ6世が「協会（サマ

コム法）（Kritthana Law）に署名し、これに基づき1914年6月5日のタイ官報に、チャオプラヤー・ヨマラート畿内大臣がバンコク州に關して「1914年協合法による協会登録規則」を公布し、既存の協会（複数の個人が、営利・利益分配以外の活動目的をもつて設立した団体）にも3ヶ月以内に協会の名、設立目的、事務所本部所在地、入会及び退会に關する規定、運営に關する規定などを警視庁に登録する義務を課したことが、日本人会として制度化する一因になつたのではないかと推測した。ところが、協会の施行と日本人会の成立とは何等の關係もなかつたことが判明した。何故ならば、日本人会が協会（結社）法に従い、暹羅国日本人会（Bangkok Japanese Association）という名称で初めて登録を申請し、許可されたのは、1932年8月になつてからのことであるからである。なお、タイ官報で見られる限り、1914年末までに登録された協会は17団体のみであり、欧米人の諸協会も登録されてはいない。

1932年8月3日の日本人会役員会例会で、江尻「賢美」

会長代理（会長の大谷清一は一時帰国中）、有延「憲一」、宮川「岩二」、植木「房太郎」、日高「秋雄」、田中「廣四」、金澤「貞三」、塩田「厚」、宮川「久治」の諸幹事（当時の会則では、会長プラス10名の幹事が役員会を構成）が出席し、

本会は未だシヤム結社法による登録を済まざるに付此の際登録を為しては如何（江尻提案、審議の結果登録に決定（江尻、宮川久治の二氏登録手続を執ること）（暹羅国日本人会会報「復活第2号、88頁」）を決めた。次の9月7日の役員会例会で、兼ねて警視庁へ本会の登録申請せる所、八月廿二日付にて登録済みの旨通知ありたり（暹羅国日本人会会報「復活第2号、89頁」）と報告された。

1933年10月30日に暹羅国日本人会会長大谷清一（Yoshiaki Ohtani, President）は、ボーウオラデート反乱における負傷者救済のため、シヤム赤十字社に日本人会会員から集めた426バーツを寄付してゐる（『タイ官報』第50号、2237頁、1933年11月5日号）。

日本人会制度化との關係が考えられるものとして、もう一つ、1905年3月8日の官報で公

布された居留民団法がある。例えば、1915年9月12日に成立したシンガポール日本人会の設立を主導した在新嘉坡藤井實領事は、1915年9月17日付公信第187号で大隈重信外務大臣に、居留民団法に則つたことを次のように報告してゐる。

新嘉坡日本人会の設立は多年の懸案たりしのみならず從來之が爲めに幾多の苦き経験と失敗の跡を残したるが本官の着任以來屢々種々なる問題に接して其設立の必要を認めつつ一向機運の到来を待ちたりしが客年四月從來当地に於て破産しつつありし頗夫四十余名を退去せしめ以來正業者の増加と相俟て当地在留邦人の風紀大に其面目を改めたる折柄即位の御大典を眼前に控へたる此絶好の機会を捉へ愈々七月十日を以て在留民の重立たるもの五十余名を領事館に招集し本官より反覆其設立の必要を懇諭したるに一同其設立を賛成し席上直ちに創立委員十五名の選挙を行ひ之に創立の準備を委託することとなりたるを以て深く從來の経験に鑑み在留民全体を包括し反目嫉視の余地なからしむる底のものとなさんとし委員に対し特に本官の趣旨のある所を説明し大体「居留」民団法及民団法施行細則「規則」の精神に則り之に市町村制度の一部を加味

したる会則案を示したるに委員会に於て之を基礎として十数回の討論を重ね其結果大体原案を可決し愈々本月十二日創立總會を開きたるに約百五十余名來会し茲に無事新嘉坡日本人会の成立を見るに至れり（外務省記録382226「在外各地日本人会關係雜件」）

1905年3月に居留民団法が公布されて後、韓国及び關東州（日本が日露戦争後ロシアから引き継いだ租借地）に居留民団が設立された。朝鮮、關東州以外に關しては、1907年4月23日付で居留民団法施行規則（外務省令第二号）が施行され、外務省告示第18号により、1907年9月1日に中国の5箇所（天津、上海、漢口、牛莊、安東）に居留民団が設立された。居留民団法施行規則によれば、居留民団は日本領事の監督下にあり、居留民に対して強制的に課金して集めた収入を財源として、財産、營造物を有し、また、日本国内の地方行政団体と同様な各種の行政を担つた。例えば、教育、消防、衛生、道路交通、公園、貧民救助など。当然学校や墓地の運営維持なども含まれた。

居留民団には、立法府の居留

民会と行政府の行政委員会（議長は議長）が置かれた。居留民会は、課金完納の居留民全員を居留民会の議員として、1年に1回通常會を開催（別に臨時會も可能）した。居留民会は毎年の通常會で議員の中から行政委員を選出した。行政委員は毎年居留民会の通常會で選出されるので、任期は1年であり、居留民会議員も行政委員も無給の名譽職である。行政の必要上有給の吏員を雇用することができた。1年会計だが、数年間の会計、特別会計も可能であつた。なお、戦前の日本の地方自治体の首長は公選ではなく、議會が市町村長を選任したが、居留民団においても同様の制度が用いられてゐる。

以上からみて、日本の法律に基づき中国に5箇所設置された居留民団は、徴税権をもち日本国内の地方自治体に類似の広範な行政を担うものであるが、一方、日本人会は有志者が親睦娛樂共助情報交換などのために任意に設立するものであり、僅かな会費を収入源（後には日本人学校への政府補助が与えられたが）としてゐる。居留民団と日本人会との間には、雲泥の差が

あり、居留民団を日本人会設立の参考にすることに意味があつたとは思われない。それでは、タイで日本人俱樂部から日本人会が生まれた原因として何が考えられるだろうか。その一つとして思ふところのは、幹部の離タイである。1906年に成立した日本人俱樂部初代会長檀野礼助が、1909年6月3日にタイを去つた後、2代目会長には政尾藤吉が就任した筈であるが、政尾も1913年8月末にバンコクを離れた。また、日本人俱樂部の書記監督を務めた溪道元は、1912年8月末にバンコクを離れた。つまり、政尾会長無き後の次期会長選定の過程で日本人会に衣替えされた可能性が高いように思われる。





# バンコクの日本人、戦前の日本人会の所在地

早稲田大学アジア太平洋研究科教授  
村嶋 英治  
(e-mail: murashimaeisaku@a.u-tokyo.ac.jp)

7月17日  
2018年7月

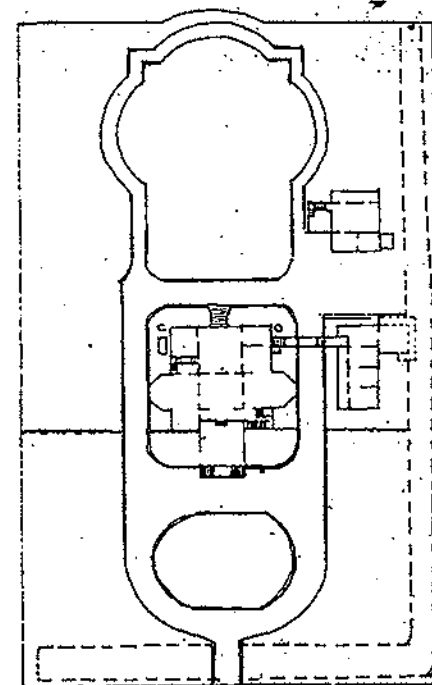
## 日本人会の最初の所在地

日本人倶楽部について、本誌で既述したことを要約すると、同倶楽部は、1906年にパーンラックの Captain Bush Lane (aomikunye) で誕生した。倶楽部には、撞球などの娯楽施設があり、来タイした日本人が宿泊できるスペースも設けられていた。倶楽部の主要メンバーは、一定の地位のある日本人であり、会長と5名の幹事が運営した。初代会長は三井物産の檀野礼助、2代目会長は、タイ政府の法律顧問政尾藤吉であった。倶楽部は1913年には日本人会に発展したが、その後も日本人倶楽部の名は消えることなく、戦前を通じて日本人会の建物は日本人倶楽部と呼称された。

日本人会の最初の事務所は、パーンラックの日本人倶楽部に置かれたものと考えられる。しかし、パーンラックにもあり、『タイと共に歩んで』泰国民人百年史(2013年)43頁の拙稿では、保科忠治氏が、日本人会が1914年(マヤ)に発足した時の所在地は、パーンラック(チャローンクルン劇場近く)であったと述べていることを紹介した。保科氏の根拠は、曾我祐知、池田柳太郎両氏からの聞き取りである。曾我氏は18歳の1912年7月12日に、池田氏は16歳の1914年5月7日に、それぞれ旅券下付を受けて来タイしている。

に宿泊した事例があることからみて、宿泊施設があったパーンラックの方が、可能性が高いと思われる。1920年以前に来タイした、川上瀧彌と立花俊道は日本人倶楽部について次のように書いている。台湾総督府殖産局技師兼同局博物館館長川上瀧彌(1871-1915)は、1911年7月に来タイしたが、日本人倶楽部あり、雑誌新聞を備へ、玉台書盤等遊戯の設備もあり、階上の二室には暖台を備へ会員の宿泊に便せり、と遺著『椰子の葉蔭』(六盟館、1915年5月27日発行、42頁)に記している。川上は満44歳で過労死している。札幌農学校の先輩であり師である宮部金吾(1860-1951)が書いた略伝(宮部金吾「故郷博士川上瀧彌君略伝」『札幌博物学会会報』第6巻1号、1915年12月、70-73頁)や内閣印刷局『職員録』などによって川上の経歴を見ると、彼の生涯は正に植物研究に捧げられたと言うこ

とができる。彼は1871年に山形県の庄内藩士族の二男として生まれ、7-8歳から付近の山を歩いて植物採集を始めた。9歳で腸チフスが原因で右足の膝が曲がったまま伸びない悪性リウマチとなったが、手術により、どうにか歩行できるようになった。1891年に札幌農学校予科に入學、1900年に本科を卒業した。この間、庄内、北海道、千島などの植物を研究し多数の学術論文を書いている。1897年にはマリモを発見し、マリモと命名したことはよく知られている。卒業後、北海道庁嘱託として1年間樹木調査に従事し、1901年末から熊本県立農業学校教諭、1904年1月に台湾総督府の技師に転じ、殖産局農務課技師を本務とし、同局商工課技師、同局博物館館長(1908年から)、或は嘉義の護謨苗圃の主任などを兼務した。1911年6月から11ヶ月間、台湾総督府の命で南洋に出張した。タイを訪ねたのは、この時



ソーイサップ時代の日本人会外観と平面図

である。帰任後、1915年8月に、自分が兼任館長を務める博物館(現国立台湾博物館)の新装オープンのために、病をおして準備に没頭し開館日の前日に館内で卒倒し、開館翌日に死亡した。川上の来タイ時、日本人会は未だ成立しておらず、日本人倶楽部はパーンラックに在った。立花俊道(1877-1955)、曹洞宗大学林卒、駒沢大学、東洋大学教授、駒澤大学学長、パリ語の大家)は、南方仏教研究のために1918年3月6日にバンコクに着き、6月下旬にトンキンに発ったが、その間日本人倶楽部に宿泊した。バンコクからの立花の手紙が、仏教新聞『中外日報』に次のように掲載されている。

盤谷より 立花氏消息、小生二月二十七日新嘉坡三泊の筈に有之候所船の出帆の都合にて四泊三日同日港出帆六日早朝盤谷に着し候、三井物産の吉岡(幸造)氏へ律師より添書を頂戴致候へは同公司に赴き、加藤支店長(尚三氏)及び右吉岡氏等に色々厄介を懸け、日本人倶楽部に宿泊致すことに相成り候、只今も同所に起居罷在候、(中略)テフシリン館舎を訪ひ、大和上ニヤナワラ氏に会談致し候、小生の片言混りの巴利語にて稍々要領を得たる

談話を交へ候、同氏はヒヤにて人格も高く学問もあり國王よりダルコ(タルマ)トライロー、カーチャルヤ(法三世師)の尊号を与へられたる人の由に候、此等に英語を解し得る比丘一名有之候時々訪問して寺院生活の様子など伺ひ候、一体にセイロンよりも英語の解る人の少く非常に不便を感じ候、南国巡礼記「采馬逐道書」には此寺に関する記事は全く無之かと存じ候、之は今王の祖母に当るるテフシリン妃の開基に係るものの由に候。帰途ワツサケ(ワツト・サケート)精舎を訪ひ候所生憎火葬中にて大和上タコクナチャーン「タマナチャーン」師には拝眉の栄を得ず大塔の下より仰いだるだけにて立去り候、シヤムの火葬の事も『記』「南国巡礼記」には無之やうに候、之は亦一奇観に候、それより旧王城の辺りツツシト「ツツシト」公園を一周致し候中々見事なものに候、小生は此頃図書館に通ひ居り候、ウチラニヤナ国民図書館と云ふシヤムの版本写本は勿論西洋の書籍も可なり蔵せられ居候、巴利の書は羅馬字、ビルマ字、セイロン字、シヤム字、カムボヂヤ字、老撾字の版本となれるものは悉く網羅せられ然らざるものは写本にいたしあり候(中外日報1918年4月27日号)。

立花が泊まった日本人倶楽部は、宿泊施設があったパーン

ラック所在のものに違いない。  
スラウオン通りへの移転

1920年3月に日本海軍の第二遣外艦隊日進、利根が、タイを訪問したが、バンコックに留の日本人は第二遣外艦隊司令官吉田清風少将以下将校四十名余を日本人倶楽部に招待し歓迎会を開いた(南洋日々新聞1920年3月20日号「盤谷海軍歓迎会」)。  
更に、1921年8月3日に軍艦新高(にひたか)がチャオプラヤー河口に投錨した。新高歓迎のために、暹羅軍艦スリヤ号が同河口に出動したので、邦人側にも同「スリヤ」号に便乗を許され三隅(兼蔵)領事、日本人会長平佐(幹)氏(台鑑)三井の山本「雅二」氏暹羅国宮内省美術技師三木「栄」氏の四名新高を訪問し歓迎の辞を呈したりと。午後五時艦長今村「信次郎」大佐及び主計長は台湾銀行前の棧橋に上陸し直にオリエタルホテルに宿泊したるが多数の在留民は出迎ひの爲め棧橋際に集合し居り艦長等を歓迎し居たり尚ほ四日は水兵半舷上陸し委員の案内にて午前五時半新高より運送船チャンタレー号に乗船しバクナムに向ひ午前八時着上陸し同九時半バクナム駅発汽車(普通列車の後尾に水兵専用車を連結)にて盤谷に向ひ同十時半着

直に馬車にて市内を見物し午後一時より日本人倶楽部に於いて昼食し休憩後自由散歩となり隨意市中を見物午後五時発車サララン駅より乗車バクナム駅に向ひそれより輸送船にて帰艦せりと。五日は後の半舷水兵上陸し四日と同じ行動にて見物し六日夕は暹羅海軍主催の将校歓迎宴会ある筈にて出席すべき予定であったが宮中要にて(国王の伯父「正しくは叔父のワチラーヤン親王」君に当る大僧正薨去せられたる為め各領事館も半旗掲揚中)宴会は中止されたり然し在留民の准士官以上の歓迎宴会は催さるる予定にて日本公使館にても七日士官以上の歓迎会あるとの事である(南洋日日新聞1921年8月10日号)。

丁度同年8月3日付けで、上述宮内省美術技師の三木氏は、自著『盤谷一巡』(発行所暹羅国日本人倶楽部、印刷所大山商會石版部、1921年8月3日発行、非売品)を刊行した。多分軍艦新高の来航に合わせたものである。新高はバンコック訪問後8月21日には、仏印のカムラン湾で訪欧から帰国途中の皇太子殿下(のちの昭和天皇)を出迎えた。当時ラーマ六世は、皇太子殿下が帰路タイに立ち寄られるように熱心に誘っていたが、日本側は警備上の不安を理由に断った。タイ側の働きかけ

が外部にも漏れたためか、日本人会は訪タイ邦人の増大に備えてバンコック案内書『盤谷一巡』を刊行することにした可能性も考えられる。同書の裏表紙にはバンコック地図が刷られ、スラウオン通りの日本人会所在地も明示されている。同書は下船後、暹羅国日本人会に至る道順を次のように書いている。

上陸、当地と新嘉坡間の定期船は、ホルネオ会社埠頭に繋留せらるれども、其他の不定期船に至つては、碇泊地点一定せず、乗下の不便一方ならず、加ふるに湖南の河岸に沿ふて道路なき為、必ず一度は河より、「二丁」丁は109mを距てたる幹線道路なるニユーロードに出でざるべからず。今仮に台湾銀行前の棧橋よりランチにて上陸したりと仮定せんか、河に面して台湾銀行の左りには、チャータード銀行、仏蘭西公使館、郵便電報局、税関など、右はオリエンタル・ホテル、東亜商會、印度支那銀行、オリエンタル・ストアにして、ニユーロードに出でんとして左側の大建築物は、元ハシントーと称し、独逸の店舗の跡なり、「二丁」にして大通りに出ずべし、ニユーロードと称し、此辺をハングラック街と呼ぶ、左に向つて二丁三丁行けば、旧王城に達すべし、二丁三丁進みて右に曲れば、スリオング「スラウオン」道路に出ず、「二

丁程にして左側に日本人倶楽部あり、尚ほ十丁程にして右側に日本公使館領事館あり(同書、8頁)。  
1920年11月29日発行の、伊藤友治郎『南洋年鑑 1921』(合資会社日南公司南洋調査部、東京)67頁は、日本人会について次のように記している。

バンコック日本人会(会員数128名内女29名)  
会長：水野泰四郎  
理事：山口萬吉、木下亨、土井節、横山和十郎、神谷信男、山本雅一、大場忠、磯部美知、土井孫次郎、大槻二雄、大谷静一、書記 柳田亮民、一方、1921年版の The Siam Directory (Siam Observer Press) の949頁は、日本人会について次のように記載している。

Japanese Association, Suriwongse Road (Bangkok)  
Director: T. Mizuno  
Committee: M. Yamamoto, M. Yamaguchi, T. Kinoshita, N. Kamiya, B. Miyagi, S. Kajinuma [藤沼川之助], T. Ohtsuki, S. Ohtani, T. Ejiri [江尻武司], I. Miyakawa [宮川三郎]  
兩年鑑とも1921年版であるが、日本人会理事(幹事)の構成を見比べると一部は入れ替

りがあり同一ではない。土井節(正しくは土居節)は、1917-1918年は大澤商會バンコク主任で、1919年4月時には日本人会長であったが、19年6月にはバンコックを引き払い広東に向かった。これから見て土井節の名がある『南洋年鑑1921』の方が、1921年版の The Siam Directory よりも古い内容であると思われる。

実は、日本人会の執行部が判る資料は、この二つの年鑑以前のものは見つからない。(因みに、1887年に創刊された Bangkok Times が毎年刊行した Directory for Bangkok and Siam が、初めて日本人会を取り上げるのは、1930年代半ばになってからのことである。)毎年刊行された The Siam Directory の1919年版は日本人会を取り上げていない。1920年版は世界中の図書館を探しても見つからない。それ故日本人会を取り上げていることが確認できる。最初の版は1921年版である。この外に1921年版で注目すべきことは、日本人会の住所が、Suriwongse Road となつてゐることである。この住所は、1921年8月に刊行された『盤谷一巡』の記述と一致している。

これから、日本人会は、1920年頃までにはスリウオン通り(現在ではスラウオン通り Siamong 通りという名前が一般的)に移転したことが判る。

#### 赤十字第1回東洋會議出席者が見た日本人倶楽部と日本人医術業

1922年11月29日から12月7日までバンコックで開催された万国赤十字社連盟の第1回東洋會議(The first Oriental Congress of Red Cross Societies)に日本赤十字社の代表として参加した蟻川新(1873-1959、国際法学者)は、帰国後1923年3月19日に訪問記を講演した中で、在タイ日本人及び日本人会について次のように述べている。

日本人は幾干「いくばく」ありやと云ふのに、盤谷に百三十人計り居つて、其の中経済的に有力なものは、三井物産と台湾銀行位のものであつて、あとは洗濯屋とか理髪屋とか云ふ小資本の業務の人であり、誠に微々たるものである。私は一々有志の厚情に依り、日本人倶楽部に招かれて一席の講演を為したが、何分にも在留者の数が未だ揃はないと公使「矢田長之助」は言つて居つた。又一日外国人に導かれて彼等の倶楽部

に招かれて行つて見たが、それは立派なものであつて、競馬場もあり、其の他倶楽部としての設備が完全して居るのを見た。而して来場せる婦人でも男子でも皆礼装を着し、立派な紳士淑女であつた。之を見て如何に英米人のコロニーが豊富であり、彼等は金もあり智識もあり勢力もあるかを認めた。是に反して日本のコロニーは如何にも貧弱であるのを見て、日本国民として誠に残念に思つた(蟻川新「法学博士」「南部亜細亜の旅(承前)」、海軍有終会『有終』第10巻8号、1923年8月号、34頁)。

蟻川の他に、第1回東洋會議には、綿引朝光(1883-1952、アメリカで医学を学び、当時東京慈恵会医科大学細菌学教授、のち京城帝国大学医学部教授)、佐藤正(1891年生の若手の内務省衛生局技師、医学博士)も参加した。佐藤は帰国後、『白象の国へ』(日本之医学社、1923年)を刊行した。

佐藤は、日本の公衆衛生の行政官であつただけではなく、学術論文を専門誌にも多数発表している。『白象の国へ』には、タイの医療・衛生状態のみならず、タイの歴史、宗教、社会経済なども短いながらも的確に描かれている。

佐藤は、タイは「現在は医師法もなければ薬局方も持たぬ、コカイン、モルヒネ条例以外に何等の束縛もないと云ふ有様で開業医家にとつては自由の楽天地である」(同書、102頁)と述べ、続けて次のように書いている。

国内を通じて衛生医官や軍医や外国医師を通じて、近代洋医学の素養のある医師は高々五〇名を出でぬ。邦人で盤谷に開業して居る人は現在三四名に過ぎない。全国に約五六十名の新しい医師の大部分は、外人医か官職にある医師であつて、無名の開業医は極めて少ない。……さて然らば邦人医は如何であるか、一時は可成り多数に昇つて廿名にも垂んとしたと云ふ噂を聞いたのであるが、彼地へ行つて實際の様子を聞くと、これには恐らく彼地で所謂「天ぶら」医を含んでの計算であらうとの話であつた。この「天ぶら」とは売薬の浮浪的行商者を指すのである。美しい鬚髯を蓄へて聴診器を携へ、仁丹や宝丹の握りつぶした粉末を売る先生であるそうなる。尤も之れは独り日本人に限つてのみでない、西洋人でもミッシェンを兼業のいかもの医が相当多数に内地の奥深くに入り込んで居るそうである。

私等が盤谷の夜、賑々訪問して見た人々の間に三谷足平氏と小川「蔵太」(1895-1978、1934年4月から2年間日本人会会

長」氏と云ふ二名の医家があつた。三谷氏は弘前医学校出身で日清戦争頃から同地に在り在留三十余年に亘り診療に従事して日本人の幹部として尽力されて居る。小川氏は愛知医専出身で最近盤谷に渡来したと云ふ話であつた。此外先頃まで居た慈恵医専出身の磯部知美「正しくは美知、1888-1943」氏は暹羅王室の信任を得て目下皇族に随伴して台湾方面に旅行し、やがて欧米に渡遊するとの噂であつた。此他千葉出身の佐竹氏、愛知出身の武田氏、熊本出身の阿部「正しくは島根出身で小瀬病院勤務の阿部坊五雄」氏等が在留したと云ふのであるが我々はその消息をよく知り得なかつた。尚ほ極く最近には東京から女医が渡航したとの話を聞いた（104-105頁）。

「邦人開業医家の内幕」彼の地でシヤム人とは勿論、在留支那人、印度人にも一番受けの好いのは日本人の医師であるとは聞かぬも言明し得である。邦人の医師は何れも官吏や公職にあるのではない、開業医家であるが在留邦人の中でも頗る経済状態の富裕なのは医師であると云ふ。開業医家の主に接する患者はシヤム人、支那人、印度人であつて一度開業医としての信用を博すれば大した余得があるそだ。薬剤師や薬種商の処で診療所を開いて居る人もある。元來が支那や、海外植民地の山

奥、シヤムの田舎あたりの医師は所謂日本大醫生と金看板を掲げてはあつたが、薬局を持つて店を陳列し売薬をも併せて販売して居るのが多い、一見して旅人の眼には薬屋とも思へてならなかつた。

開業医家の薬価や謝礼のことも大体は調へたが此處には略さう。何しる経済上から観ても需要関係、競争者分布関係から考へても、又た法的関係から観てもシヤムは開業の医師の自由業と云ふ有様である。生活費は極めて低廉である、相当の門戸を張つても家賃が安い。通井やボーイに支払つても月々四〇〇チノール「バーツ」も費せば自動車に乗廻して往診が出来るといふ。齒科医の活動は一層有望であつて現在在留外国人も入り込んで居ない、殆どいかも師の横行に委して居る状態であると云ふ（106-107頁）。

タイにおける最初の医師法は、1923年11月16日にバンコク州に限つて施行された「医療業者法（Medical Practitioners Act）」である。この法律により、一切の医療業者（内科医、外科医、助産、齒科、獣医、薬剤、看護、按摩、及び病人に対するその他の治療）は、新設の医療會議から資格の認定を受け、登録されることが必要となつた。これに違反する者には、罰則が課された。この法律実施の詳細は省令

で定められたが、その省令が手許にないので詳細は不詳である。但し、この法律施行以前から、医療業を営んでいた者の多くは資格を認定され登録されたものと思われ、これは日本における最初の医師試験と免状に関する規則（1876年1月12日内務省達第5号）が「目今新に医療開業せんと欲するものは左「略」の試験を遂げ免状を授けべし但し従来開業の医師は試験を要せず」（法令全書）としたのと同様の扱いであるう。

お蔭で、日本の医療開業免状を有せず、もしくは1906年5月2日の官報に公布された医師法に基づく医師免許（①帝國大学医学科卒業、②文部大臣指定の官立私立医学専門学校医学科の卒業、③医学専門学校卒業で医師試験に合格した者などに与えられた）を取得してゐなかつたが、法律規制がないタイで医療業を営んでいた「てんぷら医者」（多分江尻賢美など）は、タイで医者として登録されたものと思われる。

スラウオンからシーバヤーへ  
The Siam Directory 1925年版の512頁に、日本人会

の項目があり、次のように記している（明白な誤植は修正した）。

Japanese Association.  
Sipha Road.  
Telephone No. 1072  
President: Y. Bata [江田次郎]  
Committee: A. Shiota [堀田阿], S. Takeuchi, S. Izumi, M. Shibano [森野清一], S. Otani [大谷清一], K. Endo, S. Miki [三木米], S. Hatano [渡邊勝三], K. Yoshioka [西園孝海], K. Nagatsuka [永塚三郎], Secretary: R. Yanagida [柳田邦臣]

これから1924年-1925年時の日本人会長は江田次郎であり、日本人会の住所はシーバヤーであることが判る。日本人会がスラウオンからシーバヤーに移転した時期は、The Siam Directory の1922、23、24年版があらは判るはずだが、この3年分は、この図書館にも所蔵されていない。1926年6月1日に開校した在外指定盤谷日本尋常小学校（1941年4月1日に盤谷日本国民学校と改称）は、シーバヤー通り646号の日本人会（日本人俱樂部）の建物の中に置かれた。本誌2010年10月

号拙稿に示したように、日本人会長事務代理宮川岩二が1926年8月21日付けでタイ文部省に「Japanese Primary School」という名称で同校の新設登録を申請し、1926年10月17日のタイ官報（第43巻、2610頁）で新設許可が告示された。許可された日本人学校の名称、所在地は、上記官報にタイ語で「โรงเรียนประถมศึกษาญี่ปุ่นในจังหวัดสุพรรณบุรี」(Pratchaditthayalai Japanese Primary School in Surin) と記載されていることからも、日本人学校の所在地が日本人俱樂部（「Club」）であることは明白である。但し、俱樂部の住所は、「656」となっている。この番地は宮川の申請書通りであり、宮川が「646」と書くべきところを「656」と誤記したか、タイ数字の「4（๔）」と「5（๕）」は手書きした場合、紛らわしいので「4」のつもりが「5」と読まれた可能性がある。

シーバヤーから  
ソーイサップへ

日本人会は、1933年7月1日に、ソーイサップ2278号の旧デーワウオン外相邸に移転し、ここで1945年の敗戦を迎えた。旧外相邸は、王室

の私有財産を管理する内務局（「กรมที่ดิน」）の所有であり、日本人会が月額125バーツで賃借したのである。「暹羅国日本人会 会報復活3号」（1933年7月31日発行）の114頁に掲げられている「会誌」の1933年6月16日の項に、シヤム内務局より旧デーワウオン「デーワウオン」邸家賃百五十銖七月一日より家賃負担の条件付回答来た、と記され、続いて6月22日の臨時役員会で、「俱樂部並に小学校移転に關して協議の結果、来る廿七日臨時總會の決議を経て、スリオンズ路ソーイサップ第2278号へ（家賃百二十五銖）移転の件決議す、と記されている。新しい日本人会（本号写真参照）の、千八百坪の敷地内に前後の庭を控へたる堂々地下室共三階の白亜の俱樂部ハウスは階下を小学校教室、撞球室、酒場、階上を大集會室、會議室、卓球室、読書室、事務室（鈴木宇治「日本人会に残る宿題」、『暹羅国日本人会 会報復活4号』、1933年12月31日発行、14頁）、とした。

泰國日本人会歴代会長

『タイと共に歩んで』泰國日本人会百年史（2013年）の73-74頁は、泰國日本人会の

歴代会長の写真と氏名、在職時期などを掲げているが、第2、4、5、7、8代の会長名は不明のままである。それらもあつて、掲載されている戦前の会長名は、果してこれで正しいのか、在職したにも拘わらず落ちてゐる人や、在職してはいないのに会長とされている人がいないだろうかという疑問が生じてしまふ。ざつと見ただけでも、会長の河井海が河合、小川藤太が小川と誤記されている。また、1938年4月に16代目会長に正式に就任した、難波勝二（横浜正金銀行）の名が落ちてゐる。一方、昭和18、19年度の会長と記載されている新関八洲太郎は、その時期にはジャカルタ支店長であり、会長就任はあり得ない。

実は、『暹羅国日本人会会報復活第1号』（昭和7年6月25日、暹羅国日本人会発行、編輯員 江尻武司「賢美」・日高秋雄、

本會成立以來歴代会長

一 小牧次郎	二 谷足平	三 新関	四 河合	五 土居	六 水野	七 平松	八 山本	九 江崎	十 植木	十一 河野	十二 大谷
次郎	足平	新関	河合	土居	水野	平松	山本	江崎	植木	河野	大谷
次郎	足平	新関	河合	土居	水野	平松	山本	江崎	植木	河野	大谷

印刷者 宮川久治の99頁に、本頁掲載写真のように「本會成立以來歴代会長」として、初代から12代目までの会長リスト（なお、3代目の新家のフルネームは新家亮、6代目の水野泰は水野泰四郎）が掲載されている。このリストから、日本人会初代会長は小牧次郎（三井物産）であり、従来初代会長とされてきた三谷足平は2代目会長であることも判る。また、上述百年史では、大谷清一會長を11代目としてゐるが、正しくは12代目であつた。次号で、戦前の歴代会長について、在職時期、経歴などを紹介する。

597 596

595



**バンコクの日本人、  
戦前の日本人会歴代会長**

である。三井物産社員のタイでの在職期間は、職員録（三井文庫所蔵）に拠っている。役員名は判明する限り記載し、不明の場合は空欄となっている。

さて、何人かの日本人会会長のプロフィールを見てみよう。

初代日本人会会長小牧太次郎（1877-1931）

賞賛したが、その後同書が引用されている日英両語の資料をオリジナルと照合したところ、極めて杜撰な著作であることを知った。ここに賞賛の言を撤回しておく。

さて、筆者の推測が正しければ、帰国する政尾の後任会長選挙は、一因として、日本人倶楽部は1913年9月に日本人会に改組されたのである。日本人会

初代暹羅国日本人会会長は、医師の三谷足平であるという誤解が戦後に生じたが、日本人会の初代会長は、正しくは三井物産の小牧太次郎である。日本人会の前身は、三井物産と川崎造船の大口寄付で1906年に生まれた日本人倶楽部。日本人倶楽部の初代会長は、三井物産の榎野礼助、2代目会長はシャム政府の法律顧問政尾藤吉である。政尾は1913年8月末に帰国した。政尾藤吉の伝記として、筆者は、泰国日本人会百年史で、香川孝三著『政尾藤吉伝』（信山社出版、2002年）を

初代会長には小牧が選出された。

小牧太次郎は、鹿児島県出身で1899年に東京高商の本科を卒業し三井物産合名会社に就職し、間もなくロンドン支店勤務となった『東京高等商業学校一覽(従明治37年至明治38年)』(1904年12月20日発行136頁)。当時の高商は、本科の上に2年間の専攻部あり、専攻部を卒業すれば商学士の学位を得ることができた。

葛生能久『東亜先覚志士記伝下巻』(黒龍会出版部、1936年発行、5661567頁)

平壤支社の支配人となつた。この当時より内鮮融和に就て細心の注意を払ひ、単に同社工場内のみならず、進んで附近の鮮人部落の有力者に接近し、屢々会談して彼等部落民との融和に努め、勝湖里学校組合管理者として内地人子弟の教育に尽瘁する一方、鮮人子弟を收容する普通学校組合の設置に尽力し、此等子弟の就職斡旋の勞を執る等融和事業の爲めに大に貢獻した。昭和三年新に仁川府外川内里に同社の支店が設置せらるるや之が支配人をも兼ね、將に内容充実に外に發展せんとする際偶々病に罹り、昭和六年五月二十八日別府に於て没した。年五十五。東

は小牧を、汐のように志士の一人として取り上げている。

71117-7°  
2018年8月  
最终

	歴代日本人会会長名、経歴等	会長在任時期 (推定を含む)	日本人会役員名	会長在職日が判明する 同時代資料
初代	小牧太次郎 1877年鹿児島～1931、東京高商本科1899年卒、三井物産盛谷出張員在職1911年8月18日～1915年7月23日			
2代	三谷足平 1860年弘前～1924年7月3日、1881年医術開業試験に合格し三等軍医に、1894年から在タイ、「日本医院」経営	推定1914(又は15)年4月～1916年4月		
3代	新家 亮 1883年、三井物産盛谷出張員在職1915年7月23日～1917年2月12日	推定1916年4月～1917年2月		
4代	加藤尚三 1887年名古屋、市立名古屋商業学校1903年卒、三井物産盛谷出張員在職1917年2月12日～1919年10月1日	推定1917年2月～1918(又は19年)4月		
5代	土居 節 大阪生、東京高商中退、1900年2月三井物産支那修業生、1910年三井物産退職、大坂商會バンコク主任	推定1918(又は1919)年4月～1919年中途		1919年4月24日 (『婦子の集塵：林得君遺文集』1925年、209頁)
6代	水野泰四郎 1878年福島、台湾協会学校〔現拓殖大〕1903年卒、台湾銀行盛谷出張所(1919年3月5日新設)	推定1919年中途～1921年4月	山本雅一、山口真吉、木下亨、神谷信男、B. Miyagi、横田三之助、大瀧二雄大谷清一、江尻武司、宮川勝二(The Siam Directory 1921)	1920年6月19日 (タイ国立公文書館 no. 6. 5/20)
7代	平佐 幹 1890年山口、神戸高商1914年卒、台湾銀行盛谷出張所(のち野村銀行に転職)	推定1921年4月～1923年4月		1922年8月3日(南洋日報)1922年8月10日号 1922年1月3日(Changchak Times 3 Jan. 1922) 1922年11月13日(海峽之事報)
8代	山本雅一 1888年兵庫、神戸高商1912年卒[?]、三井物産盛谷出張員首席在職1919年10月1日～1924年6月14日(のち山本商会設立)	推定1923年4月～1924年4月		
9代	江畑弥吉 1887年滋賀～1952、江畑洋行	推定1924年4月～1925年4月	田村 厚、鹿野所蔵、大谷清一、三木 栄、横田三之助、宮川勝二、永塚三郎、遠藤 博、S. Lamm、竹内佐十郎(The Siam Directory 1925)	
10代	植木房太郎 1888年東京～1941、東京高商本科1911年卒、三井物産盛谷出張員首席・岡田出張所長在職1924年6月14日～1932年8月4日	推定1925年4月～1929年4月	江尻武司、宮川勝二、大谷清一、宮川勝二、山口真吉、阿井島海、加藤尚三、遠藤 博 (Changchak Times, 1 March 1926)	1926年2月27日 国王即位日本人会祝賀
11代	河井為海 1895年東京、東北大学医学部1917年卒、1922年12月6日より盛谷府日本病院医師、1933年2月まで在タイ、のち台湾で開業	1929年4月～1932年4月13日		
12代	大谷清一 1884年米子～1969、大谷洋行(1911年6月～1934年8月在タイ)	1932年4月13日～34年4月15日	理事：田村厚、田村勝、有賀一、江尻武司、宮川勝二、横田三之助、大谷清一、山口真吉、木下亨、神谷信男、B. Miyagi、横田三之助、大瀧二雄大谷清一、江尻武司、宮川勝二、山口真吉、阿井島海、加藤尚三、遠藤 博、S. Lamm、竹内佐十郎 (The Siam Directory 1932)	会報1号76頁 会報5号89頁
13代	小川蔵太 1895年名古屋～1978、愛知医専〔現名大医学部〕1919年卒、医師(1956年からウィエンチャンで博愛病院院長)	1934年4月15日～1936年4月11日	理事：横田、田高、鈴木、秋山房太郎、新野、有賀、松尾忠彦(会報5号90頁)	会報5号89頁 会報8号81頁
14代	鈴木宇治 1897年徳島～1979、Borneo Co. 構子工場(シヤムマンチ)副工場長、在タイ1930～1937年8月	1936年4月11日～1937年4月18日	新会長：日高秋雄 理事：横田、新田豊實、大谷清一、新野、岡田竹次郎、三木 栄、宇田川定雄、大谷清一、横田三之助(会報8号90頁)	会報8号81頁 会報8号95頁
15代	三原新三 1886年東京、東大農科1910年卒、シヤム農業省棉花専門家(1935年10月から3年間)	1937年4月18日～1938年4月6日	理事長：新田豊實 理事：三木、新野、林竹次郎、岡田、太田(会報9号96頁) 青木真(会報9頁)武部、大谷(会報9頁)横田(会報9頁)	会報9号36頁 会報10号162頁
16代	難波勝二 1891年東京、京大1915年卒、1937年3月～1938年12月横浜正金銀行出張所長(戦後は東洋大学教授)	1938年4月5日～5月2日	理事長：日高秋雄 理事：横田、中野久次郎、大谷清一、松尾、大谷(会報10号96頁) (会報10号162-163, 166頁)	会報10号162, 165頁
17代	三木 栄 1884年静岡～1968、東京美術学校漆工科1910年卒、シヤム文部省Fine Arts School教師	1938年5月2日～1939年4月5日	同上	会報10号165頁
18代	高月喜右衛門 1886年三重生、大阪高工〔現大阪工科大学〕船舶機械科1908年卒、三井物産支店長	1939年4月5日～6月26日	理事長：日高秋雄 理事：久保三郎、中野、横田、泰山道水、松尾(会報11号150頁)	会報11号150, 151頁
19代	竹田真昌 1893年三重生、東大1920年卒、大阪商船駐在員事務所長(1935年10月来タイ)	1939年6月26日～8月26日		会報11号151, 152頁
20代	日高秋雄 1905年徳島～1979、徳島商業学校卒、1928年来タイ、日高洋行	1939年8月26日～1940年4月11日	理事長：松尾忠彦 理事：横田三郎、土居、横田、横田、川田真実(会報11号152頁)	会報11号152, 154頁
21代	谷 清剛 1894年三重、東京高商1919年卒、三菱商事支店長(戦後三菱商事常務)	1940年4月11日～1941年4月	理事長：大谷清一 理事：横田、横田、横田、泰山(横田三郎吉之助)、松尾(会報11号156頁)	会報11号154頁
22代	江尻實美 1880年富山～1965、1906年三谷医院事務員として来タイ、医師	1941年4月～1943年4月9日	理事長：大谷清一 理事：横田三郎、池田正二、奥田喜吉(1942年7月20日没)	泰商日本人会百年史 34頁 新田豊實(泰商商工会議所会報)日記1942年4月8日
23代	森 廣三郎 1893年京都～1973、神戸高商1917年卒、三井物産支店長(戦後東洋レーヨン社長)	1943年4月9日～1945年	理事長：大谷清一(44年4月から横田三郎事務員)(泰商日本人会百年史 34頁)	泰商日本人会百年史 34頁 新田豊實日記1943年4月9日

~~598~~ 597

京多摩郡地に葬った。(遺族、東京市中野区道玄町八、小牧三子)

小牧は、1916年小野田セメントに入り、1917年に同社平壤支社が開設されるや初代支配人となり、1931年に病死するまで平壤に勤務した。彼は、社会事業にも熱心であった。小牧は殖民地朝鮮におけるセメント生産の最初から関わり、10数年間で朝鮮におけるセメントの自給を達成するという功績を挙げた。小牧は、1927年に平壤支社支配人のまま、小野田セメントの取締役に就任している。支社工場支配人が役員に名を連ねた最初の事例である(財団法人日本経営史研究所編『小野田セメント百年史』、1981年、322頁)。

限られており輸入に頼っていたが、殖民地化後1916、17年頃より、官私鉄道建設、水力電気事業、道路橋梁、水利等の諸インフラ建設が活発化し、セメントの需要が急増した。これを受けて、小野田セメントは朝鮮におけるセメント生産の開祖として1917年5月に平壤支社工場の建設に着手し、1919年末に稼働させた。平壤支社工場は朝鮮全域にセメントを供給するには地理的に偏った立地であったので、全域に便利に供給可能なように1928年末に川内支社工場を完成させ朝鮮におけるセメントの自給自足を実現した。と、小牧曰く、今や全鮮の需要に対して供給の準備は全く成れるが如き状態にあるのである。僅々十年余り以前に於ては、其の需要を鮮外産品に仰がねばならなかつた半島のセメント界は、今や全く自給自足の境域に達し得たのみならず、尚進んで母国其他海外に対して其の余剰を供給せんとする迄に進んで来たという事は、吾人の私に快とする所である。と、更に、彼は民生向上の観点から、冬の寒さが強烈な朝鮮で、安価なセメントを供給し防寒住宅の建設を進めるべきことを述べている。

第2代目会長三谷足平について

では、本誌に随分書いて来た。幾らか追加すれば、三谷は「日本医会」(Nippon Iin)を経営したが、この医会に事務員として1906年に就職した江尻武司(賢美)は、いつの間にかタの医師ともなった。本誌6月号で江尻ファミリーを紹介しているが、江尻は1935年頃女医の神谷りう(1895-1998)と再婚した。神谷りうは、現在の豊川市(愛知県)の農家の三女に生まれ、小学校の裁縫の専科正教員の免許を持っていたが、20才の夏結婚問題がもたらがりましたが、いっせ結婚にかかる費用1,000円ぐらゐを学費に代えて勉強し、何らかの技術を身につけたい、また東京へも行きたいと思(江尻りう「あの頃のこと」、『日本医師会雑誌』第65巻1号、1971年1月、88頁、上京し、独学で専攻に合格されて東京の高女四年生に編入、卒業後東京女子医専「現東京女子医科大学」(産婦人科)に進学された。同校卒業後さらに東京帝大医局に勤めて研究を積まれた。大正十二年母校東京女子医専「吉岡弥生校長」の推薦により、シャム国の首都バンコクに派遣され、三四年にわたる御活躍後に帰国されて東京京橋にて開業なされた。そして

昭和八年再びタイに行かれ(世野正雄編『徹底推諱の報徳人 江尻りう女史』、社団法人愛知報徳会、1982年、14、15頁)た、という女傑である。戦後、江尻りうは、故郷の豊川に夫の賢美を連れて引き揚げ開業した。彼女は、報徳会に参加し、質素な生活をしながら蓄えた多額の金銭を惜しげもなく公益事業に寄付した。1980年6月に、84歳で植林ボランティアとして来タイし、帰国後体調を崩して死亡した(愛知新聞1982年9月23日)。

三谷の日本医会に1922年末から勤務し、1924年7月の三谷死亡後、日本医会を継いだ河井為海は、第11代目の日本医会会長である。河井時代の日本医会の広告には、  
Dr. T. KAWAI, M.D. とともに、  
Veterinary Surgeon (獣医)  
H. Matsui (三谷日生) の名も載せられている。三谷日生(1896-1971)は、二男一女をもつた三谷足平・ヨネ夫妻の長男で、1922年に東京獣医学学校を卒業した。日生は、1926年6月の盤谷日本尋常小学校の開校時に暹羅語専科嘱託をしたり、1930年代には日本武官室の通訳をしたりした。



彼は戦後タイ残留が許可された数少ない日本人である。足平の二男、勲(いさお)は早世したので、足平・ヨネの血筋で今日まで続いているのは、長女文江(東洋英和卒、関三郎と結婚)の子孫のみである。文江の長女である作間澄子(昭和3年生)さんを、筆者は本年3月28日に訪ねたが、彼女の話では、都立多磨霊園にあった足平・ヨネの墓は、管理費滞納のために、撤去されてしまったという。

第3代、第4代目会長の新家亮、加藤尚三は、ともに三井物産社員であるが、経歴は殆ど判らない。個人情報保護がうるさく言われるようになる以前に、三井物産の人事部門に、元社員の何人かの経歴を問い合わせたところ、丁寧に教えて頂いた経験があるが、今日では無理であろう。是非、会員である三井物産の方に調べて欲しいものである。

#### 第5代目会長 土居節

第5代目の土居節は、三井物

産から京都の大沢商会に転じた人である。

京都で快客の子に生まれ、ゼロから出発して電気事業、時計製造、貿易商社などで大をなした明治大正期の実業家で京都財界の重鎮であった大沢善助(1854-1934)が創立した大沢商会は、バンコクに、1915年7月から1920年11月まで5年余支店を置いたことがある(大沢善助「回顧七十五年」、1929年、及び大沢商会社史編纂委員会編『創業100年史』、大沢商会、1990年、275頁)。土居節は東京高商在学中の1900年2月に三井物産支那修業生(1899年1月に創設)の支那修業生には、森格、高木陸郎などもいる)に採用され、広東に派遣され、言語、商取引の慣習などを3年の年限で学んだのち、三井物産広東出張所に勤務した。

1907年6月に東京高商本科2年在学中の守田藤之助(1886-1969)は、中国を旅行し、広州沙面で三井物産出張所長の先輩土居節を訪ねた。「土居氏は明治35年の高商出身で特に支那問題に没頭せられ、支那婦人を正夫人として」(守田藤之助「中国三代に生きる」、

第一篇清朝時代(一)、『東亜時論』1966年10月号、46頁)いた。守田がこの回想記を書くに際し、旧三井物産会社別室如水会、滬友会などの協力を得て調べた土居節の経歴は、「大阪府人、明治35年東高商中途退学、三井物産入社、43年3月上海支店勤務中退社、大正14年頃広東沙面英租界広東実業公司自営(同上論文、48頁)」というものであった。しかし、守田の調査では、土居の大沢商会時代の経歴が落ちていた。在バンコク領事の本省への報告によれば、土居節は、1917年12月末、翌18年12月末も大沢商会のバンコク支店主任である。同バンコク支店の1918年の取引売買額は185万バーツ、従業員は日本人6、現地人4である。一方、加藤尚三下のバンコク三井物産の取引売買額は903万8千バーツ、従業員は日本人7、現地人23であった(外務省記録33755「農工商漁業等に従事する在外邦人の営業状態取調一件」)。

1919年4月24日にワツ

ト・サケートで営まれた、医師林傳(はやし・つたえ、ボルネオ会社社のシーラーチャー材木会社附属病院勤務、慈恵医専の同

窓である磯部美知の紹介で、1917年2月に来タイ、腸チフスで死亡、満32歳の葬儀に、土居節は日本人会会長として参列した(『椰子の葉蔭』林傳君遺文集、1925年、209頁)。しかし、その後1919年6月には大沢商会を辞し、新しい就職口を求めて広東に向かった。広東では、旧知の渋谷剛の斡旋で、中華新報(社長容伯廷、日本の広東総領事が新聞操縦の対象として資金援助中)から100元、渋谷剛から100元、毎月合計200元の報酬を得ている(外務省記録137139「新聞雑誌操縦関係雑纂」)。土居は、1944年当時60歳代後半になっていたと思われるが、広東の日本人社会で「老広東」として知られ、広東の生き字引的存在として、広東総領事が日本人訪問客(1944年5月の作家大鹿卓など)を迎えた際の食事会などに招待されている(大鹿卓『梅花一両枝』、洗心書林、1948年、75頁)。

第6代の水野泰四郎、第7代の平佐幹は、1919年3月5日にバンコクに開設された台湾銀行出張所員である。水野泰四郎(福島出身)は東



京者荷谷に1900年に創立された台湾協会学校（拓殖大学の前身）に1期生として入学し、1903年7月11日の第1回卒業式で卒業した45人中の一人である（『台湾協会学校第一回卒業式』、『台湾協会会報』第58号、1903年7月20日、47頁）。水野は台湾銀行に就職し、パンコクに赴任する前の1918年は、汕頭勤務で、汕頭日本人協会の（1915年より同地日本人学校及び台湾籍子弟向けの汕頭東瀛学校（台湾総督府が援助）を経営の会長を務めていた（『外務省記録』3.10.2/10-26「在外本邦学校関係雑件 汕頭東瀛学校 附汕頭日本学校」）。1955年の『人事興信録 第18版（下）』によれば、水野は「日興電機（株）社長、日興電光（株）取締役、日本通信機器協同組合理事長、有線通信工業会理事」である。

#### 第9代目会長 江畑弥吉

日本に本社がある大手企業の社員（医師の三谷を除く）が歴代会長を占めてきた中にあって、第9代目の江畑弥吉は異色の人物である。江畑は滋賀県大上郡磯田村大字八坂（はつさか）

「現彦根市八坂」の出身で、満16才の1904年2月16日に、清国安南運糧を、商業見習の目的で旅行するために大阪府で旅券の下付を受けた。

視察後、一旦帰国し、1906年に弟の江畑弥惣吉とともに再度来タイし、「初め雑貨商を営みしが翻然志を改め今は農業にて成功しつつあり」（東京朝日新聞1909年7月23日）と報道されているように、1907年6月にランシットの国鉄の駅近く（当時はタンヤブリー県）に農地を借りて米作を開始した（タイ国立公文書館 [www.4p.709](http://www.4p.709)）。1910年には、タンヤブリー知事は、江畑が日本から持ち込んだ犁を使用して田を鋤いていることを国王に報告した。国王が日本製犁とタイの犁の性能を比較させたところ、日本の犁は、タイの犁では鋤けない固い土を鋤くことができ、かつ深鋤、浅鋤の調節も便利にでき、鋤く土量も多く、田植をせず直時きのランシット辺りの耕地に適していることが判った（同 [www.4p.709](http://www.4p.709)）。本誌2017年5月号に引用したように、1912年当時江畑は、2000ライの水田を100人の労働者を雇用して耕作してい

る。

来タイ直後の青年が、大規模な農業経営を行うには、日本国内に資金的基盤が必要である。江畑の家は、所謂近江商人で、大阪に何軒か質屋を有していた。江畑弥吉の兄である寅吉の孫、江畑弥八郎氏（前滋賀県会議員、寅次郎の子）に本年4月14日に電話してうかがったところでは、寅吉、弥吉兄弟の母である「ちの」は経営手腕があり、大阪で事業を展開したという。

弥吉のタイにおける事業は、母「ちの」が海外にまで事業を拡大しようとして二男の弥吉を送り出したことに始まると思われる。弥吉は母の期待に背かず、着実に事業を拡大させた。パンコクでも「ブROOM」、「ミカサ」という写真館を開き、更に写真機や写真材料の輸入販売も開始した。

ブROOMは弥吉のタイ人妻の名であり、彼女との間に彌弥（スリヤ）が1911年に誕生した。江畑家にとつて運悪いことに、弥吉の兄の寅吉が、息子寅次郎（1915年生）をもうけて間もなく死亡した。弥吉が1918年12月に旅券取得のために書いた申請書の続柄欄は、従来の「寅吉弟」から「寅次郎叔父」

に変わっている。未亡人となった兄寅吉の妻（寅次郎の母）は、弥吉と再婚させられた。新しい父（弥吉）の住居に、母とともに移った時、寅次郎は5歳であつた。その時の悲しさは寅次郎の心に深い傷を残したようである。彼は東京商科大学（現一橋大学）学生時代に親友になった小宮山量平に幾度となくその時の思いを吐露している。小宮山の自伝的大河小説『千曲川』には、寅次郎とその叔父で義理の父である弥吉のことが、随所に描かれている。

1939年時の江畑洋行（Yata & Co.）の本店はシンガポール、支店はパンコク、ペナン、シンガポールに有した。パンコク支店（本田寛次郎支店）は、営業科目を「（輸出）チーク其他堅木、（輸入）セルロイド製品、化学製品、菓子、刃物類、電気器具、硝子製品、蓄音機、鉄器、帽子、メリヤス、皮革製品、写真材料、陶磁器、食料品、ゴム製品、運動具、文房具、一般雑貨、化粧品及石鹸、手拭、玩具」（南洋経済研究所『南洋関係会社要覧（昭和14年版）』43頁）と、同研究所の問合せに対して回答している。

戦後弥吉と息子の彌弥は、タ

イに戻ることを希望したが、タイ政府は許可しなかった。その背景が判る資料として、ウェブ上に拙稿「堀井龍司憲兵中佐手記…タイ国駐屯憲兵隊勤務（1942〜45年）の思い出」（『早稲田大学リポジトリ』）があるので、ご関心のある方は読んで頂きたい。

#### 大谷清一・大谷長三父子

戦前日本人会の役員を親子二代に亘って務めたケースは、大谷清一・大谷長三（1901〜1997）のみである。清一は、12代目会長、婿養子の長三は、1940年4月から4年間4代目理事長を務めた。

大谷清一が郷里の米子で事業に失敗して、同郷の大山の誘いでパンコクに渡航したのは1911年、満27歳の時である。清一は大山商店に就職した（清一の孫の大谷一之氏提供の資料に拠る）。この時期の大山商店は、宮川岩二（本誌2010年8月号等参照）と清一を中心に経営された。清一は、1926年に独立して大谷洋行（Oriental S.）を創立した。清一の仕事振りは、「唐木の輸出については独特の知識と経験を有し、営業振

りが堅実なるを以て当国の唐木、本邦向け輸出は黄楊を除いては全然独占の観がある。仕向地は大阪六十%、東京四十%である」（『南洋時代第八号、今日の暹羅特輯号』、1930年10月10日発行、16頁）と評されている。

1934年7月に清一夫妻はタイを引き揚げ、長三が来タイして跡を継いだ。長三は旧姓島居、1918年に京都市立商業実修学校専修科を首席で卒業し、大阪の貿易商川原商店に就職。直ちにシンガポール支店に派遣され4年間勤務した。1928年には出光商店に移り、唐木輸入の調査のためシヤムに出張した。多分、この機会に清一と面識ができたのであろう。32年に清一のむすめ香津子と結婚した。

長三は順調に大谷洋行を発展させた。コメ、ゴム、ステイツクラック、チーク、棉花、生ゴム、皮革その他をタイから輸出し、同時に神戸のキャンパスニューズメーカーの秋毎（あきまい）やライオン歯磨の総代理店も営んだ（Commercial Directory for Thailand B.E.2484の大谷洋行の広告）。

開戦前には多数の日本貿易業者がパンコクに進出したが、そ

の中にあつて大谷洋行は主要な一角を占めていたことは、次の評価からも判明する。

泰國に於ける日本人貿易業者は約五十社に上るも主なる商社は三井物産、三菱商事、三興、東洋棉花、大同貿易、江南株式、安宅商會、大谷洋行、大倉商事、野村商店、大南公司、又一株式、田村駒等である（『南方開発金庫調査部『戦前に於ける南方各地邦人企業概観（泰版）』1942年10月、24頁）。

戦後の長三は、神戸の弘栄貿易に就職し、仕事上タイとの関係はなかった。

以上に紹介した日本人会会長以外についても経歴を調べたが、紙幅が尽きたので割愛する外ない。なお、泰國日本人会百年史は、誤って戦後の三井物産社長新関八洲太郎（にいぜき・やすたろう、1897〜1997）が、1943〜44年の会長であつたと記しているが、新関は1942年9月17日にパタヤ支店長に転じている（『新関暢一編『いたらぬ過去を顧みて…新関八洲太郎回想録』2000年、中央公論事業出版）ので会長就任は不可能である。この時期の会長は新関の後任の森廣三郎である。

敗戦により在タイ日本人は、

自由タイ政権により私財を含む全財産を接収された上、収容所に抑留され、日本に強制送還された。これによって、明治以来のパンコクの日本人社会は壊滅した。（終）

※連載「パンコクの日本人」は第96回の本稿をもちまして終了となります。長い間、ご愛読いただきましてありがとうございます。

※本連載の著者・村嶋英治氏（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）の講演会「戦前のタイ国日本人会の史実に迫る」が8月31日（金）10時〜11時半、日本人会本館で開催されます。ふるってご参加ください。詳細は32頁をご覧ください。

